金子元臣著

昭和新版

古今和歌集評釋

東京 明治書院

大内記紀貫之

紀文幹子也玄番頭從五位上木工

權頭　童名内教坊阿古久曽云々

天慶之比人

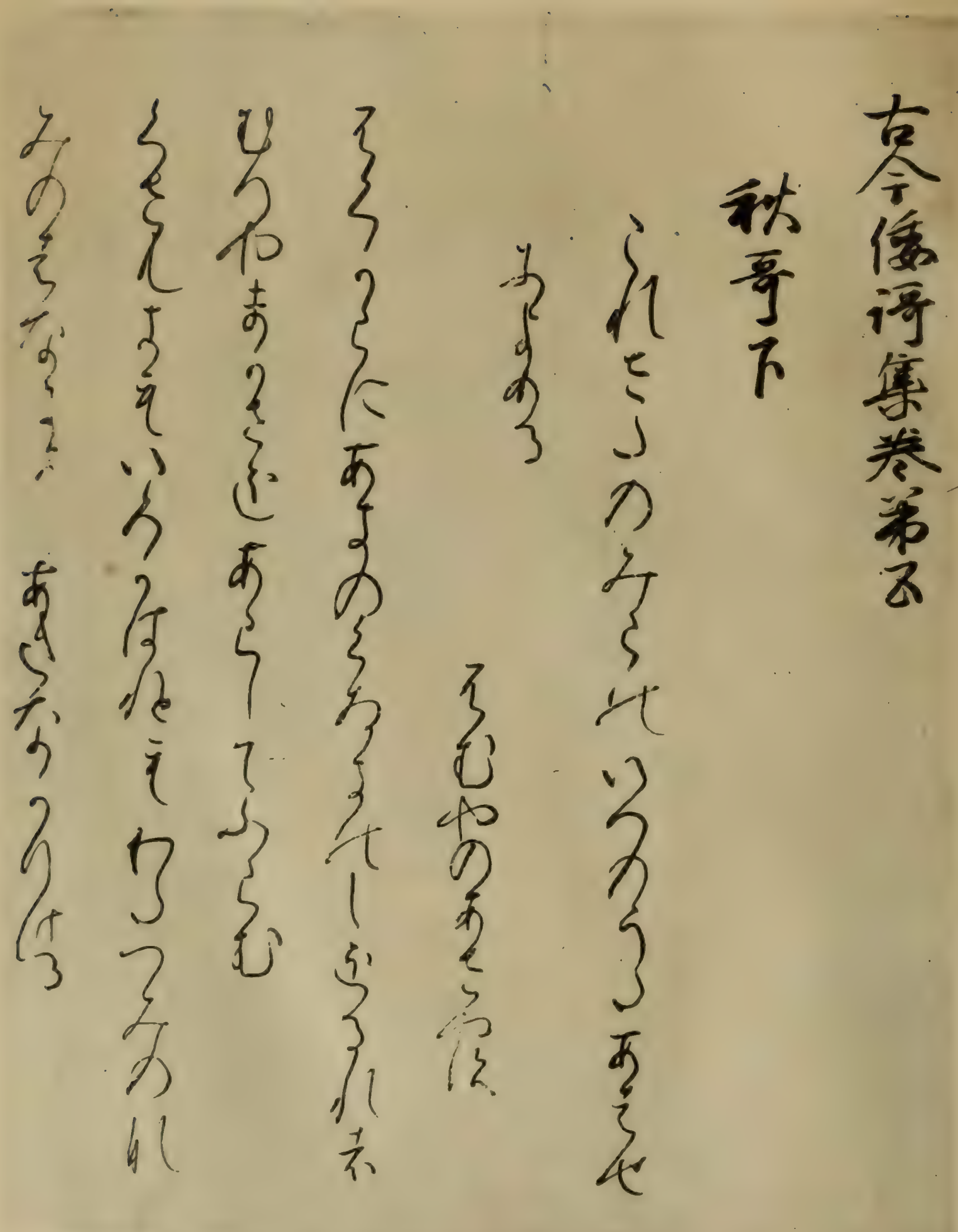
さくらちる木の下風はさむからて

そらにしられぬ雪そふりける

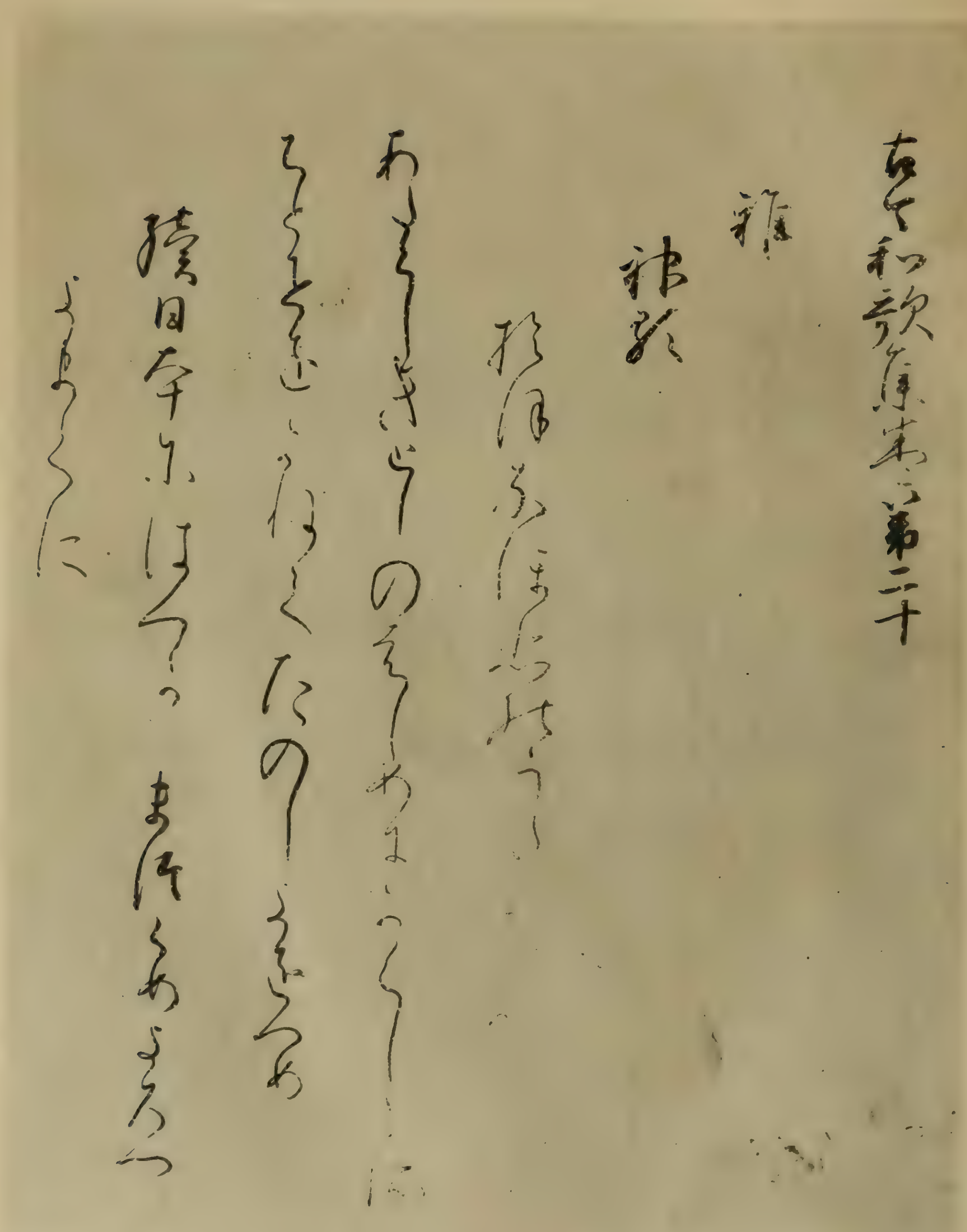
傳信實朝臣筆貫之像



(舊佐竹侯爵藏 卅六歌仙繪卷の内)


古今倭謌集巻第五
秋哥下
これさたのみこのいへのうたあはせ
のうた　ふむやのやすひて
ふくからにあきのくさきのしをるれは
むへやまかせをあらしといふらむ
くさもきもいろかはれともわたつうみのな
みのはなにそあきなかりける

傳貫之筆　高野切（毛利公爵家藏）



傳貫之筆　高野切　(山内侯爵家藏)

古今和歌集評釋昭和版原稿（著者筆）

山がつの垣ほにはへる青つゞら人はくれどもことづても無し

（釋）○垣ほ　垣といふに同じ。○ほは秀の義。○青つゞら　玉かづらと同じ。上の「玉かづらはふ木あまたに云々」の條を參照。これを采るには、手繰り寄せ取るが故に、その緣を思ひて、來れどもといへり。○ことづて　言傳への約。今云ふ傳言なり。

一首の意は、山賤の垣ほに這うて居る青葛を、繰ると云ふやうに、このあたりへ、かの思ふ人は、度々來れども、自分の方へは寄り付かぬばかりか、一向言傳も無いことワイまあ。

（評）さてさて、氣强い人かなの餘意あり。上句は、「くれ」といはむ序なること、勿論なるを、廣蔭が、わが居所を、山賤の垣ほに比喩したるやうに釋きなせるは、鑿なり。六帖には、下句、たづね來れども逢ふよしもなしとあつて、作者の名なし。

歌　大空はこひしき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらむ

よみ人志らず

（釋）○かは　反動の助辭。○ながめ　物思ひつゝ諦視すること。

一首の意は、あの大空は、戀しい人の形見かまあ、形見でも無いのに、それを何故に、その人を戀ひ慕うて物思ふ度每に、このやうに、空が詠めらるゝのであらうぞ。

（評）上句にまづ、意表の落想を著けて、人の視聽を聳し、下句に、その謂をことわれり。これ詞人の慣手。

四

昭和新版自序

この評釋が私の從來の述作のうちでは、可なりのものであつたことは事實であるが、何としても舊著は舊著で、多少否大いに不滿な點や誤謬が無いでもない。修訂したいとは常にいひ暮してゐたが、更にその機會が來なかつた。大正十二年の震災にこの紙型全部が燒失してしまつたことは、天意によつた絕版かも知れない。爾來雌黃の筆を援つて孜々として改修補訂に怠らなかつたが、なか〳〵思ふやうに進行せず、のびにのびて遂に今日に至つてしまつた。

實のところ、私は古今集を三十餘年以上諸學校で講說してゐる。しかも每學年少い時は二三校、多い時は五六校に及ぶから。平均三校と見

ても延年數は殆ど百年になる。自分でいふも可笑しいが、三年經てば私でも三つになれる。それはあの無聲に聞き無形に見る聖者の聰明には、勿論及びもつかないが、多年の努力と經驗とは、その考察鑑賞の力を、何分か的確に精細に、以前よりは把握することが出來得たと信ずる。隨つて前著に比してこの新版の特異の點は種々あらうが、一般に精覈詳密の度を加へたことは、その大きな特色であると思ふ。爲に頁數こそ大差はないが、量において殆ど三分の一を增加してゐる。なほ誤謬や蕪雜やを訂正整理して完全ならしめたこと、全文を口語體に書き改めたことも、この新版の優越を語るものである。

かくて前著の面目は全く一新せられた。これを覆刻の修訂のといふよりは、新著新版といふ方が確かに事實に適つてゐるほど變つてゐ

る。

校正は昨冬すでに了つて、殆ど發行の運びになつてゐたが、見返すとやはり不滿な點だらけなので、又々あちこち改竄した爲、頗る厄介な鉛版象嵌が多數にのぼり、その間に測らず大正版が昭和版となる結果を見たことは、御代の更新と共に本書の前途に、更に幾多の光明をもたらすものではあるまいか。

終に臨んで更に一言する。私は近ごろ御歌所寄人をつとめてゐる。御歌所は明治以來桂園一派の本據の如く聞えてゐるが、私の立場はそんな小さな天地にせぐくまつて、葭の髓から天上を覗くをいさぎよしとしない。私は既に明治の二十六七年の交において、國歌の革新を絶叫した一人である。又それに引き續いてこの評釋の擧げた產聲は、

一面において幼稚固陋なる當時の歌界に對しての警鐘であり挑戰であつた。今回の改補も、私の執つた態度と鑑賞の傾向とは、依然として渝りはせぬ。私の前には只純正公平な藝術的批判があるのみである。

堀の内松下莊において

昭和二年一月

金　子　元　臣

例言

一　本書は「釋」及び「評」の二大綱を以て組織した。

一　釋は更に語釋と意釋との二項から成り立ち、評は更に批評と考異との二項から成り立つ。但おのおの「釋」及び「評」の標中に分繫して、一一に目を設けない。

一　語釋は、つとめて簡約に從つて、詞書及び歌にあらはれた事實典故の說明、辭句の解釋を主とし、長文の詞書にかぎつて特にその大意を摘んだ。

一　意釋は、歌の意をそこねたり、調をあやまつたりすることを恐れて、鏡花水月の譯法に從ひ、極めて小心に、一字一語の出入をもゆるがせにせぬことを期した。

一　批評は、つとめて時代精神の認識を先にし、その當時の社會風潮、その作者の環境を考察することを怠らなかつた。然るのちに鑑賞に移

つて、詩味如何、評價如何と商量を費した。修辭上の考究の如きは勿論であるが、かうして極めて放膽に、極めて小心にその巧拙是非を論評した。只歌數は千餘首にも及んで居るので、閲讀の煩を憚つて、強ひて文辭の修飾を事としないのである。

一　前賢の說は、一一に擧げないが、大醇なものと、大疵なものとに限り、特に評中に於いて、その是非に論及した。

一　準據の考索、類歌の旁引は、その論斷の必要をみたすのを程度とした。また、本歌の時代よりは以前のものばかりを引證した。それは歷史的系統的に、本歌の價値を左右する力があるからである。

一　解釋の既出に屬するものは、なるべく、それを反復することを避けた。論評もまたさうである。從つて始終の精粗時に一致せず、又は結論斷論ばかりがあつて理由の前提を怠つたやうな觀があるものも多からう。學者に、最初から秩序だつて通讀の勞を執られることを、くれぐれも希望する。

一　古來この集を解釋したものは、殆ど十を以て數へることが出來る。けれども、評を評として評することは、實に本書に剏まるのである。この點においては、みづから、歌學界の急先鋒たることを信ずる。只怕れるのは草創の際、規矩をとることが極めてむづかしく、十分の滿足を望み難いうへに、自分の才識の淺陋なる爲に、時に燕石を重襲し、隋珠を擲つ如き轉倒の見がありはすまいかといふことである。謹んで大方の示教を仰ぐ。（以上明治三十三年版緒言）

一　本書は藤原定家の貞應本卽ち流布本を底本とした。その理由は「概説」中の「證本」の項に陳べておいた。

一　考異は古版物を主として參照した。古筆物に至つては一括して別に完全なる參考本を作りたいと思つてゐる。

一　卷頭に「古今和歌集概說」の一篇を掲げ、この集の研究者に、まづその概念と豫備智識とを捧げることとした。

一　作者の傳は、これを一括して卷尾に附けた。名匠大家で、その行事の

詳かに知られて居る者も、やはり小傳にとゞめたのは、體裁の統一を思つたからである。

一　なほ卷尾に卷中の語釋を檢索する爲に「語釋索引」を、又集中の歌を檢索する爲に「類句索引」を附した。

一　表紙の意匠は長原止水畫伯、背の意匠は菊地猶喜畫伯の筆になり、題簽は鈴木梅溪氏の筆である。

昭和二年一月

著　者　しるす

古今和歌集評釋目次

古今和歌集概説……一

一　序論――平安黎明期の歌壇……一

二　勅撰の壯擧……四

三　古今和歌集の出現……七

四　歌風の推移……八

五　語調の變遷……一一

六　用語の變化……一三

七　聲調及び調(シラベ)……一六

八　結　　論……一七

九　餘　　響……一九

一〇　雜　　考……二四

(1) 奏覽の年時……二四
(2) 編次の方式……二六
(3) 署名の方式……二八
(4) 和漢兩序考……三一
(5) 證本……三九
(イ) 流布本……三九
(ロ) 古筆物……四一
(6) 註釋書……四二
(7) 各卷概觀……四四

〇

古今和歌集序……五一
春歌上（卷第一）……八七
春歌下（卷第二）……一五七
夏歌（卷第三）……二一五

秋歌上……（卷第四）……二四七
秋歌下……（卷第五）……三二一
冬歌……（卷第六）……三八一
賀歌……（卷第七）……四〇九
離別歌……（卷第八）……四三三
羇旅歌……（卷第九）……四七三
物名……（卷第十）……四九九
戀歌一……（卷第十一）……五二九
戀歌二……（卷第十二）……五九七
戀歌三……（卷第十三）……六四三
戀歌四……（卷第十四）……六九七
戀歌五……（卷第十五）……七五三

哀傷歌……（卷第十六）……八一三
雜歌上……（卷第十七）……八四五
雜歌下……（卷第十八）……九〇五
雜體……（卷第十九）……九五九
大歌所御歌……（卷第二十）……一〇〇五
墨滅之歌……一〇三五
漢文序……一〇四一
○
作家列傳……一〇四五
語釋索引……一〇五九
類句索引……一〇七七

古今和歌集評釋

金子元臣著

古今和歌集概說

一　序論――平安黎明期の歌壇

奈良朝のはじめに人麻呂赤人の兩歌聖が逝かれてから、記紀の餘響を鼓吹する者がなくなり、平安朝のはじめに大伴家持が薨じてから、萬葉集の福音を傳道する者がなくなつてしまつた。桓武天皇が專ら支那文明を欽羨し景仰せられる餘りに、青丹吉奈良の都を規模なほ小なりとして、四神相應の福地を山背の愛宕に相し、「皇居の壯を見ずば、安んぞ天子の尊を知らん」と讃歎されるばかり、太しき大宮柱を立てられてから、ます〳〵天下の風尚は唐めく一方であつた。御子嵯峨天皇は、殊に支那文學の嗜好甚しく、父帝と同一の新主義であらせられたので、父帝の御鍾愛は他の御子に立ちまさつて居られた。然るに御兄平城上皇はひとり國粹保存の復舊主義であられたらしく、人心浮華に流れて、骨なき海月の波に漂ふ如く、巧にその世の風潮を迎へ、流行を追つて狂奔するを憐み、内外尊

卑の別を失ひ、國粹を滅絕して殆ど支那化しさうなのを慨かれ、隨つて平安の新京を惡んで奈良の舊都を愛し、御自身をはじめ皇子達まで奈良に在住せられ、遙に北の方平安京を冷眼に詠めて歌はれた御歌。

ふる里となりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり

天下の人は知らず、花のみは昔を忘れず奈良の故京に咲いたと、暗に當世を諷刺して、警世の晨鐘となされたけれど、朝野上下とも、長夜の眠はなほ酣なので、慷慨の御心は遂に抑制なされかねたものか、その所信の爲には再び奈良に遷都して、復位を圖らうと思し召し立たれたのが、彼の弘仁の亂の基とはなつたものと思はれる。故に藤原仲成、同藥子兄妹の奸の如きは、只その機會を早める近因であつたに過ぎない。かくて上皇の舊主義當帝の新主義は、方鑿圓枘相容れぬ狀態で、茲に一大衝突を來たして、一時擾亂を惹き起した結果は、遂に上皇の薙髮、仲成兄妹の伏誅に事了つて、全く舊主義の敗北に歸し、國粹は滅絕せられ、國文學は地に墮ちる事となつた。これに反して新主義は戰勝の餘威にまかせ、餘力を振つていよ／＼發展し、ます／＼隆盛に赴いた。況や前朝から既に遣唐使を派出し、留學生を送り、名僧智識は春燕秋鴻年々に去來し、殊にこの時代には最澄、空海の徒、佛法欣求のかたはら、彼の地の文化を將來したので、漢文學の隆盛はその極點に達し、月卿雲客は日夜應制の詩賦に忙殺され、佳人才媛は香奩に韻府を藏め、嬌舌に平仄を云爲することゝなつた。

この時代における國歌は、衰微といふよりは寧ろ社會に忘却されたのであつた。國史に「季世陵遲、斯道已墜」と見えたのは、卽ちこれを斥したのである。然るに幸にして風流宰相小野篁の出現を見た。この人重代の詩人ながら、なほよく斯道に熱心し、左遷流謫の道すがら、謫行吟の五言にその氣餤を吐きつゝも、一方には「ほの／＼と明

石の浦の朝霧」に島がくれゆく舟を思ひ、八十島かけて漕ぎ出ては「人には告げよ」と海人の子に誂へなどして、漸く殘喘を一隅に保つことが出來た。次いで仁明天皇の四十賀を行はれた時、興福寺の僧徒が五七の長歌を作つて言ほぎ奉つた。その制作こそ極めて幼稚拙劣であるが、この祝典に當つて、彼等が最も關係の深い、しかも擧世狂するが如く熱中してゐる漢文漢詩をさしおいて國歌を擇んだ、その志が殊勝といはねばなるまい。國史のこれを稱揚したのも尤もな事である。蓋し歴史は波打つ、國歌復興の氣運は人の氣の付かぬ間に旣に動いてゐたのである。

こゝに國歌壇上の夜は明けた。黎明期は早くも旭日天に沖する花々しい朝となつた。殊に緇衣界には僧正遍照の出現があつた。「をとめの姿しばしとゞめむ」と詠んだ遊蕩子良岑宗貞の昔から、仁和朝に七十賀を賜はつた頽老に及ぶまで、吟詠口に絶たず咳唾珠をまろばして、この健忘なる國民の頭腦を刺衝して、その記憶を囘復せしめ、その原性を復現せしめようと努め、これと同時に古今のすき者在原業平が、殆ど競爭的の態度で、非凡の才を振ひ、非常の熱情を馳せ、天を仰ぎ地に俯して、聲の限を絶叫してから、げに山彦のこたへぬ山は世になかつた。甲應じ乙和して、天下またわが歌といふものゝある事を曉り、復興の機運は全く熟した。これ家持歿後殆ど一百年ばかりの事であつた。

この二家絶叫の反響として崛起した名家には、前に行平、小町、黑主、康秀等、のちに深養父、興風、貫之、躬恒、友則、元方、兼輔、忠岑、伊勢、千里、素性、定文等の歌仙達があつて、又この外の人々、「その名聞ゆる野邊に生ふる蔓(カツラ)の這ひひろごり、林にしげき木の葉の如く」に多かつた。公私の歌合は頻々として催され、屛風の料の歌は各家の集中に必ず散見し、獻詠の命はしば／＼下され歌學の研究もやうやくに興つて來た。これを寛平延喜

の國歌中興の時代とする。

二　勅撰の壯擧

既にこれ等の鉅匠大家を抱擁した復興時代においては、勢ひその産物として記念として、何かしら後世にまで貽るべき事蹟がなくてはならぬ。果して破天荒なる國歌撰集の勅命は彼等歌仙達の頭上に下つた。

延喜五年四月十八日は何といふ日ぞ。顧へば國歌に取つて永久に忘れることの出來ない、しかも最も慶賀すべき嘉例を擧められた日ではないか。後撰集以後の二十代集の胚胎した日ではないか。卽ちこの日を以て、紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑等四人に勅して、萬葉集に洩れた古歌、及び以後の歌、撰者達のに至るまでの秀逸一千百首を集勒して上らしめられた。初め續萬葉集といつたのを、更に勅命によつて部類を分ち、勒して二十卷として、名づけて古今和歌集と題した。

抑も歌集勅撰の擧といふは、實は漢詩の顰に倣つたものであつた。漢詩の盛時を羨んで、その二の舞を試みたものであつた。それは嵯峨天皇の御代には勅を奉じて、小野岑守、菅原清公、勇山文繼等は文華秀麗集を撰み、又經國集は滋野貞主等數人、淳和天皇の勅を奉じて撰んで進つた。かく漢詩の奉勅撰集は、殆どその恒例ともいふべきであつたのを、醍醐天皇の御代に至つて、はじめて國歌を以て漢詩にさし易へられたのである。古人既に古今集の序の劈頭第一に「やまと歌は」と書いたのを評して、國歌の衰微を憤慨して漢詩に對せしめたる激語なりといひ、又「歌のさま六つあり、唐の歌にもかくぞあるべき」とあるを、正しく

當時もてはやせる漢詩の六義を掠め取りながら、却りて知らず顔に凌ぎたる文にて、下には嘲り笑ひたる戯業なりと論じたのは、誠に尤もな說ながら、自分は今一歩進んで、今度の勅撰を以て、漢詩に對する復讐的の擧であると斷言することを躊躇しない。といふのは詩家がそれによつて無上の光榮を誇り、無二の寵遇と矜つてゐた撰集事業を奪つて、直にわが國歌界の事業となし、かれが例を追ひ、かれが式を繹ね、かれが體裁をうつし、かれが短處弊處に鑑みて、遂に一部の勅撰歌集を完成したのは、卽ち百餘年の屈辱を一時に伸べ、欝懷を端的に開いたもので、これを復讐的の擧といはずは、外に何といはう。

又この集に漢文と國文との序がある。古來この先後に就いて大に議論がある。想ふに當時は詩集はいふまでもなく、歌集或は遊宴行幸の折などの制作の序を、皆漢文に書いたことは、本朝文粋に見えた和歌序、又は紀氏(?)の新撰和歌の序などを見てもわかるであらう。さればこの集も最初は、淑望が撰んだ漢文の序のみであつたらしいが、貫之が國文を以てこれを摸し出して、漢文序を排して、歌集にはじめて國文の序を冠らしめ、首尾よくその復讐成功の結末をつけたものであらう。歌人達が得意は想ひやられる。かくて滔天の勢ひで一時國歌を屏息せしめた漢詩は、反對にその勢力を失つて、わづかに文章博士等一味の手中に委任せられるに至つた。

あゝ彼等は成功した。漢詩に對する復讐は殆ど根を斷ち葉を枯らすまでに成功した。然してこの成功は、實をいへば彼等の力ばかりではなかつた。考へても見よ、萬一この勅撰の御下命がなかつたとしたら、どんなものか。歌人達が折角の擬勢も手腕も、遂に施すべき機會、揮ふべき場合がなくて止んだであらう。するとこの空前の壯擧を御下命あらせられた醍醐天皇に對し奉つて、大に感謝の意を表し、十分に謳歌讃歎し奉らねばなるまい。然れども當

時聖算僅に二十一二、いかに御明君とは申せ、世事に十分なる經驗もまだあらせられず、しかも斯道にはあまり熱心であらせられた事實を見出し難い點から推しても、宸襟から出た快擧とするには、少し早計ではあるまいかと思ふ。然らば輔弼の臣僚に果してその人があつたらうか。左大臣藤時平、右大臣源光はもとよりこれ紈袴の子弟に過ぎず、納言參議には或は漢學者こそあれ、眞に時務を知る達識の才俊もない。更に眼を轉じて天皇の御背後を見奉つたならば、その黑幕の内にこそ、この天皇をして稀代の聖君たらしめた傀儡師の潛んでゐることを發見して、何人も驚異するであらう。その傀儡師とは誰れか、卽ち天皇の御父君寬平法皇宇多帝でましますのである。

この法皇旣に御在位の時分から、大に斯道に趣味を感じて御熱心のあまり、宮中に歌合を始めて行はせられ、或は屛風の歌や當座やの獻詠を仰せ下され、或は菅原道眞を拔擢して任用せられ、伊勢の御を更衣として寵せられ、素性法師を良因朝臣と召されて遊幸の供奉を命ぜられるなど、努めて歌人に接近して斯道を奬勵せられた形迹が顯著であつた。上の好む所下これに倣ふは自然の數で、當時の歌界は燃える火に油を濺いだ如く、空前絕後の盛況を呈したものであらう。すると撰集の勅命そのものも、法皇の大御心から出たことは、少しの疑ひもない事實であらう。前に漢詩における嵯峨天皇がましまし、今又國歌におけるこの法皇がましまし、殆ど同一の地位に立たれたものである。只それ漢詩そのものは、わが民族文化の眞精神に觸れるものでないから、その盛衰は何の痛痒をも感ずるに及ばない。が國歌の榮枯は實に國文學の運命に關し、民族文化の消長に影響する。かるが故に法皇のあり難い思召は、この快絕壯絕なる歌集勅撰の擧を劂めて、首尾よく歌人達をして漢詩への復讐を成功せさせられたのであらう。

三　古今和歌集の出現

今この集の撰者達が、官途における閲歴を勘へると、當時（延喜五年）紀友則は大內記、紀貫之は御書所預、躬恒は前甲斐少目、忠岑は近衛府生であつた。皆これ微官薄祿の士ではあるが、斯道の堪能な點を以て、やまと歌知れるかどを以て、歌界の司命と召され、活殺自在の特權を附與せられたのは、この上もない光榮ではないか。

承香殿の東の間、垂簾なかば捲き上げ、燈臺の火あかく挑げた處、四脚の几案に四人の歌仙相對し、或は鉛槧を執り、或は家々の打聽を飜讀し、あるは高やかに歌ひあげ、あるは密やかに打ち案じなどして、仁壽殿のもとの櫻の木に時鳥の渡るを聞くまで夜の更けたのをも知らず、あれのこれのと定め合つたのは、必ず空前絕後の金玉を擇び出したい結構であつたらう。しかも前代の詩集歌集を凌駕させずはおくまいの決心であつたらう。不幸にして友則は撰集中に歿したので、躬恒を莫逆の朋友とし、忠岑を門下生にもつてゐる貫之が、代つてその棟梁の任を負擔した。元來友則とは從兄弟の關係あり、歌名また同輩を壓してゐた貫之の事だから、最初から內々には、大方その沙汰する處であつたに相違ない。集歌の十分の一は、皆自分の歌で占領したので見ても、いかにその抱負の大なるものであつたかゞ知られよう。既にこの抱負この手腕この勢力を抱有してゐる。漢詩に對する復讐運動の成功したのも、與つて力ある事と思はれる。否寧ろその主動者の位置に立つてゐた事は、殆ど疑ふ餘地がないと信ずる。蓋し貫之は世擧つて支那文化に心醉した時代に生れて、慷慨の氣は自身にも抑制しかね、極力漢文學に對抗運動を試み、彼れが跋扈を制して國粹を保存したいと冀つたものであらう。乃ち國文を草し、國歌をうたひ、國字を書して、

おの〳〵その奥妙を窮めた。これ程の貫之を主任とし、躬恒友則忠岑の名家を助手として撰ばれた古今和歌集の價値は、果していかなるものか。

四　歌風の推移

天地剖判以來、敬神を以て唯一の理想とし、滿身に磅礴した熱血と熱淚とによつて形作られた大和民族の特殊の性格は、前には儒敎、後には佛敎の渡來によつて、異常の變化を來したらしい。奈良朝時代はなほ敬神の古風が盛であつた。聖武天皇はいたく佛陀に淫すと後世から評せられた程だが、佛敎の勢力はひたすら宮廷内に蟠屈し、上中流社會を橫行するにとゞまつて、汎く一般社會に波及するまでに至らなかつた。否表面上は波及したと見えても、全國民の心の底まで透徹し切らなかつた。さればその時代の歌謠は直摯の情に富んでゐることは勿論、雄渾に豪放に、精神魄力が遙に後世に超越してゐる。たまには悲觀的の思想がないでもないが、それは極めて少數であつた。平安朝となつては、最澄、空海の徒が、巧に人情の弱點に投じて、本地垂迹說を最もまじめに提唱して、宗敎上の成功を收めてから、敬神の徒は忽ち崇佛の輩と變じ、この世を夢幻と悟り悲哀と觀じて、その氣力は衰颯し、その熱誠は消磨して、また往日の快活なる氣象、豪放なる態度を認めることが出來なくなり、八束鬚胸前に垂るゝ大丈夫も、今は風の音木の葉の落つる響にも、ほろ〳〵と泣かるゝ手弱女となり果てゝしまつた。さもなくてすら長年月を打ち續いた太平は、社會の潮流を腐敗せしめて、人心を浮華柔弱に流れしめてゐるではないか。かてゝ加へて、漢魏六朝の四六駢儷の妖冶纎巧絢爛眼を眩ます文辭が橫行したではないか。さればこそ、この人情はよくかの文辭に調

和し、融合溶化して、日に月に優美に走り、纖弱に陷つて、その惰力の停止する所を知らぬ有樣であつた。こゝに於て、かの火の如き熱情を歌つた眞摯の佳作はその迹を絶つた。氣魄の充實した雄渾の名吟は何處に就いて求めれよう。寛平延喜は國歌中興の時代とは稱するが、これらの缺點は歴々として、蔽ふに由もない。却つて弘仁天長の暗黑時代を經過した過渡時代において、相應の傑作を見得ることは、寧ろ不思議であつて不思議でない。

更に溯つて一考察すると、奈良朝末期は既にその前期に比して、頗る餘裕のあるものであつた。前期の作風は多く眞劍味に支配された結果、餘裕も遊びも少なかつたが、後期に至ると、眞實そのものゝ表現から離れて、遊びそのものゝ表現をも多少交へるようになつてきた。大伴家持及びその周圍の人達が、殊にかうした傾向のもとに述作してゐたことは、卽ち平安朝の作風に轉化してゆく逕路を示すものであつた。

萬葉集は光仁天皇の寶龜年中に斷絶して、家持等が晩年の所作を窺ふことが出來ぬが、推想上おなじ傾向で進んで往つたものと思はれる。續紀に見えた桓武天皇及びその他の少數者の所作が、比較的古風であることは、前述の議論に多少の異議を挿むに足る餘地が存しないでもないが、それは作者が全くの素人である處から、專ら形式に拘泥して、古風を執したものと斷ずる。家持等の制作は、日に月に新しい道を歩んで往かうとしたもので、時代の眞相はまさにこの人達の吟詠によつて窺はれるのである。嵯峨淳和兩朝の極端なる外國文學崇拜は、折角發達した自國文藝を根柢から阻止し、衰滅に近からしめた。けれどもそれは一面から見れば、平安文藝を創造するに就いては、却つて好都合であつたかも知れない。あらゆる改革は因襲や傳統に囚はれて、とかく成功し難いからである。やうやう改革の成功を見た時は、社會の世相は既に一歩も二歩も躍進してゐて、更に第二次の改革を必要とする時機に到

達してゐるものである。然るにこれは何等の拘束なしに、新天地を開拓し得る自由があつた。

平安朝の眞文化を語るには、仁明天皇の御代を逸することは出來ない。かの直譯文明が永い年月の間に醇化され美化されて、わが國民性にぴたりと出合ふやうになつた頃が、卽ち平安文化の確立した時期であつた。漢文學が下り坂に向つて、國文學が再び芽をふいた仁明天皇の御代は、その時期の最先に當る。小野篁の活躍したのも、專らこの御代の事であつた。

平安人士の建設した文化は、感じの頗る輕い明るい美しいものであつた。かの奈良時代の强い重苦しいぎごちない調子は、鄙びた疎野な蠻的な氣分として嫌はれた。のみならず第一、陳腐な舊式なものとして卻けられた。されば家持等の作風と一點靈犀の相通ずるものがあつて、これはいよ〳〵餘裕があり遊びがあつた。

世の太平に赴くに隨ひ、一般人民の生活は安定する爲に、その文藝にとかく深酷味を缺くことは、古今東西の歴史の證する處である。遊樂氣分が時代の雰圍氣となつて、皮相的の淺い興趣をのみ尊び、深く思考し、鋭く感受し、强く表現することは、その刺戟とその煩瑣とに堪へられなくなつた。さうした傾向からすべての世相を觀じて、その範疇に入らぬ他のものをば野暮と嘲り、日向臭しと罵つた江戸後期の文化と、ほゞその軌を同じうするものがある。然し江戸期の文化は武家時代の産物だけあつて、時にいかつい荒つぽい現象が見えないでもなかつた。が王朝文化は何處までも優美といふ薄衣で、體裁よく包んでゐることは、他の時代に全く見られない特色で、誠に注意すべき世相であつたといへる。かうした世相が産んだ文藝が、頗る輕い明るい美しいものであつて、そこに餘裕と遊びとを持つた結果、皮相的傾向に墮したことは據ない。

殊に自分が面白くなく感ずるのは、秀句卽ちいひかけの洒落を、好んで使つたことである。江戸後期にも洒落れや口合が盛に行はれたと同様な譯であるが、江戸期のはそれが洒落れなり口合なりで獨立してゐるのに、この時代のは本歌の中に侵入して、大に盛にその詩趣と品位とを傷けてゐる。單にこの時代といはず、王朝文化の最盛時たる藤原氏時代に及ぶまで、この傾向は持續してゐた。いやます／＼甚しくなつたと見られる。

曩に漢詩を恰も國歌の敵であるかの如く極論した。但歌人達が漢詩を排斥したことは、その外面的形式であつて、漢詩の底にある思想は、反對に久しい浸潤に、國歌を變色させてしまつた。漢詩はその古を尙び、格調を尙び、形式を尙び、來歷を尙んでゐる間に、知らず識らず、實生活から距離のあるものとなつて、特定した詩歌の別世界に夢遊するもの丶如くになつてしまつた。日本人の學んだ詩作は、殊にこの弊が多かつた。卽ち遊び氣分の濃厚顯著なものであつた。單に漢文學に見える典故や言語とのみいはず、その氣分が大きな流を成して、滔々として國歌界に瀰漫したのである。

五　語調の變遷

賀茂眞淵は、嘗て、奈良時代の歌詠を集めた萬葉集と、この集とを比較して論じて、

今、その調のさまを見るに、大和國は丈夫國（マスラヲグニ）にして、古は女もますらをに傚へり。かれ萬葉集の振は、すべてますらをの手振なり。山背の國はたをやめ國にして、丈夫もたをやめを習ひぬ。かれ古今和歌集の歌は手弱女の姿なり。

と喝破した。國によつて差別を立てたことには多少の異論もあるか、大體において容認せらるべき議論であらうと思ふ。只それ丈夫振である。氣魄横溢して積極的であるから、その發音もおのづから明晰で、言句の終結に近づくほど、ます〳〵力が充實して、調子の昂揚を來すのは自然の勢で、これ少數音を先に、多數音を後にして憚らぬ所以、卽ち五七調の體製を成した理由ではないか。只それ手弱女振である。意氣平靜で時に消極的であるから、その發音も忸怩として、發語こそ明確であるが、終結に近づくほど、低調に非力であるのは、これ多數音を先に、少數音を後にせねばならぬ所以で、卽ち七五調の成つた理由でないか。氣魄の充實と否とは、全く語調の變化轉倒を生ずる根本的原因である。

更にその副因となつたものは、頗る多々であつたらうと思はれる。或は支那人の詩における發音組織が漢文學を介して侵入したり、或は佛經讀誦の音節が影響したりしたらしい。これらの直接影響は却つてさほどのものではなくて、永い間に行はれた國民性の變化が、遂にこの語調の轉倒を來したと自分は斷言する。

往古の歌謠卽ち律語は、五音七音を一基調としたもので、その反復數の多少によつて、長歌短歌の稱を分つのであつた。そしてそのいづれにもあれ、末尾の七音を折り返して歌ひ終るを普通の形式とした。――以下特に短歌についていふ。――然るに奈良朝の頃ほひ、旣に七音五音を一基調とする變調が胚胎して、萬葉集中の短歌のみを檢しても、三の句でいひ切つた歌が、殆ど三十有餘首も算せられるに至つたことは、夙く七五調の後世風に轉じゆく傾向を示したものである。平安朝となつては、その一般の語調は全く七五調化してゐるにも關はらず、依然として從來の詩形を借りて歌つてゐるので、なほ古調を模倣して五七調に全く歌ひなしたのもあり、七五調に歌つて三の

句で切れたのも、又三の句まで一旦に調べおろしたのもあり、甚だまち〳〵なものであつた。殊に二の句三の句を七五調に調へた爲、初句の獨立といふ變格が起つてきた。五七の古調では、段節を切る場合には、第二句第四句及び結句で切るのを正格としたのを、七五調時代となつては、この三節の外に、初句にても又三の句にてもいひ切ることが出來得るのであつた。されば五七、七五の兩調を融通して檢べて見ると、五句から成立してゐる短歌が、いづれの句でも獨立して五箇の段節を成し得るので、語法句法に非常の自由を來し、その變化は著く複雜に縱横に、且巧緻に赴いた。

更に附言する。語調の變化は、短歌に現はれた表面上の形迹に就いて、その變化の時代をほゞ推斷したに過ぎない。これを常識から考察すると、すべての歌謠はその形式に對しては保守的であるのが通例であるから、萬葉集中の短歌に旣に三十餘首の變格を認めたとなると、當時の實際の語調は夙くから七五調になつてゐたのではあるまいか。飛鳥藤原朝時代はさし置くとしても、否その時代でも變化の道程中にあり、奈良朝となつてはいよ〳〵七五調が强調されたことゝ思ふ。かういふ性質の變化は決して一朝一夕に成るでものなく、頗る永い年月を要した國民性の推移に本づくものである。

六　用語の變化

奈良時代と平安時代とは、その文學に現れた用語に、非常な疎隔がある。卽ち大々的に驚くべきほど變化した。古語は將棋倒しに死に、新語がその代りに生れた。否ざはりの粗い强いこは〴〵しい語は多く滅びて、口に滑らか

な優しい語がそれに代つた。隨つて又その語法に、その形式や組織を殊にするものが頗る多くなつた。

都遷しと政治狀態の變化と、卽ち政治中心地の移動と、人事の變轉と及び永い太平とは、前期の文物習慣を多く破壞してしまつた。我等はまざ〳〵とその實例を眼の前に見せつけられてゐる。それは德川氏三百年間の覇府たる江戶が東京となつて、江戶つ子詞が忽に東京子詞と變つてしまつたことである。僅か三四十年間に、從來の江戶人はその江戶詞を使ふ機會と場處とを見出すことが出來なくなつた。全部重苦しい田舍調子に變り、輕快な流滑な尖銳な爽音は、社會の片隅におし付けられてしまつた。奈良平安兩朝の推移は、これを逆に反對に往つたものである。今その言語の一班たるに過ぎない僅かな單語や熟語をこゝに抽き出して、その著しい變化を示さう。

音の轉化したものは、

いめ——ゆめ	かぎろひ——かげろふ	かまめ——かもめ	あかとき——あかつき
しぬぶ——しのぶ	しらゆ——しらる	えらえ——えられ	さもらふ——さむらふ
なだす——たゞす	戀ほし——戀ひし	おやじ——おなじ	たづくし——たど〳〵し
さぶし——さびし	しまし——しばし	とをゝ——たわゝ	とふ　ちふ——てふ

語の轉化したものは、

亂り——亂れ	隱り——隱れ	へなり——へだたり	塞かへ——塞き
うづなひ——うなづき	あがふ——あがなふ	まねし——あまねし	繁けき——繁き
しば——しば〳〵	ねもころ〴〵に——ねもごろに	こきだく　そこばく——そこばく　こゝら	しく〳〵に——しきりに

單なる、又は複雜なる熟語で、平安期には滅びたものは、

片まけて　振りさけて　あり通ふ　しぬに　つきのよろし　かけのよろし　せすかも
(荒)(カレ)まくをし　(隱)(カク)らくをし　ありこせぬ　見が欲し　經につゝ　けむかも　あが如(ゴト)か
思へやも　なれか　よしゑやし　欲しけども　たもとほり　放(サカ)る　したべる
ともし（珍しく飽かず）　あふさわ　心妻

助辭または接頭語の類で滅びたものは、

いむかひ　け長き　な思ひ　戀ふるも　ゆ（より）　やも（やは）　かも（かな）

合名詞としては異例な組織で滅びたものは、

朝し奴原　安達太郎眞弓　夕浪千鳥　足柄小舟

又組織の轉倒したものでは、

つて言（言づて）　忘れて思(モ)へや（思ひ忘れめや）

の如きがある。なほ注意すべきは、結句の組織を四三の音數にしたものが、奈良期に多いことで、平安期にはそれを多く三四の音數に仕立てゝゐる。

秋山、われは　隱さふ、べしや　借廬(カリホ)しぞ、おもふ（以上萬葉）
風や、ふくらむ　花ぞ、ちりける　思ふ、なりけり（以上古今）

この組織上の變化は、語調の變化に淵源してゐるもので、大に研究を要する大問題である。この他「蓋し」の如く文語にのみ存つて、歌語には滅びたのもあり、實に奈良平安兩期の間に著しい白線を劃してゐる。

こゝに至つて單に用語のみならず、基礎として運用される語調そのものが、隨つて大に變化したことが立派に證明される。

七　聲調及び調(シラベ)

この集の特色として數ふべき點は頗る多いが、その聲調の圓滑流麗なことは、全く空前絕後で、後人の好んで範を取る所となつた。恰も盤上に明珠をまろばすに似て、一向齒牙に障碍したり、唇舌に澁滯したりしない。一唱三歎味ひの遠く長く漂ふなつかしさがある。蓋し聲音の開合上下が律呂に協つて、その調和の宜しきを得た爲と思ふ。想ふに撰者貫之は、萬葉集の古拙で、田舍倉父式の佶倔なのに慊らず、專ら意調双絕の撰を成さうと希望して、今日樂家に傳來してゐる諸物の披講、朗詠、神樂歌の譜などの如き、ある一定の樂譜におしあて、金石絲竹に諧ひ合はせて、一々撰歌を試みたものではあるまいか。あながち樂器を借らぬまでも、扇拍子または手拍子で謠ひ上げて、さて採否を決したのではあるまいか。集中千餘首の歌、古歌といはず、新作といはず、盡くある一定の調子で、類型的に切揃へたものゝ如く見えるのも、恐らくはこれが爲であらう。

單なる聲調以外に、言語の組織上から來た、多少內容と關聯をもつた一種の節奏がある。香川景樹はこれを調(シラベ)と稱した。景樹自身の調の定義は頗る漠たるもので、その運用も極めて不統一で、その門人八田知紀の調の眞路の說に聞くも、やはり同樣の感があるが、この集を以てその調の中心を得たものとして、專ら推稱してゐる。又村田眞海は、

調のとゝのひたるまことのさまを知らんと思はゞ、古今集をよく讀み味ふべし。古今集は調を旨と撰べるものなり。古今に深くなれてその味ひを得てのち、あだし集どもを見ば、そのけぢめ明らかに知らるべし。（歌がたり）

と論じたのも、やはりこの範圍に屬する讃語であらう。調の定義は、自分としては「内容を包んでゐる氣分と、その表現の方式との合致にある」としたい。これらに就いて一々例證を擧げて説明すべきだが、餘に煩瑣にわたるから、本文たる評釋の語中に就いて、その點檢の勞を執られたい。

八　結　論

歌風はかくの如くに變遷し、語調はかくの如くに變遷し、用語はかくの如くに變遷し、聲調はかくの如くに諧暢になつた。加ふるにその構想は長足の進歩を成して、細の細に入り、微の微を穿つて、巧緻に斬新に、紆餘曲折して、よく人頤を解く語言を弄するやうになつた。贈答の體は上古からあつたが、殊にこの時代に入つて盛に器用に、各自の才氣の煥發を見た。又仁和寛平の頃ほひから題詠の盛行を見、隨つて歌合と稱して、題詠によつて勝負を爭ふ文藝上の遊樂もうち頻つて催されたので、互に着想の新奇を競ひ、時に尖巧浮靡に傷くも、一旦の優勝を制さうとする傾向を生じ、やうやく自然に遠ざかり、眞情眞詩に乏しくはなつてきたが、なほ後世の如く甚しいものではない。況やその用語は清雅を主として卑陋を卻け、粗笨を離れて洗煉を窮め、又譬喩に擬人に諷託寄興に各種の轉義を應用して、露骨を避けて婉曲につき、あらゆる辭樣の變化を盡して餘韻餘情あらしめ、又助辭を巧に使用して

一字不言の妙味を生ぜしめるなど、前古に絶えて見ぬ技術の發達が認められる。

要するにこの集の長處は、詩想を表現する技術の上に多く認められ、專ら外面の形式に渉つてゐる。短處はおもに内容の實質に屬し、眞摯の情に乏しく、腦裏に與へる印象の深刻でない點にある。この長處短處は果して能く相償ふに足るか足らぬか。これ一大問題である。元來詩歌の眞價値は、その内容如何によつて定るもの故、極論すれば長短相蔽はぬとの非難もあらうが、よく〳〵思ふと、その短處といふのも、概して連城の玉夜光の珠でないといふに過ぎない。仔細に見てゆくと、その詠者不詳の歌の如きは、奈良の遺製が一割強を占めて、燦然たる璧の光を放つてゐる。平安朝になつての前期の作にも頗る佳作がある。況や他の有名な作家達は、その中期にしば〳〵絶唱を出し、後期に及んでも多少の佳作傑作を產んでゐる。これを後世幾多の勅撰集や私集に比較すると、殆ど同日の論にならぬほどの格段の品位と價値とをもつてゐる。まづ大醇にして小疵なる者といつてよからう。況や萬葉集の後に於いて、敷島のうたの荒樔川鋤き返すとすれば、勢ひかうした傾向に趨らぬ譯にゆかぬ。人の足迹を歩襲せず、様によつて胡蘆を描かぬ點だけでも、亦大に多としなければなるまい。

なほ又仔細にこの集を點検すると、その理想の多くは、佛教より感染した悲觀的であること、その着想の大抵主觀的で、客觀的文字に乏しいこと、又比較的體言どめの歌の少いこと、そのたまにあるものは寛平以往の作者の作に屬するが多いこと、その用語に體言が少くて、活用言と助辭とが多分を占めたこと等を發見するであらう。これ等は概して、その時代思潮とその風調體格に伴うた自然の結果で、萬葉集の質實雄大な風格に一歩を遜る所以、卽ち巧緻纖細幽艷流麗を以て、この集の一頭地を抽んづる所以である。

又更に注意すべきは、この集に於ける長歌の見るに足るものがないことである。古今の歌がその一種の特色を以て、萬葉の風格と相對して下らぬといふのは、只その短歌の上にとゞまるのである。その長歌に至つては、獨り數において少いのみではない、調においても想においても修辭においても、到底萬葉の長歌と競爭し得る資格はない。單に冠辭緣語の類を撮合して、纔に連絡を作して、猥に長々と鎖り續けた外、一向に篇章段落の格法を備へず、卽ち組織が立たない。又語調の變化融通も、詩形の尨大な爲、短歌に見るやうな利便を缺いて、五七若しくは七五の亂調子は、句々の枝梧を來して猥雜を極めてゐる。遺憾ながら平凡拙劣、失敗の作であると評するより外はない。

九　餘　響

古今集が最高權威ある勅撰集の嚆矢として、歌壇に出現してから、從來傳襲された家々の打聞も、私行してゐた撰集も、盡く高閣に束ねらるゝ運命に陷つたらしい。萬葉集は村上天皇の御代にあの梨壺の五人達に、その訓詁の業を開始せられたとはいへ、嵯峨天皇が既に宸筆四卷に抄出せられたこと、六帖及びこの集に采錄されたこと、又は本歌取として詠吟されたことなどに徵すると、夙く延喜以前において、相當に世に行はれてゐたことが想像される。然れどもこの集の威力の前には、その光を失つてしまつた。

梨壺の五人が天曆に撰んだ歌集には、名を後撰と命じたことも、この集を本尊としての事であつた。枕草子に、

集は　古萬葉、古今、後撰。

とつらねてあるが、事實において萬葉後撰の二集は、その脇立に過ぎなかつた。古今の勢力は殆ど當時信仰の標的

となつた法華經の如く、無二亦無三であつた。隨つて家々人々相競つてこれを傳寫して、架上に藏め座右に供へた。これも枕草子に、

　中にも古今あまた書き寫しなどする人は、皆覺えぬべき事ぞかし。

など見え、能書家は男女を問はず、人から誂へられて、その筆寫に日もこれ足らぬ有樣であつた。榮華物語に、

　御手箱一よろひ、片つ方は白き色紙つくりたる草紙ども、古今、後撰、拾遺など、五帖に作りつゝ、侍從中納言行成と延幹の朝臣と、おの〳〵草紙一つに四卷をあてつゝ書かせ給へり。（はつ花の卷）

とあるも、その一證である。現今上代樣の古今の歌切の各種が、斷簡零墨ながらも數多存するのは、かゝる理由によるのである。單に傳寫を事とするのみではない。この集の歌を諳誦することは、詠歌の修行に必要條件となつて、一條天皇の中宮（藤原定子）の御前で、この集の記憶試驗を行はれた事が枕草子に見え、なほその時村上天皇の御代に、宣耀殿女御（藤原芳子）の御前で、女御をはじめ侍ふ女房達に、帝が同樣の試驗を課せられたことを中宮が語られた事が載つてゐる。尤もこの宣耀殿女御がまだ姫君で里第に居られた頃、御父小一條左大臣（師尹）は、

　一には御手を習ひ給へ、次にはきんの御琴をいかで人に彈きまさむと思せ、さて古今の歌二十卷を皆浮べさせ給はむを御學問にはせさせ給へ。（枕草子）

と姫君に申し渡されて、この集の諳誦を子女教育の課程の一科と立てられたのであつた。

　かくの如く日夕この集に枕藉して、句を掇り語を味ひ、ひたすら範をこゝに取らうと齷齪したことは、平安時代から鎌倉、室町、江戸時代を通じての顯著な歌壇の現象であつた。時に元久歌仙の幽玄體の一旗幟を樹て、或は毘

沙門堂家の寛平以往說を唱へ、或は古學派歌人の萬葉體を唱へた如き、特殊な變調を呈したこともあるが、やはり百川海に歸する勢ひ、それらは遂にこの集の一體又は分派たるにをはつて、この集を離れて歌なく、歌としてこの集に淵源せぬものはなかつた。

鴨長明の無名抄に、

〈古今の時花實ともに備はりて、そのさままち〳〵に分れたり。後撰にはよろしき歌古今集に取り盡されてのち、幾程も經ざりければ、歌得がたくして、姿を擇ばず心を先とせり。拾遺の頃よりその體殊の外物近くなりて、云々。

この花實兼備の說は以前からの定評であつたことは、想像に難くないが、ことに長明にかく記錄されてから、歌學家の常用文句となつた。いはく、

〈古今集は花實相對にあめり。後撰はまた相對にあまば、花風さかりに成るべしと深く誡めて、實體多く入れたり。(松永貞德―戴恩記、烏丸光廣―耳底記)

阿佛尼は、

〈歌の本體は古今の歌を見覺えて、本歌にもすべし。(八雲口傳)

と初學にをしへ、

〈古今には嘗て詞の沙汰なし、おのれありのまゝの事をいひけるにこそ。古今ぞまことに詞もめでたく見え侍り。(桐火桶)

〈いにしへ三代集(古今、後撰、拾遺)の歌はたゞありに私なく、打ち聞くにことわり聞えて面白し。三百篇の詩の性情を吟詠して、高くすなほなるが如し。(耕雲口傳)

△三代集の事尋ね侍りしかば、申されしは、「この道の奧儀と申すは古今集にてこそあらめ」と申されし。(東野州聞書)

の如く、室町時代の歌人は推賞し、江戸期の古學勃興以來の諸家はまた、

△天智より醍醐までは廿二世、未だ三百年に及ばず。然るに漸く變じて、古今集の如く文質兼備なる體となれり。(荷田在滿―國歌八論)

△古今集などの頃は慕はしくぞ覺え侍るなる。(賀茂眞淵―國歌臆說)

△古今集を花實相對といへるは、萬葉集中に類せる歌ども、この集のよみ人知らずといへる中には數多見ゆ。又序に擧げたる六歌仙といふ人々の歌をはじめ、當時延喜年間に及ぶ歌ども、漸く花なること、花なるも後世の如く巧に屈して、詞迫り苦しげなるものは見えず。さればこそ花實相對とはなれ。――余はよみ歌においては古今集を師とすべしと思へり。(伴資芳――八論評)

△今にして御代〳〵の撰、いづれを採らんとならば、古今集に優れるはあるべからず。いかにとなれば、今の大御世にも擬ふべきは宇多、醍醐の御代なるべし。さればその御代の手振ことわざ、おのづからこの御代に通ひにたればにや、歌よむ程の人、知るも知らぬも、古今集を上なきものにしてもかしづかぬやはある。されば歌作り學ばんと思はゞ、額づきて古今集を見るべきなり。(加藤枝直)

△貫之、古今獨歩の才をもて、古今集を撰びて、あしきを捨てよきを集めて、歌の軌範となせり。古今をもて古を照して、是れに似たるをよしとし、似ざるをあしと知り、又後世今までを照し、似似ざるをもて、よしあしを知るべし。(小澤蘆庵―布留の中道)

△古歌を見るには萬葉集もあれど、まづ古今集の穩やかなると、今一いろ當世向なる物を合はするぞよき。(橘守部―心の種)

△古歌は多かる中にも、必ず見て學ぶべきは古今集なり。かの集のさま、すべて詞美しく情深ければ、他し書とはいみじく異なる集なり。然るを後世の人詞の工なるに泥みて、古今集の情をば解くこと能はざるが故に、――詞安らかなりとも風情なくて

は何のかひかあらん。(長野義言―歌の大概)

△神代は姑くおく、日本紀より今に至るまで見渡したらん中に、古今集は獨秀でたること、誰も知る所なり。(熊谷直好―古今正義説論補註)

の如く、絶對稱讃の詞を捧げて惜しまなかつた。然しまた多少の異義をその間に挿む者も無いではなかつた。二條良基の「今時いづれの體を正路として模すべきか」との質問に對して頓阿法師は、

△寛平延喜の頃はこの道の中興と見えたり。然るに古今集なほ貫之の心には十分せざるにや、新撰を撰んで云々。(愚問賢註)

と答へた。これは貫之中心の論から來てゐると思はれる。

△古今集の歌の風體を本としてよむべし。中にも雜部を常に見るべし。但古今にも諾けられぬ歌少々あり。(西公談抄)

△古今の歌も心こそあれ、詞はふるめかしくて、當世にはあはぬなり。(徹書記物語)

△古今集のみぞこの道の鏡なるべき。それすら若干の用捨あるべきや。(心敬僧都―老のくり言)

△古今集をのみまねぶ人あれど、彼には心さく／＼巧みたる多ければ、下れる世人の癖にて、事せばく巧めるに心寄りて、高く直きやまと魂を忘るめり。(賀茂眞淵―新まなび)

△古今集を以て花實兼備永世の法則とすべしといふ人あり。但余が僻意なる故か、この時世はなほ實に過ぎて花やかならずとこそ思へ。(宣長いはく然り)(荷田在滿―國歌八論)

△古今集めでたけれども、今時詠み出づる風には、時世あがりてうちあはず。(石原正明―尾張の家苞)

△三代集はうるはしけれども細やかならぬつひえあり。(近藤芳樹―寄居歌談)

以上の言説はその語調に強弱精粗の度こそはあるが、絶對非認ではなくて、但わづかに白璧の微瑕を指摘するにひ

としいのである。一部に不滿足を表明してゐながら、その大部分を承認してゐる態度であるのも面白い。およそ世の中に完全無缺などいふものはあるべき筈がない。いはゆる吉祥天女を思ひかけむとすれば法氣づくの類で、多少の缺點はあるとしても、古今集ひとりその責を負ふべきでない。賀茂眞淵は萬葉集を無上に推尊した人として聞えてゐるが、なほ「今萬葉集を學びてその心を知り、古今集をかねてその姿を得ば、誰かいしくなきものとせん」と唱へ、自身の吟詠もその晩年は萬葉古今の中間を步いてゐた。その門人加藤千蔭、村田春海は、今少し古今の風體に近いものを志して、議論に實行にその迹が歷々としてゐる。香川景樹に至つては遮二無二古今集を尊信して、貫之宗の經典と仰いだ。爾來景樹の桂園調が天下を風靡すると共に、この集はいよ〱その光彩を放つて、遂に今日に至つたのである。

なほこの集の絕大な勢力を證據立てるものは、後世の二十代集がすべての模範をこの集に仰いだこと、又その題名を新古今、續古今、新續古今など襲用したことなどである。次にその註書の汗牛充棟であることである。――(6)の註釋書の部參照。――又或一時代を劃した幻影に過ぎないが、餘響の一斷音として、是非とも古今傳授の劇的相承を考慮のうちに置く必要があらう。

一〇　雜　考

(1) 奏覽の年時

この集の漢文序の末尾に「延喜五年歲次乙丑四月十八日臣貫之等序ス」とあるに據れば、延喜五年四月が撰了奏覽

の日となる。然れども假名序に、

「延喜五年四月十八日に大内記紀……忠岑等に仰せられて、萬葉集に入らぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。

とある。この文意に從へば、延喜五年四月が勅撰下命の日となり、奏覽の日はそれより後の事となる。しかし若し果して五年四月が下命の日ならば、かく既に下命の日を註記した以上は、その撰了奏覽の日をも相對的に明記するのが、その文の體を得るものではないか。序文はすべて、その内容の纏まつたうへで書くべき性質のものだからである。それ故假名序もなほ五年四月を奏覽の日として書いたものだと斷ずる。

「延喜五年四月十五日云々。御書所預紀貫之、撰二集古今和歌集一部二十巻一（扶桑略記、日本紀略）

「古今、延喜五年四月十五日奉レ詔紀貫之爲二棟梁一撰レ之。（八雲御抄）

など皆五年四月奏覽説を證するものである。只集中に延喜五年以後の歌が混つてゐるので、五年四月下命説に有力な證左を與へるやうである。卽ち延喜七年の大堰川行幸の折の歌二首、

鶴立洲　　　つらゆき

あしたつの立てる川べをふく風によせてかへらぬ浪かとぞみる

猿叫山峽　　　みつね

わびしらにましらな鳴きそ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ

が入つてゐる。藤原清輔はその袋草子に、

上奏以後歌入之條、貫之不レ堪二優美一追入レ之也、奏覽本には無二件歌等一云々。

といつてゐる。なほ延喜七年六月に逝去された七條の后を悼み奉つた伊勢の長歌がある。これ等はまことに清輔の說の如く、奏覽後追加されたものと見てよい。隨つてまた反對に、奏覽後切り出された歌もあつたらうと想像される。卷末にある墨滅の歌の如きは或はそれに當るかも知れない。金葉集の三奏の例を見ても、古今集が奏覽後も加除修正のあつたことが思はせられる。

又序文にはいづれも「十八日」とあるに扶桑略記その他に十五日となつてゐる。藤原俊成は「十八日を用ゐるべし」と人の問に答へてゐる。

(2) 編次の方式

古今集の編次の方式は、全く前代に超絕した齊整さである。その整理の行き届いたことは、和漢の詩集などには、とても見られない。わが邦最初の歌集萬葉集を檢すると、その部立は、

一、雜歌　二、相聞　三、挽歌　四、譬喩歌　五、四季雜歌　六、四季相聞

と分類されてあるが、この集に至つては、更に數步を進めて、

春上下　夏　秋上下　冬　賀　離別　羇旅　物名　戀一、二、三、四、五、　哀傷　雜上下　雜體　大御歌所歌

の十三部立、二十卷に組織されてある。この分類方法と卷數とは、後世の二十代集勅撰歌集の軌範となつたことは、この集の威力の偉大さを語るものであり、又その完備した組織であることを證するものである。

變化があるといふこと〻、秩序があるといふこと〻は、正反對の地位に立つものである。秩序の整然たるものは變

化が乏しく、變化の縱横なるものは秩序を缺くことが多い。この兩立しない二つの傾向を兼ねることは、絶對に出來るものでない。かの萬葉集の四千數百首、數こそこの集に四倍してゐるが、通讀してゆくと、忽にして山忽にして川、忽にして村落忽にして谿谷、前後の應接に遑がないほど、變化に富んでゐる。讀み了つて一向その飽くことを覺えぬのは、内容の充實によることは勿論であるが、一はその編次がさのみ整然と秩序立てられない結果で、そこに何時も内容の變化が認められ、倦怠の氣の起る患をなくする。編次の不整理が飛んだ過ちの功名となつたものである。

これに反してこの集は餘りに秩序を立て過ぎた。類を以て序で、似を以て排し、微の微を穿ち、細の細をたづねて按排して往つた結果、何處を繙いて見ても、各種各樣の變化が乏しく、いづれも類想類型類調のものが列陳してゐるので、平板に流れ、興味の一半を殺ぐことゝなつた。撰者達が編輯上の能力技倆の十分に發揮されたことは感謝に値するが、そこに非常な不利益を釀してゐる。

今この編次の齊整たる實例を、一つ左に示さう。試にこの集の戀四(第十四卷)を檢すると、

(1)さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむ宇治のはし姬
(2)君やこむ我やゆかむのいざよひにまきの板戸もさゝず寢にけり
(3)いま來むといひしばかりに長月のあり明の月を待ち出つるかな
(4)月夜よし夜よしと人につげやらばこてふに似たり待たずしもあらず
(5)君こずば閨へも入らじ濃むらさきわが元結に霜はおくとも

(6)宮城野のもとあらの小萩露をおもみ風をまつごと君をこそまて

この六首は待戀の歌ばかり類聚したのである。(1)は待たるゝ戀、(2)は互待戀、(3)は深夜待戀、(4)は月夜待戀、(5)は乍立待戀、(6)は寄物待戀と次第されてある。かうした編次の方式は、後世の勅撰私撰の歌集及び類題歌集にその範を垂れたものゝ、いづれの部いづれの頁もこの調子では、山のない平野をゆくやうな感じがして、頗る妙でない。

(3) 署名の方式

この集署名の方式は、一見まち〳〵で、何の統一もないやうだが、決してさうでない。

皇上の御製は、

奈良のみかどの御歌　　仁和のみかどの御歌

と署して掲上の方式を用ゐてある。

皇族の御歌は、

これたかのみこ　　雲林院のみこ　　かげのりのおほ君

の如く、或は名或は稱呼を署してある。「これたかのみこ」の例によれば、「雲林院のみこ」は常康のみことあるべく、「雲林院のみこ」の書式によれば、「これたかのみこ」は小野の宮のみことあるべきである。

攝關大臣はその官職を主として、通俗の稱呼に從つた。決して氏姓名を現はさないのは、上古からの習慣で、敬意を表する所以である。その例は左の如くである。

前のおほきおほいまうち君　堀川のおほきおほいまうち君　近院の右のおほいまうち君　左のおほいまうち君

公卿即ち上達部以下五位の殿上人までは、氏姓名を署して官職を書かない。

在原行平朝臣（三位中納言）　在原業平朝臣（四位中將）　藤原敏行朝臣（四位右兵衛督）

藤原菅根朝臣（五位式部大輔）　藤原定方朝臣（五位少將）

このうちの變例としては、良岑宗貞が殿上人であつたに關はらず、氏名のみを署したことである。

地下の五位以下は氏名のみを署して姓を書かず、又官職も書かない。

藤原興風　布留今道　源當純

の類で、頗るおほい。

婦人の署名は甚だ大まかなもので、可なり薦次がない。打ち任せてはその本名を指斥せぬのが當時の風習であつたからである。

皇族方では、

閑院の五のみこ　業平の母のみこ

など、「業平の母のみこ」の如き、御本名は伊登内親王である。

普通女官吏の最高地位即ち典侍に至つた人は、官氏姓名まで署してある。その例、

典侍藤原因香朝臣　典侍藤原洽子朝臣

なほ宮中奉仕の女房は皆いはゆる呼名を以て書かれてある。

の類で、又乙（オト）は次第名、白女は遊女なので、その本名を署したのであらう。

三條の町　伊勢　大輔　因幡　二條　兵衛

氏を添へたのは、

小野小町　三國の町　紀の乳母

で、紀乳母は陽成帝の御乳母で、役柄の名で呼ばれたまゝに署してある。

僧尼は僧正級の人だけは、

僧正遍照　僧正聖寶

と署し、以下は凡僧に及ぶまで、

由性法師　素性法師　兼藝法師

と署し、尼は紛れぬように、

尼敬信

といふ風に署してある。

作者不詳のものは皆、

よみ人しらず

と署してある。これには全く不詳なものと、勅勘を蒙つた爲勅撰集に氏名をあらはし難いものと、或事情のもとに氏名をあらはさぬものと、甚しい卑賤によつて署名を憚つたものとがある。二條后や菅原道眞は第二に屬する人だから、今本に署名のあるのは、後人の所爲に相違ない。況や道眞のは「菅原朝臣」と著してあつて、前掲の書式

のどれにも協はない。第三に屬するものは、寛平后宮の歌合の歌をよみ人しらずとある類である。撰者の同時代で作者不明な筈がない。作者その人に何かの事情があつて、署名せぬことゝ思はれる。

(4) 和漢兩序考

○この集普通の流布本は、國文の序を最初におき、漢文の序を末尾に附けてある。國文の序卽ち假名序は紀貫之の作と傳へられ、漢文の序卽ち眞名序は紀淑望撰と署名がある。淑望は貫之の一族である。當代の老儒中納言紀長谷雄(ノハセヲ)卿の子で、文章生から大學頭東宮學士となつた漢學者である。

○序は端書(ハシガキ)である。假令漢文にせよ、序が末尾にあることは大きな矛盾である。古本(筋切など)には兩序ともはじめにある。しかもこの和漢兩體の序が、その結構布置からはじめて、措辭造句の末に至るまで、殆ど酷似してゐるから、そのいづれか一方は翻譯である事は、更に疑ふ餘地がない。この和漢兩體の序の出來た動機、及びその前後論について、こゝに記述する事としよう。

古今集以前の著書は國史といひ詩文集といひ、大抵は序文があり、その序は必ず漢文であつた。尤も内容も漢文又は漢詩であるから、ふさはしい理由もある。國文系統の書では、太安萬侶の古事記に序ではないが、漢文表が添うてゐる。とにかく序文といへば、當時は慣習的に漢文を使用することゝなつて居つたと斷言される。

かうした慣習に支配された時代に、古今集が撰著された。しかもそれが公式の勅撰集である以上は、必ず序文を冠する必要があつた。内容は國歌であるに關はらず、とにかく慣習的に先蹤を踏んで、漢文の序を冠することは、

當時に於いて最も當然過ぎる當然であつた。假令序論中に既に闡明した如く、この集勅撰の擧が漢學者に對しての對抗、漢文學に對しての復讐と見てからが、やはり强い慣習の手からは遁れかねて、一旦は漢文の序を冠したことと思はれる。現にこの集以後に出來た歌集「新撰和歌」にも、漢文の序を冠してゐることは、有力な證左である。

漢文の序作者紀淑望は、その身分閱歷からいつて、この集の序者として適任であつた。當時菅原道眞のやうな學和漢に秀でた才人も居たけれども、延喜五年時分は既に流謫の身で、筑紫に呻吟して居られた。よし又顯榮に居られた處が、その身分が高過ぎて、國史の撰輯などなら知らぬこと、かやうな太平の世の文飾に過ぎない觀のある詩歌の集などには、その序を執筆も署名もされる筈のものではない。それは懷風藻以後の諸詩文集の序者の身分を見合はせたら、卽坐に了解されよう。淑望の父長谷雄もともとより有名な文者であるが、既に上達部の末班に列してゐたから、却つてこの序者たる資格はない。

他にその人を求めると、藤原菅根もあらう、三善淸行もあらうが、この仕事は大抵なら御免蒙りたい仕事であつた。といふは、集は勅撰であるが、序は撰者貫之等の爲にする代作で、筆者自身署名するものではなかつた。貫之は歌人としては當代に認められて居つたが、身分は卑賤な御書所預くらゐである。階級觀念の强かつた當時では、この點でも多少代作を躊躇する人があつたらうと思はれる。そこで誰れ彼れといはず、この集の撰者たる、紀友則、紀貫之と同族的血緣を有する關係上、又重代の漢學者たる資格上、淑望が序者として指名されたのは、これも當然過ぎる程當然である。

淑望は集中に一首の歌をとゞめてゐる。元來が重代の漢學者だから、支那の事には明るいが、却つてわが邦の事

には闇い。何時の世でもかうした學者は存在するもので、それが又その當時には大した人氣で、世に重んぜられてゐたものである。彼れは漢詩の立場から立案して、歌集の序を作つた。

故に彼れは開口第一に「夫和歌者」と書いた。支那人が執筆したものならとにかく、わが邦人の書くべき口吻でない。蓋し嵯峨帝の前後、漢文學全盛時代の思想が傳流してゐて、恬として怪まなかつた用語の一つではあるまいか。とすればあながち淑望一人の罪でないかも知れぬ。次に歌の本旨を論ずるあたり、全く詩論を換したに過ぎない。殊に六義説などは木に竹を接ぐものである。また「古天子――擇士之才也」までは、支那唐代の詩賦を以て人材を採つた科擧の制を思つて書いたので、わが邦では全く無い事である。「乞食之客以レ此爲二活計之媒一」も、全く歌の上には無い事で、これも支那で落第の詩人などが詩を以て勢家に寄食した例話を思つて書いたものである。また「始有二三十一字之詠一今反歌之作也」とあるのは、萬葉集にまづ長歌を擧げて、次に反歌と題して、三十一字の短歌を擧げてあるのを見て、反歌は三十一字の詠の稱呼と誤認して書いたのである。

六歌仙の評論は大體において允當である。只喜撰の評に「其詞華麗而首尾停滯」とあるが、別に停滯といふ程でもなく、華麗は全然當つてゐない。小町を「衣通姬之流」といひ、黑主を「猿丸大夫之次」といふのは恐らく文飾の語であらう。その論據が甚だ薄弱である。但「各獻二家集并古來舊歌一曰二續萬葉集一於レ是重有レ詔、部二類所レ奉歌一勅而爲二二十卷一名曰二古今和歌集一」の一節は、この集撰著の來由經過を語るもので、大切な史料である。

淑望の所作に對して、かやうに論評することは、或は酷に失するかも知れない。實は歌學とか歌史とかいふ方面は、まだ平安文明草創の際に屬してをつて、甚だ蒙昧な狀態であつた。萬葉集の撰著の時代すら、漠然たる解説を

與へて居る程ではないか。さうした方面に誤謬があつたりすることは、恕してやらねばならない。又彼れがこの序を起草するに當つての態度を考察する必要があらう。抑もこの集の撰者には彼が族人たる友則貫之があり、友則死後は貫之が全部の責任者であつた關係上、この序文の署名者は貫之になつてゐる。隨つて署名者たる貫之の意見をたづね、それを尊重して書いたと見るが至當である。さればその詩論以外の責任は、貫之も分擔すべき性質のものかも知れない。とにかく當時の學問智識の程度では、あれ位が精一杯の成績と斷ずる。

漢文序を時代相當の所作とすると、國文序卽ち假名序は何の爲に書かれたかが問題になる。もし漢文序に撰者達の意に滿たぬ缺點や事情が伏在してゐるなら、奏請して面目をかへる爲に新に假字文で書くといふ自發的運動をするのも當然であるが、漢文序と國文序とを比較して見ると、詩論中の一部を除く外は全く同一致で、國文序は漢文序を飜譯したに過ぎない。かうなると屋上屋を架すで、頗る無用な事を企てた譯になるので、殆どその理由が成り立たない。

こゝに至つて勢ひ國文學復興の氣運を物語らざるを得ない。女文字で書くところの國文學は、仁明帝時代から復興の曙光を放ち、爾來歌道の隆盛を來したことは、序論中に記述した如くである。單に歌道のみといはず、女文字の使用が一般的になり、國文が弘通したことは、古今集の歌の詞書や伊勢物語竹取物語などの出現を見ても推想認識される事實で、中にも物語類に屬する著作が、婦人を中心として、盛に製作されたことは想像に難くない。

既に詩集勅撰の慣例を破つて、歌集勅撰の新例を啓いた撰者達は、果して漢文序を頂いて滿足してゐたであらうか。これは大きな疑問である。慣習的に據なく漢文序を承認したものゝ、恐らく彼等の意中には、國文序を冠せて

欲しかつたのではあるまいか。さうして純乎たる國歌の勅撰集たる體裁を整へ、範を後昆に垂れたいと希望してゐたのではあるまいか。打ては響く、思へば思はるゝの道理で、この希望はいつか天意を動し、更に國文の序を書くべき詔命は下つたと見られる。野々口隆正はいはく、

眞字序の立意は、皆もろこしの詩の論をもてきたれるにて、この國の歌のことにはかなはぬ事多かり。こと更に假名序を書けといふ詔にてありたらんには、貫之主の思ひ取られたる筋を書かるべかりしを、その漢文の序をそのまゝに譯せよとの勅にてありつと見え、その眞字序の意を失はじと力められたるものと見ゆ。

この評は全くこの間の消息を穿ち、祕密を見透し得た言である。全部書き換へることは、漢文の序者淑望の面目を潰すことにも當るので、かういふ折中彌縫の手段を取られたのらしい。又一面から見ると、既成の漢文序を國文に飜譯するのは、甚だ姑息らしい方法だが、これが從來の慣習を破つて、新慣習に入らうとする過渡の道程を、如實に物語るものではないか。

上に漢文序の筆者の黑幕の陰には、撰者貫之が居たことをいつた。さて漢文序が出來上つて見ると、殊に貫之等歌人の立場として見ると、不快なのは支那の詩論をそのまゝにわが歌論とした一點で、かねてより何とかしてこれだけは訂正したいと思つて居たものと思はれる。恰もよし國文に飜譯の勅命に接した。

貫之は何とこれらを譯したか。「夫和歌者」の冒頭の一句を本のまゝに「やまと歌は」と書いた。單なる直譯に過ぎないと見えるが、その心理には大きな相違がある。原文は只漢學者の口調に任せたので、深い用意のあるものではない。貫之のは全く別箇の意味あるもので、卽ち強く漢詩にあてゝ國歌を本とした筆法である。六義の說の如

きは修辭學と格調論とを混線させたもので、歌の上からいふと、始末に困る。然しその內容には觸れないで、只一句「からの歌にもかくぞあるべき」の語を附加して、本末轉倒、直に敵の得物を奪つて敵の胸を刺す筆法に出たのは、頗る愉快なやり方で、すべてを國歌中心に片付けたのは、まことに允當である。

原文「春鶯之囀二花中一秋蟬之吟二樹上一」の句は六義說の後にあるのを引き上げて「見る物聞く物につけていひ出せるなり」に續けたのは自然で宜しい。樹上の秋蟬を「水に住む蛙」と變へたのは日本的である。そして「物皆有レ之自然之理也」を「いづれか歌を詠まざりける」で攝してしまつたのは簡潔である。「動二天地一」に「力をも入れずして」、「感二鬼神一」に「めに見えぬ」の修飾語を冠せたのは、原文に勝る妙味がある。

「神世七代時質人淳情欲無レ分」を貫之は何と心得たのか、變な譯し方をした。卽ち「ちはやぶる神代には歌の文字も定まらずすなほにしてことの心わき難かりけらし」と書いた。これは原文の意とは相違してゐるのみならず、譯文はその要領を得難い。流石の貫之もこゝでは失敗した。「今反歌之作也」を全然すてたのは眼識がある。

「其後雖二天神之孫一――源流漸繁」の句はやゝ猥雜の感があるのを、これは「花をめで云々」と手輕に片付けてゐる。「猶拂レ雲樹云々」の句を樂天の座右銘に入れ換へて譯したのは、聊か自由がましいが、原文が譯しにくいからであらう。それすら「年月をわたり」「天雲おひのぼれる如く」と修飾や譬喩の語を挿んで譯してゐる。「難波津之什」に「淺香山の言の葉」を湊合して、「富緒川之篇」をすてたのは、一層實際的で、手習ふ人の はじめにもするほど親みが深い。

「今の世の中色につき云々」から「さかし愚なりとしろしめしけむ」の一節は、隆正の說に、

「今の世の中色につき人の心花になりにけるより、あだなる歌はかなき言のみいでくれば、色好みの家に埋木の人しれぬ事となりて、まめなる處には花薄ほにいだすべき事にもあらずなりにたり云々」と書きながら、戀の部五卷を擧げられたるはいかに。天皇に見せ奉るはまめなる極にあらずや。これは眞字序に「故半爲婦人之右、難進丈夫之前」とあるを、その意を違へじと譯されたる故、却りておのが撰集の意にそむけることを書かれたる也。又「いにしへの帝――さかしおろかなりと知ろしめしけむ」とあるも、やまと歌には離れたる事なり。これも眞字序に「古天子每良晨美景、詔侍臣預宴筵者獻和歌、君臣之情由此可見、賢愚之性於是相分、所以隨民之欲擇士之才也」とあるを譯されたる也。

「然あるのみならずさゞれ石に云々」から「歌にのみぞ心を慰めける」は、一々集中に典據を取つて頗る絢爛を極めた文字で、筆頭花を生ずる才文である。但原文には全然ない。この一節を挿んで、原文の「自大津皇子之云々――和歌漸衰」をすてたのは、次句への續きが面白くない故と思はれる。

人麻呂赤人の評は、何といつても巧語言である。原文の「並和歌仙也」などの遠く及ぶ所でない。「かの御時より」一は萬葉集撰著の時をさすものとは推想されるが、上にその時代が明記してないからよく利かない。これは上手の手から洩つた水である。「昔平城天子――不以斯道顯」の一節はこゝに引き上げられて、しかも省略されてある。

六歌仙褒貶の條は專ら原文を忠實に譯しながら、一段と精采のある文字となつた。

「今すべらぎの天の下云々」の一節は原文もなかなかよく書けて、その名文句「仁流秋津洲之外云々」は和歌朗

詠集に采錄された程である。「梅をかざすよりはじめて云々」は部立を面白く叙してはあるが、上に類似した文字があるので、又かといふ感じがする。

末節「飛鳥川の瀨になる云々」は原文では「仁流ニ秋津洲之外ニ云々」に續いて「淵變リテ爲レ瀨ト之聲寂々トシテ閉チレ口ヲ、砂長ジテ爲ルレ巖ト之頌洋々トシテ滿テリレ耳ニ」とあるのを、切離してこゝに譯したのは、聊か融通が過ぎる。「人麻呂なくなりになれど歌のこととゞまれるかな」で原文の譯は終つてゐるのを、更に「たとひ時移り事去り樂び悲び云々」の一節を附加したことは、譯文の方では文勢が盡きないので、結束が旨く付かない。止むを得ず、この節を書き足して結收したのである。また原文「俗人爭ウテ事トシ榮利ヲ――義慣ルレバ神明ニ也」の一節を略して譯さなかつたのは、その意がやゝ譏刺にわたる恐があるので、嫌忌を避けたものと斷ずる。その他をり〳〵位置を變更したり、或は重複にちかいのは切り捨てたりして活殺自在である。

要するに二三の瑕疵や失敗はあるとしても、全體から見れば、原文を凌駕した上手な譯し方で、殆ど飜譯の羈絆を脫して創作に近い。これが爲に本末轉倒の議論も起つてくるので、或は「假字序を感歎して淑望竊にこれを摸す」といひ、或は「假字序を書かむが爲にまづ淑望をして土代の草を書かしむ」ともいつて、古來その先後に更に一定の說がなかつた。然し漢文序の缺點と認められる箇處は、國文序には大抵訂正或は削除されてある。これ即ち國文序が後出のものである第一の證據である。況や本論を初頭より通覽してさて一瞑想に及んだら、國文序は飜譯文であることが意識され、前說の如き倒見は速に一掃される事と思ふ。後說の如きは餘に貫之の伎倆を輕視したもので、辯明の限でない。

二條天皇の皇女禎子内親王の御裳着の折、上東門院（藤原彰子）から御贈物に、貫之自筆の古今集を獻られたことが、榮花物語に見える。

(5) 證本

（イ）流布本

二日の夜さり還らせ給へば、一品の宮（禎子）の御贈には貫之が手づから書きたる古今二十卷、御子左（兼明親王）の書き給へる後撰二十卷、道風書きたる萬葉集などをぞ獻らせける。世になうめでたきものどもなり。圓融院より一條院に渡りたりける物どもなるべし。又世に類ひあらずなむ。（御裳着の巻）

この本はもと醍醐天皇の御本であつたといふから、若しこれが現存してゐたなら、唯一の證本であるが、惜しいかな燒けてしまつた。

古今證本陽明門院（禎子内親王）御本、貫之自筆、是延喜御本相傳也。後顯綱朝臣申賜、其後轉々、於二故公信朝臣許一燒二失之一、此本無レ序也。（袋草子）

また貫之自筆の假名序のついた小野皇大后の御本も、その宮で燒失したといふ。

小野皇大后宮御本 貫之自筆假名序也 於レ宮燒二失之一、以二件本一流二通家朝臣自筆本是也。

（異傳） 兼房朝臣の正本は、小野皇大后申し受けて御覽じける程に燒けにけり。貫之が自筆の古今も、その時同じく燒けにけり。くち惜しき事なり。（古今著聞集）

源氏物語梅が枝の巻に、

御子の侍從して宮にさぶらふ本ども取りに遣はす。――延喜の御門の、古今和歌集を、唐の淺縹の紙をつぎて、おなじ色のこき紋の唐の綺の表紙、おなじき玉の軸、だんの唐の組紐などなまめかしうて、卷毎に御手の筋をかへつゝ、いみじう書き續けさせ給へる、大殿油短くまゐりて御覽ずるに、云々。

これは小說ではあるが、當時醍醐帝宸筆の古今集が傳來してゐたのではあるまいか、けれどもそれも影も形ものこらない。

この外花園左大臣の傳來した閑院太政大臣本（貫之妹自筆假名序）もどうなつたか、その行方は不明である。

玆に至つて遂に中納言藤原定家が諸本を取捨して校定した本を以て底本とするより外はなくなつた。これに兩種ある。後堀河天皇の貞應二年七月に書かれたのを貞應本と稱し、その嘉祿二年四月に書かれたのを嘉祿本と稱する。

貞應本の奥書に、

此集家々所レ稱雖二說々多一、且任二師說一又加二了見一、爲レ備二後學之證本一不レ顧二老眼之不一レ堪、手自書レ之。

貞應二年七月廿二癸亥　戸部尚書藤　判

同廿八日令二讀合一訖、書二入落字一畢。傳二于嫡孫一可レ爲二將證本一。

當時は定家の一流が歌道の霸權を握つてゐたから、いよ〳〵この定家校本が盛行して、鎌倉時代以降今日に至る約七百年間を支配してきた。この長年月間に發生した文學技藝の作物は勿論、あらゆる事象の末に至るまで、苟も古今集に交渉あるものは、皆必ず貞應本を基礎としたのであつた。今日自分がこの集を研究するに至つて、なほ貞

應本卽ち流布本を基礎とした理由は、全くこの點にある。

（ロ）古筆物

世に高野切と稱して貫之筆と傳へられた古今集物は、その筆致からすると、三種にわかれるが、いづれも貫之當時の書風とは諾き難いのみならず、その一種の如きは全く藤原行成の筆である。しかもこの三種を通じて、完備してゐるのは五卷（秋下、原家藏）八卷（羇旅、毛利家藏）廿卷（大御所、山内家藏）の三卷に過ぎず、他は盡く斷簡零墨である。五卷と同筆と思はれる雜下は、今はわづかに模刻でのこつてゐる。

この他藤原佐理筆と稱する筋切は上卷のみにとゞまつて、下卷を逸してしまつたことは、假令佐理の筆でない迄も惜しいものである。又小野道風筆と稱する本阿彌切は物名（全）戀一（その半部）戀四（殆ど全部）を存してゐる。完本としては時代は後れるが、源俊頼筆の元永本を推すより外はあるまい。但これには追記の混入があるかと思ふ。

是等の古筆物は皆時代が舊いから、必ず善寫であらうと思つたら大間違である。これら古筆物が長い歳月を經て、今日にまで傳來した理由は、只その能書なる爲重襲秘藏された結果に過ぎない。抑も能書家は傳寫その事よりは、運筆に大きな興味を感ずるので、知らず識らず書く技術の方が主となり、寫す方が第二となる傾向が多い。それが爲落句落字寫誤等が頗る多くなる。實は拙書でもいゝから忠實に書寫したものに、學術上の價値はあるが、それらは鑑賞家からは一顧もされないから、隨つて反故と滅びてしまつたものと思はれる。されば前述の古筆類の多くは、假令それが完本であつても、證本にするだけの價値に乏しく、たゞ參考に供すべき性質のものであることを斷言す

る。

こゝに只一つ前田侯爵家所藏の藤原淸輔自筆の古今集は、學術上珍重すべきものと思ふ。これは小野皇大后家で燒失したといふ貫之自筆本を、その燒失前に若狹守通宗が傳寫し、その傳寫本によつて、淸輔が自ら寫し自ら校合して、他人の手を一切煩はさなかつたと、その奧書にある。淸輔は詞花集の撰者顯輔の子で、定家の父俊成と同時に斯道の宗匠と仰がれ、家を六條と稱し、その父祖子弟は皆有名な歌人又は歌學者であつた。しかも六條一流は微微として振はず、遂に滅亡してしまつたので、この本の傳流は、世上にその痕迹をとゞめなくなつた。

又近頃藤原雅經の自筆本が出現した。これは貫之三傳の本と稱する。雅經は飛鳥井家の祖で、新古今集撰者の一人ではあるが、定家の弟子分であつたといはれてゐる。

鎌倉末期以來の古寫本は頗る多いが、盡く定家校本の傳寫であつて、只その筆寫を云爲するにとゞまり、考異としての特別の價値あるほどのものはない。

(6) 註釋書

一條天皇時代の文運勃興期から、歌學の研究はます〳〵盛になつて、諸家の髓腦や歌論も續出するやうになつた。歌書を註釋することは、只典故や考異を附注するにとゞまつて、字句の解說までには及ばなかつた。王朝末期になつてくると、漸く研究が微細に入ることになつて、字句の解說も現れた。爾來この集の注釋書は續々と世に出て、足利時代、特に德川時代は多量な產出があつた。こゝには只この一斑を示さう。

○奥儀抄　古今の部	藤原清輔
○僻案抄　古今の部	藤原定家
顯註密勘	顯昭法橋註　藤原定家勘
深秘抄	飯尾宗祇
○古今抄延五記	堯惠法師
眞名字解	菊地春林
餘材抄	契沖律師
遠鏡	本居宣長
新釋	藤井高尙
鄙言	尾崎雅嘉
姿鏡	長野義言
辨誤	前田夏蔭
新注	間宮永好
抄	東常緣

註	北畠親房
聞書	二條爲家
童蒙抄	一條兼良
榮雅抄	飛鳥井雅親
○古今通	五井純禎
○八代集抄（古今の部）	北村季吟
打聽	賀茂眞淵
正義	香川景樹
塵拂	富樫廣蔭
大全	黒澤翁滿
評註	野々口隆正
朗解	宮部正岑
講義（賀マデ）	本居豐穎
詳解	中村秋香

○印を附けたる外は、皆頭に、古今和歌集の五字を冠すべし。

等、なほ澤山ある。就中、餘材抄、打聽、正義の三書が勝れてゐるである。遠鏡、鄙言、塵拂等は、俗語を以て

直譯したものでの良書である。奥儀抄以下、八代集抄までの諸書は、歌學の混沌時代になつた舊說で、顯註密勘と八代抄とを除いては、殆ど觀るに足るものがない。

又特に、集序ばかりを講說したものがある。

古今集序註　法橋顯昭　古今集序考　岸本由豆流
古今序註　了譽上人　古今集兩序鄙言　尾崎雅嘉
古今序古註考　荷田東滿　同　井上文雄

この他、一部分に局つた考證解釋の類を擧げると、餘に煩しくなるから、他は悉く省く。

(7) 各卷概觀

集中の歌を作者の詳不詳に關はらず、通じて假に前中後の三期に區分した。前期に奈良の遺製からはじめて天長頃までの作を統べ、中期に承和より仁和までの作を統べ、後期に寬平延喜の作を統べた。

春　上（卷　一）

元來四季の歌は自然の景趣を詠ずるのが主で、自然その物は極めて平和な對象であるから、隨つて平明和諧な調子、優麗な詞藻、或は雄渾な或は纖細な體格こそあれ、人事を主題とした作の如く、摯實な深刻な痛切な特徵は求められない。殊に平安人士は餘裕と遊びのある事を喜ぶ傾向のあつた以上は、さうした方面から、その長所を翫賞するやうにつとめたいと思ふ。

この部は立春から、春雪、鶯、初春、野遊、若菜、霞、鶯、春柳、春鳥、歸雁、梅花、初花、櫻花等の歌をおもに類聚してある。

後期の作家を中心として、行平業平兄弟、遍照などの中期の作家をまじへ、詠者不詳の作は中期を主として、後期のも二三認められる。かく後期の歌が、この巻の基調を成してゐるだけに、纖細優美巧緻の特長があるかはりに、一面頗る人爲に墮してゐる感もある。これは以下の各卷を通じての後期の作家の長短であるけれども、なほ傑作佳吟はおの〳〵その一割を占領してゐる。

春　下　（卷　二）

ちる櫻、花、ちる花、藤花、山吹、郊行、晩鶯、晩花、惜花、三月盡等の作を收めてある。中にもちる櫻、ちる花が大部分である。

中期の作家も相應に活躍してゐるが、主としては後期の作家が大努力をして、可なりの成績を收めてゐる。前卷と同じく寛平延喜の時代色を鑑賞するには好都合である。詠者不詳の作は前期中期に屬するもので、傑作二三を算する。

夏　（卷　三）

待時鳥、遲櫻、橘、時鳥、夏月、蓮、撫子、晩夏等の作を收めてある。しかし大部分は時鳥の歌である。時鳥は奈良人に盛に詠作せられ、爾來因襲的に歌人の吟詠の題目となつた。絶對客觀の作のないことは萬葉集も同樣であり、對比してみると、あながち萬葉に遜色がない。詠者不詳の作は前期中期の外に奈良の遺製が二三混入してゐる

かと思はれて、傑作に近いものも見え、後期のにも佳吟が散見する。

秋　上　（卷　四）

立秋、初秋、七夕、秋來、秋夜、秋月、蟲、蜩、雁、鹿、萩、露、女郞花、藤袴、薄、草花、秋幽栖等の歌を收めてある。

詠者不詳の作が約三分一を占めて、他の三分の二は殆ど後期の作家の所產である。詠者不詳の中には萬葉の歌の混入さへあり、奈良の遺製もあり、前中期の作もある。

松蟲、女郞花、藤袴の歌は、大抵名稱に基礎をおいた趣向なのは、甚だ面白くない手法であるが、中後期の人はこれを好んだものらしく、量において多分を占めてゐる。これを除くと、流石に傑作佳吟もある。

秋　下　（卷　五）

秋風、紅葉、菊、紅葉散、秋田、暮秋等の作を收めてある。

この卷も後期の作家の活躍場で、中期の作家のは六首ばかり、詠者不詳のは四分一に達してゐる。割合に菊の歌に佳作が多い。紅葉に關するものは頗る多量で、隨つて佳作もあるが、概していふと、この卷は傑作の量が少ない。只前卷の如き惡傾向の作がなく、すべて粒揃である。

冬　（卷　六）

落葉、冬草、氷、雪、寒松、歲暮等の作を收めてあるが、殆ど雪の歌が大部分を占めてゐる。

冬は自然の詩材が乏しいのは事實であるが、又平安人士が雪を特別に賞翫したことも事實である。白樂天の「琴

詩酒友皆抛レ我、雪月花時最憶レ君」の句は當時の口誦語で、その薫化は遂に花月に對揚して雪を翫ぶ風流心を、一般に植ゑ付けた。歌は大抵尋常の作である。

賀　歌　（卷　七）

賀算の歌及びそれに伴ふ屏風の歌を輯めてある。

喜劇は悲劇ほど深刻に榮えぬ如く、祝賀の作は古今東西を通じて立派なものが乏しい。然るにこの部の歌は割合にいづれもよく詠まれて、時に佳什名吟がある。この時代の人が明るいあざやかな心を有つてゐたことが思はせられる。國歌の「君が代は」を産したことは、何といつてもこの誇である。

離　別　（卷　八）

死別より悲しいといはれる生別離としては、その割に傑作が多くない。蓋し送留別の作は、時に一片の閑辭令に終る傾向のものがあるからであらう。心の底から滲み出た眞の情緒のものは、中期後期の作家を通じて、流石にいいのがある。

羇　旅　（卷　九）

量は餘り豐富でないが、大部分傑作又は佳作を以て充たしてゐる。蓋し題材がら情眞の語が多い爲であらう。殊に安倍仲麿の遺製を見ることは、この部に光彩を添へるものである。躬恒、貫之、兼輔の作は寧ろ略きたい。

物　名　（卷　十）

物名よみ込みの歌のみを輯めてある。全くの遊戲文字で、太平の世の消閑のすさびに過ぎない。修辭にも無理が

多く、愚劣な作が多い。集中最下に位する卷で、成る事ならば、この卷を全然略いて、二三の佳作を雜體の部に收めたかつた。

戀　（卷十一、十二、十三、十四、十五）

戀愛は人間本能の發動である。しかも、羞恥の念が常にこれに伴ひ、又社會や家庭との衝突を顧慮して、多く祕密の黑幕を蔽ふ。故にその千樣萬態の情緖を歌ふに、或は諷し、或は託し、或は比喩し、或は寄興する。戀歌に幽婉を尙び、露骨を厭ふのは、また事情の自然に出た結果である。只餘りに奇巧に馳せず、眞摯の情を失はぬのを程度とする。然るに、この部の歌、佳々その本を忘れて、徒に語言の末に拘つてゐるものが多い。それは緣語の修飾、及びいひ掛けの濫用である。緣語の濫用は詩味の範圍を縮小し、用語を制限して千篇一樣ならしめ、いひ掛けの濫用は秀句に墮ち洒落に流れて、却つて簡淨の妙はたづねられぬことになる。本集の戀歌、貞觀元慶以往に屬すべき詠者不詳の歌は、大抵高調であつて、以後のは多く卑靡振はず、剪裁厭ふべく覺える所以は、全くこゝにある。

戀一は八十三首のうち、後期の作はわづかに十一首に過ぎない。他は全部詠者不詳の歌で、それも前期中期――中期も初頭のもの――の作が互に相半ばしてゐると推せられる。隨つて古調の出色の作が多く、戀の部を通じての壓卷と思ふ。

戀二は珍しく後期の作家で、殆どその全部を占めてゐるので、完全に寛平延喜の時代色を通觀することが出來る。隨つて歌格はさう高くなく、輕薄の氣味もあるが、流石に巧緻な手腕が歷々と見える。

戀三は中期の作がその過半を占めてゐる。詠者不詳の歌は多少後期のもあると思はれるが、幸に業平及び小町な

どの活躍によつて生采を生ずる。

戀四は詠者不詳の歌が過半であるが、通じていへば、前期の作が二割を占め、中期の作が四割を占めてゐる。佳作の多い點から見れば、「戀三」よりは遙に勝れた卷で、「戀一」に次ぐべきものではないかと思ふ。

戀五は詠者不詳の歌は大抵中期に屬するものと思はれ、全卷の半數を占めてゐる。なほ中期の作者のが十一首もあるから、高調の作には乏しいが、後期の作の先驅として、傾聽に値する作がある。

哀　傷　（卷十六）

悼亡の作で、萬葉の挽歌に當る。奈良の遺製は一つもなく、全く中後期を通じて平安朝の作家で占めてゐる。流石にあの花鳥風月の品題と異なつて、盡く實況實詩の情眞の語であるが爲、浮砭な作が一つもないことは、頗る愉快である。一唱三歎の傑作佳作が續出してゐる。

雜　上　（卷十七）

こゝには歡會、交遊の諸作から、雜の月（季をもたぬ月）懷舊、老を歎く、行遊（旅情を歌はぬ遊行）題畫（祝賀などに關せぬ）等の諸作を網羅してゐる。

題詠の作も少々はあるが、大抵は實詠で、佳吟は三分一を超え、中期及び前期の作が半數を占めてゐる。流石に雜の部だけあつて題材が常に變化してゆくから、通覧すると、多種多樣の感が湧いて、頗る面白い。

雜　下　（卷十八）

こゝには無常、厭世、述懐、住居、幽棲、尋訪、懷古、その他の諸作を收めてある。

前巻と同じく大抵實詠で、通覧すると變化が多い。半數は詠者不詳で、別に前中期の作十六首までを算し、他は後期の作である。佳吟過半を占め、傑作も頗る多い。前巻よりは更に勝るといつてよからう。

雜　體　（巻十九）

長歌、旋頭歌　誹諧歌を輯めた巻である。誹諧歌は歌體においては本歌と同一であるが、内容が特殊の物なのでこゝに編入したものと見える。

長歌は組織に規律がなく、まづ未製品といつてよい。旋頭歌は第一、量において問題にならぬ。誹諧歌は中にはその誹諧たるを疑ふべき相應の佳作もあるが、概してはやはり誹諧で、甚だ低級な洒落に墮してゐる。

大歌所御歌　（巻二十）

これは大歌所において謠物として扱つた歌詞の中から選抜したもので、黒主、敏行の二首の外は、盡く詠者不詳の歌である。その種類は大直毘の神祭歌、大和舞の歌、何振と稱する謠物の歌、神樂に屬する採物や、大ひるめ、反し物の歌、代々の大嘗會の歌、東遊の國振の歌、賀茂祭の歌等である。

詠者不詳の歌は、全く奈良時代の古製と斷ずる。中には平安期の時調が看取されるのもあるが、それも古歌を謠ひかへ或は謠ひ僻めたものに過ぎない。

この巻ほど傑作を網羅し得たのは、他にあるまい。殆どその半數は絶唱神品と稱すべく、他にも佳吟が相次いでゐる。藤原定家が「凡此部歌、與二日月一懸リ、與二鬼神一爭レフヲ奥、非二短慮ノ所一レニ及ブ」と激稱したのは、流石に一隻眼を有するものである。

古今和歌集序

やまと歌は、ひとの心を種(タネ)として、よろづの言の葉とぞなれりける。

○「やまと歌」は倭歌の意で、わが國の歌をいふ。詩をから歌といふに對へた名である。本來なら日本人が日本の歌の事をいふのだから、歌とばかりいふべきものを、かう書いたのは、「當時漢詩の流行盛なりしより、世人、或はやまと歌、或は和歌などいひつらねたりし語弊を承けて知らざるものなり」と、古人は難じてゐる。果してこの文が眞名序(漢文の序)を譯したとすれば、「夫和歌者」とあるにひかれて、ふと謬つたかとの疑もあるが、やはり考へてみるとさうでない。これは詩に對へた語で、後にわが歌體を論じては、「からの歌にもかくぞあるべき」とあるに、對照呼應してゐるので、更に、不用意の誤ではない。○「ひとの」は顯昭の古今鈔に、「貫之集にひとつとあり」と見えて、其の方がいゝやうにいつたのに左袒する人が多い。次の「よろづの言の葉」とは適對だから、一應は尤もと思はれるが、又一面から考へると、わざと文詞を參差させて偏對を作すのは、平板の意趣を避ける修辭の一法であるから、却つて本文の方が面白いと思ふ。「言の葉」は詞である。草木の葉によせて、「心を種」に對せしめた。

○この節はこの序の全篇に亘つての冒頭である。譬喩で文を成し、婉にして巧なるものである。眞名序(漢文の序)には、「夫倭歌者、託(シ)二其根(ヲ)於心地(ニ)一、發(カス)二其花(ヲ)於詞林(ニ)一也」とある。

世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふ事を、見る物聞く物につけて、いひ出だせるなり。

○「ことわざ」は事と業と。○「つけて」は託しての意。事業が繁ければ、心にいろ〳〵な思が起つてくる。そのいろ〳〵な思卽ち喜怒哀樂の情を、花鳥風月などの見聞く物のうへにつけて、歌ひ出すのが歌であるといふ。

○この節は前節の細目で、前節はこの段の大綱である。眞名序に「人之在レ世、不レ能二無爲一、思慮易レ遷、哀樂相變、感生二於志一、詠形二於言一」とある。

花に鳴く鶯、水に住むかはづの聲を聞けば、いきとしいけるもの、いづれか歌を詠まざりける。

○「かはづ」は今は田中に鳴くかへるをいふが、古くは山川などに住んで淸亮の聲を發する、かじかをいつた。萬葉集などに詠じたのは皆それである。夏の末から秋の頃鳴けば、「水に住むかはづ」を秋として、春の「花に鳴く鶯」に對を取つた。

○この節は前段の餘波である。生ある者は感あり、感あるものは情あり、情ある者の聲は卽ち歌である。されば、世に歌を詠まぬ物がどこにあるか、況や人としてはもだし難い筈だから、歌詠むが當然であると激勵した。眞名序に「若下夫鶯之囀二花中一、秋蟬之吟上樹上、雖レ無二曲折一、各發二歌謠一、物皆有レ之、自然之理也」とある。秋蟬を本文は、「水に住む蛙」といひ換へたので、愈妙である。

力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬおに神をもあはれと思はせ、をとこ女（ヲウナ）の中をもやはらげ、たけきもの丶ふの心をも慰むるは歌なり。

○この節は歌の徳を讃歎してゐる。「力をも入れずして」と冠せたので、天地を動かす事も容易いやうに聞え、「目に見えぬ」と添へたので、幽冥の物深い鬼神をさへ感ぜしめる、幽玄微妙な働のあることを思はせた。眞名序に「動二天地一、感二鬼神一、化二人倫一、和二夫婦一、莫レ宜二於和歌一」とある。もと毛詩の序に、「動二天地一、感二鬼神一、莫レ近二於詩一」とあるによつて書いた。

この歌、あめつちの闢（ヒラ）けはじまりける時よりいできにけり。

（あまの浮橋の下にて、女神をがみとなり給へる事をいへる歌なり。）

○「あめつちのひらけはじまりける」は古事記、日本紀の神代開闢說に本づいたのである。天地初發の時より出來たりとは、卽ちその時代に神人化生し、化生した神人はおのづから性情があるとすれば、歌も必ず出來る道理なので、大凡に推究して斷言した。眞名序に「然而神世七代、時質人淳、情欲無レ分、和歌未レ作」とあるを、貫之自己の見識を以て、引きちがへて書いた。

左註に、「あまの浮橋云々」とあるは、文理が通らない。この序註を、藤原公任卿の所爲なりといふ說がある。いかにも其の頃の人の書き加へたものらしい。甚だ誤謬が多くて、殆ど采るに足りない。故につぎ〳〵のも、

解釋を省くことにした。

しかあれども、世に傳はる事は久方のあめにしては、下照姫にはじまり、（下照姫は天稚彦のめなり。せうとの神のかたち、岡谷にうつりて赫くを詠める、えびす歌なるべし。それらは文字の數も定まらず、歌のやうにもあらぬ事どもなり。）

あらがねの土にしては、素盞嗚尊よりぞおこりける。

○「久方の」は天、「あらがねの」は土の枕詞である。○「下照姫」は大國主神の女、夫天稚彦の死んだ時、兄味耜高彦根命が弔ひに來たのを、居合せた諸神達が、その容貌がよく似たので、天稚彦と思ひ違へて取り縋つたのを怒つて、飛び去された時、其の光儀が二丘二谷の間に照り渡つたのを、下照姫が、

あめなるや〳〵、おとたな機のうながせる玉のみすまる、みすまるのあな玉はや、み谷ふたわたらす、あぢすき高彦根の神ぞや。

と詠んだ。これは高天原での出來事である。素盞嗚尊が出雲の國で稻田姫と結婚された時、「八雲たつ云々」の歌を詠まれたのは、下照姫より時代が古いが、天と地との順序に從つて、前後させて書いた。

ちはやぶる神代には、歌のもじも定まらず、すなほにして、ことの心わき難かりけらし。人の世となりて、すさのをの命よりぞ、みそもじ餘り一文

字はよみける。

(すさのをの命は天てるおほん神のこのかみなり。女と住み給はむとて、出雲の國に宮造し給ふ時に、其の所に、八色の雲のたつを見てよみ給へるなり。「八雲たついづも八重垣つまごめに八重垣つくるその八重垣を」)

○「ちはやぶる」は神の枕詞。○「歌のもじも定まらず」は神代に歌の文字を五七の定數にのみ詠まなかつたことは、前の「あめなるや」の歌を見てもわかる。○「素直にしてことの心分き難かりけらし」とは意の通らぬ文である。「けらし」も調はない。「素盞嗚命よりぞ」の句も前段と重複してゐる。香川景樹はこれを削つて、人の世となりてぞみそ文字餘り一文字はと改めて、神武帝以後の人間世界となつて、專ら三十一字の歌を詠んだの意に解した。又、富樫廣蔭は、「この一節を全く削り去るべし」と云つた。

眞名序には「逮二于素盞嗚尊一到二出雲一、始有二三十一字之詠一、今反歌之作也、其後雖二天神之孫、海童之女一、莫レ不下以二和歌一通上レ情者上也、爰及二人代一此風大起」とある。

かくてぞ花をめで、鳥を羨み、霞を憐び、露を悲ぶ心ことば、多くさま〴〵になりにける。

○「めで」といひ、「羨み」といひ、「憐び」、「悲ぶ」とあるは、只語を變へたのみにて、皆感ずる意である。○「心詞多く云々」は、心多く詞さま〴〵になるの意を、參差させたのである。

○上文には歌の始をいひ、これからは、歌のさま〴〵に推し移つて、その盛になつた狀を述べた。花鳥霞露の四物を摘出して、春夏秋冬の時々に見聞く物につけて、感情の發することを叙べた。

遠き處も出で立つ足もとよりはじまりて、年月をわたり、高き山も、麓の塵ひぢよりなりて、天雲たなびくまで生ひのぼれるが如くに、この歌もかくの如くなるべし。

○「年月をわたり」は時日を經過する意。○「塵ひぢ」の「ひぢ」は泥土のこと。○「生ひのぼれる」は生ひ騰れるで、生長するをいふ。

○何事も末廣く成り行く前節の意を、譬喩を以て再演した。白樂天が座右銘に「千里始二足下一、高山起二微塵一、吾道亦如レ此、行レ之貴二日新一」とあるを本文にして、「千里云々」の句には、「年月をわたり」と添へ、「高山云々」の句には、「天雲棚引くまで」と添へて一層誇張したので、作者の文字となつた。○「この歌もかくの如くなるべし」は「吾道云々」の句をそのまゝに譯した。「如く」といふ語を反復したのは古文の體で、わざとおほめかして、既往のみならず將來をもかけて云つた。眞名序に「長歌、短歌、旋頭、混本之類、雜體非レ一、源流漸滋、譬猶下拂レ雲之樹、生レ自二寸苗之烟一、浮レ天之波起中於一滴之露上」とあるを、詞を換へて書いた。

難波津の歌は、みかどのおほんはじめなり。

（おほさゝきの帝の、難波津にてみこと聞えける時、東宮を互に讓りて、位に卽き給はで、三年になりにければ、王仁といふ人の、いぶかり思ひてよみて奉りける歌なり。この歌は、梅の花をいふなるべし。）

あさか山の言の葉は、采女(ウネベ)の戲(タハブ)れより詠みて、

(葛城のおほ君を、みちのくへ遣はしたりける時に、國の司ことおろそかなりとて、設などしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の、かはらけとりてよめるなり。これに、其のおほ君の心とけにける。)

このふた歌は、歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人のはじめにもしける。

○「難波津」の歌は、王仁の仁德帝の卽位し給へるを祝ひて、

難波津にさくやこの花冬ごもり今を春べとさくやこの花

と詠みて奉れるをいふ。されば次の、「みかどのおほんはじめなり」は、天皇の御世の始なりの意ならむと、古人は解いたが、如何にしても不完全な句で意が通じない。○「あさか山」の歌は舊註にある通りの事實で、

淺香山影さへ見ゆる山の井のあさくは人をわが思はなくに

と詠んだことが、萬葉集卷十六に出てゐる。○「戲れより」は萬葉集のこの歌の詞書に「於レ是、有二前采女一、風流娘子、左手捧レ觴、右手持レ水、擊二之王膝一而詠二其歌一」とあれば、わざとなまめき戲れつゝ詠んだ歌である。○「采女」は、孝德紀に「凡采女者、貢二郡少領以上姉妹及子女、容貌端正者一」とあつて、宮中に出仕して、主上の飯饌などに勤むる役である。○「このふた歌は云々」は、この二首は、一は天皇の御世の始を祝し、一は王の御心の解けた歌で、共におめでたい歌だから、この頃の幼兒の手習の始に敎へる事となつたと見える。兒童としては初めて接する歌ではあり、殊に一首は男の作、一首は女の作なので、兒童の爲には、「歌の父母のやうに」と譬

へていつた。いろは歌を小兒の手習の始に課する事は、ずつと後世の事である。

又いふ、難波津の歌を王仁の作といふは據のない臆說で、その歌體も仁德帝時代のものでない。ずつと後世の作である。想ふにこれは日本紀竟宴の際に、誰かが仁德帝を題として詠んだ歌と思はれる。眞名序に「至レ如下難波津之什獻二天皇一、富緒川之篇報中太子上、或事關二神異一、或興入二幽玄一、但見二上古歌一、多存二古質之語一、未レ爲二耳目之翫一、徒爲二教誡之端一」とある。

そも〱歌のさまむつなり。からの歌にもかくぞあるべき。

○「そも〱」は前を承けて後を起す語。○「歌のさまむつなり」とは、次に擧げた「そへ歌」、「かぞへ歌」などの事をいふ。

詩に六義といふ事あるにより、眞名序に「倭歌有二六義一、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌」と擧げたのを承けて、强ひていろ〱の名稱を作つて、歌に六體あるやうにいひなし、詩にもこの六體があるべきだと、本末顚倒の論をたてたのは一時の作意で、詩をおとし歌を揚げて、ひどくしたゝかな者のやうに宣揚したので、紀氏の斯道を執する熱心とその意見とが見られる。されば、歌の六體は甚だいはれのない事だらけで、解し難い。○「からの歌にもかくぞあるべき」は、冒頭の「やまと歌は」とあるに呼應してゐる。

そのむくさの一つには、そへ歌、

（おほさゝきの御門をそへ奉れる歌、「難波津にさくやこの花冬ごもり今を春べとさくやこの花」といへるなるべ

し。)

二つには、かぞへ歌、

(「さく花におもひつくみのあぢきなさ身にいたつきのいるも知らずて」といへるなるべし。)

(これはたゞ言にいひて、物に喩へなどもせぬものなり。この歌いかにいへるにかあらむ、その心得がたし。

いつゝにたゞ言歌といへるなむ、これにはかなふべき。)

三つには、なずらへ歌、

(「君にけさあしたの霜のおきていなば戀しきことに消えや渡らむ」といへるなるべし。)

(これは物になずらへて、それがやうになむあるとやうにいふなり。この歌よく適へりとも見えず。「たらちめの親のかふこのまゆごもりいぶせくもあるか妹にあはずて」かやうなるや、これには適ふべからむ。)

四つには、たとへ歌、

(「わが戀はよむともつきじありそ海の濱のまさごはよみつくすとも」といへるなるべし。)

(これはよろづの草木鳥けだものにつけて、心を見するなり。この歌は隱れたる處なむなき。されど、はじめのそへ歌と同じやうなれば、少しさまを變へたるなるべし。「すまの海士の汐やくけぶり風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」この歌などや適ふべからむ。)

五つには、たゞごと歌、

（「いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし」といへるなるべし。）

（これは言のとゝのほり正しきをいふなり。この歌のこゝろ更にかなはず。とめ歌とやいふべからむ。「山ざくらあくまで色を見つるかな花ちるべくも風ふかぬ世に」）

六つには、いはひ歌なり。

（「此の殿はうべもとみけりさき草のみつばよつばに殿造せり」といへるなるべし。）

（これは世をほめて神に告ぐるなり。この歌いはひ歌とは見えずなむある。「かすが野に若菜摘みつゝ萬代をいはふ心は神ぞしるらむ」これや少しかなふべからむ。おほよそ六種（ムクサ）に別れむ事は、えあるまじき事になむ。）

○「そへ歌」は風、「かぞへ歌」は賦、「なずらへ歌」は比、「たとへ歌」は興、「たゞごと歌」は雅、「いはひ歌」は頌に當てゝ書いたと見える。されどもその稱呼大方は當らない。もと〳〵故意にこじつけたのだから、しひて穴ぐるにも及ばなからう。また原文にはなりの語がない。「むつにはいはひ歌」とのみでは、文章が整はない。よつて景樹の説によつて補つた。どうしても爰では、一まづ結束せねばならぬ文勢だからである。本文は左註にまた左註がついてゐる。今それを一字引おろして、區別をたてた。

今の世の中色につき、人の心花になりにけるより、あだなる歌、はかなき

ことのみいでくれば、色好みの家にうもれ木の、人しれぬ事となりて、まめなる處には、花すゝき、ほに出だすべき事にもあらずなりにけり。

○「あだ」は浮薄の意。○「はかなきこと」はたわいもない言の意。○「うもれ木の」は埋木の如くの意で、人知れぬにかゝる序詞。「色好みの家に埋れ」に埋木をかけた。埋木は古代の木材の半石化した物で、地中から發掘される。○「まめなる處」はまじめなる所の意。○「花すゝき」は穗に出だすにかゝる序詞。○「穗に出だす」は公然と顯すをいふ。

○文意は、當世の風俗は、爭つて色に媚び、人情は浮華にばかり流れて、したゝかなる事はなくなり、浮いたしどけない歌ばかり出來れば、只色に耽けるすき人の、内々の翫弄物となつて、表面の眞じめな場所へは、公然と持ち出すべき事でもなくなつてしまつたと歎息した。蓋し漢文學の盛になつてから、士大夫たる者は、皆その方に心を入れて、歌は捨てて顧みなかつたので、おのづから男女の間の意志を通ずる所謂花鳥の使にのみ用ゐられて、わづかに殘喘を一隅に保つに過ぎないのであつた。

○この節、對句を以て仕立てた間に、「あだなる歌はかなき言のみいでくれば」の一句を挿んで變化を寬め、且上文の「力をも入れずして天地を動かし」の句に反襯せしめた。

眞名序に「及下彼時變二澆漓一、人貴中奢淫上、浮詞雲興、艷流泉涌、其實皆落、其花孤榮、至レ有下好色之家、以レ此爲二花鳥之使一、乞食之客、以レ此爲中活計之媒上、故半爲二婦人之右一、難レ進二丈夫之前一」とある。

そのはじめを思へば、かゝるべくなむあらぬ。

○決前生後の過渡の句である。歌の起源を思へば、かうした譯のものでないと抑へた。

いにしへの世々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜毎に、さぶらふ人人を召して、事につけつゝ、歌を獻らしめ給ふ。

○好色の家にばかりもて扱ふものではなく、古は世々の帝王も、折々にこれを勵まし奬められたといふ。眞名序に「古天子、毎二良晨美景一、詔下侍臣預二宴莚一者上獻二和歌一」とある。

あるは花を翫ぶ「そふ」とて、たよりなき所にまどひ、あるは月を懷ふとて、しるべなき闇にたどれる心々を見給ひて、さかし愚なりとしろしめしけむ。

○「花を翫ぶ」は原文「そふ」とある。契沖は「戀ふの誤寫ならむ」といひ、又景樹は、「一本に、もてあそぶとあるに從ふべし」といつた。いかにも本のまゝでは聞えない。後拾遺集にも、花を翫ぶとある。

○花を賞翫するより、深山の人氣遠き所に惑ひ入り、月に熱心の餘りに、闇夜の案内も知らぬ野山の道などに迷ふ、くさ〴〵のあはれを述べた歌の巧拙善惡を帝の御覽なされて、歌主の賢愚得失を見分けられた事であつたらうといふ。眞名序に「君臣之情、由ㇾ斯可ㇾ見、賢愚之性、於ㇾ是相分、所下以隨二民之欲一擇中士之才上也」とあるを襲うたので、そのもとは支那で詩賦を課して人を採つた、擧科の制を下に思つた書き方である。わが國では、歌で科場を立てゝ人物を採つた例はない。

しかあるのみならず、さゞれ石に喩へ、筑波山にかけて君をねがひ、よろ

こび身にすぎ、たのしみ心に餘り、

○公の上の事ばかりではない、私の思ひを述べるにも、歌によつたものだといつて、以下は本集中の歌の意詞を取つて文を成した。

わが君は千代にましませさゞれ石のいはほとなりて苔の蒸すまで　賀歌

筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみかげにます蔭はなし　東歌

いづれも君上を稱へ奉つたのだから、「君を願ひ」といつた。○「よろこび云々」の句は、同意の事を對句にいひ換へたまでゝ、準據は定かでない。

富士の烟によそへて人を戀ひ、松蟲の音に友をしのび、

人しれぬおもひを常にするがなる富士の山こそ我が身なりけれ　戀歌、一

ふじの根のならぬおもひに燃えばもえ神だに消たぬ空し烟を　誹諧歌

君しのぶ草にやつるゝふるさとはまつ蟲の音ぞ悲しかりける　秋歌、上

これらの歌によつて書いた。○「しのび」は慕ふこと。思ひ出づること。

高砂、住の江の松も、あひおひのやうに覺え、

○「高砂」は播磨の國。○「住の江」は攝津の國の名所で、いづれも年ふりた松のあるので顯れた。

誰をかもしる人にせむ高さごの松もむかしの友ならなくに　雜歌、上

われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いく世へぬらむ　同

によつた。〇「あひおひ」は三說ある。一は舊說で、相逐（アヒオヒ）の義として、互に追ひみ追はれみする、口語のおッかッつの意である。二は契沖の說で、相生の義として、同年に生ひた意である。三は荷田東滿、及び加茂眞淵の說で、相老の義卽ち互に老いた意として、假名もおいと改めた。契沖の相生の說が、中で殊に穩かと思はれるから、今はこれに從つて、己が老いた心から、松の老いたのをも、自分と同じ齡に生ひ立つものゝやうに思はれるの意とする。

男山の昔を思ひいで、女郞花の一時をくねるにも、歌をいひてぞ慰めける。

今こそあれわれもむかしは男山さかゆく時もありこしものを　雜歌、上

秋の野になまめきたてるをみなへしあなかしがまし花も一時　誹諧歌

これを取り成したので、男女共に若かつた時を思ひ出して、年老いたのを歎息する意。〇「くねる」は曲る義で、女の科（シナ）を作つた狀態をいふ。

〇「歌をいひてぞ云々」は、上文の「さゞれ石に喩へ、筑波山にかけて」といふより以下の文を、一括して汎く受けたので、喜怒哀樂さま〴〵な人世にあつて、その心の鬱結し、其の情の切迫する時々には、歌を詠んで慰めるのが古今の通情で、卽ち歌の德であると稱讚した。

また、春のあしたに花の散るを見、秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き、

○「夕暮」は一本に夜とあるが面白くない。
○こゝは再び上文の意を受けて、歌の功德を述べ、「春のあした」に「秋の夕暮」を對へて、四季折々の風物が、わが身の感哀を惹き起すことを云つた。修辭上の準據は、春秋の部に同意の歌が多くて、必ずこれと指摘しがたい。おしならして大凡に書いたのだらう。

あるは年毎に鏡の影に見ゆる、雪と波とを歎き、草の露、水の泡を見て、我が身を驚き、

○鏡に映つた白髮を雪に、顏の皺を寄る波によそへたのは老人の述懷で、
うば玉のわが黑髮やかはるらむ鏡のかげにふれる白雪　物名
難波の浦にたつ波のなみのしわにやおほゝれむ云々　雜體 長歌の一節
とあるに當る。又、露や泡やのもろくはかない物に、わが生命をよそへて驚くのは、左の歌などに據つたのだらう。
露をなどあだなるものと思ひけむわが身も草におかぬばかりを　哀傷
うきながら消ぬる泡ともなりなゝむ流れてとだに賴まれぬ身は　戀歌、五

あるはきのふは榮えおごりて、けふは時をうしなひ世にわび、親しかりしも疎くなり、

○難波本に「おごりて」の下に、けふはとあるのが正しい。上の「きのふは」に對へたのである。○「世にわび」は世に捨てられて衰へたのをいふ。景樹が、て文字をこの下に補つたのは聞え易いが、なくても文理はとほる。さてこゝは、

いにしへの賤のをだまきいやしきもよきも盛りはありし物なり　雜歌、上

世の中は何かつねなるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬になる　同、下

などあるに當る。「親しかりしも云々」の句に該當する歌は見えない。強ひてあげれば、

おほあらきの森の下草おいぬれば駒もすさめず刈る人もなし　雜歌、上

などの類か。

あるは松山の波をかけ、野中の水を汲み、秋萩の下葉をながめ、曉の鴫の はね掻を數へ、

君をおきてあだし心をわがもたば末のまつ山波もこえなむ　東歌

いにしへの野中のしみづぬるけれどもとの心をしる人ぞ汲む　雜歌、上

秋萩の下葉いろづく今よりやひとりある人のいねがてにする　秋歌、上

あかつきの鴫のはねがきもゝはがき君が來ぬ夜は我ぞ數かく　戀歌、五

とあるに當る。「かけ」といひ、「汲み」といふは、波水の縁語で仕立てたので、物に寄せて思を述べた。猶、萩には「ながめ」といひ、鴫には「數へ」とあるも同趣向である。○「はね掻」は羽搔ともいふ。

あるは呉竹の憂きふしを人にいひ、吉野川をひきて世の中を恨み來つるに、

世にふれば言の葉しげき呉竹のうきふしごとにうぐひすぞなく　雜歌、下

流れては妹せの山のなかにおつるよし野の川のよしや世の中　戀歌、五

これらの歌が當らう。○「うきふし」は憂き事の意で、「ふし」は節で呉竹の縁語。○「ひきて」は川の縁語である。○「世の中を」は男女の間をいふ。

○上文「春のあした」より以下、春夏秋冬哀傷戀雜等の種々の歌のさまを、「あるは」の語を四度まで疊用して、折り返し〳〵排對して叙べて來たのを、「恨み來つるに」の一句に結束收拾して、更に後文を引き起した。

今は富士の山の烟も立たずなり、長柄(ナガラ)の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心を慰めける。

○さやうに物に擬へ事に喩へて思を述べ來つたのに、

ふじの根のならぬ思ひにもえばもえ神だにけたぬ空しけぶりを　（再　出）

世の中にふりぬる物は津のくにの長柄の橋と我れとなりけり　雜歌、上

など、今は永久な物のためしに引いた、その富士の烟は絶え、長柄の橋は新造せられたと聞く人は、世の有爲轉變の甚しい歎を、歌にかゝつてばかり慰めたとの意。富士の山の噴烟は、昔から斷續が不定だつた　尻く清

和帝の朝の人、都良馨の富士山記には、「常見ニ烟火ヲ一」とあるが、この序を書いた頃は絶えたものと見える。長柄の橋は破損したまゝで、久しく新造も無く、橋柱のみ殘つて居たのを、宇多帝の時に更に造り架けられたらしい。帝の御歌に、

つくるなる橋としるくうらむれば思ひながらをいふにぞありける

又、集中の誹諧歌に、伊勢、

難波なるながらの橋もつくるなり今はわが身を何にたとへむ

とある。されば「つくる」を、舊註の一説に、盡くるの意に解いたのは當らない。また語格も穩かでない。その意ならば、盡きぬなりとありたい。

古へよりかく傳はるうちにも、奈良の御時よりぞ弘まりにける。

○「奈良の御時」は大和國奈良に都された時代を指したので、元明帝から光仁帝にいたる、七代九十年間をいふ。次に續けて人麻呂、赤人の事をいつてあるが、二人ながら飛鳥（天武）藤原（文武持統）の宮の御時の人だから、うち合はない。故に眞淵は誤として、「ならの御時」といふより、「おほきみつの位」といふまでの文を削つた。されど、飛鳥藤原時代は、奈良時代といつても似合しい程接近してゐるから、大やうに書いたものとして見てよいかとも思ふ。さて昔から世々を經て、歌の傳はつて來た中にも、取り分けてこの御時より盛に流行したのであつたとの意。

かのおほん世や、歌の心をしろしめしたりけむ。かの御時に、おほきみつ

の位柿本の人麻呂なむ、歌のひじりなりける。これは君もひとも、身をあはせたりといふなるべし。秋のゆふべ、立田川に流るゝ紅葉をば、帝の御ほん目には、錦と見給ひ、春のあした、吉野の山の櫻は、人麻呂が心には、雲かとのみなむ覺えける。

○「かのおほん世や」とあつて、又「かの御時」とあるのは、何は別だがうるさい。又、「おほきみつの位」は正三位である。人麻呂が正三位に叙せられた事はない。國史に薨卒の事さへ見えない程だから、六位以下の微官である。姑く正六位と見て、六と三との草書の寫誤を承けて、假名書にした誤とする說もあるが、猶快くない。○「歌のひじり」は歌の名人といふ程のこと。○「君もひとも身をあはせたりといふなるべし」は全く注釋の書體だから、左註の文が本文に混れ込んだものと思ふ。○「立田川に流るゝ紅葉云々」は、集中秋歌下、題しらず、よみ人しらずの歌に、

たつ田川紅葉みだれて流るめり渡らばにしき中や絶えなむ

の左註に、「此歌はある人奈良のみかどの御歌なりとなむ申す」とある。これによつて書いたものか。されど、奈良の御門は平城帝の御事で、人麻呂とは時代がずつと違ふから、取り合はせてはいはれない。○「吉野の山の櫻云々」は、契沖が「人麻呂の歌に、櫻を雲と見たるはなけれど、上に對して云はむとて、あるまじき事ならねばかくはいへり」と云つたのは、甚しい牽强である。素より萬葉集にも何にも見えぬ事だから、勿論妄である。されば、「かの御時に柿本の人麻呂なむ歌のひじりなりける」の一句を存して、他は皆盡く刪り去るがよい。

○此處より以下は、古來の歌に名ある人々の事を論じた。

又、やま(の)べの赤人といふ人あり。歌にあやしくたへなりけり。

○「やまのべ」はの文字を省くがよい。山部と書く、宿禰姓である。○「あやしくたへなり」は不思議に上手であるの意で、眞名序の神妙の字に當る。既に人麻呂を「歌のひじり」といつた故に、詞をいひ換へた。

人麻呂は、赤人が上に立たむ事かたく、赤人は、人麻呂が下に立たむ事難くなむありける。

(ならのみかどの御うた「たつ田川もみぢみだれて流るめり渡らば錦中や絶えなむ」、人まろ「梅の花それとも見えずひさかたのあまぎる雪のなべてふれゝば」、「ほの〴〵とあかしの浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞおもふ」、赤人「春の野にすみれつみにと來しわれぞ野をなつかしみひと夜寐にける」)

○人麻呂は長歌短歌に長け、赤人は短歌に秀でた。大伴家持がその族池主に贈つた文中にも、「壯年未レ過二山柿之門一」といふ語があつて、當時から、一双の上手といはれたので、こゝでも兩者の軒輊し難き由を、詞を文なして書いた。世說に「陳元方難レ爲レ兄、季方難レ爲レ弟」とあるを思つて、詞を換へたものらしい。要するに、兩人とも好敵手で優劣がないの意である。それをひどくこの語に拘泥して、「上に立たむ」、「下に立たむ」の兩句に、褒貶の意を寓したやうに論ずる者がある。作者の心にもない横入である。

この人々をおきて、又、すぐれたる人も、呉竹のよゝに聞え、片絲のよりよ

りに絶えずぞありける。

○「この人々」は人麻呂赤人を指す。この二聖をさしおいて、勝れた人も世々に顯れ、時々に絶えず出たとの意。即ち奈良朝の末かけて、高橋蟲麻呂、大伴旅人、山上憶良、笠金村、大伴家持等の輩出したのをさしたのだらう。○「吳竹の」は世にかゝる枕詞。○「片絲の」はより〳〵にかゝる枕詞で、合はせざる一筋の絲を片絲といひ、それを縒ることに、時々の意をもつより〳〵をかけた。

眞名序に「自㆔大津皇子之初㆒作㆓詩賦㆒、詞人才子、慕㆑風繼㆑塵、移㆓彼漢家之字㆒、化㆓我日域之俗㆒、民業一改、和歌漸衰、然猶有㆓先師柿本大夫者㆒、高振㆓神妙之思㆒、獨歩㆓古今之間㆒、有㆓山部赤人者㆒、並和歌仙也、其餘業㆓和歌㆒者、綿々不㆑絕」とあるは、上文「いにしへよりかく傳はる中にも」とあるより以下の文に當る。

これよりさきの歌を集めてなむ、萬葉集となづけられたりける。

○「これよりさきの」は、この古今集に採つた歌より以前のを指した。○「萬葉集」の題號は、萬の言葉といふ說と、萬代の義といふ說とに分れてゐる。廿卷四千六百餘首、奈良時代の歌を中心として輯めた歌集。

かの御時より、年はもゝとせに餘り、世はとつぎになむなりにける。

○この一節、原文には、下文「しかあれどかれこれ得たる處得ぬ處互になむある」の次にはひつてゐる。さては秩序も立たず、連絡も亂れてゐる。今は此處に引き上げて、其の意を疏通させた。

○「かの御時」は萬葉集の撰ばれた時世を指した。難波本に「もゝとせ」の下に、に文字のあるが善い。

○「とつぎ」は十繼の義で十代である。萬葉撰集の時から、年數は百年餘、天皇の御代數は十代になるといふので、逆算すると、平城天皇の御代に當り、その大同元年から、この醍醐の延喜五年まで、全く二百年になる。眞名序に「昔平城天子、詔ニ侍臣一令レ撰ニ萬葉集一、自レ爾以來、時歷ニ十代一、數過ニ百年一」とあるに合つてゐる。然れども、萬葉集が平城帝の世に撰ばれたといふ事は信ぜられない。淸和帝の御時、「萬葉集はいつの頃作れるぞ」とお尋のあつた時、文屋有季が、

神無月しぐれふりおけるならの葉の名におふ宮の古ごとぞこれ

と答へ奉つた事が、この集中雜部に見えてゐる。ならの葉の名におふ宮は、いかにも曖昧な詞だが、猶奈良朝の義に解きたい。平城帝の朝の意ならば、奈良の御門の世とあるべき筈である。榮花物語月宴の巻には、「昔高野の女帝の御代天平勝寶五年には、左大臣橘卿諸卿大夫等集りて、萬葉集を撰ばせ給ふ」とある。されど、この御時以後の歌もあるから、「大伴家持卿の、奈良朝の末に撰びしならむ」ともいひ、又、「諸兄卿の撰を家持卿のつぎて撰りしならむ」ともいつて、一決しない。萬葉集を見渡すに、平城帝の御代近くの歌は見當らないから、この御代の撰では全くない。蓋し萬葉の研究は、やう〳〵村上帝時代に始まつた位だから、この延喜時代の人達が撰述の時代を誤つたのも、あながち非難するには當らない。

こゝにいにしへのことをも、歌の心をも知れる人、よむ人多からず、わづかに一人二人なりき。しかあれど、これかれ、得たる所、得ぬ所、互になむある。

○「こゝに」は今の平安京となつてからの、十代百年の間を指した。○「いにしへのこと」は神代以降、萬葉の頃ほひまでの歌に關係した典故や故歌をいふ。○「歌の心」は歌の本旨。「知れる人」は「いにしへの事をも」を承け、「よむ人」は「歌のこゝろをも」を承けた。○「わづかに一人二人」とは、少數といふほどの意で、下に、六人までも擧げてゐる。

○さて、それもこの人達は十分完全した歌人ではなく、互に得失があるといつて、上文の人麿赤人の二聖に對して、段ちがひであると評した。

眞名序に「其後和歌棄テ不レ被レ採ラ、雖モ下風流如ク二野宰相ノ一、雅情如キ中在納言ノ上、而モ皆以テ二他才ヲ一聞エ、不下以テ二斯道ヲ一顯レ上」とある。

いまこの事をいふに、つかさ位たかき人をば、たやすきやうなればいれず。

○「今この事を云々」は、其の得失を論ずるに、官位貴い人は、餘り輕く扱ふやうで無禮だから、遠慮して入れないとの意。その實は、この論評に値するほどの資格ある歌人のない事を紛はした老獪な筆法である。

眞名序に「近代存スル二古風ヲ一者、纔ニ二三人、然モ長短不レ同カラ、論ジテ以テ可シレ辨ズ」とある。

そのほかに、近き世にその名聞えたる人は、即ち、

○「その外に」はつかさ位高き人を除いた外にの意。

僧正遍昭は、歌のさまは得たれども、まことすくなし。たとへば、繪にかけ

る女を見て、いたづらに心を動かすが如し。

（「淺みどり絲よりかけてしら露を玉にもぬける春のやなぎか」、「はちす葉のにごりにしまぬこゝろもて何かは露を玉とあざむく」、　さが野にて馬よりおちてよめる「名にめでておれるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな」）

○遍昭は歌の本質は捉へ得たが、誠實の意に乏しいと褒貶した。○「女を見て」を、近藤芳樹が「かくては、喩の意自他二つに分れて、他の五人の例に適はず、眞名序に『華山僧正尤得二歌體一、然其詞花而少レ實、如下圖畫好女徒動二人情一上』とありて、如の下に、觀の字なし。されば、女のとあるべし」と論じたのは當つてゐるやうであるが、姑く元のまゝに從ふ。さて、「繪にかける女」は歌のほゞその體裁を得たのに喩へ、徒に人の心を動かすの美はあれども、實意實情の乏しいのを、「誠少なし」にあてゝいつた。

○以下の評語、皆褒貶得失を譬喩に寓し、たとへていはゞを、玆では「たとへば」といひ、つぎ〳〵には、皆、「いはゞ」と略いてある。

在原業平は、その心あまりて、言葉足らず。いはば、しぼめる花の色なくて、匂殘れるが如し。

（「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして」、「おほ方は月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの」、「ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな」）

○「その心あまりて」は感哀の餘りあるをいふ。多くの歌人の歌の心足らぬのにさし當てゝある。これは褒であ

る。〇「言葉足らず」は詞のいひ足らざるをいふ。これは貶である。〇「しぼめる」の上に、いはばといふ語を補ふ。次ぎ〳〵皆この語があるから、こゝは脱け落ちたものと認める。さて、「匂の殘れる」を心の餘れるに喩へ、「色なくて」を詞足らずに喩へた。

眞名序に「在中將之歌、其情有ㇾ餘、其詞不ㇾ足、如下萎花雖ㇾ少二彩色一而有中薫香上」とある。

ふんやの康秀は、詞はたくみにて、其のさま身におはず。いはゞ、あき人のよききぬ著たらむが如し。

（「ふくからに野邊の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらむ」、深草のみかどの御國忌に「草ふかきかすみの谷に影かくしてる日のくれしけふにやはあらぬ」）

〇「詞はたくみ」は褒である。「其のさま身におはず」はその巧なる詞の取り成しやうは、淺く俗に近い著想に相應しないといふ。これは貶である。〇「あき人」は商人で、その心術が元來卑陋の者だから、美服を著ても不釣合なことに喩へた。〇「よききぬ」は華美の衣服をいふ。

眞名序に「文琳巧詠ㇾ物、然其體近ㇾ俗、如三賈人之著二鮮衣一」とある。

宇治山の僧喜撰は、詞かすかにして、はじめをはりたしかならず。いはゞ、秋の月を見るに、曉の雲にあへるが如し。

（「わが庵はみやこのたつみしかぞ住む世をうぢ山と人はいふなり」）

○「宇治山」は山城國宇治郡の宇治山。○「喜撰」は宇治山に隱遁してゐた僧である。正しくは、宇治山の喜撰法師はとか、或は單に、喜撰法師はとか書くべきのを、眞名序に「宇治山僧喜撰」とあるを襲つたのである。○「詞かすか」は其のいひなしの幽玄なことをいふ。これは褒である。○「はじめをはりたしかならず」は、一首の上漠然として聞え難いのをいふ。これは貶である。○「秋の月」は詞かすかなるに喩へて、幽玄の意を表し、「始終たしかならず」を、その曉の雲に紛れたのに喩へた。曉は只輕く添へた語で、深い意はない。眞名序に「其詞花麗而首尾停滯、如下望二秋月一遇中曉雲上」とある。但喜撰の歌體を花麗と評したのは當らない。この「かすか」と改めたるのは流石に眼識がある。

よめる歌多く聞えねば、これ彼れを通はしてよくしらず。

○この一句は喜撰の歌の少ないことをいつたので、たしかに後人の註語である。誤つて本文に混れたものと思はれるから、略くがよい。

をのゝ小町は、いにしへのそとほり姫のながれなり。あはれなるやうにて、强からず。いはゞ、よき女の惱めるところあるに似たり。つよからぬは、をうなの歌なればなるべし。

(「思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを」、「色見えてうつろふものは世の中の人のこゝろの花にぞありける」、「わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなむとぞ思ふ」、　そとほり姫の

歌「わがせ子が來べきよひなりさゝがにの蛛のふるまひかねてしるしも」)

○「そとほり姫」は允恭帝の妃弟姫である。艶色衣を徹してかゞやいたので、時人、衣通郎姫と號けた。そとほりは訛つたのである。○「流れなり」とは、小町がこの歌風に似てゐるといふ事か。「紀にこの姫の歌二首ばかり見ゆれど、さのみ上手にもなきをいかゞ。たしかならぬ事なれば、この一句略くべし」と、眞淵はいつた。但、眞名序にも「小野小町之歌、古衣通姫之流也　然艶而無氣力、如病婦著花粉」とあるが、猶この一句はない方が穩かである。思ふに後人の眞名序によつての加筆であらう。次の黑主の評に、眞名序には「古猿丸大夫之次也」とあるが、この文にはない。○「あはれなるやうにて」は感哀があるやうでの意で、これは褒である。○「つよからぬ」は貶である。「よき女」はあはれなるに喩へ、「惱める處ある」は強からぬに喩ふ。○「つよからぬは女の歌なればなるべし」の一句も、註の文句の混れ込んだもので、本文とすればやゝうるさい。

大ともの黑主は、心はをかしくて、そのさまいやし。いはゞ、たき木おへる山人の、花の蔭にやすめるが如し。

(「おもひいでて戀しき時ははつ雁のなきてわたると人は知らずや」、「かゞみ山いざ立ち寄りて見て行かむ年へぬる身は老いやしぬると」)

○上文の五人の評語、皆褒貶交錯して來たのを、黑主のばかり、「そのさまいやし」と貶しめたる語ばかりで、褒めた詞のないのは、正に脫文である。故に景樹は、眞名序の「大友黑主之歌、古猿丸大夫之次也、頗有逸興、而體甚鄙、如田夫息花前」とあるに據つて、心をかしくてと補つた。上文の例によると、心はをかしくて

と、は文字を添へるがよい。「たき木おへる山人」は其のさまいやしに當り、「花の蔭にやすめる」は、心はをかしくてに當る喩である。

この外の人々、その名聞ゆる、野邊におふる葛の這ひひろごり、林にしげき木の葉の如く多かれど、歌とのみ思ひて、其のさま知らぬなるべし。

○「葛の」は藤蔓の如くの意。

○以上六人の外に、歌人の名の世に聞えた人は、葛の這ひ廣がれる如くに充滿し、林の木葉の如くに多くあれど、只漫然と歌とばかり思つて、前に述べたやうな歌の本旨は心得ぬのであらうと、近來の歌道の衰へたのを歎いて、一旦抑へたのは、次に、今上皇帝の今回勅撰の事を仰せ出だされた盛事を敍して、喜悦の眉を開くことを揚げていはうとする下構である。眞名序に「此外氏姓流聞者、不レ可二勝數一、其大底皆以レ艶爲レ基、不レ知二歌之趣一者也」とある。

かゝるに、今、すべらぎの天の下しろしめすこと、よつの時、こゝのがへりになむなりぬる。

○當帝卽ち醍醐天皇の御治世は、今に春夏秋冬の四時が九返往きかへつたと、四と九との數字を交錯して書いた。この帝は寛平九年七月御受禪で、この序文を作つた延喜五年は、實にその九年目に當る。

あまねきおほんうつくしみの波、八島のほかまで流れ、ひろきおほんめ

ぐみの蔭、筑波山の麓よりも繁くおはしまして、

○「おほんうつくしみ云々」は君の御慈愛を波に擬へて、我が國をいふにも、「大八洲國」の名を用ゐ、行き渡る事をも、「流れ」といつた。又、御恩惠を蒙る事を蔭といふより、東歌の、

筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみ蔭にます蔭はなし

を下に踏んで、その蔭は「筑波山の麓よりもしげし」と、君恩の渥いことを譬へ、波と海とに對するに、木蔭と山とを以てした。○「おほん」は大御の音便で、接頭の敬語。

前節をかけて、眞名序には「陛下御宇于レ今九載、仁流二秋津洲之外一、惠茂二筑波山之陰一」とある。

よろづの政を聞し召すいとま、もろ〳〵の事をすて給はぬあまりに、いにしへの事をも忘れじ、舊りにし事をもおこし給ふとて、今もみそなはし、後の世にも傳はれとて、

○萬機を視給ふ御ひま〳〵に、文學技藝一切の事をも御奬勵なさる餘りに、神代以來の世々の帝の、侍臣等に歌詠ませられた事や、萬葉集の撰定があつた事などを忘れず、それらを再興し給ふとて、歌集を勅撰あつて、只今も御覽なされ、後世にも傳はれとての意。二つの「とて」は次の節へかゝる。

眞名序に「思レ繼二既絶之風一、欲レ興二久廢之道一」とある。

延喜五年四月十八日に、大内記紀の友則、御書のところのあづかり紀の

貫之、前のかひのさう官おふしかふちの躬恒、右衛門の府生みふの忠岑らにおほせられて、萬えふ集に入らぬふるき歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。

○「延喜五年四月十八日」は「おほせられて」へ係けて見る時は、勅撰の命を下された日となり、「奉らしめ給ひて」へ係ける時は、撰了奏上の日となる。眞名序は結尾に、「于時延喜五年、歳次乙丑、四月十八日、臣貫之等謹序」とあつて、奏上の日の如く聞える。日本紀略、延喜五年四月十五日の條に、「今日御書所預紀貫之等撰進古今和歌集、一部二十巻」とある。その他、扶桑略記、本朝世記、拾芥抄等皆同じい。大體において五年奏上說である。日は十八日でなくて、皆十五日である。いづれが眞であらう。景樹は、五年を下命の日とし、「奏上は六年にて、右の諸書の五年とあるは誤寫ならむ」とまで云つてるが、論據が薄弱である。但撰者の一人友則が延喜五年の秋に歿した時、貫之忠岑等がそれを悼める歌二首、同七年九月大堰河行幸の時の歌二首、同十三年三月の亭子院歌合の歌、及び、その折に詠める歌三首が集中に散見する。これ皆五年四月以後の作である。これ卽ち六年奏上說の生ずる所以であるが、五年奏上後も殊に歌によつて追加されたものと見れば、差支はない。

○「大内記」は中務省中の官で、詔勅の類を掌る。儒者の文章家を任ずる。正六位相當官。○「御書のところのあづかり」は宮中の祕書類を藏むる所の預の役。○「前のかひのさう官」は前の甲斐の少目。少目は國衙の四等官で、八位相當官。○「右衛門の府生」は右衛門府の下官で、衛門府の門部舍人の長。○「萬えふ集に入らぬ歌

云々」とあるが、集中に、萬葉の歌が七首はひつてゐる。全くこれは誤選であらう。
眞名序に「爰詔二大内記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐少目凡河内躬恒、右衛門府生壬生忠岑等一、各獻二家集幷古來舊歌一、曰二續萬葉集一」とある。

それが中に、梅をかざすよりはじめて、時鳥を聞き、紅葉を折り、雪を見るにいたるまで、又、鶴龜につけて君を思ひ、人をも祝ひ、秋萩夏草を見て妻を戀ひ、逢坂山にいたりて手向を祈り、あるは、春夏秋冬にも入らぬくさぐさの歌をなむ選ばせ給ひける。すべて、千歌はた卷。名づけて古今和歌集といふ。

○「梅をかざすより云々」より以下は四季、「鶴龜につけて云々」は祝賀、「秋萩夏草云々」は戀、「逢坂山にいたりて云々」は、送別、羈旅の歌をさした。又、「春夏秋冬にも入らぬ」は、哀傷、雜、物名、雜體、大歌所などの、いろ／＼の歌をいふ。これは前に奉つたのを、更に分類した趣で、集中の部立をこゝに叙した。眞名序に「於是、重有レ詔、部二類所レ奉之歌一、勒爲二二十卷一、名曰二古今和歌集一」とあるにかなふ。部類せぬ前のは、萬葉集の如く、時代の先後に從つて錄したのか。これを「續萬葉集」といつた事は、前節に引いた眞名序に見えてゐる。○「千歌はた卷」は千首廿卷といふこと。但この集の歌數は、千百十首ばかりで、墨消しの歌を除けば千九十九首あるのを、「ちうた」といつたのは、其の大概を示したのである。「古今」といふ題號は、前に「萬葉

集に入らぬ歌みづからのをも獻らしめて」とある如く、古今の歌を集めたから名づけたのである。

かく、この度あつめえらばれて、山した水の絶えず、濱の眞砂かず多くつもりぬれば、今は、飛鳥川の瀨になるうらみも聞えず、さゞれ石のいはほとなるよろこびのみぞあるべき。

○「山した水」は山より流れ出づる谷水で、涸れる事がないから、絶えずの序詞に用ゐ、「濱の眞砂」は海邊の小石で、限りもない物だから、數多くの序詞とした。○「飛鳥川の瀨になる」「さゞれ石のいはほとなる」は、

世の中は何かつねなるあすか川きのふの淵ぞけふは瀨になる　雜歌、下

わが君は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで　賀歌

に據つた。

○かく本集が成つて、斯道の流は斷絕せず、名歌も多く集まつた事だから、今よりは歌道の淵は瀨と變るやうに、衰廢する恨もあるまじく、小石の巖となるやうに、ます〳〵榮え行く喜ばかりあるべきだと、言ほいで、さて、飛鳥川の句を「山した水」に、さゞれ石の句を「濱のまさご」に應對させた。眞名序に「淵變爲瀨之聲、寂々閉口、砂長爲巖之頌、洋々滿耳」とあるは聖代を讚した詞で、本文の歌道の將來を祝福した意とは變つてゐる。

それわれら、詞は、春の花の匂少くして、空しき名のみ、秋の夜の長きをか

こてれば、かつは、人の耳におそり、かつは歌の心にはぢ思へど、たなびく雲の立ちゐ、啼く鹿のおきふしは、貫之らが、この世に生まれて、この事の時にあへるをなむよろこびぬる。

○「それわれら詞は」は、原文には「それまくら詞は」とある。まくらを三井高蔭が、「われらの誤ならむ、われとまくと、假字の書體紛はしい」といつたのは、比較的穩かな說であるから、それに據つて改めた。「まくら」を、舊註に臣等の意と解いたのは、眞名序に拘泥したので、臣をまくといふことはない。眞淵は、難波本にまろらとあるを執したが、まろは自ら尊大にいふ意にも用ゐるから、上奏文などには絕對に使はれない。その他、「それがしらを、それまくらと誤れるならむ」といひ、又、景樹が、「まくらは諸本多く、枕と眞名に書きたれば、もとは恐らくは拙の字にて、われら拙きとありしならむ」といふ門人の說に同意したのなど、いづれも煩はしい考で從ひがたい。舊說に枕詞はと續けて解いたのは不通の文で、問題にならない。○「春の花の」は句にかゝる序詞で、「すくなし」へまで係るのではない。原本には「の」文字がない。難波本に據つた。○「秋の夜の」は長きの序詞で、「長き」はこゝでは、斯道に長けたことをいつたのだが、漢語の直譯で、穩かな詞ではない。○「かこてれば」は假託(カコツ)ける意。○「かつは」は一方にはの意。○「人の耳におそり」は人の聞えを憚るの意。○「歌のこゝろ」は歌といふ物の思ふ所の意といふことで、歌を擬人した。○「たなびく雲」は立ち居にかゝる序詞。○「啼く鹿の」はおきふしにかゝる序詞。鹿はともすれば、膝折り伏せなどして起臥しげきものなのでいふ。

○貫之自身等は、詞章の藻華は乏しくて、虚名のみ道に長けたるやうにいはれたれば、一は人の聞く所を憚り、一は歌の手前にも恥ぢ入れど、起ちても居ても、寐ても覺めても、自分等が此の如き聖代に生まれ合せて、かくの如き歌集勅撰の美擧ある時に遇つたことを悦んでゐるとの意。眞名序に「臣等、詞少二春花之艶一、名竊二秋夜之長一、況哉、進恐二時俗之嘲一、退慙二才藝之拙一、適遇二和歌之中興一、以樂二吾道之再昌一」とある。

人麻呂なくなりにたれど、歌のこととゞまれるかな。

○この道の大聖人麻呂は、既に死に失せてしまつたが、歌道は滅びずして、この勅撰の集に殘り留まれる事よと、今日の盛事を讃稱した。これは遙に前節の「柿本人麻呂なむ歌のひじりなりける云々」に應じて、上文を結束し、且下文を引き起してゐる。次の一段はこの細說である。眞名序に「嗟人丸既沒、和歌不レ在レ斯哉」とある。これは論語に「文王既沒、文不レ在レ茲乎」とある筆法を學んだ。

たとひ、時移り事去り、たのしび悲みゆきかふとも、この歌のもじあるをや。

○「時移り事去りたのしび悲み行きかふ」は、陳鴻が長恨歌傳に、「時移事去、樂盡悲來」とあるをそのまゝ用ゐた。○「もじ」は文字である。これを本居宣長が、若しの意と見て、「久しくとゞまれらば」へかゝる詞とし、「あるをや」の四字は、次の「あをやぎ」の句より混れたる誤なるべしとて省いて、「この歌のもしあをやぎの

云々」と連ねたのはいかゞである。若しでは前文に、「後の世にも傳はれとて」とある詔命に適はない。○意は、上古の如く歌はあつても、文字なくては傳ふべき術もないのを、よしや時世は變遷し、諸事は盛衰しても、萬の事を起し給ふ今の聖代は、幸にこの歌の文字あるに於てをや、といふので、さて下文を引き起して、「古を仰ぎて今を戀ひざらめかも」と結び止めた。

青やぎの絲絶えず、松の葉の散り失せずして、まさ木のかづら長く傳はり、鳥の跡久しくとゞまれらば、この歌のさまをも知り、事の心をも得たらむ人は、

○「青やぎの絲」は絶えずの序詞。○「松の葉の」は散り失せずの序詞。○「まさ木のかづら」は眞折葛で、蔦類の蔓草である。長くにかゝる序詞。○「鳥の跡」は久しくを隔てゝ、とゞまれらばにかゝる序詞。○以下、上文に、「後の世にも傳はれとて」とある意を反復して細叙した。さて、この歌集の世に絶えず散佚せずして、永久に傳はり止まつたらば、歌の本旨をも知り、今度の勅撰の事譯をも辨へたらう人は、といふにて、「歌のさま」、「事の心」は、上文に、「こゝに古の事をも歌のこゝろを知れる人僅に一人二人なりき」といひ、又、「歌とのみ思ひて其のさま知らぬなるべし」などあるに呼應してゐる。

大空の月を見るが如くに、古を仰ぎて、今を戀ひざらめかも。

○今より遙か後世になつて、それ等の人々が、空の月を見るやうに、この集に依つて古を仰ぎ崇び、今を戀ひ

慕はずしてあらうかいとの意。〇「古を」は萬葉集以後この集に載つた古歌の制作された時代を指し、「今を」はこの延喜時代を指し、「戀ひざらめ」は後世を指した。さて、この古と今とは、この集の題號の本づくところである。

〇

この文殆ど全部が排對から成つてゐる。排對は詩歌類の韻文に多い。祝詞宣命なども純散文でないから、排對が盛にある。この文は散文的なるべき性質のものでありながら、かやうに排對の多いことは、四六駢儷體の漢文を直譯したからである。句を摘み章を抽く時は、名句妙句が纍々層々として、絢爛眼を驚かすやうな觀があるが、全體の首尾を通じて考察すると、餘に敷演を勗めた結果、繁褥に過ぎ、時に冗漫に失して、精神魄力の充實を缺く感がある。面白い文とはいへるが、活きた文とはいはれまい。尤もかういふ奉勅撰集の序だから、その爲に拘泥する點もあらうが、貫之の文の勝れたものではない。却つて集中の歌の詞書の文を見渡すと、何といふ節もないが、穩やかで筆力も勁健で、一字も損益することの出來ない立派な文字である。それも貫之の筆と思はれるが、一方は思ふがまゝに書き流したもの、一方は拘束する處があつて書いたものなので、かうした相違も出來て來たのであらう。但この文は後代の歌人の則る處となつて、歌集序體と名づくる一種の文の嚆矢となつた。

古今和歌集卷第一

春歌上

ふる年に春立ちける日よめる　　　　在原元方

年のうちに春は來にけり一年（ヒトトセ）をこぞとやいはむ今年とやいはむ

釋　○ふる年に春立ちける日　「ふる年」は舊年。年が改まつて後に去年をさしていふ語。「春立ちける日」は立春の日をいふ。この時代では勿論大陰曆だから、大概正月の始に立春の節のある筈だが、推步に多少出入があつて、かう前年の十二月中に立春のある事もある。但歌は前年の暮に詠んだのだから、「年の内に」とある。○よめる　の下に「歌」といふ名詞が略かれてある。以後の詞書も大抵この書例である。○年のうちに　今年の內にの意。○こぞ　去年。○來にけり　「けり」に感歎の意がある。

大意　年內に思ひがけず春は來たことであるわ、さてはこの同じ一年の內の昨日までを、去年といはうか、それとも今年といはうか。

評　忽忙繁劇な歲暮にあわたゞしく春の來たのを意外と感じた趣が、「にけり」の辭樣で表現されてゐる。四五の句、「去年とや」「今年とや」と兩端を叩いた所に、迷惑決しかねた樣子がよく出てゐる。そしておなじ語法で折

り返された聲韻の呼應に味ひがある。又「年」の意味をもつ語が四つも重複してゐるが、これは重複といふよりは寧ろ反復といつた方が適當である位に、格別耳立たないやうに旨く使ひこなしてある。畢竟正月一日を何時も立春と思ひ慣れた心から、春が來たといへば隨つて年も立ち代るものゝやうに意識して、去年今年の分別が付かなくなつた、幼いあどけない感想である。けれどかうした趣向は、太陽暦で生活してゐる我々には、直覺的に感じがぴんと來ない。元來が機智から出發したものだから小手は利いてゐるが、決していゝものではない。「巻頭の面目比類なき事」と北村季吟の評したのは鈍ましい。只春の最先としてこゝに序でたまでゝある。抑も古今集を研究する豫備智識として、第一に心得なければならぬのは、この集の風調が當時の新派である事だ。平安朝初期の歌人達がかういふ風調を創造した事は、萬葉集の風調をば舊式の陳腐極まるものと觀じたからである。尤も時代に依つて風調に變化のあるのは自然の成行だが、特にこんな意識が當時の歌人達の腦裏に往來してゐた事を、まづ知つておく必要がある。

春立ちける日よめる　紀貫之

袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

釋 ○ひぢて　「ひぢ」は甚しく濡れるをいふ。○むすびし水　手に掬つた水。

大意　夏の暑い頃袖がびしよ濡れになるまで掬つて遊んだ水が、この間の冬の寒さに氷つてゐるのを、立春の今日の長閑な風が、再びもとの水に吹き融かすだらうか。

評　四時の循環の速さを間接に驚歎してゐる。初二句はひどく水に親んだ趣だから、正に夏秋の暑い時と知られ

る。四句の終に置いた「の」の響がいかにもやはらかで、のび〳〵とした感じを與へる。春になつたからとてすぐに氷は融けもせぬが、月令に「孟春之月東風解レ氷」などある一般的認識に任せたものである。又海とか沼とかいふ平生の生活に縁の遠い水だと、立春だからとてあながち聯想は起きもしまいが、暑い時分袖まで濡してなぶつた水だから、今日しも「風やとくらむ」と一番に思ひ出される譯で、想の連絡も自然である。更に一考すると、この歌掬ぶに結ぶ、融くに解くの意を寄せて、結ぶと解くとの反對の意を鬪はせてある。巧ではあるが縁語に纏はれて面白くない。又場所の有無がしつかりしないのも殘念である。全體が想像から成り立つたものとすれば場所をもたないし、「氷れるを」を眼前の事實とすれば場所が生ずる。とはいへ首尾のび〳〵とした調子で、長閑やかな氣分の漂つてゐる所は、立春の歌にふさはしい姿である。その細かな手法の聊か混つてゐるのは、やはり延喜時代の特徴である。

題しらず　　　　よみ人しらず

春がすみ立てるやいづこみ吉野の吉野の山に雪は降りつゝ

釋 ○題しらず　歌の詠まれた事情のわからぬ場合に「題しらず」と書く。題は前書の意である。後世にいふ題のことではない。歌に題を作り設けて盛に詠むことは、昔には稀であつた。○よみ人しらず　作者の不明なのをいふ。但勅撰歌集の「よみ人しらず」にはいろ〳〵ある。全く作者が不明なの、又作者が勅勘など蒙つたの、賤卑の甚しいのなどである。○み吉野　「み」は眞と同じ美稱。吉野は大和國吉野郡吉野の里。○いづこ　の下ならむの語が略かれてゐる。○つゝ　動作の繼續を意味する辭。

大意　春にはなつたが、長閑な霞の立つてゐるのは何處の邊か、この吉野の里の吉野山には雪が降り〳〵して、一向に春めきもしない。

評　吉野は吉野山の北側の麓で山の陰だから、雪勝な土地である。天武帝の御製にも、その雪の時なき事が歌はれてある。作者は吉野の里人だらう。袖振山も耳我の嶺も高城の山も見渡す限り眞白で、春だといふに雪がちら〳〵降る。即ち春の象徴たる霞は何處に立つてゐるかと疑ひたくなる。「立てるやいづこ」その首を長く伸ばして、あちこち回看顧望した作者の態度が想はれて面白い。詰りは霞もまだ立ち敢へぬ初春の趣を歌つたのである。詞に巧がないやうで意に工があり、歌の長けも高い。力強い二句切で、三四句の同名詞の反復も「さ檜の隈檜隈川」（萬葉十二）の類で、奈良歌人の好んだ慣手段である。さりとて大した古風とも見えぬから、まづ奈良朝のはて平安朝最初の頃の作か。

集中に收められたよみ人知らずの歌は、大抵作者の不明なのである。これは昔から必然的に傳誦された歌だから、隨つていゝ歌が多い。委しく分けるとこれにも前中後の三期があり、前期のが殊によい。

二句たゝるやとある本もあるが、こゝには採らない。

二條の后の春のはじめの御歌

雪のうちに春は來にけりうぐひすの氷れる涙いまやとくらむ

釋　○二條の后　清和帝の女御藤原高子の御こと。陽成帝の代皇太后となる。東光寺の僧善祐密通の事によつて、寛平八年后位を停められ、のち朱雀帝の天慶六年の勅で本位に復された。故に契沖が、「この延喜時代にては、

奏覽の本に二條の后と書くべきにあらず」といつたのは確說である。香川景樹も「新撰和歌にこの作者を不明としたるが如く、この集にも延喜奏覽の本にはしかありけんを、復位の後に書き改めしならん」といつた。又富樫廣蔭が「これ及び前後の二首も二條后の御歌ならん」といつたのは、歌の風體の相違をも辨へぬ說で取るに足らぬ。○雪のうちに　雪のあるうちに。○うぐひすの氷れる涙　人の泣く時は涙が出るから、鶯の鳴くにも涙あるやうに聯想して、それを氷ると取り成した。

大意　まだ雪があるうちなのに、如何にも長閑な春は來たことであるわ、さては雪は勿論鶯の氷つてゐる涙も、今は融けることだらうか。

評　表面の意はかうであるが、抑もこの后の后位を停められたのは寛平八年九月廿二日で、彼これ冬である。何時もとの如き御身の上になる事かと待ちわびしく思はれるうちに、早くもその冬は暮れ年は換つたので、「春は來にけり」と驚歎し、さては鶯の涙の氷も「今やとくらむ」と想像して、わが涙のみは冬のまゝながら結ぼれて、更に春心ちもせぬのが眞につらいとの御歎である。謹愼中にはじめて初春を迎へられた感懷で、御氣の毒な御心中である。かう聯想の上から鶯の啼くにも涙あるやうに取り成すのは、作歌の一手段だのに、或學者が鶯に涙のある筈がない涙の氷る譯もないと攻擊したのは、理窟一遍の說で、第一詞の上にばかり泥んで一向肝腎の核心に觸れてゐない。源道濟の和歌十體に、この歌を比興の體として擧げたのも、この寓意を認めたからである。但歌の風調は少し下つて纖巧の傾向をもつてゐる。全く後世の新古今集の先驅をなすものであらう。結句、新撰和歌にはけふやとくらむとあるがよくない。涙の解ける時節を待ち佗びてゐるさまだから、「今や」とせき込んだ方が、調がふさはしい。上の貫之の「春立つけふの」とある優長な調とは、その軌を異にしてゐる。

題しらず　よみ人しらず

うめが枝に來ゐる鶯はるかけて鳴けどもいまだ雪は降りつゝ

釋 ○來ゐる　來て馴れ居る。○春かけて　冬からこの春かけて。

大意 梅の枝に來馴れてゐる鶯が、冬時分からこの春へかけて頻に鳴くけれども、いまだに雪は降りくして、一向春めかぬことよ。

評 この三四の句を置き換へて、「來ゐる鶯鳴けども春かけていまだ雪は降りつゝ」と「春かけて」を雪に係けた舊說を、景樹が「さては來ゐるの詞いたづらなり」と難じたのは確論である。春の物である鶯は冬のうちから來て鳴くのを、冬の物である雪は春になつても未だに降る。この有心の鶯と無情の雪とを對比させた爲に生ずる反映に、愈よ雪の疎ましさが印象されて面白い。まして初句は花の咲いた梅だから、所謂花開き鳥啼くの陽氣は目睫の間にあるのに、尙降る雪はわびしさいひやうもない。

雪の木に降りかゝれるをよめる　素性法師

春たてば花とや見らむしら雪のかゝれる枝にうぐひすの鳴く

釋 ○降りかゝれるを　降りかゝりてあるを見て詠めるの意。○見らむ　見るらむに同じい。

大意 花の咲く春の時節になつたので、雪をも花と思ふのであらうか、これまで音しなかつた鶯が、今日は雪のかゝつてゐる枝に來て鳴くわ。

評 馬鹿な、あれは冬からの同じ雪だのにの餘意がある。自分の花を待ち焦れる心から、梢の雪をふと花かと見惑うた愚さを、折柄鳴いた鶯のうへに托していひ果てたのである。されば鶯を嘲つたのは、詰りみづから嘲つたものである。この意を景樹は聞き誤つて「初春の朝夜の間の雪などの梢白く降れるを、花よりけに面白く打見るに、折しも鶯の鳴くのを、汝もわが如く愛づらんの意より詠めり」といつたのはわるい。それでは初句の「春立てば」が利かないではないか。「ば」の辭の力強さに注意するがいゝ。冬は何でもなく見過した雪を春立てば花と見るだらうかとまでいひ詰めてよい。聲調は花やかで語路は圓滑である。

題しらず　　よみ人しらず

心ざし深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ

或人のいはく「さきのおほきおほいまうち君の歌なり」。

釋 ○深くそめてし　甚しく思ひしみての意。「し」は强辭。○をりければ　「をり」は居りの意。折りと解するのは當らない。○消えあへぬ　消えんとして消えおほせぬをいふ。あへぬ、あへずなど皆立ち合ひかねる意味である。○さきのおほきおほいまうち君　前の太政大臣。「もうち君」は前つ君の轉語で、天子の御前近く候ふ君の意。この時代に藤原良房、同基經相繼いで太政大臣だつたので、前後の稱をつけて、良房を前の太政大臣と書いたのだ。前官の義ではない。さてこの左註は後人の書入で採るに足らぬことは、既に前人の説がある。

大意 冬のうちから花の事を深く思ひ込んで居たから、それでかう消えはてずして殘つてゐる梢の雪が、花と見えるのであらう。

評 上句は說明で面白くない。抑も雪が花と見え花が雪と見える趣向は、この時代ではいくらか警策のうちだつたらうが、今日となつては陳腐に堪へない。萬葉集時代の人麿赤人、この集の中でも業平遍昭の諸作は、いつも新硯を發したやうで、到底人の步襲を許さぬ特色がある。蓋しさう模倣の出來るやうなのは、まことの秀逸でない證據である。

「三句もとはをりけれかとありしを書き誤まれるならん。結句、奥儀抄、顯昭本等に見ゆるかとあるは懸合を思ひて、後に改めしならん」と本居宣長はいひ、「否はじめより見ゆるかとありつるにて、らむと結べるが非なり」と景樹は論じ、その外の註者も三句と結句との打合がわるいやうにいつてゐるが、上の解釋で見れば、そんな難のない事は明らかだらう。

二條の后の東宮のみやすん所と聞えける時、正月三日御前に召して仰言（オホセゴト）ある間に、日は照りながら、雪の頭に降りかゝりけるを詠ませ給ひける　　文屋康秀

春の日の光にあたるわれなれどかしらの雪となるぞわびしき

釋 ○東宮のみやすん所　東宮を生み奉つた御息所の意で、東宮の妃といふことではない。「東宮」は春宮と書いても尙トウグウとよむ。但春宮は專ら皇太子のゐます御殿にいひ、東宮は皇太子の御身の上に係る事に書くのが恒例である。然し歌では東宮の御事をいふ時に春宮の意で詠みなすことが多い。「御息所」は天子の妾で皇子を產んだ方を稱する。故に後世の稱呼とは義が違つてゐる。さてこゝの東宮は後に卽位なされて陽成天皇と申し

た。詞書の意は、後には皇太后となられた二條の后が、まだ女御で東宮の御息所と申した時と也。○御前　后の御前。○春の日の光　正月三日の日影なればいふ(舊曆で)。○わびしき　つらい、難儀などの意。

大意　普通では春の日影にあへば雪は消える、然るに今は春の日に當りながら、かやうに頭が白くなつて、年寄りますことがつらう御座います。

評　康秀は地下の卑官だから、御殿の階下に拜伏して御息所の御用命を承つてゐたのである。すると春日の影はさしながら、泡雪がちら〳〵と風に舞つてその頭上に降りかゝる。一寸面白い風情なので、もとより歌好きな御息所は早速歌人康秀に對して、歌詠めとの御所望があつたのである。康秀はそこで、眼前の光景を表面に述べ、裏面にはわが身の述懷を詠んだ。

東宮の御寵命を蒙るのを春日の光を受けるに譬へて、まづその光榮を歡喜する意を表し、次にわが追々老境に臨んで餘命幾ばくもないのを悲む意を叙べて相對比させ、中間「我なれど」の轉捩の一句を挾んで、自分ばかりは人並外れて折角のお陰も甲斐ない趣を、怨んで憤らぬ程度に匂はせ、御引立下さるなら今のうちですと、暗にその御眷顧御引立を御催促申し上げた。措辭巧妙婉曲で、譬喩に無理がなく、表裏いづれの方面から見ても、條理が疏通してゐる。

一體東宮春宮相通ずることは、易の卦面から來てゐる。卽ち震は長男の卦で、方角では東、四季では春が配されてゐる。詩には皇嗣の御上を春に托して作つた例は旣にある。歌では恐らくこれが最初だらう。白髮を雪に比喩することは支那から起つて、こちらでも昔から襲用してゐる。康秀この二つの典故を撮合して、咄嗟の際尙綽々たる餘裕を存して、巧にわが卑䕶を訴へ、萬一の榮達を冀つたのは、この老なか〳〵狡猾である。かう

小利口に機轉の利いた點は一寸上手に見えるが、缺點としては氣品の卑いことである。序文が「商人のよき衣着たらむが如し」と、この老の作を評したのも、こんな所を觀破しての事だらう。

この歌に就いて思ひ出した事がある。それは萬葉集卷十七に、

十八年正月、白雪多零、積レ地數寸也、於レ時左大臣橘卿、率ニ大納言藤原豐成朝臣及諸王諸臣等一、參ニ入太上天皇御在所一、供奉掃レ雪、於レ是降レ詔上臣參議竝諸王者、令レ侍ニ于太殿上一、諸卿大夫等令レ侍ニ于南細殿一、而賜レ酒肆宴、勅曰、汝諸王卿等聊賦ニ此雪一各奏ニ其歌一。

とあつて、その時の歌が擧げてある。これは天平十八年元正上皇の御前での事で、時節といひ、雪といひ、場所といひ、事情といひ、殆ど今と同一轍ではないか。さて當時の諸臣は何と詠んで奉つたか。卽ち左大臣橘諸兄卿は、

ふる雪のしろ髪までにおほ君に仕へまつればたふとくもあるか

と歌つた。雪と白髪との取材も、今のに似通つてゐる。只彼は廟廊の氣分が天地に迫り滿ちて、堂々たる大臣の屬吐と見えるが、これは甚だしみたれて、全く沈淪した微祿の小官の泣言である。得意と失意、かうした結果を生むのも當然だが、一體時世が面白くなかつた。

平安遷都後藤原氏勃興の機運を作つてから、大鏡に「藤榮えて木枯る」といつた如く、枯れたのは獨紀氏ばかりではない。勢力のない氏姓の者は、有爲の材を抱きながらも陸沈して、終生伏櫪の憾をのこす者が多かつた。そこで業平は色に遁れ、遍昭は佛に遁れた。他の碌々たる徒輩は、止むを得ず藤氏の鼻息をうかゞひ、機嫌をはかつて、萬一の榮達を僥倖した。司召縣召に申文を捧げて、微薄な官祿にありつくことが、畢生の大事であ

つた。催馬樂にいはゆる「骨なき蚯蚓力なき蛙」は、實は時世を諷した嘲罵の辭であつたかも知れない。されば彼等の所作に何の氣骨があらうぞ。平安朝以後の歌詠が、奈良朝時代に富んでゐた雄大眞摯の氣分に乏しいのは止むを得ない。

雪の降りけるをよめる　　紀貫之

かすみ立ち木の芽もはるの雪降れば花なき里も花ぞ散りける

釋 ○雪の降りけるを　只「雪」とばかりいふ時は、後世では冬季の題であるが、この時代では題詠を專としなかつたから、冬にも春にも歌の趣に從ふので、こゝのは勿論春の雪である。○木の芽もはる　草木の芽を出すを「張る」といふ。萬葉にも「山しろの久世の鷺坂神代より春ははりつゝ秋は散りつゝ」とある。この張るを季候の春にいひかけた。春の語ももと草木の芽の張り出す時節なので附いた名である。

大意 霞も立ち木の芽も萌え出す時も時とて、泡雪がちら／＼降ると、これは奇妙、花のないこの里さへも花が散つたわ。

評 花のある里に花の散るのを基想として、その當然にかけ違つたのを驚歎したのは、一趣向である。花を待ち焦れる心から、雪をも花と見なすのは常套だが、「花ぞ散りける」の前提として、まづ「花なき」の反對の語を襯染に使つたのが、この歌の手のある所以で、作者の歌風の細やかな點である。「花なき」は自分の庭か何かでの見渡しらしいが、庭では「霞立ち木の芽もはる」と大やうにいひ下して來た風情に打合はない。そこで一轉して「里も」の一語を着けたので、上下の均衡が保たれてくる。「花」の反復は、傍ら聲調の諧ひを見る。

「初二句は春といはむとて、その景色を以て詞を續けたるのみ」と說いた人もあるが、さう輕く看過される語だらうか。霞は立ち木の芽は張るから、雪を花と聯想するのも、一層自然に聞えるではないか。

春のはじめによめる　藤原言直

はるやとき花やおそきと聞きわかむ鶯だにも鳴かずもあるかな

釋 ○はるやとき云々　春の來やうが速いか花の咲きやうが遲いか。○聞きわかむ　聞いて判(ワカ)たう。○だにも　さへもの意。

大意　今年は春の來ようが何時もよりは早いのか、それとも春は尋常に來たが、花の咲きようが遲いのか、そのどちらかといふことを判斷すべき肝腎の鶯すら、今に鳴かないでゐることよ。

評 どうしてかう今年の春は、何時までも寒いのだらうの餘意がある。鶯も鳴かぬのは、春の早いのに決まつた事なのを、そんな理窟を忘れて、幼く詠みなした所が面白い。春と花との遲速を對比して、鶯をその審判者と見た趣向の立方も、警拔とはいへる。所詮は長閑な春の待ち遠しく思はれる心の現れである。初二句に同一の句法を反復した聲調の諧ひは勿論であるが、語調がすこし強過ぎて、下句が殆ど負けさうな調子に見えたが、結句が字餘になつた爲、緩急相應じ强弱相濟うて、首尾が自然に整つた。

春のはじめの歌　壬生忠岑

春きぬと人はいへどもうぐひすの鳴かぬ限はあらじとぞ思ふ

釋 ○鳴かぬ限　鳴かぬうち。○あらじ　春ではあるまい。

大意　春が來たと世間の人はいふが、まだ鶯が鳴いてゐない、自分は何でも鶯の鳴かぬうちは、何時までも春ではあるまいとサ思ふ。

評 鶯を深く愛賞する心から、その聲を聞かぬうちは春を春とも思はぬさまで、誰れが何といつても自分一人は「あらじとぞ思ふ」と、頑固に力み返つた處、いかにも詩人的狂熱が物に觸れて横溢した趣が見える。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　源　當純

谷風にとくる氷のひまごとにうちいづる波やはるのはつ花

釋 ○寛平の御時　宇多帝の御宇をいふ。「寛平」はその御代の年號である。「御時」はオホントキと訓む。大御時の音轉である。○きさいの宮　皇后宮。七條の后藤原温子の御事。攝政基經の女である。○歌合　ウタアハセ。歌人を左右に分けて、同じ題詠の歌を幾番も番へて勝負を決する文藝的遊戯である。それに判者を立てるものと、衆議判によるものとの二種の方法がある。もと詩の鬪詩の形式に倣つたもので、この寛平の后宮の歌合、及び在民部卿家歌合などが、記錄に見えたそもく〳〵の始である。○谷風　谷に吹く風。これを詩の谷風の詁に「東風謂之谷風」とあるによつて、春風のことゝする古說もあるが、こゝはたしかに谷の風であつて、春風ではない。隨つて漢語の直譯でもない。○はるのはつ花　春咲く花での第一番の花。この句の下に、ならむの詞が略されてある。

大意　春の谷吹く風に、山川に張り詰めた氷も所々うち融けて、その絕間ごとに白く噴き出す波は、恰も花のや

うに見えるが、一般の花はまだ咲き出さぬ時だから、これが東風第一の花だらうかしら。

評 花信二十四番の魁たる梅花をさしおいて、うち解けて漲り出す波の花をば、花信の第一番に推したのは、面白い見つけ物ではないか。「波の初花」の隱喩はこの歌の生命である。初句の「谷風」を優美な詞でないと難じた者もあるが、弘く歌語を見渡すと、こんなのは何でもない。元永本には山風とある。これは論はない。大して優れた歌でもないが、全首雄健で、下句殊に力量がある。結句の開口音の疊用が、また大層花やかな聲調に聞える。この種の風體は集中の一異彩で、結句の體言止めと共に、後世元久時代（新古今集時代）の歌仙達の盛に憲章する處となつた。

紀　友　則

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

釋 ○これも寛平の御時后の宮の歌合の歌である。以下、すべて詞書のないのは、前の歌の詞書をかけて見なければならぬ。作者もやはり同然である。○風のたよりに　風の吹いて來る便宜に。○たぐへ　儔ふの他動詞で、連れ伴はしめる意。○しるべ　手引または案內者。

大意 この花の香を風のゆく幸便に連れ立たせて、いまだに來鳴かぬ鶯を誘ひ出してくる手引には遣るぞ、外の事には遣られぬ大切な花の香だけれど。

評 「花の香」の花は諸木いづれでもいゝやうだが、鶯の來鳴かぬ頃としては、梅の花が適當だらう。まして薰が高いから、しるべに遣るにもふさはしい。さて來る人を待ちかねては、案內者を迎に遣る事から聯想して、こ

の待ち焦れる鶯を迎へるには何を遣らうか、幸ひ梅花に鶯は思ひ合つた同士とも見られ、必ず誘はれて來さうだから、乃ち梅が香をその手引に遣るといふ趣向である。結句の「には」とある助辭の用法は、尤も注意を要する。古來の註釋は皆漫然と看過して、一向言及してゐない。この意を細やかに聞き分けると、外の事には決して遣られぬ大切の花の香だけれど、鶯誘ふしるべには惜まず遣るといふ餘意が生じて來る。鶯を待ち戀ふる心の切なさが、そこに見える。「花の香は風にたぐへじとすとも術なきを、かく幼くいふが面白きなり」と眞淵の評したのは、着想の根本に最もたしかな一瞥を與へたものである。

大江千里

鶯の谷よりいづるこゑなくは春くることをたれか知らまし

釋　○鶯の谷よりいづるこゑ　鶯が古巣から出て鳴く聲。鶯が谷より出ることは、詩經の「伐木丁々、鳥鳴嚶々、出レ自二幽谷一、遷二于喬木一」に據つた。支那では鶯をまた黄鳥、黄鸝、倉庚、金衣公子など呼んでゐるが、日本のうぐひすとは別種である。わが邦のうぐひすは始めから里近く住み馴れて、幽谷などから出て來るものではない。只前人が鶯をうぐひすと譯したのが例となつて、鶯の故事でうぐひすを詠んでゐるのである。○たれか「か」は反動辭。○まし　假に事を設けて想像する場合に用ゐる辭である。單なる未來の辭に使ふのは、この一轉化したもの。

大意　もしこの鶯の幽谷から出て來て鳴く聲がないならば、假令春になつたとて、春の來ることを世に誰れが知らうか、とても知る者は無からう。

評 鶯の一聲にいかにも春らしい長閑な氣分を感じたのを、鶯ゆゑに春を知つたと、聊か誇張的に考へ、更にこの感想を一般的に擴張して、「誰れか知らまし」と、天下の人も皆さうであるやうに、頑固らしく思ひ入つたのが面白い。上の「春きぬと人はいへども鶯の」の歌と、互に表裏して、おのゝゝいゝ處がある。彼は猪突的の意氣を以て勝り、これはふつくりした柔味を以て勝つてゐる。千里は忠岑よりも先輩である。或はこの歌から忠岑のは換骨奪胎に及んだかも知れない。但「谷より出づる」など、詩經の典故を使つたことは、作者の身分を語つてゐるもので、作者は江家の儒者である。三句の「は」は清んで讀むがよい。
四句、新撰萬葉には春はくるともとある。又結句、古今六帖にはたれか告げましとある。景樹はこれに左袒して、本文のまゝでは上句にふさはぬやうに論じたが、今の如くに說けば何の仔細もないではないか。却つて六帖の方が、調もおくれて優でないのみか、意味も徹りにくい。無論本文の方がめでたい。

春立てど花もにほはぬ山里はものうかる音にうぐひすぞ鳴く　在原棟梁

釋 ○花もにほはぬ　花の咲かぬこと。この「にほふ」は美しいさまをいふので、薰るのではない。○ものうかる　懶くあるの約で、口語の大儀であるの意。

大意　春にはなつたけれども、花の咲かぬ山家では都とは違つて、鶯も興なく面白からず思ふと見えて、大儀さうにすゝまぬ聲でサ鳴くわ。

評 鶯の聲に、懶い音の懶くない音のといつてはない。が都とは違つて、山里は自然餘寒もきびしく、梅さへも

咲き出さぬが無興に思はれる所から、鶯もさゝ鳴ぐらゐでまだ十分に音を張らないのを、あれは張合なく物臭がつて啼くのだと、想像を斷定にいつた。想ふに何か心憂い筋の事がある時山里に籠つた卽興だらう。二句、廣蔭の說に「花の咲かぬにあらず、咲きても匂なき意なり」とあるはむづかしい解で、尤もとは思はれない。歌は聊か理路にわたつて感哀が淺い。

初句、六帖に春なれどとある。又結句、一本に鶯の鳴くとあるを眞淵は采り、上田秋成は「鶯ぞとあるは協はず」とまで極論したが、これは鶯が存外に鳴くといふ意で、自分のすさまじい感じを主にしての叙法である。

題しらず

野べちかく家居しをれば鶯の鳴くなる聲はあさな〳〵聞く　　よみ人しらず

釋 ○家居しをれば　家作して住み居ればの意。○あさな〳〵　毎朝。「な」はもと肴の意から轉つた語である。この讀癖、あさなさなと聞えるやうに讀めと中古の歌書にあるが、無用の論である。

大意 かう野邊近い場所に家居してをると、何事も都とは違つて不自由な事ばかりだが、しかし嬉しい事には、鶯の鳴き立てる聲は毎朝聞くわサ、それがまうけ物で。

評 或都人が事情があつて、そんな郊外に住居を構へた折の作だらう。皆が聞きたがる鶯の聲だけには不自由せぬのを自慢して、せめてもの心遣りとした。つまり鶯の聲の外は萬事不自由なことを承認してゐる。「時鳥自由自在に聞く里は酒屋へ三里豆腐屋へ二里」以上に、含蓄の意が深い。「聲は」のはの辭甚だ力の入つた調子で、これに依つて反映の意が生ずる。詞は淺いが意は深く、氣韻もおのづから高い。萬葉集卷十の

あづさ弓はる山ちかく家居らしつぎて聞くらむうぐひすの聲（新古今には三四、家居してたえずきゝつる）
梅のはなさける岡べに家居ればともしくもあらず鶯のこゑ

などに匹敵して、藍よりも青いといつて可からう。

二句、一本に家居しせればとある。語を成さない。

○

春日野はけふはな燒きそ若草のつまもこもれり我れもこもれり

釋　○春日野　大和添上郡春日山の裾野。○な燒きそ　燒くなの意。野を燒くのは枯草を拂ふが爲にする事である。○若草の　若草の如きの意。春の野の若草はいかにも愛らしく美しいので、「つま」の枕詞として用ゐられた。○つま　古へ夫妻互にさしてつまと呼んだ。こゝでは妻のこと。○こもれり　野中に入り交つて居るをいふ。

大意　野の番人よ、餘所の野はともあれこの春日野は、何時はともあれこの今日は、燒いてくれるなよ、なぜといふに、この野に今日私の大切な妻も籠つて居り、私も亦籠つて居るわサ。

評　奈良の都人殊に官人などが、たま〳〵休沐の暇を得て、愛妻の手を携へて、程近い春日野に春日郊行と洒落れたが、端なく野燒が起つて折角の興趣を妨げられるのを苦しんで、春日野は燒くな今日は燒くなと、折り入つてひたすら野守に賴んだのである。二つの「は」の辭が、力ある重い使ひ方である事に注意するがよい。さていづれも「な燒きそ」へ係つてゐる。「若草のつま」は仁賢紀の註に「古者以二弱草一喩二夫婦一、故以二弱草一爲レ夫」

と見え、奈良時代にも盛に使はれた詞で珍しくはないが、野燒に續いて春草の生ずるのは、卽ち「野火燒不盡、春風吹又生」の句の證する如くで、野燒の春日野に若草は離れがたい聯想をもつから、おなじ枕詞でも動きがある。下句の仕立は、同じ句法を折り返して聲調を諧へたものだが、その際に「つま」の語を「われ」に歌ひかへて姿致を取つたのは、古い歌謠に例の多い事で、まことに諷詠三昧を得たものである。要するに寛平延喜時代には決して見られない格調で、風流溫藉情致委曲と稱へてよからう。景樹が「おなじ野に遊びても、女は人目を恥ぢて忍び隱るゝ意より、妻も籠れりといひ、さるに添へてわれも籠れりといへるのみ。故に『籠れり』は妻に專らかゝれる詞と見るべし」といつたのは、說き得てよろしい。

伊勢物語には、初句を武藏野はとして、野を燒くも男女の驅落者を搜索の爲に燒く事とし、さてその女が打わびて詠んだ歌としてあるが、あれは物語の作意で、俗耳に近く面白さうには聞えるが、やつはり潤飾の痕が目立つて、自然に遠ざかつてゐる。

○

春日野のとぶ火の野守いでて見よ今幾日ありて若草摘みてむ

釋 ○とぶ火の野守　飛火野の野守を略していふ。「飛火野」は春日野のうちにある。飛火は烽火の事で、敵人の來襲などある時、合圖に揚げる火をいふ。春日野に烽火臺を置かれた事は、續日本紀元明天皇和銅五年の條に見えて、奈良の京の警備としたのである。されぱその邊の野を飛火野といつた。野守は何處にでもある。禁野の番人は皆野守である。然しこゝは烽火臺の守者だらう。○今　もうといふに當る。○幾日ありて　の下、か

の疑辭を含んでゐる。○若菜　食料になる若い野菜をいふ。初春の芹薺の類は皆若菜である。○摘みてむ　摘まうといふに、意がほゞ同じい。

大意　この飛火野の番人よ、一寸この野邊に出て樣子を見なさい。この通り若菜はまだ摘まれさうでもないが、お前はこの野にゐるから多分わかるだらう、一體もう幾日ばかり經つて、此處の若菜はたしかに摘まうか。

評　これも歌主は奈良の都人で、しかも若い婦人だらう。昔は春先野外に出て若菜を摘み小松を曳いたりする事を、唯一の行樂としたものであつた。それは支那の靑色を見て陽氣を承けるの、菜羹を食して萬病邪氣を拂ふのといふ傳説の渡來以前からの事らしい。小松を曳くのは男に、若菜を摘むのは女にふさはしい行事である。春待つはやり心から、籠を携へ掘串(ホグシ)を持つて飛火野にきて見れば、生憎やまだ若菜の芽も萌えない。「今幾日ありて」は全くその失望の聲で、野守の豫想を聞かうとするのも、失望に餘義なくされた自然の要求である。「出でて見よ」に、野守が家にばかり引き籠つてゐる趣が反證され、さう籠つてゐる事によつて、餘寒の嚴しい時であることが想像され、隨つてまだ摘むほどには若菜の萌えない事が推定される。わづかにこの一語、畫龍點睛の妙がある。

奈良の京が平安に遷都されてからは、春日の烽火は不用だから、隨つて廢絶された。さてはこの歌は奈良時代の製作でなければならぬ。然し平安初期には奈良は古京として、留守さへ置かれた程だから、烽火もその頃はなほ存置されてあつたらう。歌の格調體製は平安朝初期のものである。

○

み山には松の雪だに消えなくにみやこは野邊の若菜つみけり

釋 ○み山 「み」は接頭の美稱である。後世深山をみやまといふのは、義訓から本末が顛倒したのである。古くは深山のことを奥山といつた。○には にてはの意。○だに 口語のさへの意。○消えなくに 消えないのに。「なく」は打消のぬの延言。

大意 山邊ではやはり寒くて地上のは勿論、疾く消える筈の松の梢の雪さへ消えないのに、都の方では早郊外に人々が出て若菜を摘むわ。

評 この歌作者の位置が極めて曖昧である。舊說をはじめ眞淵も宣長も、都の方から山を望んだ趣とし、景樹は山中から都の方を見渡した趣に說いてゐる。松の雪は日影の疎い山家の實況を聯想させる。然し大木も蔽ぐらゐにしか見えぬ麓の方では、人が若菜を摘むやら摘まぬやらわかるものではない。想ふにこれは實境の作ではあるまい。必ず當時流行した屛風畫に題した歌だらう。松に雪のある山の一方に、郊外の若菜摘の光景を取り合はせて描いたのを、うち任せて大まかに詠んだものらしい。元本に野べにとあるは、いよ／＼この趣をたしかめる。それで作者の位置は山とも野邊ともきまらないのだらう。秋部の下に業平の「千早ぶる神代も聞かず立田川からくれなゐに水くゝるとは」の詠の實際に疎いのも、題畫の作意だからである。但あれには詞書がありこれにはないが、それは當時既に事情不明となつてゐたのだらう。

この歌反對の事想を上下に按排して、その轉換の味を求めたのだが、餘り出來した作ではない。初句及び四句の頭の「み」文字がさし合つて、聲調に聊か不快を感ずる。七五調で歌つて見ればすぐわかる。これを平頭病と

いつて大した難ではないが、古人は嫌つた。其の上句は逞しげに健かに調べおろして來たのに、いつか氣魄が弛んで、結尾が掉はない。この弊は平安時代の七五調の作には多い。蓋し五七調は、五七五七と調べおろして更に五と起り、七と收まるべき所を、一句七音を以て歌ひ止めたのだから、動もすれば餘勢が横溢して、結句が字餘になる事は珍しくない。然るに七五調では、まづ初五文字をおいて、七五と調べおろすから、次に第四句は七と起り結句は五と收まる約束であるのを、五七三十一字の詩形を借りてゐる處から、是非結句は七音に歌ひ延べなければならぬ事になる。そこで結句が冗漫になり、微弱に流れるのは自然の數である。

○

梓弓おしてはる雨けふ降りぬあすさへ降らばわか菜摘みてむ

釋 ○梓弓　梓はあかめ柏で、その木で作つた弓を梓弓といふ。昔の弓は丸木弓で、その木質によつて梓弓、槻(ツキ)弓などの稱がある。さて弓を張るには押し付ける事があるので、弓を押して張るを、「春雨」にいひ懸けた序詞である。○おして　押し通しての意で、「降りぬ」に係る詞である。おしなべて又は強ひての意に解いた説は皆當らない。○さへ　副ひ加はる意の辭で、もの辭に近い。口語の意とは違ふ。

大意　春雨は今日一日中おし通して降つた。かうして明日も降るならば、多分若菜もよい加減に萌えようから、晴れ次第若菜を摘まうぞ。

評　上の「春日野の飛火の野守云々」に比較すると、思ひ入つた感哀が淺くて、聊か見劣りがするが、一雨一雨に春めいて、やう〳〵若菜を摘む季候に向つた事を喜んだ氣分が、言外に溢れてゐる。景樹が舊註の意に從つ

て「明日さへ降らば濡れ〳〵も若菜を摘まむ」と解いたのは不十分である。

仁和のみかどみこにおましましける時に、人に若菜賜ひける御歌

君がため春の野にいでて若菜摘むわがころも手に雪は降りつゝ

釋 ○仁和のみかど　光孝天皇をその御代の年號の仁和を以て稱へ奉つたのである。○みこにおましましける時　親王であらせ給うた時。御在位以前の時をさす。○人に若菜賜ひける御歌　或人に若菜を贈られた時に副へて下さつた御歌といふ意。まだ時康親王と申した時の事だから「賜ひける」とは書かれぬ筈だが、後に天子になられたので、かう書いたのである。○君　尊公、貴方などの意。○ころも手　袖といふに同じい。

大意　貴君に進上致さう爲とて、この若菜を春の野邊に出て摘む私の袖に、思ひの外に雪が降りかゝり〳〵して、いやもう甚だ難儀である。

評 「春の」と置き「雪は」と對へたのに、泡雪の降るのを意外と感じた趣が現されてゐる。又「わが衣手に」とあるのを思ふと、けしきばかり袖に袂にうち散る風情で、天ぎり合つて降る冬の雪のさまではない。所詮は野邊で獨言に詠み出された御歌と聞える。木下幸文が「人の爲に親王の御身として雪降る野邊に出でて、御手づから摘み給ふにはあらじ、人に若菜給へる日しも、雪の降りけるによりて、かくは詠みなし給へるならん」といつたのは、全く事情を穿ち得た說である。萬葉集に、

君が爲やま田の澤にゑぐつむと雪げのみづに裳のすそ濡れぬ　（卷十）

とあるのはこれと同一の筆法で、こんな難儀をおかしても貴君の爲にと、私の一心を籠めた進物だから、その積りで御賞翫ありたいといふ餘意が含んでゐる。かう殆ど恩に着せるばかり誇大にいひなして、わが贈物に價値づける事は、應酬上の一手段である。これを「往時の習慣なり、當世風の心にもなき卑下謙遜をいふと異りて面白し」と或人の評したのは大早計の斷案で、贈物を卑下謙退した例も昔には澤山ある。さて萬葉のは質樸な間におのづからの風情があり、これは又聊か鍛煉を加へた上に、まだ寛平延喜の纖巧卑弱の風を帶びないから、立派な御製作と申してよい。或傳說に、これは藤原基經に賜つたものだとある。すると基經が陽成帝を廢した時、光孝帝を迎立したのは、何も大嫛の雉の足ばかりによるのでもないらしい。かねて平生相應の御交際があつて、この若菜の贈物なども大に基經の心を引き付けて居たのだらう。

歌奉れと仰せられし時よみて奉れる　　貫之

春日野の若菜つみにやしろたへの袖ふりはへて人のゆくらむ

釋　○歌奉れと云々　豫て詠み置いた歌、或は今詠んだのをさし上げよと命ぜられた時、新に詠んで奉つた歌といふ意。○しろたへの　「しろたへ」は白栲で、栲はもと穀（カヂ）の纖維で織つた粗布をいふのであるが、後には布帛の總稱となつた。普通袖の枕詞に使はれる。○ふりはへて　わざ〳〵の意。「ふり」に袖振るといひかけてある。袖を擧げてうち振るのは、人を招くとて女のする事である。

大意　春日野の若菜を摘みにあのやうに面白さうに、白妙の袖を振つて招き合ひつゝ、あゝわざ〳〵女達の出掛けるのであらうか。

【評】奈良時代の都人の立場になつて詠んだ。若い女達が例のふぐしや籠など携へて出掛けるのを見て、彼等は郊外の若菜摘みに行くのだらうかと、羨ましさうに思ひ遣つたのである。「袖ふりはへて」はこの作者の好んで用ひた辭樣で、後にも「時鳥人まつ山に鳴く」、土佐日記にも「わが戀ふる人わすれ貝」など詠んでゐる。簡淨な特色もあるが、それよりも袖を振ることに、若菜摘に出掛ける婦人達のはずんだ佚な動作が現れて、この歌としては頗る面白い。又「人の」の一語で、自他の差別を立てた所に、物羨みするさまが見え、序に聲調を緩和してゐる。全體一つの閑文字もなく、玲瓏として玉を延べたやうなのは、流石に貫之獨特の技倆で、眞淵も「詞は句每にうるはし」と評した。但「心高くやさし」とまで稱へたのは、少し過褒ではあるまいか。とにかく勅命によつて上つた晴の歌たるに背かぬ風格である。

題しらず　　在原行平朝臣

春のきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

【譯】○春のきる　春を擬人して着るといつた。○かすみの衣　霞が山や草木などの上に蔽ひかゝつたのを衣に譬へた。○ぬきをうすみ　横絲が薄さにの意。衣を織るには經(タテ)(縱)、緯(ヌキ)(横)の絲がある。「み」はさにともくてとも譯する。○みだるべらなれ　亂れさうな樣子だと譯する。抑も「べらなり」といふ語は平安朝の初期までは一向無かつたのを、承和の前後になつてやう〳〵發生したらしい。延喜時代には好んで用ひたと見えて、諸家の歌集中に數多散見してゐる。然るを間もなく勢力がなくなつて、拾遺集の頃には殆ど廢語と等しい程になつたのは、元來その語が雅馴でないからでもあらう。

大意　春の著る霞の衣は横絲が薄くて、普通の人の衣とは違ふから、外の事では亂れまいが、山から吹きおろす風には、あちらこちらが破れ損じさうな樣子だ。

評　見渡しの山縣（がた）づいてほの〴〵うち靡いた霞が、恰も薄衣を引き延べたやうに漂つてゐるさまが想はれる。霞を衣に取り成して見ると、凡俗の着物とは譯が違ふので、一寸一案を試みて、霞は春の象徵である所から、春を擬人して霞の衣を春に著せた事は、霞の衣に天女の衣に等しい一種崇高な感じを與へたものである。それが又「山風にこそ云々」と特に唱道される素地となり襯染となつてゐる。想は纖細だが、又捨て難い味もある。三の句は只絲が弱いといふまでのことだから、經緯いづれでもよいのを、「ぬきを薄み」としたのは、調に任せたものである。但この種の譬喩は先例の多い事で、別にこの作者の捌めた巧ではない。「こそ」の辭強い用法なので、外の事にては亂れまいがの餘意を生ずる。

この作者は經濟の才にこそ長じてゐるが、詠歌の方はその短處だつたらう。光孝天皇が嵯峨に行幸あらせられた時「翁さび人な咎めそ狩衣けふばかりとぞ田鶴も鳴くなる」と、覺えず不祥の語を吐いて逆鱗に觸れるやうな事件を釀し、その他「立ち別れいなばの山の峰に生ふるまつとし聞かば云々」。或は「千代のふる踏あとはありけり」など、緣語いひかけ等の修飾を旨とした歌ばかり多く、天然の節奏を備へてゐるのが稀である。舍弟業平朝臣の天才には一向に似つかない。山幸も海幸もおのがさち〳〵で仕樣のないことは、神代の昔でさへもさうであつた。

寛平の御時后の宮の歌合によめる　　源のむねゆきの朝臣

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり

釋 ○ときは　常磐の約で、常しへなる磐石の意。常に變らぬ物をそれに喩へて常磐にといつたのが轉じて、直に變りのない事物をいふやうになつた。○松のみどり　松葉の青き色をいふ。松の若芽にいふのは俗用である。○ひとしほ　一染である。「しほ」は染むるをいふ。入の字を訓むのは義訓である。一層一段などいふ意に用ひるのはこの轉義である。

大意　いつも變らぬ筈の松の綠色でさへも、一般の草木の萌える春が來ると、さすがにもう一染綠の色が增ることよ。

評「も」の辭「春くれば」に應じて、その意が重く強まるから、口語のさへもの意に聞えて、他の冬枯する草木に映對させた事となる。松は四時の變化ない常綠木と、一般に肯定してゐる概念を飜して、流石に春には松といへども色が勝ると、春色の往き渡らぬ隈もない趣にまでいひ及んだ。若しこの餘意を想像しないでたゞ詞のまゝに心得ようなら、餘りに徒言歌となるであらう。

歌奉れと仰せられし時よみて奉れる　つらゆき

わがせ子が衣はるさめ降る每に野べのみどりぞ色まさりける

釋 ○わがせ子　夫をいふ。「わが」も「子」も親んでいつた語。○衣はるさめ　衣を洗ひて張るといふに、春雨をいひかけた。

大意　妻がわが夫の衣を洗ひ張りする、その張るといふ名の春雨の降る度每に、野邊の草木の綠の色は、存外に

増つたわい。

評 衣は洗張の度毎に色の褪めるのには引き換へての餘意がある。一寸見ると作者が貧家の妻女の心になつて詠んだらしく思はれるが、再考すると初二句には出典があるので、作者自身には關係のないことを發見する。昔から洗張は女の仕事で、伊勢物語に、

昔女はらから二人ありけり。一人は賤しき男の貧き、一人はあてなる男もたりけり。賤しき男もたる、師走の晦日にうへの衣を洗ひて手づから張りけり。志はいたしけれど、さる賤しき業も習はざりければ、うへの衣の肩を張り破りてけり。これを彼のあてなる男聞きいと心苦しがりければ、いと淸らかなる綠衫のうへの衣を見出してやるとて、

紫の色濃き時は目もはるに野なる草木ぞわかれざりける

とあつて、貧乏な六位の妻が洗張に夫の袍を破つた時、義兄からその位袍を贈つた志を、「野なる草木ぞ云々」と詠んだので、洗張に綠の色は既に典故の如くなつてゐた。作者は野べの綠から忽ちこれを聯想して、綠衫の洗張に褪めたり破れたりするのと、野の綠は雨毎に色が増すのとの反對の事相を湊合して、これは不思議と驚歎したのである。「はる」の懸詞がこの湊合の樞の役目を勤め、「ぞ」の辭が驚歎の意を反撥してゐる。されば「わがせこが衣はる」の上に妻のといふ主語を置いて見たら了解し易いだらう。廣蔭が「貫之當時久しく六位なりければ、早く加階して五位の緋衣にうつらむ事を冀ひて、色まさるといふに衣の色の變る意を含めて、細君の作に託して獻詠せしなり」といつたのは附會の說に過ぎない。さてかういふ巧はこの作者の長處で、また短所である。自分はこの作者に對しては寧ろ拙なる事を望むものである。

三句、古今六帖には降るからにとある。

○

あをやぎの絲よりかくる春しもぞ亂れて花のほころびにける

釋 ○あをやぎの　春の頃の柳を色によつて青柳といふ。冬の枯柳に始めて青い色を認めた意識の上から出た語である。「の」は口語のがに通ふ。卽ち領格の辭。○絲よりかくる　絲を縒ることで、「かくる」は輕く添へた語。○しもぞ　「し」は强辭、「も」は歎辭、「ぞ」は物を强く取り出づる意の辭。然しこゝは一連に熟した辭となつてゐる。○綻びにける　花の咲くを譬へていつた。

大意 絲を縒れば綻びも縫へる筈なのに、あの青柳が絲を縒りかける春のこの節はサ、却つて花が思ひかけず大層咲き亂れて綻びたわい。

評 柳の枝を絲に、花の咲くを衣の綻びるに譬へて、すべて裁縫上の事でいひおほせた手際は、纖巧ながら面白味もある。三句の「しもぞ」は强く物にさし當てた意なので、却つての意がそこに生まれる。四句は三句の語調の强く迫つた餘響で、亂れて花のと轉倒の語法を用ひた。そして多數音の「亂れて」を上に、少數音の「花の」を下にして一句を構成したのは、意詞共に自然の調を得たものである。同一人の作だから仕方がないが、上の「春のきる云々」も、似たやうな取材趣向なのは遺憾である。

西大寺のほとりの柳をよめる　　僧正遍昭

浅みどり絲よりかけてしらつゆを玉にもぬける春のやなぎか

釋　○西大寺云々　嵯峨帝の朝に京都の朱雀通りの南門たる羅城門外の鴻臚館を捨てゝ、東寺西寺といふ大刹を建てられたのが、今は東寺ばかり殘つてゐる。その西寺をこゝに「西の大寺」といつた。奈良の西大寺のことではない。「柳をよめる」は柳を見てよめるの意。都の大路には昔は柳も多く植ゑた。○淺みどり　淺き綠色。○よりかけて　この「かけて」も輕く添へた語。○しらつゆ　露は白ければいふ。○玉にもぬける　玉にしても通してゐるの意。「も」ば歎辭。○やなぎか　「か」は歎辭。

大意　さすがに所柄とて、薄萌黄の絲を縒りかけて、白い露を玉にしてまあ、數珠繋ぎに通して居る春の柳だことよ。

評　寺門前に麴塵の絲にも譬へられる芽出し柳のふしぐに、露の白玉の溜つてゐるのを見て、端なくも花田色の緒に貫いた水晶の念珠を聯想し、所柄柳が數珠を拵へて居るやうに見立てたのは、頗る逸興がある。かう解してこそ、詞書にわざわざ「西大寺のほとり」と斷つた理由も了解されよう。況や作者が坊さんときては、いよく\さう信ぜられる。又柳絲の淺綠色と露の白色との配合、色彩が頗る映えぐしい。初二句淺綠の絲と續くべきを、のの辭を略いたのは、音數や調子に束縛のある詩歌では普通の事である。伊勢の歌に、

　青柳の枝にかゝれる春雨はいともてぬける玉かとぞ見る

とあるは、これと同想の譬喩で、只青柳を主としたのと、春雨を主としたのとの相違があるばかり、恐らくは遍昭のから生まれたものだらう。歌も劣つてゐる。抑もこの僧正の構想は奇巧の中に狂痴の意を寓してゐるので、大いに可笑的の分子に富んでゐる。他の歌仙達にはとても見られない特色で、これが優に一方に覇を唱へて、

古今に濶歩する所以である。

下句、顯昭本に玉にもぬける春の青柳、又同書古異本に玉にもぬくか春の青柳とある。景樹は後の方を執して「定家の密勘にも論なければ、當時は皆然なりけむを、今は青柳の青の詞、初句の淺みどりと同意なるをいたみて、かく直せるなるべし」と論じた。然し顯昭本のはいづれも後世の調子で、古今時代若しくはそれ以前のものでは斷じてない。

題しらず　　　　よみ人しらず

もゝち鳥さへづる春は物毎にあらたまれどもわれぞふりゆく

釋 ○もゝち鳥　百千とある鳥。多くの小鳥をいふ。百千は多數の轉義。これを古今傳授三鳥の一として事々しく昔は祕めたものだ。○ふりゆく　舊くなる。

大意 鶯や何やさま〴〵の鳥が盛に鳴く春は、空のけしきも草木の色も、すべて物毎に新しく改まるが、それに引き換へてわが身ばかりはサ、年寄つて行くわい。

評 「百千鳥囀る」といふに、浮き立つた春の趣が見えて、物毎に若やぎゆく中に、獨舊びて行く老人の述懐哀である。萬葉集に、

ふゆ過ぎて春し來ぬればとし月はあらたまれども人はふりゆく　（卷十）

とあるを、すこし引き換へたのみだが、初二句は點化の妙がある。三句以下は平凡に庶幾いほど敍述が率直である。

○

をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥かな

釋 ○をちこち　あちこちといふに同じく、此方彼方の意。よく遠近の字を塡てゝ書くが、其の意に心得てはすこし違ふ。○たづき　手着きで、手寄所、とりつき所などいふ意。○山中に　山中なるにの意。○おぼつかなく　不明瞭な意で、ぼつとしてゐるなどいふに近い。○よぶこ鳥　鳥の名。それに覺束なくも呼ぶと、上からいひかけた。この鳥も三鳥傳授の一つである。古歌の例を考へると四季に通じて詠んであり、あながち春の鳥とも思へない。眞淵は「俗にいふかんこ鳥で、字音に稱へ誤つたのだらう」といひ、中山美石、仲田顯忠は、「年よりこいと鳴く鳥ならん」ともいひ、甚だ分明でない。川柳點にいはく「猿なれば猿にしておけよぶこ鳥」と、眞に達者の言である。

大意 何處といふ取付き所さへもわからぬ山の中なのに、ぼつとした聲で何處ともなしに、人を來いと呼び立てるよぶこ鳥だことよ。

評 「山中」には、この時代としては作者自身が山中に居ていふのが普通であつた。景樹が山奥にての意に解したのは誣ひてはあるまいか。「おぼつかなくも」の下に、我をといふ語を略いてある。さて大體から考察すると、假令呼子鳥の正體が判然したとしても、餘りよい歌でもなからう。

雁の聲を聞きて、越へまかりける人を思ひてよめる

はるくれば雁かへるなりしら雲の道ゆきぶりに言(コト)やつてまし　　凡河内躬恒

釋　○雁の聲云々　歸雁の聲を聞いて、嘗て北國へ行つた人を思つて詠んだ歌との意。「越」は北陸一帶の地をいふ。「まかり」は退出の意だが、この時代では往くと同意にも使つた。但こゝは京から下つたのだから、本義の用法にも適つてゐる。○雁かへる　雁は春秋に寒を追つて南北するから、越の國は北方の寒地なので、雁の故郷と見立てゝいつた。○白雲の道　雲路といふに同じい。空中を往來するから、雲中に道があるものと見ていふ。○ゆきぶり　行觸(ユキブリ)で、行く／＼物に觸れるをいふ。源氏物語夕顔の巻にも「いかなるいきぶれにかゝらせ給ふぞや」とあるいきぶれも同意。○言やつてまし　傳言をしようか。「まし」の用法は本格である。

大意　長閑な春が來れば、聲を立てゝ雁があれ故郷へ歸ることよ、さては空の雲路を遠く北國へ行くことなれば、其處に住まへる自分の朋友の宿のあたりを通るだらうが、其の出會ひがしらに「君も歸り給へ」といふ傳言を頼まうかしら。

評　去年雁の渡る頃に都を出て、越の國へ赴いた朋友だらう。相思の情に堪へないで打ち詠めてゐる折も折、大空に歸雁の聲を聞いて、あはれ春が來れば雁が歸るわ、然るに何で彼の人は歸らぬのか、雁の如くに君も早く歸り給へと、この歸雁に言や傳てましと思ひ入つた高い情熱が躍々として、すゞろにその哀感に打たれる。「かへる」の語は全篇の主眼で、初句の「くれば」はこれに對へて鬪はせた詞である。のみならず「ば」の辭が頗る力強いので、春くれば雁のみではない、人も歸る筈のものゝやうに聞き做されるのが、言靈の玄妙である。

「白雲の道」といふに末遠く遙かな旅路のさまが象徴されてゐる。そして道を行くに行觸をかけて、「道ゆき觸」と續けた辭樣は、上の貫之の「白妙の袖ふりはへて」の手法と同じい。さて雁に言傳をする事は、前漢の蘇武の雁書の故事だが、この歌はなまじそんな典故を考へない方が可いと思ふ。但作者は或はそれにヒントを得たかも知れない。

歸る雁をよめる　伊勢

春がすみたつを見すてゝゆく雁は花なき里に住みやならへる

釋　○歸る雁を　歸る雁を見てよめるの意。

大意　これからはやうく面白い花も咲き出してくる時節なのに、この長閑な春の霞の立つを見かけて、うち捨てゝ歸つて行く雁は、其の料簡がいかにもわからぬが、想ふに昔から花といふ物のない土地に住み馴れて居るせゐだらうか、花の面白味を知つた以上は、決して見捨てゝ歸る事は出來ない筈だものを。

評　畢竟吾人が愛好する春を見捨て、花に背いて歸る以上は、その者の心狀に大きな疑惑を投げずに居られぬ。そこでつい人の鳥のといふ差別を忘れて、はかなく歸雁の心を疑つた點に、面白味がある。さてその理由として花のない土地に住み馴れてゐたかの想像は、尤も要領を得たもので、かう歸雁に就いて閑想像を畫くといふ事が、歸雁に愛惜の意を傾倒する所以である。

題しらず　よみ人しらず

をりつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝにうぐひすのなく

釋 ○ありとや　あると思つてか。

大意　梅の花を折つたれば、移り香で袖がこれこのやうに匂ふわ、それだけで眞の梅の花はありもせぬのに、袖の匂ふのを此處に梅の花があると思つてか、あれ鶯が鳴くわ。

評 さて〳〵馬鹿な鶯ではあるわ、これは移り香だぞの餘意がある。鶯の來鳴くは梅花を慕ふ爲と肯定した上の趣向で、袖の匂の高さの一通りでない事が想はれる。諸註、鶯の鳴くに重きをおいて、袖の移り香を輕く見たのは精しくない。袖の香の事は次の歌の評語を參照されたい。又四句はこゝにありとやを倒置したので、語調に任せたものである。歌は巧を覓めて巧でない、畢竟興趣が稍自然を缺く爲だらう。

○

色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも

釋 ○あはれ　もと歎辭であるが、一轉して面白い意にも悲しい意にも使ふ。こゝは面白いの意。○おもほゆれ　思はると同じい。○宿の梅ぞも　宿は庭といふ程の意。「梅ぞ」は梅なるぞの略。「も」は歎辭。

大意　この梅の花は色も宜しいが、それよりも一層この香の方がサいゝと思はれる、かう佳い薫のするのは、嘗て誰が香を焚きしめた袖を觸れた、この庭の梅であるぞい。

評 昔は薫籠卽ち火取で衣服に薫物する事が盛に行はれ、上流社會では、男女とも身嗜みに焚きしめたのだから、移り香といふ事が物語や歌文に數多散見してゐる。こゝも其の袖の薫が梅に移り留つたものとして詠んだ。紅

白いづれにせよ、梅の色は素より結構なものだのに、それを折つて「色よりも」と喝破したのは、香を揚げようの手段である。さてその香を懷しむ餘り聯想は人の袖の香に及んで、誰が觸れた袖の香かと疑ふに至つた、その癡呆の情味が面白いのである。なほ思ふにこの歌單に梅が香を愛する意のみではあるまい。必ず託する處諷する處があるのだらう。恐らく作者意中の女の許を音づれた折、庭前の梅花がたゞならず薫つたのを、こはどうした男の移り香ぞ、油斷のならぬ事かなと揶揄つたものだらう。かう見ると「たが」の一語妙いふべからざるものがある。

○

宿近く梅の花うゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり

釋 ○宿　萬葉集には屋前（ヤド）とも書いて家の前庭をいつたが、この頃は直に家をいふやうにもなつた。こゝはその意。○あぢきなく　口語のつまらなくの意。萬葉集に「わづきも知らに」とあるわづきの轉つたものか。

大意　以來家近くこんな梅の木は植ゑまい、其の故は花よく匂ふので、來もせぬ待ち人の袖の匂に、つまらなく間違へられたわい。

評　約束した戀人を待つ女の作か。梅の香につい欺されては、若しやあの人がと徒に胸騒ぎがされるので、えゝこんな物は植ゑまいと焦れたのだ。自分が人待つとて端居するから、梅が香も匂つて來るなのを忘れて、宿近く梅の花のあるが氣にくはぬやうにいひなした、その痴態が頗る面白い。二句を景樹が「梅をば植ゑじなどあるべきを梅の花うゑじといへる幼くてめでたし」といひ、又廣蔭が「梅の花の咲けるを植ゑたるなり」といへる、

いづれも諾け難い。これは眼前に眞盛な梅花を見たのでさう詠んだのである、その上待つ人の袖の香に誤たれるのも、花の咲いてのうへの事だから、おのづから其の響をも兼ねて、花と置いたのである。後にも遍昭の歌に、

蓮葉のにごりにしまぬ心もてなにかはつゆを玉とあざむく

とあるも同一の叙法で、蓮が本來の主意だが、露の置處にも緣があるので、葉の字を添へたのと同じい。又この句の字餘りに、植ゑじと思ふ決心の竝々でない趣が見える。「人の香」とのみいつて、袖とも何ともいはぬのは、現代では少し詞の不完全な心地はするが、上にもいつた通り、昔の人の袖は皆盛に薫つたものだから、殊更に袖とことわる必要がなかつたものと思はれる。

○

梅の花たちよるばかりありしより人の咎むる香にぞしみける

釋 ○たちよるばかり云々　ほんの立ち寄るといふ程の事があつた其の時からの意。景樹が「立ち寄らむとせしのみなるを」と解いたのは當らない。○咎むる　不審を打つて怪むをいふ。

大意　梅の花陰にほんの立ち寄るか寄らぬかといふ程の事があつたその時から、今までどんな人に寄り添つて居たのかと、皆人の怪む香にサ、着物が染みたわ。

評 梅の香氣が高くて移り着き易い事を誇張したのである。

以上の三首及び次々に出てゐる梅の歌は、大抵香氣を主として歌つてゐる。さてこゝに一つ注意を要する事がある。それは外でもない。同一同量の香氣も、古人と今人とは其の美を感ずる程度に、深淺多少の相違のあ

る事である。さるは文化の發達に伴つて、眼耳身舌の官能が著しく發達して行く中に、獨反比例に退歩の傾向のあるのは嗅感である。近くは聞香の技の廢れたのでもほゞ了解がいかう。却つて未開の人民程この官能が完全だといふではないか。實際古人は今日の我々よりも薰臭の刺戟を強く感じたらしい。鼻官に映ずる美感が一層著しかつたらしい。古人は雨中に山吹の香を翫び、車の齒に碎かれた蓬の香を車中で味つた。古歌に梅や橘や菖蒲や菊やはいふに及ばず、香氣を賞美する傾向の多いのは、決して偶然でない。只この官能の退歩によつて、古人が謳歌した嗅感の美を、充分に認識することの出來ないのが憾めしい。

梅の花を折りてよめる　　東三條の左のおほいまうち君

うぐひすの笠にぬふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと

釋 ○うぐひすの笠にぬふてふ梅の花　「笠にぬふ」は笠として縫ふの意。上の遍昭の歌の「玉にもぬける」と同じ語法である。昔は笠を作るを縫ふといつた。蓋しその製作法から出た語で、まづ下地の骨組を作り、それに菅なり帛なりを縫ひ附けたのである。「てふ」はといふの約のちふの通轉である。さてこの集大歌所(巻二十)及び催馬樂に入れる「春柳を片絲によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」といふ歌に本づいて詠んだので、鶯の木傳ひあるくを縫ふともいふより、取り合はせて、鶯の梅の花笠を縫ふといつた。○かざさむ　「かざす」は髮挿(カミサス)の義で、草木の花をも葉をも又造花をも頭に挿すを、古くは髻華(ウズ)といひ、後はかざしといつた。○老かくるやと　老いた顔付が隱れるかどうかと。

大意 古くから鶯が笠に縫ふといつてゐる梅の花だから、全く笠なら一つ折り取つて、吾が容貌の老も隱れるか

どうかと、試に挿頭(カザ)して見よう。

評 この歌老の述懐である事は論がないが、一向委靡衰颯した年寄らしい氣分が見認められない。史を按ずると、この作者常(トキハ)公は文德天皇の齊衡元年に年四十三で薨ぜられた。するとこの公のは、老といつても僅に初老の四十代の事だから、自然盛な花やかな氣分が漲つてゐるのだらう。四十の初老を賀する事は、嵯峨上皇、仁明天皇の御賀を著しい例として、この時代には盛に行はれた事と見えるから、この公も其の四十算に滿たれた年の春、必ず賀宴を催されたらう。主客興に入り醉に乘ずる折も折、樂人等がかの催馬樂の青柳の曲をうち出したので、早速それを引き取つて、老とは名のみで隱せば隱れぬ事もあるまいと思はれる程の初老なので、梅の花笠かざしてみむとは歌はれたのだらう。殿前の梅花の今を盛である事は勿論である。結句の終りに試にといふ語を含めて聞く時は、いよ〳〵分りよい。その現場の狀況を思ひ遣つて見ると、なか〳〵興味深く趣のある歌である。

題しらず　　素性法師

よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり

釋 ○素性集の詞書には「梅の花を折りて人のがり遣るとて」とある。○よそにのみ　餘所にかけ離れてばかり。○あはれ　こゝは賞むる意の歎詞。○あかぬ　飽かれぬの意。○折りてなりけり　折りてのうへの事なりけりの意。

大意 これまでは梅の花を只遠方からばかり、一途にあゝ見事なと見てゐた。然し今思へば、梅の花の飽かれぬ

よい色香は、存外にかく手に折り取つて近く見てのうへの事であつたわい。

評　大方の花とは違つて、梅の花は却つて近まさりのする物である事を發見した趣である。家集の詞書によれば、かう飽かぬ色香の物故、只獨で賞翫するのも勿體ないから、この折枝を貴君に差上げます、といふ餘意を含めて聞く歌となる。込み入つた意想を、わけもなくなだらかにいひ續けたのは、この法師の家法で、結句は簡潔な叙法である。

梅の花を折りて人におくりける　とものり

君ならでたれにか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る

釋　○君ならで　貴君ならずして。○たれにか見せむ　「か」は反動辭。○いろをも香をも　色の善惡も香の深淺もの意。

大意　この梅の花は貴君の外に誰れに見せようぞ、見せよう人もない、それは梅の花のいふにいはれぬよい色をも香をも、何事にも辨へある人がサ、よく知つて見分けも聞き分けもしますわ。

評　貴君こそ其の色香を知る人ゆゑ、今この花をお贈り申しますといふ餘意が含まる。これは贈物の梅が枝に結び添へた歌である。かうなると贈られた人は、卽ち色をも香をも知る人と指定された譯で、非常な梅花の知己といはねばならぬ。かう先方ばかりを推奬してゐるやうに見えながら、一面に贈物の梅花に相當地歩を占めさせて、色香の勝れた立派な物であることを語つてゐる。さればこの歌の底意は述懷で、自分の知己と憑むのは貴君の外になければ、宜しく御引立を冀ふと、自分を梅花に擬へていひ送つたものらしい。四句「色をも香をも」

と同じ語法を重疊させ、結句にはまた「知る人ぞ知る」と同語を反復した聲韻呼應の間に、一種縹渺たる情緒の漂ふを認める。

くらぶ山にてよめる　　　つらゆき

梅の花にほふ春べはくらぶ山闇にこゆれどしるくぞありける

釋　○くらぶ山　山城の鞍馬山の事とする說もあるが確かでない。日本紀に倉歷、和名抄に藏部、久良布と見えた地は、近江の甲賀郡である。○にほふ春べ　「にほふ」は氣色の映えてうるはしいのをいふ。此處では香の義に見てはならない。「春べ」は春の頃の意。この「べ」は野べ山べなどの方といふ意のべに同じい。榮の約といふ說もあるが當らないと思ふ。○しるく　著くで、判然の意。

大意　何時もとは違つて、梅の花の咲き匂ふ春の頃は、取り分け闇いといふ名のくらぶの山を、しかも眞の闇夜に越えて往つても、梅の花が存外に判然とよく知れたわい。

評　「著く」は既に「梅の花匂ふ春べは」とあるから、その匂ふ事が著くの意である。六帖には、この句咲きぬる時はとある。これは咲いた事の著き意となる。いづれも二句に讓つて、結句の上にあるべき詞を略いたものだ。本行のは六帖に比べると、調が弛んで聞えるので、景樹は六帖を正しいとした。併しこれは入選の際、例の引き直したものかも知れない。秋部上の在原元方の歌に、

秋の夜の月の光しあかければくらぶの山も越えぬべらなり

とあるも、暗部の名義を着想の起點とした事は同一である。元方も貫之も同時代だから、どちらが先に詠んだ

ものか。但「闇に越ゆれどしるく」とはあまりに理路に着したいひ方で、元方のに劣る。

月夜に「梅の花を折りて」と人のいひければ、折るとてよめる　　　　みつね

月夜にはそれとも見えず梅の花香を尋ねてぞしるべかりける

釋 ○梅の花を折りてと云々　梅の花を折りて賜へと躬恒に或人が頼んだので、その頼に應じて折る際に詠んだ歌である。○それとも見えず　それが梅の花とも見分かれない。○香を尋ねて　香を目當にしての意。尋ね行く意ではない。

大意 一枝折らうと庭をあるけども、かうさやかな月夜には月の影が白いので、梅の花がたしかにそれとも見分らない、しかし此處へ來て見れば、このやうに高い香のするものを、かうと知つたら、初から香を目當にして折るべきであつたわい。

評 あゝ存外な、我ながら馬鹿な事をして居つた事よの餘意がある。春のさやかな月夜に、高貴の人の御前に伺候し居た折、「庭の梅を折りて參れ」との仰のまゝに、木陰に立ち寄つて、さて詠んだのである。上句には專ら花の色が月の光に混うて不分明なことをいひ、下句には香のひどく高くあざやかなことを述べて、明らかに色と香とを對照させたものだが、色といふ文字が表面に見えないから、誰れも心付かない。これこの作者の巧を弄んだ猾手段である。

二句、家集に見るとも見えじとあるは、理も聞えず甚だわるい。

春の夜うめの花をよめる

春の夜の闇はあやなしうめの花色こそ見えね香やはかくるゝ

釋 ○梅の花をよめる　梅花を見てよめるの意。○あやなし　理の立たぬ、譯の分らぬ、無茶などの意。文目の立たぬことから出た詞。○やは　反動の辭。

大意　春の夜の闇といふ奴は、さて〳〵理窟もないものよ、暗くすれば梅の花はそりや見えぬなれども、香がサ隠れる事かい。

評　暗夜には殊に香の高い。それがこの趣向の基礎となつてゐる。なつかしい花の色が暗くて見分け難い所から、闇が意地悪く梅花を隠したものと想像を描いて、「やは」の反語を使つて、闇に對つて強くさし當てゝ、いくら隠しても香で梅の在處が知れるぞ、こんな事ならいつそ初めから色をも見せたがよいとの餘意を籠めた。闇を擬人しての作意、一寸面白い。

初瀬にまうづる毎に宿りける人の家に、久しく宿らで、程へて後にいたれりければ、かの家のあるじ「かく定かになむやどりはある」といひ出だして侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りてよめる　　つらゆき

人はいさ心も知らずふるさとははなぞむかしの香に匂ひける

【釋】〇初瀨に云々　初瀨はまた泊瀨と書き、略して長谷(ハセ)といふ。大和國磯城郡初瀨山に、今も有名な觀世音菩薩の靈像を安置した長谷寺があつて、當時は殊に繁昌した靈場である。貫之も勿論この信者だつたらう。參詣の度每に何時も中宿りする或人の家に、近來は參詣はしても立ち寄らなかつたのである。「人の家」を舊註に、この人の家を長谷寺の坊中と解してあるが疑はしい。これは寺中の坊などをさした書振でない。必ず普通の人家であらねばならぬ。「かく定かになむ云々」は參詣はしながら打絶えて宿をも借らなかつた家に、久し振で貫之の音づれたのを、其の主人もさる者で急にも出迎へず、家來を以て只「私の家は昔の通りに依然として居ます」とばかりいはせた。この語の裏には、それを何で近來は御立ち寄り下さらなかつたのかと、皮肉と厭味を取り混ぜたものがある。貫之隙さず、その家の門内の梅花を一枝折つて、この歌をいひ込んだのである。〇人はいさ　「人」はこの家の主人を指す。「いさ」は否やの意。下に必ず知らずと受ける。いざと濁るのは誘ふ意で別語。〇心も知らず　心も知られずの意。れ文字を略くは、乾されぬを乾さぬといふと同例。「も」は歎辭。〇ふるさと　故里。今は旅にある人の我が本貫の地を指していふ語だが、古くは故都の地をいひ、一轉しては住み捨てた里をいつた。こゝもその以前度々宿つた家だから、昔緣故のあつた所の意で、故里といつた。〇花ぞ　花は梅の花。〇むかしの香に匂ひける　昔匂つた其の香に今も匂つたの意。すべて「香に匂ふ」は單に匂ふといふのとは違ふ。袖が梅の香に匂ふ、花が昔の香に匂ふ、かういふ風に使ふ。

【大意】久し振で來たので、主人は心變りがしたやらせぬやらわからぬ、しかし昔ゐた所はさすが馴染がひに、この梅の花がサ、相變らず昔のまゝの香に匂つたわい。

【評】されば餘所〳〵しくなさゐる御主人よりは、この梅の花こそ御尋ね申す拙者と同じやうに、親切なものです

なの餘意がある。「人は」と「花ぞ」とを對照させて鬪はせたのと、「ぞ」の助辭の用法の力強さとで、さう聞える。主人が貫之の暫く此方に來られぬのは門違ひでもされたのかと皮肉つたのに對して、梅の花は依然好意を表して昔の香に匂ふのに、この御主人がかうよそ〴〵しいのは、心が昔と變つたかも知れぬとあてこすつたのは、如何にも當意卽妙の辭令である。この主人も貫之の交際する程の人だから、流石に歌心ある者と見えて、この返歌に、

花だにも同じ香ながら咲くものを植ゑけむ人の心知らなむ

と哀願して、前の擬勢はどこへやら、折れて下手(シタデ)に出でたのがをかしい。句每に力があつて歌のさまも逞しく聞えるのは、一つは二句切で大體の調が五七調で仕立てられたのと、又一つは初二句を三二、四三と輕重を轉倒した音數で組み立てた爲に、調子が切迫したのに應じて、四句の力強い「ぞ」文字を挿用した點とにある。結句はたゞの平叙で輕いやうだが、二、三、二音の細かい組織で迫つて聞えるので、全體の調子が釣り合ふ。

水のほとりに、梅の花の咲けりけるをよめる　伊勢

春ごとにながるゝ川をはなと見て折られぬ水に袖やぬれなむ

釋 ○咲けりける　咲いてあつたの意。○ながるゝ川を　伊勢集のこの歌の詞書に「池に花など散りたる」とあるによつて、川は水の誤だらうとも、又池に續いた遣水をいふのだらうともいふ舊說は、家集に拘泥したもので、水の語が重複する。しかも伊勢集は後人の僞撰であることは、景樹も既にいつた。又或人の說に「川は影か、はとけと書體紛らはしければ誤れるならん」とある。○なむ　未來の事を旣定にいふ辭。

大意　これから先春のくる度毎に、花影の流れ川に映つたものを、誤つては眞の花と見て、一枝折らうとしては折られもせぬ水の爲に、袖が濡れる事であらうか。

評　川を花と見るは、すこしあらい。「折られぬ水に」の一句、簡淨な叙法で、機智がある。舊說はいづれも、初句をこれまでの春毎にの意と見て、今年もまた懲りずまに謀られる趣に聞いたのは誤である。これは今年はじめて見た梅の花で、向後も春毎におなじ調子にだまされて、「袖や濡れなむ」と危んだものだ。四句の意も實際に折り試みたのではない、豫想である。

○

年をへて花の鏡となる水はちりかゝるをやくもるといふらむ

釋　○前のと同時の作である。○花の鏡となる水　花の爲の鏡となる水の意。○ちりかゝる　花の散りて水面へかゝるを、鏡に塵のかゝる事にかけた。「ちり」は散りと塵の兩意。○くもる　鏡面の明らかならぬをこゝではいふ。

大意　鏡は塵がかゝつて曇る習ひであるが、年々いつも春は花の影が映つて、恰も花の鏡となる水は、その花の散りかゝるのを、曇るとでもいふのであらうか。

評　鏡と見立てたのに、その水の極めて清み徹つて、花影のさやかに映つてゐる樣子が思ひやられる。初句は「上句にはさして用なきを、只鏡の年を經て曇ることにいはむ爲におけるなり」といふ千秋の說は當つてゐる。我が毎年々々見馴れた意ではない。「ちりかゝる」は今現在に散るのではない。上の「折られぬ水に袖やぬれなむ」

と同趣向の假設の事相で、さてそれを基礎として想像をめぐらしたのである。鏡の縁語の洒落のめし、渾然として斧鑿の痕跡を見ない。これこの作者の最も得意とする口吻で、下にも、

あすか川淵にもあらぬわが宿もせにかはりゆく物にぞありける

山川のおとにのみきく百敷をみをはやながら見るよしもがな

などの類が多い。口頭の技巧に過ぎないが、當時においては珍しいので、大いに喝采されたらしい。併しこの作者にも、

散り散らず聞かまほしきを古里の花みてかへる人もあはなむ

といふやうな、純ないゝ氣分の作がないでもない。やはり當時の女流歌人の中では大家である。

家にありける梅の花の散りけるをよめる　つらゆき

くるとあくと目がれぬものを梅の花いつの人まに移ろひぬらむ

釋　○くるとあくと　日が暮れるといつても夜が明けるといつてもの意。「と」はとての意。○目がれぬ　目を離さずに居るをいふ。「かれ」は離るで、物の絶えるにも、盡きるにもいふ語。○人ま　人の居らぬ間。○移ろひぬ　「移ろひ」は移りの延言で、物の變化するをいふ。故に花の移るは、色の變るをいひ、散るをもいふ。「ぬ」は現在完了の助動詞。

大意　庭前の梅なので、日が暮れるといつては見、夜が明けるといつては見して、暫しの目放しもせぬものを、この梅の花は何時のわが居らぬ間に、かうは散つてしまつたのだらう。

【評】「暮る」は夜のはじめをいつて終夜を知らせ、「明く」は一日のはじめをいつて終日を知らせた。かう終日終夜をかけて目離れぬと、仰山に誇張したのは、「いつの人まに」の疑問を強める手段である。「人まに」の人は誰れをも指すが、上句の響を承けたのだから、やはり自身の事である。すべて吾人の居る時は他の乗ずべき隙がないといふ定理をおさへて、梅の花は何時の人間を覗つて、かう移つたのだらうと、梅花が何か意あつて移ろひもしたやうに詰つたのを、この奇警な點とする。庭前の梅花に對して、恰好の地歩を占め得た構想である。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　よみ人しらず

梅が香を袖に移してとゞめてば春は過ぐともかたみならまし

【解】○とゞめてば　留めて置いたらばの意。○かたみ　記念となる物。○まし　ましをの意。

大意　梅の香を袖へ染ませて留めて置いたらば、春はよしや過ぎても、其の香が春の形見であるだらうに、然しさうする手段もないので殘念な。

【評】散りがての梅に對した感想である。散るのはいかにも惜しいが、禁めようもないので、せめて其の匂だけでも留めて置いて形見としたいと思ふが、それさへむづかしいと歎いてゐる。四句、直叙すれば花は散るともとあるべき處なのを轉義して、「春は過ぐとも」と一層誇張したので、婉曲な味ひがある。二三の句、六帖に袖にこき入れてとめたらばとあるは勿論、結句、新撰萬葉にとおもはむとあるも採り難い。

素性法師

散ると見てあるべきものを梅のはなうたて匂の袖にとまれる

釋 ○これも、前と同時の歌である。○うたて　うたゝの轉語。時と處とに依つて、少しづゝその意義が違ふ。ここは口語の厄介なの意に近い。

大意 梅の花はあ、散るわとばかり、つい一通りに見て置かうものを、厄介にも梅の香が、何時か袖に留つて居るわ。

評 これではよそ〳〵しく、散るとばかり見すましては居られぬの餘意がある。梅花の散る木陰に立ちさまよつての作である。「散ると見てあるべき」は梅花に冷淡なやうだが、實は熱中の餘りに放つた激語で、散るのは甚だ殘念だが止めようもないので、據なく思ひ諦めて、冷眼に看過さうと勗めた態度から出た語である事は、下句の意を繹ぬればわからう。散るを惜む意を點出したい爲に、まづ香が袖にとまつて術ない思をする由をいつたのは、客を借りて主を形する筆法で、婉曲である。「うたて」の一語おき得て宜しい。さて梅の散り出す時は、その香氣の最もはげしいのが事實である。

題しらず　　　　よみ人しらず

ちりぬとも香をだに殘せ梅の花こひしき時のおもひ出にせむ

釋 ○おもひ出　思ひ出しぐさ。

大意 假令花は散つてしまふとも、せめて香だけは跡に殘しておくれ、梅の花よ、すれば後にお前の戀しい時の心を慰める思ひ出し草にしよう。

評 散り方の梅花に對しての注文で、前首と其の意が反對である。注文に應じて梅が香を殘しとゞめるものでもないが、そんな理性を忘れたのが歌の趣である。

人の家に植ゑたりける櫻の花の、咲きそめたりけるを見てよめる　つらゆき

ことしより春しりそむる櫻花ちるといふ事はならはざらなむ

釋 ○人の家に　或人の家にの意。○春しりそむる　花の咲き初めて、はじめて春を知るをいふ。○なむ　希望の辭。

大意 今年から春を知り初めて、はじめて咲くこの櫻の花よ、すべての花は咲けば散るが、どうぞその散るといふ事だけは見倣はないでもらひたい。

評 これは家主への挨拶を兼ねて、行末を祝ふ意で詠んだのだらう。咲けば散るのが花の常態であることは意識しながら、尚この不可能の希望を有つた處に、痴呆の詩味が湧いてくる。すべて擬人に仕立てゝ、花咲きそむるといふ處をも、轉義して「春知り初むる」といつた。一首の姿優麗で、その聲調がさわやかに、その立意が幼いやうで底に巧のある、これこの作者の特技である。

三四の句、六帖に梅の花ちるてふことはとあるが、梅の花は櫻の花ほど散り際の脆い物でないから、散るといふ觀念を喚び起す力が淺い。又てふも「といふ」に比すれば纖弱である。爰は正格に字餘りにした方が、「散る」の意も強く表現されて、調が協つてくる。

契沖の説に「此の歌より次の巻に貫之の『水なき空に浪ぞ立ちける』といふ歌までは櫻の花なり。よりて歌に櫻とよめり。櫻と詠まぬ歌は詞書に櫻といへり。その中にこの巻には櫻の咲ける程をいひ、次の巻は散るを詠めり。平城天皇の御歌より後、貫之の『み山かくれの花を見ましや』といふまでは、詞書にも櫻といはず、歌にも只花とのみ詠みたれば、よろづの花を詠めり。後に花といひては櫻ぞと心得る類にはかはれり」とある。

題しらず　　　　　　　　　　よみ人しらず

山高み人もすさめぬさくら花いたくなわびそ我れ見はやさむ

又は、里遠み人もすさめぬ山櫻

釋 ○高み　高さに、高くてなどの意。○人もすさめぬ　世間の人も賞翫せぬ。「すさむ」は進むの意から出た語。「も」は歎辭。○いたくなわびそ　ひどく辛氣に思ふな。○見はやさむ　見て賞翫せうの意。「はやす」は榮えしむる意で、もてはやすのはやすと同じい。

大意 山が格別に高いので、花見の人も來て賞翫せぬこの櫻の花よ、人が賞翫せぬからとて、大してくよくよ思ふなよ、なぜといふに、この私が見はやして遣らうわ。

評 高峰の花は等閑に人が多く看過する。作者の基想はそこにある。そもそも賞翫されぬのは人情嬉しくない事なので、櫻の心にも佗しがるものとして、擬人して「いたくなわびそ」と抑へ、さて「我れ見はやさむ」と揚げて慰めた。その同情心の懐かしさよ。四句と五句との應接、姿致あり曲折あつて、取りどりに面白い。左註に「又は」として擧げたその上句は、聊か理をいひ過した傾があつて、本行のには劣つてゐる。すべてよ

み人しらずの歌は多く古歌だから、さまぐに傳誦されたのがあるので、それを捨てずに擧げたのだらう。

○

やまざくらわが見にくれば春霞峰にも尾にもたちかくしつつ

釋 ○やまざくら　山の櫻をいふ。櫻の一種の名稱ではない。○峰にも尾にも　峰は山の高く尖つた處をいひ、尾は峰通りから麓まで長く引きはへた處をいふ。よつて尾ノ上といふ時には自然峰の事になるが、尾とは別である。

大意 山の櫻を自分がかう見に來ると、あの春霞が高い峰にも低い尾にも、只もう花を立ちては隱しくするわい、さても意地の惡い霞であることよ。

評 「見にくれば花を立ち隱しつゝ」と二句から結句へ續く文法で、霞の意地惡い狀が、おのづから此の間に表現されてゐる。そして間接に櫻が大事の物と秘藏された趣が見える。殊に「わが」の一語に、人にはとにかく、自分には格別に意地惡くするやうに思ひ取つた稚態が見えて面白い。又「峰にも尾にも」と場所を一々指示したので、斷又續といふやうに、むらくにかゝつた霞の景氣が、目前に浮んでくる。

染殿の后（キサキ）のおまへに、花瓶に櫻の花をさゝせ給へるを見てよめる　　前のおほきおほいまうち君

年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし

釋 ○染殿の后　文德帝の皇后で、淸和帝の御母である。この作者太政大臣藤原良房公の御女で明子と申す。「染殿」は良房の邸だつたが、後この皇后のお住みなされたので、染殿の后と稱した。「前のおほきおほいまうち君」は前の太政大臣といふことだが、この前は前任の意ではない。良房の甥基經が又太政大臣となつたので、基經を後、良房を前といつたのである。○よはひ　命ある物の年の數をいふ。○老いぬ　「ぬ」は現在完了の助動詞。○しかはあれど　さうではあれど。○花をし　「し」は强辭。○物思　氣苦勞又は心配の意。

大意　年數が經てば、存外に自分の齡は老いくれたわい、これがいかにも悲しい、さうではあるが、かう立派な花をサ見れば、悲しいどころか何の心配もないわ。

評　皇后の御殿の花瓶の櫻を見て悅んだのは表面の意で、下には皇后を花に比して、この御榮華の御有樣を見れば、老の憂さを忘れて樂しいといふ譬喩歌である。大鏡の作者も「后を花に喩へ申させ給へるにこそ」と註してゐる。蓋しわが女の明子が皇后となり、東宮をも生み奉つて、榮華窮りない御樣子は、春花の匂ふが如くなので思ひ擬へたもので、定めてその花瓶の櫻は、咲きも殘らず散りも初めぬ、當に爛漫たるものだつたらう。初句「年ふれば」と冠せたのは、「齡は老いぬ」の意を强めて、慨歎の情を深める手段である。否手段ではない自然によつてくる感想である。「しかはあれど」と思ひ返してから、喜氣洋々たる調に一轉して、子女の立身出世を老後に見た親心は、どんなに嬉しかつたらうと思ひ遣られる。初句の「ば」四句の「ば」相對へて、初二の句と四五の句とを合掌させ、三句を連鎖とした篇法である。又三句の「は」の辭、四句の「し」の辭、三句結句の字餘り、句每に力量があつて、首尾に少しの弛みもないのは、恰も强弓を張つたやうである。廟廊の氣象が自然に備はつてゐる。

渚の院にて櫻を見てよめる　在原業平朝臣

世の中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし

釋 ○渚の院　河内國交野郡にあつた。文德帝の皇子惟喬親王が、常に出でまして遊ばれた處である。伊勢物語に「昔惟喬のみこと申すみこおはしましけり。山崎のあなたなる水無瀨といふ所に宮ありけり。年每の櫻の花の盛りには、其の宮へなむおはしましける。供に右馬の頭なる人を、常にゐておはしましけり。……今狩する交野の渚の院の櫻殊に面白し。……右馬の頭なる人のよめる」として、この歌を擧げてある。右馬頭とは業平の事である。土佐日記にも、渚の院の事を書いた條に、この歌を出してある。○たえて　一向に。○なかりせば　無いであらうならば。○春の心　春の人心の意。春その物の心ではない。○のどけからまし「のどけし」は穩かに悠長な貌。「まし」はましをの意。

大意　いつそ世の中に一向に櫻といふ物が無いであらうならば、結句春の人心は長閑やかであらうに、といふ意で、なまなか櫻のある故に、長閑な筈の春も、何かと心騷がしくてならぬ、といふ餘意を含めてある。

評　櫻を愛する餘りには、雨や風やが氣がかりで、心の落ち着かぬからの歎息である。決して櫻を惡んで無ければよいといふ意ではない。されど單に櫻のうへのみでは、聊か誇張に過ぎて浮華に陷る嫌がないでもないが、これは他に深意のある事で、廣蔭が「惟喬親王を櫻によそへ奉れるなるべし」といつたのは、眞相を見透した說である。それはこの親王は文德帝第一の皇子であらせられ、必ず儲君に立ち給ふべきお方なのに、外戚の紀氏に勢力がない爲、却つて藤原氏のお腹の御弟の惟仁親王（清和帝）に引き超されてしまはれた。この兩所の東宮爭

といふ名稱の野乘に貽つてゐるのを見ても、その競爭の劇甚だつたのが想像されよう。隨つてこの不利な結果を、惟喬親王はどんなに不快に思召されただらう。伊勢物語に獵にばかり耽つて居られた趣の見えるのは、恐らくは排悶遣欝の手段たるに過ぎなかつたらう。當時藤原氏の跋扈專横を憤る輩で、この親王に心を傾け奉らぬ者は無かつたと想はれる。作者業平朝臣はもとより王孫で、兄行平朝臣と共に始めて在原氏を賜はつた人なのに、在官玆に二十年、僅に五位の右馬頭であつた。眼の前に藤氏の一家一門の日に榮え、王氏の勢力の日に蹙るを見ては、何で慨たく口惜しく思はずに居られよう。されば惟喬親王の擁立を以て藤氏排斥の唯一の手段と信じ、熱心に拜趨して、其の目的を達しようと努めたものだが、事志と違つては、この親王の御不幸また察し奉るに餘りがある。とにかくにこの親王故に千々に心の碎かれるより、寧ろはじめよりこの親王がおありなさらなかつたならばこれ程まで心配はすまじといふ、せめてもの述懷であらう。富士谷御杖が「櫻は業平の關係せし二條后に比したるなるべし」といつたのは、事は差ふが、この歌の寓意の作であることを認めた點は卽ち同じい。寄託深遠で、表裏の二面の意いづれも首尾貫徹し、感慨字句に溢れ、熱情楮表を往來してゐる。三句、土佐日記に咲かざらばとある。

題しらず　　　　よみ人しらず

石はしるたきなくもがな櫻ばな手折りてもこむ見ぬ人のため

釋 ○石はしる　石上をほとばしる意で、瀧にいひ續ける語。萬葉集にはいはばしるとある。こゝも初めいはに石の字を充てゝ書いたのを、遂に「いしはしる」と訓んだものだらう。○たき　今いふ瀧は古への垂水(タルミ)で、古

への瀧は激流をいふ。水のたぎる意。○がな　は希望の辭。○手折りても　「も」は歎辭。

大意　この岩の上を逆る激流がなくてまあ欲しい事よ、すれば向岸の面白い櫻を、家に居てゝ見ぬ人の爲に家包にするように、一枝折つても來うに。

評　立派な物面白い物を見ては、見ぬ人の土產と思ひ寄るのは優しい人情で、萬葉集に、

玉津島見れども飽かずいかにしてつゝみもてゆかむ見ぬ人の爲　（卷七）

古さとのはつもみぢ葉を手折りもてけふぞわがくる見ぬ人の爲　（卷十）

多祜の浦のそこさへ匂ふ藤なみをかざしてゆかむ見ぬ人の爲　（卷十九）

など先例がある。只これは石はしる瀧が櫻の前景となつて、頗る美觀である。「なくもがな」といつても、それは實現の出來ぬ希望だから、畢竟は手折られぬので、あゝ殘念なといふ餘意が生ずる。四五句の倒置は調子の爲で、結句の終ににの辭を含めて、四句へ返して聞くがよい。とにかく古調である。

四句、六帖に手折りもてこむとあるは、調に協はない。

山のさくらをみてよめる　　そせい法師

見てのみや人にかたらむ櫻ばな手ごとに折りて家づとにせむ

釋　○見てのみや　「や」は反動辭。○家づと　土產に同じい。

大意　この見事な山の櫻の花は、只見たばかりで、戾つて人に話さうか話されはすまい、どりや手に手に澤山に折り取つていつて土產にしよう。

評 三四の朋友と春山に遊んで、思ひの外見事な盛の櫻の花に出逢つた嬉しさが躍つて見える。初二句は、三句以下の襯染である。「手毎に」とあるは、十分に多く枝を折つて、この美觀を都人士に知らせようといふ、頗る逸興に任せた逸語である。

花ざかりに、京を見やりてよめる

見渡せば柳さくらをこきまぜてみやこぞ春のにしきなりける

釋 ○こきまぜて　打ち交ぜて、入れまぜてなどいふに同じい。「こき」はすごくなどいふ意の語だが、此處では輕い接頭語。

大意 かう見渡すと、柳の青い色と櫻の白い色をまぜこぜにして、この京のけしきはサ、存外に春の錦といふ物であつたわい。

評 當時植ゑてあつた洛中の朱雀大路の柳の中に、家々の櫻の咲き交つたのを見渡したら、紅綠相參差して、さぞ春の錦と見えた事であらう。劉後村の鶯梭の詩に、

擲レ柳遷レ喬甚有レ情。交々時作二弄レ機聲一。洛陽三月春如レ錦。多少工夫織得成。

と詠じた轉句と同一の落想で面白い。又紅葉の頃は山を秋の錦と見るは常の事で、古來の歌にその例が頗る多いので、それに對へて「今は山より都の方を見渡して、春の錦は都にこそありけれといふ意を含めたること、都ぞのぞの辭にて知られたり」とある、景樹、廣蔭等の說は、細かに穿つた聞方で、よく箇中の消息を解したものである。

櫻の花のもとにて、年の老いぬることを歎きてよめる

紀　友　則

色も香も同じむかしに咲くらめど年ふる人ぞあらたまりける

釋 ○同じむかしに咲くらめど　昔の通りに同じに咲くであらうがの意。○あらたまる　昔に變るの意。新しくなる意ではない。

大意　この櫻は色も香も變りなく、昔の通りに咲くであらうが、年を取つた人はサ、櫻とは違つて、昔の若い時とは存外に變つたわい。

評　劉廷芝が代下悲二白頭一翁上の詩に、

年々歳々花相似タリ、歳々年々人不レ同ジカラ。

とある句を、そのまゝ譯したやうな作である。變る變らぬの表裏の意を、上下に對抗させて文をなした。二句、六帖に昔ながらとあるに比べれば、詞は巧である。また三句にさくらといふ語をたち入れて、所謂物名のよみ方になつてゐる。宣長がこれを叶ひ難いと非難したのは、作者の意をよく聞き取らぬからの說である。實詠ではあるが、餘にいひ過して餘韻に乏しい。

折れる櫻をよめる　つらゆき

たれしかもとめて折りつる春霞たちかくすらむ山のさくらを

釋 ○折れる　折りてあるの約。○たれしかも　誰れがまあの意。「し」は强辭。「か」は疑辭。「も」は歎辭。○とめて折りつる　「とめて」は突きとめての意。「つる」は現在完了の助動詞。○櫻を　櫻なるものを。

大意　誰れがまあ在處をつきとめて、かうも折つて來た事ぞ、さぞや霞が立ち隱すであらうと思ふ、山のこの櫻だのを。

評 花のある程の山は、おしなべて、霞み渡つてゐる頃なのだらう。櫻の折枝を見て、端なくその咲く場所に想到し、霞がわざと祕藏する物の如くに取り成して、それにも關らず折り取つて來た人は、そも誰れかと驚訝したのは、その櫻の折枝を珍重する爲の幻化手段である。かう折枝を極力珍重する所以は、それが人の贈物であるので、この贈主への挨拶の詞かも知れない。

歌奉れと仰せられし時よみて奉れる

さくら花咲きにけらしもあしひきの山のかひより見ゆる白雲

釋 ○咲きにけらしも　咲いたらしいまあの意。「けらし」はけるらしの略。「も」は歎辭。○あしひきの　山の枕詞。山は山脚卽ち裾を長く引き延へてゐる故にいふ。靑繁樹、足引城などの說は采らない　○かひ　山と山との間をいふ。

大意　やあ櫻の花が、意外に咲いたらしいなあ、あの山の間から白い雲が見えるわ。

評 見渡しの山の端に、何時の間にか櫻の咲いたのを見付けて、意外と驚いた趣である。「山のかひ」は常に雲霧の立つ處だから、白い物を認めて雲とするは自然の聯想である。さて見るまゝに、まことの雲のたゞずまひと

も樣子が變つてゐるので、更にそれを櫻の花と認めたのは、おのづから陽春清和の彌生だからである。二句、六帖及び顯昭本にけらしなとある。「な」も歎辭である。藤原俊成は「も」の方を執し、近時の韻脚論者もその立場から、結句の終の「も」文字と同韻同字を踏んだ歌だといつたが諾け難い。それは第二句に多くァ列の開口音を使つて、聲調を花やかにすべく努めたのを、僅にこの一字のみ調子の低いォ列の音に終るといふのは、變なものと思ふ。「な」は同じ開口音だから、他音との調和も保たれて、旨く諧ふではないか。又三句を枕詞で塡めたのも、結句白雲見ゆるとあるべきを「見ゆる白雲」と倒裝したのも、つまり切迫な調を避けて、悠長和諧な調に就いたので、この歌體に協つてゐる。古來「滯りなくさわやかにいひ下したる歌」と評せられ、荻生徂徠は、花を詠める第一等とまで稱讃した。西行上人もいたくこの風を襲つたと見えて、その傑作の一の、

おしなべて花のさかりになりにけり山の端ごとにかゝる白雲

といふ歌は、全くこれを藍本としたのである。但流石の貫之も囊中の物を探るやうに、無造作にかうした秀逸を得たのではあるまい。

山のかひたなびき渡る白雲はとほき櫻の見ゆるなりけり

とあるは全く同案で、この原作らしいが、ひどく詞の續け柄が劣つてゐる。推敲の忽せに出來ないよい一例である。「貫之は一首の歌を廿日も案じた」と俊賴口傳にあるのは、こんな時の事かも知れない。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた　　友則

み吉野の山べに咲けるさくら花雪かとのみぞあやまたれける

釋 ○山べ　山邊。

大意　外の土地ではさもないが、雪に名高い吉野の山のあたりに、咲いてゐる櫻の花は、とんと降り積つた雪かと、一途に見違へられたわい。

評 西行上人の歌に、

吉野山櫻が枝に雪ちりて花おそげなる年にもあるかな

とも詠まれて、吉野は山深い處なので、遲くまでも雪が降つて、花の咲くにさし合ふやうな事もあるから、山の端に花の白いのを見ても、また雪かと思ひ惑ふは自然である。後撰集に、

み吉野の吉野の山のさくら花白雲とのみ見えまがひつゝ

雪と雲との相違だけで、同想同型である。いづれが後出か。但「見えまがひつゝ」よりは、「あやまたれける」の方が強い辭樣で、印象が鮮やかである。

やよひにうるふ月のありける年よみける　伊勢

さくら花春くはゝれる年だにも人のこゝろにあかれやはせぬ

釋 ○やよひに云々　「やよひ」は彌生(イヤオヒ)の義で、三月の異名。「うるふ月」とは太陰暦では月日の閏餘を一月に立てて年中に配した、これを閏月といふ。爰では三月に閏があつて二箇月續いたのである。○春くはゝれる年　常よりは一月多くて春の日數の増加した年の意。○あかれやはせぬ　なぜに厭かれはせぬぞ、厭かれさうな物だにの意。「やは」は反動辭。「ぬ」は否定の助動辭。

大意 これ櫻の花よ、せめて春の一月加はつて長くなつた今年なりとも、人の心にはなぜ厭かれはせぬぞ、厭かれさうなものであるに。

評 閏月のあるを春が增加したと見るのは、このお許の口吻である。さて春が殖えたので、櫻も例年よりは長く咲くものゝやうに取り成した稚氣呆氣の巧は、陸侍郎の詩に、

今年閏在㆓春三月㆒、剩看金陵一月花。

とあるに似てゐる。恐らくこの句を飜案して、更に一層の趣向を構へ出したかも知れない。すべて物は見馴れれば厭がくるのが人情なので、まづ櫻の花よと呼び掛けて、せめて春長の今年なりとも見厭かれてよい筈を何故厭かれぬぞと、わが櫻に對する熱愛を、櫻を主として逆寫したのは、面白い手法である。何故にの語を上下の句間に補足して聞く格である。

三句、顯註にことしだにともある。結句、俊惠の説に、父俊頼の本にあかれやはするとあつたとあるが、するでは平凡で、この歌の折角の面白みを無効にしてしまふ。

櫻の花のさかりに、久しく訪はざりける人の來たりける
時によみける　　よみ人しらず

あだなりと名にこそ立てれ櫻ばな年にまれなる人も待ちけり

解 ○櫻の花云々　久しく來なかつた人が、たま〳〵花の盛に來たのである。伊勢物語の詞に「年頃音づれざりける人の、櫻の盛に見に來たりければ、あるじ」とあつて、この歌を擧げてある。○あだ　はかなくて頼み難

いのにいふ。答の義。人のうへでは薄情の意に用ゐる。〇名にこそ立てれ 「名に立つ」は評判になること。「立てれ」は立つてをるの意。〇年にまれなる 年内に稀な。〇人も 人さへもの意。

大意 櫻の花は散り易く仇だといふ評判にこそなつて居ますれ、この櫻の花はどうして仇どころか、かやうに一年の内にも、たまさかでなくてはお出がない水臭い人をさへも、散らずに待つて居ますわい。

評 されば一年の内にもたまにしか來ぬ人の心の方が、遙に仇であるといふ餘意を含んでゐる。專ら二句の「こそ」といふ語勢に引き立てられた歌で、三句の「櫻花」は上下に通じて活いてゐる。結句は殊に簡約な辭樣で、含蓄の味ひが饒い。この集の詞書も伊勢物語のも、この歌主は男女いづれとも判然しないが、前に仇なといふ評判のたつた事があつて、男の中絶をした女だらう。けれどもそれは寃名で、今に外心もなく獨住して居たので、自分の貞操を櫻に託して男に誇つた。

返し　　業平朝臣

今日來ずはあすは雪とぞふりなまし消えずはありとも花と見ましや

釋 〇返し 前の返歌である。萬葉集には和歌又は答歌と書いて、こたへうたと讀んだ。〇雪とぞふりなまし 雪の如く降つて散つてしまはう。〇消えずはありとも 消え失せずして存して居るとも。〇見ましや 「や」は反動辭。

大意 私が今日尋ねて來たればこそ、この櫻を花とは見ますれ、若し今日來ぬならば、明日はもう雪のやうにす散つてしまひませうわ。それもまことの雪でないから、假令消えずにあるとしても、もとの花とは見えませう

か、否雪とより外は見えはしますまい。

評 さすれば今日私が來たのは花の爲の僥倖で、花は固より評判の通りの仇な物で、只散つて雪とならぬうちに訪ね來た私が、えらい親切なのさといふ餘意を含めてある。懸歌が人よりは花の方が仇でない、と云つたのを又打ち返したので、底の意は、其方は評判の浮氣者だから、たまく餘所に心を移さぬうちに訪ねて來ればこそ、そんな事もいはれるが、今おくれたらば、屹度他人の持物となつて居らう、その場合にはさて座すとも、ものやうな私の懐かしい人と見られようかいと、却つて自分が早く來たからだと、手柄顔に誇つてゐる。贈答いづれも筆路迂回、情思曲折して、諷喩の妙を極めてゐる。但懸歌はおのづから情眞の語で、工夫を求めずに自然に工である。答歌となると、巧に口舌を飜弄して、一時をいひ勝たうと試みたもので、風骨感慨が聊か後れてゐる。

熊谷直好の説に「贈答の歌の詞書にその名をいはず、人とのみ書けるは、皆その詠人知られざるものなり。さればこの歌も前後の歌とひとしく、よみ人しらずなりけむを、恐らくは後人伊勢物語によりて、業平の名を加へたるなるべし。さらではこの詞書『櫻の花の盛に業平朝臣の云々』となくては、餘の例に違へり」とあるは全く確説である。

題しらず　よみ人しらず

ちりぬれば戀ふれどしるしなき物を今日こそ櫻折らば折りてめ

釋 ○ちりぬれば　散つてしまへば。「ぬれ」は現在完了の助動辭。○しるし　驗、詮、益などの意。

大意　散り果てゝからは、如何に見たく思つてもその詮もないものなのを、今までは惜しくて折らなかつたが、かう散りさうでは、早く今日の内にこそ、この櫻は思ひ切つて、折るならば折らうわサ。

評　折つて花瓶になりとも挿して、大事に長く賞翫しようの心構と見られる。夜の間もうしろめたい程、盛り過ぎた花に對しては、實に「今日こそ」と思ひ切らざるを得ない。されば語調が自然に迫つて表現されてゐる。又結句を景樹が「折れ〳〵といはむばかり强き語勢なり」といつたのは贊成し難い。これはやはり理のまゝに緩やかな語勢と思はれる。それは惜しくて折り難いが置けば散るので、據なく心には進まぬながら折るなら折らうと、餘義なくされた趣である。六帖に躬恒、

櫻花夜のま散りなむ後やいかにけふこそ行きて折らば折りてめ

はやゝ猥雜であるが、同意同型である。相通せて、結句のうち侘びたゆるい調子であることを味ふがよい。

○

折りとらばをしげにもあるか櫻花いざ宿かりて散るまでは見む

釋　○をしげにもあるか　惜しさうにまあ見える事よ。「か」は歎辭。○いざ　誘ひ促す意の發語。

大意　この櫻の花はあまり見事で、見捨てゝは歸りにくいから、一枝折つて行かうと思ふが、折り取らうならばいかにも勿體なささうにまあ見える事よ、それよりはこの邊に宿を借りて、この花の散るまでは是非に居て見よう。

評　路傍の盛の花に對しての作だらう。一度は折り取らうと試みたが、餘り見事なので、散るまでは宿かりて見よ

うと思ひ直したのに、花を愛する情の深さが見える。さて「宿かりて」は單なる希望だけで、實行はまる切考へてゐない、たゞ詩興の動くに任せたに過ぎない。「宿かりて」を、諸註に「花の蔭に宿りて」と解したのは早い。「かりて」は主ある時にいふ語だから、この花蔭の人の家に宿を借るのである。藤原家隆の「花の宿借せ野邊の鶯」と詠んだも、鶯を花の主と見ての歌なるを思ふがよい。「散るまでは」のはの辭妙である。是非に見ようと固く思ひ込んだ趣が、この一字によつてよく表現されてゐる。若し凡手なら、漫然ともの辭などを下しさうな處なのだ。

紀のありとも

櫻色にころもは深く染めてきむはなの散りなむ後のかたみに

【釋】○櫻色　櫻の花の如き色。櫻色といふ定まつた染色をいふのではない。○散りなむ　散つてしまうであらうの意。○かたみ　記念の物をいふ。

大意　まことの花でなくとも、着物は今から櫻色によく〳〵染めて着ようと思ふ、それは追付け花が散つてしまうであらう、その後の形見にサ。

【評】せめて花の色に似た着物を着ても慰まうといふ。全く櫻の熱愛者の言である。衣をといはず「衣は」といつたのは、他の物はともあれせめてこの着物は、と差別した意義をもつ。

櫻の花の咲けりけるを見に、まうできたりける人によみておくりける　　みつね

わが宿の花見がてらにくる人は散りなむ後ぞこひしかるべき

釋 ○櫻の花の云々　躬恒の家の櫻の花の咲き出したのを見に來た人が、立ち歸つて後に詠んで贈つた歌との意。○まうで　參出を音便にいつたので、もとは尊い所へ行くをいふ語であるが、この時代には單に行くの意に輕く用ゐられた。○花見がてら　花を見かたぐ。

大意　私の庭の花を見物がてらに尋ねて來る人は、格別主人の自分を親切に思つての事でないから、目的の花のある間はとにかく、追付け花が散つてしまう後にはサ、必ずその人が來なくなつて、いかにも戀しくなりさうな。

評　躬恒の家の櫻の殊に見事なものと聞き及んで、常はさまで親しい間柄でもない人が、花見がてら音づれたのだらう。白樂天の詩に、

逢ニ見人家ノ花一便入、不レ論ニ貴賤與ニ親疎一。

はや、これに庶幾い。主とする目的は花にあつて、主人の躬恒は旁だから、一旦花が散つたら再び來ることは覺束ない。いやそれ程むづかしい事ではなく、只當座の逸興にまかせての來訪なのを、わざとかう理詰に角を立て、想像を描き、再び逢はれまいの意を婉曲に「戀しかるべき」といひ構へ、今からそれが氣懸りになるやうに、わざと戯れて諷託したのである。もとより風流韻事に屬する事で、花見がてらに來るのも、又歌詠みて贈るのも極くの打解け業なのを、或人が其の人を腹ぎたない浮薄な人物のやうに解釋して、「花見がてらに來たるを心に憤りて詠みて贈れるなるべし」と釋したのは甚しい横入で、歌を解き殺すものである。又家集に、

わがやどの花のたよりに訪ふ人は散りなむ後にまことおもはむ

とあるは等類の歌である。恐らくは推敲洗錬の結果がこの集の歌となつたのだらう。四句の「ぞ」の辭に力があつて、花の咲いてゐる間はとにかくの餘意を生ずる。和歌十體といふものには、餘情の歌としてこれを擧げてある。蓋し諷詠は成るべく婉曲を旨とする、婉曲なれば含蓄あり、含蓄あれば餘情がおのづから生ずる。さてはこの歌の佳作である事はいふまでもなからう。

亭子院の歌合の時よめる　　伊勢

見る人もなき山ざとのさくら花ほかの散りなむ後ぞ咲かまし

釋 ○亭子院　拾芥抄に「七條坊門の北南、西洞院の西二町、寛平法皇の御所、元は東七條后溫子家」とある。この集に亭子院とあるは宇多帝を申すので、帝が御讓位の後、亭子院を仙洞御所となされた時の歌合をいふ。この歌合は延喜十三年の事で、この集奏覽以後の事なのに、春部下にもこの歌合の歌が二首あるのは、後から追加したものだらう。この歌は歌合の歌ではなく、その折序に詠んだのである。

大意　どうせ見はやす人もない山里のこの櫻は、いつそよそ外の櫻が悉く散つてしまうその後にサ咲かうものを、さすれば外に花もない故、否でも遠方からもわざ〳〵人が見に來て、少しは賞翫もされよう。

評　山家の花の見る人もなくて徒に咲き散る事を憐み惜んで、かうせよと櫻に對つて敎へた口氣である。結句「咲かまし」の語調がいかにも弱く力なげなのに、衰へきつたその現境があり〳〵と見え、就いては聊かでも優つた方を希ふ意が籠つて、なまじひに早く咲いてもてはやされぬよりは、面白い事ではないが、人も來て見ようと思へば、後れて咲いたがまだましだといふ意に聞える。そも〳〵伊勢は宇多帝の御鍾愛を承けて、寛平の間

更衣となり、遂に皇子を誕み奉つて御息所とも稱されたのを、後には新人の爲に恩寵を奪はれたのだらう。延喜の御代の頃には大に零落して窮乏した趣は、今昔物語にも見え、又この集の雜部下にも「家を賣りて詠める」と詞書があつて「飛鳥川淵にもあらぬわが宿もせにかはりゆく物にぞありける」の一詠があるのを思ひ合はせると、自然わが身の上の事をば下に歎いて、外のお后方のお寵愛の衰へた時分に宮仕すればよかつたのにと、悔恨のあまり、こんな歌も出來たものであらう。

古今和歌集卷第二

春歌下

題しらず　　　　　　　　よみ人しらず

春がすみたなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく

【釋】○たなびく　靡くこと。「た」は接頭語。○うつろはむとや　散らうとてか。「や」は疑辭。

大意　見るも長閑に霞のたな引く春山の櫻の花は、もう散らうといふのか、その色が追々白けて變つて行くわ。

【評】遠山の櫻の早くも白了して色も艷も褪めてゆくのは、まことに今も風吹けば散らうとする氣色である。詩境平凡で感興も淺薄なやうだが、「變りゆく」が時間をもつので、如何にも櫻の花を長く諦視してゐた樣子が出てゐる。卽ち深い愛着を櫻に有つて居る人の作で、隨つて色變るに大きな焦燥を感じ、移はむことを歎惜してゐる。初二句は、只山の櫻をいはう料に、時下の景物を點綴して春山を形容したまでなので、霞に用があるのではない。されば「色かはり行く」を霞のうへにかけて見てはならない。後撰集に貫之、

白雲と見えつるものをさくら花けふは散るとや色ことになる

は、これを思つて詠んだものか。けれど詞續きつぶ〳〵として、餘情も乏しい。さてこの歌移はむとする所な

ので、散る櫻の初に置いて、次のから散ることを詠んだ歌を出してある。
六帖には作者を人丸とあるが、風調は平安初期のものである。

○

待てといふに散らでしとまるものならば何を櫻に思ひまさまし

釋 ○散らでし　「し」は強辭。○何を櫻に思ひまさまし　何物を櫻にも増して愛さうぞの意。

大意 「散るのを待て」と人のいふに、それを聞き入れて散らずにサ、とまる物であるならば、何物を櫻より増して思はうぞ、世の中にこれに越して思ふものはあるまい、いふ事を聞き入れず散つてすら、これ程めでたい櫻であるものを。

評 散りかゝつては待て暫しの猶豫もなく散るのが、櫻の一つの疵だといひ立てたのは、卽ち反襯の筆法で、この疵を除けば他は間然する處のない、無上至極のものであることに落着する。かく陽に貶して陰に揚げた表裏のいひなし、一篇の詩趣は全く此處にある。又「待て」といつたとて、はいといつてとまる花は世に一つもないが、櫻が餘にはかなく散るので、それを惜しむ熱情が逆つて、覺えず一切の理趣を沒却した所に、大きな詩味が生ずる。初句の字餘り、語調に力量があつて強く聞える。若しこれを待ててふにと約めていはうか、忽に沈痛の調を失つて、氣味は索莫となるであらう。蓋しこの歌全體の勁健な調にうち合はないからである。「何を櫻に」の辭様も、頗る豪健である。

散る花の待ててふ事を知らませば春は行くとも戀ひざらましを

とあるを引き合はせて、いかに輕重强弱の差違あるかを味つてみるがよい。

○

残りなく散るぞめでたき櫻ばなありて世の中はてのうければ

釋 ○めでたき　愛痛き(メデイタ)の約で、勝れて宜しいの意。○ありて　存在しての意。○はてのうければ　終りがわるく心憂いものなれば の意。

大意 櫻の花はあゝも屑く殘なしに散るがサ、殊に宜しいわ。それは世の中といふものは、長らへての詰りが必ず惡くいやなものであればサ。

評 「散るぞ愛でたき」とは、矯激の語を放つて、一寸人耳を愕かしたもので、かうして人の注意を惹かうとするのは、詩人の慣用手段である。固より散らぬに越した事はないが、到底望み得べき事でもないからと、第一義は斷念して、寧ろその散るを扶けて、不本意ながら第二義に滿足の意を表さうと計つた。その控へ目な優しい情があはれである。老後に及んで佗びしれた人の、落花に對した述懷か。下句の力なく打ち佗びた調子が、さう思はせる。畢竟上句は下句の前提、下句は上句の說明である。悲觀的の理趣を基礎とした作ではあるが、初二句が平凡でないので、詩趣が動く。

この歌四五三一二と句を次第して見ると、早くわかる。四五の句世の中ありてはてのうければと續くのが正叙であるが、「ありて世の中」と倒裝したので諧調となつた。上の「櫻花咲きにけらしも」の歌の結句の「見ゆる白雲」の倒裝と同調である。伊勢物語に、

ちればこそいとゞ櫻はめでたけれうき世になにか久しかるべき
類想ではあるが、それよりも一歩踏み込んだ感じのものである。さて前の歌は待てといつても止まずに散るが疵だといひ、これはその殘なく散るが勝れた處だといふ。かう反對の意の歌を竝べて擧げたのが、撰者の注意を拂つた點である。

○

この里に旅寢しぬべしさくら花ちりのまがひに家路わすれて

譯 ○旅寢　眞の旅行でなくても、一夜でも他に宿泊すれば、古へはそれを旅寢といつた。○しぬべし　してしまひさうの意。○ちりのまがひ　散り亂るゝ其の花の紛れにの意。萬葉集卷二、同十五にも「もみぢ葉のちりのまがひに」とある。○家路　家へ歸る路をいふ。

大意　今夜はこの里に泊つてしまひさうだわい。櫻の花が面白く散り亂れる紛れに、うか〳〵と家へ行く路をも忘れてサ。

評 都人の程遠からぬ山里に春遊を試みた者が詠んだのだらう。紅々白々歷亂として飛ぶ面白さの、見捨てては歸り兼ねて躊躇される趣を、「旅寢しぬべし」とまで誇張した。時の移るまで見惚れた樣子が想ひ遣られる。下句は白樂天の詩句の「花下忘レ歸因ニ美景ニ」の意で、花の散るが面白さに歸さを忘れた事なのを、その花の散る紛れに家へ行く路がわからなくなつたやうに、表裏に取り做した巧筆細思、まことに詩家三昧である。六帖に、
散る花に家路まどひぬこの里にわれはまれにぞ長居しにける

同巧異曲の歌ながら、措辭が婉曲でない。この語々洗錬を經て、無窮の興趣あるには及ばない。

○

うつせみの世にも似たるか花櫻さくと見しまにかつ散りにけり

【釋】○うつせみの　「世」と續くは現身(ウツシミ)の轉語で、人の一生の間をいふ。また空蟬(ウツセミ)の義として、その蟬脱(ヌケガラ)をもいふ。○世にも似たるか　「も」も「か」も歎辭。○花櫻　源氏物語幻の卷に「ほかの花は一重散りて、八重咲く花櫻盛り過ぎて樺櫻はひらけ」、貫之集に「雨ふれば色さり易き花櫻」、詞花集に「紅の薄花櫻」などあるから、色づいて花やかに咲く一種の櫻であらう。○かつ　一事の中に他事のまじるをいふ。又物の些少なのをもいふ。この場合時間の少いのにははやと釋す。此處はその意。

【大意】少壯の身もすぐに老い衰へる、この人間の身の上によく似たる事よ、花櫻は咲くわと見たうちに、はや散つてしまつたわい。

【評】無常の悲觀を主とした歌で、これは當時の一般思潮であつた。但その聲調が花やかで、歌意との調和を缺くは開口音の多い結果だらう。舊説には初句を枕詞と見て「世」を世の中の意と解してあるが、さては下句の意にやゝ親切でない。よく意釋に照し合はせて、その分寸の違ひ目を辨へられたい。

僧正遍昭に詠みておくりける　　惟喬のみこ

櫻ばな散らば散らなむ散らずとてふるさと人の來ても見なくに

釋 ○散らなむ「なむ」は希望の辭。○ふるさと人　我がもと住んでゐた土地の人をいふ。春歌上「人はいさ心も知らず云々」の條の「ふるさと」の解參看。○來ても見なくに　來てまあ見ぬのにの意。「なく」はぬの延言。

大意　この庭の櫻よ、散るならば勝手に散つて貰はう、假令散らずにゐるとても、到底あの無情な故鄕人は、お前を來ても見ぬのに、それを待つは無益な事ぞよ。

評 作者惟喬親王が出家なされて、叡山の西麓小野といふ處に住まれたのは、伊勢物語に見えて有名な事實である。さて都に住まれし頃親昵なので、遍昭をさして「故里人」とは詠まれたのである。初二句の意を案ずるに、これまでは故里人が來もするかと思ふから、散るな〳〵と花に誂へて居たを、今はと思ひ諦めた樣だから、前の歌に「折らば折りてめ」とあると同一の語意語勢で、進んで散れと許すのではない。好まぬ事ながら餘儀ないから、散るならばお前の都合次第で散れといふので、その弱く力ない調子に、うち侘びたる情が深く籠つて聞える。又「散る」といふ詞を三度までも反復したのは、伊勢物語に、

白露は消なば消えなむ消えずとも玉にぬくべき人もあらじを

と同一のいひなしで、單に聲調の諧つて、宛轉滑脫、聽感に快味を與へるばかりではない。散る、或は消ゆといふ意を强めて、主眼の語としたのである。表面は櫻に對つてわが歎意を述べてゐるのだが、其の半面には、これ程自分を待たせながらも來ぬ故鄕人を、不人情と怨む意が籠つてゐる。されば其の不人情な故鄕人と目指されて、この御歌を突き付けられた遍昭は、誠に面目次第もない事で、早速御室に拜謁すべく思ひ立つた事だらう。蓋し親王の小野の閑居は、今の大原村のうちで、都からは三里餘もある山奥で、滅多に都人などの行く處ではなかつた。賑やかな筈の正月でさへ、「つれ〴〵と物悲しくて」居られた事は、伊勢物語に見えてゐる。そのいかに寂

寞無聊を極めたかゞ想像される。そこで世にあられた頃の故舊が、しみ〴〵戀しくなる。其一人として遍昭が頗る戀しくなる。溜りかねて花に託して遍昭の來訪を促された。比興幽婉、所謂絃外の音、味外の旨あるものか。

雲林院にて、櫻の花の散りけるを見てよめる

そうく法師

櫻ちるはなのところは春ながら雪ぞふりつゝ消えがてにする

釋 ○雲林院　山城洛北紫野にあつた。今の京都市雲林院町はその故地。淳和帝の離宮であつたのを常康親王に賜ひ、親王出家の後遍昭に付囑して、花山の元慶寺の別院となされてから、天台宗の寺院となつた。作者「そうく」は承均と書く。○消えがてに　消え難さうにの意。

大意　櫻の散る花の場所は、時節は長閑な春でありながら、恰も冬の最中のやうに、雪がサ降り〳〵して、しかもそれが消えにくさうにするわ。

評　雲林院の庭園一面の花吹雪は、そゞろに冷氣骨に泌む心地がするので、猶その意を強めて、「雪ぞ降りつゝ消えがてにする」とはいつたのである。元より落花のことだから、何時までも殘つてゐるのを、雪のうへで誇張して筋を合はせた。二句、諸註に解し兼ねて、「櫻の花の散る所はといふべきを、文字餘る故に上下したり」とあるは僻說である。これは景樹、廣蔭等の說の如く、花の場所といふ意に見るべく、さては啻に一二株のみでなく、數多の花の林と知られ、隨つてその落花ははじめて、「雪ぞふりつゝ」とある風情に打ち合つてくる。貫之が歌に、

春深くなりぬと思ふをさくら花散る木の下はいまだ雪ふる

これはやうく数株ばかりの落花と聞える。その構想こそほゞ似てゐるが、風情は劣つてゐる。

櫻の花の散り侍りけるを見てよめる　そせいほうし

花散らす風のやどりはたれか知るわれに教へよゆきて怨みむ

釋 ○散り侍り　この「侍り」の敬語はないがよい。○やどり　宿所。

大意 このまゝ花を散らす風の奴の宿所は、誰れぞ知らぬかえ、知つた者あらば自分に教へてくれよ、さらばそこに往つて思ふ存分怨をいはうわ。

評 魔風一陣紅を墜し白を零す。眞にこれ無慘の極遺恨の限である。忽ちこの憎い風にもその宿所のあることに想到し、其處へ往つて怨んでやらうと思ひ寄つた、狂痴の想が頗る面白い。「誰れか知る」「われに教へよ」と、自他の相對で潤飾して、姿致を取つたものも面白い。この法師の歌體を通觀すると、父遍昭に比しては奇拔の調戯謔の想に乏しいが、必ず一節あつて巧語よく人頤を解く。溫雅清秀な點に於いては、却つて父に優つてゐるかのやうである。但この歌などは乃父の衣鉢を傳へた作と評してよからう。國史に「素性亦善二和歌一頗有二父風一」と見えたのも、その謂なきにあらずである。

雲林院にて、櫻の花をよめる　そうく法師

いざ櫻われも散りなむ一さかりありなば人にうきめ見えなむ

釋 ○この歌素性集に入り、六帖にも作者を素性としてある。契沖は「上の『櫻ちる』の歌の詞書のこれと同じさ

まなるに、間に素性の歌を挾みて又承均の歌を擧げたるはいかゞなれば、これは素性の歌なるべし」といひ、景樹は「これは由性法師の歌にて、承均にも素性にもあらじ」といつた。けれど承均の「櫻ちる」の歌は置處が違つてゐるし、素性集は不たしかな集であるしするから、六帖の傳のみで、これを素性のとする事は無理である。又由性も遍昭の子で雲林院別當となつた人だから、一理あるやうだが、尙その確證はなく、歌意も誰れの作としても聞えるから、まづ舊のまゝに從つておくのが穩かである。廣蔭はこのあたり順序が違つてゐるとて、(一)櫻花ちらばちらなむ　(二)一め見し君もやくると　(三)春霞なに隱すらむ　(四)たれこめて春の行方も　(五)櫻ちる花のところ　(六)花ちらす風のやどりは　(七)いざ櫻われもちりなむ　(八)枝よりも仇にちりにしと次第した。○われも散りなむ　身の行方もなくする事、卽ち退散の意を花に對へて、「われも散る」といつた。○一さかりありなば　一時の盛りがあつたならば。○うきめ　憂き目。「目」は見えの約で、難儀な目、恐ろしい目と同じい。○見え　見られの約。

大意　さあ櫻よ、お前が散るならば、自分も一所に何處へなりと退散してしまはう、花も人も一盛りがあつたならば衰へた見苦しい樣子を、人に見られようと思へばサ。

評　榮枯盛衰が世間の常道であることは、作者のつとに承知してゐた處、今更驚くにも足らぬのを、「われも散りなむ」と、其處ともなくあくがれ出ようの決心を打ち出したのは、作者がさし當つて何かいたく感激した事があつて、たま／＼落花を見て、決然覺悟した口氣である。景樹が、作者を雲林院の別當たる由性法師として、その名譽な別當職を辭して寺を開かうと思ひ立つた意と見たのは、その事實こそ遽に諾ひ難いが、眞意はよく聞き取り得た考と思はれる。初二句簡淨である。又この歌二段に切りとゝのへ、いづれも「なむ」の語でとぢめた

のは、古歌には多い例で、後世のやうにさうさし合ひとはしなかつた。

あひ知れりける人のまうで來て歸りにける後に、よみて
花にさしてつかはしける　つらゆき

一め見し君もや來ると櫻ばなけふは待ちみて散らば散らなむ

釋 ○あひ知れりける云々　知人の訪ねてきたのが、間もなく歸つてしまつた後で、花の枝に歌を書いた紙を付けて贈つたとの意。「花にさして」は花の枝に付けての意で、この時代には人の許に手紙や歌をかいてやる場合に、草木の枝や葉に付けて贈るのが、風流な所作でもあり禮でもあつた。品物でも小さな物は枝に付けた。○一め見し　一度一寸見たの意。○君もや　「もや」は萬一の事を疑つていふ辭。○待ちみて　「みて」は試みての意。

大意　これ櫻の花よ、この間一寸逢つた人が、又若し來るかと、今日一日だけは待つてみて、いよ〳〵來ぬ時にこそ、散るならばお前の勝手に散つて貰はうわ。

評 いかにも暫時で立ち歸つた人なので、景慕の情に耐へず、今も逢ひたいと下待つ心を、櫻のうへに移して、「今日は待ちみて」といつたのは、大方今日はお出でがありさうなものぞと、間接に其の來訪を促したので、措辭極めて婉曲である。かういつてよこされた人、苟も物のあはれを知つてゐる以上は、花に辜負する誇を受けるのも心苦しいので、必ずやその日を過さず再び來訪したことであらう。ましてやその贈つた花が散り方ででもあらうなら、片時も猶豫が出來ぬ譯である。「散らば散らなむ」の辭樣については、上の「櫻花ちらばちらなむ」の歌の條を參照ありたい。

山のさくらを見てよめる

春霞なにかくすらむさくら花散るまをだにも見るべきものを

釋 ○なに　口語のなぜに同じい。

大意　山の櫻の花を春の霞が、あのやうになぜ隱すのであらう、それは見事な盛りの間はとにかく、せめて末になつたその散る間だけでも見てありたいものを、それも霞に遮られて見えぬのがつらい。

評　「盛りを見たいなどいふ贅澤沙汰ではなく、せめて見榮もなくなつた散る間をなりともといふ消極的の所望にすら、猶隱して見せぬ霞には、誠に意地が惡いの一言を呈するより外はあるまい。かういひ落すのがこの歌の手で、僅に「なに」の一冷語を下して、この意が一首に波及活動してゐる。

藤原のよるかの朝臣

心地そこなひて煩ひける時に、風にあたらじとておろしこめてのみ侍りけるあひだに、折れる櫻の散り方になれりけるを見てよめる

垂れこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻も移ろひにけり

釋 ○心地そこなひて云々　氣分が惡くて惱んでゐた時、身熱があるので風に當るまいと思つて、簾や几帳などを下して引き籠つてのみ居た間に、折つて花瓶に挿しておいた櫻が、はや咲き過ぎて散り方になつてゐたのを見てよんだ歌との意。○垂れこめて　簾や帳帷を垂れて内を籠らせての意。○春のゆくへ　春の暮れ行く方。

大意　自分は病氣ゆゑに、垂れ籠めて引き籠つてのみゐて、春の過ぎゆく方も一向知らぬ間に、豫てより咲いた

ら見ようと、折角樂みに待つてゐた櫻さへも、早このやうに散り方になつてしまつたわい。

【評】病氣のやゝ輕快を覺えた折か、久し振に垂れ籠めた帳などを掲げさせると、帳外にさし置かせた花瓶の櫻が、はや素枯れになつたのを見て、病間の日數の程を打ち驚いたのである。但その端的の感じなら、まづ目に觸れた櫻の移ろふ事を先にし、その感想たる春の行方も知らぬ意を後にことわつて、倒句法を用ひるのが、その驚愕の意を表現する自然の叙法だが、これは一旦思ひ鎭めてさて思索したのだから、風情の寄つて來るまゝに、正叙法を用ひたのである。「待ちし」の一語を添へて、殊に垂れ籠めた日數の長かつた意を強めてあるのは巧妙である。思ふにその折枝は蕾のうちから挿した物であらう。又二句の終の「も」の辭は、春の行方のみならず、何事をも覺えなかつた意を含み、四句の終の「も」の辭は、病み付いた頃既に咲いてゐた餘所の櫻の移ろふは無論の事とした意に聞えるのは、上の強い語勢に押されて、これに力が入るからである。針灸藥餌の間にあたら三春の歡を空しくする、眞に凄婉の極である。

東宮の雅院にて、櫻の花のみかは水に散りて流れけるを
見てよめる　すがのゝ高世

枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水の泡とこそなれ

【釋】○東宮の雅院　大内裏待賢門(中御門)より北、壬生の東にあつた。東宮の御元服の座を設け、その饗宴も行はれる所である。常は東宮の音樂學問等を習ひ給ふ所。○みかは水　禁中の殿舍の砌を流れる水で、此處は雅院の下水をいふ。

大意 枝からもはかなく散つてしまつた櫻の花の事だから、下へ落ちてもやはり、脆い水の沫とさなるわ、他の物とはならずに。

評 さても花は何處まではかない物ぞといふ餘意を含んでゐる。上下の「も」の辭相呼應して、その韻遠ながく味ひが深い。落花點々水に貼して浮んだのが、恰も水沫のやうに見えるのを、水の沫と變化してしまつたと斷言した所に、痴呆の巧がある。

櫻の花の散りけるをよめる　　つらゆき

ことならば咲かずやはあらぬ櫻花見るわれさへにしづ心なし

釋 ○ことならば　かくとならばの意。かくの約「こ」となる。顯昭、久老、守部、宣長、景樹、井上文雄諸家の說中、景樹、文雄の說を採つた。雅語譯解に「トテモソノ位ナラ」と譯したのは意が近い。○咲かずやはあらぬ　なぜに咲かずには居らぬかいの意。○さへ　添ひ加はる意の辭。○しづ心　靜かな心。

大意 櫻の花は、とてもこのやうに早く散る程ならば、いつそ最初より咲かずにあればよいものを、何故咲かずには居ぬぞ、氣ぜわしく散る櫻の花を見て居る自分までが、そはそはして落ち着いた心もないわ。

評 「咲かずやはあらぬ」と、嚴しく花を談じ付けたのは、愛惜の情の餘りに出た激語で、蓋し反映の筆法である。上の業平朝臣の、

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

の歌に似寄つた作で、一層核實を欲したが、彼れは天工、これは人爲、比較するとそこに雲泥の差を生ずる。

「櫻の如く散るものはなし」と人のいひければよめる

さくら花とく散りぬとも思ほえず人のこゝろぞ風も吹きあへぬ

釋 ○櫻の如く散る　櫻の如く疾く散るの意。○散りぬ　散つてしまふ。○思ほえず　思はれず。○吹きあへぬ　吹かうとして吹く間もない。

大意 自分にはさう櫻の花が早く散つてしまふとも思はれぬわ、それといふは、櫻の花はまだ風の吹くを待つてから散るのを、人の心はサ早く移り變る物で、風の吹く間もないわ。

評 されば人心は取り分け仇な物ぞといふ餘意を含めて、或人の詞を基礎に、層一層の樓閣を築いた。「ぞ」の辭櫻の花に對つて、人の心をば強く指斥した意となる。「風も吹きあへぬ」は、變ることの早さをいはうとて、花の縁語で筋を合はせたものである。げに頼み難く變り易く、飛鳥川の淵瀬にも喩へ來つた人心だから、それを深く慣つての作である事は勿論であるが、詞書に「人の」とあるその人は、或は作者の愛人などで、この頃心變りしたらしい女かも知れない。するとその情況が相照映して、一段の感愴が深まる。白居易の太行路の詩に、

太行之路能摧レ車、若比二君心一是坦途、巫峽之水能覆レ舟、若比二君心一是安流。

と、その着想の動機を同じうしてゐる。

さくらの花の散るをよめる　きの友則

ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

【釋】○ひさかたの　天の枕詞であるが、轉じては日、月、雨、雲、星など、すべて天象の物の枕詞に用ひられる。此處では日の光と續く意なのを、略して直に「光」にかけた。○ひかりのどけき春の日に　日の光のゆつたりとして麗らかな春の日であるにの意。「春の日」の日は時節の意で、太陽の事ではない。「に」はなるにの意。

【大意】大空の日の光のゆつたりとした春の日であるのに、何故に花がこのやうに落着き心もなく、そはそはとせわしく散るのであらうぞ。

【評】初句に枕詞を置いたのも、三句まで一息に調べ下したのも、調をのどやかにする爲めの手段である。又三句の「に」と結句の「らむ」との呼應で、その間に何故にといふ疑問の意を生ずる。但これを詞のうへに顯さぬのは、大いに理由のある事で、作者の商量を費した處と思はれる。それは何故になど難詰的の言語を用ひる時は、意調が激して、平和な一首の仕立を害するからである。「花の」の「の」の辭もまた、音調を緩和してゐる。畢竟靜中の動を認めたのが趣向で、しづ心なく散る花によつて、いよいよ春の日の長閑けく靜な感じが反映される。語勢一つの迫つた處なくなだらかなうへ、聲調また滑らかで、すべて暢びのびとした姿なのは、よく歌意と相協つてゐる。この集中の絶唱で、神品に入るものであらう。二句、六帖に光さやけきとあるはわるい。

春宮(トウグウ)のたちはきの陣(ヂン)にて、櫻の花の散るをよめる

藤原のよしかぜ

はる風は花のあたりをよきて吹け心づからやうつらふと見む

釋 ○春宮のたちはきの陣　「たちはき」は太刀佩の義。延喜式の春宮式に「帶刀舍人(タチハキトネリ)三十人、分配侍衞(ス)」とあつて、春宮御警衞の武官である。その帶刀等の兵仗を帶して陣列する詰所を、帶刀の陣といふ。○あたり　近邊。○よきて　口語のよけてに同じい。○心づから　心自から、卽ち心がらの意。○見む　試みむの意。

大意　春風お前は、咲く花の近邊をばよけて吹けよ、それは外でもない、風に當らなくても、若し花は自分の心からひとりで散るものかと、ためして見ようと思ふ故に。

評 よもや櫻は心がら散りはすまいの餘意がある。風に散る花を見て、その風に誂へて見たのは、蓋し落花を惜む情の現れで、萬千に心を碎く趣が出て來る。かやうの擬人は例の事だがやはり面白い。

さくらの散るをよめる　　凡河内躬恒

雪とのみふるだにあるを櫻ばないかに散れとか風の吹くらむ

釋 ○雪とのみふるだにあるを　雪のやうにひたすら降るのさへ惜しくあるものをの意。○いかに散れとか　どのやうに烈しく散れといつてか。

大意　櫻の花は風の吹かぬ時にも、雪のやうにひたすら散るが、それさへ以て惜しくあるものを、又この上どのやうに烈しく散れといつて、かうも風が吹くのであらうか。

評 落花を形容して雪に譬へ、その緣で散ることを「降る」といひ換へて、下の「散れ」とあるにさし合ふを避けた。又「のみ」の辭に花の頻に散る狀をめぐらし、「いかに散れとか」に吹き添ふ風の無慘なさまと、これまでは風がなくても雪とのみ散つた趣とを知らせたなど、作者が彫蟲の技に長けたのが見られる。景樹が「心面白く詞うる

はしく調高くなつかしきは、勝れたる歌なるべし」と大いに賞讃したのは、稍好む所に僻した嫌はあるが、一應さうした面影もあつて、手のないやうで手のあるのが、この特色である。

比叡にのぼりて、歸りまうで來てよめる　つらゆき

山高み見つゝわがこしさくら花風はこゝろにまかすべらなり

釋　○比叡に云々　比叡は天台宗の大本山延暦寺のある比叡山で、山城國愛宕郡にある。「比叡にのぼる」といへば延暦寺に參詣した事になる。「まうで」は添へた詞。○見つゝわがこし　見ながら自分が來たの意。

大意　山が高いので花のそばには行かず、殘念ながら餘所に見ながら、自分が歸つて來た其の櫻の花を、風は自由に散らしなどして、心に任せさうな樣子であるな。

評　「わが」に對へた「風は」のはの辭の力あるに、大いに風を羨望した餘意を生ずる。又初二句の間に、心に任するならば一枝折りもしたい意が隱然と見える。又上句の「見つゝわがこし」は卽ちわが心に任せなかつた事だから、それに對へて擬人して、風の花を吹き散らす事を、風の心にまかすと云つた。延暦寺の根本中堂に詣でて、四明の峰頂などに咲いた櫻を望見したのを、歸つて後思ひやつた作らしい。花に對しての愛惜が根強くあらはれてゐる。廣陵が「櫻花は寺の稚兒に、風は山法師に喩ふ、貫之參詣して稚兒を見て手折らまほしく思ひたれど、さはなり難きを山高みといひ、止むを得ずよそに見てこしを、かの山法師は心に任すべらなりと羨めるなり」といつたのは、面白過ぎて面白くない。

題しらず　　一本　大友くろぬし

はる雨のふるはなみだかさくら花散るを惜まぬ人しなければ

釋 ○作者の名の肩に一本とあるは、もと「よみ人しらず」の歌だつたのを、一本にこの署名があつたので書き入れたものか。旣に六帖にはこの作者を黑主としてある。又黑主の氏を大伴と書くは誤である。又思ふに、もとこゝに署名も何も無かつたのかも知れない。すれば上の歌から續けて、貫之の歌と見るべきである。○なみだか「か」は疑辭。○人し「し」は强辭。

大意 このやうに春雨の降るは、世間の人のこぼす涙なのかしら、なぜなれば櫻の花の散ることを惜んで歎かぬ人がサ、世間に一人もないによつて。

評 自分が泣きたいほど落花を惜む情が切なので、世間の人も必ず同感と見定めて、その多くの涙が集つてかう春雨となつて降るのかといふその閑想像は、多少の詩味の搖曳を認める。

亭子院の歌合のうた　　つらゆき

さくら花ちりぬる風のなごりには水なき空になみぞ立ちける

釋 ○なごり 波殘（ナミナゴリ）の約で餘波と書き、海邊などで風の吹き止んだあとに尙立つ波をいふ。後には波でない他の物のうへでも、その本體の失せた後に、聊か其のしるしの物の存在するのをいふ。形見（カタミ）の意に近い。

大意 海邊ではなごりといつて、風が凪いでも波の立つ事あるが、櫻の花の誘はれて散つてしまう風のなごりには、海邊とは違つて、水もない空に花の浪がサ立つたわい。

評 落花を風の吹き上げ吹き下して、空中に捲き立てる狀を、白波の立つと見なして、水のある處に立つ波は不思議でもないが、水のない空に波の立つたのは珍しいと驚歎した。面白い景氣である。上にも「花なき里に花ぞ散りける」といひ、今又「水なき空に浪ぞ立ちける」といひ、又「櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ花ぞ散りける」と詠む。まづ一ふし珍しさうな奇語を案出して、さていひ落すのは紀氏の慣手段で、四五の句の應接、恰も詩の轉句と結句との應接に酷似してゐる。これも再三となつては聊か興が醒めるのみでない、其の弊や尖巧に傾いて、風格が揚らない事になる。

以上は櫻を詠んだ歌を擧げた。以下は諸木の花で櫻には限らない。

ならのみかどの御歌

故里となりにし奈良のみやこにも色はかはらず花は咲きけり

釋 ○ならのみかど　平城帝を申す。眞淵のいふ「こゝにならの御門の御歌と記したるは後人の所爲にて、もとは『題しらず、よみ人しらず』とぞありけん。さるはこの集に『つかさ位高きは歌のよしあしをも憚りていはぬ』と序にみえ、且天皇と皇后の御歌は恐みて選ばざるに、平城天皇の御歌をのみ擧ぐべきにあらず」と。しかしこの論は從ひ難い。序文に「つかさ位高きは」とあるは臣下の官職の高い者の事で、それも歌の論評だけを遠慮するとの意である。又天皇と皇后との御歌は憚りて選まぬといふも臆斷の說で、無證據である。されば本文のまゝに心得てよい。○故里　こゝは舊都の地をいふ。○奈良のみやこ　大和國の寧樂の京で、元正帝から光仁帝に至る七代の帝都である。

大意 昔の都址の地となつてしまつたこの奈良の京にも、やはり色は昔に變らないで、都であつた時の通りに花

は咲いたわ。

評 他の變り果てた物に對して「色は變らず」といひ、昔の面影もなく衰へ果てた物に對して「花は咲きけり」といつた。「は」の辭の深味ある事に注意するがよい。これを疊用したのは、いよ〳〵其の差別の意を强くする。菅三品の過二平城古京一と題した詩句に、

綠草如今麋鹿苑。紅卷定昔管絃家。

と作つた。萬事變りに變つて、淺茅が原とぞ荒れにける舊都に、昔ながらに咲き匂つた櫻を見て、今昔の感に堪へかねての御作と拜察する。殊にこの帝は奈良の舊都をいたく愛でられて、御讓位の後は平安の新都をさし措いて、そこに仙居を營まれたので、平城天皇と申し奉る程だから、御父桓武帝の平安城に遷都後、奈良の京の段々に廢頽して行くことをお歎きなされ、且は人情の舊を捨てゝ新にのみ奔る輕薄を憤慨なされて居られた折、たま〳〵櫻の花を見て、その欝勃たる感懷を寄せられたのである。御歌體奈良時代の餘風を存して、高古の風調仰ぐべく慕はしい。

初二句、六帖にいその上ふりにし奈良のとある。例の采らない。

春の歌とてよめる　　よしみねのむねさだ

花の色はかすみにこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

釋 ○春の歌とてよめる 「とて」に注意を要する。春の歌として思ふ事を詠んだとの意。以下同じ詞書あるも、皆その意で見るがよい。○春の山風　春山より吹き來る風。

大意 春の山姫が大事にして、花の色は霞の中に籠め置いて見せぬにしても、せめてその香をなりとも霞の中から竊み出して、こゝに匂はせてくれ、こりや春の山風よ。

評 この花を祕めて見せぬ主人公は、恐らくは春の女神佐保姫だらうと思ふ。おなじ擬人でも、誘へといふべきを「竊め」といひ換へたのは、この作者の風體ではあるが、只口輕に興じたのみではない。佐保姫が霞の帳のうちに花を籠め置いて、色は勿論香をも洩らすまいと、大事にうつくしみかしづく狀が、この語で反撥される。四句の一張、五句の一弛、相俟つて調が諧ふ。さて詞書のさまと歌の意とを案ずると、必ず寓意あつての作と見えた。或は身分の高い女に思ひかけたか、或は中垣を据ゑられて女の逢ひ難くなつたかの際に、その媒する女などを責めて、かの父兄は大事にして我には逢はせずとも、かの人のけはひなりとも洩らして聞かせよ、かの消息をなりとも、祕密に取り次げよといふ意で、まづ思ふ人を花に譬へ、その緣で「香をだに竊め」といひ、さて「春の山風」をばその媒の女に比したのであらう。道濟の十體に比興の部に擧げたのも、この意を看取したからである。眞淵は「詞さわやかに心をかし」と評した。かう婦人の上に關係した事柄ではあり、且法德圓滿の僧正遍昭となつての後の作でもないから、作者の名を遍昭と書かず、良岑宗貞の俗名を署したのは、撰者の注意を拂つた點である。猶宗貞の名で載せた歌が、集中雜部に二首ある。いづれも婦人に關した事である。

又この集冬の部に小野篁の歌、

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだに匂へ人の知るべく

姿も調もこれとよく似てゐる。篁は宗貞の先輩だから、篁の作を點化したものである事は勿論と思はれる。但その詞や彼れは古にして雅に、これは今めかしく花やかに、劃然としてその體格を殊にしてゐる處は、二人の生存時代の前後を語り、その特性の相違を現してゐる。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた　　素性法師

花の木も今はほり植ゑじ春立てばうつろふ色に人ならひけり

釋　○花の木　花の咲く木。○ほり植ゑじ　野山より掘つて來て植ゑまい。○うつろふ色　花の變つて行く色。

大意　花の咲く結構な木さへも、もう今は掘り取つては植ゑまい、なぜなれば、春が來て花が咲くと早くも變るその色に、人が見倣つて心を變へたわ。

評　花の頃くる約束をした人が遂に來なかつたので、散方の花の木に對して感懐を寓せたといふ趣向らしい。あれ程堅い約束をして置きながら、花の散方になるまで顔を見せぬ、これといふのも畢竟花の移ろふ色に肖（アヤカ）つたらしいから、結構な花の木でも、以來は移植しまいとまで決心した。この決心はいふまでもなく、違約者への面當になるから面白い。初句の「も」の辭、二句に應じて口語のサヘモの意に當る。新撰萬葉、拾遺集等に花の木はとあるを景樹が執したのは、全くこの「も」の意を精しく聞き得なかつた誤である。「今は」とあるは、これまで掘り植ゑた事を後悔した口氣である。又「春立てば」は花咲けばの意なのを、初句の花へのさし合もあるので、類似の意義に轉換して、旁ら露骨を避けた。又「ほり植ゑじ」を欲り植ゑじの意に解する說もあるが、この時代の用語としては僻してゐる。元來花木を掘り植ゑることは當時の習俗で、前栽は大抵野邊から掘り取つてくるし、立木でも同じこと、甚しいのは人の家のまでも掘つて來たことは、鶯宿梅の話や枕草子に見えた事實でも明瞭だから、更に異說を挿む餘地はない。拾遺集に上句「花の木はまがき近くは植ゑて見じ」（讀人しらず）とあるのは、別の歌と見てよい。

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　　　　よみ人しらず

春の色のいたり到らぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ

釋　○春の色　春の氣を漢語の春色といふ文字に就いて直譯して通はせた。○いたり至らぬ里　至る里至らぬ里の略。○咲ける咲かざる　花咲ける花咲かざる花の略。但至り至らぬの語法に從へば、咲けり、咲かざる花とあるが正しいが、この歌にさうした證本がない。

大意　天下一帶の春だから、その氣色が行き渡つた里行き渡らぬ里の分け隔てはあるまい、それを何で咲いてゐる花や、まだ咲かずにゐる花やの見えるのであらう。

評　天下一帶の春といふは一般の先入觀念、咲ける咲かざる花のあるは眼前の事實、この矛盾を扱つて、その理をはかなく疑つた痴愚の想が歌となつてゐる。つまり作者の身邊に花を見ない所から起つた着想である。別に寓意があつて、咲ける花を人に、咲かざる花を自身に比して、天に不公平はあるまいのに、何で幸不幸のある事だらうと歎じた、失意の述懷とも見られるが、詞書もない事だから、あながちに執し難い。上下の句の間に、何故にの語を挿んで聞く格である。元來たゞ春の色の到らぬ里はあらじを咲かざる花の見ゆらむといふ程の事なのを、「到らぬ」にはまづ「いたり」といひ添へ、「咲かざる」にはまづ「咲ける」といひ添へたので、反對の意に歌ひ換へ謠ひ延べ、又二三の句と四五の句とを、全然同一の語法語調で聯對させた音節合拍の間に、無盡の風味が生じて來る。初句三句の字餘り、試に一字を省いて吟じ見るがよい。必ず調迫り節短く、調子の亂れることがわからう。殊に三句は結句の七字に對へたのだから、強く剛く調べ立てないと腰が弱い、否折れさうな

恐がある。そこで字餘りを用ひ、力ある「は」の辭を下した。要するに節奏上に殊に面白味をもつた歌である。

春の歌とてよめる　　　つらゆき

三輪山をしかもかくすか春がすみ人に知られぬ花や咲くらむ

釋　○三輪山　大和國磯城郡。○しかもかくすか　さうも隱すことかの意。「か」は歎辭。

大意　春の霞が三輪の山を、あのやうにひどく立ち隱すことよ、定めし山には人に知られない祕藏の花が咲くであらうか。

評　「貴人のあたりを物もて圍ふやうに見なしたるなり」と景樹のいつた通りだ。「しかも」は何を指したかといふに霞の山を蔽ふ眼前の光景を指したのである。初二句は萬葉集卷一に、

三輪山をしかも隱すか雲だにもこゝろあらなむ隱さふべしや

とあるを、其のまゝ襲用して、雲を霞に換へた。夙く梨壺の五人以前に、紀氏の萬葉にも通じた事が知れよう。三句の「春がすみ」は初句の上にまはして見るがよい。初二句、六帖に山毎に立ちも隱すかとあるはいかゞ。

雲林院のみこのもとに花見に、北山のほとりにまかれりける時よめる　　　そせい

いざけふは春の山べにまじりなむ暮れなばなげの花の蔭かは

【釋】○雲林院のみこのもとに云々　雲林院の親王の許に花見するに、まづ北山の附近に往つた時に詠んだ歌との意。「雲林院のみこ」は上にもいつた常康親王の御事。一本「みこのともに」とあるを景樹は正しとして、「雲林院は北山より半里も隔り居れば、みこの許に北山にまかるといはれず」といつたが誤解である。雲林院の花見の前に北山方面を遊びあるいたのである。「北山」は衣笠山附近をいふので、都人の遊所として有名な處である。○山べにまじりなむ　山邊に入り込んで遊ばうの意。「まじり」は竹取物語に「野山にまじりて竹を取りつゝ」の用例と同じい。○なげ　無氣といふが語の本で、なげの情、なげのいらへなど、有るも無きも同樣な意から、等閑(なほざり)、なげやりなどの意に轉じた語。○かは　反動辭。

【大意】どりや他の日はとにかく、今日はゆるりとこの春の山邊に遊び暮さうわ、なぜといふに、もし日が暮れたなら、なげやりに見棄てられさうな、あの雲林院の花の蔭がまあ、どうして投げやりにはならぬ花の蔭だからサ。

【評】作者春の一日同志と雲林院の花見に出掛けた。春の氣分の面白さに浮かれて、「いつそ先に附近の北山におし出して、それから雲林院にまはらうではありませんか」と、人達を誘ひ立てたのである。北山に遊んでゐたのでは、長い春の日脚も傾き易い。で二の足を踏む連中も無いではなかつたらう。そこを「暮れなばなげの花の蔭かは」で、厭でも應でも同行を强いた。「けふは」は他の日に對へたので、いかにその日が興の乘つた日であるかゞわかる。「まじりなむ」に、山邊に親しみたい氣分がよく表現されてゐる。「暮れなばなげの花の陰かは」暮れたら暮れたで、又花の下伏も面白いではないかといふのである。但この花の陰は雲林院の花の陰をさしたので、何遲くなつたら雲林院に泊ればよい、それも亦一興だらうといふ。調子がかうはずんで來ては、何處まで發展するかわからない。いかにも愉快氣な調子である。北山は雲林院からすると、近くに船岡があり續いて衣笠山にわ

たつて、所在の花木はこの風流な作者等を待つてゐる。三句、顯本、奥儀抄等にまどひなむとあるを景樹は執し、「まとひは統ひの義にて團欒する事」と釋いたのは、一家言で從ひ難い。

春の歌とてよめる

いつまでか野べに心のあくがれむ花しちらずは千代もへぬべし

釋 ○あくがれ　あこがれと同語。口語の浮かれといふによく當る。○ちらずは　散らぬ時はの意。「は」の辭淸んで讀む。○千代も　「も」はさへもの意。「千代」は千年に同じい。

大意　花の面白さに、何時までこの野邊に浮かれて遊び耽つて居る事であらうか、この分では若し花が散らぬ時は、この野邊で千年でも經てしまひさうな。

評 まづ野花を愛する情の甚しくて、我ながらその際限を知らぬやうに疑ひ、次に花に浮れる入興のあらましを叙べた。卽ち上句と下句との自問自答で、花下忘レ歸の意を誇大にいひなした。「千代も」は初句の「いつまでか」といふに照應してゐる。特殊の體裁、以て結構布置の妙が會得されよう。

題しらず　よみ人しらず

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

釋 ○ありなめど　「なめ」はなむの辭の變化。○あひ見む　花の盛に會ひ見むの略。相見むの意といふ說は采ら

ない。

大意 今年に限らずいつの春でも、花の盛りはあるだらうが、その花盛りに出會ふ事は、即ち人間の壽命次第の事であつたわい。

評 その壽命は佛家の所謂泡沫夢幻で、來春までの事は測られないと思へば、洵に殘多いこの花よの餘意がある。花と命とを對比して、花よりはかない命であることを觀じた。「なりけり」はこのやうに上句を解釋し、說明する場合に用ひて、詠歎の意を表はす語であるのを、近世のにはこの用格に適はないのが折々見える。甚だ濫りである。歌は命をかけたので見ると、老人などの花に對しての感懷だらう。二句、六帖及び素性集に花の句はとあるのは穩やかでない。

○

花のごと世の常ならばすぐしてし昔はまたもかへりきなまし

釋 ○花のごと　花の如く。○世の常ならば　世が常住ならばの意。無常の反對。○すぐしてし　「てし」は重い過去の助動辭。○またも　「も」は歎辭。○まし　ましを の意。

大意 花は一旦散つても、立ち返り〳〵年々定まつてこのやうに咲くが、世の中がこの花のやうに定まつて變らぬ物ならば、自分が過して來た昔は、再びまあ立ち返つて來るだらうものをサ。しかし世の中は花のやうでないから、過した昔が返つて來ぬのが悲しい。

評 花は脆い物、はかない物と誰れしも承知した事を、「花のごと世の常ならば」と喝破したのは、上にも「殘りな

く散るぞめでたき櫻花」と詠んだのと同じ手段である。これも老人、或は昔威勢よく榮えた人の懷舊の詞だらう。

○

吹く風に誂（アツラ）へつくるものならばこの一本（ヒトモト）はよきよといはまし

釋 ○誂へつくる　注文を付けるの意。「つくる」を告ぐるの意とするのは穩かでない。○よきよ　避けよの意。○まし　ましをの意。

大意　空を吹く風に注文が出來るものならば、他の木はともかく、この花一本だけは除けて通れといはうにサ、どうもさうならぬによつて、仕やうもない。

評　庭前の花に對しての作だらう。花の語なしに、花の意のめぐつてゐるのを一ふしとする。三句「この」と指し「は」と承けたのは、強く他の諸木と差別する意なので、取り立てゝ熱心に愛翫する狀が見える。四句、六帖顯昭注等にこの一枝はとある。これは花瓶などにさした花の枝を詠んだ趣だ。眞淵は「もとは一枝とありつらむを、狹しとて後人の一本と直ししならむ」といひ、景樹も「わが物と領じて殊にもめづるこの一枝のみは世のおしなべならず、吹く風も心せよ、とはかなく願へる方感ある心地せらるゝにや」といつた。が花瓶の枝では吹く風がよく利かない。

○

まつ人もこぬもの故にうぐひすの鳴きつる花を折りてけるかな

釋 ○もの故に　ものであるからの意。場合に應じて、下に適當な詞を補つて聞くべき格である。○折りてけるかな　折つた事よなあ。

大意 待つ人も來ぬのであるから、折らずともの事だつたのを、必ず來る事と思つて、その人の御馳走にと鶯の面白く鳴いて居た、あつたら花の枝を折つてのけた事よなあ。

評 さても／＼惜しい事をしたものよの餘意がある。必ず來る約束のあつた知人への馳走に挿した花瓶の花に對して、一圖に折つた事を後悔して、「折りてけるかな」と歎じた事は、隱約の間にその來ぬ人を怨んだ意がほのめいてゐる。況んやその花が「鶯の鳴きつる」と形容してある。かうした花では、自然の愛好者たる作者の立場としては、非常な犧牲を拂つた譯で、隨つて客人に非常な好意を盡した結果になり、幽怨の意がいよ／＼深く強く反映される。功者の仕業である。「題しらず」とあるから事情は明らかでないが、恐らくはその違約した人の許に贈つた歌ではあるまいか。さう見ると意況相照して一層面白く思はれる。

二句の「故に」は、六帖にはからにとあつて、躬恒の歌である。又四句の「花」を一本に枝とあるは、凡手でもせぬ事である。

寬平の御時きさいの宮の歌合のうた　　藤原興風

さく花は千種（チグサ）ながらにあだなれど誰れかは春を恨みはてたる

釋 ○千種　いろ／＼あるをいふ。○ながらに　皆悉くの意の接尾語。○あだ　移り易く賴み難い意。○恨みはて　恨みとほしの意。

く散るぞめでたき櫻花」と詠んだのと同じ手段である。これも老人、或は昔威勢よく榮えた人の懷舊の詞だらう。

〇

吹く風に誂（アツラ）へつくるものならばこの一本（ヒトモト）はよきよといはまし

釋 〇誂へつくる　注文を付けるの意。「つくる」を告ぐるの意とするのは穩かでない。〇よきよ　避けよの意。〇まし　ましをの意。

大意 空を吹く風に注文が出來るものならば、他の木はともかく、この花一本だけは除けて通れといはうにサ、どうもさうならぬによつて、仕やうもない。

評 庭前の花に對しての作だらう。花の語なしに、花の意のめぐつてゐるのを一ふしとする。三句「この」と指し「は」と承けたのは、强く他の諸木と差別する意なので、取り立てゝ熱心に愛翫する狀が見える。四句、六帖顯昭注等に「この一枝はとある。これは花瓶などにさした花の枝を詠んだ趣だ。眞淵は「もとは一枝とありつらむを、狹しとて後人の一本と直ししならむ」といひ、景樹も「わが物と領じて殊にもめづるこの一枝のみは世のおしなべならず、吹く風も心せよ、とはかなく願へる方感ある心地せらるゝにや」といつた。が花瓶の枝では吹く風がよく利かない。

〇

まつ人もこぬものの故にうぐひすの鳴きつる花を折りてけるかな

釋 ○もの故に　ものであるからの意。場合に應じて、下に適當な詞を補つて聞くべき格である。○折りてけるかな　折つた事よなあ。

大意 待つ人も來ぬのであるから、折らずともの事だつたのを、必ず來る事と思つて、その人の御馳走にと鶯の面白く鳴いて居た、あつたら花の枝を折つてのけた事よなあ。

評 さても〳〵惜しい事をしたものよの餘意がある。必ず來る約束のあつた知人への馳走に挿した花瓶の花に對して、一圖に折つた事を後悔して、「折りてけるかな」と歎じた事は、隱約の間にその來ぬ人を怨んだ意がほのめいてゐる。況んやその花が「鶯の鳴きつる」と形容してある。かうした花では、自然の愛好者たる作者の立場としては、非常な犧牲を拂つた譯で、隨つて客人に非常な好意を盡した結果になり、幽怨の意がいよ〳〵深く強く反映される。功者の仕業である。「題しらず」とあるから事情は明らかでないが、恐らくはその違約した人の許に贈つた歌ではあるまいか。さう見ると意況相照して一層面白く思はれる。
二句の「故に」は、六帖にはからにとあつて、躬恒の歌である。又四句の「花」を一本に枝とあるは、凡手でもせぬ事である。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた　藤原興風

さく花は千種ながらにあだなれど誰れかは春を恨みはてたる

釋 ○千種　いろ〳〵あるをいふ。○ながらに　皆悉くの意の接尾語。○あだ　移り易く頼み難い意。○恨みはて　恨みとほしの意。

大意　世に春咲く花は種々ありながら、皆悉くあだな物だが、それでも誰れがまあ、その仇な花を咲かす春を恨んで見限つたぞ、やはり恨み切つた者とてはないわ。

評　思へば可笑しいの餘意がある。春風二十四番の花、一つとして仇ならぬはない。さりとて春を厭ふ者は絶えてないばかりか、却つてその來るを待ち往くを惜む。この人情の矛盾を捉へて、打擊を加へた。宣長が花を恨みはてたるの意に譯したのは誤である。こは仇なる花を咲かす春を恨む意である。理趣に渉つたのは難だが、奇警の點はある。「千種ながら」は悉くの轉義である。

この歌、素性集に入つてゐるのは謬と見ねばなるまい。初句、一本にさくら花とあるは、理が通じない。結句、新撰萬葉ににくみはてたるとある。詞が聊かなつかしくない。

○

春がすみ色のちぐさに見えつるはたなびく山のはなの影かも

釋　○これも同時同人の歌である。○色のちぐさに　霞の色がいろ〳〵に。○かも　歎辭。

大意　春の霞の色が種々さま〴〵に見えたのは、その霞のたなびく山のくさ〴〵の花の色が、霞へ映つたのかまあ。

評　しかと實境のたどり難い歌である。諸注、野山の花を見た意に輕く解き、景樹は一層演繹して、「打見渡せる山邊に色めくを、ふと花かあらぬかと目惑ひたる、とばかりの間の趣を詠めるにて、霞を取り立てゝいふも、景色につけるいひなしなり」といひ、廣蔭は「こは后の宮の御殿の築山のけしきを詠めるなり。種々の花を植

ゐたる築山なるを、まことの野山の如くに詠みなせるが歌なり。諸注まことの野山と解けるは違へり。いづこにか花の影の千種に霞に映りて見ゆる山あるべき」と論じた。どれが正鵠の說だらうか。新撰萬葉に、

霞光片々錦千端。未ㇾ辨名花五彩班。遊客廻ㇾ眸猶誤道。應斯丹穴聚鴛鸞。

とこの歌を譯してある。されば廣蔭の說も據があるやうでもあるが、又穿鑿らしい感じもする。

○

かすみたつ春の山べはとほけれど吹きくる風は花の香ぞする

大意　長閑な霞の立つ春の山のあたりは遠方なれど、其の山の方から吹いて來る風は、花の匂が存外するわ。

評　淡霞の裡に籠つて依稀たる春山は、いかにも花の咲いて居さうな風情なので、近所の花を吹き過ぎた風でもあらう、ふと薫つたのを、直に山の花の香がこゝまで薫つて來たことと斷定した、その幼さが面白い。初句の「霞立つ」は春山の形容ながら三句に「遠けれど」と出る伏線になつてゐる。要するに、山邊は遠けれど近く花の香ぞすると、遠近を對照させた趣向である。

うつろへる花を見てよめる　　みつね

花見ればこゝろさへにぞ移りける色にはいでじ人もこそしれ

釋　○うつろへる花　「うつろふ」は色の變る事にも散る事にもいふが、詞書には色の變る事にのみ用ひて、散るのは皆散ると書いてある。○色にはいでじ　顏色には出すまい。○もこそ　「も」は歎詞。「こそ」は事物を強く

指定する意の辭だが、かう連續する時は萬一の事を決定的にいふ意の辭となる。

大意　花を見ると、盛りの時もかう衰へた時も、その折々に心が染みて、花の色の變るのみか、見て居る自分の心までがサ移り變つたわい、心の變るは恥かしい事だから、顏色には出すまいて、若しかすると人が知るわ。

評　花は未開は未開で趣があり、盛りは盛りで面白く、落花は落花で面白い。然し退いて考へて見ると、かう移氣の無定見もないものだと氣が咎めるので、さも大した風流罪過でも犯したやうに、「色には出でじ人もこそしれ」と誇大に取り成した。初め心の移るといつた緣に縋つて、戀の趣に取りなして詠んだ。浮華で眞摯の情に乏しいと思ふ。初句は力強い辭樣なので、外の事ではさもないがといふ餘意を生じて、花を強く愛惜する趣が見える。又四句は花が色に出て移つたのに對へて當つたので、「は」の辭に注意を要する。心のうちにはともあれ、顏色には出すまいの意である。

二三の句、六帖に心さへこそ移りぬれとあるのは采らない。四句も、六帖のは思ひしものをとある。

題しらず　　よみ人しらず

うぐひすの鳴く野べ每に來て見れば移ろふ花に風ぞ吹きける

大意　鶯の悲しさうに啼く野邊每に、自分が來て見ると、啼くも道理、いづれの野邊も散方になつた花に、風がサ吹いたわい。

評　春色今まさに闌で、花の風に散らぬ野もなく、鶯の鳴かぬ里もない。乃ちこれを湊合して、移ろふ花に風が加るその無慘さを鶯が啼くと見た。郊外の散策に落花を惜んでの作である。花落ち鳥啼くは自然詩人の套語で

あるが、その中に一手段を弄して、忽ち凡胎を脱した。好調諧語。

以下六首は、落花に鶯を結んだ歌を擧げた。

○

吹くかぜを鳴きてうらみよ鶯は我れやは花に手だに觸れたる

典侍洽子（アマネイコノ）朝臣

大意 鶯は自分に對つて、花を散らしでもしたやうに、恨み顏に鳴くが、そりやお門違ひで、あの吹き誘ふ風を啼き立てゝ恨んでくれよ、自分は散るが惜しさにこそこゝには立ち寄つたが、花に手一つさへも觸れた事かい。

評 風に亂れて散る花の面白さに、木の下に立ち寄つて恍然と見入つてゐる時しも、耳許近く鶯が金切聲で鳴き立てたのだらう。故に鶯が自分を恨み咎むるものと聞きなして、一所懸命申譯をするそのはかない廻り氣や、痴氣やが、この詩的要素を成してゐる。この種の構想はわるくすると浮華に流れて狂意に墮ちるが、幸にその弊がないのは老手である。句々力ある調子である。三句は初句の上にめぐらして聞く格である。

散る花の鳴くにしとまるものならばわれ鶯におとらましやは

大意 散る花が惜んで泣くのでサ、散らずにとまる物ならば、自分は泣く事だつて、あの鶯に負けようか負けはすまいに。

評 けれども啼いてとまりもせぬものだから、自分は啼かずに怺へて居るの餘意がある。例のわが落花を惜む心

から、鶯の啼くをも同意に推斷して、啼くことならば何で鶯に負けようかと主張する。卽ち落花を惜む情は決して鶯には遜らぬと、間接に主張してゐる。鶯相手に嬌瞋を發した處、おのづから脂粉の氣があつて、情致が饒い。

仁和の中將のみやすん所の家に、歌合せむとしける時によめる　藤原後蔭

花のちることやわびしき春がすみたつ田の山のうぐひすの聲

釋　〇仁和の云々　「仁和の」は光孝帝の御代のの意。「中將のみやすん所」はこの御世の女御更衣の皇子を生み奉りて御息所と稱へられた人で、中將だつた人の子女などであるから、さう呼んだのである。この御息所は女御平等子の事かと思ふ。この時右中將平正範といふ人があつた。光孝の后妃に外に平姓の人がないから、多分この正範の身内だらう。「せむとしける」は原本せむとてしけるとある。「て」文字文理が通じない。後の素性の歌の詞書の同文なのにも、「て」文字がないから、これは衍字と斷ずる。さて豫定はあつて遂に爲ずになつた歌合の料の歌なので、かく書いたのである。〇わびしき　つらく難儀に思ふの意。〇たつたの山　奈良縣平群郡の立田山である。春霞立つといひかけた。

大意　花の散る事が情なくつらいのであるか、長閑な春の霞のたつといふ名の立田山で、鶯の鳴く聲のするは。

評　立田山は萬葉集にも、

わが行きは七日は過ぎじ立田彦ゆめこの花を風に散らすな（巻九）

など詠んだ、花の名所である。花の散るは惜しい事の頂上なので、さし當つて盛になく鶯を同情に想像するのは例の手段である。三句「春霞」は立田山の序詞ながら、時下の景物を借りて句としたので、多少そのあたりの打ち霞んでゐる光景と見てよい。結句「鶯のなく」と收めても宜いのを、「鶯の聲」と一轉語を下し、上下の句意を參差させたのは、語意を緩く、語調を長閑やかに仕立てゝ、陽春ののんびりした調に協へたのである。この作者苦心の存する處を買つて遣らねばならぬ。「立田山」と「鶯の聲」との取合せも、打ち任せては不倫でそぐはぬやうだが、身既にその山中にゐての作とすれば、異論もなからうし、却つて鶯の鳴聲の盛な趣も見える。但三句以下の大らかなる調に對して、初二句やゝ細くからびて、力量が平均しないやうに思はれる。

六帖には、二句事や悲しき、結句山鳥の聲とある。

鶯の鳴くをよめる　　　　そせい

木傳へばおのが羽風に散る花をたれにおほせてこゝら鳴くらむ

釋 ○木傳へば　木の枝を傳へば。○おのが　己れが。○羽風　羽の煽りに生ずる風をいふ。○おほせて　負はしめて。○こゝら　許多、澤山などの意。

大意 鶯が花の枝をあちこちと飛んで傳ひあるくと、自分の羽風に煽られて散る花であるのを、誰れに其の咎を塗り附けて、あのやうに恨めしさうに、大さうに鳴くのであらうぞ。

評 上の「吹く風を鳴きて恨みよ」と、同巧異曲である。但彼れは猶豫なくさし當てゝ自分の恨まれた趣なので、おのづから語調が切迫してゐる。これは又大やうに「誰れにおほせて」と汎くかけて、自分をその中に含めたの

だから、語調も幾分かゆるやかである。この差別を味ひ知るがよい。初句の「ば」例の力ある辭様であるので、障らねば散る筈ではないものをの意が、その裏面に生じて來る。さて詞書を離して見ると、何が木傳ふとも何の羽風とも分らないが、實際に鶯を聞いてのうへの作であり、その風情も一首のうちにめぐつてゐるから、却つて鶯の語のないのが面白いと思ふ。畢竟この無理解の鶯にも困つたものと、鶯を相手に當惑した態度が面白い。

初句、六帖には鶯の、二句、顯本にはおのが羽ぶきにとある。顯昭は「羽風は今少しあらはなり」とて、羽ぶきを執した。羽ぶきは羽振で、詞が古い。眞淵は「もとは羽ぶきなりけむ」といひ、叉鶯のといひ顯はすを難じて、「詞書と歌と相對へて曉らしむるがこの集の心づかひなり」といひ、景樹はこの二つを取り合はせて「鶯のおのが羽ぶきにといふを優る」といつた。諸家の說も一往の理由はあるが、やはり本文のまゝでおく方が、一番さも古今集の歌らしい調子に聞える。

鶯の花の木にて鳴くをよめる　　みつね

しるしなき音をも鳴くかな鶯のことしのみ散る花ならなくに

釋 ○花の木　花咲く木は何でもいふ。○しるし　驗。○鶯の　鶯が。○ならなくに　ではないのにの意。

大意　鶯が何の効驗もない聲を立てゝも鳴く事よなあ、鶯の鳴くに關はらず、いつの年の花も遂には散るので、何も今年ばかり散るのではないのに、あのまあ今更らしく鶯の鳴く事わ。

評　さて／＼馬鹿な鶯よといふ餘意がある。自身と鶯とを混一にしたのは例の手段である。下句、鶯に強く當つ

て理責にしたやうな、又冷笑したやうな語氣に面白味があるので、その態度が詩なのである。調がまたよく諧つてゐる。三句は初句の上にまはして聞く格である。

題しらず　　　　よみ人しらず

こまなべていざ見に行かむ故里は雪とのみこそ花は散るらめ

釋　○こまなべて　「こま」は駒。もと小馬の義で弱い馬の事であるが、後には汎く馬をさしていふ。「なべて」は竝べての意。○故里　こゝでは舊都の意と思はれる。

大意　諸君よ、御一所に馬を乘り竝べて、さあ見に行きませうぞ、この節はさだめて故里は雪のやうに、ひたすら花は散る事であらうわ。

評　早く見に行かぬと大方散り果てゝしまはうの餘意がある。景樹は「この遷都のはじめ、奈良の舊都を忍びて思ひ立ちける人の詠めりしならむ。今の都人は皆奈良人にて、誰かは誘はれざらむ。さらば駒なべてといふべし」といつた。實に奈良の京は花が多つたと思はれる譯は、上の平城帝の御製にも花を詠ませられ、萬葉にもその附近に花を頻に詠んでゐる。されば落花人無くして寂々たる故京の春を懷ふ時、何で往きて見むの念が起らなからう。況んや平安の新都からは行程僅に十里許、輕く鞭を春風に揚げ、三才駒に白泡食ませて、以て一日路の遠乘を試みるのは、頗る愉快な事だらう。歌の風調は奈良時代をかけた老人のものではない。今少し下つてゐる。又その口吻も若びた處があつて、少壯の人の作と思はれるから、何ほどの相違もないが、弘仁の頃を盛りの人の作と見たい。眞淵は「本末の句共に、少しの巧なくあるがまゝに詠みて、何となく面白き歌なり」と評

した。

○

散る花を何か恨みむ世の中にわが身もともにあらむものかは

釋 ○何か 「か」は反動辭。○ともに 花と共にの意である。散る花と同樣にの意に見るは精しくない。○あらむ あられむの意。

大意 惜むにも關らずはかなく散るので、その花は恨めしいが、何の恨まうぞ、その譯はよし花が散らずあつても、この世の中に自分の身もその花と一所に、何時までも居られようものか、決して居られるものではない。

評 花も散り易く人も滅び易い。共に永久の存在どころか、一轉瞬の間もおぼつかない。かうともすれば所緣につけて人世の無常を觀ずるは、奈良朝時代をかけて、佛教の人心に深く浸潤した結果と見られる。殊に飛花落葉の諦觀は、當時一般の社會思想となつてゐたから、別に珍しい着想ではない。只花に對する執着を、强ひて理性で抑へようとしたその煩悶に葛藤に、詩趣の發生を認める。

小野小町

はなの色は移りにけりな徒にわが身世にふるながめせし間に

釋 ○移りにけりな 變つてしまつたわいなあの意。「な」は歎辭。○徒に 口語のむだにに當る。「ふる」にかゝる副詞。○世にふる 世の中に經るの意。年の寄ることにいふ。又「ふる」に降るの意をかけた。これは長雨

の縁語。○ながめ　長目の義で、物思する時は何となく一方が見詰められるものなので、物思する事を長目といふ。それに長雨(ナガメ)をいひ懸けた。長雨(ナガメ)はながあめの略。

大意　見むとたのしんだ花の色は、早くも變つてしまつたわいなあ、役にも立たぬ自身の老をなげいて、物思をしてゐた間に降つた長雨にサ。

評　つれづれな暮春の霖雨に屈託して居る間に、庭前の花は色あせて見る影もなくなつたのを見て、それに寓せてわが生活苦に沒頭してゐる間に、容貌の美の衰へてゆくを歎息したのである。元來譬喩を混用した構成だから、勢ひ巧緻なるべき筈ではあるが、下句の秀句勝な仕立などあまり面白くない。さはいへこれも上手の仕業である事は勿論で、そのやはらいだいひなしは、常に女流の歌である。耳立ち易い「に」の辭の四つまでも重なりながら、聲調のなだらかなのを古來稱美してゐる。又「世にふる」の解は諸說まちまちであるが、今は石原正明の說に據つた。

仁和の中將のみやすん所の家に歌合せむとしける時に
よめる　　　　そせい

をしと思ふこゝろは絲によられなむ散る花毎にぬきてとゞめむ

釋　○絲によられなむ　絲によられて欲しいの意。「なむ」は希望の辭。

大意　散るのを惜しいと思ふこの心は、どうぞ絲によられて欲しいわ、すれば散る花といふほどの花を、悉くその絲で貫き通して、他所へ散亂せぬやうに留めよう。

【評】女子供が手すさびに花片を多く絲に貫き通して、花輪に作つて遊ぶ事あるのを聯想しての作と見える。散る花毎に貫かむといふは、卽ち散る花毎に心のたぐうて惜まれる趣である。さて心は絲によられる物でもないが、それ等の理性を忘れて、幼く愚に反つた點が、歌として面白いのである。されば其の間に一點の分別も着しない等なのを、廣蔭が「惜む心の絲のやうに細くなるが細りついでにまことの絲に云々」といひ、景樹が「心に形ありて絲に造らるゝものならば云々」といつたのは、皆蛇足である。纖細の情趣ではあるが、どこにか乃父遍昭の餘風が遺つてゐる。

結句、六帖にぬきてとむべくとある。

　　志賀の山ごえに女の多くあへりけるに詠みてつかはし
　　ける　　　　　　　　　　　　　　　　つらゆき

あづさ弓はるの山べを越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける

【釋】○志賀の山ごえ云々　志賀の山越は京都府北白河の瀧の方から上つて、如意が嶽の麓を越えて近江の志賀へ出る道をいふ。經信卿記に「經二於瓜生山(將軍地藏の山)西一歩行」とある。これは天智帝の建てられた志賀の崇福寺へ詣でる道である。崇福寺は世に志賀寺と稱して、昔は甚だ諸人の信仰した寺だから、貫之も定めてそこに詣でたのであらう。「あへりける女」も同じく其處よりの歸途なのであらう。「女の多くあへりける」は女が多勢出で來逢つたの意。○あづさ弓　春の枕詞。○道もさりあへず　道も避ける間なくの意。

【大意】春の頃志賀山越をすると、道も除けて居る間もなく、花がさばら／＼と散つたわい。

評 花を女どもに喩へて、餘り貴女達が多勢なので避くべき道もなくて當惑したと誇張したのが、彼の婦人連に對した冗談口で、即興の面白味がそこに生ずる。この當惑はむしろあり難い望ましい當惑だから妙だ。もとよりこの山越は花の多かつた處と思はれるから、目前の實景を直に轉用したのを、作者の氣轉とする。さる山越の路に、思ひの外花やいだ壺折姿の女房達が數多出會つたとしたら、どんなに珍しからう。好奇の心を惹いたらう。かうした場合に物などいひ遣ることは、この時代には常にあることで、あな勝珍しいすき業でもないが、又風流な所作でもある。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

春の野に若菜つまむとこしものを散りかふ花に道はまどひぬ

釋 ○若菜　春上に既出。○散りかふ　縱横に散り亂れるをいふ。「かふ」は交ふの意。○まどひぬ　「ぬ」は現在完了の助動辭。

大意 この春の野に只若菜を摘まうと思つて來たものを、それにまあ左右から散りまじる花の爲に、若菜摘みに行くべき道は踏み迷うたわ。

評 景樹が「若菜摘む事はうち任せては女の爲業なるを、男もして遊ばむといへる、春興思ひやるべし。素より浮かれ心に任せたれば、實は花ある方に終日暮して、若菜摘むといひしに違へるを、散りかふ花に道を間違へたりと云へるがをかしきなり」といつたのは、よくその間の消息を穿ち得た說である。

山寺にまうでたりけるによめる

やどりして春の山べに寝たる夜は夢のうちにも花ぞ散りける

釋 ○山寺に云々「まうでたりけるに」は詣でたりける折にの意。折の名詞を略いた格である。宣長が「歌に夜はとあれば、けるにのに文字はよにて、夜の義ならむ」と疑つたのは拘泥である。かやうに歌と違はせて書くのが、この集の體である。○やどりして　宿をとつてといふに同じい。

大意 花の散る春の山べに宿をとつて寝たその夜は、寝て居る夢のうちにも、花がサ散つたわい。

評 作者心願の筋があつてある山寺に參籠したが、折しも落花の盛りで、盡日惜み暮した其の夜の夢に、また花の散るを見たのを、夢路にまで散つたと驚訝したのが趣向で、頻りにしきつて散りに散る花の狀が思ひやられる。躬恒のうた、

おきふしに惜むかひなく現にも夢にも花の散るをいかにせむ

を一層巧んだので、嶄新である。又山寺に一宿したのを、わざと花蔭に寝たやうに取り成したのは、「夢のうちにも花の散る」をいふ伏線である。初句は二句を隔てゝ三句へかゝる。寂寥たる山寺の春は浮世の塵縁を斷つて、花より外に問題になるものもなく、思念を煩すものもない。風流の極致である。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

ふく風と谷のみづとしなかりせばみ山がくれの花を見ましや

釋 ○水とし 「し」は強辭。○み山がくれ 山陰に隱れたのをいふ。「み」は美稱。○や 反動辭。

大意 吹き散らす風と、散り浮いたのを流す谷川の水とがなかつたものならば、山の奧に隱れて咲く花を見られようか、見られはすまい。

評 さても嬉しいのは風と水との情なるよの餘意がある。その散り浮く花を直に山奧の花と速斷したのは、ゆかしく懷かしい餘のおし當て心ながら、あたりに花の木もない山路の狀と知られた。さては折角の春の山踏に目ざす花にも逢はず失望しつゝあつた際、纔に澗水に一點の紅を見付けた趣で、何で嬉しくなからうか。吹く風と谷の水との勞を犒つて、一言感謝の意を表しないでは居られまい。かうしてこの三十一字は歌ひ出されたらしい。

上句、六帖に谷川の流れて來ずはおもほえずとある。

志賀より歸りけるをうなどもの、花山に入りて藤の花のもとに立ち寄りて歸りけるによみておくりける

僧正遍昭

よそに見てかへらむ人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも

釋 ○志賀より云々 前にもある志賀寺へ參詣して歸つて來た女達が、遍昭が住持する花山寺に入つて、庭の藤の花を見て歸つたのである。これは志賀の山越をしないで、志賀から打出の濱を經て、逢坂山を越えて京へ歸る途中、山科の花山寺に立ち寄つたと見える。いづれ京の宮女連だらうから、京へ歸り行くあとを追はせて、

この歌を贈つたのだらう。○よそに見て　他人向によそ〳〵して見ての意。○はひまつはれよ　蔓を延べて這ひ纒へよの意。「よ」は命令辭。

大意　こゝに立ち寄りながら、自分をよそに見て歸らうとする人に、こりや藤の花よ、這つて纒ひ附いて是非引き留めるやうにしてくれよ。假令それが爲にそちの枝は折れるとも構はずにサ。

評　この時代の婦人は頗るの佛教信者だから、殊に現世利益の觀音信者だから、志賀、石山はその參拜の標的であつた。さてこの人達はかねて當代の大智識たる遍昭に歸依してゐた事は勿論であらう。志賀詣の歸途訪うたのも、そんな渇仰の心持に惹かされたのであらう。がさうした道行ずりでは、ゆつくりして居られぬので、住持遍昭の機嫌をも伺はず、藤の花だけ見てすぐに歸つたのである。「よそに見て」は住持遍昭を餘所に見たのである。諸註、これを藤の花をよそに見る意に解いたのはいかゞ。詞書の「立ち寄りて歸りける」といふ詞續きは、藤の花を見るや否やさつさと脇目も振らず歸つた趣で、現に花の蔭をも立ち馴らした以上は、決して藤の花を「よそに見る」とはいはれない。枝は折るとも這ひまつれよは頗る狂痴の趣がある。引きとゞめよの餘意を說破しないのは、餘情を饒からしめる。

結句、六帖にはとかむ間をだにとある。意は藤の花が其の人に纒ひ附いたらば、それを解き捨てなければ歸れまい、さらば解き居る間なりともとゞめて見たいといふ。眞淵は「これこの僧正の口振なり、枝は折るともといへるは理り盡きず、詞もよしなし」といひ、景樹もこれを是として深く慕へる意をかくみやびに面白く、しかもいひはてずしてあざやかに聞かせたらむ、凡器の及ぶ所にあらず」とまで賞へてゐる。萬葉集十二、

さひの隈檜の隈川に馬とめて馬に水かへわれよそにみむ

とその着想がひとしいが、歌柄は檜隈川に遠く及ばない。

家に藤の花咲けりけるを、人の立ちどまりて見けるを
よめる　　　躬恒

わが宿に咲けるふぢなみ立ち返り過ぎがてにのみ人の見るらむ

釋 ○家に　躬恒の家に。○ふぢなみ　藤靡(ナミ)の義。藤の花の靡くよりついた名。藤といふも同じい。さて波に寄せて、下の「立ち返り」にかけ合はせた。○立ち返り　引き返し〳〵。○過ぎがてにのみ　通り過ぎる事が出来にくさうにばかりの意。

大意 よくもない自分の庭に咲いた藤の花なのを、何で立ち戻り〳〵して通り過ぎ難いやうに、ひたすら人が見る事であらうぞ。

評 この筆法を世に卑下自慢といつてゐる。詞のうへでは我れからおとして、立ち止まつて人の見るのを訝つたさまながら、底の意はそれも誇りは家の花のよいからと落着させるいひなしで、頗る婉曲である。三四の句間に、例の何故にの語を挿入して聞くべき格である。「人の」は上に「しづ心なく花の散るらむ」とある花のと同じことで、語調を緩和してゐる。又「藤なみ」に漣波を寄せたやうに解した人もあるが、却つて纖巧に傷くかと思ふ。それも池の藤なみなどある場合は、或はさうかとも諾かれるが。

結句、一本に人の見ゆらむとあるのを眞淵は采つたが、この歌の體では本文の方がいゝ。

題しらず　　　　　　　　　　　よみ人しらず

今もかも咲きにほふらむたちばなの小嶋のさきの山ぶきの花

譯　○今もかも　「今も」の「も」は物を含めていふ辭。「かも」の「か」は疑辭、「も」は歎辭。○たちばなの小嶋のさき　大和國高市郡飛鳥の橘の島といひ、或は山城國宇治川の北岸橋姫社の下に山吹の瀨といふがある、其處だともいつて一定しない。○山ぶき　棣棠。欵冬と書くは當らない。

大意　昔見た時は見事に咲き匂つて居たが、この節も相變らず咲き匂ふ事であらうかまあ、あの橘の小嶋の崎の山吹の花は。

評　萬葉集卷八に、

かはづ鳴く神なび河にかげ見えていまや咲くらむ山吹のはな（厚見王）

とあるを、所を易へたのみだと、眞淵はいつてゐる。萬葉のは二三の句調も七五に流れてゐるから、この歌の方が格調は古く聞える。然しそれだけの理由で時代の前後を斷定することは稍早い。抑も飛鳥の橘の島の宮は草壁皇子のお邸である。その御庭に中島などあるので、島の宮の名が附いたらしいが、小島と打ち任せていふことは全く諾かれない。これはやはり宇治の橘の小島として解しておかう。

これなむ橘の小島と申して。（源氏浮舟の卷）

平等院の丑寅橘の小島が崎より、武者一騎かけ出でたり。（源平盛衰記）

とある處で、平安遷都後の人が、暮春には舊都の奈良から折々行遊も試みた、宇治川沿岸の山吹の花を想ひ出し

て、「今もかも」と追憶に耽つたので、その感愴は無量、語意も高簡、格調もをゝしく大らかである。

〇

はる雨に匂へるいろもあかなくに香さへなつかし山吹のはな

釋 あかなくに　飽かぬにの意。「なく」はぬの延言。

大意 春雨に濡れた美しい色艶も、見飽きせぬうへに、香までがよくて、側を離れともなく懷かしいわ、山吹の花は。

評 山吹は萬葉にも「妹に似るてふ」など詠んで、暮春の景物の尤なる物にもてはやされてゐる。雨のしめりには香のまさるものだが、山吹の香がそれ程好もしい嗅感を起すことは、餘りとも思ふが、此の頃のには、女郎花にも香を詠んである位で、現代の人よりは嗅感の發達してゐたことは事實である。但山吹の香も幾群となく咲き滿ちた花のうへに風など吹き渡つたとしたら、或は匂ひもしよう。「いろも」と「香さへ」とを對照させてゐる。すべて心詞に盡きて、言外の餘味に乏しい。

〇

山吹はあやなな咲きそ花見むと植ゑけむ君がこよひこなくに

釋 〇あやなな咲きそ　「あやな」はあやなくで、分別なしの意に用ゐる。「な咲きそ」は咲く事勿れの意。　〇け

む　過去を想像する助動詞。○こよひ　今宵。

大意　山吹は無分別に決して今咲くなよ、花を見ようと思つて植ゑて置かれたあの御方が、今夜來もせられぬのに、咲いても何の詮もない事なのを。

評　この歌の妙趣を會得しようとするには、まづ往古の習俗を知らなければならぬ。當時は夫婦でも初からは相住しない。男の方から夜毎に女の許に通つたのである。これ忍ぶの怨むのといふ戀歌の昔に多い理由で、必ずしも風俗の淫猥だつたのではない。今も壻取した女の詠んだ歌で、その壻殿が山吹を前栽に植ゑさせて、花が咲いたら一緒に見ようと豫約してゐたのに、差支があつてか壻殿が來ぬ折しも、猶豫なく山吹の花が咲き出したのを見て、肝心の植ゑ主も來ぬのに咲く山吹はあやなしと罵つた。これ卽ちこの山吹の咲くのにも來ぬ人のあやなさをも、間接に怨んだものである。「こよひ」とあるはその當夜ばかりの夜離(ヨカ)れの趣である。それですら百日も不沙汰したやうに、山吹を借りて鬱憤を洩す。その戀心の濃厚なことに驚かされる。情景相協つて比興面白く、幽怨の意が隱然としてゐるのは佳作である。

よし野川のほとりに、山吹の咲けりけるをよめる

つらゆき

よし野がは岸のやまぶきふく風に底の影さへうつろひにけり

釋　○よし野川　大和國吉野郡吉野にある。

大意　吉野川の岸の山吹を吹き散らした風の爲に、誘はれさうもない水底に映つた影までが、思ひかけず散つて

しまつたわい。

評 吉野川は山ふところで、おのづから山風も烈しい。それが「影さへ移ろふ」の伏線を作してゐる。岸の花が散れば、その影だから底のも散つて見えるのは當然なのを、全然別物に扱つて、幼く愚に詠んだのを一ふしとする。上にこの作者の「夢のうちにも花ぞ散りける」と詠んだのと同趣向である。山吹ふく風と、同音の類語を疊み重ねて聲調をとゝのへ、又岸と底とを對比させてある。

題しらず　　　　よみ人しらず

かはづ鳴く井手(ヰデ)の山吹散りにけり花のさかりにあはましものを

この歌はある人のいはく　橘の清友がなり。

釋 ○かはづ鳴く　「かはづ」は天暦以後の歌では、今蛙といふ田居中に喧しく鳴く蟲をいふが、この集より以前のは、夏の頃より秋を專らに鳴く河鹿(カヅカ)のことである。河鹿は春はまだ鳴かぬから、こゝは「かはづ鳴く神なび川云々」(萬葉八)の歌と同じく、只その所の物を頭において序詞としたまでである。○井手　山城國相樂郡。井手の里、井手の玉川、皆こゝである。井手はその玉川にある堰埭(ヰデ)から起つた名である。されば井手の山吹は玉川の堰のある塘に咲いた山吹をいふ。

大意 この井手の山吹が、思つたより早く散つてしまつたわい、今少し早く來て、花の盛に逢はうであつたものを、さて〳〵残念な事をした。

評 二段に切りとゝのへて、しかも末をいひさしたのは、無限の感情を含める叙法である。又はじめより井手の

山吹と打ち出すのは唐突と酙酌して、「かはづ鳴く」の序詞を置いたのも、おのづから匂があつて優美な觀想が深まる。萬葉集卷八に、

君が家の花たちばなはなりにけり花のある時にあはましものを

この橘を山吹に取り換へたのみだが、感愴の深さ聲調のうるはしさは、却つて優つてゐる。品格高く餘韻がまた饒い。

左註に橘淸友とあるは、諸兄公の孫檀林皇后の御父で、仁明帝の御外祖父に當るので、太政大臣を贈られた人である。されば橘の淸友がなど書いては失禮である。後人の書き入れた注であることは明瞭である。但井手の地は橘氏に緣故あり、歌の體格から時代を推究してみると、或は淸友公あたりの作かも知れない。

春のうたとてよめる　そせい

思ふどち春の山べにうちむれてそこともいはぬ旅寐してしが

釋　○思ふどち　氣の合つた同志。○うちむれて　「うち」は接頭語。○そこともいはぬ　必ず其處とさしてもいはぬ。○してしが　して見たい。「が」は希望の辭。

大意　氣の合つた同志、興味の多い春の山邊に、多勢連れ立つて一日遊んで、日の暮れた所を宿として、行きつき次第に、必ず其處と定めた事のない旅寐をして見たいものぞ。

評　さらばいかに愉快な事だらうの餘意がある「春の」の一語眼目である。よろづの花咲きいろ〳〵の鳥啼く春の山邊だから面白い筈だが、それも一人では十分に愉快でないから入懇の朋友三四輩と共に行き、又日の暮れ

るを限として歸つては十分面白くないから一夜を泊る事とし、又その宿を必ず其處と指定しては煩はしくて自由でないから、行きつき次第何處にでも泊る事として遊んで見たいと、作者が遠慮のない十分の慾望を述べたのである。その慾望が全部自然の懐に抱かれて遊びたいといふのだから、罪はない。作者素性はこの時代には比較的遊覽好の旅行家であつて、野邊山邊の二語は絶えずその口頭を往來して謳歌讃歎された。されば歌もおのづから脱俗の氣味があるが、素より桀れは枯木死灰的の老禿ではない。乃父の氣質を遺傳して極めて情の勝つた人、その境遇からして、自然に烟霞の癖を助長させたやうである。故にその歌にまた蔬菜の氣、抹香の臭味のないのは、大いに喜ばしい。

四句、顯本にそこともしらぬとある。

春のとく過ぐるをよめる　　　　みつね

あづさ弓はる立ちしより年月のいるが如くもおもほゆるかな

釋　○あづさ弓　春上に旣出。春の枕詞。○年月　時日といふ程のこと。○いる　射る。

大意　冬のうちは年月も長く覺えたが、梓弓を張るといふ名の春の立つたそれからは、年月が早く經つて、矢を射るやうにまあ思はれる事よ。

評　春は四季のうちで殊に物見遊山の興がおほく、浮かれ心に任せては光陰の移るのも覺えないので、あわただしく春の暮れた心地がして、打ち驚いた狀である。この作者又、

はかなくて春二月は過ぎにけり花の盛はすぎがてにせよ

と詠んでゐる。梓弓は既に春の枕詞に用ゐたのを、再びその緣語で、速に早しの意を「射るが如くも」と轉義した。又「年月といふ語は春にては穩かならず、拾遺集及び六帖、家集に、歲暮の歌の中に入りたるが正しからむ」といふ說もあるが誤解である。これは熟語で、年は輕く添はつたまでゝ、時日などいふと同じ語例である。とにかく緣語の鎖り續けは狂歌めいて聞える。この作者の下作であらう。

四句、家集に「いにしが」ごともとある。

やよひに、鶯の久しう聞えざりけるをよめる

つらゆき

なきとむる花しなければ鶯もはてはものうくなりぬべらなり

釋 ○なきとむる　鳴いて留める。○ものうく　大儀に、面倒なとの意。○鶯も「も」は例の强い意で、さへもといふに當る。

大意　いかに惜んで鳴いても、散るを留め得る花がサないので、流石の鶯さへもあげ句のはてには、鳴くのが大儀になつてしまひさうな樣子であるわ。

評 それ故近來一向鳴かなくなつたのだらうの餘意がある。わが惜むにも關はらずひたすら花は散るので、途方にくれてゐると、たま〳〵鶯が久しく鳴かないのに氣が付いて、その理由を同情に推察した。鶯の鳴くのを花の散るを惜んで鳴くと見るのは例の事で、さてその上に一趣向を立てたのである。

やよひのつごもり方に、山を越えけるに、山川より花の流れけるをよめる　ふかやぶ

花ちれる水のまに〳〵とめくれば山には春もなくなりにけり

釋　○つごもり方　「つごもり」は月隱(ツキゴモリ)の義で、下旬又は晦日をいふ。「つごもり方」は無論下旬のこと。○ふかやぶ　深養父の字を書く。この作者はこゝに初出だから、氏を署すべきである。氏は清原である。○まにまに　隨ひての意。○とめくれば　「とめ」はもとめと同意。景樹はよく心を注ぎ目を留むると釋して、尋ぬる意と解するのを破した。

大意　花が散つて流れる川筋について、水上の方へと留意しつゝ來れば、麓とは違つて山には、意外に花ばかりか、はや春もなくなつてしまつたわい。

評　麓の里こそ散り方なれ、山ふところには猶風隱れする花もあつて、春めいた景色が多からうと、谷川傳ひに溯つて見ると、豈に料らんや滿山は綠盡して、却つて夏めいたさまなので、「山には春もなくなれり」と愕かれたのである。「山には」の「は」の辭は花散れる麓に對へ、「春も」の「も」の辭は花もを含めてある。三月の下旬だからなほ春であるが、春の證として見るべき物が無いから、春は無くなつたと斷じた。かくいふが歌である。六帖に、二句の「水」を道とし、結句は殘らざりけりとあつて、夏の歌にしてある。又北村季吟の抄本に、四句山にも春はとある。意はよく聞えてゐるが、驚歎の意が淺い。

春を惜みてよめる　　もとかた

をしめどもとゞまらなくに春霞かへる道にしたちぬと思へば

大意　立ち出でぬ前ならばとにかく、春の君がはやその歸途にサ、霞の立つ如く立ち出でたと思へば、今更別を惜んでもとても留りはせぬに、それをやはり惜むは愚なことであるわ。

評　人の別れには、まだ出立せぬうちにこそ惜んで留める法もあれ、既に門出してはその甲斐もないことを、下に思つて詠んだ。今日しも打ち霞んだうちつけ心から、「立つ」をいひ出す序詞として、當季の景物たる春霞を用ひたので、霞が主でない事は、上の、

今よりは梅のはな植ゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり

の處に於いていつたのと同じ趣である。されば霞を重く見て、春霞が歸途に就いたやうに解いた說は、粗漏といはねばならぬ。畢竟春を擬人して、その暮れ行くを彼の本所へ歸るものと見たのが、一趣向なのである。巧ではあるが、感哀に乏しい。餘韻の人を動かす處ないのは、元方の歌の通弊である。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた　　おきかぜ

こゑ絶えず鳴けや鶯ひとゝせにふたゝびとだにくべき春かは

釋　○こゑ絶えず　聲を絶やさず。○鳴けや　「や」は命令辭。

大意　これ鶯よ、隨分聲を絶やさずに鳴いてくれよ、なぜなれば、一年のうちに三四度はおろか、二度とさへも

來るべき春かまあ、只の一度より來はせぬ貴い春ぞよ。

評 春の日數も殘少なくなつた頃、鶯の聲の途絶えた時分の感想である。「一年に二度とだに」と、數量の語を懸け合はせて鬪はしめたのが詞のあやで、かく春の來ぬ事を丁寧に諄くいふのに、今の殘春の貴く大切な趣を反襯してゐる。それだから今のうちにお前の鳴くべき時を過さず鳴けと、鶯に警告した。この鋭い突き込んだ語調は、鶯を激勵するに十分である。下句は一寸理窟めいてゐるが、それを基礎として鶯の囀を強要したことは頗る詩的である。構想既に面白く、詞遣ひもまた巧者。

初句、六帖に聲たてゝとある。

　　やよひのつごもりの日、花摘（ツミ）より歸りける女どもを見てよめる　　みつね

とゞむべき物とはなしにはかなくも散る花ごとにたぐふ心か

釋 ○花摘　舊暦の二三月のころ野山に出て、花を摘んで先祖の墓を祭り佛に奉るをいふ。草花などをも摘む。○物とはなしに　物ではないのにの意。○はかなくも　しかと取り留めた處のないのをいふ。○たぐふ　類ふの義。附き添ふをいふ。○心か　「か」は歎辭。

大意 附き添つて行つたとて、留められよう物ではないのに、あの花が惜しさにたわいもなく、あの散る花といふ花毎に、附いて行く私の心よ。

評 摘みためた花束を持つて女どもの戯れながら來ると、春の末の花なので、脆くも片々と散亂する。さてその

散る花を女共に譬へたのは、前に貫之が「道もさりあへず花ぞ散りける」と詠んだのと同趣向で、今花摘から歸つて來る美人どもを見れば、一人一人に心移つて、それにもこれにもわが心の惹かれてゆく事かな、さりとて遂にその女を引き留め得べきでないのにと、人知れぬ仇心をはかなんだ譬喩歌である。「はかなくも」の自嘲の一語、却つて理性をよそに落花に熱狂する態度を、強く點出した。但初二句はすこしいひ過ぎかと思ふ。概しては艶柔な趣ある歌だが、貫之の「道も去りあへず」の作に比べると一等を下る。又詞書に「三月晦日」とその時日をことわつたのは、春の果だから散り行く花のいよ〳〵とゞめ難い意を、たしかに聞かせたい爲である。

　　やよひのつごもりの日、雨のふりけるに、藤の花を折りて人につかはしける　　なりひらの朝臣

ぬれつゝぞしひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば

釋 ○ぬれつゝ　濡れながら。

大意　この藤の花を、今日のこの雨に濡れ〳〵してサ、無理に折つたわい、なぜなれば、もはや當年の一年のうちには、春は幾日もあるまい、卽ち今日一日と思ふからサ。

評 藤の花を春の象徵として、「春を過ぎては藤の花も見る甲斐なければ、雨を冒しても今日折り取つて、貴君の御覽に入れたのだから、其の心で見て下さいの餘意がある。歌には雨とも藤の花ともないが、「濡れつゝぞ」「折りつる」で、略その片影をほのめかし、餘は眼前の事相、卽ち其の日降つた雨と贈つた藤の花とに讓つて、暫くいはないのである。實際の作には必ずこれらの省筆法がある事を知らなければならない。又濡れながらも折

るは、志の懇切さを思はせる態度で、上の「わが衣手に雪はふりつゝ」とある光孝帝の御歌と、その軌を同じうする。風體抄に「しひてといへる、姿も詞もめでたく侍るなり」とある。他の日數こそ多けれ春は幾日もと強く摘出したのに、思ひ入つた趣が深い。但業平朝臣の作としては、決して上乘なものではない。

伊勢物語に「昔衰へたる家に、藤の花植ゑたる人ありけり。彌生の晦に雨そほ降るに、折りて人の許へ奉るとてよめる」と詞書して、この歌がある。三句、同書の塗籠本といふには藤の花とある。又家集には、三句以下藤の花春はけふをし限と思へばとある。景樹はこれを執して「初二句迫れる意調なるに、下句幾日もあらじは、今日一日のみにおし詰まれる意ならねば、語調弛びて打合ひ難し。詞書にも晦の日とあれば、けふをし限とあるをもて正しとすべし」といひ、又「この集の詞書は伊勢物語の攙入にて、物語の詞書は晦と弘くかけて、必ず晦日の事ならねば、下句もこれにて適ふなり」といつた。實に詞書に親切な見解で的論と思はれる。姑く錄して後勘を俟つことゝする。

亭子院の歌合に、春のはての歌　　みつね

けふのみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花のかげかは

釋　○たつ　起つの意。立ち去ること。○かげ　蔭。

大意　もう今日だけと春を思はぬ時でさへも、立ち去る事が出來やすい花蔭かまあ、それでさへ立ち去り難い花蔭だつたのに。

評　まして今日かぎりの春では名殘惜しくて、いよ〳〵花の蔭は動かれぬの餘意がある。家集に、

けふ暮れてあすとだになき春なればたゞをしき花の蔭かな

同意ながら、率易に失して滯澁の弊がある。恐くはこの原作ではあるまいか。刻意推敲の結果、造句の巧を極めたものと思はれる。當時の歌合の判詞には、をかしと評してある。但立意がやゝ理路に渉つてゐる嫌があるのは遺憾である。

序にいふ「打聞」に慈鎮和尚の本といふに、「たれこめて春の行方も」の歌の次に、

さくらの遣水にちりけるを　つらゆき

ゆくみづに風のふき入るゝさくら花きえず流るゝ雪かとぞ見る

又「ことならば咲かずやはあらぬ」の歌の次に、

雲林院にまかりて櫻のちりけるをよめる　貫之

雪とみてぬれもやすると さくらばなちるに袂をかづきつるかな

の二首があつたと出てゐる。

古今和歌集卷第三

夏歌

題しらず　　　　　　　　　　　　よみ人しらず

わが宿の池のふぢなみ咲きにけり山ほとゝぎすいつか來鳴かむ

この歌ある人のいはく「柿本の人丸がなり」。

釋 ○池のふぢなみ　池の邊の藤の花。「ふぢなみ」は藤靡の義で、藤の花房は垂れなびくのでいふ。或はいはく藤並の義と。とにかく花についての稱である。藤波と書くは借字。○咲きにけり　「にけり」に驚歎の意を含む。○山ほとゝぎす　山の時鳥。時鳥は陰暦四月の初から五月を盛りに里近くも來て、夜をおもに鳴く。子規、杜宇、杜鵑、蜀魄、時鳥、郭公、霍公鳥などの字面を用ゐる。

大意 自分の庭の池の邊の藤の花は、意外に咲いたわい、さては山の時鳥はいつ頃山から出て來て鳴かうか。

評 藤の花は暮春から初夏にかけて咲く。時鳥は初夏から仲夏をおのが時として鳴く。今意外にも庭前の藤の花の咲き出したのを見て、俄に夏の景氣を感じて、時鳥を下待つ心になつた趣である。抑も庭前に池を設け、その中島の松に藤をからませるといふ趣向は、平安人士の好みであつた。蓋し藤の花と時鳥とは、奈良時代から

も頗る珍重され、屢歌人の題詠にのぼつてゐる。で藤の花によつて時鳥を聯想することは、火を見て烟を思ふよりも自然であつた。「藤なみ」に淵と波を寓せたとする說もあるが、それでは甚だ小細工で、この歌の味ひを少なくするものである。「山時鳥」は「宿の藤なみ」に對へたので、後世の歌の、山に何の意義なしにいひ續けるのとは違ふ。一首を二段に切りとゝのへて、上句と下句とを排對して鬪はせてゐる。下句は、

朝がすみたなびく野邊に足引の山ほとゝぎすいつか來鳴かむ　（萬葉十）

とあるに全く同じであるが、霞と時鳥の關係よりも、この方が緊密なだけに諾はれる。

藤なみの咲きゆく見れば時鳥なくべき時に近づきにけり　（萬葉十八）

はこの先鞭で、一寸軒輊しがたいやうだが、よく味ふと說明に過ぎて、この歌ほどの含畜がない。

藤なみのしげりは過ぎぬあしびきの山時鳥などか來鳴かぬ　（萬葉十九）

はほゞ同じ體製であるが、境致の面白さは池の藤なみに及ばない。

わがやどの池のふぢなみ咲きしより山時鳥待たぬ日ぞなき　（躬恒集）

に比べれば遙に優つてゐる。姿高く心ひろく、巧まぬやうで底に工のあるのは、古風を存した所で、上乘の作だらう。

結句、六帖に今や來鳴かむとある。景樹が「いつかは少し間のあるさま、今やはその時に臨みたるさまなれば、こゝは鳴くべき時節に向へるなれば、今やの方正し」といつたのは、一往は尤もと思はれるが、前にもいふ如く、まだ咲かぬ筈の花の咲いたにつけて、急に待つ心になつた趣だから、「いつか」の方がやはり可からう。

左註は例の采り難い。そんな傳へもあつたのだらうが、更に人麻呂の歌體でない。ずつと後のもので、平安遷

都後の作な事は勿論である。

うづきに咲ける櫻を見てよめる　紀のとしさだ

あはれてふ言をあまたにやらじとや春におくれて獨さくらむ

釋 ○うづき　卯月で、陰暦の四月の異名。卯の花月の略とか。○あはれてふ言　あはれと感賞する詞。「あはれ」は歎詞。「てふ」はといふの約。○あまたにやらじとや　多くの他の木に頒ち遣るまいといつてか。

大意 あゝ見事なといふ人の褒詞を、數多の櫻に頒けて遣るまい、自分の獨占にしようと思つて、わざと數多の櫻の咲く春に後れて、花の珍しい時分に、獨この櫻は咲くのであらうか。

評 假令喝采稱讃の語にせよ、獨占を望むのは、人道上からは惡德とも見られるが、櫻の感情と見れば、人間じみて飛んだ可愛い。元來櫻には何の意識もない。只隱微な人情の消息を物に託して洩らしたのである。結句「咲くらむ」にさくらを詠み込んである。それで詞書なしでも櫻の歌とわかる。

題しらず　よみ人しらず

さ月まつ山ほとゝぎすうちはぶき今も鳴かなむこぞのふる聲

釋 ○さ月まつ　「さ月」は陰曆五月の異名。早苗月の義。なほ諸說ある。時鳥は多く五月に鳴くのでおのが五月などもいひ慣れてゐる。そこで四月頃はその鳴くべき五月を、山の中に待ち居るもののやうに取り成していつた。○うちはぶき　「うち」は接頭語で勢を強むる語。「はぶき」は羽振で、羽叩きする事をいふ。振りを古くは

ふきといつた。○こぞのふる聲　去年の舊い聲。

大意　五月をおのが鳴く時として待つて居る山時鳥よ、まだ五月にならぬから、今年の初聲は出されずとも、山から飛んで來て、去年の舊聲なりとも、この卯月の今まあ鳴いてもらひたいわ。

評　聲に新古の別がある筈はないが、それをあるやうに取り成すのが作意である。

こぞの夏なきふるしてし時鳥それかあらぬか聲のかはらぬ　（夏　歌）

あたらしくてる月影に時鳥ふる聲しるく鳴きわたるなり　（躬恒集）

などあつて、時鳥に古聲をいふのは、この集の前後に專ら流行した意想と見えた。しかしこの歌の面白い所は、去年の古聲でもいゝから聞かせてくれと、極めて消極的な謙讓な希望を叙べたと表面には見せかけて、その實去年の古聲でも、今年はじめて鳴けば、卽ち今の初聲であることである。又「うちはぶき」は鳴いて飛び出す形容なので、隨つて「さ月待つ」が山にひそみ隱れ居る狀にも聞かれ、相對上甚だ面白くなる。「今も」はおのづから「ふる聲」に對へた響がある。意詞曲折して巧なものである。

伊　勢

さ月こば鳴きもふりなむ時鳥まだしきほどのこゑを聞かばや

釋　○こば　來らば。○ふり　舊り。○まだしきほど　未(イマダ)しき間。○ばや　希望の辭。

大意　時鳥は五月が來るならば、屢鳴くので、聲が舊臭くなつてしまはう、それ故今のまだ早いうちの聲を聞きたいものよ。

評 そしたら珍しからうをの餘意がある。四月中に時鳥の聲を待ち戀ふる意は、前の歌と同じで、その趣向が違ふ。理が聞え過ぎて、歌は遙に下つてゐる。

五月待つ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする

よみ人しらず

釋 ○五月待つ花たちばな 「五月待つ」は前の時鳥の歌にあると同じで、橘も五月に咲くものだからである。されど前のはその五月を待ち居る間をいひ、これは既に五月を待ちつけて咲き出たのをいふので、少し異なる。○花たちばな 橘を四五月の交、花咲く時につけていふ稱。この橘は今いふ橘とは別種の物で、葉と花と實とを同時に賞翫したことが、古い文書に見えてゐる。その點では今の夏密柑が近いものであるが、もつと小さい實で柑子の如き物であつた。密柑を以てこれに充てるのは無稽である。あれは實が花の咲く夏まで保たない。

大意 五月を待ちつけて咲く、その花橘の香を嗅ぐと、今に忘られぬ昔馴染の人の袖の香がサ、存外するわ。

評 橘の木蔭近くさまよふ人の、うちしめりなつかしく匂ふ花の香に、ふと昔の人の袖の香を聯想して詠んだものだ。香を嗅ぐといふに、作者の動作が現れて、相對的に昔の人が親密に意識されてくる。この「昔の人」は死んだ人の事ではない。昔馴染の人である。作者はこの歌の勁健な風調から推すと、男と思はれる。すると袖は昔馴染の女の袖である。かう兩性間の問題となると、その袖の香を云爲するのは、卽ちその女を云爲する譯となるので、一時忘れて居た戀々の情が、橘の香によつて復活する。詠歎の味ひが隨つて永く深い。今少し感情の動きに猶豫あらば、昔の人の袖の香ぞ思ひ出でらるゝと、多少分別の語にも渉らうが、只それを嗅いだ瞬間

の感じを端的に打ち出したので、直に「袖の香ぞする」と決定的に斷言する始末となつた。これがこの歌の佳い處だらう。春歌上に「誰が袖ふれし宿の梅ぞも」とあるも同趣であるが、これは天籟で、人爲の工がないので優つてゐる。歌體古朴で雅で、たしかに奈良の遺調である。「香」といふ語が二つある。古代は同字の病を忌む事が嚴でなかつた故もあるが、猶よく思ふと、橘の香と袖の香と、自然の對を作つてゐるやうだ。

○

いつのまにさ月來ぬらむあしひきのやま時鳥いまぞ鳴くなる

釋 ○鳴くなる　「なる」は歎辭。

大意 これはまあ何時の間に五月が來たのであらう、五月を時として鳴く山の時鳥が、思ひもかけず今サ始めてあれ鳴くわ。

評 これも時鳥は五月の節に鳴くものとして、光陰の推移の速なことを驚歎したのである。秋歌上に、

きのふこそ早苗とりしかいつの間に稻葉そよぎて秋風ぞ吹く

とあるに立意は相似て、「いまぞ」の一語がこの眼目である。その突然なのを意外とした樣子がよく表現されてゐる。これを「日頃待ちに待ちたるを待ちつけ得たる意」と解した人もあるが誤解である。それでは初句の「いつのまに」が無用の語となるではないか。歌の姿はのんびりしてゐる。

○

けさき鳴きいまだ旅なるほとゝぎすはな立花に宿はからなむ

【釋】○旅なる　住み着かずしてあるをいふ。

大意　今朝はじめて山から里へ來て鳴いて、いまだに旅がけで居る時鳥よ、いづれ宿を借るだらうが、幸ひこの庭に咲き匂ふ橘に、宿は借りてもらひたいわ。

【評】さらば其の聲が親しく又多く聞かれようと、頼み思ふ心持が歴然としてゐる。花橘が軒端に匂ふなつかしい夕間暮、今朝はじめて鳴いた時鳥が、猶あちこちと飛び廻つてゐるのを見て、旅がけの人を聯想し、さて旅人は夕暮には宿を借るので、それに擬へて、同じくは軒端のこの橘に宿つてほしいと希つた趣向は面白い。かう時鳥を人間扱にする事は、頗る時鳥に親しみを持つ所以である。今朝の時鳥と今も飛び廻る時鳥とは、別の鳥である事は無論なのを、おなじ鳥と見成したのは、全く分別を離れてゐる。古へは今の松や梅などの如く橘は大抵の人家の庭前にはあつたものである。空家になつても、必ずそこに橘が殘つてゐるので、故郷の軒の橘など詠み慣つてゐる。時に應じて時鳥に詠み合はせることは、後世鶯に梅を結ぶに同じい。奈良朝時代盛に愛翫せられた事は、萬葉集がその例を多く示してゐる。

音羽山をこえける時に、時鳥の鳴くを聞きてよめる

紀　友　則

おとは山けさこえくればほとゝぎす梢はるかに今ぞ鳴くなる

【釋】○音羽山　山城國山科にある洛東東山の一峰。そこに今も名刹清水寺がある。

大意　音羽山を今朝越えて來れば、時鳥が梢の方遙に、思ひかけず今サ始めてあれ鳴くわ。

評　「音羽山を越えける」といつても、この路は音羽山と阿彌陀が峰との山峽を山科へ出る路で、今澁谷越といふ處である。作者は近江方面へ何か所用があつて、拂曉に京の家を出立して、澁谷越にかゝつた頃は、朝もまだ早い頃だつたらう。折柄はからず、都にはまだ聞かなかつた杜鵑の一聲を、若葉さす梢の一方に遠く聞きつけた景氣は、いひ知らず面白い。これを見上げた喬木の梢に高く鳴いた趣に見た解もあるが、それでは「梢はるかに」が打ち合はない。又「ぞ」の用法は、上の「いつのまにさ月來ぬらむ」の歌と同じである。實景を只ありに述べて、簡古質實なのは、延喜時代の人の作には稀に見る處で、この作者には折々かうしたのがある。

　夏山の木ずゑしみゝに時鳥鳴きとよむなる聲のはるけさ

から胚胎したやうに一寸思はれるが、内容からいへば全く別裁に屬する。

時鳥のはじめて鳴きけるを聞きてよめる　そせい

時鳥はつこゑ聞けばあぢきなくぬしさだまらぬ戀せらるはた

釋　○はつこゑ　はじめて鳴く聲。○あぢきなく　口語のつまらなくの意。○ぬし　主。○はた　當の義。さし當つた意にいふ。こゝはもまたの意ではない。

大意　時鳥の初音を聞くと、さし當つてつまらなく、誰れともその人の定まらぬ戀心地がされるわ。

評　時鳥の聲には何となく感哀が起つて、戀心地がそゝられることは、奈良人の詠にある。しかしそれは、既に術ない程の戀に惱んでゐる人の事であつた。

何しかもこゝばく戀ふるほとゝぎす鳴く聲聞けば戀こそまされ　（萬葉卷八）

神なびのいはせの杜のよぶ子鳥いたくな鳴きそわが戀まさる　（同　上）

など、何につけても傷心の種となり、戀ひまさる端となる事を思へ。然るに素性のは全く立場が違つてゐる。彼には戀の基調はない。只時鳥の聲を聞くと人戀しい思がふと起るといふ。その理由は彼れの環境か絶對に寂しいからである。既に寂しいその上に、哀感をそゝる時鳥に鳴かれては溜つたものではない。油然として上定まらぬ戀心地が湧くのは、當然の歸結である。「はた」の語調甚だ力量に富んで、置處が頗る妙である。「あちきなく」は自己の行爲をよそ〳〵しく打ち眺めて、批評した口氣で、一寸考へると面白くないやうだが、元來が眞の戀に打ち込んでゐる場合でないから、かうした餘裕もその心境にある譯だ。

二句、家集にも六帖にも鳴くこゑ聞けばとある。これが正しからう。「初聲」は意も調も少し急で浮いてゐる。且又この集の詞書は、歌にあらはれた事は粗く書き、あらはれぬ事は委しく書いて、歌の意を扶けるのが例たから、歌に既に「初聲」とあつたら、煩はしく詞書に「はじめて鳴ける」と重ねて書く筈がない。

奈良のいそのかみ寺にて、時鳥の鳴くをよめる

いそのかみふるき都のほとゝぎすこゑばかりこそ昔なりけれ

釋　○奈良のいそのかみ寺にて云々　「いそのかみ寺」は大和國山邊郡石山(イソノカミ)の良因院をいふ。作者住持の寺である。「奈良の」とあるが古來の集訟となつてゐる。奈良と石上とは處が離れてゐるのに、いひ續けたのは不審である。或は「石上へは奈良を過ぎて行けば遠からぬ程にもあればいひ續けたり」といひ、或は「歌にいへるふるき都は

奈良の故京をさしたるなれば、安康帝の石上なる穴穂宮、仁賢帝の廣高宮と紛れぬ爲に、奈良のと添へたり」といひ、或は「平安の京となりては、石上あたりをも廣く奈良といひならへり。譬へば今の世に丹波國なる愛宕を京の愛宕といふ類なり」といひ、或は「奈良のは全く後人のさかしらに加へしなるべし。歌は石上の懐古なるをや」ともいつて一決しないが、昔の奈良の京は廣大で、石上に隣接してゐたうへに、後世大和の七大寺十五寺を南都七大寺十五大寺といふ類で、大まかに書いたものと見てよからう。○いそのかみふるき都　石の上布留（フル）といふ續きで、布留は石上のうちの地名である。それに舊きをいひ添へた。

大意　この石上の古い都跡は、何もかも昔とは變りはてた中に、只時鳥の鳴く聲のみがサ、昔の通り變らずにあつたわい。

評「こゑばかりこそ」の「こそ」の用法が力強いので、他の事物は一切昔でない趣が反證される。作者とて昔の時鳥の聲を聞いた譯ではないが、これは變化ないものと斷定して詠んだ。作者が住んでゐる良因院のあたりは、安康、仁賢二代の帝都の址で、衣冠の邱は梵僧が不斷讀經の場となり、花草の苑は野人が鋤き捨てた野らとなつて、前朝の事は茫として夢のやうに覺える中に、なまじひに感哀を催す時鳥の聲ばかり昔のまゝなのが、對映上却つて傷心の種子となるのである。上に、

　ふる里となりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり

とあると感興の基本が同じである。又萬葉集に、

　あを丹よし奈良の都はふりぬれどもと時鳥なかずあらなくに（巻十七）

これは景物までも同じで、全く等類の歌だが、詞に精粗の差がある。所謂椋の葉磨きをかけて、古撲を切磋し

て清新としたのはこの作である。

題しらず　　　　　　　　　　　　　　よみ人しらず

夏山になくほとゝぎす心あらば物おもふわれに聲な聞かせそ

釋　○夏山　夏季の山をいふ。○心あらば　思ひ遣りがあらばの意。

大意　この若葉さす頃の山で鳴く時鳥よ、汝も思ひ遣りの心があるならば、このやうに物思ひをして居る自分に、お前の鳴く聲を聞かせてくれるなよ。

評　お前の聲を聞けばいよ〳〵物思が增して堪へられぬからといふ餘意が含んでゐる。心ないものに對して、「心あらば」と希ひ、「聲な聞かせそ」と誂へた。蓋し切なさの思ひ餘つた叫である。何か憂苦のある山里人の述懐で、時鳥の聲を悲しい聲と斷定しての趣向である。されば「なく」が主腦の語となるので、輕く看てはならぬ。まこと彼が聲は音短く節促つて凄絶惻絶、人の心を傷ましめる調子なので、漢土ではこれを血に泣くとも、蜀の望帝の魂の化した物とも、さま〴〵悲哀な傳說を傳へてはゐるけれど、面白く賞美する意に取り成した詩作は極めて稀である。日本でも古くは多く然うであつて、萬葉集にも、

時鳥なかぬ國にも行きてしがその鳴く聲を聞けばくるしも（卷八）

など詠んでゐる。それを尋ねても聞かうと願ひ、初聲を夜明かしでも待つやうに愛翫する趣に詠むのは、平安時代になつての事である。實際彼れの聲音は悲調を帶びてゐるが、環境や背景からして、又面白くも感ぜられもする。

〇

ほとゝぎすなく聲聞けば別れにし故郷さへぞこひしかりける

釋 〇さへ　添ひ加はる意の辭。

大意　時鳥のなく聲を聞くと、さまぐ懷かしく思ひ出される事が多く、住み捨てた故郷の事までがサ戀しくなつたわい。

評　遊子の腸を斷つ不如歸の一聲は、漢詩にいひ舊した事である。「さへ」の一語は一寸考へなければならぬ。思ひ出の第一に推すべき筈の故郷を、「さへ」と第二におとしたのが訝しい。想ふにこの故郷は作者が厭はしく思つて住み捨てた處かも知れない。さのみ懷かしくもない故郷までが、この聲ゆゑに戀しく慕はしくなつた意と見たら適ふだらう。

〇

時鳥ながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから

釋 〇ながなく　汝が鳴く。〇なほ　やはりの意。〇うとまれぬ　「ぬ」は現在完了の助動詞。〇思ふものから　「ものから」はこゝでは物ながらの意。

大意　時鳥よ、お前が氣が多くて、鳴く里のあちこちに澤山あるので、お前を慕はしくは思ふものゝ、やはり疎疎しく思はれるわ。

評 單に表面から解釋して、時鳥ばかりの歌としては、立意が利己的で、甚だ面白くない。これは必ず眞意は外にあるので、比喩の歌と見るのが至當だらう。卽ち旨い事ばかりいつて自分をあしらひながら、他にも言ひかはす女の澤山ある人を、時鳥に喩へての作に違ひない。伊勢物語には、これを賀陽(カヤノ)親王（桓武帝の皇子）が異心(コトゴコロ)ある女に給うた歌としてあるのは、この間の消息を捉へ得たものである。「あまたあれば」と悋氣はしても、一面に思はずには居られない、いや思ふからこそ悋氣もする。この內面的葛藤に頗る面白い情緒が閃いてゐる。この集雜上に「月面白しとて、凡河內躬恒がまうできたりけるによめる」と詞書ある貫之の歌に、

かつ見れど疎くもあるか月影のいたらぬ里もあらじとおもへば

は、その事情も構想も全く同一であるから、相通はせて見たら了解されよう。いづれも時鳥なり、月影なりを擬人して表面的叙述を完了して、寓意を隱然たらしめた手腕は巧妙である。

○

思ひいづるときはの山の時鳥からくれなゐのふり出てぞなく

釋 ○思ひいづるときはの山　思ひ出づる時に、常磐山をかけた。「思ひいづる」はわが戀人を思ひ出すのである。常磐山は山城國の名所といふ。○からくれなゐの　唐紅の如くの意。紅にからの美稱を添へて「唐紅」といふ。その紅色を染める時に、紅の染汁に布帛を入れては、度々振り動かして色濃く染め付けるので、「ふり出て」の序詞となつた。○ふり出て　振り立てといふに同じい。

大意 戀しい人を思ひ出す時に、常磐山の時鳥が、恰も自分とおなじやうに、聲を振り立てゝサ、あれ鳴くわ。

評 戀人を思ひ出す時は聲立てゝも泣かれる。この事相を基調として趣向を立てた。初句は結句に影響があるので、單なる序でもなく、時鳥を思ひ出すのでもない。また昔を思ひ出すのでもない。契沖が時鳥が自分の妻を思ひ出す時と解したのも牽强である。又「唐紅のふり出て」に拘はつて、血涙紅涙と解した說もあるがわるい。只「唐紅」は序であるとのみ覺えてよい。然し常磐山の綠色に唐紅の配合は自然の句となつて、一首の表を飾つてゐる。初句に「いづる」、結句に「出て」と、同意の語が重なつてゐるのは、不用意と見える。

○

こゑはして涙は見えぬほとゝぎすわが衣手のひづをからなむ

釋 ○ひづ　ひぢと同語。浸つて濡れたのをいふ名詞。

大意　鳴く聲はしても、その癖に涙は見えぬ時鳥よ、この自分の袖が物思の涙の爲に、びつしより濡れてあるのを、お前の涙に借りてもらひたいわ。

評 もとより物思ある人の作である。想ふにこの作者は時鳥とは反對に、涙は見えて聲はせぬ、即ち忍び泣に泣いてゐる人だらう。「は」の辭をうち重ねて相對へたのも、さうした下意がありさうに思はれる。時鳥に借りてくれとまでいふので、その涙の多量なことが想像され、涙の多量なことで、物思の甚しい事が推定される。又涙の見ゆる見えぬといふのは、手近の梢を渡つて鳴く時鳥らしい。鳥の啼くにも涙をいふのは、春上に「鶯の氷れる涙云々」と詠んだ類の聯想である。

○

あしひきの山時鳥をりはへて誰れかまさるとねをのみぞ鳴く

釋 ○あしひきの　山の枕詞。○をりはへて　時延(ヲリハヘ)で、時長く續くをいふ。居り延へといふ說もある。○誰れかまさると　「か」は疑辭。「と」はとての意。○ねを　「ね」は聲を立てるにいふ。

大意　時鳥が折も折とて、自分が物思をして泣いて居る處へ、引き切りなしにいつまでも鳴き競つて、誰れが勝つかといふやうに、聲を立てゝサ、ひたすら鳴くわ。

評　世に侘びしれて山里に籠つた人などの作だらう。打ち眺めた山の茂みに、絕間なく聞える時鳥の聲の、自分の泣くに競ひ顏なので、「誰れかまさる」とて時鳥が鳴くやうに、有心に取り成したのが一ふしである。景樹が「こゝらの時鳥の互に聲を競ふ事なり」といつたのは、結句の意を何と見たのか。すべて音を啼くは只泣くのをいふのではない。心を聲に交へて啼く意だから、時鳥のうへだけなら、只鳴くとあるのみでもよい筈だ。これは憂思ある人が、時鳥の鳴くをも同情に推想したもので、人の啼くと時鳥の鳴くとを撮合して、「誰れか」といつたのである事はいふまでもない。

この歌再び後撰和歌集に入つて、三句うちはへてとある。「をりはへて」はあまり耳遠いので、たま〳〵異傳を得たので擧げたと見える。

○

今さらに山へかへるなほとゝぎす聲のかぎりはわが宿になけ

釋 ○今さらに　今改めての意。○聲のかぎり　聲のありたけ。

大意 これ時鳥よ、お前も山から出て來て、折角里馴れた事だから、今改めて山へ歸るなよ、是非に聲のありたけは、此方の宿に居て鳴き盡しなさい。

評 五月も大分更けて、時鳥の鳴く音の間遠になつた頃の作である。時鳥の間遠になつたのを、古巣の山へ歸るものとして詠んだ。「今更に」の一語不盡の妙がある。折角今まで馴染んだものをと抑へて、「聲のかぎりは」との懇望、彼れ時鳥を熱愛する情緒が、深く強く表現されてゐる。

二句、六帖にみやまに歸るとある。

以上の詠人しらずの諸作、格調はあまり高古でない。延喜時代にさのみ遠からぬ頃の作らしい。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

やよや待てやま時鳥ことづてむわれ世の中に住みわびぬとよ　みくにのまち

釋 ○やよや待て　「やよや」は俗にやいのといふに似てゐる。對手を呼びかける語。「待て」は命令格。○ことづてむ　言傳（コトヅテ）をしよう。○住みわびぬとよ　住みあぐんだといふ事ぞよの意。

大意 山へ歸る時鳥よ、これよ一寸待つてくれ、山里人へ傳言を頼まうわ、その傳言は外でもない、自分はもうこの世の中に住みあぐんだといふことよ。

評 追つ付け貴方のお住みなされる山へ、私も隱れようと思ひますの餘意がある。この作者は仁明帝の更衣で、貞（サダ）朝臣登の母君である。登朝臣は母の過失に依つて、僧となつて深寂と號したと、三代實錄に出てゐる。され

ば「言傳てむ」とある山里人は、或は山寺に籠つたわが子の深寂をば指されたのかも知れない。實に一旦の過失から世に捨てられて、物思の絶えぬあまり、いつそわが子深寂のゐる山にでも籠つてしまひたいと思ふ折しも、時鳥が鳴き渡つたのである。夏も大分深けた頃なので、それを山へ歸るものと聞き成して、さて一趣向を立てた。一首の語調の迫つて窘しげなのは、まさに作者の胸の切ない鼓動を聞くやうである。舊註、奥儀抄などの說に、時鳥は死出の山を通ふ鳥だから、人などに後れて世の中歎かしく思つた時よんだもので、

なき人の宿に通はゞほとゝぎすかけてねにのみ泣くと告げなむ　（集中、哀傷）

と同意だらうとあるが、どうも承け難い。

この三國の町の署名に一考を要する。母の罪が子にまで及んで、屬籍を削られた程だから、無論町は勅勘の人であるとすると、よみ人知らずと署すべきである。尤も承和の御時だから、永い間に何時か勅免を得たのかも知れない。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた　　紀　友　則

さみだれに物おもひをれば時鳥夜深く鳴きていづち行くらむ

釋 ○さみだれに　「さみだれ」は普通梅雨の名稱となつてゐるが、こゝは梅雨の降る季節を指していふ。○いづち　何方。

大意　梅雨の頃によろづ心細く、夜もくよ〳〵と物思して居ると、時鳥はこの夜深に啼いて、どちらへ行くのであらうぞ。

評 あゝ心細い事よの餘意がある。實はこの餘意が一首に亘つた主觀で、梅雨の頃といひ、夜深けといひ、時鳥といひ、暗闇といひ、不分明なことといひ、どれも不安な悲しい感じを惹き起す媒である。これ巧まぬ巧で、一寸見にはさのみ手のないやうなのが、この風調の高尚な所以であらう。時鳥の歌では絶唱ともいはれる拾遺集の、

鳴きすてゝいづち行くらむ時鳥淀のわたりのまだ夜深きに

の藍本として、餘り遜色がない。

〇

夜やくらき道や惑へるほとゝぎすわが宿をしも過ぎがてに鳴く

釋 ○夜やくらき　夜が暗いのか。○道や惑へる　道を間違へたのか。○わが宿をしも　「し」は强辭、「も」は歎辭。○過ぎがてに　通り過ぎる事の出來にくさうにの意。

大意 この頃の五月闇で夜が闇いので、どちらへもえ行かぬのか、それとも道に迷つてさまよつて居るのか、時鳥が所も多いに私の宿をサ、取り分けいかにも通り過ぎにくさうに、どちらへも行かずに鳴いて居るわ。

評 假令夜が暗くても時鳥が道を惑ふわけもあるまいが、人間の慣ひから推想したのである。もと〳〵數多の時鳥の鳴き過ぎたのを、一羽の時鳥のさまよつて鳴くと聞き成したのが、趣向である。更にそのさまよひ鳴くに就いて、「夜や闇き道やまどへる」と、その兩端を叩いて、時鳥の行動を不安らしく臆測し心配した處に、作者の親切らしい纏綿の情致がみえる。「しも」の用法に注意を要する。特に取り分ける意の辭なので、他に强くさ

し當てる餘意を生じて、譯すると、所も多いにわが宿をの意となる。

やどりせし花たちばなもかれなくになど時鳥こゑ絶えぬらむ　大江千里

譯 ○やどりせし　宿を取つた。○かれなくに　枯れぬのにの意。「なく」は否定のぬの延言。○など　口語のなぜに當る。

大意 時鳥の宿を取つて居た橘も、まだ枯れはせぬのに、なぜにまあ時鳥の聲が、一向こゝにはせぬやうになつた事だらう。

評 橘を時鳥の宿とする事は萬葉集にも再三見え、上にも「花橘に宿はからなむ」と詠んである。さて宿にした橘は依然としてこの軒端にあるのに、時鳥の來なくなつたのは不審といふ。この理窟らしい不理窟が、詩味を醇成する。橘の枯れぬ事と、時鳥の聲の枯れて絶えた事とを湊合して、上下の句に對へて鬪はしめたのは、後にも、

月見ればちゞに物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど

と詠んだのと同一の手法で、この作者の好んだ風體らしい。又「花橘も枯れなくに」は、廣陰の説に、橘の花の散らぬのをいふのであらうと。これも一説で捨て難い。

結句、六帖にきなかざるらむとある。この意で初句を解すると、去年宿を取つた橘がいまだに枯れぬ趣になる。

但こゝの排列の次第から見ると、きなかざるでは合はない。

きのつらゆき

夏の夜のふすかとすれば時鳥なくひとこゑに明くるしのゝめ

釋 ○夏の夜の　「の」文字を「はの意なり」と宣長、千秋等は解し、景樹は「いかにしてもこのまゝにては聞えず。顯本にはとあるぞ正しき」といひ、廣蔭は「結句の『しのゝめ』へかゝるのにて、體言を連續せしむる意の辭ならむ」といふ。これは夏の夜がと解して「明くる」に係けて見るが穩かである。○ふすかと　臥すかと。○しのゝめ　東雲なるかなの略。「しのゝめ」は、夜明方をさしていふ。字義は篠之芽で、その色に赤みがある故、あかる(明)の意に通はせて、明くといふ語の枕詞となり、それが一轉して、直に夜明方の名稱となつた。さゝがには蜘蛛の枕詞なのを、直に蜘蛛の事とする類である。一說にしぬのめは篠の群の義ともいふが、あかるの意に連絡がないので、意義が不完である。

大意　寐るかと思へば、時鳥の鳴くその一聲に、意外にはやもう、夏の夜の明ける東雲の空であることよ。

評　さて〳〵寐る間もない程に短いなの餘意がある。二句は寐るか寐ないかのうちになどいふ如く、碌に打ちも臥さぬさまで、これ秋の夜、冬の曉などの幾度寐覺めても猶明けやらぬのに對へた趣向である。夏の夜がいかに短いとて、時鳥の一聲のうちに明ける事はないが、短い印象を强める爲に誇張して表現した。これを一聲を待ち得た間に夜が明けるとも、一聲のみで二聲と鳴かぬうちに東雲となつたともいふ說は、理に泥んで興趣を忘れたもので、論ずるに足らぬ。下句頗る力强い叙法である。

みふのたゞみね

暮るゝかと見ればあけぬる夏の夜をあかずとや鳴くやま時鳥

釋 ○あかずとや　飽かずといつてかの意。

大意　日が暮れるかと思へば、はやもう明けてしまふこの夏の夜を、あまり殘多く不滿に思つて鳴くのか、あの山時鳥は。

評 わが短夜を惜む心から、時鳥の鳴く意中をも同意に推想した。又「飽かず」を明かずとかけたと見られぬでもないが、さうとすると、明かず明けぬるの反對の懸合が、餘に露骨過ぎて、下手な狂歌に近い。故に飽かずを本義にのみ采るを穩かとする。

紀　秋岑

なつやまにこひしき人やいりにけむこゑふりたてゝなく時鳥

釋 ○なつやま　夏季の山。○こゑふりたてゝ　聲高く張り上げての意。

大意　この夏山に戀しい人が籠つてしまつたのであらうか、頻にこの節聲を張りあげて時鳥が鳴くわ。

評 戀に泣かれるのは人情の常なので、夏山になく時鳥を聞いても、その山中に彼れの戀しい人が籠つたらうと、その意中を推測した。山に入ることは、世に侘びて山に住居するのも、出家遁世して山寺に入るのも種々あつて、どれと定めた事はないが、殊にこの頃の世態では、世を厭つて出家して山籠りする、それが心深い仕業のやうに見られた。その實例としては多武峰（タフノミネ）少將が最も著名であらう。當人は覺悟の上の事だが、あとに殘された父母妻子は、泣いてもわめいても追つ付かない。乃ちこの趣を夏山の時鳥に撮合した。新撰萬葉集にこの歌

に合はせて、「一夏山中驚(カス)二耳根(ヲ)一、郭公高響入(クイテル)二禪門(ニ)一」とあるも、この歌の意をよく辿つたものである。

題しらず　　　　よみ人しらず

こぞの夏なきふるしてし時鳥それかあらぬかこゑのかはらぬ

釋 〇なきふるしてし　澤山に鳴いて珍しげもなくしたのを「鳴きふるす」といふ。「てし」は現在完了の「て」の助動辭に、過去の助動辭の「し」の重なつたもの。〇あらぬか　それにはあらぬかの意。

大意 去年の夏頻に鳴いて、古臭くしてしまつた時鳥の聲が又聞えるが、あれは去年の時鳥か、それとも別の時鳥か分らぬが、聲が第一去年のまゝ變らぬわ。

評 時鳥はどれも一樣の聲で、又年によつて聲に新古の別ある筈もない。それらの理趣を超越して、そこに想像を描いて、新古の別をおもひ、聲に差別をつけ、これはどうしても去年のであると斷言せぬばかりにいひ詰めた痴意が面白い。上にも「今も鳴かなむ去年のふる聲」と詠んだ類である。四句、句中句ありともいふべく、同じ語法を反復して切り調へたので、最も力強く聞える。それに應じて結句も旨くおき得てある。これをもし聲ぞ同じきなどいはうか、上來の語勢忽ち頓挫して、尾枯れとなつてしまふであらう。

時鳥の鳴くをきゝてよめる　　　　つらゆき

さみだれの空もとゞろに時鳥なにを憂しとか夜たゞ鳴くらむ

釋 〇空もとゞろに　空もどんどと。「とゞろ」は響動するをいふ。動詞にはこれをとゞろくといふ。「も」はさへ

もの意。○夜たゞ　「たゞ」は直(タ)の義で、宵から曉まで直に引き續くを「夜たゞ」といふ。夜通しにおなじい。

大意　梅雨の空もとゞろに鳴り響くほどに、時鳥は何事を憂いと思つてか、あのやうに夜通し泣くのであらうぞ。

評　天地の寂寥を破つて、梅雨の闇の夜空を鳴きとよもす時鳥の悲愴な聲は、よもすがら獨起き居る愁人の斷腸に堪へぬ處、坐に同情を寄せて、どんな憂き事があつてか泣くと、不審も打つて見たくなるのである。時鳥の聲はさほどの大聲でもないのに、「空もとゞろに」はその鳴くことの盛んさを誇張したもので、三句以下の語を成す素地を作つてゐる。立意は何でもないが、この誇張とかの疑問と相俟つて、その應接の間に不言の妙味が生じてくる。

さぶらひにて、をのこどもの酒たうべけるに、召して「時鳥待つ歌よめ」とありければよめる　　みつね

ほとゝぎす聲も聞えず山彦はほかに鳴く音をこたへやはせぬ

釋　○さぶらひにて云々　「さぶらひ」は禁祕抄に「下侍(シモザブラヒ)二間、有(リ)二炭櫃一、四面敷(ク)レ疊(ヲ)、號(ク)二侍臣亂遊所(ノト)一也、云々。酒宴等於(テ)二此所(ニ)一行(フ)レ之(ヲ)」とある通り、禁中で五位六位の殿上人達の詰所を侍所とも、下侍ともいふ。「をのこ」は男子の義で、家隷(ケライ)をいふ。主上から藏人頭をはじめ五位六位の人々をさして宣ふ語であるが、この集は勅撰で御覽に供へるものだから、その語を以て書いた。「酒たうべ」の「たうべ」は口語の食(タ)べと同じい。さて詞書の意は殿上の侍所で、侍臣等が酒宴した時に、躬恒をその座に呼び出して時鳥を待つ歌を詠めと所望したので、躬恒が取りあへず詠んだといふ意。この「召して」を、主上の御前に召したやうに解いた諸註は誤である。召すは天子

に限らず、尊卑兩者の間には廣く用ひられる詞で、躬恒は當時甲斐少目といふ極めて淺い官位の者だから、殿上人の詰所である侍に呼んだのは、卽ち召すといつてよい。若し强ひて主上の召した事とすると、「歌詠めとありければ」とあるを、どう解釋するつもりか。餘に失禮の文體ではあるまいか。前後の例を推すに、主上の御詞には必ず仰せ云々とある。秋部上に「寛平の御時七日の夜、うへにさぶらふをのこども歌奉れと仰せられける時、人にかはりてよめる」とある詞書を見合はせて心得るがよい。○山彦　こだま。反響をいふ。山に靈があつて物の聲に應ふるやうなので、男神の美稱なる日子を添へて呼ぶ。或說に「ひこ」は響の急語で、萬葉集九に「足日木乃山響令動」とありといふ。しかし山響は義訓だと思ふ。○やはせぬ　春歌下「櫻花春くはゝれる云々」の條に既出。

大意　待てども〱時鳥の聲がまあ聞えぬわ、なぜに山彦は、餘所で鳴く聲をなりとも應へて、此處へも響かさぬぞ、應へて響かせて聞かせさうなものだに。

評　獻酬數巡、夜も更け渡つた折柄、時鳥も啼き出しさうな五月の空のけはひなので、歌人躬恒をこの座に呼び出して、待つ歌詠ませて酒の肴としたのは、時に取つての殿上人等の風流であらう。この際皆樣の酒のお肴に、本物の時鳥はもとより、山彦だつてよその反響くらゐお聞かせしてもよかりさうなものを、どれも氣が利かないと申し上げた。時鳥の鳴かぬあまりに、應へぬ山彦を恨み咎めたのは、客を借りて主を形する筆法である。待つといふことを詞に顯さないで、その聲を待ち戀ふる意があり〱と見えるのは、流石に老手である。躬恒でなくて誰れに出來よう。當夜の入興はさもと思ひ遣られる。

三句、顯本にあま彦とあるは山彦に同じい。

山に時鳥の鳴けるをきゝてよめる　　つらゆき

時鳥ひとまつ山になくなればわれうちつけに戀ひまさりけり

釋 ○ひとまつ山　人を待つといふに、松山をかけた。松山は松の生えた山をいふ。名所ではない。○うちつけ　突然に、卒爾になどの意。

大意　時鳥が人を待つといふ名の松山に、あれあのやうに鳴くので、自分もふつと人を待つ心になつて、戀しく思ふ事が、これまでよりは增さつたわい。

評 これは當時の男女會合の習慣をまづ思はねば解るまい。夫妻にまれ、相思の間にまれ、男は女の家に夕暮每に通つて往つたものである。今何の思念もなく山本を越えてゆくと、時鳥が山松の梢をかけて頻に鳴く。松に待つの響があるので、端なく自分の來るのを待ちつゝ、時鳥の如く泣いて居るかと、愛人の上に想到されたのである。こゝに至つて端的に居たゝまれぬ程人戀しくなつてくる。さもありさうな自然の聯想である。「人まつ山」は旣に春歌上の「白妙の袖ふりはへて人の行くらむ」の條でいつた通り、この作者の慣用の語法である。大和物語にも「君まつ山の時鳥」といふ歌がある。恐らくはこれを點化したものだらう。

はやく住みける所にて、時鳥の鳴けるを聞きてよめる　　たゞみね

むかしへや今も戀しきほとゝぎす故鄕にしも鳴きて來つらむ

釋　○はやく住みける所　以前住んだ所。卽ち故鄕である。○むかしへ　昔方。「へ」は方の意。行方(ユクヘ)などのへと同じい。

大意　住み馴れた昔が、今でも戀しいのかしら、あの時鳥が所も多いに、自分が昔住居をした土地にサ、取り分け鳴いて來たのであらう。

評　わが昔戀しくて故鄕を音づれたので、時鳥の來て鳴く意中をも、同意に推想したのは、作者の狡獪な處で、畢竟はわが意中を時鳥に託してうち出したのである。「しも」の餘意は前の「わが宿をしも過ぎがてに鳴く」の處でいつた通りである。處も多いに軒には忍草生ひ、垣には蔦かづらが這ひ纏つて、露けき野原と荒廢した故鄕のあたりに、わざ／＼鳴音を洩らしにくる時鳥は、げに這般の心ありげなものと見られる。詞のうへでは「昔」と「今」と鬪はせてある。

時鳥の鳴けるをきゝてよめる　　みつね

時鳥われとはなしに卯のはなのうき世の中になきわたるらむ

釋　○われとはなしに　我れには非ざるにの意。「我れ」は作者自身をいふ。○卯のはなの　「うき」にかゝる序詞。○なきわたる　時鳥の上では、空を鳴いて渡ること。それを自身の泣いて年月を經る意にかけた。

大意　自分は世の中の憂さに堪へないで、泣きつゝ月日を亘るが、時鳥は自分と同じ身でもないのに、何で憂いこの世の中に啼き暮すのであらうぞ。

評　自身をこの上もない憂き身と定めて、時鳥の鳴き渡る所爲をいぶかしみ、彼れを主とし、おのれを客として

相對比して、姿致を取つた。かうした厭世觀はこの時代一般に漲つてゐた事で、殊にこの作者にしばしば歌はれたが、後世に至りますます甚しくなつて、遂には陳腐厭ふべきものとなつた。「卯の花の憂き世」と疊み重ねた叙法は、萬葉集卷十に、

うぐひすのかよふ垣根の卯の花のうき事あれや君が來まさぬ

とある三四の句を踏襲したのである。蓋し時節の景物を借りての序詞だから、詞づかひが細やかにうるはしく聞える。又何故にといふ語を句中に挿みて聞くのは、例のらむ留めの一格である。

はちすの露を見てよめる　　僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

譯 ○はちす葉　蓮の葉。○しまぬ　染まぬの意。○なにかは　「か」は疑辭。「は」は調を強める爲に添へた辭。反辭ではない。

大意　蓮は泥中に生ひたちながら、その泥水の濁にも染まぬほどの潔白な心を以て、何であのやうに、葉の上の露を玉として見せて、人をば欺くことか。

評 法華經の湧出品に「不染世間法如蓮花在水」とあるを取り合はせて、初二句は詠んだものか。桑門の作者おのづからさうした準據があらうと思はれる。又「濁にしまぬ心」は蓮の心だから、初句は蓮のと云ふだけで十分なのを、露の置くに取緣もあるので、熟語として「蓮葉の」と連ねたのである。尚このこと委しくは、春歌上、

宿近く梅の花うゑじあぢきなくまつ人の香にあやまたれけり

とある歌の處で、いつたのを見合はせるとよい。萬葉に「蓮葉にたまれる水の玉に似たる見む」と歌つたやうに、覆盆の如き立葉のうへに溜つた露の、宛轉として皎潔なのを見た時、怪しく白玉かと思ひ惑ふを、却つて蓮が心あつて露を玉と欺くやうに取り成して詰問したのは、頗る奇巧を弄した處で、落想人の意表に出てゐる。この種の想は眞摯の情にこそ乏しいが、氣韻こそ高くないが、また一種の感興があつて面白いと思ふ。蓋しこの僧正の獨壇である。

因にいふ、こゝに不思議なのは佛像の蓮花座蓮臺は繪畫彫刻に盛んに現れ、蓮の散華は法會にも經卷にも見えるが、萬葉集でもこの集でも、蓮の花を詠んだのは絶對にない。

月のおもしろかりける夜、曉方によめる　ふかやぶ

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ

釋　○まだ　こゝは口語の意と同じい。正意ではなほの意であるが。○宵ながら　「宵」は夜と同意。又初夜の意にも用ゐる。こゝも初夜である。「ながら」はこゝではまゝにといふに似た接尾語。

大意　夏の夜は短いもので、まだ更けもせぬ宵の間に、はや明けてゆくのを、これではあの月は、とても西山まで行き渡る間もあるまい、すると空の何處に宿を取つて隱れる事であらうぞ。

評　端居しつゝ涼夜の月を見耽つてゐるうちに、早くも明方になつた一時の驚きに、道理を滅却して、深夜なしに宵のまゝに明けたと速斷した痴意稚氣は、やがて夏の夜の短い事を表現する誇張の言語となつた。又曉方の

月は大抵山の端に見馴れた心から、今見明した中空の月に對つて、かく突然と間もなく明けては、月は空の何處に宿るだらうかと心配した。これらの痴愚の想は、卽ち詩趣の要素を成すものである。空のいづことといふべきを「雲のいづこ」と轉義したことも、自然の景象が句になつて面白い。立意は新奇だが尖巧に傷らず、姿も淸く長けも高く、語調また流滑である。流石に元輔が祖、淸女が曾祖たるに愧ぢない伎倆。

隣より常夏の花をこひにおこせたりければ、をしみて、この歌をよみてつかはしける　みつね

塵をだにすゑじとぞ思ふさきしより妹とわがぬるとこ夏の花

譯 ○隣より云々 「常夏」は撫子の一名である。夏から秋の末までも咲く花なので、夏を常しなへにする意で常夏といふ。この集以後の詞である。「乞ひにおこせたりければ」は貰ひに使をよこしたからの意。○すゑじ　置くまい。○妹とわがぬるとこ夏　妹と我が共寝をする床といふに、常夏をかけた。妹は妻をも愛人をもさしていふ。

大意 手前の常夏は花が咲いてからこの方は、塵をさへ置かせまいとサ思ひますわ、その理由は妻と手前が中よく寝る床といふ其のとこ夏の花だから、大事に存じまして。

評 これ程大事なものなので、折角の御所望ではありますが、折つてさし上げる事は、とても出來ませんの餘意がある。他より物を請求所望された場合に、極めてその物の貴重ないはれ因緣を絮說することは、卽ち間接に謝絶の意味を表するもので、この手段は吾人が日常の交際上によく利用されてゐる。かう直接を避けて間接に、

露骨を厭つて婉曲に就く理由は、これに依つて他の感情を害しないようにと、力めて其の辭令を巧んだのである。又夫婦間の疎隔して相住せぬ時は、その床も枕も使はぬから、おのづから塵が置くので、古へから床や枕やに塵を詠み合はせて、夫婦間の愛情を歌つたのが多い。こゝもその意で、他に斷りやうもあらうに夫婦愛を宣言しての謝絶は、一寸手きびしいが、これ位また有力な立派な理由は又とあるまい。いかに何としても夫婦中に水はさせない。まあこんな事をいつたりやつたりするので、以てその隣人は極めて隔のない懇親の間柄であることが想はれる。又詞書に「をしみて云々」とあつて、其の花を遣つたとはないが「惜みながら戯れにこの歌を詠み添へて遣はしゝならむ」といふ上田秋成等の說は、事情を揣摩し得たものと思ふ。「常夏」のとこの一語を主眼として、それを夫婦の床に准へて花のなつかしい趣を見せ、さて床の緣によつて、「塵をだに据ゑじ」と極めて大事な所以を述べ、まして折つて上げる事はなり難いとの餘意を含めたのは、恰も一挺の梭から千尋の繭絲を抽き出して組織した匹練のやうで、しかも絕えて補綴の痕がないのは老手である。三句は初句の上にまはして聞くべきである。又四句から五句へのいひかけは、わるくすると卑しげに聞えるが、これは自然で節立たないから、却つて簡淨で嬉しい。六帖に同人の歌、

　妹とわがぬる床夏の花なればなべて人には見せむものかは

とあるはこの前身か。姿碎け、修辭も粗笨で、「塵をだに」と打ち出した姸麗艷冶な姿に遠く及ばない。それを景樹は「其の塵をいはむとする方に引かれて、なべての人に見せじといふ初の主意は傍になりて、よくせずは然は聞取り難きまでなり」と難じて、六帖のををかしと定めたのはあらい。この兩首は全然同一のものでない。六帖のはなべての人には見せじと、露骨に出たもの、この集のは塵をだにすゑぬ大事の物ぞといつて、言

外の餘意を以て謝絶したので、とても同一の論になる作ではない。
三句、六帖に植ゑしよりとある。

みな月のつごもりの日よめる

夏と秋とゆきかふ空のかよひ路はかたへ涼しき風や吹くらむ

釋 ○みな月　陰暦六月の異名。水無月、また水之月の轉語ともいふ。○ゆきかふ　往き交ふで、行きちがふ態。○かよひ路　通路。○かたへ　片方。中古文には、多く半分の意に使用してゐる。こゝもさう解してもよいが假に直譯にしておく。

大意 今暮れて行く夏と、引き換へに來る秋とが往きかひする空の通路は、その秋の通つて來る片一方は、定めて涼しい風が吹くであらうか。

評 夏の果てゝ秋になるを「往きかふ」と擬人し、その縁で「かよひ路」といつた。もとより形もない攫まへ處のないものだから、空中にかよひ路を求めたのは適當の想像で、下句の爲に好都合な素地を作つてゐる。「片へ涼しき」はきはどい處に着眼したもので、炎夏涼秋の境目に立つ六月三十日としては、ほんに動かぬ妙趣向である。そして、秋のくる一面の涼風を想像したことは、早く此處にもその風の吹けばよいと待ち望む心持が、言外にほのめいてゐる。
三句、六帖に通ひ路にとあるは調がつまり、意も味ひも劣つて聞える。

古今和歌集卷第四

秋歌上

秋たつ日よめる　藤原敏行朝臣

秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞ驚かれぬる

釋　○秋たつ日　立秋の日をいふ。○きぬと　來たと。○さやかに　あざやかにと同じい。

大意　秋といふ者が來たと、目にははつきりと見えないけれども、昨日に變つてあざやかな風の音にサ、さては秋が來たぞと思ひ知られたわ。

評　あながちに秋にのみ風の吹き立つものでもないが、立秋の日しも恰も風の吹き立つたのを見て、これを秋の證左としたのが、詩人の興趣である。「さやかに」の語下句に響いて、風の音の耳にさやかなことも聯想される。又四句の下に秋きぬとあるべきを、初句に讓つて略いた。かう視覺と聽覺とから來た感じを、上下の句に按排して反映させたのは一趣向であるが、「目にはさやかに見えねども」は說明に過ぎて、餘情に乏しい。昔は人の許を訪ふに、その家の格子をほと〳〵と叩き、或は扇を鳴らして我が來たことを知らせる習慣であつたから、秋を擬人して、あの風の音に依つてその來たことが知られたといふ構想は、當時に於いては甚だ面白く感ぜら

れたものだらう。故に「驚かれ」も驚愕の意ではなく、人の許を訪ふことを驚し聞ゆると物語などに書いたのと同一の用法で、思ひ知つた、わかつたといふやうな意味であらう。
結句、新撰萬葉に驚かれけるとある。

秋たつ日。うへのをのこども、かもの川原に川せうえうしける、ともにまかりてよめる　　つらゆき

河風の涼しくもあるかうちよする波とともにや秋は立つらむ

釋 ○秋たつ日云々　「うへのをのこ」は上の男の義で、いはゆる殿上人である。「うへ」とは清涼殿の殿上の間をいふ。其處に伺候する四五位の侍臣達の事である。夏部の躬恒の歌の詞書の解參看。「かもの川原」は京都の鴨川原。「川せうえう」は川遊び。「せうえう」は逍遙の字音で、遊ぶと訓む。莊子の逍遙游の語に本づく。「ともに」は諸共にの意。隨伴の意ではない。然し當時貫之は殿上人ではなかつた。「まかりて」は本は退くの意なのを、行くと同意に、この頃から使つてゐた。○涼しくもあるか　「も」は歎辭。「か」はかなと同意の歎辭。

大意　川風が大層涼しい事よ。思ふにこれは、この岸に打ち寄せては波が立つが、その波と一所にサ、秋は立つのであらうか。

評　この秋は冷やかな川波と共に立つて來るのかしらと、その川風の餘に涼しい所以を想像した。故に「共に」の語が主眼である。輕々に看過してはならない。さて波の立つは涼しきまで吹く風のしわざで、卽ち秋のしるしなのを、「たつ」の緣語によつて、波と秋とを連絡して文なした細やかさは、この頃の風體で、殊にこの作者の

長所である。

題しらず　　　　　　　　　　よみ人しらず

わがせ子がころもの裾をふき返しうらめづらしき秋のはつ風

釋 ○わがせ子　春歌上「わがせこが衣はる雨云々」の條に既出。○うらめづらしき　「うら」は心のこと。衣の裏を寄せてある。○秋のはつ風　秋になつて始めての風。

大意 夏とは違つて、わが夫の君の着物の裾を、裏の見えるほどに吹き返して、それはく心珍しい秋のはつ風である事よ。

評 秋立つ頃のきぬぐの朝など、別れにくさうに庭に下りたちながら、前栽のあたりを立ちさまよへる男の後影を、床しく懷かしげに見送つてゐると、その衣の裾を吹き返して、秋風の吹き渡るのが、夏になかつたことなので、珍しさに女の詠んだのである。されば上句を「うら」といひ出す序とばかり解くのは穩かでない。大やう平安朝初頭の作らしい。體格雄渾で氣味清新である。只一寸傾かれるのは、「裾」の一語である。男は大抵の場合袴をはいてゐるから、風が來ても吹き返せない。新撰萬葉、歌林良材に、初句をわぎも子がとあるはその故であらう。着流しでまだ外に出ない間の事としては、風の吹き返すまでの事はあるまい。或は「裾」は袖の誤寫か。六帖には、作者を躬恒とあるが、更にかの風體でない。又家持集にあるのは、杜撰である。

○

きのふこそさ苗とりしかいつの間に稻葉そよぎて秋風のふく

釋 ○さ苗　稻の苗をいふ。「さ」は早の字を當てゝ書くが義は異なつて、さ月、さ處女などのさと同じ美稱である。○さ苗とる　苗を苗代田から採つて水田に植付するまでの所作をいふ。「とる」は執るの義で、その事をなすをいふ。○しか　過去の助動詞のきの變化。

大意　つい昨日あたり苗の植付をしたと思ふを、何時の間に稻の葉が延びて、それがそよ〳〵と動いて、このやうに涼しくも秋の風が吹く事であらうぞ。

評 光陰の經つはさて〳〵早いものよの餘意がある。この餘意を引き立てゝ、强く聞かせる手段として、早苗採と稻葉の秋風とを對揚して、その間に介在する幾ばくの月日の有無に着する分別を放下して、早苗とりしは昨日のことゝいつた誇張、例の事ながら面白い。尤もこれは漢詩にもよくある例で、過去を近くいひなす筆法である。かうして「何時の間に」を呼び出す伏線を作つてゐる。歌柄たけ高く、詞遣ひさら〳〵として、一點の塵垢もとめない。要するに神韻を以て優つてゐる。公任卿の和歌九品にこれを下品に序でて、「すこし思ひたる處あるなり」と評したのは、充分にこの眞價を了解されなかつた故と思ふ。新撰萬葉に、

いつの間に秋穗たるらむ草と見し程いくばくもいまだ經なくに

又貫之集に、

植ゑし袖いまだひなくに秋の田をかりがねさへぞ鳴き渡るなる

など、構想は同じながら、いづれも露骨で疎笨で、風格が甚しく下る。

下句、六帖に稻葉もそよと秋風ぞふくとあるは不調である。

秋風のふきにし日よりひさかたの天の川原にたゝぬ日はなし

釋 ○ひさかたの　天の枕詞。春下に既出。○天の川原　天の川の磧。銀河の事を天河、天漢といふ。直譯してあまのがはと訓む。川原は河畔の平地をいふ。この歌より以下は棚機の事を詠んだものだから、こゝにその概略を述べよう。初秋の頃に牽牛、織女の二星が、銀河の邊に現れる。支那の傳説に、毎年の七月七日の夜を期として、烏鵲が翼を延べて天の川に橋とし、織女がこれを渡つて牽牛と交會するといふことが、續齊諧記、博物志、淮南子等に出てゐる。素よりしどけない傳説の事であるから、牽牛の方から行くやうにも、又舟で渡り或は徒渡するやうにも、さま〲にいひなすのである。七月七日の夕即ち七夕に二星を祭る事は、兒女の業となり、乞巧奠とて針線を供しなどする風習、奈良朝時代に我が國にも傳來して、孝謙帝の代に、禁中に乞巧奠を行はれた事が、國史に出てゐる。又高天の原にある天の安河原を天の川原ともいふので、織女星を神代の天の棚機姫の神に附會してたなばたつめと訓み、牽牛は男なので、彦星と稱した。

大意　妾は秋風のこの間吹き初めた日からこの方、今日はお出になるか〲と、毎日この天の川の畔に出て佇立んで、君を待たぬ日とては一日もないわ。

評　或は牽牛になり、或は織女になつて、渠等が意中の祕密を洩し、情事の消息を通ずるは、萬葉集以來歌人の常手段である。これも織女の身になつて詠んだ。待つといふ意を囘護して道破しないのは、婉曲の味ひのある所以であらう。素より牽牛に逢ふ日は七夕と定まつてゐるのを、七月朔日の立秋の日から、夙く川原に立ち待

つに、その戀情の切なさが表現されてゐる。卽ち情熱の前には理窟も何も無い譯である。「日」といふ語の重複したのは、恐らくは不用意ではあるまい。知りつゝも憚らなかつたのだと思ふ。その理由は、夏部の「五月まつ花橘の香をかげば」の條で說明しておいた。萬葉集巻十に、
秋風の吹きにし日より天の川河瀨に出立ち待つとつげこそ
に似てゐる。この題の歌は、萬葉集中既に雷同の趣が甚だ多い。これもその儔で、かの集の遺珠であるかも測られない。あながちに彼れを引き直したものとも定め難い。格調は太だ蒼古である。

〇

ひさ方のあまの川原のわたしもり君わたりなばかぢ隱してよ

釋　〇かぢ　梶の事にのみいふは後世の意で、古くは舟を遣る具は、櫓をも棹をも廣くさしていつた。〇隱してよ　隱してあれよの意。「よ」は命令辭。

大意　これよ天の川の渡守よ、彥星樣がこちらへお渡りなされたなら、すぐに舟の楫を、そつと隱してお吳れよ。

評　すれば川を渡つてお歸りなさる事が出來まいから、何時までも御逗留なされるだらうの餘意がある。かの陳遵が車轄を井中に投じて賓客を留めた故智を襲はうといふ譯でもあるまいが、情人の別を一途に惜む心から、「楫を取り隱してよ」とは、宛たる巾幗の口吻で、織女星、否寧ろこの歌の作者その人を見るやうである。構想痴にして妙。天の川を舟渡しとして渡守をおいたのは、萬葉集巻十なる、
わが隱せる楫棹なくて渡り守舟貸さめやもしましはありまで

に似て、構想は更にこまやかに、語々一層の洗錬を經てゐる。

○

あまの川紅葉を橋にわたせばやたなばたつめの秋をしも待つ

釋 ○橋に 橋にしての意。○わたせばや 渡すせゐかしての意。○たなばたつめ 「たなばた」は棚機である。機を織るには棚を構へるのでいふ。「つ」は連辭ののと同じい。「め」は女の意。合はせて機織女の義であるが、專ら神代の天棚機姫神をさしていふ。又棚機とばかり畧してもいふ。これを織女星に附會した事は、上に說明しておいた。○しも 殊に取り出でていふ意の助辭。

大意 彦星樣のお渡りになる天の川には、紅葉を橋にかけるせゐかして、時節も多いに棚機樣が、紅葉の時節の秋をサお待ちなさるわ。

評 晚秋紅葉の節は、無論二星相逢ふといふ初秋七夕の候には後れてゐるが、大まかに紅葉を秋のものとして、趣向を立てた。又「紅葉を橋に渡す」は織女が秋を待つ理由を、作者の詩的想像に任せて假設したまでだから、更に天の川の大小廣狹には關はらぬのを、景樹は「紅葉の枝ながら打渡す狹き流なり」といつたが、さほどの細流なら、今更紅葉の橋の必要もない。さつさと徒渉してもいゝ筈である。又、顯本に、二句紅葉を舟にとあるによつて、「大川のさまに聞えて安らかならむ」とある舊說も泥んでゐる。これらの分別を脫却して見ると、「紅葉の橋」大どれて幼げで、却つて面白くも見えよう。

更に思ふ。「紅葉をはしに」の紅葉を紅葉の枝とするのは、意で迎へて解いたもので、實は不當のやうである。

恐らく「はし」は石橋（イハハシ）の類をいふので、梁の字が當るらしい。紅葉を梁（ハシ）にとは、瀨々に散り溜つた紅葉を、川瀨にしおいた石橋と見立てたのだらう。

〇

こひ〳〵て逢ふ夜はこよひ天の川霧たち渡り明けずもあらなむ

釋 〇こひ〳〵て　「戀ひ」を打ち重ねたので、事を深く強くいふ語法。〇こよひ　今宵。この語の下なるぞを略いてある。〇なむ　希望の助辭。

大意 去年の秋より、長の月日を戀ひ焦れ〳〵して、わづか一度、彦星樣と逢ふ夜はこの今夜よ、それ故に例ならぬ事ながら、何卒天の川に霧が一面に立つて闇くして、いつまでも夜が明けずにあつて貰ひたい。

評 これも織女になつて、その意中を詠んだ。「逢ふ夜はこよひ」のいひさし、語調はげしく促つて、おのづから長日月を待ち焦れた情の激越した趣が見える。これが無理な願も思ひ立つ所以である。わづか七夕の一夜を千夜とちぎる。ほんに霧でも立ち渡らないと、いとゞ短く明けてしまふ心地がするだらうと哀れである。集中戀部三に、

こひ〳〵て稀にこよひぞあふ坂のゆふつけ鳥は鳴かずもあらなむ

とあると同一の意想で、珍しくはないが、續け柄はをかしい。

寬平の御時、なぬかの夜「うへにさぶらふをのこども歌奉

れ」と仰せられける時、人にかはりてよめる　友則

天の川淺瀬しらなみたどりつゝ渡りはてねば明けぞしにける

釋 ○寛平の御時云々　「なぬかの夜」は七月七日の夜のこと。眞淵がこのかを一つ二つのつと同じ數へ詞として、「なぬかの日の夜」とあるがよいと論じたが採らない。「うへにさぶらふをのこども」は上に既出。「人にかはりて」は歌を召された或殿上人に代つての意。詞書の意は宇多天皇の御代、七夕の夜、主上が殿上人等に歌よみて奉れと仰しやられた時、或殿上人に代つて友則が詠んだ歌との意。○しらなみ　知らなくての意に、白波をかけた。「み」は接尾の辭。○たどり　覺束なく踏み迷ふをいふ。○渡りはてねば　この「ねば」を心得かねて、舊くねど又はぬにと說いたのはわるい。これは四五句の間に詞を補つて聞く格である。卽ち「渡りはてねば夜の明けむとも思はぬに明けぞしにける」と續けて見るがよい。萬葉集卷八に「秋立ちて幾日もあらねばこのねぬる朝明(アサケ)の風は袂寒しも」とあるも同格である。

大意　久し振で渡る、この天の川の水の淺瀬がわからぬので、白波を立てゝ、川の中を尋ねさまよひ〳〵して、隙取つたのかしら、まだ渡り切らねば明けようとも思はぬに、夜が意外に明けてしまつたわい。

評　これは牽牛(ヒコ)星になつて詠んである。舟筏をまだるしとして、直に川中におり渉つて只渡りに渡らうとするは、卽ち丈夫の所作で、いかに戀心にはやつてるかゞ見える。川の徒渉は今日では頗る突飛らしく思はれるが、交通不便な昔の時代では珍しくはない。隨分都內の川でも徒渉したものだ。けれど急がばまはれ瀬田の長橋で、却つてそれが爲に手間取つて、大事な一夜を無益に明かして、織女に逢ひ損つた失望落膽、その憾は天の川の水と共に竭きなからう。滑稽な悲哀をねらつたその落想の新奇さ、殆ど天外から來たやうだが、實は萬葉に淵

源してゐる。同集巻十に、

天のがはこぞの渡代（ワタリデ）うつろへば河瀬をふむに夜ぞふけにける

とあるを、一層誇張したのである。けれど用語が洗錬を經て、その巧妙さは遙に原作に勝つてゐる。既に昨日の淵は今日の瀬と變る飛鳥川の例もあるやうに、去年渡つた天の川ながら、更に淺瀬の辿り難い趣で、「しらなみ」の一語が殊に活いてゐる。秀句は動もすれば卑しげに聞えるが、これはその弊がないばかりか、淺瀬を踏みたどる渠れが毛脛に向股に、激しくいざよふ水のけしきの見るやうなのは、全くこの一語の點綴されたによる。宇多帝の七夕の歌召されたのは、長恨歌の御繪に對して、伊勢貫之等の歌を召されたのと、何等かの關係があるやうな氣がする。長恨歌に「七月七日長生殿、夜半無ㇾ人私語時、云々」とあるからである。多分后妃を喪はれた折柄の御事であらう。

四句、家集に渡りはてぬにとある。

同じ御時きさいの宮の歌合の歌　　藤原興風

契りけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたび逢ふは逢ふかは

釋 契り　約束するをいふ。○つらき　こゝでは口語の氣強いといふ意に近い。○たなばた　棚機津女（タナバタツメ）の畧。○年に　一年にの意。○逢ふかは　逢ふといふものかいの意。「かは」は反動辭。

大意 そもそものはじめ、一年に一度と約束されたであらう棚機樣の心がサ氣強いわ、なぜといふに、一年に只の一度位逢ふのが逢ふのかい、それは逢ふといふものではないわ。

【評】七夕の會合を、二星の心からさう約束したものと見て、二星がその稀の逢ふ夜に滿足したのをもどかしがり、そんなのは逢ふといふものではないと憤慨した、この作者の態度が面白い。作者は恐らく一日逢はねば千秋と待ち焦れる人であらう。「棚機の」とはあるが、こゝは彦星をも攝してある。結句同語を反復した反語、頗る力強い表現である。三句は初句の上にまはして解するがよい。

七日の夜よめる　　凡河内躬恒

年ごとにあふとはすれど棚機のぬる夜の數ぞすくなかりける

【語】○ぬる　寢る。

大意　棚機は每年缺かさず今夜逢ひはするが、よく〳〵思へば、一年にわづか一度宛だから、年こそ多けれ、まことに逢つて寢る夜の數はサ、少ないことだつたわい。

【評】「年每に逢ふ」といふに多い趣をもたせて、上下の句に多いと少ないとを對照させた算數的の手段は、なほ平凡ながら、一度は二星の昔から年久しく變らぬ契を羨ましく思つたが、翻つて逢ふ夜の數を思へば、極めてわづかで氣の毒の至りと、彼が爲に弔意を述べた一揚一抑の筆法は奇警である。萬葉集卷十に、

　玉かつら絶えぬものからさぬらくは年のわたりに只一夜のみ

とあるに胚胎して、一層明快であるだけ、缺點としては含蓄味が乏しくなつてゐる。「あふ」と「ぬる」とは詞を易へたまでゝ、畢竟同意である。

この歌寛平の后宮の歌合に出て、前の興風のと左右に番へてある。然るにこの集では詞書が違つてゐるのはい

ぶかしい。この集に收める時、わざと適切な詞書を作つたものか。

結句、六帖の一本に數は少なかりけりとある。

○

たなばたにかしつる絲のうちはへて年の緒長くこひや渡らむ

釋 ○たなばたにかしつる絲の　棚機に貸した絲の如くの意で、手向けることを貸すといつた。抑も織女祭の事は、荊楚歲時記に「七夕婦人結ニ彩縷一穿ニ七孔針一或以ニ金銀瑜石一爲レ針、陳ニ瓜菓於庭中一以乞レ巧、有ニ蟢子一網ニ于瓜上一則爲レ得レ巧」とあつて、竹竿を渡して絲を繰り懸けて、願ひ事をいひあげる、これを願の絲といふ。景樹の考に「手向くる事を貸すといへるは、凡神佛には手馴し穢したる物を捧ぐる事なし。七夕のみはありふれたる衣類調度などをも暫く手向くれば、貸すとはいふめり。もと根無し事の戲れ業なればなり」とある。さもある事と思はれる。○うちはへて　「うち」は接頭語、「はへ」は延へで、引き延べる意。○年の緒　息の緒などいふと同じく、年は長く續くものなので、緒に喩へたのである。

大意　棚機樣に供へてお貸し申した絲のやうに、長く延び〳〵に、この先も年久しく人に戀ひ焦れて、月日を過すであらうか。

評　思ふ人に逢ひ難いので歎く折柄の七夕祭に、手向けた願の絲を引き出した譬喩歌である。普通の序歌とは少し違ふ。年久しくといふべきを、「年の緒長く」と轉義したのは、絲の緣をも兼ねたのである。かやうの修辭は巧ではあるが、歌柄がしみたれてくる。さてこの歌織女の戀を詠んだやうに解釋した說もあるが、それは初句の

「棚機に」の「に」文字のたどろく事を心付かぬものである。又結句の「こひ」を乞ひと釋して、わが手業の巧を願乞ふ意に解いた說もあるが附會である。是等は四季の部には、戀歌はないと推定しての說と思はれる。けれど四季の部中に戀歌はいくらもある。次の素性の歌も亦この儔で、いづれも寄二七夕一戀の歌である。あへて拘はるに及ばない。

題しらず　　　　そせい

こよひこむ人にはあはじ棚機の久しきほどに待ちもこそすれ

譯 ○もこそ　萬一をいふ意の辭。

大意 今夜來る人には逢ふまいと思ふ、なぜといふに今夜は七夕だから、萬が一にも棚機の一年に一度逢ふ待ち遠さに肖かつて、自分も久しく待つことになるかも知れぬによつてサ。

評 「來む人には逢はじ」といふ前提に、まづ人を驚かしておいて、實はわれ等が交情の棚機に肖かつては大變と、はかない事にも緣喜を擔ぐに、その人を思ひ捨てがたくする愛情の篤さを認める。更にいふ、このあやかるといふことが、抑も七夕祭卽ち乞巧奠の大目的である以上は、間違つて詰らぬことに肖かるまいものでもない。無意味の苦勞性でない事がこれで今解されよう。ところでこの歌は、題詠ならば寄七夕戀の歌で、婦人の立場になつて詠んだものである。當時の慣習では、通例男が婦人の許に通ふので、婦人の方から男の許にくるのは異例であるから、もし實詠とすると、作者素性は坊さんだから、內情はともかく、これは婦人關係の事ではなく、今宵來む人を友人と見てよからう。

結句、新撰和歌、六帖、家集等にあえもこそすれとある、この方が解りが早い。

なぬかのよの曉によめる　むねゆきの朝臣

今はとて別るゝ時はあまの川わたらぬさきに袖ぞひぢぬる

【釋】○今はとて　今は歸る時刻なりといひての意だが、意釋のやうに詞短に早く解する方が、語勢を失はないでよい。

【大意】夜も明方になつたによつて、もう今日はといつて別れる時は、歸途の天の川をまだ渡りもせぬ前にはや、川水に浸りもしたやうに、かう袖サが意外にひた／＼と濡れるわ。

【評】これも彦星の身になつて詠んだ。涙を道破しないのを妙とする。袖の濡れるのは涙故などいふ理窟はさしおいて、渡らぬ袖の濡れたのを思ひ掛けないやうにいひ成したのが、作者の手段である。畢竟濡れるといふ聯想で、別れの袖と天の川を渡る袖とを湊合させた巧に過ぎない。別れかねて猶豫した情趣は、一首のうへに行きめぐつてゐる。さて宵に逢つて曉に歸るは、この時代に於ける夫婦間の常習であつた事を記憶されたい。

やうかの日よめる　みふのたゞみね

けふよりは今來む年の昨日をぞいつしかとのみまち渡るべき

【釋】○今來　口語の追つ付けといふに當る。○いつしかと　何時かと。「し」は强辭。

【大意】今日は七月八日であるが、さて今日からは、追つ付け又來む年の七月七日の昨日をサ、何時か／＼とばか

り待ちあぐんで、月日を過す筈だ、さて〳〵つらい事よ。

【評】古來織女の意中を此方より推察した作のやうに解釋してあるが、當らない。前の歌どもを見るがよい。さうした趣のは、皆歌に「棚機の」とことわつてあるではないか。そのことわりのないのは、皆牽牛又は織女の身になつて詠んだものである。こゝも後の方の意である。「けふ」にかけ合はせて、「來む年の昨日」と文なしたのは自在の措辭で、又時間を溯つて逆寫した點は一寸新手であるが、餘りわざとらしくて、纖弱で、體格輕浮に傷く。蓋し忠岑の歌の弊はとかく巧に失するにある。六帖にこれを躬恒の歌としたが、どうも彼れの風體ではないらしい。

以上七夕を詠んだ歌十一首、概ね凡作で見るに足らない。その中「秋風の吹きにし日より」、「久方の天の川原の渡守」、「天の川淺瀨しらなみたどりつゝ」の三首を白眉とする。蓋し七夕の乞巧奠は上代盛んに漢土と交通してから、その文化に隨從して輸入され、奈良時代の歌人等に、新奇の好題目として諷詠された。けれども元來無稽の臆說なので、詠む人も聞く人も、單なる好奇心と遊戲心とを滿足させるだけで、實感を動かすまでには至らない。その名歌のないのは偶然でない。降つて平安朝卽ちこの集の頃に至つては、徒に奈良朝歌人の糟粕を舐るに過ぎない。

題しらず　　　よみ人しらず

木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は來にけり

【譯】○心づくし　心の限りを使用する意から出て、心配する事をいふ。

大意　先頃とは樣子が違つて、葉のまばらに透いた木の間から、洩れてさして來る月の光の、さやかに物哀れなのを見ると、さて〳〵物事辛氣な秋は、意外に早くも來たわい。

評　夏木立の茂りも、さすがに秋が來たしるしには、一葉二葉と透いて、もりくる月の光は物寂しいので、秋思の催すに耐へぬあまりの感懷であらう。なほ思ふに、もとから憂思ある人の作であらう。うき秋の取越苦勞に、木間もる三日月につく〴〵と詠め入つて、「心づくしの」と打ち出したその辭旨、頗る凄婉である。これを初句の「木の間」とあるに重きを置いて、「木の間洩る月なれば、障り多くて明かにも見えぬが、心づくしの種なるなり」とある舊說は、字句の末に拘泥して、大體の興趣を忘れたものである。萬葉集卷十一に、

木の間よりうつらふ月の影をしみたちやすらふに小夜更けにけり

とあるをも思ひ合はせるがよい。上に「もりくる」といひ、下に「來にけり」とある同語のさし合ひ、古歌には多い例だが、この歌ではいさゝか穩かでない。

「心づくしの秋」秋を物思の時悲しい時と觀ずるのは、漢土の詩人の常套語であつた。旣に悲秋といふ熟語があり「欲レ不レ悲レ秋不二自由一」（白樂天）とも提唱して居る。この想は支那文學の將來に依つて、殊に文筆者の間に宣傳され、遂に深く國民思想に食ひ入つてしまつた。

二句、新撰和歌にはおちくるとある。これは新古今集冬部に藤原清輔が、

冬がれの森の朽葉の霜のうへにおちたる月の影のさやけさ

とも詠んでゐるから、入方の月でなくともいふ詞だが、この歌では「もりくる」の方が、遙に妥當である。

○

大かたの秋くるからにわが身こそ悲しきものと思ひ知りぬれ

釋 ○大かた　廣く總體をさしいふ詞。○からに　よつての意。

大意　世間一統の秋が來るにつけて、自分は悲しく感ずるのに、他人はさほどにも思はぬのを見ると、秋の爲悲しいのではなく、素(モト)からの自分の身がサ、悲しいものぞと思ひ知つたわ。

評　契沖以後の諸家等、わが身こそ秋を悲しきものと思ひ知るの意として、下の大江千里の歌、

月見ればちゞに物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど

と相表裏したものゝやうに解いてゐるのは、粗妄である。句題和歌といふものを檢すると、「秋來(ツテ)只識(ル)二此身(ノ)哀(シキヲ)一」の詩句を題として、この歌が擧げてあるのでもわかるではないか。句題和歌は、千里が勅に依つて、古句を題として新歌を獻つたものなのだから、この歌の作者は千里でなければならぬのを、こゝの「讀人しらず」のうちにはひつてゐるのは、蓋し傳寫の際、署名の脱落したものではあるまいか。殊に風體といひ修辭といひ、意想まで、大いにかの「月見れば」の歌に酷似してゐる點から見ても、ますく千里の作たることが動きなからうと思ふ。さて歌は詩句に據つたものとすれば、いかにも上手にたしかに飜譯されて、その技倆の尋常でなさが認められる。たゞ原句が平凡で、想には采る處がないから仕方がない。

○

わがためにくる秋にしもあらなくに蟲の音聞けばまづぞ悲しき

釋 ○秋にしも　「し」は强辭、「も」は歎辭。

大意　悲しい思をおこさせようとて、わざ〳〵自分の爲に來る秋でもないのを、なぜか自分の爲ばかりに來る秋かのやうに、蟲聲を聞くや否や、何はさておいてサ、秋が物悲しいわ。

評　蟲の聲は如何にしても陽氣なものではない。假令獨唱にしても合唱にしても、秋思はまさにこれによつてそそられる。されば「まづぞ悲しき」は、「まづぞ秋は悲しき」の略語である。劉禹錫が秋風引、

何處秋風至、蕭々送雁群。朝來入庭樹、孤客最先聞。

と同巧異曲ではあるが、說明に過ぎて、禹錫が自然ないひなしに如かない。

○

物毎にあきぞ悲しきもみぢつゝうつろひ行くを限りと思へば

釋 ○もみぢつゝ　紅く色付きながら。○うつろひ　變るをいふ。こゝは散る意ではない。

大意　惣體の物毎につけて、秋はサ悲しいわ、草や木の色が段々紅くなり〳〵して、變つて衰へ行くを、この時節の限りと思へばサ。

評　草木の色付き初めたのを見て、その結果を豫想して秋を打ち侘びた。「限り」は秋の限りの意であるのを、上句の「秋ぞ」に讓つて略いたのである。これを宣長、景樹等の諸家の、草木の限りと釋きなしたのは、「物毎に」とある初句の落着を顧みず、ことわりの齟齬するにも心付かなかつた誤である。歌はあまり面白くない。

ひとりぬる床は草葉にあらねども秋くるよひは露けかりけり

釋 ○よひ こゝは夜をいふ。○露けかり 口語の露つぽくあるの意。

大意 草の葉こそ露に濡れるものなれ、自分が獨寢の床は草の葉ではないが、まるで草の葉のやうで、物悲しい秋の來る夜は、いつもとは違つて、それは露つぽい事であつたわい。

評 戀人に逢ひ得ずして獨寢した人の作だらう。待つ人は來ず、なまじひに物の悲しい秋は來る、怨めしい限りである。まして時が感哀の催され易い小夜中ではないか。ひし／＼と寂寥の感に打たれ、床の邊は數行の涙に沾つた。たま／＼草葉におく露の滋さの秋來てはまさるのを見て、乃ちこれを湊合した。床の露は卽ち涙であるのを道破せず、ひたすら草葉のうへで辻褄を合はせたのは、上の源宗于朝臣の「今はとて別るゝ時は云々」の歌と同巧である。後世藤原清正が、

わが袖は草のいほりにあらねどもくるれば露のやどりなりけり

と詠んだのは、恐らくはこれから脫化したものであらう。この「あらねども」は逆叙した一種の譬喩法である。

御句、六帖にふしてぬるとあるはいかゞ。

○

これさだのみこの家の歌合のうた

いつはとは時はわかねど秋のよぞ物思ふ事のかぎりなりける

釋 ○これさだのみこ 是貞親王は光孝帝第二の皇子で、宇多帝の御兄であらせられる。貞觀十二年源氏を賜ひ、

播磨權守また左近衞中將に任ぜられ、寛平三年親王となり三品に叙し、太宰帥に補せられ、延長元年七月に薨ぜられた。○いつはとは　何時は物思ふ時ぞとはの意を、詞を略いていつた。○わかねど　分かざれどの意。○物思ふ　憂思あるをいふ。○かぎり　極點。

大意　何時は物を思ふ時といふ時節の差別無しに、年中物思はあるけれど、この秋の夜がサ、殊に物思する頂上であつたわい。

評　白居易の詩、

大抵四時心摠苦、就中腸斷是秋天。

を翻譯して、秋天を秋夜に換へた。されば杜甫が詩句の「中夜起坐萬感集」といつた趣に似て、常に憂苦ある人の秋の長夜を歎く趣である。景樹が「初二句優にして調に力あり、よりて事なき末の句も、自然にめでたく聞ゆ」と褒めたのは、一應は尤もの事のやうだが、初句にあるべき物思ふの語を、四句に讓つていはぬ省筆法の見るべきのみで、他に一向優れた點がない。大和物語に、

いつはとはわかねどたえて秋の夜ぞ世のわびしさは知りまさりける

といふ歌をあげて、在原滋春の詠としてある。等類の歌ながら、大いに劣りざまなのは、修辭が拙だからである。この親王家の歌合の頃は、滋春の中年時代だから、滋春も歌合の作者の一人で、この歌を詠出したのを、本集の撰者等が採錄の際に、かう引き直したものかと思へど、大和物語では、滋春が相模國箕輪の里にての作としてある。同書は元來しどけないものだから、強ひては信用し難いが、姑く暗合と定めておかう。又宗于集を檢すると、「物思ふ頃ひとりごとに」と端書があつて、この歌が出てゐる。宗于は即ち是貞親王の子だから、わ

が家の歌合に出詠する事は、その謂れがないでもない。さてはもと宗于の歌なのを、轉寫の際作者の名を書き落した爲、遂に「讀人しらず」の中には混じたのではあるまいか。本集の撰者達は、皆この親王家の歌合に出合つた人達だから、作者のわからぬ理由がない。そこをよく思ふがよい。若し又脫落としないで、このまゝに解かうなら、卽ち作者は分明であるが、勅勘など蒙つた人なので憚つて、わざと「讀人しらず」としたともいはれよう。すれば作者は宗于ではなくて、別人だらう。宗于は勅勘を蒙つた形跡もなく、現にその名を署して他に幾首も集中に載つてゐるから。

かんなりの壺にて、人々あつまりて、秋の夜をしむ歌よみけるついでによめる　　みつね

かくばかりをしと思ふ夜を徒(イタヅラ)に寐てあかすらむ人さへぞうき

釋 ○かんなりの壺云々　「かんなりの壺」は神鳴の壺で、宮中五舍の一つの襲芳舍(スハウシャ)をいふ。「つぼ」は中庭になつてゐる處をさしていふ語だが、こゝは直にその殿舍をさしていつてゐる。さて他の四舍は坪庭の內の木の名を以て、照陽舍を梨壺、淑景舍を桐壺、飛香舍を藤壺、凝華舍を梅壺といつたのを、この襲芳舍ばかりは、昔雷の落ちかゝつた事があつてから、神鳴の時は近衞の諸官伺候の場所となつて、雷の壺と稱へたといふ。「秋の夜をしむ」は秋の月夜を惜むの意。眞淵が「惜しむは古く愛する意に用ひ、こゝもその意なり」といつたのは、歌の意を聞き誤つての說である。「ついでによめる」はその折につけて私も詠んだの意。以下處々に散見する詞書中のこの語は、皆この意味で通ずる。○さへ　副(ソヘ)の義で、物の一つある上に添ひ加はつたのにいふ辭。

大意　夜の明けるのが情なくて、これ程に惜しいと思ふ、あつたら秋の月夜であるものを、惜しいとも思はず、むざ〳〵と寐てしまつて、この夜を明かすであらう人までがサ情ない。

評　初夜或は夜半の頃までは、一緒に月を賞した數多の人達が、更闌けるに隨ひ、ぬけ〳〵に退散してゆくので、その人達が家に歸り着いて、大方もう寐た時分だらうと思ひ遣つて、わが良夜を惜しみ、明くるを慽む心から、これほどの良夜を見さしても、徒に夢に過すであらうあの人達の心までが、憂く思はれるといふ。されば「徒に寐て明かすらむ人」は、弘く世間の人にかけていつたのではない。この神鳴の壺の月見の宴に集りながら、半途に退出した人達に專らさしあてゝ、彼等の不風流なのを非難したのである。もし明くる朝早くこの歌を彼等の許に贈つたとしたなら、いよ〳〵妙であらう。躬恒集に月を見てといふ詞書で、

明くるまでこよひの月を見てもあらで寐て明かすらむ人の心よ

とあるのは、この前身かと思ふ。わるくもないが氣少なく力弱く、そのうへ率易に流れて露骨である。後案の風韻高く邁れて、句々洗語々錬、その響の玉のやうなのに遠く及ばない。又詞書にも歌にも、月といふ語は見えないが、實際月夜に對した興趣である事は動かせない歌だから、なまじ道破せぬ方が味ひが深い。後世の題作の、一首の生命をば忘れて、只管微細を穴ぐつて屑々たるものとは、大いに逕庭がある。

結句「人さへぞ」とあるから、必ず對へたるものがあるべき筈である。或抄には、秋の名殘を惜む憂さに對へたと解いたが、さうすると、部立も秋の末の方に入らなければならぬ。契沖、眞淵、宣長、雅嘉等の諸說、皆曖昧である。景樹が「半途に退出せし人も、月の爲には憂く思はるゝを、最初より關係なく寐てあかすらむ人さへも憂し」と解したのもいかゞ。これでは輕きを先にし、重きを後にした辭樣となつて、さへの用法からいふ

と、輕重が轉倒する。これは前に釋した如く、夜の明ける事が憂いのに對へたと見るべきであらう。

題しらず　　　　　　　　　よみ人しらず

白雲にはねうちかはしとぶ雁のかずさへ見ゆる秋のよの月

釋 ○白雲に　雲居といふに同じで、天を指す。大空を雲とのみいつた例は、古くから多くある。○はねうちかはし　雁と雁とが互に羽を相交へるをいふ。白雲と打ちかはすのではない。○秋のよの月　下になるかなの語を略いてある。

大意 遙に高い大空のあたりに、羽と羽とを打ち交して、連れ立つて飛び渡る雁の、その數までもよく見える秋の夜の月であることよ。

評 さても〳〵さやかな光よの餘意がある。白雲を實在の雲と見て、雲に羽を交すと見た解は、取るに足らぬ。それでは雁の影も數も見える筈なく、月もさやかな月でなくなる。又新撰萬葉には、四句をかげさへ見ゆるとして、その譯詩にも「秋天飛翔雁影見」とあるうへ、顯昭本にもかげとあるから、この集も元はかげとあつた事は、何の疑もあるまい。源俊賴が影の方を執してから、諸家大旨この說に贊同してゐる。影とは面影、後影、人影などいふ意の影で、雁の飛ぶ形貌である。月光によつて映射した地上の影ではない。この二つを混じてはならぬ。さて數と影との優劣如何と見ると、數とあるは、二句の「羽うちかはし」の雁の多數である光景に照應し、且は月の光の清明なる感じを強くいひ顯し得たやうである。けれど又翻つて考へると、飛ぶ雁の互に羽を打ち交すなど、殊更に纖細を穿つたのは、毫釐の末も見える月明の趣を既にいひ竭したのだから、又も「數」と

あつては、餘に小刀細工に陥つて、一首の風格を損じさうである。寧ろ「影さへ」と大まかにいつた方が妥當であらう。いづれにせよこの四句は俗に「蟻の這ふまで見える」といふ類の誇張である。古來月明を歌つた吟什は尠くないが、これほどにその清光が身にしみ入る心地のする歌はない。體格も高渾で、風調は何處までも平安時代のものである。公忠集、

池水のもなかをいでてあそぶ魚の數さへ見ゆる秋のよの月

は、全くこの飜案であるが、とても飛ぶ雁の印象の鮮明なのに及びもつかない。結句、新撰萬葉に月かなとあるのは、力弱く響いて面白くない。

〇

さよ中と夜はふけぬらし雁がねのきこゆる空に月わたる見ゆ

釋 〇さよ中　夜中。「さ」は眞の意の美稱。〇ぬらし　口語のたらしいに當る。〇雁がね　雁の鳴く聲をいふ。「ね」は音である。これを單に雁の事とするは、平安朝にはじまる。〇月わたる　月が空をめぐり行くをいふ。

大意 あれあの雁の鳴く聲が聞えるはるかの空の方へ、もう月が廻つて見える事よ、さてはもはや夜中とまで、夜が更けたらしいわ。

評 天地の靜寂を破つて、過雁の聲が端なく落ち來るに、ふと見上げると、その聲する中空に一輪の明月の滿ちたのを見て、さて〳〵思はず夜を更かした事よと愕いた。總べて物の音は、夜が更けるまゝにいよ〳〵澄み增るものだから、「雁が音の聞ゆる空」に深夜の景氣が隱然としてゐる。身邊身外何物もなく、只耳に雁聲、目に明月

を見たこの折の感懐は、限なく歌ひ盡されてある。格調が高古莊重で、用語も古く、更に平安時代のものでない。果してこの歌は、萬葉集卷九にある奈良人の述作で、獻二弓削皇子一歌三首と詞書のある中の一首であつた。この集の序に、萬葉に入らぬ歌を採つたとあるから、誤つて選に入れたらしい。この他にも萬葉の歌がこれかれ交つてゐるが、類句索引などない時代だから、據ない誤と思ふ。

是貞のみこの家の歌合によめる　　大江千里

月見ればちゞに物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど

釋 ○ちゞに　上の「ち」は千の意、下の「ち」は物を數ふる辭で、はたち、みそぢのちに同じい。一つ二つのつの通轉である。○物こそ悲しけれ　物悲しいといふを、二つに分けていつた。○ひとつ　一人の意。

大意 秋は世間一統の事で、自分一人の秋ではないけれど、それを自分一人の秋かのやうに、世間の人はとにかく、**自分は月を見ると、さま〴〵に物悲しいわい。**

評 月を傷心の媒であるやうに歌ふのは、この集以後の事か。奈良朝時代の人士の月に對する感想は、極めて平和に愉快であつたらしい。萬葉集を見渡すと皆さうである。そのまゝ悲觀的に歌つたのは、戀の歌か、さもなくば、閨閫の情況の悲しい場合に限られてゐる。尤もこの歌とても、白居易が關盼々に贈つた詩、

燕子樓中霜月夜、　秋來只爲二一人一長。

を譯したものとすれば、なほ戀愛によつた作だから、悲しいといふのもその理由がある。千里は重代の儒者ではあれ、句題和歌をも作つた人だから、これも翻譯物と見る方が穩當であらう。但、詩の長の字をその儘に

直譯せず、「ちゞに悲し」といひ換へ、わが身ひとりといふべきを「ひとつ」と轉義して、上下に數量の語を對照させたのは巧手である。「ちゞ」も多數の轉義である。「秋にはあらねど」と道理をいひ詰めたのは、却つて原作の餘韻あるのに劣る。

又いふ、かうした反轉法を用ひた辭樣は、これを眞直に置き換へて詠吟しては、折角の詠歎の味ひを殺ぐ。原形のまゝで詠吟すると、眞の味ひが出てくる。これが所謂調（シラベ）である。まあ下句は上句の脚註と見たら、ほゞ當るだらう。

たゞみね

ひさかたの月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ

【釋】○月の桂も　「月の桂」は、詞林採葉抄に兼名苑を引いて、「月中桂長二百五十丈、月輪内有レ之、下有レ河、此木秋花開、云々」と見え、又初學記、酉陽雜俎等にも見えた支那の故事である。「も」は口語のさへもの意。○なほ　口語のやはりの意。

大意　この國土とは違つた大空の月の中の桂でさへも、秋はやはり紅葉するせゐかして、いつもよりは光があるやうに、照り增るのであらう。

【評】それでなくては、かう秋の月のさやかな譯がないの餘意がある。秋は總べて、草木の紅葉して照りあふ時節なので、月光のいみじく照つたのを見て、月桂の典故に據つて、桂の紅葉を聯想した。卽ち人間の秋を月中にまで延長した想像は、自由自在といへよう。懷風藻に、山田史三方が「銀河月桂秋」と作つたのも、この儔であ

らう。殊に萬葉集卷十に、

もみぢする時になるらし月人のかつらの枝の色づく見れば

とある、修辭は稍劣るが、想に於いては確かにこの先鞭を着けてゐる。後撰集、貫之の歌に、

春がすみたなびきにけり久方の月のかつらも花や咲くらむ

これは構想語意風調までも全然一致し、只春秋の相違がある爲、敍述に多少の變化を生じたまでである。どちらが先に出來たのだらうか。貫之と忠岑とは師弟だといふ說に從へば、善くも衣鉢を傳へたものといつてよい。なほ再吟して試みると、紅葉の方今一きは細やかにいひおほせてある。これはこれ、この作者の本領。

三句、六帖、古異本、忠岑集等に秋くればとある。

月をよめる　　在原元方

秋の夜の月の光しあかければくらぶの山もこえぬべらなり

釋 ○光し 「し」は强辭。○くらぶの山　春上「梅の花匂ふ春べは」の條に既出。○山も 「も」はさへもの意。

大意 このやうに秋の夜の月の光がサ、春夏とは違つて格別明るいので、暗いといふ名のくらぶ山さへも越えられさうな。

評 明暗の二つを對照させて趣向を立てた着想は、春上の貫之の、

梅の花にほふ春べはくらぶ山やみに越ゆれどしるくぞありける

の什と同じで、やゝこの勝れてゐることは、既に其處で論じておいた。抑もかう名詞の縁語で一首を組織する

ことは、極めて容易に極めて拙ない手段で、若し實感の人を動かすに足るものがないとしたら、洒落地口乃至下手な狂歌と何の相違があらう。

以上の月數首は、秋に關係のあるもの、又は秋季の景物を詠み合はせたるものに限つてゐる。單に月ばかりを詠んだのは、雜部に收めてある。

人のもとにまかれりける夜、きりぎりすの鳴きけるを聞きてよめる

藤原たゞふさ

きりぎりすいたくな鳴きそ秋のよの長き思はわれぞまされる

釋　○人のもとに　「人」は朋友を指したものか。景樹は、これを女の許と釋してゐる。○きりぎりす　萬葉集又はこの集のは、こほろぎの事である。促織に似た蟲をいふのは、後世になつて轉つたのである。○いたく　甚しく。○秋のよの長き　秋の夜の如く長いの意。○長き思　長くて切りの無い辛苦をいふ。夜長を侘ぶる思の意ではない。

大意　きりぎりすよ、さうひどく啼くなよ、この秋の夜の長いやうに果しも無い辛苦は、お前よりも自分がサ格別勝つて居るわ、といふは表面の意で、この家の主人公よ、君は果しも無い辛苦を思うて泣きなさるが、餘りにさう泣きなさるな、そりや辛苦をいつたら、私の方が遙か增つてひどいのである、といふが裏面の意。

評　それを辛棒して自分は泣かずに居るものをの餘意がある。「なく」の聯想から、きりぎりすの鳴くをも愁思あつてのやうに取り成すことは常套ながら、世を歎き人を恨み身を喞つてゐる主人を、只今耳近く喞々と暗愁を

訴へて居るきり〲すに擬して、且は諫め且は慰めたので、その懇切な友愛の熱情と、諷諭の妙とが、楮表に溢れてゐる。景樹は、これを戀歌と定めて、蟋蟀も女を喩へたこととし、「何か打詫びて泣きたらむを、其許よりも我ぞ勝れると、打返しいひ慰めたるなり」といつた。參考の爲に姑く一說として掲げておく。「ながき思」は盡きぬ思の轉義で、夜長に響かせてある。四句、和漢朗詠集には長き恨はとある。

是貞のみこの家の歌合の歌　　としゆきの朝臣

秋の夜のあくるもしらずなく蟲はわがごと物や悲しかるらむ

釋 ○わがごと　我が如くの意。

大意 この長い秋の夜の明けるのも知らずに、あのやうに鳴く蟲は、自分のやうにあれも、何か悲しくあるのであらうか。

評 當然の聯想、平凡の詩境、取り立てゝいふ程の事もない。が只夜通し蟲が鳴きあかした事を知つてゐる人は、卽ち夜通し起き明してゐた人でなくてはならぬ。何かの物思にかきくれて寐もやらぬ曉方など、今も鳴きしきる蟲の音に、親切らしく同情したのは、實は物に託して自分の秋思を歌つたのである。

題しらず　　よみ人しらず

秋萩も色づきぬればきり〲すわが寢ぬごとやよるは悲しき

釋 ○秋萩も色づき　萩の葉の枯れて色變るをいふ。○寢ぬ　寢られぬの意。

大意 やう〳〵秋更けて、萩の下葉もそろ〳〵色の變る時節になると、物悲しさに夜も寐られぬまゝに聞いて居れば、あの蛬のしきりに鳴くのは、自分が寐られぬと同じやうにサ、夜は物悲しいのかしら。

評 夜すがら寒蛬に伴ひ明しての作であるが、「悲しき」といつた聯想にゆづつて、鳴くの一語を道破しない點に、やゝ婉曲の味ひがあると見られる。その他は、狀況といひ、構想及びその表現の順序といひ、悉く前首と同一軌である。なほいへば、措辭の自在な點では或はこれが勝るかも知れないが、凄婉で含蓄味があり、しかも語調の流麗なる點では彼れが優つてゐる。

猿丸太夫集には、初句秋萩の、四句わが身のごとやとあるが、勿論わるい。ことに同書は僞書である。

○

秋の夜は露こそことに寒からし草むらごとに蟲のわぶれば

釋 ○寒からし　寒くあるらしの約。

大意 この秋の夜は、いつもより露がサ格別に寒くあるらしいわ、叢毎に、あれあのやうに、蟲が鳴いてつらがつて居るを思へばサ。

評 秋の夜寒に、草村の露はます〳〵繁くおき、蟲の音は悲しげに響く。しかし蟲の鳴くは、何も露に關はつての事ではない。が、この兩者に交渉をもたせて、蟲が難儀がつて鳴くのは、露の冷いせるらしいと推定した。「露こそことに」は蟲の音に有力な脈絡がある。

結句「わぶれば」を、眞淵が「わぶるはの誤ならむ」と疑つたのが却つて誤であることは、意釋によつて了解されよう。景樹が、書例を擧げて誤でないと辯護しながら、猶わぶるはの意に解したのは滑稽である。

○

君しのぶ草にやつるゝふるさとはまつ蟲の音ぞ悲しかりける

釋 ○君しのぶ草　人を慕ふ意のしのぶといふ語に、しのぶ草をかけた。「しのぶ草」は、和名抄に垣衣とある草で、多くは簷又は舊い樹の皮や枝の間に生じ、一根に叢生し、葉は長さ四五寸位の甚だ厚いもので、深綠色で、背に金星がある。冬を經ても枯れない草である。俗に八日蘭（ヤツメ）といふ。釣りなどにしてもてはやす荵（シノブ）とは違ふ。○やつるゝ　見ざまの惡くなるをいふ。○ふるさと　春上「人はいさ心もしらず云々」の條參看。但こゝは、住み捨てゝ年經た里をいふ。○まつ蟲　松蟲に待つを寄せた。さて古歌にある松蟲は、りん〳〵と鳴く今の鈴蟲の事で、今の松蟲は古の鈴蟲である。この名稱古今全く相反してゐるから、注意を要する。

大意 見捨てゝ寄り付かない貴君を戀ひ偲（シノ）ぶといふ名の付いた忍草が、軒端などに生えて見苦しくなつた故里は、外とは違つて、荒庭に鳴く松蟲の聲がサ、人を待つといふ名のあるせゐか、一入悲しいことであるわい。

評 主人一度去つて廢宅の秋は闌である。生えた草の名は偲ぶといひ、鳴く蟲の名は待つといふ。これさへ既に傷心の種であるのを、ましてや、いくら偲んでもいくら待つても、無情な主人は全く故鄕を忘れ果てゝ、振り返りもしないではないか。空しく見る人聞く人の感愴を催すばかりである。斷腸の極とはこれであらう。想ふに、その主人の住み捨てた故里に、今もなほ住んでゐるこの歌の作者が、その故人である主人を思ひ偲ぶの

あまり、その故宅の荒廢した光景を歌ひ、これに託して、一面には主人の鄕愁をそゝつて萬一の歸來を望み、一面には自己の思慕の情を叙べたのである。さればこの歌は、その主人公の許に贈つて一寸驚かしたものに違ひない。景樹が、この「君」を旣に世に亡き人と解したのは、事情に暗い說である。それでは「故里」の語も一向剴切ではない。「君しのぶ草」の語法は「袖ふりはへて」の類で、この事は春上「春日野の若菜つみにや」の歌の條にいつておいた。一首の中に二所まで、緣語のいひかけを用ひてあるが、更に厭味にも狂じても聞えないのは、內容に實感の人を動かすものがあるからであらう。離別の部の行平朝臣の詠、

たち別れいなばの山の峰におふるまつとし聞かば今歸りこむ

も、このおなじ體である。結句、形容詞を用ひて、「悲しかりける」と說破したのは直截で露骨で、詠歎の味ひを殺ぐやうだが、又一面から見れば、この歌の主意は故宅の主人公に對しての諷諭にあるから、その使意を達する手段としては、却つてかう直截に表現する方が効力が多い。さてこの歌の風格を案ずるに、たしかに承和以後の作である。

○

あきの野に道もまどひぬまつ蟲の聲する方にやどやからまし

釋　○まどひ　迷ひの意にちかい。○まつ蟲　松蟲に、待つの意をもたせた。

大意　この面白い秋の野に、心がうか〳〵と浮かれ迷ふばかりか、道も踏み迷うたわ、まゝよかうなれば、いつそあの人を待つといふ名の付いた、松蟲の聲のする方へ往つて、宿を借して呉れるならば借らうか。

評「道も」は、草花などの面白さに、心も惑つたのに對へたのである。秋の野邊に遊び耽つて、日暮になつてしまつた實況が思ひやられる。何も骨折つて歸るにも及ぶまい、いつそこの野の待つといふ松蟲の許に往つて、今宵一夜泊らうかとは、窮りない逸興に任せた、心のすゝみを歌つたものである。曠達物に拘はらない詠者の氣質があらはれてゐる。松蟲の秀句などは輕く聞くがいゝ。

○

秋の野に人まつ蟲の聲すなり我れかと行きていざとぶらはむ

釋 ○なり　歎辭。○いざ　いでに近い。誘ひ立てる語。○とぶらはむ　訪はむといふに同じい。

大意　この秋の野で、人を待つといふ名の付いた松蟲の聲がするわい、お前が待つのはこの私かと、その聲するあたりに往つて、ドリヤお見舞ひ申さう。

評「人まつ」とあるのに、自然なつかしげな心地が現れる。つまりは、秋の野に松蟲の聲がするから、その方に往つて見ようの意であるのを、上は「人まつ」といひ懸け、さて「我れかと」と下に對へて鬪はしめたその構想が、作者の巧を弄した處である。

○

もみぢ葉の散りて積れる我が宿に誰れをまつ蟲こゝら鳴くらむ

釋 ○宿　こゝは庭をさす。宿はもと屋前（ヤド）の義である。○誰れをまつ蟲　誰れを待つに、松蟲をかけた。○こゝ

ら　澤山の意。

大意　誰れも踏み分けて來る人も無くて、紅葉が散つてさうして積つたこの庭だのに、さうとも知らず、待てば來る人のあるもののやうに、誰れを待つとて、あのやうに松蟲が澤山鳴く事であらうぞ。

評釋　唐詩に「青苔黄葉滿二貧家一」といつたのに似通つた柴門の裡、落葉の下などに、さうした蟲が繁く啼いたなら、どんなに哀れであらう。二句散りつもれるといはず「散りて積れる」と時間をもたせたのに、秋來寂寞として訪ふ人も無く、只木の葉の散るのみが日毎の出來事であつた趣が見えた。即ち拂はぬ庭の景色である。勿論こゝは訪ふ人もなく、又待つべき人もない幽棲である。これ「誰れをまつ蟲」の一疑問を提唱し來つた所以である。景樹いふ「松蟲のこゝら鳴くは、盛に鳴立つるけしきなれば、秋の半頃と覺ゆるに、紅葉の散積れるは、暮秋より初冬のさまなれば、打合へりとも見えず。松蟲も人氣遠き山野などの方ふさはしければ、後撰集、六帖等にこの上句秋の野に來宿る人もおもほえずとあるぞ正しき」と。尤もらしい說ながら、修辭も語調も大に後れてゐる。思ふにこの「もみぢ葉」はあながち楓櫨などいふ木に限ることではあるまい。櫻の紅葉などの秋の初からも散つて積つたのを斥したのだらう。さすれば景樹の難も無用の辯となる。

〇

蜩（ヒグラシ）の鳴きつるなべに日は暮れぬとおもふは山の陰（カゲ）にざりける

語釋　〇蜩　かなかな蟬のこと。夕暮多く鳴くによつてこの名がある。〇なべに　並（ナベ）にの義で、口語のつれてといふに同じい。必ず濁るがよい。〇とおもふは　と思ふは誤りでの意。〇にざりける　にぞありけるのぞあの約

つて「さ」となつた語。

大意 山里に來て見れば日を暮すといふ名の蜩の鳴くのにつれて、いつの間にかはや日は暮れたと思ふは間違ひで、木深い山の陰なので闇いのであつたわい。

評 綠樹相蔽うて晝もなほ暗い山陰は、卽ち茅蜩の常に鳴く處なので、この蟲の名に因んで一趣向を立てたのである。平凡で感興がさう深くない。後撰集に、

ひぐらしの聲きく山のちかければ鳴きつるなべに入日さすらむ

とある貫之の歌も、その想ばかりか、その斡まで似てゐる。

四句、顯本、六帖、朗詠にと見えしはとあるは、却つて面白くない。よく意釋の補足語を辿つて、その意を曉られたい。定家の密勘に「家の本にはとおもへばとあり」とあるが采らない。

○

日ぐらしの鳴く山里のゆふぐれは風よりほかに訪ふ人もなし

大意 鄙とは違つて何時も寂しいが、殊に茅蜩の鳴くこの山里の秋の夕暮頃は、そよ／＼と音する風より外には、一向に音づれる人もないわ。

評 まあ寂しい事よの餘意がある。これを寂しと說破しないで囘護した處に、含蓄の味があつて、餘韻が遠長い。更に細說すると、蜩の聲といひ山里といひ夕暮といひ風といひ、どれ一つでも秋の物寂しい感情をそゝるには充分の材料である。それを悉く湊合した上に、「訪ふ人もなし」と詠め捨てたのに、いよ／＼強い寂し味が印象

される。ましてこの結句の語調の細くからびて力無げなのが、全首の意調によく調和して、旨く收め得てある。妙は淡々と筆をつけて、些の痕迹を露さぬ點にある。後世西行が、

あはれたゞ草のいほりのさびしきは風より外にとふ人ぞなき

と作つたのは蹈襲である。殊にさびしきはと說破したのは、餘韻索然としたうへに、結句の語調が強く、全首のからびた調にふさはない。

結句、小町集には人ぞなきとあるが、その調の劣つてゐる事は、今いつた如くである。又小町集は後人の纂めたものだから、作者はやはりこの集に「讀人知らず」とあるのが正しい。

はつかりをよめる　在原元方

まつ人にあらぬものから初雁のけさなく聲のめづらしきかな

釋　○初雁　秋はじめて來る雁をいふ。○ものから　ものながらの意。

大意　待つ人の聲を聞き付けたのは珍しいものだが、その待つ人ではありもせぬものゝ、不思議に待つ人同樣に、初雁の今朝鳴く聲が珍しい事よ。

評　風冷かに吹き立つて、露など繁く置いた朝、おもはず過雁の第一聲を耳にした景氣であらう。「けさ」の一語這般の景致を映出する眼目である。待つ人の聲を對照に取り出したのは、雁は年々に往き交ひして遠來の客めいてゐるからの聯想で、しかも待つ人同樣に雁を見た作者の心情の美しさが、快い感じを起させる。隨つて結句が旨く活きてくる。落想奇といふ程の事もないが、自然で、淸圓流麗、明珠が盤上を走る趣がある。風體元方

の他の作に似ない。全くこの人一代を通じての佳作である。

是貞のみこの歌合の歌　　　とものり

秋風にはつ雁がねぞきこゆなるたが玉づさをかけて來つらむ

釋　○秋風に　秋風の吹く時に、又は秋風の吹くにつれての意。○玉づさ　玆では書狀をいふ。奈良時代には專ら使といふ語の枕詞に用ひた。眞淵は「玉は美稱つは助辭さは章の字音なり」といひ、宣長はこれを破して、上代の風俗として、「梓の木に玉を著けたるを使のしるしに持てあるきしなるべし。そは思ひ懸けたる人の門に錦木を多く立てしと、心ばへの似たる事にて、渾べて使を遣る音信の志を顯し、しるしとしたるなるべし。さて後に文字渡り來て書をかはす世になりて、消息文は使のもてくる物なる故に、かの玉梓に准へて、それをも同じく玉づさといへるなるべし」といひ、又村田春海は「陸奥にて男女の懸想するに、王づさといふ物をかたみに贈ることあり。殊に桃生郡、玉造郡などの山里にては、常にする事にて、厚紙を折りて結ぶさま、五十種ばかりあり。その結び樣にて事の故由を知ると、その國人の語るを聞けり」といつた。宣長又いふ「讚岐の人女を娉ぶに、藁を結びて贈る業あり。里人共は皆しる事なり。若し萬葉に玉梓と云へるは、かゝる事にはあらじか」と。語意はいづれにせよ、使と續く枕詞なのを、萬葉集三「いつしかと待つらむ妹に玉梓の事だにのらずいにし君かも」とある歌は、玉梓を直に使の事に詠んである。なほ足引を直に山の事としたのと同じい。かうなつては書狀は使の代用をなす物だから、その役目の同じな處から更に一轉して、玉梓を書狀の意に用ゐるやうになつて來たらしい。それはこの集に近い以前の事であらう。○かけて來つ　翼にまれ足にまれ、頸にまれ着けて持

つて來るをいふ。「玉梓をかけて來る」とは雁の書札を傳へる事で、前漢の蘇武の故事である。蘇武が武帝の代に匈奴に使して、爲に久しく囚れて澤中にゐた、漢の使が更に匈奴に往つた時、匈奴は武は旣に死んだと紿いた、たま〳〵武帝上林苑に射て雁を獲られた、足を見れば帛書が係けてある、怪んでそれを取つて見られると蘇武の書であつた、これによつて武が未だ生きて胡國に在る事を知られたといふ。委しくは漢書、蒙求等の書に出てゐる。

大意 この頃吹く涼しい秋風に誘はれて、初雁の聲がサあれ聞えるわ。雁は遠方からの書狀を翼にかけて持つて來るといふ事だが、あの雁は誰れの書狀をかけて來たであらうか。

評 遠人を懷つてゐる折などの感興だらう。蘇武の典故を思つて、この雁も誰れかの書狀を持つて來はせぬかとの疑は、史實を知る者に取つては、頗る興味饒いものである。卽ち過去の面白い追想と現在の景致とが融合して、いはれぬ味ひが生まれる。二段に切り整へた節奏の巧に、一氣流轉の妙を具へてゐる。出語また渾成、聲調また嚠亮。これが友則の特色である。

三句、六帖にひゞくなるとある。

題しらず　　よみ人しらず

わが門にいなおほせ鳥の鳴くなべにけさ吹く風に雁は來にけり

釋 ○わが門に　我が門前にの意。○いなおほせ鳥　田の畔などに居て秋鳴く鳥であらう。秋歌下、忠岑の歌にもこれを詠んである。和名抄に「羽族、名稻負鳥、萬葉集云(其讀以奈於保世止科)」とある。按ずるに萬葉集にこの名は見

えない。新撰萬葉を續萬葉ともいへば、新撰の二字か續の一字かゞ落ちたのだらう。さてこの鳥の生體がわからない。能宣、順、和泉式部、公實等の歌皆交接教鳥（トツギヲシヘドリ）の典故に據つて、鶺鴒を詠んだらしい。顯昭、定家、眞淵も鶺鴒、宣長はにふなひ雀、景樹は河原鶸（ヒワ）などいつて、定説がない。甚しいのは馬だらう用夫だらうともいつた。前にもいつた如く中古の歌人等、百千鳥、呼子鳥、及びこのいなおほせ鳥を集中三鳥の祕事と稱へて、傳授物として扱つた。然し傳授してもその實物は依然として不明なのであつた。抑も三鳥の名目は文選に見えて、雜體詩三十首に、「願言寄三鳥」といふがある。蕭銑の註に「三鳥者楚辭本屬二當時所見一無二定名一也」とある。これ等に擬へて、强ひて三鳥の目を立てゝ祕事としたらしい。

大意 自分の門前にいなおほせ鳥が鳴くにつれて、今朝吹く涼しい秋風に誘はれて、雁は意外に來たわい。

評 に文字四つあるは、小町の「花の色は云々」の歌に似て、今少し耳につく、詩境はほゞ辿られないでもないが、いなおほせが鳥が不明なので、隨つて確たる事もいはれない。評語をさしおく。

○

いとはやも鳴きぬる雁か白露の色どる木々（キヾ）ももみぢあへなくに

釋 ○いとはやも　最も早くも。○雁か　「か」は歎辭。○色どる　彩色する意。○あへなくに　「あへ」は春下「櫻花とくちりぬとも」の歌の條に既出。「なく」は打消の助辭のぬの延音。

大意 一通りならず早くまあ鳴いた雁であることよ、白い露が置いては彩色する諸木も、まだろくに色付きおほせぬのにサ。

評 山野の秋色また闌でもないうちに、數行の渡鴻が急に寒さを告げる、意外でなくて何であるか。されぱこそ「いとはやも」とは驚歎されるのである。實は雁は來べき季節に來たので、作者自身の心のたゆみから、それを早いと感じたのである。「白露」を擬人して、彼れが諸木を彩色するやうにいつたのも、それを下の「もみぢ」に對照させて、字面に色彩の配合をもたせたのも巧は巧だが、その爲に風骨がやゝ傷くやうな氣がする。

結句、六帖にもみぢあへぬをとある。

○

春霞かすみていにしかりがねは今ぞなくなる秋霧のうへに

釋 ○いにし　往にしの意。○かりがね　もと雁が音の意であるが、今は只雁の事に用ひてゐる。

大意 ついこの間の長閑な春の霞に、幽かに見えぬやうになつて立ち去つた雁は、この秋の霧の上に現れて、思ひかけず今サあれ又鳴くわ。

評 この卷にある、

きのふこそ早苗とりしかいつのまに稻葉そよぎて秋風のふく

とほゞ同型で、初二句と四五の句とを對揚させて、鴻雁の去來を見て、春秋退轉の速かなのに驚歎したのが主意である。故に「今ぞ」に意外と感じた趣をもつ事は、既に「いつのまにさ月來ぬらむ」の條でいつた如くである。初二句、一聲づつに影消えて、霞の中に遠ざかつて往つた歸雁の面影が見るやうである。これが卽ち今の秋霧の上を飛び渡る景色に似寄つてゐるので、思ひ出されたのである。まことに恰好の聯想ではないか。「春霞かす

みて」と體用の別こそあれ同語を重疊したの、初二三五句の頭字、いづれもア韻の響あるのなどは、又聲調の流滑な所以である。四五の倒句法も諧調となつて、節奏いよ〱妙である。殊に四句は語調が強いので、五句を收めるには、更に一倍の大力量を要するのを、忽に字餘りの一案で、容易く解決したのは、頗る敏活の手腕である。又結句の終りのに文字はとかく調が促つて不快なのを、これは字餘りである爲に耳立たない。詞を使ふこと優麗に典雅に、巧ではあるが纎細に墮ちず、格調おのづから高邁である。

この歌、袋草子には「延喜の御時、躬恒が子の小童を召しけるに、時は八月にて、瀧口より竹の臺のもとに參りたりしに、雁の鳴きたりければ、勅ありて歌を奉らしめ給ふに、春霞と唱へたれば、人々あざけり笑ふ。然るに次句を聞きて各感じたり」といひ、古今著聞集には「寛平歌合に、初雁の題にて、友則左方にて、この歌の初句を讀み上げたる時、右方の人々笑ひぬ。次句霞みていにしと歌ひ上げたるを聞きて、皆靜まりかへれり」とある。けれど若し事實さうした折柄の歌ならば、何でこの集に「題しらず」と記されよう。躬恒の子或は友則の作としたら、何で「よみ人しらず」と記されよう。皆傳ふる者の誤である。又寛平歌合とあるは、后宮の歌合をさしたものか。然るにそれにはこの歌がない。杜撰である。

○

夜をさむみ衣かりがね鳴くなべに萩の下葉もうつろひにけり

この歌は、ある人のいはく、「柿本人丸がなり」と。

【語】○夜をさむみ　夜が寒くて。○衣かりがね　衣を借るに雁がねとかけた。○うつろひ　衰へ凋れるをいふ。

卽ち葉の黃ばみいたむこと。

大意　この頃の夜の寒いので、衣を借るといふ名の付いた雁の鳴くにつれて、寒さの爲に萩の下葉も色が變つてしまつたわい。

評「夜を寒み衣」といふまでを序詞と解した說もあるが、さうでない。「夜を寒み」は雁の來るにも、萩の下葉の移ろふにも打ち合つた主要の句だから、序詞の如き輕い意のものでない。衣を借ることは、奈良朝詩人が「旅にして衣借すべき妹もあらなくに」、又「さぬの岡越ゆらむ君に衣借さましを」など歌つて、古へは夫婦の間などでは互に著物を借り合つたものだ。故に夜寒の頃の雁が音にいひかけて、詞の文とした。この修辭は「少女らが袖ふる山」「時鳥人まつ山」の例である。「萩の下葉も」の「も」文字は、雁金の鳴くに對へたのである。萬葉集卷八に、

雲のうへに鳴きつる雁の寒きなべ萩の下葉はうつろへるかも（結句又、もみぢつるかも）

とあるを蹈襲して、原作以外にあまり蹈み出してゐない。どれも皮膚の感覺と視覺とを基礎として、想が構成されてある。或は萬葉の歌が平安調に、自然轉唱されたものではあるまいかとも思ふ。「衣かりがね」の秀句は、當時にあつては奇警と思はれたらうが、後世人々道破して竟に陳腐となつてしまつた。

左註に「人麿が歌なり」と記してあるが、更に歌聖の風骨でない。新撰萬葉にも收められたのを思へば、平安朝初期のものらしい。

寬平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原菅根朝臣

秋風に聲をほにあげてくる船はあまのと渡る雁にぞありける

釋　○聲をほにあげて　聲を高く打ち上げての意。「ほ」は秀の意で、物のすぐれ出たのをいふ。さて物を顯すを、ほに出だすとも、ほに顯すともいふので、舟の帆を擧げるにかけて、聲を帆にしてあぐといつた。○あまのと　大空をいふ。天を海に見成して、海には迫門水門など渡り處あるに准へて、天の門といふ。戸と書くは借字である。

大意　この節の秋風に、聲を帆に卽ちあらはに高く擧げて、追手に走る如く來る船は、よく〳〵見れば船ではなくて、空の海の渡り所を高く鳴いて渡る、雁でサあつたわい。

評　着想の本據は雁が遙かの天末から飛んでくる景趣が、小舟の沖から漕ぎつれて返つてくるのによく似てるので、雁の聲を上げるのを帆に擧げてと譬喩し、折柄の秋風を追手にあへしらつて、「くる舟は」と隱喩し、「天の門渡る」と緣語を以ていひ續けたのは、冬部の列樹の歌、

山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

の筆法と全然同一である。層一層に巧み重ねてはあるが、さう纎細でもなく聲調勁快である。二句五句の字餘り、上下の斤量が相當してゐる。

雁の鳴きけるを聞きてよめる　　　みつね

うき事を思ひつらねて雁がねのなきこそわたれ秋のよなよな

釋　○うき事　心憂き事。○思ひつらねて　いろ〳〵思ひ竝べて。○雁がねの　「の」はの如くの意。

大意　幾羽となく連つて鳴いて渡るあの雁の如く、自分は身の憂き事の數々を思ひ續けて、泣いてばかり明かすわ、この秋の夜る〳〵はサ。

評　秋思の催すに堪へず、秋の長夜を明かしかねた折も折、過雁の聲々に鳴き立てるのを聞いて、彼が列を成して行くので、「思ひつらね」と寄せ、空を鳴き渡るをわが泣いて月日を亘るにかけて、雁の縁語で仕立てた述懐である。故に「秋のよな〳〵」はわが泣き渡ることの連夜であることを擬へたのである。詞書の文體も、その意で書かれてある事を注意されたい。

是貞のみこの家の歌合のうた　　たゞみね

山里は秋こそことにわびしけれ鹿のなくねに目をさましつゝ

釋　○山里　山家をいふ。○わびし　心憂く苦しい意。

大意　都と違つて山家は、いつもといふ中に、殊に秋がサ難儀に思れるわい、夜は物哀な鹿の鳴く聲に、幾度となく目を覺し〳〵するによつて。

評　境は山里、節は秋、時は夜半であるのに、嶺上の鹿の音が絶えず物思ふ人の夢路を破る。この取り集めた哀れさは、實に侘しい頂上だらう。都人の馴れぬ山住の情致がよく現れてゐる。この作者の歌としては割合に平淡な作といはう。但萬葉の、

山ちかく家やをるべきさをしかの聲を聞きつゝいねがてぬかも　（巻十）

の類想である。

三句、六帖の一本に悲しけれとある。

○

よみ人しらず

おく山にもみぢ踏みわけ鳴く鹿のこゑ聞く時ぞ秋はかなしき

釋 ○おく山　深山をいふ。外山、端山に對した語。但こゝは輕く山の奥といふ位の、け近い處の意に用ひてある。

大意 秋はすべて悲しい時であるが、人里離れた山のあたりで、最早散つた紅葉を踏み分けてあるきなどして鳴く鹿の聲を、遠く遙かに聞く時がサ、取り分け秋は悲しいわ。

評 秋の更けた山陰のあたり、あの鼻聲の悲しげな鹿鳴に、一段の感哀を促されては、秋を悲むまいとしても心にまかせない。二句は暮秋の落葉した時節を示し、かねて鹿の動作の形容に用ひたので、かう推測を斷定していふのは、なほ下に、

秋萩をしがらみふせてなく鹿の目には見えずておとのさやけさ

の上句の叙法に同じい。それを一說に「紅葉ふみわけ」を作者自身の紅葉を踏み分ける意として、新撰萬葉の、

秋山寂々葉零々。鹿麋鳴音數處聆。勝地尋來遊宴處。無レ朋無レ酒意猶冷。

とある、この歌の譯詩を證に引いてゐるが、彼れを以てこれを釋する事は、本末が轉倒してゐる。況やこの譯詩は原歌の意を損じて、極めて妥貼を缺いてゐるから、さう信用はならない。下句の力ある「ぞ」の辭に、「は」の辭を粘せしめた爲に生ずる餘意は、意釋に解いた如くである。

小倉百人一首に、作者を猿丸太夫とあるのは據がない。猿丸集にも見えない。尤も同集は僞撰である。

題しらず

秋萩にうらびれをればあしひきの山したとよみ鹿の鳴くらむ

釋　○うらびれ　うらぶれの轉語。顯昭が誤であると云つたのは非。愁ふるの意。○をれば　宣長がをるにの意と解したのは早い。この語意、意釋に就いてよく心得られたい。上の七夕の歌に、「天の川淺瀬しらなみたどりつゝ渡りはてねば」とあるをも參照するがよい。○とよみ　響動する意。

大意　やうく枯れ行く萩の下葉をながめて、物思してゐると、それだけでも既に堪へ難く思はれるのを、何でこの山本を響かして、かう鹿が鳴くのであらうぞ。

評　いよく悲しく泣き出したいの餘意がある。凋殘した萩、その見じめさは、既に詩人の心を傷ましめる。折柄かの山陰に端なく悲しい響を傳へて、曳聲に鹿鳴の聞えたので、時もあらうに何でかうは鳴くのかと、あまり思ひ遣りなさ過ぎるやうに、彼れを暗に詰つてゐる。初句は悲秋の時節を示すが主意で、傍ら鹿をいひ出す楔子とした。蓋し萩と鹿とを詠み合はせて、萩の花妻などいふ事は、奈良時代からの常套になつてゐる故である。故に「秋萩」とあるに拘泥して、景樹が、萩にも鹿も愁ぶるものなるかとまで、餘意を推したのは誤つてゐる。又廣蔭が初句の「に」文字を秋津羽に匂へる妹など云ふにの意義に解し、二句の「うらびれ」を宣長の解に從つて頂垂れの意として、「秋萩の如くに物思に頂を投げてゐれば」と釋したのは、全然わるい。さて想は萬葉の、君にこひうらぶれをればしきの野に秋萩しのぎさを鹿鳴くも（巻十）

夜を長みいのねらへぬにあし引の山びことよめさを鹿鳴くも（卷十五）

この頃の朝けにきけばあし引の山をとよもしさを鹿鳴くも（卷八）

などあるに胚胎して、あまり變つた節もない。

初句、奥義抄に「普通本には秋風にと侍り」とある。又六帖には「妹にわがうらこひをれば足引の山下とよみ鹿ぞ鳴くらむ」とある。

○

秋萩をしがらみふせてなく鹿の目には見えずておとのさやけさ

釋 ○しがらみふせて　しをり搦みて踏みしだくをいふ。「しがらみ」はこゝは動詞である。繁く絡（カラ）むの意か。竹木を編んで流れを遮るを柵（シガラミ）といふも、この語の名詞となつたもの。○おと　聲に同じい。鳥獸の鳴聲をおとといふは古言である。萬葉五に「鶯のおと聞くなべに」同十七に「時鳥なくおと遙けし」源氏物語初音の卷に「鶯のおとせぬ里は」など例が多い。○さやけさ　あざやかさと同じい。分明なるをいふ。「さ」は形容を意味する助辭。

大意 この頃の盛りの秋萩を、胸に分け靡かしおし伏せて、姿を隱くして鳴く鹿が、人の目には見えないで、その癖あのまあ聲があざやかな事わ。

評 懐かしい鹿の音に、その姿を見たく思つても見られないのを憾む。これ四五の句に、視聽の二つを鬪はせた爲に生ずる餘意である。初二句は上の「おく山にもみぢ踏み分け」の條でいつた如く、可憐愛すべき萩花を借り

て來て、鹿の動作を形容したのである。かやうに丁寧に想像を措くことは、即ち鹿に對しての懷かしい心持を表示したもので、おのづから下句の素地を成してゐる。多少の工夫こそ費してあるが、四五の句、對照が密貼し過ぎて、味ひが乏しい。

結句、顯本にこゑのさやけさとある。

是貞のみこの家の歌合によめる　藤原敏行朝臣

秋萩のはな咲きにけりたかさごのをのへの鹿は今やなくらむ

【解】○たかさごの　山をさしていふ。委しくは序文中に既出。○をのへ　尾上の義。峰をいふ。

大意　あれ秋萩の花が意外に咲いたわい。さては山のをのへの鹿は、今サ鳴く事であらうか。

【評】萩の花の候は鹿の妻戀して鳴く時なので、この兩者を配合して、遂には萩を鹿の妻とまで歌つたのが萬葉にある位で、殆ど分離し難いやうな慣習になつてゐる。されば、

わが宿のふぢなみの花咲きにけり山時鳥いつか來鳴かむ

などと同じ手法の、型にはまつた想像は、敢へて珍しいとはいへない。この種の想は殆ど日常の口頭語に近い性質を帶びてゐる。さてかうなると、只一篇に漲る氣分如何、修辭の美如何、聲調の美如何を問題にするより外はない。この歌はその點において、悉くそれらの條件を突破するに足るだけの資格がある。風神暢爽、朗誦すべき作である。躬恒集に、

わが宿のあき萩のはなさく時はをのへの鹿のこゑ立てゝなく

も、この類想類型で、しかも形式に於いて頗る劣つてゐる。

昔あひ知りて侍りける人の、秋の野にて逢ひて、物がたりしけるついでによめる　　みつね

秋はぎのふる枝に咲ける花見ればもとの心はわすれざりけり

釋 ○あひ知りて　これに二義がある。たゞ識り合ふをいふのと、夫婦相思の關係をいふのとである。こゝは昔馴染の女を斥したと思はれる。○ふる枝　舊枝。萩には草立と木立とある。舊枝に花の咲くのは木萩である。○もと　以前の意。幹(モト)の意をかけた。

大意 秋萩の去年の舊枝に、相變らずこの通り咲いた花を見れば、萩は以前の心を忘れずにあつたわい。

評 然るに秋萩とは違つて、昔の人は舊(モト)の心を忘れはてた事よと、暗に諷詆した餘意がある。秋郊散策の折柄、圖らず昔馴染の婦人に出會つたが、一言二言の話こそしたれ、あまり打ち解けもせぬのを不平に思ふ餘り、野生の古枝の萩を倩ひ來つて、その年々に花を着けるのを讃歎して「花見れば」といひ、「忘れざりけり」と打ち合はせたのは、おのづから比興體に屬する作である。ましてやその古枝の萩にさして、この歌を贈つたとしたら、いかにかの女は顏の赤らむまで羞ぢ入つたらうと、その情況が想像されて、頗る妙である。雜上の、

石上ふるから小野のもとかしはもとの心はわすられなくに

の詞を襲用して、意を異にした換骨奪胎の手腕、實に自在といつてよい。結句の調は卑弱ながら、通體優美に流暢である。古來結句を人の忘れぬ意、又はわが忘れぬ意と解釋したのは誤である。こは三句以下の語調を、

よく咀嚼し得なかつた故だらう。又詞書の「あひ知りて侍りける人」を朋友の事とした宣長等の說は、四季の部立に泥んで、戀歌でないと思つたからの誤である。

結句、六帖にかはらざりけりとある。

題しらず　よみ人しらず

あき萩の下葉色づく今よりやひとりある人のいねがてにする

釋 ○ひとりある人　獨身者をいふ。「ある」は居ること。○いねがて　寐ね難くの意。

大意 秋萩の下葉がそろ〳〵枯れかけて、色が變るわ、これでは夜寒が增してくるだらうから、もうこれからはサ、獨住をして居る者は、寢入り惡くさうにする事か。

評 一叢の胡子花花既に散つて、葉も亦衰へ、秋氣はひし〳〵と迫つて來た。そのわびしさ凄まじさは、物思はぬ人の夢をも圓かにさせない。ましてや榲の身の只ひとりある人では、どんなものか。空しく衣襟の冷たさを卿ちつゝ、膝を抱いて天明を待つことであらう。作者はその中の一人である。否寧ろ作者自身が主である。「今よりやひとりある人の」と將來の苦酸を豫想してをのゝいた點は、まことに同情に堪へない。二句切れの歌である。誤つて三句まで續けてはならぬ。

○

なきわたる雁の涙やおちつらむ物おもふやどの萩のうへの露

大意　雁も物思があるかして、あのやうに空に鳴いて來るが、その泣く涙の落ちたのだらうか、物思をして悲しんで居るこの庭の萩の上に、自分の袖の涙のやうに繁く置く露はサ。

評　見る所愁景でないものはなく、觸れる所愁緒でないものはない。折も折過雁の聲を聞いては、これを同情に推想して、萩の露はその涙だらうかといふは、畢竟「なき渡る」からの聯想である。四五句に字餘りを用ひたのは、三句まで一旦にいひ下した上句の語勢に、權衡をたもたしめる爲である。意は悲しく切に、詞は玉の如く穩秀に、聲響悠揚、諷すべく誦すべきものである。但集中秀歌十首の一つに定家の推選したのは、俄に諾ひがたいが、この集中での今調の歌として勝れたものゝ一つであらう。

〇

はぎの露玉にぬかむと取ればけぬよし見む人は枝ながら見よ

ある人のいはく「この歌は奈良のみかどの御歌なり。」

釋　〇玉にぬかむ　玉にして貫かうとの意。春上に「玉にもぬける春の柳か」、萬葉集八「さを鹿の萩にぬきおける露の白玉」などある。〇けぬ　消えぬの約。〇よし　口語のいゝわと同意。まことによしと許すのではない。

大意　恰も玉のやうな萩の露の餘りの見事さに、眞實の玉のやうに緒に通して見ようと思つて、手に取るとつい消えたわ、よし賞翫する人は、いくら玉のやうに見えても、取らずに枝にあるまゝで見なさい。

評　花の色に匂つた露は、いかに美しかつたらう。さればこそ、一寸玉に貫かうといふ洒落氣も出るのである。で障つて見るともろくも碎け散るので、我れながらよせば善かつたと後悔されて、枝ながら見ることの賢明な

ことを力說して、見む人に警告してゐる。蓋し露を愛賞する至情である。尙思ふに、玉に貫かうとて手に取つたといふは誇張で、實は一寸指頭で露に觸れて見た位の事であらう。そして誰れもこの萩の露に對しては、手を觸れずには居られぬものと想定してしまつた、その稚氣が面白い。節は短く音は促つて、古拙な修辭に却つて素朴な味ひがある。

下句、六帖に見む人はなほよそながら見よとあるは劣つてゐる。又左註に「奈良の御門の御歌」とあるのは、例の諾けがたい。

○

をりて見ばおちぞしぬべき秋萩の枝もたわゝにおける白つゆ

釋 ○しぬべき　仕舞ひさうの意。○たわゝ　しなく\するをいふ。撓むと同語。

大意　大層綺麗なので、一枝折つて見たいが、しかし折つて見たら定めて落ちてサしまひさうな、秋萩の花の枝がしなふほどに置いた、あの白露がサ。

評 折つて露を散らすよりは、折らずに賞翫した方が、寧ろましだとまで思ひやつた口氣である。前首と着想が似て、これは修辭が舒暢で、彼れは氣魄が鬱勃としてゐる。

四句、六帖に枝もとをゝにとある。

○

萩が花散るらむ小野の露霜にぬれてを行かむさ夜はふくとも

釋 ○小野　野と同じい。「小」は美稱。大野に對へたのではない。○露霜　露と霜との意に解いたのもあるが、つゆじもと濁つて、秋の末から冬へかけて露のやゝ氷りかけた物の稱とするがよい。萬葉集にもこの意で用ひてある。○ぬれてを　「を」は歎辭。○さ夜　上の「さ夜中と」を參照。

大意 思ふ人の許（がり）行くに、多分萩の花がもはや散るであらう、と思ふその野道に置いた露霜に、難儀ながら濡れてまあ行かうわ、萩の花の散るが惜しくて、見捨てゝは行かれぬ故に、行先は夜は更けようとも構はずに。

評 濡れても、夜は更けても往かうといふ。その往先のたゞの人でない事が了解されよう。ましてや「小夜は更くとも」の口氣から推せば、時刻は夕暮頃と見てよい。するとわざと出かけた萩の花見ではない。妹がり行く野路の夕間暮、流石に秋が更けてか、露霜は繁く萩の花は散りかゝる景氣に打たれて、その端的の感慨を歌つたのである。諸註、今を旣に夜中であるやうに心得て、初二句を單に修飾の詞とし、「よしやこの夜は更けぬとも露霜に濡れつゝ妹がり行かむの意」と釋したのはいかゞと思ふ。これは結句の「ふくとも」をふけぬともと同意に速斷した誤である。この差別をよく吟味するがよい。

色澤情韻倶に高く、語古格古高古の妙は、上の詠者不詳の歌中の「さよ中と夜は更けぬらし」の什と相拮抗する。ことわりや、これも萬葉集卷十の、

　秋萩のさきちる野べの夕露にぬれつゝきませ夜は更けぬとも

を表裏に取り成して、潤飾したものである。然し原作よりは更に一頭地を抽んでてゐるのは手柄である。

是貞のみこの家の歌合によめる　文屋あさやす

萩の野におくしら露は玉なれやつらぬきかくるくもの絲すぢ

釋 ○玉なれや　玉にあればやの意。○絲すぢ　絲といふに同じい。

大意　この秋の野に置く白露は、恰も玉と見える、あゝいかにも玉であるかして、まことの數珠のやうに繋ぎかける事よ、蜘蛛の絲筋が。

評 露を玉に喩へ、これを絲に貫くといふ趣向は、上にもしばく見え、この作者また、

しら露に風のふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける

とも詠んで、往時玉といふ物が、平生盛んに取り馴らされて、いかに珍重されたかが知られる。おなじ比喩でも玉の如しと直喩にいはず、「玉なれや」と隱喩を用ひた爲に、蜘蛛の絲の貫きかけるのがさも自然に聞える。萬葉集卷八、

さを鹿の萩にぬきおける露の白玉　おふさはに誰れの人かも手にまかむちふ

を藍本として、鹿と萩との代りに蜘蛛の絲筋を使つたのは、却つて平凡の詩境となつた。二句、新撰萬葉にこりたる露は、四句、六帖につらぬきとむるとある。優ならしめようとて、入選の際改めたものか。けれどもこりたるの方、露の繫きさまを形容し得て、いさゝか勝つてゐるやうに思はれる。つらぬきとむるよりは本文の方が無論よろしい。

題しらず　　　　　　　　　　　　　　　　僧正遍昭

名にめでてをれるばかりぞ女郎花われおちにきと人に語るな

釋 ○名にめでて　名に心がとまつての意。「めで」は愛するの意。○をれる　折りてあるの約。一本おれるとあるに據つて、宣長が馬より下りた意に解したのは、語格違ひを忘れたものである。○女郎花　をみなへしと訓む。秋草の名。○おちにき　操を立てあへぬにいふ。僧徒の穢行あるを墮落といふに通はせてある。○な　禁止の辭。

大意　お前の若い女といふ名に愛でて、折つておいただけの事ぞ、これや女郎花よ、必ず拙僧が女に手を掛けて墮落してしまつたなど、人に噂して呉れるなよ。

評　女郎花の名に縁り擬人して、「語るな」と誡めたので、饒舌な艶妻の狀態が現はれて、甚だ面白い趣向である。所謂「歌のさまは得たれど誠少なき」滑稽は、この僧正の擅場である。後世蜀山人が、

女郎花口のさが野にたつた今僧正さんがおちなさんした

とやつたのは、よくこの意を得て翻案したものである。又この歌の詞書遍昭集には、「さう〳〵しく侍りしかば、馬に乘りて物にまかりし道に、女郎花の見えしを、及びて折りし程に、馬より落ちて伏しながら」とある。これに據つて、この集の序註には、「嵯峨野にて馬より落ちてよめる」とあるは「おちにき」に墮落の意と落馬の意とをかけた事になるが、餘にふざけ過ぎて、實際に疎い。遍昭集は素より後人の撰だから、恐らくは好事者の杜撰であらう。後拾遺集に「法師の扇を落して侍りけるを返す」とて、和泉式部、

はかなくも忘られにける扇かなおちたりけりと人もこそ見れ

とあるは、今の證左となりさうだが、それは俳諧の部に入れてある位で、この歌は律せられない。されば詞書に「題しらず」とあるまゝで說き得る範圍内で釋するのを妥當とする。さて奈良朝歌人は女郎花をその名稱に因んで詠みもしたが、かうまで擬人に巧む事はなかつた。それはこの作者の時代から始まつたものである。この集が巧緻の點に於いて、萬葉集より一層進步した一證と見られる。けれど爾來女郎花の歌とさへいへば、必ず譬喩と擬人とを常套とし、陳々相倚り腐々相累り、浮華厭ふべく、死氣楮表に滿ちてゐる。つぎ〳〵の歌人は敏行といひ、貫之、躬恒といひ、貞文といひ、いづれも豪傑の士であるのに、一首も彼れ女郎花の眞趣を直叙したるものゝないのは、傍痛いことである。

僧正遍昭がもとに、奈良へまかりける時に、男山にてをみなへしを見てよめる　　　ふるのいまみち

女郎花憂しと見つゝぞ行きすぐる男山にし立てりとおもへば

釋 ○僧正遍昭がもと云々　遍昭の住所へと志して、奈良へ赴く時、男山を過ぎて、女郎花を見て詠んだ歌との意。○男山　山城國久世郡石清水八幡宮のある山。雄德山とも書く。淸和帝の貞觀元年豐前の宇佐より勸請して祀る。○男山にし立てり　「し」は强辭、「立てり」は立ちてありの約。

大意 あの優しい女郎花といふ女が、一人でゐるならば語らはうとも思ふが、男といふ男山にサ立つてゐると思へば、自分には靡くまいから、彼れ女郎花を憂き事よと餘所に見ながらサ、通り過ぎるわ。

評 例の擬人して、女郎花に男山を對照せしめ、わが語らひ得ぬが遺憾だといふ。要は見附け物の一小をかしい

だけである。實感の歌ではない。諸註、男の中に立てるいたづら女にて、苦々しと見つゝ行き過ぐるの意としたのは、三句及び下句を輕く見過した結果であらう。

遍昭が奈良に居たことは、この卷の終の「里はあれて云々」の詞書に據ると、その母の家が奈良附近にあつたらしいから、遍昭も時折逗留して居たと想はれる。その子の素性が石上の良因院に住してゐたことも、何か所縁がありさうである。石上は夏部の素性の歌の詞書に、「奈良の石上寺」とあるので、當時奈良の一部と見られてゐた事は明らかである。作者の布留今道は、元來大和の布留の里人で（雜下、日の光藪しわかねば云々の歌の詞書を參照）今は仕官して都住居をしてゐる。たま〳〵遍昭が奈良に居られる頃、歸省かた〴〵訪問を兼ねての旅行の途次、淀の渡をして男山にかゝり、そこに女郎花を見たのである。

是貞のみこの家の歌合の歌　　としゆきの朝臣

秋の野にやどりはすべし女郎花名をむつましみ旅ならなくに

釋 ○名をむつましみ　名の懷かしく親しく思はれるをいふ。「み」は例のサニともクテとも譯する辭。○旅ならなくに　旅でもないのに恰も旅のやうにの意。こゝの旅は眞の旅行の意である。

大意　女郎花の女といふ名がサ、格別睦まじさに、うか〳〵遊び暮して、今宵は旅ではないのに旅めいて、この秋の野に泊りはしさうな。

評　當時行旅の際は野臥山臥が通例であつた。今はその旅ではないが、女といふ稱呼が氣に入つたので、この秋の野に一宿しさうだと、女郎花を賞翫する意を誇張したのは、春歌下、

いつまでか野べに心のあくがれむ花し散らずば千代もへぬべし

の筆法と同じい。それを季吟、宣長、景樹が、「同じくは秋の野に宿るべし、女郎花の名の睦じさに、旅にて寐るやうにはあらず」の意と解いたのは、結句を誤解して、遂に全體の意を謬つたのである。

この歌宗于集にもあるが、かの集は後人の撰だから信憑し難い。

題しらず　　をのゝよしき

女郎花多かる野べにやどりせばあやなくあだの名をや立ちなむ

釋 ○あやなく　わけもなく、詰らなくなどの意に近い。文無(アヤナク)の義。○あだ　移り氣で當(アテ)にならぬをいふ。空の義。○名をや　名やといふに同じい。名は評判の意。「を」は歎辭、「や」は疑辭。

大意 女郎花の多くある野原に泊りもするならば、眞實の女に逢つて寐たのでもないのに、わけもなく仇々しいといふ名が立つであらうか。

評 それ故泊りたいが見合はせるの餘意がある。實は秋の野に遊び暮して、いざ歸らうとする段になつて、花を見捨てゝ歸る心淺さを嘲られまいとして、花故浮名の立つのが迷惑なやうに假託して、口舌の間に瞞過しようと試みたのが面白いのである。以上はこの歌を表面から見た一應の解說である。もし比喩の作として見ると、景樹が「女多きあたりに宿るべき事ありつるやうの時、准へて詠めりしと見ゆ」といつたやうな一說が生ずる。作者美材は野相公篁の孫で、寛平中に進士に及第し、延喜二年にまだ壯年で歿した人である。名家の門葉といひ、才學といひ、年配といひ、如何にも婦人社會に歡迎されさうな人物だから、ある御簾の前などで、そんな

女郎花どもに惡る留めされて、この歌を詠み捨てにして逃げ退いた事とも想はれる。
二句、新撰萬葉に匂へる野べに、結句、新撰和歌に名をや流さむとある。

朱雀院のをみなへしあはせに、よみて奉りける

左のおほいまうち君

をみなへし秋の野風にうちなびき心ひとつをたれに寄すらむ

釋 ○朱雀院　朱雀院は亭子院ともいふ。累代上皇の御所で、三條の南、朱雀の西四町、四條の北、西坊城の東にあつた。この集の頃には、宇多上皇がお住ひであつたから、こゝの朱雀院は宇多上皇をさしたのである。○をみなへしあはせ　女郎花を洲濱などに飾り立てゝ、歌を添へて左右に番へて、勝負を競ふ遊戯である。この類、菊合、撫子合、前栽合、菖蒲合など、種類が多い。○心ひとつ　一心といふに近い。單に心、或は二つなき心と解した說もあるがわるい。

大意　あの女郎花の女は、秋の野の風にあちへこちへと打ち靡いて、心の定まらぬやうに見えるが、そも〱まことの一心を、誰れに寄せるのであらうぞ。

評　彼れが風次第に彼方此方にくねるを見て、その節操を女のうへで疑つたのを趣向とする。入らぬ心配のやうだが、作者が既にその女郎花に心を寄せてゐるものとすれば、その心配は當然である。それも或は浮氣な女のたよりなさを擬へたのかも知れない。輕雋な調子である。作者は時平の左大臣で、當時男盛であつたことを思ふと、何だか意味がありさうにもある。諸註、三句を一方にのみ打ち靡く意に解いたのは粗鹵。

藤原定方朝臣

秋ならで逢ふことかたき女郎花あまの川原に生ひぬものゆゑ

釋 ○秋ならで　秋にあらずしてはの意。○逢ふことかたき女郎花　逢ひ難きをみなといふに、女郎花をかけた。○生ひぬものゆゑ　「ぬ」は打消の助動詞。「ものゆゑ」は早く解すれば物ながらの意。

大意　あの女郎花は何故か、秋でなくては逢ふ事のむづかしい女である事よ、天の川の河原に生えもせぬもの故、何時でも逢はれさうなものを、棚機同前にサ。

評 秋になれば、二星相逢ふ七夕の典故に據つて、自分と女郎花との交會の、餘に二星の境遇に似たことを訝つた。「天の河原におひぬものゆゑ」頗る巧語言である。結句、一本にたゝぬ物からとある。

つらゆき

たがあきにあらぬものゆゑ女郎花なぞ色にいでてまだき移ろふ

釋 ○たがあきに　誰が飽くといふに、秋をかけた。○なぞ　何ぞの意。この語から轉つて、などが出來た。○まだき　まだの意。○移ろふ　色の變るに、心の變るを含めた。移るの延言。

大意　誰か飽きたといふ秋でもないもの故に、移ろふにも及ばぬのに、女郎花はどうした事ぞ、あのやうに色に出て、早くも自身の方から移ろふのであらう。

評 褒へ方の女郎花を見て詠んだ。人が飽きもせぬうちに、もう向で變つてしまう、さて〳〵女は移り氣なものだなあといふ意の譬喩である。歌はこずんで、叙述も明快でない。

二句、六帖にあらぬものからとある。

みつね

妻こふる鹿ぞ鳴くなる女郎花おのが住む野の花と知らずや

釋 ○おのが　己れがの意で、鹿自身をさす。○知らずや　「や」は疑辭。

大意 妻を戀ひ慕ふ鹿がサ、頻にあれ鳴くわ、えゝ鈍な奴よ、女といふ稱の花は、お前が住む野に在る花だとは知らぬのかい。

評 詠者が勝手に女郎花の名に縁つて、それを鹿の妻に取り成して、鹿に小言をくれたその痴想に、面白味をもつ。

結句、躬恒集に花にあらずやとあるは、調がおくれてゐる。

○

女郎花ふき過ぎてくる秋風は目には見えねど香こそしるけれ

大意 女郎花を吹き越して來る秋の風は、目にはそれと見えはせぬが、香がサ著しい、それで女郎花を吹き過ぎて來たとは知られる。

評 女に逢つて來た男の、その女の移り香の高いのを聯想したのだらう。下句理窟張つて面白くない。「目には見えねど」はいひ過ぎで無用である。「こそ」の用法も正格ではない。試に引き直すと目にこそ見えね香はしるくしてなどいふがよからう。春上に、この作者が、

春の夜の闇はあやなし梅のはないろこそ見えね香やはかくるゝ

と詠んだのと、なまじひに着想の同一であるだけ、いよ〳〵飽き足らぬ心地がする。

四句、六帖に目には見えずてとあるは優つてゐる。新撰萬葉に、二三の句行き過ぎてくる秋風のとあるは劣つてゐる。

たゞみね

人の見ることやくるしきをみなへし秋霧にのみたち隱るらむ

釋 ○たち隱る　「たち」は接頭語。

大意 人の見る事が迷惑なのか、それ故にあのやうに女郎花の女は、とかく秋の霧にばかり隱れるのであらう。

評 嬌羞人を怕れて、動もすれば物に蔭らふは、女の通性であるばかりか、殊に當時の婦人社會の慣習を知ると、この歌の痛切さがわかる。王朝時代の上中流の婦人は、情的關係以外では、知らぬ男否知合でも、絶對に顏を見せない。姿も隱してゐる。御簾越、几帳越、卽ち物越で男には對面する。出這入には扇で顏を蔽ふ。そこで秋は霧深くして野草をもおほふを、女郎花の方より羞かしさに、心あつて隱れるものゝやうに、反對に描寫したのを一ふしとする。

新撰萬葉に、初二句君に見えむ事やゆゝしき、四句霧のまがきにとある。六帖も、四句は新撰と同じい。

○

ひとりのみながむるよりは女郎花わが住む宿に植ゑて見ましを

釋 ○ひとり　獨身でゐるをいふ。○ながむる　物思しつゝ見詰むるをいふ。

大意　獨身で女戀しげに物思をして居るよりは、寧ろ女といふ名の女郎花を、自分の住む宿に移し植ゑて見て、心を慰めようものを、今までそこに心つかずに物思してゐたのは愚だつたよ。

評　はかない物種につけても心を遣らうとする、輾轉反側の情が哀れである。諸家、後撰集に、

わが宿に植ゑてだに見む女郎花人はしたなき秋の野よりは

を類歌として、初二句を女郎花が獨詠むる意と解した契沖の說に據つたのは、結句への折合の妥貼でないことを忘れたものである。且初二句の語意を誤解してゐる。却つて奥義抄等の舊說の方が可い。「ひとりながむる」といふ語は、源氏などにも見えて、獨身者の煩悶を意味する時代語である。

物へまかりけるに、人の家に女郎花うゑたりけるを見てよめる　　兼覽王

女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたる宿にひとり立てれば

釋 ○物へまかりけるに　或所へ往つたのにの意。「もの」はその事物を顯はさず、弘くさしていふ語。○うしろ

めたく　不安心な意。氣懸かり。

大意　あの女郎花の女は、さても〳〵不安心に思はれる事よ、その故はこの荒れてある宿に、後見する者もなしに、只一人立つて居ればサ。

評　軒は朽ち簀子は壞れて、傾きかゝつて寢殿に、ほんの身を隱すだけの屛風几帳を、昔の名殘にしつらつて、親も乳母立つ者も同胞も仕女もない少女只一人住んでゐるあたり、庭は野のやうに荒れはてゝ、蓬葎さては女郎花の自生してあるのを見て、この女主人公を女郎花に譬喩したものであらう。空穗物語の俊蔭の女の獨住の條を思ひ合はせると、いよ〳〵このうしろめたさが痛切に感ぜられよう。

寛平の御時、藏人所のをのこども、嵯峨野に花見むとてまかりたりける時、歸るとて、みな歌よみけるついでによめる

平のさだふん

花にあかでなに歸るらむ女郎花多かる野べに寢なましものを

釋　○藏人所のをのこども　藏人所は類聚國史に、「弘仁元年三月十日始置二藏人所一令下侍二殿上一掌中機密文書及諸訴上」とあつて、頭は四位、藏人は五六位、その下に非藏人、出納、小舍人、雜色所衆、瀧口などの職がある。「をのこども」はこの下輩の人々をさす、うへのをのこ とは違ふ。混じてはいけない。○嵯峨野　今の京都の西北の嵯峨村。○なに　口語のなんでの意。

大意　見事な花を、十分に飽くまで見ないで、人々は何で歸るのであらう。自分はこの女郎花といふ女の多くあ

る野邊に、今宵は寢ようと思ふものを。

評 初二句は人々の行動について訴りもどき、三句以下自分の欲望を陳べた。遊行などの歸さは、通例の場合日暮になる。この歌も時刻は日暮であることを、まづ記憶しなければならぬ。さて日は暮れても尚この野に遊んで居ようの意を、「寢なましものを」と、女に心の惹かされた趣に取り成して興じたものである。この打ち解けた輕い冗談には、その若々しい好色者であることを思はせられる。作者は世に平仲（ヘイチウ）と呼ばれた有名な好色家である。この構想が人柄相應なのも可笑しい。

是貞のみこの家の歌合の歌　　としゆきの朝臣

なに人かきてぬぎかけし藤ばかまくる秋毎に野べをにほはす

釋 ○きて　來ての意。○ぬぎかけ　脫ぎ掛けの意。「掛け」は衣桁などに掛けるのでいふ。○藤ばかま　宿根草で、莖圓く節長く葉は對生して長く、高さ三四尺又は六七尺もあり、夏秋の際枝の末毎に淡紫色の細小花集り開く、葉に香氣が多い。○にほはす　薫らするの意。

大意 この藤袴は、以前どんな人が着馴して、此處に脫ぎ掛けて置いたか、每年每年秋の來る度每に、その移り香がこの野邊を匂はすわ。

評 から每年も匂ふは、必ず尋常の袴ではあるまい、名香をよく炷きしめた、いともあてなる人の袴だらうの餘意がある。往古上流社會の好んで薫物した事は、既に春上「色よりも香こそあはれと思ほゆれ云々」の條で說明しておいた如くである。藤袴の名稱から、袴の上で仕立た譬喩、巧ではあるが眞摯でない。以下の二首また浮

華である。
四句、新撰萬葉に秋くる每にとある。

藤袴をよみて、人につかはしける　　つらゆき

やどりせし人のかたみか藤袴わすられがたき香ににほひつゝ

釋 ○かたみか 「かたみ」は記念の物をいふ。「か」は疑辭。

大意 この藤袴は先達て此方にお泊りなされた貴方の、形見に脱ぎ置かれたのかしら、とかく今に忘られにくい貴方の移り香に匂ひくして、貴方の事が懷かしく思はれますよ。

評 詞書の「人」を朋友と見る說と、情人と見る說とがある。この時代までは、男同志でも友情の切な間柄では、いたく思慕する趣を歌つてゐるから、いづれにしてもその意は適切であらう。袴の香は例の意匠である。又思ふに實際はこの歌を藤袴に付けて贈つたものではあるまいか。詞書にさうことわつてないのは、書信の往復を始めて物の獻酬には、物の枝に附けるのが、當時一般の常習であつたからであらう。カ音の多さが耳立つて聞える。

ふぢばかまをよめる　　そせい

ぬし知らぬ香こそ匂へれ秋の野にたがぬぎかけしふぢ袴ぞも

釋 ○ぬし 持主。○知らぬ 知られぬの意。○ぞも 「ぞ」は指定の辭。「も」は歎辭。

大意　主の分らぬよい香がサ、高く匂つてゐるわ、かう匂ふ藤袴は、この秋の野に誰れが脱ぎかけて置いた袴であるぞよ。

評　往古はその人の好みによつて、甲は梅花がよいとか、乙は黒方(クロバウ)が好きだとかいふ具合に、常用の薫物の加減を試みたものだから、さつと薫るや否や、大やう誰れだらう位の見當がつく。處で今は藤袴の香なので「知らぬ」のであるのを、「誰がぬぎかけし」と袴の上で仕立てあげた。前二首と同趣で、疑問體の形式まで同一である。どれが先出か不明であるが、年輩からいへば、貫之は中での後輩で、敏行が先輩である。

題しらず　　平貞文

今よりはうゑてだに見じ花薄穂にいづる秋はわびしかりけり

釋　○花薄穂にいづる　薄の穂を成すをいふ。これを又尾花ともいふ。一種の薄の名とするは當らない。

大意　もうこれからは、薄は庭などに植ゑてさへも見まいと思ふ。なぜといふに、あのやうに薄が穂に出て哀れな景色の見える秋は、心細くいやであつたわい。

評　古は秋草を植ゑることが盛に行はれ、薄も移植されたことは、哀傷部にも「君がうゑし一村薄」とあるのでも知られる。春上に「花の木は今はほりうゑじ」とあると同趣で、面白からうと思つた豫想が裏切られて、眼前の秋色の、徒に斷腸を促すに過ぎぬのを打ち歎いてゐる。二句の「だに」に古來異論がある。或は意義がないといひ、或は植ゑてまで見るべきでもないの意といふは、皆誤つてゐる。秋の野にわざ〳〵行つて見る事は勿論の事として、よく庭には植ゑる物だが、「今カラハ植ヱテサヘモ見マイ」といふのである。和歌九品に、下の中に

据ゑて、「事の心無下に知らぬにもあらず」と評してある。聲調は蒼涼で、その體に協つてゐる。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　ありはらの棟梁

秋の野の草のたもとかはな薄穗にいでてまねく袖と見ゆらむ

釋　○たもと　袂は手本、袖は衣手の義で、つまりは同一物である。差別していふ時は袖は全部をいひ、袂は手の當る一部をいふ。○穗にいでて　内にある事の外面に露顯する事をいふ。それに薄の穗を出すをかけた。

大意　花薄の穗は秋の野の惣體の草の袂であるか、否さうでもないのに、何でその花薄の穗に出て風に靡くのが、恰も人が色に出て戀しい人を招く袖のやうに見えるのであらう。

評　穗薄の風にゆらぐ樣子が、實に人が袖から手を出して招くのに似てゐることは、郊外で吾人のよく見る所である。「袂」は草の方につけていひ、「袖」は擬へた人の方でいつた。初二句の下、何故にの語を補足して聞くべき格であるが、意詞やゝ晦澁の嫌があるやうである。

素性法師

われのみやあはれと思はむきり〴〵す鳴く夕蔭のやまと撫子

釋　○のみや　「や」は疑辭。○あはれ　可怜の意で、身にしみて歎賞するをいふ。○夕蔭　夕日の傾いて未だ暮れ果てぬ間の物蔭をいふ。奈良時代からの語。○やまと撫子　唐なでしこに對へた稱で、顯昭の註に「紅梅色にて花の裾さゝけて變り、秋の野に一筋〳〵ぞ咲きたる」とある。今の河原撫子のこと。

大意 他に來る人も無くて、自分ばかりが、あゝ美しいと思つて見よう事かまあ、この蛬の鳴く夕陰に咲いた、あつたら撫子の花をサ。

評 すさまじい寂びた秋色の表現を主眼としてゐる。他に同情の友も無くて、形影の單なるのや、暗蟲の啣々たるのや、夕日絶え〲にさして物蔭の暗い入相時、大和撫子の物はかなげに咲いたのや、一つですら感哀を刺戟する材料でないのはない。ましてこれを湊合してゐるときては、溜つたものではない。風韻幽玄、聲調も各種の韻を平均に配し得て、極めて平靜である。佳作と稱へてよい。

舊註、初句の「や」を反動辭として、自分ばかりか誰れもあはれと思はぬ者はなからうの意に解し、諸家またこれに從つたのが多いのは、一番の吟味を缺くものである。

題しらず　　よみ人しらず

緑なるひとつ草とぞ春は見し秋はいろ〲の花にぞありける

大意 春萠え出た時は、只皆おなじ青い一色の草とばかり思つたが、春見たとは存外に、秋になつて見れば、このやうに色々の見事な花でサあつたわい。

評 春と秋とを對比し、又數多い事を「いろ〲」と轉義して、「ひとつ」に對照させ、且は種々の色彩ある事をも暗に響かせた。一首の組織を案ずると、上句と下句と全然聯對法を用ひて、主客反對の比較を取つたので、その變化の甚しいさまが顯れ、それを意外と驚いた情致が見える。叙述の手法は、全く一家の機軸を出してゐる。但意に綢密過ぎて、想像の餘地に乏しい。聲調は清晩である。後拾遺集に、

霜枯はひとつ草とぞなりにける千ぐさに見えし野べにはあらずや

とあるは、只これを歩襲したに過ぎない。

○

もゝ草の花の紐とくあきの野に思ひたはれむ人なとがめそ

釋　○もゝ草　數多の草をいふ。「もゝ」は百である。數字を以て多くの意を代表させた。○花の紐とく　花の開くをいふ。物の結目の紐を解けばその口の開くに譬へた語。○思ひたはれむ　思ひ戲れむの意。「たはれ」は淫るの意から出てゐる。

大意　この色々さまぐ\の草の花が、帶紐解いて亂れた面白い秋の野で、巫山戲て遊ばうと思ふ、それ故人は見ても見ぬ振して、怪しからぬ奴と咎め立てをして呉れるなよ。

評　「百草の花の紐解く」を、數多の女がうち解けて衣の紐を解き下げたのに擬へ、これを楔子として、遊ばむといふべき處を、「思ひたはれむ」と取り成したので、「人な咎めそ」の一句が、必然の聯想として寄つて來たのである。要するに秋草の咲き亂れた野邊に足がとまつて、頗る興に入つた趣を、比喩で述べたのである。修辭の技巧は認められるが、面白過ぎた憾がある。然し作者の目的はそこにある。四句、六帖に思ひみだれむとある。

○

月草にころもはすらむ朝露にぬれてののちは移ろひぬとも

釋 ○月草　今の螢草。その花早朝に開き晝萎び、碧色で採つて衣に摺るに善く染み着けば、着草（ツキクサ）といふ。月と書くは借字。又鴨頭草とも書く。露草と同一物。さてこの花の色は染み付き易く、又褪め易い。故に昔から月草には移ろふことを頻に歌はれてゐる。○すらむ　摺り附けむの意。

大意 このよい色の月草の花で、自分の着物は摺つて染めよう、よしこの朝の露に濡れた後には、忽に色が變つてしまうとも、そんな事は構はずにサ。

評 風格高古で、更に前二首の比でない。果して萬葉集卷七に既に見えて、寄草と題した譬喩歌であつた。例の誤選であらう、「朝露にぬれての後」は衣に摺りての後の意の轉義で、同語のさし合を避けた一手法である。元來この歌は、ともすれば氣の變り易い女を、色の移ろひ易い然し美しい月草に擬へ、とにかくあの女に一度契をかはして見よう、よし契をかはした後は心變りはするにしてもと、後の事はともあれ、刹那の享樂に醉ひたい希望で、理性と情熱との葛藤に、遂に情熱が勝を制した趣である。若い血の湧き立つた響が聞える。但この集では、比喩の意を見ず、單に月草の歌として收めたのではあるまいか。「朝」の一語が眼目である。月草の咲いた樣子も、露のおほい樣子も、これによつて活躍する。

さて上古染色法の發達しなかつた時代では、木草の花或は葉の汁を以て、直に染め着ける事、丁度小忌（ヲミ）の摺衣（スリゴロモ）のやうであつた。奈良朝時代は、支那との交通に由つて、大いに斯術の進歩を致したけれど、打ち解けた物古典的な物には、なほ摺衣もあつたとすると、萩や月草やの色よい草花が目に觸れゝば、摺つて見ようと思ひ寄るも常の事で、今考へるやうに單なる洒落氣や不自然ではない。

四句、萬葉集にはぬれてのちにはとある。おのづから意詞相協つて、且古調である。

仁和のみかど親王(ミコ)におはしましける時、布留(フル)の瀧御覽ぜむとておはしましける道に、遍昭が母の家に宿り給へりける時に、庭を秋の野につくりて、おほん物がたりのついでに、よみて奉りける

僧正遍昭

里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる

釋 ○仁和のみかど云々　春歌上の「君が爲春の野いでて」のにおなじ詞書に、既に説明したから略する。「布留の瀧」は大和國山邊郡石上(イソノカミ)の布留にある瀧。布留川の上流。「遍昭が母の家」は遍昭は大納言良岑安世の男であるから、母は安世卿の室である。「庭を秋の野につくりて」はこの親王の御饗應の爲に、殊更に庭に秋草の花など植ゑて、秋の野の狀に作り成したのである。「おほん」は大御(オホミ)の音便。○里　人家ある處。○ふりにし　舊くなり果てた。○なれや　なればやの意。○まがき　垣と同じい。「ま」は美稱。○野ら　野のこと。「ら」は添辭で、夜ら、稀ら、淸らなどのらと同じい。

大意　京とは違つて里は荒れて、そのうへ住む人は舊臭く年寄つてしまひました宿のせるかして、御覽の通り庭も籬も甚しく荒れ果てゝ、あれあのやうに、恰も秋の野らで御座いますわい。

評　むさくるしい處である上、萬事行き屆かぬが恐縮の至で御座いますの餘意がある。この歌は遍昭がその母に

代つた作である。「里は荒れて」は、勿論寄興の戲言ではあるが、もと盛んであつた趣も見えるから、平安の京から布留へ行く途中とすると、遍昭が母の家は奈良の故京か、又はその附近と見ねばなるまい。桓武天皇の皇子大納言良岑安世卿の未亡人の家である以上は、いかにも造り磨かれた立派な住居と思はれるのに、「里は」「人は」と「は」文字を疊用して、力を籠めて侘びしげにいひ立て、「も」文字を疊用して、何處も見る影無く荒れたやうにいひ張つた水火の取り成し、例のこの作者の壇場であることは異論はないが、又一面に、この事實に反いた描寫は、明らかにそれが親王に對しての謙辭であり、內面的には敬虔の意が漂つてゐることを感ずる。時に取つての好辭令ではないか。質實ではないが、寄託の興が深く、含蓄の餘味も亦太だ饒い。又上句の「は」文字の相對、下句の「も」文字の相對に呼應して、全首の和諧暢達の素を成してゐる。

古今和歌集卷第五

秋歌下

是貞のみこの家の歌合の歌　　文屋朝康

吹くからに秋の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらむ

釋 ○普通本には作者を文屋康秀とある。但古今六帖、及び秋の下卷の貫之筆（高野切）といふには、作者文屋朝康とある。朝康は康秀の子である。契沖の說に、「春歌上に、二條の后の東宮の御息所と申しける時、御前にて康秀が「かしらの雪」と詠みしは、貞觀十一年より後、天慶元年より前の事にて、五十餘の齡なるべし。さてこの是貞親王は、仁和の御門（光孝）の第二の皇子なれば、この歌合の頃康秀若し世にありとも、いと老い果てゝ、さる事には列るべくもあらず。こゝは次の歌と共に、朝康とこそありつらめ」とあるは當つてゐる　○からにつけて、よりてなどの意。○しをるれば　撓ひ折るゝこと。○うべ　成る程、尤もになどの意。諾ふの略で副詞。小倉百首に「むべ」とあるは轉訛。○あらし　「し」は風又は息をいふ。故に荒い風は「あらし」である。

大意　山風が吹くによつて、それに揉み立てられて、秋の草や木があのやうに萎れるから、道理で山の風を物を荒すといふ名のあらしといふのであらう。

評 山風に秋の草木の萎れる實際の光景を基礎としての作ではあるが、「あらし」の秀句が著想の中心である爲に、畢竟口舌の巧に過ぎないので、詩趣は卽ち缺乏してゐる。公任の九品に、これを下品の上に置いて、「わづかに一ふしある歌なり」と評したのは允當である。又漢字の嵐の一字を拆いて、うべ山風を嵐と洒落れたのだといふ說がある。かやうの文字上の遊戯は、夙く支那に行はれ、又わが朝にも傳はつて、文人詩客の弄んだ例證が數多あるから、これも亦それに倣つて試みたものだらう。冬部「雪降れば木毎に花ぞ咲きにける云々」の歌の梅の字を拆いた例もある。さては國語の秀句と漢字の拆字との巧を兼ねた作で、雕蟲の技は驚くほど達者である。初句は新撰萬葉にうち吹くに、二句は六帖にはなべて草木の、この集の序註には野べの草木の、結句は新撰萬葉、及び貫之筆本にあらしてふらむとある。うち吹くには浮泛で力がない。なべては抽象的で妙でない。野べのは山には對照があるが、眞淵の「この歌には秋のといはまほしく、且ことも廣ければ」との論に從ふがよい。てふらむは、眞淵は「この集の頃の詞遣ひなり」といひ、景樹もこれに左袒したが、語調が弱くて奮はない。といふらむの字餘りの方が、初句及び四句の逞しい調に匹敵して、權衡が取れる。

○

草も木も色かはれどもわたつみの波の花にぞ秋なかりける

釋 ○これも康秀のではあるまい。六帖には朝康とある。○わたつみ　海をいふ。雜上「わたつみのかざしにさせる」の條參看。○波の花　風の爲に波の白く立つのを白い花に喩へていふ。

大意 世の中の草も木も、この秋といふ時節の爲には、うら枯れて色が變るけれども、あの海の波の花には、こ

の節でも、色の變る秋といふ事が無かつたわい。

評 變ると變らぬとの對照で、詩境は平凡だが、修辭の巧はやゝ見られる。波を花に喩へるのは常套とはいへ、おのづから春といふ感じが浮いて、結句へ對應してゐる。又色の變らぬ事を、「秋なかりける」と轉義したのも露骨でない。かゝる文字三昧は、文琳父子が得意の處である。なほ思ふに、草木の色變るも波が花と立つも、皆秋吹く風の仕業だから、一首の上に秋風の風情がめぐつてゐる。卽ち陰に秋風が活躍してゐる。新撰萬葉に、初句草木みな、三句大海のとある。又六帖に、下句波の花こそ秋なかりけれとある。

秋の歌合しける時によめる　　きのよしもち

もみぢせぬときはの山はふく風の音にや秋を聞きわたるらむ

釋 ○ときはの山　山城の名所といふ。常磐木のみ生えてゐる山故に付いた名だらう。

大意 秋になつても木の葉の色も變らず、いつも同じ綠の常磐の山は、ほかの山とは違つて、自分自身は秋のしるしもないが、この頃夏とは吹き變つた梢の風の音にサ、世間の秋を聞いてゐる事だらうか。

評 諸註「常磐の山は」の「は」文字をにてはの意とし、其處に住んでゐる人のうへを想ひ遣つた歌のやうに解したのは、間違つてゐる。これは常磐山を擬人したのである。常磐の名義を基礎としての構想は甚だ面白くもないが、只この擬人に多少の趣がある。風の音が秋を知らせる所以は、秋上の敏行の「風の音にぞ驚かれぬる」の歌で、その趣が知られよう。

この歌再び拾遺集に入つて、大中臣能宣の歌になつてゐる。同集またこれと並んで能宣の、

紅葉せぬときはの山に住む鹿はおのれ鳴きてや秋をしるらむといふがある。案ずるに能宣の歌は淑望の作を換骨した事が明らかだから、後人が淑望作の原歌をその傍に書き入れて心覺えとしたのを、轉寫の際途に本文に混入してしまつて、能宣の歌となつた事は疑ひもない。

題しらず　よみ人しらず

霧たちてかりぞ鳴くなる片岡のあしたの原はもみぢしぬらむ

釋 ○片岡のあしたの原　片岡は大和國北葛城郡二上山の東方に横はつてゐる丘陵である。そのあたりを王子村大字王子といひ、片岡山達磨寺などある。その近傍の原野をあしたの原といふ。朝の原、芦田の原などと書く。

大意 霧が立つて雁がさあれ鳴くわ、この分では最早片岡の朝の原は、紅葉した事であらう。

評 嘗て片岡の朝の原の秋色を味つたことのある人の作だらう。八重立ち籠る霧、峰飛び越ゆる雁、取り集めた悲秋の景氣に感じては、曾遊の朝の原のしもと林の紅葉を、今やと聯想せざるを得ない。況や霧の立つは木の葉の色づくに關係がある。否たゞさう聯想したゞけではない。やがてその秋色にあこがれた、根强い熱心を見せてゐる。格調蒼古で、萬葉集中に置いても恥かしくない。あの時代の作には、この種の想像、語法、風體を具へた、

やたの野の淺茅いろ付くあらち山みねのあわ雪寒くふるらし

の類が隨分多い。されば自然陳套の嫌がないでもない。平安時代の歌人が巧緻の一局面を開いたのは、重にこれらの風調に對する反動である。

○かみな月時雨もいまだ降らなくにかねてうつろふ神なびの森

釋 ○かみな月　陰暦十月の異名。十月は神事が多いので、神の月と云つたのが轉じたのだとも、この月諸神出雲の大社に集ひ給ふによつて、神無月の意だとも、收穫の新穀にて酒を製する時期ゆゑ釀成月の略だとも、雷の收つてしまふ頃だから雷無月の意だともいふ。最後の說が簡易で一番穩當だらう。○かねて　前以ての意。○神なびの　大和國平群郡龍田村神南村。龍田川に沿うた三室山をまた神南備山といふ。森も其處にある。同郡立田村字立野の龍田神社の南方とする說は采らない。

大意 今は秋で、木の葉を染める筈の、十月の時雨さへもまだ降らぬのに、はや前以て色付いたこの神なびの森よ。

評 はて不思議なの餘意がある。この歌古來の疑問になつてゐる。それは秋での歌だから、初二句は神無月の時雨と解しないと意が聞えない。意釋は假にこれに從つておいた。景樹はこれを難じて「のの辭の入るべき語勢にもあらず。後をかけたる意と見むも強ひたるが如し。況や時雨を必ず冬季十月の物とするは後撰集に、

　神無月ふりみふらずみさだめなき時雨ぞ冬のはじめなりける

の一詠出でてより後の事にて、この時代までは重に秋季に詠み合はせて、『秋の時雨と身ぞふりにける』『秋は時雨に袖をかし』など、この集中にも見えたり」と云つたのは當つてゐる。故に神無月の時雨と豫定することは、時代思想を餘所にしたことになる。依つて思ふに、この初句もとはなが月のとあつたのではあるまいか。那の

假字は神の字の草體に似、可の假字と奈の假字とは、草略してないがしろに書く時は又似ないこともないから、見誤つて神奈月のと讀んだが、さては一字餘るので、の文字を略き捨てゝ、「神無月時雨も」とは讀み連ねたものか。秋の時は、長月の時雨と詠み、冬の時は、神無月時雨の雨と詠むは、この時代までの恒例だから、

ながが月のしぐれもいまだふらなくにかねてうつろふ神なひの森

とすると、意味貫徹して、措辭も妥貼になる。こはこれ試にいつたまでゝある。なほ大方の是正を俟つ。貫之自筆本といふものには、

わが門のわさ田もいまだ刈りあげぬにまだきもみづる神なひの森

の歌があつて神無月の歌がない。このわが門の歌、また六帖の森の題に出て、三句刈りあげねばとあり、下句は本文のと同じである。眞淵も景樹もこれを採つて、本文を排斥してゐる。貫之自筆本といふ物が果してどこまで信用のなるものか。「彼の本は貫之のにはあるまじとも思はるれど、近き世の物にはあらず」と、眞淵自身も既にいつて居るとはいへ、一本として參考に供すべき價値ある事は、又いふまでもない。

○

千早ぶる神なひ山のもみぢ葉におもひはかけじ移ろふものを

釋 ○千早ぶる　神にかゝる枕詞。委しくは下の「千早ぶる神代もきかず立田川云々」の歌の條に述べる。○神なひ山　神なひの森と同處としても、高市郡の神南備山としても通ずる。上の「神無月時雨もいまだ云々」の條を參看。○移ろふ　こゝは散る意。

大意 神無備山の紅葉に、あまり深く執心しまいぞ、折角思をかけたとて、つい散つてしまふものをサ。

評 「思は懸けじ」といふのは、既に深く思を懸けてゐる人の詞である。「移ろふものを」は例の無常觀で、「色葉匂へど散りぬるを」と同一規であるが、感情を強ひて理性で抑へようと計つてゐる。かう深く思索したことは、これ決して普通單調の歌でないことを思はせる。蓋し譬喩である。紅葉を心仇なる人に比して、そんな移ろひ易い者に思ひ掛けるは愚の頂上だから、最早思ふまいと、口では立派にいひ切りながら、心にはやはり思はれるのを、何ともしかねて懊惱してゐる。歌主は全く戀の奴である。辭藻は優美で情韻が饒い。

貞觀(チヤウグワン)の御時、綾綺殿(レウキデン)の前に、梅の木ありける、西のかたにさせりける枝のもみぢはじめたりけるを、うへにさぶらふをのこどものよみけるついでに詠める　藤原かちおむ

同じえをわきて木の葉のうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ

釋 ○貞觀の御時　清和帝の御世。貞觀はその御代の年號。「綾綺殿」は禁中の御殿の名で、宣耀殿の北麗景殿の南にある。清和帝はこゝ及び弘徽殿をおましとなされた事が三代實錄に見える。貫之自筆本といふには、弘徽殿とある。「ついでによめる」は一寸考慮を要する句である。蓋し歌詠むとて集合したのは、「上にさぶらふをのこ共」卽ち殿上人である。作者勝臣(カチオン)は地下人で、肩を竝べて列座する資格のない者であるけれども、殿上人達の歌詠まるゝそのついでに詠み出したといふのである。○同じえを　「え」は枝。「を」はなるをの意。○わきて取り分けて。

大意 東西南北共に、同じ一本の木の枝であるものを、西の方へさした枝が、取り分けあのやうに早く色付くのは、どうした事と思つたが、それはその筈、西の方がサ、秋の來る取付であつたわい。

評 居並んだ程の殿上人は、梅の紅葉を詠んだであらうが、勝臣ひとり西の一字に着目して、易に坤の卦を西として秋に配する典故があるので、それを捉へ來つた「西こそ秋のはじめ」の警策は、いたく物めでする大宮人等の喝采を博したであらう。かやうな歌は、その折柄の面白さにもてはやされてこそ出榮えはするが、程が經つと感が淺くて、纔に一ふしありといふに止まる。

石山へまうでける時、おとは山の紅葉を見てよめる

つらゆき

秋風のふきにし日よりおとはやま峰の木ずゑも色づきにけり

釋 ○石山へ云々　近江國石山觀音に參詣するには、音羽山の南麓、久久目路(今の澁谷越)を越えて、山科から逢坂に出る。○おとはやま　洛東東山の一峯で、清水寺のある山。

大意 秋風の吹き初めたその日からして、風の音が立つたその音羽山を、今日來て見れば、峰の梢も思の外色が付いて來たわい。

評 「吹きにし」と過去にいつたので、上下のうち合が面白くなくなる。又實際の事情にも協はない。そこで眞淵が、「音羽山に風の音を含めたり。後撰集に、

松蟲のはつ聲さそふ秋風はおと羽山より吹きそめにけり

も、山の名の音を物の音にいひなせり」と云つた說を采つて、糊塗しておくより外に仕方がない。すると初二句は有心の序詞の如き結果になる。秋上の棚機の歌の、「秋風の吹きにし日より久方の」といふに比較して、語に分寸のある事を心得られたい。

秋風の日にけに吹けばみづぐきの岡の木の葉も色づきにけり　（萬葉卷十）

を蹈襲して、しかも不調の嫌がある。

是貞のみこの家の歌合によめる　　としゆきの朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉を千ぢに染むらむ

釋　○ひとつを　一つなるをの意。

大意　露の色は皆同じ一つ色であるものを、それにまあどのやうにして、秋の木の葉をあのやうに、いろ〳〵に染める事であらうぞ。

評　白露一たび下るや、黃綠參差し、紅紫間錯して、千葉の秋は萬段の錦を舖く。その靈怪な手腕には、驚かざるを得ない。特に染色の業に、深い趣味と鑑識とをもつた當時の人士では、かうした染色上の着想は、別に珍しくもない。只反對の事相を湊合して驚訝したことが、一寸した機智を感じさせる。「ひとつ」は同じ、「ちゞ」は多數の轉義に、いよ〳〵適切に明確に、兩者の相反したことを說明する。この「ひとつ」と「ちゞ」との對照は、大江千里も、「月見れば云々」の歌に用ひて、しかもこれと同時の詠だから妙だ。但想も修辭も、千里のに一籌を輸してゐる。聲調は悲涼である。後に大中臣賴基が、

白露はわきておかじを秋の山やまのもみぢの薄くこからむ

と詠んだのはこの蹈襲で、又はるかに拙い。

三句、新撰和歌にいかなればとあるは劣つてゐる。又四句新撰萬葉、及び六帖に秋の山べをとある。「ちゞ」といふ觀念にはふさはしいやうだが、染色の技工に着して見ると、實際の加工材料たる「木の葉」を點出した方が面白い。

壬生忠岑

秋のよの露をば露とおきながら雁のなみだや野べを染むらむ

大意　あの白い露サ、野邊の草木を染めるのは、訝（イブカ）しいと思つて居たが、あれは全く露は露としてそのまゝ置いて、別に雁の鳴いてこぼす涙が降りかゝつて、あの野邊を一面に染めるのであらうか。

評　雁の涙は、例の啼くからの聯想で、珍しくもないが、それが野邊の草木を染めると見たのは新案である。無情の露、有情の涙、當然結果に逕庭のある筈、況や節は秋、時は夜、この物悲しいをりを啼く雁の聲は、聞くからして、愁人の腸を斷つものである。野邊の草木のそれによつて染まる位は、勿論と感じたのである。まづ相當の感哀ある作と見られる。但雁の涙を血涙にまで取り成して、野邊を染めたと釋くは、白露に近い對映はあるが、却つて入ほがであらう。

三句、家集に、おもひおきてとあるは、更に義を成さない。

題しらず　　よみ人しらず

秋の露いろ〲ことにおけばこそ山の木の葉の千種なるらめ

釋 ○いろ〲ことに　色々殊にか。傳貫之筆のも本文と同じだが、古筆ながらなほ信じ難い。新撰萬葉に、色殊々丹（コトゴトニ）とある。その方が調つてゐる。それに從はう。「こと〲に」は別々の意。

大意 この頃の秋の露は、色がそれ〲違つて置くからこそ、あのやうに山の木の葉が、いく色にもなるのであらう。

評 さもなくては、かう千種となるべき筈がないとの餘意がある。全山五彩燦爛たる目前の實況に幻化せられて、却つて露の各色あるやうに、沒常識の想像を試みた。この稚氣痴態卽ち詩である。

寛平歌合に、二句色のこと〲、四句山も紅葉もとあり、新撰萬葉には、四句山の紅葉もとある。

もる山のほとりにてよめる　　つらゆき

しら露もしぐれもいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

釋 ○家集には、「竹生島（チクブ）へまうづる時、もる山といふ所にて」とある。○もる山　今守山（モリヤマ）といふ　近江國志賀郡にある。いたく洩るといひかけた。

大意 白露も時雨も、甚しく洩るこの守山の木立は、流石に外の山とは違つて、梢ばかりか下葉まで、殘らず色付いた事わい。

評 都を出て、多くの山々を見つ越えつして、始めて守山に來て、紅葉の盛りのに出會ひ、その然る所以を訝し

んだ事から、端なく地名に想ひ到つて、露時雨のいたく洩る山である事を、了得したのである。三句の「は」の辭に力があつて、差別の意に聞えるので、他の山の梢は、いまだ下葉までは色付きあへぬ頃である事が知られる。又上に「いたく」と置き、下に「殘らず」と受けた詞の掛け合、この種の修辭は、後世、藤原爲家が祖述したもので、夙く二條家の家風の端を啓いたといはれよう。地名を構想の基礎に置いてゐるが、なほ實感を失はない。定家が「詞優しくことわり明らかなる歌」と評したのは、さもと思はれるが、この集の秀歌十首の一に推したのは、蓋し過褒である。

結句、家集、六帖ともに、もみぢしにけりとある。又六帖には、作者を忠岑とあるけれども、到底忠岑の企及し得る風體でない。貫之と忠岑とを對比すると、おなじ巧を弄しても、おのづから人天の懸隔がある。

秋の歌とてよめる　ありはらの元方

雨ふれどつゆも洩らじをかさとりの山はいかでかもみぢそめけむ

釋 ○つゆも　少しも。○かさとりの山　山城國宇治郡笠取村の山をいふ。醍醐の近くである。さて笠を冠り、傘をさすを古へはとるといつたので、山の名にその意をいひかけてある。

大意 かさとり山は、雨を防ぐ笠をとるといふ名だから、いくら雨が降つても、露ほども洩るまいと思ふものを、どういふ事でこの山は、あのやうに紅葉しそめた事であらうぞ。

評 露や時雨には、草や木葉の變色するものとしての作である。「雨降れど」は現に雨が降つての上でいふ詞だから、二句の「つゆも」に、その雨の餘滴の露も聯想される。「かさとり」の縁語仕立、一寸をかしさうだが、詩味

は則ち缺乏してゐる。寧ろ誹諧歌として見る方が適當らしい。

神の社のあたりをまかりける時に、齋垣（イガキ）の內のもみぢを見てよめる　　つらゆき

ちはやぶる神のいがきにはふ葛も秋にはあへず移ろひにけり

釋　○いがき　齋垣（イミガキ）の略。忌垣に同じい。社の周圍の玉垣をいふ。すべての穢らひをこの內には許さぬ故の名である。○葛　國栖葛（クズカヅラ）の略で、吉野の國栖（クス）の產を最とするより呼んだ稱か。宿根の蔓草で、山野に生ずる。蔓莖だ強く、葛布を製し、又根で葛粉を製する。○葛も　この「も」はさへもの意。○あへず　敢へずの意で、立ち合ひ難いこと。夙くいへば、堪へずの意となる。

大意　滅多な者は寄せつけぬ筈の、神社の忌垣に這ふ葛でさへも、すべての草木の色變る秋の使すには、こたへ切れず、色が意外に變つたわい。

評　秋色の到らぬ限もない趣が、神の忌垣を借りて映し出された。今日、神社の境內を公園地のやうに心得てゐる人の頭では、「秋にはあへず移ろひにけり」の詠歎の味ひが、よくは聽き取れまいと思ふ。よく忌垣のうちを、絕對神聖な場處と觀じてゐた古人の立場になつて、吟詠して見たら、作者の歌つた深い詠懷に共鳴が出來よう。

萬葉卷十に、

はふり子がいはふ社のもみぢ葉もしめ繩こえて散るとふものを

これと表裏してゐる着想だが、あれは比喩歌で、更に異なつた內容をもつてゐるから、全く別趣の歌である。

體格風調ともにこの作者の特長が出て神韻が永い。しかも細く乾びた趣は、秋の歌として甚だふさはしい。

是貞のみこの家の歌合によめる　たゞみね

雨ふればかさとり山のもみぢ葉はゆきかふ人の袖さへぞ照る

釋 ○雨ふれば　有心の序で、雨降れば笠を執るといふに、笠取山をかけた。

大意　雨が降れば笠を執る、その笠取山の紅葉は、山の名こそ笠とりであるが、そのかひもなく、雨に十分濡れでもしたか、梢ばかりか往來の人の袖までがサ、色が耀いて照るわ。

評「照る」の一語、「雨ふれば」と表裏して、對照の間、甚だ不思議なる事よの餘意を生ずる。上の元方の、「雨降れどつゆも洩らじを云々」に、更に一層の潤色を加へ、婉曲味を増したものである。「ゆきかふ人の袖さへぞ照る」と、眼前の花やかな光景を叙して、初二句に對する矛盾の意を強めた。

三句、新撰萬葉に秋の色はとある。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　よみ人しらず

ちらねどもかねてぞをしきもみぢ葉は今は限りの色と見つれば

大意　この紅葉は、もう十分に染まつた頂上の色と見たから、追付け散るであらうと案じられて、散らぬ先からサ、惜しく思はれるわ。

評　一ふしはあるが理窟張つてゐる。四句に就いて景樹の「秋來りて移ろひ行く紅葉は、梢の枯れ衰ふる限の色

と見つれば」と解したのは牽强である。

やまとの國にまかりける時、佐保山に霧の立てりけるを見てよめる

きのとものり

たがための錦なればかあき霧のさほの山べをたちかくすらむ

釋 ○佐保山　大和國添上郡にあり、春日山の西北に當る。佐保川、佐保路など、皆この附近に散在してゐる。○たちかくす　「たち」は霧の立つをいふ。錦の縁語で、斷ちをかけたのではない。

大意　この佐保山の紅葉は、誰れの爲に大切にして置く錦であるかして、他人には見せまいと、秋霧があゝも立つて隱すのであらうぞ。

評　折角紅葉を見ようと思ふものをの餘意がある。佐保山は、奈良の舊都の北部を遮つてゐる岡陵たる奈良山の一部で、もとこれ柞の紅葉を以て聞えた名所。友則がこの行は、啻にこの佐保のみでない、立田などの歌枕をもかけての旅であつた。蓋し大和路の秋色を賞するつもりであつたらしい。それを遠方わざ〳〵來たかひもなく、佐保山の紅葉は、濃霧が遮蔽してゐる。遺憾千萬の極に發した「誰がための錦」の一語、これ當然起りさうな廻り氣である。霧を擬人して、意地惡くも隱すものと見立てた。この際紅葉を寸金と稱する錦に譬喩したことは、最も賢い手段で、貴重品たる聯想から、「たち隱すらむ」の疑念が自然に聞えてくる。自然の現象に對してさへ、こんな嫉妬じみた口吻を洩らすことは、この作者がいかに自然に親みあこがれて、それを自己の生活中の物としてゐるかがわかる。

是貞のみこの家の歌合の歌　よみ人しらず

秋霧はけさはな立ちそ佐保山のはゝその紅葉よそにても見む

釋 ○はゝそ　柞と書く。小楢の葉に似て、薄く紅葉する木とぞ。

大意 秋霧はいつはともあれ、今朝はさう立つて吳れるなよ、そのわけはあの佐保山の柞の紅葉を、せめて餘所ながらなりとも見ようわ。

評 初二句は春歌上に「春日野はけふはな燒きそ」とあると同じ語法である。「は」の辭の用法に、特殊の意味ある事は、そこに說明してあるから參照されたい。「餘所にても」の遠慮勝ないひ方に、如何にも大切な物らしく思はれて、秋霧の立ち隱すのも尤もなやうに聞きなされる。何時はともあれ今朝はと希望したのに、紅葉を愛賞する熱情の等閑でない趣が見える。生憎霧の立ち渡つた朝、佐保山に行き合はせて、失望の餘りに詠んだのである。

六帖に、二句たゞずもあらなむとあるが、思ひ入り淺く、又三句、新撰萬葉にはたつた山とあるも、柞を同所に詠み合はせた例を見ない。すべて本文の方が可い。

秋の歌とてよめる　坂上是則

さほ山のはゝその色は薄けれど秋は深くもなりにけるかな

大意 この佐保山の柞の紅葉の色は、あまり照らないで薄いけれども、それとは反對に、秋の景氣は思ひかけず

深くもなつてしまつた事よ。

評 紅葉の頃は卽ち暮秋なので、柞の本色は薄いながらも、秋の深さは知られると、兩者を反映させたのが、一寸した機智である。色でいふ薄いは卽ち淺い事だから、淺深の對照が稠密で面白くない。

家集には、三句淺けれどとある。

さて以上の紅葉の歌は、色付きはじめから盛の頃までを、範圍としてゐる。散る紅葉は、菊の歌の次に別に揭げてある。

人の前栽に、菊に結びつけてうゑける歌　　在原業平朝臣

うゑしうゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

釋 ○この詞書、大和物語には、「后の宮より菊召しければ」とある。○前栽　庭前などの草木の植込をいふ。○菊　奈良朝以往にこの名目が見えない。日本後紀、桓武天皇の延暦十六年冬十月の曲宴の條に、「このごろの時雨のあめに菊の花散りぞしぬべきあたらその香を」と、天皇の詠まれた事が見え、又平城天皇の大同二年、神泉苑で、「四位以上挿二菊花一」と見えて、皇太弟の御歌にも、御製にも、藤袴と詠まれてある。されば菊は奈良、平安兩朝の過度時代に舶來したものだらう。故に字音のまゝに、キクといひ、香草の類なので、藤袴とも呼んで、稱呼が一定しなかつたものと見える。又菊を新撰字鏡に、「辛與毛支、和名抄に加波與毛木、可波良於波木」とあるを、鹿持雅澄は、「これは昔よりある野菊の名稱にて、今茲にいふ菊の事にはあらじ」と云つてゐる。さて當時の菊は養生させて、數多く花を咲かせた作り方で、今の一輪咲などのやうなものでない事は、次

次の歌の趣でも推し測られる。○うゑしうゑば　しかとよく植ゑるならの意。

大意　かうしかと植ゑて置かうなら、今から後、秋の無い時はそれは咲かなからうか、しかしそんな事は無いから、毎年秋のくる度毎に咲かないといふ事はあるまい。この今年の花こそ散るでもあらうが、根まで枯れようか、いや花は散つても、根までは枯れはせぬわ。

評　されば毎年の秋は必ず咲く事であらうの餘意がある。今菊を移し植ゑようとして、まづその行末を祝したのである。普通菊の花は散らぬ物で―稀には散る種類もあるが―それを「花こそ散らめ」といひ、桓武天皇の御製にも「散りぞしぬべき」と詠まれたのは甚だ疑はしい。これは花の衰へた極を、一般の花の上からの聯想で、散るといつたと見たい。眞淵が「大方の花に準へて散ると詠めり。撫子などにも、萬葉に散らまくをしもと詠み、後撰に大和撫子散るよなきやはと詠める、皆然り」と云つたのは妥當の說である。さて人の庭前に菊を贈つて植ゑるとて、行末を祝つた歌まで添へての親切さ、いつれ然るべき方の前栽であらう。或は大和物語の傳へる如く、后の宮の前栽かも知れない。幾秋も永久に咲くであらうの意を表現するに、直說を避けて、側面から說明したのは、春上の「世の中に絶えて櫻のなかりせば」の歌も思ひ合はせられる。且歌後の語を弄して、あながちに說き盡さぬのはこの朝臣の慣手段で、その含蓄の餘意が多いのもこれが爲、紀氏に、「心餘ありて詞足らず」と評せられたのも、亦これが爲である。根にまでいひ及んだのは移植の際だからで、これは花の附いたのを植ゑたのである。この時分の菊は、今日賞翫するやうな大輪の物ではなくて、全く野菊に近い種類の物であつたらうと推察される。古い繪畫などで見てもさうである。三段に切り調へて、句々力量あるうへに、意詞、曲折して姿致多く、聲調も花やかである。

初句、傳貫之本にもかうある。群書類從本の家集に、うゐしうへはとあるは理は立つてゐるが、語法が今めかしくて、貞觀時代のものでない。契沖もこの意に解してゐるが諸け難い。伊勢物語の眞字本には遷植者とあり、普通本の業平家集にもさうある。これは最も平易ではあるが、なほ本文が優つてゐよう。

寛平の御時、菊の花をよませ給ひける　　敏行朝臣

久かたの雲のうへにて見る菊はあまつ星とぞあやまたれける

この歌は、まだ殿上許されざりける時に召しあげられて仕うまつるとなむ。

釋　○久かたの　雲の枕辭。○雲のうへ　禁中を喩へていふ。禁闕を天上に擬へる事は支那の典故で、擧例に堪へない。○あまつ星　空の星。「つ」は連辭。

大意　人間界とは格別隔つた雲の上といふ禁中で、かやうに見る菊の花は、さすがに所柄天の星とサ、取り違へられたわい。

評　この菊や必ず白菊であつたらう。禁庭の白菊、禁庭は卽ち雲の上であると思ふと、皓潔なる菊花の色は、燦として星斗の闌干たる光が聯想される。そこで星の樣だと比喩にいふべき處を、星と間違へられたといつてのけた。そこに分別を離れて、感じばかりに動いてゐる作者の樣子が見えて面白い。六帖に兼輔、

けふ引きて雲るにうつす菊の花あまつ星とやあすよりは見む

構想が同一である。思ふに兼輔は後輩だから敏行のを踏襲したのであらう。尤も敏行のも獨創の想ではあるまい。新撰萬葉にも、

大空をとりかへすとも聞かなくに星かと見ゆる秋の菊かな

とあつて、菊を星に譬へることは、當時の套語と思はれる。然し禁庭の菊花を仰によつて詠んだものとしては、頗るその體を得てゐる。

左註は、殊更に趣あるやうにと、後人の書き加へたさかしらだらう。既に詞書で事情は明らかではないか。又この左註に拘泥して、「雲のうへ」を殿上の事に解した說もあるが、すべて當らぬ事である。敏行は、夙く仁和年中に、右近少將藏人を歷任して殿上人となり、寬平の頃には權中將藏人頭にまで昇進してゐたではないか。左註の說は全然虛妄である。

結句の「ける」一本にぬるとあるはわるい。

是貞のみこの家の歌合の歌　　紀友則

露ながらをりてかざさむ菊の花おいせぬ秋のひさしかるべく

釋 ○露ながら　露のおきたるまゝの意。○かざさむ　「かざす」は髮挿すの義から出て、この頃は、花草或は造花などを冠の巾子の根に挿すことをいつてゐた。○おいせぬ　年寄らぬ。

大意　何時までも長生して、年の寄らぬ秋の久しくあるやうに、この菊の花を露の置いたまゝ折つて、頭へ挿さうと思ふわ。

評 菊の露は齡を延べる物と定めての趣向である。これは爾雅に菊の異名を擧げた末に、

延年有二紫蘂一、氣香而味美者、服レ之可三已レ疾延二年。

風俗通に、

南陽酈縣有二甘谷一、谷中水甘美、上有二大菊一、落水從レ山流下得二其滋液一、谷中人家飲二此水一、上壽百二三十、其中百餘歲、七八十者則爲レ夭。

とあるなどを取り合はせて、典故としたものと見える。但藥用として服する場合の外は、風俗通の本文を典據とするから、この時代には、延齡には露を必要として詠み合はせてゐる。後世のやうに、菊の花のみで延齡たいふやうな事はない。又いふ、古人がこれを彭祖の故事としたのは無稽である。彭祖の事は、莊子、列仙傳、楚辭王註等に出て、長壽の仙人だつた事は見えたが、菊花に何等の關係をも持つてゐない。但太平記や、謠曲に見えた枕慈童（菊慈童といふ）は、彭祖と酈縣の故事とを撮合したる小說で、後世佛徒の附會した所爲と思はれるから、この集の歌の本據に引き出すことは出來ない。

時の花をかざしにすることは、物の折の所爲で、これは九月九日の菊花の宴の折などを思つて詠んだらしい。菊の露を着綿に移して、身內を撫でなどして、不老長生を希ふことは常であるを、こゝは露をかざすといふが新案である。句は、四、五、三、一、二と次第すればその意が得られる。流麗和諧、壽命の延びさうな氣持のよさがある。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　大江千里

うゑし時花まちどほにありし菊うつろふ秋にあはむとや見し

【譯】○見し　こゝでは見る意ではない。思ひしの意である。

大意　春植ゑた時、何時花の咲くことかと待ち遠だつた菊、その菊がやれ咲いたと思ふのに、かうも早く盛り過ぎて、色の變る時節に逢はうと思つたことか、さうは思はなかつたものを。

評　待つた時間の長いに似ず、盛りの時間の短いといふ矛盾を基調として、その意外を驚く詠歎の味ひを籠めようとしてゐる。卽ち待つた間が長いから、盛りも長からうといふ論理は、事實ですぐ打ちこはれる不理窟だから面白い。うつろふ時とあるべきを、「うつろふ秋」と轉義して、初句の「時」の語にさし合ふを避け、かねて植ゑし時の春に暗對させた。三句、結句の促調相呼應して、節短く意促る。

新撰萬葉に、下句うつろふ秋はあはれとぞ見るとあるは平凡で、一半の味ひを減ずる。

おなじ御時せられける菊合（キクアハセ）に、洲濱（スハマ）を造りて、菊の花植ゑたりけるに、くはへたりける歌

ふきあげの濱のかたに植ゑたりけるをよめる

すがはらの朝臣

秋風のふきあげに立てるしら菊は花かあらぬか浪のよするか

釋　○おなじ御時云々　「おなじ御時」は、上の詞書を承けたので、寬平の御時をさす、卽ち宇多天皇の御代である。年月は定かでないがその御代に菊合とて、名所の模型を洲濱臺の上に作つて、それに菊を植ゑ歌を添へて、左右に片分けて、勝負を爭つた風流の遊戲を宮中に催されたのである。「かた」は形で、型の意にも、繪の意に

も用ひる。こゝは初の方の意である。洲濱は、もと祝日の飾物を据ゑるに、洲の形がふさはしいので、それに一定した臺で、今の島臺といふ物に似てゐる。その形を洲濱形といつてゐる。その時の記に、

左方占手の菊は殿上童だつ君を女につくりて、花におもてを翳させて持たせたり。今九本をば洲濱を作りてぞしたる。その洲濱のさまは思ひやるべし。面白き所の名を附けつゝ菊には結びつけたり。右方これも殿上童、ちご、藤原重時、安房の守ひろしげがむすめがみて、菊どもおほすべき洲濱をいと大きに作りて一つに植ゑたれば、持て出づるに處狹ければ、おし合はせては一つになるべく構へて、割りて和をつけて、ひとたびにおし合はせて出さむと構へたるを、左方の一本づつ出すに驚きて、たび〳〵に出しければ、合せ果てたればいと面白き處一つなれど、合はする程は割れていとかたはなり。

と見えた。さてこの歌は左方八番の歌、次の大澤の池の菊はおなじ方二番の歌、又次なる仙宮の菊は右方七番、人の人待てる菊は、おなじ方十番の歌である。このはじめの條の詞書は、これ及び次の三首へわたつた大綱で、「ふきあげの濱の云々」以下、歌毎の端詞はその細目である。

「すがはらの朝臣」の署名が、他の體と變つてゐる。これは菅原道眞の事で、この菊合の頃は大納言であつた。されば大納言の書例と見ておかう。然しこの集奏上の頃は既に勅勘流罪に遭つてゐたから、署名は出來ない筈である。或はもとよみ人知らずとあつたのを、古本の筆者が心覺に、假に「すがはらの朝臣」と書き付けたのが、そのまゝ世に流布したものと思ふ。

○ふきあげの濱　紀伊國和歌山の西南、和歌の浦の北にある。顯註に「吹上の濱とは、風のいたく吹きて濱の眞砂を吹き上ぐるが面白き云々」と見え、庵主の熊野紀行、公任集の詞書、藤原爲家、釋正徹等の歌にも、同

じ趣にいひもし、詠みもしてあるから、砂を吹き上げるので附いた名と見える。○ふきあげに立てる　吹上の濱に立てるの略。秋風の吹くとかけた。「あげ」にまではかゝらぬ。

大意　秋風が吹くと、吹上の濱に生えたあの白い菊は、それが全くの花であらうか、いやさうでは無いか、それとも濱の事だから、波の寄せるのであらうかと思ひ惑はれるわ。

評　海濱に叢生した白菊の樣を思つたのである。秋風の吹くにつけて打ち靡くさま、所柄打ち寄する浪とも見えるので、それを云はう爲に、先づ「花か」とおき、次に「あらぬか」と打ち返したので、この二語は、結句の前提となつてゐる。かく「か」の疑辭を疊用して、三段に切り調へたので、節短く、音促つて、いろ〳〵に見惑ふ情態がよく表現されてゐる。この叙法は早く伊勢物語に見える。

君やこしわれや行きけむおもほえず夢かうつゝか寐てかさめてか

はるゝ夜の星か川邊の螢かもわが住むかたのあまのたく火か

又花の浪に紛ふも、又浪の寄するも皆風のせゐだから、初句の「秋風」が一首のうへに活動して、今も浪が白く、菊がきれいな吹上の濱邊に、秋風のさわやかに吹く樣子が想見される。通體一の曼聲弱字なく、筆々矯健で、のみならず、下句ァ列音が多くて、聲調花やかに勁い。定家もこの集秀歌十首の一に擧げてゐる。素性集に、

あき風のふき上の濱のしら菊は浪のよするか花のさけるか

は、全くこれと符合する。對比してこの歌の措辭の巧妙さを知るがよい。恐らくはこの歌の轉訛して傳はつたのを、後人の誤つて素性集には加へたのだらう。

廣蔭が顯註に泥んで、初二句、秋風の砂を吹き上げと解し、四句を、花か、さにあらずして砂かと解したのは、

失笑する程の牽强である。

仙宮に、菊をわけて、人のいたれるかたをよめる

素性法師

ぬれてほす山路の菊のつゆのまにいつか千年をわれはへにけむ

釋 ○仙宮に云々　仙家に菊をいふは酈縣の故事である。上の「露ながら折りてかざさむ」の條參看。○山路　仙家へ通ふ山逕をいつた。○つゆのまに　つゆのまなるにの意で、「つゆ」は僅なるにいふ。それに露をかけた。

大意 自分は仙人の住居に往きは往つたが、その山路の菊の露に、着物の濡れたのを乾かす間ほどの、僅の間だと思ふを、何時まあ千年を自分は過した事であらうか。

評 これは驚いた事よの餘意がある。仙宮に往つた人になつて、その感想を述べた。殊に注意すべきは、詞書に從へば現在仙宮を訪うてゐるのだが、歌に「いつか千年をわれは經にけむ」とあるので見ると、旣に仙宮から歸つて來ての感想である。すると晉の王質といふ樵夫が、爛柯山に入つて、竜の碁を打つを見てゐた間に、斧の柄が朽ちてしまつたといふ、述異記に見えた故事を思ひ寄せたらしい。菊の花の面白さに、うか〳〵とその中を分けて、不知不識、袖袂の露に濡れた趣を、「ぬれて」といひ、さて歸つて來た趣を、「乾す」と續けて、主語の袖又は袂の語を略いて利かせた簡潔の妙、東坡が餓蛟取渇虎の句に匹敵する。「つゆのま」の秀句も自然で、たえて卑俗の氣がない。「いつか」とおける疑問の語、三句に對へて、驚歎の意がいよ〳〵著しい。俊成もこれを評して、

「ぬれてほす」とおける五文字の洵にめでたく侍るに、又「山路の菊の露のまに」といへるも有り難く侍るによりて、末の句も何となく引かれて皆いみじく聞え侍るなり。

と讃歎し、わざ〳〵これを祖述しては、

山人のをる袖にほふ菊の露うちはらふにも千代はへぬべし

と歌つた。景樹がこの集中の菊花を詠んだうちでの隨一と稱へたのは尤で、想に於てはさもないやうだが、洗煉の極、一の冗字一の煩語がなく、全く下界の塵垢を斷つて、仙郷に羽化しさうな趣がある。各種の韻を平等に分配し得て、聲調の宛轉流麗なる事は、白玉の盤上を走るに似てゐる。

下句、家集にいかでかわれは千代をへぬらむとあるが、本文の方が遙に優つてゐる。景樹は、選勅の際、撰者達が引き直したのだらうと云つてゐる。六帖に「いつか」をいかでとあるのは最もわるい。

菊の花のもとにて、人の人待てるかたをよめる

とものり

花見つゝ人まつときはしろ妙の袖かとのみぞあやまたれける

釋 ○しろ妙　こゝは袖の枕詞ではなく、白色の意に用ひてある。釋は春上「春日野の若菜つみにや」の條に既出。

大意　庭の白菊の花を見い〳〵して、來る人を待つ時は、その白い花を、その待たれる人の白い衣の袖では無いかとばかりサ、取り違へられたわい。

評　これも待つてゐる人になつて、その感想を詠んだ。白菊を白妙の袖と見あやまるのは、白衣酒を送るの故事で、

續晉陽春秋に、

晉陶潛九日無レ酒、宅邊有二叢菊一、摘レ之盈レ把、望二白衣人至一、乃太守王弘送レ酒、酌而醉歸。

とあるに據つた。但淵明は、白衣の人を待つてゐたのではないが、こゝは又酒の使がくるかと、人待つ趣に取り成した巧である。二句の「は」の辭に力があつて、いつもはさうでもないが、人待つ時は錯たれるといふのである。菊の故事を用ひて菊の字を着けない。却つてあつさりしてい丶。

大澤の池のかたに、菊植ゑたるをよめる

ひともと丶思ひし花をおほさはの池の底にも誰れか植ゑけむ

釋 ○大澤の池　廣澤の池のことで、山城國葛野郡上嵯峨にある。もと嵯峨帝の離宮の境内に屬してゐたといふ。池中にある一嶼を菊島と云ふが、それは昔菊の花のあつた故といふ。或は却つてこの歌から付けたのかも知れない。○ひともと　一株といふほどの意。必ず一本と限つたのではあるまい。○おほさはの　大澤におほさは（多數）の意をかけたとする說は當らない。○花を　花なるをの意。

大意　只一本と思つた菊の花なのを、それにまあ水中に花の見えるのは、岸ばかりか、この大澤の池の底にも誰れが植ゑた事であらうぞ。

評 澄潭秋影を涵したのを、直に見て以て水中に花ありとするは、一轉瞬の幻影のみ。この幻影を捉へて趣向を立て、それを實在のものとして驚訝した、この一切の理窟を拋却したのが、卽ち詩境である。雜上に、

二つなき物とおもひしをみな底にやまの端ならでいづる月影

と貫之の詠んだのも同巧異曲。

二句、家集及び類本の詞に、思ひし菊をとある。詞書を離せば、菊をの方がたしかであるが、すでに菊の名所なる大澤の地名を詠み入れてはあるから、「花を」とある方が大らかで宜からう。四句、家集には底までとある。又諸本ともに作者の名が特記してないから、これも前のと同樣、友則の歌と見るべきであるが、元來菊合は、一首づつ作者の異なるのが普通だから、若し前後いづれかは坂上是則の作なのを、轉寫の際、是の字を友の字と見誤つて皆友則の作と思ひ、遂に名をば略いたのではあるまいか。家集は素より後人の輯錄したものだから、證にはし難い。

世の中のはかなき事を思ひける折に、菊の花を見てよめる　　つらゆき

秋の菊匂ふかぎりはかざしてむ花よりさきと知らぬわが身を

譯　○世の中のはかなき事を思ひける折に　人世の無常なる事を感じた折に。○匂ふ　美しく咲いたのをいふ。馨る事ではない。○花よりさきと　「と」はともの意。○知らぬ　知られぬの略。○わが身を　わが身なるをの意。

大意　この面白い秋の菊の、咲き匂ふ間一パイは、髮挿して遊ばうと思ふわ。なぜといふに、自分の死ぬ事があの花の枯れるより先とも測られぬ、はかない我が身だものを。

評　李太白が、

「夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮生若レ夢、爲レ懽幾何、古人秉レ燭夜遊良有レ以也。」（春夜宴桃李園序）
「處レ世若二大夢一、何爲勞二其生一、故以終日醉、云々。」（春日醉起）
と喝破したのにその意吻合し、悲觀のうちに樂地を覓めて、刹那の享樂に慰藉を求めようといふ、しかもそれが、作者の身世のはかなさを感じた術なさの餘りに出た矯語であるのが、却つて哀れである。「かざしてむ」は、遊ばむの轉義である。盛りの長い菊の花とはかない命と、暗々裏に對映してゐる。下句の叙法は簡潔。

しら菊の花をよめる　　凡河内躬恒

心あてにをらばやをらむはつ霜のおきまどはせるしら菊の花

釋 ○心あてに　當推量にの意。○をらばやをらむ　折らば折られようかの意。「や」は疑辭。「をらむ」は折られむの意。古來の說、多く煩はしく曲解してゐる。○はつ霜　秋冬の交最も早く降る霜をいふ。○おきまどはせる　初霜が置いて紛はしくしてゐるの意。

大意 花やら霜やら知れぬやうに、あのやうに初霜が置いて、紛はせてある白い菊の花は、大概當て推量で折つたら折られようか。

評 初霜ならさうは繁かるまいに、白菊を置き惑はして、心あてでなければ折られないとは、餘りな虛誕らしいとの難もあるが、よく思はぬ論かと思ふ。これは前栽などに叢生した數多の白菊を、初霜の零つた朝、簀子あたりから見渡して詠んだのである。手近の草葉などの霜を見て、彼方の菊の白いのも、皆霜かとも思ひ惑はれる

ので、「初霜のおきまどはせる」とは云つたのである。これ常に詩歌の上で見る普通の誇張に過ぎない。さてかう思ひ惑ふのは、則ち霜の様子を餘り見馴れない初霜の朝に限る景趣だらう。白玲瓏として、些の塵氛だもない。

是貞のみこの家の歌合の歌　よみ人しらず

いろかはる秋のきくをば一とせにふたゝび匂ふ花とこそ見れ

大意　初めの程は白く、この頃は紫に色の變るあの秋の菊をば、同じ花であることは忘れ、一年の内に白と紫と二度咲き匂ふ花とサ、これを見るわ。

評　當時は白菊を專ら賞翫した。それが霜の爲に變化して、紅となり紫となる。今日の人はかうなると、衰殘したものとして最早顧みないが、平安時代は紫色にあこがれた時代だから、却つてそれに好處を見出して、推賞したのである。蓋し西施の微醺、太眞の浴後、別趣の更に捨て難いものがたしかにある。變化の逕路を忘れて、全く別箇の花と思つた黠が、この歌の山である。「一とせにふたゝび」と數量の語をかけ合はせたのは、春歌下に、

聲たえず鳴けやうぐひす一とせにふたゝびとだに來べき春かは

と、興風の詠んだのに同じい。

仁和寺に菊の花めしける時に「歌そへて奉れ」と仰せられ

ければよみて奉りける　　　　　　平のさだぶん

秋をおきて時こそありけれ菊の花移ろふからに色のまされば

釋 ○仁和寺に云々　仁和寺は眞言宗の大寺で、光孝帝の仁和四年に御願寺として、京都の西山に造られたので、寺名とした。その後延喜元年に、宇多上皇、御室を立てゝ其處におはしまされた。この「菊の花召しける」は、宇多上皇の召されたのである。○おきて　さし置いて。

大意　この菊の花は、秋の一盛りはさし置いて、それより後に、又も盛りの時節があつたわい、なぜといふに、花が末になつて來ると、かやうに色が增さるからサ。

評　恐れながら陛下の御上も、この菊の如きかと存じ奉るの餘意がある。「移ろふからに色のまされば」とあるによれば、これも上のと同じく白菊である。初句、盛り過ぎてとあるべきを、「秋をおきて」と轉義したのは、節後の菊を殘菊といつたに同じい。卽ち本朝文粹に、惜₂殘菊₁各分₂一字₁應ㇾ制、菅贈大相國

黃華之過₂重陽₁、世俗謂₂之殘菊₁。

と見えてゐる。蓋し菊花は重陽の節のもてあそびであつたから、それを盛りの時として、その以後は秋でもないやうにいひなし、遂に殘菊とも稱したのであらう。若し文字のまゝに、「秋をおきて」を冬になつての意とする時は、この歌は冬部に收めなければならぬ事になる。二句は、盛なる時こその省略と見れば事もないが、なほ思ふに、「時」といふ語は、直に盛りの意味に用ひられたのではあるまいか。時めく、時めかす、時をうる、時の人などいふ語は、その證ではないか。初二句おの〳〵字餘りなのが力量相當して、驚歎の意がいよ〳〵加

はる。構想は前首と同一ながら、宇多上皇が遜位の後も、幼帝を後見られて、なほ世の中をまつりごち給へる御威勢の盛んさを、賀し奉つた譬喩歌である。抑も、「歌そへて」と御下命のあつたのは、作者平仲は、歌詠むと世に知られた男だからである。卽ち取りあへず移ろひ方の白菊に、これを添へて奉つたとすると、宇多上皇は、どんなにか興に入られたことだらう。この諷託寄興がないとすると、殆ど愚作に近からうに。

人の家なりける菊を移し植ゑたりけるをよめる

つらゆき

さきそめし宿しかはれば菊の花色さへにこそうつろひにけれ

【釋】○宿し　「し」は强辭。○うつろひにけれ　花の衰へた意に、移轉の意を響かせてある。

大意　咲きはじめた家がサ變れば、この菊の花は場所ばかりか、花の色までもサ變つたわい。

【評】植ゑ換へた菊花の萎れたのを見て詠んだ。移植の爲に萎れたのを、宿柄ゆゑに萎れたやうに取り成した。うつろふの語に縋つた秀句、手があり過ぎる。

題しらず

よみ人しらず

佐保山のはゝその紅葉散りぬべみよるさへ見よとてらす月影

【釋】○散りぬべみ　「べみ」はべくての意。○はゝそ　上出。

大意　あの佐保山の、柞の木の紅葉が散りさうであるので、晝ばかりか、夜までも人に見よといつて、照らす

この月の光であるよ。

評 柞の葉は極めて脆く散る。それが秋は末で、一般の草木でさへ凋落しようとする頃だとすると、夜の間の風もうしろめたく覺えるから、自然夜を晝に續いで見たい念がおこるではないか。さる折しも照り渡る月なので、意で對へて、「夜さへ見よと照す」と、月に親切氣があるやうに取り成した。自然を愛する風流な月ではないか。これ卽ち作者の風流な心、親切な心から出た解釋である。後撰集に

照る月の秋しもことにさやけきは散るもみぢ葉をよるも見よとか

と同趣ながら、これはさやけきと道破しないで、さやかな趣がめぐつてゐるから妙だ。

三句、六帖に散りぬべきとあるは調はない。

以下、散紅葉の歌を擧げてある。

宮づかへ久しう仕うまつらで、山里にこもり侍りけるによめる　　藤原關雄

おく山のいはがき紅葉散りぬべしてる日の光見る時なくて

釋 ○宮づかへ　大宮に奉仕すること。仕官。○いはがき　岩ほの疊なはつて欹つのをいふ。景樹はいふ「岩陰を轉じてイハカキといふ。垣の意にはあらず」と。「がき」は或は崖（ガケ）の意か。

大意 この深山の岩がきの紅葉が、このまゝで散つてしまひさうな、日の目もろくに見る時がなくてサ。

評 口惜しい事よの餘意がある。詞書の趣で見ると、紅葉を自身に、天恩を照る日に喩へて、不遇にして恩光に

俗する事も出來ないで、徒に山林に朽ち果てる事を慨いたのである。文德實錄に、

關雄習レ屬レ文、性好二閑退一、在二東山舊居一、耽二愛林泉一、時人呼爲二東山進士一。

とあるから、詞書の「山里」は、今の京都の東山である事は明らかである。この歌は、進仕祿を干すの意があらはであるのに、史には好二閑退一といひ、後にも折角の淳和上皇の徵をも、一應固辭した事などを併せ考へると、頗る行動に矛盾がある。しかも、間もなく召命に應じて出仕した事を思ふと、渠れ關雄は必しも閑雲野鶴の質なのではあるまい。徒に狷介廉潔なる高士の名を竊まうとしたものか。否々渠れは右大臣内麿の孫、眞夏の五男で、藤氏とはいへ實は支流で、その無勢力なる事は、他の諸氏族と何の擇ぶ處もない。才なく學なき徒輩も、家の子は重用されるのを見て、流石に憤慨に堪へなかつたらう。これ念を仕官に絶ち、心ならずも名を閑退を好むに託して、東山に隱遁した所以だらう。されば心常に朝廷を懷うて不遇を憾み、陸沈を愧ぢてゐる。たまたま日影の疎い岩頭の霜葉が、おのづからわが境遇に似たのを見て、卽ちこの諷託比興の言を爲して、測らず胸中の祕密を洩らし、機微を露はしたものだらう。感慨が字句に溢れてゐる。

二句、六帖の一本に岩かげ紅葉とある。

題しらず　　　　よみ人しらず

たつた川紅葉みだれて流るめり渡らばにしきなかや絶えなむ

この歌はある人「ならの御門の御歌なり」となむ申す。

釋 ○左註「ならの御門」を、舊說に文武帝といひ、或は聖武帝なりともいつてゐるが、なほ平城帝の御事と見た

方が穩やかだらう。歌の風格も、奈良時代のものでは決してない。眞淵は、はじめから左註を排してゐるから、全然問題にしてゐない。○たつた川　次の歌の條を見よ。

大意　この立田川の一面に見事なのは、紅葉が散り亂れて流れるやうであるわ、これでは今渡つたら、あつたら錦の中が斷たれるであらうか。

評　當惑の事かな、どうしたものだらうかの餘意がある。駒の爪が漬くぐらゐの、さうした山川を徒渉しようとすれば、紅葉亂點、波を逐うて轉じ去るを見る。詩に、馬蹄無レ處レ避二殘紅一といひ、赤染衞門が「踏めばをしふまねば行かむ方もなし」などいつた落花のさまにも似て、ほんとに途方にくれてしまう。渉りかねて躊躇してゐる作者の態度が、眼前に彷彿する。川渉りは、往代では常の事で、橋の無い淺川は大抵徒渉であつた。その慣習から、「渡らば」と假定的に想像を描いてきたのである。「渡らば錦」の省筆、また大いに注意すべき辭樣である。その紅葉を、川波に洒した蜀錦に譬へたことは、卽ち中の絕える事を惜む情を、強く深く印象せしめる。四句の促調、上來の緩調を拯つて、節奏が諧ふ。景致面白く、聲調又花やかに勁い。

二三の句、大和物語、及び六帖にもみぢ葉おちて流るなりと見え、又顯本には、三句かゝるなりとある。

○

たつ田川もみぢ葉ながる神なびのみむろの山に時雨ふるらし

又はあすか川もみぢ葉ながる　　此歌不注人丸歌

釋　○たつ田川　この所在、古來の集訟である。或は山城國の山崎川(淀川)といひ、或は大和國高市郡神南備神社のおはします山は御室山で、その麓の川が立田川だといふ說もあるが、信じ難い。又これを、龍田の立野にもとめて、龍田の大川をこの立田川とし、神なひ山も、神なひの森も、ならしの岡も、この附近とした說もあるけれど、秋歌上「神無月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なひの森」の歌の例に從ひ、立田川も、御室山も、神なひの森も、皆大和國平群郡立田村と定む。但これはこの集以後の歌に限ることである。抑も「神なひの森」は、神の森の約、「みむろ」は、神の御室の義だから、あながちに一所に固定した名稱でない事は、萬葉集に、三輪山をも、神岳をも、共にみもろ(みむろの音通)と詠んであるのでも知られる。

大意　この立田川に、紅葉の葉が流れるわ、定めて川上の神なひの御室の山に、時雨が降るらしいわい。

評　散る紅葉から、川上の山に時雨のかゝつた事を想定した。時雨に紅葉の散る趣は、萬葉集中に數多見えたことで、珍しくもないが、これはそれを逆寫してゐる。藤原家隆が、結句を、嵐吹くらしとしたいと評したのは、時代思想の相違を心付かぬ僻說である。體格は蒼古で、風調は高適である。蓋し南京の遺篇だらう。六帖、及び大和物語に、

　あすか川もみぢ葉流るかづらきや山にはいまぞ時雨ふるらし

これと同調とは見ゆるが、三四の句のあたり、姿が甚しく碎けてゐるから、一列には論ぜられない。又いふ、この歌の採つた叙法は、頗る形式的なもので、蒼古な神韻的の描寫には適するが、變化がなく、想の運用は固定的であるから、再三すると飽かれ易い。平安時代の人士はもう陳腐な形式として、餘り喜ばなかつた。

又左註の「飛鳥川」は、萬葉集巻十三に、

神なひの三諸の神の帶にせる飛鳥の川の、云々。

と見えて、地理もかなつてゐるからそれも惡くはない。この三諸は、大和國高市郡飛鳥神岳である。廣蔭が、後に見えた興風の歌「み山よりおちくる水の色見てぞ」の詞書に、「立田川もみぢ葉ながるといふ歌を書きて」とあるに據つて、左註の「飛鳥川」を否認して、後人の書入と定めたが、この詞書は、他に異說のない證とはならない。こゝは、素より普通に行はれてゐる方を本行に收め、異傳の方を左註に錄したのである。但左註の下に、「此歌不注人丸歌」とあるは、本據のない俗說で、勿論捨つべきである。

○

戀しくば見てもしのばむもみぢ葉を吹きな散らしそ山おろしの風

釋 ○しのばむ　萬葉集卷一、額田王の歌に「紅葉をばとりてぞしぬぶ、靑きをばおきてぞ歎く云々」と見えたしぬぶと同語で、賞で愛しむ意である。この外戀ひ慕ふ意と、堪へ忍ぶる意と、竊び隱るゝ意との三義あるが、玆には關はらない。○もみぢ葉を　しのばむもみぢ葉と續くのである。「を」はなるものをの意。○山おろしの風　山よりふき下ろす風。

大意 今後、紅葉が戀しいならば、それをなりとも見て愛でようと思ふ、大事な紅葉であるものを、そのやうに吹き散らして吳れるなよ、これ山おろしの風よ。

評 美しい紅葉が、颯然とおろし來る山風に吹き立てられて、名殘さへもなくならうとするを惜んで、山風に懇願した、懷かしい詩情である。聲調また沈んで寂しい。廣蔭、雅嘉等が、二句を、枝にあつた時の事を思ひ出

さうの意としたのは、「しのぶ」の語の意を、見誤つた曲解である。

〇

秋風にあへず散りぬるもみぢ葉のゆくへ定めぬわれぞ悲しき

釋 〇もみぢ葉の　もみぢ葉の如きの意。〇ゆくへ　行き方。〇定めぬ　定まらぬの意。

大意 秋風に堪へかねて散つて行く紅葉の、何處とも行方の定まらぬやうに、身の成り行をどうとも定めぬ、自分の身がサ悲しいわ。

評 飄蓬落魄した人の作だらう。何の物思のない人でさへ秋思の催すに堪へない頃に、ほろ〳〵と風に誘はれゆく紅葉を見て、さうした悲觀を懷くのは、自然の數である。譬喩の辭樣は簡淨である。

〇

秋は來ぬ紅葉はやどにふりしきぬ路ふみわけてとふ人はなし

釋 〇しきぬ　「しき」は布きの意。

大意 物悲しい秋の時節は來た、紅葉は庭へ一面に散り敷いた、しかもその道も見えぬ程に、散り布いた紅葉の中道を踏み分けて、誰れも尋ねて來る人は無いわい。

評 さても〳〵この寂しいことかなの餘意がある。三段に切りとゝのへて、いやがうへにその上の寂しさを數へ立てた、漸層の叙法が頗る面白い。卽ち秋の來たことは、既に物悲しく寂しいことだが、それでも面白い紅葉

があらうなら、稀にも人に訪はれる望が無いでもないのを、それすら散り果てゝしまつては、全く絶望で、いよ〳〵慰みやうもない暮秋の景氣である。初句は、秋の今來る意ではない。契沖が、秋の暮は來ぬと解したのも誤で、只秋の時節になりぬの意である。それを「來ぬ」と擬人したのは、末の「人」とあるに呼應し、さて秋の來たると、人の來ぬとを反映させた。又紅葉は、ちりしきぬといふべきを、「降りしきぬ」と轉義したのも面白い。三疊の「は」の辭以外に、初句の「きぬ」三句の「しきぬ」のきぬの同音を反復し、しかもぬの音を三疊して、韻脚に踏んだのは、聲韻の響應があつて、諧調となつた。況やイ列音の多數なことは、詩意に旨く協調して、凄酸悲涼の情をそゝるうへに、與つて力がある。第二段は、七五の促調で、初二及び、結句は多數音、少數音の排列順が轉倒してゐるので、亦節短く調が迫つてくる。意、詞、調の三者がよく打ち合つて、眞に沈鬱頓挫の妙を極めてゐる。

結句、古本にとふ人もなしとあるは采らない。

○

踏み分けて更にや訪はむもみぢ葉のふり隱してし路と見ながら

釋 ○更にや　「更に」はあらためての意だが、こゝは强ひてといふ意に近い。「や」は疑辭。宣長が反語に解したのは當らない。

大意　この家へ入る路は、あのやうに紅葉が散り鋪いて、誰れも來ぬやうに隱してしまつた路だとは見ながら、いつそそれを踏み分けて、强ひてサ見舞はうかしら。

評　暮秋の頃、山里人を音信れた人の作だらう。柴門晝も掩うて、滿地の落葉掃ふ人もない處に、とかく躊躇して佇立んだ狀が、今見るやうである。紅葉意あつて路を降り隱したといふのに、やがて世を厭ひ、跡を晦まして山住してゐる主人の本意が、語中にたどれる。その見すく紅葉卽ち主人の本意に背いても、見舞つて見やうかといふに、親切な氣持がいよく露はれてゐる。「更にや」の語、姿致が頗る多い。これ等の曲折は、一篇の含蓄の餘味を多くする。

結句、六帖には宿と見ながらとある。景樹は「この方、更にや訪はむと云ふまでに反りて宜しきにや。路とあるは、初句のふみわけてに反りとゞまりて、飽かぬ心地す」といづた。尤もと思ふ。但初句、六帖に露わけてとあるは、甚だわるい。

○

あきの月山べさやかにてらせるはおつる紅葉の數を見よとか

大意　秋の月が、あのやうに山のあたりをあざやかに照らして居るのは、散る紅葉の數を、とくと見て吳れよといふ事か。

評　起首「秋の月」と打ち出したのは、その清明な感じを强く印象させる。さて「落つる紅葉の數を見よ」とは算數的に勘定せよの意味ではあるまい。すべて物每に、一つくに心のたぐひて數へられるのは、則ち執着した愛惜心の發露だから、此處にも紅葉の散るのが勿體なくて、飽くまで惜しまれる心から、月の照るのをも、散紅葉の數を見よとの親切心であるやうに解釋した。上の、

さほ山のはゝその紅葉ちりぬべみよるさへ見よと照らす月かげ

と、同調の歌である。

○

吹く風の色の千ぐさに見えつるは秋の木の葉の散ればなりけり

釋 ○色の　色が。○千ぐさ　千いろ。

大意 この頃吹く風の色が、いろ〳〵に見えたのは、どうした事かと思へば、いろ〳〵に染まつたこの頃の木の葉の、散るからであつたわい。

評 色もない風を、「千種の色に見えつる」とまで誇張した。いかにも紅葉の夥しく散る光景である。强ひていへば、いさゝか浮誇の嫌がないでもない。「の」の音を疊用して、調が緩やかである。元來この歌は、内容がさうすぐれてゐる譯でないから、平叙すると一半の面白味が減ずる。こゝに倒叙の方法を採つたのは、賢い仕打といはねばならぬ。

二句、貫之本に千ぐさの色にとある。眞淵及び景樹はこれを賛した。洵に「吹く風の色の」と續けては、素より風には色があるものゝやうに聞える。春上に「春霞色の千種に見えつるは」の歌の第二句に似たので、傳へ誤つたのかも知れない。

せきを

霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦のおればかつ散る

釋 ○霜のたて露のぬき　「たて」は經絲、「ぬき」は緯絲。

大意　霜から出來た經絲、露から出來た緯絲がサ、弱いらしい、そのせゐかして、あの山の紅葉の錦が、折角織り上げるそばから破れて散るわ。

評 紅葉は露霜に遭つて色付くので、露霜の經緯で織り立てた錦と見立てた。萬葉集卷八に、

たてもなくぬきも定めずをとめ等がおれる紅葉に霜なふりそね

懷風藻に、

天紙風筆畫キ二雲鶴ヲ一、山機霜杼織ル二葉錦ヲ一。

とある大津皇子の作や、白居易の句の、「織レ霜織レ露二秋錦一」などを思ひ合はせると、この種の着想は陳腐に屬するが、これを散り方の紅葉に應用して、一層の趣向を構へたのは、作者の手腕である。結句、おれば且亂るゝとか破るゝとかいへば、譬喩が完全されるのを、本體の紅葉のうへに立ち返つて、「散る」といつたのは、齊整の弊を避ける爲に、わざと辭樣を參差させたのかも知れない。卽ちかの萬葉の「おれる紅葉」、藤原公任の「散るもみぢ葉を着ぬ人ぞなき」など、皆錦の一語を著ける事を憚つたもので、不用意に譬喩の完全を缺いたのではないらしい。

三句、六帖にもろからしとある。又結句、貫之本におれどかつ散るとあるはわるい。

雲林院の木の蔭にたゝずみて　　僧正遍昭

わび人のわきてたち寄る木のもとは頼む蔭なく紅葉ちりけり

釋　○雲林院　春下「櫻ちる花の所」の條に既出。○わび人「わび」は難義に思ふ意なので、不仕合せな人、失意の人、貧乏な人などをいふ。○わきて　取り分けて。○頼む蔭　身の置處として當てにする物蔭をいふ。○紅葉ちりけり　景樹が「紅葉の散る事を、只一句中に『紅葉散りけり』と、急迫に調ぶべきものならむや。もみぢて散りけりの意に聞きなす時は、自然句調もをさまるもの也」といつたのは、甚しい僻言である。字の表面通りに解してよろしい。

大意　不仕合の者が、擇りにえつて立ち寄るこの木の下は、やはり頼む蔭も無く、紅葉が散つたわい。

評　かさね〴〵心細い事かなの餘意がある。雲林院の後園、流石に故王宮の名殘をとめて、千樹の秋色は翫賞に値してゐる。作者はこの院の住持として後園に臨み、たま〳〵わが立ち寄つた梢を仰ぐ折しも、ほろ〳〵と紅葉の散るのを見て、これも立ち寄る人柄による事ぞと嗟歎したのは、外界の景象が端なく胸中の琴線に觸れたものである。以てそのいかに失意の際であつたかが、想像されよう。或は雲林院の法務上の不平などあつた際でもあらう。なほこの歌に就いて一說を試みたい。雲林院の僧正さんは、當時僧界の第一人者で、痩法師や、乞食坊主の境涯とは違ふ。それを「わび人」と我れから名告つて、「頼む蔭なく」などいつたのは、一時の卽興から出た狂意だといひたいのである。そしてこの僧正の例の手法と認めたいのである。三句の「は」の辭に力がある。依つて殊にさう聞える。「わきて」も、この意を補くる大切の語である。俗諺にいはゆる「頼む木のもと雨が漏る」に似て、今一層痛切を極めてゐる。けれど、この僧正の他作に比べると、數等を下つてゐる。

二條の后の春宮のみやす所と聞えける時、御屛風に、立田川に紅葉流れたるかたをかけりけるを、題にてよめる

そせい

もみぢ葉の流れてとまる湊にはくれなゐ深き波や立つらむ

釋 ○二條の后の春宮のみやす所と　春上「春の日の光にあたる云々」の條に既出。○かたを　繪を。

大意 この立田川に散り浮いて赤く見える紅葉が、流れて一つに行き止まる湊には、何時もの白波とは違つて、定めし眞赤な色の深い波が立つ事であらうか。

評 光彩眼を射るばかり色濃く描き成した紅葉であつたとすれば、かうした想像も起らう。紅濃きを「深き」と轉義して、波の深い趣をも聯想させた。字法精細である。「湊」は、所の轉義ぐらゐに輕く見たい。結句、六帖に波ぞ立ちけるとあるは、立田川が紅葉の流れ止まる湊のやうに聞えて、穩やかでない。

業平朝臣

千早ぶる神代も聞かずたつ田川からくれなゐに水くゝるとは

釋 ○千早ぶる　汎く神にかゝる枕詞。「千早」は逸隼（イチハヤ）の義で、鋭い勢をいふ語。「ぶる」はびの變化で、形容の接尾語。故に千早ぶる人、千早ぶる神など續けて、荒ぶる人や神をも稱したが、その本義ではない。○からくれなゐ　「から」は韓（カラ）で、その昔あらゆる技巧は韓國（カラクニ）の方が優れたので、遂に移つて美稱となつたのである。○く

くる　絞るの意で、潛るではない。さて紅に絞るとは、今の絞染（シボリゾメ）の事で、令式に、絹を綵で所々絞つて、紅、紫、綠などに染めることが出てゐる。字には纐纈と書き、ユハタと訓む。

大意　さて〳〵奇妙なことよ、このやうに立田川で紅に水を絞染にすることは、いろ〳〵不思議の事のあつた神代にも、一向聞かぬわ。

評　先づこの畫のさまを想像すると、眞靑に描き流した水の上に、頗る大きな紅葉の、しかも濃い紅なのが、あらあらとしたゝかに、模樣的に描かれてあつたのだらう。古代の畫のさま思ひ遣られる。その一葉々々を、纐纈の形に見成したのである。神代に不思議があつたといふことは、國史に、草木がさゝやいたり、又祝詞などに、岩根木根たちが物をいつたりした事が見え、その外種々樣々な奇蹟が傳へられてあるから、「神代」を例に引いて、今の不思議さを強く表現したのである。又紅葉の語が一首のうちにないのは、例の詞足らずなのではない。畫の上に讓つて略いたのである。實詠としては、「唐紅に水くゝる」が誇張に過ぎて面白くないやうだが、題畫の歌として見ると却つて面白い。

是貞のみこの家の歌合の歌　　としゆきの朝臣

わが來つる方も知られずくらぶ山木々の木葉（コノハ）の散りとまがふに

釋　○くらぶ山　春上「梅の花匂ふ春べは」の條に既出。○散りとまがふに　散りと散り紛ふの略。意は甚しく散り紛ふこと。

大意　ゆく先は無論、今自分が通つて來た方もわからぬわ、只でもこの暗いといふ名の暗部山の、木どもの葉が頻に散り紛ふのでサ。

評 落葉の盛りに、たま〳〵さる山中に行き迷つた趣を、木の葉の散るによつて誇張した。山の名の「くらぶ」の聯想が、既に初二句に響いて、覺束ない氣持がある。これこの作者の慣手。

二句、古本に道もしられずとあるのを眞淵は執したが、ことが狹い。又三四の句、家集にはくらま山やまの木の葉のとある。

神なひのみむろの山をあき行けば錦たちきるこゝちこそすれ　たゞみね

釋 ○たちきる　裁ち着るの意。契沖が、立ち着るの意と見たのはいかゞ。但「裁ち」は熟語として添つたのみで、主意は「着る」の方にある。

大意　この神南備の三室の山を、秋の頃通ると、紅葉が散りかゝつて、錦を着物にして着る心持がするわ。

評 官卑しく祿賤しい流石の忠岑も、今日ばかりは引き換へた紅葉の錦衣に、いかに心驕りした事であらう。想は平凡だが、作者の人柄に惹かれて、をかしくも聞える。

三句、六帖及び家集に分け行けばとある。

北山にもみぢをしむとてまかれりける時によめる　貫之

見る人もなくて散りぬるおく山のもみぢはよるの錦なりけり

釋 ○北山に云々　北山は、京都の北部、葛野郡衣笠山以北の山地をいふ。「もみぢをしむ」は、紅葉を愛賞する意で、その散るを惜む意も、おのづから含まれてゐる。これを理りなしとして、古本にもみぢ折らむとてとあるに、眞淵、宣長の從つたのはいかゞ。折らうといつて出掛ける、そんな殺風景な事は今の人でもしない。○おく山　奧山は深山をいふ。端山の對語。○よるの錦　如何に美しい錦でも、夜は文目の分からぬから、物の詮の無いのにいふ譬喩である。史記、項羽本紀に「富貴不レ歸ニ故郷一如ニ衣レ繡夜行一、誰知レ之者。」とあるに本づく。又史記の、朱買臣傳にもある。支那の古諺である。

大意　格別見事に錦のやうに見えながら、誰れ賞翫する者も無くて散つてしまふ、この奧山の紅葉は、全く喩にいふ夜の錦であつたわい。

評　典故を湊合した夜の錦の隱喩、親貼を極めてゐる。況や衣錦夜行の意を、僅々「夜の錦」の數語にいひ取つた造句の簡淨さ、凡手の到底眞似も出來ない所である。「おく山の紅葉は」も、都近い紅葉の心ある人々に、昔の錦と賞翫されるのに反映して、無量の感慨を含む。想ふに或は寓意の作か。わが大才を抱きながら、陸沈して朽ち果てゝしまふことを慷慨し、自ら奧山の紅葉に擬して、その幾微を洩らしたのではあるまいか。

秋のうた　　かねみの王

立田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらめ

釋 ○秋のうた　契沖いふ、「この下に、とてよめるの五文字落ちたる歟」と。さもと思はれる。○立田姫　立田の社はしなつ彦、しなとべの神の、男神女神を祀つてある故に、その男神を立田彥、女神を立田姫と稱へる。

もと風の神なのを、後世秋の神とすることは、奈良の京を中心として、その西の方角に立田は當るので、西を秋に配する易や、纖維の學に依つて、立田姫を秋の神として、春の神佐保姫に對した。「立田を紅葉の名所としたから、其處におはする神なので立田姫を秋の神とした」といふ舊說では、佐保姫の解說が付かなくなる。○たむくる神　手向する神の意で、昔は旅に出ると、こゝかしこの道の神に、幣を捧げる習慣であつた。道の神は道のなかぢの神、又くなどの神とも、さへの神ともいふ。支那の道祖神に似てゐる。○ぬさ　幣帛。みてぐらとも、にぎてともいふ。いにしへは絹布の長きまゝを用ひたが、後には五色の絹を細かに切つて袋に入れたのを携帶して、神前每に撒き散らして手向ける事となつた。されば幣には、散るが緣語である。

大意　立田姫は秋の神だが、それすら暮れて行かれる折には、お手向けなさる道の神樣があるからこそ、このやうに、御自身お染めなされた秋の木の葉が、手向の幣のやうに散るのであらう。

評　木葉の飄零するさまを見て、五色の切幣を聯想し、さて暮れて行く秋の女神の旅を想像したのは、頗る面白い。更にその女神にも猶手向ける神樣のあることに想到したのは、所謂奇想天外より落つるもの。

小野といふところに住み侍りける時、紅葉を見てよめる

つらゆき

秋の山紅葉をぬさとたむくれば住むわれさへぞ旅ごこちする

釋　○小野　京都の北にある山里。但三箇所ある。今の葛野郡元杉坂村、これ古の小野庄である。又愛宕郡高野村と、同郡小野山とにある。眞淵の說に「古本に『紅葉を見て』の五文字なきをよしとす。この集の詞書には、

歌とかよはせて紅葉と書かぬ例、上にも下にも類多く見ゆ」とある。

大意　秋の山では、恰も旅人が道の神に、道々幣を散らして手向けて行くやうに、風が紅葉を散らして山の神に手向ける故に、此處に住む自分までが、どうやら旅の心持がするわい。

評　想ふに作者の小野に住んだのは、一時の假住居であつたらう。さては外界の縁に觸れては、旅心地もされやうではないか。折しも暮秋風廻つて、木葉繽紛とする其の狀が、さながら切幣を撒き散らした樣とすると、思はず、「住むわれさへぞ旅心地する」と歌はれもしよう。但切幣を手向くる習慣は今は廢つたから、以下の歌ども皆切實な實感を、聽者に起させることは、やゝ困難である。

神なひ山を過ぎて、立田川をわたりける時に、紅葉の流れけるをよめる　　ふかやぶ

神なひの山を過ぎ行く秋なればたつ田川にぞぬさはたむくる

釋　〇神なひ山を過ぎて　貫之本に越え過ぎてとあるのが優つてゐる。「神なひ山」は上出。

大意　これから神南備山を暮れて過ぎ行く秋なので、先づ山口のこの立田川にサ、あれあのやうに紅葉の幣は手向けるわ。

評　上にもいつた如く、この立田川は神南備山を半周して流れてゐる。作者は、神南備山を越えて、立田川の西岸に出ると、こゝには、又紅葉が波に浮いて流れてゐる。そこで、先刻自身が神南備の神に幣を手向けて來た事を思ひ出して、川の紅葉を、神南備山を越え行く秋が手向けた幣と見成した。つまり作者は神南備山を東へ越

え、行き違ひに秋は西へ越えるものとして立案した、往時の旅行者の感じさうな興趣で、秋の擬人がこの生命である。落葉の意を一首にめぐらして、その語を遺したのは實景に讓つたものである。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　興　風

白なみに秋の木の葉のうかべるをあまの流せる舟かとぞ見る

釋 ○あま　海村の生活者を總稱していふ。○流せる　漂流させたの意。下の十九巻の伊勢の長歌にも「年へて住みし伊勢のあまも舟流したる心ちして」とある。

大意 白浪の上に、この節の木の葉の散り浮いたのを、漁人の海に流した、小舟かしらとサ思ふわ。

評 土佐日記に、

みな人々の船出づ。これを見れば、春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。

など、舟を落葉に譬へることは常套でもあり、自然でもあるが、落葉を舟に譬へることは、纎細な詩境である。「白波に」はその荒びた狀を拈出して、下句に海上の難船を聯想する襯染とした。場處は早瀨の水でゝもあらう。

寛平歌合、新撰萬葉に、三句浮べるは、結句舟にざりけるとある。六帖には、結句舟かとぞ思ふとある。

たつ田川のほとりにてよめる　　坂上是則

もみぢ葉の流れざりせばたつ田川水の秋をばたれか知らまし

釋 ○水の秋　水にある秋の意。

大意 水といふ物は、何時も同じ色だから、若しこのやうに水の赤くなる紅葉の、流れずにありもするならば、この立田川の水にある秋をば、誰が知らうぞ誰れも知りはすまい。

評 聯想の上から、水にも春秋のあるものとするは、例の手段で、卽ち物名の部に、

浪の花おきからさきに散りくめり水の春とは風やなすらむ

とある伊勢の歌の儔である。紅葉の流れるので、はじめて水の秋をば知るといふ意を逆寫して、婉曲の味をもたしめようとした。そのわざと奇巧を覓めた處は、夙く金葉、詞華二集の風を啓いたといはれよう。宮聲半を占めて和諧。

志賀の山越にてよめる　　春道列樹

山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり

釋 ○かけたる　造りかけたの意。○しがらみ　水流を堰く爲に、材を連ね立てゝ横に竹柴などを搦み附けた物をいふ。○流れもあへぬ　流れもおほせぬの意。

大意 この山川に、風の拵へた柵は、外でも無い、瀬々の處々に流れもまあおほせず、水を堰いて居る落葉であつたわい。

評 旣に落葉の山川の瀬々に溜つた狀を柵に譬喩したのを、又「風のかけたる」と擬人したのは、巧中の巧を求めたるものである。木の葉なりけりといはず、「紅葉なりけり」といつたのは、川水に對する色彩を點出したの

である。北白川の上方、近江に通ふ志賀山越の溪水が、玉を蹴つて流れる處、奇岩怪石の間を、紅葉の點綴した光景が、ありくと見える。聲調もおのづから爽快である。

池のほとりにて、紅葉の散るをよめる　　みつね

風ふけばおつるもみぢ葉水きよみ散らぬ影さへ底に見えつゝ

大意　風が吹くと誘はれて落ちる紅葉が、池の上に浮いて見えるばかりか、水の清さに、まだ散らぬ梢の紅葉の影までが、底に映つて見えくして、面白い事よ。

評　最初は梢の紅葉の色の深さに目がとまり、次には風に任せて打ち散る紅葉の行方を迦つて、測らず池水の清さに驚き、さてさやかな梢の影を水底に見出した趣向である。すこし混雜した感じがして、作者の他作に類しない。又「つゝ」の用法も正格でない。古今傳授を云爲した者、これを「力ありて見過ぐすべからず」といつたのは曲解である。

亭子院の御屛風の繪に、川渡らむとする人の、紅葉の散る木のもとに、馬をひかへて立てるをよませ給ひければ、仕うまつりける

たちどまり見てを渡らむもみぢ葉は雨と降るとも水はまさらじ

釋　○亭子院云々　宇多上皇がその御所亭子院の御屛風の繪を題にして、躬恒の歌を召されたので、詠んでさし

あげたのである。亭子院は、春下「見る人もなき山里の」の條に既出。「馬をひかへて立てる」に、馬を乘り据ゑて立つてゐること。○見てを　「を」は歎辭。

大意　先づ立ち止まつて、あの紅葉の散る景色を見てサ、この川を渡らうぞ、眞の雨ならば猶豫しては居られぬが、紅葉は散つて雨のやうに如何ほど降るとても、この川の水は增りはすまいと思へばサ。

評　淺川のほとり、駒を控へて紅葉の散るを見る、その光景は頗る詩的だ。卽ち畫中の人物の抱くべき詩的觀想を假想して、更に有聲の美を添へた。はげしい落葉から雨を聯想するは常套ながら、「水はまさらじ」とまで想像を延長したその痴氣は、實に愛すべきである。題畫の歌としては、洵に上乘の作と思はれる。公任が九品に、これを中の上に据ゑて、「心詞滯らずして面白きなり」と評したのは允當。

是貞のみこの家の歌合の歌　　　　たゞみね

山田もる秋のかりほにおくつゆはいなおほせ鳥の涙なりけり

釋　山田もる　「もる」は守るの意。○かりほ　假庵(カリイホ)の約。秋の田の稻を、鳥獸に荒させまいと守る者の居る小屋をいふ。○いなおほせ鳥　秋上の「わが門にいなおほせ鳥の」の條參看。

大意　山の田の番をする秋の假小屋に、このやうに置く露は、このあたりに來て鳴く、いなおほせ鳥の涙であつたわい。

評　假廬のあたり、白露の穰々たるのを見て、いなおほせ鳥の淚を思ひ寄つたのは、以てこの鳥の雁鵝椋鳥の類の、秋の渡り鳥である事が知られ、以てこの鳥の、いかに繁く鳴き騷いだかが想はれる。鳴くにつけて涙を聯

想するは、例の事である。

結句、新撰萬葉に涙なるべしとあるが、却つて詩味が局促する。

題しらず　　よみ人しらず

穂にも出ぬ山田をもるとふぢごろも稲葉の露に濡れぬ日はなし

釋 ○穂にも出ぬ　稲穂の秀でぬをいふ。「も」の辭、語調が強いから、さへもの意に聞き取られる。○ふぢ衣　藤葛の皮の纖維で織つた衣。今の葛布に同じい。古へは、山住などしてゐる賤者の服であつた。又喪服の稱ともする。

大意 まだ穂にさへも出ぬ山田を番するとて、稲の葉の露に、藤衣の濡れぬ日とては一日も無いわ。

評 嗚呼辛氣なことよの餘意がある。穂に出ぬ間すら既にかうだとすると、やがて穂に出でて、實つて、さて刈り收めるまでの艱辛は、どんなものだらうと想ひやると、この田夫の述懷、世に同情を寄せないものとてはあるまい。歌の風格も、古調を帶びてゐる。

初句、季吟本に穂にいでぬとある。又結句、貫之本に濡れぬ夜はなしとある。山田を守るも露の置くも、夜を主とするから、夜はの方、呼應の妙があるやうに思つたが、よく考へると、却つて事が狹い。又古本には、この歌の次に、前の「山田もる秋の假庵の云々」の歌を擧げてある。この初二句の趣に據ると、從ふべき序次と思はれる。

○

かれる田におふるひづちの穂に出ぬは世を今更にあき果てぬとか

釋 ○ひづち　刈つた後で再び自生する稻。おろか生ひともいふ。○あき果てぬ　「あき」は、飽きに秋をかけた。「ぬ」は現在完了の助動辭。○とか　といふ事かの略。

大意　刈つた田に又も生えるひづちが、一向穗に出ないのは、今となつては時節の秋もはや果てたし、この世の中をもう飽き果てたといふ事であらうかしらぬ。

評　一旦は生ひ立ちながら、遂に穗に出ないで止むひづちを怪んで、世を飽き果てたのかといへる擬人の想像は、蓋しこの憂き世を飽き果てゝ、出身の素念を斷つた人などの寄せた感懷であらう。

北山に、僧正遍昭と、茸狩にまかれりけるによめる

そせい法師

もみぢ葉は袖にこきいれてもて出なむ秋は限りと見む人のため

釋 ○北山に云々　古本には「僧正遍昭と」の五文字がない。家集の詞書にも「北山に松茸とりにまかりたりけるに」とある。○こきいれて　「こき」は搔き落すこと。すごくに同じい。○もて出なむ　持つて出でようの意。「なむ」は希望の辭ではない。

大意　この梢の紅葉は、自分の袖へこき入れて、持つて往つて土產にしようぞ、こゝらに來て見ずに、秋は最早仕舞ひだと思ふ人の爲にサ。

評　紅葉を袖にこき入れるのは、逸興ある所作だが、既に萬葉集に、

ひきよぢて折らば散るべく梅の花袖にこきれつしまばしむとも　（卷　八）
時鳥なくはぶきにも散りぬべし袖にこきれつ藤なみの花　（卷十九）

とあるから珍しくはない。「出なむ」が眼目である。この一句によつて、山中に現在入り立つてゐる趣が見える。京附近の紅葉は、既に空しい枝のみとなつた頃とすると、秋のしるしとして見るべき物もないから、「秋は限り」と思ふのは固よりの事、作者自身も、全くさう思つた一人であつたらう。たま〳〵北山邊に、茸狩の勝遊を試みた所が、測らず紅葉のなほ盛りなのに出會つて、いざこれを家産にして、山には秋の殘つてゐる事を、都人等に知らせようと興に入つたのは、いかに作者自身が、この紅葉の盛りを意外と感じたかが想見される。

春上同人の歌、

見てのみや人に語らむさくら花手毎に折りて家づとにせむ

はその興趣といひ、構想といひ、ほゞ同調の作である。この他、春興を憶うては、「思ふどち春の山べにうち群れて」と歌ひ、大和撫子を見ては、「我れのみやあはれと思はむ」と歎き、躑躅を見ては、「思ふどち折りて暮さむ」と希ふなど、人と娛樂を頒つて倶に天與の恩光に浴したいのが、この作者の特想である。渠れは單に理想として希望として、これを稱道したのみではない。事實に於いてそれを踐行した。卽ち渠れの交際は汎交で、上は宇多上皇より、下は乞食坊主の輩に至つてゐる。會友を喜び、會談を娛み、會飮を解し、山野の同遊を以て唯一の性命としてゐるやうである。その動もすれば、狷介獨立、世と忤ふのをえらい事とする野狐禪の境涯を出離してゐる所以は、既に春上「思ふどち春の山べに」の歌の條で、論じておいた。

初句、新撰和歌、六帖にもみぢ葉をとある。四句、古本に秋を限り、三句、打聽本にもていなむとある。

寛平の御時、ふるき歌奉れ」とおほせられければ「立田川もみぢ葉流る」といふ歌を書きて、そのおなじ心をよめりける

おきかぜ

み山より落ちくる水のいろ見てぞ秋はかぎりと思ひしりぬる

釋 ○寛平の御時云々　宇多帝の御世に、古歌奉れとの仰のあつた時、上に見えた、「立田川もみぢ葉流る神なびのみ室の山に時雨降るらし」の歌を書いて、それに同趣向の歌を詠み加へて奉つたとの意。

大意 まだ秋が殘つて居らうと思つたその深山から、散紅葉の流れて來る水の色を見てサ、さてはもういよいよ秋は仕舞ひだな、と思ひ知つたわ。

評 都あたりこそ散り盡したれ、深山の方にはまだ秋をとゞめて、紅葉のある事と思つてゐた趣、「ぞ」の辭と「は」の辭との應接によつて聞き知られる。紅葉の語を着けないで廻護したのを、一ふしとするが、詩味饒かでなく、とてもかの「立田川もみぢ葉流る」の什に配するに足らない。「名歌に返歌なし」の諺の通り、唱和などは控へれば、却つて賢かつたものを。

二句、六帖におちくる瀧のとある。

秋のはつる心を、立田川に思ひやりてよめる

つらゆき

年毎にもみぢ葉ながすたつ田川みなとや秋のとまりなるらむ

釋 ○秋のはつる云々　立田川を想像して、暮秋盡の意を詠めるとの意。○とまり　泊舟の繫る處をいふ。

大意　每年々々紅葉を流し下す立田川の川下の湊がサ、あの暮れて行く秋の泊り處であらうか。

評 湊は古船の泊る處なので、紅葉の流下によつて、立田川の湊は秋の泊だらうとの想像は、甚だ巧趣がある。上なる「もみぢ葉の流れてとまる湊には」の歌に似通つた所もあるが、六帖に、

もみぢ葉の流れてよどむ湊をぞくれ行く秋のとまりとはする

は殊に類想類型である。但用語は一層の洗煉を經てゐる。「ながす」は、舟や筏を流し下す趣に聞えて、湊、或は泊の語に打ち合ひ、例の細やかな叙法である。舌音、及びア韻の語の多いのは、勁く花やかな聲調を成す所以と思はれる。

長月のつごもりの日、大堰にてよめる

夕づく夜をぐらの山に鳴く鹿の聲のうちにや秋は暮るらむ

釋 ○長月の云々　「長月」は、陰曆の九月の異名。夜長月の略かといふ。「つごもりの日」は晦日。「大堰」は京都府下葛野郡嵐山の麓を流れる大堰川に沿うた里の名。小倉山はその北岸に當る。○夕づく夜　夕就夜の義で、夕方になるをいふ。故に小闇き意をいひかけて、小倉山の枕詞に使ふ。「づく」は、月の意でない事は、朝づく夜、夕づく日、秋づけばの語を思ひ合はすればわからう。さて「夕づく夜小倉の山」と續いた例は萬葉集にあるが、それは大和の立田の小倉山である。

大意 あの小倉山に鳴く鹿の聲のするうちにサ、秋はもう暮れることであらうか。

評 蕭條たる山本の里に、物悲しい夕闇を傳うて、曳聲に鹿の鳴く音の聞えてくる、いかに遊子の悲を催すことであらう。こゝに今遊子といつた。この時代では都から出て、嵐山や交野邊ぐらゐを歩いても、旅であつた。この氣分で、この歌の味ひを曉らなければならぬ。況やそれが九月盡の當日ときては、溜るものではない。又「聲のうちに秋暮る」といふに、秋の果の九月盡のその日も、早暮方にまでおし詰まつて、殘餘の秋の幾ばくもない趣をいひ現はし、秋のいとゞ惜まれる所以を構成してゐる。家集にある、

くれぬとてなかずなりぬる鶯のこゑのうちにや春のへぬらむ

はその初稿で、更に推敲されて今の歌とはなつたのであらう。想は清警、措辭は縝密、調は流暢である。

同じつごもりの日よめる　　みつね

道しらばたづねも行かむもみぢ葉をぬさと手向けて秋はいにけり

大意 え、道を知らうなら、跡追つて尋ねても行かうよ、散紅葉を道の神へ幣のやうに手向けて、秋は旅立して去つてしまつたわい。

評 しかし道を知らぬから、あとの追ひやうもないの餘意がある。秋を擬人して、その暮れ行くを旅立つものと看なし、さて人の別を惜む情を、秋の別に擬した。人の別はなほ道が分明だが、秋の別となつては道がわからぬ。その惜まれる所以は偶然でない。巧を覔めて纖弱の弊がないのが、この作者の擅場であらう。但春上の、素性の歌、

花散らす風のやどりは誰れか知るわれにをしへよ行きて恨みむ

と構想が似寄つて、曲折自在は彼れにあり、歌の位はこれが勝つてゐる。どちらが先に詠まれたものか。古本に、二句たづねもいなむとあるは、結句にさしあつてゐる。又同じ本に、結句秋はいぬめりとある。又六帖に、下句ぬさに手向けて秋はいぬともとあるは、調が舒暢でない。

古今和歌集卷第六

冬歌

題しらず　　　　よみ人しらず

たつ田がは錦おりかくかみな月しぐれの雨をたてぬきにして

釋 ○おりかく　織り懸く。但、懸くに重い意のない事は、春上「あを柳の絲よりかくる春しもぞ」の條にいつた。○かみな月　陰暦十月の異名。

大意 立田川が、紅葉の錦を織りかけるわ、神無月のこの節降る時雨の雨を、竪横の絲にしてサ。

評 上の秋下の、

たつ田川もみぢ葉流る神なびの三室の山にしぐれ降るらし

と同一の詩境で、但これは眼前に時雨を見、紅葉の散り浮くを見たものだ。紅葉を錦と譬喩した縁によつて、時雨をその經緯の絲と見做した。尤も雨脚を絲に譬へることは、漢詩にも例ある事で、秋下、

霜のたて露のぬきこそよわからし山のにしきの織ればかつ散る

などの構想も、これと似通つた巧だが、一段格調が高くて、纖細の嫌のないのが嬉しい。又、その實況に讓つ

て、紅葉の一語を着けないのも、この歌の餘情ある一因として數へられよう。

初句、新撰和歌、及び六帖に立田山、家持集に佐保山とあるはいかゞ。山の錦を時雨の織りかける頃、卽ち紅葉の色付く頃は、寧ろ長月がふさはしからう。神無月では季節後れだから、山の紅葉は盛り既に過ぎて、最早落葉してゐる頃だらう。されば本文のまゝに、立田川の落葉の趣が妥當である。又家持集は後人の僞撰だから、これによつて家持の歌と心得てはならぬ。又或書に、延喜の御製とあるも妄りである。それは新古今集の序に、「抑、於二古今一者、不レ載二當代之御製一」と見えてゐるではないか。

冬の歌とてよめる　　源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば

釋　○人め　人の見る目をいふ。「め」は見えの約。○かれぬ　枯れに、離れを寄せた。離るゝは、遠離るなどの離るゝと同じい。

大意　山家は、冬がサ取り分け寂しさが増るわい、今まではたま〳〵ながらも見えた人目も離れ、草も枯れてしまふと思へばサ。

評　幽閑寂寥は山家の常ながら、尙春は花、夏は時鳥、卯花、秋は鹿、紅葉などにつけつゝ、稀には都人の音信れる事もあつて、寂しい中にも、自然賑はしい點もあつたのを、冬となつての山家は、はかない小草までも枯れ渡つて、人の訪ねてくる種はひもないので、全く世に超えた寂しさである。さて、草の枯れるは何處でもある事だが、人目の離れるのは山家に限る事なので、「人目」が主眼の語である。結句の「おもへば」を、宣長が、「只、

枯れぬればといふに同じく、思ふに意味なし」といつたのは甚だ粗い。これは只その遣ひなしが稍輕いだけで、意味のないのでは決してない。辭句の彫琢はやゝ見られる。

題しらず　　よみ人しらず

おほ空の月のひかりしきよければ影見し水ぞまづこほりける

釋　○きよければ　古本幷に新撰萬葉、六帖、朗詠等に、さむければとあるに據つて釋した。

大意　この大空の月の光がサ大層寒いから、嘗て月影を映して見た水がサ、他の水よりは一番先に氷つたわい。

評　大空の色は玄く澄み、月の光は氷と冴えた冬の夜、遣水などの今は氷つてゐるのを見ての作だらう。さうした寒い夜は、何處の水とても氷らないのは無いが、そんな理窟を放下して、單に目前の實境に卽した感興のまゝに、月を映した水が、流石に一番に氷つたわといふ。極めて只ありのまゝの作である。これを舊註は素より眞淵、宣長、景樹等を始めて皆、

昨夜の空の月がきつく冴えた故に、その影を見た水がサ、今朝はあれあのやうに、

の意に解いたのは贊成し難い。何で月の光を昨夜のと定めたのか。清かりければなど、過去にいつたなら知らず、淸ければとあるではないか。歌は月の光と氷れる水と相須つて、凛乎たる霜氣が骨に徹つて、寒いやうに覺える。

○

夕さればころも手さむしみよし野の吉野の山にみ雪ふるらし

釋 ○夕されば　夕べになればの意。萬葉集に夕去者とあるが、去は借字である。○み雪　「み」は美稱。深雪と書くはこれも借字。

大意　夕方になると、袖のあたりが格別寒い、これではあの三吉野の吉野の山に、きつと雪が降るらしいわ。

評　初句「夕されば」の句、力強く聞えるので、晝の間はさもなかつたがの餘意を生ずる。日の暮れ〲から、何となく底冷して、働く手許の寒さを覺えるにつけて、この分では、かの氣疎げな高山の吉野の山はと思ひ遣つたのは、吾人が日常の應對にも、「今宵は大層冷エマスナ、多分遠山ハ雪デセウ」など語ると同想である。萬葉集卷十に、

ゆふされば衣手さむし高まどの山の木毎に雪ぞ降りたる

降雪を現在に看たのと、想像したのとの差別があるばかりで、大體は同調ながら、高圓は吉野ほどは寒くない土地だから、「夕されば衣手さむし」が生きない。流石にこの歌は自然で實情で、格調も高古莊重である。「み吉野の吉野の山」は諧調ではあるが、或は時代の好尙に惹かれて、撰者が引き直したのではあるまいか。集中に同調のが三首ある。しかもこの歌は六帖に、初句夕ぐれば、四句高きみ山にとあり。家持集といふものには、四句を高まの山とあれど、高間山は河内國だから、「み吉野」からは續け難い。顯註に「常には深き野山とあれども、崇德院の御本にも高きの山と侍り」とある。これ等を併せてみると、高きみ山も、高きの山も、ふかき野山も、皆、たかぎの山の誤寫から起つて、さま〲に字を塡めたらしい。たかぎの山は、萬葉集卷三に、

三吉野の高城の山にしら雲は行きはゞかりてたな引ける見ゆと見えて、吉野山の奥、子守神社の左方にある山で、俗にこれを城山といふ。實際高山なる上に、名稱が既に崇高の概念を表して、峰の上の雪を聯想するに尤も緣由がある。

○

いまよりはつぎて降らなむわが宿の薄(スヽキ)おしなみふれるしら雪

釋 ○つぎて　引き續きて。○おしなみ　おしなべの轉。推し靡けの約語。

大意 これからは、どうぞ打ち續いて降つてもらひたいわい、こちの庭の薄を推し靡かして降つてゐる白雪が、大層面白いによつてサ。

評 下句は萬葉集の、

めひの野のすゝきおしなみ降る雪に宿かるけふし悲しく思ほゆ（卷十九）

の二三の句をそのまゝだ。然し主意は全く違つて、萬葉のは旅人の羈愁を主とし、これは自然の感興を主としてゐる。然も同じ薄の雪でも、めひの野のと、わが宿のとは全く場處が違ひ、隨つて趣を殊にして居るから、踏襲とはいはれまいと思ふ。雖一重覆つたやうに降り布いた雪に、前栽の枯生の薄の靡き伏したのが、殊にいちじるしく見え渡つた風情は、全く面白い。白雪とあるに、その色彩が強く印象されるのも、この場面では興味を一段と助ける。そんな薄雪だから、すぐにも消えさうなので、今よりは間斷なく降れと希つたのは、卽ち今より間斷なくめではやしたいの下心と見えた。わざ〳〵巧まない巧で、情景相協つた作である。貫之が、

よるならば月とも見ましわが宿の庭しろたへにふりしける雪

は、實にこれを藍本として、一節をかしくは詠み成したが、遙かに單調で味ひが淺く、雪を月影と見るのも類想が多い。但この歌、「降らなむ」と「降れる」と、同語が重複してゐる。古歌には例ある事ながら煩はしい。

○

ふる雪はかつぞけぬらし足引の山のたぎつ瀬おとまさるなり

釋　○かつ　片一方からといふに當る。春下「咲くと見しまにかつ散りにけり」の條參看。○けぬ　「け」は消えの約語、「ぬ」は現在完了の助動詞。○たぎつ瀬　漲り立つて流れる激湍をいふ。「たぎつ」は沸る(タギ)と同意の動詞で、古意の瀧と同じい。瀑布(タルミ)ではない。

大意　山の雪は積りもあへず、降る傍からサ消えてしまふらしいわ、其の證據には、この谷川の早瀬の水の音が、あれ高く鳴るわい。

評　山陰などに住む人の作だらう。屋後の溪聲が、常に變つて鳴高なので、降るまゝに雪が消えるのだらうと想像した。以て寒氣のさのみは烈しくない、初仲冬の頃なる事が知れよう。想はさしもないが、なほ古調の面目がある。

二句、顯本かつぞけぬらむとあるは、この歌體に協はない。結句、六帖に聲まさるなりとある。

○

この川にもみぢ葉ながるおく山の雪けの水ぞいままさるらし

釋 ○雪け　雪消えの約で、雪解（ユキドケ）のこと。清んで訓む。けを濁ると雪氣の意となる。紛へてはいけない。

大意　この川についぞ見ぬ紅葉の葉が流れる、こりやこれ、川上の奥山の雪解の水がサ、今增るらしいわ。

評　秋歌下なる、

たつた川もみぢ葉流る神なびの三むろの山に時雨ふるらし

と殆ど同想で、今一きはその規模を小さく、その格調を卑くした縮圖の觀がある。劈頭第一、「この川に」と打ち出したのは、驚歎から發した意調で、紅葉の流れたのを意外と感じた樣子が出てゐる。さてその紅葉を、必ず川上の奥山の物と見なして、雪解の水に推し流されたとするのは、想像としては當然なことである。その實は途中何處からか散り込んだ物かも知れないが、必ず奥山のと定めたのは、卽ち詩の理路に着せぬ所以である。「今」の一語、輕く看過してはならぬ。初句の驚歎に呼應があつて、紅葉が今はじめて流れ出た趣さへ推定されるのである。無論立田川の歌よりは、後出の作である。

○

ふるさとは吉野の山し近ければひと日もみ雪降らぬ日はなし

釋 ○ふるさと　都址、又は故京の意。○し　强辭。

大意　この吉野の古里は、奥深い吉野の山がサ近いによつて、一日とても、雪の降らぬ日といふは無いわ。

評　吉野の里人の作だらう。日本書紀、應神天皇の卷に吉野宮に幸し、又齊明天皇の卷に吉野宮を作られた事が

載つてゐる。いはゆる秋津の離宮で、奈良時代の末からは全く荒廢したから、古里といふのは協つてゐる。抑も吉野は全部北受の土地で、天武帝の御製にも、「三吉野の耳我の嶺に、時なくぞ雪はふりける、ひまなくぞ雨はふりける」とある如く、その雨雪の影響を受ける事は一通りでない。かうした山陰冱寒の冬景を、ありのままによく詠み得てゐる。況や「古里は」と打ちあげるからして、人氣遠く物寂しい聯想があつて、その日毎に降る雪は殊に侘しさうに感ぜられる。「ひと日も」を「降らぬ日」と受けた「日」の語の反復が、一層その意を強くする。又み雪一日もといふべき順序を轉倒して、「一日もみ雪」と四音三音の組織にしたのも、強い迫つた感じを與へる。體格は純古とまではいへないが、素朴で高調である。

新撰和歌に、二三の句奈良の都の近ければとあるのは、甚だ謂れがない。第一地理的からして成り立たない。又結句は日ぞなきとある。六帖に、この歌を御幸の題に収めたのは、四句の「み雪」をいひかけと見たのだらうが、全く據のない事である。

◯

わが宿は雪ふりしきて道もなし踏みわけてとふ人しなければ

釋 ◯ふりしきて　降り敷きて。「しき」を頻るの意とするは、この歌では面白くない。◯道も　「も」はさへもの意。

大意　自分の家は、雪が一面に降り滿ちて、行き通ふ道さへもないわ、それといふも、この雪を踏み分けて尋ねて來る人がサ無いからサ。

評　山里などの人氣の稀な處に住む人か、又は侘びしれて、世のまじらひの絶えた人かの作らしい。「わが宿は」と強く出てゐるので、差別的に他に對へた趣がある。卽ち世上の繁華な宿には引き換へて、わが宿はいとゞ雪の爲に人の足跡を絶つて、訪はるべき道さへもなくなつたよとの歎息である。「ふりしき」は、面積を廣くかけていふ語だから、何處を見渡しても一帶の白皚々で、道一つだにない光景を想像させる。

わが宿は雪ふりこめて道もなしいづこはかとか人のとひこむ　（新撰萬葉）

わが宿は雪ふる野べに道もなしいづくをはかと人のとがめむ　（寛平后宮歌合）

は誤寫もあるらしいが、とにかく上句は似てゐる。

冬の歌とてよめる　　紀貫之

雪ふれば冬ごもりせる草も木もはるに知られぬ花ぞ咲きける

釋　○冬ごもり　本集の序註の王仁の歌といふものに、「難波津にさくや木の花冬ごもり今をはるべと咲くや木の花」といひ、又萬葉集にも、多く春といふ語の枕詞に用ひてある。冬は閉藏とて、草木の發育をとゞめて内に籠るをいふ。○せる　してあるの約。○はるに知られぬ花　花といふ花は、春の關り知らぬはないが、これは冬の雪の花なので、春に知られないのである。

大意　まだ芽も出さずに、冬に籠つてゐる草も木も、雪が降るとめづらしく、春の一向知らない花がさ、咲いたわい。

評　初句は四句に續く格である。雪を花に譬へる例は、既に和漢に亘つた套語であるが、冬の雪を春に認知され

ない花と見たのはこの歌の特想で、腐を化して新としたものである。この種の趣向は作者の得意とする所で、殊に拾遺集のおなじ貫之の歌、

櫻ちる木のした風はさむからで空に知られぬ雪ぞ散りける

は、これと表裏した一對同調の作で、恰も双生兒の觀がある。その描寫こそ反對なれ、春と空とを擬人して、「そらに知られぬ雪」、「春に知られぬ花」と巧んだのが、多少理路にわたる感もあるが、いかにも氣が利いて、語が洗煉されてある。一首の精神またよく流動して、ラ行の音勝に、聲調がうるはしい。さてこの二首の優劣をしひて論ずると、櫻の雪は兄、雪の花は弟だらう。

志賀の山ごえにてよめる　紀秋みね

白雪のところもわかず降りしけばいはほにも咲く花とこそ見れ

釋　○わかず　差別なしに。○いはほ　石秀（イハホ）の義。單に岩といふに同じい。

大意　白雪が別け隔てなしに、平一面に降ると、草木ばかりか、花の咲かぬ筈の岩にも、花が咲いたとサ思ふわい。

評　志賀の山越は、上にもしば〳〵見えた通り花の名所なので、聯想上から、今草木岩石の差別なく、薄雪の降つてゐるのを見て、流石の無心の頑石にまでも、花の咲くと見たのが、この一節（ヒトフシ）である。但萬葉巻十九に、

于時積雪彫ニ成重巖之起一、奇巧綵ニ發草樹之花一云々。

なでしこは秋さくものを君が家の雪は岩ほに咲きにけるかも

とあつて見れば、着想の先取權は彼れにある。「咲く花」は、花咲くとあるべきを、語調のまゝに倒裝したのである。景樹が、「これは花を主としたるいひざまにて、草木と同じく、巖にも咲く花ありと見ゆの意なり」と解いたのは、一應尤もに面白いが、よく思ふと、もし花が主なら、三句はそれに顧應する名詞が必要であるから、降る雪をとか、降り敷く雪をとかなくてはならぬ。「降りしけば」では、やはり咲くを主として、意釋のやうに見るべき語勢である。

結句、六帖に花かとぞ見るとある。

奈良の京にまかれりける時に、宿りける所にてよめる　　坂上是則

み吉野の山のしら雪つもるらしふる里寒くなりまさるなり

【釋】○奈良の京に云々　「まかれりける時」は行つて居た時の意。作者が奈良の古京に逗留してゐた時に、その旅宿で詠んだものである。「延喜八年正月任二大和權少掾一、同八月廿八日任二大和權掾一」と、古今集目錄に見えた。これはこの集の撰よりも後の事だから、それより以前に、大和の目などで下つてゐた時の作か。或は撰進後の追加だらう。○ふる里　こゝは奈良の故京をさしていつた。

大意　この頃は、あの吉野の山の雪が、積るらしいわ、さうと見えて、この奈良の古里が、ます〳〵寒くなることよ。

【評】後世の人が、吉野山と云へば櫻花を聯想するやうに、奈良時代からこの頃にかけては、吉野山とさへいへば、

山深く雪も亦深い荒山が聯想されたのであつた。奈良では、間に塔の峯續きの山があるので、その山影すら見難いが、嚴冬の寒さを感じては、附近の山々をさしおいて、まづ吉野の積雪が思ひ出されたものらしい。ラ行音多くて、聲調ほがらかである。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原興風

浦ちかくふりくる雪はしら波のすゑの松山越すかとぞ見る

釋 ○すゑの松山　今陸中國二戸附近にある波打峠を、末の松山だと里俗にいひ傳へてゐる。すゑは地名と見える。日本紀に、山城に陶野（スヱノ）あり、和泉に陶邑ある事見え、又、上總には周淮（スヱ）郡あるを以て證とされる。顯註に、能因が歌枕を引いて、「本の松、中の松、末の松とて、三重にありと申す」とあるは、妄言である。なほ本集東歌のうち、みちのく歌に、

君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山波もこえなむ

の所で委しくいはう。

大意 かう海近い所へ降つて來る雪は、景色が面白くて、古歌に波の越さぬ處と歌つた末の松山を、白い波が越えるかとさ思ふわ。

評 山近い海岸で、浦風に吹きしかれて、雪が卍字巴と亂れ降る趣が、沖つ波邊つ波が押し寄せて、陸を覆つた狀に似たので、うちつけに、白波の山を越すかといはうとしたが、端なく、「末の松山波もこえなむ」の古歌を聯想して、かの山を波の越すかと見ると擬へたのである。されば、初句は何處の浦でもよい。契沖が、末の松

山あたりの浦と見たのは泥んでゐる。巧に典故を湊合した手際は見えるが、何だか作物で、實感が伴はない心地がする。

二句、新撰和歌にふりしく雪はとある。又この歌、拾遺集にも金玉集にも再選されて、作者人丸とあるが、無論人丸の歌體ではない、この集の方が正しい。

壬生忠岑

みよし野の山のしら雪ふみわけて入りにし人の音づれもせぬ

釋 ○音づれもせぬ 「音づれ」は便り。「も」はさへもの意。「ぬ」は否定の助動辭。

大意 吉野の山の深い雪をふみ分けて、籠つてしまつた人が、その後は出て來るどころか、一向に音づれさへもせぬわ。

評 いよく無事だかどうか、時節柄所柄ゆゑ心配だなあの餘意がある。初二句、單に「白雪」とあるのとは異なつて、いかにも荒山の深雪の狀に聞え、入りにし人の心細さを映發してゐる。一去杳として消息を斷ち、さりとてこちらから尋ねる心當りもない。生かはた死か、覺束ない極みではないか。友愛相思の熱情はこゝに迸發して、端なく「入りにし人の」と歌ひ出されたものだ。結句の「も」の辭に力があるので、出會ふことは勿論の意が含んでゐる。商徵の音過半を占めて、聲響が悲愴に、情が眞摯で、體格の長高なのは、忠岑の他作に似ない。それゆゑ景樹は、「その趣、打ち任せたる雪の景色にあらねば、歌合の歌めかぬ心地す。別に事に當りての歌ならむ」と疑つた。けれど、世を憤り俗を厭ふ餘りの山籠りに、吉野の山奥などに遁れるのは、奈良に都のあつ

た時代の事である。今の平安京になつては、藤原關雄が東山進士と稱せられたやうに、東山西山、あるは北山、さては白河宇治などのあたりに、多く閑居したものであつた。それを奈良時代の舊套のまゝに、都からは懸け離れた吉野を特に取り出したのは、あのもろ越の吉野の山と詠んだ類で、吉野を必ず隱遁の場處と假定しての上の作と思はれるから、實況の歌ではなく、題詠の範圍内に屬するものだらう。やはり歌合の歌と見てよい。

秋山にもみぢあはれとうらぶれて入りにし妹はまてど來まさぬ（萬葉卷七）

に比べると、雲泥の優り方である。後世鎌倉の八幡社頭で靜御前が、この歌の結句をあとど戀しきと謠ひ易へたのは、時に取つての手柄だが、やゝ露骨で、大いに風雅を傷ける。

○

しら雪のふりてつもれる山里はすむ人さへやおもひきゆらむ

釋 ○おもひきゆ　心細く消え入る思するをいふ。

大意 雪は消える物だが、その白雪が降つて、段々深く積つてある山里は、さぞや住んで居る人までが、心が消え入るやうに思ふ事であらうか。

評 源氏物語手習の巻に、小野に住みわびた所に、

雪ふかく降りつみ、人め絶えたる頃ぞ、思ひやりたる方なかりける。

とあるにおなじく、山家の情を思ひ遣つたのである。二句の「て」の辭は注意を要する。單に降り積るといふ

とは異なつて、時間を持つ爲に、いみじく降りもし、積りもした狀に聞きなされて、大いに力がある。これが爲に麓の通ひ路も打ち絶えて、閉ぢ籠つた寒さや寂しさの甚しさが映出されてくる。それを雪の緣で、「思ひきゆらむ」と調べおろしたのである。だから雪の消えるのは現前の事實と見てはならぬ。只雪は消えるといふ觀念を基調としたに過ぎない。

三句、新撰和歌にふる里はとある。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

雪のふるを見てよめる　　凡河内みつね

雪ふりて人もかよはぬ道なれやあとはかもなく思ひきゆらむ

釋 ○雪のふるを見てよめる　見て思ふ事をよめるの意。○道なれや　秋上、「秋の野におくしら露は玉なれや」の語法と同じい。參看されたい。○あとはか　「あと」は跡である。「はか」はそこはか、いづこをはかりなどいふ、はか、はかりに同じく、量りの略である。けれど「あとはか」と連ねては、「はか」に深い意味はなく、單に跡といふ語の意を強めたに過ぎない事は、淺はか、あてはかなどいふ語例を思ひ合はせるがよい。

大意 雪が降つて、人も通はぬ道は、足跡も無いによつて、道筋が消えてしまふが、このやうに引き籠つてゐる自分の心は、不思議にもその人通りの無い雪道かして、何がなしに消え入るやうに思ふのであらう。

評 憂思を抱いて、ひどく懊惱してゐる折しも、雪の降るのをつく〲詠め入つて、わがはかない思に擬へたのである。雪故の物思ではない。けれどもまた、かうも歌ひ出されるのは、雪の日の徒然な物わびしさからである事は勿論である。まづ寄レ雪述懷といつたやうな歌である。元來不倫な物を譬喩に捉へて來て、緣語によつて

連絡したので、彫蟲の技は多少見られもするが、感哀はやはり淺い。

雪の降りけるをよみける　淸原深養父

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ

釋　○花の　こゝは雪を譬へた。

大意　まだ冬でありながら、あのやうに花の散つて來るのは、あの雲のあちらは、もう春になつてゐるのであらうか。

評　雪の花などいふ、陳套の譬喩を用ひないで、直に花と斷定したのが面白い、この稚氣が卽ち歌である。貫之集に、

春ちかくなりぬる冬の大空は花をかねてぞ雪もふりける

とあるも、想は類似してゐるが、理路に纒はれ過ぎて、ひどく劣つてゐる。「雲の」は空のといつてもよい所を、上に「空より」とあるので、轉義したものと見ても見られるが、自分はこれを實在の雲と解したい。冬の一日、雲影が低迷して、折々輕く雪がちらつく。それが花とも見れば見られる。卽ち雲の此方は冬ながら、彼方は春だらうとの想像が、そこに生まれてくるのは自然である。この集、夏歌、

夏と秋と行きかふ空の通ひ路はかたへ涼しき風やふくらむ

を、時節と材料とを取り換へて、逆寫したやうな作である。上に、「冬ながら」とおき、下に、「春にやあるらむ」と結んだ對照は貼密に過ぎて、餘情が乏しい。この歌が體格の點で卑小な原因の一にも數へられよう。道

濟十體に、高情の歌と評したのは、どういふものか。聲調は花やかで流滑である。

雪の木に降りかゝれりけるをよめる　つらゆき

冬ごもり思ひがけぬを木のまより花と見るまで雪ぞふりける

釋 ○冬ごもり　この解上出。但こゝは冬籠りの頃はの意に解さなければならぬ事は、なほ梅雨を梅雨の頃はの意に解するのがあると同じい。

大意 諸木は冬枯れたまゝ、まだ芽も出さず籠つて居る頃なので、花を見ようとはとても思ひも懸けぬものを、それにまあ、あの木の間から花の散ると思はれる程にサ、雪が降つたわい。

評 韓愈の春雪の詩に、

白雪却嫌春色晩、故穿庭樹作飛花。

萬葉集卷八に、

うめの花枝にかちると見るまでに風にみだれて雪ぞふりける

など和漢を通じて、夙く同案の作あるうへに、新撰萬葉の、

木の間よりふきくる風に散る時は雪も花とぞ見えまどひける

に至つては全然吻合してゐる。其の穿庭樹といひ、枝にか散るといひ、木の間より散るといつたのは、皆、雪を花と見る爲の襯染である。既にいふ通り、雪を花の構想は等類がすでに澤山あるうへに、後世いよ〳〵屋下屋を架して、どうもならぬ。

結句、六帖に雪は降りつゝとある。

大和の國にまかれりける時に、雪の降りけるを見てよめる　　　　坂上是則

朝ぼらけ在明の月と見るまでによし野の里にふれるしら雪

釋 ○大和の國にまかれりける　この作者が、大和に往つた事に就いては、上の「三吉野の山の白雪つもるらし」の條に辨じた。○朝ぼらけ　朝朗明（アサホガラアケ）の略で、夜明方のこと。集中戀三に、「東雲のほがら〳〵と明け行けば」とある趣がそれである。○在明の月　影がまだ空に在りながら、夜の明くる頃の月をいふ。おもに下弦の月。○月と見るまでに　月の影と見るまでにの略。「まで」はばかりの意。○ふれる白雪　下に、なるかなといふ詞を補つて聞く格。

大意　朝しら〳〵明けに見れば、恰も在明の月の影かと思ふ程に、一夜の間に、吉野の里に、一面に降つた白雪であるよ。

評　元來吉野は山ふところだから、他所よりは雪も早い。或朝ぼらけ、外の方おしなべて眞白に見渡されたのを、都人の慣はらぬ心からは、雪とは思ひも寄らず、ふと在明の月影が地に印したのかと疑つたが、よく〳〵見れば、夜の間に降つた雪の光であつたといふのである。かう闇夜の頃に、雪を月明かと疑ふのは、白居易の詩に、「風吹二枯木一晴天雨、月照二平沙一夏夜霜」とある儔である。貫之集にも、

よるならば月とも見ましわが宿の庭しろたへにふりしける雪

といふのがある。強ひて詠出の前後は決し難いが、いづれも白詩からヒントを與へられたと見るが至當である。又この雪は草木の形を失はぬ程度の薄雪の光景で、更に萬物の面目を埋了する深雪の趣ではない。白詩の霜の風情に近い雪である。然るに眞淵が、「まで」の辭を重く見、且歌の序次に拘泥して、薄雪でないと定めたのは失考である。又契沖、宣長が在明の月は光り收めたる朝朗に、尙その影かと見るばかりと說き成したのは、在明の月を曉の月と解し、朝朗とは時刻が出會はぬと考へた拘泥の見で諾ひ難い。さてこの歌は姿も綺麗で、長けも高いが、大した佳作でもない。

四句、歌集に吉野の山にとある。

題しらず　　よみ人しらず

けぬがうへに又も降りしけ春霞立ちなば深雪まれにこそ見め

大意 これ雪よ、このまだ消えぬ上に、又も降り續いてくれい、その譯は、追つ付け長閑な春の霞の立つ時分になつたら、この面白い雪も段々消えて、稀にサ見る事であらう。

評 上の「今よりはつぎて降らなむ」は、その降り敷いた樣を興じて、その度々降る事を望み、これは殘雪の稀なことを豫想して、ある上にも夥しく降り積れと希つた。それを景樹は同意と見て、初句を、けぬがうちにの意だと解いたのは、いみじき誤である。この歌、表面から見ると雪の熱愛者の詞らしいが、或は裏をいつて居るのではあるまいか。この頃雪が頻々として降るので、その苦寒に堪へぬ餘り、いつそ降るなら在るうへにも山と降り積つておけ、春になれば少ない雪だからと、自棄的に皮肉をいつたものと思はれる。どうもかう見た方

が、この歌の自然の調に協ふ。「春霞立ちなば」は春立ちなばの意で、春の歸るを春下に、

をしめどもとゞまらなくに春霞かへる道にし立ちぬとおもへば

といつたと侔しい修辭で、おのづから霞と雪との對照が出來てゐる。

〇

梅の花それとも見えず久方のあまきる雪のなべて降れゝば

此歌は、ある人のいはく、「柿のもとの人まろが歌なり。」

釋　〇それとも　それなりともの略。「それ」は梅の花を指す。〇久方の　あまの枕詞。春下「久方の光のどけき」の條を參看。〇あまきる　奈良時代に多く見えた語で、天きらし、天きらふなどもいふ。天のポッと曇り合ふのをいふ。あの霧といふ語はこの居體言で名詞となつたものである。〇降れゝば　降りてあればの約。

大意　大空に漲る雪が、一面に降つてあれば、梅の花が梅の花とも見えぬわ、同じ白さなので。

評　梅雪相紛れることは、夙く支那の詩に見え、奈良時代にも數多いひ舊してゐる。しかも萬葉集卷八、赤人の歌に、

わがせ子に見せむとおもひし梅の花それとも見えず雪のふれゝば

又同集卷十に、「梅の花それとも見えず降る雪の云々」とも續けて、語句に多少の出入こそあるが、全く同想同趣である。但この體格、風調、用語を味ふに、雄渾雅健で、しかも蒼然たる古色を帶びた所は、純乎たる萬葉調である。道濟十體には、これを器量ある體として擧げたのは、一隻眼を持つてゐる。一體この作者は誰れ

か。風調が既に赤人でない。憶良でない、家持でない。旅人でない。かう數へてくると、僅に只一個の歌聖人麿を剩してゐるばかりだ。左註に「人麿が歌なり」とあるは、あながちに否認し難い。以下四首、皆雪中の梅を詠んである。

拾遺集には、斷然これを人麿の作として采錄したことを思へば、却つてこの左註は、拾遺集の選者といはれた藤原公任卿の所爲かも知れない。既にすべての左註は、この卿の手になつたものだらうと、古人も疑を挿んでゐる。

梅の花に雪の降れるをよめる　　小野篁朝臣

花の色は雪にまじりて見えずとも香をだに匂へ人のしるべく

釋　○雪にまじりて　雪の白さに混つて。○香をだに　「を」は歎辭。

大意　これ梅よ、汝が花の白い色は、よし雪の白さにまじつて、差別が見えないとしても、花が咲いてあると人の知るやうに、せめて持前の香でなりとも、あざやかに匂つて呉れよ。

評　梅を愛賞する情の尋常でない態が見える。梅の一語をつけないで、梅を歌つたものであることは動かない。初句「花の色は」と字餘りに起したのは、頗る勁健な調子である。四五句倒裝法を用ひたのが、偽に諧調となつてゐる。次の二首も同調の歌だが、これは稍古朴な傾向があるだけ嬉しい。なほ春下、

花の色はかすみにこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

の條を參照してほしい。

六帖に花の色に雪はまじりて見せずとも香をだにぬすめとあるは、甚だ妄りがはしい。新撰和歌に、初句梅の花とある、これは節短く力が弱い。

雪のうちの梅の花をよめる　　きのつらゆき

梅の香のふりおける雪にまがひせば誰れかこと〲わきて折らまし

釋 ○降りおける　降り置きてあるの約。萬葉集に多く見え、延喜の頃までは用ひてゐた語である。集中雜部にも、時雨ふりおけるとある。○まがひせば　紛(マガ)ふならば。○こと〲　別々の意。秋下「秋の露色こと〲におけばこそ」の條を參照。

大意　若しこの梅の香が、花の色のやうに降り置いてある雪に紛ひもするならば、誰れが雪と梅の花とをよく別々に見分けて折らうぞ、折る者は無からうを。

評 雪は梅花と一樣に白くて、缺く所は只その清香のみである。流石に梅が香は雪に紛れない。それを逆寫して若し紛れたら折るにも折られまいと心配らしく首を捻つたのは、詰り梅雪相紛ふ趣を、婉曲にやゝ誇張して合點させたものである。春上、

月夜にはそれとも見えず梅のはな香をたづねてぞしるべかりける

これも月色の白さを借り來つて、梅花の清香を讃歎したので、色と香と暗に映對してゐる。

六帖に、三四の句うつりせば誰かはものをとあるは、しかと聞き取り難い。

雪の降りけるを見てよめる　　紀友則

雪ふれば木毎に花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし

大意 雪が降れば、木それぐ\に、白い花がサ、思ひよらず咲いたわい、これでは、どれを梅と見分けて折らうぞ。

評 雪が梢に點ずると、林は盡く花となる。さてそれが梅花に紛ふを誇張して、折り煩ふとまでいつた。六帖に、

いづれをかわきてをらまし梅の花枝もとをゝにふれるしら雪

と同想同調で、餘り珍しくもない。新撰萬葉に、

冬くれば梅に雪こそ降りまがへいづれの枝を花とまをさむ

は等類ながら、聊か情致があるやうだ。さて「木毎に」の一語、殊更めいて聞える。必ず梅の字を拆いて詠み入れたものらしい。

物へまかりける人を待ちて、師走(シハス)の晦(ツゴモリ)によめる　　みつね

わがまたぬ年は來ぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

釋 ○物へまかりける人云々　「物」は何と限らぬ場合にいふ語で、こゝは餘所へ行つた人の意。「師走」は、年竟(トシハツ)、また末果(シハ)つの轉訛で、年の果ての十二月の異名。「つごもり」は、月隱(ツキコモリ)の略で、狹義には晦日の一日に限られ、廣

義には月の廿日過ぎより晦日までを稱する。こゝは前者の意。〇かれにし　冬草の枯れにしと、人の離れにしとをかけた。人の離るとは人の寄り付かぬをいふ。

大意　自分が待ちもせぬ新しい年は近く來たが、それとは引き換へ、この節の草の枯れたやうに、離れ〴〵になつて餘所へ行つた人は、歸つて來るどころか、音信さへもせぬわ。

評　待ちに待つてゐるうちに年もおし詰つた趣で、しかも「年は來ぬれど」とまであるから、晦は狹義に解した方が、事情がしつくり合ふ。物へ往つた人は誰れか、昔の人は朋友間でもこんな調子の事をいふから、斷定は出來ないが、まづ親類附合の女と見てよからう。待たねど來る年と、待てど來ぬ人とを對照させた歌だが、餘りに貼き過ぎる心地がする。初句は下句に反映させる爲だらうが、少しいひ過ぎてゐる。新玉のなどと置けば、やゝ大らかで宜からうにと一旦は思つたが、さてこの歌は又そこが山で、「年は來ぬれど」の擬人も、「わが待たぬ」とあるので活きてくる。そしてこの擬人は、「かれにし人云々」を引き出す所緣となつてゐる。「冬草の」は「離れにし」の序ながら、時節の物を應用したので、自然に心細げなけしきが浮かんでくる。「音づれもせず」は來ぬの轉義である。渾べて五分もすかさぬ纖巧さが見える。

年のはてによめる　在原元方

あらたまの年のをはりになる毎に雪もわが身もふり増りつゝ

釋　〇あらたまの　年の枕詞。〇年のをはり　年の果て。〇ふり增りつゝ　身の舊りまさるに、雪の降り增るを寄せた。

大意　年の終りになる度毎に、雪も降り増り〳〵するが、自分の身も舊さか増り〳〵してさ、次第に年寄つて行くは、あゝ情けない事よ。

評　作者老境の作と見える。眞淵は、古體でいとめでたいといつたが、承知が出來ない。小倉百首の、

花誘ふあらしの庭の雪ならでふり行く物は我が身なりけり（公經）

の藍本で、「ふり」の語に緣つて巧んだ秀句に過ぎない。これがこの人の作風である。

三句、六帖になる時はとある。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　よみ人しらず

雪ふりて年の暮れぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

釋　○もみぢぬ　赤く色付かない。「もみぢ」は動詞に用ひてある。

大意　他の時にはわからぬが、雪も降つて年の限りになつた時にこそ、さてはとう〳〵露時雨は勿論、何が降つても色の變らぬ松だといふ事も知れたわい。

評　他の草木の、雪はおろか時雨にも霜にも、容易く秋の頃から紅葉するのに對へた。論語の「歳寒然後知ニ松柏之後ニ凋」の意を本據としたので、看るべきは只その飜譯の精妙な點にある。「つひに」の一語眼目で、松の地歩はこれに依つて占められてゐる。舌音勝で、聲調が沈んで強い。

二句、寛平歌合、新撰萬葉に暮れ行く、四句、新撰萬葉につひに緣のとある。六帖は本文と同じ。

年のはてによめる　はるみちのつらき

昨日といひけふと暮らしてあすか川流れて早き月日なりけり

釋 ○あすか川　大和國高市郡飛鳥川。明日をいひかけた。

大意　過ぎ去つた日を昨日といひ、さし當つた日を今日といひて暮らして、すぐ明日を迎へるといふやうに、何の間も無いうちに早もう年の暮になつたを、どうした事ぞと思つて見れば、明日香川の水の早く流れて行くやうに、早く經つた月日であつたわい。

評「昨日」「今日」の緣語で、明日といふ響ある「飛鳥川」を取り出して漸層法を用ひたのは、いかにも一年の月日の、猶豫なく迅速に暮れてゆく概念を與へる。川の緣語で、過ぎて早きといふ所を、「流れて早き」と轉義した。二句は、けふといひて暮しての意なのを、初句の「いひ」に讓つて略いた。作者は流石に漢學者の事とて、おなじ歳暮の感懐を賦するにも、歳月如流の句意を骨子として、これに潤飾敷演の皮肉を加へた。詞は流麗で、聲調健やかである。

二句、六帖にけふといひつゝとある。

「歌奉れ」と仰せられし時によみて奉りける　きのつらゆき

行く年のをしくもあるかな増鏡見る影さへに暮れぬと思へば

釋 ○**増鏡** 眞澄鏡(マスミカガミ)の略。よく清みて光の明らかな鏡をいふ。

大意 とかく暮れて行く年が惜しい事ではあるよ、鏡で見る自分の影までが、年と同じやうに老い暮れたと思ふによつてサ。

評 唐詩に「霜鬢明朝又一年」などいつた趣を詠んだものか。明鏡の裡、形影自ら相憐んで老の迫るを歎き、年の逝くを慨く。誰れも思ひ當る感懐である。老いを轉義して、「影さへ暮れぬ」といつたはの、年の縁語に依つて理りを合はせたのである。

古今和歌集卷第七

賀歌

題しらず　　　　よみ人しらず

わが君は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔の蒸すまで

釋 ○こゝに賀歌とあるは、皆算賀の歌である。算は年齢の謂で、四十歳を初老として、十年毎にこれを行ふ。もと支那の習慣だが、奈良時代には、既にわが邦に行はれて、東大寺要錄に、僧良辨等が聖武天皇の四十の御齡を祝した事が見え、猶二三の書にも、算賀の事が載せてある。平安朝になつては、殆ど數へるに遑がない。皆長壽者の子弟等が、自ら親戚故舊を會して宴を張るのである。されば、かの天皇の大御世の萬歲を祝する歌は、この部中には無い。それのあるのは後撰集以後の事である。○わが君は　「君」は二人稱の代名詞で、天子の事でない。○八千代に　八千代にましませを略いた。八千代は八千年の義だが、茲の八千は只多數を意味するまでゝある。○さゞれ石　細石。小をさといひ、打ち重ねてはさゝといふ。卽ちさゝやく、さゝらぐ、さゝ波の類である。それにら或はれの接尾語を添へて、さゝら、さゝれ石などいふ。一轉しては、さゝれとばかりで小石の事ともなつた。○いはほ　石秀の義で、大きな岩。○苔の蒸す　「蒸す」は生すで、高皇產靈神の御名の產

に同じい。

大意　私の頼み奉る君は、千年も萬年もお繁昌で、お出で遊ばされて下されませ。いやそれではまだ飽かぬ、あの小さな石が大きな巖ほとなつて、またそれに苔の生えるまでお出でなされませ。

評　山厲河帶の語もあるやうに、巖石は缺けて小石とこそなれ、小石が長じて巖石となるのは事實ない事だが、昔は和漢を通じてさう思つて居たのだから仕方がない。この時代思想の立場からこの歌を見ると、「さゞれ石」の小と、「いはほ」の大とを對照させて、その變化の時間の無窮なる趣を現はしたので、既に賀意は完全してゐるのを、それでもまだ不足として、さゝれ石の巖となるにはまるで比較にもならぬ「苔の蒸すまで」を歌ひ添へて、少しも餘計にと今一層の時間を持たせた漸層法は、この種の想を叙述するに尤も適當の表現で、その賀意の親切さがつく〴〵と感ぜられる。二句も、「千代に八千代に」と同調を反復した漸層法で、下句に應じた。六帖、道濟十體、新撰和歌、奥儀抄、顯本等には千代にましませとあつて、表面の意義は完全するが、調がいたく後れて、永遠な意味と、その概念とを記得させる力が、頗る薄弱である。無論本文の方が勝つてゐる。抽象的に限りなき齡といふ所を轉義して「千代に八千代に」と數量の語に易へたのも面白い。初句の「わが君」は、我が大君、我妹子、あが佛などいふ類で、親しんで呼びかけた趣が見えて、その行末の長久を祈るのも尤もと點頭かれる。辭樣も、構想も面白く、格調も高古莊重なので、唯一の祝歌として、古來から吟誦されてゐるけれども、その音節の凄涼なのが聊か口惜しい。蓋し一首のうち、イ列音十、オ列音七あつて、その過半數は、商徵の音から成立した爲だらう。洋々たる暢諧快活の音節こそ、祝歌の性質として必要と思ふ。初句、朗詠集に君が世はとある。これは事がひろいから、今日國歌として用ひられた。

○

わたつみの濱のまさごを數へつゝ君が千年のありかずにせむ

釋 ○まさご 眞砂子、或は眞砂子の約。萬葉集には、まなごともある。細い砂をいふ。「ま」は美稱。○ありかず 存在の數。數取と解いた說もあるが妥當ではない。

大意 海の濱の砂の、限りも無い數を數へくて、それを、君の御長壽でお經なさる數にしようと存じます。

評 萬葉集卷四に、

八百日ゆく濱のまなごもあが戀にあにまさらじか沖つ島守

に著想は類似してゐる。但、君が千年にせよ、あが戀にせよ、何にまれ、無量數の譬喩に砂を用ひる事は、佛敎の影響である事を忘れてはならぬ。それは佛經中に無數恒河沙の語、數多散見して、當時の人士が朝夕の勤行に、誦を成したと思はれるからである。「千年」は窮りない齡の意を轉義したのであることは、上の歌に同じい。

四句、顯本に君がいのちのとある。

○

しほの山さしでの磯にすむ千鳥君がみ代をばやちよとぞ鳴く

釋 ○しほの山さしでの磯 「しほの山」は顯註に、能因が歌枕を引いて、甲斐國に在りとある。今同國甲府から東

北三里許、笛吹川に沿つて、小邱あるあたりをさし出といひ、それより二里許、北方にある山を鹽山といつてゐる。しほの山さし出の磯はこれだと稱してゐる。然しさし出の磯はさし出た磯崎の義だから、何處でもいはれる語である。契沖いふ、「平家物語に、しほの山打越えて、能登の國小田中親王の塚の前に陣を取る。又能登越中の境なる志保の山と見えたるその志保の山にて、さし出の磯もそのあたりならん」と。又眞淵はいふ、「延喜式に、能登國羽咋郡に、之乎神社あり。萬葉集に、赴二參氣比大神宮一行二海邊一之時作歌とて、之乎路可良多太古要久禮婆とあり。之乎を後にしほと誤り、それよりさし出の磯とは設けてよめるか」と。〇千鳥　多く河海の上に群つて鳴く水禽。鴫に類し、鶺鴒に似て小い。種類多く、その羽色にも種々ある。

大意　しほの山さし出の磯に鳴く千鳥でさへ、貴方の御世をば、八ちよ〳〵とサ鳴きますわい。

評　前にもいつた如く、賀部は皆祝壽の歌だから、「君が御代」といつても、大御世の謂ではない。初二句、たゞ在りにいひ續けたものながら、汐のさし來る磯邊に、千鳥の鳴き立つ景致が思はれる。その千鳥の鳴聲のちよちよと聞えたので、彌の語を冠せて、八千代と秀句に取り成した。「代」といふ語を折り返したのが、三句、結句の「鳴く」の重疊と相關聯して、節奏の諧ふを見る。まづは古調中の手ある歌だらう。

四句、顯本に君がみちよをとある。定家の密勘にも異論がない。六帖、伊勢集には君が齡をとある。君が御代をばは崇德院御本である由、顯註に出てゐる。景樹が折衷して、君が千代をばと改めたのは私である。三句、顯本になく千鳥とある。眞淵いふ「下にも鳴くとあるはその理をいふにて、古歌のいひなしなり。後世、同語の重複を嫌けむとて、さかしらにすむと改めしならむ」と。景樹もこれに從つた。伊勢集にはゐる千鳥とある。

○

わがよはひ君が八千代にとりそへてとゞめおきてば思出にせよ

釋 ○よはひ　齢。○とりそへて　添へて。「とり」は接頭語。○おきてば　置いたならばの意。春上「梅が香を袖に移してとゞめてば」とあるに同じい。○思出に　思ひ出し種に。

大意 自分のこの長命な齢を、貴君に進げようと思ふから、これからは貴君の八千代の齢のうへに、この自分の齢をも取り添へて、お手許に留めて置いたならば、それを幾千年も長生をされた後に、自分の事を思ひ出す種にして下され。

評 七八十の老人が、同年輩か、或は年下の友人の年賀を祝つて贈つたものだらう。されば、我が壽を讓るから思ひ出にせよなど打ち解け事もいはれるのである。まるで不可能な事を、出來るもの、やうに取り成して、空中に樓閣を現じたものである。契沖が「君より臣下に賀を賜へるに、同じくはこの久しき齢を、君がもとよりの八千代の上に取り添へて留め置きて、わが思ひ出にせむと詠めるか。せよとはみづから下知するなり」といひ、景樹が「とゞめおきてば」を、とゞめたればと既然に解したのは皆わるい。顯本に、結句おもひでにせむとあるは調はない。

仁和の御時、僧正遍昭に、七十の賀給ひける時の御歌

かくしつゝとにもかくにも長らへて君が八千代にあふ由もがな

の筆法である。詩想婉曲で、狂痴の意をさへも寓したのは、例のこの僧正の特色。二句、六帖、家集、顯本等に「神やきりけむ」とある。註家多くこれに據つたが、眞淵は本文を執した。成るべく治定した方が、狂痴の意を増して面白いから、「神の」がよい。

堀川のおほいまうち君の四十の賀、九條の家にてしける時によめる　　在原業平朝臣

櫻花ちりかひくもれおいらくの來むといふなる路まがふかに

【釋】○堀川のおほいまうち君云々　藤原基經公の邸は、京の二條堀河にあつたので、世に堀河の太政大臣と稱した。この公の四十歳の壽筵を、別第の九條の家にて行はれた時、業平の詠んだので、賀は貞觀十七年の春の事である。○ちりかひくもれ　散り交ひて曇れ。○おいらく　老ゆらくの轉語。老ゆらくは、おゆるの延言である。しかしこの語は、老と同じ意の名詞として用ひられる。

大意　老といふ奴めが、來ようといふ沙汰のある路の、紛れて知れぬかのやうに、これ櫻の花よ、澤山散り交つて、そこらが闇く曇るやうにして呉れい。

【評】さらば老奴も定めて踏み迷つて來得まいがの餘意がある。四十を老の山口とする事は、元來支那の典故に據つたことでもあるし、又老のくるといふのも、空想的な話說でもあるから、「來むといふなる」と人言に取り成した。折柄の賀宴に、櫻花の爛漫たるのを見て、常ならば一片も散るなと惜むべき花をも犧牲にして、今日ばかりは路も見えぬまで散れと命令した狂痴の想は、流石に業平である。かくて隱約の間に、この公の老を傷は

しがつて居る氣持が動いてゐる。「老らく」の擬人は珍しくもないが、この歌では大事な中樞となつてゐる。

貞辰(サダトキ)のみこのをばのよそぢの賀を、大堰(オホヰ)にてしける日よめる　　きのこれをか

龜のをの山のいはねをとめておつる瀧のしら玉千代の數かも

釋 ○貞辰のみこのをば　「貞辰親王」は清和天皇第七の皇子で、母は藤原基經の女佳珠子の女御である。故に「をば」はこの姉君で、これも清和の女御だつた賴子と斷ずる。「大堰」は山城國嵯峨の大堰の里である。其處に、この姨君の別莊でもあつたのだらう。○龜のをの山　龜の尾山、又龜山ともいふ。山城國葛野郡で、嵯峨の天龍寺の後の山。龜の甲の形した山なのでいふ。「尾」は借字で岑(ヲ)の義。字面に拘泥して龜の尾を引いた形と說くは穩かでない。前中書王の菟裘賦には「吾將下入二龜緒之巖隈一、歸二菟裘一而去來上」と作り、自註に「龜緒便龜山也、猶如二龜尾之讀一、故云」と見えた。○いはね　岩根。「根」はこゝでは輕い添辭。○とめて　尋ね求めて。○瀧のしら玉　瀧の水の岩に碎け散るのが玉の如く見えるのを、直に瀧の白玉と譬へた。「瀧」は垂水(タルミ)即ち瀑布ではなく、激湍である。○千代　直譯では千年の意だがこゝは長壽の意に轉義してゐる。○かも　かなと同じ歎辭とするは粗い。「か」は疑辭。「も」は歎辭だから、カマァと譯する。

大意　あのめでたい龜の名に呼ぶ龜の尾山の、岩根を傳はつて流れ落ちる瀧水の白玉の多い數は、貴女の御長壽の數であるかまあ。

評　龜鶴を長壽の物とする事は、もと支那にはじまつた。卽ち鶴は藐姑射の山に住んで仙人の伴侶とされ、龜の

經あがつたと稱する白龜、綠毛龜の類は、神物として太平の祥瑞と目された。さればこれに擬へて言ほぎかはす事も、既に久しい習慣であつた。今は大堰の里に開いた賀筵なので、さし詰め其處の萬年も生きるといふ龜山を思ひ寄せ、巖も亦動きなき常磐の物なので、その龜山のその岩根をと取り竝べて、下句に、「千代の數」といひ出す襯染とした。激湍の飛沫、玉を跳らすその數は、とても數へ盡されないから、その人の齡の數に擬へるには全く適切だ。無窮を轉義して、「千代」と換へて呼ぶことは例の辭樣である。さて龜の尾山の瀧は何處か。想ふに、大堰川の龜山に沿つた激湍だらう。

貞保のみこのきさいの宮の五十の賀奉りける御屛風に、櫻の花のちるしたに、人の花見るかたかけるをよめる

藤原興風

いたづらに過ぐる月日はおもほえで花見てくらす春ぞ少なき

釋　○貞保のみこ云々　「貞保親王」は淸和天皇第五の皇子。「きさいの宮」は貞保親王の母后で、二條后藤原高子である。「五十（イソヂ）の賀奉りける」は五十の御賀を執り行ひ申し上げたことをいふ。「御屛風」は御賀宴の時に立てるので、總べて賀に限らず事ある時は、主人公の背後に屛風を立てるのが、昔の習慣であつた。「櫻の花の散る下に人の花見る」はその屛風の繪樣で、「かた」は圖樣の義。○いたづらに　徒に。むだに。○おもほえで　思はれずしての約轉。

大意　何の事もなしに過ぎて行く月日は、何とも思はれないでうか〳〵暮らすが、このやうに面白い花を見て暮

らす春はサ、ひどく日數が少ないわ。

評 それ故つくづく惜しいの餘意がある。作者は屛風の畫中の人物の心になつて詠んだ。「花見て暮らす」と形容したので、いかにも長閑やかに娯しげな春の趣と見え、いとゞ過ぎ去るのが惜しい心地がされる。多ければ宜からうと思ふ春は却つて少ないと打ち侘びたのに、人事の實相が暴露されたやうな氣がする。句題和歌、新勅選集に、大江千里、

年月にまさるものなしとおもへばや春しも常にすくなかるらむ

これは「歳時春日少」といふ題の歌である。この種の想は當時既に類型が多い。誰れも思ひ寄る口頭語だが、尤も適當な敍述で先鞭をつけただけえらい。抑も屛風の歌は、その圖樣に本づいて詠むは例の事で、賀の屛風だからとて、あながち祝賀の意にのみ拘泥しない。さればとて場合が場合だから、陰氣な事や不祥な事を描いたり詠んだりする譯もない。

三句、朗詠集におほけれどとあるは、率易で味ひがない。

本康のみこの七十(ナヽソヂ)の賀のうしろの屛風に、詠みて書きける　きのつらゆき

春くればやどにまづさく梅のはな君が千年のかざしとぞ見る

釋 ○本康のみこ 「本康親王」は仁明天皇第五の皇子で、八條の宮と號する。一品式部卿となり、延喜元年薨ぜられた。「うしろの屛風」とは、賀筵に親王の御座の後に建てる屛風。「詠みて書きける」は、貫之は歌書兩道の

名手なので、仰を承けて歌も書も皆自分で遣つた。○かざし　髪挿（カミサシ）の義。今いふ簪（カンザシ）はこの轉じた語。遊宴の折節に、冠の巾子の根に、時の花や造花を挿すことが、奈良平安時代を通じての風俗であつた。○見る　思ふといふに近い。

大意　春が來ると、この庭にまづ一番に咲く梅の花を、君が御長壽の春のお髪挿とサ存じますわ。

評　詞書には見えないが、これも人の家に花の咲いた繪樣の屏風で、その畫中の人物になつて、親王の御壽を賀いだのだらう。「まづさく」が「千年のかざし」に對して、時間上の反映となつてゐる。花を髪挿すのは卽ち樂しいすさび業だから、折に合つた見立である。

素性法師

いにしへにありきあらずは知らねども千年のためし君に始めむ

釋　○ありきあらずは　ありきあらざりきはといふべきを、上のをめぐらして、下の過去のきを略いた。○ためし　迹形（アトカタ）。手本（テホン）である。普通には例の字を書くが、よくは當らない。

大意　千年も生きた人は、昔にあつたか無かつたかは知らぬけれども、假令今まではそんな人の無いにもせよ、千年生きるためしは、君から始めませうよ。

評　「知らねども」と一旦撥ねておいて、「君に始めむ」と一途に思ひ入つた處に、高い狂熱が見えて面白い。二句の疊語、一正一反聲調がよろしい。

これ及び次の歌は、題畫の歌ではない。單に祝壽の意を述べたものだ。上の詞書に、「よみて書きける」とある

から、貫之のと同じく、これも素性の書いたのだらう。延喜六年二月十六日、襲芳舍に召されて御屏風を書き、同九年十月二日、又召されて御前で屏風を書き、左中將源定方をして、酒及び祿を被けられた事が、物に見えるから、素性は貫之にも劣らぬ書道の名手と見えた。

初句、六帖にいにしへもとあるはわるい。

○

ふして思ひおきて數ふる萬代は神ぞしるらむわが君のため

釋 ○ふして思ひおきて數ふる　臥して萬代を思ひ、起きて萬代を數ふる意。○萬代　萬年。○神ぞしるらむ　神こそ知食して守り給はめの意。「しる」は只知るのではない。計らひ行ふをいふ。

大意 私が君の御爲に、寐ても起きても御年の數を、何卒萬年までもと指折り數へて願ひます事は、人の力にこそ及ばずとも、神がさこの心を御承知下されて、願の通りにお取り計らひなされる事だらうと思ふ。

評 初二句、起臥に萬代を思ひ數ふるといふべきを、切り離して對句を作つた。「臥して」「起きて」とあるに、平素不斷の意がある。景樹が「本來、わが君の爲ふして思ひ、おきて數ふると續くべきを、調に任せて「わが君の爲」を結句に置けるより、君の爲に神ぞしるらむの意を倒裝したる語勢となりて、「君の爲」の詞、全く神の方にのみ重く係りて、君の爲に起臥願ふの意は、却て疎くなれり。それも立ち離れたる心ならねば、さる方にかくも調べおほせるなり」と評したのは、尤もと思はれる。

三句、家集によろづ代をとある。

藤原三善が六十の賀によみける　在原滋春

鶴龜もちとせののちはしらなくにあかぬ心にまかせはてゝむ

この歌はある人「在原の時春が」ともいふ。

釋 ○藤原三善　この人の傳不明。○しらなくに　知らぬによつて。「なく」はぬの延言。

大意　昔から人の長生の祝言に例へていふ鶴も龜も、共に長生するものとは聞き及んでは居るが、それも千年も經つた曉は、どうあるやら知らぬによつて、そんな例など引く事は止めて、貴公が何時まで居ても飽き足らず思ふ私の心のまゝに、君の御壽命を任せてしまひませう。

評　それが一番いゝの餘意がある。三句「知らなくに」と撥ねて調べ下した具合、上の「千歳のためし君にはじめむ」と同型である。拾遺集に、

萬代もなほこそあかね君がためおもふ心のかぎりなければ

貫之集に、

百とせといはふを我は聞きながら思ふが爲はあかずぞありける

とあるは、同想ながらこれに比べると狂熱が缺けてゐる。この歌の優れる所以は全く玆にある。

左註に就いて契沖は、「この歌滋春、時春の異を傳へたるに、當時二人とも亡き人にて慥に記せる物もなければ、多分に就きて滋春と載すれども、異說を捨てぬ心にて、註せるにやあらむ」と考へた。

よしみねのつねなりが、四十の賀に、むすめにかはりてよ

める　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　そせい法師

萬代をまつにぞ君をいはひつる千年の蔭にすまむとおもへば

釋 ○よしみねのつねなり　良岑經世か。「世を也と誤れるならむ」と眞淵はいつた。三代實錄に「貞觀十七年五月十九日庚子、從四位下行丹波守良岑朝臣經世卒」とある。その經世の四十賀に、娘に代つて素性が詠んだのである。「よめる」は一本に據つた。原本によみ侍りけるとあるが、この集の書式に協はない。○まつにぞ　待つに松をかけた。○いはひつる　「いはひ」はもと齋の義だつたのを、この頃は既に祝賀の意に用ひた。「つる」は現在完了の助動辭で、鶴を寄せた。○蔭　松の蔭に、父のお庇蔭(カゲ)を寄せた。

大意　私は父君の萬年の御壽命を待ちますから、そのまつといふ名の松に寄せてサ、お祝ひ申しますわ、丁度千年もいきる松の蔭に鶴の住むやうに、私も父君の變らぬお蔭を蒙つて、共に長く居ませうと存じますればサ。

評　祝宴や興宴に、洲濱臺を作つて捧げるのは、この時代の習慣であつた。年賀だからこれはおめでたい造物を洲濱に据ゑたので、松の蔭に鶴の立つて居る型を、金銀か何かで作つたと見える。松を父に、自分を鶴に擬へて、さて松の樹齡の千年は勿論の事だから、この上の萬年を待つといはひ、その理由としては、松蔭に立つ鶴のやうに、その變らぬお蔭を常に蒙りたいからといふ。「千年」は變らぬ、又は常磐の意の轉義である。松と鶴とのいひかけは、小細工過ぎて卑しげだが、親子の情から見ると、さうもあらうかと思はれる。或は經世の娘はまだ年端のいかないので、小娘らしくと構へて詠んだのかも知れない。素性の他作に似ない。素性は良岑氏だから、近い親戚關係で、この代作を賴まれたらしい。

上句、六帖に萬代の松にぞ年をいのりつるとあつて、貫之の歌とした。眞淵は貫之の歌ざまにあらずといつた。なほ案ずると、經世の四十賀をひき下げて、その歿年近くに行はれたものと見ても、貫之はその頃やう〱十歳以下の童兒だから、こんな歌を詠む筈がない。

內侍のかみの、右大將藤原朝臣の四十(ヨソヂ)の賀しける時に、
四季の繪かけるうしろの屏風に、書きたりける歌

春

春日野にわか菜摘みつゝ萬代をいはふこゝろは神ぞしるらむ

釋 ○內侍のかみ云々　「內侍のかみ」は尙侍。こゝのは贈太政大臣藤原高藤の二女滿子をいふ。（拾遺集に三條內侍とある人なり）「右大將藤原朝臣」は、高藤の三男定國の事で、泉大將と稱し、尙侍の兄に當る。躬恒集に「延喜五年二月十日、宣旨によりて奉れる和泉大將四十賀の料屏風四帖、內よりはじめて內侍督殿にたまふ歌」と詞書があつて、次の「山高み」の歌「すみの江の」の歌が出てゐる。貫之集にも「延喜五年二月、いづみの大將四十賀屏風の歌、仰言にてこれを奉る」とあつて、次の「しらゆきの」の歌が出てゐる。四季の繪かける屏風は、躬恒集に屏風四帖とあるから、春夏秋冬の繪を一帖宛にかいて、それに人々の歌を書かせたので、專ら醍醐帝の思召で出來た屏風である。さてこゝの歌ども、普通本には作者がない。又春の部だけ端に春の字が題してない。眞淵の說に「此度の歌七首に、今は作者を記さぬにつきて、この上の歌素性なれば、次々も皆素性の歌なりと思へるは誤なり。六帖、家集等に、各作者見えたり。その上、藤原家隆卿自筆のこの部を見しに、各名あり。さてこの歌は素性なり」

とある依つて、この端書には「春」の字を補ひ、以下の歌には、作者の名を一々塡めた。○しるらむ　上の「ふして思ひ」の條參看。

大意　御賀の爲にかう春日野で、私が若いといふ名の若菜を摘み〳〵して、兄君の御壽命の長久をお祝ひ申す心願の程は、御先祖の春日の御神がサ、承知し御納受なさるだらう。

評　給樣は若菜摘の所と見える。そこで奈良時代からの若菜の名所、春日野を思ひ寄せ、その野の春日明神は藤原氏の祖神なので、それをも撮合して、せめても君が老の若えるやうにと、名におへる若菜を摘むこの心は、わが祖神が御承知だらうと、侍自身が畫中の人になつて、祝つた趣に取り成したのが趣向である。上に、

　ふしておもひ起きて數ふるよろづ代は神ぞしるらむわが君のため

と落想は同じい。いづれも素性のである。

四句、大和物語、新撰和歌、家集、六帖等にいのる心はとある。

躬恒

山たかみ雲ゐに見ゆるさくらばな心のゆきてをらぬ日ぞなき

釋　○雲ゐ　空をいふ。○心のゆきて　心の往くに、滿足の意を寄せた。○をらぬ　折らぬ。

大意　山が高くて、空に見える櫻の花を、自身はとても往かれぬが、一枝ほしいと思ふ心ばかりが、其處まで往つて、その櫻の枝を折らぬ日はサないわ。

評　畫の上に表れた山の頂などに、櫻を畫いたのだらう。心の往くの擬人から、「春每に心をしむる花の枝に」な

どのやうに、「心の往きて染まぬ日ぞなき」といふべき所を、「花」の緣語で「折らぬ」と轉義した。

六帖、躬恒集、家隆本によつて、躬恒の名を補ふ。

夏　友則

めづらしきこゑならなくに時鳥こゝらの年をあかずもあるかな

釋 ○こゝら　許多、澤山などの意。

大意 何時の年も同じ聲で鳴けば、何も珍しい聲では無いのに、あの時鳥は數多の年々を、さても〳〵聞き飽かない事であるよなあ。

評 幼く詠んだつもりだらうが、感哀が淺い。

六帖、友則集、家隆本によつて、友則の名を補ふ。

秋　躬恒

すみの江の松を秋風ふくからにこゑうちそふるおきつしら波

釋 ○すみの江　攝津國住吉郡。今の住吉神社のある所。古事記仁德天皇の條に「又定ム墨江之津ヲ」と見え、萬葉集には、住吉、墨吉、墨之江、須美乃延など書き、奈良時代までは、必ずすみのえとのみいつた。この集中に「住みよしとあまは告ぐとも云々」、又、和名抄に「攝津國住吉、須三與之郡」などあるので見ると、既に延喜前から、文字について唱へ謬つてきた事が知られる。古くは吉、愛通用して、皆エと訓ませてゐる。○ふくからに

秋下「ふくからに秋の草木の」の條參看。○うちそふる 「うち」は添詞。○おきつしら波 沖の白浪。「つ」は連辭。

大意 住の江の松を、秋風がうち吹くにつけて、どう／＼と聲を打ち添へる、沖の白浪である事よ。

評 住吉の地は甚い滄桑の變に遇つた。それは住吉社頭の松原は、その根を洗つて波の寄せるやうに、古歌古文には見えてゐるが、今は海岸を距る事、約二十餘町の西にある。蓋し木津川、大和川の土砂が堆積して、遂に陸地を作つたのである。さればその當時の實境を想像して、この歌の詩趣を辿らなければならぬ。和泉の灘より難波津をかけて、長汀極浦相參差し、住吉の濱を中心として、白砂青松相映じてゐた。海は卽ち茅渟の海、右に由良の險灘があり、淡路島を前に控へ、左に播攝諸州の山を望む。烟波はる／＼として一望窮りない。この時に當り、天風吹き落ちて颯と梢を拂ふと、一帶の長松はどう／＼として、大濤の湧くにも似た響にうち合はせて、寄せくる沖の白波が、鳴高に聲打ち添へる光景は、言語に絕した趣である。しかも「沖つ白波」の立つのは、卽ち松ふく秋風の所爲だから、風の趣が一首の上にも活躍し、翠松と白波との配合も鮮やかで目覺ましい。眞に有聲の畫、否畫境は旣に渾脫して、神品に入つたものだ。古來、餘情限り無き歌と稱せられ、眞淵は「所のさまに就きて面白きなり。かく其の所のさまを思ひ得て、心はあるがまゝに詠むぞ古歌なる」と評した。後世、この風調を慕ひて「聲打ち添ふる」の語を踏襲し、或はこの詩趣を模倣して詠んだのが夥しい中に、壬生忠見が、

秋風の關ふきこゆるたびごとに聲うち添ふる須磨の浦波

の作もあれど、最も勝れたものは大納言經信の、

沖つ風ふきにけらしな住よしの松のしづ枝をあらふしら波

で、躬恒に比べて、契沖は、及ばないといひ、眞淵は、大して劣らないといつてゐる。十訓抄には、

かの卿（經信）後に、俊頼朝臣（經信の子息）を呼びていはれけるは「古今に入れる躬恒が歌に、『住吉の松を秋風吹くからに聲うちそふるおきつしら波』。この歌、任大臣の大饗せむ日、わが所詠の沖津風の歌、中門の内に入りて、史生の饗に就きなむや」と。俊頼いはく、「この仰いかゞ。彼の御歌全く劣るべからず。然れども古今の歌たるによりて、限り有りて、先任大臣候はむに、御作は一の大納言にて、尊者として南階よりねり上りて、對座に居なむとこそ存じ候へ」といふ。「さてはさもありなむや、いかゞあるべき」とて感氣ありけり。又自讃していはく「躬恒が家集に歌多かる中にも、『松を秋風』の歌のたけ、品は、年丈けたる胡人の、錦の帽子したるが、尺八・琵琶を鳴らし、紫檀の脇息おさへて詩を案じ、嘯きて眺望したる姿なり。此の人に對ひてあひしらひつべきは、わが沖津風の歌にこそあれ」といはれけり。

と見えて、經信自身も、俊頼も、甲乙なきやうに思はれた。袋草子には、經信の語がやゝかはつて、

この歌の（躬恒のをさす）七間四面の寢殿の南面に、御簾所々破れたる中に、何宮など申して御座しまさむに參じて、中門の廊より入りて、寢殿の階の間に參りて給二言談一事はわが歌なり。

とある。これは兩者の間におのづから軒輊ある趣で、及ばぬ事を自覺されてゐるやうだ。又景樹が「住吉は岸打つ波の高き事世に聞えたれば、沖つ浪の聲など待つべきにあらず。實景にはあはざれど、さる屏風の繪樣にのみ從ひて詠めるがめでたきなり。經信のこそ、歌は劣れど實景なれ」といつたのは、妄も亦甚しい。なぜ住吉には、岸の波より外は詠まぬやうに窮屈に考へたのか。風波のないだ日こそ、岸ばかりにさゞ波が、折れ返つても居ようが、松を秋風の吹き拂ふ日は、沖が白波だつて騒ぐではないか。試みに岸の白波とおいて見る

がよい。その詩境が殊の外に狹まり、その聲甚だけち臭く、とても一誦爽颯の氣があたりを拂つて、衣襟が汐氣に薰る氣分が出ない。但第二句の「松を」は上に、「秋風」は下について獨立しないのが、調のうへに於いて聊か口惜しい。これは白璧の微瑕である。

六帖には素性とある。素性集にも出てゐる。思ふにこの集の最初の流布本には、既にこの前後の名は皆脫けてゐたのだらう。それで上の歌の素性の署名を及ぼして皆素性の作とし、夙く六帖にも、何にも采つたと思はれる。その故は、拾遺集に、躬恒のとしてこれが再出してゐる。既にいつた通り、この集の歌が、後の勅撰集に再出したのは、必ず本文に異同あるか、詞書又は作者に相違あるかの場合に限つた事である。歌も素性の風體ではない。

忠岑

千鳥なく佐保の川霧立ちぬらし山の木の葉もいろまさり行く

【釋】○千鳥なく　千鳥の鳴くを、後世は冬にのみ詠むが、古くは秋、又は春にも詠んだ。○佐保　秋下「佐保山の柞（ハヽソ）の紅葉」の條に既出。○山の　佐保山の。

大意　もう千鳥の啼く佐保川の狹霧が、きつと立つのらしい、それと知られて、この佐保山の木の葉も、段々色が增つて行くわ。

【評】流れ川の向ふに紅葉の山を畫いた圖樣だらう。乃ち川を佐保川、山を奈良山に見立てゝよんだ。「千鳥鳴く」は、佐保川の形容として冠せたので、あながち今鳴いてゐるのではない。霧もまた繪のうへにない想像で、題畫の詠としては器用な趣向である。紅葉の露時雨や霧などに色付くは常套である。

拾遺集、六帖、忠岑集、家隆本に從つて、忠岑の名を補つた。さて拾遺集にも、家集にも、結句色かはり行くとある。眞淵いふ「賀の歌なれば色かはるといふ詞を忌みて、後に『色まさる』と換へたるにもあるべし」と。けれどそれは本末顚倒で、この集のは初から、「まさる」とあつたからこそ、拾遺集には今一說の傳に據つて、再び采錄したのである。下句、六帖にま木の梢も色付きにけりとあるのは深山の景色で、玆にはかなはない。

〇

秋くれど色もかはらぬときは山よそのもみぢを風ぞかしける

釋 〇ときは山　夏部、秋部下に出てゐる。〇かしける　貸した。

大意 秋が來ても、木の葉の色も變らぬ常磐山では、時節柄紅葉の無いのもいかゞといふやうに、餘所の紅葉を風がさ持つて來て、この常磐山へ貸したわい。

評 山の名に縋つての趣向は、秋下にも、

もみぢせぬ常磐の山はふく風の音にや秋をきゝわたるらむ

などあつて、平凡ながら紅葉を風が貸すの擬人は尖奇である。いかにも題畫らしい作である。木立の茂つた靑山のあたりに、紅葉の打ち散つた繪樣だらう。

この歌、家隆本にも署名ないといふ、前のと同じく忠岑の作か。

冬　貫之

しらゆきのふりしく時はみよしの野の山下風にはなぞ散りける

釋 ○山下風　萬葉集には、山のあらしと訓んでる。けれどこれは、ヤマシタカゼと讀むがよい。もと萬葉の訓み違へから起つて、一つの詞となつたのである。

大意　この三吉野の里では、白い雪が頻に降る時には、山下風で、花がサ意外に散つたわい。

評 雪中の山の景色を描いた圖樣だらう。乃ち吉野に取り成してよんだ。景樹、廣蔭等が「芳野は花の名所なれば、雪を花と見たてしなり」といつたが、奈良時代からこの集の頃にかけては、吉野には雨雪、或は山水の勝をこそ詠んだが、櫻の花を賞する事は少ない。これは冬部に數多見えた趣向と同じ譬喩である事は、

山高みふりくる雪をうめの花散りかも來ると思ひつるかも（萬葉卷十）

とある先軌をたづねて知るがよい。調子のよい外に、想に見るべき物が無い。

拾遺集、家隆本、貫之集に從つて、貫之の名を補つた。三句、六帖にあし引のとある。

春宮のうまれ給へりける時に、參りてよめる

典侍藤原よるかの朝臣

峰たかき春日の山にいづる日はくもる時なく照らすべらなり

釋 ○春宮のうまれ給へりける時に　「春宮」は醍醐天皇第二の皇子で、保明親王と申し、御母は藤原基經の女、中宮穩子である。延喜三年降誕、同四年二月立太子。延長元年三月御病の爲、御齡二十一にて薨ぜられた。文彦と謚し奉る。○春日の山　大和國奈良にある。其處に藤原氏の祖神を祀つた事は、上の「春日野に若菜摘みつ

つ」の係にる

大意　頂の高い春日の山にさし出る日は、所柄曇る時もなく、世の中を照らすやうな樣子であるわ、といふが表面の意で、實は春日の神の御末の藤原氏の中でも、この上もない基經公の姫君の御腹に出來ました若宮樣だから、御行末天子とお成り遊ばされて、何時までも御仁德の曇る時もなく、天下に御照臨遊ばしさうな樣子で御座りますわい、といふが裏面の意。

評　昔は后妃のお產を宮中ですることはない。この中宮もお里の藤原家で、皇子をお娩みなされたのだ。作者はそのお祝に參邸して、この歌を詠んだ。お家柄、春日の神を取り出して、閥閲の高さを「峰高き」に、藤原氏出の皇子を「春日の山にいづる日」に擬へて、すべて譬喩を以て御行末を慶賀し奉つたので、巧である事は勿論、その語調の逞しく力ある事は巾幗の作に似ない。やがてこの皇子の東宮となつたのも、この歌の功力が關つたかも知れない。作者の參邸したのは、典侍として職掌上、皇子御降誕の御儀式に參與したものらしい。

古今和歌集巻第八

離別歌

題しらず　　　　在原行平朝臣

立ち別れいなばの山の峰におふるまつとし聞かば今かへりこむ

〔釋〕○離別歌　ワカレノウタと讀む。○いなばの山　和名抄に、「因幡國法美郡稻羽」とある所の山で、今も松が多い。稻葉山とも書き、又、宇倍山といふ。山下に稻羽川流れて、國府村がある。いにしへ國府を置かれた土地である。文德實錄に「齊衡二年正月、從四位下在原朝臣行平爲因幡守」とあれば、因幡國の稻葉山であることは明らかである。或說に、美濃國の稻葉山（今の岐阜）かとあるは、據のない臆說である。○立ち別れいなば　立ち別れて去ぬるの意に、稻羽をいひかけたので、將然の意で去なばとまでかけたのではない。○まつとし　松に待つをかけた。「し」は强辭。○今　口語のぢきにの意。

〔大意〕自分は貴方達に立ち別れて、因幡の國へ往きますが、その國の稻羽山に生えて居る松の名の如くに、貴方達が、私を待つとサ聞くならば、すぐに歸つて來ませう。

〔評〕作者が因幡國に赴任の折の留別の作と思はれる。これが死に別れといふでもない、「待つとし聞かば」すぐに

逢ひに立ち歸つてこようからと、旅行く人が却つて見送る人を慰めた、別離の際の情致掬すべきものがある。況や因幡國は、京より下るに六日、上るに十一日を費すべき行程であつた。それを「今歸り來む」と譯もないやうにいひなした「今」の一語の常理を沒した狂想、詩味湧然として生ずる心ちがする。「去ぬ」と「歸る」とを鬪はせ、又いひかけを一首のうちに再用したなどは、この作者の慣手段である。すべて親句の續いたのは面白くないものなのを、四五句の續きが疎句に仕立てられてあるから見直されてしまふ。但萬葉集卷十三、

門に居るをとめは内に至るともいたくし戀ひば今歸り來む

はこの藍本らしい。しかも修辭の點に於いて、これは一段の巧技を弄してゐる。更にいふ、この「歸りこむ」及びこれに類する辭様は、多くの場合、實際にその意志があるのではない。出來ることならさうしたいといふ希望を、決定の將然にいひなしたのである。國司は私に任地を離れることは法の禁ずる處である。假令故人が待つと聞いたとて、歸れる筈でもない。況や「今」歸るは尙不可能である。そんな理窟は全くぬきにして、情の動くに任せたのが面白い。

又眞淵が、「いなばの山は、萬葉集に、陸奥の小田郷より金を出しゝを、『陸奥山に黃金花咲く』と詠める如く廣くいひしこそよけれ、法美郡稻羽の鄉の山とせむは、狹くて古人の意に非ず」と評したのはいかゞ。「峰に生ふる松」といふこまかな取り成しは、因幡の國の山といふが如き、漠然たる廣義の叙法を許さない。それは不調和の滑稽に陷るからである。

よみ人しらず

すがるなく秋のはぎはら朝たちて旅ゆく人をいつとか待たむ

釋 ○すがる　和名本草に、「蠮螉一名土蜂、一名蜾蠃、一名細腰、和名佐曾利(サソリ)」とあるも同じ物で、世に似我(ジガ)蜂といふ土蜂である。小野博は、似我蜂に就いて一說を立てゝ曰はく「全身深黑色に、腰甚細く絲の如き小蜂、夏日人家に飛來り、筆管中などに入りて巣を造り、子を養ふが爲に、蛛を螫し傷めて其の中に入れて、泥にて塗り塞ぐ。管内にて鳴く聲、似我々々と云ふに似たり。又青蜂といふ一種の小蜂も、似我の聲あり。いづれならむ」といつてゐる。舊說、及び緘注、密勘等に、鹿の事としたのは、下に萩原とあるによつた臆說である。

○はぎはら　萩の多く咲いた野。

大意　このやうに、蜾蠃の鳴く秋の萩原を、朝立つて旅へ行く貴方を、さてまあそのお歸を、何時と思つてか待ちませうぞ、あゝ何時とも知れぬ待ち遠い事でありませう。

評　送る人送られる人、そもどうした關係か知れないが、祖帳既に別を叙して、なほ袂を分つに忍びず、送つて郊外蜾蠃鳴く萩原に到る。その纏綿の情致が思ひやられる。「朝」の一語、啻にその出立の時刻を點出しただけに止まらず、秋氣清爽として露白く花紅なる萩原に朝影を受けて、さうした蟲どものすだく面白い景氣が想像される。蓋しかう極力その背景を詳叙したことは、別離の狀を強く印象させて、再會期遙なる歎嗟の意を佑けるものである。一旦別れたら「何時とか待たむ」であり、さりとてこの場に臨んで別れぬ譯には往かず、痛し痒しで途方にくれた光景で、情景兼ね到つた妙作。

眞淵が、古事記に、鳴をナスと訓んだのに據つて、初句の鳴を借字として、すがるなすと改めていふ、「蜾蠃の子は一度巣を立ちては又歸り來らぬ由、その如く別れ行きては歸の知られぬ人なれば、何時とか待たむと歎

きたるなり」と解いたのは牽强である。況や螺贏の子云々も、本據のしかとしない臆說である。叉宣長が初句を「萩原」、序詞と見たのは粗である。

下句、六帖に旅行く人のをしまるゝかなとあるのは面白くない。

○

かぎりなき雲居のよそに別るともひとを心におくらさむやは

釋　○雲居　例の空のこと。○ひとを　對手の人をさす。

大意　限もなく遠いあちらの國に、今から別れて私は行くとも、不斷貴方の事を心に置いて、跡になどのこして置きませうか、いや何所までも、心には貴方を連れ立つて行きますわ。

評　束の間も忘るまじき交情を婉曲に叙べた。その構想の尖巧なのは、格調のあまり高くない所以であらう。「雲居のよそ」は遠方の轉義である。大和物語に遍昭の詠としたのは、全然信ずべからざる小說であるが、口吻はほんに相似て、その下作に儔する。

結句、舊本にをくらさむやはとあるに據つて、眞淵が「心に隈なく守りて小暗(ヲグラ)さむやはの意なり」と解いたのは、牽强も甚しい。を文字の假名違であることは勿論である。顯注に引いた大和物語にをくらざらめやとあるも、當時の謬に從つた假名遣で聞え難い。叉四句、大和物語一本に人に心をとある。これもいかゞ。類從本大和物語は、四五句とも本行のと同じい。

小野のちふるが、みちのくの介にまかりける時に、母の

よめる

たらちねの親のまもりと相添ふる心ばかりはせきなとゞめそ

釋 ○小野のちふる云々　小野千古が陸奥介に任ぜられて赴任した時に、その母の詠んだ歌といふこと。「介」は國司の次官。○たらちねの　親にかゝる枕詞。奈良の頃までは、母といふ語の枕詞としてのみ用ひられ、たらちしの、たらしねのとも轉じていつた。足の義で、母の慈愛を讃した詞だらう。○親のまもりと　「の」は口語のがの意。「と」はとしての意。○相添ふる　「相」は互になどいふ意もあるが、こゝは接頭語で、只下の動詞の意を強めるに止まること、なほ相願ふ、相變るの相と同じい。○せきなとゞめそ　堰き止むるなの意。關をかけた。

大意　附き添つて一緒に行くことは叶はずとも、この母が子の爲の守にと思つて添へて遣るこの心だけは、往來を止める關も、堰き止めて下さるな。

評　東路は京から陸奥までの間に、逢坂の關を始として、不破、鈴鹿、清見、足柄、白川、勿來等の諸關がある。行人を誰何して、通書文など無い人は押し止めて通さなかつた。されば、この親心ばかりは止めて下さるなと愁訴した。心だけ分けて子に添へて遣れるものでもないが、そんな分別は忘れてしまつた處に、あり難い尊い眞摯な親の熱愛と詩情とが動く。

さだときのみこの家にて、藤原のきよふが、近江の介にまかりける時に、馬のはなむけしける夜よめる

きのとしさだ

けふ別れあすはあふみと思へども夜やふけぬらむ袖の露けき

釋　○さだときのみこ云々　貞辰親王の家で、藤原清生(キヨフ)が、近江介となつて赴任しようとする、その立振舞した夜に詠んだ歌との意。○「馬のはなむけ」は、いにしへ旅行く人が乘つた馬の鼻面を、その行くべき方へ向けて祝ひ言して立たせ遣るが本で、轉じては送別の宴を開くをいふとも、驛路(ウマヤヂ)の端設(ハナマケ)の略とも、旅立つ人の馬の鼻へ向けて物を贈つたのから起るともいふ。こゝは送別の宴である。今では略して、はなむけとばかりいつて餞別の事とする。○あすはあふみ　明日は逢ふ身といふに、近江を寄せた。

大意　貴方の赴任なされる近江の國は京隣の程近い處ゆゑ、今日は別れても明日はすぐに逢はれるこの身ぞとは思ふが、さすがに別といへば名殘が惜まれて、猶豫するうちにはや夜が更けたのであらうか、これこの通り袖が露ほいことよ。

評　いや〳〵これは露ではなくて、別の悲しさに溢れた涙なるはの餘意がある。そんな交通不便の時代ですら、僅々一日のうちに往來される隣國なので、別離とはいへ涙を落して騷ぐ程の事でもないのを、「袖の露けき」とまで誇張してゐる。四句は、これが爲に假設した前提だから、實に夜の更けたのでもあるまいが、おのづから別離の名殘惜しさに時の移るを知らなかつた趣が聯想されて、流石に無駄でない。二句を、契沖、眞淵、宣長等の、逢ふに近江國をかけたものとして、明日は逢ふ程に近い近江國と思へどもの意に解したのは、理のたじろぐことを忘れたものである。「逢ふ身」といへばこそ、「袖の露けき」に打ち合つても聞えるのである。國の名は物名として詠み込んだまでゝある。

こしへまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありとは聞けど春霞たちわかれなば戀しかるべし

釋 ○かへる山　和名抄に、越前敦賀郡に鹿蒜郷がある。其處の山を加比留山といひ、又轉じてはかへる山ともいつたのである。眞淵が「歌の寄せにて、さてかへる山に歸るを寄せ、かへる山と轉じいへるなり」と解いたのは本末顚倒で、名詞を私にいひ改めて聞える筈がない。○春霞　「たち」にかゝる序詞。

大意　北國には、追付け無事でお歸りなされる、かへる山といふ賴もしい名の山があるとは聞いたが、それでもこの節の春の霞の立つやうに、立ち別れて往かれたならば、定めて戀しうありさうなわい。

評　未だ出立せぬ以前に、別後の離情を豫想して、その人の許に詠んで贈つたのである。「春霞」は山の縁で時節の景物なのを、「立ち別れ」の序詞に用ひた。故に契沖が「春霞と共に立ち別れて」といひ、宣長が「あの霞の立ちてある方へ立ち別れて」といふ、いづれも誤つてゐる。想ふに、その人は外官などで赴任したものか。さては一定の任期を終へると、必ず歸つてくる筈なので、其處の山の名に寄せて、「歸ることあり」といつたのだらう。「聞けど」の一語、足いまだ他鄕の土を踏まぬ都人士の口吻。

人のうまのはなむけにてよめる　　きのつらゆき

をしむから戀しきものを白雲のたちなむのちは何ごこちせむ

釋 ○うまのはなむけにてよめる　餞の席上にて詠めるとの意。○をしむから　「から」はよりの意。○白雲の

「たち」にかゝる序詞。

大意　別を惜むよりはや未だ出立せぬ貴方が、かうも戀しいものを、それをまあ空の果に見える白雲のやうに、立つて遠くへ往かれようその後は、どのやうな心持がしませうぞ。

評　「をしむ」は眼前惜別の情で、「戀しき」は別後の情である　それを混一にして、別れ切らぬうちから戀しいといふ沒理路の言は、鍾情の極で、「たちなむ後は何ごこち」の下句の力強い前提を成してゐる。實際離苦は豫想してさへも耐へられない。況や實現の曉は何心地と、不定の疑問を用ひたのに、測るべからざる多大の愁恨を寄せた。

三四の句、六帖に春霞たちわかれなばとあるは、前の紀利貞の歌を謬り混じたるものと思はれる。家集は、四句のみ六帖と同じい。

ともだちの、人の國へまかりけるによめる

在原しげはる

別れては程をへだつと思へばやかつ見ながらにかねて戀しき

釋　○人の國　他國。狹義にはわが住處をもとにして餘所の國をいひ、廣義にはわが國をもとにして外國をいふ。伊勢物語に「この男、人の國より夜毎に來つゝ、笛をいと面白く吹きて」とあるは狹義。「人のみかど」などいふは廣義である。さてこの端詞は外國への旅行のやうでもない。内地の旅行ならばこの上下の歌のやうに、越の國、あづまの國など書くべき筈だが、想ふに出先の國が不明な爲に、止むを得ず「人の國」と書いたのだらう。

○程　道程。時間の意に用ひるは俗意である。

大意　一旦別れては、久しく逢はれぬ遠い道のりを隔てる事と思へばかして、一方にはお顔を見て居ながら、一方には案じ遣きがせられて、今からもう戀しく思はれますわ。

評　「かねて戀しき」の上に、かつの副詞が一つ略されてある。見て居ながら戀しいといふ矛盾を捉へた尖新な着想だが、あまり說明的で、叙法がくだくだしい。乃父業平朝臣に詠ませたなら、かうはあるまい。

あづまの方へまかれりける人に、よみてつかはしける　　いかごのあつゆき

おもへども身をし分けねば目に見えぬ心を君にたぐへてぞやる

釋　○あづま　日本武尊の東國征伐の時、御妻橘姫が上總の海に沈まれたのを歎いて、碓氷の坂で東を顧みて、吾妻者也(アヅマハヤ)と仰せられたので、坂東の國々をあづまといひ、後々は、逢坂の關から東の國をも引くいひもした。さてその行手の道をあづま路といつた。

大意　何程思つても、身を二つに分けられぬによつて、お供は協はぬかはりに、目には見えない私の心を貴君に添はせてサ、はるばる遣りますわい。

評　公務などに支へられて、一緒に出立されないので、さりとて「身をし分けねば」と、わが苦心の尋常でない趣をいひ送つたのである。三句は何たる冗語と思はれたが、詞書のやうを見ると、同伴はさておき、見送りにさへ行かないさまだから、或はそれらの怠慢を模稜すべく、目に見えぬ心を引き出したるものか。すると輕く看

過されない大事な句になる。上の「人を心におくらさむやは」と、その意が表裏である。韓偓の詩に、
身情長在暗相隨、生魄隨君君豈知。
に比すると、巧拙天壤の差がある。又伊勢物語の業平の詠に、
おもへども身をしわけねば目がれせぬ雪の積るぞわが心なる
は、二三の句が全く符合してゐる。けれど主想が差つてゐるうへに、彼は例の詞足らずであるが、これは隈なくいひ徹つてゐる。

あふ坂にて、人をわかれける時によめる　なにはのよろづを

あふさかの關しまさしき物ならばあかず別るゝ君をとゞめよ

釋　○あふ坂にて云々「あふ坂」は相坂、逢坂、合坂と書く。山城近江の國境の山で、近江國滋賀郡に屬してゐる。關を置かれた事に就いては、日本記略、延曆十四年八月己卯に「廢近江國相坂剗云々」文德實錄に「天安元年四月庚寅、始置近江相坂大石龍華等三處之關云々。相坂是古昔之舊關也云々」などある。「人を別れ」は眞淵いふ「この集に、人の旅行に別るゝには、人をといひ、わが行くには、人にといへり」と。然し萬葉集には、その差別がない。廣蔭說に「人を別るといふは正格なり。にの音は、似る、煮る、膠など、渾べて密着の義を持てるなれば、人に逢ふとこそいへ、人に別るとはいはれぬ言なり」と。音義からは尤もと思はれるが、言語は生命を有する活物であるから、あながちに泥むべきではない。

大意　關は人を止める所であるが、この逢坂の關がサ、果して正しい物ならば、殘り多いのに氣強く別れて行くこのお方をせき止めてくれよ。

評　わが引き止めたく思ふ人が、關守の誰何をも蒙らず、見すく越え行くのが恨めしいので、汝逢坂の關よ、この遊子をとゞめて、關の關たる實を示せと誂へたその構想はやゝ面白い。當時の逢坂は關守なしの開け放しであつた。契沖が「あふ坂の名には心を着くべからず」といつたのはよい。眞淵、宣長等が、逢ふの意義を余ねたやうに解いたのは拘泥の見で、早く詩味の一半を沒了するものである。

題しらず　　よみ人しらず

唐ごろもたつ日は聞かじ朝露のおきてし行けばけぬべきものを

この歌は、ある人つかさを給はりて、新しき妻につき、年へて住みける人をすてゝ、たゞ「明日なむ立つ」とばかりいへりける時に、ともかうもいはで、詠みてつかはしけり。

釋　○唐ごろも　唐衣。唐は韓又は支那の意に用ひ、又美稱として用ひる。こゝは美稱と見てよい。唐衣裁つといふより「立つ」にいひかけた枕詞である。○朝露のおきてし　「朝露の」は序詞で、「の」はの如くの意。露の置くに、人を打ち置く意をかけた。○行けば　木下幸文いふ「行かばなりけむを、もと行はと書きたるより行けばと訓み誤れるなるべし」と。本文のまゝにても聞えないこともないが、行かばは更に妥當である。依つて、幸文の考に從ふ。

大意　御出立の日をば何時といふことは、私はもう聞きはすまいと存じます。なぜなれば、私を捨てゝ朝露の

置くやうに跡に置いてお出なさらば、私の身はその朝露の消えるやうに、消えてしまひさうに存ぜられますものを。

評 それをもなほ見捨てゝ行くのは、餘り無情な仕打だと自覺して、若し思ひ直りもするかと、一縷の望を萬一に繋いだ可憐の情致は、同情に堪へない。棄てゝ往つたら生きては居ませんといふ勝氣な氣性ではなくて、生きて居られませんといふ弱々しいはかなげな氣性なのである。それだけ餘計に同情が惹かれる。夕露といはず、朝露といつたは、朝立つことが旅行の常慣習だからである。この三四の續きは、貫之の、

　長き夜を思ひあかして朝露のおきてしくれば袖ぞひぢぬる

と同巧である。又死ぬべきの意を露の縁に寄せて、「消ぬべき」と轉義した。枕詞と序詞とで、上下に排對の辭樣を取つた。

左註は、大やうこの歌の事情を悉したやうであるが、上來の例に據ると、これも後人の所爲だらう。けれども眞淵の「誰といふ男、誰といふ女、何の司、何の書にありといふべき事なるを、さはなくて、かく浮きたる事のみ書くは、用なき事なり」と難じたのは偏してゐる。その實は確かでない事でも、世間一般にいひはやして捨て難いものもあるではないか。

　ひたちへまかりける時、藤原のきみとしに詠みてつかはしける　　寵

朝なけに見べききみとし憑まねば思ひたちぬる草まくらなり

釋 ○藤原のきみとし 公利とも書く、本朝文粹、三善清行が異見封事中に、備中介になつた事の見えた人である。

○朝なけに 「朝な」は朝にの轉語。「け」は來經(キヘ)の約語だから、「けに」は常にの意。連ねて毎日の意と解する。○見べき 見るべきの意。○思ひたち 思ひ斷ちに、思ひ立ちをかけた。○草まくら 菰、菅の類は勿論、何にまれすべて草で造つた枕をいふ。旅にかゝる枕詞に用ひる。古の旅行には、驛舍の設がなかつたので、草を引き結んで枕とした故、草枕する旅といふ意の續きである。雅澄の説には、草枕把(タバ)ぬの意を旅にかけたともいふ。こゝは草枕を直に旅の意に轉用した。なほ足引のは山、玉鉾のは道の枕詞なのを、後には直に、足引を山、玉鉾を道の意に用ひた例に同じい。

大意 とてもいつも逢はれさうな貴方樣とはサ憑まれぬ故、あきらめて思ひ立ちました、今度の旅で御座りますわ。

評 よもやに惹かされて人の無情を怨みつゝある人、失望の極、世間の消息を絶つた住所を求めようと出で立つた。それでもなほ去るに臨んで、戀々の情躊躇の態のない譯にはいかない。「思ひたちぬる草枕」、眞に斷腸の語である。結末殊に力量が見える。さて「きみとし」に人の名の公利、「おもひたちぬる」にさして行く國の名の常陸、「草まくら」に我が名の内藏(クラ)を詠み入れた。抑もこの作者の名は、籠(ロウ)アナ、寵(チョウ)メグム ウツクシム又、襲(シフ)カサヌなど、墨本まち〳〵である。清輔奥儀抄にウツクと訓んであるのは、うつくしむの略で、寵に從つたものと見える。經典釋文、籠字を寵とも書く。宇冠穴冠通用するは隸書の常である。齋藤彦麿の説に「この女の夫か兄か、内藏寮(クラレウ)の頭助允などの官の時に、内裏へ參りたる女にて、呼名を内藏(クラ)といひしが、草書にて書きたる二字を一字と見誤りて、上の二字の如くには、寫しひがめしならむ」とある。極めて適解と思はれるから、これに據つて結句に、我が名の内藏(クラ)を詠み入れたものと定める 煩はしいほどに名詞を斷ち入れたが、更に斧鑿の痕の

ないのは、巧手と稱へてよい。

紀のむねさだが、あづまへまかりける時に、人の家にやどりて、あかつき出で立つとてまかりまうししければ、女の詠みて出せりける　よみ人しらず

えぞしらぬ今こゝろみよ命あらばわれや忘るゝ人やとはぬと

釋 ○紀のむねさだが云々　「むねさだ」、如何なる字を塡てゝよいか明らかでない。傳未詳。「まかりまうし」は罷申と書く。暇乞である。さて人の家から旅に出立するのは、方違への爲に宿つたものと思はれる。中昔の頃は、天一神といふ神の天を周りあるくが、其の運行の方に向つて行くと凶事があるといふので、必ず行くべきことのある折には、一先づ他所に宿つて、方を違へてから行く習慣があつた。こゝは素より知合の女の許に宿つたのである。○えぞしらぬ　知り得ぬの意。○今こゝろみよ　「今」は口語の追つ付けに當る。「こゝろみよ」は試して見よの意。○命あらば　我が命のあらば。○人や　「人」は、こゝでは女から男をさしていつたのである。

大意　何方が頼もしいか頼もしく無いかは、ソレヤ今はわかりませぬ、私は貴方にお別れ申してからが、生きて居る空はないが、萬一にも命あつて生きて居るなら、長い間に私が忘れるか、貴方が音信れても下さらぬか、二つ一つのところを追付け試して御覽なさいよ。

評　雲山萬里を隔てゝ、長い年月を重ねたら、移り易い女心は甚だ覺束ないものだらうなど、男のいつたのを承

けて、論より證據「今こゝろみよ」の一冷語を下して、さう仰しやる貴方自身こそあぶないものだの意を寓してゐる。日頃疎々しい振舞などした彼れ、慙死せずに居られようかい。「命あらば」は、我が思ひに堪へかねて焦れ死ぬべきことを豫定して、男の薄情な反映とした。含蓄あり曲折あつて、面白い歌である。但氣格はさう高くない。

二句、六帖に「今こゝろみむ」とある。これは我が試みむといふ意である。景樹は「本文の如く試みよと人に下知する意ならむには、命あらばも人に係るべし。何故に人の命を覺束なむにか理り立たず。旅の門出にもゆゝしき語なるをや」といつて、六帖に從つた。けれども上文のやうに解けば、本行のまゝで仔細はなからう。

あひ知りて侍りける人の、あづまの方へまかりけるをおくるとて　　ふかやぶ

雲居にもかよふ心のおくれねばわかると人に見ゆばかりなり

釋 ○あひ知りて　多く男女の語らひをした中にいふ。上の二首も男女間の別離だから、これもその儔だらう。
○人に　對手を指す。狹義に使つてある。

大意 雲のある程遠い所へ、貴方が往かれても、私の心は何時も貴方の居る方へ通つて、跡に後れて居ねば、詰りこの身だけが、今別れて跡に殘ると、貴方に見えるばかりですよ。

評 上の「かぎりなき雲ゐのよそに別るとも云々」と表裏してゐる。心と身とを二つに分けて、別々に取り扱つたことは詩的である。「私の心はどんな遠方でも貴方について往きます」。遠い〳〵東の旅に赴く人に取つて、こ

んなあり難い餞はなからう。

二句、六帖に深き心のとある。

友のあづまへまかりける時によめる

よしみねのひでをか

白雲のこなたかなたに立ち別れこゝろをぬさとくだく旅かな

釋 ○白雲の 白雲の如くの意。「こなたかなたに」の句を隔てゝ、三句の「立ち別れ」の「立ち」へかゝる序詞である。下に「秋霧のともに立ち出でて別れなば」とあるも、「秋霧の」は立ちにのみかゝつて、「ともに」といふ詞にはかゝらぬのと同じである。○ぬさとくだく ぬさの如く碎くの意。「ぬさ」は神に捧げる布帛であるが、こゝは旅行く時、道の神に手向の料として幣袋に入れた五色絹の切幣で、細かに切り碎いた物だから、幣の如く碎くといつた。

大意 貴方は遠い東へ、私はこの都にとあちこちに、恰も大空の白雲の立つといふやうに、立ち別れて、道の神に手向けるこの幣のやうに、心を千々に碎いて悲しまれる、貴方のお旅立でありますことよ。

評 行く人は、峠の社頭に幣を捧げて行旅の平安を祈り、送る人は、油然として白雲の生ずる天の一方を望んで、袂を別つに忍びない。眼前の光景に詩材は多々あらうが、これぞ殊にこの白雲と幣とを借り來つて、斷腸の情を叙べた所以であらう。同一の譬喩法を疊用したが、煩冗の感を與へない。

みちのくにへまかりける人によみてつかはしける

つらゆき

白雲の八重にかさなるをちにても思はむ人にこゝろへだつな

釋 ○みちのくに 「みちのく」は陸(ミチ)の奥(オク)の略だから、國の字を添へると、みちのくの國(クニ)といはずばなるまい。上の「常陸へまかりける」の例によれば、陸奥(ミチノク)へであらう。さてはに文字は冗字。○八重に 「八」は多量多数の意を表する。七重に次ぐ八重の意ではない。○をち 口語のあち、あつちなどの意。萬葉集に、彼此をヲチコチと訓んである。

大意 今お出になる白雲の幾重にも重なつた彼地でも、貴方を思ふ程の人には、必ず心をお隔てなさるな、假令あの雲は隔てゝあらうとも。

評 その「思はむ人」といふは外ならぬ私の事サと、落着させるいひなし、巧である。かうよそ〳〵しく自身を取り扱つた點に、婉曲の味が生ずる。上句、限りなく遠い趣が見えた。雲の縁で「八重にかさなる」から「隔つな」ときたのは例の手づまで、親貼過ぎるが、かうした叙法は當時の流行である。

人を別れける時によめる

わかれてふことは色にもあらなくに心にしみて侘(ワビ)しかるらむ

釋 ○人を別れ 「を」の辭の說は上に既出。○しみて 染みてと同語。

大意　別といふことは、色でもありもせぬに、何でこのやうに、心に沁み〴〵となつて、仕方も無くつらいのであらうぞ。

評　「心にしみて」から色の語を聯想して、これを反喩に扱つた。すべて細くからびた仕立、これも一體である。三四の句間に、何故にの語を含めて婉曲にした爲に、大人しい安らかな氣分になつてゐる。初句、六帖にわかるてふとある。別と名詞にいつた方が二句へよく出合ふ。

あひ知れりける人の、越の國にまかりて、年へて京にまうできて、又かへりける時によめる　凡河内躬恒

かへる山何そはありてあるかひは來てもとまらぬ名にこそありけれ

釋　○何そはありて　「何そは」は何それはの意。この語古來釋き得た說がない。この何は、口語の何大シタ事デモ無イ、何驚クニ及バヌ、などの何で、末に必ず否定の語か、反駮の詞かを現はすべき格である。故にこゝは、何それは在つて在甲斐の無いの意に解するがよろしい。下の戀二「命やは何そは露のあだ物を云々」の歌をも參照して、通はせて心得られたい。

大意　越の國のかへる山は、彼地へ下られた貴方の、再び都に立ち歸る名ぞと、これまでは賴もしく思つて居つたに、何それは在つて在甲斐(アリガヒ)の無いので、その在る甲斐といふのは反對に、久し振に來た貴方が京には留まらずに、又彼地へ歸るといふ名でサありましたわい。

評　山の名の「かへる」は、此方へではなくて、彼方へ歸る意である事を、始めて合點したといふ。「來てもとまら

ぬ」は即ち歸ることであるが、「かへる山」の名と重複するのでいひ換へたのである。「あり」の語の反復何でもないことだが、調子の滑かさを覺える。けれどもと〳〵山の名に絡つた緣語の仕立で、弄舌の妙こそあれ、氣味に至つては、則ち索然としてゐる。

六帖に、作者を市原のおほきみとあるのは誤だらう。

こしの國へまかりける人に、よみてつかはしける

よそにのみ戀ひや渡らむ白山のゆき見るべくもあらぬわが身は

釋 ○白山のゆき見る　白山の雪を、「行き」にかけた序とする。雪見るに、行き見るをかけたとする說はわるい。白山は加賀國能美郡にある。今は音讀してハクサンといふ。越前にも同名のがあるが、打ち任せて、雪など詠むべき高山でない。越前、加賀、能登、越中、越後のあたりは、すべて古の越の地で、京畿より越路に入つて、先づ目につく高山は雪を戴く白山である。故に越の白山の名が世に高い。白山の名も雪によつてゞある。

大意 今からは、餘所にばかり戀しく思つて、月日を送ることでありませうか、とても雪深い白山のある越路へ往つて、貴君にお目に懸かられさうにも思はれぬ私の身はサ。

評 公務に支へられて、心に任せぬ身なので、「ゆき見るべくもあらぬ」といつたらしい。平凡の着想、わづかに「白山のゆき見る」の弄語が一ふしを成すのみ。

音羽山のほとりにて、人を別るとてよめる　つらゆき

音羽山木高くなきてほとゝぎす君がわかれを惜むべらなり

釋 ○音羽山　夏部「音羽山けさこえくれば」の條に既出。○木高く　梢高くの意。小高くと心得てはいけない。

大意　この音羽山の梢高く鳴いて、時鳥があれあの通り、貴方の別を惜むやうな樣子でありますわ。

評 時鳥の聲を聞いて、あれは君が別ゆゑに鳴くのだといふ推定は、即ち既に君が別に泣いてゐる作者であることを證する。しかも心無き鳥獸すらも愁へ歎くは、即ち別れ行く人の重きを成す所以で、客を借りて主を形する筆法である。杜牧の、

蠟涙有レ心還惜レ別、　替レ人垂レ涙到二天明一。

は、詩材こそちがふが、同想の同叙と見える。「木高く」は、山の端の梢あたりに鳴く景色であるが、おのづから鳴く音の高く聞えた趣も響き合ひ、鳴く音の高いに、別を惜む心の一通りでない態も聯想される。音羽山に木高くといひ、又梢を詠むことは、その木茂き實景から來たものだらう。細心の作ではあるが、一往自然のやうである。又、唐僧無悶の詩に、

杜鵑不レ顧離人意、　更向二落花枝上一啼。

同一の詩境同一の詩材で、有情無情の取り成し、比較してその好處を曉るがよい。

藤原の後蔭が、唐物のつかひに、なが月のつごもりがたに
まかりけるに、うへのをのこども、酒たうびけるついでに
よめる　　藤原のかねもち

もろ共になきてとゞめよきりぎりす秋の別は惜しくやはあらぬ

平もとのり

釋 ○藤原の後蔭が云々　後蔭が唐物の使に任ぜられて、九月の晦方に西國へ出立した時に、殿上人達がその餞別の酒を酌んだ序に詠んだ歌との意。「唐物の使」は唐國、渤海國等の商船の、筑紫に着いた時、その積荷を檢校して、珍奇の貨物は收公して都に奉りなどする爲に、遣はされる使である。武家の世となつては、唐物奉行といつた。「晦方」は月の下旬。「たうび」は賜びの音便である。この本文は、うへのをのこどもを主とした書き方だから、自他が差つてゐる。たうべとなければなるまい。「たうべ」は賜はりである。飮食することを、口語にたべといふも同語である。○もろ共に　自分と共にの意。これを秋の別と、人の別との二つをいつたとする說は、甚だその謂れがない。

大意 蟋よ、共々に泣いてとめて吳れよ、今この秋の暮れ行く別は、惜しくは無いことか、どうして惜しいことであるわ。

評 壹々のあたりに、唧々と鳴き出した蟲の聲をやとひ來つて、秋の暮れようとするを惜んだのは表面の意で、實は秋行く人の別を惜んだ暗喩である。筑紫の往復は公程として一月半、それに公務執行の時日を加へたなら早くて二月を要する。況や旅行の苦患は今日の人の想像以上であつた當時とすると、いよいよ旅行く人がいたはしくもあり、隨つて別れ難くも感ずる。けれども公事は私情で如何ともし難い。ひたすら別淚の催すに堪へず、汝も手傳つて泣いて止めよと、はかない蟲の聲をも力賴みとする纏綿の情緒、あはれ深いものがある。

秋霧のともに立ち出でて別れなばはれぬおもひに戀ひや渡らむ

釋 ○秋霧の　「立ち出でて」の「立ち」に係る。「出でて」には係らない。○はれぬおもひ　胸の開くことない物思。

大意　秋霧の立つと共に、貴方が立ち出でて、お別れなされてしまつたならば、私は今からあの霧のやうに、晴れぬ心の物思に、何時も貴方を戀しく思つて、月日を過すことでありませうか。

評 霧の縁語を以て、「立ち」「晴れぬ」など修飾した。これも上と同時の歌で、殿上の夜宴と覺しいから、夜霧の立ち渡つたのを見て詠んだらしい。されば晝の歌として、「おもひ」に日をいひかけ、霧に曇つて日の晴れぬのを胸の晴れぬに擬へたとする說は、成り立たない。

源のさねが、筑紫へ湯あみむとてまかりける時に、山崎にて別をしみける所にてよめる　しろめ

いのちだに心にかなふものならば何か別の悲しからまし

釋 ○源のさね云々　「源實」は官右近衛少將に至つた人。「ゆあみ」は湯浴で、筑紫によい溫泉があつたので、湯治に行つたのである。「山崎」は山城河内攝津三國の堺、淀川の北岸に當る。京より西國に通ずる咽喉の地で、延喜時代には、京に上下する船場であつた。土佐日記にもこの趣が見えてゐる。○心にかなふ　思のまゝになるをいふ。

大意　貴方をお留め申すことは協はずとも、せめて自分の命なりとも心任せになつて、お歸まで長らへられるものならば、何のこのお別が悲しからうぞ悲しくもありませんわ。

【評】しかし心に協ふ命でないから、やはり別は悲しいと落着する。現代の人の目からは、筑紫あたりの湯治の別に命をかけるのは、餘り大袈裟過ぎる嫌ひはあるが、八束鬚胸前に垂る益荒雄すらも、上に見えるやうに、唐物の使を送るといつては「鳴きてとゞめよ」「晴れぬ思に戀ひや渡らむ」など詠みあつた時代だから、女の情ではましてであらうと思ふ。それに聊か誇張を加へられたら、これ位の事は當然である。景樹が「生得か弱き人なりけむ」などいつたのは、餘り事情に疎い穿鑿である。杜甫のいはゆる生別常惻々で、焦れ死にして貴方のお歸の日に逢へないかも知れないと、不安を豫測して眼前の別愁に耽る。實に直情のあらはれで、辭旨悽惋に沈痛に、直に人の肺腑を刺して、一聲一涙、一字一珠。この作を思ふと、白女は遊女ながら實に立派な人格者であつたらしい。又いふ、作者は江口の遊女であり、源實は廷臣である。しかも深く馴れ昵んだ間柄であつたらしい。後の者だが大江匡房の遊女記は、よくこの間の消息を説明してゐる。

自山城國與渡津浮巨川西行一日、謂之河陽、江南北、邑々處々、分流向河内國、謂之江口、到攝津國、有神崎蟹島等地、比門連戸、人家無絶、倡女成群、棹扁舟看船舶、以薦枕席、上自卿相下及黎庶、莫不接牀第施慈愛、又爲妻妾、歿身被寵、雖賢人君子不免此行、長保年中、東三條院參詣住吉社天王寺、此時禪定大相國被寵小觀音、長元年中、上東門院又有御行、此時宇治大相國被賞中君、延久年中、後三條院同幸此寺社、狛犬憧等之類、竝舟而來、人謂神仙、近代之勝事也、相傳曰、雲客風人、爲賞遊女、自京洛河陽之時、愛江口人、刺史以下自西國入江之輩、愛神崎人云々。

上下淫蕩の風見るやうである。既に宇多法皇巡幸の途次、この作者、并に大江玉淵が女の遊女などに、謌を賜うたことがあつた。

結句、六帖、金玉集等に悲しかるべきとあるは、風調がやゝ劣りざまである。

山崎より神なひの森まで、おくりに人々まかりて、歸りがてにして、別をしみけるによめる　みなもとのさね

人やりの道ならなくに大方(オホカタ)はいきうしといひていざ歸りなむ

釋　○山崎より云々　「神なひの森」は、秋部に見えた大和國のとは別で、山崎の南の山邊にかゝつて向日明神といふがある。その後方の、今かうなひの森といふ所である。「歸りがて」は歸りにくいの意。○人やりの道　人の遣る道。我が心から行く道でないのをいふ。○大方は　大抵はの意。○いきうし　往きづらいの意。「いき」は往きの古言。○いざ　率(イザナ)ふのいざで、誘ひ出す意の發語。

大意　今度の旅は自分の心からで、何も人に遣られて行く道中ではないので、折角止めて下されるお志を、振切つて行くもいかゞだから、大抵は往くが大儀とかこつけをいつて、さあ歸つてしまひませう。

評　次の詞書を併せて見ると、前のと同時の歌である。然らば湯治行きの私の旅で、公務などに關した人やりの道でないことはいふまでもない。されば自發的によしてよされぬ事はない。とはいふものゝ湯治療養も亦身に取つて大事である。既に山崎で袂別の情を十分叙したのを、なほ神なひの森まで慕つて來てくれた人々の志は格別である。「いざ歸りなむ」はこの芳情に酬いて、離愁を緩和する爲の挨拶で、歸らうといふのは却つて歸らぬ人の所言である。そこにその胸中の葛藤が見える。上の行平朝臣の「今歸り來む」と似た趣があつて面白い。

「今はこれより歸りね」と、實がいひけるをりによめる

藤原のかねもち

慕はれてきにし心の身にしあれば歸るさまには道もしられず

釋 ○今は云々　上の詞書を承けた書きざまである。なほ別れかねて、何處までも送らうとする樣子なので、もうこれからお歸りなされと、源實がいつた時に詠んだ歌との意。○きにし　「し」は過去の辭。○心の身にし　心に付いた身でサの意。「し」は強辭。○歸るさま　口語の歸りしなといふに當る。

大意 此處まで來たことは、抑も貴方のお跡が慕はれて、自然に引かれて來た心故の身でサあるから、貴方を置いて今歸れと仰しやられても、歸りしなには道もわかりませぬ。

評 これも心と身とを分解して、別々に取り扱つた。應酬の語、おのづからかうなるのも仕方がないが、上句は說明に過ぎて面白くない。以上三首のうち、これが最も劣つてゐる。

藤原のこれをかが、武藏の介にまかりける時に、おくりて、逢坂を越ゆとてよみける

つらゆき

かつ越えて別れも行くか逢坂は人だのめなる名にこそありけれ

釋 ○藤原のこれをか　傳不詳。集中の作者には紀惟岳といふ人があるが、氏がちがふ。○かつ越えて云々　惜みて引き止める一方には、坂を越えて別れ行く意で、「かつ」といつた。千秋が、逢坂を越えながら且別れ行く

の意に解いたのは杜撰である。「かつ」は「越えて」に係つて、「別れ」には係らない。「か」は歎辭。○人だのめ　人に憑ましめる意が本で轉じて、人に憑もしげに思はせて賴みにならぬ意に用ひる。

大意　逢坂は人に逢ふといふ名なのに、今別を惜んで居るそばから、この坂を越えて別れてまあお行きなさることよ、これでは逢坂といふ名は、人憑めな、あてにならぬ名でサあつたわい。

評　上に躬恒が、「歸る山何そはありて云々」と詠んだのに似てゐる。萬葉調を陳腐と卻けた延喜の歌仙等が、更に一生面を開かうとあせつた餘弊は、語言の窠套に陷つて、測らず後世の俑を作つた。拾遺集に、物へまかりける送り關山までし侍るとて、と詞書して、

別れゆくけふはまどひぬ逢坂は歸りこむ日の名にこそありけれ

これも貫之の作である。いづれも着想の出發點が面白くない。

大江のちふるが、越へまかりける、馬のはなむけによめる

藤原かねすけの朝臣

君が行くこしの白山しらねどもゆきのまに〳〵跡はたづねむ

釋　○大江のちふる　大江千古。參議音人の子で、仕へて從四位上伊豫權守式部權大輔になつた。この時は、北陸地方の介、椽などの官で、赴任する折と見える。○ゆきの　雪に行きを寄せた。

大意　貴方の行かれる北國の白山あたりは、私の不案内の道ではあるが、雪の深い處と聞けば、貴方の踏んでゆかれたその雪の足跡のまゝに、お跡を尋ねて私も參りませう。

評 白山は、聲調のうへから、「しらねども」の語を喚び起し、縁語のうへから、「ゆきのまに〳〵」の句を引き出し、さてその雪はまた「跡」の一語を呼び出してゐる。恰もとん〳〵拍子、口拍子になつたもの丶やうである。人に立ち後れては、都に一人ゐる心地せぬ由で、そんな不知案内の處でも後から尋ねて行かうといふ。離情の切なのは素よりだが、やはり誇張の言であらう。實に尋ね行かうといふのならば、却つてこれ只言であり、僧父の言である。

人の花山にまうできて、ゆふさりつかた歸りなむとしける時によめる　　僧正遍昭

夕暮のまがきは山と見えななむよるは越えじと宿りとるべく

釋 ○花山　春下「よそに見て歸らむ人に」の條に既出。山城國山科の花山の元慶寺である。「ゆふさりつかた」は夕方。○まがき　間垣の義とも、馬垣の義ともいふ。和名鈔に、「籬（和名末加岐、一云末世）以柴作之言疎離也」とある。○見えななむ　過去の助動辭のなと、希望の助辭のなむと重なつた詞。

大意 夕暮の闇の紛れのこの庭の籬は、どうぞ山と見えて貰ひたい、夜は山が越えられまいと思つて、あの歸らうとする人が、今宵は此處に宿を取るやうにサ。

評 上句を下句で解釋した叙法である。さる大寺の夕間暮、築地や垣やの隈々が黒ずんでほのかな物陰から聯想して、山に譬へた。蓋し夜山は越えられるものでない。旅人は昔から警戒してゐる。越え易い籬を、越えにくい山、しかも夜山に、あの客人達の眼に映じてくれとの希望、實は客人の別を惜む意に外ならない。破天荒の

空想で、詩膽斗の如きものがある。これぞ遍昭の壇場で、當時の歌仙の、遙かに及ばぬ點であらう。誠少ないと評せられたのも、これらの風體に就いての事であらう。

三句、顯昭本に山と見えぬかなとあるはわるい。

山にのぼりて、歸りまうで來て、人々わかれけるついでによめる　幽仙法師

わかれをば山の櫻にまかせてむとめむとめじは花のまに〳〵

釋 ○山にのぼりて云々　山は比叡山である。王朝時代には比叡山の延暦寺を山、三井の園城寺を寺とばかりいつた。眞淵いふ、「歸りまうで來てといひながら、歌に山の櫻とよめるは、幽仙の住める坊は、西坂本などにありけるが、其處まで歸りまうで來て、人々と別るゝなるべし」と。これは幽仙が慈覺に就いて、未だ修業中、山にゐた頃の事としてよい。又思ふに、天台座主記に、第九長意和尚の項に、幽仙律師を隸して、「仁和寺根本師、彼寺別當建立人也」と見え、又、昌泰二年十二月十四日官符任ニ別當一。口傳云、幽仙元慈覺弟子、後任ニ仁和寺別當一云々。依ニ本習一申ニ任延暦寺別當一云々。と見えた。されば眞言宗の僧で、仁和寺別當を勤め、又さる所縁に依つて姑く延暦寺別當に任じたので、折々山に上つて、その職務を執つたものとすると、人々とおなじく麓まで下りて來て、別れる時も山の主人方の位置に立つて、別を惜んだものかも知れない。

大意 さてお別れ申すは甚だ殘念ではあるが、愚僧がいろ〳〵申しても、お止まりはなさるまいによつて、この上は別といふことをば、この山の櫻に一任してしまはうわい、貴方達を止めうとも止めまいとも、それは花の心任せサ。

評 とても心なく花を見捨てゝ歸られはすまいの餘意がある。歸る歸らぬは人々の御心のまゝといふべきを、花のうへに移して擬人にいひはてたのは、婉曲である。人々個々の胸裡に伏藏してゐる一片の風流心に訴へて、花に辜負する罪の容易ならざるべきを暗示した。もしもこの人達が風流を以て自任する風雅男であつたなら、止まらずには居られないことになる。作者の狡猾手段は頗る妙といはう。六帖に、二句峰のさくら、結句春のまに〳〵とある。春は誤寫であらう。

うりん院のみこの、舍利會に、山にのぼりて歸りけるに、櫻の花のもとにてよめる　　僧正遍昭

山風にさくらふきまき亂れなむ花のまぎれにたちとまるべく

釋 ○うりん院のみこ云々　雲林院の親王が比叡山延暦寺の舍利會に參詣なされた歸りに、お送の爲にお供申した遍昭、及び幽仙等が、櫻の蔭で詠んだ歌との意。「雲林院」のことは春下「櫻ちる花の所は」の條に既出。「雲林院の親王」とは仁明天皇の皇子、常康親王のこと。「舍利會」は佛骨供養の法會である。叡山の舍利會は貞觀二年から始まつた。○山風に云々　「山風に吹きまき」といふは、自他が差つてゐる。吹き捲かれでなくては協はない。吹き捲きがもとのまゝならば、初句の助辭と三句の自他とを直して、「山風は櫻吹き捲き亂らなむ」

とあるべきである。○花のまぎれ　散る花の紛れ。

大意　山風はこの櫻の花を吹き捲いて、散り亂して貰ひたいわい、花の散り亂れるに紛れて、歸る道が知れぬといふので、君がお止まりなさるやうにサ。

評　落花兩三片、緇素の衣を撲つて、互に別れ難くする光景が想ひやれる。平生は散るなと希ふ花を、今日は「道まがふまで散れ」といふに、別を惜む情の甚しさが見える。この妙處は、既に賀部の業平の歌、

櫻花ちりかひくもれ老らくの來むといふなる道まがふかに

の條に說明しておいた。詩材も構想も、兩者相同じである。但遍昭のは貞觀八年、業平のは貞觀十七年の作だから、これから彼れは出たものか。業平朝臣は有數の歌仙で、あへて人の歌を拘ふものではない。暗合か。結句、家集に君とまるべくとある。その方が意が明晰である。

幽仙法師

ことならば君とまるべく匂はなむ歸すは花のうきにやはあらぬ

釋　○ことならば　かくとならばの意。春下にも見えた語。殊ならば、如ならば、など釋いた說は誤つてゐる。○君　雲林院の親王をさす。

大意　櫻の花よ、どうせこのやうに咲き匂ふ程ならば、君の殘り多く思し召してお留りなさるやうに、咲き匂つて貰ひたいわ、お歸し申すは、花よ其方の努力が足りないので、其方が憂いことではないか、まさに憂いことであるぞよ。

評 この法師、上には、「別をば山の櫻に任せてむ」と詠み、これは又、今一歩を進めて、別をとむる責任は素より花の上にあるものとして、歸すは汝の不面目ではないかと詰責した。これ草を打てば蛇動くの筆法で、暗に親王のお歸りなさるのは花に面目を失はせる所以だからと、必ずお止まりなさるやうに諷示した。寄託の興、味ふべきものがある。

遍昭も、幽仙も天台僧であるが、山の住僧ではない。故に舍利會がはてゝは、親王と同道下山されたのである。すると遍昭のは、この一行全體にかけて、「立ち止まるべく」といひ、幽仙は親王の御うへをのみ「君とまるべく」といつて、別を惜しんだのである。

仁和のみかど、みこにおはしましける時に、布留の瀧御覽じにおはしまして、還り給ひけるによめる　兼藝法師

あかずして別るゝ涙瀧にそふ水まさるとやしもは見ゆらむ

釋 ○仁和のみかど云々　春上の「君が爲春の野にいでて」の條に既出。○瀧にそふ　瀧の水に添はる。○しも　川下。

大意 殘り多くてお別れ申す愚僧のこの涙が、瀧に添つて流れますわ、定めし水が増ると川下では見えることでございませうか。

評 この法師、抄物に大和國城上郡の人とあれば、石上附近の住僧で、親王の布留の瀧見の御案内に出たものであらう。或は石上の良因院などの住持かも知れない。涙の流水に和する構想は、詩に大分多い。

一含相思涙、臨レ江瀨二素秋一、碧波如レ會レ意、却與向レ西流。
潮中有二妾相思涙一、流到二樓前一更不レ流。
の類である。さて涙の水に瀧の水、量において非常の懸隔のある物を配した。勢ひ奇句が生まれてこなければならぬ。果して「水まさるとや」の誇張、白髪三千丈の李謫仙をも後へに瞠若たらしめる。かくて別恨の深さも見えるのである。又一面から見れば、布留の瀧はさう大いして大きな瀧でないとも、これによつて想像される。實際瀧としては甚だ小さなものであるのだ。

かむなりの壺にめしたりける日、大御酒などたうべて、雨のいたう降りければ、夕さりまで侍りて、まかり出で侍りける折に、さかづきをとりて　　つらゆき

秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそ思へ

釋 ○かむなりの壺云々　「かむなりの壺」は襲芳舍のこと。これは秋上「かくばかりをしと思ふ夜を」の條に既出。「大御酒」は下されの酒をいふ。「さかづきをとりて」は杯を持ちての意。

大意 あの前栽の萩の花を、この雨に濡らすは惜しいものではあるが、それよりもお別れ申す貴方をば、なほの事惜しいとサ思ひますわ。

評 眞淵いふ、「この歌は、兼覧王に杯をさすとて歌へるなり。伊勢物語にも、〽狩して天の川に至るといふこゝろを詠みて、杯はさせ』とあり。源氏物語にも、源氏の御許へ、今上も院も出でまして、おの〳〵御歌をとな

へて、御杯をさゝせ給ふことあり。歌を唱へて杯をさすが、古へのみやびなり。奥儀抄にも其の由見ゆ」と。まことにさもあらう。抑も貫之、躬恒等は、この集撰著の爲に、雷鳴の壺に召されたことゝ見えるから、これも必ずその折の事と思はれる。

兼覽王は王氏ではあるが官位はひくいので、今回の勅撰集の事に、奉行か何かで關係してゐた人ではあるまいか。今日しも貫之等は撰集の事で、雷鳴の壺に召され、始めてこの兼覽王に謁し、共に賜餐に列して、いよいよ退席の前に、まづ一杯と兼覽王に薦めたものらしい。折柄の秋雨は壺庭の萩の上に濺いで、そのあたらしい光景は、奈良時代の歌人の、一再ならず繰り返して歌つた如くである。乃ちこの詩材を配合して、その雨中の萩以上に、只今お別する君を「惜しとこそ思へ」と、天にも地にも兼覽王の他には人が無いやうに取り成した。當坐の頓作としては一寸面白い。

とよめりけるかへし　　兼覽王

をしむらむ人の心を知らぬまに秋のしぐれと身ぞふりにける

釋 ○とよめりけるかへし　前の歌を受けて書いた詞書である、しかぐ\と貫之の詠んだその返歌との意。○時雨と　時雨の如くの意。和名抄に「䨫雨 小雨也 之久禮」とある。秋冬の交の小雨を時雨といふ。冬季にのみ限るは後世のことである。○ふり　時雨の降りに、身の舊りをかけた。「身の舊り」は老い行くをいふ。

大意 そのやうに、一寸の別でも私を惜しんで下さる程の貴方のお志を、知らないでをります間に、私の身はサ、この秋の時雨の降るといふやうに、舊く年寄つてしまひましたわい。

評 傾盞の遲きを憾んだ意が顯然としてゐる。卽ち貫君にそんなあり難いお心持があつて下されたのも知らないで、年經ましたといふ挨拶を、折柄の時雨を點景に使つて述べた。景樹の說に「若からましかば末遠く交り語らむをと、知己に逢ひて餘齡少なきを悔めるなり」とはいひ過ぎである。「身ぞふりにける」は、旣に老境に臨んだ人の口吻と聞えるものゝ、さまでの頽齡ではあるまい。抑もこの作者は惟喬親王の長子である。親王は貞觀十五年に、廿六で薨逝せられたから、その十七八の頃の御子と見ても、この集撰著の延喜の四五年には、やつと四十一二である。四十を初老とする支那風の習慣のまゝに、これは詠んだのである。必ず景樹の說に從ふとすると、大抵同年配と見える貫之、躬恒を前に置いて、我れ一人老い朽ちたやうに歎いた譯になつて、穩やかでなくなる。又景樹は「調高し」と評したが、何それ程のものでもない。「秋の時雨とふる」のいひかけも、後人にしばく模倣されて、折角の一ふしも陳腐になつた。

兼覽のおほきみに、はじめて物語して、別れける時によめる　みつね

別るれど嬉しくもあるか今宵よりあひ見ぬ先に何を戀ひまし

釋 ○兼覽のおほきみ云々　上のと同じ時の歌であらう。兼覽王は躬恒のみならず、貫之とも初對面の筈なことは、「をしむらむ人の心をしらぬ間」と詠んだのでもわかる。○あるか　「か」は歎辭。○あひ見ぬ　「あひ」は逢ひの意。相の意ではない。

大意　悲しい筈のお別を致せど、考へて見ればそれとても嬉しうございます事よ、なぜといふに、お目にかゝりましたればこそ、お別れ申すこともあれ、今夜より未だお目にかゝらぬ以前において、何を戀しく思ひませうぞ。

評　「別るれど嬉しくもあるか」と、先づ矯語を放つて注意を引き付けておいて、さて其の解説を與へた。素より別れぬに增した事はないが、それは出來ない相談なので、第二義を以て姑く滿足した。抑も會者定離を苦と觀ずることは、事實何處でもおなじ事だ。況や佛教が盛んに宣傳してゐたことである。この一般的思想に對して一寸一轉捩を試み、苦中に樂地を發見した。笑の中に涙あるを認めるがよい。これを離合集散を一つにした洞達の見などと早合點しては、大きな謬であらう。なほ春下「殘りなく散るぞめでたき」の評語を參照してほしい。「今宵より」の句は、「あひ見ぬ」を隔てゝ、「先に」にかゝる。

題しらず　　よみ人しらず

あかずして別るゝ袖のしらたまは君が形見とつゝみてぞ行く

大意　殘り多く思つて別れる袖の涙は、まるで白玉と見えるが、この白玉は貴方のお蔭で出來たもの故、貴方のお形見と存じて、大事に袖に包んでサ行くわ。

評　泣きつゝ別れ行く人の作である。おのが涙を人の形見と取り成したのを一ふしとする。さて涙を「白玉」と暗喩して、玉は貴重な物として物に包みなどするから、大事にするの意を轉義して、「つゝみて」といつた。又、上に「袖の白玉」とあるに讓つて、袖に包みてといふべきを略いた。袖に包むは元來作者の創語ではない。法華經の衣裏珠の典故で、前代からいひふるして居たことである。とにかくこの一語に、人目をかねて涙を抑へ

てるゝ、作者の態度がほの見えて面白い。

○

かぎりなく思ふ涙にそぼちぬる袖はかわかじ逢はむ日までに

釋 ○そぼち　濡れ透る意。そぼ濡る、そぼ降るなどのそぼも同語である。

大意　この別を限りも無く悲しく思つて泣く涙に、濡れ透つたこの袖は、なかなか乾きはすまいわ、又と逢はう其の日まではサ。

評 無窮の離愁に沈まむことを、取り越し苦勞したので、修辭の巧はないが、率直の作である。萬葉集卷十二に、

白妙のわが紐の緒のたえぬ間に戀むすびせむ逢はむ日までに

國遠みたゞには逢はず夢にだに我れに見えこそ逢はむ日までに

朝霞たなびく山を越えていなば我れは戀ひなむ逢はむ日までに

などあると、同調の古歌である。「逢はむ日までに」は、逢はむ日まではの意と同じなことは、萬葉の語例を見て知られる。

○

かきくらしことはふらなむ春雨に濡衣（ヌレギヌ）きせて君をとゞめむ

釋 ○かきくらし　「かき」は接頭語。「くらし」は暗くする意。奈良時代には搔霧（カキキラ）しといつた。○ことは　上の春

下「ことならば咲かずやはあらぬ」のことと同語。○濡衣きせて　奈良時代には、濡れた衣の意にのみ用ひたが、平安時代になつては、無實、寃名の意に轉用した。こゝはその意。

大意　この春雨よ、とても降る程のことならば、いつその事空も掻き暗まして、強く降つて貰ひたいわ、さうしたら、こんな雨降りではと雨に無實をいひかけて、別れて往く人をお留め申さう。

評　雨に雪に托しても、君を留めようとする、これら濃艷な情緒は直に人の心魂を魅するものである。霏々たる細雨の夕、門に臨みて人の歸るを送る、その況致が想ひ遣られる。

初句、顯昭本にかきくづしとあつて、「人のいたく物言ふをも、かきくづしてとこそ申せ」と注した。源氏物語の語だが、こゝには協はない。

○

しひて行く人をとゞめむ櫻花いづれを道とまどふまで散れ

釋　○しひて　强ひて。

大意　何程止めても止まらずに、無理やりに歸つて行く人を止めようと思ふわ、櫻の花よ、あの人がどれを道とも迷つてえ行かぬ位に、散つて呉れよ。

評　上なる、

櫻花ちりかひくもれ老らくの來むといふなる道まがふかに　（賀）
山風にさくらふきまき亂れなむ花のまぎれに立ち止まるべく　（別）

と同一の構想。しかも「老らく」の歌は、殊に奇想を加へてあるから、最も優れてゐる。但「しひて行く」は面

白い。何でもかでも止めたい心持が、この一語によつて反撥される。なほ委しくは、上二首の條を參看。

志賀の山越にて、いし井のもとにて、物いひける人の別れけるをりによめる　つらゆき

むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな

釋 ○志賀の山越にて云々　「志賀の山越」は春下に既出。「いし井」は石井である。岩ある處に清水の湛へてあるをいふ。古くはいはるといつた。「物いひける人」とは、男同志にいふ詞でないから、この「人」は女である。○しづく　涓滴。○山の井の　山の井の如くの意。「山の井」は、山清水を堰き溜めた井。詞書の「石井」と同じ物である。○あかで　飽かでの意。梵語に水を阿伽といふより、山の井の阿伽に、飽かでをかけたといふ說は、穿鑿過ぎる。

大意　山の井は淺くて、掬ひ上げる手から落ちる雫の爲に忽に濁るゆゑ、思ふやうに飲み足らぬ殘り多い物であるが、丁度その如く、殘り多いのにまあ、貴方に別れてしまふことよ。

評　三句までは、「あかで」にかゝる序である。石井の水は山越の途中では、息づきの爲に誰れもその一杯は汲まずには通れぬ水で、我れも人も立ち寄つて幾掬びする間に、互に一言二言詞をかはし初めたが、忽に東西と別れてしまふ。逢ふも別れるも極めて假初な事ながら、深く惜まれるやうに詠み成したのが、趣向である。眼前の景趣を借り來つて、序の材料に用ひた。萬葉集卷十一、

泊瀬川速見早瀬をむすびあげて飽かずや妹ととひし君はもの類型であるが、彼れは修辭にやゝ粗朴の嫌がある。六帖に、

むすぶ手の岩間をせばみおく山の石垣清水飽かずもあるかな

は酷だ似てゐるが、なほ「雫に濁る山の井」の、形容の妙を悉したのに遠く及ばない。掬ひ上ぐる手の股より雫の滴り落ちると、透き徹つた水底の砂が攪き亂されて、忽に濁り果てた淺く涼しい山の井の狀、見るがやうである。俊成卿の風體抄にいふ、

この歌、「むすぶ手の」とおけるより、「雫に濁る山の井の」といひて、「飽かでも」といへる、大方すべて詞毎のつゞき、姿心限りなく侍るなり。歌の本體は、只この歌なるべし。云々。

拾遺集に、再びこの歌を擧げて、次に「三條内侍方違へに渡りて歸るあしたに、雫に濁るばかりの歌は、今はえ讀まじと侍りければ、車に乘らむとしける程に」と詞書して、貫之、

家ながら別るゝ時は山の井の濁りしよりもわびしかりけり

この詞を見れば、俊成卿以前、作者現存の當時に於いて、既にこの歌が嘖々の好評のあつたことが知られる。但、風體抄に、歌の本體のやうにこれをいつたのは、過褒の甚しいもので諾きがたい。又拾遺集のこの歌の詞書に、「女の、山の井に手洗ひむすびて飲むを見て」とあるは、歌の上には適はぬやうである。

道にあへりける人の車に、物をいひつきて、別れける所にてよめる　　とものり

したの帶の道はかた〳〵別るともゆきめぐりても逢はむとぞ思ふ

釋　○道にあへりける云々　「人の車」は女車であらう。「いひつきて」は言ひ寄り着きての意。つぎと濁つて、人してその車に物をいひ繼ぐ意とする釋は協はない。○したの帶の　したの帶の如くの意。「したの帶」は上衣の下締の帶をいふ。眞淵いふ、「裝束の下に着たる物の紐をいふ。いにしへ、帶と紐と通はしていへり」と。契沖が、「下の帶は、道の枕詞なり。伊弉諾尊、日向檍原にして御秡し給ふ時、帶を投げ給ひしかば長道磐神となる。これ道の神なり。よりて帶の道とは續けたり」と解いたのは、贊成が出來ない。「下の」といふ語が、それでは無用となる。○かた〳〵　片々の意。○ゆきめぐり　行き巡りの意。

大意　下の帶をするに、はじめは端の方が兩方へ別れるが、廻して結ぶと、又出合ふものであるが、その通りに、今往く道はかう右と左へ別れて往くとも、又そのうちに是非とも出合はうと思ひますわ。

評　詩にも歌にも、衣帶に託して思慕の情を寓することが多い。中にもこゝの譬喩位恰當なのは尠からう。下の帶は、上の帶に對した名稱と思はれる。但こゝは肌付の帶の稱でなく、たゞ下締の帶である。袍や直衣の上の帶は、只一重まはりで前に結ぶ。下の帶は、二重にも三重にも締りのいゝやうに廻して結ぶ。かく必ず行きめぐる筈の物を譬喩に使つて、「逢はむとぞ」おもつたのである。希望に實現性のあることを豫期したことは、深い懇情をもつた趣を說明する。萬葉集卷十一、

玉の緖のくゝり寄せつゝ末つひにゆきは別れず同じ緖にあらむ

の類想とおもはれる。

古今和歌集卷第九

羇旅歌

もろこしにて、月を見てよみける　安倍仲麻呂

あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

この歌は、「昔なかまろを、もろこしに物ならはしに遣はしたりけるに、あまたの年をへて、え歸りまうでこざりけるを、この國より使まかりいたりけるに、たぐひてまうできなむとて出でたりけるに、めいしうといふ處の海べにて、かの國の人、うまのはなむけしけり。よるになりて、月のいと面白くさし出でたりけるを見てよめる」となむ語りつたふる。

釋 ○羇旅歌　タビノウタと訓む。昔は年月を亘るのでも、只一夜二夜でも他泊すれば、すべてこれを旅といつた。○もろこし　漢土、卽ち支那。○あまの原　「あま」は大空をいふ。「原」は廣い所をさしていふ語。海原、野原など皆同義。○ふりさけ見れば　見ようとする方に振りのけて見るをいふ。これは遠く物を見る時の態度である。萬葉集に、振放と書き、又、振仰而を、フリサケテとも讀んである。「ふり」は接頭語。「さけ」は、放又は、離の義である。○春日なる三笠の山　春日に在る三笠山の意。春日は大和國添上郡にある鄕の名。もと、

糟垣の義より出たといふ。三笠山は御笠、御蓋とも書く。春日神社の鎭座まします後方の山をいふ。○かも「か」は疑辭。「も」は歎辭。

大意　大空を遙かに見渡すと、東の日本の方に月が今さし昇るが、あの月は以前わが故郷の奈良の京に居た時、春日の三笠山に出たことであつた月かまあ。

評　「春日なる三笠の山」と續けて、月を取り合はせて詠むことは、奈良時代の歌に例が頗る多い。蓋し三笠山は奈良の都の東方に聳えてゐる故である。作者は元來、磯城郡安倍鄕出身ではあるが、幼時から學問研究に奈良の京にゐたので、三笠山の月はいつも見慣れて、深く腦裏に印象して居つたらう。故に他國他鄕に月を見ては、直に京の三笠山を聯想して、宵々毎に待ち出でし時代を回想し、人を憶ひ、鄕土を懷ひ、本國を思ふ。いかに晴れ渡つた夜の月であつたらう。「かも」の用法、極めて輕くて殆ど歎辭に近い。故鄕で見た同じ月か否かとまで、疑問したのではない。この詠歎の情味に、わが思ひの外の異鄕にさすらつて、月を見ることを悲傷した意が隱然としてゐる。又「見れば」とあるを、「出でし月かも」と承けたとばかり見ては、上下の意が齟齬する。これは二句の下に照應すべき詞のあるのを略いたのである。卽ち二句と三句との間に、月こそはさし昇れ、その月はといふ詞を補足すると、始めて完全の意義をなすのである。この歌の簡淨な所以も、この省筆から生ずる。風調高邁で、更に工を須ひないが蘊含の妙があり、感愴窮り無く、神韻縹渺として、體格雄渾である。そも〳〵作者仲麻呂が、元正天皇の靈龜二年、遣唐使多治比縣守に從つて、留學生として入唐したのは、十六歳の時であつた。舊唐書東夷傳に、

其偏使仲滿、慕二中國之風一、因留不レ去、改二姓名一爲二朝衡一、仕歷二左補闕一、儀王友レ衡、留七十年、好二書籍一、

放歸レ郷、逗留不レ去、云々。

そのいかに唐土の文化に眩惑して、父母の國を忘れ果てたかゞ窺はれる。抑も朝廷の留學生を彼の土に遣はされたのは何の爲か。彼が長を取りわが短を補はうの思召ではなかつたか。莫大の給費、巨多の賜暇、以てその學業を成就させたのに、忘恩背信の渠れは、大使の歸國に伴はず、唐の位に居、唐の粟を食ひ、唐の衣を着、唐の天子に仕へて、祕書監となつて、無上の光榮を博したことゝ思つて居たであらう。あはれ、この得意滿面の渠れ、渠れも亦人である。たま〳〵失意あり、憂苦あり、病苦あり、名利の迷雲時に晴れて、本性の月明らかに照る時、獨坐無聊の時に當つては、懷土望鄕の念がそこに湧然と起つてきたであらう。法顯三藏が天竺に往つた折、途中漢の扇を見ては悲しがり、病に臥しては漢の食を希つたといふではないか。越鳥は南枝に巢ひ、胡馬は北風に嘶くとあるではないか。頭陀の境涯ですら、鳥獸すらさうである。さては長安一片の月に鄕思動くこと萬里、端なくこの一篇の佳作を貽し來つたものだらう。かくてこれらの動機は、三十五六年間も逗留した渠れをして、遣唐使藤原清河と共に、歸國の旅裝を整へることを思ひ立たせたに違ひない。しかも傍ら玄宗の使命を帶びてゐた。自作の詩にいふ、

銜レ命將レ辭レ國、菲才忝二侍臣一、天中戀二明主一、海外憶二慈親一、伏奏違二金闕一、騑驂去二玉津一、蓬萊鄕路遠、若木故園隣、西望憶レ恩日、東歸感レ義辰、平生一寶劍、留二贈結交人一。

口調は全く唐への歸化人としか思はれない。この時、王維、包佶、趙驊等の送行の詩がある。又、

慕レ義名空在、輸レ忠孝不レ全、報恩無レ有レ日、歸國定何年。

とも作つた。海外憶慈親といひ、孝不全といつた點はやゝ殊勝らしいが、その歸國は只自分の親の爲で、わが

大君の御爲、國の爲などいふ眞心は露ばかりも見えない。想ふに、わが大君は棄れが不臣を惡み給うて、「歸りまるこずは、その親どもを罪なはむ」など仰せ下されたのかも知れない。流石にさし當つて親殺しの名を負ふのも心苦しさに、滋り〳〵出立したのだらう。されば海上颶風に遭つて安南に漂泊し、再び長安に還着したのは、寧ろその幸とした事かも測られない。舊唐書の「慕二其中國之風一、因留不レ去、云々」とあるは、何よりの證據ではないか。仕へて左散騎常侍鎭南郡都護より、光祿大夫兼御史中丞北海郡開國公に至り、寶龜元年唐の大曆五年年七十餘で唐で死に、潞州大都督を贈られた。蜀葵の日に向ふに劣ること太しい。安濟泊、夙くこの說を立てゝゐる。

初句、撰者貫之の土佐日記に靑海原とある。眞淵が「二樣の傳へありしか」と疑つたのは贊成し難い。日記のは、土佐よりの歸途の海上での事なので、靑海原となくてはふさはしくない。且は女の筆に托したものだから、しどけなく聞き僻めたやうに、わざと書き改めたものと思はれる。その證は、續日本紀承和三年の條に、遣唐使に托して仲麻呂に贈位せられた位記の文に、「唯有二掞天之章一、長傳二擲地之響一」とある。掞は、文選の注に、猶レ蓋也とある。蓋は笠のことだから、卽ち「天の原三笠の山」を摘記した詞である。近藤芳樹亦この事をいつてゐる。

左註は、土佐日記などに依つて後人の書き加へたものだらう。若しこれに據れば、仲麻呂が淸河に伴つて來ようとした時、明州の海濱にての留別の作である。明州は唐書地理志に、明州屬二江南道一開元廿六年以レ境有二四明山一爲レ名云々 それならば、部立も上の離別の部に收めなければならぬ。又歌の趣も、悲的の感情を叙べたもので、送別の宴席での作のやうでない。この調のある處をよく察しなければならぬ。

おきの國に流されける時に、船にのりて出で立つとて、京なる人のもとにつかはしける

小野たかむらの朝臣

わたの原やそ島かけてこぎ出でぬと人には告げよあまの釣舟

釋 ○おきの國に云々　篁が隱岐に流された事のおこりは、淳和帝の承和四年、遣唐副使の役で出發する時、大使藤原常嗣が自分の乘船が壞れたので、副使篁の船と取り換へたいと、朝廷に願つて許された。それを篁は恚つて、病氣と稱して行かず、西道謠を作つて遣唐の事を刺つた。嵯峨上皇、見て大いに怒らせ給ひ、死一等を減じて庶人とし、隱岐に流罪に處した。途上、謫行吟七十韻を作り、當時の稱誦するところとなつた。後、數年を經て召還され、つひに本位に復された。それは帝が特にその文才を愛されたのだといふことである。「船に乘りて出で立つ」は、浪速の津からの舟出であらう。淀や山崎からではない。歌に「八十島かけて」とある。隱岐に行く航路は、大坂から瀨戸内海を漕ぎ通つて、北の海に迂回して出るのである。○わたの原「わた」は海をいふ。「原」は例の廣きをいふ語。○やそ島かけて「やそ島」は八十島の意。「かけて」は兼けての意。春上、「梅が枝にきぬる鶯云々」の條の、「かけて」を參看。○人には「人」はわが家人をさす。

大意 果しも知らぬ大海を、行先限りもなく、この數多の島々をかけて、今出船したといふ事を、故鄕の家人にはどうぞ知らせてくれい、幸ひ其處に居る海人の釣船よ。

評 「八十島かけて」の八十島は、何處をさしたものか。隱岐行の航路に當る瀨戸内海の島嶼をさしたとも思はれないでもないが、「かけて」の語は、過去から現在に亘るのをいふので、現在から未來へ亘るのをいふのではない。

今は難波津出帆の場合だから、瀬戸内海の島嶼では、「かけて」が未來に亘るから誤用となる。そこで八十島を難波附近に求めねばならぬ結果となつた。つら〳〵當時の難波、卽ち今の大坂の地勢を按ふと、現在の低地は盡く汐入の海であつて、やゝ地盤の高い處があちこちに島嶼を成してゐたので、姫島だの笠縫島だの田蓑島だのは、皆その中の一島であつた。八十島はこの島々を稱したもので、「八十」は多數の轉義である。難波の渡津は、今の渡邊橋附近と思はれるから、そこから八十島かけて隱岐行の舟は漕ぎ出すのである。

勅勘を蒙つた流人の身なので、押送の役人は難波の津まで來り、その下官は隱岐まで護送して行くのである。されば公然と京の誰れ彼れに音信する事は、その憚がある。こゝに至つて、「人には」のはの辭に、大きな注意を拂はずには居られない。他人はともかくも、せめて彼の思ふ人ばかりには告げよの意である。單に人にとあるのとは異なつて、差別の意をもつ趣を知らねばならぬ。難波からいよ〳〵船出してしまふと、この萬斛の離愁を託すべきものは何もない。僅に千波萬波に浮沈する海士の釣舟を見た。苦しい時の神頼みと同じく、そんなものにも取り縋らざるを得なくなる。もとより釣舟は、消息など取り傳ふべき物でもなく、海士は難波の浦人で都に交涉のある者でもないが、それらの分別を失つて、「告げよ」と賴んだのは、情の高潮に達した狂想で、その詩的情調はこの一句によつて活躍する。さてかくまでに思はれる人は、そも誰れであつたらうか。遣唐の時の上表に、「自分家貧親老、身亦尫弱、當汲水採薪致匹夫之孝耳」とある。父岑守は以前に歿してゐるから、その親老といふのは母親である。このたよりない老母をおいて萬里流謫の身となり、わづかに一片の漁舟に託してその熱愛の情を寄せたいと希ふ。感哀窮りない。

渡口郵船風定出、波頭謫處日晴看。

は同時の詩である。併せてその狀況を見るに足る。後世平康頼が、

　さつま潟おきの小島に我れはありと親には告げよ八重のしほ風

と詠んだのは、この歌を粉本に取つたのである。數多くといふことを「八十」と相換したのもよい。四句と五句との應接、やゝ詩の轉結の落しに彷彿としてゐる。果して作者は詩人であつた。

題しらず　　　　よみ人しらず

みやこいでてけふみかの原いづみかは川風寒しころもかせ山

釋 ○けふみかの原　今日三日といふに、甕の原をかけた。契沖は「今日見るといふに甕をかけたり」といひ、眞淵、宣長等もこれに從つてゐる。世にこんな拙い辭樣はあるまい。從ふべからず。「甕の原」は山城國相樂郡。山城名勝志に、「在二木津渡東一里半許一、鄕内廣今有二九村一」と見え、和銅年中離宮を置かれ、聖武帝の天平中、始めてそこに恭仁宮を造られた。○いづみ川　甕の原を東西に貫流する木津川の一名。こゝは甕の原の泉川といふべきを、語調にまかせてのの辭を省いたのは、篠竝志賀の浦、石川片淵などの例に同じい。○ころもかせ山　衣を借せといふに、鹿脊山をかけた。この山は、名勝志に、「在二木津里東一里半許一、山西南半里許有二鹿脊山村一、瓶原隔二木津川一南也」とある。

大意 都を立ち出てから今日は三日目、この甕の原の泉川に來たが、ひどく風が寒いわ、自分に衣を一つ借せよ、川向ひのあの鹿脊山よ。

評 平安遷都後、あまり遠くない頃の人の作か。都は平安の都だらう。都を出掛けて何かの事情で、旅路に三日ば

かり費して、甕の原に來たと見える。乃ち三日に甕の原をかけた。既に萬葉集に三日原とも書いてあるから、さもあるべき取り成しである。景樹は、「都をいでてけふ」を、甕といふ語の枕として解したが、さう輕く見るべき意調とは思はれない。下句への照應も、事實であつてこそ面白くも聞えるのである。抑も甕の原は恭仁の京の地で、泉川は甕の原を貫流し、これに對して鹿脊山は、川の南岸に沿うて京口を塞いでゐる。されば、「川風寒し」は、實に甕の原を象徴する句で、舊都の荒涼なる景氣まで聯想される。衣を借すことは古への常習で、夫婦間では珍しくない。で川風の寒さが身に入むと思ふと、はかない山の名に寄せても、衣を借せと要求される、その痴想が面白い。想ふに暖い妹が手を離れた旅人の詠作だらう。

打聽に、「顯本には、初句家を出でてとあり」とあるが、今の顯本には見えない。さうした異本もあつたのであらう。

〇

ほの〴〵とあかしの浦のあさ霧に島隠れゆく舟をしぞおもふ

この歌は、ある人のいはく、「かきのもとの人まろがなり。」

釋 〇ほの〴〵と　仄(ホノカ)にの意の副詞。口語のほんのりに當る。〇あかしの浦　ほの〴〵と明しといふに、明石の浦をかけた。「明石」は和名鈔に播磨國明石郡明石郷とある。〇島隠れゆく　萬葉集には、島に隠れ行くと、島陰を行くとの兩意に用ひられてある。この解は前の意に從つた。島は明石の浦の眞向ひの淡路島をさした。宣長は、「島隠れは海を隔てたる所の隠れて見えぬをいふ。必しも島には限らず」といつた。さては雲隠れ、葉隠

れ、木隱れ、深山隱れを何といはうか。更に據ない臆說である。〇舟をしぞおもふ　舟をぞ懷ふといふに、「し」の強辭を挾んだ。惜しの義ではない。

大意　ほんのりと明けてくる明石の浦の朝霧に漕ぎ出して、向ひの島に隱れて見えずなつて行く舟を、哀れと思ふわ。

評　明石の阜頭に立つて、海上を眺望しての作だらう。さては、羇旅の部に收め難いやうである、下の白山、二見の浦の歌の如く、詞書でもあらばともかくもだがと、傾く者もあらう。されど、須磨明石といひ列ねてその勝景を黜ぶのは、後の事であることを思ふがよい。奈良時代、及びその前後に於ける明石は、實用的船舶の錨地として、著名であつたことを思ふがよい。瀨戸內海の水東に走つて、茅渟灣に注がうとする時、淡路島に迫られて、海上一里餘の明石の迫門を形作る。潮流の干滿に從つて、水勢の變化甚しく急なので、渺乎たる木葉舟は風待ち、汐待ち、是非に恰好の錨地を得なければならぬ。この要求を充たすのは、卽ち明石の浦である。難波の津からして西し、瀨戸內海からして東する船舶は、必ず此處に船がかりしたものであつた。されば阜頭に燈明臺を設けて、その往來を安全ならしめたのである。萬葉集に、「燈火のあかしの浦云々」とあるは、卽ちそれである。萬葉の註者、皆燈火のを枕詞とのみ見たのは、往時の狀況を察しない疎漏といはう。（この燈臺今も存して和船の出入の便になつてゐる）そこで明石とさへ歌へば、すべて行旅の作と聞きなされたものである。況やこれは「舟をしぞおもふ」と、哀れに打ち詠めた樣は、まさに遊子羇客の吟と知られる。

早朝浦頭に立つて、霧と波との別れ目に漕ぎ行く舟の島隱れしてしまふまで、見送つた光景である。「舟をしぞ思ふ」實に天地の間には、わづかに人間の消息を傳へる一葉の舟の動搖は、頗る詩人の感哀をそゝるに足るも

のである。朝の氣分が、あざやかに表現されてある。又「朝霧に島隠れゆく」の句だけ斷章的に見て、霧があつては舟の行方は見えまいといふ考から、宣長の島隠れ說も起つたらしいが、これは、初句の「ほの〴〵と」を、序詞のやうに輕く見た誤からきてゐる。のみならず、霧その物の變化の狀態に熟したら、速坐に了解される光景である。五句に「し」の辭を挿んで字餘りとしたので、大きな重みと力量とが加つて、この種の體製の結束を成すに適する。奈良時代の調よりは和びた所はあるが悠遠で、聲調は蒼涼である。けれど公任の九品和歌に、上品の上に擧げて、「詞妙にして餘に心さへあるなり」とあるのは、人麻呂の作と思つたからの詠評だらう。況や「公任この歌をば三年まで案じて、始めて心得られし」とある顯注の說、或は一首十體ありといふ一時軒隨筆の說など、皆耳を尊んで目を卑めた繫說に過ぎない。左註は全然非である。眞淵が、「風調既に人麿のにあらず。剩へ撰者貫之も人麿のとせざることは、後に又勅に依りて撰び出でたる新撰和歌の序文に、『抽ク下始リレ自ニ弘仁一至ルニ于延長一詞人之作ヲ上』と書きて、この『ほの〴〵と』の歌をも收めたり。然らば、嵯峨帝の弘仁にさしつぎて、天長承和の頃の人の歌とせしこと明けし」といつたのは、確論である。

又舊本、今昔物語卷廿四、小野篁被レ流ニ隱岐國一時讀ニ和歌一語の條に、上に見えた「わたの原八十島かけて云々」の歌を擧げて、次に、

明石ト云フ所ニ行キテ、其夜宿テ、九月許リノ事ナリケレバ、明ボノニ不被寢テ詠メ居タルニ、船ノ島隱レヌルヲ見テ、哀ト思ヒテ如此ナム。

ホノ〴〵トアカシノ浦ノ云々

トゾ詠ミテ泣キケル。コレハ、篁ガ返リテ語ルヲ聞キテ、言ヒ傳ヘタルトナリ。

とある。これに據つて、眞淵は、直に篁の作とした。長野義言は更に一歩を進めて、これは篁の自作でなく、篁の島ゆきを送りにきた人の濱邊で詠んだ歌だらうとの新案を立てた。この二首、果して同時の詠であるならば、この集にも八十島の歌に續けて擧げてよい筈ではないか。又一つは篁の名を署し、一つはよみ人しらずと記す筈がないではないか。早まつた斷定である。

あづまの方へ、友とする人、一人二人いざなひていきけり。三河國八橋(ヤツハシ)といふ處にいたれりけるに、その川のほとりに、かきつばたいと面白く咲けりけるを見て、木の蔭におり居て、かきつばたといふいつもじを、句のかしらにすゑて、旅の心をよまむとて詠める

在原業平朝臣

から衣きつゝなれにしつましあればはる〴〵きぬる旅をしぞ思ふ

釋 〇あづまの方へ云々　「あづま」は吾嬬で、東國をいふ。廣い意では、京の東、逢坂の關から彼方を云つた。「八橋」は行嚢抄、名所記、方角抄等に據れば、碧海郡池鯉鮒宿の東方の里村の續きに、舊址があるといふ。確かなことは分らぬ。伊勢物語に、「水のくも手に流れ別れて、橋八つわたせるによりてなむ、八橋といひける」とある。「かきつばた」は燕子花、杜若など書く。和名抄に、馬蘭を加木豆波太(カキツバタ)と訓んだのは謬つてゐる。さてこの詞書の書き方は極めて拙い。この集の詞書は專ら短いのを主としてゐるのに、業平のに限つて長く書いて

ある。伊勢物語の内容は、虚實混淆した頗るしどけないものなのを、頑なに業平の自記なり、實錄なりと信じた者が、物語に據つて、猥りにこの詞書を書き入れ、或は書き改めなどもしたらしい。それ故伊勢物語の本文と較べると、その斧鑿の痕がありありとして見るに堪へない。○から衣きつゝ「なれ」にかゝる序の詞。「から衣」は、もと韓國の衣の義。韓唐の物のめでたいので、からを美稱として用ひるやうになつては、から衣は、單に衣といふも同じ意となつた。こゝは後の意。さて衣は着褻（キナ）らす物故、人に馴染む意をかけた。○つまし妻しである。衣の褄（ツマ）を寄せた。「し」は强辭。○はるばるきぬる　遙々來たの意。「はるばる」は遙かの意に、張るをかけた。張るは衣の緣語。

大意　都に狎れ馴染んだ、衣の褄といふ名の妻がサあるから、別れてはるばると來たこの旅をサ、心細く悲しく思ふわ。

評　初二句のいひなし、萬葉集に、「唐衣きならの里」とあるに似てゐる。「なれ」「つま」「はるばる」など、衣の緣語を點綴し、しかもかきつばたの五文字を、一字づつ句の頭に置いた細工、手練の極である。三句の字餘りなのが、よく上來の語勢に對抗し得て、腰折の難を免れた。結句の字餘りに就いては、上の「ほのぼのと」の歌の條に既に叙べた如くである。氣强く振り切つて京を出ては來たものゝ、長い旅の空には、流石の丈夫心も鈍つて、端なく家人を思ひ出して、轉た繾綣の情に堪へない趣がほの見える。伊勢物語に、「皆人乾飯（カレイヒ）のうへに涙落して、ほとびにけり」とあるは、さもと思はれる。但、この朝臣の詠としては下作である。

むさしの國としもつふさの國との中にある、すみだ川の

ほとりにいたりて、京のいと戀しう覺えければ、しばし川のほとりにおり居て思ひやれば、かぎりなく遠くもきにけるかなと思ひわびて、ながめをるに、わたし守、はや船に乘れ、日もくれぬ」といひければ、舟に乘りて渡らむとするに、みな人物わびしくて、京に思ふ人なくしもあらず。さるをりに白き鳥の、はしと足とあかき、川のほとりに遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、みな人見知らず。わたし守に、「これは何鳥ぞ」と問ひければ、「これなむ都鳥」といひけるをきゝてよめる

名にしおはゞいざ言とはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

釋 ○むさしの國云々　この詞書も伊勢物語の抄錄で、いよ〳〵拙い。「武藏と下總との中にあるすみだ川」とは、今の武藏の隅田川であらう。さて隅田川の名の起源は、川の東の葛飾郡に、隅田の里がある故で、葛飾郡は、この集の時代は下總に屬して、川を挾んで武藏と對してゐたらしい。壽永、建保の間は武藏に屬し、永祿の頃は復下總に屬し、貞享、元祿の頃からは、また今の如く武藏に屬した。委しいことは、高田與清の松屋棟梁集を參照するがよい。「みやこ鳥」は伊勢物語に、「白き鳥の嘴と足と赤き、鴫の大きさなる、水のうへに遊びつつ魚を食ふ」とある。山岡明阿が說に、「都鳥は諸說ありと雖も、鷗なる事疑なし。鷗に大小二種あり。大鷗を

關東の方言に濱猫といふ。その聲の似たればならむ。小なるは鳩ほどありて、その聲細くひくし。墨田川などに來るはこの小鷗なり」とある。この鳥、嘴赤く腹白く、背は鼠色である。けれどふと見ては白く見える。梅亭鞠塢の都鳥考の說は異說である　小野蘭山の本草啓蒙に、「都鳥のミヤは、聲によりておほせ、コドリは、よぶこ鳥、みさご鳥などの小鳥に同じく、大鳥に對しての稱なり」とある。○名にしおはゞ　名に負ひ持つならばの意。「し」は强辭。○言とはむ　物言はむの意。大祓の詞に、「語問志磐根木根立」、萬葉集に、「言とはぬ木すら」など多く見えて、口を利くことをいふ。尋ね問ふの意に用ひるは、後世の轉訛である。○ありやなしや「や」は疑辭。事無くて在りや否やの意。生死の事と見るのはやゝ早からう。

大意　都といふ名を負つて居るならば、定めて京の事をよく知つて居らう程に、どれ話して見よう、都鳥よ、私が思ふ都の人は、今無事で居るか如何かとサ。

評　「言とはむ」は物言はむの意ではあるが、それも「ありやなしや」と物言ふのだから、おのづから尋ね問ふの意にはなる。只語に分寸の差があるのである。都鳥といつたからとて、京の事がわかる筈もないのを、物言はむとする稚氣痴態、いと〳〵哀れ深いものがある。蓋し作者は測らざる風流罪過から、髻を切つて放され、心ならずもの東下り、長い旅寢の果は、又この川一つ渡つて國境を越える事かと思ふと、無量の鄕愁は、その胸に湧いたであらう。これ暫く川のほとりにおりゐて、渡船を躊躇した所以である。流石の夏の長い日も、やがて暮れてくる。船頭はもうしまひ舟だと催促する。厭でも渡らねばならぬ。ほんに情なく感じたであらう。たま〳〵白い鳥が、夕汐時をねらつて魚をあさる。都育の物珍しさに、何鳥かと問ふと、船頭が、「これなむ都鳥」、貴方は都人でも、御承知はないのですかといひさうな口振、只この「都」の一語、何たる懐かしい響を作者

の心の奥に傳へたであらう。かうなると、鳥であらうと何であらうと構つてはゐられない。「いざ言とはむ」の一案が湧然と起つてくる。この心理は、なほ溺れた者が蘆の一葉にもすがるに等しい。その鄕愁の對象となるものは、勿論「わが思ふ人」である。「ありやなしや」と、一正一反してその兩端を叩いたのや、同韻の折り返されたのやで、姿致節奏兩つながら面白く、千古人口に膾炙されたのも、決して偶然でない。

題しらず　　　　　　　　　　　　　よみ人しらず

北へ行く雁ぞ鳴くなる連れてこし數は足らでぞ歸るべらなる

この歌は、ある人「男女もろともに、人の國へまかりけり。男まかり至りてすなはち、身まかりにければ、女ひとり京へ歸りける道に、歸る雁の鳴きけるを聞きてよめる」となむいふ。

釋　○北へ行く雁　春の歸雁である。北はその歸る方角で、卽ち雁の故鄕の方。

大意　故鄕の北の方へゆく雁がサ、あれ鳴くことよ、故鄕へ歸るは嬉しかりさうなものを、あのやうに鳴くは、故鄕から連れ立つて來たことであつた、そのうちの一つが死に失せて、來た時とは數が足らなくなつてサ、歸るのであるさうな、丁度自分のやうにサ。

評　伉儷を失つた人の、歸家途上の作である。たま〳〵北歸の過雁を聞く。我れも歸る旅、彼れも歸る旅、また彼れも鳴き、我れも泣く、外面的の境遇が眞によく相似てゐる。乃ち內面的境遇も我れと同樣で、おなじ不幸に泣くものと看取して、相憐んだ推察は、秋上の歌に「長きおもひは我ぞまされる」、「わがごと物や悲しかるらむ」などゝ、蟲の音を詠んだのと同規である。又「數は足らで」といつて、そのうちのあるものゝ、死に失せた

ることを思はせたのは婉曲である。「連れてこし」の一句は四五句の數の足らで歸るの對映で、悼亡の情がいよいよ強く表現される。

左註は、大和物語から取り合はせたものか。けれども、大體の事情はさうであつたらうと思はれる。又季吟が、「哀傷部に見えた在原滋春が、甲斐國に下りける時のなり」といつたのは妄である。土佐日記にも、「くだりし時の人の數足らねば、古き歌に、『數はたらでぞ歸るべらなる』といふことを思ひいでて」とあつて、古歌とことわつてゐる。滋春は撰者貫之と同時の人である。もし滋春の作なら、詠人しらずの歌とする筈もない。

あづまの方より京へまうでくとてよめる　おと

山かくす春のかすみぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ

釋　○まうでく　參出來(マヰデク)の音便。

大意　もう京の山が見える筈を、隱して見せぬあの春の霞がさ、怨めしいわ、あゝ早く往きたいと思ふ都の境は、何處らあたりであらうぞ。

評　意地の惡い霞よと怨んだ餘意に、婦人の情致が現はれて面白い。又田舍からはじめて上つて來た人では、これほどまで怨む譯がないらしいから、これはもとからの都人の、東から歸つて來た折の作であることは明らかである。韓愈が潮州に貶せられて行く時、「雲橫(ハッテ)二秦嶺(ニ)一家何(ニカ)在(ル)」と作つたのも、往返の別こそあれ、その意は同じである。作者の父壬生益成は、仁和四年遠江介に任ぜられた。若しは秩滿ちて歸京の途次、作者は伴はれてゐて詠じたものか。

二句、六帖に霞ぞ春はとある。これでは、怨めしく思ふは春にのみ限つたやうに聞えて、穏やかでない。

越の國へまかりける時、しら山を見てよめる　　みつね

きえはつる時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける

釋　○越路　北越地方の道中をいふ。

大意　雪の消え果てゝしまふといふ時がサ無いから、越路にある白山といふ山の名のおこりは、雪からでサあつたわい。

評　雪の白色から山の名が生まれたのは、そもそもからの事で、今更らしくいふに當らない。然しさういふのは理窟で、この山に始めて、出會つた作者の感想は、かうなのだ。

あづまへまかりける時、道にてよめる　　つらゆき

絲による物ならなくにわかれ路の心ぼそくもおもほゆるかな

釋　○よる　縒ること。

大意　絲に縒る物は皆細いが、自分の心はそれでも無いのに、家を別れて遠く行く旅の道は、一通りならず、心細くまあ思はれることよ。

評　「心細く」の緣語から絲を聯想し、配合して、離愁に堪へぬ心が弱り細るのを、怪しみ歎いたのである。徒然

草にいふ、

絲による物ならなくにといへるは、古今集の中の歌屑とかやいひ傳へたれど、今の世の人の詠みぬべき事柄とは見えず。その世の歌は姿詞この類ひのみ多し。この歌に限りてかくいひ立てられたるも知り難し。全く必ず歌屑といはば、集中にこれよりも劣つたのが數多ある。兼好が「知り難し」と訝つたのも尤もである。

初二句は、心の絲に縒られぬのをいふのである。それを中村知至が、「絲に縒る物とは、縒り合せある絲といふにて、其の絲を一方にわくれば、二筋となりて細く別るゝ故に、細くと緣語をつらねて、歌とせるなるべし」と解したのは、鑿説に過ぎる。宣長が、「別れ路は絲に縒る物ならなくに」の意に釋いたのは、いよく〳〵いけない。さてこれは離別の意なので、詞書を添へて、殊更に旅行の途次に詠んだものであることを知らせた。拾遺集に、離別の部に再び收めたのは、この意を心得かねての所爲である。

二句、源氏物語總角の卷に、「物とはなしにと、貫之がこの世ながらの別をだに、心細き筋に引き掛けゝむを云云」とある。

かひの國へまかりける時、道にてよめる　　みつね

夜をさむみおくはつ霜をはらひつゝ草の枕にあまたたびねぬ

釋 ○はつ霜　秋冬の交零るはじめての霜をいふ。○あまたたび　數多度。

大意　道中筋は、この頃は夜がサ寒い故に、降る初霜を拂ひく〳〵して、その霜のおく草を枕に、幾度もく〳〵寢たわ。

評 作者が甲斐權少目に補任したのは、寛平六年二月廿八日であるが、その年の秋の末になつて旅裝を整へたものか。京からの公程は十三日と定まつてゐるから、草の枕は「數多たび」といはれよう。「おく初霜を拂ひつゝ」は誇張ではあるが、旅の艱苦が想ひやられる。當時の旅行の狀態を知悉したものは、これを實境實詩と讃するに躊躇すまい。眞淵いふ、「隱れたる所なくて、續け柄面白くあはれなり」と。但幾夜も枕の霜を拂ふのでは、「初」の意義がたじろぐ。

結句、新撰和歌に寐むとあるはわるい。

たぢまの國の湯へまかりける時に、ふたみの浦といふ所にとまりて、夕さりのかれいひたうべけるに、ともにありける人々、歌よみけるついでによめる　　藤原兼輔

夕づく夜おぼつかなきを玉くしげふたみの浦はあけてこそ見め

釋 ○たぢまの國云々　「但馬國の湯」は想ふに古から著名な城崎（キノサキ）の溫泉だらう。「ふたみの浦」は契沖の說に、「伊勢の海にもあれど、これは播磨にて、今土俗ウタミと呼べる所なり」と。秋成いふ、「今但馬國にも二見と呼べる所あり。城崎のある邊なり。兼輔のこゝにて詠まれしとかの里人はいへど、所のさまを見るに然るべからず。この歌によりて附會したるものぞ。彼處へ行かむには、難波より舟に乘りて播磨路を經つゝ、高砂のあたりより舟を上りて、北の方山路分け入る道あり。いにしへはその道をや行きけむ。然れば、播磨なるぞ道の行

手なる」と。いづれもしかと定め難い。「夕さりのかれいひ」は夕飯の意で、「かれいひ」は乾飯即ち糒(ホシヒ)である。古へは行路に必ず糒を携へて、所々で水に浸して食つたのである。「ともに」は共にの意、隨伴の意ではない。○夕づく夜　日の入りて夜に成り行く頃をいふ。　秋下「夕づく夜をくらの山に」の條に既出。○玉くしげ「玉」は美稱。「くしげ」は櫛笥で、化粧道具を容れる笥をいふ。蓋(フタ)、身(ミ)、懸子(カケゴ)がある。○ふたみ　二見に、蓋身をかけた。○あけて　明けてに、開けてをかけた。

大意　夕暮の闇い頃は、分明には見えぬものを、それを無理に見ようより、玉櫛笥の蓋や實(ミ)やといふ名のこの二見の浦は、櫛笥の蓋を開けてといふやうに、夜が明けてからサ、とくと見ようと思ふわ。

評　詞書に、「ついでに」とあるに注意を要する。倶にゐる人達は皆この浦の景色に見耽つて、歌詠みかはしなどしたとすると、やがて夜も更けたらしいさまである。されば、明日になりてこそと警告した歌で、乃ち事のついでなのである。地名に據つた緣語の鎖り、先づ狂歌の一體である。かやうの體は、平安の京になつて發達したもので、當時の人士は珍しがつて喜んだらしい。二句の下、意解の如くに詞を補はないと、「を」の辭に打ち合ふべき詞がない。

新撰和歌には、三句玉手筥、四句ふたみの浦をとある。

惟喬(コレタカ)のみこのともに、狩にまかりける時に、あまの川といふ所の川のほとりにおりゐて、酒などのみけるついでに、みこのいひけらく、「狩して天の川原にいたるといふ心を

よみて、さかづきはさせ」といひければよめる

ありはらの業平朝臣

かりくらし棚機つめに宿からむ天の川原にわれは來にけり

釋 ○惟喬のみこ云々　これも伊勢物語によつて書き加へた後人のしわざであらう。落筆唐突で、他の例に協はない。伊勢物語、惟喬親王交野の櫻狩の段に、

御供なる人酒を持たせて野より出で來たり。この酒をのみてむとてよき所を求め行くに、天の川といふ所にいたりぬ。親王に右馬の頭大みき參る。親王宣ひけるは、交野を狩りて天の川のほとりにいたるを題にて盃はさせと宣ひければ、詠みて奉りける。

とあつて、この歌を擧げてある。「天の川」は河内國交野郡（今北河内郡）牧野村禁野にある。○かりくらし　狩して日を暮らしての意。句の下、ての助辭が畧かれてある。勢語を釋く者、その本文に泥んで、櫻狩としたものがあるが從ひ難い。櫻狩を打ち任せて只狩とのみいつた例がない。○棚機つめ　秋上「天の川もみぢを橋に」の條に既出。○天の川原　秋上「あき風の吹きにし日より」の條に既出。

大意 いつその事今日一日を此處に狩し暮らして、棚機樣に今宵の宿を借らうぞ、歩きまはつて、丁度幸ひ棚機の居る天の川の川原に、思ひかけず來たわい。

評 「棚機つ女に宿借らむ」の唐突にして、且奇矯なのに人耳を欹てしめて、さてこの天の川を、かの天の川に暗喩して、天上の天の川原に來たと斷じた。作者の人を飜弄すること實に甚しい。この技倆は業平に至つて始め

て見られた。到底諸家の企及すべき所でない。景樹は、「下に漢の張騫が槎にのりて、漢を窮めし故事を思へり」といつたが、恐らく無用の說と思はれる。初句を古來の多くの註者、四句の上に冠せて、狩り暮らして天の川原に來りけりの意に釋いてゐるのは疎漏である。

みこ、この歌をかへす〴〵よみつゝ、返しえせずなりにければ、ともに侍りてよめる　きのありつね

ひとゝせに一たび來ます君まてば宿かす人もあらじとぞ思ふ

釋 ○みこ云々　伊勢物語には、前の歌を擧げて、「と聞えければ、この歌をかへす〴〵誦し給ひて、返しえし給はず。紀の有常、御供につかうまつれり。それが返し」とある。○ます　座すで、こゝは敬語。

大意　いや〳〵天の川では、一年に一度づつお出でなされる彥星の君を待つことだから、他の者が宿を借らうといつても、借す人も容易にあるまいとサ思ふわ。

評 彥星のことを、「一年に一度來ます君」と婉曲にいひ成し、織女星のことを、「宿かす人も」と大らかにいつたのが、含蓄があつて面白い。業平の歌の宿借りて寐て行かうといふのを承けて、織女は操正しく、思ひ入つて彥星の君を待てば、天の川原には宿の借し手もあるまいと、裏を缺いて出た。貞操な織女と、色めいた業平とが自然對照されてゐる。景樹の、彥星を惟喬親王に擬へたといふ說は諾ひ難い。親王は既に天の川原に來て居られるのだから、更に「待てば」とはいはれない。狩場先の交野の院で、年若な親王の思ひ上つて居られる御容體、天が下の好き者業平が大御酒奉らうとするを抑へて、酒の好下物としての歌の御所望に、取り敢へず揶揄樣と

寢て行かうの、例の本性を見はしたたはれ言、素より歌好きの親王も、業平の歌の出榮えしたのに臆れてか、返歌が出來かねて呻吟して居られると、座に侍つてゐる有常が默しかねて、この一吟を提げて助け船と出たなど、その夜の狀況を想像すると、頗る興味のある團居であつたらう。

朱雀院の奈良におはしましける時に、手向山にてよめる

すがはらの朝臣

このたびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまに〳〵

釋 ○朱雀院云々 「朱雀院」は宇多上皇を申す、委しくは秋上「をみなへし秋の野風に」の條に既出。「手向山」は大和の奈良のではあるが、今いふ若草山の南麓に當る手向山神社の處ではあるまい。往時の奈良に入る本街道は奈良山の中央部歌姬越と稱する處で、奈良坂もその坂である。奈良に出入する者は皆その道祖神に手向したものと見え、遂に手向の名がこの山に附いたと思はれる。○このたび 度の意に、旅をかけた。○ぬさもとりあへず 「とる」は何にまれその事を取りまかなふ意である。「あへず」は秋下「千早ぶる神の忌垣に」の條に既出。萬葉集には不堪をアヘズと訓んである。○神のまに〳〵 神のお心任せにの意。「まに〳〵」は儘に〳〵の略で、隨意の義。

大意 何時はともあれ此度の旅は、秋の時分なので、道の神にお手向け申す筈の幣も見すぼらしくて、捧げるに堪へぬわい、たゞこの手向山の見事な紅葉の錦を、幣として捧げますから、神のお心任せに御受納下され。

評 宇多上皇のこの御幸は、昌泰元年十月の事で、貞數親王及びこの歌の作者道眞を從へ、途に道眞の高市郡の

山莊に宿つて、遂に吉野の宮瀧に至り、龍田山を經て河内に入り、住吉社に詣でられた。奈良の御通過は、十月中の事と思はれるから、紅葉は手向に眞盛りであつたらう。抑も幣は神に捧げる布帛の料で、通例旅行者の携帶する切幣などは、ほんの衣裳の裁屑や何かの、粗末な物と想はれる。錦などは貴重品だから使はない。そこでこの紅葉を錦に譬喩して、これほど立派な錦は、神のお心任せに賞翫なされてるから、我が數ならぬ幣の如きは捧げるまでもないといふ意を、更に一轉捩して歌つた。畢竟幣を對照の具に用ひて、紅葉のめでたさを歌つたものである。「このたびは」とことわつたので、これまでしば〳〵手向を越えた事が知られた。それは高市の山莊への往返でゝもあつたらう。萬葉集に、

いなだきにきすめる玉は二つなしこなた彼方も君がまに〳〵（卷三）
春風の音にし出なばありさりて今ならずとも君がまに〳〵（卷四）
玉きはる吾が山のべに立つ霧の立ちとも居とも君がまに〳〵（卷十）
たらちねの母に知らえずわが持てる心はよしゑ君がまに〳〵（卷十一）

の儔、なほ澤山ある。作者はこの風體を學んで、やゝ平安朝の皮肉を加へた。

初二句に就いて諸說ある中に、或は院のお供だから、私の幣は取りあへずの意といひ、或は院のお供で多忙の爲に都を出た時、幣も取り持ちあへずの意ともいふのがある。景樹いふ、

私の幣はとるに堪へずとならば、君が爲の幣をばいよ〳〵とるべきなり。打ち任せて此度はとらずといふべけむや。また院は微行を好ませ給ふと雖も、大和、攝津、河内の遠方を巡幸し給ふらむは、流石に搖り滿ちたる御しつらひなりけむ。況や右大將ばかりの人の、御供に仕へ奉り給ふなるをや。卑賤の子の、周章し

く取る物も取り敢ず騷ぎ立つと倖しからむや。これとりあへずといふ詞を、急遽蒼卒の意と思ひ泥めるより
の僻言なるべし。

と。この駁論はよろしい。

手向にはつゞりの袖もきるべきに紅葉にあける神やかへさむ

素性法師

釋 ○つゞりの袖　僧服で、衲衣の事である。人の捨てゝ顧みぬ糞掃に均しい襤褸を拾ひ集め、これを綴つて衣とするのでいふ。もと袈裟の異名である。天竺では、袈裟の外に衣はない。日本支那の寒國は、特別に下に衣裳を着る。○あける　飽きてあるの約。

大意　この手向山の神への手向には、出家の身もこの衲衣(ツヾリ)の袖をも切り刻んで、幣にして手向けてよい筈なのに、あの錦のやうな見事の紅葉をば幣と受けて、思ふ存分見て御座る神樣だから、衲衣の袖の小切などは、入らぬといつてお返しなされる事であらうか。

評 それ故にさし控へて居るの餘意がある。志は松の葉、切つてはならぬ袖さへも切るべしといふのが、既に面白いのに、「紅葉に飽ける神やかへさむ」の意外の落想。神意を人間の心理と混一にしての想像に、更に一段の詩趣を生ずる。又「つゞりの袖」とあるに對へて、おのづから神の飽き給へる紅葉は、錦の如くあるべきことが想ひ知られる。畢竟上のもこれも、手向の神を取り合はせて、紅葉のめでたい限りを形容したので、面白いのは、神やかへさむ綴の袖、格調の高いのは、神のまに〳〵の紅葉の錦である。

作者は當時、石上の良因院の住持であつた。宇多天皇はこの大和御幸に、作者を召して戯れに良因朝臣（ヨシヨリノ）の假名を賜ひ、供奉を仰せ付けられた。詩人道眞、歌人素性を左右に從へられて名所巡り、いかに興味の饒い御幸であつたらう。當時他に歌人もあり詩人もあつたが、特にこの兩人に供奉を仰せつけられたことは、道眞も素性も、大和の地に殊なる緣故があつたからである。

古今和歌集卷第十

物名

うぐひす　　　藤原敏行朝臣

心から花のしづくにそぼちつゝうくひずとのみ鳥の鳴くらむ

【釋】○物名　モノ、ナと訓む。物名は名詞の事であるが、こゝは詠歌の技工上の特殊の名稱に用ひられてゐる。即ち名詞を他の意に取り成して、歌のうちに詠み込むをいふ。奥儀抄に、「隱題歌、古今集并拾遺集の物名部といふはこれにや。近代の人これを稱二隱題一也。件歌は爲レ題物の名を歌の表に置きて、他の心を述ぶる也」と見え、八雲御抄には、「物名、これは隱題也。物の名を隱して詠む歌なり。古今などには、隱す物をやがて題にて、多くはその心を詠めり。」とある。その組織の種類からいへば、隱すべき名詞即ち物名をやがて題としてそれを詠じたのと名を歌の表に置いて、他の事を歌つたのとの別がある。さて、この體製は萬葉集に見えない。平安朝になつて、國歌の復興に連れて創められた一新體であらう。詩に離合詩といふ一體がある。文體明辨附錄に、「按離合詩有二四體一云々。其二、離二一字偏旁一於二一句之首尾一、而首尾相續爲二一字一。其四、不レ離二偏旁一、但以二一物二字一離二於一句之首尾一、而首尾相續爲二一物一云々。」と見えて、唐の陸龜蒙が詩、

松間斟、
子山園靜憐ニ幽木一。公幹詞淸詠ニ華門一。月上風微瀟洒甚。斗醪何惜置ニ盈樽一。

の如きは、その一例である。國朝詩人、また、字訓詩の體あり。本朝文粋に、淸原眞友が詩、

禾失曾知レ秋。中心豈忘レ忠。里魚穿レ浪鯉。江鳥度レ峽鴻。火盡仍爲レ燼。山高自作レ嵩。色絲辭不レ絕。凡虫泣ニ寒風一。

の類である。是等の遊戯文字は、專ら詩にのみ行はれてゐたのを、復興期の歌人等が欽羨の餘り、こゝに物名の一體を創めて、わが誇としたものだらう。（以上岡井愼吾の說に據る）〇心から　「から」はよりの意。〇うくひず　憂く干ずの意。鶯を隱した。

大意　おのが心から、花の雫に濡れ〳〵して、それを人の知つた事のやうに、何で、つらく乾かぬとばかり、あのやうに鳥が鳴くのであらう。

評　歌の意も、鶯を詠んである。「憂く干ず」は、鳥の鳴く理由をいつたまでゝ、うぐひすと鳴くのではない。それを思ひ誤つて、大江匡房が、

　いかなれば春くるからにうぐひすのおのれが名をば人につぐらむ

を初めて、鳴聲として詠んだ歌が後世に多い。

　　ほとゝぎす

くべきほどときすぎぬれや待ち佗びてなくなる聲の人をとよむる

釋 ○くべきほどときすぎぬれや　來べき時期過ぎぬれやの意。時鳥を隱した。「ぬれや」はぬればにやの意。○とよむる　響動せしむる意。

大意　時鳥が待つ雌の來る筈の時分が過ぎたかして、それを待ちづらがつて鳴き立てる聲が、時鳥が鳴く／＼と、人をワヤ／＼させるのであらう。

評　時鳥のうへの戀を詠じて、下には作者自身の戀を思つたのだらう。

うつせみ　在原滋春

浪のうつせみれば玉ぞ亂れけるひろはば袖にはかなからむや

釋 ○浪のうつせみれば　浪の打つ瀬見ればの意。空蟬を隱した。「うつせみ」に二義ある。現し身の轉語である現せ身の意と、空蟬卽ち蟬の蛻の意とである。但後の方は更に一轉して、直に蟬の事にもいつた。○はかなからむや　「や」は歎辭。

大意　浪の打つ川の瀬を見れば、見事の玉がサ亂れて散るわい、しかしあの玉は、袖に拾ひ入れようならすぐ消えて、はかないだらうよ。

評　歌は水珠を詠んでゐる。四句は袖に拾はばを倒置した。

かへし　壬生忠岑

袂よりはなれて玉を包まめやこれなむそれとうつせみむかし

釋 ○袂よりはなれて　袂より外にてといふ程の意。○包まめや　包まむやはの意。「や」は反動辭。○それとそれなるとの意。○うつせみむ　移せ見むの意。空蟬（ウツセミ）を隱した。

大意　貴方は、袖に拾はゞはかなからむと仰つしやるが、袖を除けての外に、玉を何に包まうか、包む物はありませんわ、やはり袖の上に、これがサそれであると取り移して見せなさい、私が見せうわサ。

評　汝は移せ、我は見むとあるべきを、主語を略いて單語を重疊して、簡淨にいひなした。この語法は後世の戲曲文に、多く襲用されてゐる。

うめ　　よみ人しらず

あなうめに常なるべくも見えぬかな戀しかるべき香は匂ひつゝ

釋 ○あなうめに常なる　「あなう」で切り、「めに常なる」と讀む。「あな」は歎詞、「う」は憂しの畧、「めに常なる」は目に何時も觸れるをいふ。梅を隱した。

大意　梅の花はあゝ憂いわ、すぐ散つてしまつて、目に常住見られさうにも見えぬことよ、その癖後で戀しかりさうな香は、匂ひ〳〵してサ。

評　「べく」「べき」が重複してゐる。

かにはざくら　　つらゆき

かづけども浪のなかにはさぐられで風ふくごとに浮き沈む玉

釋 ○かにはざくら　和名鈔に、「樺木皮、可=以爲_炬者也、和名加波、又、加仁波」。又、源氏物語に、「外の花は八重さく花櫻盛り過ぎて、かばざくらは開け、藤は遲く色づきなどはすめるを」とある樺櫻がこれである。宣長は「和名鈔に櫻桃、一名朱櫻、和名波々加、一云邇波佐久良とあり。邇の上に加の字の脱ちたるにて、加邇波櫻なり」といつたけれど、樺櫻は花が白いから、朱櫻とはいへない。小野博いふ、「樺木は、葉は桑の葉に似て尖れり、四月に白色の細花開く、樹皮白くして黑斑あり、横理ありて櫻皮と同じ、物など纏き綴ちするに用ゐる」と。○かづけども　潛けども。○なかにはさぐられで　中では探られないで。樺櫻を隱した。

大意　海の底に潛つて取らうとするけれども、浪の中では探り當てられないで、風の吹く度每に、浮いたり沈んだりする玉であることよ。

評 滄海に珠を撈る趣を思つて、波の白玉を詠んだのである。

すもゝのはな

今いくか春しなければうぐひすもものはながめて思ふべらなり

釋 ○すもゝ　酸桃の義で、李のこと。○うぐひすもものはながめて　李の花を隱した。

大意　春は今幾日あるぞ、もはや幾日も春が無いから、鶯も自分と同じやうに、辛氣さうに物思をする樣子であるわ。

評 春上に「鳴きとむる花しなければ云々」と詠んだのと、着想も叙法もおなじで、作者も同じ人である。景樹は、「ながめて物はとは誰れもいふべきを、倒置したるが調のいみじくめでたきに、それはた物名となれ

る、奇なり」といつた。

からもゝのはな　ふかやぶ

あふからもものはなほこそ悲しけれ別れむ事をかねて思へば

釋　○からもゝ　杏のこと。韓桃、辛桃の兩義がある。○あふからもものはなほ　杏（カラモヽ）の花を隱した。

大意　逢へば嬉しい筈なのを、逢ふにつけてもやはり物悲しいわ、逢へば又別れる事のあるのを、豫て思ふからサ。

評　離別の「別るれど嬉しくもあるか」の歌と、その意は反對である。但これは平叙。

たちばな　をのゝしげかげ

足引の山たちはなれ行く雲のやどり定めぬ世にこそありけれ

釋　○たちはなれ　橘を隱くしてある。○行く雲の　「の」はの如くの意。

大意　山を立ち離れて行く雲の、宿り所の定まらぬやうに、行末の止まり所の、知られぬ世の中でサあつたわい。

評　人生を行雲流水に擬へて歎ずるのは、支那の文學に、昔から數多見えたところである。只叙法の流暢さを味ふがよい。秋成いふ、「この題は、山たちばなとありしを、後に、山の字を寫し洩しゝか」と。山たちばなは、今の藪柑子といふ物である。

をかたまの木　　ともののり

み吉野の吉野の瀧にうかび出づる沫をかたまのきゆと見つらむ

釋 ○をかたまの木　眞淵は、「岡玉の木なり。楢の木にて、その實玉の如し。古へ玉を貴べる習慣より、まことの玉ならねども、圓きは緒に貫きて、身にも帶びたるが故に、かゝる實あるをば玉の木といへり。その岡にあるをいふ」といつた。下に、山柿を竝べたので見れば、岡の玉の木かも知れないけれども、玉の木の說は受け取りにくい。谷川士淸、橘守部はいふ、「招魂（ヲギタマ）の木の轉ならむ。神の御魂を招ぎ遷す木の意にて、榊なるべし」と。安齋隨筆、閑田耕筆、茅窓漫錄、松屋叢考にはその圖を出してある。○沫をかたまのきゆ「たま」は玉である。をかたまの木を隱した。

大意 吉野川の瀧津瀨に、浮び出ては消える水の沫を、玉が出て又消えるのだと、人が見るであらうか。

評 「うかび出づる」と「消ゆ」とを掛け合はせて、沫には消ゆ、玉には浮び出づるの詞を省いた。

やまがきの木　　よみ人しらず

秋は來ぬ今やまがきのきりぎりすよなよな鳴かむ風の寒さに

釋 ○やまがき　和名鈔に、「鹿心柿、柿小而長也、和名夜末加岐（ヤマガキ）」とある。千秋いふ、「世に、信濃柿とも、吉野柿ともいふ。材に黑柿といふもこれなり」と。○今やまがきの　山柿を隱した。

大意 秋ははや來たわ、この風の寒さに、籬のきりぎりすが、今のまに夜な夜な鳴く事であらうか。

評 すなほな點は、彫琢技巧の作に似ない。

あふひ　かつら

かくばかりあふひの稀になる人をいかゞつらしと思はざるべき

釋 ○あふひ　二葉葵である。平安の京になつて、加茂の神事には必ずこの草を用ひる。○かつら　桂である。これも加茂の神事に用ひた桂で、和名鈔に、「楓一名攝、和名乎加豆良」とあり、又、「桂一名梫、和名女加豆良」とある。古事記でも萬葉集でも、楓をカツラと訓んだ。この楓は今、紅葉を愛ではやす槭樹ではない。貝原篤信いふ、「其の葉白楊に似て、兩々相對ふ、加茂祭に用ふるかつら是れなり」と。西宮抄に、「四月祭時、近以レ桂爲二挿頭一」と見えてゐる。葵と桂とを合はせて、諸鬘といふとか。葵は鬘くこともあるから、こゝのを同じ物に見て、葵鬘の義と思ひ誤つてはならぬ。○あふひ　逢ふ日である。葵を隱した。○いかゞつらし　桂を隱した。

大意 これ程逢ひ見る日の稀になる人を、どうしてまあ、つらい事と思はずに居られようぞ、實に辛い事と思ふわ。

評 平安時代の葵に逢ふ日をいひかける習慣は、文獻上ではこの歌から始まつたと見られる。逢ふ日とあるので戀歌によまれた。とにかく二箇の名詞を耳立たぬやうに取り扱つたのは、器用なものである。

人目ゆゑのちにあふひの遙けくはわがつらきにや思ひなされむ

釋 ○あふひ　逢ふ日、葵を隱した。○わがつらき　桂を隱した。

大意　人目を憚る故に、これから後に若し逢ふ日が間遠になるならば、その譯も知らずに、自分がつらい仕打をすることのやうに、思ひ成されようか。

評　前の歌の手際にくらべると、大分劣つてゐる。

くたに　　　僧正遍昭

散りぬればのちはあくたになる花を思ひ知らずもまどふ蝶かな

釋 ○くたに　童蒙抄に、「苦丹と書く、澤山にある草なり」、榮雅抄には、「蔦の類」などあるは、源氏物語寄木の巻などに見えた、こたにと混じたのだらう。今は少女の巻に、「花橘、撫子、さうび、くたに、などやうの花のくさぐ〜を植ゑて」と見えたくたにである。異名分類抄に、「苦膽」(龍膽ノ一名逍遙院説 八重藥ト云フ草トゾ)といひ、また前田夏蔭説の「嘉祐本草に、酸漿一名苦耽とあれば、酸漿なり」といふは、倶に韻の假名が差つてゐる。膽も耽もタムで、タニではない。眞淵の續萬葉論に、「木丹の木の音を上略して、くたにと云へるなるべし。字書に、「木丹梔子花也」とありて、即ちくちなしなり。五月花咲きて、殊に子は黃色にて、絲など染めて、女など翫ぶ物故に、源氏にも夏の方に書きける歟。牡丹の類にて、芍藥かともいふ説は、夏の物なれば叶へども、芍藥にくたにの名あること、未だ知らず」と論じた。契沖は苦丹で、牡丹の類だといつた。想ふに、芍藥の根は藥に用ひ、花は牡丹に似てゐるから、或は、苦丹の名を負せたのであらうか。○あくたに　芥に、苦丹を隱した。

大意 散つてしまへば、後は芥になる、何の事も無い花であるものを、それをてんで合點せずに、あのやうに迷ふ蝶であることよ。

評 例の色卽是空の觀想であらう。結句、六帖にまどふけふかなとあるは誤寫であらう。

さうび　　つらゆき

我れはけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり

釋 ○さうび　薔薇の字音、シヤウビの轉。和名鈔に、「薔薇、陶隱居注云營實、和名無波良乃美（ムバラノミ）」とある。又、「うばら、むばら、いばら」と訓じた。高駢が、「一架薔薇滿院香」白居易が、「階底薔薇入レ夏開」の句の趣を考へると、其の枝は長く生ひ延びて、墻などのやうになる物であらう。この種の薔薇は今でもある。○けさうひに　今朝初（うひ）にである。「うひ」は初冠などの初で、始めてゞある。さうびを隱した。

大意 自分は薔薇の花を今朝初めてサ見たわ、この花の色は、人のいふやうな面白い物では無くて、仇なる物ぞといふべきであつたわ。

評 人の愛で翫んで、面白い花といひ囃すのに對へて、我は仇な物と覺悟したといふ。宣長が、人の仇な物といつたのを、今思ひ當つた趣に釋いたのは誤つてゐる。想ふに、この薔薇は、常の野茨ではないから、支那から舶來の當坐などで、ひどく珍しかつたものであらう。貫之もこの時はじめて見たので、「うひにぞ見つる」といつたと思はれる。

をみなへし　　　　とものり

しら露を玉にぬくとやさゝがにの花にも葉にも絲をみなへし

釋 ○玉にぬくとや　玉にして貫くとてか。○さゝがに　蜘蛛をいふ。もと蜘蛛の枕詞である。小蟹の義といひ、笹原に住む蟹の意ともいひ、又鹿持雅澄は、「笹の根は入り組みたる物故、笹が根の組むといふを、蜘蛛にいひかけたり」といつた。○絲をみなへし　絲を皆綜して、綜は延ふる意。女郎花を隠した。

大意　白露を玉にして貫くといつてか、蜘蛛がこの露の置く女郎花の花にも葉にも、絲を皆引き張つた。

評 秋上「秋の野におく白露は玉なれや」と同想。

○

朝露をわけそぼちつゝ花見むと今ぞ野山をみなへしりぬる

釋 ○野山をみなへしりぬる　野山を皆歩いて知つたの意。女郎花を隠した。

大意　女郎花の花を見ようと思つて、朝露を分けて濡れ〱して、今はサ野山といふ野山を、悉く歩いて知つたわ。

新撰萬葉に、初二句露草にぬれそぼちつゝ、下句しらぬ山べをみなへしりにきとある。

朱雀院の女郎花あはせの時に、をみなへしといふいつも

じを、かしらにおきてよめる　つらゆき

をぐら山みねたちならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき

釋 ○朱雀院のをみなしあはせ　秋上「女郎花あきの野風に」の條に既出。宇多帝譲位の翌年、朱雀院の御所で、皇后と競はせ給うたのである。○をぐら山　秋下「夕月夜をぐらの山に」の條に既出。

大意 小倉山の峰を立ち馴して鳴く鹿の、これまで經て來たであらう秋の數を、知る人がサ無いわ。

評 これは折句である。業平がかきつばたの五文字を置いて、「唐衣きつゝなれにし云々」(羇旅の部參照)と詠んだのと同じである。然るにこれは物名に入つてゐる。思ふに、彼れは題詠の歌でないから、その重い意味に從つて、羇旅に收めたのであらう。

拾遺集に再出したのには、下句へにける秋をしる人のなきとあるが、詞が劣る。

きちかうのはな　とものり

あきちかうのはなりにけり白露のおける草葉も色かはり行く

釋 ○きちかう　桔梗の字音。和名抄に、「和名阿里乃比布木(アリノヒフキ)」とある。卑しげでもあり、詞も長いから、字音にいひならしたのだらう。○あきちかうのはなりにけり　秋近く野は成りにけりの意。「近う」と音便を用ひたのは本歌には例のない事だが、物名の歌なので、止むを得ぬ變例であらう。桔梗の花を隱した。

大意 野の景色を見ると、夏も深くなつて、物悲しい秋の時節が、思ひがけず近くなつたわ、そのしるしには、

この野の露の置いてある草も葉も、おひ〳〵色が變つて行くわ。

評 上句は晩夏、下句は仲秋の頃のさまで、一致しない。雅嘉は上句を助けて、「秋の物悲しき頂上の時節の近づきたる意」とし、景樹は下句を助けて、「萩の下葉などは、五月の末より色付き黄ばみて散りもすべければ」といつてゐるけれど、このまゝではさうも聞えない。

しをに　　よみ人しらず

ふりはへていざ故里の花見むとこしをにほひぞ移ろひにける

釋 ○しをに　和名鈔、「紫苑一名紫蒨、和名能之、俗云之乎邇」とある。今シヲンといふ。○こしをにほひぞ　來しを匂ぞ。「匂」は花の色澤をいふ。紫苑を隱した。

大意 どりや古里の花を見ようと思つて、わざ〳〵來たものを、殘念にもう、花の色澤が變つてしまつたわ。

りうたむのはな　　友のり

わが宿の花ふみしだくとりうたむのはなければや此處にしもくる

釋 ○りうたむ　和名鈔に、「龍膽、和名衣夜美久佐、一云邇加奈、味甚苦、故以膽爲名也」とある。今リンダウといふ。眞淵は、「唐音の轉か」といつてゐる。○ふみしだく　蹂み拉ぐこと。○とりうたむのはなければや　鳥打たむ野は無ければにやである。龍膽の花を隱した。

大意 自分の庭の大事の花を踏みにじる、あの鳥を打たうわ、あれは住む野が無いかして、とかく此處にサ來

る、迷惑なことよ。

評 丸子を飛ばして小鳥を彈つことは、支那の詩にしば〳〵見えてゐる。こゝも其の趣であらう。杖などで打たうとするのではあるまい。

二句、六帖、友則集にふみちらす、結句、友則集にこゝにしも鳴くとある。

をばな　よみ人しらず

ありと見て賴むぞ難きうつせみの世をばなしとや思ひなしてむ

釋 ○をばな　尾花。その義は薄の穗に出たのが、獸の尾に似てゐるからだといふ。眞淵が、女郞花に對して、男花といつたのであらうとて、萬葉集巻廿に「秋野には今こそ行かめものゝふのをとこをみなの花匂ひ見に」の歌を引いたのは疑問である。をとこをみなは花の名ではない。たゞ男女を花に譬へたのである。或は、麻花の義だともいふ。その狀が一總の苧の亂れたのに似てゐるからだらう。○うつせみの　世にかゝる枕詞。○世をばなし　尾花を隱した。

大意 すべて物は有ると思つても、はかなくて賴みには成り難いわ、この世の中をばいつそ無いものと、料簡を着けて見ようか。

評 例の一切空の無常法門である。

けにごし　やたべの名實

うちつけにこしとや花の色を見むおく白露の染むるばかりを

釋 ○けにごし　和名鈔に「牽牛子、和名阿佐加保(アサガホ)」とある。今の朝顔である。但支那では花を牽牛花といひ、實を藥用にする時、牽牛子と呼んだ。牛の字は音便で、午の音と同一になつたのだらう。○うちつけにこし　打ち付けに濃しである。「打ち付け」は唐突の意。牽牛子を隱した。○ばかりを　ばかりなるをの畧。

大意　牽牛子の花を見て、誰れも一寸見るからして、濃い色ぞと見ようが、何あれは、花のうへの白い露が染めたまでの、何でもない物であるものをサ。

評　牽牛花をよんだのである。

二條の后の、春宮(トウグウ)のみやすむ所と申しける時に、めどにけづり花させりけるを、よませたまひける　　文屋康秀

花の木にあらざらめどもさきにけりふりにしこのみなる時もがな

釋 ○二條の后云々　「二條后」幷に「東宮の御息所」の事は、春上「春の日の光にあたる」の條に既出。「めどにけづり花」のめどは蓍(メド)と馬道(メダウ)との二說がある。蓍は、或は蓍萩であらうとも、或は玉箒俗に箒草と呼ぶ物であらうともいはれ、いづれもその莖に削花(ケヅリハナ)をさして作つた由である。又、馬道は和名鈔に「俗音、馬多宇(メタウ)、向レ堂之道」とあつて、殿中の眞中の板廊下をいつた。そこに削花をさしたといふことである。削花は木を削り掛けた造花である。延喜式に「金銅花瓶二口、菊削花二枚」と見え、其の他のをも考へ合はせてみると、佛事に多く用

ひたらしい。これは削り木と同じ物で、蜻蛉日記に「紙屋紙に書かせて、立文にて、削り木に附けたり」とある。この文は、源高明公の北の方の尼になるのを弔はうとて贈つたのだから、やはり佛事に緣ある物だとの證據になる。又思ふに、馬道の說は諸け難いやうだ。歌も、花のない木に花の咲いた趣をいつてゐるから、蓍に削花をさした物である事は確かである。後世削り掛けといふ物を門にさすけれど、それは粥杖の移つたもので別である。○あらざらめども　蓍を隱した。○このみ　此身に木の實をかけた。

大意　蓍に附けた削花を見ると、花の咲く木でも無からうけれども、花が意外に咲いたわ、それだから年古りた木にも、實の結る時もあつてほしい、卽ち年寄りました私のこの身も、何卒成り出る時節もあつて欲しいと存じます。

評　上句は、俗に「煎豆に花が咲く」といふのと同想で、春上の「春の日の光にあたる云々」と、同一の情願である。歌も同調。

しのぶぐさ　　きのとしさだ

山高みつねにあらしのふくさとは匂ひもあへず花ぞちりける

釋　○しのぶぐさ　秋上「君しのぶ草にやつるゝ」の條に既出。○あらしのふくさと　忍草を隱した。

大意　近くの山が高くて、常々嵐の吹く里は、咲き匂つて居る間もなく、花がサ散つたわ。二句、六帖に峰にあらしのとある。

やまし　　平あつゆき

時鳥みねの雲にやまじりにしありとは聞けど見るよしもなき

釋 やまし　山にある羊蹄菜か。和名鈔に「蕈、和名之布久佐、一云之、羊蹄菜也」とある。又、同鈔に、知母をヤマシと訓んでゐる。○雲にやまじりにし　山羊蹄を隱した。

大意 時鳥は、峯の雲の中に飛んで混つてしまつたかもしれぬ、鳴聲によつて、居るとは聞くけれども、形は見えようも無いわ。

からはぎ　　よみ人しらず

うつせみのからはきごとにとゞむれど魂の行方を見ぬぞ悲しき

釋 ○からはぎ　萩花集說に、草萩に對したる木萩の名とした。思ふに幹萩の義であらう。眞淵が「一種枝の細く花の色深きを、唐撫子の類にて唐萩と呼べる歟」といつてるのは、論據のない說である。又、千秋が、からをぎの誤であるとして、清暑堂の御神樂の時に、人長の持つ枯荻であらうかといつてるのは、妄斷である。○うつせみ　空蟬。現し身の意をかけた。○からはきごとに　骸は木毎にに、棺毎をかけた。棺は古くキといつた。幹萩を隱した。○魂　たましひ。なき魂。

大意 蟬の蛻殼は、木毎に留めてあるけれども、その身は何處にか飛んで、往く方が知れぬ、そのやうに、人間も死んでしまふと、骸は棺毎に留めてあるけれども、魂ひの行方の見えぬのがサ悲しいわ。

評 靈魂不滅の思想は神代からあるが、佛教傳來この方盛んになつてきた。しかも妄執によつた死者生者の魂は

物の怪となつて迷ふと信じたものゝ、その行方を見屆た者とてはやはりないのであつた。

かはなぐさ　　ふかやぶ

うばたまの夢に何かはなぐさまむうつゝにだにも飽かぬ心を

釋 ○かはなぐさ　和名鈔水菜類に、「水苔一名河苔、和名加波奈」とある。これは河藻である。景樹は、「既に川菜といへるに、草の字を添へむこといかゞ、甘菜草、水菜草といふ事なし」といつた。○うばたまの　夢にかゝる枕詞。「うばたま」は古言ではぬばたまといつた。和名鈔に、「射干、一名烏扇、和名加良須安布木」とある烏扇の實で、其の色は黑い。野にある物故、野眞玉の義であらうとも、野羽玉の義であらうともいふが、判然しない。色の黑い物だから黑と續け、轉じて夜と續け、更に轉じて夢とも續けた。○何かはなぐさまむ　川菜草を隱した。

大意　戀しい人を夢に見たとて、何で心が慰まうぞ、慰むことでは無い、現在見てさへも、まだ飽き足らぬやうに思ふ心であるものをサ。

さがりごけ　　高向のとしはる

花の色はたゞ一さかりこけれどもかへす〴〵ぞ露は染めける

釋 ○さがりごけ　蔦の種類で、蔓に青白い毛が生じてる。深山の古木などに這ひかゝつて垂れる。和名鈔に「蘿、比加介、女蘿也」とあるのがこれである。垂苔とも、さるをかせともいひ、俗に狐のたすきといふ。○一さか

りこけれども　さがり苔を隱した。

大意　花の色はほんの一盛りだけ濃いけれども、これまでに染め返し〱、何遍も露がサ染めたわ。

にがたけ　　　　しげはる

命とて露をたのむにかたければ物わびしらに鳴く野べの蟲

釋　○にがたけ　苦茸か。眞淵は、「和名鈔に『長間箏(ヨナガダケ)、箏青最晩生(クモクフ)、味大苦也(ニシ)』とある物なるべし。今は女竹とも、しのめ竹ともいふなり」といつた。けれどもこの前後、苔、蕨などの間に並べてあるのだから、茸とする方がよいだらう。次のも皮茸を隱した。○わびしらに　侘しの語に、形容のらの尾辭を添へた副詞。

大意　わが命として露を賴みにしても、はかなくて賴みになり難いので、何やら難儀さうに鳴く、野邊の蟲であることよ。

評　結句、この頃には珍しい語調である。

かはたけ　　　　かげのりの王

さよふけてなかばたけ行く久方の月ふきかへせ秋のやま風

釋　○かはたけ　皮茸である。今、こう茸と轉じて呼ぶ。眞淵は和名鈔に、「苦竹、加波多計(カハタケ)、本朝式用ニ河竹二字ヲ」とあるに據つて、苦竹(マダケ)とした。○なかばたけ行く　皮茸を隱した。

大意　夜が更けて、もう空の半分ほども闌けて行くあの月を、もとの東の方へ吹き戾してくれい、秋の山風よ。

評 「月吹き返せ」の狂想が面白い。體格豪宕で雄渾であるが、自然萬葉調と異なつた處があつて、新古今時代の豪傑等が希つた風調の祖をなしてゐる。

わらび　　眞せい法師

けぶり立ちもゆとも見えぬ草の葉をたれかわらびと名づけそめけむ

釋 ○わらび　蕨。○わらび　藁火。蕨を隱した。

大意 藁を焚く火ならば、烟が立つて燃える筈なのに、さうとも見えぬ草の葉であるのを、誰れがわらびといふ名を附け初めたのであらうか。

評 契沖は、「物名の詠みざまにあらず、この部に入るべきならず」といつた。上に、折句の歌をも收めた程だから、大まかに見るがよい。

さゝ　まつ　びは　ばせをば　　紀のめのと

いさゝめに時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人に見えつゝ

釋 ○さゝ　和名鈔に、「篠、和名之乃、一云佐々、俗用二小竹二字一、細々竹也」とある。○まつ　松。○びは　枇杷。○ばせをば　和名鈔に、「芭蕉、和名發勢乎波」とある。蕭韻の字は、チの假名に響かして用ひた。その例は澤山ある。○いさゝめに　假初にの意、篠を隱した。○時まつ　松を隱した。○ひは　日はである。枇杷を隱した。○心ばせをば　「心ばせ」は意思である。芭蕉を隱した。

大意　つい逢ふ時を待つ間に、ひどく日數が經つたわ、逢ひ度いといふ心持をば、先の人に、とくと見られ〳〵してサ。

評　覺束なく思つて日を經た間に、度々自分から音信れなどしたのをいつたものであらう。

なし　なつめ　くるみ　　　　兵衛

あぢきなし歎きなつめそうき事にあひくるみをば捨てぬ物から

釋　○なし　梨。○なつめ　棗。○くるみ　胡桃。○あぢきなし　無益、味氣無しの義だといふ。梨を隱した。○歎きなつめそ　歎き詰むる勿の意。棗を隱した。○あひくるみ　遭ひ來る身であた。胡桃を隱した。

大意　あゝ無益の事よ、そのやうに一途に歎くなよ、いろ〳〵さま〴〵の憂い事に遭つて來る、自分の身を捨てもせずに居ながらサ。

評　契沖は、「三代實錄に、『仁和三年二月信濃國例貢、梨子、大棗、吳桃子(クルミ)、雉腊(ホシトリ)、別貢、云々』これをもて思ふに、この貢物をもて來たる時、これを詠めと仰言などのありて詠めるにや」といつた。

からことといふ所にて、春の立ちける日よめる

安倍清行朝臣

浪の音けさからことに聞ゆるははるのしらべや改まるらむ

釋　○からこと　備前國韓琴の浦であらう。○けさからことに　今朝より殊にである。韓琴を隱した。

大意 波の音が立春の今から變つて、長閑に聞えるのは、この唐琴の浦の調子も、春の調子に改まるのであらうか。

評 樂家の說に、春は双調、夏は黃鐘、土用は一越、秋は平調、冬は盤渉調だとか。それ故、春の調子が改まるといつたのだ。地名のからことを、樂器の韓琴に取り成して、浦の立春の景氣を歌つた。韓琴は新羅琴をいつたものか。又、日本琴に對して舶來した箏などの類を總稱したものか。

いかゞさき　かねみのおほきみ

かぢにあたる浪の雫を春なればいかゞさき散る花と見ざらむ

釋 ○いかゞさき　蜻蛉日記に、「石山に參りて、舟にて歸るとて、いかゞ崎、山吹の崎などいふ所を、蘆の中より漕ぎ行く」とある。これに據れば、近江の打出の濱から、勢田、田上あたりまでの内にあつたのであらう。枕草子にも、「崎は辛崎、いかゞ崎」とある。○かぢ　舟を遣る櫂、梶、棹をすべて、古くはかぢといつた。○いかゞさき散る　如何が咲き散るである。いかゞ崎を隱した。

大意 舟の檝に當つて散る波の雫を、今は春だから、何で散る花と見ないことがあらうぞ、散る花とたしかに見る。

評 「咲き散る」の咲きは、熟語として輕く添へたまでゝある。口ぶりから見ると、人に答へたものらしいから、返歌であらう。下の二首、これも題に就いて、水邊の光景を詠んである。

からさき　　　　　　あほのつねみ

かのかたにいつからさきに渡りけむ浪路は跡も殘らざりけり

釋　○からさき　近江國滋賀郡辛崎。唐崎とも書く。○かのかた　彼の方と、彼の潟との兩說がある。○いつか、らさきに　何時より先にである。辛崎を隱した。

大意　あの先の方の辛崎に舟があるが、何時からあのやうに、自分より前に渡つたのであらう。渡れば跡のある筈なのに、波の路には、これといふ渡つた跡も殘らなかつたわ。

伊　勢

波のはなおきからさきて散りくめり水の春とは風やなるらむ

釋　○おきからさきて　沖より咲いてである。辛崎を隱した。

大意　波の寄せるのが花と見えるが、この波の花は沖から咲いて、磯へさして散つて來ると見えた、水の春には風がなつて、このやうに波の花を咲かせたり、散らせたりするのであらうか。

評　四時の變化のない水を捉へて、春をいひ秋をいふ。この種の着想は、奈良時代にはまだ發達しなかつた。秋下、是則が、

もみぢ葉の流れざりせばたつ田川水の秋をばたれか知らまし

と詠んだなど、共に後世の尖巧派の基を開いた。

かみやがは　　つらゆき

うば玉のわが黑かみやかはるらむかゞみのかげにふれる白雪

釋 ○かみやがは　山城國の北野と、平野との間を流れる川で、古へ紙漉き場のあつたところ。拾芥抄に、「紙屋院、圖書別所、在二野宮東一云々」。圖書寮は書寫を司る故に、紙漉く所をも兼管したのである。○うば玉の「わが」を隔てゝ、黑へかゝる枕詞。解は上に既出。○黑かみやかはるらむ　紙屋川を隠した。

大意 自分の黑髪が、白髪に變つたのであらうか、自分が對ふこの鏡へ映つた影に、眞白に降つて居る雪を見ればサ。

評 李白の、「不レ知明鏡裏、何處得二秋霜一」と、その興趣を同じくし、張九齡の、「誰知明鏡裏、形影自相憐」と、その感慨をひとしくしてゐる。三句、かはりぬらむとなくては、時の打合が不都合に思はれる。拾遺集に、二三の句をわが黑髪に年暮れてと直したのは、こゝに見る所があつたのであらうか。拾遺集に再出したのは、詞書をも、「師走の晦日がたに、年の老いぬることを歎きて」と直してあるが、よくない。この集撰著の頃の貫之は、未だ鏡裏を白了する程の年配でない。題詠であることが分る。

よどがは

あしひきの山べにをれば白雲のいかにせよとかはるゝ時なき

釋 ○よどがは　山城の淀川である。○いかにせよとかはるゝ　淀川を隠した。

大意　山邊に住んで居ると、只さへ氣のふさぐものを、どうせよといふ事か、白雪がかゝつて晴れる時が無いわ。

評「いかにせよとか」の辭樣、既に萬葉集にその例がある。

かたの　　たゞみね

夏草のうへは茂れる沼水の行くかたのなきわがこゝろかな

釋○かたの　河内交野郡の交野である。○沼水の　沼水の如くの意。○行くかたのなきわが心　交野を隱した。心の行くは、心の滿足すること。

大意　夏草がうへに一面に茂つてゐる沼の水の、流れて行くところの無いやうに、滿足しようの無い、自分の心であることよ。

評　沼池などの水は、瀦留して流れないのを本とした序歌である。初二句はたゞ沼水の修飾で、うへは夏草の茂れるといふべきのを倒裝したのである。これをわが身の世に埋れて人に知られないのを譬喩したと見てはならぬ。又、「かな」の助辭の打合をおもふに、行く方もとある方が妥當であらう。果して六帖には「も」とある。交野の物名に拘はつて、枉げたのであらう。

かつらのみや　　源ほどこす

あきくれど月のかつらのみやはなる光を花と散らすばかりを

釋 ○かつらのみや　今昔物語に、「五條西洞院に、桂の宮と申す人おはします。その前に大なる桂の木ある故に、名づけまゐらせたるなり」とあるのが、これであらう。○月のかつらのみやはなる　實(ミ)やは結(ナ)るの意。桂の宮を隱した。月の桂のことは、秋上「久方の月の桂も」の條に既出。○花と散らすばかりを　「花と」は花の如く、花としてなどの意。「を」は歎辭。

大意　すべての草木は秋は實る物だが、秋が來たとて、月の中の桂の實が結るか、いや結りはせぬ、たゞ常よりさやかに、月の光を花のやうに散らすばかりの事よ。

評　月華といひ、桂花の亂れ、桂葉の飜るといふことは、漢詩に多く散見してゐる。たゞこの新案は、桂の實に思ひ到つたのにある。

百和香(ハクワカウ)　よみ人しらず

花毎にあかず散らしゝ風なればいくそばくわがうしとかは思ふ

釋 ○百和香　和名鈔に、「神傳云、淮南王張二錦繡之帳一、燔二百和香一、漢武内傳云、武帝好二長生之術一、求レ道、七月七日帚二宮掖之内一、設二座殿上一、紫羅席レ庭、燔二百和香一云々」とある。契沖は、「五月五日に百草を取りて合はする香なり」といつた。○いくそばくわがうし　幾何(イクソバク)我が憂しである。百和香を隱した。

大意　花といふ花をば、皆殘り多いのに散らした風であるから、どれ程自分が、あの風奴の仕打を憂いと思つた事か、並大抵に憂いと思つた事では無いわ。

すみながし　　しげはる

春がすみなかしかよひぢなかりせば秋くる雁は歸らざらまし

釋 ○すみながし　墨流しである。墨汁を水の上に流して、その亂れた狀を紙や布に寫し取つた物。今もあるものである。○春がすみなかし　春霞中しである。墨流しを隱した。「し」は强辭。

大意 春霞の一面に立ち塞つてある中にサ、通ひ路が無いものであつたならば、何時も秋來る雁は、この春に歸らないだらうものを、霞の中に路があるかして、雁が歸つて行くが殘念だ。

評 「秋くる」を「春霞」に對した。秋こし雁といふべきのを、「秋くる」と現在にいつたのは、調をいたはつたのである、といふ說もあるが、いかゞであらう。「秋くる」は、何時も秋には來るといふ意から、形容に置いた詞で、過去の事實をいつたのではない。霞の通路は、白雲の道、雲路、空の通路などと、同じ辭樣である。「なかし」の一語は贅瘤だが、物名の事だから、仕方がない。

おき火　　みやこのよしか

流れいづるかただに見えぬ淚川おきひむ時や底はしられむ

釋 ○おき火　和名鈔に、「燠、於岐比、猛火也」とある。おこり火の意であらう。○淚川　淚を混喩したのであつて、川の名ではない。○おきひむ　沖干むである。燠火を隱した。

大意 流れ出す方角さへ見えない淚川であるから、底の深さも猶更知れないが、沖の深みまで水の干ようとする

時があつたらば、底の深さも知れようか。

評 景樹が、「愁思の竭きむ時、自然涙も盡きて流れざらむの意を、河になしていへるなり」と、說いた通りである。

ちまき　大江千里

のちまきのおくれておふる苗なれど仇にはならぬたのみとぞ聞く

釋 ○ちまき　和名鈔に、「糭亦作レ粽、和名知萬木、以二菰葉一裹レ米、以二灰汁一煮レ之令二爛熟一也、五月五日啖レ之」とある。支那の例に倣つてした事である。○のちまき　後蒔である。粽を隱した。○たのみ　田の實に賴みをかけた。田の實は實つた稻をいふ。

大意 遲蒔の種で、外のよりは後れて生える苗であるけれども、萬更むだにもならず、秋はやはり實つて、賴みある田の稻であるとサ聞くわ。

評 諷喩である。晩年からの學問だけれども、あながち遲蒔であるとて放棄すべきものではないと、希望に光明ある由を述べたのである。或は、出世などの人に後れた身であるが、末に賴みがあるから落膽すべきでないとの意を比喩したともいはれるであらう。作者の人柄からいふと、どちらでも通用する。

『は』をはじめ『る』をはてにて、ながめをかけて時の歌よめ」と、人のいひければよめる　僧正聖寶

はなのなかめにあくやとて分け行けば心ぞ共に散りぬべらなる

釋 ○はをはじめ云々　はの字とるの字とを、歌の終始に置き、ながめの三字をいひかけて、そして當季の歌を詠めとの意。「ながめ」は長雨（ナガアメ）の約。○はなのなかめにあくや　長雨（ナガメ）を隱した。

大意　花の咲いた中を、目に見飽くかと思つて分けて行けば、花に目が移つて、自分の心がサ、花と一所にあちこちと散つて行きさうな心持がするわい。

評 春の霖雨のつれ〴〵に、眞言祕密の大和上を弄んで、難題をいひかけたものと思はれる。和尚、生憎にこの雕技があつて、綺語罪過を犯し、文字魔を作した。

この部の歌は、しひて精評を加へない。それは作者の目的が、それになく、これにある事を思ふからである。歌として論じたなら、必ずその本意に背く點が多からう。

古今和歌集卷第十一

戀歌一

題しらず　　　　よみ人しらず

ほとゝぎすなくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀もするかな

釋 ○戀歌　男女間の戀愛を歌つたのを、この部に收めた。萬葉集には、男女親子兄弟朋友の相思ふをも一つに收めて、相聞の部を立てた。この集に至り始めて特に戀の部を立てゝ、後來の勅撰集の爲に、先例を開いた。○なくや　「や」は間投の歎辭。○あやめ草　水澤に生ずる香草の菖蒲で、花を賞する所謂花菖蒲とは別である。○あやめも知らぬ　「あやめ」は衣の文目から起つて、何とも筋が立たず分別のつかぬを、あやめなしとも、あやめを知らぬともいふ。

大意 時鳥の鳴くまあ、五月のあやめ草の名の、あやも目も分らぬ無茶な戀をまあ、自分はすることよ。

評 初戀を歌つた作である。戀は情の火である。その燃ゆるや、多く一時的の性質を帶び、その熾なるや、實に一三昧である。あやめも知らぬ戀にして、始めて人を戀すといふべきである。三句までは萬葉集卷十八家持の歌に、

紀貫之

よし野がは岩波たかく行く水のはやくぞ人をおもひそめてし

釋 ○岩波　岩に激する波をいふ。平安時代の新熟語らしい。○行く水の　行水の如くの意。○はやく　夙くの意。忽ちの意とする説は、結句の「てし」の辭に文法上の時が打ち合はない。

大意　吉野川の岩根に波が高く立つて流れて行く水は、早いことであるが、その早いといふ如くに、疾くの昔に人を思ひ初めて居つたわ。

評　三句までは序である。力強く調さやかにいひ下したのは、よい手際である。想ふにその思ふ人の許に詠んで贈つた歌であらう。長い年月戀の心を胸に祕め來つて、遂に包み切れなくなつた戀の奴が、こゝに慇懃の意を致して、情の露の一雫を待つ趣で、その幽怨の情は甚だ深い。以下、「人」といふ語が、對手又は意中の人を指した場合が多いことを、特に注意ありたい。

藤原勝臣

白浪のあとなきかたに行く舟も風ぞたよりのしるべなりける

大意　白浪のうへの、道の跡も無い方へ行く舟でさへも、思ふ方へ行くには、風といふ物がサ、便りの手引であつたわい。

評　[illegible]ふに用ひられた事は、意釋の通りである。さて、わが戀ふ人に便りのしるべたるべき

……た。諷喩の運意が適切で、爲に幽婉の味ひが生ずる。

在原元方

おとは山おとに聞きつゝあふ坂の關のこなたに年をふるかな

釋 ○おとは山　山城の山科の音羽山で、名刹清水寺がその西麓にある。逢坂の關の西南につゞいてゐる。旁ら下の、「音」といふ同音の語を喚び起した序である。

大意　音羽山の名の音に卽ち噂に、其の人の事を聞き〳〵しては居ながら、逢坂の關の名の逢ふといふ事もえせずに、越えられぬ關の此方で、年月を經ることよ。

評 早く逢坂の關を越えたい、卽ち思ふ人に逢ひたいの餘意がある。躬恒の歌に、

はる雨に君をやりてば逢坂の關のこなたに戀ひや渡らむ

同樣の譬喩である。「逢坂の關の此方」は逢はぬ事を婉曲に轉義した。しかも音羽山は關の此方(コナタ)にある。(京からいふと)かうした地理的關係を考慮においたこの作は、京人達には頗る警拔なものとして喝采されたに違ひない。かく巧中に巧を求めるのは、この作者の慣手である。六帖には、作者を貫之とある。

○

たちかへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつしら浪

釋 ○あはれ　感歎の語で、下にかはゆい、戀しいなどの意を含む。○よそにても　餘所での意。「も」は歎辭。○心をおきつしら浪　心を掛けおくに、沖つ白浪をかけた。「心をおき」は隔心の意ではない。

大意 思ふ人に言ひ寄るすべが無さに、このやうに餘所ながらまあ、かの人の上に心を掛けて置くので、その置くといふ沖の白浪の、跡からく打ち掛けくするやうに、立ち返つてつくぐあゝいとしいとサ思ふわ。

評 剪裁彫琢はたまにはいゝが、屢してはうるさい。乃祖業平朝臣が見たら、何とした凡骨と悲しむ事であらふ。只、「心を沖つ白浪」といひ捨てた語調に、嗟歎の味のやゝ動くのみである。

世の中はかくこそありけれふく風の目に見ぬ人も戀しかりけり

つらゆき

釋 ○ふく風の　ふく風の如くの意で、「目に見ぬ」にかゝる序。○目に見ぬ　風よりいへば、目に見えぬとあるべきだが、一方の意の重きにひかれて、「見ぬ」といつた。

大意 世の中は、皆かうしたタワイもない物であつたわい、吹く風の目に見えぬやうに、まだ一目見た事も無い人さへも、このやうに戀しいものであつたわい。

評 見ぬ人戀し、こんな理窟のあはぬ事はない。然し事實であつて見れば仕方がない。一旦は自己の行爲を怪んで見たが、考一考すれば、矛盾がこの世相だと氣が付いたといふ。蓋し煩悶の餘りに出た語である。三句以下を契沖、眞淵等の、「吹く風の音にのみ聞きて、まだ見ぬ人を戀ふる」と解したのはいひ過ぎてゐる。三句は只、「目に見ぬ」の序のみに過ぎない。夙く萬葉集に「ふく風の見えぬが如く」と所々に詠んである。昔からいひ馴

した詞と思はれる。埤雅に「人不ㇾ見ㇾ風」ともある。和漢想を同じうするものか。

右近のうまばのひをりの日むかひに立てたりける車の下すだれより、女の顔の、ほのかに見えければ、よみてつかはしける　　在原業平朝臣

見ずもあらず見もせぬ人の戀しくばあやなくけふや詠(ナガ)め暮さむ

【釋】○右近のうまば云々　袖中抄に、「右近の馬場は一條より大宮の方をいふ。それより東の方は左近の馬場なり」とある。拾芥抄には、「一條京極の末」とある。「ひをりの日」は古來の集訟である。袖中抄には引折の日の意として、「五月三日左近の荒手結、四日右近の荒手結、五日左近の眞手結、六日右近の眞手結にして、この六日の右近の眞手結の日は、紅の下の袴、織物の指貫に、括りをあげずして、そばを挾みて、褐の尾を胯より前ざまに引たをりて、前に挾めり。されば、この眞手番の日を、ひをり日といふ」とある。眞淵、宣長は、「五月の五六日に、武徳殿に幸して騎射をみそなはし給ふ御定なれば、右近の馬場に騎射ある事は、他日なる事明けし」と難じた。けれど世々にその式の行はれたことの、史に載せられたのが甚だ稀なことから考へると、その日内裡で式の行はれない時は、左右の近衛の馬場で、代に行はれる例と思はれ、今昔物語にも、「右近の馬場に、五月六日弓行はれけるに云々」とある。「ひをり」を、眞淵は「引柵(ヒヲリ)又は、標柵(ヒヲリ)の意ならむ」といひ、近藤芳樹は「褻(ケ)の衣は褻えばみ、晴の衣はこはく折目正し。このこはきを引折といふ。台記の、皇后御讀經結願の件に「右

大將衣冠出二紅引折一』春日詣の件に、『着二引折一』などある、やがて晴の衣なり。されば、衣の地厚くて、引折るやうに強き義よりつけたる名にて、また如木と云へり。この晴の衣を引折る日は卽ち晴の日の意なり」といひ、伴信友は、右近のうまばの日と讀み切つて、栅の日向ひに立てたりける車と解した。「車の下すだれ」は西宮記に、「婦人之車餝也」と見えて、車簾の下に帷幕の如くに掛けた物をいふ。

大意 一向に見ぬでもない、又たしかに見たでもない人が、かうも戀しいならば、何がなしに今日は一日、辛氣に思ひ暮さうことか。

評 それでは迷惑だから、しかと名告つて下さいの餘意がある。伊勢物語にも、今昔物語にも、「中將なりける男」とあつて、作者が近衞司で、右近の馬場に行き向つたとある。近衞舍人達の騎射があるので、この日は見物人が賑ふ。中には女車もある。簾からこぼれ出た物見車の出衣や、その袖口どもの艶なのには、「天が下の好き者」と歌はれた業平が、とても默つて通さう筈がない。まして、下簾からその透影が夕日に榮えて見えたとなつては、公用も何もあつたものでない。但歌は只當座の外交辭令に過ぎない。

かへし　　よみ人しらず

知る知らぬ何かあやなくわきていはむ思のみこそしるべなりけれ

釋 ○知る知らぬ　知る人知らぬ人の略。○わきて　分けての古言。

大意 見知るの見知らぬのと、詮も無いことを差別を立てゝ何でいはうぞ、いはずとものことである、戀といふものは、たゞ一筋の思ばかりがサ、その成就する手引であつたわい。

評 知る知らぬは問題でない、只信實の心から思ひなさい、さらばその思にめでて逢ふ時もあらうの意だから、女にも多少その氣があるのである。果して、伊勢物語には、「後には誰れと知りにけり」と書いてある。兩箇の才人が互に脊戀の情を含んで、物いひ渡つた當座の狀况は、顧ふに頗る艶なるものであつたらう。贈歌の主意は下句にあるを、これはその初二の句を捉へて、見る見ぬに拘はるは、淺はかな心ぞとそらしてもどいた。人を射るに先づ馬を射る筆法は、返歌の祕訣である。

かすが野のまつりにまかりける時に、物見にいでたりける女のもとに、家をたづねてつかはしける

みふのたゞみね

春日野の雪間をわけておひ出くる草のはつかに見えし君はも

釋 ○かすが野のまつり云々　一本、春日の祭とあつて、野の字が無い。春日の祭は、大和國の春日神社の祭祀である。延喜式に、「春二月、冬十一月、并上申日祭レ之」とある。貞觀の頃に朝廷の式祭に加へられたらしい。「物見」は今の見物といふに同じい。○おひ出くる　生ひ出で來る。○草のはつかに　草の如くはつかにの意。「はつか」は僅かの古言。○はも　歎辭。

大意 この春日野の雪の消え間を分けて生えて出て來る草の、チラリと見えるやうに、今日一寸姿の見えた貴女はまあ。

評 存外に深く戀しくて溜らぬの餘意がある。頃は二月の祭と見える。作者は藤氏のある公卿の隨身などで出掛けたか。とにかく舍人はその祭には澤山往つたものである。春日野、雪消の澤のあたり、萌え出した草が未だ短くはつかな眼前の光景を、序詞の材料として、はつかに見た祭見物の衣被ぎの女に詠んで贈つたのである。その家を突きとめて贈るに至つては、その熱心さに驚かれる。女は勿論奈良の里人である。作者はもとより舍人風情の男、まづ程々の懸想であらう。景樹が、物見を物見車と解したのは大業過ぎる。詞書はそんな物々しい身分の人が出てきた趣でない。又事實の上にも協はぬ事である。「見えし君はも」とのみいひ放して餘意をもたせた叙法は、含蓄の味が深い。

結句、六帖に君かもとあるが、詠歎の風味に乏しい。

人の花摘しけるところにまかりて、そこなりける人のもとに、のちによみてつかはしける　つらゆき

山櫻かすみの間よりほのかにも見てし人こそこひしかりけれ

釋 ○花摘　春下「とゞむべき物とはなしに」の條に既出。詞書のやうは、評語を見合はせて心得られたい。

大意 山の櫻を霞の間から見るやうに、餘所ながらほのかに見た事であつた人がサ、戀しくあつたわい。

評 佛の供養の料にとて、木草の花など摘みあつてゐる所に、何かの用で作者の往つた處だ、殊更に羞かしがつて物蔭に這ひ隱れた女の許に、後にこの歌を贈つて揶揄つたものらしい。「見てし人こそ」の強き語調、この意を扶けていよ〳〵面白い。「山櫻霞の間より」は、その花摘してゐる野邊の光景である。それを直に、譬喩の材

料に取つた。想ふに、その人は花のやうに艶な人であつたらう。下句餘りに說明語が長過ぎて、感じが離れてくる。詞は圓滑であるが、忠岑の「草のはつかに見えし君はも」の含蓄の味ひの深いのには及ばない下句、家集に見しばかりにや戀しかるらむとある。

題しらず　　もとかた

たよりにもあらぬ思のあやしきは心を人につくるなりけり

釋　○たより　消息や小包やうの物を配達する使をいふ。もと人の往來の便りに言傳てたのから出た名。○つくる　送附するの意。

大意　使こそ物を人の許に屆け附けるが、使でも無いこの思が、不思議な事は、自分の心をかの人の許に屆け附けるのであつたわい。

評　何者がこの心を人の許に持つて往つたかと見れば、豈に料らんやわが胸の思であつたと怪みいぶかつた。元來思と心とは、體用の別こそあれ一つ物なのを、姑く名の二つに別れたまゝに、全く分離させて巧み成したことは、雜部に、

身をすてゝいにやしにけむ思ふよりほかなる物は心なりけり

とあるに同じい。戀は人を愚痴にし又神經質にするから、つい瑣末な事にも想到するが、かゝる纎細の構思は感哀に乏しく、氣味が索きる。

後撰集に再出したのは、詞書に、「はつかに人を見て遣はしける」とあつて、作者は貫之である。後撰の頃、夙

く元方の名の脫ちた本があつて、上の歌に列ねて、貫之の作と思つた處から、姑く異説を存する爲に、貫之の名で再選したのだらう。詞書は、前後の歌皆はつかに見聞した戀を排列した例を追つたのみで、歌にはつかの意は更にない。もしは部立の違つたものか。さらずは後撰の如く詞書があるべきである。

凡河内躬恒

はつ雁のはつかに聲をきゝしより中空にのみ物おもふかな

釋 ○中空にのみ物思ふ　空にのみ物思ふといふとはやゝ違つて、何方ともつかず物思ふをいふ。

大意　初雁の聲をはつ〳〵に聞いた時から、又鳴くかと空にのみ心をつけて、氣を揉むことよ、その如く、その人の聲を、はつ〳〵に一寸聞いた時から、思ふ心をいひ出しもえせず、さりとて斷念（アキラ）めも出來ず、宙にばかり迷つて物を思ふことよ。

評 初二句は、初雁の聲をはつかにといひ下すべきを、はつの同音を反復して諧調たらしめる必要上、成るべく近接させる爲に倒置したのである。意解は全體を諷諭の作と見て釋いたが、若し下句を輕く聞く時は、初句の「初雁の」は單なる序詞と聞かれる。いづれか。

つらゆき

逢ふことは雲居はるかになる神の音にきゝつゝ戀ひ渡るかな

釋 ○雲居はるかに　空遙かにての意。これを三句に引き續け、遙かになるといふに、「鳴神の」をかけたと見る

のは大にわるい。〇鳴神の「音に聞く」といふにかゝる序詞。「鳴神」は雷。

大意 これ程思へども、その人に逢ふことは遠い事で、その霹雷の音を聞くやうに、近く噂に聞きく／＼して、戀しく思つて月日を經ることよ。

評 遠しといふことを「雲居はるか」と轉義して、序詞の鳴神に縁をもたせたことは常套である。但「音に聞く」の序として鳴神を用ひたことは、その音聞の甚しさを思はせるもので、隨つて逢ふ事の雲ゐはるかな事を慨く心持を強める。又見やうによつては、遠近の對照を成してゐるやうでもある。

結句、六帖、及び、家集に戀ひや渡らむとある。景樹は、この方を宜しいと評した。

片絲をこなたかなたによりかけてあはずば何を玉の緒にせむ　　よみ人しらず

釋 〇片絲 より合はせぬ一筋の絲をいふ。〇あはずば 「ば」と濁る。〇玉の緒 玉を貫く緒。緒は長く續く物をすべていふ。鳥獸の尾、年の緒、息の緒といひ、さて命をも魂の緒といつて、玉の緒に通はせた。玉の緒に三義ある。一は暫しの意、一は玉を貫く緒、一は命をいふ。

大意 一筋の絲をあちらこちらに縒を掛けて合はせようとして、愚かな頼みをかけてゐるが、結局一つに合はぬなら、何を玉の緒にせうぞい、自分の戀もその如く、こちらばかり、あちらこちらへと心を碎いて見ても、若し逢はれずば、何を命にして生きて居られようぞ。

評 片絲ではより合ふことは絶對にない。その如く片思では逢ひ得る時は絶對にない。この見え透いた結果をも

無視して、おのが慾目になほ一縷の希望を繋ぎつゝ、戀の不安を豫想して、もし「合はずば何を」と憂慮してゐる。よもやに惹かされた戀の迷を歌つたものである。譬喩は例の巧に傷く。片絲の玉の緒は、夙く奈良朝歌人の用ひた材料で、萬葉に「片絲もち貫きたる玉の緒を弱み」「玉の緒を片緒に縒りて」など數ある。この歌、是則集に出てゐるのは誤である。以下悉く詠者不詳の歌である。風調體格を以て推すに、弘仁以降、元慶の頃ほひまでの作が入り交つて居らうと思ふ。

○

ゆふぐれは雲のはたてに物ぞ思ふあまつ空なる人を戀ふとて

釋 ○雲のはたてに「はたて」ははてに同じい。萬葉集卷八に「敷きませる國のはたてに開きにける櫻の花の」とある。又萬葉集卷一、「渡津海の豐旗雲に入日さし今宵の月夜淸み明くこそ」、懷風藻の大津皇子の詩に、「雲旗張ル嶺前ニ」など見えて、旗の靡く如く棚引いた雲を、旗雲とも雲の旗ともいふから、雲の旗手にの意とも解してゐる。比較すると前說の方が穩かである。

大意 自分は夕方になれば、遙かの雲のはてにながめ入つて、物をサ思ふわ、自分より遙か高い身分の人を戀ひ慕ふといふのでサ。

評 譬喩の「雲のはたて」の緣によつて、身分高いの意を「天つ空なる」と轉義した。景樹の上句を、夕暮は雲の悲しき景色に物思ふと釋いたのは、氣分はちかいがやゝ誤つてゐる。又、「天つ空なる人」を、舊註はすべて、遠方なる人の意に解いた。捨つべきでもないが、戀に上下の隔なし。かけても及び難い人を戀うた意と見る方が面

白からう。拾遺集、
雲居なる人をはるかに思ふにはわが心さへ空にこそなれ
の趣を併せ味ふがよい。夕暮はたゞですら感傷に陥り易い時分だから、戀する身はいよ〳〵思ひ亂れるのである。

初句、六帖新撰和歌には夕されば、顯註の一本には夕ぐれのとあり、結句、袖中抄、奥儀抄には人こふる身はとある。

○

かりごもの思ひ亂れてわが戀ふと妹しるらめや人し告げずば

釋 ○かりごもの　「思ひ」を隔てゝ、「亂れて」へかゝる枕詞。刈つた菰は、埒もなく亂れ混ふ物だから續けた。菰は眞菰（マコモ）である。○妹　廣い意味では、男から婦人をさして、すべて妹（イモ）といひ、狹い意味では、妻又は情人又は女弟をいつた。こゝは前の義である。

大意　刈菰の亂れるやうに、いろ〳〵と思ひ亂れて、自分が戀ひ慕ふといふことを、あの人は知るであらうか、いや知りはすまい、人がサいひ聞かさずば。

評　情天凝があり、空床輾轉の思に耐へない。然るに意中の人は格別さうとも知らずにゐるではないか。どうかその同情を惹くべく、殷勤の意を取り傳へてくれる人もありたいなと、心中に希望してゐる趣である。古調で風骨が凡でないが、結句は親貼し過ぎて味ひを淺くしてゐる。

○

つれもなき人をやねたく白露のおくとは歎きぬとはしのばむ

釋 ○人をや　「や」は反語。○ねたく　悔しくの意　○白露の　「おく」にかゝる枕詞。露の置くに、起くをかけた。○ぬ　寢ぬの意。○しのばむ　偲ばむの意。慕ふをいふ。

大意　あの無情なつれない人を、このやうにくち惜しう、朝晩に起きるといつては歎き、寢るといつては慕はうことかい、今からはもう歎きも慕ひもすまい。

評　斷念めたといふは、斷念めぬ人の言である。畢竟熱情の餘りに、三冬暖氣無き的の人の無情を恨んだ激語である。思ふと思はぬとは反比例に進行するもので、時にはもう思ふまいと憤慨もするが、實現はむづかしい。この情致、歌としての無窮の妙諦を具へてゐる。業平の「世の中にたえて櫻の無かりせば」と詠んだのも、この筆法である。朝に晩にの意を、「おくとは」「ぬとは」と轉義し、歎き偲ばむの句を斷ち切つて、上下に按排して、四五に對句を作つたので、語調がおのづから強まつて、常住歎き偲んでゐる趣が強く表現されてゐる。

○

ちはやぶるかもの社のゆふだすき一日も君をかけぬ日はなし

釋 ○ちはやぶる　秋下「ちはやぶる神代も聞かず」の條に既出。○かもの社　山城國の賀茂神社。上下二社ある。平安時代には、祭とさへいへばこの社のお祭であつた位尊崇された。今も官幣大社。○ゆふだすき　木綿

の襷で、社人が神に奉仕する時に掛ける物である。木綿は穀即ち楮の事である。古語拾遺に、穀の木を木綿なりと註し、豐後風土記に「速水郡柚富郷云々、此郷中栲樹多生、常取二栲皮一以造二木綿一因曰二柚富郷一」とある。栲は楮である。

大意 賀茂の社の社人が神に仕へまつるとて、毎日〳〵木綿襷を掛けるが、そのやうに、私も一日たりとも貴方の事を心にかけて思はない日といふは無いわ。

評 三句までは、「一日もかけぬ」にかゝる序である。あながちに賀茂の社の木綿襷をかけたのは、或は、京人の賀茂の御社に詣でて、この戀を祈つたのではあるまいか。伊勢物語に、

　戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずもなりにけるかな

とあるも賀茂の社に戀を祈つた證據である。さてかう詠んで、かの人の憐を乞ふべく贈つたらしい。「日」といふ語の重疊が、意調のうへに、多少の姿致を添へてゐる。語路暢び〳〵して、風韻悠揚、諷すべく誦すべき作である。

二句、顯註にかみの社とある。景樹いはく、「この方事ひろくてよし。枕草子に、賀茂臨時祭の條に、『千早ぶる賀茂の社の木綿だすきと歌ひたる云々』とあり。これはもと神の社とある歌なるを、かの祭に用ひられし時、賀茂の社のと謠ひ變へしが一說となりて、今の本には入れるなるべし」と。されど、事弘いのが必ずよい譯でもない。評語のやうに見れば、却つて、事狹いのが面白く聞えるのではないか。又、結句を新撰和歌に口ぞなきとある。

〇

わが戀はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もなし

釋 〇むなしき空　虛空の直譯語であるから、空におなじい。〇思ひやれども　「思ひ遣る」は思を遣り失ふこと。遣悶、排欝の義。想像の意にも轉じて用ひられる。

大意 自分の戀は、虛空一杯に滿ち〳〵たらしい。心の思を餘所へ逐ひ遣つて見ても、何處へも思の行く處が無いわ。

評 纏綿の情懷は奇愁を催して、如何ともすべからざる人の作である。戀を說いて、虛空に瀰漫したの矯語を放つに至つて、始めて詩歌の三昧に入ることを得る。體裁、やゝ疎漫なやうで實は緻密である。上句下句の脚字、同音の韻を蹈んでゐる。奇作妙作。

〇

駿河なる田子の浦波立たぬ日はあれども君を戀ひぬ日はなし

釋 〇駿河なる田子の浦波　駿河國庵原郡淸見が崎から東へ行けば、薩埵峠の山下の渚に昔の道があつて、其處より向ひの伊豆の山の麓までの海は、田子の浦だといふ。

大意 この駿河にある田子浦は、風の烈しい所なので、その浦波は何時でも立つとはいふ條、それでもたまには、立たぬ日がありはするけれども、私が貴方を戀しく思はぬ日といつては、一日も無いわ。

評 駿河の國人の作か。比興の體が面白い。「日」の語の反復も味ひを永くする。但萬葉集卷十一、

唐泊能亘(カラドマリノコ)の浦波立たぬ日はあれども家に戀ひぬ日はなし

を、些ばかり改竄したに過ぎない。恐らく「唐どまり」の歌の異傳だらう。

○

夕づく夜さすや岡べの松の葉のいつともわかぬ戀もするかな

釋 ○夕づく夜さすや岡べ 「夕づく夜」は夕就く夜の意であることは、秋下に釋いた如くで、月夜の義ではないから、「さすや」とはいはれない。一本には夕づく日とある、これが宜しい。これは夕就く日の義で、夕暮近く傾く日をいふ。この歌元久時代には、既に兩樣の傳があつたと見えて、千五百番歌合に、公經の「夕づく日さすや岡べの松の雪折」の歌の季經判に「萬葉には夕づく日と侍り、古今の歌を思ひて松を詠まば、夕づく夜とぞ侍るべき、云々」。公經は、夕づく日とある本に據つて詠み、季經は、夕づく夜とある本に就いて判じたのである。「さすや」の「や」は間投の歎辭。○松の葉の　松の葉の如くの意。

大意 あの夕就く日の刺す岡のあたりの松の葉は、四季共におなじ色で、何時といふ別ちも無いが、丁度その如く自分は、何時といふ別ちも無い、えらい戀をまあすることよ。

評 これは戀の迷執を我れから批判したものである。蓋し或機會に理性に立ち返つた瞬間の思索である。夕影の岡邊の松の裏葉を照すのは、誰が眼にも着く面白い景趣である。乃ちこれを序の材料とした。古へは日影の刺すのを、崇高なる觀念を與へる無上の形容語として、或は「内日刺す宮」といひ、或は「朝日の日照る宮、夕日

の日陰る宮」など續けた。萬葉集卷十六に、

夕づく日指すや河邊につくる屋の形をよろしみうべぞよりくる

とあるも同趣である。この初二句を、これは岡邊の松に轉用したので、只眼前の景氣を述べただけに止まつてゐるが、上句の修飾が餘りに花やかに立派に過ぎて、「いつともわかぬ」の譬喩にのみ用ひたのでは、調和がぴつたりと取れないやうな氣がする。又語調からいふと、上句太く逞ましく、二句殊に力量があるので、やゝ下句との權衡を失してゐるやうである。

六帖には、「朝日子がさすや岡邊の松が枝のいつともわかぬ戀もする哉」とある。甚だ劣つてゐる。

○

あしひきの山下水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる

釋 ○山下水の　山陰の水の如くの意。○こがくれて　木隱れて。○たぎつ心　湧き返つて沸る心。

大意　山陰の川水は茂つた樹木に隱れて、餘所からは見えぬけれど、せわしく瀧つて落ちる物であるが、自分の戀も丁度そのやうに、餘所からは見えないで、只一人胸の内に湧き返る心を、水を堰くといふやうに、堰き止めようと思つて見ても、なかなか堰いてせき止めかねたわ。

評　人知れず思ふ心の忍び難さをどうしたらと、打ち歎いた。萬葉集に、

歎きせば人知りぬべみ山川のたぎつこゝろをせかへたる鴨　（卷七）

言にいでていはゞゆゝしみ山川の瀧つ心を塞きあへにけり　（卷十一）

の類型はあるが、これは一層巧緻である。「木隱れてたぎつ」までは譬喩であるが、「堰きぞかねつる」と、水の緣語で仕立てたのは、なまじひに大らかな味ひをなくする。萬葉の歌の結句を參照したら、この點がいよ〳〵明らかにならう。

三句、新撰和歌にうづもれて、結句、新撰和歌、及び新朗詠集にかねぬるとある。しかも作者を六帖には源のよしの朝臣とし、新朗詠には伊勢とし、後撰集戀四に再出したのには能宣朝臣として、詞書を「女の許に遣はしける」と加へてある。

○

吉野川いはきりとほし行く水のおとには立てじ戀はしぬとも

【釋】○行く水の　行く水の如くの意。○いはきりとほし　岩切り通してある。○しぬとも　爲去(シヌ)ともの意。舊註、死ぬともの意に見たのは誤である。必ず死ぬ意ならば「は」の辭は不用で、戀ひ死ぬとも又は戀ひて死ぬともいつてよい。

大意　吉野川は早川で、岩をも切り通して行く水が、烈しい音を立てるが、自分は假令この切ない戀をするとても、その吉野川の水のやうに、音を立てゝ泣きなどして、人には知られまいわ。

【評】忍び餘つた人の作である。「音には立てじ」の序は、萬葉集卷十一に、

高山の岩本たぎち行く水の音には立てじ戀ひて死ぬとも

の同想の先型がある。戀ひて死ぬとも、音に立てゝ名には顯はさじと、命をかけて包み忍んだ胸裏の苦悶は、

どんなものであつたらう。これは只、戀爲たりとて音に立てじといふに止まつて、愛の高潮を說く點に於いて、やゝ遺憾がある。二句は、さうした山川の急流激湍を、よく形容し得てゐる。原作に勝つたのは只この點のみ。四五の倒裝は調を諧へむが爲である。

初句、六帖に「吉野の」とある。

〇

瀧つ瀨のなかにも淀はありてふをなどわが戀の淵瀨ともなき

釋 〇淀　淵の靜な所をいふ。〇淵瀨　淵は水の深い所、瀨は淺い處である。

大意 山川のたぎり落つる瀨は早い物だが、その中にも淵になつて水の淀む所はあるといふ事であるものを、それにまあ何で、自分の戀は淵の瀨のといふ別ちも無く、何時も心苦しい事であるぞ。

評 反喩になつてゐる爲に、幽婉な姿致があつて面白い。廣蔭いふ、

「ありてふを」といへるが面白し。ものをといひても聞ゆるなれど、てふといへるは、この作者深窓の婦人にて、未だ實際の瀧津瀨を知らず、たゞ淀ありと聞及びて詠めるに、いたく味あり。ものをといふ時は、瀧のやうをも知りていふやうに聞ゆ。

とあるは拍案の快說で、その肯綮を得て居る。「淵瀨ともなき」は、頻り弛むことの無きの意を、「瀧つ瀨」の緣で轉義したのである。

山高みしたゆく水のしたにのみ流れて戀ひむ戀はしぬとも

○

釋　○したゆく水　山もとを流れる水。○したに　下にの意に、心の内の意であるしたをかけた。○流れて　水の流れてに、存在(ナガ)れてをかけてある。存在れてはながらへての約。

大意　山が高いので、あの下の方にばかり流れて行く水のやうに、自分は切ない戀をするといつても、表面には顯はさず、何時までも心の内でばかり戀ひ慕つて居らうわ。

評　初二句は「下にのみ流れ」とかけた序である。境遇か何か知らぬが、心の中に祕めて一生でも戀ひくらさうとは、同情に禁へない。「した」及び「戀」といふ語の反復が相交錯して、聲調を成してゐる。

契沖いふ、「以上四首、寄水戀の類なり。これより下、この卷の中に、忍ぶ意を詠めるは、戀ふる人みづから忍ぶなり。後の卷なるは、世人に忍ぶなり」と。

○

思ひいづるときはの山の岩躑躅いはねばこそあれ戀しきものを

釋　○思ひいづるときはの山　夏部に既出。「思ひいづる時」は「いはねば云々」と續く。○岩躑躅　「いはねば」の語を喚び起す序詞。和名鈔に、「羊躑躅、和名以波豆々之(イハツツジ)、一云毛知豆々之(モチツツジ)」とある。和名本草に、「羊躑躅、和名以波都々之(イハツツジ)又之呂都々之(シロツツジ)、又毛知都々之(モチツツジ)」とある。されば花の色の白い躑躅と思はれる。景樹說に、今の

方言に據つて、紫の花の咲く躑躅だらうとあるのはどんなものか。

大意 思ひ出す時には、常磐山の岩躑躅の名のやうに、口へ出していはずにこそ居れ、それは〳〵戀しいものをサ。

評 少しは察して下されと、相手にその同情を希つた。素より打ち出した戀でないから、その人は知る筈もないのを、なほこの沒道理の言を爲すのは、蓋し戀の窮竟で面白い。「いはつゝじいはねば」の反復、例の聲調に任せた序である。上句の「思ひ出づるときはの山」のいひかけは少しくどいかも知れない。

○

人しれず思へば苦しくれなゐの末つむ花のいろに出でなむ

釋 ○くれなゐの末つむ花の　「くれなゐ」は呉藍(クレノアヰ)である。和名鈔に、「紅藍、久禮乃阿井(クレノアヰ)、呉藍、本朝式云(ニ)、紅花、俗用(ユルヲ)レ之(ヲ)」和名本草に、「紅藍花、和名久禮乃阿爲(アヰ)」とある。秋分に實をおふし、春に至つて莖が延び立つて高さが三五尺になる。夏月枝の末毎に紅の花が咲く。もと呉國から渡つたので、呉(クレ)の藍草といつたのだらう。「末つむ花」は、その花の紅くなつた時、衣類などを染むる料に、末を摘み採る故にいふ。宣長は、萬葉集にある末摘花を、ウレツムハナと訓んだ。○末つむ花の　末摘花の如くの意。○いろに出でなむ　ほに顯はさむと同意。

大意 人に知られずに心の内で思つてゐると、ひどく苦しいわ、これでは叶はぬからいつその事、あの紅の末摘む花の色に出るやうに、うち出してあの人に知らせようわ。

評 いつそ思ひ切つてうち出さうか、げに羞かしい限りである。忍んで思はうか、心の苦しみに堪へぬを何としようぞ。とつ追ひつ煩々悶々の末、やはり、「色に出でなむ」としも決心したのは、どんなに切ない戀であつたらう、況や作者が纖手紅花を摘む婦人であつたらうと想像すると。但萬葉集卷十、

よそにのみ見つゝを戀ひむ紅のうれつむ花の色に出でずとも

とあると同喩で、意を表裏に取り成してある。創作とはいひにくいかも知れないが、出でずともは無骨である。「出でなむ」は心火の劫掠するに耐へず、その餘燄を吐かうとする趣で、感哀が深い。調も流麗で、阻澁の跡が更にない。

○

秋の野の尾花にまじり咲く花の色にや戀ひむ逢ふよしをなみ

釋 ○咲く花の　咲く花の如くの意。その花は何の花と定まつてさしたのではない。八千種の花などいつて、秋草の花はくさ〴〵ある。

大意 このやうに心の内にばかり思つて居ようよりは、秋野の尾花に交つて咲く草花の、色に出でゐるやうに、いつその事包まず打ち出して見ようかしら、これでは一向逢へさうな樣子が無いによつてサ。

評 色に出でて戀ひもしたら或は逢はれる事もあらうかと、はかない事を賴みとするまで煩悶してゐる。上と同想同趣で、上句は序である。長け立ちの高い尾花隱れに、野菊桔梗などの咲いたけしきを、「まじる」とは、げに妥當の表現である。

〇

わが園のうめのほつえに鶯のねに鳴きぬべき戀もするかな

釋 〇ほつえ　上の枝をいふ。秀(ホ)つ枝(エ)の義。〇ねに鳴きぬ　「音(ネ)に鳴く」は音に立てゝ鳴くをいふ。たゞ鳴くといふとは異なる。

大意 あれあの庭の植込の梅の木の高い枝に、鶯が聲を立てゝ鳴くが、自分もあのやうに、聲を立てゝ泣きもしさうな、切ない戀もすることよ。

評 思慕の情にかきくれてゐる折しも、鶯の鳴くのに驚かされて、ほんに自分もあのやうに泣かれさうなといふ。見聞する處のもの、皆傷心の種となる。情はもろいものである。抑も「音に泣く」は、人の視聽も憚からぬ絕對の戀であるが、これは「べき」の一語に、多少商量の餘地が存する。普通の序歌の體ならば、二句は、梅のほつ枝のとある方が、意は疏通し易い。に文字の近く重複したのも、聲調上不快である。

〇

あしひきの山時鳥わがごとや君に戀ひつゝいねがてにする

大意 貴方の戀しさに、夜も寢られぬまゝに聞けば、頻りに山時鳥が鳴くが、あれも貴方に逢ひたくて、戀ひ慕ひくして寢にくいのであらうか。

評 時鳥は君に戀ふやら何やらわからぬ。然らば何を以つて「わがごとや」の直喩を用ひたか、それは外でもない、夜通し寢ないで啼くといふおなじ事實があるので、自分は君に戀ひつゝこの苦悶を味ふ處から、時鳥をも同境遇に推想した。啼くの一語を絶對に著けないのに、餘韻の饒さが見える。秋上に敏行、

秋の夜のあくるも知らず鳴く蟲はわがごと物や悲しかるらむ

と同型である。只秋思の蟲と相思の時鳥との差あるのみである。どれが先きか。詠人知らずの歌には、敏行以後のもあるらしいから俄に判じ難い。なほ「秋の夜」の歌の評を參照されたい。

六帖に、「わが如く君に戀ふれや時鳥この夜すがらをいねがてにする」とあるは、この歌の二樣に傳はつたものだらう。

◯

夏なればやどにふすぶる蚊遣火のいつまでわが身下もえにせむ

釋 ○ふすぶる 燻るに同じい。○蚊遣火 萬葉集には、蚊火とも詠んだ。

大意 この節は夏なので蚊遣火を焚くが、その燃え上がらずに何時までもくすくすと、下にばかり燻つて居る蚊遣火のやうに、自分の身は思ふことを人にえ言はずに、内證で胸を焦して居るが、何時まであの蚊遣火のやうに下燃えにして居ようぞ、いつそ打ち出して見ようと思ふ。

評 庭前の蚊火の下燃えに燻るのを見て、忽ち聯想はわが下燃えの苦悶に及び、寧ろ快活的に炎え出したらばといふ。上の「末摘む花の色にいでなむ」「咲く花の色にや戀ひむ」などの儔で、忍び餘つた情懐を陳べた。溜ら

なくなつて一時興奮はしたものゝ、やはりつゝましく臆病勝な作者の心持が窺はれる。恰當の比興である。但萬葉集巻十一の、

足引の山田もるをぢがおく蚊火の下こがれのみわが戀ひをらく

を粉本として、更に一歩を進めた。六帖、

難波潟すく藻たく火のうち忍び下もえにてや世をばつくさむ

は、「わが戀ひをらく」の意を、さながら承けてゐる。「いつまで」の語、この主眼である。下に反動辭のかを添へて、その意を綜ぬるがよい。

初句、六帖に夏くれば、新撰和歌に夕されば とある。

○

戀せじとみたらし川にせしみそぎ神はうけずぞなりにけらしも

釋 ○みたらし川　いづれの神社でもいふが、これは賀茂の御手洗川だらう。神山より流れいでて、賀茂の御社を貫流する小川。○みそぎ　身滌で、水で身を洗ひ清むるをいふ。そして秡除（ハラヘ）するのである。○うけず「うけ」は諾である。納受である。

大意　わが戀の思ふに任せぬことの切なさに、どうぞ戀をしはすまいと思つて、御手洗川でした身滌を、神は意外にお諾け下されずにサ、なつてしまつたさうなわ。

評「苦しい時の神頼み」人情は古今東西かはりもない。戀すれば人に疎まれ、戀せじと願へば神に見放さる。失

戀失望の極は、恐らく氣が狂つてしまうだらう。おなじ事ながら、萬葉集に見えたのは、おのづからその時代の風調をそなへて、

いかにして忘るゝものぞあめつちの神を祈れどわが思ます（卷十三）

天地の神をも我れは祈りてき戀といふものはすべてやまずけり（同上）

などあるが、いづれも叙法が卒直で、この「うけずぞなりにけらしも」の辭樣の婉曲で、蘊含の味ひの深いのに及ばない。六帖に、

つらき人忘れなむとてはらふればみそぐかひなく戀こそまされ

模倣の作、この好處をすべて沒却してしまつた。

四五の句、伊勢物語にはうけずもなりにける哉とある。本行のは、聲調やゝこは〴〵しい節はあるが、意は優つてをらう。又四句、一本にうけずもとある。

○

あはれてふことだになくば何をかは戀のみだれの束ね緒にせむ

釋 ○あはれてふこと　あはれといふ言。「あはれ」は歎辭、あゝと同じい。愛憐の義ではない。○束ね緒　物を把ぬる緒又は紐。

大意 思が胸に迫つて心の亂れた時は、聲を擧げてあゝと溜息を吐けば、少しは心も靜まるが、そのあゝといふ言葉なりとも無くば、何をまあ自分の戀の心の亂れを靜める汐、卽ち亂れた物を引き把ねる束ね緒にはしよう

ぞ、他には何物もないわ。

評 ひどく苦悶した擧句にはあゝと息吐く、又苦悶してはあゝと息吐く。丁度それが亂れ散つた物を束ねる緒のやうな具合なので、もしこのあゝの吐息がないとしたら、戀の亂れは〆括もなく亂れるだらうといふ。「戀の亂れ」のとあるより、心を靜むる機會を「束ね緒」と轉義したのである。少し技巧に走り過ぎた感がある。

又意釋の一説は、「人の、あはれとだにもいはずば、何をか亂れたる戀の束ね緒にせむ」の意とした。さうも聞えるが、前後の部立から考へると、その意ではこゝに竝べられない。

○

思ふにはしのぶる事ぞまけにける色には出でじと思ひしものを

大意 人を思ふ心と、それを怺へ忍ぶ心とが、自分の胸の内で爭つてゐたが、怺へ忍ぶ方がサ負けてしまつたわい、それでつい思ふ色目を人に見られたさうな、えゝいつまでも色目には出しはすまいと思つたものを。

評 糾紛した胸中の苦悶を描き出して、餘蘊がない。思ふと忍ぶとの兩者の格鬪、いかによく堪へ、いかに強く戀うたものだらう。下句の如きは誰れにでもいはれる。平兼盛も、「忍ぶれど色に出にけり」と詠んでゐる。上句の落想に到つては、所謂天外よりした奇想で、面白い擬人である。但伊勢物語に、

思ふには忍ぶることぞまけにける逢ふにしかへばさもあらばあれ

とあるが、伊勢のはこの歌を作り換へたものだらう。雅嘉が、「しのぶる」を、世に忍ぶ意と解したのは誤つてゐる。

○

わが戀は人知るらめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ

釋　○しきたへの　枕にかゝる枕詞。袖、袂、衣手、床などいふ語へもかけて、枕詞とする。「しきたへ」は下に藉きて寢る布をいふ。「たへ」は栲で、楮の纖維から織つた布であるが、轉じて布帛の總稱ともする。○知るらめや　「や」は反動辭。

大意　自分の戀は一途に忍んで居るから、このやうに思ふことを、あの人が知るであらうか、とても知りはすまいわ、しかしこの閨の枕ばかりはサ、若し知るならば知るであらう。

評　それとても知りはすまいがの餘意がある。想は後人のやたらに踏襲する所となつて、新硯を發したやうにゆかない。結句の語調は、春上の「けふこそ櫻折らば折りてめ」と同じだから參照されたい。「知る」の語、ふと見ては無意味に三疊したやうだが、然うではない。短歌の體製を案ずるに、三四五句は、初二句の反復である。形に於いて調子に於いて、同じにゆくのが定律である。故に初二のと同意同語を、三句以下に於いて、同調に折り返すことは珍しくない。時に或は意を表裏し、叙法を順逆にして、姿致を取ることはあるが、なほ同語同調を追ふこと、この歌の如きもある。

初二句、六帖にわが戀を人知らめやも、下句、新撰和歌には枕ばかりぞ知らば知るともとある。

以下忍戀の歌をつらねてある。

○

淺ぢふの小野の篠原しのぶとも人知るらめやいふ人なしに

釋 ○淺ぢふの　「野」にかゝる枕詞。「淺ぢふ」は茅草のまばらに生へた所をいふ。茅はつばなの草。生は生ふの略語で、草木などの發生する處をいふ。○小野の篠原　小野の「小」は美稱で、小さい野の義ではない。又地名でもない。篠原は小竹の生へた原で、同音の響で「しのぶ」といふ語を喚び起したので、上句はすべて序である。○しのぶとも　「知るらめや」に續く。忍ぶと人は知らうかいの意。「とも」を重く聞いてはいけない。

大意　このやうに怺へ〳〵て忍んで思ふとまあ、先の人は知るであらうか、知りはすまいわ、誰れもいつて聞かす人無しにはサ。

評 「人知るらめやいふ人なしに」は明らかに理窟であるけれども、我が行爲を我れと批判して、非難らしい口吻を洩した點が面白い。否さう自省はしながらも、やはり祕めた戀心を打ち出す勇氣がなくぐつ〳〵してゐる。その矛盾が詩味をそゝる。蒼古な格調である。

四句、一本に妹しるらめやとある。人を親み思ふ意も顯はれ、且「人」の語の重複も避けられ、又第二者第三者の差別も明らかになつて宜しい。六帖には、下句妹はしらじなとふ人なしにとあつて、作者を人麿とある。新撰和歌には、初句夕されば、三句忍ぶれどとある。

○

人しれぬ思やなぞとあし垣のま近けれども逢ふよしのなき

釋 ○なぞと 「なぞ」は何ぞの意。「と」の辭が下に續かないので聞え難い。顯昭、眞淵の、詞の助に置いたといふ說は妄りである。千秋いふ、「このとは字形の似たるより、必ずもを寫し誤りて傳へたるにて、もとはなぞもにてぞありけむ。なぞもは古歌に例多く見ゆ。近くはこの卷の中にも、『かゞり火にあらぬわが身のなぞもかく云々』とあり」と。この說は旣にこの集の一本になぞもとあるから、從ふべきである。山田常典は「本の儘にて下に、思ふまでといふ詞を補ひて聞くべし」といつたが、さう詞を補つて行けば、聞えない詞といつては世にないことになる。○あし垣の 「ま近」にかゝる枕詞。蘆で造つた垣は粗末な垣で、少々づつまばらなので、間近きと續ける。顯昭の說には、「蘆の細きをこまかに組みて、ひま無ければいふ」とあるが、萬葉集に、「岩橋の間近き」とも續けた例を推せば、前の說が可いと思はれる。

大意 思ふ人に知られぬ內々の思は、何たる事ぞまあ、ほんの間近な所に住んで居れども、逢ふ仕方が無いわい。

評 いくら近隣でも心にだけ思つてゐるのでは、先方が御存じなしだから、逢へる筈がない。この見易い道理を忘れて、懊惱の極、「人知れぬ思やなぞも」と、わが思のかひなさを咎めた幽怨の趣は、一寸捨て難い。廣蔭が、「先の人にこの思を知らせなば、逢ふ由もあらむ」とまで、餘意を說いたのは過ぎてゐる。

二句、六帖に思やなにぞとある。これは意が明らかであり、二句で切るべき證とされる。

○

思ふとも戀ふとも逢はむ物なれやゆふ手もたゆく解くる下紐

釋 ○逢はむ物なれや　「や」は反動辭。上の「秋の野におく白露は玉なれや」。又、西行の「津の國の難波の春は夢なれや」のやは、各これとは別意である。○ゆふ手もたゆく　結ふ手も弛(ダル)くの意。○下紐　下裳の紐をいふ。

大意　如何に思ふとも戀ひ慕ふとも、その人に逢はれようものか、とても逢はれるものでは無い、それにその人が自分を思つて呉れるかのやうに、結ぶ手もだるい程に、何返も下紐が自然に解けるわ、昔から、「人に戀ひられる時は、下紐が解ける」といひ習はしてはあるけれど、あてにならないなあ。

評　奥儀抄に、「人に戀ひらるゝ人は、下紐解くるといふことのあるなり」とある。いにしへさうした諺のあつたことは確實である。萬葉集巻十一に、

君に戀ひうらぶれをればあやしくも我が下紐のゆふ手倦(タユ)しも

これは下紐のやたらと解けるのを見て、さては思ふ人に逢ふ前兆だらうと、悦んだ趣である。然るにこれはその前兆が一向事實に應現しないので、何と馬鹿な下紐奴と憤慨した口氣である。結句は下紐解くるとあるべきを調の爲に倒装した。婦人の作であらう。なほ、萬葉集巻十二に、

都べに君はいにしを誰れ解けか吾が紐の緒のゆふ手たゆきも

これも類型である。一二三の句、清輔、顯昭等の「思ひ戀ふとも我は逢ふまじきを、それも知らず戀ふるにやあらむ」と釋いたのは木强の言で、更に人情の眞諦でない。又詩歌の本旨でない。こは、逢はれむのれの略かれた

一格である。逢はむの意に見るは誤である。

○

いでわれを人なとがめそ大船のゆたのたゆたに物思ふころぞ

釋　○いで　允恭記には「歷乞」、萬葉集には「乞」の字を訓んである。乞ひ望むの意の歎辭で、發語にのみ用ひ、後には轉じて、口語のサア、イヤ、モウ、ドレヤなどの意に用ひる。こゝも後の意である。○とがめ　異しむこと。○大船の　大船の如くの意で、「ゆたのたゆた」にかゝる序。大船は動くにもゆくらく〱と漂ふのでいふ。○ゆたのたゆたに　萬葉集卷七に、「吾が心ゆたにたゆたに浮きぬなは邊にも沖にも寄りがてましを」とある。「ゆた」は口語のゆつたりの意。これにたの接頭語を加へて、「たゆた」といふことは、靡くをた靡く、謀るをた謀るといふに同じい。このゆたにを重ねたゆたにたゆたにが「ゆたのたゆたに」と轉訛した。意は大やうに迫らぬ狀なので、ゆくらく〱と搖くにもいふ。

大意　いやサ自分の樣子を、これ人達よ、必ず恠んで呉れるな、自分は今どうしようかうしようかと、落ち付かずに物思をして居る、この節であるぞよ。

評　いかにしても、思の色が顏に出て隱し切れないので、まゝよと腹を据ゑて、物や思ふと人の怪しまぬ先に、此方から打ち出した。もとより冷靜の思慮ではない。旣に戀の甘い香に醉ひ切つた人である。狂してゐる作者である。それでこそ歌も面白くなる。大船の譬喩は、萬葉集に「大船のはつる泊のたゆたひに」「大船のたゆたひ見れば」など數多ある。

結句、六帖に物思ふ頃をとある。

○

伊勢の海に釣するあまのうけなれや心ひとつを定めかねつる

釋 ○うけ　和名鈔に、「泛子、鉤別名也、宇介」とある。今、うきといふ。鉤に附けて、その動靜によつて魚の餌についたことを卜する。

大意　戀する自分の心は、この伊勢の海に釣をする漁師の使ふ泛子であるかして、うか〳〵と浮かれて、どうしようかうしようかと、この心一つをいづれとも定めかねたわ。

評 浪に搖られて出頭沒頭、打東打西するこの泛子のやうな心は、まことに意緒百端で、いひ出すのは羞かしからう、思ひ切るのは苦しからう。羞かしいのもはた苦しいのも、共に耐へられない業である。これいひも出さず思ひも切らず懊惱する所以、乃ち定めかねつる所以である。「伊勢の海の」といひ出したのは、この作者が他國人だからである　もとよりの伊勢人ならば、さう斷る必要がない。又、「都わたりに近き海にて、御贄の魚なども多く奉れば」といふ說もあるが、この叙述の趣によつても、譬喩の上からしても、眼前に泛子の浮沈するを見た狀でなくてはをかしくない。萬葉集巻十一、

住のえの津守網引の浮笑緒のうかれや行かむ戀つゝあらずは

よりは譬喩が一層巧妙で、妥當である。それは直喩によらず隱喩を用ひた爲だらう。

○

伊勢の海のあまの釣繩うちはへてくるしとのみや思ひ渡らむ

釋 ○釣繩　海中遠く數多の鉤を附けた枝繩を、一條の元繩を延ばしておいて、よい頃にそれを繰り寄せて、餌についた魚を捉る。これを長繩といふ。卽ち釣繩である。伊勢尾張では、ながの、釣(長繩の鉤の訛か)といひ淡路でははへ繩といふと。○うちはへてくるし　打延(ウチハ)へて繰るに、苦しをかけた。

大意　この伊勢の海の海士の釣繩は、長く延ばして置いては又繰り上げるが、自分は戀故に、その釣繩の長く延へたやうに長い月日をかけて、それを繰るといふやうに苦しい事よとばかり思つて居ようか、思ふ人にはいひ出さずしてサ。

評　上の二首は、ゆたのたゆたに物思して、心一つを定めかねたのを、これは一方に心一つに思ひ忍ぶと決心した。如何にはかない戀であつたらう。釣繩の序、これはいよ〳〵目のあたりに、海士の爲業を見ての作と斷ぜられる。

「釣繩」、一本に栲繩(タクナハ)とある。栲の皮で綯つた繩で、網などの綱に用ひる。四句、六帖にこひしとのみやとある。

○

なみだ川なにみなかみを尋ねけむ物思ふ時のわが身なりけり

釋 〇なみだ川　涙を川に喩へていつた。固有名詞として伊勢國にあるといふ說は、前二首が伊勢の海とあるに引かれての附會と思ふ。

大意　涙川の水上を、餘所にばかり何で尋ねたことであらう、よく見ればその水上は、戀故に物を思ふ時の自分の身であつたわい、涙がこれこの通り身から出るわサ。

評 自身の涙を自身と切り離して、別々に考へてゐた趣である。いかに戀に目の眩んでゐたかが思ひやられる。實に涙の水上を尋ねる事ではないが、ふと冷靜に返つた時、おゝこれは皆自分の涙であるわと、氣が付いての思索から出てゐる。漢の張騫が河源を窮めて天に到つた故事を聯想したとするのは鑿であらう。二句の辭樣など面白さうだが、技巧の間に、漸く眞情が逃げてゐる。

吉野川そのみなかみを尋ぬれば苔のいは間のしづくなりけりとその樣式を同じうしてゐる。

○

種しあれば岩にも松は生ひにけり戀をし戀ひば逢はざらめやは

釋 〇種し　〇戀をし　「し」はいづれも强辭。

大意　種がサあれば、生えさうにも無い岩の上にも、松は存外に生えたわい、されば、假令出來にくい戀でも、一生懸命にこの戀をサ戀ひ徹さうなら、逢はれぬ事があらうか、いや逢はれぬといふ事はあるまい。

評 蟻の思も天、戀を戀として、その最後に到達するまで、戀ひて後已むである。その間或は無窮の障碍もあら

う。或は、獻身的の活動を要する事もあらう。それは一向辭さないのである。この高潮の情熱があつてこそ、始めて愛の神聖を語ることが出來よう。上句と下句とは合拍せしめたもので、初句の字餘りは、四句の強い語調に均當して平衡を得た。比興も奇警で古樸の味ひを帶び、表現が又平凡でない。佳作。

三句、六帖に生ひぬるをとある。又、結句の「やは」、季吟本にはやも、打聽本にはかもとある。

○

朝な〳〵立つ河霧の空にのみうきておもひのある世なりけり

【釋】○河霧の　河霧の如くの意。○うきて　うは〳〵して。

大意　人を戀ひ慕へば、毎朝立つあの川霧が、宙にばかり浮いてゐるやうに、何時も心がうは〳〵して、一向に落ち着かぬ思のあるこの世であつたわい。

【評】上句は、「空にうきて」にかゝる序である。川づらの宿に住んでゐる人が、眼前の實景から關聯して起した戀の感懐で、煩悶のはては遂に世を恨み世を呪ふに至るのである。六帖、及び新古今集に、山口女王の作として、

鹽がまの前にうきたる浮島のうきて思のある世なりけり

を舉げてあるが、下句のさまは、決してこの女王の時代の風體でない。萬葉を見知る人は知るであらう。されば、鹽釜の作は、この歌より後の物か。「ある世なりけり」は、景樹以後やたらとこの口調を眞似て、厭はしい程の陳語となつた。飛んだ作者に取つての迷惑である。

○

忘らるゝ時しなければあしたづの思ひ亂れて音をのみぞなく

【釋】○あしたづの　あしたづの如くの意、「あしたづ」は蘆鶴で、鶴は蘆邊に住むので付いた名。或は「蘆の花の色に據れり」といひ、或は「求食鶴(アサリタヅ)の約なり」といふ說もあるが采らぬ。

大意　戀しさを忘られる時がサ無いから、蘆鶴の飛び亂れて鳴くやうに、いろ〳〵と思ふ心が亂れて、聲に立てて泣いてばかりサ居るわい。

【評】「蘆鶴」は、「亂れてなく」にかゝる序である。鶴に亂れることをいふは、萬葉集にも「朝露にたづは亂れて夕霧に蛙は騷ぐ」(赤人)などある。同集卷三に、金明軍の大伴旅人の甍を悼んで詠んだ、

君に戀ひいたもすべなみ蘆鶴の音のみし泣かゆ朝よひにして

は同想の同喩で、暗合か模倣か。第二句、原作はひどく切迫した調子であり、これはやゝ比較的のびてゐる。三句以下の調子が又、おの〳〵初二句に相應して仕立てられてある。中古鶴の內地に數多棲んでゐたことは、既に上にいつておいた。

○

からごろもひもゆふぐれになる時は返す〳〵ぞ人は戀しき

【釋】○からごろもひもゆふぐれ　韓衣紐(カラヒモ)結ふに、日も夕暮をかけた。

大意　着物の紐を結ふといふやうに、けふの日も夕暮になる時は、何やら寂しくなつて來て、衣を返すといふや

うに返す〳〵さ、かの人が思ひ出されて戀しいわ。

評 何時とても戀しくない時はないが、わけて夕暮はあらゆる感哀のすゝむ頃であるから溜らない。況やまた當時の慣習として、夕暮は男女相逢ふ時だから、いよ〳〵人戀しさが取り詰めてくる。この意を萬葉集には、

何時はしも戀ひぬ時とはあらねども夕方まけて戀はすべなし　（卷十一）

とある。只これは韓衣を取り入れて、緣語で鎖り續けてゐる。萬葉集のは荒削のこは〳〵しさが見えるが素朴であり、これは小巧を弄して却つて氣味が盡きる。殊に初二句のいひかけ、すこし卑しげである。拾遺集に貫之、

忘らるゝ時しなければ春の田をかへす〴〵ぞ人は戀しき

この下句と、上の歌の上句とを取り合はせて、序詞を春の田に換へたやうな歌である。

○

よひ〳〵に枕定めむかたもなしいかに寢し夜か夢に見えけむ

釋 ○枕定めむかたもなし　枕を落ち着けようすべもないの意。「方」は方角の意ではない。

大意 この頃は毎晩〳〵物思に責められて、あちらこちらへと寢返りして見ても眠られぬ故、どうしたら眠られようやら、枕の定めうようも無いわ、あの何時ぞやどのやうにして寢た事であつた晩か、よく眠られて、思ふ人が夢に見えたのであらう。

評 始めの間こそ眠れもして、人を夢に見るほどの餘裕もあつたが、今はいよ〳〵思が募つて、夜もろくに眠ら

れない。戀の深みに段々はまり込んでゆく趣が見える。毛詩にいはゆる、

窈窕タル淑女、寤寐求ムレ之ヲ、求レドモレ之ヲ不レ得、輾轉思服ス、悠ナル哉悠ナル哉、輾轉反側ス。

と同一の境致である。萬葉集巻十一の、

敷妙の枕うごきてよるも寢ず思ふ人にはのちもあはむもの

敷妙の枕うごきていねらえず物念ふ此宵ははやも明けぬかも

はまた同想である。而してこの歌、風調といひ語調といひ節奏といひ、遙かに萬葉のに勝つて、全く洗煉の作である。「いかに寢し夜か」の疑問、一番弄巧の處ではあるが、しかも纖俗でない。

初句、六帖には夕されば、新撰和歌には戀ひ〳〵てとある。

○

戀しきに命をかふる物ならばしにはやすくぞあるべかりける

釋 ○しに　死ぬの連用言をいひ据ゑた體言。

大意　この戀の苦みに命を換へられる物であるならば、死ぬといふことは、造作無いことでサ、ありさうな事であるわい。

評　しかし命が思ふまゝにならぬ故くち惜しいの餘意がある。恐ろしい强烈な戀の聲である。戀に對して古人は自殺を考へてゐないが、後世は死を濫用するやうになつた。後世の人情から、この歌の死を希つたことを輕く考へてはならない。但萬葉集巻十二に、

なかくに死なばやすけむ出づる日の入わき知らぬ我れし苦しも

とあるは同想同型であるが、これは敍述が說明的になつてゐるのが疵である。遊仙窟に「他言愁勝ㇾ死、兒言死勝ㇾ愁、愁來百處痛、死去一時休」とあるのは、これらの藍本か。

○

人の身もならはしものをあはずしていざ試みむ戀ひや死ぬると

釋 ○ならはしものを　慣しがらの物であるものを。

大意　人の身といふものも、すべて慣しがらのものであるものを、戀しい人に逢はずに居て、それが習慣となつて逢はずにゐられるか、それとも亦怺へられずに、焦れ死にに死んでしまうかどうかと、どれ試して見よう。

評　習慣によつて性情の變化することは、古人も夙く認めたと見える。然し何も戀ひ死ぬかどうかとわざく試す必要もない。實は戀ひ死ぬばかりの間柄に邪魔がはひつて、思ふまゝに逢へぬ人の感懷で、心から物好きに逢はぬのではないだけに、强ひてかうした矯語を弄することが哀れである。畢竟逢ひたい心の募るのを抑へる爲に、一工夫を案じたのである。所謂「出來ない相談」ではあるが、そんな事までも思ひ寄せて、千々に心を碎くのが、戀の情であらう。誹諧部に、

　ありぬやと心みがてらあひ見ねばたはぶれ難きまでぞ戀しき

これは既に試みて、悶々の苦を嘗めた趣である。相對へて意得るがよい。初句の「も」の辭、如何に廻護して見ても妥當でない。

○

忍ぶれば苦しきものを人知れず思ふてふこと誰れにかたらむ

大意 打ち出さずにじつと怺へて居れば、いよ〳〵切ないものを、このやうに内々に思つて居るといふことを、誰れかに話したいものであるが、誰れに話さうぞ。

評 大鏡に、「おぼしき事いはぬは、げにぞ腹ふくるゝ心地しける。かゝればこそ、昔の人は物言はまほしくなれば、穴をほりてはいひ入れ侍りけめ」と見え、上にも「あはれ」と歎息するばかりでも、「戀の亂れの束ね緒」となるとある。まして「思ふてふこと」を打ち明けたなら、如何に胸の明く心地がするであらう。けれども、この胸裏の祕密をまことに開くべき鎖鑰は、卽ち戀ひ焦れるかの君の御手にある。たゞ如何せんこの心を先方に通ずる手段がない。せめてこの祕密を聞いて貰へる親身の友でもあるなら、幾分か戀心が緩和されもしようが、さてその人がないとなると、殆ど途方にくれる。これ「誰れに語らむ」と煩悶する所以である。伊勢物語に、

思ふ事いはでぞたゞに止みぬべき我れと等しき人しなければ

などを思ひ合はせてよい。

○

こむ世にもはやなりなゝむ目の前につれなき人を昔とおもはむ

釋 ○こむ世　未來の世。○なむ　希望の辭。○目の前に　直にといふに似てゐる。

大意　いつそこのまゝ、來世にまあ、早くなつてしまつて貰ひたいわ、そしてあのつれない人を卽座に、前世の事と思はうわ。

評　構想を佛經の三世流轉說に采つた。前世の事は「隔生の如し」と說いて、現在世では一向に聞知する所がない。されば早く來世となつて、卽座に現世の戀の苦患から遁れたいといふ。いかにその戀が熾烈であるかゞわかる。況や對手がつれないとなつては、厭世觀は當然起つてくる。來世になるには、先づ死んだうへの事だが、そんな分別を離れた愚痴が、戀の爲に血迷へる人の態度である。この歌の妙味は、全くこゝに存する。廣陰が「人を戀ひて焦れ死にすべく思はるゝ故、同じ死ぬ程ならば、來む世にも早なれかし」と釋いたのは、戀せぬ人の理窟である。又景樹が、「來む世は今經て行かむ世にて、年經たらむ後をいふ」と、佛說の來世の意とするのを否認したのは、好んで樹てた異說で隨へない。「目の前に」は卽座に、直になどの意の轉義である。これで印象が更に鮮明になる。

○

つれもなき人を戀ふとて山彥のこたへするまで歎きつるかな

釋　○山彥　夏部「時鳥聲はきこえず」の條に既出。○歎き　長息(ナガイキ)の動詞となつた語、溜息を吐くこと。

大意　つれないあの人を戀ひ慕ふといつて、谺(コダマ)の應へて響く程にまで、さても〳〵大きな聲で、溜息を吐いた事よ。

評　「山彥の應へするまで」は、歎聲の甚しさを誇張したものである。無情の山彥の應へるのは、則ち有情の人の、

手答ない無情さを反映するもので、この誇張の程度の高ければ高い程、面白い對照をつくる。景樹が「餘り仰山にて眞實の歌ならず、只讀み上げたる調のみよきなり。新撰萬葉に山彥の音のするまでとある、この山彥は音といふ枕なり。これは面白し」といつたのは、更にこの間に於ける微妙の消息を曉り得ぬ論である。「天彥の音羽山」など續けたのを一つにして、山彥を枕詞と思つたのも穉い。

山彥の答へするまでほとゝぎす妻戀すらし小夜中に鳴く　(萬葉卷十)

と一寸似たらしいと見えるが、全く別趣のものである。

新撰萬葉には二句待つとて、四句音のするまで、寬平歌合には四句を答ふるまでとある。

○

行く水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

釋 ○かずかく　數書く。一つ二つ幾つと線を書き付けるをいふ。

大意　流れて逝く水に、一本二本と線を引くは、書くそばから消えて、はかないものであるが、それにもまださつてはかないのは、此方を思つても吳れぬ人を、此方からばかり思ふのであつたわい。

評　我が戀は、卽ちその最もはかない物といふ事を暗示した。客觀的に見たのではなくて、自嘲の語である。しかもその愚を知りながら、なほ執著してゐる人の作である。上句は、既に萬葉集卷十一に、

水のうへに數書く如き吾が命妹に逢はむとうけびつるかも

とある。只その比喩を對比に轉用したのが、この特徵である。但萬葉のは更にまた出處がある。涅槃經に、

是身無常、念々不ㇾ住、猶ニ電光暴水幻炎一、亦如ㇾ畫ㇾ水、隨畫隨合。

來歷を吟味して、その叙法の異同に注意を拂ふ時は、これも亦面白い。下句「思はぬ」「思ふ」と、同語を反對の意に掛け合はせて曲折を作り、姿致を取つた。意旨幽怨で、語路聲調兩つながら流朗である。

○

人を思ふ心は我れにあらねばや身のまどふだに知られざるらむ

釋 ○我れにあらねばや　我が身に存在せざればやの意。中古文のあるの語の用法は、多くこの意である。諸註、「我が物にあらねばや」の意に解したのは誤。

大意　人を戀しく思ふ心は浮かれ出して、自分の身には無いせゐかして、大切なこの自分の身のうろたへ迷ふのさへも、知られないのであらう。

評　戀は一種の精神病である。或物に對してのみ發作する情狂である。戀ゆゑに身をはたすことは、昔も今もかはりはない。たま〳〵本性に反つた時、我れと我が行爲を訝り、我が心を疑ふ。この撞着が乃ちこの歌の成る所以である。好處は上句にある。

○

思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢路に逢ふ人のなき

釋 ○思ひやる　排悶の意が本義だが、こゝは一轉して、想像の意に用ひた。

大意　戀しい人のことを常住思ひ遣つて居るまゝに、その思ひ遣る路も段々深入りして、場所が遠く遙かになりもするのやら、あちこちと思ひ惑ふ夢の路には、一向に出逢ふ人が無いわ。

評　夢を夢路と混喩にいふことから、遠い野山に惑ひあるく旅路には、行き逢ふ人も無いことを聯想して、夢路に人の子一人にも逢はぬは、餘り思ひ遣り過ごして、そんな途方も無い遠境に行き惑つたのかと訝つた。「逢ふ人のなき」と弘くはいつてゐるが、その人はやはりかの戀人一人を斥してゐる。想ふに實はその夢すらも結ばないのであらう。構想尖奇。

〇

夢のうちに逢ひ見むことを賴みつゝ暮せる宵はねむ方もなし

釋　〇宵　夜といふに同じい。

大意　せめては夢のうちに戀しい人に逢はふことを、ひたすら賴みにしくて、やつと日を暮した宵は、却つて心が澄んで、どうして見ても、寐よう方角も無いわ。

評　夢中の會合を賴むのは、現實に逢はれぬからである。「暮せる」とある、如何に晝の內から心待ちに樂しみとしたかがわかる。生憎や目はさゆる心は焦燥る、輾轉反側して寐付かれない。戀は一種の神經衰弱である。然し當人にとつてこの位意地のわるい情ないことはない。起きても逢はれず寐ても逢はれず、その當惑のうめき聲が卽ちこの歌となつた。「宵は」と差別を立てたのに、常は眠りもした趣が反映されて面白い。かく些少の潤色はあるが、通篇一氣呵成の渾體である。廣蔭が、「人のつれなくて現には逢はれぬまゝに」と、餘意をいひ添

へたのは蛇足である。景樹の說に、「夢を見るにさまざ〻の修法などして、暮るゝとやがて閨に入りしなるべし、淫佛の弊なり」とあるも、この歌を釋くには無用の贅說である。

○

戀死ねとする業ならしうば玉のよるはすがらに夢に見えつゝ

釋 ○よるはすがら　夜は夜通しの意。夜すがらを分けていつた語。○うば玉の　「よる」にかゝる枕詞。物名「うば玉のわが黑髮や」の條に既出。

大意　これはまあ必ず戀ひ焦れて死んでしまへといふ心で、思ふ人のする爲業であるらしい、なぜといふに、夜は夜通しに思ふ人が夢に見えくくして、現實には更に逢つても吳れぬわ。

評 戀の爲に神經昂奮して、非常に過敏となつた人の作だらう。まゝならぬ戀路は、なまじいに夢にその俤を見るだけつらい。かう寐ても醒めても戀に責められては、全くやりきれない。そこで餘計な邪推が起つて、戀ひ死ねとて思ふ人のする事かと、一途に人の上のみを怨みがましく咎めたのが面白い。實にこの道は賢者をも愚にする。但この句、萬葉集卷十一に、

戀ひ死なば戀ひも死ねとや玉ほこの道行き人にことも告げなき

戀ひ死なば戀ひも死ねとや吾妹子が吾家の門を過ぎて行くらむ

など、夙く古人の道破を經たもので、奇警で目につき易いので、また後人の踏襲する所となつて、六帖にも、

戀ひ死ねとする業ならし玉章のたよりも見えずなり行く見れば

とある。「よるはすがらに云々」は、晝は日ねもす思ひ暮すに對した叙法で、一部を省略して想像にまかせてある。されば、比較的省筆の必要の尠い詩形の尨大な長歌の如きは、皆聯對して叙してある。萬葉に見えた、「ぬば玉のよるはすがらに、赤羅引く日も暮るゝまで、「赤根さす晝はしみらに、ぬば玉のよるはすがらに、「茜さす晝はしめらに、ぬば玉のよるはすがらに、の類なほ多い。

○

涙川枕ながるゝうきねには夢もさだかに見えずぞありける

釋　○うきね　浮宿(ウキネ)。水上に泊るをいふ。それに、憂きをかけた。

大意　涙が川なしてそれが爲に枕が流れる、かういふ憂いつらい浮寢では、寢入り兼ねて、思ふ人の夢もしかとは見られ無い事でサあつたわい。

評　涙の多量なることを川に譬へ、さて「枕流るゝ浮寢」とあくまで誇張し、水上の假泊は夢も結び難いのを下に踏んで、「夢も見えず」と歎息した。その眞意はせめて戀人を夢になりと見たいからである。萬葉集卷四、しきたへの枕をくゞる涙にぞ浮宿をしける戀のしげきにを本歌とした歌である。

○

戀すればわが身は影となりにけりさりとて人に添はぬものゆゑ

【釋】○影となりにけり　「影となる」は瘦せ衰へて、影法師のやうになるのをいふ。影法師もいろ〳〵あるが、朝夕の細長く地に影を引いたのがふさはしい。故に萬葉集には、「朝影になる」と詠んである。○ものゆゑ　ものながらの意。

大意　戀に打ち込んで居ると、自分の身はかう瘦せ衰へて、影法師のやうになつてしまつたわい、さうかといつて思ふ人に添ひもせぬ故、何の詮も無い事よ、影ならば人に立ち添ひさうなものを。

【評】「影」の一語に就いて、一趣向を立てた。只この影は實在の影でないから、沙上の堂舍で、決して理路に陥らない。上句は奈良時代にしば〳〵繰り返された想で、萬葉集に、

朝影に吾が身はなりぬかぎろひのほのかに見えて行きし子故に　（卷十一）

朝影に吾が身はなりぬから衣すそのあはずて久しくなれば　（同）

夕づく夜あかとき闇の朝影に吾が身はなりぬ汝を念ひかねに　（同）

年もへず歸りきなむと朝影に待つらむ妹が面影に見ゆ　（卷十二）

などある。但下句はこの歌の生面で、その痴呆の想は警策といふべきである。

二三二の句、新撰萬葉に吾が身ぞ影となりにけるとある。

○

かゞり火にあらぬわが身のなぞもかく淚の川にうきてもゆらむ

釋 ○かゞり火　和名鈔に、「夜篝火、師說云比乎加々利邇須、今案、漁者以レ鐵作レ篝盛レ火照レ水者名レ之、此類乎」とある。漁夫が篝を焚いて水面を照射し、魚の寄り來るを待つて捉へることは、川でも海でもすることである。○なぞも　「何ぞ」に「も」の歎辭の添つた語。

大意　篝火こそ水の上に浮いて燃える物であるが、その篝火でも無い自分の身が、なぜにまあこのやうに、涙の川に浮いて焦れ燃えるのであらうか。

評 人に戀ひ焦れて涙に身の浮くばかりなので、浮いて燃える漁火の影を聯想し來つて、涙の川を流しかけた。「涙の川」のことは、既に上にいつた。構想ます〳〵尖奇に走つてゐる。

結句、諸註「思ひの火の燃ゆる」と解いたのは、似て非なるものである。これは身の燃ゆると續くので、別に思ひといふ物の燃えるのではない。詞の上にも見えぬことである。

後撰集戀四に再出したのには、「女につかはしける」と詞書があつて、二三の句あらぬ思のいかなればとある。六帖には、二句あらぬ物から、結句浮きて見ゆらむとある。

○

かゞり火の影となる身の侘しきはながれて下にもゆるなりけり

釋 ○かゞり火　これも前の歌と同じ漁火である。○影となる　上の「戀すれば」の條に既出。○ながれて　流れてに、存在れてをかけた。存在れてのことは、上の「山高み下行く水の下にのみ流れてこひむ」の條に既出。○下にもゆる　心の内にはげしく思ふを喩へていふ。

大意 篝火の映つた影は水の下で燃えるが、丁度そのやうに、戀に痩せ衰へて影のやうになる自身のつらいことは、死にもせずに生き長らへて、心の内でばかり思つて、胸の燃えるのであつたわい。

評 同じ材料を用ひても、この頃のは修飾多く、眞摯の點に缺けてゐる。萬葉の後に出て、更に生面を開かうと試みた結果である。上に擧げた萬葉の朝影と、この集の影とを比較して、その風調の變化を味ふがよい。歌は上のと同調同體同巧である。

○

早き瀬にみるめおひせばわが袖のなみだの川に植ゑましものを

釋 ○みるめ　和名鈔、「海松云々、水松、狀如レ松而無レ葉、和名美流」とある。布は昆布、荒布など、海藻につけて呼ぶ稱。さて海松布に、見る目をかけた。○淚の川　例の混喩。

大意 海中に生える海松布が、川の迅い瀨に生えて育ちもするものならば、戀しい人を相見ることの無いのを歎く爲に、早瀨になつて流れる、自分の袖の淚の川に植ゑようものを、さすれば海松布の名の如く、戀しい人を見る目もあらうと思ふに、生憎海松布は早瀨に生える物でないから致し方もない。

評 渴ける者は水を擇ばず、戀する者は手段を問はない。はかない物種につけても、せめてはかうもあれあゝもあれと希つて、多少の慰藉を得ようとする。このはかない痴愚の想は、戀の迷の甚しさを想はせるものである。海松布の名によつた着想は、やゝ纖細に流れるが、その希望の不合理なのが、大いに詩味を生じて、怨嗟の意が殊に深さうに聞える。それを「海松は海にこそ生ずれ河にはいかで」など難じた說もあるが、味者の言であ

る。平安朝になつて殊に戀の歌に海松布の弄語が非常に多い。海松などは海邊に遠い都人のさう目に觸れる物でもないのにと思はれるが、實際はこれを塩漬などにして食料に用ひてゐた。そして模様などにも海松總を使つてゐる處から見ると、やはり當時の都人士の生活に卽してゐる物であつた。六帖には作者を貫之とし、結句植ゑて見ましをとあるが、語勢がやゝ弱い。この歌の趣では、この句は力强いのがよい。本行のに從つておかう。

○

おきへにも寄らぬ玉藻の浪のうへに亂れてのみや戀ひ渡りなむ

釋 ○おきへにも　沖にも邊にもの意。沖は海の遠き奥をいひ、邊は海端をいふ。○玉藻　玉は美稱、藻は海草のすべてをいふ。

大意　自分の戀は沖の方へも海端へも寄らずに、玉藻が浪の上で亂れてゐるやうに、思ふ人にえいひ出しもせず、又思ひ切ることもえせずに、どちへも就かず、心が亂れてばかり居て、月日を經る事であらうか。

評 亂れてのみ戀ひ渡るのは實に堪へ難いことである。然るにさうした境地に立たなければならぬとなつては、その苦悶は同情に値する。

わが國は海國である。神代の歴史は海の歴史である。かゝれば沖つ藻邊つ藻の歌詠に上ることは久しい。天孫の御歌その始をなし給ひ、奈良時代の歌詠に至つては、枚擧に遑がない。人麿の句に、

香靑なる玉藻沖つ藻、朝羽ふる風こそ寄せめ、夕はふる浪こそ來よれ、浪のむたかよりかくより、玉藻なす

寄り寐し妹を、（萬葉集卷二）

と見え、祝詞には、

沖つ藻は、邊つ藻は、

と連ねた。玉藻のか寄りかく寄りすることは、奈良時代からの常套語となつたが、それだけ餘計に「亂れて」とかゝつた意味が確實性をもつ。

○

あし鴨のさわぐ入江のしら浪のしらずや人をかく戀ひむとは

釋 ○あし鴨　鴨は蘆邊に住むゆゑにいふ。蘆鶴（アシタヅ）の語例と同じい。○しらずや　「や」は歎辭。

大意 蘆鴨の騷ぐ入江の白浪のしらといふやうに、知らぬことよ、人をこのやうに戀しう思はうとは。

評 上句は白浪のしらずと同音を疊んだ序である。「靑き中にちらりくと波の白く見ゆる景色面白し」と景樹は評した。但萬葉集卷十一、

あし鶴のさわぐ入江のしら菅のしられむ爲とこちたかるかも

の序詞を借用したのである。「知らずや」の「や」の用法は弱くて、浮泛の感がある。上來の語勢では呼格に解したいが、すると意が齟齬してくるから仕方がない。冷靜に考へると、戀は全く思案の外である事を痛感する。六帖には、下句しらずや君はわが戀ふらくをとある。思ひ入つた趣が見え、高古の風があつて、倒裝の語調も自然でよい歌である。萬葉の下句に優つてゐる。本行のは或はこれを誤り傳へたのではあるまいか。

人丸集には、二句入りて鳴く音の、結句しらずや妹をとある。

以上六首は江河等に寓せた戀である。

○

人知れぬおもひを常にする河なる富士の山こそわが身なりけれ

釋 ○おもひを常にする河なる　思を常に爲るに、駿河をかけた。

大意　戀しいあの人に知られぬ思を、いつも〳〵するこの自分の身に、譬へる物は外には無い、底の火は餘所に見えずに、不斷うへに烟が立つて燃える、あの駿河に在る富士の山がサ、卽ち自分の身であつたわい。

評 「富士の山の烟も立たずなり」と、序文中に見えたが、都良馨の富士山記には、其頂中央窪下、體如二炊甑一云々、其甑中、常有レ氣蒸出、其色純青、窺二其甑底一、如二湯沸騰一、其在レ遠望者、常見二烟火一。

とあれば、この歌も貞觀頃の作であらう。富士の火の底にばかり燃えて、餘所に見えぬのを、わが心火の燃えながら、思ふ人に知られぬのに想到して、普通ならば譬喩の叙法を采るべきを、直に富士の山はわが身なりと斷定したのがこの奇處、嶮處、はた好處といはう。「おもひ」に火を寓せたか寓せぬかゞ問題である。歌としてはそんな小細工をせぬ方がよいが、時代としては或は寓せてあるかも知れない。

○

とぶ鳥の聲もきこえぬおく山のふかきこゝろを人は知らなむ

釋 ○おく山　深山をいふ。秋下「奥山に紅葉ふみわけ」の條に既出。○ふかき心　一方ならず思ふ心。

大意　飛ぶ鳥の聲さへも聞えぬ程の、深い山のやうな、深い思ひ入つた私の心を、外の人などはどうでも、あの人はどうぞ知つて貰ひたいわ。

評「奥山の」までは序で、深山の形容を悉した。「聲も」のもは例の強い用法。「人は」のはも調が強いので差別の意が生ずる。全篇から力強い調なので、その一途に思ひ込んだ情緒の動きが見える。

○

あふ坂のゆふつけ鳥もわが如く人や戀しき音のみ鳴くらむ

釋 ○ゆふつけ鳥　木綿(ユフ)附け鳥の義で、鷄のことか。顯昭いふ、「世の中騷がしき時、君の御祈に四境の祭といふ秡あり。鷄に四手を附けて、陰陽師に凶しき事を祈りつけさせ、四境の關に放さるゝなり。されば木綿附け鳥といふ。逢坂はこの平安城にては東方の關、四境の一也」と。なほ雜下「誰がみそぎゆふつけ鳥か云々」の條にいはう。

大意　逢坂の關に放してある木綿附け鳥といはれる鷄も、自分のやうに人がさ戀しいのかして、自分と同じやうに、聲をばかり擧げて鳴くのであらうぞ。

評　上に「足曳の山時鳥わが如や云々」と詠んだのと同想。そこの評を參照されたい。「戀しき」は「や」の係辭の結であるが、連體言なので、直に結句の「音」といふ體言にいひ續けた。いはゆる藕斷えて絲絶えざる語法。

○

あふさかの關に流るゝいはし水いはで心におもひこそすれ

釋 ○いはし水　岩間の清水をいふ。これは逢坂の關の清水の事と思ふ。

大意　逢坂の關に流れる岩清水の岩といふやうに、口にはいはずに居て、心にばかり思つて居るわ。

評 上句は、岩清水いはでと、同音を疊んだ序である。譬喩ではない。されば廣陰の「岩清水の滿ちこぼるゝ如くに胸に餘れども、口にはいはずして」と釋いたのはわるい。「いはで思ふぞいふにまされる」で、つゝしみと羞恥との壓迫にあつて、下燃えにのみ燃えてゐる胸の苦惱は、戀知らぬ人の想像以外である。聲調流麗、齒牙に碍らない。

下句、六帖にいはでしもこそ戀しかりけれとある。

○

うき草のうへは茂れる淵なれや深きこゝろを知る人のなき

釋 ○うき草　和名鈔に、「萍、和名宇木久佐、無レ根浮二水上一者也」とある。

大意　うはべに出して見せぬ自分の心は、丁度浮草が水の上は茂つて、その底の見えぬ淵であればかして、この深い心底を知つて呉れる人が無いわ。

評 初二句、うへはうき草のとあるべきを、調に任せて倒裝した。比興が巧で、感哀も等閑でない。語勢も亦毫

ふ人は默つて已むより外はない。但部立に依れば、戀の意とばかり見るがよい。

蘆の弛みがない。「深き心を知る人のなき」、かるが故に、戀する人は意中の人の同情なさに煩悶し、世を憂る人は默つて已むより外はない。但部立に依れば、戀の意とばかり見るがよい。

○

うちわびてよばはむ聲に山彦のこたへぬ山はあらじとぞ思ふ

大意 胸の迫つたあまりに、大聲に喚ばらう聲に、谺の響いて答へぬ山はあるまいとサ思ふわ、といふが表面の意で、これ程に深く思ふからは、思つて吳れぬ人はあるまいと思ふ、といふが裏面の意。

評 有情の山を以て無情の人に對へた映帶の味ひが至極面白い。「山彦の答へぬ」の擬人、いよ〳〵その諷喩の意を深めて妙である。結句の字餘り、春上の一鶯の鳴かぬ限はあらじとぞ思ふ」と同じで、語調強く、一途に怨めしく思ひ込んだ態度が哀れである。

後撰集戀五に再出したのには、「返しせぬ人に遣はしける」と詞書を添へ、その返しとて、

山びこの聲のまに〳〵とひゆかばむなしき空にゆきや返らむ

の歌を擧げてある。

「山は」を六帖には空はとある。

○

心がへするものにもが片戀はくるしきものと人にしらせむ

釋 ○するものにもが　「が」は希望の辭。がなと同じい。○片戀　片思と同じい。

大意　互に人の心が取り換へられる物でまああつてほしい、さらば、自分の思ふ心と、あの人の思はぬ心と入れ換へて、片思は苦しい物といふことを、つれないあの人に思ひ知らせようわ。

評「心がへ」は面白い落想ながら、あながち斬新でもあるまいか。それは天武紀に、「是日爲二天皇一招レ魂」といふことが見え、職員令鎭魂の義解に、「謂二鎭安一也、人陽氣曰レ魂、魂運也、言招二離遊之運魂一、鎭二身體之中府一、故曰二鎭魂一」とあり、又、延喜式に、鎭魂祭の祝詞がある。魂魄の遊離を信ずることは、その時代の通想だから、隨つて反魂の際謬つて、甲乙の身體を取り違へて入り換りなどした俗說もあつたらうと思ふ。これを戀に湊合したのはこの歌の働である。列子に見えた、扁鵲が公扈齊嬰二人の心肝を入れ換へた話を典故とするのは、却つて物遠からう。到底不可能の事をも、萬一の望を繫いで、千々に心を碎くはかなさが、卽ち戀の眞情である。「人に知らせむ」とあるは、怨恨の意が殊に深い。「もの」といふ語の重複は不用意から出たと思はれる。まあ白璧の微瑕であらう。

結句、顯本に思ひ知られむとある。いひ方は大人しいが、思ひ入りが淺い。

○

よそにして戀ふれば苦しいれ紐のおなじ心にいざむすびてむ

釋 ○いれ紐のおなじ心に云々　顯昭いふ、「入紐は、雄紐雌紐ふたつを取り合はせてさすものなれば、同じ心に結ばむとは詠めり」と。中身を心といへば、通はせて用ひた。

大意　このやうに隔たつて、餘所に居て戀ひ慕へば苦しいわ、されば入紐の兩方の紐を一所に結び合はすやうに、これからはあの人と同じ心になつて、どれ一所になることにしよう。

評　男女いづれか相手の心のまだ得心の出來ぬ點があつて、隔たり居る者の希望である。恐らくかう詠んで先方に贈つたものではあるまいか。素より自分だけの勝手ぎめで、相手は肯諾してゐないのだから、實現はむづかしい。それにも關はらずやりさへすればすぐ出來さうな風に思ふのも戀の迷で、思ひ迫つた情緒の横溢した趣が見える。入紐の譬喩は、萬葉集卷十二、

何故か思はずあらむ紐の緒のこゝろに入りて戀しきものを

の先蹤があるが、着想が別だから仔細はない。漢詩に若に同心結を詠じてあるのも、同じ事である。「同じ心」を、宣長は、「同じ所の誤寫」といひ、景樹は、「下句聞えず、さりとて、所にては結びてむの語をさまらず」といつた。けれどそれは誤解で、意釋の通りに見れば何の事もない。

○

春たてばきゆる氷の殘りなく君がこゝろはわれにとけなむ

釋　○氷の　氷の如くの意。

大意　春になれば消える氷のやうに、貴方の心はどうぞスッパリと、私に打ち解けて頂きたい。

評　平凡の譬喩である。序歌ではない。

〇

あけたてば蟬のをりはへ鳴きくらしよるは螢の燃えこそ渡れ

釋 〇あけたてば　萬葉集に、「明立たば松のさ枝に、夕去らば月に向ひて」とある明立たばと同語。夜の引き明くれば の意。〇蟬の〇螢の　「の」はの如くの意。〇をりはへ　夏部「足引の山時鳥」の條に既出。

大意 この頃は、夜が明けると、晝は蟬のやうに一日泣いて暮し、さて日が暮れると、夜は螢のやうに思に胸が燃えてヰ、夜を明すわ。

評 二六時中思に燃えて泣くことを叙べた。それを晝夜に引き分けて、蟬と螢と時節の景物二つをやとつて對偶せしめ、合掌の句法を取つた。委しくはあけたてば晝は蟬の、暮るれば夜は螢のといふべきを、互に讓り合はせて詞を省いて叙べた。さてかやうに一つ〳〵に、具象的分解的に叙べるのが、抽象的總合的にいふよりも、感觸を與ふる點に於いて、遙かに強いことが聞き知られる。

〇

夏蟲の身をいたづらになす事も一つおもひによりてなりけり

釋 〇夏蟲　夏季の蟲をばすべていつてよいが、こゝは火取蟲の事である。〇一つおもひ　一つ心と同じ語例である。「おもひ」は戀の思で、火をいひかけてある。

大意 夏の蟲が身をほろぼしてしまふ事も、何かと思へば、火を取らうといふ一つの思に因つての事であつたわ

い、自分があの人の事を思つて、その思の火に身を燃やして、ついわが身をくづをらしてしまうのも構はぬと、同じ事さ。

評 夏蟲の火に入るのはその明るさに欺かれるので、決して戀の爲ではないが、火からの聯想で思ひの火に身を滅すものと觀じた。そして想像の辭樣たるべき場合を、斷定の辭樣に調へた點に、強くわが身の戀に結び付けて詠歎した感傷氣分が漂ふ。六度集經第八にある、

以レ火爲レ色、人爲ニ飛蛾一、蛾貪レ火、色身燒煮。

と全く同じ感想である。恐らくはこれを再演したものだらう。但經文は理を拆くに忙しくて、この譬喩の蘊含の味ひあるいひなしに及ばない。細く枯びた風體、戀歌の姿として元久時代の歌人の希つた所である。

○

夕さればいとゞひがたきわが袖に秋の露さへおきそはりつゝ

釋 ○袖に　袖なるにの意。

大意 夕暮になると人の戀しさが增して、涙がこぼれて、酷く乾きにくい自分の袖なのに、時節柄とて秋の露までが置き添ひくして、いよく濡れまさつて難儀なことよ。

評 夕暮はさびしさに、いとゞ人戀しく泣き暮される時、又悲しげな露のおく時である。かう湊合してくると、感傷氣分に淒然たるものがある。但やゝ理窟がある。宣長が、初句を三句の下に續けて解いたのは誤である。

○

いつとても戀しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり

大意 何時といつても人戀しくない時はないけれども、格別に秋の夕方は戀しくて、合點の行かぬ事であつたわい。

評 樂天の詩の、

大抵四時心惣苦、就中腸斷是秋天。

の意に加ふるに、一日の中の殊に悲涼なる夕暮と戀とを以てした。この秋の夕べに戀を取り合はせることは、萬葉集卷二十、

我がせこが宿なる萩の花咲かむ秋のゆふべはわれをしぬばせ

の先例がある。けれどもながち如上の詩歌を撮合して、わが物としたのではあるまい。こんな感想は誰れも思ひ寄ることだから。極めて淡々と叙し去つて、卒直の點はいゝとも思ふが、やゝ說明に墮してゐる。秋上、

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふ事のかぎりなりける

は全くこの歌から胚胎したものであらう。

下句、小町集にあやしかりけり秋の夕暮とある。

○

秋の田のほにこそ人を戀ひざらめなどか心にわすれしもせむ

釋 ○ほにこそ 「ほ」は秀の義で、表面に顯はれるをいふ。初句は秋の田の穗とかけた序。

大意 自分はこの節の秋の田の穗に出るやうにあらはにサ、貴方を戀ひもせぬであらうが、しかし何として心には忘れもせうぞ、決して忘れはしない。

評 これは返歌らしい。理路にからまれてゐる憾はあるが、申譯の挨拶ならば仕方はあるまい。結句もやゝ纎弱の感もあるが、この歌の意趣の上から見れば、これでもよいやうである。

○

秋の田の穗のうへを照らす稻妻の光のまにもわれや忘るゝ

大意 この節の秋の田の稻の穗の上を照らす電の、ピカリと光る程の一寸の間にも、私はサ貴方の事を忘れるか、いや忘れはせぬわ。

評 私はかほどに思つても、貴方はさ程までにはとはかなんだ。これは結句の意調に因つて生じた餘意で、かう詠んで其の人の許に贈つたとすると、相對的の興味が生ずる。最短小時間を電光に喩へたのは、佛說の電光石火の譬喩から來たので、新規な點はない。只序としての價値を考へると、かの疊語や同語の聯想から發程した序歌よりは、多少含蓄の餘味がある。これも返歌らしい。結句、六帖に君ぞ戀しきとある。

○

人めもるわれかはあやな花薄などかほに出て戀ひずしもあらむ

釋 ○人めもるわれかはあやな 「人めもる」は人目をはかりまもる意、卽ち人目を憚ることである。「あやな」は春下「山吹はあやなな咲きそ」の條に既出。

大意 今は人目を憚る我が身がまあ、何も人目を憚る身でもない、それを思はぬは無分別であつた事よ、されば何で花薄の穗に出るやうに現はして、戀ひずにサまあ居ようぞ、いざ表立つて戀せうわ。

評 あながち打ち出しても、差支のない間柄の戀と見えた。されば斷然意を決して打ち出さうといつたもの丶、實はなほ羞ぢらひ澁つて相思の情を通じえぬ狀態にゐるのである。臆病な戀よ。形式は自問自答である。

○

あわ雪のたまればかてに碎けつゝわが物おもひのしげき頃かな

釋 ○あわ雪 和名鈔に「沫雪、阿和由岐(アハユキ)、其弱如(キコトシ)二水沫(ノ)一」と見えて、弱くて水沫の如く消え易いからの名である。後世淡雪と心得て、春降るをのみいふとは差ふ。○たまればかてに 溜り難(ガテ)にの意。「かて」は元來下二段の動詞で、堪へ、敢ふなどの意。萬葉集に「ゆきかてぬかも」「ありかつましゞ」などあるは皆この意である。然るに、こゝはかてぬと同意に「かて」を用ひてある。蓋し異例である。

大意 木の枝などに、泡雪の溜るかと見れば溜りかねて、落ちて碎け〲するやうに、自分の胸がいろ〲に碎け

て、さて〱物思の數々あるこの頃であることよ。

評 溜り難くして碎けるのは、地上の雪の狀でない。木の枝などに積るのをいつたのであらう。間斷なくくづれ落ちる狀が、物思の絶間なさを具象的に示してるやうにも思はれるので、序に用ひた。

○

おく山の菅の根しのぎふる雪のけぬとかいはむ戀のしげきに

釋 ○菅の根しのぎ　菅は麥門冬（ヤマスゲ）、簑菅の類をすべていふ。麥門冬にも、大葉小葉の二種ある。小野博いふ「大葉のは藪蘭、小葉のはジヤウガヒゲといふ」と。さて、「菅の根しのぎ」は、「菅の葉しのぎ」の誤だらう。「しのぎ」は押し靡かして降り敷る意だから、根では相應しない。萬葉集には、菅の葉しぬぎとある。○けぬ　「け」は消（キ）えの約語。

大意 奧山の菅の葉をおし付けて降る雪の消えるやうに、自分はもう消えて卽ち死んでしまふといつて遣らふかしら、かう物思が繁くては、如何にも溜らぬによつてサ。

評 三句までは序である。萬葉集卷八、

高山の菅の葉しぬぎふる雪のけぬとかいはも戀のしげけく

とあるを、二三耳遠い詞をこの時代のに改めて傳へたに過ぎない。戀に直面した者の窮極は、生かさもなければ死である。然し「けぬとかいはむ」はまだ死の境にまで到達した人の言葉ではない。只戀の苦悶を誇大にいひなして、相手に同情して貰ひたいまでゝある。「いはむ」といつても決していひ遣つたのではない。それ程の決

心はまだ無い。やはり獨言で一人で呻吟してゐるのである。それだけに却つていぢらしさが增す。情景兼ね到つて、風調高邁である。詞はすべて萬葉の方が優つてゐる。高山は殊に菅の葉凌ぎ零る雪に、恰好の場處ではないか。

古今和歌集巻第十二

戀歌二

題しらず

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせば覺めざらましを　　小野小町

大意　思ひ〳〵して寢たので、戀しい人が夢に見えたのであらうか、えゝその時に夢と知りもしたら、覺めずに居ようものを、殘念の事をした。

評　萬葉集巻十五、

思ひつゝぬればかもとなぬば玉の一夜もおちずいめにし見ゆる

の意を上句に約めた。これだけでは平凡の語だが、下句に至つて一層の趣向を立てた。夢と知つて夢を見る者は勿論ない。又覺めまいとしてもさう自由になるものでもない。然るにかくいつた沒常識に頗る詩味が發揚する。この感じの強いほど人を思ふ情が餘計に映出される。素より肺腑の語で、徒に語言の巧を弄するものと、その選を殊にしてゐる。

○

うたゝ寢に戀しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき

釋 ○うたゝ寢　假睡。

大意　ホンの假寢に戀しい人を夢に見た事であつた時から、夢といふ物は、なかなかよい物と、頼みにしはじめて來たわ。

評　夢幻と連ねて、はかない例に引かれた夢も、頼もしい所のあるを意外と感じた趣が、「夢てふものは」とある語氣に見はれた。「そめてき」とあるので、その後はくる夜もくも夢にまたも見えるかと頼まれる心持である。戀ゆゑにははかない夢をも頼まずには居られぬ。水に溺れる者は蘆の葉にもすがり付くと同じ心理であらう。それだけその苦悶の甚しさが思はれる。

○

いとせめて戀しき時はうばたまのよるの衣をかへしてぞきる

釋 ○いとせめて　最迫(イトセマ)りて。○よるの衣　寢卷、夜著などをいふ。

大意　「衣を返して着て寢る時は、思ふ人を夢に見る」といへば、自分はひどくさし迫つて戀しい時は、せめて夢になりとも見て慰まうと思つて、寢卷を裏返しにしてサ寢るわ。

評　こんな俚諺が夙くからあつたと見える。萬葉集には、

吾妹兒に戀ひてすべなみ白妙の袖かへしゝは夢に見えきや（卷十一）

吾背子が袖かへす夜の夢ならしまことも君に逢へりしがごと（卷十一）

白妙の袖をりかへし戀ふればか妹がすがたの夢にし見ゆる（卷十二）

など、皆袖を反すことを詠んでゐる。契沖が「衣を反さゞれば袖も反らざれば、袖反すは衣反すに同じ」と論じたのは賛成し難い。かやうの言は時代の推移に從つて、少々づつ變化するものである。只奈良時代には袖を反し、平安朝になつては衣を反して寢れば、人を夢に見るといひ慣はしたに過ぎない。迷信は實行に移つて、せめてもの慰藉にそんなたわいもない眞似でも爲て見るのが、戀の哀れな情合である。

素性法師

あき風の身に寒ければつれもなき人をぞたのむ暮るゝ夜毎に

大意 秋風が身に入みて寒いので、日頃つれない人をサ、若し物の哀れさを知るようになつて來て呉れる事もあらうかと、頼みにすることよ、日が暮れて夜になる度毎にサ。

評 秋風の寒く吹く晩は、氣強い人の心も弱つて若しかしたら尋ねてでもくれるかと、纔に一縷の望を繋いで、下待つ心は哀れである。それも自分が秋風に對する感懷を本としたのだから、向ふは何と思つてゐるかわからぬ。いよ〳〵覺束ない賴みである。冷たい夜床の觸覺から、溫かい觸覺を戀した歌は、奈良時代の作にも多いが、これは百尺竿頭に一歩を進めた構想である。

この歌僧門の作としては不似合である。もし題詠でなくば、女に代つて詠んだものだらう。

しもついづも寺に人の業しける日、しんせい法師の導師
にていへりけることばを歌によみて、小野小町がもとに
つかはしける　　　　あべのきよゆきの朝臣

つゝめども袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめのなみだなりけり

釋 ○しもついづも寺云々　しもついづも寺は、和名鈔に「山城國愛宕郡出雲以都毛、在二上下一」とある。又、拾芥抄に二十一寺の中に、上出雲寺、下出雲寺が擧げてある。今上下御靈とあるその下御靈のことである。「人の業」は、人の追善の法會をいふ。「しんせい法師」は、上の物名の部に見えた人と同人だらう。古今集目錄には、眞靜とある。この法師が法會の導師として述べた說法の詞を歌に詠んで、小町の許に贈つた歌といふ意。その詞は、歌によると法華經五百弟子授記品の、

以二無價寶珠一繫二其衣裏一、與レ之而去、其人醉臥都不二覺知一云々。

の意を說いたと見える。意は、人々は皆佛性を具へてゐるが、痴にして覺悟しないといふ譬喩である。

大意 眞せいが談義に說かれた法華經の衣裏寶珠とは違つて、如何ほど袖に包んでも溜らずにこぼれ出る白玉は、何かと思つたら、戀しい貴方をえ見ぬ目から出る涙でありましたわい。

評 經文の寶珠は、衣袖に藏されても知られないのに、わが袖の涙の白玉は、重襲してもなほこぼれて露はれると反映させた。この手段は人をえ見ぬ遺憾さを、最も強く印象させる結果となる。加ふるに、涙の玉の混喩があり、語調は流滑である。

眞靜法師が衣裏珠の說法は、菩提心を勸める爲であつた。然るに作者の抱いたのは見當ちがひの戀心であつた。眞靜が聞いたら啞然とするだらう。否作者自身も實は意外に感じてゐるのである。かう當座の法話を采つて戲れかゝつた因緣を想ふと、小町もその法會に列つた女人の聽衆であつたらう。

かへし　　こまち

おろかなる涙ぞ袖に玉はなすわれはせきあへずたぎつ瀨なれば

釋 ○おろか　疎か。

大意 あの談義の聞きやうの疎かな涙が、袖のうへにそのやうに玉を成してとまるのです、その御法談に感に堪へた私の涙は、なか〳〵その位の事ではなくて、たぎり落ちる川瀨のやうですから、堰き止めようにも堰き止められませぬわ。

評 淸行が無價寶珠をよそに、人を見ぬ目の涙の玉をいひかけて、慇懃の意を通じたのを、そ知らぬ風に輕く反して、私は尊い法談に、隨喜の涙を瀧つ瀨と溢したので、貴方の袖の白玉位はまだ〳〵疎な感じ方ですぞと、何處までも空とぼけて、信心話にしてたしなめてのけた。實によくこの情況にあてはまつた巧語言で、應對の辭令に嫻れた者でなくてはとても出來ない。語調が勁健で、作者の他作に似ない。序文に「强からぬは女の歌なるべし」との評があるのは、その概論である。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

藤原としゆきの朝臣

戀ひわびてうちぬるなかに行き通ふ夢のたゞぢはうつゝならなむ

釋 ○たゞぢ　直(スグ)に行く路。直路の義。○うつゝ　現實。

大意 思つても〱逢はれぬ爲に、戀ひ倦(ウ)んで寢た間に、あの人の處へ行き通つたと見た夢の直路は、どうぞ現在の事實であつてもらひたいわ。

評 想は平凡である。

三句、新撰萬葉に行き返るとある。結句、寛平歌合にうつゝならむとあるは、意が通らない。

○

住の江の岸による波よるさへや夢のかよひ路人めよくらむ

釋 ○住の江　今の攝津の住吉。賀部に既出。○よく　避(ヨ)く。春下「春風は花のあたりをよきてふけ」のよきてを參照。

大意 晝間はまことに通ふ道ならば人目を避けもしようが、何で夜までも、夢のうちに通ふ路に、人目を憚つて避けるのであらうか。

評 初二句は序である。「よる浪」のよるは、浪の字を隔てゝ「夜(ヨル)さへ」と疊んだので、上の「小野の篠原しのぶれど」と同じ辭樣である。諸註の、いひかけと見たのはわるい。「住の江」は松の下枝にうち寄る波のけしきある所で、古歌にもいひ馴れ、人も見知つてるので取り出した。三句の下に、何故にの語を補つて聞く格である。

現（ウツヽ）に忍ぶ慣習がその儘夢にも見えたのを、目が覺めてから情なく思つて詠んだ幽怨の情致は、またすて難い氣味がある。語調は流滑で、白玉の盤上を走るに似てゐる。

をのゝよしき

わが戀はみ山がくれの草なれやしげさまされど知る人のなき

釋 ○み山　春上「み山には松の雪だに」の條に既出。

大意 自分の戀は、山奥に隱れて生えてある草であればかして、段々と思の繁さが增るけれど、さうと知る人が無いわ。

評 「知る人の」と汎くいつてゐて、實は思ふ人一人をさしてゐる。戀一、浮草のうへはしげれる淵なれや深き心をしる人のなきと同型同調で、劈頭第一に、「わが戀は」と打ち出した調子は、對他的の意味があるので、自分一人がこんな特殊の境遇にあるやうにいひなした愚痴に戀のあはれさが認められる。四句はやゝ幽婉の味ひを殺ぐ。「まされど」をまさるをと改めたらばとも一寸思つてみたが、やはり「わが戀は」の强い調子には、これでよい。繁さまさるみ山隱れの草、かう聯想を馳せて、我れとわが戀の現在狀態に譬喩したことは、永い戀の懊惱に疲れて、心上に自身の行爲の批判を試みる餘裕を得た折の所作である。結句、新撰萬葉に知る人もなきとある。

紀　友　則

よひのまもはかなく見ゆる夏蟲にまどひ増れる戀もするかな

大意　わづかな宵の間さへも保ちさうもなく、命のはかなく見える火取蟲は、惑の甚しいものであるが、それにも惑の增つてゐる、愚かしい戀をまあ、自分はする事よ。

評　蠅蛾の火に入つて命を盡すのは端的である。故に、「宵の間もはかなく見ゆ」といふ。上の「も」は重い用例で口語のサヘモの意である。宣長は宵の間をもと、眞淵、景樹等は宵の間にもと解いてゐるが皆當らない。結句の調は、戀一、「あやめもしらぬ戀もするかな」の條にいつた如くである。理智の力は蠅蛾の惑溺に增つてゐるとわが戀を冷笑し、感情は一切を放下して戀の爲に夢中でゐる。

初句、寬平歌合に宵のまはとあるはわるい。結句、六帖に戀にもある哉とある。

〇

ゆふされば螢よりけにもゆれども光見ねばやひとのつれなき

釋　〇螢よりけに　萬葉集には、殊、勝、異などの字を、ケニと訓んである。格別に、もつと、勝れてなどの意。

〇見ねばや　見えねばやの意。

大意　毎日夕方になると、あのやうに燃える螢よりもなほ格別勝つて、思ひの火が燃えるけれども、螢のやうに光が見えぬせゐかして、あの人が知らぬ顏してつれないのであらう。

評「夕されば」の一句輕く看過してはならぬ。夕暮は當時思ひ人の許を訪問する時刻である。單に一日中の物悲しい頃であるのみではない。たま〳〵その時刻から光り出す螢の人目につくのを感じて、自分の思ひにも光があつたらばと比較して、螢にも及かぬことが悔しまれる。

三句以下、寛平歌合にはもゆるとも光見えねば人ぞつれなきとある。

○

さゝの葉におく霜よりもひとりぬるわが衣手ぞさえまさりける

大意 小竹の葉に置く霜はきつく冴えるが、それよりもなほ、思ふ人に逢はずに獨寢る自分の袖がサ、冴えまさつたわい。

評 篠の葉のさえることは既に萬葉に見えて、

篠の葉はみ山もさやに亂れども我は妹おもふ別れきぬれば　（卷二）

これを下に踏んだものである。さてそれを衣手に配合させての比興が山だが、平々である。

下句、新撰萬葉にわが衣こそさえ増りけれとある。眞淵は「この方古意にて、理もよろし」といつたが、既に上に「よりも」の語があるから、「こそ」とはいはぬがよい。

○

わが宿の菊のかきねにおく霜のきえかへりてぞ戀しかりける

釋 ○きえかへり　動作の至つて甚しさをいふ場合に、「かへり」の語を添へて熟語とする。立ち返る意としては

叶はない。

大意 あの自分の庭の菊の垣根におく霜の、消え入るやうに心も消え入つてサ、あの人が戀しくあつたわい。

評 この序は庭上の所見から來たものだらう、しみぐ戀ひ入つた趣が見える。

新撰萬葉には、二句以下菊の垣ほにおく霜の消えかへりてもあはむとぞ思ふとあつて、おのづから別裁である。

〇

川の瀨になびく玉藻のみがくれて人に知られぬ戀もするかな

釋 〇玉藻　玉は美稱。〇みがくれて　水隱れての意。

大意 川の瀨にはえて靡く玉藻の、水に隱れて知れぬやうに、思ふ人に知られぬ戀をまあ、自分はする事よ。

評 打ち出でもならず、獨くよく案じ入るのを、我れながら愚かしく思つた感懷である。上の「夏蟲にまどひまされる戀もするかな」と同調で、比喩の風情は一寸おもしろい。

以上五首の友則の作のうち、比較的これが優つてるやうに思はれる。

〇

みふのたゞみね

かきくらし降る白雪のした消えに消えて物おもふ頃にもあるかな

釋 〇した消えに　下方の融けるをいふ。

大意 空も闇まして降る雪の、表面はさも無くて下の消えるやうに、忍ぶつらさに心の内で消え入つて、物思を

するこの頃でまあある事よ。

評 忍ぶ戀を詠んでゐる。「下消えに消えて」と折り返した諧調は、例の事である。

六帖、及び後撰集冬、讀人しらずの、

冬の池の鴨の上毛におく霜のきえて物思ふ頃にもあるかな

（興風集には、浮きてぬる鴨の上毛におく露のとある）

と、下句は同一であるが、これは「下消え」から續くので、意味がやゝ複雜である。

○　　　　　　　　　　　　興　風

君戀ふる涙の床にみちぬればみをつくしとぞわれは成りける

釋 ○涙の　涙が。○みをつくし　水脈つ杭。「つ」は連辭。航路の水脈に立てた標の杭をいふ。澪標。こゝはそれに身を盡しとかけた。身を盡しは身を滅すをいふ。

大意 あの海の中に立てゝある木を澪標といふが、貴方に戀ひ焦れる涙が、海の汐のさすやうに、床一面に滿ちたので、人に身を盡すといふ名の澪標とサ、私はなりましたわい。

評 涙に浸つて、床中に歎いて居るのを、涙の海の澪標となつたと誇張した比喩である。

「床に」は新撰萬葉に浦にとあり、「われは」は六帖、新撰萬葉に今はとあり、「ける」は六帖、寛平歌合、新撰萬葉、家集等にぬるとある。

○

しぬる命いきもやすると試に玉の緒ばかり逢はむといはなむ

釋 ○玉の緒ばかり　少しの間をいふ。萬葉集に數多見えて、玉を貫いた間に見える緒の短いことから出た語。萬葉には、又「玉の緒の間もおかず」と續けてある。

大意　焦れ死にに死にかけて居るこの命が、もしや生きもする事があるかと、物はためしに、玉の緒の短い間なりとも一寸逢はうと思ふと、あの人がいつて貰ひたい。

評「死ぬる命」はもとより誇張の託語で、全篇この沙上に築いた塔である。よしそれがほんの情らしい慰めの詞に過ぎないまでも、「逢はむ」の一語にかゝつて滿足しようとする。戀を以て性命とし、逢ふを生く藥とするなる熱愛、人の同情を惹くにあまりある。

初二句、新撰萬葉集に消えぬべき命もいくやとある。結句、六帖、家集にはあひ見てしがな、續後撰集に再出したのには、逢ふよしもがなとある。

○

わびぬればしひて忘れむと思へども夢といふ物ぞ人だのめなる

釋 ○人だのめ　「たのめ」は憑ませの約。

大意　人を思ふといふことは誠につらいので、無理に忘れようと思ふが、夢にその人を見ることがある爲に、も

しやまことに逢はれるかと、頼みに思はれて忘れもはてず、その癖逢はれもせねば、あゝ夢といふ物は、人に頼もしく思はせながら益にも立たぬものであるわ。

評 思ふも心にまかせず、さりとて忘れるも心にまかせず、進退兩難、「夢てふものは」と、測らず怨嗟の聲を洩すに至つた。そのはかなさが味ひをもつ。

よみ人しらず

わりなくも寢てもさめても戀しきか心をいづちやらば忘れむ

釋 ○戀しきか 「か」は歎辭。

大意 只無闇にまあ寢ても起きても忘られずに、戀しい事よ、この心をどちらへ逐ひ遣つたらば、戀しさが忘られようぞ。

評 忘れたいと要望するに至つて、戀はますく頂天である。けれどもまゝならぬは心、空しく手を措いて、懊惱するに過ぎない。心を遣るの活喩が振つてゐる。

六帖、新撰萬葉には、初句わりなくぞ、三句戀ひらるゝとあり、五句、新撰萬葉にはやりて忘れむとある。

○

戀しきにわびてたましひ惑ひなば空しきからの名にやのこらむ

釋 ○空しきから 魂の抜け出たあとの骸(カラ)をいふ。空しき乍(ナガラ)、空しき故(カラ)など解した註はわるい。○のこらむ 新

撰萬葉に立ちなむとあるによつて解する。

大意　餘り戀しいのにつらくなつて、魂が迷つて出てしまへば、跡のぬけ骸の身に、あれは戀して物の怪になつたといふ名が、世間にぱつとするであらうか。

評　これは往時盛んに信ぜられた物の怪の觀念から詠んだのである。物の怪には死靈生靈などあり、いづれも恨や嫉妬などで對手の人に魂が取り憑くのであつた。死靈は死後の事だから自身は痛痒を感じないが、生靈の方は困る。これは自分の生靈だといふ評判が立つと、恥かしくて、居ても立つても居られない。然し魂はふら〳〵と迷ひ出して、自分のいふ事を聞かないのだから始末にいけない。源氏物語葵の卷の六條御息所は卽ちこれであつた。こゝは物恨といふ程ではなく、只戀しさの甚しさを誇張して、物の怪の狀態に取り成していつた。三句、六帖に出でていなば、結句、新撰萬葉に名にや立ちなむとある。立ちなむはしつくり意が落着する。必ずこれに從ふがよい。「殘らむ」では死後の事になつて、意の疏通を缺く。

君こふるなみだしなくばから衣むねのあたりは色もえなまし　　貫之

釋　○から衣胸のあたり　「から衣」の下に、のの辭を補つて聞く。又一說に「から衣」は胸にかゝる序と。

大意　貴方を戀ひ慕つて泣く淚がサ無いならば、自分の着物の胸のあたりは、思の火で色が燃え色になつてしまうであらうわ、淚の水がそばから消して行けばこそ、さもないが。

評　情のきはまつた時は、思ひ入れ泣きに泣いて、切なさを遣るすべもあるから、若しこの淚といふものがない

としたら、ほんにどんなものであらう。まづかうした大問題を提起しておいて、心火が赤く燃え出すだらうと誇張の結論を與へた。畢竟は涙のしげさの甚しいことを歌つたものである。「色」は「から衣」の縁語である。

新撰萬葉に、初句人を思ふ、四句胸のわたりはとある。

以上は、悉く寛平后宮の歌合の歌である。

題しらず

世と共にながれてぞ行くなみだ川冬も氷らぬみなわなりけり

釋 ○世と共に　世と諸共に。「世」は我が經行く一生をいふ。○ながれ　存命(ナガラ)へてに、流れてをかけた。○みなわ　水泡。水(ミ)のあわの約。

大意　大抵の川の水泡は、冬は氷つて止まる物であるが、自分の生きてゐる世のかぎり、人を戀ひ慕ふので流れて行く涙の川、こゝの水泡は、冬でさへも氷らぬ水泡であつたわい。

評 三句の下に此處の水沫はの語を補はないと、「なりけり」の辭がうち合はない。これ千秋が「水とのみにては詞足らぬ故、水沫と云へり」といふ僻說の起る所以である。歌は凡下。

家集には、「行く」をふる、六帖には、「冬も」を水もとある。水もは意義を成さない。

○

夢路にも露やおくらむよもすがら通へる袖のひぢて乾かぬ

大意　夢に思ふ人の所へ通ふ道にも、露が置くのであらうか、なぜなれば、夜一夜夢に幾度も〳〵、その道を通つた袖が、ひどく濡れて今朝も乾かぬわ。

評　これは不思議と驚訝した餘意がある。現前の涙の露から、夢路の露を聯想した。涙の一語を着けないのをこの趣向とする。六帖に、

秋の夜の夢路に露ぞおきけらし通ふとしつる袖ひぢにける

大いに劣つてゐるものゝ、どれが先鞭を着けたものか。

二句、家集には露ぞおくらしとあつて、語調が勁健である。この頃の歌人に喜ばれたのは、やらむと和らかに調べ成す方にあつた。勅撰集でもあり、かた〴〵姿をいたはつたと思はれる。

　　　　　　　　　　　　　　　　そせい法師

はかなくて夢にも人を見つる夜はあしたの床ぞ起きうかりける

釋　〇夢にも　「も」は歎辭。

大意　餘りに呆氣（アッケ）無くて、夢にまあ思ふ人を見た夜は、名殘をしさにその朝の床がサ、起きづらいことであつたわい。

評　平凡。初句の落ちつきもわるい。

上句、六帖には夢にても戀しき人を見たる夜はとある。これは叙述が明晰である。

忠　　房

いつはりの涙なりせばから衣しのびに袖はしぼらざらまし

釋 〇から衣　しのびにの語を隔てゝ、「袖」にかゝる枕詞。

大意　戀しい風をして、うそに泣いて見せる涙にありまするならば、人に見せようとはすれ、このやうに人に見られまいと、竊かに着物の袖を絞ることはありはすまいわ。

評　六帖に、

まことなき物思ひせば僞に涙はかねておとさざらまし

想は全く同じであるが、今のは洗煉を經て、遙かにまさつてゐる。涙は戀の標章で、神聖な物である筈だが、輕薄才子平仲の水をつけて泣いて見せた儔も、隨分ないではなかつた。人情は古往今來同一轍である。されば歌意を案ずるに、「さうは御親切に仰しやるが、人心は僞の多いもの故頼みになりませぬ」など、女のいつたのに對して、その返辭に詠んだものらしい。言外の餘韻は無いが眞摯の作で、この卷中にかういふ作を見ることは頗る嬉しい。

初句、後六々撰になほさりのとあるが甚だ面白味がない。結句、打聽本に、一本しをらざらましとありと見えるがわるい。

千　　里

ねに泣きてひぢにしかども春雨にぬれにし袖と問はゞ答へむ

大意 實は戀故に聲を立てゝ泣いて、ひどく袖の濡れたのだつたけれども、若し人が問はうならば、これは春雨に濡れた袖だと返辭をしようわ。

評 人のあやしみ問ふことを豫期して、分疏(イヒワケ)の詞を案出してゐる。細の細に入る神經過敏、戀は苦しいものである。蓋し自分ながら氣が咎めるほど、涙に袖が濡れてゐたのである。上句はやゝ理路に渉つてゐるが、この性命は、「春雨に濡れにし袖と問はゞ答へむ」と、餘計な苦勞をする處にある。

敏行朝臣

わがごとく物やかなしき時鳥ときぞともなく夜たゞ鳴くらむ

釋 ○夜たゞ　夏部「さみだれの空もとゞろに」の條に既出。

大意 自分のやうに物悲しいのかしら、それで時鳥が、何時を時とまあいふこともなく、夜は夜通し、あのやうに鳴くのであらうぞ。

評 諸註、何故にの語を補ひ、それを「夜たゞ鳴くらむ」へかけて釋いたのは不當である。戀一、

逢坂の木綿つけ鳥もわが如く物や悲しき音のみ鳴くらむ

の紋法と同じであるのを見よ。のみならず想も亦相同じい。この他、

秋の夜のあくるも知らず鳴く蟲はわがごと物や悲しかるらむ　（秋上）

秋萩も色づきぬればきりぐ\すわが寢ぬごとやよるは悲しき　（秋上）

足曳の山ほとゝぎすわがごとや君に戀ひつゝいねがてにする　（戀一）

の類型がある。殊に「秋の夜の云々」の歌は作者自身のである。よつてその條の評を參照ありたい。鳴聲からした聯想、かう流行物のやうになつては、有難味がなくなる。結句、六帖によゝに鳴くらむとある。

さつき山こずゑをたかみ時鳥なく音空なるこひもするかな　つらゆき

釋　○さつき山　萬葉集にも見えた語で、五月頃の山をいふ。夏山といふに同じい。○空なる　うかうかと落ち着かぬをいふ。

大意　この節の五月の山は、木葉が茂つて、何時もより梢が高さに、時鳥の鳴く聲が空にするが、その空といふやうに、自分は心もそゞろな戀をまあすることよ。

評　初句から「なく音」までが序詞であることは、萬葉集卷十一、

この山の峰に近しとあが見つる月の空なる戀もするかも

と同類である。既に「高み」とおいて「空なる」と承けては、いひ詰め過ぎて味ひがない。萬葉の方が遙かにまさつてゐる。

秋霧のはるゝ時なきこゝろにはたち居の空もおもほえなくに　躬恒

大意　秋霧の立ち塞つて晴れぬやうに、戀の爲に氣の晴れる時が無い心には、霧に空がわからぬやうに、起居する空もそゞろ覺えぬのに、それを思ひやりもなく人はつれないわ。

評　心はひたすら焦燥して、乍ち起ち乍ち坐し、身も心も落付のなくなるのは、戀の常態なので、萬葉集にもこの趣を詠んだのが頗る多い。只、秋霧の緣語を延長して、「たち居の空もおもほえなく」まで持つてきたことは、この時代の風調で、これが作者の物である。

結句、六帖におほえざりけりとある。

深　養　父

蟲のごと聲に立てゝはなかねども涙のみこそしたに流るれ

大意　人目を忍ぶので、蟲のやうに聲を立てゝは泣きはせぬけれども、涙ばかりがサ、內證で流れるわ。

評　泣かぬは泣くに勝り、聲に立てぬは立てるに勝る。更に思ふに、蟲の聲に立てながら涙のないのに對した趣向ではあるまいか。戀する人の感傷に囚へられた境遇を歌つたことは諾かれるが、叙法がやゝ理路に傾いてゐる。

下の「人を思ふ心は雁にあらねども」の條を參照されたい。

是貞のみこの家の歌合の歌　よみ人しらず

秋なれば山とよむまで鳴く鹿にわれ劣らめやひとりぬる夜は

釋　秋なれば　戀一、「夏なれば」と詠んだのと同じい。

大意 獨寢た夜は、人戀しさに自分は泣くが、殊に時節が秋なので山中鳴り響くまで妻戀をして啼く鹿に、泣くことが劣らうか、いや劣りはすまいわ。

評 暮秋であり、山里であり、悲しげな響を傳へる鹿鳴があり、獨寐の宿である以上は、鐵石の心腸も碎けずには居るまい。ましてそれが戀する身であつたなら、實に溜らなからう。これ卽ち啼く事なら鹿には負けないと絕叫される所以である。「獨ぬる夜は」は最も主要の句で、戀の意はこれに依つて表現されてゐる。「秋なれば」は、何時とても戀する身は侘しく泣かれる趣を思はせてゐるが、この歌體から見ると、やゝ細瑣に傾く。秋山の下とよむまでなどある方が、おほらかで優つてゐよう。

題しらず　　　　貫之

秋の野に亂れて咲ける花のいろのちぐさに物をおもふ頃かな

釋 ○ちぐさ　千種の義。千草ではない。

大意 秋の野にあれあのやうに、入り亂れて咲いてゐる花の色のさま〴〵あるやうに、いろ〳〵さま〴〵に心が亂れて、物を思ふこの頃であることよ。

評 上句は序である。かやうの風體、着想は既に奈良時代に澤山ある。萬葉集に、

おほの浦のその長濱によする浪のゆたけく君をおもふこの頃　（卷八）
國栖等が若菜摘まむとしめし野のしば〳〵君を思ふこのごろ　（卷十）

只、平安の朝になつては、聲調のうるはしさを求めて、思ふこの頃とは詠まなくなつた。これらのけぢめをよ

く注意すべき事である。秋の野の花の千種、慵紅悶紫、艶に優なる趣を想見させる。六帖に、

春くれば野べのまにく生ひしける千ぐさに物を思ふ頃かな

とある。下句こそ同じであるが、上句は更に比等すべき辭樣でない。「亂れて」を思ひ亂れるに緣があるやうに解くのは鑿である。

初句、六帖に秋の野のとあるは諧ひがたい。

みつね

ひとりして物を思へば秋の田のいな葉のそよといふ人のなき

釋 ○いな葉のそよと　稻葉の戰く音のそよといふに、其よをかけた。其よはそれよの意。

大意　獨で以つてこのやうに物思をして、心を苦しめて居れば、誰れもその理由を知らぬので、秋の田の稻葉のそよといふ音の、それよ御道理よと、いつて吳れる人が無いわ。

評「いふ人のなき」も、內實は思ふ人に顧みられぬ事をいつてゐる。獨で默つてゐては、いくら思つたとても、誰れも知らぬのは知れた道理なのを、珍しさうに「獨して物を思へば」と、くどくいひ詰めたその愚痴が、却つて下句の歎意を强めてゐる。「秋の田の稻葉のそよ」とかけた序、この頃では斬新だつたらうが、後人が猥りに踏襲して、或は荻の葉、或は篠原、或は楢の葉、竹の葉、桐の葉、すゝきなどに取り合はせて、そよと詠んだ。作者に取つてはさぞくちをしい事であらう。宣長が『思へば』は思ふにの意なり、古きいひざまなり」といつたのは粗い。秋上に「渡りはてねば明けぞしにける」とあるに同じ語法で、意釋にあるやうに、必ず略いた詞のあ

ることを知るがよい。

六帖に、二句物をぞ思ふ、結句いふ人もなしとある。又、初句、新撰和歌には人知れぬとある。

ふかやぶ

人を思ふこゝろは雁にあらねども雲居にのみもなき渡るかな

大意 人を戀しう思ふ心は、あの空を鳴き渡る雁ではないけれども、空にばかりあこがれてまあ、泣いて月日を經ることとよ。

評 わが泣くのから聯想して、鳥に獸に蟲に比興することは、上來の歌がその例を數多示してゐる。叙法例の理路に傾く。

たゞみね

秋風にかきなす琴のこゑにさへはかなく人の戀しかるらむ

釋 ○かきなす 掻き鳴らすの意。萬葉集に、響の字、鳴の字を、ナスと訓んである。

大意 この秋風に、掻き鳴らす琴の聲にまでも、何でかう理由(ワケ)もなく、人が戀しいのであらう。

評 琴に秋風をいふことは、李嶠が百詠に、「秋風入二夜琴一」或は、白氏文集の新樂府五絃彈の詩に、

第一第二絃、索々(トシテ)秋風拂(ツテ)レ松(ヲ)疎韵落(ツ)。

などから出て、常套となつたらしい。「秋風にかきなす琴の」は、秋風の吹く折、何處にか彈き鳴らす琴の聲に

さへの意と輕く見たい。かくして四句の「はかなく」が利いてくる。又契沖、宣長などの說に、思のあまりに慰みがてら、作者自身が琴を彈じた趣に解したのは、賛成しにくい。景樹が「わが琴の音に人の戀しくなるといふは打ち任せたる理りならず」と難じたのは尤もと思ふ。上にも「秋のゆふべはあやしかりけり」などあるやうに、既に秋思の感哀を催してゐる折も折、たまく悲しい物さびしい琴聲の聞えて來て、そゞろに相思の情の胸に迫つて堪へられないので、何故にかうはと怪訝したのである。家集には、「ある女に遣はしける」と端書がしてある。これは思ふ方の琴の音を、秋風の吹き傳へた趣である。事情は全くさうらしい。

つらゆき

まこも刈る淀の澤みづ雨ふればつねよりことにまさるわが戀

釋　○まこも　眞菰。「ま」は美稱。菰は禾本科の水草で、薦(コモ)や簾などに作る。○淀　山城國久世郡、淀川の北岸。この淺卑濕の沼澤に眞菰が叢生する。枕草子にも、此處の眞菰の事が出てゐる。

大意　眞菰を刈る淀の澤水は、雨が降ると常よりも格別に水嵩が增すが、その如く、雨が降ると何となく物寂しくて、常よりも格別に增る自分の戀であることよ。

評　黃梅時節の陰鬱な天候は、相思の人を愁絕させるに十分である。まして、家々の雨の心頭に滴る時、情火はいよく熱し來るを覺えるに違ひない。平生からして水量のある淀の澤水を序に借用したのは、平生も戀に沒頭してゐる作者であることを聯想させられる。「眞菰刈る」は卽ち梅雨頃の季節を語るもので、隨つて三句の「雨降れば」に親貼してゐる。三句までを序とした說もあるが、それでは、何の故に常より殊に增るのかが、明らか

でない。序歌は序詞を除いて見ても、その意義が完全でなければならぬ。されば強ひて不完全な意義に解する必要もないから、初二句だけを序詞と見るのが穩かである。奈良朝後期の風調を存して、出語渾成の妙がある。とにかく貫之は當代の大家である。

越えぬまは吉野の山のさくら花人づてにのみ聞きわたるかな

やまとに侍りける人に遣はしける

大意 まだその國越をせぬ間は、世に有名な吉野の山の櫻の花を、人の話にばかり傳へ聞いて暮すことよ、といふが表面の意で、その如く、まだ國越をせぬ間は、大和に居られる貴方の事を、人傳にばかり聞いて、戀しく思つて月日を經ることよ、といふが裏面の意。

評 諷託の間に、多少の味ひを生ずるやうだが、その外には表裏二面の意とも、何の面白味もない平叙でありただ言である。初句殊に理をいひ過して面白くない。家集に、結句聞きや渡らむとあるは、やゝ姿致あるらしいが、それとても五十歩百歩である。

吉野山に櫻を詠むことは、この歌が抑もの始であらう。奈良時代には、山川の清き河内など歌つて、山水の美は盛んに稱譽してゐるが、櫻に言及したのは一向ない。

彌生ばかりに、物のたうびける人のもとに、又、人まかりて、せうそこすと聞きて、よみて遣はしける

露ならぬこゝろを花におきそめて風ふく毎に物おもひぞつく

釋　〇彌生ばかりに云々　「物のたうび」は物宣ひの轉訛で、物いひけるの尊敬格である。當時の俗言であらう。「人まかりて」は人參りてといふに似てゐる。「まかり」の用法は古意と異なつてゐる。「せうそこ」は消息の字音。もとは人の生死にいふ詞を轉じて、安否を訊ふこととなり、又轉じて書簡をいひ、又人を音づれる事にもいふ事となつた。詞書は、三月頃に自分とある懇話をかはされた婦人の許に、又他の人が參つて音信をすると聞いて、詠んで贈つたとの意。〇物おもひぞつく　つくは附着の義。

大意　花には露が置くが、その露でも無い自分の心を、花のうへに置き初めて、それ故、風の吹く度毎に、花が散らうかと、心配がサ起るわ、といふが表面の意で、自分の心を貴方にかけそめて、それ故餘所より消息のある度毎に、貴方のお心がその方へ散らうかと、心配がサ起るわ、といふが裏面の意。

評　「物のたうびける」「人參りて」など敬語を使つてあるのを見ると、その人は貴婦人らしい。折柄が彌生の頃なので、移ろひ易い花をその人に喩へ、誘ふ風を他よりの消息に擬へて、我が心がら、仇なる花故に物思するといひ送つた。これ暗に花に耐久性のあるやうにと諷したのである。則ちその人に貞操を要求したのである。そこに含蓄の味ひがある。そして戀する人の輕い嫉妬心が活いてゐることが面白い。結句、六帖に物をこそ思へとある。

坂上これのり

わが戀にくらぶの山の櫻ばなまなくちるとも數はまさらじ

釋　○わが戀にくらぶの山　我が戀に比ぶに、暗部山をかけた。暗部山は春上「梅の花匂ふ春べは」の條に既出。

大意　自分の戀に比べると、暗部山の櫻花が、よしや絶間なく散るといふとも、その思の數は格別まさりはすまいわ。

評　物思のしげさをいふに、繽紛として飛ぶ落花の數を以て對比したのに、詩趣が搖く。くらぶのいひかけは無い方が簡淨でよいのだが、手のあるのを喜んだ時代の風調だから據ない。

宗岳(ソガ)のおほより

ふゆ川のうへは氷れるわれなれやしたにながれて戀ひ渡るらむ

釋　○ながれて　流れてに、長らへてをかけたのは、例の事である。

大意　冬の川のうへは氷つて、下には水が流れてあるとも知れぬやうな自分の身かして、その氷の下を水の流れるといふやうに存在へて、心の内に絶えず戀しく思つて、月日を經てるのであらう。

評　「うへは氷れる」、「したに流れて」の對照、やゝ粘密に過ぎて煩はしい。四句、一本に下にこがれてとあるはわるい。六帖に、初句ふる川の、結句戀しかるらむとある。ふる川もよくない。

たゞみね

たぎつ瀬に根ざしとゞめぬ浮草のうきたる戀もわれはするかな

釋　○根ざし　根入りをいふ。

大意　たぎり流れる川瀬に、根もとが着かずに浮く浮草のやうに、何の取りしめも無い浮いた戀をまあ、自分はすることよ。

評　上句は序である。下句は、萬葉集卷十一に、

解衣のこひ亂れつゝ浮草のうきても吾は戀ひ渡るかも（六帖にあるは、小異あり。）

とあるから斬新ではない。又後撰集戀二、六帖等に、

玉津島ふかき入江にこぐ船のうきたる戀もわれもするかな

と見えた大伴黑主の歌と同じい。黑主も忠岑の先輩である。然しこの下句などは、誰れでもいへる平凡な句だから、序の冠せ具合一つで、別の歌と認めることも出來る。たゞ瀧つ瀬に根ざしとゞめぬ浮草は、事實が疑はしい。瀧つ瀬は浮草の生える場處にふさはしくない。想ふに作者の意では、自分がさまぐ\いひ寄つても人が受け引かずつれないのを譬へたものかも知れないが、どうもしつくりこないと思ふ。

よひ〳〵にぬぎてわがぬる狩ごろもかけて思はぬ時のまもなし

とものり

釋　○よひ〳〵　夜々の意。初夜の意ではない。○狩ごろも　狩衣（カリギヌ）に同じい。狩衣は輕裝の略服。もと狩獵服であつた。

大意　夜々自分が脫いで寢る狩衣は、衣桁に懸けて置くが、その懸けてといふやうに、心に懸けて人を思はぬと

いふことは、片時の間も無いわ。

評 三句までは序である。戀一、「千早ぶる賀茂の社の夕たすき云々」の歌と同想同型であるが、序の敍述がやゝ簡淨でない。「よひ〳〵に」は狩衣をぬぐ時刻を表はしたのだけれども、肝腎の「時のまもなし」の感じを擾亂すので面白くない。

三句、六帖にから衣とある。うち任せては、衣を總稱してゐる唐衣の方が穩やかであるが、「よひ〳〵にぬぎてわがぬる」とあるには、狩衣の方が作者の生活に緊密であらう。

○

あづま路のさやの中山なか〳〵に何しかひとを思ひそめけむ

釋 ○あづま路のさやの中山　逢坂の關より東(アヅマ)の方へゆく路をすべて「東路」といつた。「さやの中山」は和名鈔に遠江國佐野(サヤ)郡とある、その郡の中にある山の意である。後には小夜(サヨ)の中山と訛つていふ。○なか〳〵に　口語のなまなかといふに近い。○何しか　「し」は強辭、「か」は疑辭。

大意 かう氣強い人を、一體なまなかに、何しにサ自分は思ひ初めたのであらうか。

評 今更思ひ切られもせず困つたものよといふ餘意がある。悔恨の念は卽ち暗に自己の行爲を否認してゐるのであるが、情は情で勝手の行動を執るので、制馭する譯にもいかない。徒に悔恨しつゝもなほ戀に引きづられ續けてゆくのである。この苦悶は局外者の全然關知せぬだけ餘計に、切ないものである。初二句は、「なか〳〵に」の語を喚び起すが爲に置いた序である。なかの音の三疊すらあるに、「中山」、「なか〳〵」、「何しか」と、な

の頭韻を蹈んだのは、この聲調の和諧な所以であらう。疑問を用ひて姿致を取つてゐる。

○

敷妙の枕のしたに海はあれど人をみるめは生ひずぞありける

釋 ○敷妙の　枕にかゝる枕詞。戀一「わが戀は人知るらめや」の條に既出。○みるめ　見る目に海松布をかけた。

大意　寢て居る枕の下に海はあるけれど、これは涙の海で、まことの海でないから、戀しい人を見る目といふ名の海松布は、生えぬことでサあつたわい。

評　上句、多量の涙と說破せずして、「枕の下に海」といつたのは、浮誇の嫌ひはあるが面白い。下句は、人を見る目も無い卽ち逢はれぬの隱喩である。この弄語は、戀一に、早き瀨にみるめ生ひせばわが袖のなみだの川に植ゑて見ましをともあるから、當時の套語であらう。構想も涙の川を、「涙の海」といひ換へたるまでゝある。初二句、六帖に君戀ふる涙の底にとある。

○

年をへて消えぬおもひはありながらよるの袂はなほ氷りけり

釋 ○おもひ　思ひに、火をかけた。○よるの袂　夜の衣の袂の意。寢卷の袖をいふ。

大意　年數を經ても消えぬ思の火は、胸にありながらも、涙に濡れた夜の衣の袂は、やはり氷つたわい。

評 冬より春へかけた寒夜を、戀の涙にかきくれて濡れ明した人の作であらう。されば節物にも打ち合ひ、消えぬ心火にも對照が的確だから、濡れけりといはず、「氷りけり」と誇張した。語言の巧に着して、着想が平凡である。只涙の一語を隱したのがこの一ふしである。

結句、家集に氷りつゝとある。

つらゆき

わが戀は知らぬ山路にあらなくにまどふ心ぞわびしかりける

釋 ○あらなくに 「なく」は否定のぬの延音。

大意 自分の戀は、案内知らぬ山路ではありもせぬのに、このやうに踏み迷ふ心はサ、實に難儀であつたわい。

評 「惑ふ」の語から聯想した不知案内の山路を、反喩に使つた。畢竟は技巧の歌である。

三句、家集にあらねども、下句、六帖になどか心のまどひけぬべきとある。風調體格の上から論ずると、三句本文の儘ならば六帖の下句がよからうし、下句本文の儘ならば、三句は家集に從ふ方がよからう。

○

くれなゐのふり出つゝ泣く涙には袂のみこそ色まさりけれ

釋 ○くれなゐのふり出つゝ泣く 夏部「思ひ出づるときはの山の時鳥」の條に解した。但、「くれなゐの」は、この歌では序詞ではない。それは末に「色」の語で承けてゐるからである。

大意　戀の思に迫つて、紅を染めるに振り出し〳〵するやうに、聲を振り絞り〳〵して泣くので出る紅い涙には、袂ばかりがサ色が増つたわい、紅の着物一面に染めるとはちがつてサ。

評　かう言外に餘意を遺したから、「こそ」の辭は重い用格である。その袂のみ色の變る所以は、もはら涙を抑へるからである。紅涙は、甚しく泣く時は、涙が竭きて血が出るのをいふので、

楚人和氏得玉璞楚山中、奉獻厲王、王使玉人相之、曰石也、王以和爲詐而刖其左足、及武王卽位、和又獻之、王使玉人相之、又曰、石也、王又以和爲詐而刖其右足、文王卽位、和乃抱其璞、而哭於楚山之下、三日三夜、泣盡而繼之以血。（韓非子）

楊貴妃、初承恩召、與父母相別泣涕登車、時天寒、涙結成紅氷。（天寶遺事）

など見えた支那の典故である。

○

白玉と見えしなみだも年ふればからくれなゐに移ろひにけり

大意　始の程は白い玉のやうに見えた涙も、段々に年を經ては、血の涙になつたかして、眞赤に色が變つてしまつたわ。

評　水精の玉が珊瑚珠と化つたと、涙の上における變化をのみ述べたのに、おのづから年月に添つて、物思のいよ〳〵はげしく増つた趣が躍々としてゐる。婉曲の妙は他の千言萬語に優る。紅涙卽ち血涙のことは、上にいつた。

結句、家集になりぬべらなりとある。

夏蟲をなにかいひけむ心からわれもおもひに燃えぬべらなり　　みつね

釋　○なにかいひけむ　愚なるものと何かいひけむの意。「か」は反動辭。○おもひ　思ひに火をかけた。

大意　これまで夏蟲を、火の中に飛び入つて、心から身を燃やす愚なものと、何としていつたであらうぞ、さうはいふべきで無かつたわい、今は心から自分もその通りに、思ひの火に身が燃えてしまひさうな様子であるわ。

評　燭蛾の典故は、戀一、

　夏蟲の身をいたづらになすことも一つおもひによりてなりけり

の條に擧げた。想も類似した上に、本據といひ、「おもひ」の弄語といひ、全く同一である。只敍述に多少の曲折があるので、姿致を殊にしてゐるに過ぎない。躬恒にしてこんな踏襲をやることは、聊か不審なことゝ思つたが、作者の同人友則も、上に、「宵の間もはかなく見ゆる夏蟲に云々」と詠んでゐるから、この頃の歌人の、好んで詠みあつた事柄であるらしい。

風ふけば峰にわかるゝしら雲のたえてつれなき君がこゝろか　　たゞみね

釋　○風ふけば云々　峰に棚引いてゐる雲が風に隨つて東西に別れて、ちぎれ〳〵になるをいつた。○たえて一向にの意。白雲の絶えてとかゝつた。○こゝろか　「か」は歎辭。

大意　風が吹くと、山の上を離れて行く雲が絶えるが、そのたえてといふやうに、たえて即ち一向に氣強い貴方のお心であることよ。

評　三句までは序で、その風致も面白い。又句々力量があつて、ひどく緊張した響をもつてゐる。それが詠歎の意を強めることになる。この作者の作としては、蓋し逸調に數ふべきものゝ一つであらう。結句、六帖、貫之集に人の心かとある、これは優つてゐる。下句、新撰萬葉に往き返りても逢はむとぞ思ふとあるは別の歌だらう。

○

月影にわが身をかふるものならばつれなき人もあはれとや見む

釋　○あはれ　可憐の意。

大意　あの空の月影に、自分の身を換へられる物であるならば、早速換りたい、さすれば、いかに氣強いあの人も、あゝ可愛いと思つて、見て呉れるでもあらうか。

評　月影の身にしみ〴〵と、人を戀ひつゝ詠んだらしい。「今夜月明人盡望」といつたやうに、月ほど世に愛でられる物も無い。乃ちこれを基想としてこの月に身を相換へたらばと思ひ寄るのも、無理ならぬ事で、絶望の餘りは理性を沒却して、到底不可能の希望をすら描くに至る、その焦慮煩悶の狀態が想ひやられる。この空想、

この實感、兩々相對して、詩味湧然としてこゝに生じてくる。又この歌では、「月影」は月といふも同じ程の事である。月あれば影は必ずある物故に、うち任せては、月とも月影ともいふ。新後拾遺集に、天暦の御製、

月影に身をやかへましあはれてふ人の心に入りて見るべく

比較して、その巧拙を知られたい。

拾遺集に再出したのには、四句思はぬ人もとある。家集も同じい。六帖には、相思はぬといふ題に入つて、初二句、月影をわが身にかふるとあり、しかも作者を躬恒と署してある。歌のさまを思ふと或はさもあらう。

ふかやぶ

戀ひ死なばたが名は立たじ世の中の常なき物といひはなすとも

大意 もし私がこのまゝ戀ひ死なうならば、誰れも外の人の名は立ちはすまいわ、貴方は、人の生命は世の中の無常の物として、當然の事のやうにいひ成されても、貴方のつれない事は、人もよく知つてゐる事ゆゑ、やはり貴方の無情な爲、といふお名が立つことでございませうわ。

評 されば、餘り強顏(ツレナ)くなさらぬのが貴方のお爲でせうと、所謂お爲ごかしで、自分に同情を求めた手段の狡猾、語言の巧、また一顧の値がある。但萬葉集卷十二、

里人も語りつぐがねよしゑやし戀ひても死なむ誰が名ならめや

人目おほみたゞにあはずて蓋しくもわが戀ひ死なば誰が名ならむも

を藍本として、更に佛理を加味してゐる。その先潛りをして、先方のいひさうな辯疏の詞をまづ奪つておのが

物として、攻道具に使つたことは流石である。三句、景樹が「世の中はとあらでは、その意徹らず」といつたのはなかなかに僻言で、「常なき物」は世の中をいつたのではない、人の壽命を指したものである。

つらゆき

津の國の難波のあしのめもはるにしげきわが戀人知るらめや

釋　○津の國の難波　津の國は攝津の國の古名、難波の津あるより負うた名である。和名鈔に「攝津國延暦十三年停レ職爲レ國」とあるも、なほ國文國歌などには、津の國と書いた。難波は今の大坂の地。○めもはるに　目も遙ハルにの意。見渡しの遠いをいふ。上から續けて、蘆の芽も張るといひかけたとする說は穿鑿である。「め」は見えの約。

大意　津の國の難波の浦の蘆が、目も遙々と見渡す限り生え茂つてある如くに、繁く物を思ふこの自分の戀を、先の人が知らうか、いやこれ程であらうとは知りはすまいわ。

評　先方の人が知つたなら、必ず同情せずにはおくまいにの餘意がある。下にのみ思ひ包んだ戀であらう。長高の體である。上句は、萬葉集に、「春草のしげきわが戀」などあると同想の序。

○

手もふれで月日へにける白眞弓シラマユミおきふしよるはいこそ寐られね

釋　○月日へにける　この句下へ續いては、一首の意がどうしても聞き取りがたい。諸註、さまざまに釋きなしてはあるが、牽强で諾はれない。打聽本には、へにけりとあつて、切れてゐる。それなら聞える。假令、かう

した準據の證本がないとしても、こゝで句は斷るべきである。思ふに誤寫のまゝに傳はつて來たのだらう。

○白眞弓　和名鈔に、「檀、木名也、和名萬由美」とある。伊勢貞丈は「この木、木理細かに其の性ねばくしなやかにして、弓材には甚だ宜し。葉も幹も大方玉椿に似たり。皮を剝げば、木の肌細にして色白し、云々。檀を弓の上材とする故に、眞弓の稱を負せたるなるべし。眞は美稱、白眞弓は、檀にて製れる弓を、白木のまゝにて用ゐるをいふ」、宣長は「木の色白き故にいふ」など諸家の說がある。さてこれは、下の「おきふし」の序に用ひた。弓射るに、古くは、その鉾を或は起し、或は倒すことがあつたのであるらしい。古事記、書紀、萬葉集などに、弓腹振立て、弓彇振起し、弓上振起しの類、數多見えてゐる。眞淵が、弓射る人の起伏する射禮のあつたといふ說は覺束ない。○よるは　夜に寄るをかけた。寄るは弓引けばその本末が體の方に寄つてくるからいふ。○いこそ寐られね　「い」は寢又は宿の意。

大意　心のうちにばかり思つて、あの人には手さへも觸れずに、長い月日を經て來たわい、今はもう思が嵩じて白眞弓の起伏するやうに、夜は起きたり伏したりして、夜の目もサ寐られぬわ。

評　例の轉輾反側の意である。序詞の「白眞弓」の緣で、掛け離れて居ることを、「手も觸れで」と轉義した。二句でけりと切れば、譯も無く聞える歌なのに、「ける」とある原本によつて、季吟は「手も觸れず久しく置きたる弓は節起きなどして、癖の出來る如くに」といひ、廣蔭は「手も觸れで月日を經たる白木は、強くて引寄せて起伏しさすることも心に任せぬ如くに」など解いて、譬喩の不完全となるのも忘れ、宣長は不得要領の解を下し、景樹は解し難しと投了したのは、皆その誤寫のあるのに心づかなかつた失考である。

結句、六帖、家集に「物をこそ思へ」とある。

〇

人しれぬ思のみこそ侘しけれわがなげきをばわれのみぞ知る

大意　先の人に知られぬ戀の思ばかりはサ、仕方も無く難儀に思はれるわい、自分の歎きをば、自分ばかりがサ承知して居るわ。

釋　おのが行爲の愚さを自分から嘲つてゐる。さりながらやはり利口にはなれないで、思ひ歎くより外のない人の作である。「のみ」の語、無意味に重複して、洗煉の作とも思はれない。

結句、家集にわれのみぞきくとあるを景樹はたすけていふ「歎きは長息なれば、その聲を聞く由なり」と。

友　則

言にいでていはぬばかりぞみなせ川したに通ひて戀しきものを

釋　〇言に　言葉に。〇みなせ川　攝津の國山崎のあなたに水無瀬といつて、惟喬親王や後鳥羽上皇によつて有名となつた處もあるが、本來固有名詞ではない。何處にまれ、水の無い川、或は砂の下を水は通つて、うはべに水の無い川をいふ。萬葉集に、水無し川とあるのも是れで、みなし、みなせと轉つたのである。水無瀬の瀬はあて字である。さてこゝは「したに通ひて」の序に用ひた。

大意　スレヤ戀しいと、詞に出していはぬだけの事ぞよ、丁度水無瀬川の、うはべは水の無いと見えて底には水の通ふやうに、自分も心のうちには思が通つて戀しいものをサ。

評 かうとも、あの人はよう知るまいと打ち歎いた餘意がある。水無瀨川は、萬葉集に、「水無瀨川下ゆわれ痩す」など、先例がないではないが、譬喩がいかにも恰好である。戀三に、この作者はまた、「かくれ沼の下に通ひて戀ひはしぬとも」の詠がある。好んだ口癖であるらしい。

君をのみ思ひ寐にねし夢なればわが心から見つるなりけり　　みつね

釋 ○思ひ寐　思ひながらに寐入るをいふ。

大意 戀しい人の事を、一途に思ひながらに寐て見た夢なので、逢ふと見たのも、やはり自分の心がらと見たのであつたわい、夢のうちには、逢つて吳れた貴女のお心を、嬉しく思つたがなあ。

評 逢ふと見た夢は自分の思ひがらで、先方には無關係であつたと氣が付くと、なまじひに物思の種で、見ずともの夢であつた。かう反映の意を味ふ時は、また多少の感哀があるやうである。萬葉集卷十二、

吾がこゝろと望み思へばあたら夜のひと夜もおちず夢にし見ゆる

に胚胎して、更に一段の結構を進めたものである。恐らく贈遺の作であらう。

二句、一本に思ひ寐にせしとある。

命にもまさりてをしくあるものは見はてぬ夢のさむるなりけり　　たゞみね

大意　二つ無い命にも優つて、惜しく思はれる物は、世に無いと思つて居たが、さうまで惜しいものは、戀しい人に逢ふと見る夢のまだとくと見切らぬうちに、このやうに覺めるのであつたわい。

評　誇張といつてしまへばそれまでだが、高度の情熱は、輕重の分別をさへ失して、命も物の數でなくなる。見果てぬ夢の悔しさが思ひ遣られる。突梯の狂想がこの好個の詩を成したものである。家集に、「昔物などいひし女のなくなりしかば、あか時方の夢に見果て侍らで、さめ侍りしにかば」とある詞書は、事情を解せぬ後人のさかしらに書きなしたものと思ふ。死んだ人の上では一向おもしろくない。

つらゆき

梓弓ひけばもとすゑわがかたによるこそまされ戀のこゝろは

釋　○梓弓　春上「梓弓おしてはる雨」の條に既出。こゝはたゞ、弓といふに同じい。○もとすゑ　弓の本弭末弭（モトハズウラハズ）の方をいふ。○よるこそ　寄るに、夜をかけた。

大意　弓を挽けば、その本末が自分の方へ寄るが、そのよるといふ夜がサ、晝よりも格別に、人戀しく思ふ心は增るわ。

評　上句は序で、隨分器用によみこなしたものである。夜の戀ひまさるは、氣の散亂する事なしに、感傷し易い時だからである。上の貫之の「白眞弓おきふしよるはいこそ寐られね」に類似した修辭着想であるが、ふつくりした味ひはこの歌にある。景樹は、「今更さと思知りたるが尤も切なる限にて、いと哀なり」と評した。結句、六帖に戀しきことはとある。この方的實であると古人はいつた。思ふに、語調をなだらかならしめよう

として、撰者等の改めたのかも知れない。

わが戀はゆくへも知らずはてもなし逢ふを限りと思ふばかりぞ　みつね

大意　迷ひぬいた自分の戀は、何處へさして行くといふ行方も知られず、何處までといふ果も無いわ、たゞ思ふ人に逢ふを行き止まりと、思ふばかりであるぞ。

評　逢へばこの苦悶はやむといふ。その一切を放下してひとへに逢ふべく思ひ入つた熱誠は、木石も感ぜしめる概がある。限りも無い物と揚言しておいて、一轉語を下してそれに限りをつけた頓挫が、この巧處である。

○

われのみぞ悲しかりける彦星もあはですぐせる年しなければ

大意　世の中に自分ばかりがサ、悲しい身であつたわい、あのあはれな例に引く彦星さへも、一向逢瀨の無い自分とは違つて、年に一度の契はあつて、逢はずに過ぎた年がサ無いから。

評　世におなじ悲境に沈淪する者があると思へば、自分ばかりでもないと、自然慰めもされる。されば逢はずして日を經る頃は心細くはあるものゝ、なほ天上には彦星があると思つて慰んでゐたのを、ふとその彦星でさへも、七月七日の年に一度の會合はあると思ひ寄つて、遂に天にも地にもわが儔が無いと知つた時、ほんにどんなに悲しい心地がしたらう。牽牛織女を戀の比與とすることは、夙く奈良時代にはじまつて、この頃に盛んで

あつた。さて、この逢瀬のないのは、女のつれない爲か、それともまた、さる契ある彥星を引證した點から見ると、素より知り合つた中に、障る事が出來ての事か、いづれでも意味はとほる。
三句、六帖にたなばたもとある。

ふかやぶ

今ははや戀ひ死なましをあひ見むと賴めしことぞ命なりける

釋 〇あひ見む 「あひ」は輕い接頭語。逢ひの意ではない。萬葉集には、皆、相の字が書いてある。〇ことぞ「こと」は言の意。事ではない。

大意 もうはや焦れ死んでしまはうものを、何時ぞや逢はうと、あの人が約束して、賴みに思はせたその一言がサ命となつて、かう生きて居るのであつたわい。

評 言諾けのよかつた儘に、よもやにかゝつて綱引いた戀であらう。源氏物語夕顏の卷に、うつせみの世はうき物と知りにしをまた言の葉にかゝる命よ
この類の着想はなほ澤山ある。蓋したしかに世間に多い事實である。

みつね

たのめつゝあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人は知らなむ

大意 逢はうと約束して、賴みにさせ〳〵して置いて、逢つても吳れず年を經る每に、懲りもせず、やはり賴み

にして待つて居る自分の心底を、かの人は知つて貰ひたい。

評 虚僞と眞實とを對照させて、彼れの羞恥心を刺衝し、その悔恨の念を轉じては、自分に同情を寄せるようにと希つた。僞に凝りぬ心長さもつまり戀なればこそで、哀れである。

この歌、後撰集戀五に再出して、詞書に「久しくいひ渡り侍りけるに、つれなくのみ侍りければ」なりひらの朝臣とあつて、伊勢が返し、

　夏蟲のしる〱まどふ思せばこりぬ悲しと誰れか見ざらむ

といふをも擧げてある。これは枇杷左大臣藤原仲平公の官位卑い時分の歌で、なかひらと假名に書いたのを、なりひらと寫し誤つたものである。まこと業平ならば、伊勢とは時代が出會はない。伊勢集にもこの贈答が載つて、作者は仲平である。仲平は躬恒と同時の人であるから、作者の誤記などはあるべき筈がない。後撰集にわざ〱業平と署して再選したことは、頗る異しい。

再考、古今集撰著の頃は、仲平は官位のまだ淺い三十歳ばかりの壯年で、伊勢の御との關係は、なほ久しい以前からあつたらしい。對手の伊勢は歌人の聞えもあり、餘り拙劣の歌を出すのも、殘念できまりがわるいので、斯道の名匠たる躬恒に誂へて詠ませたのかも知れない。そして贈つたのだらう。仲平の甥に當る師輔が大納言だつた時、わざと貫之の家を訪ねて、魚袋の歌を乞うた咄を思ひ合はせるがよい。さて、躬恒はこの集の撰者として、自分の作だから自分の歌として載せたのだらう。伊勢の御はまた仲平が贈つたのだから、仲平の自作と思つて、集にも書き留めておいたのを、後撰集の撰者達が伊勢集を過信して、古今を誤とし、作者をあらためて更に收錄したものと思はれる。

命やはなにそは露のあだ物を逢ふにしかへばをしからなくに　とものり

釋　○命やは　下に惜しきの語が略かれてある。かう初句で切る解は、廣蔭說によつたのである。長野義言は、「命といへば大切なる物のやうに聞ゆれど、人の身は何さるものならんぞといへるにて、さるものにはあらず、只露の如く空なるものをといふ意なり」と說いてゐるが、初二句の連續が十分に解かれてない。○なにそは　離別「かへる山何そはありてあるかひは」の條に、委しく註してある。○露のあだ物を　露の如き空物なるをの意。「空」ははかなくて當にならぬをいふ。

大意　大切に人の思ふ命がサ命かい、何それは露同然のはかないつまらぬものを、思ふ人に逢ふのにサ換へるならば、この命をしまふ事は一向惜しくは無いのに、それでも逢つて吳れぬので、仕方が無いわ。

評　逢ひだにせば死をも辭せじの意を、「逢ふにし換へば云々」といひ換へた。洗煉の語である。凡想ならば、まづその命が極めて貴重な所以を述べて、さて戀の爲には惜しまぬ趣に取り成すべきを、これは開口一番命を物にもあらぬやうに罵倒し去つて、逢ふに換へば、寧ろ餘程換へ德であるやうに喝破した。全く意表の語である。高潮の情熱に驅られて、冷靜を失つた想の矯激で、辭樣また奇で、實におもしろい作である。この種の風格は、全然業平朝臣集中に見るべきもの、延喜の歌人にして在五の壘を摩し得たのは、實に非常の好成績を擧げたといつてよい。上句は、或は當時の口語の辭樣ではあるまいか。

初二句、六帖に命かは何そも露のとあり、家集の一本には、また命やもとある。伊勢物語に、「思ふにはしのぶ

ることぞまけにける逢ふにし換へばさもあらばあれ」とあるは、この下句と、戀一、「色には出でじと思ひしものを」の歌の上句とを撮合したもので、筋が立たない。

古今和歌集卷第十三

戀歌 三

彌生のついたちより、しのびに人に物をいひてのちに、雨のそぼふりけるに、よみてつかはしける　在原業平朝臣

おきもせずねもせでよるをあかしては春の物とてながめ暮らしつ

釋 ○彌生の云々　「ついたちより」は打聽の一本に「ついたちばかり」とあるがよい。「物を」は一本に「物ら」とある。「物をいひて」は男女の語らひをなすをいふ。「そぼふり」はショボ〳〵と降るをいふ。この詞書は、伊勢物語に、

昔男ありけり。奈良の京ははなれ、この京は人の家未だ定らざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。形よりは心なむまさりたりける。ひとりのみにもあらざりけらし。それを、かのまめ男打ち物語らひて、かへり來て、いかゞ思ひけむ、時は彌生のついたち、雨そぼふるにやりける。

と見えた。景樹いはく、「この詞書は、勢語の文を抽き入れたるにて、尤も拙し。紀氏の文は、勢語の企て及ぶ所にあらず。さるに、この文勢語に劣れること論なし。紀氏にまがへて見るは淸盲なり。こは題しらずの歌な

るべし。集次も、不逢戀なるべきなり。この詞書ありては、逢戀の意になれり」と。紀氏の文は勢語の及ぶ所にあらずと、一概に論じてしまつたのはやゝ偏斷に失するが、この詞書に就いての說は至極同感である。

○春の物とてながめ暮らしつ　暮春の頃など長雨は降り勝なので、「春の物とて」といつた。「ながめ」は、長雨（ナガメ）に詠（ナガ）めをかけた。詠めは長目の義で、物思しつゝ見るともなしに物を見詰める貌である。

大意　物思に亂れて夜の目も合はず、さればとて起き上りもせず又眠りもせずに、やう〳〵と一夜を明かしては、やれ嬉しやと思ふに又、晝は晝で、この節の春の物ぞといふことで降る長雨に、一日辛氣に詠め暮らしましたわ。

評　編次のさまを思ふと、意は不逢戀なるべく、さて歌はその女の許に贈つたものであらう。夜もすがら輾轉反側して物思するが、それでも夜が明ければ、物に紛れて思の慰む事もやと、漸く待ち明かしたのに、又折柄空がかき曇つて、雨さへ降るので、その一日を詠めくらしたのは、どんな心地がするであらう。かう晝は晝で物思をすることの生憎な趣が、三句の「ては」の助辭に依つて表現される。等閑に看過してはならない。終日終夜を日を經て思ひ戀ふるさま、戀一、

　あけたてば蟬のをりはへなき暮らしよるは螢のもえこそまされ

とほゞ同趣で、これは修飾に春雨を用ひたのみが差つてゐる。なほその歌の條を參照ありたい。筆路縱橫、更に窘束の態がない。但この朝臣の作としては、決して上乘のものではない。

業平朝臣の家に侍りける女の許によみてつかはしける

としゆきの朝臣

つれ〴〵のながめにまさる涙川袖のみぬれて逢ふよしもなし

釋 〇業平朝臣の云々　伊勢物語に、

昔なまあてなる男の許に、ごたちありけり。それを內記なりける藤原敏行といふ人よばひけり。この女、顏かたちよけれど、未だ若ければ、文もをさ〳〵しからず、詞もいひしらず、況や歌はよまざりければ、かの主人なる人、案を書きてかゝせてやりけり。めで惑ひにけり。さて男のよめる。

と詞書して、この歌をあげてある。〇ながめ　詠めに、長雨をかけたことは、上の歌に同じい。〇涙川　地名でない。混喩である。

大意 打ち續いて雨の降る頃は、徒然なのにつけて、いよ〳〵戀しさがまさつて、長雨といふ名の詠めをする爲に、水嵩の增る涙の川に袖ばかり濡れて、逢ひたくても逢はれさうな模樣も無いわ。

評 霖雨の徒然には、外に氣の紛れる仕草もないから、思ふ事ある人の、いよ〳〵堪へ難い頃ほひであらう。「涙川」は、長雨に川水の增す聯想から涙に誇張の比喩を用ひて承けたに過ぎない。故にこゝの「川」は主眼の字でなく、輕く使はれてある。それを頗る重く見て解釋した眞淵、宣長等が誤を襲つて、藤井高尚が、

長雨には川の水增して深くなれば、渡らむとしても袖を濡らすばかりにて、渡るべきやうなきをもて、一うたの詞を仕立てたるなり。思ふ人に逢ふことを、川を渡るに喩へたること例あり。

といつたのは鑿である。渡るといふ語は、全然歌の上にない。但返歌の方は、渡つて袖のぬれたことに取り成

して詠んでゐる。それが贈答歌の常手段である。又「涙川」の造語は奈良時代になく、六帖及びこの集に頗る多いことを思ふと、平安期の流行語と見える。特にこの贈答二首がその先驅をなしたものらしい。「逢ふよしもなし」の結句は、萬葉にも語例が多過ぎるほどある。

四句、伊勢物語、六帖、家集等には袖のみひぢてとある。次の返歌に、「袖はひづらめ」とあるに合はせて考へると、本文の、「ぬれて」とあるはよくないかも知れない。わざと詞をいひ換へたのだといへばそれまでだが。

かの女にかはりて返しによめる　なりひらの朝臣

あさみこそ袖はひづらめ涙川身さへながると聞かばたのまむ

釋　○かの女云々　この詞書の書きざまは拙い。勢語には、「返し、例の女にかはりて」とある。思ふに、もとは返しとのみあつたのを、勢語によつて書き加へたものかも知れない。景樹いふ、「上の歌の詞書は『女の許によみて遣しける』とのみありけむを、勢語によりて業平云々の語を入れ、この返しも『よみ人しらず』なりけむを業平の名を署せしならむ。この次なる『徒に行きては歸る云々』の歌は詠人不知なるを、勢語には『在原なりける男』と、業平めかせたるなど、いろ〳〵に繰れるものなり」と。○あさみ　淺み。この「み」は、サニ、又、クテと譯すべき副詞格の助辭であるやうに、眞淵以降の註者は解したが、なほ舊註、及び契沖、雅嘉等の說の如く、形狀體言と見るのが穩やかであらう。

大意　貴方は「袖ばかり濡れて」と仰しやるが、一體河水の淺い處こそ、渡りなどするに袖は濡れるでしよう、涙川がそのやうに淺い事では、賴みにはなりませぬ、袖が濡れるどころか、貴方の御身までが流れると聞きま

せうならば、それは深い涙川で、御思の程もさこそと存じまして頼みに致しませうわ。

評 長い袖が水に漬いて徒渉する位の水は、淺いにきまつた事だから、

廣瀨川袖つくばかり淺きをや心深めてわが思へらむ（萬葉集卷七）

澤田川袖つくばかり淺けれど久邇のみや人高橋わたす（催馬樂）

など、古へより詠み來つてゐる。こゝもその意である。「つれ〴〵の詠めに増る涙川」に袖が濡れるといふは、旣に甚しい誇張であるのに、なほも不充分として、今一倍差を掛けた「身さへ流る」の意表の奇言、これ小さな虛を衝くに、更に大きな虛を以てしたものである。戀二に、

おろかなる涙ぞ袖に玉はなすわれはせきあへず瀧つ瀨なれば

と小町が返歌したのも、同一の筆法である。この大膽な誇張は、尋常一樣の歌人の、とても出來得る處でない。この作者は全く業平であらう。

題しらず　　よみ人しらず

よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心は君が影となりにき

釋 ○よるべなみ　寄方無さに。○影となりにき　この「影」は影身に添ふなどの影である。戀一に「戀すればわが身は影となりにけり」、「篝火の影となる身のわびしきは」などの影は、瘦せ細つたのを形容したので別である。混じてならぬ。

大意 不斷貴方に近寄るすべが無いので、身をこそかうして遠く隔てゝ居れ、しかし戀しく思ふ心は、不斷貴方

のそばを離れずに、貴方の影となつてしまひましたわ。

評 戀心にあくがれた人の作である。形と影とは必ず相伴ふものであるから、相副ひて離れぬ意を、「影となる」と轉義した。遠近の合拍はこの組織の骨子である。

○

徒(イタヅラ)にゆきては來ぬる物ゆゑに見まくほしさにいざなはれつゝ

釋 ○來ぬる　上に「行きては」とあるので、返るといふ意になること、往來(キユキ)の來(キ)と同じい。○物ゆゑに　物乍(ナガラ)にの意に解するのは早い。下に最早ゆくべきではないにの語を補つて解するがよい。○見まくほしさに　見むことの欲しさにの意。「まく」はむの延言。

大意 思ふやうに逢はれずして、折角往つては空しく返り〳〵する物なので、最早ゆくべきでもないものを、それを逢ひたいと思ふ心にサ、誘ひ出され〳〵しては、又しても往き又しても往きすることよ。

評 詩の召南の、

陟(リ)二彼南山(ニ)一、言采(ル)二其薇(ヲ)一、未(ダ)レ見二君子(ヲ)一、我(ガ)心傷悲(ス)、云々。

の趣に彷彿してゐる。上句、やゝ理路に渉る嫌ひもある。但、「ゆきて」の下に、わづかに「は」の辭を點出して、幾たびも往來する趣を現はしたり、能ふかぎり多くの語言を省略したりなど、叙述の精巧は頗る見るに足るものがある。

この歌の作者、伊勢物語ではよみ人しらずである。六帖には人麿の名を署してある。もとより風體が殊つ

てるから信ぜられない。

〇

あはぬ夜のふる白雪と積りなば我れさへともにけぬべきものを

この歌は、或人のいはく、「かきのもとの人丸が歌なり。」

釋 ○白雪と積りなば　白雪と共に積りなばの意。「と」の辭早く解すると、白雪の如くともいはれよう。花と散る、雪と降るなど皆この意。

大意 思ふ人に逢はぬ夜が、この降る雪と同じやうに、幾夜も〱積つたなら、又この雪の消える時分に、え逢はぬ悲しさに、自分の命までが共に消えてしまひさうであるものを、さても逢はれぬことかな。

評 一度逢つて後、故障が出來てか、人が逢つてもくれない頃、雪の降るのを見て、忽ち感興を發して、わが運命をトすると、遂には雪とおなじ運路をたどつて消えてしまはうかとはかなんで、無情な戀人を怨んだものと思はれる。或はかう詠んで、その人に贈つたのかも知れない。譬喩の親貼なのはこの巧處で、また拙處であらう。結句の「を」の辭を解して、景樹は、「八重垣造るその八重垣を」「夜には九夜日には十日を」などのをと同じ歎辭であると論じたが、上來の語勢を味ふと、言外になほ餘意ののこるほどに、强い調子に聞きなされるので、やはり抑揚の意味に用ひられた辭と解するのが穩やかだらう。

左註は信ぜられない。風調叙法すべて人麿には似もつかない。

なりひらの朝臣

秋の野に笹わけし朝の袖よりも逢はでこし夜ぞひぢ增りける

釋 ○笹　小竹。

大意　秋の野で、笹原を踏み分けて來た朝の間の袖は、露の爲に隨分濡れたが、それよりも貴方の所へ往つてヽ逢はずに戻つて來た夜の間の袖がサ、意外にも涙の爲にひどく濡れまさつたわい。

評　小笹の露にそぼちつヽ秋野を分けたのは、以前その人に逢つて立ち歸つた朝のことであつた。今は訪ねたかひもなく、叩きわびて、空しく夜中時分に立ち歸つた袖のうへの涙に、かの後朝の朝の袖の露が聯想されて、比べて見れば今の涙の方が濡れ勝つたとの斷案を下した。この誇張はその佗しさの一通りでない趣を見はすに力がある。「朝の袖」とあるに讓つて、夜の袖といふべきを省き、又上句に露、下句に涙の語を着けずに、たしかにそれと思はせるなど、頗る老練なものである。一篇の骨子は有情無情の對照にある。

四句、伊勢物語にあはでぬる夜ぞとあるはいかゞ。これは我が家に丸寢した趣だから、秋の野に笹分けつヽ立ち歸つた後朝の袖を聯想するに、緊切でない。但、ぬるの現在法を用ひたのは、その理がないでもない。本行のやうに、「笹分けし朝」、「逢はで來し夜」とあつては、いづれも過去の出來事を後で比較して見た趣になつて實感が遠くなる。されば過去と現在とを對比して、無量の感愴を搖曳させる叙法に依るのが適當だから、四句は、**逢はで來る夜と改めるがよい。**

小野小町

みるめなきわが身をうらと知らねばやかれなで海士の足たゆくくる

釋 ○みるめ　見る目に、海松布をよせた。○わが身をうらと　我が身を憂といふに、浦をかけた。○かれなで　離れずしての意、變ることのないのをいふ。○足たゆく　「たゆく」は口語のだるくといふに同じい。

大意　海松布の無い浦といふことを知らぬせゐかして、それを刈らうと思つて、海士が休無しに足のだるくなるほど來るやうに、何遍來ても逢ひ見るといふ事が無い私の身を、憂い辛い者とも知らぬかして、途絶えも無く、貴方が足のだるいほどお出になることわ。

評　愚なる業かな、やめ給への餘意がある。「みるめ」とか、「うら」とかいふ緣語から、思ひ切りわるく附き纏ふ未練男を、海松布の無い浦に、足たゆくかれず來通ふ海士に比喩し、的の無い矢を放つなと、下に嘲つたのは、人のわるい仕打である。當時の宮仕に出で立つた、口賢い女房の狀態が見るやうではないか。構想は一機軸を出してゐるが、詞は煩瑣に失する。初二句を、宣長が、「わが身をみるめなき浦と、下上に打ち反して、心得べき格なり。後に、わが身のうらと詠める歌多きは、これに據れるものなり」といつたのは從はれない。これは、この時代に於ける一つの成語で、さう切り放して釋くべきでない。

流れてはゆく方もなしなみだ川我が身のうらや限りなるらむ　（千兼）

わたつみと賴めしこともあせぬればわれぞ吾が身のうらは怨むる　（伊勢）

わび渡るわが身のうらとなれゝばや戀しきことのしき波に立つ　（寛平歌合）

その例證はこんなに多い。又これらを必ず小町の歌に據つて詠んだとするのは泥んでゐる。この事は、既に杲樹も論じてゐる。

源宗于朝臣

あはずして今宵明けなば春の日の長くや人をつらしと思はむ

釋 ○春の日の　「長く」にかゝる序。

大意 これまでは度々逢はずにこそ戻つたが、今夜は是非と思つて來たに、又逢はずに今夜が明けたならば、この節の春の日のやうに長くいつまでも、貴方をつらいと思つて、過すでがなあらうわ。

評 さる女房の格子わたりを這ひあるいて、叩きわびた折の作であらう。水鷄かともいはずひそまり返つた、女のつらい心にも思ひ知られるやうに、「長くや人を」と打ち詠めた。初句、六帖、及び家集にあかずしてとあるはわるい。

みぶのたゞみね

在明のつれなく見えしわかれより曉ばかりうきものはなし

釋 ○在明のつれなく　「在明の」は在明の月の如くといふべきを省いたので、在明の月は、夜が明けてもなほさりげなく空にある物なので、「つれなき」にかゝる序に置いた。○つれなく　平氣に。つらいなどの意。

大意 在明の月が夜の明けるのも、よそ〳〵しく知らぬ顔で、空にあると同じやうに、人の氣強く見えたあの一

別以來、今は世に曉ほど憂いものは又と無いわ。

評 よく世に曉の別がつらいといふが、それは逢つての上の事である。これは女がつれないまゝに別れた曉で、まことに曉の憂さをしみ〴〵と味つた趣である。女の同情のない仕打を、殘月の無頓着に空に明け殘つてゐるに譬へたのは、丁度その折柄の景物を想ひ出して、侍つて來たものである。夜もすがら格子の外に居明して、碌なあしらひも受けず、すご〳〵と曉方に殘月を踏んで歸つた戀想人の見じめさが思ひやられる。

この集の歌の編次は、撰者達の非常に注意したもので、殊に戀の部は、一々その意を綜ねて配列され、毫末も忽せにしなかつたものらしい。この前後はいづれも、逢はずに夜の明けた意の歌だから、これも必ず同じ趣と見るべきである。六帖にも、「來れゝど逢はず」といふ題のもとにこの歌をおいてある。まして作者忠岑は已に撰者として、この歌の序次を是認してゐる人である。若しこれを拘泥の論といふならば、却つて疎鹵の嘲を得るだらう。然るに顯昭は、逢つて別れた趣に解し、宣長、及び石原正明またこれに從ひ、中井履軒はその首肯贊々に、

かの時男心は殘りがら、泣く〳〵出でて歸るに、曉月は我れを送らむともせず、依然と閨にさし入りて女を照して居るを、羨ましくも妬ましくも思ひし情を述べたり。

とあるも、皆當らない。更に宣長が、「此處に入りたるは、ふと所を誤れるなり」と論じたのは、私意を挿んだ誣言である。さて、定家卿が、

この詞つゞきを見るに、及ばず艷に面白くも詠みて侍るかな。これ程の歌一つ詠出でたらむ、この世の思出に侍るべし。

といひ、又、古抄に、

後鳥羽院より、定家家隆兩人の許へ、八代集の中に面白き歌は、取分けいつれぞと勅問ありしかば、有明のつれなく見えしの歌を、兩人同心に申されし。

と見えたのは、皆、顯昭の解に據つた贊辭で、假にその意と見ても、過褒を免れまい。

ありはらの元方

あふ事のなぎさにしよる波なればうらみてのみぞ立ち返りける

釋 ○あふ事のなぎさ　逢ふ事の無きに、渚(ナギサ)をかけた。渚は波打際をいふ。○うらみて　恨みてに、浦見てをかけた。

大意　自分は丁度、人の逢つてくれる事が無いといふ名の渚にサ寄る波であるから、その波が浦を見たのみで立ち返るやうに、折角その人の許に通つて往つては、逢ふ事もなしに、一途に恨んでサ立ち歸つたわい。

評 おのれを波に、つれなき人を渚に譬喩して、その緣語で仕立てた。波の如くと直喩せずして、「波なれば」と穩喩したのが面白い。そして、「浦見て」と擬人した。後にも、戀五に、

わたつみのわが身こす波たち歸り蜑のすむてふうらみつるかな

又は、

あふ事のなぎさに身をしなしつれば袖も涙に濡れぬ日ぞなき　（六帖）

大淀のまつはつらくもあらなくにうらみてのみも返る浪かな　（伊勢物語）

など、皆同調の歌である。織巧は作者の例の特技である。

かねてより風にさきだつ波なれやあふ事なぎにまだき立つらむ　　よみ人しらず

釋　○波なれや　「なれや」はなればやの意。○あふ事なぎに　逢ふ事無きといふに、和をかけた。和は風波の穩やかなのをいふ。

大意　浪は風が吹くに因つて立つ物であるが、自分の人を戀ふといふ名は、前以てまだ、風の吹かぬ凪のうちに立つ浪であればかして、このやうにまだ逢ふといふ事も無いのに、早くから噂に立つことであらうぞ。

評　逢はぬのに名の立つた戀である。萬葉集卷十一に、

風吹かぬ浦に波立ちなき名をも吾れは負へるか逢ふとは無しに

とあるを藍本として、多少の塗抹を施したに過ぎない。一首の上に、名といふ語の無いのを、顯昭が不審したのに景樹も同意し、又眞淵、廣蔭は、先立つ名といふに、波をかけたものとした。これらは皆我が戀を波に比喩したものと思ひ込んだ誤である。これは戀故に立つ名が主格なので、それを波に比喩したのだから、もとより詞のうへに現はさないのである。意釋にあるやうに主格の語を補つて見るがよい。「かねてより」「さきだつ」、「まだきたつ」など、同語類語重疊して、頗る洗煉を缺いてゐる。

陸奥にありといふなる名取川なき名取りては苦しかりけり　　たゞみね

釋 ○名取川　陸前國にある。名取郡の中央を貫流して海に入る。

大意　奥州にあるといふ話である、名取川といふ川の名のやうに、譯の無いのに、譯のあるといふ名を取つてはさて迷惑な事であるわい。

評 これが實ある名ならば苦しくもないがの餘意、「ては」の辭によつて表現される。上句は、「なき」の語を隔て、「名取りて」へかゝる序である。「いふなる」は、

みちのくにありといふなる松島のまつに久しくとはぬ君かな　（六帖）

瀧つ瀬のなかにも淀はありてふを云々　（戀一）

の類例で、足いまだ邊陬の奥地を踏まず、話にばかり聞き及んだ都人士の口吻である。聲調は流滑である。結句、家集にわびしかりけりとある。

みはるのありすけ

あやなくてまだきなき名のたつ田川渡らでやまむ物ならなくに

釋 ○あやなくて　春上「春の夜の闇はあやなし」の條に既出。○なき名のたつ田川　無き名の立つに、立田川をかけた。立田川は、秋下「立田川もみぢば流る」の條に既出。

大意　厄介にも、まだ事實も無い先から、かう名の立つことよ、このうへはいつそ、渡りかけた立田川を渡らずに已まう物では無いに、どうしてなりとも逢つて、この戀を遂げようわ。

評 貴女もその覺悟でゐて下されと、思ひ入つたますらを心は哀れである。濡れぬ先こそ露をも厭へで、かうお

互の浮名の立つた以上はいつそと、捨鉢的に強く出るのは、高ぶつた感情の所産である。人に逢ふことを、川を渡るに喩へる例は、外にも數多例が見えて、この獨創ではない。下句の高調なのにあはせては、上句がやゝ煩瑣の傾のあるのはくちをしい。

二句、新撰和歌にはまだきうき名のとある。

もとかた

人はいさわれはなき名のをしければ昔も今も知らずとをいはむ

釋 ○人はいさ 「いさ」は淸んで讀む。否やの意。春上「人はいさ心も知らず」の條に既出。○とを 「を」は歎辭。

大意 貴方はどうか知らぬが、自分はありもせぬ事をいひ立てられる名が惜しいから、前方も今も一切、貴方の事は知らぬとサいはうわ。

評 後撰集戀二に、「大つぶねに、物のたうびつかはしけるを、更に聞き入れざりければつかはしける」、元良親王、

大方はなぞやわが名のをしからむむかしの妻と人にかたらむ

返し、「大つぶね」とあつて、この歌を擧げてある。眞淵いふ、「元方も大つぶねも、倶に在原棟梁の子なれば、この集には、元方の姉とか、妹とかありつらむを、文字の落ちたるを寫し傳へしならむ」と。この說まことに從ふべきである。想ふに、天暦時代に傳はつた古今集には、既に元方とのみあつたので、後撰の選者達がその誤

である事を心付いて、更に贈答二首を載せて、作者の名を訂されたのであらう。大つぶねは、僻案抄に、

敦忠中納言の姨、中納言幼くて呼びつけられたる名といふも、無下に打解けたり。名なくば、棟梁がむすめとも書くべきに、勅撰の作者に、かくて載せたれば、定まりにける名と聞ゆ。大納言行成本にも、おほつぼねとあり。

と見えて、元方の妹二人のうち、長は始め藤原國經の室で、後時平大臣に通じて敦忠を生んだ人、次はこの大つぶねである。季吟が「心よく叶へる故に、兄の歌を借り用ゐたるにや」と推量したのは、無理な解説である。親王の御歌は、餘りに先の女が聞き入れぬ妬さに、只入懇といふほどの間柄なのを、なき名の立つたを幸ひに、もと相語らつた妻だと人に語つてやらうと、厭がらせをいひやつたのを承けて、それならば此方は、後にも先にも、全く一面識もない赤の他人ですといはうと、虚を以て虚に酬いたので、いづれも口巧者の贈答である。返歌はさう佳作ともいひかねるが、冗字冗語がなく、句々力つよく、洗煉を經た作である。後撰の選者達も、同感であつたと見えて、贈歌をば省いた。

結句、古本伊勢集に知らずとやいはむとある。やと疑つては、左右決せぬ趣になつてをかしくない。「とをいはむ」と、一途に思ひ入つたのがこの場合に叶ふ。

よみ人しらず

こりずまに又もなき名は立ちぬべし人憎からぬ世にしすまへば

釋 ○こりずまに　懲りずにといふに同じい。

大意　以前世間から、無い事をいひ立てられて、據なく一時疎々しく打ち絶えたが、それに懲りもせずに、又も無き名が立ちさうなことよ、なぜなれば、あの人がどうしても憎まれぬこの世にサ、住まつて居るからサ。

評　つい知らず〳〵中よくなり過ぎて、又も浮評の立つことゝならうとの杞憂、萬更でもない女との浮名をいひ立てられて、一旦は世間のうるささに控へた心の駒の、ともすれば跳り出しさうにするのを歎いてゐる。意思の弱い人か、情熱の高い人か。

ひんがしの五條わたりに、人を知りおきてまかり通ひけり。忍びける所なりければ、門よりしもえ入らで、墻のくづれより通ひけるを、度重なりければ、あるじ聞きつけて、かの道に、夜毎に人をふせて守らすれば、いきけれどえあはでのみ歸りて、よみてやりける　　なりひらの朝臣

人しれぬわがかよひ路の關守はよひ〳〵毎にうちも寢なゝむ

釋　○ひんがしの云々　この詞書も、伊勢物語に、

昔男ありけり。東の五條わたりに、いと忍びていきけり。みそかなる所なれば、門よりしもえ入らで、わらはべの踏み明けたるついぢのくづれより通ひけり。人繁くもあらねど、たび重なりければ、主人聞き付けてその通ひ路に、夜毎に人を据ゑて守らせければ、かの男いけどもえあはで歸りけり。さて詠める、

とあるを摘み入れたもので、もと「題しらず」の歌であらう。ひんがしの五條は、東の京の五條通り、昔の京都は、朱雀大路を中心に、東西兩京に別ち、北より南へ、九條の街路を設けてあつた。「人を知りおきて」は女を懇にしておいての意。「いきけれどえあはで」は、行つたけれども〳〵、え逢ひ得ないでの意。詞書の意は、東の五條附近に、或女を拵へておいて通つていつた、壻といふ譯でない所だから、公然と門からは這入れないで、墻の崩れから通つたのを、度重なつてゐるうちに、家の主人が聞き知つて、その忍び込む道に毎夜番人を寢させて守らせたので、いくら往つても逢へないで、空しく歸つて來て、そこで詠んで贈つた歌との意。○人しれぬ　人に知られぬの略。「人しれぬ思を常にする河なる」「人しれぬ思やなぞと」の例に同じい。内々のと譯すのが當る。○關守　關を守る番人。○よひ〳〵每　「よひ」は夜と同意に用ひた。必ず今いふ宵の口の意とするは泥んでゐる。○うちも寢なゝむ　「うち」は接頭語、「も」は歎辭、「なむ」は希望の辭。

大意　外の關守はともかく、内々の私の通ひ路の關守だけは、每夜〳〵に寢てしまつてまあ貰ひたいなあ。

評　さらば絶えず通つて逢はうものをの餘意がある。まことの關守に對へて、我が通ひ路の關守のみは「打ちも寢なゝむ」と、切に思ひ入つた趣が、「は」の辭で表現される。このことは既に春上「春日野はけふはな燒きそ云々」の條に委しく辨じておいた。初句を、舊說に「今は主人の知りて、關を据ゑたる程なれば、人知れぬとはいはれぬ道理なり」と疑つたのは粗い。又或人は、人に知らさぬの意に解いたが、それも強ひてゐる。「よひよひ每にうちも寢なゝむ」はこの場合大分おとなしやかな注文である。「人の戀路の邪魔する奴は、犬にくはれて」といふ程の事はなくとも、今少し激越の詞がありさうに思はれる。「おしなべて峯も平になりなゝむ」といふ位の口をもつて居ながらと、齒痒くも思つたが、格調がのびやかで、意促つて詞迫らぬ妙味もある。

題しらず

つらゆき

忍ぶれど戀しき時はあしひきの山より月のいでてこそくれ

大意 隨分怺へ忍びはすれども、ひどく戀しい時には、怺へかねて、あの山の端から月の出てくるやうに、思ふ人の所へさして出てサくるわ。

評 三四の句は、「出でてこそくれ」の序詞ながら、東の山際に、月の立ち昇つた折柄の哀れさが思ひやられる。思ひ妻などの許へ通ふには、夕暮がその時であつたから、人戀しさのいとゞまさつて來て、堪へられぬ趣である。「山より月の」の促調は、この氣分をよく表して、敍述が簡淨である。

戀ひ〳〵て稀に今宵ぞあふ坂のゆふつけ鳥は鳴かずもあらなむ

よみ人しらず

釋 ○今宵ぞあふ坂の　今宵ぞ逢ふといふに、逢坂をかけた。相坂は離別「あふ坂の關しまさしき」の條に既出。○ゆふつけ鳥　鷄の事だらう。戀一、「相坂のゆふつけ鳥も」、雜下「誰がみそぎゆふつけ鳥か」の條を參照。

大意 戀ひ慕ひ〳〵して、たま〳〵今宵といふ今宵ぞ逢ふことだから、その逢ふといふ名の相坂に名の高い庭鳥は、どうぞ鳴かずにまあ居つて貰ひたいなあ。

評 夕方逢つて朝に別れてゆく男女、明けたと告げる鷄の音の恨めしさは勿論だらう。秋上、

戀ひ〳〵てあふ夜はこよひ天の川霧立ち渡り明けずもあらなむ

詩材の異なつてゐるのみで、想も詞も大同である。たゞその少異の點がこの兩者の巧拙の別れるところである。天の川の歌は、二句の敍法が非常に緊迫して、稀に逢ふ夜を喜んだ眞摯の情が、一段と切に聞える。これは又二三句のうつりに、一番の工夫を弄してゐるが、もとより小刀細工で、到底匹敵しがたい。六帖に、

こひ〳〵てまれにあふ夜のあかつきは鳥の音つらきものにざりける

は、これを又やゝ變へたもので、鳥の音つらきの說破は最も拙い。

以下三首は逢戀である。

秋の夜も名のみなりけりあふといへば事ぞともなく明けぬるものを

をのゝこまち

釋 ○事ぞともなく　さしたる事も無いのをいふ。

大意　世に長い物といふ秋の夜も、名ばかりであつたわい、たま〳〵戀しい人に逢ふ夜といへば、何を語らふ間も無くて、これぞといふ事もなく、つい早く明けてしまふものを、何の秋の夜が長からうぞ。

評 秋の夜を長しといふ事は、春の日を長しといふと同じく、遍く世にいひ慣れた語だから、長しといふ秋の夜もといふべきを略いて、想像に任せた。「事ぞともなく明けぬる」は、短いの意を持たせた轉義だから、結局、長短の對照がこの骨子である。この構想はさう珍しい事ではない。萬葉集卷十、

秋の夜を長しといへどつもりにし戀をつくせばみじかゝりけり

は、この先型ではないか。又、誹諧部に躬恒、

むつごともまだつきなくに明けぬめりいづらは秋の長してふ夜は

とあるも同型ではないか。さはあれ、かうした作意は、誰れも思ひ寄る筈のものだから、踏襲も剽竊もない。只敍述の巧拙によつて優劣を判けると、萬葉のは婉曲の妙味に乏しく、理路に落ちてゐる。躬恒とこの作者とのは、ほゞ伯仲の間にあつて、躬恒のは男だけに語氣が鋭く、これは女だけに優しく述べられてある。なほ躬恒の歌の條下にこれを說明しよう。

三句、六帖にあひしあへば、打聽本にあふてへばとある。

長しとも思ひぞはてぬ昔よりあふ人がらのあきの夜なれば　　凡河内躬恒

釋 ○はてぬ　不竟（ハテヌ）の意。○昔より　先々から。○人がら　人體。

大意 秋の夜を長いとも、え思ひきめられぬわ、以前から逢ふ人物次第に依つて、長くも短くも覺える秋の夜であるから。

評 戀しい貴方に逢つては、大層短く思はれてサの餘意がある。逢ふ夜は秋の夜も長く思はれないといふを基想として、更に一層の工を弄し、相手の女の喜びさうなうまい事をいつた。

二句、家集の古本に思ひもとある。

しのゝめのほがら〳〵と明け行けばおのがきぬ〴〵なるぞ悲しき　　よみ人しらず

釋 ○しのゝめの　もと「ほがら」にかゝる枕詞である事は、既に夏部「夏の夜のふすかとすれば云々」の條に解した如くである。但こゝは轉つて、夜の引き明け方の意に用ひてある。○ほがら　朗らかの意。○おのがきぬ〴〵　銘々自分の着物〴〵と取り分けて着ることをいふ。源氏物語などにも見える。男女が逢つて起き別れる朝を、きぬぎぬといふのも、この意から轉つた語である。

大意 夜明の空が朗らかに明けて行くと、一つに打ち重ねて掛けて着た、銘々の着物と着物とが、別々に着られて別れることであることがサ悲しいわ。

評 何だか面白くもなささうな歌である。それは「悲しき」と説破してしまつたので、含蓄の味が消えた爲であらう。「ほがら〴〵」と「きぬ〴〵」と疊語の對を爲してゐる。以下の歌は別戀である。

結句、顯昭本にきるぞ悲しきとあるのを定家はたすけて、本行のを書寫の誤にやといつた。理は聞え易いが、趣は劣つて聞える。

藤原國經朝臣

明けぬとて今はの心つくからになどいひしらぬ思そふらむ

釋 ○今はの心つくからに　今は歸らうと思ふ心の萌すをいふ。○など　口語のなぜに當る。○いひしらぬ　いひやうも知らぬ。

大意 夜が明けて來るといふので、もう今は別れねばならぬと思ふ心が附くにつけて、なぜかういふにはいはれぬ、情無い思が添ふことであらうぞ。

評 せめて機嫌よくと思ふ別れ際に、生憎なる愁思の生ずるこの心を打ち歎いた。所謂別れのつらさであるのを、さう說破しない處に味ひがある。

結句、顯昭本に思なるらむとあるはわるい。六帖には、閑院大臣の歌としてある。閑院大臣は、嵯峨、淳和の朝に大臣であつた藤原冬嗣のこと。この風調を味ふに、今すこし時代はおくれてゐる。國經のものであらう。

寬平の御時きさいの宮の歌合の歌　　とし行朝臣

あけぬとてかへる道にはこきたれて雨も淚もふりそぼちつゝ

釋 ○こきたれて　扱き垂れてで、すごき落すをいふ。雜上「刈りてほす山田の稻のこきたれて」も今と同じい。「こき」は秋下に「もみぢ葉は袖にこき入れて」とあるこきと同語。

大意 このやうに雨の降るのに、夜が明けたといふので、別れて歸る道には、物をこきおろすやうに、雨も淚も一所に降つて來て、着物が濡れ〳〵して、さて難儀なことよ。

評 後朝の別愁を敍べた。本來淚の落ちるのが主であるを、わざと輕く傍に取り成して、まづ「雨も」といひ、次に「淚も」といひ添へたのもをかしく、淚を雨に竝べ擧げて、「こき垂れて」、「降りそほつ」の誇張も「かへる道には」のはの辭に呼應して面白い。

題しらず　　寵

しのゝめの別ををしみわれぞまづ鳥よりさきになき始めける

釋 ○寵　この作者の名のことは、離別「朝なけに見べききみとし」の條に既出。

大意　夜あけの別が惜しさに、自分がさまづ、鷄より先に泣きはじめたわい。

評「なく」の聯想から、折柄の晨鷄を對比の材料として、それに先んじて泣かるとあるに、惜別の情が強く印象させられる。

よみ人しらず

ほとゝぎす夢かうつゝか朝露のおきて別れしあかつきの聲

釋 ○うつゝか「うつゝ」は正氣なこと。○朝露の「おき」にかゝる序。哀傷に、「朝露のおくての山田」とある例に同じい。

大意　朝露のおきといふやうに、起きて別れて來た曉に聞いた時鳥の聲は、夢であるか現であるか、しかとは覺えぬわい。

評　女の許を夜深く立ち出でた後朝の空に、端なく杜鵑の一聲を聞き付けたらば、どんな心地がするであらう。ほんに夢とも現とも方角がつかなからう。女が氣が進まぬか何かで、話しかけても返事がなく、一夜を過した曉の別にやつと一言洩したのを、時鳥の一聲によそへ思慕の情を歌つたものである。句々字々力量あり、一煉の鐵のやうである。造語また精煉を極めてゐるが、「朝露の」とある朝の語、はての曉とさし合つて、聊か妙でないが、古歌には萬葉以來一首のうちに朝と曉とを疊用した例が頗る多い。「あかつきの聲」の辭樣は漢文直譯から來て、この時代に行はれ始めた。すべて元久時代の歌仙が希つた風格で、新古今調の胚胎である。

玉くしげあけば君が名立ちぬべみ夜深く來しを人見けむかも

釋 ○玉くしげ　玉は美稱、くしげは櫛笥で、櫛などの調髮具を容れる筥をいふ。「あく」にかゝる枕詞に用ひた。○立ちぬべみ　「べみ」は秋上「佐保山のはゝそのもみぢ」の條に既出。

大意　歸るのに夜が明けようならば、人目にかゝつて、君の名が立ちさうなので、まだ夜深なうちに別れて來たが、それにしても若し誰れぞ、人は見たであらうかしらぬわい。

評 忍んで逢つた戀である。人目に觸れぬようにとは注意はしたものゝ、なほ萬一を氣遣つて、事の破綻を恐れてゐる。「立ちぬべみ」の句、この時代の造語で、前後の古調に調和しない。着想は萬葉集卷十一、

月しあれば明くらむわきも知らずして寐てわが來しを人見けむかも

の先型がある。これになほ同集卷二、

玉くしげおほふをやすみ明けて行かば君が名はあれどわが名しをしも

を搗き混ぜて拵へ上げたやうな歌である。

三句、一本立ちぬべきとあるはわるい。四句、六帖には寢てわが來しをとあるは、萬葉のが紛れたので、この歌では意が徹らない。

大江千里

けさはしもおきけむ方も知らざりつ思ひ出づるぞ消えて悲しき

釋 ○けさはしも　「し」は强辭、「も」は歎辭で、霜を寄せた。○おきけむ　起きに、霜の置くを寄せた。○思ひ出づる　思ひに、日を寄せた。○消えて　心の消え入るに、霜の消ゆるを寄せた。

大意　今朝はサまあ格別に心が亂れて、どのやうに起きて來たやらも、一向覺えがなかつたわ、今その時の事を思ひ出すのがサ、置いた霜が朝日が出れば消えるやうに、心が消え入つて悲しいわ。

評　初二句、四句の細瑣ないひかけは厭になる。興風の歌に、

おもひには消ゆる物ぞと知りながらけさしもおきて何に來つらむ（後撰集雜二）

とあるなども、全く同巧の双生兒である。

人に逢ひて、あしたによみてつかはしける　業平朝臣

寢ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなり增るかな

釋 ○人に逢ひて云々　「人」は女であることはいふまでもない。その後朝に家に歸つて後贈つた歌との意。この詞書、伊勢物語には、

昔深草の御門に仕うまつりける男ありけり。いとまめに、じちやうにて、あだなる心なかりけり。さるに、心あやまりやしたりけむ、皇子達の仕ひ給ひける女を相知りにけり。さて朝にいひやる。

とあつて、この歌をあげ、次に「となむよみてやりける。さる歌のきたなさよ」とある。○夢をはかなみ　「を」は歎辭。苫を荒み、瀬を早みなどのをと同じい。○まどろめば　睫を交すをいふ。目蕩(メトロ)むの義とぞ。○いやはかな　「いや」は彌々(イヨイヨ)の意、「はかな」ははかなしの假體言。

大意 昨夜逢つて二人寢たあの暖い夢がまあ、餘りはかないので、たしかに今一度見ようと思つて、トロリと目をねぶつて見れば、却つて寢られもせず夢さへ見えずに、いよ〳〵はかない事になり增る事よ。

評 逢ひ難い女に、やつとの事で忍び逢つた後朝の心とするは、勢語に泥んだ誹があらう。たゞ飽かぬ別の後朝の意ばえを敍べたものとしてよい。寐不足で自然うつら〳〵と、うつゝなき後朝の態を、逢つた夢が見たさに目どろむ趣にいひなして、わが思を深げに見せたのは、頗る老獪である。三四句のうつり、意釋の如く詞を入れて見ないと、意がはつきりしない。「まどろめば」といひ下す時はまた、自然さうした詞の生まれてくる調であることは、秋上、

天の川淺瀨しらなみたどりつゝ渡りはてねば明けぞしにける

の條に解いた如くである。さて、勢語の地の文に「さる歌のきたなさよ」と評したので、季吟、契沖は「これは自記の詞にて、卑下して云へるなり」といひ、眞淵は「さる忠實人の思ひ亂れし歌詠めるを、心きたなしと云へるなり」といひ、高尙は「歌のとあれば、歌を指して、きたなしと譏れるなり。いと〳〵をかしき歌なれば、記者のわざとうらをいひて、戲れたる詞と見るべし」と。

以下五首後朝戀の歌である。

業平朝臣の、いせの國にまかりける時、齋宮なりける人の、いとみそかにあひて、又のあしたに、人やるすべなくて、思

ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりける

よみ人しらず

君や來し我れや行きけむおもほえず夢かうつゝか寢てかさめてか

釋 ○業平朝臣の云々　齋宮は、伊勢の皇太神宮に奉仕し給ふ内親王を申す。「みそか」はひそかと同じい。「人やるすべなくて」は使して便りする手段の無きをいふ。伊勢物語には、

昔男ありけり。その男、伊勢の國に、狩の使にいきけるに、かの齋宮なりける人の親、常の使よりは、この人、よくいたはれといひやりけり。親のいふ事なりければ、いと懇に勞りけり。あしたに出し立てゝ、夕さりは、こゝに歸りこさせけり。かく懇に勞りける程に、いひつきにけり。二日といふ夜、男、われて逢はむといふ。女もはた、逢はじとも思へらず。されど、いと人目繁ければ、えあはず。使ざねとある人なれば遠くも宿さず、女の閨も近くありければ、女、人を靜めて、子一つばかりに、男の許に來りけり。男はた、寐られざりければ、外の方を見出してふせるに、月の朧なるに、人の影するを見れば、小さき童を先に立てゝ人立てり。男いと嬉しく、わがぬる所にゐて入り、子一つより丑三つまであるに、まだ何事も語らひあへぬ程に歸りにけり。男いと悲しくて寢ずなりにけり。つとめて、いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、いと心もなくて待ち居れば、明け離れてしばしある程に、女の許より、詞は無くて、「君やこしわれや行きけむ云々」

とある。さて「男、いといたう泣きてよめる」とあつて、次に「かきくらす心の闇に云々」の歌を擧げてある。上

にもしば〳〵論じた如く、勢語は古歌にさま〴〵の物語を附會したもので、この文など殊にその痕跡を顯はしてゐる。抑も齋宮はさる淫行ある場合には直に廢せられるのが、當時の例規であつた。業平時代の齋宮にさる事のあつた事は史書に見えない。よし又事實であつたとしても、勅撰の集には憚つて、書くべき筋のものでない。この詞書が勢語によつて書かれた後人の筆である事は必定である。行文もまたいと拙い。○おもほえず　覺えずといふにちかい。

大意　昨夜お逢ひ申したやうなが、貴方がお出で下されたか、たゞしは私が參つたか、あわたゞしくお別れ申したので、一向覺えませぬ、それにつけて思へば、お逢ひ申したも夢であつたか、正氣の事であつたか、眠つてゐる間の事であつたか、目の醒めて居る間の事であつたか、いづれやらとんと覺えませぬわ。

評　私はこんなですが貴君はどうですかと、うら問うたのである。初めて男に逢つた婦人の僞ない告白で、私はまるで夢中だつたといひ贈つたことは、貴君はもとより浮氣な方で、從來も多くの女に關係したでせうから、そんな事もありますまいが、といふ諷詆の餘意があるのである。こゝを聞かなくては生きた解ではない。「君や來し」が主であるのを、更に反對の意なる「我れや行きけむ」をいひ添へ、「夢か」が主であるのを、更に反對の意なる「うつゝか」をいひ添へ、なほ詞を換へて、「寢てか」といふに、「醒めてか」をいひ添へて、漸層法を用ひつつ、その兩端を叩いた表現に情味が活躍して、いはれぬ妙味が生ずる。況や、君や、我れやといひ、夢か、うつゝか、寢てか、さめてかとある疑問語の疊用、同語、同形語、同音の反復が、自然に諧調を成してゐる。三十一字七段に切りとゝのへられて、節短く音促り、とかうに惑つた情態がよく表現された。縱横の口吻、矯健蕩宕の筆路、殆んど婦人の作とは思はれない。

三句、古本業平集にはおぼつかなとある。

かへし　なりひらの朝臣

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつゝとは世人さだめよ

釋 ○心の闇　闇の夜は惑はれるものだから、心の惑ふをも聯想上から、心の闇と混喩にいつた。○世人　世間の人意の。

大意　まことに昨夜の事は、私も掻き暮れた心の闇に惑つてしまひました、それ故、夢か現か一向に覺えぬが、かうお互に知らぬからは、そのいづれであるかといふ事は、局外の世間の人が定めて呉れよ。

評 「夢か現か寢てか覺めてか」と、眞向から斬り掛けたる大太刀を、危く體をかはして、私も貴女と御同感で全く夢中でしたから、お尋ねに對してのお答へは出來ません。それは寧ろ局外者にきいて下さい、即ち「世人定めよ」と、餘所へ外らせた意表の辭令、その技凡ならずといつてよい。といつて、こんな事を本當に世人に話されては溜らない。「世人」とひろくいつたやうものゝ、實は相手の女一人をさしたものである。結句、六帖、伊勢物語にはこよひ定めよとある。意は聞え易いが、詩味は遠く劣る。

題しらず　よみ人しらず

ぬば玉の闇のうつゝは定かなる夢にいくらもまさらざりけり

釋 ○ぬば玉の　うばたまに同じい。闇にかゝる枕詞。物名「うばたまの夢に何かは」の條に既出。○闇のうつ

つ　闇の紛れなる或事實をいふ。

大意　闇夜の紛れに、ひそかに逢つた現の事は、これまで思寐に見たたしかな夢に比べると、何ほども增らなかつたわい。

評　暗夜を利して出會つた位だから、それははかない瞬間の契であつたらう。で思寐の「定かなる夢」に對比して、嬉しい逢瀨の現を、夢にすこし增し位の物ぞといひくたしたのは、頗る意表の語で、雋永の味がある。

六帖に、作者を敏行としてある。

○

さよふけてあまのと渡る月影にあかずも君を逢ひ見つるかな

釋　○さよ　夜をいふ。「さ」は美稱。○あまのと　天の門。空といふに同じい。委しくは秋上「秋風に聲をほにあげて」の條に既出。○君を逢ひ見つる　この「を」の用法は珍しい。然し誤ではなくて、當時に使用された一格と見たい。

大意　夜ふけて、大空を渡る月の光に、あらはに見ても〳〵見飽かずにまあ、逢ひ難い君を逢ひ見たことよ。

評　月下の會合から得た感懷である。上のは、闇夜に逢つてかひもないと歎き、これは、月夜に逢つて夜よしと悅んだ反對の意を以て序でた。三句の「に」を、の辭の誤だらうといふ宣長、景樹等の說は當らない。**六帖**に見える、

あしひきの山したとほる月影にあかずも人に逢ひ見つるかな

は、このやゝ變化したもので、月影にとある。意釋を尋ねて心得られたい。秋成が「月影には、月影の如くにの意なるべし」といつたのも牽强である。又、景樹、雅嘉が、「小夜ふけて」とあるので、曉月の趣に解きなしたのはいかゞ。秋上の、

小夜中と夜はふけぬらし雁が音の聞ゆる空に月わたる見ゆ

も中夜の景で、曉更の光景ではない。是等みな、上句を「飽かずも」にかゝる序とのみ心得ての誤である。

○

君が名もわが名も立てじ難波なるみつともいふなあひきともいはじ

釋　○難波なるみつ　難波の御津に、見つをかけた。難波の浦は、攝津職がおかれて、船舶の出入を管理した官津なので、御津といつた。○あひき　逢ひきに、網引を寄せた。

大意　貴方の名も私の名も、世に立てはしまいと思ひますわい、それ故、この難波には御津といふ所があり、又網引をするが、その名の如く、私を見たとも貴方は仰しやるな、私も貴方に逢つたともいひますまいわい。

評　狡童の奔女に誨へた語である。萬葉集に、

大宮のうちまで聞ゆ網引すと網子とゝのふる海人のよび聲（巻三）

吾がころも人にな著せそ網引する難波をとこの手にはふれゝど（巻四）

など見えて、難波は往時の都に近い漁業地とて、難波とさへいへば、御津と網引とは、直に聯想の出來る事柄であつた。でかういひ寄せたのである。「君が名も我が名も」と、又「みつともいふなあひきともいはじ」と、自

他の排偶が、上下に聯對された敍法は頗る齊整である。かう一再反覆する漸層法は、自然に丁寧有もせざる意趣を生じて、物の大事を取るが爲に、相互の祕密を口堅むべく、諄々と說いて已まぬ細心さが歴然としてゐる。よほど、神經質の作者と見える。いや餘程むつかしい間柄の戀であらう。

大津のみつとはいはじあかねさし照れる月夜にたゞに逢へりとも　（萬葉卷四）

を更に一層潤飾し加工したものである。

以下逢ひ見てのち忍ぶ戀である。

○

名取川せゞの埋木(ウモレギ)あらはればいかにせむとか逢ひ見そめけむ

釋　○名取川　本卷、上に既出。○せゞの埋木　瀨々の埋木。「埋木」は水土の中に埋れた材木をいふ。故に谷の埋木なども詠んである。景樹は、「瀨々に打ち捨てた古杭なとを指す」といつた。必ず今陸前地方の名產なる半化石した古代の遺木の稱とするのは當らない。河內の弓削川にも、埋木を詠んだものが萬葉集にある。

大意　名取川の瀨每にある埋木のやうに下に忍んで、上へは顯はさぬやうにはして居れども、若し世間へ露はれて、戀のうき名を取つたらば、その時はどうしようと思つてかゝ、かう逢つて馴染み初めた事であらうぞ。

評　意馬心猿の狂ひ疲れたる刹那、電光一閃、胸前を刺す理性の利刄に、覺えず身の毛いよ竪つた折の作であらう。社會と個人との葛藤衝突、これらの危險をも忘れたわが心を訝しむ間に、嗟歎の聲が自然と永くなつた。想ふに、作者は分別盛の男であらう。萬葉集卷十、

寸十板もてふける板目のあはざらばいかにせむとかわが宿そめけむ

が平安の風調に轉唱された際、初二句の序詞を萬葉集卷七の、

眞鉋もち弓削の川原の埋木のあらはるまじき事とあらなくに

の趣をうつし、しかも名取川に名の立つ事を籠めなどして、巧にして艶なのは全くこの時代の風調である。「いかにせむとか」の疑問、語調一段と強く、無限の意趣がこゝに生じて、一波、萬波を描くの姿態がある。定家卿は、この集秀歌十首の一とした。

六帖に、作者の名を貫之とある。

○

よしの河水の心ははやくとも瀧のおとには立てじとぞ思ふ

釋　○水の心　混喩にいつた。○はやくとも　逸るともの意。○おとには立てじ　素振には出すまいの意を喩へた。泣聲を立てまいと解しても聞えるが、「おと」に拘泥し過ぎてゐる。

大意　瀬の早い吉野川の水のやうに、自分の戀の心ははやるとも、その川の瀧の音を立てるやうに、素振には出しはすまいとサ思ふわ。

評　比興の作である。何處までも内證にして包まうといふ。いかに世間を憚る戀であるかゞ知られる。「立てじとぞ思ふ」と抑へたのであるが、それは端的の理性の閃きで、實行の如何を考慮においてない處に面白味がある。

戀の比喩に、山川の水をいふことは、既に萬葉集卷十二に、

山河の瀧にいやまさる戀すとぞ人知りにける間無くおもへば
足ひきの山川水のおとに出ず人の子ゆゑに戀ひ渡るかも
など見え、この集にも、「足引の山下水の木隱れて瀧つ心をせきぞかねつる」など、等類が頗る多い。殊に、
高山の岩本たぎち行く水のおとには立てじ戀ひて死ぬとも　（萬葉十一）
吉野川いはきりとほし行く水のおとには立てじ戀はしぬとも　（戀一）
などは同型で、畢竟山近い土地に住み馴れた奈良時代の人の遺想である。
打聽本には、四句瀧つおとにはとある。

○

戀しくばしたにを思へむらさきのねずりの衣色に出づなゆめ

釋 ○したにを思へ　「した」は心の内をいふ。「を」は強辭。○むらさきのねずりの衣　紫色を染めるに、紫草の根で、布帛に摺り著ける方法があつたと見える。其の色が映え〴〵しいので、「色に出づ」にかゝる序に用ひられた。昔の紫染は大抵は紫草の根の皮の汁を採つて染める。小野博いふ、「紫草、春分後種を下す。長じて苗高さ二尺許、葉は細長くして、旱蓮草の如く互生す。夏月白花開く。五出にして、大さ二三分ばかり、梅花に似たり。實は紅花の實に似て小し。熟して白色或は淡褐色を帶びて光あり。その根直にして深紫色」と。○ゆめ　萬葉集には、努、禁、勤などを訓ませてある。禁止の副詞。

大意 戀しく思ふなら、心の内でサ思つて居てくれい、紫の根摺の衣のやうに、色に出るなよ、人目に立つから、

急度よ。

評 片戀には戀ひ死んでも構はない者が、諸戀には永しへにこの甘露に醉ふべく、「色に出づな」と警戒した人情變轉の機微、味ふとひどく面白い。「したにを思へ」と、强辭を挿んだ命令法、「出づなゆめ」といひ重ねた禁止の語、相俟つて、大事を取つた老婆心切が想ひ遣られる。派出やかな紫の根摺の衣を着て、はかなげに見めいた人の、年嵩なる男の胸にかゝつて點頭く姿態は、そもどんなであつたらう。

初二句、六帖に思ふともしたにや逢はむとあるはわるい。

花すゝきほに出でてこひば名を惜み下ゆふ紐のむすぼほれつゝ

をのゝはるかぜ

釋 ○花すゝき　穗の出た薄をいふ。「ほに出でて」にかゝる序。○ほに出でて　秀に出ての意。表面に顯はすをいふ。○下ゆふ紐　下裳の紐をいふ。下に結ぶ物なれば、心のうちに結ほれる比喩で、「下ゆふ紐の」と序に用ひた。○むすぼほれ　結ばると同じい。

大意 花薄の穗に出るやうに、表へ顯はして戀ひ慕ふなら、名の立つことが惜しさに、衣の下に締める紐が下に結ばるやうに、心の内でばかり思つてゐて、氣が結ぼれ〳〵して、甚だ難儀である事よ。

評 「花薄」、「下結ふ紐の」の序詞、奈良時代から盛んに用ひられて、殆ど陳腐に近い。ましてや、これを一首中に併用したのは、なほこの感じが強く、又修飾に過ぎてこちたい。風調やゝ卑靡、當時武邊を以て、朝野に重きをなした作者の人柄に似ないといはうか。いや作者は寛猛幷び濟す人で、藤原保則傳に、

春風率二兵四百餘一、取二陸奥路一、入二上津野一、宣二諭恩詔一、賊徒悉降（中略）春風少在二邊塞一、能通二夷語一、脫レ甲釋レ兵、獨入二虜軍一、具宣二朝命一、於レ是夷虜大服、奉レ書乞レ降、云々。

とある。あゝこの寛裕仁恕は、卽ちこの和いだ心から出てくるのであつたと知られる。

橘の清樹が、しのびにあひしれりける女のもとよりおこせたりける

思ふどちひとり〳〵がこひ死なば誰れによそへて藤ごろもきむ

釋 ○橘の清樹が云々　橘の清樹の情婦の許から詠んでよこした歌との意。○ひとり〳〵が　いづれか一人がといふ程の意。一人毎にの意ではない。この說古事記傳に委しい。○藤ごろも　喪服をいふ。もとは、葛布にて製した粗服の稱。

大意　かう思ひ合つた同士の間に、貴方か私かの一人が、若し焦れ死をしませうなら、喪服を着ようにも、表立つた夫婦でないから、世間へは、身内の誰れが死んだので服を着ると、誰へかこつけて喪服は着ませうぞ。

評 餘計な取越苦勞をしたのに、婦人の情致が見えてをかしく、更に矯飾の浮辭ではない。といふは敵は本能寺にあるので、本意は、晴れた夫婦中になつてくれと、間接に迫つたのである。

かへし　　橘のきよき

なきこふる涙に袖のそぼちなばぬぎかへがてらよるこそは著め

大意　いはれる通り、若しいづれか戀ひ死んだ時は、悲しくて泣き慕ふ涙に、袖が甚く濡れようから、それを脱ぎ換へがてら、人の見ぬ夜の間サ、その喪服をば着ませうわサ。

評　戀歌の深意はそ知らぬ風にそらして、只對手の詞について、痴案を立てた。誠意のない奴である。

題しらず　　　　　　こまち

うつゝにはさもこそあらめ夢にさへ人目をもると見るが侘（ワビ）しさ

釋　○人目をもる　人目を憚り愼むをいふ。「もる」は守の意。

大意　互の逢瀬に人目を憚ることは、現にてはさうもサあらう、それは無理も無いが、夢にまでも、人目を憚ると見ることが難儀なことわ。

評　一途に思ひ迫つた婦人の情には、婉曲の辭樣を用ひる餘裕もなく、頗る露骨に流れた。戀二、敏行、住の江の岸による波よるさへや夢のかよひ路人めよくらむに比すれば、眞摯の點は或は勝るかも知れないが、含蓄の餘味は乏しい。四句、定家自筆本に人めをよくととある。この方が意が明晰である。結句、諸本見るが佗しきとある。

○

かぎりなき思のまゝによるもこむ夢路をさへに人はとがめじ

釋　○こむ　行かむの意。かゝる例は常に多い。

大意　限り無い胸の思にまかせて、夜も夢に往つて逢はう、現に通ふは格別の事、夢に通ふ路をまで、人は咎めはすまいわ。

評　晝の間往つたけれど、人目に支へられて、逢へずに戻つたらしい。この趣が一首のうへに反映してゐる。據なくはかない夢路をすら、唯一の賴み處として、逢はうと思ひ入つた情熱は同情に値する。宣長、景樹等が、夢にもといふべきを、下に「夢路」とある故に、詞を換へて、「よるも」といつたやうに釋いたのはわるい。「夜」もは晝も來たのに對しての辭樣である。

又思ふに、當時の習慣として、普通は男の方から女の許に通つてゐた。されば、この歌は婦人の作としてはふさはしくないやうである。必ず作者を小町とするなら、三句の「こむ」はこよの誤ではあるまいか。

二句、顯昭祕註には思のまにまとあり、下句、六帖に夢路をさへや人の咎めむとある。

○

夢路には足もやすめず通へどもうつゝに一目見しごとはあらず

釋　○一目見し　一寸見たといふに近い。○ごとは　如くはの意。

大意　夢の路には、足も休めず精出して通つて、度々逢ふと見るけれども、やはり本當に、嘗て一目逢つたやうにはいかないわ。

評　嗚呼夢ではつまらないの餘意がある。けれど、今は夢を賴むより外に、すべのない逢瀬なのだから情けない。表現の率直なのが却つてよい。結句は見し事はあらずの意にしても解されるが、この部立、皆逢つてのうへの

戀であるから、如はの意に從ふがよい。

六帖に、二句足もやすまずとある。又、四句うつゝにひとりとあるは殊にわるい。

よみ人しらず

思へども人目づつみの高ければかはと見ながらえこそ渡らね

釋　○人目つゝみ　人目を愼(ツヽ)むに、堤をかけた。○かは　彼(カ)はに、川を寄せた。

大意　堤が高いので、それは川と見ながらも、渡りかねるやうに、戀しく思ふ人を見ては、あゝ彼れはと思ひながらも、人目をつゝむ心が大方ならぬによつて、逢ひたく思ひながらも、ようサ逢はぬわ。

評　意中の人を間近く見ながら、人目を憚る場合には、他人顏をして逢ふことも出來ない、その苦惱をうち出した。「人目づつみ」は、奈良時代には絶無の造語で、この頃に刱まつたらしい。註者、萬葉集卷八なる、

妹がりと吾が行く道の河なれば附固緘結跡夜ぞ更けにける

の四句を、人目つゝみと訓んで、この先例としたのは誤である。又、「かは」の弄語と譬喩とは、後撰集、戀二、

かはと見て渡らぬ中にながるゝはいはで物おもふ涙なりけり

大和物語にも、

古里をかはと見つゝも渡るかな淵瀬ありとはうべもいひけり

など例は多いが、それらは時代が後れるから、恐らくはこれを學んだものだらう。なほ後撰の詞書を見ると、「おなじ所にて見交しながら、え逢はざりける女に」とある。全くこれと同一の事情であるのを見ると、いよく

この歌から生まれたものであることが諸かれる。

たぎつ瀬のはやき心を何しかも人目づつみのせきとゞむらむ

○

釋 ○はやき心を　はやき心なるものをの意。瀬の早きに、心の逸るを寄せた。○人目づつみ　人目を包むに、堤をかけた。

大意 たぎり落ちる川瀬のやうに、逸る胸の思であるものを、何故かまあ、堤の水を堰きとめるやうに、人目を包むばかりに、怺へ忍んで居る事であらうぞ。

評 早瀬の水は、堤を築いて堰けども堰かれぬものなので、託して以て、わがこの一方ならぬ熱愛の、世間の制裁位の事に憚るは何ぞともどかしがつた。この衝突この苦悶、これ戀愛に於ける第一活劇である。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　きのとものり

くれなゐの色にはいでじ隠れ沼のしたに通ひて戀ひはしぬとも

釋 ○くれなゐの　「色には出でじ」にかゝる序。委しくは、戀一、「人知れず思へばくるし」の條に既出。○隠れ沼の　草などうへに茂つて、水の下に湛つた沼をいふ。故に「したに通ひて」にかゝる序とした。

大意 紅のやうな、人目に立つ色には出しはすまいわ、隠れ沼の水の下に通ふやうに、心の中にのみ思つて、戀ひ慕ひはするとてもサ。

評　戀緒百端、すべて心に呑む。萬葉集卷四、
いふことのかしこき國ぞ紅のいろにな出でそ思ひ死ぬとも
などの類型で、自他の差がある。友則の作としては可なりのものだが、萬葉のに比すれば遙かに下つてゐる。しかも序詞の重疊は煩はしい。

題しらず　　　　　　　　　　　みつね

冬の池に住むにほ鳥のつれもなくそこに通ふと人に知らすな

釋　○冬の池に住むにほ鳥の　にほ鳥は鸊鷉（カイツムリ）のこと。鳰の字をも塡てる。鴨より小さく、小鴨よりは大きい、俗にむぐりといふ鳥で、常に水に出沒し、藻木葉などを集めて、水上に巣を浮べ作る。冬の池は、氷の張るにもかかはらず、鳰鳥はその水底に潛き入るので、「つれもなくそこに通ふ」にかゝる序に用ひた。○つれもなく　知らず顏、或は口語の平氣などいふ意に當る。○そこ　底に、人代名詞の其許（ソコ）を寄せた。

大意　冬の池に住む鳰鳥は、氷を潛つて、水底を通ふによつて、うはべには見えぬやうに、私がそこ許に通ふといふことを、何氣なく知らぬ顏して、人に知らせるなよ。

評　これも奔女に誨へた語で、上なる、
君が名もわが名も立てじ難波なるみつともいふなあひきともいはじ
こひしくは下にを思へむらさきの根摺のころも色にいづなゆめ
の儔である。「難波なるみつ」と、「紫の根摺の衣」とは、殆ど伯仲の間にあつて、氣格はこれが最も下つてゐる。

鳰は鴨などの類と異なり、常に居る物なのを、取り立てゝ「冬の池の」といつたのは、その氷つてゐることを聞かせる爲である。

後撰集冬に再出して、四句下に通はむとある。家集にもさうある。六帖には、氷の部に出て、下句氷の下をわれは通はむとある。又後撰には、作者不詳の歌である。

〇

さゝの葉におく初霜の夜を寒みしみはつくとも色に出でめや

釋 〇しみはつく　氷り付くをいふ。氷ることを、しむといふこと、今も方言に遺つてゐる。さて染み付くを寄せた。

大意 笹の葉におく初霜が、夜の寒い爲に氷み付くとても、笹の葉が他の草木のやうに色に出ようかまあ、色に出はすまい、それと同じ事、自分の戀も、染み付くやうに貴方の事を思ふとても、氣色に顯はさう事か、いや如何なる事情の下にも、氣色に顯はす事では無いわ。

評 夜衾氷の如く冷たく、懊惱として夢もむすばれぬ朝、庭上を見やれば、細竹は眞白に霜にまみれてゐる。覺えずそれに感觸して、「色に出でめや」と獨言つた、諷託の作である。

二三の句、六帖に、おきゐる霜の寒ければとあり、又家集には、二句おく白露のとある。

よみ人しらず

山科の音羽の山のおとにだに人のしるべくわが戀ひめかも

この歌、ある人「あふみのうねべの」となむ申す。

釋 ○山科の音羽の山　山城の今の清水寺のある山。戀一「音羽山おとに聞きつゝ」の條に既出。○おとに　風聞に、噂になどの意。○かも　やもと同じい。反動辭。

大意　このやうに忍ぶ中を、山科の音羽山の音といふやうに、風聞にも人の聞いて知りさうには、現はれて戀ひ慕はうかまあ、いやさうは戀ひ慕はぬ、ごく內々に忍んで戀ふるわ。

評　されば、事の露顯に及ぶ氣遣ひないから、御安心下さいの餘意がある。恐らくは返歌であらう。卷末、墨滅の歌の部に、あめの御門の、近江の采女に給へる「犬上の床の山なるいさや川云々」の歌のかへしとて、この歌を擧げてある。近江の采女とあるは、近江より貢した采女であらう。あめの御門は聖武天皇の事と見られてある。けれど、この歌の辭樣用語を察すると、更にその頃のものでない。初二句の「おと」の二音を反覆した序の體は、奈良時代まではなかつた。その時には、吹風のおと、行水のおと、鳴神のおとなど、直にいひ續けた。結句の「めかも」も平安朝になつての新語である。左註は、墨滅の詞書によつての書き入れと思はれる。二句、墨滅には音羽の瀧のとある。これは優つてゐるやうである。

きよはらのふかやぶ

みつ汐の流れひるまを逢ひ難みみるめの浦によるをこそ待て

釋 ○みつ汐の流れひるま　滿潮の水の流れて干るといふに、晝間をかけた。○みるめの浦に　浦に海松布の寄ると續けた。みるめの浦といふ地名があるのではない。さて、海松布に、見る目をかけた。○よる　寄るに、夜

をかけた。

大意　滿潮の水の流れて干るといふその晝間はサ、人目に障へられて逢ひ難いので、海松布が汐に連れて浦へ寄るといふその夜をサ、逢ひ見たさに自分は待つわ。

評　緣語の鎖り續け、いひ掛けの多さ、實に厭はしい。たゞ小手の利いたのを見るだけだ。

うらみても汐のひるまはなぐさめつ袂に波のよるいかにせむ　（續後拾遺集）

これもこの作者ので、模型が同じである。清少納言の曾祖、元輔の祖父としてこれでは困る。躬恒集に齋宮屏風の歌、

あつさ弓いるまとかたにみつ汐のひるあひがたみよるをこそ待て

似たやうな修辭で、この頃流行つたものである。

二句、六帖にひるまもとある。

平貞文

白川のしらずともいはじ底清みながれて世々にすまむと思へば

釋　○白川　山城國愛宕郡にある。志賀山越の溪間から發して、南流して末は鴨川に合する。○ながれて　流れてに、存在てをかけた。存在ては、ながらへての約。○世々に　歲月の長さをいふ轉義。一世二世の意ではない。○すまむ　澄まむに、住まむをかけた。この住むは、男が女の許に住みつくをいふ。

大意　一人の中を、若し人が問はば、一向そのやうの事は、白川の名のやうに知らぬともいひはすまいわ、その

譯は、その白川の水底の清さに、流れて何時までも水の清むやうに、私は心きれいに眞實にかねての詞の通り、長らへて世と共に相變らず、貴女と一緒に住まうと思へばサ。

評「底清み」は心の誠あるを喩へたので、あの人と末始終添ひ遂げようと思へば、人に問はれても打ち明けて隱すまいと、さも思ひ入つたらしい戀である。「底清み」など自讃してゐる點や全體の趣からいふと、機會のあり次第二人の仲を表向にしようではありませんかの意をほのめかして、女の許にいひやつたものらしい。

初句、一本にしら浪のとあるは采らない。

とものり

したにのみ戀ふればくるし玉の緒のたえて亂れむ人な咎めそ

釋 ○玉の緒の　玉の緒の如くの意。○たえて亂れむ　玉の緒が絶えると玉が亂れるのを喩へた。「たえて」はひたぶるに、一向になどいふ意。「亂れむ」は放蕩れむの意で、實の反對。

大意　心のうちにばかり戀うて居れば、ひどく苦しいわ、これではかなはぬ程に、いつその事打ち出して、玉の緒の切れて玉が亂れるやうに、一向に戀に亂れようと思ふ、必ず誰れも人は咎めて下さるなよ。

評　姿詞、大やう、戀一の、

人しれず思へば苦しくれなゐの末つむ花のいろに出でなむ

と同じやうで、堪へに堪へ、怺へに怺へた餘りに破裂した情熱である。但これは、既に逢ふ瀬を經ての戀だから、事態がやゝ殊つてゐる。萬葉集巻十一、

いきの緒に思へば苦し玉の緒のたえて亂れな知らば知るとも
に至つては、字句に二三の出入こそあれ、全くこの同意同型である。剽竊の謗は梨壺の歌人友則でものがれる事は出來ないものか。次の歌も萬葉に淵源した形迹があるから、作者は多分萬葉に枕藉したものであらう。

二句、六帖に思へば苦しとある。

○

わが戀をしのびかねてば足引の山たちばなの色に出ぬべし

釋 ○足引の　山にかゝる枕詞。○山たちばな　藪柑子をいふ。冬その實が赤く色づく。本草和名に「牡丹　也末多知波奈」とあるはいかゞ。

大意 自分の戀の思を、今まではこそは、とかくして忍び隱して居れ、これから先、どうも堪へられなくならば、山橘の實の色に出るやうに、人目にかゝる位に、氣色に顯はれてしまひさうなわ。

評 山橘を詩材とすること、夙く奈良時代に行はれ、殊に、

足引の山橘のいろに出でて語らばつぎてあふ事もあらむ　（萬葉卷四）

足引の山橘のいろに出でて吾が戀ひなむをやめがたくすな　（同卷十一）

の如き、同想の序である。しかく、修辭の一部に萬葉の精粹を藏つてはゐるが、著想におのづから特異の點が認められ、平凡のうちに、大きな眞摯の情が籠つてゐる。一氣呵成にいひおろして、調に弛緩のないのも宜しい。

二句の終りの「ば」文字は清んでも、その意が聞える。

大方はわが名も湊漕ぎ出なむ世をうみべたにみるめすくなし　よみ人しらず

釋 ○大方は　大抵ならばといふ意に近い。七八までそれとして許すをいふ。○世をうみべたに　世を憂といふに、海べたをかけた。倦みにかけたのではない。「海べた」は海端の轉。海濱をいふ。

大意 磯端は海松布が少なさに、舟を湊から沖へ漕ぎ出して、存分に海松布を刈るやうに、大抵ならば、自分の名も、世間に立てゝしまはうわ、隱し忍ぶ中は、思ふやうに度々逢はれぬが、如何にも憂い事であるによつて、いつそ顯はしたらば、却つて思ふまゝに逢ひ見る事が出來ようと思へばサ。

評 ふと聞いたばかりでは、上句が意味を成さない。下句の說明を見るに及んで、はじめて轉義よりきた譬喩であることを曉る。素性集、

　たよりなくなき名は沖にこぎ出なむよるべたもとにみるかひもなし

は、この等類だらう。いづれもいやな彫琢である。

下句、六帖に人をみるめをおきにこそかれとある。

平のさだぶん

枕よりまた知る人もなきこひを涙せきあへずもらしつるかな

釋 ○枕より　枕より外にの意。○こひを　戀なるものをの意。

大意 逢つた夜の枕より外に、又と知る人も無い戀であるものを、思に堪へかねて、つい涙を堰き止めおほせずこぼして、自分の戀を洩らしてのけた事よ。

評 知らず〳〵こぼれる戀の感傷の涙は、物や思ふと人に怪まれたら、ほんにどうならうぞ、危い事かなと、みづから悚然とした趣が見える。戀を枕が知ることは、下にも「知るといへば枕だにせでねしものを」などあつて、夙くから、普くいひならはした諺であつたらしい。必ず戀一の、

わが戀は人しるらめやしきたへの枕のみこそ知らば知るらめ

を本歌と定めるのは泥んではしまいか。歌は戀の實情があらはれてをかしいが、大したものではない。

風ふけば浪うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり

よみ人しらず

此歌は、ある人のいはく、「柿本の人まろがなり」。

釋 ○松なれや 「や」は歎辭。○ねにあらはれて云々 根に音をかけて、「顯はれて」といつた。「音に顯はれて」は、聲に立てるをいふ。

大意 風が吹くと、浪打ち寄せる岸の松は、波に洗ひさらされて、根が顯はれる物だが、自分の戀は丁度その松であることよ、實にその根の顯はれるといふやうに、音に顯はれて、ひどく泣きもしさうなわい。

評 「松なれや」の隱喩、「秋の野におくしら露は玉なれや」、「伊せの海に釣する海士のうけなれや」、「うき草のうへは茂れる淵なれや」、「わが戀は深山がくれの草なれや」の類、上にも數多散見して、面白い辭樣と思はれた

が、これは四句の秀句がなまじひに細砕に過ぎて、感興の自然を害つてゐる。却つて六帖の、

風ふけば浪うつ岸のそなれ松ねにあらはれて泣きぬべらなり

又同、みつねの歌に、

五月雨の玉にぬく日のあやめ草ねにあらはれて泣きぬべらなり

などあるが如く、上句を普通の序詞に仕立てた方が優りさうである。

左註は勿論信ぜられない。六帖にも人麿の作としたが、「べらなり」の語が、奈良時代のものでないことは、夙く春上「春のきる霞の衣ぬきを薄み」の條に說明した。

○

池にすむ名ををし鳥の水を淺み隱るとすれどあらはれにけり

釋 ○名ををし鳥の　名を惜むに、鴛鴦(ヲシ)をかけた。

大意 あの池に住む、名がサ惜しいといふ名の鴛鴦が、池の水が淺いので、水底へ隱れるとはするが、顯はれてしまつたわい、その如く、自分の戀も憂き名の立つが惜しいので、隨分と隱れ忍ぶとはするが、顯はれて人が知つたわい。

評 庭前の池に鴛鴦の出沒するのを見て發した感興で、論語の「隱したるよりあらはるゝはなし」に表裏してゐるだけ、歌らしい氣分にはなつてゐるが、比喩がやゝ不完全である。「名ををし」の秀句が、夙く諷託の本意をいひ顯はした爲だらう。

○

逢ふことは玉の緒ばかり名の立つは吉野の川の瀧つ瀬のごと

釋 ○玉の緒ばかり　少しの間ほどの意。玉の緒のこと、戀二「死ぬる命いきもやすると」の歌の條に既出。

大意　自分達二人の中は、逢ふ事は、丁度玉の緒位のわづかな事で、その噂憂き名の立つことは、吉野川の瀧の音の高いやうで、世間へ響き渡つて、それは〳〵喧ましい事よ。

評 さても制のわるいあぢきない戀よの餘意が、上下の應接によつて生ずる。兩極端の反對してゐる現象を、ただ具體的の譬喩を以て排對した外に、何等の言葉をも挿まぬは、この簡古の妙を具へる所以で、又情味永く、風韻の高い所以である。萬葉集卷十四、

さぬらくは玉の緒ばかり戀ふらくはふじの高根の鳴澤のごと

は同想の先型である。抑も彼れを點化して詠んだものか。それともこの時代調に、彼れの轉訛して傳はつたものか。修辭表現の完全した點からいへば、吉野の瀧つ瀬の方が、富士の鳴澤に勝つてゐる。

○

むら鳥の立ちにしわが名今更にことなしぶともしるしあらめや

釋 ○むら鳥の　むら鳥は群鳥(ムレトリ)の轉。その飛び立つ光景の目につくより、「立ち」にかゝる序とした。○ことなしぶ　事無しと振(フル)の意。「ぶ」は形容の接尾語。

大意　群鳥の立つやうに、世間に一度立つてしまつた自分の戀のうき名は、今改めてそ知らぬ風をしたとて、その甲斐があらう事か、いやありはすまいわ。

評　取り返しのつかぬ以上は、まゝよ事實を事實として、寧ろ遠慮もなしに逢はうと、決心の臍を固めた。この捨鉢的な態度に、その抑へ切れぬ熱情がほとばしる。

二句、打聽本には立ちぬるとある。

○

君によりわが名は花に春がすみ野にも山にも立ちみちにけり

大意　貴方故に、自分のうき名は、花にかゝるこの節の春霞が、野にも山にも一面に立つやうに、世に遍く立つてしまつたわい。

評　誘つた水を怨んだ落花の述懷であらう。うき名の立つにつけて、流石に女の小さい胸には、戀の甘い露に醉ひながらも、一面には空おそろしく感じたのである。「花に春霞」は、眼前の景物を序に用ひたので、世に遍くの意を、霞の縁で、「野にも山にも」と轉義した。「花に」は對手の人を擬へたとする契沖、眞淵の說はやゝ鑿に過ぎはしまいか。二句は碎けて、敍法が明快でない。

初二句、六帖に君が名もわが名もおなじとある。

知るといへば枕だにせで寢しものを塵ならぬ名の空に立つらむ　伊勢

釋　○空に立つ　パッと高く立つをいふ。

大意　「いかに包んだ思でも、枕は知る」と諺にいへば、その枕さへせずに寢たものを、どうして人が知つて、塵こそ空に立つが、その塵でも無いうき名が、かう高く立つことであらうぞ。

評　假令そんな諺があつたとて、落ち着いて寢るのに、枕をしないこともなからう。これはほんの手枕ばかりの假寢を、わざと枕を取らず寢たやうに假託したのである。かうして塵ならぬ名の空に立つを訴る素地を作つたのである。さて、使はぬ枕には塵の置くことは、夙くからいひ來り詠み來つてゐるので、忽ち塵を聯想して、その緣によつて、名の高く立つことを、「空に立つ」と轉義した。修辭が纖細巧緻で、調が流滑なのは、この作者の特技である。又いふ、「空に」の語に拘泥して、なき名の立つことゝ解してはわるい。この篇次、皆その實があつて顯はれた戀である。

古今和歌集卷第十四

戀歌四

題しらず　　　　　　　　　　　　よみ人知らず

みちのくのあさかの沼の花かつみかつみる人に戀ひや渡らむ

釋 ○みちのくの云々　「あさかの沼」は今の岩代の國安積郡にある沼。古へは今の福島縣以北はすべて、「みちのく」といつた。道の奥の義。東海東北兩道の道のゆきどまりだからいふ。○花かつみ　何物とも定かでない。能因が歌枕に「かつみは菰をいふ。菰花を花かつみといふか」とある。契沖、榊原玄輔、土肥經平、屋代弘賢、伊勢貞丈、喜多村節信、山本明清、井上文雄、近藤芳樹等皆これに從つた。六帖に、菰の次に、かつみの題を立てゝあるから別物のやうだが、ぬなはに次いでねぬなはを載せた類で、畢竟同物だらうと契沖はいつた。東雅、物類稱呼に陸奥の方言とあるは、萬葉集に陸奥でなくても詠んであるのを知らないからである。田字草といふ說は荷田東滿に起つて、眞淵、狛諸成等も主張したが、伊勢貞丈は同名異物と斷じた。楫取魚彥、加藤千蔭は、陸奥で今菖蒲に似て花の四片なのを、かつみといつてゐる、それが眞の物だらうといつたのに、谷川士清、石川雅望は從つてゐる。橘守部は、芺（ミヅフフキ）だらうといつたが、餘り僻してゐるらしい。本草啓蒙に、菰米を充

て、あるが、それは蒹葭の類で、花とはいはれない。淩蓁といふ說もあるが、あれは深い沼には生えない。無名抄、奥儀抄などに、蘆の花とあるが、夙く、顯昭は聞えぬ說と難じてゐる。上田秋成は參河美濃などに、かつみと呼ぶ物がある。菰の類であるといつた。なほ諸說紛々として決しないが、煩はしいからあとは省く。〇かつみる　はつ〳〵に見るの意。「見る」は男女相逢ふをいふ。「かつ」は苟且の意。

大意　陸奥の安積の沼の花かつみの名の、かつみといふやうに、かつ〴〵に一寸逢つたばかりの人なのに、心に戀しく思つて、永く月日を經てることであらうか。

評　かりそめの契に捧げたわが生涯を豫想して、打ち歎いた。上句は同音を疊みかけた序で、爲にかつみるの意が強く印象されて、おのづから「戀や渡らむ」と、時間上の對映を生ずる。この語勢によつて、「人に」が、人なるにの意に聞えてくる。

下句、六帖にかつみる人の戀しきやなぞとある。

以下九首、逢ひ見て後の戀をあげた。

〇

逢ひ見ずば戀しき事もなからまし音（オト）にぞ人を聞くべかりける

大意　一度も逢つた事が無いならば、このやうに戀しい事もありますまいわ、されば、逢ふことなどせずに、只よその事の風聞にばかりサ、あの人の事を聞いて居るべき事であつたわい。

評　なまじ逢つたが爲に、枕より跡より、戀の奴が攫みかゝつて、何とも仕樣がないので、却つて噂にばかり聞

いてゐた逢はぬ昔がましだと回顧した。後の物だが、敦忠の中納言の「あひ見ての後の心にくらぶれば昔は物を」と詠んだのと、その情況を同じうするものである。さりとて、實に昔を今にしたいと希つたのではない。現在の苦境にたまりかねた呻吟の聲なのである。逢ひ見ると昔に聞くとを對比して、本末好惡顚倒の言をなした處に詩味がある。

つらゆき

いそのかみふるの中道なかなかに見ずば戀しと思はましやは

釋 ○いそのかみふるの中道　大和の山邊郡石上(イソノカミ)の布留(フル)の中にある道をいふ。美濃の中山、佐夜の中山、鈴鹿ふるの中道などの類である。○なかなかに　却つて。

大意　石上の布留の中道の名の、なかといふやうに、なかなか却つて、一度も逢つた事が無いならば、このやうに戀しいとは思はうか、いや思ひはすまいわ。

評　上の歌の上句の意に、初二句の序をつけた形である。逢ひ得ずに人を思ふのは、もとより戀しいに定まつたことを、なかなかに戀しと思ふまいといつた反興、以て今の愛慕の情の切なさが見られる。上のもこれも、業平の「世の中にたえて櫻のなかりせば」と同一の心理狀態から出てゐる。例の同音の反復もあり、かたがた語々流暢に諧つてゐる。

藤原たゞゆき

君といへば見まれ見ずまれふじの根の珍しげなくもゆるわが戀

釋 ○見まれ見ずまれ　見るにもあれ見ずにもあれの約。○ふじの根　根は嶺（ミネ）の上略。○珍しげなくもゆる　當時の富士山は常に噴烟して居たからいふ。○わが戀　戀に火をいひかけた。

大意　富士の山の燃えるのは、常住の事で珍しげも無いが、貴方の事とさいへば、逢ふにつけ逢はぬにつけ、何時も富士の山の燃えるやうに燃える、私の戀の火であることよ。

評 見るに慰み、見ぬに燃えるといふのは、戀の常態なのを、我が胸のはしり火は、そんな差別がないと、常に烟火の絶えぬ富士の山を例に引いて、水平以上に熱狂した情懐を敍べた。初句は面白い。君故はなどいふ力弱い調べと違ひ、しかも、字餘りときてゐるので、「君」といふことが、絶對に重く點出されてゐる。且二句の語法が短截なのに、結句を體言で止めたので、全首の語調がおのづから勁健である。「君」と「我が」との對照の如き、卒にその用意不用意が斷ぜられない。

友則集に入つてあるのには、初句君てへば、結句もゆるわが身をとある。

伊　勢

夢にだも見ゆとは見えじ朝な〳〵わが面影にはづる身なれば

釋 ○夢にだも　「だも」はだにもの略。○見ゆとは見えじ　かの人に、わが目見（マ）ゆとは見られじの意。

大意　思ふ人には、現には勿論夢にさへ、此方から逢ふとは見られますまいわ、毎朝鏡に向ふにも、甚くやつれた自分の面影に、恥かしくたまらぬ身であればさ。

評 鏡に對つて、寢くたれ髪を取り上げるのは、女の身嗜みだから、朝な〳〵の面影は、鏡の影であることは勿

論である。一度逢つてから思に痩せ細つて、容色の衰へが目立つので、今更男に會ふ事を羞ぢるその心根のいぢらしさ、神經質な婦人の特質を現はしてゐる。「みえじ」の決心を強くいふとて、現在を夢にまで延長した。「夢にだも」と誇張して、夢は心にも任せぬものであることを忘れた狂痴の想が面白い。一說に、たゞ容貌の醜いを羞ぢる意と解したのは、こゝの部立に協はない。逢つて後色衰へた顏と見るがよい。

初句、六帖に夢にてもとある。

石間ゆく水の白波立ちかへりかくこそは見めあかずもあるかな

よみ人しらず

釋 ○石間　眞淵は「イシマと訓むべからず、イハマと訓むが古語なり」といひ、景樹は人丸集に證を引いて「この頃は、イシマの語ありしならむ」といつた。○水のしら波　水の色の白く立つ波をいふ。水の白しに白波をよせた。

大意 山川の石の間を流れて行く水の、白い波の立ち返るやうに、何遍も立ち戻つて來て、この通りにサ逢はうわ、いくら逢つても〳〵見飽きの無いことよ。

評 「立ち返りかくこそは見め」とは、常に逢ひ見むといふことを婉曲にいつたのである。上句の序、敍景がおもしろい。「水の白波」は元久時代の歌人達に喜ばれた語である。結句が惜しいことに甚だ率易である。

○

伊勢のあまの朝な夕なにかづくてふみるめに人を飽くよしもがな

釋　○朝な夕な　宣長いふ「『な』は、何にまれ飯に添へて食ふ物をいふ稱にて、魚菜を通じていふ。轉じては單に朝夕の意にも用ゐる」と。又齋藤彥麿の說に「朝な夕なのなを魚菜の事といへるは、萬葉集の借字書きより誤を傳へたるなり。朝の間夕の間といふ事にて、之間(ノマ)の約はななり。よな〱は夜之間(ヨノマ)〱にて、晝を晝間といふに同じ。夜をよはといふも夜の間の義なり。夜半と書くはもとより借字なり」と。○かづくてふ　潛くといふの約。「潛く」は波にもぐることであるが、こゝは潛いて獲物を取るにいふ。○みるめ　海松布(ミルメ)に、見る目をかけた。

大意　伊勢の海の海士が、朝夕の食物に潛き上げるといふ海松布(ミルメ)のやうに、思ふ人を逢ひ見ることに、飽き足る仕方があつてほしい事よ。

評　上句の序は、萬葉集卷十一、

伊勢のあまの朝魚(ナ)夕菜(ナ)にかづくちふ鰒の貝の片思にして

を、全く襲つたものである。「みるめ」のいひかけを以て序としたのは、おのづから奈良時代とこの時代との風調の相違を示してゐる。四句、人をみるめにといひ下すべきを、調のうへから倒裝して諧へた。「朝な夕な」は、萬葉に朝魚夕菜の字を充てた如く、必ず朝食夕食の菜料に潛くことゝするがよい。輕く朝夕の意に見ては、この結構の旨趣に協はぬかと思ふ。作者は京人で、伊勢の海にはそんな事があると聞き及んだまゝに、「潛くてふ」と餘所〱しい表現をした。

初句、六帖に伊勢の海のとある。

友則

はる霞たなびく山のさくら花見れどもあかぬ君にもあるかな

大意　長閑な春霞のなびく、山の櫻の花のやうに、見ても逢つても、飽かぬあの方でまあある事よ。

評　思ふ人を花に擬へたのは、世辭か慾目か。花顏といひ、花想レ容といひ、似レ君花發兩三枝ともいつて、漢詩にも例が多い。景樹が、春霞を重く見て、「霞の隱せる山の櫻はさやかならぬ物なれば、見れどもあかぬの序とせり」といつたのはわるい。たゞ春山の花は景氣が面白くて、見飽かれない趣とするがよい。この事は既に春下、「はる霞たなびく山のさくら花」の條に論じておいた。

ふかやぶ

心をぞわりなきものとおもひぬる見るものからや戀しかるべき

釋　○わりなき　道理(スヂ)の無いの意。○ものからや　「から」は乍(ナガラ)の意。「や」は反動辭。

大意　この心をサ、道理ない物と思ひ定めたわ、一體逢つて居ながら戀しからうか、いや戀しい筈が無い、然るにかう戀しい故にサ。

評　募る戀のあこがれに、われとわが心に愛想を盡かした趣である。「もの」の語無意味に重複してゐる。後撰集戀一、

戀のごとわりなき物はなかりけりかつむつれつゝかつぞ戀しき

はこれと同意で、敍述はなだらかだが、語調平靜に過ぎて、これに比するとやゝ情熱の活躍を缺いてゐるやうだ。

かれはてむのちをば知らで夏草の深くも人のおもほゆるかな　凡河内みつね

釋 ○かれはてむ　「かれ」は草木の枯るに、人の離るを寄せた。

大意　夏草は今こそ茂りが深いが、時が來れば枯れる物であるやうに、追付け見捨てゝ遠退いてしまふ先の事をば知らずに、さし當つてはその夏草の深いやうに、深くもその人の事が思はれる事よ。

評 「夏草の」は「深く」の序ながら、上に「枯れはてむ」と緣語をおいて、ことわりを合はせてあるから、おのづから、比興の體を成してゐる。四句の「も」、及び「の」辭の應接、聲響がことに和諧に覺える。六帖に、二句ことをば知らで、結句人をたのみける哉とある。

飛鳥川ふちは瀨になる世なりとも思ひそめてむ人は忘れじ　よみ人しらず

釋 ○飛鳥川　大和國高市郡にある。明日香川とも書く。冬部「昨日といひけふと暮して」の條に既出。

大意　假令飛鳥川の深い淵が、淺い瀨になる世の中であるとも、自分は一度深く思ひ染めたであらう人をば、何時までも忘れはすまいわ。

評 飛鳥川に淵瀨の變ることをいふは、奈良時代には一向無かつた。そのこれあるは、本集雜下、世の中は何かつねなるあすか川きのふの淵ぞけふは瀨になる
にはじまる。この歌もそれを本據として、常住の物がない世といふことを、飛鳥川を引いて具象的に敍した。「忘れじ」は卽ち變らぬのである。よつて上句に對映を生じてくる。强い貞操觀を歌つたなつかしい愛の歌である。又思ふに、四句は「思ひそめてし」といつた方が切實で、感哀が深くはなからうか。

寛平の御時后宮の歌合の歌

思ふてふ言の葉のみや秋をへて色もかはらぬ物にはあるらむ

釋 ○秋をへて 飽きを寄せたとする說もあるが穩やかでない。

大意 すべて草木の葉は、秋は色の變る物であるが、私が貴方を思ふといふ言の葉に限つてサ、秋を越しても、色の變らぬ物ではあらうか。

評 草木の葉に對映させた言の葉の混喩、尋常のことで、さのみ奇とするにも足らない。續後撰集に、昌泰四年八月十五日夜歌合の歌に、よみ人しらず、
おしなべてうつろふ秋もあはれてふ言の葉のみぞかはらざりける
時代も餘り隔らず、おなじやうに歌合の歌なのに、かほどに似てるるのはいぶかしい。

題しらず

さむしろにころも片敷きこよひもやわれをまつらむ宇治のはし姫

又は宇治の玉姫

【釋】○さむしろ　狹莚。延喜式に、廣席、長席、狹席とあつて、狹い短い莚をいふが、なほ思ふに、こゝの「さ」は輕く見て、接頭語としても更に差はない。○衣片敷き　獨寢の丸寢をすれば、衣の片敷かれるのをいふ。○宇治のはし姫　「宇治」は山城國宇治郡。「橋姫」は山姫、市姫の類で、橋を守る神を橋姫といつたものか。今も宇治の橋本に姫大明神といつてある。然し眞淵が「萬葉にはしき妻、はしき妹など詠める、はしきを略きて、はし姫といへるなり。はしきは精(クハ)しきにて、よき事をいふ」といつた如く、愛姫(ハシヒメ)がもとで、橋姫はその附會かも知れない。秋成は眞淵說を强言だと論じた。

【大意】寢莚の上に、着物を片敷いて片寢をして、今宵も多分、自分を待つてゐるであらうか、あの宇治のはし姫がサ。

【評】はし姫は、宇治の里なる寵妻をさしたとしたい。平安の京から宇治は、僅に四里强の道程だから、京紳の別業を營み、或は忍び妻など据ゑた例は頗る多い。源氏物語にも、薰大將が、こゝに隱れ住ませ給ひし八宮の大姫君を思つて、京から通はれた事が出てゐる。想ふに、世のさがなき物言ひを避けて、思ふ人をこゝに隱し据ゑて、忍び〳〵に通つた人などの詠か。蘆分小舟障り多さに、この日頃打ち絶えて、今宵も亦行かれぬのを、かの情ある橋姫のことなれば、恐らくは日頃に懲りず、帶紐解き設けて下待つことだらうと、その女の動作を、

細やかに想ひめぐらしたのに、いよ〳〵わが行かれぬことをもどかしがつた、纒綿の情致が露はれて、餘味が言外に饒い。「こよひ」と指定したのは、必ず逢はうと約束のあつた夜でゝもあらう。風調もまた高い。左註の宇治の玉姫とあるは取り難いかと思ふ。契沖いふ「顯註に引きたる六帖の宇治のはし姫とある歌を、今の六帖には、宇治の玉姫とあり。されば是れも六帖によりて、後人の書き加へたるなるべし」と。

○

君やこむわれや行かむのいさよひに槇の板戸もさゝず寢にけり

釋 ○君やこむわれや行かむの　この「の」は體言を承けた格で、上を一の成句と見たのである。○いさよひ　滯りて進まぬをいふ。○槇の板戸　檜などの板戸。槇は眞木の義で、美稱である。故におもに建築材料によい常磐木をいつた。今、柀をのみいふは轉つたのである。○さゝず　戶鎖さぬこと。

大意 君が來うか、私が行かうかと、ためらひ〳〵して居たうちに、閨の眞木の板戸も、さゝずに寢てしまつたわい。

評 元來人の來ることを主としたのだから、「われや行かむ」は映帶の敍法で、且同調の語を反復して、姿致を取つたに過ぎない。そのいさよひに板戸をも鎖さずに寢てしまつたといふに、如何に夜ふけまで待ち設けて居つたかを思はせて、暗に來なかつた人の無情を怨んでゐる。かくて、その人に贈つたものらしい。婉曲で情味の長い作である。

六帖に、三句やすらひに、下句槇の板戸をさゝでとある。

今こむといひしばかりに長月の在明の月をまちいでつるかな

そせいほうし

釋 ○今　口語のすぐといふに當る。○長月　陰暦九月の異名、秋下「夕づく夜をぐらの山に」の條に旣出。○在明の月　空に在りながら夜の明ける頃の月をいふ。卽ち廿日以後の月である。

大意　宵の程、人が只今行かうといつてよこしたばかりに、それを誠と思つて待つも〱來ずして、待ちもせぬ、夜の長いこの長月の末の、しかも早くでも出ることか遲く出る在明の月を、早もう待ち出した事よなあ。

評　さても待つ人は、どうしたのかの餘意がある。待たねど出てくる月を擧げて、待てど來ぬ人の不信を反映させ、長月の在明の月と諄くいひ立てゝ、さほど夜の更けるまで音もしないのは、いよ〱來ぬに定まつたと、失望怨嗟の意を深めた。況や時もあらうに夜の最も長い長月の、しかも最も遲く出る頃の在明の月を待ち出したといふに、ひどく待ち恍けた趣を思はせたもので、婉曲で味ひ永く、姿は素直に、めでたい歌である。

月夜よし夜よしと人につげやらばこてふに似たり待たずしもあらず

よみ人しらず

釋 ○月夜よし夜よし　月夜よし、月夜よしと重ねた詞であるのを、上略したのである。「東屋のまやのあまり」「忘るなよなよといひにし」など、皆同じ省略格である。○こてふ　來といふの約。「來」は命令格。○待たずしも　「しも」は十の八九は、しかる意を表す辭。

大意　今夜は大層よい月夜だが、月がよい〳〵と、表向きあの人の所へ告げて遣らうなら、やはり來いと催促するに似て居るわ、それも餘りはしたないからやめにしようとは思ふが、あながち又あの人のお出を、待たぬ譯でも無いわ。

評　月のさやかな夜中まで男が來ないので待ちあぐんだ、女の煩悶の聲である。月に託する好方便もつゝましく、さりとて待たずしもあらずを何としよう。この撞着が胸中に反復されて、苦悶の末は、遂に茫然自失するに至つて已む。この心理狀態を想像する時は、詩味一段と長い。萬葉集卷六、

わが宿の梅咲きたりと告げやらば來ちふに似たりちりぬともよし

を本歌にした換骨奪胎で、おのづから別趣の妙を具へ、文情曲折して、餘韻悠然として永い。風格も高古で語語適健である。「待たずしもあらず」は何といつても掉尾の豪句。四五の句間に意釋の如き意が略されてある。

○

君來ずば閨へも入らじこむらさきわがもとゆひに霜はおくとも

釋　○閨　寢屋の義。○こむらさき　濃紫。○もとゆひ　元結。髻(モトドリ)を結ぶ物をいふ。和名鈔に「髻、和名、毛度由比、以レ組束レ髮也」とある。

大意　君が來ぬならば、何時までも閨へ這入るまいわ、かうして夜の更けるまで外に立ち待つて、私の濃紫の元結へ、眞白に霜はおくとも構はずにサ。

評　古は男女を通じて髻を取り上げ、元結に紫などの組絲を用ひたと想はれるから、歌主はいづれとも決し難い

が、閨をいひ、濃紫の元結をいふ處、何となく女らしい方に傾いてゐるから、婦人と見てよからう。さては、婦人の情として、最も大事にすべき頭髮に元結に、霜の零るをも厭はず、門に倚つて立ち待つとは、どんなにか切な戀であつたらう。蓋し肺腑の語で、同情に堪へない。三四の句、正しくは、濃紫なる元結といふべきを、なるの辭を省き、「わが」を隔てゝ「元結」へ續けたのは、詩形に制限せられた結果であらう。濃紫の元結に霜を取り合はせたのは、色相の配合が鮮やかである。「霜はおくとも」の語に戀の決心の深さを表した例は、集中にも多い。但萬葉集に、

居明かして君をば待たむぬばたまのわが黑髮に霜はおくとも　(卷二)

待ちかねてうちには入らじ白妙のわが衣手に霜はおくとも　(卷十一)

これら同想同型である。剽竊とすれば餘りに甚し過ぎるが、想ふに、或はこの歌どもが轉つて、本文の如く傳へられたのかも知れない。但三首中では、これが最も優れてゐる。起句旣に千鈞の力あるうへに、原歌の君をば待たむ、或は待ちかねてなど、卒易な語を著けたのと選を殊にし、又、黑髮に換へて「元結」を擧げたのも婉曲で、格調もまた高古である。

○

宮城野の本(もと)あらのこはぎ露をおもみ風を待つごと君をこそ待て

釋　○宮城野　陸前國宮城郡。今の仙臺市の東偏にその名がなほ存してゐる。○本あらのこはぎ　幹疎(もとあら)の小萩。末の茂つて、本立のあら〳〵とした萩をいふ。おなじ草萩でもこれは野萩であらう。「小」は美稱と見るがよ

い。眞淵は、これを木萩と解したが、あのあたりの丘陵原野に今も萩が多いが、皆草立で、木立のは見えない。

○待つごと　「ごと」は如くの意。

大意　宮城野の本あらの小萩が、枝の露が重いので、その露を吹き散らす風を待つやうに、私も貴方をサ待つことわい。

評　幹疎く枝葉の密なのは、露に撓み易い譯なので、さも風を待つてゐさうな趣が見はれ、隨つて君を待つことも大方ならぬことが、言外に立證された。「待つ」の反復はこの場合最も有力な表現である。「風を待つ」の擬人、結句への關係を親切ならしめる。湊合的確に、情思曲折して清麗である。

○

あな戀し今も見てしが山がつの垣ほに咲けるやまとなでしこ

釋　○あな　歎辭。○見てしが　「が」は願望の辭。がなと同じい。○山がつ　山住の賤民をいふ。○垣ほ　「ほ」は秀の意であるが、垣とのみいふに同じい。○やまとなでしこ　秋上「我のみやあはれと思はむ」の條に既出。

大意　あゝ戀しい、只今なりとも逢ひたいものよ、山人の家の垣根に咲いてある、その大和撫子をサ。

評　撫子がしどけなげに咲き出した山里の垣根のうちに、いと思の外なやさしい綺麗な人を見たので、垣根の撫子にその人を擬へて、戀し見たしと、立つても居ても物の思はれる熱情を敍べた。初二句の漸層はこの意趣を描くに、適當の表現である。眞率のうちに寄興あり、情文相協つて面白い。

○

津の國のなには思はず山城のとはに逢ひ見むことをのみこそ

釋 ○津の國　攝津の古名。○なには　難波に、何はをかけた。○とは　山城國乙訓郡の鳥羽である。常(トハ)をかけた。常(トハ)は永久不斷などの意。

大意 自分は、津の國の難波といふ名の如く、何もは外に思ひはせぬ、山城の鳥羽といふ名の如く、常(トハ)に卽ち不斷、只あの人に逢ひ見ようことばかりをサ、思つて居るわ。

評 津の國の難波、山城の鳥羽、名所を聯對して、序に用ひた。結句、「事をのみこそ思へ」といふべきを、上の「思はず」を響かせて略いた。初二句は映帶の筆法で、句法も三句以下に排對させ、「思ふ」「思はず」を照映せしめた。畢竟一途に逢ふことを思ふの意を、かう潤飾したものである。もしこれが難波男が京女を戀したのなら、地名の運用が單なる修飾の爲ばかりでなくなり、頗る自然に聞えてこよう。

敷島(シキシマ)の大和にはあらぬ唐(カラ)ごろもころもへずして逢ふよしもがな

つらゆき

釋 ○敷島の云々　「敷島」は大和國磯城郡の今もある地名で、此處に欽明天皇の磯城島の金刺宮を建てられてから、遂に大和に續けての枕詞となり、大和の國がまた代々に帝都であつたので、延いて日本全國の稱と轉つては、敷島も日本全國にかけて稱する名となつた。○唐ごろも　羇旅「から衣きつゝなれにし」の條に既出。

大意　敷島の倭の國では無い、唐といふ國の名のついて居る唐衣の、ころもといふやうに、頃も經ずに間無しに、逢ふ仕方があつてほしい事よ。

評　「頃も」の同音を冠せる爲に「唐衣」とおき、その「唐」をいふ爲に「敷島の大和にはあらぬ」とおいた累々層々の序、これも一體である。雜下、

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべらなり

と、殆ど同型の作である。「頃も經ずに」が強く印象させられるが、又源氏物語に「かへすぐ〵ぞ唐衣なる」の刺笑も一寸聯想されないでもない。

ふかやぶ

戀しとは誰が名づけけむ言(コト)ならむ死ぬとぞたゞにいふべかりける

釋　○言ならむ　事ならむではない。○たゞに　ひたすらに、一途になどの意。直にが正義。

大意　思ふ人を慕ふ事をいふに、戀しいとは、昔誰れが名付けて置いた言葉であらうぞ、そのやうな生(ナマ)ぬるいいひ方よりは、死ぬとサ手短く直にいふべきであつたわい。

評　戀しといふ詞では、死ぬほどに戀しい表情に、不十分な氣持のするまゝに、直にその結果たるべき「死ぬ」の語を以て、その表情の符標としようといふ。常識を失した不合理の論理とその辭氣の劇しさとは、殆ど狂人の譫語にひとしい。この血の氣澤山なる所に詩味の活躍がある。

一二三の句、六帖に誰が名付けゝる言の葉ごとゝある。

よみ人しらず

みよし野の大川のへの藤なみのなみに思はゞわが戀ひめやは

釋　〇大川のへ　大川の邊。大川は、吉野では吉野川をいふ。〇藤なみ　春上「わが宿に咲ける藤なみ」の條に既出。〇なみに　並に、一通りになどの意。

大意　三吉野の大川の邊の、花の咲いて居る藤波のなみといふやうに、並々の者と貴方を思はうなら、このやうに私が戀ひ慕ひはしますか、いや戀ひ慕ひはしませぬわ。

評　三句までは、「なみ」の同音に疊みかけた序である。古へは吉野川の岸邊には、山藤など這ひかゝつて咲いてゐたので、序詞に使つたと見える。實際眞劍に人を戀することは、あだやおろそかな事ではないが、「なみに思はゞ」は或は世にいふ氣休め文句で、かういつて人に贈つた歌ではあるまいか。萬葉集に、松浦川で釣魚の娘子等の詠んだ、

若鮎(ワカユ)つる松浦の川の川波のなみにし思はゞわれ戀ひめやは　（巻五）

に下句が全く符合してゐる。いづれも序歌で、松浦の川波と、吉野の藤波との差があるだけだ。場所を近畿に換へ、調をも改めて、平安朝の手振に近づけてはあるが、つまりは一つ歌と思はれる。

〇

かく戀ひむ物とはわれも思ひにき心のうらぞまさしかりける

釋 ○心のうら　心中に立てた占形（ウラカタ）。○まさし　正し。卜占は正確なるを尙ぶ。故に占正（ウラマサ）の語がある。

大意　最初から、後でこのやうに戀しくならうものとは、自分も思ひ設けた事であつた、されば、その最初の自分の心の內の占ひがサ、正しかつた事であるわい。

評　果して豫想した如くであると、知りつゝも苦しい戀の淵にはまつた今を、自分から弔してゐる。
初二句、六帖に忘れなむ物とはかねてとある。

○

天の原ふみとゞろかしなる神も思ふなかをばさくるものかは

釋 ○ふみとゞろかし　踏み立てゝ轟かし。○なる神　雷。○さくる　遠退くるの意。鳴神の裂くにかけた。神代にも、拆雷（サクイカヅチ）の名がある。中島廣足いふ、「避（ヨクル）は下二段活、裂（サク）は四段なれど、鳴神の方にてはさくまでにかゝりて、さくるとまではかへらず。いひかけにはかやうの語例多し」と。

大意　おのやうに、大空を踏み轟かして、仰山な音を立てる鳴神は、何でも割り裂く恐ろしい物ではあるが、その鳴神さへも、互に思ひ合つた中をば遠ざけるものか、いや遠ざけはせぬわ。

評　假令何事が起るとても、二人が仲は決して裂かれるものではないの餘意がある。景樹が「世に噂の高くなりたるに怖ぢて、女の、かくては添ひ遂げむ末いかゞならむなど打ち詫びたるを諫めて、遣はしたる歌ならむ」といつたのは當つてゐる。來れ天雷何物ぞの所信、その情熱の天地に磅礴して、いかに高くいかに大いなるかが見られる。「踏み轟かし鳴る神」すら旣にかうだとすると、かの紛々たる人言（ヒトゴト）の如き何かあらむの反映が、言

外に躍如としてゐる。雷の音を「踏み轟かす」といつた擬人的想像も、また頗る面白い。尤も雷は日本でも支那でも、古代から神格を與へてはゐるが、その連鼓を負つて荒れまはる様子を出したことが、鳴神の力強さを表現するもので、隨つて下句の意を強く反襯する。辭氣跌宕で、理無く情あり、語々句々百錬の鐵の如くである。傑作と稱してよい。

前卷の「かねてより風に先立つ云々」より「こりずまに又もなき名は云々」までの五首は虚名を歎く戀、「池に住む名ををし鳥の云々」より「君によりわが名は花に春霞云々」までの四首は實名を歎く戀、この卷のこの「天の原」より「里人の言は夏野の云々」までの四首はいひ妨ぐる戀を竝べた。おの〳〵大同にして小異がある。

〇

梓弓ひき野のつゞら末つひにわがおもふ人に言（コト）のしげけむ

この歌は、ある人、「あめのみかどの、あふみのうねべに給ひける」となむ申す。

釋 〇梓弓　ひき野に、梓弓ひくといひかけた枕詞。梓弓のことは春上「梓弓おしてはる雨」の條に既出。〇ひき野　河内國に日置と書いて、今へキと唱ふる所がある。そこの野であらう。〇つゞら　延喜式に、黒葛と書いてある。和名鈔、葛類に「本草云、防已、一名解離、阿乎加豆良（アヲカツラ）」とあるは同物か。小野博いふ「防已は、青かづらとも、青つゞらとも、つゞらかづらとも、つゞらふぢともいふ。蔓至りて長し」と。枝から枝が咲いて蔓延してゆくので、「末遂に繁し」と喩へた。〇言のしげけむ　言の繁くあらむの意。物言（モノイヒ）のうるさいのをいふ。

大意 日置野の葛の、ひろがつて繁つてゐるやうに、末には遂に、自分の思ふ人に名が立つて、いろ〳〵と世に

噂が繁くなるであらうわ。

【評】世の物言のさがなさは、昔も今も變りはない。若しそれが男女間の事となると、一層甚しい。戀路に立つ者としては、これが一番こはい。詩の鄭風に、

將仲子兮、無レ踰ニ我園一、無レ折ニ我樹檀一、豈敢ニ愛之一、畏ニ人之多言一、仲可レ懷也、人之多言、亦可レ畏也。

人情は何處も同じものである。但かう將來の人言を豫想して危惧の念に驅られてゐるが、よく見ると、更に踏み込んだ第二の危惧が暗示されてある。それは外でもない、もしその場合には手を切らずばなるまいかといふ事である。夏草などに喩へて、人言の繁きを歎いた例は、萬葉集に數多あるが、かう葛蔓の末繁きに比興したのは無い。緣語の寄せに、ひき野まで取り出したのは、この時代の風調である。

左註の「あめの御門云々」は例の采らない。

○

夏引の手びきの絲をくりかへし言しげくとも絶えむと思ふな

この歌は、返しによみて奉りけるとなむ。

【釋】○夏引の云々　春蠶飼して夏絲を引けば「夏引」といひ、手して引けば「手引の絲」といひ、それを、籰に懸けて繰り反すが故に、「くりかへし」といつた。○絶えむ　語らひを罷めること。俗に手を切るといふに同じい。

大意　ゆくすゑ假令、世間の噂は、夏引の手引の絲を繰りかへし〳〵するやうに、かへすがへす繁くとも、何時までも私との手を切らうとはお思ひなさる勿よ。

【鑑】女の歌であることは勿論である。されば、女紅なる手引の絲のくりかへしを以て序とし、絲の緣で、「絕えむ」といつた。まことに引き延へて繰つた絲の如き敍法である。世間の噂を憚つてゐるやうではと、豫め相手を警戒したのに、婦人の思ひ迫つた情致が見える。

左註は例の采らない。しかし上の歌の返歌としてふさはしい趣である。

○

里人のことは夏野のしげくともかれゆく君にあはざらめやは

【釋】○夏野の　夏野の如くの意。○かれゆく　離れゆくに、枯れゆくを寄せた。

大意　世間の噂は、假令夏野の草のやうに繁くあるとしても、それ故遠退いてゆく君に、逢はずにおかうか、いや逢はずにおきはすまいわ。

【評】上句は、全く萬葉集の、

人ごとは夏野の草のしげくとも妹とわれとしたづさはり宿ば（卷十）

から出てゐる。「枯れゆく」の緣語を持ち出したのは、上の「梓弓ひき野つゞら云々」、「夏引の手引の絲云々」と同巧で、皆この時代の風調である。萬葉卷四、高田女王が今城王に贈れる、

人言をしげみこちたみ逢はざりき心あるごとな思ひわが背

この世には人言しげしこむ世にも逢はむわが背子今ならずとも

の返歌ともいふべきさまで、世間の人言に躊躇する戀と、それを物の數ともせず猪進する戀とを對映させて、愛

の高潮を歌つてゐる。

藤原敏行の朝臣の、業平の朝臣の家なりける女をあひしりて、ふみ遣はせりけることばに「いまうでく、雨のふりけるをなむ、見わづらひ侍る」といへりけるを聞きて、女にかはりてよめる　　在原業平朝臣

かず〳〵に思ひ思はずとひがたみ身をしる雨はふりぞ増れる

釋 ○藤原敏行の朝臣の云々　敏行朝臣が、業平朝臣の家に居る女といひかはして、消息を贈つた文句に、「今參らうと思ひますが、雨が降つて居るのを見合はせて居ります」といつてよこしたのを聞いて、その女に代つて業平が詠んだとの意。これも伊勢物語の文意を摘んで書いたものと覺しい。伊勢の本文は長いから略する。前田夏蔭いふ「この端詞定家卿の書かれしといふのに、『雨のふりげなるをなむ』とあり。これいとよろし」と。○かず〳〵に　數々に。宣長が、深切の意と解いたのははやい。○とひがたみ　問ひ難さに。○身をしる雨　身の運命を知る雨。

大意　いろ〳〵に、親切にいはれるが、誠に思ふやら思はぬやら、お心のうちが問ひ難いので、心配して居ましたが、幸ひ私の身の程が知られる雨が、降りに降つてサ來ました、この大降の雨に濡れ〳〵も來て下さらば、私は深切に思はれて居る幸ある身と知りませうし、來て下さらずば思はれぬ不幸の身と知りませうわ。

評　顯註をはじめて、諸家の說まち〳〵である。中に、高尙、廣蔭の釋が優れてゐる。依つて兩說を參酌して意

釋に擧げた。景樹は素より、この詞書を勢語の攙入としてゐるから、詞書を離れて、

懇に思ふ故に訪ふ、さは思はぬ故に訪はぬといふにあらず、とてもかくても訪ひ難さに、只涙のみ落ちまされり。

と釋き、「身を知る雨は涙を云へるにて、この頃のいひならひなり。伊勢集『かたみにも身を知る雨の降りし哉』、六帖に『今日は身をしる雨とこそ降れ』の類、證とすべし。さて詞書は『題しらず』か、又は雨によりたるさるべき詞ありけむかし。今知れ難し」といつた。「身を知る雨」を涙とするは古說で、既に顯昭は、それを僻言だと難じてゐる。身を知るといふに、何とも仕樣模樣もない、わが身の宿世を佗ぶる意が、下に匂つてゐる。

ある女の業平の朝臣を、所定めずありきすと聞きてよみてつかはしける

大幣(オホヌサ)のひくてあまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ

釋 ○所定めずありきす　彼方此方に人を据ゑて通ひあるくをいふ。○大幣の　大幣の如くの意。これも伊勢物語に「昔男、ねんごろにいかでと思ふ女ありけり。されど、この男をあだなりと聞きて、つれなさのみまさりつついへる」とある。「大幣」は顯昭が「祓するに、陰陽師の持ちたる串にさしたる四手(シデ)なり。祓へて果てぬれば、これをおの〳〵引き寄せつゝ撫づる物なれば、ひく手あまたと詠めるなり」と解したので明らかである。「大」は美稱、「幣」は本來麻でつくる故に、麻をヌサとも訓む。○ひくて　引く方といふに近い。幣のうへでは、勿論ひく手である。○頼まざりけれ　頼まれざりけれの略。頼まぬの意とするはわるい。

大意　大幣が數多の人の手に手に引かれるやうに、貴方は、近頃は引つ張られる所が、方々に多くなつたので、私こそ淺からず思ふけれども、貴方は一向賴みになりませぬ事わい。

評　あゝ私ひとり情ないの餘意がある。賴まれぬは人情の裏切者である。その癖それに愛想をつかす程の勇氣をもち得ないで、いら〳〵懊惱する。こんなみじめな事は世にあるまい。想ふに、はじめは大層篤實らしいのにめでて、許した戀であらう。この趣、「なりぬれば」とあるので聞き知られる。

三句、伊勢物語には聞ゆればとある。

かへし　　　　なりひらの朝臣

大ぬさと名にこそ立てれ流れても遂に寄る瀨はありてふものを

釋　○流れても　「も」は歎辭、口語のても用法とは殊なる。幣に「流れて」とあるは、水無月祓に麻を川に流すことがあるからである。

大意　私は引手數多の大幣なりと、名にこそ立てられたれ、その大幣も川へ流れ〳〵てまあ、果には流れ寄る所の瀨はあるといふものを、私とても末にはいづれ、寄る所がありませう。

評　その寄る所はいふまでもなく貴方の處です、それをお怨みなさるは心得がたいの餘意がある。文情曲折の間に、餘韻悠然たるものあるはこの朝臣の擅場で、殊に諷託の妙がある。

題しらず　よみ人しらず

すまのあまの鹽やく烟風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

釋 ○伊勢物語に出て、詞書に「昔男、懇にいひちぎりける女の、ことざまになりにければ」とある。○すまのあま　須磨の海人。須磨は攝津國武庫郡。○風をいたみ　風が太くての意。いたみは甚しきをいふ。

大意　須磨の浦の海人の鹽を燒く烟は、風が格別に强いので、あれあのやうに、思ひも寄らぬ脇の方へたなびいて往つたわい、といふが表面の意で、自分の思ふ人も、强ひて誘はれるまゝに、思ひも寄らぬ人の方へ靡いてしまつたわい、といふが裏面の意。

評　山厲河帶の盟誓もその甲斐なく、艶なる夢も今は冷たいものとなつた。それも他の者に見換へられたとなつては、嫉妬と悔恨とで胸は張り裂ける。萬葉集の、

志賀のあまの鹽やくけぶり風をいたみ立ちはのぼらず山にたなびく（卷七）

を襲つたやうだが、原歌は單なる旅中の敍景なのを、これは諷喩に仕立てたから、藴含の味ひに、無量の感愴を生じて、おのづから獨立したものとなつた。おなじことながら、躬恒集に、

もしほやく蜑のたく火の烟こそ思はぬかたに立ち昇るらし

は、これに比して大いに劣つてゐる。

初句、六帖に伊勢のあまのとある。

○

玉かづらはふ木あまたになりぬればたえぬ心の嬉しげもなし

釋 ○この歌伊勢物語に出て、詞書に「昔男久しく音もせで、忘るゝ心もなし、參り來むといへりければ、女」とある。○玉かづら　蔦類の植物。和漢三才圖會に「玉蔓、其蔓引レ地、葉似二忍冬葉一而厚、春開二小花一、色青緑可レ愛」とある。○たえぬ心　縁を絶やさぬ心。

大意 葛のあの木へもこの木へも這ひかゝるやうに、貴方もあちこちと通ふ所が數多になられた故、私の方の縁を切りはせぬものゝ、そのお心が、何の嬉しいやうも無いわ。

評 口ばかりうまくて誠實のない人に贈つたのだらう。「たえぬ」は比興の玉葛の縁語である。といふは、葛はその蔓が長々と生ひ延びて、引いても切れぬからである。

顯本には、二句以下、はふ木のあまた見えぬればたえぬ言の葉とある。伊勢物語には、四句、普通本は本文のと同じく、眞名本は顯本と同じい。すべて顯本が宜しいかと思ふ。本文の二三の句は、上の「大幣の引く手あまたになりぬれば」にほゞ同じい。筆寫の際つい混れたものであらう。次々の五首の歌も、詞の僞なのを怨んだ意だから、これもその一列で、たえぬ言の葉は書簡だけ絶やさず通はすのをいふ。

○

たが里に夜がれをしてか時鳥たゞこゝにしも寢たる聲する

大意　今夜は珍しく、何處の里に一夜を闕かしてか來て、この時鳥はそらさぬ顏して、只此處にサ寢る積りで泊つたやうな聲をすることよ、といふが表面の意で、絶えず通ふらしい誰が里をか、めづらしく今宵夜離カれして來ながら、外へなどは一向通はぬ風をして、只私の許にばかりにサ、泊つてゐるやうな事をいふ事よ、といふが裏面の意。

評　作者は婦人であらう。夏歌、

時鳥なが鳴く里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから

と同一の諷喩で、さる輕薄なる男が辯口を弄する狀態が、「聲する」の一語に表現されてある。宣長が「これは時鳥を詠める歌なるを、こゝに入れるは誤なり」といつたのは、この諷意を聞き知らぬ疎漏である。「誰が里に夜がれをしてか」とその急處を衝いて、詰責冷罵した口氣には、流石の鐵面漢も慚汗三斗、その背を沾すを覺えるであらう。實にこの歌の活躍して、一段の妙味と一層の姿致と添へるのは、この疑問の體を用ひた處にある。

○

いで人はことのみぞよきつき草のうつし心は色ことにして

釋　○いで　發語である。○ことのみ　言のみ。○つき草　螢草をいふ。委しくは、秋上「月草にころもは摺らむ」の條に既出。この花の色は物に移つて染み易い。これを貯へておくには、その花汁を紙に染ませて乾しておく。入用の時水に浸して溶かして使ふ。これを移し花といふ。よつてうつし心の「うつし」にかゝる枕詞とする。○うつし心　移しウツ心で、變り易い心をいふ。○色ことに　色殊にで、格別に色の深いのをいふ。

大意 いやもう貴方は、逢ふと親切さうに、ひどく口先ばかりサよいわ、月草のやうに移り易いお心は、月草の色の、一時はあざやかであるやうに、格別に御親切らしく見えてサ。

評 月草の縁で、著き心を「色殊に」といつた。「人は」は差別の語だから、お世辭こそいはぬが誠ある自身を誇つて、他をおとしめた寓意が隱然としてゐる。

○

いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉嬉しからまし

大意 嘘といふもの、無い世の中であらうならば、貴方のこのやうに親切にいつて下さるお詞が、どの位嬉しい事でありませう。

評 しかしとかく嘘の世の中なれば、貴方のお詞をうかと信じて嬉しがられもせぬの餘意がある。狂熱の血を湧すものもなく、思索の頤を解くものもない、平々凡々たる口頭語のやうではあるが、一誦再誦、必ず人をして同感に禁へざらしめる。想ふに平凡の眞なるものであらう。殊に場合が戀であるだけに、餘計に痛切な感じがする。六帖に、

世の中に絶えて僞なかりせばたのみぬべくも見ゆる玉章

同一の構想ながら、巧拙に月鼈の差がある。措辭の忽せにし難い一例である。

○

いつはりと思ふものから今更にたがまことをか我れは賴まむ

大意　あの方のお詞は例の嘘ぞとは思ひながらも、やはりそれを頼みにして居るわ、假令ほかに誠ある人がかれこれいつても、今更心を移して誰れの誠をサ、自分は頼みにはしようか、決して頼みにはしはすまい。

評　貞女の兩夫にまみえぬ決心である。この誠意は空言する不誠實な人の心に、好個の反映を成して、一段の光彩が添はる。好かぬ人の誠よりは好いた人の嘘がよいとは、眞に嬉しい實意である。隨つてその聲沈痛で、怨意がおのづから深い。かの口蜜の如き輕薄の兒、これを聞いては羞死せずには居られまい。上の歌に比すると、一歩思索の境に足を進めたものである。僞と誠との對照の如きは、そも〳〵語言の末である。拾遺集戀五に再出してゐる。詞書にも字句にも、異同が無いのを見ると、偶然の重複と思はれる。

素性法師

秋かぜに山の木の葉もうつろへば人の心もいかゞとぞ思ふ

釋　○うつろへば　花や木の葉には、色の變つて散るのをいふ。

大意　この頃の秋の風に、山の木の葉が變つて行くのを見ると、頼みに思ふ人の心もどうあらうか、變りはすまいかとサ、氣遣ひに思はれるわ。

評　時節柄ゆゑどうあらうかと疑つたのは、素より頼もしげなき人の心を、下に歎いたものである。「移ろへば」が字眼で、聯想の楔子になつてゐる。「いかゞとぞ」と疑問を存した敍法は、不盡の意があつてよろしい。以下六首は、皆人の心の移るのを詠じてある。

寛平の御時きさいの宮の歌合のうた　　友則

蟬の聲聞けばかなしな夏ごろもうすくや人のならむと思へば

釋 ○かなしな　「な」は歎辭。

大意 蟬の聲を聞けば悲しい事よ、そのわけは、はやまことの秋が來るばかりか、心の飽きさへ來て、夏の衣の薄さを覺えるやうに、人の契が薄くならうかと思へばサ。

評 「夏衣」は時節の景物を以て、「薄くなる」の序に用ひた。夏衣の薄くなるとは、その薄さを感ずることで、卽ち秋の來ることが聯想され、秋のくるは卽ち飽きのくることを暗示してゐる。宣長が蟬の羽衣の緣をかねてといつたのはわるい。蟬は秋の景物とし點出されたのである。

結句、六帖にならむとすらむとある。

題しらず　　よみ人しらず

空蟬(ウツセミ)の世の人ごとのしげければ忘れぬものゝかれぬべらなり

釋 ○空蟬の　世にかゝる枕詞。「春上」うつせみの世にも似たるか」の條に既出。

大意 世間の人の噂が繁くあるから、互に約束した心は忘れはせぬものゝ、おのづから世間を憚つて、逢ふ事も遠退いて、二人の中も離れてしまひさうだわい。

評 これ決して杞憂ではない。社會に從順な自我的でない當時の人の心持からは、進退に谷つた場合の呻吟の聲

であらう。

○

あかでこそ思はむなかは離れなめそをだに後の忘れがたみに

釋 ○忘れがたみ　忘れ難みに、形見をかけた。形見は記念の物をいふ。

大意　思ひ合つて居る中は、互に飽きの來ぬうちにサ、別れてしまはうよ、飽きが來て別れたのでは、思ひ出しても嬉れまいから、それよりは今のうち別れて、この互に飽かぬ心持をなりとも、後々の忘れ難い記念にしようわサ。

評 痴話が嵩じての喧嘩も、度重なつては、自然末の見込もなくなる道理で、男は流石に何とも思はぬが、氣の小さい女としては、縁を切るならば、愛想盡しをせぬ今のうちになど、悲觀することもありさうである。作者は必ず婦人であらう。結句、形見にせむの意であるのをいひさしてある。

○

忘れなむと思ふ心のつくからにありしよりけにまづぞ悲しき

釋 ○ありしよりけに　「けに」は殊に、勝つてなどの意。

大意　あのやうに不實な人の事は、もう忘れてしまはうと思ふ心が附くにつけて、さて絶えて後はどうであらうかと、又心細くなつて、今までよりはなほ増つて、別れぬ先から早悲しいわ。

評 いくら怨めしいの憎いのといつた處が、もとが愛し合つた中で、いざといふ土壇場となると、心の底に潜在してゐる曲者が頭をもち上げてくる。そこが人情の嬉しい處だ。伊勢物語に、

忘らむと思ふこゝろのうたがひにありしよりけに物ぞ悲しき

は、これを少し換へて、物語を添へたものか。玉葉集戀四に、

忘れなむ今はと思ふ時にこそありしにまさる物思はすれ

は、一二三の文字に出入はあるが、全く同歌である。作者は詠人しらずであるが、詞書に「謙德公に贈れる歌」とある。謙德公は圓融帝の朝の一條攝政藤原伊尹公だから、時代が差つてゐる。或は、折に打ち合つてゐるたまゝに、古歌を書いて贈つたとも考へられる。後撰集雜二に、上句はこれと同じで、下句「言の葉さへやいへばゆゝしき」とある歌の詞書に、「みそか男しける女を、荒くはいはで問へど、物も言はざりければ」とある。この詞書の意は大抵この歌の趣に合つてゐる。

○

わすれなむわれをうらむな時鳥人のあきにはあはむともせず

釋 ○人のあき　飽きに、秋をかけた。

大意 もう貴方の事は忘れてしまはうわ、さりとて必ず私を恨んでくださるなよ、あの時鳥は、人の心の飽きといふ名の、秋の時節には逢はうともせずに、夏のうちに去つてしまう、私もうか〳〵として居て、人の心に飽きの來る時節に逢はうとは思ひませぬわ。

【評】むごい目にあはぬ先に、此方より身をひかうと思ひ込んだのは、よく〳〵の事であらう。飛花の如き遊蕩子そも何と聞くであらう。
この歌、兼輔集に入つて、女に贈つたものとなつてゐる。けれども兼輔は撰集當時の人だから、こゝに詠人しらずとする譯がない。

○

たえずゆく飛鳥の川のよどみなば心ありとや人のおもはむ

此歌、ある人のいはく、「なかとみのあづま人がうたなり」。

【釋】○飛鳥の川　冬部「きのふといひけふと暮らして」の條に既出。

大意　絶えず流れて、遂に淀んだことの無い飛鳥川が、忽に淀むといふやうに、何時も絶えず通ふこの自分が、餘義ない事情の爲に、暫時も通はぬ事があらうならば、絶える心のあることゝ、あの人が思ふであらうか。

【評】あゝ心配の事かなの餘意がある。障る事があつて、行きかねた折の作であらう。飛鳥川は比興に用ひたのだから、「たえずゆく」は作者の行動をも擬へてある。通ふ事の滯るを、川の縁で「淀み」と轉義した。この歌のいゝ處は、「人のおもはむ」と氣遣ふ處にある。一にも二にもあれが〳〵と氣に懸けて、その機嫌取に汲々として居る作者の態度が見はれて、そのやさしい萬斛の情味が、湧然として生じてくる。風調がまた古に近い。果して萬葉集巻七、詠者不詳の歌の、

たえずゆく明日香の川のよどめらば故しあるごと人の見まくに

と同想同型である。この轉つて傳はつたものか。
四句、一本に心あるとやとあるについて、田中道麿は、「心あるごとやのご文字の落ちたるならむ」といひ、宣長は「この歌古き姿なれば、必ず然るべし」と賛したが、この集はわざと今調に引き直して採錄するは常の事だから、古き姿必ずしも、この集の眞面目とは定められない。左註は例の據り難いものだらう。

○

淀川のよどむと人は見るらめどながれて深き心あるものを

釋 ○淀川　宇治川の末で山城攝津を流れる川。○ながれて　長れてに、流れてを寄せた。

大意 この頃しばらく、繁くもえ通はぬを、淀川の淀むやうに、何ぞ此方の心に滯があると、貴方は見るであらうけれども、此方はそれは／＼深い思はくがあるものを、しばらく遠退いたとて怨んで下さるな。

評 人目人言を憚つて、しばし躊躇うてゐる頃ほひでゝもあらう。當分足を退いて、嫌疑でも避けて、それから末長くゆるりと逢はうといふ計畫なのを、一方では察しがなく怨んで來たので、自分の態度について辯明したものである。恐らくは返歌であらう。初句は「よどむ」の序、「ながれて深き」は川の縁語であることは勿論である。そして淀川の實景も帶敍してゐるらしい。

素性法師

そこひなき淵やはさわぐ山川のあさき瀬にこそあだ波は立て

釋 ○そこひ　退方（ソキヘ）の轉語で、極み、果てなどいふ意。○淵やはさわぐ　淵は波の騷がんやはの意。○あだ波　役にも立たぬ波。「あだ」は空の意。

大意　底のはても無いやうな深い淵がサ、波の騷ぐものかいや騷ぎはせぬ、山川の淺い瀨にこそ、ざわ〳〵と仇な波は立つわい、といふが表面の意で、私のやうな淵のやうに深く思ふ者は、口へ出して何かといひはせぬが、貴方の眞實らしく何かといひ騷ぐのは、つまり山川のやうな淺い心の仇浪ぞよ、といふが裏面の意。

評　一寸地理的報告めいてゐるが、よく見ると作者の主觀が活いて、そこに不可動の眞理が籠り、諷喩として多くの場合に適應する。今は、我が戀に餘りはづまぬやうに卽ち冷淡なやうに、向からいつてきたのを承けて、借りて以て答へたのである。字句精錬をきはめて、窮りない含蓄がある。

初句、六帖におほかたのとある。結句、素性集も六帖もうは波は立てとある。景樹はこれを執したが諾はれない。うは波は平凡で何の事もない。「あだ」の一語でこの歌は生きるので、口前ばかりよい人にさし當てた趣が、强く表現されて面白い。

上の「たえず行く」「淀川の」の二首は、我がと絕えをわが心苦しく思つた意、この歌より「陸奥の」の三首までは、人より恨み咎められたのを受けて、詠んだもの。

くれなゐのはつ花染のいろ深くおもひしこゝろわれ忘れめや

よみ人しらず

釋 ○はつ花染　くれなゐ卽ち紅花（ベニバナ）は、房（フサ）の數多あるが中に、その中央なるが早く咲いて、殊に色がよいので、

「初花染の色深く」といつた。

大意 紅の初花染の色の深いやうに、初戀に深く思ひ染めた心を、いかな事のあればとて、私は忘れようか、いや決して忘れはすまいわ。

評 萬葉集卷十一、

うまびとの額髮結へる染木綿の染めしこゝろはわれ忘れめや

と同型で、只その序が異なつてゐるだけのやうであるが、これは初戀、彼れは單なる戀を歌つたのである。初戀とすると「くれなゐの初花染」は頗るふさはしい情調を漂はすもので、艷冶な特殊の光彩が動く。體調も蒼古である。

六帖に、三句色ごろも、結句われは忘れずとある。

陸奥のしのぶもぢすり誰れ故に亂れむと思ふ我れならなくに　　かはらの左大臣

釋 ○しのぶもぢすり　信夫捩摺か。「もぢ」はもぢれた卽ち亂れた樣にいふ。信夫は岩代の國の地名で、その頃は、大やうに「みちのくのしのぶ」といつて、まだ郡名とならなかつた。和名鈔に信夫郡の名が見えないから、後に至つて、郡名となつたのだらう。信夫山、信夫の里など名高い。此處で草の花葉を摺りつけた布を產したのを信夫摺と稱するのだらう。東鑑に信夫毛地摺千端と見えた。なほ諸說を採錄すると、顯昭いふ「この地にて、古へ布帛に忍草の莖葉を種々の色に摺りたる物にて、その文亂髮の如く捩れる狀なれば、捩摺といひ、地の名

をかけては、信夫捩摺ともいふ。又一說、信夫郡に、大なる石二つあり、其の面平にして、もぢのやうなる文あり。それに藍もて摺りたる布を、年貢に昔奉りたるを、狩裝束などにしたるなり」と。又古川辰が東遊雜記に「陸のくにて、福島の里にて、沼崎某といふ人にあひて、文字摺石の事を問ひしに、その人のいひけらく、今それとてあるは諾け難し。想ふに、古へこのあたりの人、石の面の平なるに、色よき草花を並べおき、藤布を覆ひて、丸き小石をもて上より摺りて、草花の色を、布へ移しゝなるべし。今もこゝより十里もをちの、出羽近き所などにては、貧しき者ども、しかするを見しなり。信夫郡なる面の平なる石は、皆文字摺石ならむといらへき」とある。荷田東滿は、「しのぶは地名にあらず。古記に、產出の證明なし」といひ、眞淵は、この意を演べて「伊勢物語に『春日野の若紫の摺衣しのぶの亂れかぎり知られず』とある、素より地名ならむには、打任せて、信夫の亂れといはれず」といひ、景樹は「顯注に定かに云へるも、東鑑に、陸奧なる信夫摺の布を供養せし事見えたるも、この歌や伊勢物語の歌やに本づきて、かの里に、あやしき摺布を出だしゝにや。その形なりとて傳ふるを見るに、眞の忍草にあらず。眞のは、𣑥(マキ)の葉の形したる物にて、しか摺らるゝ物ならず。只靑色に摺りたるを、しか云ふならむ」といつた。〇我れならなくに　「なく」はぬの延言。

大意　陸奧の信夫捩摺の模樣の亂れて居るやうに、私の心は亂れたが、それは貴方より外の誰れ故に、心を亂さうと思ふ私ではありませぬ、皆貴方故に亂す心なのに、推量して下されよ。

評　仇なりなど、人に疑はれたのに答へたのであらう。初二句は「亂れむ」に係かる序なることは勿論である。廣蔭が、しのぶに重き心をあらせて、「君を思ひ偲(シノ)ぶ故に心の亂れたるを、推して給はれ」と釋きなしたのは、勢語の「春日野のわか紫の摺衣忍ぶのみだれ限知られず」の意を以て、これを解いたので差つてゐる。勢語のは、

その意が素より異なつて、これに關はるべきでない。歌は流石にやむごとなき血胤におはする、この人の氣品が現はれて、高古の調仰ぐべく、しかも意詞の幽婉なる、おのづから延喜時代には見られない風調である。上乘の作と稱へよう。

四句、伊勢物語には亂れそめにしとある。

よみ人しらず

思ふよりいかにせよとか秋風になびくあさぢの色ことになる

釋 ○思ふより 思ふことより外にの意。○あさぢ 淺茅。茅はたけ低く、まばらに生へるので淺茅といふ。秋その葉色づく。○色 心の色をよせた。○ことになる 變つてくる。

大意 自分は、思のかぎりを思つて居るが、まだこの外にどうせよといふ事でやら、秋風に靡く淺茅の色の變るやうに、あの人の樣子が變つて來るわ。

評 わが誠の盡し甲斐の無さを歎いた中に、怨意が隱然としてゐる。二句、顯註にいかにせよとてとあるは劣つて聞える。以下の二首も心の變る戀をあげてある。

○

ちゞの色に移ろふらめど知らなくに心し秋のもみぢならねば

釋 ○ちゞ 秋上「月見ればちゞに物こそ」の條に既出。○移ろふらめど 「ど」の辭濁る。○知らなくに 知られ。

ぬのにの意。かやうの場合に、れの音の略かれる例が多い。「なく」はぬの延音。

大意 人の心は定めてあちこちと、いろ〳〵に移ることであらうけれども、その心はサ秋の紅葉でないから、色の見えないので、移ろふ様子が表面には知れぬに、何とも致し方が無いわ。

評 心の移ろふといふより、紅葉を聯想して、その縁語で、心の動いてさま〴〵なるを、「ちゞの色に」と具象的に轉義した。初二四五三と句を次第して聞く格である。戀五、小町、

色見えで移ろふものは世の中の人のこゝろの花にぞありける

と同一の着想。但おのづから軒輊の分があることは、いふまでもない。

蜑(アマ)のすむ里のしるべにあらねどもうらみむとのみ人のいふらむ　　小野小町

釋 ○しるべ　知る方。案内者をいふ。○うらみむ　浦見むに、恨みむをかけた。

大意 海邊の海人の住む里の案内者に對つてこそ、浦を見ようとはいへ、自分はその案内者では無いけれども、何でうらみよう怨みようとばかり、あの人のいふのであらうぞ。

評 男が血眼になつて、ひたすらに逢はゞ恨まうといつてよこしたのを受けて、「馬鹿〳〵しい、浦の案内者ではあるまいし」と茶かして、空恍惚けた虚實の驅引、その對照が頗る面白い。「うらみむ」の洒落は、この頃は既に二番煎じて、新奇とはいへないが、「海人の住む里のしるべ」を聯想し來つて趣向を立てたのを、手柄とする。これらはこの作者の家風である。

しもつけのをむね

曇り日の影としなれる我れなればめにこそ見えね身をば離れず

釋 ○曇り日　空の曇つた日。○影としなれる　痩せることをいふ。戀一「戀すればわが身は影と」を參看。○身をば　貴方の身をば。

大意 曇り日には人の影はあつても見えぬが、戀に痩せて、その曇り日の影のやうにサなつた自分なので、それと目にこそ見えね、影の身を離れぬやうに、心は常住貴方の身をば離れはせぬわ。

評 貴女は知るまいがなあの餘意がある。戀する人は精神病者だから、こんな纖細な事をも考へ付く。いはゆる「影身に添うて離れない」は、當時とても常套語であつたらうが、その影を「曇り日の影」と見立て、「めにこそ見えね」と應じた一轉語は、陳を化して新としたものである。

初句、顯註にくもる日のとある。

つらゆき

色もなき心を人にそめしより移ろはむとはおもほえなくに

大意 まる切無垢の色さへもない自分の心を、貴方に染み込ませたからは、何時までも變らうとは思はれぬにサ、さう思つて下され。

評 無垢の初戀のやうなことをいつてゐるが、もしこの歌が女に贈つたものとすれば、騙引上こんな事もいふの

で、實の處はわからない事になる。又獨坐の偶吟とすれば眞實な心の現れとなる。景樹が「戀の的面は、移ろはむとは更に思はずなど、たしかに云ふべきなれど、色もて染むる方にいひなしたれば、姑くそを評する側になりて、然は思はれずと弛ぶる方に、『おもほえなくに』と詠み下せり」と評したのは、よく當つてゐる。色の緣語のいひつゞけは、例のことである。初句理路におちた語で、爲に全篇が面白くなくなる。

よみ人しらず

めづらしき人を見むとやしかもせぬわが下紐の解け渡るらむ

釋 しかもせぬ　然も爲ぬ。こゝでは下紐を解くことをさす。〇下紐　下裳の紐。

大意　久しく逢はぬ、珍しい人を見ようといふ事でか、解きもせぬ自分の下紐が、かうも解けるのであらうわ。

評 あのつれなく中絶えた人も、この頃は思ひ出してくれるのかと滿悦してゐる。下紐の解けることを、人に戀ひられる兆とする事は、奈良時代からの遺風である。

以下五首は立ち返つて戀ふるの意歌である。

〇

かげろふのそれかあらぬか春雨のふる人みれば袖ぞ濡れぬる

釋 〇かげろふの　かげろふの如くの意。「かげろふ」は絲ゆふのこと。陽炎、野馬、遊絲とも書く。その見えみ見えずみするので、「それかあらぬか」へ續けた。〇あらぬか　それにあらぬかの略。〇ふる人　故人。春雨の

降るとかけた。

大意　空に立つ陽炎のやうに、さうかとも思はれ、さうで無いかとも思はれて、春雨の降るといふ、古い馴染の人を見れば、春雨にあつたやうに、うれし涙に袖が濡れたわ。

評　李益の詩に「問レ姓疑ニ初見一、稱レ名想ニ舊容一」と。これはそれほど忘れ果てた舊い事ではないが、久し振で逢つたのが、まるで夢のやうに思はれるので、「それかあらぬか」とまで誇張した。袖の濡れるのは、蓋し嬉し涙である。燒木杭に火のつき易いのもこの心持である。「かげろふ」も「春雨」も、時節の景物を序に使つたのであつて、實景ではない、といふのは雨中に陽炎は立たないから。

四句、普通本ふる人なればとあり、奥儀抄にもさうある。意がよく通じ難いから、六帖、及び顯註に見ればとあるに從つた。なほ奥儀抄には、結句袖ぞひぢぬるとある。

〇

堀江こぐたな無し小舟漕ぎかへりおなじ人にやこひ渡りなむ

釋　〇堀江　攝津國の難波の堀江。堀江川ともいふ。日本紀に、仁德天皇の御時掘らしめられたことが見える。〇たな無し小舟　小さい舟には、船棚が無いのでいふ。船棚とは和名鈔に「棚、和名不奈太那、大船旁板也」とある。船の小緣のわたり板のこと。

大意　堀江を往來する棚無し小舟が、幾度も同じ川筋を上り下りするやうに、又も立ち返つて、自分を一旦見捨てた、同じその人に戀ひ焦れて、月日を經てる事であらうか。

評　上句は序である。舟を以て比興とした。堀江の小舟は、往來上下が頗る頻繁なものであつたらしいから、「漕ぎかへり」と續けた。同じ人に戀の蒔き直しをする。燃木杭につく火で、我れながら情に脆い愚かな所爲と知らないでもないが、心が自分のいふことを聞かないので仕樣がない。はかない運命に翻弄されることを長歎した意が、言外に籠つてゐる。「こぐ」の語が重複してゐる。不用意の誤らしい。六帖に、初句入江こぐ、下句おなじ人のみおもほゆる哉とあり、又六帖の一本には、四句戀ひ渡るらむとある。

伊　勢

わたつみとあれにし床をいま更にはらはゞ袖や沫と浮きなむ

釋　○沫と　沫の如くの意。

大意　人に見捨てられた悲しさに、涙が海をなして、その海の流れるやうに、荒れてしまつた床なのに、今更その人に逢ふとて、その床を袖で拂はうなら、海に沫の浮くやうに、袖が涙の海に浮くであらうか。

評　音づれの絶えた間の悲歎の趣を、甚しくすさまじく聞かせる爲に誇張したのである。空しく塵にまみれた床を、「わたつみと荒れにし床」と比喩したのは、上に「敷妙の枕の下に海はあれど」とあると同巧である。袖を「沫と浮きなむ」は海の緣で首尾をあはせたので、例のこのお許の口吻である。床を拂ふは人待つ時の仕業で、元來塵を拂ふが主だけれど、「眞袖もて床うち拂ひ君待つと」など萬葉集にも見えて、塵の語をいはずして聞えてゐる。この歌、後撰集戀三に再出して、詞書に「宮仕しける女、程久しくありて、物いはむといひ侍りけるに、遲くまかり出でければ」とあつて、枇杷左大臣、（仲平）

よひの間にはや慰めよいそのかみふりにし床も打拂ふべく

とある歌の返しとして詠んだ伊勢の歌である。家集にもさうある。この事情を明らかにすべく、後撰に再錄したものと見える。

結句、六帖、家集共に沫と消えなむとあり、後撰は本文と同じい。

いにしへになほたち返へる心かな戀しきことに物わすれせで

つらゆき

釋 ○戀しきこと 「こと」は事の意。每ではない。

大意 久し振に昔の人に逢へば、そのつれなさは忘られて、戀しいといふ事には物忘れをせずして、いろ〳〵嬉しかつた事を思ひ出して、昔の馴染んで居た時に、立ち戻る自分の心である事よ。

評 自分を見捨てたつれない人の、物忘れした無情さを反映してゐる。

結句、六帖に物忘れしてとある。これに從へば、四句を、戀しきごとにと濁つて、人の戀しい度每に、年頃のつらさをも物忘れして、逢ひ初めた古へに猶立ち返る心なるよと解されよう。けれども部立に從ふと、やはり本文の如くでよい。

人をしのびにあひ知りて、あひ難くありければ、その家のあたりをまかりありきけるをりに、雁のなくをきゝて、よ

みてつかはしける

大伴くろぬし

思ひ出でて戀しき時は初雁のなきてわたると人知るらめや

釋 ○人をしのびに云々　女に忍びあつて、それが容易に逢ひにくいので、その女の家の附近をあるき廻つてる折に、初雁が鳴くのを聞いて詠んで贈つた歌との意。

大意 思ひ出して戀しい時は、あの初雁の今鳴いて通るやうに、こゝの門を泣いて私が通るといふことを、この家のうちの思ふ人が知らうか、いや恐らくは知りはすまいわ。

評 空飛ぶ雁の初聲は或は聞き知りもしようがと、わが泣き渡りながら知られぬのを、雁にも劣るやうにくやしがつてゐる。せめてもの心遣りに、その家の前渡りするは、詩の鄭風に、

東門之墠、茹藘在レ阪、其室則邇、其人甚遠。

とある趣に似て、人情は東西一軌である。戀三、貫之、

忍ぶれどこひしき時は足引の山より月の出でてこそくれ

も同じ境地で、詩材と着想がすこしちがふ。熱情は貫之のに優つてゐる。蓋しこの作者としての傑作であらう。

右のおほいまうち君住まずなりにければ、かの昔、おこせたりける文どもを取り集めて返すとて、よみておくりける

典侍藤原よるかの朝臣

たのめこし言の葉今は返してむわが身ふるればおき所なし

釋 ○右のおほいまうち云々　右大臣源能有公が通つて來ずなつたので、以前よこした文殼を集めて返すとて、添へて贈つた歌との意。○言の葉　書簡をさす。○ふるれば　舊(フル)さるればの意。

大意 これまで末頼もしさうにいつて下されたお文も、もうお戻し申しませう、私の身が古臭く飽かれましたから、このやうな艶なるお文は、私方に置所が御座りませぬわ。

評 花やいだ言の葉などは、今の舊されたこの身にはふさはしくもないからと、嫌味を竝べたのは、何處までも女心である。その實をいふと、風月定情のさる艶めいた消息などが日に觸れるにつけ、思ひ出の種となつて、「形見こそ今は仇なれこれなくば忘るゝ時もあらましものを」といつた調子で、斷腸に堪へないので、屑く否むしろ當てつけに返してしまはうと思ひたつたのである。「置き所なし」を諸註に「我が身すら置所なきを聞かせたり」とあるのはわるい。それでは意が兩端に岐れて、歸着點がない。

戀文を一纏めにして渡すことは、一般的慣習でもないが、折々あつたことが平安期の文書に散見する。それは絕緣のしるしであつた。

かへし　　近院(コンヰン)の右のおほいまうち君

今はとてかへす言の葉拾ひおきておのが物から形見とや見む

釋 ○物から　物ながらの意。

大意　今はもう見限つたといつて、お返しなされたこの文を拾ひ上げて置いて、もと〳〵自分の物ながらも、一旦貴女のお手に觸れた物故、貴女の形見と思つて見ませうか。

評　彼れは示すに絶を以てしたのに、これは戀々として故を懷ふ情を敍べた。その對照がおもしろい。おのが物からの形見、眞に才人の言である。

題しらず

よるかの朝臣

玉桙(ホコ)の道はつねにもまどはなむ人をとふともわれかと思はむ

釋　○玉桙の　「玉」は美稱、桙は古の鉾は、木で造つた物なので、偏旁は木に從つてゐる。こゝは、道の枕詞に用ひた。眞淵はその冠辭考に、「玉桙の身と、ミの一言にかゝれるなるべし」といひ、宣長は、「道のミは美稱にて添へたるなれば、枕詞はチへかゝれり。古へは戈の柄に取持つ便に、乳のありしなるべし」といひ、雅澄は、「古への戈は一木なれば、身のあるべき筈なし。これはミチの二言にかゝれるものと覺し。玉桙の圓(マト)といふを、通音なればミチにかけたるなるべし。さるは玉は美稱にあらで、桙を圓く、石劒などのさまに作成したる形よりつけたるならむ」といつた。以上三說中、眞淵の說が宜しい。欄柄(ツカ)に對して、刄渡(ハワタリ)を身といふに何の差支はない。雅澄の說はむづかしい。

大意　每夜餘所にお通ひなさる貴方が、今夜珍しくこれへ來て下されたのは、定めてお門違へだらうが、貴方のお通ひ道は、いつも〳〵戸惑ひして、取り違へて下されて頂きたいわ、さらば餘所へ志してのお出も、亦私の所に來て下されるものかと思ひませうわ。

評 たまさか忘れた時分に訪ねて來た男に對しての挨拶で、筆路迂餘曲折して、暗に諷託の意を寓してゐる。貫之集なる、

月影に道まどひしてわが宿にひさしく見えぬ人も見えなむ

などの儔である。六帖に「文たがへ」の題に收めたのに據つて、人の許へ行くべき文を門違ひして、常に迷ひ來よかし、せめて我れかと思はむといふ意に解いた說もあるが無理である。

まてといはゞ寢ても行かなむしひて行く駒の足折れ前の棚橋

よみ人しらず

釋 ○駒の足折れ　駒の足を折り伏せよの意。「駒」はもと小馬の義で、齢のわかい馬をいふことであるが、大方、馬といふも同じことに用ひられてゐる。「折れ」はこゝでは挫折の意ではない。折り敷かせよの意である。祝詞萬葉集などに、鹿自物膝折敷(シシジモノヒザヲリシキ)とある折敷とおなじい。○前の棚橋　家の前の小川に架けた棚橋。「棚橋」は顯昭は「板にて棚のやうに柱立てゝ渡したり」といひ、景樹は、「たゞそとしたる橋にて、大方は柱も無き、一枚の板打渡したるなるべし」といつた。

大意 まあ暫く待つて下されといふからには、今宵は泊つて寢てまあ往つて貰ひたい、それを聞かずに無理に往かうとする、あのお方の駒の足を爪づかせて止めて呉れい、門前の棚橋よ。

評 小やかなる門前の流に、棚橋うち渡せる趣は、田舍でなければ京も場末であらう。車にもえ乘らぬ地下の物げなきわび人か、或は公達殿原の若く好いたるが、志のあつい忍びありきか。いづれにもあれ、遙かな道を馬

で通つて來たらしい、たま〱もとより差支のあつてか、さらずは口說など嵩じてか、俄かに歸らうとして、馬引き寄せて這ひ乘りつゝ出て行く後影を見送りながら、詠んだものである。假初に板うち渡した棚橋は動もすれば躓き易い。卽ちこの棚橋を有情に取り成して、かの無情な人の駒の足折れと絶叫した。構想奇矯、筆また豪宕である。初句の字餘りから、四句に命令を用ひ、結句を體言に止めたのが、この勁健の調を成す所以かと思ふ。この歌、實に尋常の婦人の口吻でない。餘程雄々しい氣性の者であつたらう。否待てといふに強ひて郎の歸るのに、ひどく激昂した結果であらう。かゝる極度に憤慨することは、一面に限ない戀の高潮を示してゐる。千秋がこれを俳諧の類かと評したのは淸宧の言で、采るに足らない。二三の句間に然るを、三句の下に人のといふ語を省いてある。讀人しらずの歌の中では、その中期以前に屬する作である。

中納言源のぼるの朝臣の、あふみのすけに侍りける時に、
よみてやりける　　閑院

相坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆきゝをなく〱も見め

釋　○中納言源のぼるの朝臣云々　今中納言である源昇朝臣が、昔近江介であつて赴任する時に詠んで贈つた歌との意。源昇朝臣は左大臣源融の二男で、近江介に任ぜられたのは、仁和四年二月である。「介」は國司の次官である。○相坂のゆふつけ鳥　戀一「相坂のゆふつけ鳥も」の條に既出。

大意　相坂の關に放してある、木綿附け鳥といふ雞は、貴方が近江への往來の度毎に、啼きつゝそのお姿を見るが、私の身がその木綿附け鳥ならばこそ、泣きつゝも御往來なさるお姿だけは、餘所ながらも拜見致さうに、

木綿附け鳥ならぬ私は、それさへも叶はぬ事が恨めしい。

【評】婦人の身としては自由に外出も出來ず、思ふ人の遠行も見送りすらなり難く、徒に近江へ越ゆる國境の相坂の木綿付け鳥の、君がゆきゝを鳴く〳〵も見るを羨むに過ぎない。その衷情實にあはれである。その假設の構想はさう珍しくもないが、この集中、木綿附け鳥四首のうちでは最も勝れてゐる方だらう。「こそ」の辭力ある用法であるから、必ず言外の餘意を聞かねばならぬ。

題しらず　伊勢

故里にあらぬ物からわがために人のこゝろのあれて見ゆらむ

【釋】○故里　都址。なほ春上「人はいさ心もしらず」の條參照。○こゝろのあれて　心の變るをいふ。

大意　故里こそ荒れても見ゆれ、あの人の心は、故里では無い物ながら、何で自分の爲には荒れて、うとうとしく見えるのであらうぞ。

【評】怨意は十分である。心の荒れることは土佐日記に、

聞きしよりもまして、いふかひなくぞこぼれやぶれたる。家を預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。

と、貫之が書いたと同一の措辭で、これは故里を帶敍したのが一ふしである。二三の句間に、何故にの語を補足して聞く格である。

山がつの垣ほにはへる青つゞら人はくれどもことづても無し　寵

釋 ○垣ほ　垣といふに同じい。「ほ」は秀の義。○青つゞら　玉かづらと同じい。上の「玉かづらはふ木あまたに」の條を參照。○人はくれども　人は來れどもに、繰れどもを寄せた。青つゞらを採るには、手繰り寄せるので、その緣によつた。○ことづて　言傳への約。今いふ傳言。

大意　山賤の垣ほに這つて居る青葛を、繰るといふやうに、このあたりへあの思ふ人は度々來れども、自分の方へは寄り付かぬばかりか、一向言傳も無いことわ。

評　さて〳〵氣強い人よの餘意がある。「人はくれども」は、その男が自分の所にくるのではない。自分の近處に住む他の女の處にくるのである。かうした男の放縱らしい振舞は、當時の慣習からは、さう珍しい事ではなく、寧ろ當り前であつた事を記憶してほしい。然し門前を素通りしてゆきながら、聲一つ懸けられないのは、何としても婦人の堪へられる處でない。その氣強さを怨まずには居られぬ。「言傳もなし」といひ離した辭樣は、その深い心の波動を響強く表現してゐる。上句は、「くれ」にかゝる序であることは勿論なのを、廣蔭が「わが居所を山賤の垣ほに比喩したり」と解いたのは鑿である。

六帖には、下句たづね來れども逢ふよしもなしとあつて、作者の名がない。

さかゐのひとざね

大空はこひしき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらむ

釋 ○かは　反動辭。○ながめ　物思ひつゝ諦視すること。

大意　あの大空は戀しい人の形見かまあ、形見でも無いわ、それを何故に、その人を戀ひ慕つて物思ふ度毎に、

かう空が詠められるのであらうぞ。

評 戀の懊惱に空のみながめられるので、自分ながら自烈たくなつて、自分の態度に對して、一棒を喝はしたのである。畢竟これ幻化手段で、上句にまづ意表の落想を著けて、人の視聽を聳かし、下句にその謂れをことわつたのである。上下句の間に、例の何故にの語を補足して聞く格である。

あふまでの形見もわれは何せむに見ても心のなぐさまなくに　よみ人しらず

釋 ○何せむに　下に、とゞめおきけむといふ詞が略かれてある。

大意　あの人がこの間、又逢ふまでの形見にと殘し置かれたこの物も、自分は何にしようとて、留め置いたのであらう、これを見ても、戀しく思ふ心が一向休まらぬのにサ。

評 いづれ逢はねば、この胸がをさまらぬといふに歸着する。形見で紛れる位の淺い思でないと主張した。それでは形見を不要とするのかといふと、決してそんな事ではない。實は形見があるから安心して、それ以上を欲求するのである。

親のまもりける人のむすめに、いとしのびにあひて、物らいひけるあひだに、親の呼ぶといひければ、いそぎかへるとて、裳をなむぬぎ置きて入りにける、そののち、裳をかへ

すとてよめる　　おきかぜ

あふまでの形見とてこそとゞめけめ涙に浮ぶもくづなりけり

譯 ○親のまもりける云々　親の守りかしづいてゐる大事の人の女に、密かに逢つて話などして居つたうちに、女中共が來て、親がお喚びですといつたので、女が周章てゝ去ぬるとて、裳を脫いで置いて奧へはひつたそのあとで、その裳を取り上げて持つて歸つたのを、その後返すとて詠んだ歌との意。「物ら」は物等である。「裳」は婦人の禮服で、腰のうしろに襲ふ褶である。○もくづ　藻屑。裳を寄せた。

大意　この裳は定めて、又逢ふまでの形見よとての事でサ、留め置かれたのであらう、しかしこの裳を見れば、貴方の事が思ひ出されて、涙がひどくこぼれるから、その涙の海に浮く藻屑のやうな、つまらぬ裳であつたわい。

評　それ故お返し申しますの餘意がある。折角の形見も、たゞ涙の種となるのみなればといふことを潤飾した。「涙に浮ぶ」は誇張で、それに藻屑を取り合はせたのに、海の意がおのづから廻護映出されたなど、纖細浮華である。

題しらず　　よみ人しらず

かたみこそ今はあたなれこれなくば忘るゝ時もあらましものを

譯 伊勢物語に「昔あだなる男の、形見とておきたる物どもを見て」と詞書があつて、この歌が出てゐる。○あた淸んで讀む。仇讐の義。

大意　戀しい人の殘して置いた形見がサ、今は却つて、自分の爲にはかたきではあるわ、なぜといふに、これが無いならば、少しは忘れる時もあらうものを、なまなかこの形見があるので、見ては思ひ出し〳〵して、忘られぬによつてサ。

評　勢語の詞書は、よくこの事情を説明してゐる。居らぬ間の形見に見なさいと男の殘して置いた物があつたが、その男が浮氣者で、それ切り忘れて來なくなつた時に詠んだのである。「今は」の一語、心長く我慢に我慢をかさね、辛棒に辛棒をした趣が見えて、最も緊切に器用に使はれた。すべて情眞に語摯である。故によく人の肺腑に入つて、一唱三嘆に堪へざらしめる。逸品と稱へてよからう。

古今和歌集卷第十五

戀歌　五

五條のきさいの宮の西の對に住みける人に、ほいにはあらで物いひわたりけるを、月のとをかあまりになむ、ほかへ隱れにける。あり所は聞きけれど、え物もいはで、又の年の春、梅の花ざかりに、月のおもしろかりける夜、こぞを戀ひて、かの西の對にいきて、月のかたぶくまで、あばらなる板敷にふせりてよめる　　在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

釋　○五條のきさいの宮は、仁明天皇の皇后藤原順子を申す。文德實錄、嘉祥三年四月の條に「皇大夫人、移二御五條院一」とある。「西の對」は中昔の家造は、寢殿を正中に、東西に對屋を建てる。その西の對屋である。「ほいにはあらで云々」のほいは本意の音の略で、卽ち初めよりこの女をと思ひ込んだのではなくて、何となきこ

とのついでに語らひついて、志の深くなつたのである。「あばらなる板敷」は端つ方の板敷の、格子も几帳も立てぬをいふ。あばらは荒頽の義で、四壁の無い家卽ち亭を、和名鈔にアバラヤと訓んである。さて、この詞書も伊勢物語の攙入らしい。勢語を解する者、多くこの「西の對に住みける人」を、五條后の姪の藤原高子の事とし、「外へ隱れにける」を、その兄基經などの計ひで、淸和帝の後宮に奉つた事としたのは、大鏡をはじめ、後世の書に準據がないではないが、元來が傳說で、確たる事實と見難いから、それに拘泥して釋かぬ方が穩やかと思はれる。○月やあらぬ春や昔の春ならぬ　二つの「や」は反動辭。舊註に疑辭と見たのはわるい。「昔」は廣い意味での過去をいふ。

大意　今この月はもとの月で無いか、やはりもとの通りの月である、今のこの春はもとの春で無いか、やはりもとの通りの春である、すべて何もかも去年と變つた事はないのに、只我が身一つばかりはもとの身であつて、しかも身の上が去年とは變りはてた事よ。

評　詞書に「月の十日あまり」とあるので思ふと、今はその翌年の二月頃の十日あまりで、月の最も面白い夜頃である。あはれ花天月地、春色は依然としてゐる。失意失戀の身でこれに對すると、その感愴はどんなものか。かく自然の景物を借り來つて、その不變の現象を境遇上の變化に對照させたことは、感哀を永からしめる詞家の慣手段で、趙嘏の詩に、

獨上江樓思渺然、月光如水々連天、同來翫月人何處、風景依稀似去年。

と作つたのも同一軌である。「わが身一つは」の「は」の辭、暗にわが身以外の或者の變つたことを反襯してゐる。只その變つたがために、月も花もわが身も、もとのまゝながらもとの物とも思はれざるに歸著する。初句、月

や昔の月ならぬといふべきを、二句に讓つて略き、結句「して」といひさして餘意を含めたのなど、省筆の限りを盡したのは、語簡に味ひの永い所以である。新古今集雜上、淸原深養父の、

昔見し春は昔の春ながらわが身ひとつのあらずもあるかな

はこの註解である。序文の「この朝臣の歌は、意餘ありて詞足らず」の評は、よく病處を穿ち得たやうだが、この歌の如きは、斷じてその權衡に上すべきものでない。寶玉集に「緣の空に遊絲を望むが如し、あるにあらず、なきにもあらず、幽にして境に入らざらむ人の得難きなるべし」とあるは名評である。上句の「月や」「春や」、又「あらぬ」「ならぬ」の同語同音の重疊反復、下句の「身」の語の重疊など、聲調の和諧を極め、又上句なる二つの反動の「や」の辭は下句の「は」の辭と力量相匹敵してゐる。概するに、蒼凉淒婉の調で、餘意あり餘情あり、情景兼ね到つて、眞の黃絹幼婦といふべく、實に朝臣が作中の神品に屬するものである。

題しらず　　藤原なかひらの朝臣

花すゝきわれこそしたに思ひしかほに出て人に結ばれにけり

釋 ○したに 「した」は心の底をいふ。○ほに出て 「ほ」は表面、公などの意。穗をいひかけた。

大意 あの人を自分こそわが物にしようと、內々思つて居たことわ、然るに、この花薄の穗に出たのを結ぶやうに、公然と外の者に、意外にも取られてしまつたわい。

評 殘念なる事かなの餘意がある。初句の「花薄」は二三の句を隔てゝ四句へかゝる。「穗」も「結ばれ」も薄の緣語で仕立てたまでゝ、內容は一向つまらない。伊勢集のこの歌の詞書に、

この男の兄なるをとこありけり。「今はあの人は世にも訪はじ、何か頼み給ふ、我を思へ」などせちにいへど文ばかりは見つゝも、更に逢はでありけり。かくいふけしき、もとの人は知りたりけむ、女里に出でて、秋前栽などをかしかりけるを、花をなむ手ずさびに結びたりける。このつらかりし人の來てよみたりける。と見えて、作者は仲平の兄とある。この人の兄は時平で、時平は好色の人だから、多少形迹はありさうだが、この詞書の趣は、歌の意とは相違してゐる。

藤原かねすけの朝臣

よそにのみ聞かましものを音羽川渡るとなしにみなれ初めけむ

【譯】○音羽川　山城國山科なる音羽の瀧の流の末をいふ。○みなれ　見馴れに、水馴れをかけた。見馴れは馴染むをいひ、水馴れは水に親み馴れるをいふ。

大意　いつそ只餘所にばかり、噂だけに聞いて居ようものを、何でその音羽川を渡るといふでもないやうに逢ふといふでもなしに、水馴れるといふやうに、見馴れ初めたのであらうぞ。

【評】逢ふ瀬の中の絶えた折、いつそ馴染まぬ昔がましと、かひない今を悔んでゐる。かういつても絶對に相見ぬ昔がよいとするのではない。只現在の境遇の苦惱を甚しくいつたまでゝある。詞の皮相に泥んで、その深意を誤つてはならぬ。音聞きの語縁によつて、「音羽川」を取り出し、さて川の緣語で、渡らばこそ水には馴れようが、かう渡らぬ中のいかで「みなれそめけむ」といひなした轉義、技巧に趨つて、感哀を殺いでゐる。初句、古本、家集におとにのみとあるはいかゞ。

凡河内躬恒

わが如くわれを思はむ人もがなさてもやうきと世を試みむ

釋 ○わが如く　我が人を思ふ如くの略。○さても　然してまあの意。もやと續けて萬一を疑ふ辭と見てはならぬ。○世を　「世」は伊勢物語などに多く見えた語で、男女の中らひをいふ。

大意　自分があの人を思ふやうに、自分を思つてくれる人もあつてほしいことよ、そのやうに人に思はれても、やはりかう憂いものであるかどうかと、一つこの夫婦中を試して見ようわ。

評　何とあの人は自分を思つてみてくれぬかなあの餘意がある。思つてくれゝば希望通りだから、憂きことなどは全く無い譯である。それをなほ、「さてもやうき」と思案した痴愚が面白い。上句は、自分ばかり戀ひ焦れて、人が自分を思つてくれぬ憂さを、下句は、それにつけてもこの世の中の心憂く思はれる趣を寓したのは婉曲で、言語の驅使に自在を得たものである。

拾遺集戀五に再出したのは、初句われればかりとあつて、讀人しらずの歌である。六帖も同樣。また、古本信明集に出てゐるのは疑はしい。

もとかた

ひさ方のあまつ空にもすまなくに人はよそにも思ふべらなり

大意　自分はあの天のやうな遠くにも住まぬのに、とかくあの人は、自分を餘所〳〵に思ふ樣子であるわ。

評 どうした事ぞの餘意がある。この怪訝の意を輕々に看過してはならない。さうでないと餘りにこの歌を凡了してしまふ。上句は、「よそにも思ふ」といひ出す伏線で、まあ一寸した口合である。三句、六帖にはあまの空にもとある。又三句、新撰和歌にはあらなくにとある。

よみ人しらず

見てもまた又も見まくのほしければ馴るゝを人は厭ふべらなり

釋 ○見ても　「見て」に「も」の歎辭の添はつたのである。口語の「見れども」の意に用ひるとは異なつてゐる。

大意 逢ひ見てもまあ逢ひ見てもまあ、やはり又も又も逢ひ見たくなるので、それで二度三度と馴染むことを、どうやらあの人は嫌がる樣子であるわい。

評 それであの人はかう疎々しく自分を扱ふのだらうと、一遍は表面的善意に解釋して見たのである。昨日鴛鴦の夢を訂した人、今日は早く路傍の人で、炎涼は飜掌の間に變ずる。どうして我慢がなるものではない。畢竟は、わが切ない情思とは反對に、一度の契に絶えてしまはうとする人を怨んだ意が隱然と見える。「また」の語の重疊、見ても亦見まほしく、見ても亦見まほしくといふ反復の意を、最も簡淨に表現したものである。宣長が三句を、「見まくのほしきにといふ意なり。古歌にこの格多し」と解いたのは委しくない。

きのとものり

雲もなくなぎたる朝の我れなれやいとはれてのみよをばへぬらむ

釋 ○なぎ　和ぎの意。風日の長閑なにも、波の立たぬにもいふ。○朝の　朝の如きの意。○なれや　なればやの意。○いとはれて　最晴れてに、厭はれてをかけた。

大意　空に雲も無くつて和いだ朝は、いと晴れてあるものだが、その朝のやうな自分であればかして、人に厭ひ嫌はれてばかり居て、一生を暮らしてしまふであらう。

評「いとはれて」の秀句、狂體にちかい。六帖には、三句以下「てる日にもおもはれまさる我や何なり」とある。

よみ人しらず

花がたみめならぶ人のあまたあれば忘られぬらむ數ならぬ身は

釋 ○花がたみ　神代紀に籠をカタマと訓じたのは、このかたみと同語である。「花がたみ」は、花を摘み入れる籠で、籠の編み目は、所狭く竝びつらなるので、「めならぶ」にかゝる序に用ひた。○めならぶ　見竝ぶの意。卽ち見比べる意。

大意　花籠の目の竝んだやうに、外に美しいのが幾人もあるので、自分のやうな人數にも無い身は、もう忘られてしまふ事であらうわ。

評 婦人の作らしい。男がなか〳〵のすき者で、あちこちかゝり合ふ女が多く、そでない素振がほの見えたのであらう。直接に人を恨みず、「數ならぬ身は」と消極的に悲觀したのが、却つていよ〳〵怨意が深く聞える。四句、顯木に忘られにけむとあるを景樹は執したがわるい。こゝの部立は、まださう疎くはならぬうちに、つ

らい心の見えたのを擧げてある。もとより本文の解に從ふがよい。

○

うきめのみおひてながるゝ浦なればかりにのみこそ蜑はよるらめ

釋　○うきめ　憂き目に、浮き布をかけた。布は海藻をいふ。黑布、和布、昆布などの布である。○ながるゝ　泣かるゝに、流るゝをかけた。○かり　假に、刈りをよせた。

大意　浮き布ばかりが生えて流れる浦であるから、これを刈りにばかりサ、一途に海士は浦邊へ立ち寄るであらう、その如く、憂い事ばかり出來て、心ならずも泣いて暮らす自分である故、思ふ人のたま〳〵見えても、誠の志からではなくて、只假初に氣休めだけに、一寸立ち寄られるのであらう。

評　比喩に加ふるに、懸詞を用ひたので頗るうるさい。著想も平凡である。「のみ」の重複いよ〳〵拙い。二句、六帖にうきて亂るゝとある。六帖の一本には又、四句かりにのみだに、結局あまはよるらむとある。皆おだやかでない。

伊勢

あひにあひて物思ふ頃のわが袖に宿る月さへぬるゝがほなる

釋　○あひにあひて　合ひに合ひて。合ふことの甚しきをいふ。○ぬるゝがほ　濡れるかたち、濡れる樣子などいふ意。

大意　よくも打ち合つて、物思をしてゐる頃の、涙に濡れたこの袖に映る月影までが、おなじやうに濡れ顔であるわ。

評　もうこれでは溜らぬの餘意がある。三界唯心、心の闇に月の光もかきけちて、濡れ顔なる擬人、おなじ歎に月も沈むと見たのである。涙の語を著けないで廻護したのが、例のこの作者の小巧である。後撰集雜四に再出したのには、詞書を「物思ひける頃」とある。結句、六帖、及び家集にぬるゝかげなるとあるは甚だわるい。

秋ならでおくしら露はねざめするわが手枕のしづくなりけり　　よみ人しらず

釋　○手枕　轉寢などに、腕を枕とするをいふ。

大意　露は秋によく置くものであるが、秋でなくて床の上に置く露は、何かと思へば、物思に寢覺をする、自分の手枕から落ちる涙の雫であつたわい。

評　「寢覺」といひ、「手枕」といつたのに注目されたい。これその夜すがらの心づかれに堪へず、轉寢した趣である。しかも端なく夢が覺めると夜はなほ闇で、萬感胸に集つて、こぼれる涙は秋の夜露の如く夥しい。乃ち敍述の順序を轉倒して、まづ「秋ならでおく露」と驚訝の前提を置いて、人の注視をひいておいて、さて、それはわが物思の涙ぞと說明を下した。これら思索の間に、感愴の意の動くを認む。手枕の涙とあるべきを轉義して雫(シヅク)としたのは、露に應接させる爲で、涙を道破しないのは、上のと同工である。

○

須磨のあまの鹽やき衣筬をあらみまどほにあれや君がきまさぬ

釋 ○鹽やき衣　製鹽の際に著る衣。但別にさうした衣があるのではない。鹽燒く海士の衣をいふのみ。○筬をあらみ　筬が疎さに。筬は機の緯絲をとほす器具であるが、筬があらいといへば卽ち緯絲の織目があらいことになる。○まどほ　間遠。この語は通例、時間のあるにいふが、こゝはそれでは意が通じない。よつて道程のある意に解した。○あれや　あればやの意。

大意　須磨の海人の鹽燒衣は、筬があらいので、織目の間が透いて遠いやうに、道の間が遠い故かして、待てどもく君がお出なさらぬわ。

評 「間遠にあれや」は君の來まさぬ理由を、强ひて善意に解釋して見たので、内心では男の不誠實を怨んでゐる。これが婉曲の味ひある所以である。上句の意は、萬葉集卷三、

すまのあまの鹽やききぬの藤衣まどほくしあればいまだ著なれず

を拘つたものか、否おそらくは、一首ながらこの誤傳ではあるまいか。六帖に、結句いまだ來まさぬとあるのは、いよく萬葉のに近い。藤衣まどほくとあるを、心得かねた後の心から、「筬をあらみ」の一句を加へたものか、細碎にわたつて却つてをかしくない。すべて序歌の類の構意は簡單だから、ひとへに修辭聲調のうへに、無限の姿致を要求するものであることを忘れてはならぬ。「や」の辭、廣蔭が反辭として解したのは鑿である。

○

山城のよどのわかごもかりにだにこぬ人頼むわれぞはかなき

【釋】○よどのわかごも　淀の若菰。淀は山城久世郡で淀川沿岸の地、眞菰の名處で、里人はこれを刈り取つて、蓆や簾を織りなどした。○かりにだに　刈りに、假をかけた。

【大意】山城の淀の若菰は里人が刈るが、その刈りといふ假初にさへも、自分の處には來てくれぬ人をあてにして、來るか〳〵と待つて居る自分はサ、さて〳〵たより無いことわ。

【評】說明にとゞまつたのはくちをしい。これは結句の「我れぞはかなき」がわるいのである。しかし自嘲の語として聞けば、多少の味ひはある

○

あひ見ねば戀こそまされみなせ川なにに深めて思ひそめけむ

【釋】○みなせ川　戀二「言にいでていはぬばかりぞ」の條に既出。水もろくにない淺い川なので、こゝは反對に取り成して、「なにに深めて」にかゝる序に用ひた。

【大意】あの人に逢ひ見ることが無いによつて、いよ〳〵戀しさが增さるわ、もとより水無瀨川のやうに、淺いあの人の心を、何で末かけて深く思ひ初めたのであらうぞ。

【評】やう〳〵厭棄された人の作であらう。ひたすらその不明を悔いた趣は、人の輕薄無情さを反襯して、怨意が

活躍する。しかも戀々として、その故を忘れかねた情合がなつかしい。「なにに」の疑問、深淺の對映、また多樣の姿致を生ずる。

○

あかつきの鴫のはねがき百はがき君が來ぬ夜は我れぞ數かく

釋　○あかつきの鴫のはねがき云々　鴫は曉方には殊に打ち頻つて羽搔くので、羽搔き百羽搔きと續けたといふ。萬葉、六帖などの歌の例では、多くその飛び立つ羽音を詠んでゐる。守部の鐘の響きに、空に舞ふ鴫の羽音のすさまじい事を敍べて、神樂歌の「しなが鳥ゐなのふし原飛びてくる鴫の羽音はおもしろきかな」を引證してゐる。○數かく　うち任せては、萬葉十一「水の上に數かく如きわが命」、又上の戀一「行く水に數かくよりも」の如く、數を畫する意であるが、顯註をはじめ、來ぬ夜の數を書き附ける意と解いてゐる。しかしこゝは、屢搔く意としてよい。廣蔭のもじ〳〵することなりといつたのは當つてゐる。千秋が宣長の解をたすけて、「數かくは、喩の鴫の百羽搔の詞によりていへるのみにて、意はたゞ歎きすることの繁き由なり」といつたのは、杜撰である。

大意　曉には鴫がしげく羽を搔き鳴すが、君が來ぬ夜は、宵から曉まで待ち通して私がサ、その鴫の百羽搔するやうに、幾度となしにもじ〳〵として歎き明かすわ。

評　所謂輾轉反側の意である。鴫の百羽搔を數へ盡し得たのは、曉まで一睡もしなかつたことを語る。卽ち君を待ちつゝ夜を明かしたことを語る。傷心の極である。「はねがき」、「もゝはがき」、「數かく」の疊語、反復の意

を表現する辭樣として適當である上に、語調音響また相協つて、字々鏗然たる感じがする。格調もやゝ古い。「君」と「我」との露骨な對照が、こゝでは却つて妙である。

顯註に、二三の句、榻のはしがき百夜がきとある由をいひ、

これは、昔あやにくなる女をよばふ男ありけり。志ある由をいひければ、女心見むとて、來つゝ物いひける處に榻を立てて、これが上に頻に百夜伏したらむ時に、いはむ言を聞かむといひければ、男雨風を凌ぎて來つゝ伏せりけり。榻のはしに、ぬる夜の數をかきけるを見れば、九十九夜になりにけり。明日よりは何事もえいなび給はじといひて歸りにけるに、親の俄に失せにければ、その夜えいかずなりにけるに、女の詠みてやれりける歌なり。

とある。定家は「鴫、榻共に用ふべき中に、古今の諸木一同に鴫なり」といつた。思ふに好事者鴫を榻に換へて、一場の小說を作つたのであらう。

○

玉かづらいまは絕ゆとやふく風のおとにも人の聞えざるらむ

釋 ○玉かづら　戀四「玉かづらはふ木あまた」の條に既出。葛は蔓延するものだから、「絕えず」の意にいひ續けるが常なのを、こゝはその文理を忘れて、反對の「絕ゆ」の序に用ひた。詩歌のうへにはありがちの特例である。○ふく風の　「おと」にかゝる序詞。

大意　今はもう緣を切るといふのでか、風の便りの音づれも、あの人はせずにゐるのであらう。

評 揣摩臆測は、遂に最後の手切れにまで到達する、その煩悶の情致が思ひやられる。たゞ序詞の疊用は繁縟らしい感がする。

○

わが袖にまだき時雨のふりぬるは君が心にあきや來ぬらむ

釋 ○あきや　飽きに、秋をかけた。

大意 この頃一向お出の無いを悲しく思ふ私の袖に、まだその時節でも無いのに、このやうに時雨の降つたのは變つた事であるが、これは君が心に私を飽いたといふ名の、秋が來たのであらうか。

評 時雨を秋の景物として詠んである。この時代は皆さうであつた。委しくは、秋下「神無月時雨もいまだ降らなくに」の條を參照されたい。後にも、

しぐれつゝもみづるよりも言の葉のこゝろのあきにあふぞわびしき

と同じく、飽きと秋との秀句から聯想して、涙の落ちるのを、時雨の降るに比喩した。工ではあるが、眞實味はそれだけ遠ざかつてゐる。

○

山の井のあさき心もおもはぬに影ばかりのみ人の見ゆらむ

釋 ○山の井の　離別「むすぶ手のしづくに濁る山の井の」の條に既出。山清水を堰き溜めたまでの物淺いか

ら、「淺き」にかゝる序とした。○影ばかり　一寸ほの見えたまでゝ、來てもとまらぬにいふ。

大意　山の井のやうな、淺い心では私は思はぬのに、何であの方は、その山の井に映る影程ばかり一寸見えて、落ち付いてはとまらぬのであらうぞ。

評　これは萬葉巻十六、

淺香山影さへ見ゆる山の井のあさきこゝろをわが思はなくに

を本歌としてゐる。三句の下に、何故にの語を含めて解すべき格である。「山の井のかげはなる」はあまり小細工で、味ひはまことに乏しいが、調は流滑である。

○

わすれ草種とらましをあふ事のいとかくかたき物と知りせば

釋　○わすれ草　和名鈔に「兼名苑云、萱草、一名忘憂、漢語抄云、和須禮久佐、俗云如環藻之音」とあり。春宿根から長葉叢生して、秋長莖を抽んで、枝を分ち花を著ける。形は百合花の如く、色は紅黄で、紫黑の點がある。詩の衛風に「焉得諼草言樹之背」云々」とある諼草を、釋文に「諼、本又、作萱」と見えて、註に「食之令人忘憂者」とある。又稽康が養生論に、「諼草忘憂」などあるに本づいた名であらう。

大意　思ふ人に逢ふ事が、ひどくこのやうになりにくいものぞといふことを、疾うから知りもしたらば、この苦しい戀を忘れるやうに、忘草の種を取つて置かうであつたものを。

評　忘草の名によつた落想は、夙く奈良時代に見える。萬葉巻十二の、

わすれ草垣もしみゝにうゑたれどしこの醜草なほ戀ひにけり

などの類がそれである。「逢ふ事のいとかく難きものと知りせば」といふのは、何も後悔した譯ではない。「忘草種とらましを」といふのは、必ずその人を忘れ果てたいと希望するのでもない。たゞ逢へない煩悶の餘りに出た矯語である。土佐日記に、

住の江に船さしよせよわすれ草しるしありやと摘みて行くべく

とある歌のつゞきに、

うつたへに忘れなむとにはあらで、戀しき心地しばしやすめて、又も戀ふる力にせむとなるべし。

と評したのは、又うつして、この歌の評に充てゝよい。

○

こふれども逢ふ夜のなきは忘草夢路にさへやおひ茂るらむ

大意　何程戀しく思つて寢ても、夢にも逢ふと見る夜の無いのは、あの人が自分を忘れた忘草が、現ばかりか夢の路にまでもサ、生ひ茂つた事であらうか。

評　その實は戀々の情に驅られて目も合はぬので、夢も見ぬのであらう。次の「夢にだにあふこと難く」の歌も、同じ情況であつて、これは忘草のうへでいひはてゝある。「夢路にさへや云々」の趣向は、戀二の「夢路にも露やおくらむ」と同工異曲である。

この歌、後撰集戀六に再出して、二句逢ふ夜なき身はとある。身の一語却つて障碍物となつて、意の疏通を妨

ける。

○

夢にだにあふ事かたくなり行くは我れやいをねぬ人や忘るゝ

釋 ○いをねぬ　「い」は寢入ること。「ね」は横臥すること。

大意　せめて夢になりとも逢ひたいと思ふ、その夢にさへも、段々逢ふ事のなりにくゝなつて來るのは、自分が物思の爲に眠りかねる故か、それともまた、あの方が自分を忘れて心が通はぬのか、どちらであらうぞ。

評　その實は、人に忘られたのではないかの心配に、我がいを寢かねた爲である。それを「我や」、「人や」と兩端を叩いて疑つてゐるこの痴呆の處に、一段の詩味を生ずる。「なり行く」とあるに、日に添へてその物思のまさる趣が見える。

けんげい法師

もろこしも夢に見しかば近かりき思はぬなかぞ遥けかりける

釋 ○もろこしも　「もろこし」は支那をいふ。「も」は口語のさへもの意。

大意　遠い唐さへも、夢に見た位だから近かつたわ、それに引き換へ、思つてくれぬ中は、夢にも見ることもないから、遥かに遠いことであつたわい。

評　これも物思の爲に、夢も結ばぬのであらう。かう遠近を表裏に取り成した構想は、晉の明帝の幼時、「日と長

安と、孰れか遠き」といへる問に對して、「日は近し、目を擧ぐれば則ち、日を見れども長安を見ず」と對へた類想と思はれ、又下句は、かの「肝膽も胡越」といつた趣にも似てゐる。枕草子に「近くて遠きもの、思はぬはらから親族の中」とあるは、或はこの歌などから思ひ寄つたかも知れない。開口一番、唐を近しと喝破した落想の奇矯なのには驚かされる。これは例の詩家の常手段である。遠近の對比が親密に過ぎたのは、聊かくちをしい。今すこし蘊含の味ひをもたせたいとも思つたが、この歌の特色は却つてこの餘裕のない仕立にある。

さだののぼる

獨のみながめふる屋のつまなれば人をしのぶの草ぞおひける

釋 ○ながめふる屋のつま　詠め經るに、長雨降るをかけ、その降るに又古屋をかけた。「つま」は軒の端である。○人をしのぶの草　人を偲ぶに、忍草をかけた。忍草のことは、上に既出。

大意 人のつれなさに、只一人ばかり物思をして、毎日〳〵日を經る、この古屋の軒の端であるから、雨に朽ちて、自分が人を偲ぶとおなじ名の、忍草が生ひ茂つたわい。

評 霖雨に朽ちた軒端の忍草につけて、その懷抱を敍べた。初二句は、春下「わが身世にふるながめせしまに」といふ小町の詠と同工で、更に「つま」とまでかけてきたので、煩瑣にたへられない。

僧正遍昭

わが宿は道もなきまであれにけりつれなき人をまつとせしまに

大意　自分の庭は草が茂り合つて、通ひ路もない程にまで、ひどく荒れてしまつたわい、心強くて來もせぬ人を今日は明日はと待ち〳〵して居る間に、つい月日が經つてサ。

評　「待つとせしまに」の一語、悲涼凄酸の感をそゝること太だしい。蓋しその途絶えは暫時の事と豫期した口調だからである。今日は明日はとはかない空頼めに、月日は梭の如くに經つて、看る〳〵苔蘚古逕を封じてしまつた。その心長さの程が思はれるではないか。いかにせむ飛花の如き輕薄の子は、他の春風に狂し去つて、遂に再び梢に返つて來ない。こゝに至つて悔恨の情、絶望の聲は乃ちこの三十一字を呻吟し來つた。風韻また縹渺として絃外の餘音がある。宗貞の昔ならば知らぬこと、遍昭としての戀歌は異數である。今姑くその人格を尊重して、これを題詠の作として疑ひを存しておく。

結句、六帖にこふとせしまに、二句、貫之集に道見えぬまでとある。すべて意調ともに本文の方が勝つてゐる。且貫之集に入つたのは勿論誤である。

○

今こむといひて別れしあしたより思ひくらしのねをのみぞなく

釋　○今こむ　「今」は離別「立別れいなばの山の」の條に既出。○思ひくらし　思ひ暮らしに、蜩(ヒグラシ)をかけた。

大意　あの人が近いうちに又來うといつて、別れて去なれた朝からこの方、一向音づれが無い故、毎日、あの人を戀しく思ひ暮らしに暮らして、あの蜩の鳴くやうに、音を擧げて泣いてばかりサ居るわ。

評 素性が「今來むといひしばかりに」の作は、乃父のこの作に胚胎したのかも知れない。但彼れは只その一夜を待ち明かしたので、これは日をわたつて待ち暮らしたのである。感哀の深かるべきは、理に於いてはこの歌であるが、情韻兩つながら、却つてあの歌の方が優つてゐる。よく構想敍法の相違を對比して、その妙諦を味はれたい。「思ひくらし」の小細工、甚だ厭味である。

拾遺集の物名に、忠岑の歌としてこれが再選されてある。すべて再選の歌は後出の方がたしかであるから、拾遺に從ふがよい。多分最初の傳本の誤であらう。

よみ人しらず

こめやとは思ふものからひぐらしの鳴く夕暮は立ち待たれつゝ

釋 ○こめや　來むやはの意。

大意 今は如何ほど待つても、來ようかいや來はすまいとは思ふものながらも、蜩の鳴く夕暮時分になるといふと、門口へ出て、ひたすら立つて居ては、待たれ〳〵して、どうも思ひ切つては居られぬわ。

評 例のよもやに惹かされるのである。人情の弱さがむき出しにされてゐる。それが何となく悲しい響を吹奏する蜩の鳴く夕暮、その夕暮は思ふ男の通つて來た時刻だから、慣習のまゝに又も立ち待たれるのである。

○

今しはとわびにしものをさゝがにの衣にかゝり我れをたのむる

〔釋〕○今しはと　今はとの意。「し」は强辭。○さゝがに　もと蜘の枕詞。日本紀私記に「佐瑳餓泥、蜘蛛之別名也、言其體加レ蟹、住ニ左々原一故云」とある。雅澄は「笹が根の轉れるにて、小竹の根は入り組みたる物なれば、組むに蜘をいひかけたるなり」といひ、又、小蟹の意でその形から譬へて、蜘に續けたともいふ。こゝでは、「さゝがに」を直に蜘のことに用ひた。○たのむる　頼ましめるの意。

〔大意〕かう久しう來ぬからは、今はもう來ることではあるまいと、くよくよ物案じをして居たものを、その人の來るといふ知らせのやうに、蜘が着物に這ひかゝつて、まだ何か頼み處のあるやうに思はせることよ。

〔評〕さてはあの人の心はまだ絶え切つたのではないのかの餘意がある。允恭記に、衣通姫が天皇に獻つた歌に、

わが夫子がくべき宵なりさゝかねの蜘のおこなひこよひしるしも

と見えて、「蜘の出れば待ち人來る」といふ諺が古くからあつたと見える。尤もこれは支那から輸入の迷信である。爾雅の疏に「一名長蹄、荊州河内人、謂ニ之喜母一、此蟲來著ニ人衣一、當下有ニ親客至一有上喜也」とあり、又、西京雜記に「蜘蛛集而百事喜云々」とあり、皆慶兆としてゐる。君を待ち戀ひ、橋占、辻占、石占、疊算、松葉算もしつくして、今や絶望の淵に沈まうとする刹那、この蟲の出現に萬緒の哀怨は一旦に忘却されて、はかない新光明に隨喜する。ほんに他愛ないのは戀の道である。結句の終りにことかなといふ歎辭が含まつてゐる。歌は今一層の狂熱がほしい。

○

今はこじと思ふ物から忘れつゝまたるゝ事のまだもやまぬか

【釋】○まだも　「まだ」は未だの上畧。○やまぬか　「か」は歎辭。

大意　今はもう來まいと思ふものながら、ついそれを忘れ〳〵しては、あの人を待たれる事が、未だにまあ已まぬことかな。

【評】ほんに困つてしまふの餘意がある。ともすれば打ち忘れて待たれるのは、日頃の心慣ひからであらう。土佐日記に、

あるものと忘れつゝなほなき人をいづらと問ふぞ悲しかりける

頗る人情の機微に觸れてゐる。結句、疎宕奇氣ありで、自分ながら未練らしい自分の心を呆れて歎かずには居られない趣である。

〇

月夜にはこぬ人またるかき曇り雨もふらなむわびつゝも寢む

大意　かうさやかな月夜には、常は來ぬあのつらい人も、月の面白さに浮かれ出して、もしも來はせぬかと待たれて、氣が揉めてならぬ、しかしどうで來ぬことなら、いつそ空が眞黑に曇つて、雨が降つてもらひたい、すれば、情なくつらい事とは思ひ〳〵してもまあ、あきらめて寢ようと思ふわ。

【評】益なき心盡しの、なまなかなることを歎いた。月夜を喜び雨を嫌ふのは、一般の人情である。それをわびしく思ひながらも諦めて寢ようといふ。月ゆゑ人待つ心の焦燥が、あからさまに表現されてゐる。景樹いはく、眞實雨を願ふにあらず。月夜にはふと來まじきにあらねば、なほ月夜をぞ賴むべきはいふに及ばぬを、かき

曇り雨も降らなむなどいへるは、せめてもの情の心やりにて、實を推しきる時は、必ずしも然らざるなり。云々。

背綮に中つた適評であらう。結句、素朴な表現で、泣寢入に寢入らうとする痴呆の態が、遺憾なく描き出されて面白い。下句、二段に切りとゝのへて、四五の句の終りに、未來の辭の「む」を据ゑたのも、聲響がなだらかである。要するに貞觀前後の風調かと思はれる。

雨ふらむ夜ぞおもほゆるぬば玉の月にだにこぬ人のこゝろは　（貫之集）
月夜にはこぬだにもこそまつと聞け曇るをかへす物にぞありける　（六帖）
月夜にはこぬ人まつといとへどもふる夜しもこそ寢られざりけれ　（同）

の類は、この歌によつて構想したもので、遙かに感哀が劣つてゐる。

○

うゑていにし秋田刈るまで見えこねばけさ初雁の音にぞなきぬる

大意　五月の頃、この田を植ゑておいて去なれてしまつた人が、その田を刈る秋のこの時節になるまで、待てども〳〵來ねば、今朝初めて鳴き渡る、あの雁のやうにサ、聲に立てゝ泣いたわ。

評　あはれ「一日見ざれば三秋の如し」といふを、早苗を採つてから來ぬこと殆ど半歳强。これまでは人目をかねて辛棒に辛棒をしぬいたのが、今や早稻田かり金にあはれを催されて、端なく音に立てゝ泣かれてしまつた。

萬葉集卷十、

住の江の岸を田にはり蒔きし稻ひいで刈るまで逢はぬ君かも
春がすみたなびく田居に庵して秋田刈るまで思はしむらく

と同想同型で、月日の程經たのを、具體的に景物を以て表現した。「見えこねば」の敍述がすこしいひ過しかとも思ふが、外にいひやうもない。「初雁のねになく」の巧を加へたのは、平安朝の手のある歌風である。

○

來ぬ人をまつ夕暮のあき風はいかに吹けばかかわびしかるらむ

大意　來もせぬ人を待ち居る夕方の秋の風は、どのやうに吹くので、かうも悲しくつらく思はれるのであらうか。

評　風もとより心なし、悲しいのは只聞く人の心的作用によることなのを、「いかに吹けばか」と、風の所爲であるかのやうに、幼く疑つてゐるのが面白い。蓋し夕暮は男の女の許を訪づれる時刻であり、待つ男は久しく來ぬ男であり、風は物悲しさを齎す秋風であり、かう三拍子揃つては、鐵で作つた人間でも泣かれる。語調また、暢やかで和らかい。作者は婦人に違ひない。

○

久しくもなりにけるかな住の江のまつは苦しきものにぞありける

釋　○住の江　住吉と同じい。賀部「住の江の松を秋風」の條に既出。○まつは　松に待つをかけた。

大意　思ふ人が來ずなつてから、存外に久しくまあなつたことよ、その久しいといふ事を以て評判の、住吉の松といふやうに、來もせぬ人を待つは、さて〳〵苦しいものであつたわい。

評説　「住吉の松は久しい物」といひ囃された、世の諺を踐んでの作である。雜下に「われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松云々」と詠んだのも、亦さうである。或は別にさうした意味の古歌などがあつたのかも知れない。

住の江のまつほど久(ヒサ)になりぬれば蘆たづの音(ネ)になかぬ日はなし　かねみのおほきみ

釋　○住の江のまつほど　松に、待つ程とかけた。○久　久しの名詞格。○蘆たづの　「音になく」にいひかけた序。「蘆たづ」は戀一「忘らるゝ時しなければ蘆たづの」の條に既出。

大意　來ぬ人を來るか〳〵と、住の江に久しい名の高いその松といふやうに、待ち居る間が久しくなつたから、その松に住む蘆鶴の音をたてゝ鳴くやうに、自分は聲を出して泣かぬ日とては、一日も無いわ。

評説　「待つ」といひ、「久」といひたい爲に、住の江の松をひき出した。蘆たづは松に對へて、齢久しい物の取り合はせに置いたのみではない。實に、松に多く來馴れて、當時の住吉の濱あたりには、盛んに巣食つて鳴いてゐたので使つた。これを「音になく」の序としたのは、既に萬葉に「あしたづのねのみしなかゆ」など例の多いことである。序詞の疊用、例の煩はしい。

なほ考へると、「まつほど」は伏苓(マツホド)か。伏苓は和名鈔に「玄中記に松脂淪(ル)入(ニ)地(ニ)千歳則爲(ル)伏苓(ト)、伏苓末都保度(ハマツホド)」と見えて、松脂が千年も經なければ伏苓にならないのだから、伏苓は久(ヒサ)にかけた序ではあるまいか。

なかひらの朝臣あひ知りて侍りけるを、かれ方（ガタ）になりにければ、父が大和の守に侍りける許へまかるとて、よみてつかはしける　　伊勢

三輪の山いかに待ちみむ年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば

釋 ○なかひらの朝臣云々　なかひらは藤原仲平である。關白基經の子で、時平の弟。天慶八年七十一にして薨じた。官左大臣に至り、世に枇杷殿と稱した。「父が」は作者の父藤原繼蔭をいふ。○三輪の山　大和國式上郡にある名山、大物主神を祀る。

大意　私は貴方に見捨てられて、京住居も面白くないから、古歌に「戀しくば尋ねてお出なされ」と詠んである三輪の山の方へ此度下りますするが、さて古歌の三輪山とは違つて、この三輪山は何年たつとも、思ひ出して尋ねて來てくれる人もありはすまいと存じますれば、どんなに人を待ち暮らすことでございませう。

評　大和の國府は奈良であるから。作者が父の大和守の許に行つたのも、奈良であつたらう。すると三輪とは隔つてゐるが、同じ國内の名所なので用ひたのである。雜下、

わが庵は三輪のやま本こひしくばとぶらひきませ杉立てる門

を本歌に取つて、三輪山を擬人して、自分の身によそへて詠んだ。本歌には、とぶらひ來ます人あるに對して、これは「尋ぬる人もあらじ」と打ち歎いた。かう「尋ぬる人も」と廣くはいつてゐるが、その實はこの歌をさし當てゝ、贈つた人一人卽ち仲平をさしてゐる。面白い器用なよみ方で、この作者のとしては優れた方である。女が

男に棄てられて田舍落をする位、あはれな氣の毒なことはない。當時仲平は年廿ばかりの若殿上人だから、移ろふ方々が多かつた事は思ひやられる。作者はかうして一旦大和に下り、間もなく又上京したことゝ見えて、寬平の末年には七條后の宮人として、宇多帝の寵を受けて、行明親王を生み奉つた。男も女も若いうちは根を絕えた波の浮草で、つひの寄る瀨は妙なものではないか。この歌、公任の金玉集に入撰してゐる。

だいしらず　　　雲林院のみこ

ふきまよふ野風を寒みあき萩のうつりも行くか人のこゝろの

釋 ○行くか　「か」は歎辭。

大意 あちこち吹き迷はす野の風が寒いので、秋萩の花の移ろつて行くやうに、思ふ人の心が、餘所へ移つてまあ行くことよ。

評 暮秋の蕭條たる景氣に誘はれて、いよく人に捨てられた賴りない寂しみを感ずる。上句は序である。四五句の倒裝、促迫した意趣に相協つて、調が諧ふ。「か」の辭、「の」の辭呼應して、鏘然たる響がある。

小野小町

今はとてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへに移ろひにけり

釋 ○時雨に　時雨の如くにの意。萬葉集卷十一「秋津羽に匂へる衣」などのにである。○ふりぬれば　降りに、舊りをかけた。

大意　この節の時雨の降るといふやうに、私の身が舊くなつたによつて、その時雨に木の葉の色の變るやうに、心ばかりか以前仰しやつたお約束の言の葉までが、存外に變つて來ましたわい。

評　時節柄の時雨に移ろふ木葉に擬へて、かの比翼連理の傘言を拈出し來つて、輕薄の兒を愧死せしめようとする。この場合にふさはしい手段である。比喩の重疊、緣語の修飾、この作者の家風と知られる。後撰集冬に再出して、初句あきはてゝとある。かくてはいよ〳〵纖細に流れるであらう。

かへし　小野のさだき

人を思ふ心木の葉にあらばこそ風のまに〳〵散りも亂れめ

大意　私が貴方を思ふ心が、仰のやうに時雨に移ろふ木の葉ならばこそ、風の吹くに隨つて、餘所へ散り亂れもしませう、しかし心が木の葉といふことは無いから、決して餘所へ散り亂れて移ることではありません。

評　何事があつても、心配なさるなの餘意がある。贈歌の「言の葉さへに」とあるについて、この一場の活地を發見して、水火の言舌を弄する處、太だ狡獪である。

業平の朝臣、きの有常がむすめに住みけるを、うらむることありて、しばしのあひだ、晝はきて、夕さりは歸りのみしければよみてつかはしける

あま雲のよそにも人のなり行くかさすがに目には見ゆるものから

釋 ○業平の朝臣云々　業平が紀有常の娘の許に通つて壻になつてゐたが、面白くない事があつて、暫の間晝は來て、夕方には歸り〳〵してゐたので、有常の娘が詠んで業平に贈つた歌との意。「むすめに住む」とは娘の壻になること。伊勢物語には、

昔男、宮仕しける女の方に、御達なりける人をあひ知りて、程もなくかれにけり。同じ所なれば、女の目には見ゆるものから、男はあるものにも思ひたらねば

と詞書があつて、この歌を載せた。○あま雲の　「あま」は天の意。こゝは雨の義ではない。大空の雲は遠く隔たつた物なので、「よそ」の序に用ひることは、萬葉に例が多い。但こゝは序詞を一轉して、比喩に用ひた。○か　歎辭。

大意 天雲の遠よそにあるやうに、よそ〳〵しくまあ貴方のなつて行くことよ、それならば隠れて見えぬやうにもなる筈を、さすがに晝はお出があつて、天雲の目に見えるやうに、お目にはかゝりながらサ。

評 怨めしいお仕打よの餘意がある。夜泊つて朝歸るのが當時の慣習であるから、晝ばかり見えて、夕方歸つてしまふものは甚しい皮肉な仕打である。かうしてとゞの詰りは棄てられるのだと意識すると、默つてはゐられない。「天雲」の比喩は前代からの套語だが、これはいかにもよくあてはまつて使はれた。

かへし　　　　なりひらの朝臣

ゆきかへり空にのみしてふることはわがゐる山の風早みなり

釋 ○ゆきかへり空にのみして　空にのみ往返してといふを前後させていつた。○ふる　經る。

大意　貴方の仰しやる天雲が、空にばかり往來をして時を經ることは、なぜかといふに、そのかゝつてゐる山の風が烈しさに、落ち付きかねるからであるわ、私もその通りで、往きつ戻りつ足をとめずに、どちら付かずに月日を經る譯は、私が妻として住んで居る貴女のお心が變り易くて、氣が早いからであるわ。

評　不足は此方からいふべき筈なのにの餘意がある。「わがゐる山の風早み」、これ詞書にある「うらむることありて」に當つてゐるので、女の密夫を引き入れたことを怨んで、夜は足をとめずに立ち歸つたのである。「わが」を、景樹が「こなたにかくるは非なり。上の天雲のさま、皆わが上なるに、更に又わがと、我が身をいふべきにあらず、このわがは、人のわがなり」と解したのは甚だむづかしく過ぎる。これは、起句もわがゆきかへりといふべきを、下のに讓つて略いたのである。すべて戀歌にある天雲のうへで、首尾をあはせた。諷託寄興は巧妙ともいへないが、譏刺の意は殊に痛切である。

題しらず　かげのりのおほ君

唐衣なれば身にこそまつはれめかけてのみやは戀ひむと思ひし

釋　○唐衣　離別「唐衣きつゝなれにし」の條に既出。○なれば　著馴れなばの意。○かけて　心に懸けること、唐衣の緣語である。といふは衣は衣桁などに懸けるが常であるから。

大意　着物は著馴れると柔かになつて、身にぴつたりと著き纒ふであらう、それに引き換へて、人が馴染になつてからが、このやうによそ〳〵しく、たゞ常住に心懸けてばかり居て、戀ひ焦れようとは思つたことであつたか、いや思ひも寄らなかつたことよ。

評　比興の作、しかし大した事もない。

とものり

秋風は身をわけてしも吹かなくに人の心のそらになるらむ

釋　○あき風　飽きに、秋風をかけた。○身をわけて　體内を吹きとほるをいふ。野を吹き過ぎる風を野分といふの類である。○しも「し」は强辭、「も」は歎辭。

大意　秋風は野などを分けて吹きもすれ、人の身を分けてはサ吹かぬのに、何で風に草木の葉などの、空に吹き上げられるやうに、私に飽きたあの人の心が浮かれて、よそ〳〵しくなるのであらうぞ。

評　吹く風が物を空に颺げることは、この頃の常套語で、大井川行幸の序にも、「拙き言の葉は、吹く風の空に亂れつゝ」など見えた。「心の空になる」といふより、折柄の秋の野分の風を聯想し來つて、「身を分けてしも云々」と、一不審を提出した。「身を分けて」は、後撰及び六帖に、

身を分けて霜やおくらむあだ人の言の葉さへにかれも行くかな

と同じく、區別する意ではない。契沖、眞淵、宣長などの「わが身、人の身と分けては」と解いたのは甚しい誤である。三句の下に、何故にの語を挿みて聞く格である。

三句、家集には吹かねども、結句、顯本にはちるらむ、六帖にはみゆらむとある。

源宗于朝臣

つれもなくなり行く人の言の葉ぞ秋よりさきの紅葉なりける

大意　紅葉は秋になれば色づく物であるが、次第につれなくなつて行く人の言の葉はサ、秋より先の紅葉であつて、時節の秋も來ぬうちに、皆變つてしまつたわい。

評　言の葉の變るより、木の葉の色變るを聯想して、「秋より先の紅葉」と隱喩したのを、一ふしとする。家集には、二句言の葉や、結句なるらむとある。

心地そこなへる頃、あひしりて侍りける人のとはで、心地おこたりてのち、とぶらへりければ、よみてつかはしける

兵衛

死出の山麓を見てぞ歸りにしつらき人よりまづ越えじとて

釋　○心地そこなへる頃云々　相語らうた男が、病中には見舞に來ないで、全快した時分に來たので、詠んでその男に贈つた歌との意。○死出の山　死有の相を別譯阿含經に、「死山、能壞二一切壽命一」とある。又涅槃經に「有二四大山一、從二四方一來、欲レ害二人民一、四大山卽生老病死也」と見えて、死の險難を山に譬へたまでゝある。然るに、十王經といふ僞經に「閻魔王國堺、死天山南門云々」と作つてから、實の山の如くになつた。

大意　この間は私も煩つて、既のこと、あの世の界と聞く死出の山まで行つたのに、その時見舞に來て下されぬ無情の貴方とは違つて、私はその死出の山をも、假令つれない貴方とはいへ、かねて一所に越える筈の約束だから、貴方より先には越えはすまいと存じまして、その山の麓を見てサ、一まづ立ち戻つて參りましたわい。

評　諷詆骨に徹するものである。こんな皮肉は却つて婦人でなくてはいひ得まい。對手の男は、必ず天地にほこ

ろび目の無いことを卿つたことであつたらう。

類本に、二三の句麓よりのみ歸りきぬとあるはわるい。

あひしれりける人の、やうやくかれ方になりけるあひだに、燒けたる茅の葉に、ふみをさしてつかはせりける

小町があね

時過ぎてかれ行く小野の淺茅には今はおもひぞ絶えずもえける

釋 ○かれ行く　離れ行くに、枯れ行くをかけた。○小野の淺茅　戀一「淺ちふの小野の篠原しのぶとも」の條に既出。○おもひ　思ひに、火をかけた。

大意 秋の頃が過ぎて、冬枯になつて行く野は、火をつけて燒くものであるが、身の盛りが過ぎて、貴方が段々遠ざかつてしまひなされた、枯野の淺茅のやうな私は、今は思ひの火が絶えず燃えてまあ居りますわい。

評 その證據には、この焦げた茅の葉を御覽下されたいと、その書簡をつけて贈つたのである。こんな氣の利いた思ひつき、小野にわが氏の小野を寄せたはたらき、すべて作者の小慧を見るに足りる。「波のうねく」と詠んだ妹に愧ぢない。

物思ひける頃、物へまかりける道に、野火のもえけるを見てよめる

伊勢

冬枯の野べとわが身を思ひせばもえても春を待たましものを

釋 ○野火　枯草などを燒き掃ふ爲に、野に著けた火の稱。○もえても　燃えての意。「も」は歎辭である。燃ゆとも の意に解してはならぬ。

大意　時過ぎた冬枯の野が、あのやうに燃えてまあ再び芽の出る春を待つことであるが、人に見棄てられた自分の身を、その冬枯の野であると思ひもするならば、この胸の中に、思の火の燃えたまゝにまあ辛棒して、復もとにかへる時節の來るのを待たうものをサ、何といつても、自分は冬枯の野とはちがつて生身ナマミであるから、思の火に焦れ死をして、その時節を待ち得られぬわい。

評 何としたいたづら者か、この可憐の佳人をして、こんな苦勞をさせる。冬枯の野でも、なほ萌えて春待つ光明が未來にある、然るに自分の未來は絶望である、冬枯の野にも及ばないと、思ひ入つた感傷的情致は、全く同情に堪へない。

六帖に、初句霜枯のとある。結句、六帖の一本に待つべきものを、今一本には春にあはましものをとある。貫之集にあるのは、本行のと同じい。但貫之の歌ではあるまい。六帖には、作者を小町があねとしてある。これはこの集の排列を見誤つて、上の歌の作者を、これにまでかけて見たのであるらしい。

とものり

水の沫のきえでうき身といひながらながれてなほも賴まるゝかな

釋 ○きえでうき身　消えずして浮くに、憂き身をかけた。○ながれて　長らへての意。流れてをよせた。

大意 思ふ人に見捨てられて、水の沫の消えないで浮くといふやうに、消えもえせず卽ち死にも得せぬ憂い身とはいふものゝ、何時もかうばかりでもあるまい、又逢はれることもあらうかと生き長らへて、やはりまあ末を頼みにされることよ。

評 例の緣語のくさり續けで甚だうるさい。「ながれて」も水の緣である。「いひながらながれて」とある同音の反復、聲調はなだらかに聞える。諸註、二句の「て」の辭を淸んで、眞淵は、「消えて浮くといひかけて」といひ、景樹は、「消えては浮くの意」といひ、宣長は、「初句はきえてにのみ係る序にて、うきへまではかゝらず」といつた。いづれも義理が十分にすまない。今は廣陰の說に從つて、「て」を濁つて、否定の辭として解いた。六帖及び、友則集に、二句うき世と、三句知りながら、四句ながれても猶とある。又六帖の再出のには、三句思へどもとある。また六帖には、作者は伊勢となつてゐる。景樹は「歌のさまより推して、伊勢のならむ」といつたが、一往尤もとも思はれるが、なほよく考へると、六帖のは上から次を逐つて、本集の作者を見誤つたに相違ない。

よみ人しらず

みなせ川ありて行く水なくばこそ遂にわがみを絕えぬと思はめ

釋 ○みなせ川　戀二「言にいでていはぬばかりぞ」の條に旣出。○ありて　川の在りてに、我が身の存在しての意をかけた。○わがみを　身をに、水脈をよせた。

大意 平日は水が無いといはれる水無瀨川に、いつまでも絕對に流れ行く水が無いならばこそ、とうとうこの川

は水脈が絶えたと思はう、その如く今は棄てられたとしても、長らへてみて、いよ〳〵何等の便りもないなら、その時こそとう〳〵貴方が私の身を見限つたと思はうわ。

評　しかしその水無瀨川でさへ、折には水が流れて水脈を作すから、わが中も亦もとに反る緣が無いことでもあるまいの餘意がある。この貞淑な心長さには、どんな者でも反省を促される。この種の比興は正敍を避けて逆寫した描法だから、曲折がその間に生じて、體裁のおのづから巧緻となるのは據ないが、水無瀨川の緣語が、あまりに細かに貼き過ぎてゐる。

みつね

吉野川よしや人こそつらからめはやくいひてしことは忘れじ

釋　○はやく　夙（ハヤ）く。○ことは　言はの意。

大意　吉野川の名のやうによしく、貴方こそそのやうにつらくもなさらう、しかし私は、貴方が以前お約束なされたお詞は、決して忘れは致しますまい。

評　わが飽くまで故を思ふ情を敍べたのは、卽ち反映の手段で、これ早くもその約束を反故にした人への諷刺である。この歌を贈られた女は、どんなに面目ない事だつたらう。初句は同音を疊んで、「よし」を呼び出す序としてゐる。吉野川は急流なので、「はやく」もその緣語である。

よみ人しらず

世のなかの人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞありける

釋 ○花ぞめの　花染の如くの意。花染は、月草の花で染めたもの。月草は秋上「月草に衣はすらむ」の條に既出。宇治拾遺に「色は花を塗りたるやうに、青じろにて」とある。

大意　世の中の人の心といふものは、色に喩へれば、丁度花染のやうなもので、至極變り易い色でゝあつたわい。

評 眞淵が「世の中と廣くいひて、心は一人をさせるなり」といつたのは適解である。色の移ろひ易いことから聯想して、人の心を花染に喩へた。元來花染は最も原始的の染料であるが、奈良平安時代を通じて盛んに用ひた。染花（ウツシバナ）といつて、その花汁を紙に移しておいて年中の所用とした。故にこの移ろひ易い色であることは恐らく知らぬ者はなかつたと思はれる。随つてその時代としては新味は乏しい譯になる。況や花染即ち月草染を、移ろひ易い例に引くことは、既に萬葉に數多見えてゐる。

初句、六帖には月草のとある。

○

心こそうたてにくけれ染めざらば移ろふことも惜からましや

釋 ○うたて　春上「散ると見てあるべきものを」の條に既出。○ましや　「や」は反動辭。

大意　うたてや自分の心がゝ憎いわ、なぜといふに、染めぬ色の變ることの無いと同じく、自分から思はずば、人の心の變るのも惜しからうかまあ、惜しくも無い筈だ。

評 「天をも怨みず、人をも咎めず」で、只わがこの心を責めた。一寸半悟りのやうな事をいつては見たが、さて

心は心として、思ふまゝにはならぬから、依然としてあきらめがつかない。これら愛憎の葛藤から生ずる煩悶の情的心象の變化を味ふ時は、幾多の滋味を藏してゐる事が知られよう。まづ「心こそうたて憎けれ」の矯語を下して、三句以下その理由を説明した。

こまち

色見えでうつろふものは世の中の人のこゝろの花にぞありける

釋　○色見えで　草木の花ではその色相をいひ、心の花ではその氣色又は樣子をいふ。○移ろふ　變るをいふ。

大意　草や木の花は、色にあらはれて移ろふと見えるが、さう氣色にもたゝずして移り變るものは、たゞ一つ、世の中の人の心の花でサあつたわい。

評　上の「世の中の人の心は」と同じく、廣くいつて實は一人をさしたのである。「心の花」は心的現象を花に混喩した語で、そのあだくしい限りを敍べた。暢達流麗、おのづから感慨がある。

よみ人しらず

われのみや世をうぐひすと鳴きわびむ人の心の花とちりなば

釋　○世をうぐひす　世を憂といふに、鶯をかけた。○うぐひすと　鶯の如くの意。○花と　花の如くの意。

大意　私一人ばかり、世が憂いといふ名の鶯の鳴くやうに、泣いて辛氣に暮らすであらうか、あの人の心が花の散るやうに、自分を離れようならばサ。

評 いよ〳〵棄てられたのではないかといふ疑ひの起つた時の作で、悲しい豫想に、その時は泣くより外はあるまいと思ふ折から、鶯の盛んに落花に紛れて啼くのを見て、湊合して詠んだ感懷である。

そせいほうし

思ふともかれなむ人をいかゞせむあかず散りぬる花とこそ見め

大意 いかな程戀しく思ふとも、遠退いていかう人を何としようぞ、どうも仕方が無いわ、いつそ奇麗にあきらめて、まだ十分見足らぬうちに早く散つた、花だとサ思つて居ようわサ。

評 飛花は再び梢に還らぬ、この理は見易い。この見易い道理を捉へて、そこに姑く慰めの天地を作らうといふ。大層冷靜に構へた處は達者の言にちかい。がこれは口と腹とは大した相違なので、自分から離れて往つた人が戀しくて〳〵溜らぬあまりに、一寸かうも考へて、我れと我が心の熱を醒まさうと試みたものである。實は悲しい歌なのである。幽怨の致、妙は說破せぬ處にある。

新撰和歌に、初二句今はとてかれなむ人もとある。

よみ人しらず

今はとて君がかれなばわが宿の花をばひとり見てやしのばむ

大意 もうこれ限りといつて、君が遠退いて、來ぬようになつてしまはうならば、仕方が無いから、このわが宿の花をば自分ひとりで見て、一緒に見た事もあつた君のことを、いろ〳〵と思ひ出さうか。

評 男が漸く冷淡に寄り付かなくなつてゆくので、行末を想像して悲觀した。花以外に思出草になる物もない趣が、「花をば」の辭で表現されてゐる。「看ㇾ花滿ㇾ眼淚、楚王共不ㇾ言」など、樂しい追懷を催すべき花は、悲哀の情に對映して、なか〳〵に苦悶を多からしめる。「女の歌と見えて、哀れにやさしく侍るかな」と、古人の評したのは尤もである。

以上四首一類の歌で、或は花につけ、或は花に對して、懷を敍べてゐる。

宗于朝臣

忘草かれもやするとつれもなき人のこゝろに霜はおかなむ

釋 ○忘草　上に既出。

大意 自分を忘れた人の心の忘草も、若しや枯れもして、又もとのやうに思つてくれる事もあらうかと思へば、あのつれない人の心へ、霜が置いてもらひたいわ。

評 忘草より霜を聯想して、その霜を人の心にと希つた奇巧には驚かれるが、眞實味は淺い。

寛平の御時、御屛風に歌かゝせ給ひける時、よみてかきける

そせいほうし

わすれ草なにをか種とおもひしはつれなき人の心なりけり

釋 ○屛風に歌書かせ　屛風の色紙形などに、素性に命じて歌を書かせられた時、素性が新に詠んで書いた歌と

の意。

大意　これまで忘草といふ物は、何を種にして生えることかと思つて居たは、不覺の至で、その種はつい目の前の、自分につれない人の心であつたわい。

評　序文に「大和歌は人の心を種として」と書いたと同様の巧で、これは今始めてそれを會得した趣にいひなしたのが面白い。「なりけり」に係るべきその種はといふ主語が略いてあるから、意釋の如くに解しないと、その意がたじろぐ。「は」の辭一字點睛の妙がある。調も流滑である。小町集に、

忘草わが身につむと思ひしは人のこゝろにおふるなりけり

類想の同型だが、比較すると、遙かにこの洗煉の作であることが知られよう。

詞書の趣によると、この作者はいみじき手かきであつたらしい。貫之などにさしつぎの伎倆であつたらう。賀部にも「よみて書きける」の詞書があつて、貫之と素性の名が竝んである。

三句、新撰和歌に思ひしをとある。

題しらず

秋の田のいねてふこともかけなくに何をうしとか人のかるらむ

釋　○いね　稻に、去ねをかけた。○こともかけなくに　言も懸けぬにの意。「なく」はぬの延言。○かる　離るに、刈るをかけた。

大意　秋の田の稻は刈つて物に掛けて乾すが、思ふ人の來られた時、自分が嫌つて、その秋田の稻といふやう

に、去ねといふ詞をも掛けはせぬに、それにまあ何を憂いと思つてか、このやうにあの人が遠退いて離れて來ぬのであらう。

評 緣語の修飾が、うるさいいやな氣がする。

新撰和歌に、二句いねといふことも、下句をらじとなどか人のいふらむとある。

紀貫之

はつ雁のなきこそ渡れ世の中の人のこゝろのあきしうければ

釋 ○はつ雁の　初雁の如くの意。○あきし　飽きに、秋をかけた。「し」は强辭。

大意 自分は空を渡る初雁のやうに泣いてサ、月日を經るわ、その譯は、世の中の人の心に來る、飽きといふ秋がサ憂いからサ。

評 秋には雁の鳴き渡るのを有意に取り合はせた。「世の中の人」は例の一人をさしたのである。

よみ人しらず

あはれともうしとも物を思ふ時などか淚のいとなかるらむ

釋 ○いとなかるらむ　「いとなし」はせはしいことをいふ。新撰字鏡に倥偬を伊止奈志と訓んである。

大意 人が情け深くて、あゝ嬉しいと思ふ時も、人がつれなくて、あゝ憂いと思ふ時も、何でかうも、淚が暇なくこぼれるのであらうぞ。

評 人の知り切つた平凡の事實、只一つ疑問の語を著けて、纔に詩情の搖曳するを覺える。作者は點化の術を心得てゐる。

○

身をうしと思ふに消えぬ物なればかくても經ぬる世にこそありけれ

大意 思ふ人にすてられて、限りなくわが身が憂いと思ふのに、流石に命はえ消えぬ物なので、このやうに憂い身ながらも、やはりそれなりに經て行けば行かれる世でさあつたわい。

評 見棄てられたら、その悲歎にすぐにでも死ぬやうに思ひながら、よくもいまだに居るものと、過去の回想に耽つたので、人間の弱さを告白したものである。上句の説明的なのがくちをしい。

典侍藤原直子朝臣

蜑の刈る藻に住む蟲のわれからとねをこそなかめ世をば恨みじ

釋 ○われから 名詞のわれからに、我れからをかけた。「われから」を秋成は「六帖には、別の題に出だせれば、その世には、人知りたる物なるべし。貝などの一種にて、破殼の義とも思はる。伊勢物語にも、われから身をも碎きつる哉とよめり。こはわが友正のりが考なり」といひ、大和本草には「藻にいで來る蟲にて、細く長きものなり」といひ、北邊隨筆には「藻につきたる貝にて、殼の一ひらなる物」といひ、又景樹は「因幡わたりにて海布に小蝦の如きいとさゝやかなる蟲のつきたるをいふ。さるは、甲めきたる物のもぬけたる、或は破れたる

さまなど、はかなげに見ゆめり」といつた。なほ玉勝間、閑田耕筆、瓦礫雜考、茅窓漫錄、後撰新抄、參考勢語附錄など、うるさい程前人の說があるが、いづれもたしかな事はない。○ねをこそなかめ　聲をあげて泣かうの意。

大意　海士の刈る藻の中に住む、われからといふ蟲の名のやうに、何事も我れから仕出した事と了見して、自分一人音を立てゝサ泣かうわ、つれない人を恨みはすまいぞ。

評　われからに就いて、久保之取蛇尾(クボノスサビ)にいふ、

顯註、八雲御抄、色葉和難、餘材抄、たしかならず。今試に僻案をいはむ、仁德紀に「故諺曰有海人耶(アマナレヤ)、因己(オノガ)物以泣(モノカラネナク)、是其緣也云々」。古今の歌はこれによりて詠めるならむ。海士の刈る藻に住む蟲とは、かの調進の魚をいふ。われからとねをこそなかめとは、彼の諺に、おのが物から音泣くといへるが如し。かく見る時は、たしかなる證文ありて、われからとは貝ぞなどいふ論なかるべし。云々。

調進の魚を蟲とは、あまりに甚しい牽强で、失笑したくなる。無論意釋の解に從ふがよい。初二句は序である。三句以下は、まことに「有海人耶因己物以泣」の諺に據つたものだらう。人のつれないのをも、皆わが不束なる故と、ひとへにおのれを責めた謙虛な態度と、「音をこそ泣かめ」と限りない心の痛手をむき出しにしたのとは、他の同情を惹く素因をなしてゐる。

この歌伊勢物語には二條后の御歌とし、

戀ひわびぬあまの刈る藻にやどるてふわれから身をも碎きつるかな

といふ業平の返歌がある。

いなば

あひ見ぬもうきもわが身のから衣思ひしらずも解くる紐かな

【釋】〇わが身のから衣　我が身からの意に、唐衣をかけた。「から衣」は羇旅「唐衣きつゝなれにし」の條に既出。〇紐　こゝは下裳の紐である。

【大意】思ふ人に逢はれぬのも、その人のつらいのも、皆我が身からなので、自分のやうな者は、とても先の氣に入る譯は無いのに、その人の思つてくれる知らせがましく、さても〳〵譯がわからずに、解ける下紐であることよ。

【評】下紐の解けるのを、人に戀ひらるゝ兆とすることは、戀一「思ふともこふとも逢はむものなれや」の條に說明しておいた。しかもその歌とこれとは類想の同型である。只彼は一度も逢ひ見ぬ趣、これは逢ひ見たが飽かれた趣であることが差つてるるだけである。下紐の思ひ知らずとある擬人を一ふしとする。二句の碎けたのと三句へのうつりの辭樣とは、餘り快くもない。

寬平の御時きさいの宮の歌合の歌　すがのゝたゞおん

つれなさを今はこひじと思へども心よわくもおつるなみだか

【釋】〇なみだか　「か」は歎辭。

【大意】人のつれなさを思ひ知つて、今はもう戀ひ慕ひはすまいとたしなむけれども、ともすれば思ひ出して、さ

てもさても心弱ぐまあ、こぼれる涙であるよ。

評 何と理性で抑へても、涙の方で承知しない。戀の眞諦が卽ちこゝに存する。六帖の詠者不詳の歌に、
戀ひしとはいはじと思ふにきのふけふ心よわくもおつる涙か
同想の同型、どちらが先であらうか。思ふに、或はこの歌が轉つて傳はつたものではあるまいか。初句、新撰萬葉につれなきをとある。これは意が一層明確である。

題しらず　伊勢

人知れず絶えなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはましものを

大意 はじめから二人の中が、世間の人に知られずに、そして切れてしまふのであらうならば、つらい事ながらも、せめてあれは無根の噂だとでもいひもしようものを、はやもう世間の人も知つて居るので、さうもいはれねば、切れたうへに浮名が立つて、さてさてつらい事よ。

評 當時は一夫多妻であり、そして男子はなかなか放縱であつた。だから忘られる卽ち棄てられる危險は婦人には多かつた。その場合その自尊心と名譽とを傷けない唯一の彌縫策は、男との關係を祕密に葬ることだけれども、公然と人が知つた中では、それも出來ない。進退谷つた苦悶の聲、悽愴の感に打たれる。古本今昔物語に、今は昔伊勢の御息所のいまだ七條后の御許に候ひける頃、枇杷左大臣(仲平)若くして少將にてありける程に、いと忍びて通ひ給ひけるを、忍ぶとすれど人おのづからほのかに、そのけしきを見てけり。その後少將通ひ給はずして音なかりければ、かく詠みてなむ遣はしたりける。「人しれず云々」と。少將これを見てあはれと思

ひけむ、かへりてなむ此度はあらはれていと思ひて住み給ひけるとや。

とあるのは、その事情を裏書するものである。

二句、六帖にやみなましかばとある。

よみ人しらず

それをだに思ふ事とてわが宿をみきとないひそ人のきかくに

釋 ○思ふ事とて　思ふ事としての意。○きかくに　聞くにの意。くの延言は「かく」である。

大意　貴方に今飽かれたのはつらい事であるが、そのうへに棄てられたなどいふ噂が立つては猶更つらい故、せめて噂の立たぬやうにする、それをなりとも私を思つて下さる事として、外の話のついでにも、私の家を見たなどと、決していつて下さるな、事ありさうに人が聞くによつてサ。

評 「わが宿を」とあるので見ると、壻殿を家に通はせたのである。然るにその壻殿が甚だ浮氣な奴で、來たかと思ふともう愛想を盡かして來ない。これでは婦人の立場として我慢の出來ない侮辱と悔恨を感ずる。そこでいつそ私の家へ來たといつてくれるな世間の手前もあるからと、滿足すべからざる事に滿足して、せめてそれを恩に着ようと歎願した。その心情は頗るあはれである。宣長が初二句を、人を深く思ふ時はその人の家をなりとも見たく思ふものなれどもといふ意に誤解して、部立の違つてるやうに論じたのは、なか〳〵である。

○

あふ事のもはら絕えぬる時にこそ人の戀しきことも知りけれ

釋 ○もはら　專ら。

大意　これまで絶え〳〵ながらも、逢ふことのあつた間は、待つといふ樂みもまじつて、戀しさもさ程では無かつたが、今からう一向に絶えてしまつて、逢はれぬとなつた時にサ、はじめて人の誠に戀しい事も思ひ知つたわい。

評　いひ通つたまでのやうだが、更に見返すと、極端まで突き詰めた感じが出てゐる。

○

わびはつる時さへ物のかなしきはいづこをしのぶ涙なるらむ

釋 ○しのぶ　慕ふ意。

大意　あの人に見棄てられて、難儀しぬいた時節にも、やはり忘れかねて物悲しいのは、どこをあの人の取得として戀しく思つて、流れる涙であるのであらうぞ。

評　一寸理性に返つた或瞬間、しづかに自分をながめたのである。「いづこをしのぶ」と涙を怪しんだのは、卽ち心を怪しんだのである。身を怪しんだのである。といつてどう諦めがつくのでもない。まことに愛着の念はその根が深く、理性に超越してゐる。

後撰集に再出したのは、「男の忘れ侍りければ」と詞書があつて、作者は伊勢である。また四五の句、新撰和歌にはいづれをしのぶ心とある。

恨みても泣きてもいはむ方ぞなき鏡に見ゆる影ならずして　　藤原興風

大意 恨んでも泣いても、この悲しさを、誰れを相手にしていはうぞ、思ふ人は最早絶えて、一向に逢ふことも無ければ、鏡へ映つて見える自分の影で無くては、外に相手にしていはうやうが無いわ。

評 孤煢依るところなく、形影相弔するばかり、この寂寞荒涼たる思ひは、渾べてその人の無情に因縁するのである。下句沈痛で、嗟歎の意が永い。結句の下にはの辭を添へて見ると、意が明瞭に聞える。

夕されば人なき床をうちはらひ歎かむためとなれるわが身か　　よみ人しらず

釋 ○夕されば　冬歌「夕されば衣手さむし」の條に既出。○人なき床　人のゐぬ床。

大意 今は契も絶え果てゝ、來て寢る人もない床を、夕方になれば、以前の通り打ち拂つて、以前夕暮毎には人を待つとて、床の塵を拂つた事を思ひ出しては、空しく歎かう爲に生まれて來た、我が身であることかまあ。

評 拙い運命をかこち、身をはかなんだ愚痴は、この沒理想の誇張となつた。苦勞する爲にこの世に生まれたのかなど、今もよく人のいふ事である。萬葉卷十、

あすよりはわが玉床をうち拂ひ君といねずてひとりかも寢む

を藍本として、更に一歩をすゝめたもので、いづれも婦人の作であらう。

○

わたつみのわが身こす波たち返り蜑（アマ）のすむてふうらみつるかな

釋 ○わたつみのわが身こす波　我が身を超すわたつみの波といふを、倒置していつた。○蜑のすむてふうらみつる　海士の住むといふ浦見つるに、恨みつるをかけた。

大意　海の自分の身をうち超すほどの大波が寄せて、海士の住む浦を見、浦を見しては立ち返り〳〵するやうに、自分の身をさし越して無い者にする人を、今更恨んでも詮ない事ながら、又してもく〳〵恨んだ事よ。

評　顯昭いふ、

我をおきて先に人に逢ふを、わが身こす波とそへたるにや。末の松山（君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなむ）かといふ人あれど、その心見えず、云々。

歌意の解し方は誤つてゐるが、末の松山に關係のないといふはよろしい。なほ戀三「あふ事のなぎさにし寄る波なれば」の條を參照ありたい。

○

あらを田をあらすき返し返しても人の心を見てこそやまめ

釋 ○あらを田　荒れ田。「を」は美稱。○あらすき返し　疎（アラ）鋤き返しの意。打聽に擧げた或說に、「小田は度々すき返し作る、初に鋤くをばあらすきとて、あら〳〵と鋤くなり」とある。今俗にアラクリといふ。○返しても

返してまあ。返せどもの意ではない。「も」は歎辭。

大意 荒田をあら鋤き返すやうに、今一應立ち反つてまあ、人の心をとくと見屆けてサ、いよ／＼心が變つたといふことならばあきらめて、戀ひ慕ふのも止めようわ。

評 この未練、この心長さ、所謂惚れた弱身なのであらう。初二句は、三句の「返しても」にかゝる序である。結句、四音三音の組織だから、調が促つて、上句の長高な序體にふさはない。六帖に「見てこそやまめ人の心を」とあるに從ふがよいかと思ふ。下なる誹諧歌に、なかき、

雲はれぬあさ間の山のあさましや人の心を見てこそやまめ

とあるに紛れて、下句を誤つたのではあるまいか。なほ六帖、又は童蒙抄にある、

伊勢の海のちひろたく繩くり返し見てこそやまめ人の心を

など、いづれもその序詞を殊にするだけで、主成語は同一である。どれが先に出來たものか。

初句、六帖にあらき田をとある。新しき墾田の意である。景樹はこれを宜しとして、一二句を新鋤き返すの意に解きなし、さて「新田は、何返も打こなすべければ、打返し／＼の序に置きて力あるなり」といつた。

○

ありそ海の濱のまさごと頼めしは忘るゝことの數にぞありける

釋 ○ありそ海 荒磯海の義。○まさご 「ま」は美稱。「さご」は砂の略。○頼め 頼ませの意。

大意 大海の濱の眞砂の數のやうに、數々の親切を盡して居るといひ立てゝ、自分を頼もしく思はせておいた、

その濱の眞砂の數は、案外にも自分を忘れる方の數でさあつたわい。

評 冷熱の豹變に驚いて、昔のかね言にもかうした新解釋を與へたことは、即ち深くその不誠意を指斥したのである。怨意が深い。後撰集戀四、

常磐にとたのめしことはまつほどの久しかるべき名にこそありけれ

もこの類想である。

○

蘆べより雲ゐをさしてゆく雁のいや遠ざかるわが身かなしも

釋 ○ゆく雁の　行く雁の如くの意。

大意 蘆邊から空をさして飛んで行く雁の、段々遠くなるやうに、段々と思ふ人にかけ離れて、契の絶えて行く自分の身は悲しいわまあ。

評 三句までの序は、萬葉集巻十、

秋風にやまとびこゆる雁がねのころ遠ざかる雲がくるらし

に類似してゐる。さうした景色を詠め入つてゐる折節、雁のいや遠ざかるから、ふと聯想があの人に走つて往つたやうな趣である。

○

しぐれつゝもみづるよりも言の葉の心のあきにあふぞ佗しき

釋 ○心のあきに　飽きに、秋をかけた。

大意　時雨が降り〳〵して、木の葉が色づいてゆく秋は、わびしいものであるが、それよりもまさつて、親切にいつて下された言の葉の變る、人の心の飽きといふ秋に逢ふのがサわびしいわ。

評 緣語が表現の出發點になつてゐるので、感じが生きてこない。言の葉の混喩、心のあきのいひかけ、新撰萬葉に、

言の葉をたのむべしやはあきくればいづれか色の變らざりける

とあるに似てゐる。さては上の、

わが袖にまだき時雨のふりぬるは君がこゝろにあきや來ぬらむ
今はとてわが身時雨にふりぬれば言の葉さへに移ろひにけり

の二首を錯綜して出來たやうな歌である。

○

あき風のふきとふきぬる武藏野はなべて草葉の色かはりけり

釋 ○ふきとふき　吹きに吹くと同じ。

大意　秋風の吹きに吹いた武藏野は、流石に廣い野ながら、總體に皆、草の葉色が變つたわい、といふが表面の意で、飽きたといふお心が強くなつてくる時には、かねての約束のお言葉は、すつかり變つたわい、といふが

裏面の意。

〔評〕顯昭はこの歌意を釋して、「武藏野といひて、一本ゆゑにの心あるなり」といつた。これは、むらさきの一本ゆゑに武藏野の草は皆がらあはれとぞ見るの意に據つたといふので、景樹も贊成したがわるい。一向無關係のことである。これは、流石に廣い武藏野の草葉も、秋風に色の變らぬは一つもないといひ立てゝ、御親切らしかつた貴方のお言葉も、やはり同じこと變りましたよと、あてつけた皮肉が手際なのである。おのづから含蓄はある。

四句、六帖になべて草木のとある。

小町

あき風にあふたのみこそ悲しけれわがみ空しくなりぬと思へば

〔釋〕○たのみ　田の實に、賴みをかけた。田の實は稻をいふ。○わがみ　身に、實をかけた。

大意　秋の大風に遇ふ田の稻はサ、折角賴みにして置いた私の稻の實が入らずにしまふと思へば情けないわ、それと同じやうに、人の心の秋風にあつて、私の身の賴みが、皆むだになつてしまつたと思へばサ悲しいわい。

〔評〕例の口吻、この人には免れ難い癖であらう。

平貞文

あき風のふきうらがへす葛の葉のうらみてもなほうらめしきかな

釋 ○葛の葉の 「葛」はその葉が廣くて、風に飜りがちで裏を見せるので、葛の葉の裏見とつゞけ、恨みをかけた。

大意 思ふ人が自分を飽きて裏反つた恨は、秋風が吹き反す葛の葉の、裏を見るといふやうに、恨をいつてもいつても、やはり恨が晴れぬ位、さてもく恨めしいことよ。

評 上句は、「うらみて」にかゝる序である。萬葉卷集十二、

水莖の岡の葛葉をふきかへしおもしる子らが見えぬ頃かも

の序も同じ取材であるが、彼れは葛の葉の表面の隱れる方から見たのを、これはその裏面のあらはれる方から見て、描寫を順逆にした、作者が折角の新案を、後人がやたらに踏襲して陳腐としてしまつたのは、葛の葉のこれも恨めしい限りであらう。「うら」の語の三疊は、わざと巧んだものである。

初二句、六帖に秋風に吹き反さるゝとあるが宜しいと、景樹は論じた。まことに一意到底の序體にはふさはしく、初句三句の終りの「の」の辭の重複も避けられようが、作者の歌風の多くより論ずれば、やはり本文によるべきかと思ふ。

あきといへばよそにぞ聞きしあだ人の我れをふるせる名にこそありけれ

よみ人しらず

釋 ○あだ人 浮氣な人。○我れをふるせる 自分を見棄てゝ、舊人としたのをいふ。

大意 これまでは、あきといへば季節の名と心得て、餘所事のやうに聞いて居つた處が、餘所事では無い、移

り氣な人が自分を見棄てゝ、舊いものにした名、即ち自分を飽いたといふ名でサあつたわい。

評 時節の秋にあひ、又も人の飽きにあつたので、それを湊合した巧である。

初句、打聽木に秋てへばとある。

以上五首、秋に飽きをよせて恨んだ戀である。かやうに秀句を基礎とした構想は、詩としての本旨を誤つてる。度々見ると唾棄してしまひたく思はれるのも、評者ばかりであるまい。

○

わすらるゝ身をうぢ橋のなか絶えて人も通はぬ年ぞへにける

又は、こなたかなたに人も通はず

釋 ○身をうぢ橋の　身を憂といふに、宇治橋をかけた。宇治橋のことは、戀四「さむしろに衣片敷きこよひもや云々」の條に既出。「うぢ橋の」は宇治橋の如くの意。

大意　人に忘られて見棄てられるわが身は、憂いものであるが、その憂いといふ名の附いた宇治橋の中の絶えて人が通はぬやうに、中絶して使の人さへも通はぬ年がサ、何返も經つたわい。

評 まことこの歌を詠んだ頃は、宇治橋の中絶えたまゝに、年久しく經て居たのであらう。大化二年に、道昭和尚が始めて架設してから、延喜の頃までは、二百三十餘年を經た。この間必ず幾多の興廢があるべき筈である。紀に所見がないからとて、「中絶えて」を橋の緣語に設けていつた事とのみ解した前人の說は、太だ妥當でない。

新撰和歌も、結句は左註と同じい。この方調が豪健で面白い。

坂上これのり

あふ事をながらの橋のながらへてこひ渡るまに年ぞへにける

釋 ○ながらの橋　弘仁三年に攝津國長柄郡（今西成郡）長柄の里の長柄川に架けた橋。長柄川は淀川の支流。

大意　長柄の橋の名のやうに、生き長らへて、あの人に逢ふ事を、ひたすら戀ひ望んで居るうちに、はや何年もサ、意外に經つたわい。

評　假初の夜離（ヨガレ）と思つて待ち戀うてるるうちに、年月の經たのを歎いたのである。「長柄の橋の」は三句に同音を反復させた序で、「こひ渡る」は橋の緣語である。初句は直に四句にかけて心得てよい。諸註、逢ふ事を無（ナ）といふに、長柄の橋をかけたと解いたのは、强言にちかい。

とものり

うきながらけぬる沫ともなりななむながれてとだに賴まれぬ身は

釋 ○うき　浮きに、憂きをかけた。○けぬる　「け」は消えの約。○ながれて　流れてに、生存（ナガラ）へての約なるながれてをかけた。

大意　せめては長らへての末でなりとも添はれよう、といふ賴さへ無いこの身は、いつその事、水に浮きながら消えてしまふ沫ともなつてほしいわ、憂き身ながらに死んでしまひたいと思ふから。

評「ながれて」から水の沫を聯想して、憂き身のまゝに死ぬるを、「浮きながら消ぬる」と轉義し、憂きをいひかけた。失戀の極死を冀ふは、既に分別を超越したものだから、狂熱が横溢して、語々活躍する筈である。それを彫蟲の小技に拘泥してゐるまに、感興を失つたのは遺憾である。

六帖に、二句きえせぬ沫と、結局賴まれなくにとある。又、家集には、二句消えぬる沫ととある。

○

ながれては妹背（イモセ）の山のなかに落つる吉野の川のよしや世の中

釋 ○ながれ　流れに、長（ナガラ）への意のながれをかけた。○妹背の山　妹山と背山とをいふ。紀伊國那賀郡にある。萬葉集に、「せの山にたゞに向へる妹（イモ）の山」「木の川のべの妹とせの山」「並びをるかも妹と背の山」「木の國の妹背の山に」など、數多見えてゐる。宣長いふ、「妹山は兄（セ）の山あるにつきて、只設けていへる名にて、しかいふ山あるにあらじ。背の山のことはたしかに詠めれど、妹山のことはさして詠める歌見えず。今も背山村あれど、妹山は紛らはしくて定かならず」と。けれども、萬葉に、「木道（キヂ）にこそ妹山ありといへ」と詠み、又は、上の諸例どもを考へ渡すに、全然詞のあやとばかりもいひ難い。又、眞淵は、「妹山は大和、勢山は紀の國にありて云々」といつたが、これも萬葉に「木の國の妹背の山」とあるから從へない。古くは、すべて男性女性の間にも又兄妹の間にも夫婦の間にも、男を背（セ）、女をいもといつた。

大意 川も流れては、妹山背山の中へ落ちる吉野川と隔てるやうに、すべて人間の男女（イモセ）の中も、長らへて年久しくなれば、何時までも元のやうに睦まじくは無くて、自然隔てが出來るもその筈のことよ、よしまゝよ、これ

が世の中の有樣であるわ。

評 されば心の變つた人を怨むのも、よい程にして置かうの餘意がある。世の鹽も十分嘗め盡した人の口吻らしい。が實はかうなるまでには、散々苦勞をさせられたので、もう怨むもおこるも出來ない程に、彈力がなくなつた結果である。だから怨意が幽婉で迫つた點がない。比興を以て立意の骨子とし、「吉野の川のよしや」と同音を反復して、「世の中」と體言にいひ捨てた風姿、無限の含蓄と餘韻とがある。字句にまた一のたるみがなく、聲調も流麗である。

四句、新撰和歌に吉野の瀧のとある。

古今和歌集卷第十六

哀傷歌

いもうとのみまかりける時よめる　小野のたかむら

泣く涙雨とふらなむわたり河水まさりなば歸りくるかに

釋 ○哀傷歌は、萬葉集にいはゆる挽歌(バンカ)である。悼亡の作を收めた。○いもうとの　小野氏系圖に據ると、篁の異腹の妹にあたる。○雨と　雨の如くの意。○わたり河　三途川をいふ。三途とは、火途刀途血途の三つで、即ち地獄餓鬼畜生の三惡趣を三大河に喩へていふこと、金光明經に見える。僞經十王經には、死出の山の先にある大河で、河中に三所の瀬があるといふ。よつて三瀬川(ミツセガハ)とも直譯して歌に詠まれた。○かに　助辭である。爲にと譯する。

大意 この私が泣く涙よ、いつそこぼれるならば、雨のやうに降つてもらひたい、それで冥土の三途川に、水が增ることであるならば、その川を渡りかけた妹も渡りかねて、再びこの世に立ち歸つてくるであらう爲にサ。

評 一朝の暴雨に動もすれば川止めの悲劇を演出した時代は、「越すに越されぬ大井川」と謠つた。いやこの時代は、洛中洛外でも雨降の川どめはよくあつたものだ。即ちこれを佛教思想の三途河に湊合して、涙の雨の川止

めに、亡者が渡りかねて立ち戻つてくることを熱望した。これらの構想は到底現代に見られないものである。更に思ふに、往時は異腹の兄妹の相婚を禁じなかつたから、篁はいたくこの妹君に懸想し、

中に行く吉野の川のあせななむ妹せの山を越えて見るべく

と詠んだ歌が玉葉集にある。骨肉の愛にかてゝ加へてこの戀愛を以てしたので、頗る情合の切なものがあつたらうと想像される。それを端なく、香奩人去つて玉堂いたづらに空しい。悲んでなほ悲み、傷んで又傷む。その蘇み返る事を切望したのも無理はない。玆に至つて現世と幽界との見さかひがなくなつてしまつた。さては徒に巧語を弄して眞情を忘れたものでないことが知られる。雨をまで聯想したので、涕涙の千行を拭拂すれば、更に萬行と落つる狀が思はれる。涙の溢れるのを「降る」といつたのは、勿論雨の緣語である。

前のおほきおほいまうち君を、白川のあたりにおくりける夜よめる　　素性法師

血の涙落ちてぞたきつ白川は君が世までの名にこそありけれ

釋 ○前のおほきおほいまうち君を云々　前の太政大臣を白川邊に葬送した夜よんだ歌との意。前の太政大臣藤原良房であることは春上「年ふればよはひは老いぬ」の條に既出。良房は貞觀十四年九月二日薨じた。山城國愛宕郡の後の愛宕の墓といふのがこの墓所で、卽ち白河である。爲家抄には今の法勝寺とある。大鏡にも、「白河にをさめ奉る日」とある。○血の涙　涙竭きては血を流すといふ本文による。韓非子に「卞和抱二其玉一哭二楚山下一三日三夜、泣涙盡、繼レ之以レ血」。○白川　志賀山越の傍に白川の瀧があり、その水の末流は洛外を通

つて鴨川にそゝぐ。

大意 この薨去の悲しさを泣く、拙僧の血の涙が、落ちてたぎつて流れる事よ、さてはこの川水が赤くならうから、この川の名を白川といふのは、良房公御在世の時かぎりの名でサあつたわい。

評 血の涙と、白川との色相上の對映は、畢竟これ文字の洒落で面白くない。但この皮相の色彩は燦として、當時の人士の素人眼を眩ましめた趣が、大鏡に見えてゐる。誇張に過ぎて殆ど妄想に近い程なのを、斷乎としていひ切つたその眞實に取るべき點がある。かういはれるといかに沒常識の事も、或はさうかしらとつい釣り込まれる。諸註、かくては最早白川にあらずして赤川なりと、餘意をいひ添へたのは甚しい蛇足である。

堀川のおほきおほいまうち君みまかりにける時に、深草山にをさめける後(ノチ)によみける　　僧都勝延

うつせみはからを見つゝも慰めつ深草の山けぶりだに立て

釋 ○堀川の云々　藤原基經、京の堀河に第があつて、堀河の太政大臣と稱する。寛平三年正月十三日薨じた。深草山は山城國紀伊郡深草村にあり、稻荷山の尾續きの山である。榮華物語には、木幡をこの公の葬所としてある。上田秋成の考に、「木幡は深草山のうしろにて連絡したれば、深草山と云へるが、卽ち木幡山にや」と。○うつせみ　空蟬の義で、蟬の蛻(マケガラ)をいふ。但こゝは蟬のことに用ひた。この語、古來現し身の轉じた語のやうにいふが、全然別語と見る方が穩やかであらう。○から　蛻(マケガラ)。

大意 蟬ははかなげな物だが、その遺した蛻を見い〳〵して、氣を慰めたわ、然るに、基經公は火葬に附して遺

骸さへもとゞめぬのが餘りだから、この深草山に、せめてその火葬の烟なりとも殘つて立てよ、さらば公の形見と思つて慰まうはサ。

評　深草山の野邊送り、一夜明けると、今は早その荼毘の烟さへ消散し去つて、形見としては一物をもとゞめぬのに感じ、深草山を呼びかけて、その名殘の烟を要求したのに、追慕の情の甚しさが見える。上句は下句の爲に設けた比興の句ながら、蟬に蛻を見て慰む事は、甚だその謂れがない。或は現身は骸を見つゝも慰めつの意に解したらどんなものかとも思ふ。

六帖、又遍昭集に、下句けぶりだに立て深草の山とあつて、四五の句が轉倒してゐる。眞淵は遍昭集を杜撰として、本文を執したがその理由を說明しない。景樹、及び八田知紀は本文を排し、知紀は「もとのまゝにては理のみ聞えて、歎聲の響なし」とまで極言した。景樹、知紀等がいはゆる調とは、どんなものか知らないが、語急に節の促つた句を以て結束した本文の方が、却つてこの歌にふさはしい自然の調であると思はれる。

かむつけの峯雄

深草の野べの櫻しこゝろあらばことしばかりは墨染に咲け

釋　○これも同時の作である。○深草の野べ　前にある深草山の裾野をいふ。○櫻し　「し」は强辭。○こゝろ　同情の意。○墨染　黑色をいふ。

大意　總べて草木は無情の物ながら、今度基經公を葬送したこの深草の野原の櫻よ、お前に思ひ遣りがあるならば、何時はともあれ、今年ばかりは喪服の色の墨染に咲きなさい。

【評】當時の喪服は、橡、鈍色などで、おなじ黒にも濃淡の差があつた。さて花の頃は公の忌日より、まだ五十日にも滿たぬ程だから、御墓に參詣する人のかぎり、我れも人も常の衣とは引き換へて、墨染の袖なのに、墓邊の櫻が例年の通り、花やかに咲き出したのでは、心無しといはずには居られぬ。「心あらば」に櫻は非情の物ながらといひ添へては、分別に着していけない。始から有情の物として扱つて、只同情心があるならといふ激勵の詞と見るがよい。故にこの悲みに同情を有つなら、本來の色相を易へて、悲哀の象徵たる喪服の色に咲けといふ。この沒理趣の要求は、感情の奔馳するまゝに常識の範圍を逸した結果で、そこが詩歌三昧である。人麻呂が「靡けこの山」といひ、業平が「峯も平らになりななむ」といつたのも、亦これに外ならない。ましてや作者はこの公の家人と思はれるから、悲歎の極さう思ひ寄つたのも無理はない。げにこの歌の純眞の情は草木も感じさうである。果して流石の櫻もこの年は黑色に咲いたので、今に藤の森の二町ばかり南の地に、その櫻の故地として、墨染の名稱を存してゐる。信僞は深く辨ずるまでもないが、そんな奇蹟もあつてよさゝうだ。六帖に、二句櫻もとある。意が複雜になり調が弛緩して、却つて妙でない。こゝは一切他事をさしおいて、ただ櫻のうへにのみ就いて、一途にその同情を希つた單調の方が、思ひ入つた情が強く表現される。

藤原敏行朝臣のみまかりける時に、詠みて、かの家に遣はしける　　紀友則

寐ても見ゆ寐でも見えけり大方はうつせみの世ぞ夢にはありける

【釋】○藤原敏行朝臣の云々　敏行は延喜七年卒と拾芥抄にある。すると同五年撰進のこの集に、この歌の載る筈

がない。一說には昌泰四年の卒とある。○うつせみ、現し身の意。

大意　此度の御主人の御不幸に就いて思つて見れば、夢といふものは、寢て居ても見え、寢ずに居ても見えるわい、するともと〲この人間の世がサ、はじめから夢であつたわい。

評　あゝ敏行殿の事は、寐ずに見た夢のやうに存じますの餘意がある。身世を夢と觀ずることは、莊子に、

夢飮酒者旦而哭泣、夢哭泣者旦而田獵、方其夢也不知其夢也、夢之中又占其夢焉、覺後而知其夢也、且有大覺而後知此其大夢也、
丘也、與汝皆夢也。予謂汝夢亦夢也、

といひ、維摩經に、

是身如夢爲虛妄見、

又、金剛般若經に、

一切有爲法如夢幻泡影、

などいふ虛無或は無常說に胚胎してゐる。この思想は早く朝鮮文化輸入時代から浸染して、延喜の頃は、社會一般の思想となつてゐたから、別に作者の新案でもない。只この新味は、敏行の面影が起臥に關はらずいつも見える處から、それを旨く夢に撮合した手際にある。初二句の反復漸層は諧調をしてゐる。けり、けるの同辭の重複の如きは、深く問ふ所でない。

二句、一本に見てけりとあるはわるい。六帖、家集、顯本、みな本文の通りである。

あひ知れりける人のみまかりにければ　紀貫之

夢とこそいふべかりけれ世の中にうつゝあるものと思ひけるかな

釋 ○うつゝ　現の義で、實在をいふ。

大意 この度の事に就いて、よく〱思ひまはして見れば、世の中の事は、すべて夢とさいふべきであつたわい、それを今までは、世の中に現實といふことのあるものと思つて居た事よ。

評 死に對して觀ずれば、浮世は一切夢といふべきである。人間常住の思をなすことの非をつく〲と悟る。かう昨非を甚しく觀ずることは、人生の夢ともいふべき所以を強めたのである。詠歎の風姿にすて難いところがある。

三句、六帖に世の中をとある。拾遺集に再出したのにもさうあるが、それは異傳を採錄したに過ぎない。

あひ知れりける人の身まかりにける時によめる　壬生忠岑

ぬるがうちに見るをのみやは夢といはむはかなき世をも現とは見ず

釋 ○この詞書、家集には「世の中常ならず心憂かりし頃」とある。

大意 睡り居るそのうちに見る夢ばかりを、夢といはう事か、それぱかりを夢とはいはれまい、なぜなれば、元來無常の果敢ないこの世の中をも實在とは思はず、皆夢と思ふわ。

評 上の友則の歌の初二句を敷演したやうな歌で、勿論莊子や佛教の意を踐んだものである。「はかなき世をも」

と始から底を割つてしまつては、「現とは見ず」がよく利かない。こゝの三首皆同想同體の歌で、友則がやゝ勝れてゐるらしい。それすら今から評すれば、陳腐の誇は免れ難い。

三句、六帖に夢といふとある。本文の方が優つてゐる。

姉の身まかりける時によめる

瀬をせけば淵となりてもよどみけり別をとむるしがらみぞなき

大意 水の流れて行く川瀬を、柵を掛けて止めれば、淵になつてまあ、水が暫くは止まるわい、然るに、死に行く人の別を止める柵がサないわ。

評 上句は柵にて瀬をせけば水は淵となりてよどみけりの略筆で、その簡淨さを味ふべきである。とめればとまる水を借りて、とめてとまらぬ死別に對せしめた。かうした反對の事相の配合は、詠歎の味を永くする詩家の慣手段である。別を止むる手段を、淵瀬の縁で「しがらみ」と轉義した。又三句まで一氣にいひおろして詠め捨て、然るにといふ接續詞を用ひず、直に「別を止むる」といひ起した、この緩急相拯す節奏は、今の表情に最も適切なる調を得たといつてよからう。萬葉集巻二に、明日香皇女を悼んで、人麿呂が詠んだ歌、

あすか川しがらみかけてせかませば流るゝ水ものどにかあらまし

に胚胎したかのやうである。人麿呂のは婉曲で、調ものびのびしてゐるが、これは意が明晰で調がまた促つてゐる。親身の姉の死んだ場合としては、おのづからかうあるべきである。まづは佳作であらう。

家集の詞書には、「相知りたる人の、すまひの使に、遠き國へ下るとて」とある。一時の別を惜む作としては、

餘り哀傷に過ぎる。無論この集の詞書に從ふがよい。又二句、家集には淵となりつゝとあるが、つゝの語が落着しない。

藤原忠房が、昔あひ知りて侍りける人のみまかりける時に、とぶらひに遣はすとてよめる　　閑院

さきだたぬ悔の八千たび悲しきは流るゝ水のかへりこぬなり

釋　○藤原の忠房が云々　忠房が以前夫婦の語らひせし人が歿した時に、その見舞に使を遣るといふのでよんだ歌との意。「とぶらひ」は見舞の意。○さきだたぬ　悔しさの先立たぬの意。○八千たび　幾度といふに同じい。○水の　水の如くの意。

大意　先に立たぬ後悔の、繰り返しくて悲しいのは、なぜかといふに、流れて逝く水のやうに、死んでいつた人が、二度と跡へ戻つて來ぬのであるわ。

評　忠房の許に弔意をいひ入れる爲に、この歌を贈つたのだから、卽ち貴方の御心中は、かやうの御愁傷とお察し申すとの餘意が含んでゐる。かう當事者の胸中を忖度して、悲傷の意を敍するのは、深く同情をその人に寄せた所以で、弔慰の意がおのづからその中に籠つてゐる。これを諸註ともに、忠房が死者に先立たぬ事を悔むと解いたのは當らない。景樹は、

こは「後悔不レ立レ前、流水不レ還レ源」と云へる本文について詠めるにて、もと其の心離れたる古語の二句を取り合はせて、しひて、一首の趣を立てたる歌なれば、甚だ聞え難し。

と評した。この準據は、顯昭も既にいつた事である。「八千たび」は多數の轉義である。

紀友則が身まかりにける時よめる　つらゆき

あす知らぬわが身とおもへどくれぬまのけふは人こそ悲しかりけれ

大意　時の間もあてにならぬ世の習で、今日はかうして居ても、明日は又どうなる事やら知られぬ我が身ぞと思ひはすれど、まだ明日ともならぬ今日のうちは、わが身のあるまゝに、死んだ人がサ悲しく思はれるわい。

評　例の無常思想の歌である。昨日までは、夢にもかうならうとも思はなかつた友則の、今日ははや隔世の人となつたにつけて、わが明日の命もはかり難い有待の身であることを觀ずる。けれどもさし當つては、やはり人の上の悲まれるのは、これ意智が感情を抑制し切れぬ結果で、そこに友則の死を悼む友情の一方ならぬ態が見はれ、覺えず一掬同情の涙を墮さしめる。大作絶唱ではないが情眞の語で、口誦に値するものである。命あるうちはといふべきを、「暮れぬまの今日は」と轉義して、上の「あす」とあるに對應せしめ、又、「わが」と「人」とを對照させたのなど、措辭が工で緻密である。

延喜十四年の泉大將(藤原定國)の四十賀に、友則の歌がある。すると友則の死は同十四年以後の事でなくてはならぬ。この集撰進の延喜五年より少なくとも十年のちの作である。撰進後頗る出入のあつた確證である。

拾遺集、及び六帖、家集等に、二句命なれどもとあり、結句、家集にはあはれなりけれとある。

たゞみね

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだに戀しきものを

釋 ○時しもあれ　時しもこそあれの略。○ある　生存の意。

大意 一體物事には時節がサあるわ、それに何ぞや、取り分けて秋の時分に、人が死別すべき事であらうか、いや死別すべき事では無いわ、秋はたゞさへ物悲しい時節で、生きて居る人を見てさへ戀しいものを、死別をされてたまるものではない。

評 秋を悲むことは、文選にも白氏文集にも見え、わが國人も確たる文獻こそないが、夙くよりさう感じもしたと思はれる。そのうへに死別の悲劇を添へては、慘又慘で、

紛々落葉那堪二秋色之摧一、渺々晨星竟逐二流光而逝一、

の儔である。機嫌をえらばぬ死別に對して、この無勘辨者よ、秋はこれその時でないと一喝したのは、既に理趣を超えて詩境に入つたものである。「あるを見るだに悲しき」は、感傷的の作者の人格が思はれる。六帖に「時しまれ秋やは人に別るべきさるは夜寒になれる頃しも」とあるは、この下句の他のと紛れて、一つになつたものだらう。

母がおもひにてよめる　凡河内躬恒

神無月時雨にぬるゝもみぢ葉はたゞわび人のたもとなりけり

釋 ○母がおもひ　喪を古へは思といつた。○わび人　難儀してゐる人。

大意 この十月の時雨に濡れる紅葉の葉は、只もう母親に離れて、難儀の目を見て泣いて居る者の袖であつたわ

い、あの紅くて濡れて居る所がサ。

評 例の血涙の故事を襲つての聯想で、涙の爲に袂は紅色に變じたと誇張して、時雨の紅葉に混喩したゝ浮誇その實に遠かつてるのは遺憾である。後撰集秋下、

から衣たつ田の山のもみぢ葉は物おもふ人のたもとなりけり

も、全くこの等類である。

父がおもひにてよめる　たゞみね

藤ごろもはつるゝ絲はわび人のなみだの玉の緒とぞなりぬる

釋 ○藤ごろも　喪服をいふ。藤葛の纖維で織りなした疎布で、賤者の服とし、又貴人も喪中には鮮美の衣を憚るので、これを喪服とした。後には、たゞ喪服の稱となつた。○はつるゝ絲　解(ホツ)れる絲。藤布は筬(フナ)の疎いよみの間遠な物だから、その絲が解(ホツ)れ易い。

大意 今喪服に着て居る、この藤衣のほつれる絲は、父親に別れて難儀して居る者の、悲しさにこぼす涙の玉を、珠數繋ぎにする緒とサなつたわ。

評 藤衣の絲のはつれに、たまく涙のこぼれかゝつたのを見て詠んだのだらう。涙を玉と觀ずることはもう久しい事であり、絲には玉を貫くといふ聯想の起るは、この時代相應の慣習であつた。この類想は枚擧に遑がない。織巧。

三句、拾遺集哀傷部に「服ぬぎ侍るとて」と詞書して、詠人不知として再出したのにも、貫之集にも、君こふる

とある。又拾遺集には、結句緒とやならむとある。

おもひに侍りける年の秋、山寺へまかりける道にて
よめる　　　つらゆき

朝露のおくての山田かりそめにうき世の中をおもひけるかな

釋 ○朝露のおく手　朝露の置くに、晩稲(オクテ)をかけた。○山田　山縣(ガタ)の田。○かりそめに　苟且(カリソメ)に、山田を刈るといひかけた。

大意 あの朝露の置く、晩稲の山田の稲を刈るといふやうに、假初に只うか〳〵と、この憂い世の中を、さまでとも思はず、今までは思つて居た事よ。

評 この思に中つてこそ、始めて身にしみて憂い世の中といふことを悟つたの餘意がある。上句の序は、山寺へ墓參の途上に於ける實景を應用したらしい。初二句のいひかけ、家集に、朝露のおく手の稲はといふもあり、作者の常套と見える。

二句、一本におくての稲葉とある、わるくもないが、強ひていへば、葉の字が餘り物である。又初句、六帖に白露のとある。

おもひに侍りける人を、とぶらひにまかりてよめる
たゞみね

墨染の君がたもとは雲なれやたえずなみだの雨とのみ降る

釋 ○とぶらひにまかりて　見舞に往つて。

大意　貴方の着てお出なされる墨染の黒い衣の袖は、雨を降らす雲であればかして、絶えず涙が雨のやうに、ひたすら降るわ。

評　涙を雨に比喩し、その縁でこぼるゝことを「降る」と轉義し、さて雨雲と喪服の黒色とを聯想して、袂を雲と假喩した。

拾遺集哀傷部に、詠人不知「墨染の衣の袖は雲なれや涙の雨のたえず降るらむ」とあるは、この訛つたものだらう。

女のおやの思にて、山寺に侍りけるを、ある人のとぶらひつかはせりければ、かへり事によめる　よみ人しらず

あしひきの山べに今はすみ染のころもの袖のひる時もなし

釋 ○女のおやの云々　女は妻である。この詠者が、妻の親の喪に中つて、その追福のため山寺に籠つて居たのを、或る人が使を以て見舞つてくれたので、その返事に詠んだ歌との意。○今はすみ染の衣　今は住むといふに、墨染の衣をかけた。住み初むとまでかゝるのではない。「墨染の衣」は喪服をいふ。

大意　私はお聞き及びの通り、かやうな山邊にもはや住み付いて、亡人の思に泣き暮して、服の墨染の衣の袖が、乾く時も無いのでありますわ。

評 近況報告的の作に近い。上句の口調は、わづか三七日か四七日の山ごもりを、頗る誇大にいひなしたもので、隨つて「ひる時もなし」によく響いてくる。

諒闇（リヤウアン）の年、池のほとりの花を見てよめる　　篁朝臣

水の面（オモ）にしづく花のいろさやかにも君がみ影のおもほゆるかな

釋 ○諒闇の年　諒闇にあたつた年。諒闇は履中紀に、ミモノオモヒと訓じてある。天子の崩御で、國中の上下悉く喪に居る稱である。わが古制には十三箇月間である。○しづく　沈み漬くの義。○さやか　鮮明、清亮などいふ意。○み影　御面影。

大意 あの池の水の面に漬（ツカ）つて居る花の色の、いかにも鮮やかであるやうに、あざやかにまざ〳〵と、崩御あらせられた先帝の御面影が、思ひ浮べられます事よ。

評 初二句は、「さやかにも」にかゝる序である。花の色を龍顔に思ひ擬へ奉つたとするは鑿であらう。諸註皆、嘉祥三年三月に崩御せられた仁明帝の諒闇としてある。なほ景樹はいふ、「詞書に諒闇の年と綴びたるを見れば、必ず櫻の時とも思はれず。この頃は櫻は櫻とありて、たゞ花とのみあるは諸木の花なり云々」と。するとあながち仁明帝の諒闇にも限らない事になる。

或時作者がその庭上を逍遙してゐると、池邊の花木は咲き誇つて、あざやかな影を水中に落してゐた。あゝ今年は諒闇なのに非情の草木はと思ふと、君の御面影はまざ〳〵と眼に映じてくるのであつた。「しづく花の色」は即ち花影なので、隨つて「君がみ影」に脈絡が通じて、その襯染をなしてゐる。影の語が主眼である。然るに

景樹が上句を無心の序と主張したのは、甚だ委しくない。

深草のみかどの御國忌の日よめる　文屋やすひで

草深きかすみの谷に影隱してる日のくれし今日にやはあらぬ

釋　○深草のみかど云々　「深草のみかど」は仁明帝を申す。山城國紀伊郡深草陵に葬め奉つたので稱する。「御國忌」はミコキと訓む。天皇崩御の御忌日をいふ。御忌日は、嘉祥三年三月二十一日である。御年四十一。

大意　盛んに照る日が、深い霞の谷に隱れて暗くなつたやうに、まだお盛りのお年で、俄かに崩御遊ばされ、草の深い深草山の霞の谷へ葬り奉つたその日が、丁度去年の今日では無いか、いや今日ではあるわ。

評　悲しみに取り紛れて、月日の經つをも覺えぬうちに、早くも御一週忌の今日に逢つたのを驚歎したのである。蓋しこの日に諒闇は果てゝ、世間は平常に復する時なので、特に感慨が深いのである。「草深き霞の谷」とあるに、折ふし三月で霞の深く立つた深草山を暗喩した。日を天子に喩へることは古來の常套であるが、「てる日のくれし」といつて、未だ寶算のお盛りにお崩れになつた事をも思はせたのは巧喩である。これも例のこの作者の口吻。

深草のみかどの御時に、藏人の頭にて、よるひる馴れ仕うまつりけるを、諒闇になりにければ、更に世にもまじらずして、比叡の山にのぼりて、かしらおろしてけり、その又の

年、みな人御ぶくぬぎて、あるはかうぶり給はりなど、よろこびけるを聞きてよめる　　　僧正遍昭

みな人は花のころもになりぬなり苔の袂よかわきだにせよ

釋　○深草のみかどの御時云々　仁明天皇の御代に藏人頭で、晝夜おそばにお馴れ申して、御奉公して居つたのを、御崩御になつたので、一向出仕しないで、比叡山にのぼつて、延暦寺で剃髪してしまつた。その翌年諒闇が果てたので、誰れも皆喪服を脱いで、或は位階の昇進などしてお禮など申すのを聞いて詠んだ歌との意。「藏人頭」は藏人所の長官。四位相當官で、定員二人。頭ノ中將と頭ノ辨とである。藏人所のことは秋上「花にあかで」の條の詞書の解に既出。「比叡の山」といへば延暦寺をいふのであつた。「御ぶくぬぎて」は諒闇の間の喪服を脱ぐをいふ。「かうぶり給はり」は位階を賜はるをいふ。○苔の袂　蘿薜の衣。隱者の服を稱するので、僧衣に通はせて用ひた。

大意　世間の人は、皆もはや御服をぬぎ換へて、花やかな衣になつてしまつたわい、ひとり自分は花の衣どころか、未だに涙をこぼして泣いてのみ居るので、せめてこの涙に濡れた苔の衣の袖よ、乾きなりともして呉れよ。

評　藏人の頭は殿上の貫首(クワンジュ)として、威勢は竝ぶ者もなかつた。その下に居る藏人でさへ、枕草子に、めでたき物の中に「うへの、近く仕はせ給ふさまなど、見るには羨ましくこそ覺ゆれ」といつてゐる。今の大臣に對する祕書官の如き關係で、天子の親昵を主とするから、一旦崩御となると、大概辭任交代する定めであつた。特にこの作者良岑宗貞が藏人頭として、仁明帝の優渥なる寵遇を得た趣は、大和物語などにも見えた如くで、げに諒闇

にあつては、世にも人にも交るまいと思ひ込んだ事であらう。況や好色者の名を取るほどの情に脆い性質は、人生の無常を痛感して暫時も平靜なる能はず、三十五歳といふ年の盛りを、天台座主圓仁に就いて、出家得道したのであつた。曉に星を戴いては花を摘み、夕に月を踏んでは閼伽を汲む。難行苦行もみなこれ君の御菩提の爲と、偏に戀ひ申してゐるうちに、たま〳〵事の便りに都を聞けば、今は諒闇が果てたといふので、人は皆鈍色の衣を爭ひ脫ぎ、官位昇進、新恩に浴しつゝ悅びあふさまは、全然先朝の舊恩を忘れたかのやうな有樣なのに慨して、輕薄者流を驚かしたものらしい。皆人の色ある「花の袂」に、わが「露けき苔の衣」を對照させたのを見ても、この間の消息がほゞ窺はれよう。大和物語にも、仁明帝の御大葬の夜、少將宗貞が跡を晦して失せたことを敍べて、

御はてになりて御服ぬぎに、よろづの殿上人河原に出でたるに、童のやうなるなむ、柏葉に書きたる文をもて來たる。取りて見れば、（こゝに本文の歌を擧げたり）とあり。見ればこの良少將の手に見なしつ。いづらといひて、持て來し人を世界に覓むれどなし。法師になりたるべしとは、これにてなむ皆人知りにける。

とあるは、例の作話もまじつてゐようが、實に如上の意を得て書いたかと思はれる。なほ思ふに、この「皆人は」はおもにわが主管してゐた藏人所の下臈で、藤衣を脫ぎすてたり、五位に敍爵したりして、したり顏な六位の藏人等をさしたらしい。悲哀沈痛、滿紙をして涙とならしめる。四五句の終りに疊用した「よ」の辭、この情趣を助けて、大いに力がある。

河原のおほいまうち君のみまかりての秋、かの家のあた

りをまかりけるに、紅葉の色まだ深くもならざりけるを見て、かの家によみて入れたりける

近院右のおほいまうち君

うちつけに寂しくもあるかもみぢ葉も主なき宿は色なかりけり

【釋】○河原のおほいまうち君の云々　河原大臣の薨去された年の秋、そのお邸のあたりを通つたのに、紅葉の色がまだ十分にもならなかつたのを見て、そのお邸の内に詠んで遺つた歌との意。「河原のおほいまうち君」は河原左大臣源融公をいふ。「河原」の下、左のの二字が脱けたのだらう。上に見えたのにはある。この公の薨去は寛平七年八月廿五日である。「かの家」は有名な河原院である。下の「君まさでけぶり絶えにし」の條にその說明がある。參照されたい。○うちつけ　卒爾の意。○あるか　「か」は歎辭。

大意　主人の歿くなられたこの院に來て見ると、さし當つて俄かに寂しくもある事よ、それもその筈、見事な庭の紅葉さへも、主人の無い宿は、流石に色が無かつたわい。

【評】嶋好む大臣既に仙し去つて僅かに月餘、鹽竈の烟早く絶え、遺愛の楓樹誰が爲にか紅なるといふ光景、河原院の今昔を思つては、誰れとてこの感愴を起さぬ者はなからう。まして作者源能有公は、次席の大臣として常に院主に昵び、院中に立ち入られたであらうから。三句は、色ある紅葉さへもの意で、結句に反襯してゐる。輕く看過してはならぬ。この一ふしが卽ちこの歌の生命である。

三句、一本にもみぢ葉のとあるはわるい。

藤原たかつねの朝臣のみまかりての又の年の夏、時鳥の鳴きけるを聞きてよめる

つらゆき

ほとゝぎすけさ鳴く聲に驚けば君が別れし時にぞありける

釋 ○藤原たかつね　高經は季吟の抄に、「内藏頭左中辨右兵衞督正四位下、寛平五年五月十九日卒」とある。

大意 今朝時鳥の啼く聲に驚いて、目が覺めて、つくぐ思ふと、月日の經つは早いものよ、今が去年君が死に別れて往かれた時でサあつたわい。

評 景によつて情を起し、幾聲の杜鵑に故人の別哀を聯想してくる。故人は逝いて返らず、杜鵑は時節を忘れずして、又去年の舊聲に啼く。兩々對映して一段の感愴を生ずる。極めて素直な表現で、感哀が窮りない。四句、一本に君に別れしとある。本文の故人を主として、「君が」といつた方が面白い。

櫻を植ゑてありけるに、やうやく花咲きぬべき時に、かの植ゑける人、身まかりにければ、その花を見てよめる

きのもちゆき

花よりも人こそあだになりにけれいづれを先に戀ひむとか見し

釋 ○植ゑける人　望行の家族か友人かいづれでもよい。伊勢物語には、「昔男、友だちの人を失へるが許にやりける」と詞書して、この歌を擧げた。

大意 櫻の花はもろく散るはかない物だが、今その花が咲く時分に、それを植ゑた人がサ、一足先にはかなくなつてしまつたわい、かねては花と人とは、どちらが先へ仇になつて、戀ひ焦がれようとサ思つたことか、勿論花が先と思つたに、さて〳〵意外な事よ。

評 不定なる人世を、花に對比して說明した。「見し」は思ひしといふべきを、花の方について轉義したのである。下句は洗煉の語で、措辭婉微である。

あるじ身まかりにける人の家の梅の花を見てよめる

貫之

色も香もむかしのこさに匂へども植ゑけむ人の影ぞこひしき

釋 ○あるじ云々　家集には「あるじ失せたる家に、櫻を見てよめる」とある。○こさ　濃さ。○匂へども　匂ふは、色には光澤のあるのにいひ、香には芬芳の高いのにいふ。

大意 この梅の花を見れば、色も香も昔の通りの濃さに變らず、美しく咲いてよく匂ふけれども、花の賞翫はさし置かれて、これを賞翫すべく植ゑた、昔の亡き人の面影がサ戀しいわ。

評 「濃さ」とあるので見ると、紅梅に違ひない。古へは軒近く植ゑられて、櫻にもまさる程にめでられた花である。家集の詞書に「櫻を見て」とあるは、これを心得かねた者のさかしらであらう。想はやゝ理路にわたつてゐる。

二句、顯本、及び六帖に昔にこさずとあるは、ことわりが通じない。

河原のおほいまうち君のみまかりて後、かの家にまかりてありけるに、鹽竈といふ處のさまを造れりけるを見てよめる

君まさでけぶり絶えにし鹽竈のうらさびしくも見え渡るかな

釋 ○「鹽竈といふ處のさまを云々」 河原左大臣融公の河原の院中に、陸前國千賀(チカ)の鹽竈の浦（今の松島灣）の景を摸して造つたのをいふ。每月難波の潮二十斛を汲ませて、鹽を燒かせたことが、古本今昔物語や顯註などに出てゐる。續古事談に「河原院は、融左大臣の家なり。臺閣水石風流をつくして、作りみがきて住み給ひけり。失せ給ひて後、その子法皇に奉りて、時々渡り給ひける。云々。その後、佛寺になりにけり。云々」と見え、山城名勝圖會に「今按ズルニ舊跡ヲ、自リ二六條坊門一至リ二六條ニ一、自リ二萬里小路一至ル二京極ニ一、此内淨德寺ノ鎭守、曰フ二融公ノ靈社ト一、又、有リ下稱スル二鹽竈町ト一所上」とある。○まさで 座さずして。○鹽竈のうらさびしく 鹽竈の浦寂しくに、心(ウラ)寂(サビ)しくを寄せた。

大意 融君が御座なさらずして、その節から鹽も燒かねば、烟が絶えてしまつたこのお邸の鹽竈の浦は、物寂びて一方ならず心寂しうまあ、見渡される事よ。

評 この好個の詩題に對して、感興がやゝ淺い憾がある。源順の如きは、長篇を賦してその荒廢の跡を歌つたではないか。わづかに「鹽竈のうらさびしく」の秀句など、いひ立てる程の事もない。只その細くからびた風姿はこの題目にかなつてゐる。古本今昔物語に、この歌をあげて、

今は昔河原院に宇多院住ませ給ひける、失せさせ給ひければ、住む人もなくて、院の内荒れたりけるを、貫之土佐の國より上りて行きて見けるに、云々。

とあるのは時代が合はない。貫之が土佐守の任がはてゝ上京したのは、のちものち朱雀天皇の承平四年の事である。そんな頃に詠んだ歌が、この集に載るはずがない。

初句、六帖、朗詠、卅六人撰等に君なくてとある。

藤原のとしもとの朝臣の、右近中將にて住み侍りけるざうしの、身まかりて後、人も住まずなりにけるに、秋の夜ふけて、物よりまうできけるついでに見入れければ、もとありし前栽、いとしげく荒れたりけるを見て、はやくそこに侍りければ、昔を思ひやりてよみける

みはるのありすけ

君がうゑしひとむら薄蟲のねのしげき野邊ともなりにけるかな

釋 〇藤原のとしもとの朝臣の云々　藤原利基朝臣が、右近衛の中將の時住まれた曹司が、利基の逝後は人も住まずで空部屋であつたに、作者有輔が、秋の深夜餘所よりの歸途、邸内を窺ふと、もとあつた前栽の甚しく荒廢したのを見て、以前作者は、其處に家人として居つた事があるので、昔を思ひ出して詠んだ歌との意。「利基」

は贈太政大臣良門の子、内大臣高藤の兄で、堤中納言兼輔の父である。「曹司」は部屋、「前栽」は庭前の植込。

○ひとむら薄　一叢薄。

大意　故人が植ゑて置かれた、わづか一叢の薄が、何時の間にか茂つて、蟲の音のしげく聞える野原のやうにまあ、意外にもなつてしまつた事よ。

評　「蟲のねのしげき」に、おのづから一叢薄の繁く生ひ延びた光景が聯想させられて面白い。元來前栽の草木が荒れたとて、何ほどの事もないのを、「野べともなりにける哉」は全く誇張で、一叢薄との對映上、甚しい變化、いみじき荒廢の跡を想見させる手段である。作者は延喜年中に、左衞門の權少志に任ぜられたことが見えるから、もとより武人出身の微官で、利基在世の頃は、その家に出入してゐたのであらう。蒼涼凄酸、體調またよくこの趣に協つて、完作といつてよい。

惟喬の親王の、「父の侍りけむ時によめりけむ歌ども」とこひければ、かきておくりける奥に、よみてかけりける

とものり

ことならば言の葉さへも消えななむ見れば涙のたきまさりけり

釋　○父の侍りけむ云々　父の在世の時に詠んだ歌どもを見せよと請はれたので、書いて贈つた歌卷の奥に、自分がこの歌を詠んで書きつけたとの意。友則の父は有友とて、貫之の父なる望行の弟である。一家悉く歌に名を得て、有友も集中に二首はひつてゐる。されば惟喬親王が遺稿を見せよと請はれたのも、その理由がある。

○ことならば　春上「ことならば咲かずやはあらぬ」の條に既出。○なむ　希望の辭。○たき　四段活の語で、沸(タギ)る意。これを體言にいひすゑたのが、即ち瀧である。

大意　自分の親は、とても死ぬる位ならば、詠み置かれた歌までも、一所に消え失せて貰ひたかつた、なぜなれば、なまなか形見の歌などが目にかゝると、一しほ思ひ出されていよ〳〵悲しく、落ちる涙が盛んに湧き立つて來るわ。

評　大事ともてはやすべき形見を、むしろなくなれと希つたのが、この一ふしであるが、類想も可なりあるのがくちをしい。

題しらず　　　　よみ人しらず

なき人のやどにかよはば時鳥かけてねにのみなくと告げなむ

釋　○なき人のやどにかよはば　時鳥を冥途の鳥と稱する本文によつた。十王經に「一切衆生臨二命終時一、閻羅法王遣二羅卒一(中略)縛二三魂一、至二門關樹下一、樹有二荊棘一、宛如二鋒刃一、二鳥栖掌、一名二無常鳥一、一名二拔目鳥一、我汝舊里化二成鶗鴂一、示二怪語一、鳴二別都頓宜壽一云々」とあるに據つたので、玉篇に「鶗鴂鳥、今之郭公」とある。但十王經は僞經で、郭公の事はかの蜀魄の故事に附會して、更に敷演したものである。その古い僞作なので、夙くから典據として作つた詩歌が多い。「なき人」は世に亡き人。○かけて　心にかけて。

大意　時鳥はこの世に亡き人の所へ通ふ鳥といふ事であるが、果して通ふ事ならば、これ時鳥よ、自分が亡き人の事を不斷心にかけて、聲に出して泣いてばかり居ると、あちらへ知らせて貰ひたいわ。

評 伊勢集に、

死出の山こえてや來つる時鳥こひしき人のうへ語らなむ

と、描寫を反對にしたものである。當時に弘通した佛教思想の結果として味ふ時は、また別趣がある。

〇

たれ見よと花咲けるらむ白雲のたつ野と早くなりにしものを

大意 この宿の花は、誰れに見てくれよといつて、このやうに昔に變らず咲いてゐる事であらう、主人が死んだので家は荒れて、早もう白雲の立つほどの、里遠い野原となつてしまつたものをサ。

評 「白雲のたつ」は野の修飾である。輕く見るがよい。重くとる時は、現前に雲の立ち昇ることゝ聞えて、この景致に協はない。眞淵は、火葬の烟に寄せたといつたが、それでは邸内で火葬でもしなければ出合はぬ事になる。無情の花を有情のわれに對へ、有爲轉變の迹を不斷の花に對へた。

式部卿のみこ、閑院の五のみこに住みわたりけるを、いくばくもあらず、女みこのみまかりにける時に、かのみこの住みける帳のかたびらの紐に、ふみをゆひつけたりけるを取りて見れば、昔の手にて、この歌をなむ書きつけたりける

かず〳〵にわれをわすれぬものならば山の霞をあはれとは見よ

【釋】○式部卿のみこ云々　式部卿親王が、閑院のみこに馴れ染めてゐられたが、間もなく女みこがおかくれになつた時に、その住んで居られた帳臺の帳の飾の紐に文が結びつけてあつたのを、あとで發見して取つて見ると、故人の手蹟でこの歌が書きつけてあつたとの意。「式部卿のみこ」は宇多帝の皇子敦慶親王のことで、玉光宮と稱せられ、好色無双の美男であられたといふ。「閑院の五のみこ」は誰れとも定かでない。「帳のかたびら」は御帳臺に懸けた帳の布帛で、帷をかたびらと訓む。「紐」は帷の縫ひ合はせの處に平ぬひの細紐を添へて下げるをいふ。「昔の手」とは故人の筆といふことで、閑院の女五のみこの筆蹟である。

【大意】若し在世の砌のお約束に變らず、何につけかにつけ、私の事をお忘れ下されぬものならば、山へ立ちます霞を、何卒あはれいとしやと思し召して、御覧じて下さりませ、山の霞は私が烟になりました名殘で御座りまする程に。

【評】大空の霞に紛ふ北邙一片の烟となつて、萬事こゝに休する。わが亡き後に於ける好色無双の玉光の宮に、山の霞をあはれと見るばかりの、些の人情を要求したその哀情は頗る哀れである。

をとこの、ひとの國にまかりけるまに。女俄かにやまひをして、いと弱くなりにける時、よみおきてみまかりける

よみ人しらず

聲をだにきかで別るゝたまよりもなき床に寢む君ぞかなしき

釋 ○ひとの國　他國の意。○まかりける　萬治本まかれりけるとある。○たま　魂魄。○なき床　妻の無き床。

大意　貴方が他國にお出の爲、お姿はさておき、お聲をさへも聞かずに死に別れる、誠に殘念に悲しい私の魂ひよりも、追付け京へおかへりなされて、私が居らぬ跡の床に、獨りお休みなさるであらうと思ふ貴方が、おいとしう御座りますわ。

評 死に當つて靈魂は身體より遊離すとは、古代宗教のひとしく宣明する處である。さてこの生別に更に死別をかさねた悲慘の境遇は、既に他の同情を惹くに十分である。況や自身のこの大きな悲を傍にして、偏に夫の孤煢依る所なき悲境に淪むことを豫想して、氣の毒さに堪へぬといふ。全く純なる人情美の極致を發揮したといつてよからう。死ぬるわれよりもといふべきを、「別るゝ魂よりも」と轉義したのが、いよ〳〵はかなげに聞えて、身を既に亡き物にした口吻が哀れである。結句「悲しき」は露骨の嫌ひがある。三句、六帖にわれよりもとあるは劣つてゐる。四句も、同書に人ぞ悲しきとある。

やまひに煩ひ侍りける秋、心地たのもしげなく覺えければ、よみて人のもとに遣はしける　大江千里

もみぢ葉を風にまかせて見るよりもはかなきものは命なりけり

釋 ○心地たのもしげなく　快癒の覺束なきをいふ。

大意　もみぢの葉を、風の心任かせに吹かせて見るは、何時散るかも知れぬ、頼み少ないはかないことであるが、

それよりも優つて、頼み少なくはかない物は、自分の命であつたわい。

評 佛教に所謂飛花落葉の聲聞觀から出てゐる。當時としては殊に珍しくもない著想かと想ふ。上句は病床から作者の見た實景で、それを湊合して、命にはかなさをたくらべたのである。

身まかりなむとてよめる　　藤原これもと

露をなどあだなるものと思ひけむわが身も草におかぬばかりを

釋 ○ばかりを　ばかりなるものをの意。

大意 日頃草の葉に置く露を、はかなく消える頼み少ない物なぞとは、何で思つたのであらう、今から病み勞れて、何時死ぬかも知れぬ頼み少ない事を思ひまはせば、自分の身も、草の葉に置かぬといふばかりであるものをサ。

評 この種の感想は、漢書の蘇武傳に、「人生如二朝露一」、又、文選の古詩に「年命如二朝露一」と見え、金剛經の六喩に「如露亦如電」、南本涅槃經に「是壽命（中略）亦如二朝露一、勢不二久停一」と見え、支那印度を通じて、全く同一軌に出づ。もとより作者の新案ではない。只わが身は露と殊ならぬものをなど、凡手はいふべきを、露の緣で「草に置かぬばかりを」と、譬喩で婉曲に敍したのが奇妙である。

やまひして弱くなりける時よめる　　なりひらの朝臣

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日けふとは思はざりしを

釋 ○つひに行く道　死をいふ。

大意　死の道は、誰れもしまひには是非に行く道ぞといふことは、かね〴〵聞いて居つたけれども、それが昨日や今日の事とは思はなかつたものを、早その時が來て、行かねばならぬ事かまあ。

評　生ある者は必ず死す。これは專らいひ觸れた事だから、「かねて聞きし」とはいつた。死ぬることを「遂に行く道」とは婉曲な措辭である。「きのふけふ」は昨日は知らずに過ぎた事だから、道理のうへからは、けふあすといふべきだが、實はこの頃とは思はざりしをの意を、具體的に轉義したのだから更に差支はない。いや却つて昨日といひ副へたのは、いたく末期のはや過去になりさうな程にさし迫つた趣が躍々として、感慨が深い。流石に一代の才人が最後の囑吐だけあつて、刻せず劃せず、偶然にこの絶調を成した。自然の聲、純眞の響である。

甲斐の國に、あひ知りて侍りける人とぶらはむとて、まかりける道なかにて、にはかに病をして、いま〳〵となりにければ、よみて、「京にもてまかりて、母に見せよ」といひて、人につけ侍りける歌　　ありはらの滋春

かりそめのゆきかひぢとぞ思ひこし今はかぎりのかどでなりけり

釋 ○甲斐の國に云々　甲斐に居る知人を訪ねようとて下つた途中で、急に煩ひ付いて、臨終の期に迫つたので

この歌を詠んで、「京に持つて歸つて自分の母に見せてくれ」と人に賴んで託した歌との意。滋春は、業平の次男で、母は右大臣藤原良相公の女、染殿ノ內侍とある。この詞書、一本には、「甲斐の國にまかりて、身まかりける時よめる」とある。○ゆきかひぢ　往反道(ユキカヒヂ)といふを、甲斐路(カヒヂ)に寄せた。

大意　甲斐の國へ行くこの旅を、つい一寸した往き來の道とサ思つて、出て來ましたわ、然るに只今となつては、これがこの世の門出で御座りましたわい。

評　こんな事とは思ひ掛けなかつたがの餘意がある。他國他鄕の旅の空をさすらうて、他人の手に死なうとする。故鄕の慈母の膝下がまづ慕はれて、假初の門出が死別の門出となつたことを悔恨し、遙かに永訣の情を敍べた。事態頗る悲慘である。かうした際に、甲斐路の秀句の如きは、あまりに眞劍を缺いて感心しない。

大和物語に、

この在次君、在中將の東に往きたるけにあらむ、この子どもも、人の國通ひをなむしける。心ある者にて、人の國の哀に心細き所々にては、歌よみて書付けなどしける。（中略）かくて、人の國ありき〳〵て、甲斐の國に到りて住みける程に、病して死ぬとて詠みたりける、

と見え、この歌が擧げてある。事情は大抵そんなものであつたらう。

古今和歌集卷第十七

雜歌　上

題しらず　　　　　　　　　　　　よみ人しらず

わがうへに露ぞおくなるあまの川とわたる舟の櫂(カイ)のしづくか

釋 ○雜歌　ザウノウタ、又、クサ〴〵ノウタと訓む。序文に、「春夏秋冬にも入らぬ、くさ〴〵の歌を選ばせ給ひ」と見えて、四季、戀、賀、別離、羈旅の部に入れにくいのを收めた。○題しらず　伊勢物語には、「昔男京をいかゞ思ひけむ、ひむがし山に住まむと思ひ入りて、云々。かくて物いたく病みて死に入りければ、おもてに水灑ぎなどして、息出でて」と詞書して、この歌を擧げた。○とわたる　門渡るの意。門はこゝでは天の川の川門(カハト)をいふ。川門は川岸が迫つて、水瀬の一つに流れる處である。○しづくか　「か」は疑辭。

大意　自分の體のうへに、思ひがけず露がサ置いたわ、これはあの空の天の川の渡しを渡る舟の、櫂の雫か知らぬ。

評　契沖いふ、「この歌のつゞきは、皆、歡ある歌のたぐひなるを、その始に出せるをもて思へば、七月七日の夕べ

思ひがけず內宴に召されて、祿など賜りし人の御惠のかゝれるを、かく寄せたるにや」といひ、景樹は「この歌の調、いとはかなげなれば、歡喜の情もて詠めるものならじ。勢語に、面に水洒ぎたるとある、いと似つかはしく聞ゆ。さる傳などありて、それを飾りて作れるも計り難し」といつた。熟ら思ふに、この歌、ア列の開口音が多くて、聲調が頗る花やかであるから、決して景樹のいふやうなものではない。勢語の傳說はわざと表裏に作爲した事が多いから、もとより信ぜられない。よつて假に契沖說に從つておく。「わがうへに」は、天の川の櫂の雫の洒ぎかゝるに恰好の措辭である。袖になどいつては、部分的になつてふさはしくない。落想は奇拔、**體格**はまた雄渾である。萬葉巻十、

　このゆふべふりくる雨は彦星のはやこぐ舟の櫂のちるかも

はこの同想同型である。

○

思ふどちまとゐせる夜は唐錦たゝまくをしきものにぞありける

釋　○まとゐ　團欒の義。○唐錦　支那より舶載した錦。蜀江の錦、東京錦などをさしたのだらう。「たゝまくをしき」の序に用ひた。○たゝまくをしき　錦は貴重な織物なので、裁斷するのは勿體ないものだから、裁たまく惜しきといひ、それに起たまく惜しきとかけた。「まく」は未來の助動詞のむの延言。

大意　かう心の合つた友達同志うち寄つて、語り合つて居る夜は、唐錦の裁つのが惜しいやうに、座を立ち去らうとすることが、惜しいものでサあつたわい。

評 平凡の想ではあるが、眞實の語である。わづかに「唐錦たゝまくをしき」の剪裁によつて、一首に光彩を生ずる。唐錦は舶載の織物で、後世でも一寸四方を坪と稱して、兩値で賣買したほどだから、當時ではその貴重さが思ひやられる。そこで「裁たまく惜しき」の譬喩が頗る適確になる。

○

うれしきを何につゝまむから衣袂ゆたかにたてといはましを

釋 ○袂ゆたかに 「ゆたかに」はゆつたりとの意。

大意 このやうな嬉しいめを、何に包まうぞ、小さいこの袂には、なか〳〵包まれる事ではない、かうと知つたら、裝束の袂をもつと大きくゆつたりと裁つてくれと、誂へようであつたものをサ。

評 無形の感情を有形に取り扱つて、何に包んだらよいかと躊躇する穉愚の想は、既に詩である。まして況や、「袂ゆたかにたて」の痴呆はいよ〳〵出でて、いよ〳〵面白い。常識からいへば袂ゆたかに裁つたからとて、包まれる譯のものでない。蓋し躍るばかりの嬉しさをつゝみかねる事から出發したので、「つゝむに人目を愼む意と物を包む意との兩意をもたせて剪裁してある。その包むから更に袂を撮合した。景樹が「昔は袖の尺いと長ければ、何くれに用るしなり、今の不用の類にあらず、故に包むといへば、袖の事とをれるなり」といつたのもよい。但長いのは袖だけではない。ゆきである。又、「初句をうれしさをと、體言にいふべし」といつたのは拘はつてゐる。

○

限りなき君がためにとをる花はときしもわかぬ物にぞありける

　ある人のいはく、「この歌は、さきのおほいまうち君のなり」。

釋 ○伊勢物語に、「昔おほきおほいまうち君と聞ゆるおはしけり。仕うまつる男、長月ばかりに、梅の作枝に雉をつけて奉るとて」と詞書して、この歌を擧げた。○限りなき　壽命の限りなき。○ときしも　時しも。「し」は强辭、「も」は歎辭。

大意 御壽命の限りない君に、さし上げませうと思つて折る花は、流石に何時といふ時節の分ちも無しに、咲くものでサありましたわい。

評 御壽命の限りもない故に、花も時節の限りなしに何時も咲くといひ、こんな奇蹟も皆君の御勢ひゆゑと讚へ奉つた。反り咲の花などを折つて、御門、或はわが主君などに奉つたのであらう。勢語の詞書によれば、「ときしも」に、雉を隱してある譯だが、例の作物語だから、それでこれを說いては却つて間違ふ。六帖には、形見の題に收めて、二句君が形見にとある。勢語には、初句わが賴むとある。左註は、勢語によつて後人の書き添へたものだらう。この集に、「前のおほきおほいまうち君」とあるは忠仁公藤原良房なので、これをも忠仁公の作とするは、左註に泥んだものである。

○

紫のひともとゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞ見る

釋 ○武藏野　武藏の國中央の大平原、紫草の產出を以て名高かつた。紫草のことは、戀三「戀しくば下にを思へ紫の」の條に既出。○みながら　皆ながらの略で、悉皆の意。

大意　色深い紫草の一株を、あはれなつかしい物と思ふ爲に、その緣にひかされて、限りもない廣い武藏野中の草が、皆殘らずあはれになつかしいとサ思ふわ。

評　全然諷喩らしい。すると、わが愛する妻一人ゆゑに、そのゆかりの人は、悉くなつかしく思はれるといふ裏面の意が出てくる。武藏野には數多あるべき紫草を、必ず「一本」といつたのも、この意をたしかに强く表現する爲の手段と見えた。「武藏野の草は皆がら」は誇張で、ゆかりの者は盡くの意を、强く印象させたい爲である。さて、この歌よりして、紫を、「ゆかりの色」といひ慣つた。

妻のおとうとをもて侍りける人に、うへのきぬを贈るとて、よみてやりける　　なりひらの朝臣

紫のいろこきときはめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

釋 ○妻のおとうと云々　妻の妹に連れ添つてゐる男に、袍を贈るとて詠んでやつた歌との意。「妻のおとうと」は、妻の妹をいふ。おとうとは乙人の義で、男女ともに齡の劣つた者にいふべき語である。「うへのきぬ」は袍である。袍は朝服で位階に應じて服色の制があつた。伊勢物語の詞書には、姉の夫を貴人、妹の夫を卑しい者とし、師走の晦日に、妹は手づから夫の袍を洗濯したが、慣れぬ事とて袍の肩を張り破り、せむ方なしに泣いて居たのを、姉の夫が聞いてあはれに思つて、位に合つた綠袍を贈つてやるとて、この歌を添へたとある。

○めもはるに　見えも遙かにの意。見えの約「め」である。

大意　紫草の花の色濃く咲く時は、見渡し遙かに野にある草木までが、おなじ野にある物と思ふせゐか、差別もなくなつかしいわ、といふが表面の意で、古歌に、「紫の一本ゆゑに云々」と詠んであるが、いかにもその通りで、私も妻一人を思ふ心が深い時は、それにひかされて、そのゆかりの人は誰れでも皆サ、妻同前にかけ隔てなしに、大切に存ぜられますわ、といふが裏面の意。

評　まして貴方はおなじ血緣でもごく近いお方だから特に懇切に存じますので、失禮を顧みずこの袍をお贈り致しますの餘意がある。「野なる草木」とあるので見ると、この袍は綠色であつたらしい。妻の寵愛の深いのを紫の色濃きに喩へて、上の「紫の一本」の歌の意を下に踐んで仕立てた。必ず紫草の生えてゐる武藏野の實景に對しての歌とは思はれない。

又いふ、必ず勢語の所說の如くならば、姉の夫は四位以上の人で、その服色は紫なので、「紫の色こき時は」といひ、妹の夫の六位の綠袍をよそへて、「野なる草木」といつたとも見られる。

大納言ふぢはらの國經の朝臣、宰相より中納言になりける時に染めぬうへのきぬの綾をおくるとて

近院右のおほいまうち君

いろなしと人や見るらむ昔よりふかき心にそめてしものを

釋　○大納言ふぢはらの國經云々　藤原國經が、宰相より中納言に昇任したのは、寛平六年五月五日である。「宰

相」は參議の唐名、「染めぬ云々」は袍の料に白綾を贈るとて、この歌を詠み添へたとの意。○いろなし　色相のない意に、物の風情やおもむきなどのないのをいふ色なしの意を寄せた。

大意　これは白綾だから、何も色がなくて、風情のないやうに、貴方は思ひなさらう、しかし私は以前から、貴方に大層深切な志を深く染めて置いた、この綾であるものを、不興には思つて下さるな。

評　袍の料にすべき白綾を贈つたのは、官途昇進のお祝なのである。位色相當に染めて贈つてもいゝけれども、色の染めあがりがむづかしくて喧しかつた時代だから、その家々の好みに任せる爲、白のまゝで贈つたと見える。それに就いては何とか一言の挨拶せねばならぬので、この歌が出來た。色の有無に對して、志の淺深を反對にかけ合はせた構想は、語言の技巧に多く傾いてゐる。

いそのかみの並松が、宮づかへもせで、石の上といふ所にこもり侍りけるを俄かにかうぶり賜はりければ、喜びいひ遣はすとて、よみて遣はしける　　ふるの今道

日の光やぶしわかねばいそのかみふりにし里の花も咲きけり

釋　○いそのかみの云々　石上の並松が仕官もせずして、大和の石上に籠つて居たが、急に五位に敍せられたに就いて、賀詞をいひ遣るとて詠んだ歌との意。「かうぶり賜はり」は敍爵とて、五位に敍せられるをいふ。三代實錄に、「仁和二年正月五日、授從七位石上朝臣並松從五位下」と見えた。○やぶし　「やぶ」は藪である。草深き處をいふ。今、藪をさしてのみいふは轉つたのである。「し」は強辭。

大意　日の光は、どのやうなる草深い藪原をもサ、分け隔てなしにお照らしなされるから、石上の荒れてさびれてしまつた里にも、流石に春が來て、花も咲いたわ、といふが表面の意で、お上のお惠は、何處までもサ行き渡つて、分け隔てが無いから、世に舊された貴方のお身の上にも、名譽の花が咲きましたわ、といふが裏面の意。

評　單に表面の意のみで味ふと、やはり理窟に着する嫌ひがあるが、譬喩の巧はそれを償つて餘りがある。比喩渾然として、斧鑿の痕もないのは老手である。新撰姓氏錄に據れば、布留氏は宿禰姓で、布留の神主である。その族人として、當時造酒正（ミキノカミ）たる作者は、同鄕の好に並松の昇敍を賀したものと思はれる。從七位から從五位下は過分の越階で、しかも仕官もしてゐなかつたとしたら、實に不思議な昇敍としか思へない。何か特殊な功勞があつたには相違ないが、しかし天恩の辱さは如何にしても感謝せずには居られぬ。今道同鄕人を以てこの喜を賀するに、措辭まことにその體を得てゐる。

二條の后の、まだ東宮のみやす所と申しける時に、大原野（オハラノ）にまうで給ひける日よめる　なりひらの朝臣

大原やをしほの山もけふこそは神代のことも思ひいづらめ

釋　○二條の后の云々　二條の后がまだ女御で、東宮の御生母の御息所と仰しやられた時に、大原野の神社に御參詣遊ばされた日よんだ歌との意。「二條の后」は淸和天皇の女御藤原高子である。「大原野」は山城國乙訓郡こ「まうで給ひ」とは、閑院左大臣藤原冬嗣が、氏神春日の社が大和の遠地にあつて、氏の婦人達の神拜に不便な

のを憂へ、この地を相して、春日の神を勸請し、文德天皇の仁壽元年から祭儀が始つて、藤氏の后妃は必ず行啓があつた。二條后の大原野詣は、同后の東宮の御息所と稱せられた貞觀十一年から同十八年までの間であらう。伊勢物語には、「昔、二條の后の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神に詣で給ひけるに、近衞司にさむらひける翁、人々の祿給はりける序に、御車より給はりて、詠みて奉りける」との詞書がある。○大原やをしほの山　「をしほの山」は、大原野の神の鎭座しましましてゐる小鹽山。○神代の事も　古事記に天照大神の御孫邇々藝命の天降ります條に、「爾天兒屋命云々、幷五伴緒矣支加而天降也」と見え、日本紀、古語拾遺にも天つ神の御孫のこの國にお降りなされた時、輔佐なされた神の中では、天兒屋命が特に重臣であつた趣が見える。この天兒屋命は、即ち春日の祭神の一つで、即ち藤原氏の祖先である。

大意　かやうに、御子孫の藤原氏の御息所が、東宮の御母儀として御參詣あるなれば、この大原野の小鹽山に御鎭座あらせられる氏の御神も、かの神代に天照大神から、天孫を輔佐すべき勅定を承つた昔の御事も、何時はともあれ今日こそは思し召されて、御滿足に思はれるで御座らう。

評　作者は近衞司として今回の行啓に際し、路次の警固に候うたものと思はれる。嚴肅な行粧を引き繕つて、小鹽の社頭に東宮の御母儀たる盛儀をつくされる。誰れしもこの際この時に、直覺的に藤氏の祖神と御息所と皇室との關係を思ひ寄り、深い感慨に打たれぬ者はなからう。作者も全くその一人であつた。只その感想を敍するにあたり、一轉語を下して、祖神の意中から捻出したことは、やはり尋常でない。しかもをしほの神もといはず、「山も」と轉義して、「思ひ出づらめ」と擬人した修辭の巧を加へたのは、自在な口吻である。「山も」はわが神代の事を思ひ出づるに對へ、「神代の事も云々」は眼前の盛儀に滿足するに對へたのである。眞淵は、一い

と安らかにめでたし」と評した。舊說の、勢語に據つて、「山も」は二條后を喩へた物とし、作者と密事のあつた昔の事を思ひ出すだらうといふ意に解いたのは從ひ難い。勅撰の集に恐れ多くも、御息所密通などの隱事を歌つたものを掲げる筈がない。勢語の方は、もとより傳說から生まれた一場の作話である。

三句、大鏡にはけふよりは、六帖にはけふしこそとある。又勢語には、四句神代の事を、同塗籠本には、二句をしほの松もとある。

五節の舞姫を見てよめる　　よしみねのむねさだ

あまつ風雲のかよひぢふきとぢよをとめの姿しばしとゞめむ

釋 ○五節の舞姫　五節の舞姫は、陰曆十一月中の丑の日、豐明節會に臣下に酒饌を賜はる儀式があつて、その時行はれる女樂である。舞姫五人或は四人、公卿國司などより美しき少女を奉つて、御前に舞はせる。後には大嘗會の時のみに行はれた。續日本紀天平十五年五月、橘諸兄の太上天皇に傳奏し給ふ詔に、「天武天皇、禮樂なくしては世を治むる事缺けたりとて、この舞樂を作らせ給ふ」とある。政事要略に、「五節舞者、淨御原天皇之所レ制也、相傳曰、天皇御二吉野一、日暮彈レ琴有レ興、俄爾之間、前岬之下、雲氣忽起、疑如二高唐之神女一、髣髴應レ曲而舞、獨入二天矚一他人無レ見、擧レ袖五變、故謂二之五節一、其歌曰、乎度綿度茂邑度綿左備須茂可良多萬乎多茂度邇麻岐氐乎度綿左備須茂」と見え、三善淸行の意見封事にも、「按二舊記一、昔神女之來舞、云々」とあるから、神女が五變の舞を象るといふが、古い傳說であらう。宣長いふ「この古傳說は、古事記に、雄略天皇吉野に行幸して、吉野川の濱に美麗なる童女にあひ給ひ、御みづから御琴を彈じて、そをして舞はしめられ

し事見えたるに據りて作れるものならむ」と。五節の義については別に音樂上からの說がある。○雲のかよひぢ　雲の中の通路。

大意　空を吹く風よ、あの天女が歸り上らうとする雲の中の通路を、雲を吹き寄せて塞げてくれい、さうして、あの面白い天女の舞姿を、もうすこしの間なりとも、留めて置いて見ようわ。

評　五節の舞の古傳說によつて、丁度所がらが禁中で雲の上の稱があるので、今の舞姬を直にその天女と看なし、その舞ひ果てゝ引つ込まうとする名殘を惜んで、「雲路を吹き閉ぢよ」と天つ風に命令した比興は業平朝臣の、

あかなくにまだきも月の隱くるゝか山のは逃げて入れずもあらなむ

と共に、同巧異曲の妙作である。殊に五節は四五日連續した宮中の大宴會で、舞姬はいづれも未婚の少女の器量よしを擇んだものだから、當時の若殿原は勿論上達部までも、血道をあげて夢中になつたものである。作者宗貞もその一人で、黑酒白酒(クロキシロキ)の醉心地に、舞姬の姿に見とれて恍惚としてゐるさまが思ひ遣られる。色卽是空、これが法德四海に遍照した花山僧正の前身と觀ずると、更に一段の面白味が加はる。

五節のあしたに、かむざしの玉の落ちたりけるを見て、たがならむと、とぶらひてよめる　河原の左のおほいまうち君

主やたれとへど白玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はむ

釋　○五節のあした云々　五節舞のあつた翌朝、舞姬の釵の玉の落ちてあるのを見て、これは誰れの物だらうと落し主を尋ねて詠んだ歌との意。○いはなくに　いはぬにの延言。○あはれ　可憐の意で、いとしいと思ふを

いふ。

大意　この簪の白玉の落し主がなつかしさに、これの主は誰れぞと、簪の白玉に問ふけれど返辭をせぬによつて、それならばいつそ、夜べの舞姫を、誰れ彼れといふ事なしに、總體にあゝかはゆいと思はうかな。

評　五節の最終夜は、舞姫はなほ常寧殿中の五節所に泊り込んでゐる。作者は翌朝禁庭を立ちなして、測らずその簪の玉を拾つた。玉にその主を問いて見たが返辭がないのでといふのは、實は舞姫等に尋ねても、いづれも若い娘の事とて羞かしがつて、それは私のといふ者がなかつたのを喩へたのである。詞書の「とぶらひてよめる」は、その經過を說明してゐる。「なべてやあはれと思はむ」の狂痴がこの生命である。「さらばなべてや」の頓挫の筆法も面白い。

寬平の御時に、うへのさぶらひに侍りけるをのこども、瓶を持たせて、きさいの宮の御方に「大御酒のおろし」と、きこえに奉りたりけるを、くら人どもわらひて、瓶をお前にもていでて、ともかくもいはずなりにければ、使のかへり來て、「さなむありつる」といひければ、くら人の中におくりける

としゆきの朝臣

玉だれの小がめやいづらこよろぎの磯の浪わけおきに出でにけり

釋 ○寛平の御時に云々　寛平の御時代に、殿上に詰めて居た殿上人達が、酒瓶を使に持たせて、后の宮の御方へ、「御酒のおさがりを下さりませ」と申し上げたのを、女藏人共がその瓶を后の御前に持ち出しながら笑ひこけて、折角の口上を何ともいはずにしまつたので、使が立ち歸つて來て、しかじかと復命したものだから、その女藏人の中にいひ送つた歌との意。「寛平」は宇多帝の御代の年號。「うへのさぶらひ」は清涼殿の殿上の間、「きさいの宮」は皇后藤原温子。「大御酒のおろし」は大御酒の下しで、御酒のおさがりといふこと。「ときこえに」のあたりは誤寫があらう。顯註には、きこひにとある。きはを文字の誤寫で、大御酒のおろしをこひにとあつたのであらう。それでこそ事狀も明らかに、歌の趣にも協ふ。「くら人」は女藏人をいふ。皇后宮の御方に侍ふ卑い女官である。○玉だれの小がめ　「小がめ」は小瓶で、小龜を寄せた。眞淵いふ、「玉簾の緒と續けたる枕詞なり。されば、小がめは小がめと訓むべし」と。顯註には「玉だれとは小瓶をいふ。瓶の上に塗りたる物の、玉のやうにさがりたればいふ。玉だれのみすとも續くるは、玉すだれとて、玉を貫きても簾には懸くれば、玉を垂るといふなり」と。清水光房は、玉簾の鉤とかけたので、玉垂の小瓶、玉垂の小簾と訓むべしといつた。鉤は簾を捲き上げた時かける曲つた金物である。諸證本及び六帖にコガメとあるから、光房說に隨つておきたい。○いづら　どれどこに。○こよろぎの磯　小淘の磯で、相模國中郡。今の大磯小磯邊の古名。○おきに　沖に置きにをかけた。

大意　先程の小瓶はさてどれ何處にあるぞと、使の者に問へば、風俗の諸物にある小瓶とは違つて、小瓶といふ小龜は、小淘の磯の浪を分けて、存外に沖に出てしまつたわい、卽ち后の宮の御前に置きにさ。

評　瓶など持たせて、后宮の御方に大御酒のおろしをこひに遣はすは、若殿上人等が、女藏人に向つての打解け業

で、内證の事である。されば后宮の御前に、女藏人がその小瓶を持ち出したのは、殿上人等の意外とした所であらう。卽ち風俗の諸物なる、

多萬多亂乃、乎加女乎奈加仁須惠天、阿流之者毛也、佐加奈末幾二、佐加奈止利仁、己由流木乃、伊曾乃和加女加利阿介二。

を捉へ來つて典據とし、かの小瓶は主客の中に据ゑられたが、この小瓶は飛んでもない后の宮のお前に置き放しになつたといふ事を、小龜が沖遠く出でたよ、と秀句を以て洒落れたのである。玉垂の風俗は、當時誰れも知つてゐる諸物だから、この機智頓才は大喝采を博したらしいが、もと〳〵語言の巧で、興味は索然としてゐる。結句、千秋が田中道麿の說によつて、「けり」をけむの誤寫だらうと定めたのはわるい。意釋を見て承知されたい。

二三の句、六帖にこがめはいづらこゆるぎのとある。

女の見て笑ひければよめる　　けんげい法師

かたちこそみ山がくれのくち木なれ心は花になさばなりなむ

大意 女中達よ、さうお笑ひなさるな、この通り形こそ見る影も無い、深山の奥の朽木のやうではあれ、しかも心は花にしようならば、花にもならうはサ。

釋 馬鹿になさるなよの餘意がある。古木倚二寒巖一、三冬無二暖氣一の消極的禪とは異なつて、一道の春風が常に心頭に存するのは、この作者なか〳〵只の鼠でない。「朽木なれ」の隱喩、及びその緣で、心は美しくといふ

べきを、「花に」と轉義した對映、意簡に詞約やかである。「なさば」の一語大いに深味がある。すればなる、然し求めない、自然の結果に放任しておく。そこに枯淡の眞味がある。作者はいよ〳〵達者である。

方たがへに、人の家にまかりける時に、あるじのきぬを著せたりけるを、あしたに返すとてよめる　きのとものり

蟬のはのよるの衣はうすけれどうつり香こくも匂ひぬるかな

釋 ○方を違へに或人の家に往つて泊つた時に、主人の著物を夜の掛物にしてくれたのを、翌朝歸るに當つてそれを返すとて詠んだ歌との意。「方たがへ」は源氏物語河海抄に、「金櫃經云フ、天一立ツ二中央一、故號ク二中神一歟、件ノ方、古來所二違來ヘル一也」と見え、この中神は日毎に巡行するから、また一夜めぐりの神ともいふ。物へ行かうとする時家へ歸らうとする時など、その方角がこの神の塞りの方だと、一夜他家に假寢して歸る、これを方違へといふので、中古の習俗である。○蟬のはの　蟬の羽の如きの意。○よるの衣　夜著をいふ。

大意 昨夜拜借したこの衣は、時節がら蟬の羽のやうに薄いけれど、移香が濃くまあ匂ひました事よ。

評 時はこれ夏であらう。かくその餘香を賞愛するのは、卽ちその人柄を稱へて、その親切を感謝する所以である。立意が理窟なうへに、「濃き」と「薄き」との對照が、餘りに露骨親粘に過ぎて、卻つて淺膚を感ずる。

題しらず　よみ人しらず

遲くいづる月にもあるか山のはのあなたおもてても惜むべらなり

釋 ○あるか　「か」は歎辭。

大意　待てども〳〵、遲く出る月でまあある事よ。これを思ふと、此方でかう待つやうに、あの東の山のあちら面でも、山へ入るのを、人が皆惜むさうなわい。

評 この著想は地平説の行はれた昔時においては、實に破天荒の沒理想であつた。今日は既に學理上立證されて、空想ではなく事實となつてゐるから、詩味は一半を減ずる心地がする。けれども、なほ月が人に惜まれて、その運行を躊躇する有情の取り成しは、詩としての價値を十分に存してゐる。全く月に愛を傾倒してゐる人の言で、いひ知らぬ情味に滿ちてゐる。四句の「も」は、わが月出を待つことを本としての辭である。二句、六帖、及び新撰和歌に月にもあるかなとあり、また六帖の再出のには、三句以下山のはのあなたの里もをしむなるべしとある。本文のに比すれば大いに劣る。

○

わがこゝろなぐさめかねつ更科(サラシナ)やをばすて山にてる月を見て

釋 ○更科やをばすて山　信濃國更科郡にあり。姨捨山と書く。その所在については煩はしく說がある。

大意　自分の心が、何となく物悲しくなつて、慰めかねたわ、この更科の姨捨山に照る月を見てサ。

評 遊子秋月を姨捨山に見る、折柄處がら、その境遇と相俟つて、この愁思が催したものだらう。「てる」の語が眼目である。なまじなまなかさやかな光の爲に、感哀はいよ〳〵そゝられてならぬのである。敍述は極めて單純で、技巧も何も用ひないが、詠歎の味ひが永い。姨捨の名によつて解いた說もあるが、諾ひがたい。大和物

語に、「この山に、姨を捨て置きて歸るとて、甥が詠める」とて、この歌を舉げてあるが、記事の意と歌の意とは矛盾してゐる。のみならずこれはもと、雜寶藏經の棄老國緣第四に見えた印度の傳說を、わが國の事めかして作り設けたるものと思はれる。令の集解に、信濃の古俗に老人を捨てる事があつたとあるも、皆この誤を傳へたので、信じられない。

なりひらの朝臣

おほ方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの

釋 ○伊勢物語には、「昔いと若きにはあらぬ、これかれ友達ども集りて月を見て、それが中にひとり」と、詞書がある。○おほ方は　大概の事ならばの意。○これぞこの　「これやこの」などの類で、「この」は下の「老」といふ語に跨續する。○なるもの　の下、なりけるが略かれてゐる。

大意 月は面白い物であるが、大概の事には、さうその月も餘り賞翫すまいわ、なぜなれば、この月をめでることがサ、段々とたび重なると、何時か光陰が經つて、この人間の老となるものであつたわい。

評 一年の盈虛を數へると幾何もない。これ月に狂し月に執して、老のまさに到らんとするをも知らぬ所以である。その詩的生活は眞に羨ましい。ふとわれから二毛の白いのに愕いて、「月をもめでじ」といふ。必ず月は老に關し、老は月によつて催されるものとした沒理想の構想、これこの作者が擅場である。「大方は」となほ微温的の語を冠せてゐる處は、作者が月に對しての未練執着を語るもので、理窟らしく強い事はいつても、風流情味に勝ち得ない處が頗る面白い。あゝこの作者は、よく花に狂し月に狂し、女に狂し世に狂してゐる。彼れは

全く熱血の男兒である。結句のいひさし、體調勁健の素を成してゐる。

初句、勢語の眞字本に大方のとあるを、眞淵は采つたがわるい。結句、家集には老といふものとある。

月おもしろしとて、凡河内躬恒がまうできたりけるによめる　　紀貫之

かつ見れど疎くもあるかな月影の到らぬ里もあらじと思へば

釋　○月おもしろし　月がいゝといふに當る。○かつ　片一方の意。

大意　あの月を片心ではめでて見はするけれども、疎くまあ思はれる事よ、なぜなれば、あの月の光は、此處ばかりに心あつて照るのではなくて、何處もかも行き渡らぬ處もあるまいと思へばサ、といふが表面の意で、躬恒の來たのを親切には見るけれども、一方には疎くも思ふ事よ、なぜなれば、面白い月故に來たのだから、月の照るかぎりは、躬恒の往かぬ處もあるまいと思へばサ、といふが裏面の意。

評　月を躬恒に擬へての諷詆である。詞書の「月おもしろしとて」とあるに、心を注ける必要がある。躬恒の來たのは月が主で、主人は附けたりだからと、一寸嫌味をいつてみたのは、素より親しい間柄の戲謔である。夏部に、

時鳥ながなく里のあまたあればなほ疎まれぬ思ふものから

とあると、構想が同じで、歌柄も大抵同等の佳作である。

二句、新撰和歌に疎ましきかな、四句、新撰和歌には里の、六帖、及び家集には里はとある。

池に、月の見えけるをよめる

ふたつなき物と思ひしをみなそこに山のはならでいづる月影

大意 月は二つ無い物で、山の端からばかり出る物と思つてゐたものを、それにまあ、山の端では無い、池の水底にも出る月影よ。

評 「山のはならで」は水底に出た月と山の端に出た月とを對映させた筆法で、影の月をも實在と見たのが、この痴呆の想の好處である。秋下に、友則が、

一もとと思ひし菊をおほさはの池の底にもたれか植ゑけむ

と同型の構想で、尖新である。「月影」は月といふに同じい。影に意はない。

題しらず　　よみ人しらず

天の川雲のみをにてはやければひかりとゞめず月ぞながるゝ

釋 ○みを　水脈。水筋をいふ。

大意 天の川は、下界の川とは違つて、雲の水脈で瀨が早いので、光を暫くも留めずに、月がサ早く流れて行くわ。

評 今少し光が淀めばいゝにの餘意がある。天の川の名に據つて、くだち行く月を「流るゝ」といひ、さて「雲のみをにて」と混喩を用ひた。空想に走つてゐて、的實でない。貫之が土佐日記に、

照る月のながるゝ見れば天の川いづる湊は海にざりける

とあるも、これらに胚胎したものか。

○

あかずして月の隱るゝ山もとはあなたおもてぞ戀しかりける

釋　○山もと　山麓をいふ。

大意　まだ見飽かずしてあるうちに、山に障へられて、早くも月の隱れるこの西の山本では、月の入るこの山のあちら面がサ、戀しい事であつたわい。

評　上の「遲くいづる月にもあるかな」と、その場合を反對にして、同巧異曲の觀があるが、これは遙かに劣つてゐるらしい。蓋し「戀しかりける」と道破したのは露骨で、かの「惜むべらなり」と、詩的想像を逞しうしたのに遠く及ばない。

三句、新撰和歌に山里はとある。

惟喬のみこの狩しける供にまかりて、やどりけるに、歸りて、夜ひと夜、酒のみ物語をしけるに、十一日の月も隱れなむとしけるをりに、みこ醉ひて、うちへ入りなむとしければ、よみ侍りける　なりひらの朝臣

あかなくにまだきも月の隱るゝか山のはにげて入れずもあらなむ

【釋】○惟喬のみこ云々　業平が惟喬親王の狩をなされたお供になつて、親王の御別邸に宿つて居たが、終日狩から歸つて一晩中酒を飲み話をしたが、十一日の月ももう隱れようとした折に、親王は醉うて座に堪へず、奥に引き込まうとなされたので、詠みました歌との意。伊勢物語には、惟喬親王が、年毎の花盛りには、山城國水無瀬の別業におはして、常に右馬頭なる人を供につれて遊ばれたが、河内國交野に狩して渚の院に至り、天の川を經て、再び水無瀬の宮に還られて、酒宴なされた折の事として、「還りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで酒のみ物語して、主人のみこ醉ひて入り給ひなむとす。十一日の月も隱れなむとすれば、かの馬の頭のよめる」と詞書して、この歌が出てゐる。○あかなくに　あかぬにのぬの延言。○隱るゝか　「か」は歎辭。

【大意】面白くて見ても／＼見足らぬのに、入るべき時刻よりも早くまあ、月の隱れる事よ、あの月の隱れる山の端が、脇へ逃げ退いて、月を入れずにまああつてほしいわ、といふが表面の意で、この興宴の愉快の盡きぬのに、早くもまあ親王樣の席を辭して、お奥にお入りなされる事よ、あのお姿をお隱し申す御簾や御帳やが無くなつて、お入れ申さずにまああつてほしいわ、といふのが表面の意。

【評】月を親王に比興したのは巧は巧であるが、さほどの高手でなくても、いへばいはれる。只この「山のはにげて」の一語は、實に超凡の大手腕である。高情の極、遂によく一切の理窟を脱し得て、こゝに天外の痴想を現じ來つた。李長吉が、「黒風吹山作平地」と作り、人麿が、「妹が門見む靡けこの山」と詠んだのと共に、豪宕の奇作である。「逃げて」の擬人、論者往々雅馴でないとして退けてゐる。所謂、駱駝を見て馬の肉腫を病むものと考へる儔、むしろ滑稽である。すこし業平朝臣の膽玉でも煎じて飲ませたい。十一日の月がはや入方になるまで夜が更けたのに、酒宴は興なほ酣に、玉山まさに頽れて、親王は殆ど座に堪へ給はず、この時、この

人、この歌があつたとすれば、情味興會は果してどんなであつたらう。紀有常親王に代つて歌ふ。

おしなべて峯もたひらになりなゝむ山のはなくば月も入らじを

二句、新撰和歌にまだきにとあるはわるい。

田村のみかどの御時に、齋院に侍りけるあきらけい子の
みこを「母あやまちあり」といひて、齋院を易へられむとし
けるを、その事やみにければよめる　あま　敬信

大空をてりゆく月し淸ければ雲かくせどもひかりけなくに

釋　○田村のみかどの御時に云々　文德天皇の御世に賀茂の齋院に立たせられた慧子内親王を、その生母に過失があるといつて、齋院を罷められようとしたのを、それが中止になつたので詠んだ歌との意。「田村のみかど」とは文德帝のことで、山城國葛野郡田村に葬め奉つたのでいふ。「齋院」はもと伊勢の齋宮に倣つて置かれたもので、山城の上下賀茂の神に奉仕する齋女で、内親王を以てこれに充てる定であつた。「慧子」は文德帝の皇女である。かく慧子の齋院を廢せられる事はやんだが、しかしその後、また他の事によつて慧子が廢された事が、文德實錄にある。いはく「天安元年二月、廢二鴨齋内親王慧子一、更立二述子内親王一、遣二右大臣正三位藤原朝臣良相一於神社一、告二事由一、其事祕者、世無レ知レ之也」と。○けなくに　消えぬにの延言。

大意　あの廣い空を照つてゆく月がサ淸いによつて、いくら雲が隱しても、光は消えはせぬにサ、といふが表面の意で、素より曇の無い御身は、一旦人がいろ／＼と無き名を立てゝも、ぢきに明りが立つわ、といふが裏面

の意。

評 所謂晴天白日の譬喩を、月にかへていつたまでのやうであるが、自然の景象を借りて感懐を寄せた處に、喜氣が楮表に溢れてゐる觀がある。

題しらず　　よみ人しらず

石の上ふるからをのゝ本がしはもとの心は忘られなくに

釋 ○石の上ふるからをのゝ本がしは「もとの」にかゝる序。石上布留のことは、夏歌「石の上ふるき都の時鳥云々」の條に既出。「ふるからをの」は、「古幹斧即ち柄の古い斧にて、本は手元の意」とは、寄居歌談にある和田正主の考である。又契沖は、「布留枯小野にて布留野の冬枯れたる時をいふ」といひ、眞淵もこれに從つた。景樹は、「古幹なる小野の略」といつた。又大和の地名とするは、舊註の說である。「本がしは」は景樹が、「若生に對へたる名にて、元木の柏なり。野には古木若木立ち交りて、實に然るものなり」と解したのに從つておく。雅嘉は「柏は梢の方は散りても、本の方に葉の殘りてあるものなれば本柏といひ、本の心を忘れぬといへる譬喩の序に用ゐたり」といつた。

大意 石の上ふるからをのゝ本柏のもとゝいふやうに、もとの卽ち以前の貴方のお心は忘られぬにつけ、さう思つて下さい。

評 秋上、躬恒の歌、

秋はぎのふる枝に咲ける花見れば本の心はわすれざりけり

といふは、これを本歌として詠んだらしい。景樹いふ、「この歌、その頃もてはやして唱へたりしならむ。孫姫式に、難波津の歌と並べていへるにて知らる、その歌ざま、實にめでたければなり」と。石の上をいひ、布留をいひ、もと柏をいふ。これでもかくといふやうに、ふるい感じを跡からく追かけに與へようと試みたことは、丁度「足引の山鳥の尾のしだり尾の長々し」と續けたのと似てゐる。さうした程もとの心は忘られないとあるので、故舊を懷ふ情の深さが窺はれる。作者は眞實な人である。

〇

いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ

釋 〇野中の清水　舊くは播磨國印南野にあるといひ、十六夜日記にもさうある。又、一說には大和國布留野にありといひ、貫之集、「石の上布留野の道の草分けて清水汲みには又も歸らむ」。寂超法師、「昔見しふる野の澤のわすれ水なに今更に思ひいづらむ」。堀川太郞百首、「いにしへの布留野の道を尋ねきて清水をなほもむすびつる哉」などを證として、「布留の社は、崇神帝の時の鎭坐にて、瑞垣の久しき所なれば、昔より舊き心にいひなし來れるより、古野といふ意になして、いにしへの野と續けたるか」と。後說やゝましか。但布留野の社云々は從へない。たゞ布留の野中に、いゝ清水があつて、遂に野中の清水と固有名詞にいはれたのを、こゝは、その水のなかつた昔をかけて、「いにしへの」といつたとする。〇ぬるけれど　溫けれど。水は冷清冽なのがよいので、溫いのは下である。

大意　つめたいよい水といふので名高かつた、昔の野中の清水は、今はもう生溫いけれども、やはり昔の事をお

ほえて居る人はサ、今でも汲んで飲むわ、といふのが表面の意で、この節衰へたけれども、以前繁昌であつた時の事を忘れぬ人は、やはり訪らうてくれるわ、といふが裏面の意。

評 昔榮えてよかつた人の詠であらう。今は世に侮りすてられたものゝ、なほ二三、故舊の情を忘れぬ人のあるのを嬉し喜んで、みづから慰藉したその衷情は憐むべきものがある。暗喩の工の如きは第二である。やゝ理路におちた敍述が多少殘念にもある。

○

いにしへのしづの苧環(ヲダマキ)いやしきもよきも盛りはありしものなり

釋 ○いにしへのしづの苧環　「いにしへのしづ」は上代の倭文布(シヅヌノ)をいふ。青と白とを織りまぜたので、今いふ縞織に似てゐる。これをシヅリとも、シドリともいふは、倭文織(イツオリ)の義である。苧環はその倭文を織る料の絲を卷く卷子(ヘソ)である。この「しづの苧環」を、「卑しき」の序とするに就いて、正義に引ける榎並隆璉の說に、「卷子はいやが上に卷くものなれば、彌繁(イヤシキ)といへるを通はせたるらむ」と。この說甚だ穩當である。

大意 身分のよい者ばかりでは無い、我等がやうな賤しい者でも、一度は男盛りはあつたものであるわ。

評 年寄つたとて、さのみ侮り給ふなの餘意がある。身柄卑い老人が世を憤つての作と思はれる。第二句は序である。「よきも」は只いひ添へて、調を諧へたまでの語。自負の言は、次の「今こそあれわれも昔は」といつたのと、その趣が同じである。

結句、六帖にありこしものをとある。

○

今こそあれわれも昔はをとこ山さかゆく時もありこしものを

釋 ○今こそあれ　今こそかくてあれの略。○をとこ山　秋上「女郎花うしと見つゝぞ」の條に既出。○さかゆく　榮行(サカユ)くの意。

大意　今こそこのやうに、年も寄つて老い朽ちたれ、自分とても昔は男山の神威の榮行くといふやうに、一廉(イツカド)の男と榮え行く、若盛りの時節もあつてきたものを、あゝくち惜しいことよ。

評　清和の朝の頃の人の作であらう。老人の感懷、何人と雖もその頽齡にあたつて、この感愴を抱かぬ者があらうか。「今こそあれ我れも」の口吻は、なほ幾分の壯氣をのこして、自負の氣慨に滿ちてゐるのが面白い。この作者の若い時は、頗るの活動家でゝもあつたらう。初句を字餘りでいひ切つた強い語調、「ありこしものを」といひさして殘した餘情、皆これ無量の感慨を惹く所以である。「われも」のもは人に對へていひ、「時も」のもは今衰へたのに當てゝいつた。四句は、男山は山上に社殿あれば、阪行くにかけたのだといふ説もあるが、俗解である。

○

世の中にふりぬるものは津の國の長柄の橋とわれとなりけり

釋 ○津の國の長柄の橋　長柄の橋は戀五「あふ事をながらの橋」參看。元明帝の和銅六年に、國郡の名を二字

に定めて、好名を用ゐしめられた時、津の國を攝津の國と稱せられた。けれど、うち解けた假名物や歌などには、昔のまゝに、「津の國」といつた。

大意 この世の中に、段々舊くなつて衰へ行くものは、よく〳〵思ひまはして見れば、外には無い、たゞあの津の國の長柄の橋と、自分とであつたわい。

評 老人の感懷である。文德帝の仁壽三年十月、攝津國よりの奏言に、

長柄三國兩河、頃年橋梁斷絶、人馬不レ通、請准二堀江川一置二二艘船一、以速二濟渡一、許レ之。

と見えたれば、この歌は仁壽より以前、長柄の橋梁の、いまだ斷絶しなかつた時代の人の作であらう。なほ思ふに、「頃年云々」とあるから、橋梁の腐朽も年久しいことで、當時物の舊い例には、いつもこの橋をいひならしてゐたらしい。よつて、「われ」の對比に、この橋を取り出して、聽者の記憶と聯想とを喚び起し、彼の事態を借りて、我が感愴を映帶せしめた。蓋し作者の狡手段である。長柄に存在の意を寄せたとする說もあるが、穿鑿に過ぎる。

〇

さゝの葉にふりつむ雪のうれを重み本くだちゆくわが盛りはも

釋 〇さゝ 小竹。〇うれ 末。今うらといふ。〇くだち くだりの古言。〇はも 歎辭。

大意 笹の葉に降りつもる雪が、笹のうらの方が重さに、しなひ靡いて、その爲に本の方のが段々にさがつて行くが、まづそのやうに段々に傾いてゆく、自分の若盛りであるはまあ。

評 四十に近い人などの、老の將に來らうとするに對する述懷であらう。四句までは序である。「くだちゆく」に非常に手數をかけた敍述である。抑も笹の葉が雪の重みでさがつてゆくのは、おひく段々で、その急激でない經過が丁寧に映出され、作者の年盛りも、いつか知らぬ間に過ぎ去つた趣がよく表現されてゐる。初二句、一本にわが宿の竹の白露とある。結句、六帖にわが心かなとあるは一向に聞えない。

○

大あらきの森の下草おいぬれば駒もすさめず刈る人もなし

又は、櫻あさのをふの下草おいぬれば

釋 ○大あらきの森　萬葉巻十一に、「大荒木の浮田の杜」とあるも同處か。神名帳に、大和國宇智郡荒木神社がある。そこの森か。能因歌枕には、「山城國にあり、尤もあらはなる森なり」とある。○すさめず「すさむ」は進むこと。○左註の「櫻あさ」は、櫻の色した花のさく麻とも、櫻の花の色に似た麻ともいつて一決しない。「をふ」は麻生で、麻畑をいふ。

大意 大荒木の森蔭の草も、盛り過ぎてからは、馬も喰ひたがらず、又刈る人も無いわ、といふが表面の意で、人もこのやうに年が寄つてからは、皆厭がつて、寄りつく人もないわ、といふが裏面の意。

評 大荒木の森を取り出したのは、作者の住んでゐる附近なのであらう。草も馬にすさめられぬとなつては、はや論外で、傷心の語である。「老いぬれば」の擬人は、直に作者の老境を想及する楔子となる。四句で意は完結してゐるのに、五句を更に歌ひ添へたので、その漸層の反復に詠歎の意が力強く表現される。

作者を、六帖に小町とあるが、更にかの娘子の風調でない。しかも、婦人の口氣でない。櫻あさ、六帖には櫻麻(ヲ)とある。

〇

數ふればとまらぬ物をとしといひて今年はいたく老いぞしにける

譯 〇とし　疾しに、年を寄せた。

大意　よく數へて見れば、暫時もとまらずに過ぎ去るものを、疾(ト)いといふ名の年といふので、忽ちの間に、今年は存外にひどく年寄にサなつたわい。

評　あまり說明的でつまらない。

〇

おしてるや難波のみつにやく鹽のからくも我れは老いにけるかな

又は、大伴のみつの濱べに

譯 〇おしてるや　難波の枕詞。「おしてる」は、襲(オソ)ひたてるの約で、波の高く寄せて立つをいふ。難波は、神武紀にある如く、浪の速い處だつたので、「おしてる波」と續けた。〇難波のみつ　「みつ」は御津の義。官船の出入する津なので、貴んでいつた。〇左註、「大伴の」は御津の枕詞である。古語に、才德勇威のあるのを、稜威(イツ)又みづといつた。古事記に、「みづくし久米の子らが」とあるがそれである。往古大伴氏は武勇の家柄で、み

づくしいといはれたので、大伴の御津と續けたのだらう。

大意　あの難波の御津でやく鹽は辛いものであるが、そのからくも卽ちつらくもまあ、自分は年が寄つてしまつたことよ。

評　三句までは序である。當時難波の製鹽は著名なもので、これを序としたことは、「からく」の印象を與へるに好都合な表現であつた。四句の促調は詠歎を深刻にする。

二句、六帖に難波の浦にとある。又、和歌九品に荒汐の汐の八百會にとあるは意が通じない。

○

おいらくのこむと知りせば門さしてなしと答へてあはざらましを

この三つの歌は、昔ありけるおきなのよめるとなり。

釋　○おいらく　賀、業平、「櫻花ちりかひくもれ」の條に既出。

大意　この老といふものが、自分を尋ねて來ようといふことを、早く知りもしたならば、門をしめて置いて、留守といつて、逢はずに居ようであつたものを、さうしたならば、このやうに年も取るまいに。

評　昔でも老のくるといふ擬人の辭様は、殆ど平語の如くに使用されてるたものだらうと思ふ。それを修辭上の本義にたち返つて、ますく敷演誇張して、「門さしてなし」とまで、居留守を使ふ場面を展開した狂痴の想は覺えず破顏される。業平の「櫻花ちりかひくもれ」の歌よりは、やゝ古い頃のものか。さうしたら、これを據として、業平は「來むといふなる」と取り成したと見てよい。

左註は、もとより信ずるに足りない。

○

さかさまに年も行かなむとりもあへず過ぐる齢やともにかへると

大意 月日がまあ、逆(ギャク)にあとへいつてもらひたい、何する間もなく經つて行く齢がサ、その月日と一所にあとへ戻つて、若がへるかと思へば試にサ。

評 あとへ年を取りたいとは、よく人のいふことである。しかし、當時では尖新の語であつたかも知れない。

○

とりとむる物にしあらねば年月をあはれあなうと過(スグ)しつるかな

大意 月日のたつのは、取り止められる物でサないから、仕方がなさに、あゝさて憂いことぞと、歎きながら過したことよ。

評 あきらめ切つたやうで、なほあきらめ切らぬ歌である。

○

とゞめあへずうべもとしとはいはれけりしかもつれなくすぐる齢か

釋 ○とし 疾しに、年を寄せた。○か 歎辭。

大意　年のたつのは早くて、止めようと思つても、止める間もない、道理でまあ疾しといふ名をつけられたわい、それは仕方が無いとしても、そのうへにまあ年につれて、氣強く過ぎてゆく自分の齡であることよ。

評　年ゆゑには、重ね〳〵難儀な目を見る趣である。諸註「しかも」の意がよく解けてゐない。

〇

鏡山いざ立ちよりて見てゆかむ年へぬる身は老いやしぬると

この歌は、ある人のいはく、「大とものくろぬしがなり。」

釋　〇鏡山　近江國蒲生郡。古へは野州郡のうちであつた。

大意　鏡山といふ山なら、人の影がよく映るであらうほどに、年をひどく久しく經てきたこの身は、老いくちたかどうかと、どれ立ち寄つて見てゆかうわ。

評　初老の程の人の、鏡の宿あたりを過ぎての作であらう。山口ながら年寄の部に入つたので、鏡山の名を聞いては、面影も變つたかしら、「いざたち寄りて」と洒落れてふざけて見たのである。全くの老人ならば、「老いやしぬる」と、疑ふまでの事はない。前人等皆、箇中の消息を曉りかねて、耆老の人の作としてゐる。甚だ疎漫である。鏡山の名稱に發足した構想は、やゝ浮誇の感じがする。

左註に就いて、眞淵は例の採らぬから、これは論なしで、景樹は、「黑主は近江の滋賀郡大友鄕の人なれば、立ち寄りて見むとやうに珍しむべからず」といひ、又「この歌は老いて後の意なるに、黑主の滋賀にありしは若き程なり。女と戲れたるにて知るべし」といつて、黑主說を否認した。しかし假令同國同郡でも、未見の地なら

珍しがらう。況やこれは、狂痴の想を主としたもので、まことに珍しがつて詠んだのでもなからう。女と戯れたる云々は、既にいふ如く、四十の聲を聞いたばかりの初老の人ぐらゐなら、普通あることである。されば、景樹の論據は極めて薄弱である。たゞ必ず黒主のといふ證もなく、又でないといふ證もない。姑く左註を存しておく。

業平の朝臣の母のみこ、長岡にすみ侍りける時に、業平宮仕（ミヤヅカヘ）すとて、時々も、えまかりとはず侍りければ、しはすばかりに、母のみこの許より、とみの事とて、文をもてまうできたり。あけて見れば、詞はなくてありける歌

おいぬればさらぬ別もありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな

釋 ○業平の朝臣の云々　業平朝臣の母の内親王が、長岡に住んでゐられたが、業平は公の勤務の爲にたまさかにも往つて見舞ひかねてゐたので、師走時分に、母の内親王の許から、急用といつて、書簡を持つて來た。業平がそれを開いて見ると、文句は書いてなくて、歌ばかり書いてあつた、その歌との意。この詞書は伊勢物語にもあつて、異なつたところが多いが、長いから略く。「母のみこ」は桓武帝の皇女伊登内親王で、阿保親王の妃である。長岡は山城國乙訓郡鷄冠井にあつて、桓武帝の延暦三年奈良から一旦遷都された地で、古來この地を大極殿と稱してゐる。「とみ」は頓の字音で、急用の意。○さらぬ別　「さらぬ」はえ去らぬことで、遁れ難い

別卽ち人世に於ける死別をさす。

大意　今は親子が、都と長岡とに別々で居るが、それぱかりかこのやうに年寄つては、世の中に是非とも遁れぬ別もまたあるといふことなれば、それが氣になつて、常々逢ひたく思ふ其方(ソナタ)に、いよ〳〵この頃は逢ひたく思はれることよ。

評　作者伊登内親王は、夫阿保親王とは、叔母甥の關係であるが、阿保親王は父帝の壯時の初孫で、承和九年五十一歳にて薨ぜられ、内親王は御姉甘南美内親王が、弘仁八年に十八歳であられたのから推算すると、承和九年に、四十三歳よりはお若かつたことは著しい。されば貞觀三年薨去の御時は、六十歳程と見て誤がなからう。業平はその時に三十七歳である。「とみの事とて」とある詞書と、この歌とを併せて考へると、内親王が薨去に近い頃の師走、御病氣の爲にこの度はと思し召された折のことゝ思はれる。夫親王に後れてから、父帝の一旦還都された長岡の舊土に寡居すること、殆ど二十年にならうとする。その愛子は、世過ぎ身過ぎの京住居、公務に忙殺されて、僅々一里内外の道ながら、往省する遑さへなく、殆ど生別れに等しい觀がある。然るに御自身は、さらぬ別の死に目に近い頽齡の病身であり、況や今は師走で、又しも一箇の老を加へようとする。何で「いよ〳〵見まくほしき」感が起らなからうぞ。眞にこれ心の聲である。純眞の聲である。尋常彫琢の語の遠く及ぶところでない。「さらぬ別も」と婉曲にいひなしたのに、凄愴の意が殊に活躍する。「も」は離居の生別に對へた辭で、下の「いよ〳〵」の語も、その響を受けてこそ落着するのを、諸註、別のといふも同じやうに解いたのは粗い。

「別も」を、一本、及び伊勢物語に別のとある。恐らくは次の返歌の詞のまぎれたのであらう。

かへし　　　　なりひらの朝臣

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もとなげく人の子のため

大意　何卒世の中には、遁れぬ別などいふことの、無いやうにしてほしいことよ。親の壽命を千年もあれかしと歎いて願ふ息子の爲にサ。

評　單に「子の爲」といつて聞えることを、「人の」と修飾したのが、世の中の人の子にかけていつたやうに聞えて、その中に自然とわが事は含まるのである。萬葉集、「人の祖の立つること立て」、「人の子は祖の名絶たず、大君にまつろふものと」、又、後撰集兼輔、「人の親の心は闇にあらねども」の類、皆それである。歌は眞情眞詩。四句、伊勢物語に千代もと祈るとある。又眞字本伊勢物語には、齋の字を書いてあるから、千代もといはふと訓むのである。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　　　ありはらのむね梁

白雪の八重ふりしけるかへる山かへる〴〵も老いにけるかな

釋　○かへる山　離別「かへる山ありとは聞けど」の條に既出。○かへる〴〵も　かへり〳〵といふべきを、かへる山の語調を承けていひかへた。

大意　自分の頭はまあ、雪の幾重〳〵も降り積つた北國の鹿蒜山のやうに、眞白になつて、その山の名のかへる

がへるも、ひどく年寄つたことよ。

評 山に寄せて頽老を歎いた。山の雪を白髪の頭に喩へ、しかも「八重ふりしける」は、「かへる〴〵も」にかけ合つてゐるから、うち任せた序歌ではない。さて、寛平后宮の歌合の歌は、寛平五年の撰なる菅家萬葉に收められてあるから、歌合は寛平の初年に行はれたものと見られる。作者の父業平は、寛平元年より十年前なる元慶四年に、五十六で卒してゐるから、假令業平が存命してゐたとしても、寛平歌合の頃には六十五六の齢である。その子たる作者棟梁は取つても四十位だから、歌の趣がその年配に適はない。さりとて擬人して、山のけしきを詠んだものとも思はれず、前後の部立にもかなはぬ。古人は題詠でも、述懐などに虚構して詠むことはなかつた。されば棟梁の歌ではないかも知れぬ。姑く疑ひを存する。

四句、顯本にかへす〴〵もとあつて、定家も異存がないが、かへる山を打ち返したことは明らかだから、どうあらうか。新撰萬葉にも、「白雪之八重降敷留還山還々曾（茂の字の誤か）老丹藝留鉇」とあるので、本文の正しいことが知れよう。

おなじ御時、うへのさぶらひにて、をのこどもに、大御酒（オホミキ）給ひて、大御遊（オホミアソビ）ありけるついでに、仕うまつれる

としゆきの朝臣

老いぬとてなどかわが身をせめきけむ老いずばけふにあはましものか

釋 ○前と同じ寛平の御時、殿上の侍所で、侍臣に御酒下されがあつて、管絃の御遊があつた折につけて詠んで

あけた歌との意。「大御遊」は專ら管絃の御遊をいふ。○せめきけむ 「せめき」は迫めきで、迫めくと活く。せめくは毛詩に、「兄弟鬩ニ于牆一、外禦ニ其侮一」とある。鬩の字を訓ませてある。鬩は、註に「鬩很也」とあつて、爭ひもとること、いさかふことである。責め來けむの意に解くも一說である。

大意 ひどく年寄つたといつて、我れとわが身を、これまでなぜに責めたけたことであつたらうぞ、よく思つて見れば、年の寄つたのは嬉しい事よ、かう年の寄るまで生きて居ずば、めでたい今日に逢はうものか、いや逢はれるものでないわ。

評 老を讚して今日の光榮を喜ぶ、仕うまつゝた歌としては、その體を得てゐる。然しその內面的心理から見ると實は老を歎いた矯語である。面に笑つて心に泣いてゐるのである。二つの「か」、上のは疑辭、下のは反動辭だから差支もないが、「老」の語の重複したのは、洗煉を缺いてゐるものではあるまいか。作者はわざとしたのであらうが。

二句、六帖になどやとあるは誤であり、家集にわが身などてかとあるも、意がとほらない。

題しらず　　よみ人しらず

ちはやぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ年のへぬれば

釋 ○ちはやぶる宇治 「ちはやぶる」は秋下「千早ぶる神代も聞かず」の條に既出。こゝは「宇治」の枕詞に用ひた。冠辭考に、「宇治は、稜威と同音にて通へば、千早ぶる宇治といひ下したり」といひ、萬葉古義に、「宇治は、俗に、いぢある人、いぢはる、いぢわるきなどいふと同音にて、(意地とかくはあて字)平穏ならず、烈しき意

ある言なる故に、ちはやぶる宇治と續けたり」といひ、古說は、「物部の八十氏人は逸(イチハヤ)ぶるが故に、千早ぶる氏と續け、さて宇治にいひかけたり」とある。「宇治」は山城の宇治川のある地。〇橋守　野守、山守、關守などの類で、宇治に橋守のあることは、天武紀に、「令下菟道守橋者(ウヂノハシモリヲシテ)遮(ラ)中皇太弟宮舍人運(ノ)ニ私粮(ノブ)一事(ヲ)上(ヲ)とあるので知られる。〇なれ　汝。

大意　宇治の橋守よ、外の人よりは其方をサ、取り分けて不憫な者ぞとは思ふわ、自分と同じやうに、ひどく年寄つた者と思ふによつてサ。

評　わが老によつて、人の老を憐む。所謂相見互(ミタガヒ)の同情である。橋守を憐むのは卽ち自分を憐むのであつた。昔から山守だの橋守だのいふ者はおほく隱居役で、老人の掃溜であつたと見える。打聽の或說に「才德ある人の、世に沈みてあるを憐みて、橋守に寄せていへるか」といひ、眞淵は、「宇治に住める人の、宇治の橋守に寄せて、そのいふかひなくて年老いたらむを、高貴の人の憐み給へるにてもあるべし」といつた。それも一寸面白いが、この前後の歌が、皆老人自身の感懷をついでてあるから、從ひ難い。

〇

われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姬松いくよへぬらむ

釋　〇住の江の岸の姬松　「住の江の松」のことは、賀部「住の江の松を秋風」の條に既出。「姬」は細小で愛すべき物を形容するに用ひる語であるが、こゝは單なる美稱と見てよい。

大意　この住の江の岸の姬松は、自分が見はじめてからも、もう久しいことになつて居るが、一體抑もの始から

は、いか程年を經てきたことであらうぞ。

評 それほど久しく松を見てきたことは、卽ち自分のいゝ老人であることを暗證する。萬葉卷七、

いにしへのことは知らぬを我れ見ても久しくなりぬあめのかぐ山

を踏襲してはゐるが、松が生物であるだけ、しかも「姬」といふ人稱が冠してゐるだけ、作者の生活に近い感じがして、同感がはやく起る。語調も流暢で、姿も亦清い。初句を、わがと讀むがよいとの景樹の說は、僻言である。

○

住吉の岸のひめまつ人ならばいくよか經しと問はましものを

釋 ○住吉　住の江と同じい。攝津國住吉郡(今東成郡)。吉の古訓はヱであるから、住吉と書いても、なほ「スミノエ」と訓むべきを、夙くこの頃は「スミヨシ」と訓むことが起つてゐたのである。下にも「住みよしと蜑はつぐとも長居すな」とある。

大意 住吉の岸の姬松は、大層年久しい物のやうに噂されるが、これが人間ならば、いかほど年を經たかと尋ねて見ようものを、人間ではないから、仕方がないわ。

評 この種の構想は、先型のあることである。景行紀に日本武尊の御歌、

尾張にたゞにむかへる、をつの崎なる一つ松あはれ。一つ松、人にありせば、きぬ着せましを、太刀佩けましを、一つ松あはれ。

これが最も古く記述に見えた、しかも立派な作であらう。

をぐろ崎みつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを（本集大歌所）

くり原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを（伊勢物語）

などはまた、その響をつぐものである。この住吉の松は、やゝ狂熱が乏しく、「人ならば」と假設した詮がやゝうすいやうである。但これは吹毛の難をいふだけで、格調はすべておなじ儔のものである。

初二句、六帖に玉津島入江の小松とある。

〇

あづさ弓いそべの小松たが世にか萬代かねて種を蒔きけむ

このうたは、ある人のいはく、「柹本人まろがなり。」

釋 〇あづさ弓　春上「梓弓おしてはる雨けふふりぬ」の條に既出。こゝは「磯」にかゝる枕詞。梓弓射といふに磯をいひかけた。〇かねて　かけてと同じい。

大意　この磯の上の小松は、ひどく古びて居るが、昔いつの誰れの時代に、ゆく末何萬年もかけて生ひ茂れと思つて、種を蒔いて置いたことであつたらうか。

評 この小松は二葉ではない。巖に根ざした老樹の矮松である。宣長の「小松はたゞ松なり、小さきをいふにあらず」といふ說は强言である。樹こそ古りたれなほ小さいから、普通の長立となるには、萬年も經なければばと思はれるので、さては、たが世にかく萬代かけて、かう蒔いておいたかと訝つたのが、この趣向なのである。

又左註の妄りなことは、この風調を知る者の、誰れも點頭くところであらう。

○

かくしつゝ世をやつくさむ高砂（タカサゴ）のをのへに立てる松ならなくに

釋　○世をやつくさむ　一生を暮らしてしまうかしら。○高砂　播摩國加古郡高砂。「高砂」はもと普通名詞で、高いさごの義である。どこにもせよ、濱風の吹き上げた砂の積つて山となつたのをいふ。それに松など生えて、眞の山とも見られる。播摩の高砂もさうした景色の所なのが一轉して、固有名詞に呼ばれたものだらう。序文に、「高砂、すみの江の松も相生のやうに覺え」とあるのは、この歌に據つて書いたと思はれるから、この集の撰者も、播摩の名所と見たことは無論である。

大意　自分はこの年になるまで、何一つ仕出した事もないが、毎日毎日このやうにして、つい一生を送つてしまふであらうか、あの高砂の山の上に立つて居る松こそ、何の役にも立たずに年久しくある物だが、自分はその松でもないのにサ。

評　世に無用の長物たることを慚悔した對比に、高砂の松を取り出したのに、無量の感慨が寓せられた。松でもないのに松と同じ始末では、全く言語道斷である。或は、世に大材を抱いた者の、老境に至るまで時に合はず世に淪んだのを嗟傷したものか。これは試にいふのみ。

藤原興風

たれをかも知る人にせむ高砂のまつもむかしの友ならなくに

釋 ○たれをかも　「か」は疑辭。「も」は歎辭。○知る人　故舊知己などの意。○高さご　山の意としても通ずるが、撰者はこれも地名として採つたと思はれる。

大意　自分はかう年寄つて、今では生き殘つて居る友達も無いによつて、誰れをまあ近付(チカヅキ)として交りをしようか、あの高砂の松も年久しい物ではあるが、それも昔からの友達ではないによつて、話相手にならぬサ。

評　上句を下句で解釋した敍法である。松の有をいつて、故舊の無を歎ずる對照の間に、無限の感愴を生ずる。白居易の「十人酬和九人無」と同じく、故舊親朋は次々に凋零して、ひろい世界に只一人取り殘された。昔の友なら松でも知る人にして話したくなる。老境に於ける孤獨の酸味は、實に思ひやると慄然とする。

○

わたつみの沖つ潮合(シホアヒ)にうかぶ泡の消えぬ物からよる方もなし

釋 ○わたつみ　次の歌の條參看。○潮合　さしひく潮の滿ち合ふところをいふ。○物から　物ながらの意。

大意　海の沖の潮合に浮く泡は、消えずにはありながら、寄りつく場所もないが、自分もその泡のやうに、命は消えずにはありながら、何處といつてたよる所もないわ。

評　おなじはかない物ながら、磯邊の泡は、なほ寄りつく所があらう。然るにこれは沖の潮合の泡で、寄り付く處もなしにふは〳〵浮いてゐる。老大なほ志を得ないで、世に浮沈する意を寄託し得た。眞淵が「上句は消えぬものからといはむ序なり」と解したのは精しくない。全然譬喩である。

四句、六帖にたえぬ物からとあるはわるい。美成いふ、「この歌、或人の本に、『よみ人しらず』とあり、與風集

にも、以下三首ともに見えず」と。さうした證本があるなら、それに從つてもよい。

○

わたつみのかざしにさせる白たへの波もてゆへるあはぢ島山

釋　○わたつみ　海神の名。陰陽二神が國產みませる次に、海神を產まれたことを、古事記に、「次生二海神一名ハ大綿津見神」、日本紀に、「又生二海神等一號二少童命一」と見えた。古事記傳に、「師說(眞淵)に、綿は海、津は助辭、見は毛知の約りたるにて、海津持の意なり。これ海を持つ神なればなり」とあるに從つておく。海をワタといふのは、渡る意から出たといふ。轉じては、直に海のことにも用ひた。○かざし　秋下「露ながらをりてかざさむ」の條に既出。○ゆへる　結へる。

大意　海の神が、簪に刺してお出なされる白波を以て、くるりと結ひまはして居る淡路島であることよ。

評　海越に淡路島を見渡しての作である。海神の挿頭の波、おのづから崇高の觀念を與へる。萬葉集卷一人麻呂の長歌に、

山つみのまつる調と、春べは花かざしもち、秋くれば紅葉かざせり。云々。

とあると同調である。「白妙の」は枕詞ながら、こゝはその本義に立ち返つて、白い色相を聯想させる。二句の「させる」、四句の「ゆへる」、同語形の重複は、いさゝか不快である。

○

わたの原よせくる波のしば〱も見まくのほしき玉づ島かも

釋 ○波の　波の如くの意。○見まくの　「まく」は未來の助動詞のむの延言。○玉づ島　紀伊國海部郡若の浦（今の和歌の浦）にある。三代實錄に玉出島とかゝれ、空穗物語に玉出づる島ともある。されば「つ」は濁つてよむのが正しい。玉津島明神の社があり、衣通姫を祀る。

大意 あの海原から、絶間もなく、しば〳〵寄せてくる波のやうに、何遍も來て見たいと思ふ玉津島であることよ。

評 上句は有心の序で、玉津島の背景を形作つてゐる。「しば〳〵も見まくのほしき」といふは、しば〳〵も見られない人の言で、和歌の浦遊覽に來た他國人の作である。玉津島の景色は、聖武帝がいたく愛でられて、

登レ山望レ海、此間最好、不レ勞二遠行一、足二以遊覽一、故改二弱濱一、名爲二明光浦一、云々。春秋二時、差二使官人一、祭二玉津島之神、明光浦之靈一。

との勅があつた。爾來奈良人の賞翫する處となつて、以てこの朝に至つた。惜しいことに桑滄の變は海水の減退を來たして舊時の觀を失つてしまつた。もとは今の岡陵のもとまで海水が灣入して、玉津島は海中の孤島であつた。赤人が「潮みちくれば」といひ、「あしべをさして」といつた處は、今の畑や人家のあたりと思はれる。

○

なには潟潮みちくらしあま衣たみのゝ島にたづ鳴きわたる

釋 ○あま衣たみのゝ島　「あま衣」は雨衣で、「たみの」のみのにかゝる序に用ひた。和名鈔に、「蓑、和名美能、雨衣也」とあるを思ひ合はせると、この續きが明瞭になる。「たみのゝ島」は攝津で難波のうちとは思はれるが、

場處が不明である。秋成の說に、「今大わたと呼ぶ里あり、近昔までは、みのわたと呼びしなり。これたみの、わたりなるべし」と。

大意 あゝ難波の浦の干潟に、潮が滿ちてくるらしい、その證には、あのたみのゝ島へ、鶴が飛び騷いで鳴いて渡るわ。

評 神韻を以て勝る作である。又、ア列音が多くして、聲韻が爽快である。

難波潟汐干に立ちて見わたせば淡路の島にたづ渡る見ゆ　（萬葉卷七）

わかの浦に汐みちくれば潟をなみ蘆邊をさしてたづ鳴きわたる　（萬葉卷六）

の如きは皆同型の同調である。もしこれを當代の作とすると、萬葉の糟粕、奈良人の餘唾であるが、恐らくこの歌は平安朝の作ではなくて、奈良朝の遺調だらう。神樂歌の大前張（サイハリ）に收められてあることは、その適證である。

序にいふ、難波の地形も非常な大變動があつたもので、昔の面影は全くなくなつたのである。今の大坂の丘陵高地は或は島であつたり、水涯の陸地であつたりして、海水が遠く灣入し、淀の河水は幾派にも分流して、頗る風趣に富んだ水鄕であつたらしい。そのつもりで難波あたりの歌は味はれたい。

貫之が、いづみの國に侍りける時に、大和より越えまうできて、よみてつかはしける　　藤原たゞふさ

君を思ひおきつの濱になくたづのたづねくればぞありとだに聞く

譯　○いづみの國に侍りける　和泉の國守の任にありましたの意。○思ひおきつの濱　思ひ置くに、沖津の濱をかけた。この濱は和泉にあるといふ。

大意　私は貴方のことを、心にかけておいて忘れずに、この沖津の濱に鳴く鶴(タヅ)の名のやうに、尋ねて來たればこそ、御無事でお出なさるといふ事だけでも聞きましたわ。

評　それに引き換へ、貴方からは一向音信も下さらぬことよと、自分の親切さをいひ立てたのは、暗に貫之の不沙汰を怨じた諷意をもつ。忠房は大和守、貫之は蟻通明神の社頭で、「かきくもりあやめも知らぬ」の歌を詠んだことを思ひ合はせると、これも和泉守であつた當時、公務などで、和泉の沖津の濱までは來たが、私に閑を偸んで、貫之を國衙に訪ねることが出來なかつたので、歌だけ贈つたものだらう。

かへし　　つらゆき

おきつ浪たかしの濱のはま松の名にこそ君を待ちわたりつれ

譯　○おきつ浪たかしの濱　沖つ浪高しに、高師の濱をかけた。「高師の濱」は和泉國泉北郡(もと大鳥郡)高石の海岸、今濱寺といふ處。

大意　あの沖つ浪の高いといふ高師の濱の、そこの松の名の通りにサ、自分はとうから、久しく貴方をお待ち申して居りましたわ。

評　私の方でもお待ちしてゐたのですと應酬し、向ふから「なくたづのたづねくればぞ」といつてきたのを受けて、こちらも「高師の濱の濱松の」と、疊音の巧を鬪はせたのは、時に取つての興がある。作者は流石に老手である。

松を待つに取り成すことは、うるさい程類例がおほい。「こそ」が輕い用法であることにも注意するがよい。
この歌、拾遺集雜戀に再出したのには、詞書「和泉の國に侍りける程に、忠房の朝臣大和よりおくれる返し」とある。けれども、上なる忠房の歌に「尋ねくればぞ」とあるから、却つて事實が相違する。

難波にまかれりける時よめる

難波潟おふる玉藻をかりそめの海士(アマ)とぞ我れはなりぬべらなる

釋 ○玉藻をかりそめの　玉藻を刈りに、假初をかけた。

大意　たまく京地から來て、この難波潟の風景を見れば、さてく珍しく面白くて、歸ることも忘れて、當分玉藻を刈る海士にサ、自分はなつてしまひさうだわ。

評　面白さに長居されるを、「海人になりぬべらなり」と誇張したのを、巧手とする。然し萬葉集に、

あら拷の藤江の浦にすゞき釣る海士とかみらむ旅ゆく我れを　（卷三）

うち麻(ソ)を麻績(ヲミ)のおほ君あまなれやいらごが島の玉藻刈りをす　（卷一）

などから、胚胎してきたものである事は爭はれない。「かりそめの」の一句、分別に著して面白味を殺ぐ。
上句、六帖浦本に生の浦におふる玉藻のかりそめにとあるは、本文のに劣つてゐる。

あひ知れりける人の、住吉にまうでけるに、よみてつかはしける

みふのたゞみね

住吉とあまはつぐとも長居すなひとわすれ草おふといふなり

【語釋】○住吉　地名の住吉に、住み好しの意を寄せた。○人わすれ草　人を忘るに、わすれ草をかけた。「わすれ草」は戀五「わすれ草種とらましを」の條に既出。

【大意】貴方が住吉に行かれたなら、「所の名の通りに住みよい處である」と海士は申さうとも、必ず長居をなさいますな。あの住吉の岸には、人を忘れるといふ名の忘草が、生えて居るといふことですわ。

【評】何分早く戻り給への餘意がある。「相知れりける人」は必ず戀人である。その住吉の神詣、假初の旅ながら、風光明媚で長居しさうな處がらなので、ふと考へると、處の名が住みよし、生えてゐる草が忘草、さあ心配になつて溜らない。で「長居すな」といひやつた。「人」は女やうにいつて自分を含めた例の辭令である。「人わすれ草」は一寸面白いが、この作者のはじめた造語でもあるまい。既に萬葉にも、戀わすれ貝ありけり、この集墨滅の歌にも、戀わすれ草と詠んだ貫之のがある。

難波へまかりける時、たみのゝ島にて、雨にあひてよめる

つらゆき

雨によりたみのゝ島をけふゆけばなにには隠れぬ物にぞありける

【語釋】○たみのゝ島　上に既出。○なには　名にはに、難波を寄せた。

【大意】雨が降るによつて、蓑といふ名をあてにして、この難波のたみのゝ島を今日行くと、それは雨に濡れてしまつた、存外に名には身體の隠れぬものであつたわい。

評 俄雨に遇つて立ち寄つた所が「たみの丶島」なので、「名には隱れぬ」と大發見をしたやうにいつた。「本の句は雨の降るによりて、もしやとわざと田蓑に行きたるさまに構へなすもの」と、景樹の解いた如くである。縁語の仕立を基想としたかうした口は、自分はあまり感心しない。三句、顯本にけふのけどとあるのは、意は聞え易いが、本文の方に含蓄がある。

法皇、西川におはしましたりける日、「つる洲に立てり」といふことを題にて、よませ給ひける

あしたづの立てる河べを吹く風に寄せて返らぬ波かとぞ見る

解 ○法皇西川に云々 「法皇」は宇多の上皇。「西川」は大堰川のこと。京都より西に當るのでいふ。「つる洲に立てり」は、鶴立洲の漢字題を譯したのである。日本紀略に、「延喜七年九月十一日、太上皇幸二大堰河一」と見えて、その前日に、「法皇召二文人一、賦二眺望九詠之詩一」とある。鶴立洲は眺望の題の一つであらう。序文は貫之で、歌人はこの序者、及び躬恒、是則、頼基等であつた。○河べを 河邊なるを。

大意 あれは白い鶴のたつて居る河邊であるものを、自分はついしては、吹く風につけて寄せたまゝ、返らずになる波かと思はれた。

評 色相上の聯想から浪を點出し、その動かぬさまを極端に誇して、「寄せて返らぬ」の句を添へた。直譯すれば、動かぬ波が洲にあることと見れば鶴のゐたのであつたといふことを倒敍したのである。題を上手にこなしたものである。

この歌は延喜七年の作だから、この集奏進後のものである。

中務のみこの家の池に、舟をつくりておろしはじめて、遊びける日、法皇御覽じにおはしましたりけり、夕さりつ方、かへりおはしまさむとしける折に、よみて奉りける

伊勢

水のうへに浮べる舟の君ならばこゝぞとまりといはましものを

釋　○中務のみこ云々　中務卿親王の家のお池に舟を造つて初進水をやつて、遊宴のあつた日、御父宇多法皇がそれを叡覽に御幸があり、夕方御還幸なさらうとする折に、詠んで法皇に奉つた歌との意。「中務の親王」は宇多法皇の御子で、玉光宮といはれた敦慶親王であらう。この親王は延長八年二月に四十四歲で薨ぜられた。それから逆算すると、延喜の初年頃は十七八歲でおありなさる。元服なさるとすぐに中務卿に任ぜられ、のち御弟敦實親王に中務卿を讓つて、式部卿に轉任なされた。中務卿時代にまうけた御女を中務と稱して、名譽の歌人である。諸註こゝを敦實親王としたのは差つてゐる。敦實親王は、この集撰進後の延喜七年に元服なされ、尋いで中務卿となられたので、この時はまだ小兒であられた。「おろしはじめて」は新造の舟を始めて進水すること。「遊び」は例の管絃の遊。○とまり　舟泊。

大意　水の上に浮いて居る、今日お召になつた舟が、もし法皇樣であるならば、「こゝがその泊所であります」と

申し上げてお留め申さうものを、舟でない法皇様には、さやうにも申し上げられず、お留め申さぬことが殘多いことに存じ上げます。

評「舟の君ならば」といつた空中樓閣、幻化の手段は頗る妙である。作者伊勢は中務の君の母だから、この頃は敦慶親王の妻で、亭主方として、法皇の御駕を迎へ奉つたものか。さては法皇との關係は、すでに絶えてゐたものと看做される。物の音名殘おもしろく池の中島に響き、ま新しい朱のそほ舟は乘りすてられて、汀の波にたゞよつてゐる。見送仕うまつると、御車のほとりに侍ふ一雙玉の如き人、御心ゆきて笑ましげに見おこせ給ふ法皇の御顏、それらがすべて夕蔭に榮えたこの時の情景は、思ひやつてさへ限りなくおもしろい。況や「こゝぞとまりと」と名殘を惜んだこの三十一字が、今日の掉尾の興を添へたではないか。

この歌及び上の歌の詞書に、「法皇云々」とあるのが、他の例に差つてゐるのを訝つて、廣蔭が、後人の書入だらうと推定したのは、却つてよくない。それは宇多帝御在位中にかゝつたものは、「寛平の御時」と書き、御讓位後にかゝるものゝうち、御出家後のは、「法皇」とのみ書いたのである。史によると、「この帝御讓位の後、朱雀院太上天皇と稱せられ、昌泰二年太上天皇の尊號を辭して、單に朱雀院とのみ稱せむことを請ひ給ひしかども、醍醐帝きかせ給はざりしかば、これより、法皇と申す」とある。この集の詞書の書體は正にこれに符合する。その差別の嚴なことが知られる。なほ同じ人の作を、一は良岑宗貞、一は僧正遍昭と書きわけてあるのと同じい。

唐琴といふところにてよめる　　眞せい法師

都までひゞきかよへるからことは波の緒すげて風ぞひきける

釋 ○唐琴　備前の國の名所で、船どまりである。○すげて　附けての音轉。

大意　京まで名の響いて聞えてゐる唐琴の浦は、どうしてさう響いたかと見れば、波の緒をすげて、風がサ彈いて音をたてるのであつたわい。

評　これは無理のないこと、人間業でないからの餘意がある。「唐琴」の名稱から「響かよへる」といひ、さて、波の緒に風の彈手の空想を案出したのは、恰も春蠶が絲を吐くやうである。只その緣語にからまれて、狂歌めいてゐるのが飽き足らない。

四句、六帖に波の緒よりてとある。

布引の瀧にてよめる　　　在原行平朝臣

こきちらす瀧の白玉ひろひおきて世のうき時の涙にぞかる

釋 ○布引の瀧　攝津國、今の神戸市の北端、布引山の半腹にある。雄瀧十五丈、雌瀧七丈餘。伊勢物語には、「この山の上にありといふ布引の瀧見にのぼらむといひ、のぼりて見るに、その瀧物よりことなり。高さ二十丈、廣さ五丈ばかりなる石の面に、白絹岩を包めらむやうになむありける。さる瀧のかみに、藁蓋の大さしてさし出たる石あり。その石のうへに走りかゝるは、小柑子栗の大さにてこぼれ落つ」とある。

大意　丁度緒につないである玉を引きしごいて撒きちらすやうな、この瀧の水玉を拾つておいて、世の中の憂い時節の自分の涙にサ、借りてつかはうわ。

評　百尺の素練絶壁に翻つて、大珠小珠を瑠璃盆に跳らせる。今こそこの絶景に對して、暫時慰んでゐるが、自

分はもと〴〵胸中に萬斛の愁を抱いて、世の憂さに涙も盡きてしまひさうに、常は泣いてゐる者だから、幸ひこの瀧の水玉を涙に拜借しますといふ。對象の壯快なのにも關らず、こんな感傷的な愚痴をこぼす、作者の心境には、よほど入り組んだ事情があるに違ひない。抑も作者がこの布引に來たのは、下に、「田村の御時に、事にあたりて、津の國の須磨といふところに籠り侍りけるに」とある時の事で、須磨からあまり遠くもない同じ國の内の名所だから、排悶かた〴〵の遊覽かとも思はれる。四句は豫定の語で、「ひろひおき」とあるにその意が相應する。すると結句はからむと未來にいふべきを、「かる」と現在にしたのは、強く確かにいひ詰めたものである。卽ち刹那の現在は憂思を忘れてゐられる趣が暗映してゐる。

布引の瀧のもとにて、人々あつまりて、歌詠みける時によめる　　なりひらの朝臣

ぬき亂る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせばきに

釋 ○散るか　「か」は歎辭。

大意　誰ぞ繫いである緒から拔いて、ばら〴〵に散らす人がサあるらしいわ、このまあ狹い袖に包まれもせぬ程、うつくしい白玉が絕間なしにまあ、散りかゝる事よ。

評　例の玉の緒のこき散らし、著想に珍しげもないが、「ぬき亂る」人を捉へたのは、時に取つての思ひつきか。詞書もその心して、「人々あつまりて」の一句を加へて、上の歌のとわかつてある。瀧のしぶき面を撲つて、衣袂皆沾ふあたりの歌まとゐ、興に乘じては、同行者にそんなわるさする戲者（イタヅラモノ）がないとも限らないといつた調子、

その如何に打ち解けて遊び耽つたかゞ想ひやられる。伊勢物語にこの歌を掲げて、「かたへの人、笑ふことにやありけむ」と注したのは、正にこの意を得て書いたものである。「袖のせばきに」の一語は、「まなくも散る」白玉の夥しい事を反映する。景樹は、勢語に、作者の兄行平も同伴したとあるのを見て、上の行平の歌をも同時の詠とし、この詞書を後人の書入といひ、殊にその説を立てる爲に、「人々あつまりて」を、無用だとまで論じたのは、歌の趣を無視したる說である。何も同時の詠とすべき確證もなく、またその必要も見ない。彼これ更に相涉らぬ事と見てよい。

六帖に、四句間なくもふるか、結句袖のせばさにとある、いづれもわるい。

よし野の瀧を見てよめる　承均法師

たが爲にひきて晒せる布なれや世をへて見れどとる人もなき

釋　○よし野の瀧　萬葉集に、「鮎はしる吉野の瀧」など詠んで、吉野河の早瀨となつて落ちたぎつ處である。多分宮の瀧であらう。

大意　誰れの著物にする爲にと云つて、引つ張つてほしてある、あの布であればかして、年月へて久しく見るけれども、いまだにそのまゝで、別に取り入れる人も無いわ。

評　不思議なることよの餘意がある。瀑布の語すらあつて、瀧と布とは珍しくない比喩だが、これは更に一層の趣向を立てゝ、何年經つても晒しばなしはをかしい、一體誰れの使料かと訝つたのが、この趣向である。

六帖に、二句かけて晒せる、結句きる人ぞなきとある。季吟の抄には、結句とる人のなきとある。「かけては垂

水のさまなれば、吉野の瀧にはかなはず」と景樹のいつたのはよい。又、結句は六帖のも、抄のも、本文のに劣つてゐる。

題しらず　　　　神たい法師

清瀧の瀨々のしらいとくりためて山わけ衣おりてきましを

釋 ○清瀧　水の淸い瀧つ瀨。その固有名詞になつたものでは、山城高雄山の麓の清瀧川が最も有名である。○山わけ衣　山をわけ行く時の衣。殊に山ごもりする僧、又は隱士などの服をいふ。

大意 この清瀧の瀨々の水は、宛も白い絲のやうであるが、これを澤山繰りためて、山わけ衣を織つて著ようものをサ、さうもならぬのが惜しい事よ。

評 作者の身上相當の構想である。瀧の絲の混喩から山わけ衣を織り出した巧は、例の弄語に屬するが、後人みだりにこれを踏襲して陳腐となつた。

龍門にまうでて、瀧のもとにてよめる　　伊勢

たちぬはぬ衣(きぬ)きし人もなきものをなに山姫の布さらすらむ

釋 ○龍門に云々　龍門は大和國吉野郡なる龍門山の龍門寺である。山は高さ三千二百餘尺、二條の瀑布がある。一を龍門の瀑、一を白倉の瀧といふ。いづれも高さ三丈、濶さ三尺ばかり、寺は今は退轉して、跡かたもない。扶桑略記に、

古老傳、本朝往年、有二三人仙一、飛二龍門寺一、所レ謂大伴仙、安曇仙、久米仙也、有レ基無レ舍、餘兩仙室、今猶在、云々。

懷風藻に葛野王遊龍門山一絶、

命レ駕遊二山水一、長忘冠冕情、安得二王喬道一、控レ鶴入二蓬洲一。

など見えて、龍門に仙人の住んだ傳説があつたのである。○たちぬはぬ衣きし人　仙人をいふ。天衣無縫などいつて、仙人の衣は、裁ちも縫ひもする必要がないさうである。○山姫　山を守る女神。

大意　裁縫のいらぬ著物を著た仙人も、今は居もせぬのに、何の爲に山姫が、あのやうに、布を晒すのであらうぞ、不思議な。

評　垂水や瀧つ瀬を布と見立てることは、套語で何の奇もない。それを基礎としては、いかに構想を逞しくしても、徒に纖巧に流れるだけで、詩味はいよ／＼索然とする。このわたりの作者達は皆語言の末をおふに急がしくて、かの自然の大觀を忘れてゐる。銀河の九天より落つる李青蓮が胸吐はとても／＼。しかしこの歌の仙衣をさらすを、山姫の仕業とした詩的空想、「なに山姫の」といつた一番の譏笑、一寸面白い點もある。龍門寺に詣でた懷古の作として、その體を得てゐる。

朱雀院のみかど、布引の瀧御覽ぜむとて、ふむ月のなぬかの日おはしましてありける時に、さぶらふ人々に、歌よませ給ひけるによめる

たちばなのながもり

ぬしなくてさらせる布を棚機にわが心とやけふはかさまし

釋 ○朱雀院のみかど云々　これは宇多上皇が、大に遊幸せさせ給ひし昌泰元年、二年の間の出來事であらう。○棚機　例の織女星のこと。なほ、秋上「あまの川紅葉を橋に」の條參看。

大意　主なしに晒してあるあの白布を、織女に自分だけの取計ひで、借されるものならば、外の日はともかく、七夕の今日は貸さうかしら。

評　織女に貸さうといふ想は詩的であるが、これは七夕祭に物を手向くるにいふ套語で、作者の新案ではない。只、主なき瀑の布を、けふの祭に取り合はせた機才が認められるだけである。

ひえの山なるおとはの瀧をみてよめる　たゞみね

おちたぎつ瀧のみなかみ年つもり老いにけらしな黑き筋なし

釋 ○ひえの山なる云々　山科の音羽瀧と區別する爲に、「比叡の山なる」と冠せた。空穗物語に「住みわたりける處は、そのあたりは比叡の坂本小野わたり、音羽川近くて、瀧の音水の聲あはれに聞ゆる處なり」とある瀧の音は、この音羽の瀧であらう。六帖及び源語に、小野山に、音なしの瀧をよみ合はせてある。○おちたぎつ　水の落ちてたぎること。

大意　たぎつて落ちる、この瀧の水上が久しくなつて、年寄つてしまつたさうな、見るところ白髮ばかりで、黑い筋は一筋も無いわ。

評　水の白瀧を擬人して年寄つたせるで、白髮ばかりだといふ。元來、國歌に擬人を運用することは少ないから

耳なれぬ心地からは、俳諧に近く思はれさうである。初二句の聲調はよろしいが、これは萬葉にいくらも見えて、一種の成語である。只、全體の調の勁健なのを、この特色とする。「水上」に皆髪をかけたとするは、この歌を俗了するものである。

三句、打聽本に年をへてとあるは、語調がやゝよわい。

おなじ瀧をよめる　みつね

風ふけど處もさらぬ白雲は世をへておつる水にぞありける

釋 ○さらぬ　去らぬ。

大意 風が吹けども、同じ所を去らずにゐるあの白雲は、不思議の事とよく〳〵見れば、昔から落ちる瀧の水でさあつたわい。

評 忠岑、躬恒の兩歌仙の歌によつて想ふに、この音羽の瀧は山腹の木繁きあたりに、白泡立ちておちる溪流であらう。この二首、同時の詠か否かは明らかでない。

結句、六帖に瀧にざりけるとある。

田村の御時に、女房のさぶらひにて、御屛風の繪御覽じけるに、「瀧おちたりけるところ面白し、これを題にて、歌よめ」と、さぶらふ人に仰せられければよめる　三條の町

思せくこゝろのうちの瀧なれやおつとは見れど音のきこえぬ

釋 ○田村の御時に云々　文德帝の御世に女房達の侍所で、そこに立てゝある御屛風の繪を御覽遊ばされた時に この瀧の流れ落ちる處が面白い、これを題にして歌を詠めと、おそばの人々に仰せられたので詠んだ歌との意。「田村の御時」は文德帝の御時で、この帝の陵が山城國葛野郡田邑鄕にあるので申す。「女房のさぶらひ」は女房達の詰所で、卽ち臺盤所のこと、淸涼殿中、朝餉の間の南、鬼の間の北にある。○思　こゝは名詞。

大意 人が物思を悚へて居る心のうちは、音こそしないが、瀧のやうに湧きかへる物であるが、この繪の瀧は、その心の內の瀧であればかして、落ちるとは見えながら、一向に音が聞えぬわ。

評 繪の瀧に音がしない、これが著想の起點になつてゐる。水はせくと瀧を成す、戀の心を瀧によそへて詠みなすことは、古歌にも集中にも、例が多い。たゞこれは心のうちの瀧の隱喩を一ふしとする。題畫の詠は自然過巧になるのが普通だが、これは又「思せく」の「心のうちの瀧」のと、何か作者自身の鬱悒の情を託しものゝやうに聞かれる。果然この作者は更衣であつた。それで帝を思慕し奉る情の切なさを、折よしと題畫に託してほのめかしたものである。

屛風の繪なる花をよめる　　つらゆき

咲きそめし時よりのちはうちはへて世は春なれや色の常なる

釋 ○うちはへて　打ち延へて。時の長く續くをいふ。

大意 咲きはじめた時から後は、長くうち續いて、世の中はいつも春であればかして、この花は色が常住おなじ

事であるわ。

【釋】屏裏常に春風を藏するの詩味であるが、措辭がやゝ冗漫である。繪にゆづつて、花の字を着けない。「色の」は題畫としては必要な文字と思はれる。いづれその畫は極彩色の花が模樣のやうに描がかれてあつたらう。

屏風の繪によみあはせてかきける　　坂上これのり

かりてほす山田の稻のこきたれてなきこそ渡れ秋のうければ

【釋】○繪によみあはせて　繪の趣に歌をよみあはせての意。卽ち畫讃である。○こきたれて　戀三「あけぬとてかへる道には」の條に既出。

大意　この繪にかいてあるやうに、刈つてはほす山田の稻をこきおろすやうに、淚をはら〳〵流して、雁のなくやうに泣いてサ、月日を送るわ、秋がつらいによつてサ。

【評】繪樣は、刈りほした稻塚があつて、畯の夫が稻をこきおろすところで、空には雁が列を成して、鳴き渡るさまであつたらう。初句、「かりて」に、雁をよせてある。秋上、躬恒、

うきことを思ひつらねて雁が音のなきこそ渡れ秋のうければ

と全く同意ながら、一段理趣におちて、措辭も簡淨でない。

古今和歌集卷第十八

雜歌　下

題しらず　　　　　　　　よみ人しらず

世の中は何かつねなる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀨になる

釋 ○飛鳥川　冬「きのふといひけふと暮して」の條に既出。

大意 飛鳥川を見れば、昨日まで淵であつた所がサ、今日はもう淺い瀨になるわ、あの川でさへさうである、世の中では何がいつも變らぬ物か、いや變らぬ物といふは無いわ。

評 飛鳥川は高市郡の稻淵山から發源して、郡の傾斜地を貫流し、大和平原に注ぐ。しかも甚しい屈折をなしてゐる。だから一寸急雨でもあると、昨日の淵は今日の瀨であつた。殊に飛鳥朝廷時代から、大和人はこの川の案内に熟して、その變化の急激を意識して居つたと思はれる。一寸考へると「きのふけふ」と按排すると、必然に明日が聯想されるので、それがため飛鳥川が點出されたやうだが、それは本末顚倒の見で、飛鳥川が地理的に不常住な的證を提供してゐるので、その明日の語響からきのふけふを聯想し、淵瀨の變化を撮合したのである。初二句は主要の總說であり、三句以下はその解說に屬する。もとより世間の無常なことは、佛教の力說してゐる處で、一向平凡な思想であるが、飛鳥川を引例にした解說が、この拍案の妙を成したのである。餘り變轉の

ない物と、誰れも思ひすてゝゐた地象に屬する物だけに、餘計にさもと諾かされる。「きのふの淵ぞけふの瀨」、相對的に極端な變化が意識され、感慨が強く印象される。措辭奇巧に調は渾然として、浮辭漫辭は一つもない。その千古人口に膾炙されるのも偶然でない。

廣蔭が「淵瀨の變らぬ喩に古歌に詠まれたる飛鳥川すら變るなれば」と解したのも面白いが、古歌にさう詠んだ例を見ない。萬葉を檢すると、山川で瀨の早いこと、淀のあること、玉藻のはえてゐること、蛙の鳴くこと、身そぎすることなどばかりがある。恐らくは杜撰だらう。

○

幾よしもあらじわが身をなぞもかく蜑の刈る藻に思ひ亂るゝ

【釋】○幾よしも　「幾よ」は幾世、「し」は强辭、「も」は歎辭。○刈る藻に　刈る藻の如くにの意。

【大意】いか程長生すればとて、千年萬年もはさまあるまいと思ふこの身であるものを、なぜまあかう海士の刈る藻の亂れるやうに、とつおひつ思ひ亂れて苦勞するのであるぞ。

【評】浮世はまゝの皮にせよやの餘意がある。理窟は知りぬいてゐる。感情は感情で走つてゐる。この撞着が「なぞもかく」と、自分ながら自烈たく思はれるので、その悶々の情を味ふべきである。人生はもとよりいくばくもない。李白が、

處世若大夢、胡爲勞此生。

と、その想がほゞ同じい。蜑の刈る藻の譬喩は器用である。一二三の句、あらじと思ふわが身なるものをとあるべ

きを略いた。諸註、今は幾ばくもあるまじきわが身をと解いて、はや盛り過ぎた人の述懐とした。今はの語は勝手な補足語で、作意を曲解してゐる。

初句、新撰六帖にはいくばくもとあり、四句、六帖にかゝる藻のとある。

○

雁のくる嶺のあさ霧はれずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ

大意 雁のくる時分の、その嶺の朝霧の曇つてゐるやうに、心が晴れずにばかり、常住おもひ事の盡きぬ、この世の中の憂さよ。

評 初二句は序で、時節の景物をあしらつたのである。想においてはきまり切つた厭世觀ではあるが、序詞が背景となつて、孟郊が「出レ門皆有レ礙、誰言天地寛」の如く、餡酸の氣の迫るにたへない。結句、六帖にうきとある。

しかりとて背かれなくに事しあればまづ歎かれぬあなう世の中

小野たかむらの朝臣

釋 ○背かれなくに 世を遁れられぬのに。○世の中 の下との辭が略かれてある。

大意 さうであつたとて、世を捨てられもせぬのに、何ぞ事がさあれば、まづ一番に、あゝ憂い世の中だと歎かれたわい。

評 これも矛盾撞着を扱つてゐる。こゝに悲観し、こゝに厭世する。しかりとて背かれない。人間の心弱さが暴露されてゐる。流石の野狂その人も、境遇の不平は、遂にこの凡人らしい愚痴に墮ちた。六帖に、初句しかありとて、四句歎かるゝとある。新撰和歌には、結句あれば世の中とあるが、これは誤であらう。

甲斐の守に侍りける時、京へまかりのぼりける人につかはしける　　をのゝさだき

みやこ人いかにととはゞ山高みはれぬ雲ゐにわぶと答へよ

釋 ○京へまかりのぼり　「まかる」は退出の意であるが、この頃は、行くと同意に用ひた。

大意　もし京の人が、自分の事をどうして暮らして居ると尋ね問うたならば、「山が高くて、常住雲の晴れぬやうに、心もはれぬ遠い國に難儀して居る」と答へてくれい。

評 事にあたつたさすらひの身でもない、又、住むべき國もとむるのでもない。大君の御委任のまゝに、事取り持つ牧民の官人で、處がらとはいへ、餘りに女々しいいひ草である。高山のかひの國、當時の都人の心地としては、ほんに島流しにでも遭つたやうな氣もするだらうが、實の處は同情を求める狡獪手段で、わざと旅愁を誇張したに過ぎない。下なる行平の「わくらばにとふ人あらば」と全く同一の樣式である。どちらか踏襲であらう。

文屋の康秀が、三河のぞうになりて、「あがた見にはえいで立たじや」といひやれりけるかへりごとによめる

小野小町

わびぬれば身をうき草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

【釋】○文屋の康秀が云々　康秀が三河椽になつて赴任の時、小町に「田舍見物にお出掛けなさいませんか」と誘つてきたその返事によんだ歌との意。「ぞう」は椽をいふので、國衙の三等官である。「あがた見」は田舍見物といふこと。「あがた」は上田(アガリタ)の略で、田舍にある御料地をいつたのが、轉つて縣主の治める地の稱となり、又轉つて地方官の任國をいひ、更に田舍の稱となつた。眞淵いふ「斑田の義」と。「えいで立たじや」はよう出掛けまいかどうかの意。

大意　自分は今ではひどく難儀にくらして、身を憂いつらいと思つてをるので、丁度浮草の根がきれて、水のゆく方へ誘はれるやうに、誰れでも誘つてくれる人があるならば、どちらへなりと往かうとサ思ひますわ。

【評】康秀が「田舍見物には」といつてきたのを承けて、田舍見物位の洒落ではない、誘ふ水さへあらば、何處へなりとも往き切に參りませうと答へた。これは一時の辭令で、康秀の好意に對する挨拶である。詞のうへにのみ泥んで、眞に田舍住ひを希望するものと速斷してはならない。又、落花流水の風流消息あるものと忖度してもならない。さはいへ彼れが當時失意の境遇にあつた事は勿論である。春下、

花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

後撰雜一に、定めたる男もなくて、物思ひける頃、

蜑のすむ浦こぐ舟のかぢをなみ世をうみ渡るわれぞ悲しき

などを思ふに、漸く縮緬皺の小鼻に寄るに驚き、さて生涯の苦樂を托すべき、眞面目な戀瀬を思はなかつた不覺に想到して、懊惱煩悶に堪へなかつた折も折、康秀が誘ふ水にあつたものらしい。本居内遠が考に、當時康秀五十餘歳、小町三十七八歳だらうとある。身世如浮萍で、浮草の寄る方（べ）ない事は支那の詩にこそよくいふが、わが歌には從來なかつた。あまり婦人が漢學をせぬ時代だから、恐らく作者獨自の取材だらう。それに誘ふ水の比喩を撮合した措辭の巧慧さ、作者の才思が見られる。詩の鄭風に、

蘀兮蘀兮、風其吹レ女、叔兮伯兮、倡レ予和レ女。

と、全くその體製をひとしくして、聯璧の觀がある。

題しらず　　よみ人しらず

あはれてふことこそうたて世の中を思ひ離れぬほだしなりけれ

釋 ○あはれてふこと　あはれといふ言。○うたて　春下「散ると見てあるべきものを」の條に既出。○ほだし　古語ふもだし。馬の足を繋ぎとめる綱をいふ。

大意 人があゝいとしいといつてくれる詞が、この憂い世の中を、生憎によう思ひ切つてすてられぬ、羈絆（キヅナ）であつたわい。

評 厭世觀を實行にうつらうと考へてゐる折の作である。けれどもいざとなると、妻子親朋などの懐かしい心持

を思ひ出さずにはゐられぬ。愛着心は厭離の妨となる。これは佛教の口頭語で、何でもない想だが、「絆なりけれ」の譬喩が多少の詩味を搖曳させる。それも後世あまりにいひ舊してしまつた。

新撰和歌には、二句ことこそうけれ、結句けりとある。

○

あはれてふ言の葉ごとにおく露はむかしをこふる涙なりけり

大意 昔の事を思ひ出して、あゝと歎くたび毎に、涙がこぼれる、するとそのあゝといふ言の葉に、ひとつ／＼おく露は、涙であつたわい。

評 言の葉の混喩から、涙を露に取り成した隱喩、意は巧に、詞は簡淨に、調は流諧であるが、つまりは語言の末のものか。

○

世の中のうきもつらきもつげなくにまづしるものは涙なりけり

大意 世の中の憂いことも、つらいことも、いつて聞かせもせぬのにまあ、存外に一番に知るものは、涙であつたわい。

評 憂いにつけ、つらいにつけ、先立つて涙がこぼれる。それを涙が「まづ知る」と擬人したのが、この一ふしである。感傷的な氣分は受け取れるが、「つげなくに」は理をいひ詰めて面白味を殺ぐ。しかし告げても一向同

得してくれぬ他人に對した強調の語とみれば譯つてよいかも知れぬ。

○

よの中は夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらずありてなければ

大意 この世の中は夢か正眞か、いや正眞とも夢とも知られぬわ、といふのは、世の中にあつて、しかもないのであるから。

評 想は天台にいはゆる三諦の理である。萬有の現象、有と觀すればうつゝであり、無と觀すれば夢である。有の假諦である、無の空諦でない實相、これが中諦である。「現とも夢とも知らず」に中諦をいつたものである。この眞如の妙諦を三十一字に寫し得たのを、作者の技倆とする。初二句は自問、三句以下は自答で、「ありてなければ」の一句掉尾の警句である。促句まじりの四段切の中に、漸層法と反轉法とを雜へて、語調の飛躍をたもち、同時に同語を反復させて、聲調の和諧をはかつたなど、作者苦心のところであらう。

○

世の中にいづらわが身のありてなし哀れとやいはむあなうとやいはむ

大意 この世の中に、どれどこにわが身があるぞ、今日明日にも死なうも知れねば、あつてないものである、さればあゝ悲しいといはうか、あゝ憂いといはうか。

評 平々凡々の無常觀で、一向冴えない。四段切の促句仕立で、下句、同型の語を反復したうへに、アの頭韻を

押したのが、一寸異色である。

○

山里は物の寂しき事こそあれ世のうきよりは住みよかりけり

釋 ○寂しき事こそあれ　寂しい事こそあしくあれの畧。

大意 山家は物さびしい事こそあるいが、それでも世の中の憂いのよりは、存外に住みよい事であるわい。

評 塵界にゐる人の想像を裏切つた宣言である。境は卽ち心を移す、人生の行路に蹉跌し、世をすてゝ世にすてられて、山里に思ひ入つた時、卽ちこの感じがあるであらう。山里の缺點は寂しい。浮世の缺點はういつらい。相對的に比較して團扇を山里に擧げて見せた。

六帖、小町集に、二句物のわびしきとあるのを、「しまりて優れり」と景樹はいつたが、うなづき難い。この作者は山里がわびしいのではないので、頗る安住してゐる。但しひて疵を穴ぐつて寂しいといつたまでだ。又、朗詠に物さびしかる事はあれどとあるは拙い。

白雲のたえずたなびく嶺にだにすめば住みぬる世にこそありけれ

これたかのみこ

大意 雲の不斷たなびく高山の峰でさへ、住めばかうして住んで居られる世の中ですあつたわい。不思議なものサ。

評 この親王の御事に就いては、既に春上「世の中にたえて櫻のなかりせば」の條下に、委しい說明をしておいたから參照されたい。失意の極遂に出家して、山城國愛宕郡小野山に住まはれた。場處は叡山の西山で麓の村は大原村である。都から三里半高野川の上流で、それは〳〵寂しい白雲のたなびく峯である。伊勢物語に、む月に拜み奉らむとてまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室にまうでて拜み奉るに、つれ〴〵といと物悲しくておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、いにしへの事など聞えさせけり。とは、この間のことである。金殿玉樓にのみ起臥させられた御心地に、はじめは住み遂げ難く思し召された山住であつたが、自然の成行に抗しかねて、そこにあきらめが湧いたやうなお歌で、御心の中を察すると、實に畏くも悲しい。「住めば住みぬる」の同語の反復、わが行爲を間接にわれと讃歎したので、沈痛の意が深まる。六帖には、よみ人しらずとある。四句、古本貫之集には住めばすまるゝとある。

ふるのいまみち

しりにけむきゝても厭へ世の中は浪のさわぎに風ぞしくめる

釋 〇しくめる 「しく」は頻りの意の動詞。

大意 これ世間の人達よ、もう知つてしまつて居るであらう、もし知らずば、今自分がいふことを聞いてなりとも、この世を厭つて捨てゝしまいなさい、この世の中は、丁度海ならば浪の騷がしく、風がサ吹きかけ〳〵するやうなものと見えたわい。

評 法華經の偈文、

三界無レ安、猶如ニ火宅一、衆苦充滿、甚可ニ怖畏一の意をのべた。下句は、古物語などに、疫病などで人の數多死ぬるを、「世の中騷がしき頃」と書いたと同意で、無常迅速の物安からぬ貌を、浪の立ち騷ぎ、風の吹きしきるに喩へた。風が吹いて、浪の騷ぐといふのが順序だけれど、こゝはそれに拘はらず、たゞ關聯した事項を排對した譬喩である。「知りにけむ」「聞きても」と漸層法を用ひたことは、警告の意を強く印象させる筆法で、迷夢を打破するに必須な表現である。

そせい

いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にもまどふべらなれ

大意 どちらの方へ、この世を捨てゝ往かうか、この心といふものがサ、野に往つても、山に入つても、やはり惑ひさうな樣子だわい。

評 我ながらわが心には、愛想のつきた事かなの餘意がある。作者が桑門の人だけに、その迷悟の境に彷徨する苦惱が、しみ〴〵と同情される。人間ばなれのした坊さんの方が、却つて本音でない事が多い。華嚴經にいはゆる、「三界唯一心、心外無別法」の理は、かくて暗示された。四句は、野にても山にてもの意だが、やゝ明快を缺くが、かうした辭樣はまさに存在してゐる。

雜部下の古本に、初句いづこにかとある。

よみ人しらず

世の中は昔よりやはうかりけむわが身ひとつの爲になれるか

釋 〇やは　「や」は疑辭、「は」は添辭。

大意　世の中は昔からこの通りにまあ、憂いのであつたであらうか、それとも又自分の身ひとりの爲に、このやうに憂い世の中になつてあるのであらうか。

評 「わが身ひとつの爲」といふことは絕對にない事なのを、しかも疑つて、兩端を叩いたその愚痴を聞いてやるべしである。

〇

世の中をいとふ山べの草木とやあなうの花の色に出にけむ

釋 〇あなうの花　あな憂に、卯の花をかけた。「あな」は歎辭。

大意　あゝ憂いと思つて、世の中を厭つて引つ込む山邊の草木といふことでか、憂いといふ名の卯の花が、かう色にあらはれたのであつたらう。

評 正義に引いた赤尾可官の說に、「うつ木の一種を、今比叡の山人あなうつといへり。色も薄紅なれば、色に出にけむといふか」と。この說よろし。うつ木には、常いふうつ木と、山うつ木と、箱根うつ木との三種がある。比叡山のは、山うつ木であらう。白いのばかり見馴れた目に、その淡紫紅色な花を訝つて、處がら非常の草木も、なほかつ、あな憂の色に出たものかといふ。うつ木は草ではないのに、「草木とや」は變なやうだが、これは熟語法である。

○

三吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時のかくれがにせむ

釋 ○かくれが　隱處(カクレガ)。隱家とかくはあて字。

大意　吉野山は深い山であるが、その吉野山のまだあちらの山奥に、家がまあほしい事よ、そこを世の中の憂いと思ふ時の隱れ所にしようわ。

評 到底憂き世と見なして、早手廻しの隱宅穿鑿、大覺の眼から見れば、唯これ一箇の痴案である。さはいへ人は環境によつて支配される。凡夫はこの詩的方案もなければならぬ。吉野を取り出したことは、往時から隱遁場所として聞えた土地だからである。故に吉野といへばすぐ隱處が聯想された時代で、この心持でこの歌を見る必要がある。

○

世にふればうさこそまされみ吉野の岩のかけ道ふみならしてむ

釋 ○岩のかけ道　和名鈔に、棧道を「山のかけみち」と訓んだ。こゝも棧道か。崖をガケといふもこの語から轉じたのである。一說に、岩の陰道とある。○ふみならし　踏み平(ナラ)しの意。

大意　世にかうして居れば、次第に憂いことが増(サ)るわ、これではかなはぬ故、いつそ吉野山の難所をも踏み開いて、奧深く引き籠らうぞ。

評 四五句、山ごもりせむといふことを轉義したので、婉曲味もあり、その態度も思はれて面白い。しかもかく

辛い岩のかけ道をも厭はぬ事によつて、ますく世の憂さのはげしさが見える。

○

いかならむいはほの中にすまばかは世のうき事は聞えこざらむ

釋　○いはほの中　岩窟の中。又岩の立ちめぐつた山中。○かは「か」は疑辭、「は」は添辭。

大意　どのやうな岩山の中に住んだらまあ、この世間の憂い事が聞えてこぬ事であらうか。

評　作者は大きな憂き事のある人であらう。尋常の山住などでは、やはり憂き事は聞えてきさうなので、「いかならむいはほの中に」と思案にくれたのである。苦樂は心一つで、山にはひらうが、地にもぐらうが、のがれ難い道理を忘れて、ひたすら他に向つて安住の處を求めようとあせつてゐる。その焦燥と痴愚とに人間味のあはれさが漂ふ。山の中をいはほの中と轉義したのが面白く、後人の踏襲するところとなつた。三句、この部の古本にすまばかもとある、結句、六帖にたづねこざらむとある。

○

あしひきの山のまにく隱れなむうき世の中はあるかひもなし

大意　山のあるについて、何處へでも往つて、隱れてしまはうわ、なぜなれば、このやうに憂い世の中は、住んで居る詮もないわ。

評　すなほにさつぱりした歌柄はわるくない。想はきまつた厭世觀だけれど。

○

世の中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれるゆきやけなまし

釋 ○うけく　憂くの延言。○ゆきや　雪に行きをかけた。

大意 もう〳〵、世の中の憂いのに飽きはてたわ、いつそ奥山の木の葉に降つた雪が消えるやうに、自分も其の奥山へ往つて、跡をかき消してしまはう。

評 厭世のあまり、まづ奥山の隱處を思ひよせ、次に木の葉の雪を聯想して、「ゆきや消なまし」の一案を立てた。秀句仕立ながら、思ひ入つたところも見える。「消なまし」はこゝでは、死んでしまふ意ではない。或説に、行倒となつてしまはうと解いたのは失笑にたへない。

おなじもじなき歌　　もの〻べのよしな

世のうきめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそ絆(ホダシ)なりけれ

釋 ○おなじもじ云々　一首のうちに同字のない歌との意。歌の意によつて、こゝには序でた。

大意 世の中の憂い事の、見えも聞えもせぬ山の中に這入らうとするには、戀しく思ふ人がサ、その邪魔立するきゝなであつたわい。

評 恩愛の羈絆をいふは常套で、陳腐である。只一首のうちに同字のないなど、畢竟文字の遊戯に過ぎない。

山のほうしの許へつかはしける

凡河内躬恒

世をすてて山に入る人山にてもなほうき時はいづちゆくらむ

釋 ○山のほうし　山住の法師。或は、平安京時代のならひで、「山」は比叡山をさしたかも知れない。家集の詞書には、「世を怨みて、山寺にまかる人につかはす」とある。

大意 世の中が憂いとて、山に引き込む人よ、その山でもやはり憂い時は、どちらへ行くのであらうぞ。

評 詩としての妙味は少ないが、頗る好皮肉で、驚くべき機智を藏してゐる。對手が坊さんだけに、餘計に刺笑が鋭く聞える。

家集に、初句世をうしと、三四の句山ながら又うき時はとある。

物思ひける時、いときなき兒を見てよめる

今さらに何おひづらむ竹の子のうきふし繁き世とは知らずや

釋 ○おひづ　生ひいづの略。○うきふし　憂き場合をいふ。竹の節(フシ)をかけた。○知らずや　知らぬかい。

大意 生(ハ)えずともの事を、竹の子が今更に、何とて生えて來たのであらうぞ、憂い事のある折節(ヲリフシ)のおほい世の中とは知らぬのかどうか。

評 この稚き子はわが兒か人の兒か、いづれでもよい。これを竹の子に擬へていひはてた。「ふししげき」も竹の縁語である。「世」も或は竹の節(ヨ)を寄せたかと思はれる。「物思ひける時」は、恐らく五月の竹の子時分であつたら

う。輕儁で、しかも人生の半面を說明し、人情の機微に觸れ、うたゝ感愴を深からしめる。この作者時々かうした手柄がある。當代の歌仙たるにはぢない。

題しらず　よみ人しらず

世にふれば言の葉しげき吳竹のうきふし每にうぐひすぞなく

大意 世にあれば、人に何のかのといはれる事が多いが、その憂い折節每に、繁つた竹のふしぐに、鶯がさあれなくわ。

評 「なく」は鳴くに泣くをよせたのである。譬喩と緣語の修飾で、煩瑣に堪へない。

○

木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにわが身はなりぬべらなり

ある人のいはく、「たかつのみこの歌なり。」

釋 ○竹のよ　「よ」は節と節との間をいふ稱。○はし　半とおなじい。何方へもつかぬにいふ。

大意 木でもない、草でもない竹の節のやうに、どちらつかずの物に、自分の身はなつてしまひさうな。

評 上句は、晉の戴凱之の竹譜に、

植之中有、名曰竹、不剛不柔、非木非草、云々。

とあるに據つたものと思はれる。木にも草にもと、兩端をたゝいた句法に、姿致があるばかりではない。對映

の妙があつて、竹のよのはしたな事を歎ずる意が頗る深まる。抑も作者の境遇はどうした事情であつたかしら。左註にいふ高津の皇女は桓武帝の皇女で、大同四年六月嵯峨帝の妃となり、幾ばくもなく廢められたことが、續紀に見えてゐる。後撰集に、この皇女の御歌として、

なほき木にまがれる枝もあるものを毛をふき疵をいふがわりなき

その本文をひかへて詠んだ歌ぶりは、相同じである。當時は漢學隆盛の世だから、わが國風も自然かうしたよみ口が行はれたものか。すると左註の說も信じてよささうである。密勘に「内親王の身、思ひかけぬ入内をして、又その本意あるさまにもなかりければ、木にも草にもあらず、はしたなる身とよみ給へるなり」とある、或はさうであらう。が「なほき木に」の詠を湊合して考へると、別に餘程込み入つた事情が伏在して、人言の繁さに殆ど堪へかねての折のお作であらう。

○

わが身からうき世の中と歎きつゝ人の爲さへ悲しかるらむ

釋 ○わが身から　「から」はよりの意

大意　自分の身から、憂い世の中ではあると、歎き〳〵して居れ、人はさうもあるまいのに、何で人のうへまで身につまされて、悲しくあるのであらう。

評　頗るおせつかいらしく感じた口吻、作者は自家の解嘲とするつもりか。何故にを三句の下に含めて聞く格。

おきの國に流されて侍りける時によめる

たかむらの朝臣

思ひきやひなのわかれに衰へてあまの繩たぎいさりせむとは

釋 ○おきの國云々　羈旅「わたの原八十島かけてこぎいでぬと」の條に既出。○ひな　ひろく都の外の國をいふ。田舍。○繩たぎ　「たぎ」は手繰ること。○いさり　漁(スナドリ)。

大意　都にゐた時分に、思ひ寄つたことか、いや思ひも寄らなかつたわい、このやうに遠い田舍に流された別の悲みにくづをれて、その日のたつきには、海人の釣繩をたぐつたり、魚など釣つたりしようとはサ。

評　今昔境遇の劇變は、たゞですら無量の感慨にうだれるであらう。況やこれは勅勘となり、流人となる。當時三十七八歳の元氣旺盛な、しかも硬骨野狂の名を負うた作者も、幾多の感愴に打たれぬ譯には往くまい。殊に名家の子弟として、弱冠から順調の徑路ばかり踏んで來たので、一旦この逆境に臨むと、心膽俄に沮喪したに違ひない。下句、海人のしわざをせむとはといふべきを、具象的に轉義したのに、大いに詩味を生ずる。元來蠻烟瘴雨、磯臭いあたりに住み馴れたことを、海人の所業をみづからするやうにいひなしたのも、誇張である。萬葉卷一麻續王(マミノオホキミ)の、

うつそみの命ををしみ波にぬれ伊良古(イラコ)が島の玉藻刈ります

と同趣で、詩人の慣手段である。

田村の御時に、事にあたりて、津の國の須磨といふ所にこ

もり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける

在原行平朝臣

わくらばにとふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつゝわぶと答へよ

釋　〇田村の御時云々「田村の御時」は文德帝の御世。「事にあたりて」は敕勘を蒙るをいふ。津の國の須磨は、攝津國武庫郡の須磨である。眞淵いふ、「今はいさゝか御氣色のあしかりけるを、しばし避けて、須磨に籠り居られしなるべし。罪ありて流されしこと、文德實錄に見えず。この天皇の御在位はわづか十年が程にて、その間官位昇進年々にこそあらね、滯なく見えたり」といひ、秋成は更にこれを敷演して、「須磨に避け給ふは、御父阿保親王攝津守に任ぜられしこと見えたれば、そのよせなどのなほ彼處にありけるにや。業平も津の國に遊びしことのあるも、いづれ在原氏の領地ありし故なるべし。今も菟原の郡打出の里に、御父親王の遺蹟と稱ふる寺院あるによりて、しか思はるゝなり」といつた。しかし、これも敕撰集だから、事に當らぬ者をさう書く筈もない。國史はいくらも脫漏があるから、悉くは信ぜられない。〇わくらばに　たまさかにの意。〇藻鹽たれつゝ　藻鹽に、鹽垂るをよせた。「藻鹽」は海藻の鹽水より採る鹽をいふ。海藻を簀の上に搔き集めて、鹽水を汲みかける。その鹽の染みついた藻を燒いて、水に攪拌し、上澄を釜に煮て鹽とする。「鹽垂る」はその鹽水を垂らすことから轉じて、涙に濡れそぼつにいひ、又、歎に沈むにいふ。

大意　もしたまさかでも、問うてくるゝ人もあるならば、その時貴方は、私が須磨の浦で、海士のする仕事をしてしほたれて、ひどく難儀をして居ると應へてください。

評　日陰のさすらへ人、今は誰れ問ふべきでもない。しかも鍾情の昔を忘れぬ人が萬に一もあつて問はば、云々

と答へよとは、蓋し假託の言である。まことは「宮の内に侍りける人」にわが現況を報告して、その同情を求めるのを、その本旨とする。その「宮の内に侍りける人」とはどんな身分の人か。いづれ宮中奉仕の婦人とは思はれるが、甚だ事が廣くて判然しない。然し后妃をさしたらしくもないから、まづ主上のおそばに侍ふ、いはゆる上の女房と見たがよからう。かねて知合の女房の許に、かう詠んで贈つたとすれば、「わくらばに問ふ人」はいはずして主上の御事を暗にさしたので「答へよ」は卽ち行平はかくの如く苦辛を嘗めて居りますと奏上してほしいといふのである。「藻鹽たれつゝ」は、上の歌の「あまの繩たぎ」と同趣の誇張で、唐の韋莊の、

若見二青雲舊相識一、爲言流落在二天涯一。

の詩に比して、更に一段の感愴と、幾層の巧趣とをそなへてゐる。

この歌業平集に見え、又後世の或寫本に業平とある。杜撰が杜撰をひいたので、源氏物語にも既に立派に行平の作としてゐる。

左近將監とけて侍りける時に、女のとぶらひにおこせたりける返事に、よみてつかはしける　をのゝはるかぜ

あま彦の音づれじとぞ今は思ふわれか人かと身をたどる世に

【釋】○左近將監とけて云々「左近將監は左近衞府の判官(三等官)で、從六位上に叙せらる。五位に進んで、中には殿上を許さるゝもある。「とけて」は解官されたこと。「女」は妻。「とぶらひに」は見舞に。○あま彦の天彦の字をあてる。山彦とおなじで、谺を神格視した名。こゝは「音」にかけた序である。集中、貫之の長歌

にも「あま彥の音羽の山」と詠まれ、又、貫之集にも散見してゐる。宣長の「天上の人をいへり。物語どもにこれかれ見えたり」との說はいかゞ。物語にあるは、天人といふので天びことあるのは誤寫から來てゐる。○世に　世にての意。

大意　貴女へも便りはすまいとサ、もはや思ひますわ、この頃の不仕合に當惑のあまり、心も空になつて、自分のからだを、人のか自分のかと、辨へかねて居る時節でして。

評　この時代の習慣として妻は無論親里にゐて、作者は通つてゐた折である。妻女の消息には、久しく音信のないことをば怨んだ文句があつたらう。そこで音づれぬ理由を具陳したのである。蓋し作者の解官されたのは喪解でもなく、病解でもない。藤原保則の奏議中に、

前左近將監小野春風累代將家、驍勇軼レ人、前年頻遭ニ讒謗ニ、免レ官家居。

とあるから、讒言によつたのである。「われか人か」と身をたどるまでに歎かれたのは尤もである。當時の免官免職は、今日の人の考へるほど輕い事ではない。あの時代には絕對の官吏萬能で、金があらうが財產に富まうが、無位無官は士人の齒ひしなかつたものである。されば免官の打擊は容易ならぬもので、家の爲にも身の爲にも悲傷すべき大事件である。隨つて妻女訪問などは、思ひよる餘裕もなくなる。歌は格別よいともいへないが、武辨の人として是等の文字のあるのは頗るゆかしい。

初句、新撰和歌に山彥のとある。

つかさのとけて侍りける時よめる　　平さだぶん

うき世には門（カド）させりとも見えなくになどかわが身のいでがてにする

釋 ○つかさのとけて　免官をいふ。

大意　自分の家こそ閉門して居れ、この憂い世には門をさしてあつて、出入のならぬものとも見えもせぬのに、なぜまあ自分の身が、この憂世を遁れて、出家しにくうすることか、さても合點の行かぬことわ。

評 失意の極厭世の念はおこしたものゝ、とかく執着する處があつて、いさぎよく思ひ立てなかつた述懐である。「憂き世には門させり」の假構の隱喩も面白いが、「などか」の疑問の痴呆もこの詩趣を煽揚する。「には」の助辭を味ふに、作者は既に閉門して籠つて居たものである。さらばその司の解けたのは、何かの過失などに因つたらしい。諸註多く、立身出世しがたいのを歎く意と見たのは、皮相の見である。且すでに「憂き世」とあるからは、出家遁世を願ふ意に見るが至當である。後世の、無意味にうき世といふとは異なつてゐる時代である。拾遺集雜上に再出したのには、詞書「つかさとられて侍りける時、いもうとの女御の許につかはしける」とある。げに事實はこの詞書の如く、妹の女御に愁訴して、その救解を求めたのであらう。年代をおすに光孝天皇の女御平等子は、この妹の女御か。

○

ありはてぬ命まつまの程ばかりうきごとしげく思はずもがな

大意　とてもこの世に生きどほしにはせられぬ、僅かな命の終るのを待つあひだぐらゐ、どうぞ憂い事を、多く思はぬやうにしたいことよな。

評 浮生の須臾なることは、電光石火である。されば、「命まつまの程ばかり」はせめて一生との意にも解せられるが、これは老境に臨んだ人の作と見るが至當で、せめてその餘生だけでも氣樂で過したいといふ希望である。然し現世は到底苦の世界で、希望の滿足は望み難い。そこに心の葛藤がある。

三句、古本に程だにもとあるがよい。

みこの宮のたちはきに侍りけるを、宮仕つかうまつらず
とて、とけて侍りける時に　　　みやぢのきよき

筑波ねのこのもと毎にたちぞよる春のみやまの陰をこひつゝ

釋 ○みこの宮の云々「みこの宮のたちはき」は東宮の帶刀である。この東宮は醍醐帝の皇子保明親王（文獻太子）を申す。延喜四年二月立太子、延長元年三月、廿一歳にして薨じ給ひき。帶刀のことは、春下「はる風は花のあたりを」の詞書の解に既出。「宮仕つかうまつらず」は帶刀の官にありながら、不奉公であるをいふ。○筑波ね　常陸國新治郡にある名山。「ね」は嶺の上略。○このもと　木の下。○春のみやま　春の宮に、深山をかけた。春の宮は、皇太子、又は皇太子の座す御所をさしていふ。

大意 筑波山のひどく茂つてあるやうに、惠深い方々へ、おわびを賴みにサ立ち寄ることわ、春宮樣のお蔭を戀ひ慕ひ〳〵申してサ。

評 集中、大歌所の東歌、

つくばねのこのもかのもに蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし

を本歌として詠んだ。しかもこのもの響を踏んで、「このもと」と洒落れたのなど、輕い手際だ。「春のみ山」のいひかけの譬喩は、既に當時の套語であつて、要するに東宮の官人、又は女房達に贈つて、復職を歎願した作である。

時なりける人の、にはかに時なくなりて歎くを見て、みづからの、なげきもなく、よろこびもなきことを思ひて、よめる

清原ふかやぶ

ひかりなき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思もなし

釋 〇時なりける云々　權勢のあつた人が、急に權勢を失つて歎くのを見て、自分のはじめから權勢がないのだから、歎きも喜びもないことを思つて詠んだ歌との意。「時なりける」は時を得て權勢のあること。

大意 日の光の當らぬ谷では、春も餘所の事であるから、花の咲く事もなく、そのかはりに又、早く花が散つて悲しい思もしないわ、といふが表面の意で、自分のやうに、はじめからお見出しにも與からず、花も咲かぬ身は、あの人の今度のやうな歎きも無いわ、といふが裏面の意。

評 結句これが增しだの餘意がある。時も得ず沈んでゐるのを、みづから慰藉したので、官位の高いのを、日のよくあたる高嶺に、數ならぬ身を日影もさゝぬ谷に譬へ、花を權勢に見立て、その得喪を開落によそへた。表裏の二面各よく意が徹つて、寓意明白である。巧手。

初句、六帖に光まつとある。

かつらに侍りける時に、七條の中宮とはせ給へりける御返りごとに、奉れりける　伊勢

久方のなかにおひたる里なればひかりをのみぞ頼むべらなる

〔釋〕○かつらに侍りける云々　「かつら」は山城國葛野郡桂の里。「七條の中宮」は昭宣公藤原基經の女で溫子と申し、宇多帝の女御である。醍醐帝卽位の後、尊んで皇太夫人と爲し、中宮と稱し奉り、延喜七年六月三十六歳で崩ぜられた。家集の詞書には、「この女は、これかれいへど聞かず、宮仕をのみしてけるに、時のみかど召し仕ひ給ひけり。ようぞ人の言を聞かざりけると、心にも親なども思ひ渡りけるうちに、孕みにけり。さて男みこをぞ生み奉りける。わが親みづからも嬉しと思ひけり。仕うまつりし御息所も、后になり給ひにけり。生みたりける男みこは、桂の宮といふ所におきて、みづからは后の宮に侍ひけるに、雨のふる日打詠めてゐたりければ、后の宮のよみて給へりける。

月のうちの桂の人を思ふとて雨に涙のそひてふるらむ

御返しとて、本行の歌があり、次に「かくて、みかどおりゐさせ給ひて、云々」とある。文體を案ずるに、勢語に倣つて作つたものらしい。事實は大體は合つてゐるが、部分的には間違ひもありげである。○久方のなかにおひたる里　月中に生ひたる桂といふ名の里の意。月桂の故事は、秋上、「久方の月の桂も云々」の條に既出。但、「久方」は天象に關する多くの物の枕詞だから「久方の中に」を必ず月の中にの意と解するのは、すこし無

理があるやうだが、足引のを山、百敷のを宮の意とする類の轉用としよう。眞淵は「中」を月の誤寫とした。

大意 この里は、月の中に生えてあるといふ桂の里であるから、月の光ばかりをサ、一途に頼むべきであつた、といふが表面の意で、自分は、中宮樣の御内に成り出た者ですから、中樣宮の御餘光を、ひたすら頼みには致しませうと存じますわ、といふが裏面の意。

評 地名から構想した諷喩である。中宮のお蔭を月の光に喩へたのも、旨く當てはまつてゐる。桂の語をつけずして、廻護し得たのも巧である。作者が中宮の女房として、帝寵を得たことは、中宮に對して背信の行爲であらねばならぬ。それ故作者はつとめて謙虚の態度を守り、中宮も寛假なされたことゝ見える。で作者が皇子のゐます桂の宮に居る折には、中宮から御存問のお使があつたので、そのあり難い思召に感佩の餘り、この歌を奉つたとすると、美しいこの交情に涙を催さぬ者はなからう。

二句、六帖に月のかつらのとある。意は明らかである。景樹は、これを執していふ、「本文は土佐日記に『久方の月におひたる桂川底なる影もかはらざりけり』とあるを、後人の取り入れたるなるべし。紀氏のいと近く名高き伊勢の御歌をとりて詠まれむも、いかゞなり」と。けれども「里なれば」と婉にいつたのと、桂川とあらはにいつたのとは、既に大きな相違がある。況やこれは「生ひたる」に、多樣の意趣を生じてゐる。意釋を味つてよくこの分寸を曉るがよい。

紀利貞が、阿波の介にまかりける時に、うまのはなむけせむとて、けふといひおくれりける時に、こゝかしこにまか

りありきて、夜ふくるまで見えざりければ、つかはしける

なりひらの朝臣

今ぞしる苦しきものと人またむ里をばかれずとふべかりけり

〔釋〕○紀利貞云々　紀利貞が阿波の國の介となつて、赴任するにつき、餞別するから今日來いといつてやつたのに、利貞はあちこちあるきまはつて、その日夜ふけまで待つたが、顔を見せなかつたので歌をよんでやつたとの意。利貞が阿波介に任ぜられたのは、元慶五年二月である。○かれず　離れず。

大意　人を待つは苦しいものといふことを、貴方が待てどもく來ぬにつけて、今サ始めて知りました、これではすべて、人を待つであらう所をば、不沙汰をせずに、早く往つて遣るべきでありましたわい。

〔評〕諷刺の妙、殆ど人をして羞死せしめる。「今ぞ」の一語、實に骨に徹する冷語である。初二句は轉倒して聞く敍法。

惟喬のみこの許にまかりかよひけるを、かしらおろして、小野といふ所に侍りけるに、正月にとぶらはむとて、まかりたりけるに、比叡の山の麓なりければ、雪いと深かりけり。しひて、かの室にまかりいたりて、をがみけるに、つれづれとして、いと物悲しくて、歸りまうできて、よみておくり

ける

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは

釋 ○惟喬のみこのもとに云々「かしらおろして」は三代實錄に、「貞觀十四年七月十一日、四品彈正尹惟喬親王、寢レ病、頓出家、爲二沙門一」とある。「小野」は山城國葛野郡小野鄕。上の「白雲のたえずたなびく」の條を參照ありたい。「室」は庵室のこと。この詞書は、勢語に、

かくしつゝまうで仕うまつりけるを、思の外に御ぐしおろし給ひてけり。む月に拜み奉らむとて、小野にまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室にまうでて拜み奉るに、徒然といと物悲しくおはしましければ、やゝ久しく侍ひて、いにしへの事など思ひ聞えけり。さても侍ひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければ、えさぶらはで、夕暮に歸るとて、

とあつて、この歌を擧げてあるが、文辭高妙を極めてゐる。比較すると、この集の文の拙處病處が歷々と數へられよう。全く後人が勢語の文をいろつて、書き入れたものとより思へない。景樹も同論である。

大意 あまりのことに、ふと忘れては、これは夢ではないかと思ひますわ、この深い雪を踏みわけて、かやうの山里にきて、君にお目にかゝらうとは、ほんに思ひがけたことか、いや思ひもかけぬことでありましたわい。

評 「ふみわけて」とあるに、その雪の淺くないことが暗示され、從つてその深い山里であることも推想される。然るにことすると、これは賤山かつの住處にふさはしい場所で、なま貴人でも更に立ち舞ひがたい處である。然るにここで、先帝第一の皇子として、おほよくは儲貳の位にそなはり、遂に天位をも踐ませ給ふべき君惟喬を、御年

二十九の一若僧として拝み奉ることは、人生の有爲轉變のあるが中にも、餘りに痛ましい出來事ではないか。なる程親王御自身は「住めば住みぬる」と、この白雲のたゞよふ峯の庵に、安住のお心持をお示しになつたとはいへ、人情から見ればとても堪へ得る處でない。況や、時はいつぞ正月である。世にあられた時は、年頭拜禮の廷臣等の出入で頗る繁華なものであつたのを、徒然として今は雪の中におはしますではないか。こゝに多感なる近昵の士臣業平が參りあはせては、いかに斷腸の思がしたであらう。その夢か現かとたどられたのも尤もである。要するに、親王が境遇上の變化に着想して、今昔二面の兩極端を、暗に對映させたのが、無量の感慨を搖曳させる所以である。二三の句のうつり、「思ふ思ひきや」の疊語、藕斷えて絲斷えざる趣がある。さはいへ、この種の作は、技巧ばかりのよくする所でない。全く眞情から流露した同情の熱語で、詩美の極處に到達してゐる。單にこの作者の歌中において、白眉たるばかりでなく、眞に千古の絶唱である。

深草の里にすみ侍りて、京へまうでくとて、そこなりける
人に、よみておくりける

年をへてすみこし里をいでていなばいとゞ深草野とやなりなむ

釋　○深草の里に云々　深草の里に住んで居りまして、出京するといふので、深草に一緒に住んで居た人に詠んで贈つた歌との意。「深草の里」は哀傷「深草の野べの櫻し」の條に既出。○いとゞ深草　里の名の深草に、草の深い意をよせた。

大意　今私が、年久しく住んで來た、この里を出て去なうならば、たゞさへ深草の里が、いよ〳〵草深くなつて

野となるであらうか。

評 あとに住み殘つて居られる貴方のさびしさを、御推察申すの餘意がある。蓋し官途などに就いての京住居となつたので、しばらく閑居の軒を並べた深草の里人を驚かしたものであらう。初二の句、下句の襯染となつてゐる。「いとゞ」の一語を眼目とする。これによつて、もとから草深く住みなしてゐたことも明らかに、「野とやなりなむ」の誇張も、唐突でなくなる。

二句、伊勢物語塗籠本に宿をとある。

かへし　よみ人しらず

野とならばうづらと鳴きて年はへむかりにだにやは君はこざらむ

釋 ○うづらと鳴きて　鶉と共に鳴きての意。この「と」の助辭、雪と散る、花とちるなどのとの意と見ては穩やかでない。○かりに　狩に假初にをよせた。

大意 貴方のお詞によれば、この里が野となるまでも、わざ〳〵尋ねて來ては下さらぬらしいが、まこと野となつたらば、私はその野に住む鶉と一緒に、怨み泣きに泣いて、月日を送つて待ちませう、さすれば獲物のある野が出來たといふので、せめて狩ぐらひには、貴方はお出でなさらなからうか、いやお出でなされようわサ。

評 「野とやなりなむ」の一語、料らずこの奇怨を釀した。隣人の口舌はけに縱横で、在五の君が詩敵たるに愧ぢない。さて鷹狩は當時流行の遊技で、百敷の大宮人は、休沐の暇さへあれば、卽ち肥馬輕裘に郊野をあさり、遂には雉の產地を味ひわけるほどの通人もあつた。さればこそ、「かりにだにやは來ざらむ」と下待つ理由があ

るのである。「うづら」を、憂を寄せたとか、憂辛(ウツラ)を寄せたとかいふ說は甚しい橫入である。又この贈答を、勢語に、「深草に住みける女を、やう〳〵飽き方にや思ひけむ、かゝる歌をよみける」として、色めいた男女の贈答に作りなしてある。それに拘はつてはならぬ。結句、六帖、業平集には人のとある。二句、勢語、六帖ともに鶉となりてとある。聞えやすいが、今は本文に據つて解した。

題しらず

我れを君なにはの浦にありしかばうきめをみつのあまとなりにき

この歌は、ある人、「昔をとこありけるをうなの、をとこ訪はずなりにければ、難波の三津の寺にまかりて、尼になりて、詠みてをとこにつかはせりける」となむいへる。

釋 ○なには　何(ナニ)に難波をかけた。○うきめ　憂き目に、浮布(ウキメ)をよせた。○みつ　見つに三津をかけた。三津は、難波の御津の名によつた三津寺のことで、大福院と號して、今に大阪にある。○あま　海人に尼をよせた。

大意　貴方は私を、何のとあるかなしになされたこと故、私は憂い目を見まして、かやうに難波の三津寺の尼とまでなつてしまひましたわ。

評　この口氣を味つて、事相を斷ずると、げに左註にあるやうな事情であつたらう。眞淵は、「いもせのことによりてならば、戀の部に入るべし」といつて、これを否認したが、この前後はみな閑居隱遁の詠を擧げてあるか

ら、これも出家遁世のおもい意について、こゝに収めたのである。歌は縁語仕立の煩はしいものだが、甚だ口達者で、すべてを過去にいひなしたのが、悔恨の追懐を促す間接の力があつて、感哀がある。

かへし

難波潟うらむべきまもおもほえずいづくをみつのあまとかはなる

釋 ○うらむ　恨むに、浦見るをよせた。○みつ　見つに、三津をかけた。○あま　海人に、尼をかけた。○かは「か」は疑辭、「は」は歎辭。

大意 自分は貴方に、そのやうに恨まれさうな、折節も覺えないわ、それだのに自分の心の、どのやうな所を見つけて、愛想をつかして、三津寺の尼となつたのか知らぬ。

評 浦を見るべき間もないのに、いづれの所を見るぞといふ理窟から仕立てた。この贈歌に對しては、かう細やかにいひなすより外に法がなからう。

○

いまさらにとふべき人もおもほえず八重葎して門させりてへ

釋 ○八重葎して　八重葎を以ての意、「八重」は多數を意味す。「葎」は雜草で、今いふかなむぐらのこと。○門させりてへ　「てへ」はといへの約。

大意 今になつてから、尋ねて下されさうな人があらうとも思はれませぬわ、こちらは、八重に生ひ茂つた葎

で、門口もさしこめてあつて、はひれないといつてくれい。

許 殆ど忘れるほどうち絶えた人が、訪問するといふ使をよこしたか、或は言傳などしたかの折に、その返事としていひやつたものである。「八重葎して門させり」の誇張は、いよ〳〵その人の久しく訪はなかつたことを反映して、諷刺の妙を見る。

この歌拾遺集戀二に再出してゐる。

　　友だちの、久しくまうでこざりける許に、よみてつかはしける　　みつね

水の面におふるさ月の浮草のうき事あれや根をたえてこぬ

釋 ○浮草　萍。根はあつても水面に漂ふので、根のないやうに、歌にはよみならつてゐる。○あれや　あれば。やの意。○根を　「を」は歎辭。

大意 貴方は何ぞ私に對して、浮草の憂いと思し召すことがあるかして、浮草の根の絶えてあるやうにうち絶えて、近頃はとんとお出がないわ。

許 さもなくばお出がありさうなものをの餘意があつて、人の久濶を諷し、かねて思慕の情を寓した。「五月の浮草」は折からの景物を借りたので、三句までは、「うき」にかゝる序であることは、既に萬葉集に、

時鳥なくをのうへの卯の花のうきことあれや君がきまさぬ　（卷八）

うぐひすのかよふ垣根のうの花のうき事あれや君がきまさぬ　（卷十）

とあるに同じい。「根を絶えて」の比喩を用ひて、一層の巧を加へたのに、時代の風調の相違が見られる。たゞし、内容の主想が既に作者の物でないから、どうもならぬ。

人をとはで、久しうありける折に、あひて怨みければよめる

身をすてゝ行きやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり

【釋】○あひて怨みければ　出會つて、その疎遠を咎めたのでの意。「て」文字は一本によつて補つた。

大意　自分は不斷お尋したいとばかり思つてをるが、今に御無沙汰してをるところを見れば、あの心奴が、とかく餘所事に紛れて、この身を打ち捨てゝ、わきへ往つてゐたのであらうか知らぬ、まことに思の外のものは、あの心奴でありましたわい。

【評】作者の狡獪さ。私は知らぬが、心外なる奴は心よと空恍けて、辯疏の詞を咄嗟に作つた、その機智には驚かされる。心と、思ふとの體用を、しばらく別箇の物に取り成した沒理想を、この詩味のある處とする。二句、古本にいにやとある。この方が妥貼であらう。

宗岳の大頼が、越の國よりまうできたりける時に、雪のふりけるを見て、「おのが思は、この雪の如くなむつもれる」といひける折によめる

君がおもひ雪とつもらば頼まれず春より後はあらじと思へば

釋 ○おのが思は云々　私が貴君をおもふ思は、この雪のやうに積つてをりますの意。これは大頼の詞。
大意　お詞のとほり、貴君の思がこの雪のやうに積ることとならば、それはとても頼みになりませぬわ、なぜなれば、この雪のやうに、貴方の思も春からのちは、もうあるまいと存ずればサ。
評 かやうの座興的の歌は、不易不變の味ひを缺くが、その場では、出で榮えのするものである。後撰集戀六に、

兼輔朝臣の契りける女の歌とて、

しら雪のつもる思も頼まれず春よりのちはあらじと思へば

とある。初二の句、おのづから剛柔の差があつて、男女の性格が現はれてゐる。但いづれも同時代なので、後先が定めにくい。

かへし　　宗岳大頼

君をのみ思ひこし路の白山はいつかは雪のきゆるときある

釋 ○思ひこし路　思ひ來しに、越路をかけた。
大意　いやく雪も雪によること、私は貴方の事ばかり思つて、はるぐと來ましたその越の白山は、何時まあ雪の消える時があるか、あの雪は春でも何時でも、消えはしません、私の思はその雪なのです。
評 雪ではあてにならぬと突つ込まれて、さそくに私のは白山の萬年雪ですと遣り返した。戀歌に比べると、ややふつくりした味ひに乏しい。いづれも機智の作で、感情のものではない。結句、古本にきゆる時のあるとある。

越（コシ）なりける人につかはしける　　きのつらゆき

思ひやる越のしら山しらねどもひと夜も夢にこえぬ夜ぞなき

釋 ○思ひやる　想像すること。こゝは排悶の意ではない。

大意 貴方の事を、不斷都から思ひやつて居るので、あの北國の白山は、どのやうな山かは知らぬが、一夜さたりとも、夢に越えぬ夜はサないわ。

評 夢中の山川をいふことは、詩にあまた例があつて、あながち作者の物ではない。たゞ筆路の暢達自在のが、その特色であらう。「しら山しらねども」「一夜も」「夜ぞ」などの疊語反復が、聲調の圓滑な所以であらう。古本に、二句越の白嶺（ネ）の、四句夢のとある。

題しらず　　よみ人しらず

いざこゝにわが世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし

釋 ○こゝに　菅原や伏見の里をさす。○へなむ　經ようの意。「なむ」は希望ではない。○菅原や伏見の里　大和國添下郡。今菅原寺のある附近の地をいふ。山城の紀伊郡にも伏見の里があるが、この歌には交渉がない。○あれまく　荒れむの意。「まく」はむの延言。

大意 どれ料簡をきめて、こゝに自分の一生は住んでくらさうぞ、この菅原の伏見の里はよい所であるのに、今もし自分まで餘所へ移つて行けば、荒れてしまふであらう事がまあ、をしいわ。

評 菅原の里は、萬葉集に、

大きうみの水底ふかく思ひつゝ裳ひきならしゝ菅原の里　(巻二十)

と詠んで、奈良時代の西の京だから、宮人等は勿論、民庶の住まつてゐた所である。一旦延暦の遷都にあつて、世にある人、又はその蔭を憑むほどの人は、皆われ勝に新都に移住して、奈良の故里は、殊に西偏の菅原伏見のあたりは、瞬く間に淺茅が原と荒れたであらう。舊都の親しみを忘れかねた餘り、せめて自分だけなりとも踏みとゞまつて、殘年をこゝにして終へようとの決心、頗るやさしい情緒のものである。その實は作者が宮仕など辭して、年老い世に餘された憤を託したものではあるまいか。格調蒼古で、神韻悠長である。春上、「故里となりにし奈良の都にも」の詠と共に、奈良の舊都に寄懷した作での双璧である。

○

わが庵は三輪の山もとこひしくばとぶらひきませ杉たてる門

釋 ○三輪の山　春上「三輪山をしかも隠すか」の條に既出。山の麓に大物主神を祀つた大神(オホミワ)神社がある。○山もと　もとの下なりが略かれてある。

大意　私の家は三輪の山の麓であります、逢ひたくば尋ねてお出でなされ、杉の立つてをる門が、それでありますぞ。

評 三輪山のほとりに跡を晦まし、世を避けた人の、流石に人戀しさの思に堪へかねて、親しい友達などにいひおくつたものだらう。「戀しくば」と人事のやうにいつて來訪を催促してゐるが、實は自分が戀しいのである。

かうした表裏の取り成しは詩味を饒かにする。三輪の神山は林木鬱蒼として、檜杉などが多いところ、乃ちその老杉を利用して、わが門のしるしと、稱道したのを趣向とする。造句簡勁で、格調もまた高い。景樹が、「上句はいまだ所も知らぬ人に示したるなり。されば友達の交にあらず」といつたのは、事情を解せぬ僻論である。隱逸みづから喜ぶ士が、決して一々住處報告の愚をするものではない。

初句、古來風體抄にわが宿はとある。俊頼口傳に、「こひしくばとぶらひきませ千早ぶる三輪の山本杉たてる門」とあるのは、この誤傳である。六帖に、三輪の大神の詠とあるのは、もとより妄りである。

わがいほは都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり　　きせん法師

【釋】○たつみ　辰巳で、東南の方位。○しかぞ　然ぞの意。○世をうぢ山　世を憂といふに、宇治山をかけた。山は山城國宇治郡、今喜撰が嶽といふ。鴨長明の無名抄に、「喜撰が住みける迹あり。堂はなけれど、礎など定かにあり」といふものである。

【大意】自分の庵室は、京から辰巳に當る所で、世が憂いとて籠る宇治山であると、人はいふのであるわ、しかも、自分はかくの通り、憂いとも思はず氣樂に住んで居ますわ。

【評】都をいひ人をいふ。世間を對象としてその安住を誇つてゐる處は、眞の脱俗者でないかも知れぬ。けれども彼れは宇治山の隱遁者としてその一生を終へた。とにかく彼れの生活が出てゐる所を取る。貫之がこれを評した「詞かすかにして、はじめをはりたしかならず。いはゞ、秋の月を見るに、曉の雲にあへるが如し」の語は

古來諸家のひとしく首肯する所である。
六帖に、初句わが宿は、結句いふらむとある。二條關白記に、人毛とあるを、近藤芳樹は執して、「人は」は誇つた口調だから隱者喜撰の語にふさはないと評したが、それでは「然ぞすむ」が一向利がなくなる。やはり本文のまゝがよい。

よみ人しらず

あれにけりあはれ幾世の宿なれやすみけむ人の音づれもせぬ

釋　○宿なれや　宿なればやの意。
大意　この家はひどく荒れはてたわい、抑もまあこのやうにして、何年になる家であればかして、昔住んだであらう人が、たえて訪ひ音づれもせぬことぞ。
評　廢宅を詠じたのである。住み捨てゝも、程經ぬ家は、その主人の訪ひ音づれたり、或は預りのをのこなどがゐて、さうは荒さぬものなのに、かうも荒れてゐるのは、數多の星霜を閲した宿だらうと思ひやつたのである。初句で切れたのは、この集からはじまつた體製である。
六帖に、作者を伊勢とある。この歌、伊勢物語にも詞を作つて出してあるから、勢語を伊勢の作と思つた人が、六帖のにも、勢語によつて、その名を掲げたのであらう。伊勢集にも出てゐる。

奈良へまかりける時に、あれたる家に、女の琴ひきけるを

きゝて、よみて入れたりける　　　良岑宗貞

わび人の住むべき宿と見るなべになげき加はる琴の音ぞする

釋 ○よみて入れたりける　歌を詠んで、その家のうちにいひ入れた歌との意。

大意 世にありわびた人が住みさうな家であるがと見れば、それにつれて又、その歎きの添ふ琴の音がするわ。

評 御境遇は深くお察し申すと、同情したのである。琴の音に歎きの加はることは、昔からいふことで、萬葉集にも、

琴とればなげき先だつけだしくも琴の下樋（シタヒ）に妻やこもれる　（卷七）

わがせこが琴とるなべに常人のいふなげきしもいやしきますも　（卷十八）

と詠んだ、一向知らぬ家でも、知らぬ人へでも、歌など詠み入れるのは、當時の常習であるが、これが色好の作者の所爲だと思ふと、何だかをかしくも感ずる。

初瀬にまうづる道に、奈良の京（ミヤコ）にやどれりける時よめる

二條

人ふるす里をいとひてこしかども奈良の都もうき名なりけり

釋 ○初瀬にまうづる道に　大和の長谷寺に詣づる道にての意。初瀬は春上「人はいざ心も知らず」の條に既出。

大意　珍しい人ばかりもてはやして、自分などは飽かれて、古物にされる都を、いやに思つて出てはきたれども、この奈良の京も古里といふによつて、自分の爲には憂い名であつたわい。

評　思ある身には、聯想の惹かれるものは、名を聞いても厭はしいのは當然である。作者は男にふるされての憂さ晴し、否戀を祈りに初瀬詣を企てたのであらう。下句の措辭頗る簡約を極めてゐる。

題しらず　よみ人しらず

世の中はいづれかさしてわがならむゆきとまるをぞ宿と定むる

釋　○わがならむ　わが物ならむの略。

大意　この世の中は假の世であるゆゑ、どれが一つこれぞといつて、自分の物であらうぞ、自分の物とては無いわ、それ故住居も、何處であらうが行きとまつた所をサ、自分は宿ときめて居るわ。

評　行雲流水行脚の覺悟を述べた。一體我れが無ければ我が物も無い、隨つて我が宿と定まつた處も無い事になる。樹下であらうが、石上であらうが、その問ふ所でない。往きつき次第の野伏山伏である。彿者が常套の文句で、作者は僧侶であらう。

○

逢坂のあらしの風は寒けれどゆくへ知らねばわびつゝぞぬる

釋　○逢坂　離別「あふ坂の關しまさしき」の條に既出。○ゆくへ　行方。○知らねば　知られねばの意。

大意 この逢坂山の嵐の風は、ひどく寒いけれど、さればとて、さして外に行くべき方もわからぬゆゑ、難儀しながらもヽ辛棒して、こゝに寝るわ。

評 ある漂泊者の作であらう。都を出ての第一足迹を逢坂山に印して、夜嵐の膚に寒くて、夢もまどかならぬままに思ひやれば、何處とあてどもない旅の空で、泣寝入に寝入るより外はない。今昔物語に蟬丸の歌として、

逢坂の關のあらしのはげしきにしひてぞゐたる世をすぐすとて

とあるは、或はこの下句を作りかへて、傳へたものかも知れない。今昔のは一種の人生觀を歌つてゐるので、その意味において感愴がある。これはさすらひの苦患を卒直に歌つたもので、少し理路にわたつた敍述は面白くないが、眞摯な點がある。

六帖に、三句はやけれど、結句わびつゝぞふるとある。

○

風のうへにありか定めぬ塵の身はゆくへも知らずなりぬべらなり

釋 ○塵の身　塵の如き身。

大意 風にふき上げられて、居所の定まらぬ塵のやうな、この身は、丁度その塵のやうに、何處へどうなつて行くか、行先もわからずなつてしまひさうなわい。

評 これも行脚僧などの作であらう。「塵の身」の譬喩は佛經中から出發した舊い想だが、「ゆく方も知らず」と聯想を馳せたのは、舊を化して新としたものである。「風のうへにありか定めぬ」は無理な辭樣で、うへの語が

浮いてゐる。必ず風前塵の直譯と見るべきである。

家をうりてよめる　伊勢

あすか川淵にもあらぬわが宿もせに變りゆくものにぞありける

大意　飛鳥川の淵こそ、淺瀬に變る物とは聞き及んで居るが、その飛鳥川の淵でもない自分のこの家も、思ひ寄らず瀬にかはつて行く物でサあつたわい、その瀬にといふのは、實は錢のことサ。

釋　○せに　瀬にに、錢をよせた。

評　有爲轉變を歎ずる際にも、なほ錢に換るの洒落を忘れないのは、蓋しこの御の持前の口吻である。どこまでも遊戲氣分が伴つてゐる。上の

世の中は何か常なるあすか川きのふの淵ぞけふは瀬になる

を本歌としたものであることは勿論である。古來の註家、皆この御の零落のはてに、家を賣つたものと解してゐる。けれど、延喜時代はこの御を寵幸された宇多帝及び敦慶親王もましく〵たのに、それ程の窮乏をも知らず顔に過されることは、人情あるべくもない。況や勅撰の集にその名を署して擧げるとなると、且は君の過ちを擧げ、且は作者が辱をあらはすに似てゐるではないか。よつて想ふに、これは他に理由があつて、家を讓つたと斷ずべきである。

三句、古本にわが宿はとある。

筑紫に侍りける時にまかり通ひつゝ碁うちける人の許

に、京に歸りまうできてつかはしける　　きの友のり

故里は見しごともあらず斧の柄のくちし處ぞ戀しかりける

釋 ○見しごと「ごと」は如くで、碁をよせた。○斧の柄のくちし　爛柯山の故事である。書言故事に、「晉王質、代レ木到二信安石室山一、見二二老叟圍レ棋、與二質一物一如二棗核一、含レ之不レ覺レ飢、看レ棋未レ終、視二斧柯一已爛、歸無二復舊時人一」とある。述異記には、老叟が童子となつてゐる。

大意 久しぶりに歸つて見れば、京の故鄕は何もかも模樣が變つて、以前見たやうにもなく、知らぬ土地に來たやうである、それ故、却つて故鄕でも無い處の、貴方と碁を打つて、何事も忘れて面白く暮した所がサ、戀しい事であつたわい。

評 信安の樵者王質の境遇を應用して、今の感想を詠んだ。作者が筑紫に居たのは、國衙の小吏であつた折の事と思はれる。すると、歸期におのづから限りがあるので、「見しごともあらず」とまで、故鄕の變つてしまふことはありさうもない。蓋し、抑揚の筆法でさう誇張したので、斧の柄を取り出したのが、その碁客に對する挨拶である。「見しごと」で爛柯の故事を意識させることは、この頃流行つたこと、見えて、貫之も、

見しごともあらずもある哉ふる鄕は花の色のみあせずぞありける

と詠んでゐる。

女ともだちと物語して、別れてのちにつかはしける　　みちのく

あかざりし袖の中にや入りにけむわがたましひのなき心ちする

大意 私の魂ひは、殘り多く思つて別れた、貴女方の袖の中に這入つてしまつたのであらうか、貴女方に別れてから、うつら〳〵として、魂ひがこゝに無いやうな心持がしますわ。

評 もと〳〵眞摯の作ではない。只うまい事をいつて喜ばせたものである。想は萬葉卷四に、

わがせこが著(ケ)せる衣の針目おちず入りにけらしなわがこゝろさへ

とあるに同じであるが、これはいひ過ぎてゐるから、含蓄の味ひはやゝ乏しい。

寛平の御時に、もろこしのはうぐわんに召されて侍りにける時に、東宮のさぶらひにて、をのこども、酒たうべけるついでに、よみ侍りける　藤原忠房

なよ竹のよ長きうへに初霜のおきゐて物をおもふ頃かな

釋 寛平の御時云々　宇多帝の御世に遣唐使の判官に任ぜられました時に、東宮御所の侍所で、侍臣達が御酒を頂いたその序に詠みました歌との意。扶桑略記に、寛平六年八月二十一日、遣唐使の詔の出たことが見えてゐる。但これは派遣の豫定だけで沙汰やみになつた。「もろこしのはうぐわん」は遣唐使の判官で、遣唐使には大使、副使、判官、主典の役人がある。「東宮のさぶらひ」は春宮坊の侍所。○なよ竹の　なよ竹は、嫋(ナヨ)びかなる竹の意と思はれる。或はいふ長節(ナガヨ)竹の義かと。和名鈔に長間笋を、よなが竹と訓んである。節(ヨ)はふしとふし

との間の稱。こゝは、節長きに、夜長きを寄せた。〇おきゐて　置きに、起き居てをかけた。

大意　嫋竹の節の長いうへに初霜がおくこの頃、夜の長いうへに寢もせずに起きて居て、遠方へ行く別のことについて、物思をすることよ。

評　東宮の侍臣達は御酒下されで、はめを外しての大愉快。獨り作者忠房は千波萬波を隔てた外國行の苦勞な旅をひかへてゐるので、一向に浮かぬ顔付をして、こんな歌を詠んだのである。遣唐の詔命は八月下旬に出てゐるから、丁度これは九月初旬あたりの初霜のおきゐる夜長の頃であつた。この秋思に催されては、何の思もない人でも、感傷せぬものはなからう。況やこの作者の境遇としては、いかに溜らなく感じたのであらう。序歌としては普通の出來である。今昔物語に、敦忠の中納言が、「殿守の伴の御奴(ミヤツコ)心あらばこの春ばかり淸朝めすな」の名歌詠まれた時、小野宮の實資の大臣が、そのあへしらひにこの歌を誦せられたことが見えてゐる。それほど大した作でもなし、時節にも合はぬのに、いさゝか不思議である。

題しらず　　　　よみ人しらず

風ふけばおきつ白浪たつ田山よはにや君がひとり越ゆらむ

ある人、「この歌は、昔、大和の國なりける人のむすめに、ある人住みわたりけり。この女、親もなくなりて家もわるくなりゆくあひだ、この男かふちの國に人をあひ知りて通ひつゝ、かれやうになりゆきけり。さりけれども、つらげなるけしきも見えで、かふちへいく毎に、をとこの心の如くにしつゝいだしやりければ、怪しと思ひて、もしなきまにこと心もやあると疑ひて、月の面白かりける夜、かふちへい

くまねにて、前栽のなかに隱れて見ければ、夜ふくるまで琴をかき鳴しつゝ、うちなげきてこの歌をよみて寢にければこれをきゝて、それよりまた、ほかへもまからずなりにけり」となむいひ傳へたる。

釋　○立田山　大和國平群郡大和川の上流に沿つた龜瀨越の處である。その附近立野といふ所に、立田神社がある。○左註の「かれやう」は離れ方。「前栽」は庭前の植込。

大意　風がふけば、沖の白浪は立つ事であるが、その立つといふ名の立田山を、時もあらうによる夜中に、君が只一人、越えてお出でなさるであらうかまあ。

評　さてもお案じ申されることかなの餘意がある。元來立田山は、神武紀に、

赴二龍田一而其路狹嶮、人不レ得二竝行一、

とある嶮岨で、晝でも歩み苦しく、心細い山越である。それを時もあらうに夜中、しかも一人で越えるとなつては、その辛苦と心細さとは、まことに想像の外であらねばならぬ。と思ふ人のうへに想を馳せて氣遣はしく案じ暮らす處に、婦人のやさしい情致が動いて見える。初二句の序は、

わたの底沖つしら浪たつ田山いつか越えなむ妹があたり見む　（萬葉一）

と同一であり、構想はまた、

二人行けどゆき過ぎがたき秋山をいかでか君が獨りこゆらむ　（萬葉卷二）
朝霧にぬれにしころもほさずして一人や君が山路こゆらむ　（同九）
玉かつま島くま山の夕ぐれにひとりか君が山路こゆらむ　（同十二）

と符合する。いづれこれらを撮合して作つたものらしいが、おのづから別趣をそなへてゐるのは、老手である。

とはいふもの丶、初二句の序は、大和人の詠としては不似合な取材で、氣分がしつくりと來ない氣味がある。萬葉の「わたの底沖つ白波」の詠はこれとは別裁で、作者の位置や環境が違ふから一緒にはならない。舊說に「白波」を白波綠林の意として、立田山に盜人を出した俗解がある。滑稽ではあるが、この序が突飛に不調和に感じた結果である。

左註は伊勢物語から轉寫したものと思はれる。

結句、六帖、新撰和歌、金玉集等にゆくらむとあるは味ひが淺い。六帖に、作者をかぐ山の花の子とある。何に據つたものか。

○

たがみそぎゆふつけ鳥かから衣たつ田の山にをりはへてなく

釋 ○たがみそぎ云々　誰が禊してゆふつけたる鳥かの意。「ゆふつけ鳥」の鷄であることは、戀一「あふ坂のゆふつけ鳥もわが如く」の條に解した通りである。但この歌に、「たがみそぎ」とあるを思へば、あながち世の中騷がしき時の公（オホヤケ）の祓のみではなく、箇人でも、おのが罪咎をこのものに負せて禊祓をなし、さて神に獻つたものと思はれる。社頭に鳥居のあるも、その根源には種々の說もあるが、實際鷄のとまり木として應用された時代があつての事であつた。○から衣「たつ」にかゝる枕詞。

大意 たれが禊をして、放した庭鳥であるかしらぬ、この立田山に長く續けて、頻に鳴くわ。

評 立田山に鷄の鳴くことのふさはしからぬのを咎めてはならぬ。作者も旣にこれをいぶかしんで、一度は聞き

咎めたのである。しかし、立田の神垣あることに心付いて、「たがみそぎゆふつけ鳥か」と思ひやつたものだ。結句、六帖にたちかへり鳴く、猿丸集にうちはぶきなくとある。

○

忘られむ時しのべとぞ濱千鳥ゆくへも知らぬ迹をとゞむる

釋 ○迹をとゞむる　濱千鳥の迹は、文字をさしていつた。昔支那で黄帝の時、蒼頡が鳥迹の文を見て字を作つたといふ事、淮南子、呂氏春秋、史記等に出てゐる。

大意 のちく人に忘られよう時に、これを見て思ひ出してもらはうと思つてゞ、丁度濱千鳥が飛んでその行方も知らぬのに、砂に足迹を殘してあるやうに、鳥の迹と世にいふ手迹を、ろくに書き方も知らぬのに書きとめておくわ。

評 身後の爲に、何か書きおく時の作であらう。「ゆくへも知らぬ跡」は文字が拙くて、筆の行き方も知らぬ意を、千鳥のうへで喩へていつたのである。

貞觀の御時、「萬葉集はいつばかり作れるぞ」と問はせ給ひければ、よみて奉りける　　ふんやのありするゑ

神無月時雨ふりおけるならの葉の名におふ宮のふるごとぞこれ

釋 ○貞觀の御時云々　淸和帝の御時、萬葉集は何時頃作れるぞとの御尋あつたので、そのお答へに詠んで奉つた歌との意。萬葉集のことは、序文の所でいつてある。○ふりおける　降り置きてあるの約。○ならの葉の名におふ宮　楢(ナラ)の葉の奈良といふ名を負ひ持てる宮の意。卽ち奈良に宮處のあつた時代をさす。○ふるごと　古言。舊い詩歌の類を稱した當時の語。

大意　十月頃の時雨が降りたまる楢の葉の、その奈良といふ名のついた宮の御時代に出來ました、古歌の集がサ、これこの萬葉集で御座ります。

評 奈良時代の詞藻は、早くも世に忘られて、淸和帝の頃は、その出來の時代すら覺束なくなつたのは、蓋し弘仁、天長の厄運に際會した爲であらう。もとより萬葉集は平城帝以前のものであるが、撰者貫之が、この集の序文に書いた年代の趣を以て推すと、この奈良の宮も、平城帝の御代の意で採つたものと思はれる。然し作者の意は奈良の京時代といふのであつたらしい。それもその筈、この詞書の趣によれば、帝は萬葉集の撰著された時代をお尋ねになつた事と思はれるのに、有季は採錄の中心となつてゐる歌の時代を以てお答へしてゐる。これでは矛盾した御挨拶になるので、殆どつんぼ話にひとしい。これは全く詞書の書き方のわるいので、帝のお尋ねは撰著の時代の事では、必ずなかつたに相違ない。この歌筆鋒が頗る勁健で、緊張してゐるうへに、敍述の詩的なのは嬉しい。上句の序は、時雨の名殘が楢の枯葉にたまつた、神無月の卽景である。「ふりおける」は萬葉集に雪又は霜によんである。時雨にはいかゞといふ說もあるが、それは見方が委しくない。

寛平の御時、歌奉りけるついでに奉りける　大江千里

蘆たづのひとりおくれてなく聲は雲のうへまで聞えつがなむ

釋 ○聞えつがなむ　段々に先へと聲を傳へてゆくを、「聞え繼ぐ」といふ。「なむ」は希望の辭。

大意　蘆邊の友鶴が、皆立つた中に、一羽おくれて鳴く聲は、雲のうへまで聞えるやうに取り次いでほしい、といふが表面の意で、他人は、皆官位昇進されるのに、自分一人後れて歎いて居る聲は、お上のお耳にまで達して頂きたい、といふが裏面の意。

評 作者の歌を召された折、その序にこの歌を詠んで愁訴したのである。「つがなむ」といつたのは、作者は地下の卑賤で、直に奏上など出來る身分でないから、傳奏を希ふの意味である。諷喩を用ひたのは、かゝる場合に、最もふさはしい裁製である。下句は詩經に、

鶴鳴二于九皐一、聲聴二于天一。

とあるによつてゐる。作者は流石に漢學者の子で、その句に來歷が多い。

六帖には、作者を千古とある。

ふぢはらのかちおん

人しれず思ふこゝろははる霞たち出でて君が目にも見えなむ

釋 ○春霞　「たち」にかゝる序。

大意　人には知られずひそかにわが望み願ふこの心は、春霞のやうに立ち現はれて、お上のお目にもとまつてほしいわ。

評「思ふ」は人を思ふのではなく、心配苦勞などの「思ふ」である。上のと同じ官途の陸沈を歎いての作である。「君」はこの人の身分から推すと、直に天子をさしたのではなく、知己の上官などを斥したと思はれる。

歌めしける時に、奉るとて、よみて、奥にかきつけて奉りける　　伊勢

山川のおとにのみきく百敷(モヽシキ)をみをはやながら見るよしもがな

釋 ○百敷を　宮にかゝる枕詞で、「百敷」は百磯城(シキ)の義。大宮所は、あまたの石垣を築き固めてあるからいふ。但こゝは、百敷を直に大宮のことに轉用してある。○みをはやながら　身を以前のまゝながらにしての意。「はや」は早くの意。水脈早(ミノハヤ)を寄せた。

大意 山川は音が高くて、水脈の早いものである、その山川のやうに音にばかり、只今は承つて居る御所の御有樣を、私が宮仕を致して居りました以前の身で、今も參つて拜見する法もありたいと存じますよ。

評 この御、七條の后の宮の女房として、また寵幸渥い更衣として、宇多帝の後宮にあつた間は、何の思ふ事もなく禁中を立ち馴らしてゐた。今は、宇多帝は上皇となつて朱雀院に遷居、隨つて后妃の人々も禁中を出てしまつた。代りに新主上醍醐の帝が禁中に居られる。すべてが入り代りだ。作者もそれ以來、上皇の御所や自分の里の家などに往來して、禁中を見る機會はなくなつてしまつた。たまたま新帝から歌召された折、昔の花やかな夢を回想して、その追憶に耽り、今一度以前の身分で禁中を立ち馴らして見たいものと思ふのも偶然でな

い。しかし「身をはやながら」と昔に返すことは出來ない相談で、それをなほ希望することが、理窟を忘れて感情の主となつたことを思はせる。但「みをはやながら」は例の刻琢に過ぎる。

古今和歌集巻第十九

雑體

長歌

題しらず　　よみ人しらず

あふことの、まれなる色に、おもひそめ、わが身はつねに、
あまぐもの、晴るゝ時なく、富士のねの、燃えつゝとはに、
おもへども、逢ふ事かたし、なにしかも、人をうらみむ、
わたつみの、沖をふかめて、おもひてし、おもひは今は、
いたづらに、なりぬべらなり、ゆく水の、絶ゆる時なく、
かくなわに、おもひみだれて、ふる雪の、けなばけぬべく、
おもへども、えぶの身なれば、なほやまず、おもひはふかし、
あしひきの、山した水の、こがくれて、たぎつ心を、

たれにかも、相かたらはむ、色にいでば、人知りぬべみ、
すみぞめの、ゆふべになれば、ひとりゐて、あはれ〳〵と、
歎きあまり、せむすべなみに、庭に出でて、たちやすらへば、
しろたへの、ころもの袖に、おく露の、けなばけぬべく、
おもへども、なほ歎かれぬ、春がすみ、よそにも人に、
あはれと思へば。

釋 ○雜體　ザフテイ、ザツテイと音讀し、又くさ〴〵のすがたと讀んでもよい。この卷には、長歌、旋頭歌、及び短歌の一部なる誹諧歌の諸體を收めてあるのでいふ。上の雜歌と混じてはならぬ。又、本卷の長歌は、本集中の糟粕ともいふべく、殆ど細評に値しない。誹諧歌も內容の疎末なのが多いので、折々評を略した。
○長歌　古本に短歌とあるが、その歌は長歌だから、誤であることは無論である。舊說に彼れ是れの解はあるが無用の辯で、紹介するまでもない。
○稀なる色　色は色彩の意と、色情の意とをかねた。○思ひそめ　思ひ初めに、染めをよせた。○天雲の　○富士の根の　ともに枕詞。○とはに　常に。○沖を深めて　心の奧を深めての譬喩。沖と奧とはもと同語。○行く水の　枕詞。○かくなわに　「かくなわ」は、いにしへの唐果子である。和名鈔に、「結果、形如結緒、此間亦有之、和名、加久之阿和」と見え、顯註に、「唐果子の中に、とかくちがへたる物の、透垣などのやうに亂れて製りたる油物なり」とある。されば、かく繩の如くに「亂れ」とかゝつた枕詞。○ふる雪の　枕詞。○えぶの身云々

「えぶの身」は閻浮の身、閻浮は梵語閻浮提の略で、人界をいふ。この世の人間の身なれば、思はじと思へどもかなはずとの意。えぶを、崇徳院の御本に、てふとあるに據る說は采らない。○あしひきの山下水の木がくれてたぎつ　窃かに思にたぎるの意の譬喩。戀一、「足引の山下水の木隱れてたぎつ心をせきぞかねつる」に據つたものか。○墨染の　枕詞。○たちやすらへば　躊躇すること。○白たへの　○おく露の　○春がすみ　ともに枕詞。

評「人を恨みむ」の句、上下に續かない。思といふ語九箇所、「思へども」と續いたのが三箇所、「あふこと」と續いたのが二箇所、その他同意の重複もある。「ふる雪の消なば消ぬべく」、「おく露の消なば消ぬべく」は、わざとの疊句で、對揚せしめたのだらうとも思はれるが、それも不分明で、殆ど蕪雜で、意を成さない。景樹は「或は二首混同したるならむ、足引の山下水云々より切り離して見れば、めでたき長歌なり」といつた。六帖には、古き長歌として、これを擧げてある。まことに平安の京となつての古製と見え、その五七の格調の亂れは、僅に二箇所あるのみで、しかも語句の今調に出來てゐるのは、仁明帝の代に奉つた興福寺の僧徒の長歌のさしつぎの作と見られる。

ふる歌奉りし時のもくろくの長歌　　つらゆき

ちはやぶる、神のみよより、くれ竹の、よゝにも絶えず、
あま彥の、音羽のやまの、春がすみ、思ひみだれて、
さみだれの、そらもとゞろに、さよふけて、山ほとゝぎす、

鳴くごとに、たれも寢覺めて、からにしき、たつ田の山の、
もみぢばを、見てのみしのぶ、かみな月、しぐれ〳〵て、
冬の夜の、庭もはだれに、ふる雪の、なほ消えかへり、
としごとに、時につけつゝ、あはれてふ、言をいひつゝ、
君をのみ、千代にといはふ、世の人の、思ひするがの、
ふじのねの、もゆるおもひを、飽かずして、わかるゝなみだ、
藤ごろも、織れるこゝろも、やちくさの、言の葉ごとに、
すべらぎの、おほせかしこみ、まき〳〵の、中につくすと、
いせの海の、浦のしほ貝、ひろひ集め、取れりとすれど、
たまの緒の、みじかき心、思ひあへず、なほあら玉の、
年をへて、大宮にのみ、ひさ方の、ひるよるわかず、
つかふとて、かへりみもせぬ、わが宿の、しのぶ草おふる、
板間あらみ、ふる春雨の、もりやしぬらむ。

釋 ○ふる歌奉りし時云々　序に、「萬葉集に入らぬ古き歌を奉らしめ給ふ」とある。「もくろく」は目錄で、その

目じるしの詞をよみつらねた長歌との意。〇ちはやぶる　〇くれ竹の　〇あま彦の　ともに枕詞。〇音羽の山の春がすみ　思ひ亂れての「亂れ」へかゝる序で、春上、「春のきる霞の衣ぬきを薄み」に據つた。〇さみだれの云々　夏、「五月雨の空もとゞろに時鳥」に據つた。〇からにしき云々　唐にしきは、「立田」の枕詞。秋下、「立田川紅葉亂れて流るめり」、又、同、「戀しくば見てもしのばむもみぢ葉を」などに據つた。〇かみな月しぐれ〳〵て　冬、「立田川錦おりかく神無月」によつた。〇冬の夜の庭もはたれに云々　冬、「今よりはつぎて降らなむわが宿の」、同、「白雪のふりて積れる山里は」などを思つたものか。〇君をのみ云々　賀、「君が代は千代に八千代にさゞれ石の」、同、「鹽の山さし出の磯になく千鳥」に據つた。〇思するがの云々　戀一、「人しれぬ思を常にするがなる富士の山こそ」に據つた。〇飽かずして云々　離別、「あかずして別るゝ涙瀧にそふ」に據つた。〇ふぢ衣おれる心　哀傷、「藤衣はつるゝ絲は」に據つた。〇やちぐさ　八千種。〇つくすと　盡くすとての意。〇伊勢の海の浦のしほ貝　「ひろひ集め」の序。汐貝は汐海の貝のこと。〇玉の緒の　「みじかき」の枕詞。〇みじかき心　才の足らざる心の意。〇思ひあへず　わきまへがたいをいふ。〇あら玉の　年の枕詞。〇ひさ方の「日」とかゝつて、晝の枕に用ひた。〇しのぶ草　垣衣。〇板間あらみ　板間の疎さに。板は屋を葺いた板をいふ。〇もりやしぬらむ　雨の漏るに、よい歌のもれるのを喩へた。

評「千早振云々」はまづ歌の來歴をいひ、「あま彦の云々」は春、「さみだれの云々」は夏、「唐にしき云々」は秋、「神無月云々」は冬と、四季を擧げて、「時につけつゝ云々」の句で一括し、「君をのみ云々」は賀、「世の人の云々」は戀、「あかずして別るゝ」は離別に羇旅をかね、「ふぢ衣」は哀傷、「やちぐさの言の葉」に物名、雜、雜體、大歌所の歌などをかね、「すべらぎの云々」よりは、勅命を畏んで撰著に從事し、つとめてよい歌を網羅

する積りなれど、われ等が短才にては、良否を思ひあへずして、洩れたのもあらうといつて、年を越えて、宮中の昭陽舍に詰め切りで撰んだが、遂に春雨のふる頃にまで及んだ趣を含めた。序に延喜五年四月とあるは最後の完成で、ほゞ脱稿のうへ、目録を作つたのは、その年の二三月の交であつたらう。

ふる歌にくはへて奉れる長歌　　壬生忠岑

くれ竹の、よゝのふるごと、なかりせば、伊香保の沼の、
いかにして、おもふ心を、のばへまし、あはれむかしへ、
ありきてふ、人まろこそは、うれしけれ、身は下（シモ）ながら、
ことの葉を、あまつ空まで、きこえあげ、すゑの世までの、
あととなし、今もおほせの、くだれるは、塵につげとや、
塵の身に、つもれる事を、問はるらむ、これをおもへば、
いにしへも、くすりけがせる、けだものの、雲に吼えけむ、
こゝちして、ちゞのなさけも、おもほえず、ひとつ心ぞ、
ほこらしき、かくはあれども、照るひかり、近きまもりの、
身なりしを、たれかは秋の、くる方に、あざむきいでて、

みかき守、　とのへもる身の、　みかき守、　をさ〳〵しくも、
おもほえず、　こゝのがさねの、　中にては、　あらしの風も、
聞かざりき、　今は野山し、　近ければ、　春はかすみに、
たなびかれ、　夏はうつせみ、　なきくらし、　秋はしぐれに、
袖をかし、　冬は霜にぞ、　責めらるゝ、　かゝるわびしき、
身ながらに、　つもれる年を、　しるせれば、　いつゝのむつに、
なりにけり、　これに添はれる、　わたくしの、　老のかずさへ、
やよければ、　身はいやしくて、　年たかき、　事の苦しさ、
かくしつゝ、　ながらの橋の、　ながらへて、　難波のうらに、
立つなみの、　波のしわにや、　おぼほれむ、　さすがにいのち、
をしければ、　こしの國なる、　しら山の、　かしらは白く、
なりぬとも、　おとはの瀧の、　おとに聞く、　老いず死なずの、
くすりもが、　君が八千代を、　若えつゝ見む。

君が代にあふ阪山のいはし水木がくれたりと思ひけるかな

釋 ○ふる歌云々　これも上のと同時ので、添へて奉つた歌である。○くれ竹の　枕詞。○ふるごと　古言。○伊香保の沼　上野國群馬郡今の榛名湖のことと思はれる。こゝは「いかにして」の枕詞。○のばへ　述べの延言。○むかしへ　昔方。いにしへと同じい。○人まろ　柿本人麻呂。飛鳥藤原の宮の代の大歌人で、官五位に至らない。○しもながら　下官ながらの意。○あまつ空　大宮の内を譬へていふ。○あと　例の意。○今もおほせの云々　いにしへ人麻呂の歌を召しけるに續いて、今も我が徒に、「歌奉れ」の仰言の下つたのは、かの人麻呂の例に繼げといふことかとの意。「塵につぐ」は文選に、「遙々播清塵、清塵竟誰嗣」とあつて、古き迹をまなぶを、繼塵といふのである。但、人丸の歌を召されたことは物に見えない。○塵の身　塵の如き身で、輕い卑しい身を譬へていふ。○つもれること　積れる言で、塵の緣語。○いにしへも藥けがせる　この二句、原文にない。六帖、及び忠岑集によつて補つた。神仙傳に、淮南王劉安が、仙藥を服して登仙した事を記したところに、「安、臨去時、餘藥器還在中庭、鷄犬舐啄之、盡得昇天、故鷄鳴天上、犬吠雲中」とある。獸などの仙藥を舐めたのだから、「けがせる」といつた。○ひとつ心ぞ云々　俗に一心にといふに似てゐる。こゝは撰者の數に入つたのを喜び誇つたのである。○照るひかり　天子を譬へ奉る。○近きまもり　近衞の直譯。作者は左近衞の番長であつた。○秋のくる方に云々　「秋のくる方」は西である。作者はこの時、左近衞の番長から、右衞門の府生に轉任した。衞府の陣屋は、すべて左は東、右は西なので、東西の方位を以て敍した。さて、これは順任であつて、左遷ではないが、大御身に近づき奉る近衞の職を去つたのを、不本意のやうにいひなして、「あざむきいでて」といつた。○みかきもり云々　元來宮城の警衞は、その禁內を近衞、中郭を兵衞、外郭を衞門府といふ

風に分擔してゐた。右衞門の府生たる作者は、外郭の御垣を守るのが職であつた。故に、「とのへもる身の御垣守」といつた。「とのへ」は外の重で、外郭のこと。○をさ〳〵しく　長々しにて、立ち優つたの意。○こゝのかさね　九重の直譯。文選に「君門多九重」とあるより、宮城又は禁内をいふ語とする。○今は野山しちかければ　衞門は外郭を守れば、「野山近し」といひ、近衞に對へて、外衞のあしさをいひ竝べた。○霞にたなびかれ　心の晴れやらぬをいつた。○時雨に袖をかし　涙に濡れを喩へた。○しるせれば　かき記したれば。○いつゝのむつに云々　五六三十年に及んだとて、わが公務の勤勞を陳べた。○やよれば　「や」は彌「よ」は愈で、數多き意である。佛足石の歌に、「やよつ光を放ち」とあるもこの意。○長柄のはしの　「長らへて」の序。○難波のうらに　「たつ浪」の序。○波のしわにや云々　皺だらけに老いくちなむの意。波の重なり寄るを、面の皺に譬へた。「おほほれ」は溺れの原語。○しら山の　○おとはの瀧の　「の」文字、いづれもの如くの意で序詞。○藥もが　不老不死の藥を欲しの意。「もが」は願望の辭。○わかえ　若くなること。○君が代に云々　かく古き事を興じ給ふ君の御代に逢はうとも知らず、逢坂山の石淸水の木隱れてあるやうに、人知れず沈んだ身と歎いたことを後悔するとの意。

評 長歌には、まづ御時にあうたのを悅び、次には身のわびしきをかこち、次には君をいはひ、終に我が命の長くあれかしと願ひ、短歌には、いよ〳〵君の御時にあうた悅をいひかへした。貫之の目錄歌よりはやゝ一ふしもあり、優つてはゐるが、冗長に堪へられない。また、貫之はさすがに萬葉集を心得てゐたものと見えて、五七調が流れて、ところ〳〵七五となつたと思はれるのを、これ及び次の二首は、却つて七五調が五七に流れたやうな觀がある。時代の風潮とはいひながら、かうも劃然たる體形をそなへぬ以上は、邯鄲に步を失つた燕人の

類で、どちらつかずの變なものになつてゐる。

君が代にの短歌は長歌の反歌である。反歌は長歌の意を反復し、又はいひ洩したのを歌ふのを、その本色とする。

「聞えあげ」は家集に聞えあげて、「いにしへに」は一本にいにしへも、「かくはあれども」は家集にかくはほこれどとある。「とのへもる身のみかきもり」は家集にない。「身ながらに」は一本に身ながらも、「しるせれば」は家集に數ふれば、「やよければ」は一本せめくれば、「ながらへて」は家集にながらへば、「浪の」は家集に老の、「瀧の」は家集に山のとある。

冬のながうた

ちはやぶる、神無月とや、けさよりは、曇りもあへず、
うちしぐれ、紅葉とともに、ふる里の、よしのゝ山の、
山あらしも、寒く日ごとに、なりゆけば、玉の緒とけて、
こきちらし、あられみだれて、霜こほり、いやかたまれる、
庭の面に、むらく見ゆる、冬くさの、うへに降りしく、
しら雪の、つもりく て、あらたまの、年をあまたも、
すぐしつるかな。

釋 ○ちはやぶる　枕詞。○神無月とや　神無月といふことにやの意。○紅葉とともにふる里の　時雨が紅葉と共に零るといふに、古里をかけた。吉野の古里であることは、冬、「ふるさとは吉野の山し云々」の條に既出。

○あらたまの　枕詞。

評 平凡の二字これを悉してゐる。しかも、「玉の緒とけてこきちらし」は自他がうち合はない。又、こきちらしたる如くと解かねば、その意が通じないが、それも無理で、元來詞が足らないのである。

「けさよりは」は家集にはつ時雨、「うちしぐれ」は六帖に初時雨、「山あらし」は家集に山おろし、「年をあまたも」は家集に年をおほくもとある。

七條の后うせ給ひけるのちによみける　　伊勢

おきつ波、荒れのみまさる、宮のうちは、年へてすみし、
いせのあまも、船ながしたる、こゝちして、よらむかたなく、
かなしきに、なみだの色の、くれなゐは、われらがなかの、
時雨にて、秋のもみぢと、ひと〴〵は、おのがちり〴〵、
わかれなば、たのむ蔭なく、なりはてゝ、とまるものとは、
花すゝき、君なき庭に、むれたちて、空をまねかば、
はつ雁の、鳴きわたりつゝ、よそにこそ見め。

釋 ○七條后　藤原溫子。關白藤原基經の女で、宇多帝の中宮である。集中の詞書に、「寬平の御時后の宮の歌合の歌」とあるその后の宮の御事である。延喜七年六月御年三十六にておかくれなされた。○おきつ波　「あれ」にかゝる序。○年へてすみし　作者はこの后宮の女房として侍うた人で、宇多帝の寵をも受けた。○いせのあま　伊勢の海の海人。わが名の伊勢を寄せた。○よらむ　賴るに寄るをよせた。○かなしきに　悲しきにより〻〻の意。○われらがなか　宮のうちの女房達すべてにかけていふ。○おのがちり〲云々　一周の年月を經て、宮の中の人々も、御墓仕へする者も、おのがむき〲に退散するをいふ。○とまるものとは　留まるものとてはの意。○はつ雁の　初雁の如くにの意。

評 草木こそ多けれ、薄を以てあしらひとしたは、彼れが穗に出て招くさまが、心ありげに見えるからである。しかも哀傷にも、「君がうゑし一むら薄」などあるので思ふと、この頃、薄などを前栽に移して、秋の野らのさまをまねぶことが、專ら行はれてゐた事が知られる。后の薨ぜられた年の秋の頃、御忌はてゝ、宮の内の人達が散りぢりに成りゆく末を思ひやつて、眼前の景物を詩材として、その榮枯盛衰の情を敍した。故宮人空しく、殘草風雨に摧け、天邊雁語の冷やかなのを聞いたなら、何人といへども懷舊の情、斷腸の思に堪へなからう。況や作者が私の主人と賴んだお方であつて見れば、その船流したる海人のよるべない心地のしたのも尤もである。長歌五首のうちで、これひとり見られる。

「たのむ蔭」は六帖及び家集にたのむかたとある。

旋頭歌

題しらず　　　　　　　　　　　よみ人しらず

うちわたすをちかた人に物まをすわれ、そのそこに白く咲けるはなにの花ぞも

釋 ○旋頭歌　セドウカと讀む。六帖にはセンドウカとかいてある。漢字序には、旋頭、混本と竝べ擧げてあるが、一體兩名である。混本、また双本ともいふ。旋頭はかみにめぐらす、混本は本にまじふる、双本は本にならぶるの意で、本の句五七七に對するに、末句もまた、五七七を以て仕立てた一體である。そのはじめは本末相互の問答を專らとしたことは、紀記にその例の見えた如くである。かくて本末いづれにまれ、その五七七の一句をさして、片歌と稱へた。奈良時代に至つて、この體大いに行はれたと思はれるが、なほ他の長短歌の盛んなのとは比べ物にならなかつた。しかもあながち問答體によらず、自在にその詩想を發揮した。只その體製が五七につぐに七字を以てしたから、下の方いよ〳〵重く、頭勝な七五調時代となつては、その調が氷炭相容れ難いものであつた。況や、字句ともに少なくて、融通出入の自在を缺いてゐる。これらの理由が平安朝において、やうやく廢絶に近づいた所以である。されば後には五七五とつらねた、短歌の半截の如きものも現はれるに至つたが、畢竟どちらつかずの異體であつた。

○うち渡す　此方より彼方へかける意。場處の時にはその距離あるにいふ。宣長が、「見渡すことなり」と解したが、古歌を案ずると、その意が差つてゐる。○をちかた人　遠方なる人。○花ぞも　花であるぞよ。「ぞ」はおし詰めていふ意の辭。「も」は歎辭。

大意　かけ離れた、はるか向ふの方の人に、私は物をお尋ね致しまする、貴方の居られるそれ其處に、白く咲いてゐる花は、何の花でありますぞ、まあ大層見事な花ですが。

評　詩形をそなへた平語に近い。われ物申すとあるべきを倒置したのは、その二音五音の組織が、あまりに緩調に流れるので、促調にしてその失をすくつたのである。

かへし

春されば野べにまづさく見れどあかぬ花、まひなしにたゞに
のるべき花の名なれや

釋　○まひ　禮物をいふ。古來、幣の字を訓んでゐる。まひなひといふもこれで、賄賂をのみいふは後世の事である。萬葉卷六、「天にます月讀男幣はせむこよひの長さ五百夜繼ぎこそ」、同九、霍公鳥の歌に「幣はせむ遠くなゆきそ」などの例を見て推し知られよう。○のる　告る。

大意　これは春になれば、野邊にまづ一番がけに咲く、見ても〳〵見飽かぬ花で、その名はお禮の物なしに、ついいつてしまふやうな、輕々しい花の名であるか、いやさうではござらぬわ。

評　詼諧を弄した狂言で面白い。この集における如き狭義の見解からすれば、これも俳諧の部のものであるが、

姑く體製の上について、こゝに収めたものらしい。「たゞにのる」、原本たゞ名のるとある。「名告る」といふことここでは聞えない。高野切によつて改めた。

題しらず

はつせ川ふるかはのへにふた本ある杉、年をへてまたもあひ見むふた本ある杉

つらゆき

釋 ○はつせ川　大和國磯城郡初瀬を流れる川。○ふるかはのへ　古川の邊。初瀬川は、古代からいひはやされた川なので、「古川」といつた。廢川を古川といふのとは異なる。

大意　初瀬川の古川のあたりにある二本杉、私はあの杉の年久しいやうに、年がたつて後、あの杉の竝んで向ひ合つて居るやうに、またもお目にかゝつて、對座致しませう。

評　諸註解き得ない。稻掛太平が、「上はまたといはむ序なり」とて、「二本杉」を二股杉と解したのは、中にもわるい。この二本杉は初瀬川附近で著名な物だつたので、譬喩に用ひたのであらう。本の三句を、再び末句の三句で歌ひかへしたその詠歎の味ひは頗る永い。その風調によつて想ふに、奈良時代の遺製であらう。作者が大和人であることは、勿論と思ふ。末の結句、躬恒集におもがはりせでとあるは、この特色を抹殺したもので、神意が索きてしまふ。

君がさすみかさの山のもみぢばの色、神無月しぐれの雨のそめるなりけり

釋　○君がさす「御笠（ミカサ）」にかゝる序。○みかさの山　羇旅「あまの原ふりさけ見れば」の條に既出。○そめる　染みてあるの約。滲（シ）みたの意。

大意　三笠山の紅葉の色、これは大層見事であるが、何が染めたかと思へば、神無月の時雨の雨が染めたのであつたわい、人間業ではないはサ。

評　萬葉に、「君が着るみかさ」と續けたのは冠り笠である。これは「さす」とあるから、唐傘、大傘の類であらう。そはいづれにせよ、時雨の雨をかけ合はせたことは、萬葉集の、

大君の三笠の山のもみぢ葉はけふの時雨にちりかすぎなむ（巻八）

と同巧である。末の結句、助辭がその大部分を占めたことは、輕くて更に力がない。五七七の體を成す自然の調に背いてゐる。

末の第二句、躬恒集に時雨のあめにとある。それなら、下の「そめるなりけり」に自他が打ち合ふが、時雨を主として、そむるといつた方が面白い。元本にもさうあるから、意釋はその意で解いておいた。

元本にはこの次に、

ます鏡底なる影にむかひゐてみる時こそ知らぬおきなに逢ふ心ちすれ

の一首がある。體が甚だとゝのはない。

誹諧歌

題しらず　　　　　　　　　　　よみ人しらず

梅のはな見にこそ來つれうぐひすの人く人くといとひしもをる

【釋】○誹諧歌　史記の註に、「滑稽俳諧也」とあつて、をかしいたはれ言を、俳諧といふ。唐の杜甫の詩にも俳諧體がある。こゝに誹諧と書いたのは、下の諧の字の偏によつて、上の俳の字の偏をも言偏に作つたもので、かういふ例は、熟語にはよくあることである。

【大意】自分は梅の花を愛して、見にこそ來たのである、されば、梅に寢ぐらを占めて居る鶯は喜ぶべき筈なのに、なぜか鶯が人が來る人が來ると鳴いて、自分の近寄るのを厭つてこそまあ居るわ。

【評】撰者等が、俳諧と認めた標準は、きはめて曖昧で、今より推することは頗る困難である。同じ構想、同じ敍述のものでも、一は本歌に入り、一は俳諧に入り、人をしてその定見のなさを疑はしめる。確たる認識力鑑賞力がないからといへばいはれるが、かういふ事は、時代の慣習と思潮とに支配される點もあるから、さう一概にはいへない。

素性法師

山ぶきの花色ごろもぬしやたれ問へど答へずくちなしにして

釋 ○山吹の花色ごろも　山吹の花の黄色をした衣をいふ。襲(カサネ)では表黄、裏黄又は青を山吹といふ。○くちなし口無しに、梔子(クチナシ)をよせた。梔子はその實の外殼が、口を開かないので、この名がある。黄色の染料とする。

大意　この山吹の花色衣は、主は誰れであらうか、いか程問へども、更に返事がないわ、をゝそれもその筈、山吹は口の無いといふ梔子色であるによつてサ。

藤原敏行朝臣

いくばくの田をつくればか時鳥しでの田長(タヲサ)を朝な〳〵よぶ

釋 ○しでの田長(タヲサ)　催馬樂に、「雨やどり、笠やどり、宿りてまからむ、しで田長」とある。田長は田をつかさどる人で、即ち農夫である。時鳥の鳴くのは、梅雨頃を盛りとして、農時に際したれば、その聲を賤(シツ)田長と聞きなし、それが轉つてはしで田長となつたのだらう。そのしでの音に就いて、死出の山を越えた冥土に、時鳥のあるやうに、僞經十王經に作つてあるので、死出田長の意にも取り成して、詠むこともある。十王經のことは、哀傷「なき人の宿に通はば時鳥」の條にいつてある。賤田長をこゝは姑く調について、「しでの」と、の文字を入れた。

大意　どれ程の田を作るのであればか、時鳥はあのやうにいそがしさうに、賤の田長を毎朝毎朝呼ぶことぞ。

七月六日たなばたの心をよみける　藤原かねすけ

いつしかとまたく心をはぎにあげて天の川原をけふや渡らむ

釋 ○たなばたの心を　たなばたは棚機で、織女星のことをいふが、こゝはひろく二星にかけていつた。歌は牽牛星の心を詠んである。○またく　待つの延言。○はぎにあげて　宣長いふ、「人に物をかくと顯はし見することを、古の語に脛に擧ぐといふことのありしなるべし。土佐日記なるもその意なり」といへり。土佐日記に「ほやのつまのいずし鮨鮑をぞ、心にもあらぬ脛にあげて見せける」とある。

大意 今日は六日なれば、逢ふ日は明日であるが、いつか〳〵と待ちかねる心を見せて、高股立を取つて、今日渡らうか。

評 「脛にあぐ」といふ詞が、當時の卑俚な語であつた上に、「またく」に股の響があるので、俳諧の意をもつのであらう。

題しらず　　凡河内躬恒

むつ言もまだつきなくにあけぬめりいづらは秋の長してふ夜は

釋 ○むつ言　睦び言で、男女の情話をいふ。○いづらは　「は」は歎辭。

大意 睦言もまだ澤山あるのに、はやこの秋の夜があけたやうだわ、一體どこにあるぞ、よく人のいふ秋の長いといふ夜はサ。

評 逢ふ夜の短さを怨みかこつてゐる。二星の心を詠んだとも見られ、又作者の實情とも見られる。「いづらは」の語が眼目である。これら相當の佳吟で、更に俳諧の氣味でない。

三句、高野切、元本にあけにけりとある。

僧正遍昭

あきの野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花も一時

大意 秋の野に嬌態(シナ)をして立つて居る女郎花、これを世の人は大層にいひはやすが、あゝ喧しいわ、その花もほんの一盛りのわづかの間のものぞ、といふが表面の意で、あすこに美しい女が居る〳〵といひはやすが、ああ喧しいわ、何の美人の色も、ほんの一時の間のものぞ、といふのが裏面の意。

評 諸註、女郎花の喧しいやうに解きなしたのは、筋が通らない。女郎花はなまめいてゐるだけで、喧しいのはそれを見はやす人達の事である。諷意は、朝には紅顏、夕には白骨の無常を說いて、好色家を警醒したのである。

四句、一本及び元本にあなことごとしとある。

よみ人しらず

秋くれば野べにたはるゝ女郎花いづれの人かつまで見るべき

釋 ○つまで　摘までに、抓(ツ)までを寄せた。

大意 秋になると野邊に色めいて居る女郎花を來て見る人は、どの人でも摘まずに見ようか、いや皆摘んで見るわ、丁度花の名によぶ女のじやらくらしたのには、誰も一寸手を出して、抓(ツメ)つて見るやうにサ。

結句、一本つてに見るべきとあるはわるい。元本にすぐべきとあるは本文にまさる。

○

秋霧のはれてくもればをみなへし花の姿ぞ見えかくれする

大意 霧が晴れたり曇つたりすると、女郎花の花の姿がサ、見えたり隠れたりするわ。

○

花と見て折らむとすれば女郎花うたゝあるさまの名にこそありけれ

釋 ○うたゝある　うたてあると同じい。

大意 つい一とほりの花と思つて折らうとすれば、女郎花の女といふ名は、生憎な譯合のある名でサあつたわい、女にはどうも手がさしにくいて。

評 作者は法師でゝもあらう。

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌　在原のむね梁

秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぐ〳〵す鳴く

釋 ○つゞりさせ　綴り刺せ。今も蛬の聲を「肩させ裾させ」と聞く。○きりぐ〳〵す　昔のきりぐ〳〵すは今の蛬である。

大意 藤袴の袴が秋風で、大分綻びたらしいわ、その證據には、その綻をつゞくりさせといふ蛬が鳴くわ。二句、一本綻びぬらむとある。

あす春立たむとしける日、隣の家の方より、風の雪をふきこしけるを見て、その隣へよみてつかはしける

きよはらの深やぶ

冬ながら春のとなりのちかければ中垣よりぞ花はちりける

大意　まだ冬なれど、もう明日春が立つ今日で、春の近隣であるによつて、冬と春との界目の中垣からさ、その春の花が散つて來たわい。

評　わが宿を卑下して冬、隣家を春に喩へたので、隣家の雪をも花に見立てた。初句、高野切に冬なれど、結句、六帖に花ぞ咲きけるとある。又、拾遺集戀四に再出した。

題しらず

よみ人しらず

石の上ふりにし戀の神さびてたゝるにわれはいぞ寢かねつる

釋　○石の上　舊りにかゝる枕詞。夏「石の上ふるき都の」の條參看。○たゝる　祟る。

大意　あまりに年久しくなつた自分の戀は、性が入つて、祟りをする爲に、自分は夜も寢ることがさ、えう出來ぬわ。

評　すべて、年舊りた物の化けて怪を爲すといふことは、太古よりの迷信であつたらしい。久しい戀に、心が焦られて、いよ〳〵安眠もしないのを、戀の祟りとしたのは、面白い滑稽である。

結句、一本にいねぞかねつるとある。又、拾遺集戀四に再出したのにも、元本にも、ねぎぞかねつるとある。

○

枕よりあとより戀のせめくればせむかたなみぞ床なかにをる

釋 ○枕よりあとより　頭から脚から。神代紀に、頭邊脚邊(マクラベアトベ)とある。○なみ　無さに。

大意 夜寢て居ると、枕の方からも、脚の方からも、戀といふ奴めが、しきりに攻め立てゝくる故に、仕様がなさにサ、床の眞中にうづくまつて、ぢつと起きて居るわ。

評 萬葉に「戀の奴(ヤツコ)のつかみかゝりて」と詠んだ儔で、床中に蹲る態度は、その術なさ加減があらはれて眞實だが、敍述には全く一種の俳諧味を持つてゐる。

○

戀しきがかたもかたこそありと聞け立てれをれどもなき心ちする

釋 ○かたもかたこそ　舊註に兩說ある。いかに戀すとて、心の方角は方角であるものと聞くといふ說と、いかに戀すとて、その人の形は形にてあるものと聞くといふ說とである。姑く下句とのかけ合と、狂味の如何とを思つて、後說に從つた。○立てれ居れども　立てれども、居れどもの略。

大意 どのやうに戀をする人でも、形は變れ細りながらもサ、あるものと聞くわ、それに自分は戀に心が空になつて、立つて居てもすわつて居ても、この身體の形がどうやら無い心持がする。

初二句、元本に戀しきも向ふ方こそ、下句床中にこそおきゐられけれとある。

○

ありぬやと心見がてらあひみねばたはぶれにくきまでぞ戀しき

釋 ○ありぬや　逢はでもありぬやの略。

大意　思ふ人に逢はずにも居遂げられるものかと、ためしがてらに逢はずに居れば、もう〳〵さやうの冗談事もして居られぬ程にサ戀しいわ。

評 ありぬやと試みるといふことが、狂味のあるのである。

○

耳無(ナシ)の山のくちなし得てしがなおもひの色の下ぞめにせむ

釋 ○耳無の山　大和三山の一。大和志に、「大和國在(リ)二十市郡木原村上方(ノ)一、四面田野、孤峯森然(タリ)、山中梔樹多(シ)矣、因(ツテ)又呼(ブ)二梔子(クチナシ)山(ト)一」とある。○おもひ　思ひ。緋を寄せた。

大意　あゝ耳無山の梔子が得たいものであるわ、それがあらば、世間の聞えを忍ぶ戀の思の緋色の下染にしようわ、さすれば、耳なしなれば人が聞かず、口なしなれば人がいはず、思を忍ぶには好都合であるによつてサ。

○

足引の山田のそぼつおのれさへ我(ワ)をほしといふ憂(ウレ)はしきこと

釋 ○そぼつ　案子山（カヽシ）をいふ。古言そほど。○おのれ　こゝは二人稱に用ひたので、罵つた語。
大意　山田の案山子を見るやうな汝（ナノレ）さへ、自分を望んで逢ひたいといふ、さても厄介なことよ。
評 萬葉卷十一なる、左の歌その儘である。

山城の久世のわく子がほしといふ我（ワ）を、あふさわに我（ワ）をほしといふ山城の久世。

二三の句、元本に山田にたてるそぼつさへとある。

富士のねのならぬおもひに燃えば燃え神だに消たぬ空しけぶりを　　きのめのと

釋 ○ならぬ　成就せぬ。○おもひ　思ひに火をかけた。○燃えば燃え　下の「燃え」は命令格。○神だに　富士の神は、木花開耶姫命（コノハナサクヤ）である。富士の火のことは、既に序文の中に釋してある。
大意　富士の山が出來ぬ戀の思の火で燃えるやうに、自分の出來ぬ戀の思の火も、燃えるなら燃えよサ、富士の山の神様でさへも、昔から思の火から立つ益にも立たぬ煙を、お消しなさらぬものをサ。
評 後撰集戀二に、平貞文、

われのみやもえて消えなむ夜と共におもひもならぬ富士のねのごと

紀のめのとのかへし、

富士の根のもえわたるともいかゞせむけちこそしらぬ水ならぬ身は

とあるが、別時の詠か。撰者は「富士のねのならぬ思」の構想を俳意と見たらしい。かやうの空想は詩歌の常である。

あひ見まくほしは數なくありながら人につきなみ惑ひこそすれ
きのありとも

釋 ○ほしは　欲しに、星を寄せた。○つきなみ　手著(タヅキ)がなさにの意、「手著」は便宜である。月を寄せた。

大意　星があつても、月のない晚は道を惑ふやうに、逢つてほしい思は、數限りもなくありながらも、その人に逢ふ便宜(ツキ)がなさに、心もかきくれて惑ふことでサあるわ。

人にあはむつきのなきには思ひおきて胸はしり火に心やけをり
小野小町

釋 ○つき　便宜(ツキ)に、月を寄せた。○思ひおきて　思ひ起きに、熾火(オキ)を寄せた。熾火は盛んにおこつた火。○胸はしり火　胸の走るに、走火(ハシリビ)をかけた。「胸の走」るは心の騷ぐこと。「走火」は火の外へ刎ね飛ぶをいふ。○第二句、一本、なきよはとあるがよろしい。「に」はよの誤寫である。

大意　思ふ人に逢はう便宜(ツキ)の無い夜は、そのことを思ひながら起きて、火の走るやうに胸が走つて、心が焦れて居るわ。

初二句、元本に人にあはてつきなき時はとある。

寬平の御時きさいの宮の歌合の歌　藤原おきかぜ

春霞たなびく野べの若菜にもなり見てしがな人もつむやと

釋 ○つむや　摘むに抓むを寄せた。

大意　春霞の立つ野べの若菜にもなつて見たいものであるわ、自分のやうな者でも、もしや若菜の摘まれるやうに、思ふ人に抓めらるゝか、どうかと思へばサ。

二句、新撰萬葉にはたちいづる野べの、四句、一本になりもしてしがとある。

題しらず　　よみ人しらず

思へどもなほうとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらじと思へば

大意　自分はあの人を、隨分思つては居れども、やはり頼みがたくて、疎々しい心持がするわ、その故は、丁度春の霞がこゝの山へも、かしこの山へもかゝらぬ所はあるまいやうに、あの人が氣が多くて、かゝりあるかぬ所はあるまいと思ふによつてサ。

評 著想は、左の歌などと同じなのに、これのみ俳諧なのはいぶかしい。

時鳥ながなく里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから（夏）

かつ見れど疎くもあるかな月影のいたらぬ里もあらじと思へば（雜上）

蓋し「かゝらぬ山」のいひかけの取り成しが、俳味に墮して聞えたのだらう。

平貞文

春の野のしげき草葉の妻どひにとびたつ雉のほろゝとぞ鳴く

釋 ○しげき草葉の妻戀に　草葉のしげき妻戀にといふべきを、調について倒裝した。春上「若草の妻もこもれり」の續きとは違ふ。○ほろゝ　ほろうつなどもいつて、雉の羽音である。涙のおちる形容のほろ〳〵をかけた。

大意 自分は春の野の草葉のやうに、妻を戀ふる思がしげき爲に、その春の野に妻戀して飛び立つ雉子の羽音の、ほろゝといふやうに、ほろほろとサ泣くわ。

評 ほろゝの口合が俳諧である。それを心付かずして、雉子がほろゝと鳴くと思つて、後の歌などによく詠んであるが誤である。行基菩薩の詠といふに「山鳥のほろ〳〵となく」とあるが、あれは行基時代の口調ではない。必ず後人の假託である。

あきの野に妻なき鹿の年をへてなぞわが戀のかひよとぞなく　きのよしひと

釋 ○かひよ　鹿の鳴聲である。甲斐よをかけた。○なぞ　この語で句を切つて見る。

大意 秋の野で妻のない鹿が、何年も何年も、あのやうにかひよ〳〵と鳴くが、何で妻戀の甲斐があるぞ、鹿の料簡がわからぬわ。

評 六帖に、伊勢、

秋山に妻なき鹿の年をへてなぞやいきてのかひよとぞなく

とある。いきてのの一語、頗る深刻に聞えて勝つてゐる。

五句、一本にかひよとはとある。

みつね

蟬の羽のひとへに薄き夏衣なればよりなむ物にやはあらぬ

釋 ○ひとへ　一重に偏にをかけた。○なればよりなむ　馴れば紕りなむにて、着馴らせば萎えばみて皺づくをいふ。

大意　自分の思ふ人は、蟬の羽の衣のやうに、一向に薄い心なれど、こちらから實を盡して馴れたらば、着馴らすと夏衣の紕れるやうに、ゆく〳〵は自分に思ひ寄つてきさうな物ではないか、寄つて來ぬことはありさうもないものに思はれるわ。

たゞみね

隱沼のしたよりおふる根沼繩の寢ぬ名はたゝじくるな厭ひそ

釋 ○隱沼のしたよりおふる根沼繩の　譬喩をかねた序。隱沼は草など茂つて水の見えぬ沼をいふ。根沼繩は蓴菜をいふ。○くる　來るに繰るをよせた。「繰る」は繩の緣語。

大意　私がこのやうに通つて來ても、貴方がつれなくて、一所に寢てくれぬ故、根蓴の名のやうに、寢ぬ名は立ちはすまいと思ふ、それ故、草隱れの沼の底から生える根蓴のやうに、隨分忍んで私のくることばかりは、厭

つて下さるな。

よみ人しらず

ことならば思はずとやはいひはてぬなぞ世の中の玉襷なる

釋 ○ことならば　春下「ことならば咲かずやはあらぬ」の條に既出。○玉襷　玉は美稱、襷(タスキ)は掛ける物なので、どちらつかずに引きかゝつた意の隱語に用ひた。

大意 このやうに逢つてくれぬとならば、いつそ何とも思はぬといひ切つてしまへばよい、なぜに二人の中が、どちらつかずに引き掛つて、玉襷であることぞ。

評 後にも、「大幣にして」と詠んだ隱喩を、俳諧の意としてある。

○

思ふてふ人の心のくまごとにたち隱れつゝ見るよしもがな

大意 自分を思ふと口でいふ人の心の隅々(スミヾヽ)へ、そつと這入つて、隱れ〳〵して、實か噓(ウソ)かを見屆ける手だてが、あつてほしいな。

○

思へども思はずとのみいふなればいなや思はじ思ふかひなし

釋 ○いなや　否や。

大意 これほど眞實に思ふけれど、それをあの人は疑つて、思つて居らぬとばかりいふのであるから、いやいや
これから、もう思ふまいぞ、とても思ふかひがないわ。
「いなや」、六帖に今はとあり、元本にいさやとある。

○

われをのみおもふといはばあるべきをいでや心は大幣（オホヌサ）にして

釋 ○大幣にして　大幣は、戀四「大幣のひく手あまたになりぬれば」の條に既出。こゝは引く手あまたの隱語に用ひた。

大意 あの人が思ふくといふのも、自分ばかりを思ふのならば、それでよからうが、いやもうあの人の心は、あちらへもこちらへも靡く、引手あまたの大幣であつて、一向あてにならぬわい。

○

われを思ふ人を思はぬむくいにやわが思ふ人のわれを思はぬ

大意 自分を思つてくれる人を、思つてやらぬ報かして、自分が戀しく思ふ人が、自分を思つてくれぬわ。

評 眞淵は、「俳諧にあらず」と評した。けれど、「思ふ」の語を故意に疊用したり、思はぬ報を取り成したりなど、やゝ俳意はある。次の歌も、むくいを詠んでゐる。

○

思ひけむ人をぞともに思はましまさしや報(ムクイ)なかりけりやは　〔一本ふかやぶ〕

釋　○まさしや　正しや。

大意　あの自分を思つてくれたであらう人をサ、こちからも思はうことであつたわ、あゝ爭はれぬもの、報といふものが無かつたことか、いや覿面にあつた、それは今自分の思ふ人が、自分を思つてくれぬわ。

作者の名、次のもこれも、一本云々は、奏覽の原本にあるまいこと、思はれる。定家卿校正の時書き加へられたともいふ。このあたり皆「よみ人しらず」の歌であらう。

○

出でゆかむ人をとゞめむよしなきに隣のかたに鼻もひぬかな　〔一本よみ人しらず〕

釋　○隣のかたに　隣の方にての意。○鼻もひぬ　鼻をひるとは、嚏(クサメ)をすること。

大意　今こちから出でゆかうとする人を、留めよう手だてがないによつて、人が嚏をすれば、出ることを忌む習があるから、かこつけて留めようと思へど、生憎近所隣で、嚏もせぬことよ。

評　奈良時代には、鼻ひれば待人來るといひ、又、人の思ふ時は嚏るともいつた。この頃は又、鼻ひれば、出て行くことを忌むといふ迷信のあつたと見える。抑も嚏を凶兆とすることは印度の慣習で、それが佛教に伴はれて、支那を經て日本に入つたのである。

元本、初句いでてゆく、三句すべもなし、結句鼻もひなくにとある。

○

紅にそめしこゝろもたのまれず人をあくにはうつるてふなり

釋 ○あく　飽くに灰汁をかけた。紅は藁の灰汁にて洗へば、色が褪めるものとぞ。

大意　紅のやうに、深い色に染めこんだ人の心も、頼みにはならぬ、なぜなれば、あの紅も灰汁に漬ければ色が變るといふやうに、人を飽くといふ氣が出ると、つい心が變るといふことであるわ。

評　紅のやうに深く思つてゐますなど、人が自慢をしたので、その紅の深い色とても、あてにはならぬといひくたしたのである。

二句、六帖に染めしこころももとある。

○

いとはるゝわが身は春の駒なれや野飼がてらに放ちすてたる

釋 ○駒なれや　駒なればやの意。○野飼がてら　顯註に、「馬をも牛をも放ちて飼ふをば、野飼といふ。それに寄せて、人を思ひ放つをも、野かふといふなり」とある。景樹の說に、「退きのきを延べてかふといふにて、退きがてらに遠ざかる譬なり」とある。後撰集に、「みちのくの尾駮の駒も野飼ふには荒れこそまされなつくものかは」など、まことに退く意がありさうである。

大意　人に厭はれる自分の身は、春の駒かして、丁度春駒を野飼がてらに放しすてにしておくやうに、あの人が、

咨氣せぬやうな顏をして、その身を退きがてら自分を見すてゝ、一向かまはぬわ。

○

鶯のこぞのやどりのふるすとや我れには人のつれなかるらむ

釋 ○鶯のこぞのやどりの　「古巢」にかゝる序。○ふるす　古巢に舊すをかけた。

大意 鶯の去年の宿を古巢といふやうに、あの人が自分を舊いものにして見捨てるといふので、それでかうも氣強くするのであらうか。

評 詩でも新人といひ故人といふ。見捨てることをふるすといふは、當時の通語である。

○

さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやぐ霜夜をわが獨りぬる

釋 ○さかしらに　賢(サカ)しらに。かしこだての意。○さやぐ　さや〳〵と鳴ること。

大意 人に見捨てられても、ぬからぬ顏に、夏は人まねに、いつそ獨寢の方がよいなどいつて紛はしても見たが、このやうに笹の葉の、さや〳〵と鳴る寒い霜夜をも、自分が獨り寢ることよ、これはいかにも堪へやうがないわ。

評 深い感傷を含んだ作で面白い。たゞ第二句の俳意と、「人まね」の語とが、この歌をこの部に收めしめたものである。

あふ事の今ははつかになりぬれば夜深からではつきなかりけり　　平中興(ナカキ)

釋 ○はつか　僅(ハツカ)に二十日(ハツカ)を寄せた。○つき　便宜(ツキ)に月を寄せた。

大意　何時も二十日になれば、夜がふけねば月がないが、自分もあの人に逢ふ事が、人目のうるさゝに、今ではわづかになつたによつて、たまに逢ふにも、人目の無い夜ふけでなくては、便宜(ツキ)がなくなつたわい。

結句、元本につきなかるべしとある。

左のおほいまうち君

もろこしの吉野の山にこもるとも後れむと思ふ我れならなくに

釋 ○もろこしの吉野の山　吉野山は山深く、世を厭ふ人などのよく籠る所なので、假令諸越のさうした深山に籠るともと、假に設けていつた。

大意　貴方が大和の吉野山は勿論、假令唐の吉野山の奥へ引き込まうとも、どこまでも慕つてこそゆけ、あとに殘つて居ようと思ふ自分ではないものをサ、それを心の淺いやうに思はれるのは口惜しいわ。

評「もろこしの吉野の山」、この辭樣が奇矯なので、俳意と見なしたらしい。撰者達は餘りにまじめ過ぎる。戀五に見えた、伊勢の御が仲平朝臣に贈つた、「三輪の山いかにまち見む云々」の歌の返しとて、これを伊勢集に擧げたので、仲平の作とし、さて仲平は後にこそ左大臣にもなりたれ、延喜の頃は未だ微官だからと、「左のおほいまうち君」の署名を疑つた者のあるは、伊勢集に泥んでゐる。かの集は素よりしどけないもので、勅撰集

の如き正しいものでない。彼れによつて是れを云爲するのは、本末を顚倒してゐる。勿論「三輪の山」の返しでもない、仲平の作でもない、左大臣藤原時平の作である。

なかき

雲はれぬ淺間の山のあさましや人のこゝろを見てこそやまめ

【釋】○雲はれぬ淺間の山の　譬喩をかねて、「あさまし」の序とした。淺間山は信濃國北佐久郡の噴火山。○人のおのれをさした。

【大意】淺間山の噴き出す烟が、雲となつて晴れずにあるやうに、疑ひの晴れもせぬに、早くも退いてしまうとは、あまり怪しからぬ肝のつぶれたことよ、私の心をとくと見たうへでサ、止むなら止めたがよいわ。

【評】淺間の烟の比喩と「あさ」の疊音など、俳諧とするのは贊成し難い。

伊勢

なにはなる長柄の橋もつくるなり今はわが身を何にたとへむ

【釋】○長柄の橋も　雜上「よの中にふりぬる物は」の條に既出。○つくる　造るの意。盡くるに解くは當らない。この事、序文中、「長柄の橋もつくるなりときく人は」の條に既出。

【大意】これまで舊い物のためしに引いた難波の長柄の橋も、新しく出來るのである、今はもう人に飽かれて、舊

い物となつてしまつた自分の身を、何に譬へようぞ、何にも譬へる物も無くて、心の慰みやうも無いわ。

評 ひろい世界に自分ひとり男に舊るされてゐる者と心狹く考へて、くよ〳〵物案じした趣が面白い。これなど俳諧に收めるのは餘りに惜しい。

初句、金玉集につのくにのとある。

よみ人しらず

まめなれど何ぞはよけく刈る萱(カヤ)の亂れてあれどあしけくもなし

釋 ○まめ　眞實、或は眞面目などの意。○何ぞはよけく　よけくあらむの略。○刈る萱の　刈つた萱は亂れて見えるので、「亂れ」にかゝる序とした。刈萱として一種の草の名とするは、後世の訛誤である。

大意 自分は隨分實體であるけれど、それが何のよい事があらうぞ、現にあの人などは、自分をさし置いて、刈萱の亂れたやうに、あちこちに心を移して亂れて居るけれど、それでもさのみわるいやうな事もないわ。

評 「よけく」「あしけく」、對偶があまりに親貼に過ぎるが、卒直らしい點によい氣分がある。

おきかぜ

何かその名のたつ事のをしからむしりて惑ふは我ればかりかは

大意 何のその、名の立つことが惜しからうぞ、惜しくはないわ、戀路のならひ、よくも無いと知りながら迷ふ

のは、自分ひとりかまあ、自分ばかりでは無い、皆さうであるわ。

評 これはひどく急所を突いたものだ。愚者も賢者も、戀の前には一切無差別だと喝破して、名の立つ位が何かと、自棄的に出たのはよく〳〵の戀路であらう。多分ある衝動を心に感じた結果らしい。

いとこなりける男によそへて、人のいひければ　　　　　く　そ

よそながらわが身にいとのよるといへば只いつはりにすくばかりなり

釋 ○いとこなりける云々　從弟なる男に、情交のあるやうによそへて、世の人のいひ騷いだからの意。但、「けるは無川の辭である。元本に絲と名ありける男に云々とあり、顯註に、「この歌は、いとといふ男によそへて、人のいひければ、女のよめるなり」とあるのに從ふがよい。○いとのよる　絲といふ男の寄るに、絲の縒るを寄せた。○いつはり　僞に針を寄せた。○すく　着ぐること、好色を寄せた。

大意 この頃聞けば、よそながら絲といふ男が自分に寄り附いて居るといふから、絲の縒つたのは針にすげ通すばかりである如く、たゞ冗談に好いて見たばかりサ。

評 緣語のくさり仕立は論外であるが、絲だの針だのが作者の身分を語つてゐる。

題しらず　　　　　さ　ぬ　き

ねぎ言をさのみ聞きけむ社こそはてはなげきの森となるらめ

釋 ○ねぎ言　願言。○なげき　歎きに木をかけた。「なげきの」は歎がの意で、なげ木の森と續くのではない。

大意　多くの人が歎き願ふ詞を、さやうにお聞き入れなされたであらうと思ふ神の社はサ、しまひには、なげきといふ木の茂る森になるであらうわ、といふが表面の意で、人のいひ寄るのを、さやうに無暗と聞き入れて、誰れ被れなしに逢つたであらう人がサ、しまひには歎きが繁くなるであらうわ、といふが裏面の意。

評 さて、その人は作者自身なのであらう。

元本に作者を安倍清行娘とある。

大輔

なげき樵る山とし高くなりぬればつら杖のみぞまづつかれける

釋 ○なげき　歎きに木をかけた。○つら杖　頰杖。

大意　いろ〳〵の歎きが、山のやうにサ高く積つたから、何ぞ思ふと、頰杖ばかりサ突くやうになることではあるわい。

評 木を樵りつんで來て、山阪の高さに、道すがら杖を突く趣で仕立てた。

元本に作者を源扶娘とある。

よみ人しらず

なげきをばこりのみつめて足引の山のかひなくなりぬべらなり

釋 ○なげき　歎きに木をかけた。○足引の山の「かひ」にかゝる序。山には峽のあるので、詮（甲斐）にかけた。峽は山あひの地をいふ。

大意　あまりに木を樵り積むと、山の峽が埋つてなくなるやうに、自分は戀ゆゑに歎きばかりが積つて、その歎き甲斐がなくなつてしまひさうなわい。

○

人こふることを重荷と擔ひもてあふごなきこそ佗しかりけれ

釋 ○あふご　枴（アフコ）に逢ふ期（ゴ）をかけた。枴は荷ひ棒である。

大意　戀を重荷と擔つて居るから、それなら枴がある筈なのに、その枴といふ逢ふ期がないのがサ、難儀なことであつたわい。

○

よひの間にいでて入りぬる三日月のわれて物思ふ頃にもあるかな

釋 ○よひの間にいでて入りぬる三日月の　三日月は片破れなので、「われて」にかゝる序とした。○われて　わりなくの意。「わりなく」はことわりなくの略で、無理やりに、强ひてなどの意。

大意　宵の口に一寸出て這入つてしまふ三日月の、片破れといふやうに、わりなく無やみに、物思をするこの頃であることよ。

評　上句は序であつて、今日から見れば俳諧らしくもない。結構な歌である。只「三日月のわれて」のかゝりが、當時は奇異に感じた爲であらう。

○

そへにとてとすればかゝりかくすればあないひ知らずあふさきるさに

釋　○そへにとて　當時の俗語と思ふ。契沖いふ、後撰集に、『けふそへに』とあるは副の意にて、けふさへにといふ詞なれば同じからず。古今著聞集第十六、法師の角力とる事をいへる條に、『そへにと答ふ』といふ詞見ゆ。それよといふ詞に近し」と。この說に從つておかう。○あふさきるさに　「あふさきるさ」は合ふさ離るさの義で、往くさ來さの意から轉つては、往き違ひ、かけ違ひなどの意にも用ひられる。諸註、皆いひ足らない。「に」はにての意。

大意　さうだと一つ思案をきめて爲て見ると、一方に差支へる、それならばと又その方へかゝつて爲て見ると、又こちらの一方に差支へる、あゝ何といつてよいやら、いひやうも知らぬわ、とかく世の中の事は、あちこち往きちがひのものであつてサ。

評　「かくすればとあり」とあるべきを、上にゆづつて略いた。人事は多くこれ塞翁が馬である。

○

世の中のうきたび毎に身を投げばふかき谷こそ淺くなりなめ

大意 世の中が憂く思はれる度毎に、世を厭つて、身を投げようなら、深い谷がサ、その死骸でつまつて、淺くなつてしまふであらうわ、このやうに憂い事の多い世の中なればサ。

評 滑稽突梯の想、暗に諷託の意を寓してゐる。

よの中はいかにくるしと思ふらむこゝらの人に恨みらるれば　在原もとかた

大意 世の中そのものは、どんなにか苦しいと思ふであらうわ、かう澤山の人に、世の中が恨めしい〳〵と恨まれるからサ。

評 世の中を擬人しての一趣向、諷託の意がある訓戒をもたらす。四句、六帖によろづの人にとある。

何をして身のいたづらに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさしき　よみ人しらず

釋 ○やさしき　羞かしいこと。

大意　一體自分はまあ、何をしてこのやうに年寄つたのであらう、何一つ仕出した事もなしに、寄つてしまつた年の思はくがサ、はづかしいわ。

評　頗る感慨の深い作で、遲暮の歎は全く同情に値する。「年の思はむ」の擬人は、やゝ尖奇の嫌がないではない。但「松のおもはむ事もはづかし」と詠んだ歌は正體の本歌と認め、「年のおもはむ」は俳諧に收めたのは、その理由がわからない。有象と無象との差別はあるが。

三句、朗詠に老いにけむ、結句、六帖、元本にこともやさしくとある。

おきかぜ

身はすてつ心をだにもはふらさじ遂にはいかゞなると知るべく

釋　○はふらさじ　「はふる」は放ち捨つるをいふ。物を擲つを、俗にはうるといふもこの語。零落の意にも用ひるが、こゝには當らない。

大意　とてもこの世の望は、思ふにかなはぬ故、この身は思ひ切つて無い物として捨てたわ、しかし、せめて心だけなりとも大切に持つて、捨鉢といふやうにふり捨てまいぞ、流石に捨てた身の行末が、どのやうになるかと見屆けられるやうにサ。

結句、家集、元本になると見るべくとある。

ちさと

白雪のともにわが身はふりぬれど心はきえぬものにぞありける

釋 ○白雪のともに　白雪と共にの意。

大意 雪の降ると一緒に、自分の身は老いふるびたが、流石に雪の消えるやうには、心は消えぬものでサ、やはり若い時に變らぬわい。

評 雪の降る冬を經て、又一年を加へた人の感想で、壯心は決して消磨しないと威張つた。初句、元本に白雪ととある。

題しらず　よみ人しらず

梅の花さきての後のみなればやすきものとのみ人のいふらむ

釋 ○み　實に身をかけた。○すきもの　酸き物に好色者(スキモノ)をかけた。

大意 梅の花が咲いて後になる實は、酸いものであるが、そのやうなこの身であればかして、自分を好色者(スキ)だ好色者だとばかり、人がいふのであらう。

法皇、西川におはしましたりける日、猿山の峽(カヒ)に叫(サケ)ぶといふことをよませ給うける　みつね

わびしらにましらな鳴きそ足引の山のかひあるけふにやはあらぬ

釋 ○法皇西川におはしまし云々　雜上「蘆たづの立てる川邊を」の條に既出。「猿山の峽に叫ぶ」は、猿叫ニ山

峽」を書きくだしたので、鶴立洲と同じく詩題である。○わびしら　侘しげにといふに同じい。「ら」は形容の接尾語。○ましら　猿のこと。翻譯名義集に「摩斯吒、或、末迦吒、此云ニ獼猴ニ」とある。○かひ　詮（甲斐）に、峽をかけた。

大意　猿よ、そのやうに難儀さうに啼くなよ、今日は法皇樣の御幸があつて、この山のありがひのある日ではないことか、ほんにかひあるあり難い日であるぞよ。

評　「わびしらに啼く」は、題の趣によつたのである。詩には猿聲を悲しいものに作り、宜都山川記の「巴東三峽猿鳴悲、猿鳴三聲涙沾レ裳」、白氏文集の「三聲猿後垂ニ郷涙ニ」の類、屈指に遑がない。眞淵は、「これを意詞たはれたるところなくめでたし」とて、この部に入つたのを疑つてゐる。想ふに、わびしらの音を反復すべく、マシタの梵語をましらと轉じて、口合にしたものか。或は萬葉集に、既にましの助辭に猿の字を塡て、あるから、早くより猿をマシとのみいつて居たのに、わざと「ら」の複數を添へて、疊音に仕立てたものであらう。この作者時にかやうの戲謔を弄する癖がある。比良の山を隱しては、「かくてのみわが思ひらのやまざらば」と、思ひらの新熟語を作つてゐる。「ましら」もこの儔であらう。又「山のかひよとぞなく」と詠んだのが、この部に入つてゐるのを思ふと、「山のかひある」のいひかけだけでも、當時は俳諧の意と見たことが知られる。元本に初句ましはな鳴きそ、結句けふにはあらずやとある。

題しらず　　　　よみ人しらず

世を厭ひこの本ごとにたちよりてうつふし染の麻のきぬなり

釋 ○うつふし染　「うつふし」は俯臥しで、假寢のさまをいふ動詞。空五倍子をかけた。宣長が「全臥にて全剝の全なり、丸寢と同じ」としたのは從ひがたい。五倍子は、ぬるでの木に產する蟲の巢で、その中がうつろなので、空五倍子といふのである。これで黑色を染める。卽ち五倍子染である。○麻のきぬ　僧衣をいふ。

大意　この衣は、浮世を厭つて所定めずあるく僧の、どこでも行きかゝり次第、樹蔭樹蔭に立ち寄つて、假寢にうつ臥す、その空五倍子染の麻の黑衣であるわ。

評 五倍子染の僧衣を贈るとて詠んだものかとも思つてみたが、歌の趣は自身の麻衣を詠じたらしいから、作者は僧侶であらう。「うつぶし」のいひかけがやゝ異樣なので、この部に收められたと見える。

結句、六帖に苫のころもぞ、遍昭集に麻の袈裟なりとある。大和物語には、上句「霜雪のふるやの中にひとり寢の」とあつて、遍昭の詠とした。但本文のを正しいと見るが至當である。

この次に、元本に左の歌どもがある。

人の牛をつかひけるに死にければその牛のぬしの許によみて遣しける　源宗岳娘

わがのりし事をうしとや思ひけむ草葉にかゝる露のいのちを

○

いかにしてこれを隱さむくれなゐのやしほの衣まくりてにして　よみ人しらず

○

てる月をゆみ張としもいふことは山のはさしていればなりけり　みつね

古今和歌集卷第二十

大歌所御歌

おほなほびの歌

あたらしき年の始にかくしこそ千年をかねてたのしきをつめ

日本紀には、つかへまつらめ萬代までに

釋 ○大歌所 西宮抄に、「大歌所、在二圖書寮東一、新嘗時供奉、有二親王、大納言、非參議、六位別當、琴師、歌師十生一」とある。邦樂なる神樂、催馬樂、風俗等の諸物を掌る官人、歌人等を召し置かれる所である。それを習ひ傳ふるにもこゝで教へる。江家次第に、大歌、小歌の稱が見えた。大歌は公朝に用ひられるをいひ、世に專ら歌ふを小歌といふ。又謠ふには、新しく撰んでうたひ、その曲調をも作ることがある。大嘗會、新嘗會の時には、大歌所の人が奏樂する。雅樂寮の專ら唐風の舞樂を司るとは異なる。この卷の歌は皆こゝで歌はれたものなので御歌といふ。○おほなほび 紀記に、伊邪那岐神の、夜見の國より歸りまして、その禍を直さむとて成りませる神直毘(カムナホビ)、大直毘(オホナホビ)神のことが見える。即ちその大直毘神の御祭の時にうたつた歌である。催馬樂の韓神の詞に、「おほなほみ」とあるも同じで、もとはこの神の祭の歌であつたらう。この神大直日とも書くので、

神を祭りはてゝ後の直會の日とする說もあるが、諸ひ難い。〇たのしきをつめ　樂しきを積むに、木を積むを寄せた。木を積むは年の正月十五日、百官悉く薪を奉る、これを御薪といふ。その數の定めは延喜式に見えた。積木のはじめは天武帝の五年正月に、神位以上進レ薪と紀にある。

大意　この新しい年の始に、かうやつてサ、今から千年の先までをかけて、樂しきといふ木を、お庭に積みませう。

評　續日本紀、天平十四年正月に、天皇大安殿に出御ましまして、五節の舞等奏しをはりて、諸臣に宴を賜ふ時、六位以下の人々琴を彈いて、

新しき年のはじめにかくしこそ仕へまつらめよろづ代までに

と歌つたことが出てゐる。左註に「日本紀」とあるは誤つてゐる。又萬葉卷五に、

むつき立ち春のきたらばかくしこそ梅ををりつゝたぬしきをへめ

とある。この二歌を泥一にして、更に「樂しきをつめ」の積木をよそへた趣向を加へて、時調に協ふやうに歌ひかへたものと思はれる。であるから、この集の歌として見る場合には、本文のまゝで解くがよい。契沖が萬葉の本文を執して、「古き上手の書けるへ文字は、つに紛ひ易きより、後の人の寫し誤れるにて、へめなるべし」と唱へてから、先覺多くこれに從つてゐる。本文のまゝでよく聞えてゐる以上は、好んで平地に波瀾を起すのは面白くない。古筆物もへつの別が不分明である。この歌は催馬樂の呂の歌である。

この大歌所の歌どもの端詞、甚だしどけなくて、事行かぬふし多く、上なる卷々のにふさはない。思ふに、もとは端書がなくて、只歌章ばかりを書きつらねたものを、後人、樂府の本によつて書き入れたと思はれる。さ

れば必ず詞書によつてのみ釋かうとするのは拘はつてゐる。

ふるきやまとまひの歌

しもとゆふかづらき山にふる雪のまなく時なくおもほゆるかな

釋 ○ふるきやまとまひ　もとは大和の國振の舞であつたらう。大嘗會の己の日に、豊樂殿にてさまぐの舞ある中の一つである。また神社の祭にも演ぜられる。こゝに「ふるき」とあるは、大和舞の歌章中のふるき意である。舞にかけていふのではない。○しもとゆふ　楚結ふ。楚は若木の茂り立つたもの、これを刈つて、薪にするとて、藤葛で結ぶことがあるので、「葛」にかゝる枕詞とした。○かづらき山　大和國葛上郡と、河内國石川郡とに跨る山。河内では金剛山といふ。

大意 あの葛城山にふる雪の、ふらぬ間のないやうに、何時といふことなしに、君のことが心にかゝつて、忘れるひまのないことよ。

評 三句までは序で、戀歌である。構想は天武帝の、

三吉野の耳我の嶺に、時なくぞ雪はふりける、ひまなくぞ雨はふりける、その雪の時のなきがごと、その雨のひまなきがごと、限もおちず思ひつゝぞ來し、その山道を。（萬葉巻一）

と同じい。しかも詩形が小さいから、曲折合拍の妙を缺いてゐる。殊に結句が、力量に乏しい。平安朝となつては、頭大尾小の體の多いのは、七五調の結果であらうが、かやうな凡句輕句を以て結束するのでは、完作は到底得られない。されば同じ事でも、

うち渡す竹田の原になくたづのまなく時なくわが戀ふらくは（萬葉卷四）

の如く、とゝのへたいと思ふ。葛城山は大和の國では吉野につぐ高山で、京人の目からは雪勝なおそろしい山と感じてゐたのであらう。

あふみぶり

近江より朝立ちくればうねの野にたづぞ鳴くなるあけぬこの夜は

釋　○あふみぶり　古事記に夷振（ヒナブリ）、宮人振、天田振（アマダブリ）などあると同じく、管絃に合はせて奏した歌には、おの〳〵一定の曲節があつて、それを何振と名づける。なほ何節（ナニブシ）といふやうなものである。こゝに近江振といひ、次に水茎振、四極山振といつたのは、樂府で呼んだ名で、たゞその歌の詞を取つて、假にその節の名としたゞけのことである。近江振といつても、その國の風俗の歌曲ではない。○うねの野　近江國蒲生郡にあつて、いま蒲生野といふ。

大意　あふみから今朝はやく立つてくると、今うね野に、あれ鶴がサ鳴くは、さあ夜がもう明けたわ。

評　「近江より」は、うね野に相對的に使はれてゐるから、近江の國内のある一地方の名に相違ない。或說に「今うね野の三里ばかりに大見といふ所あり、昔の順路なり。假字は違へど聲の通へば、この誤りたるにや」とあるも捨て難く思はれる。卽ちそのあふみなる家を、夜深く立ち出た人の詠であらう。うね野あたりは、古へは大湖の水がひろがつてゐたので、人里は稀に、鳥雀の影は絶えて、鷺鶴などの涉水鳥ばかり、多く栖息してゐたらしい。曉行幾里、こゝに至つて、一聲の鶴唳に天が始めて白い。旅情がこゝにはじめて慰まれる。「あけぬ

この夜は」の喜氣に滿ちた調を聞き取らなければならぬ。又この倒裝の辭樣は、四句切れの、上の強い調に對抗して、千斤の力量がある。「この」の一語も、また容易に下せない語である。わびしさにその夜明を待ちに待つてゐた趣も見えるではないか、後人好んで、この結句を襲用したが、畢竟優孟の衣冠であることは、代々の撰集を見てもわかる。要するに高古で、神韻縹緲、一唱三嘆に値するものである。

みづぐきぶり

水莖の岡のやかたに妹とあれとねての朝けの霜のふりはも

釋 ○みづぐきぶり　水莖振。○水莖の岡　近江なり、筑前なりといふ說もあるが、宣長の「水莖は草木の瑞々しき莖の稚きの意にて、その稚(ワカ)はチカと通へば、岡の枕詞とせり」といふ說に從はう。○岡のやかた　岡の屋形。屋形は殿舍に比べて、備はらざる家だちをいふ。宣長は「岡の屋縣(ヤアガタ)の略にて、岡の屋は、山城宇治郡なる地名なり」と。鬬岡野洲良は「萬葉に岡の湊とある、筑前遠賀郡の岡の屋形をいふ」。○妹　こゝは妻をいふ。○あれ　我れの古言。○朝け　朝明(アサアケ)の略。○霜のふり　「降り」は降るの假體言。○はも　歎辭。

大意 この岡の家で、妻と自分と寢て夜の明けた今朝の、この霜の降りやうはまあ、一方ならぬことわ。

評 昨夜は二人して寢たので、かほど冷えた夜とも思はなかつたがの餘意がある。蓋し岡邊はおのづから風の當る寒い處なので、その朝霜とても雪の如くに繁かつたらう。たまくこの屋形に相宿りした人、よべの鴛夢の暖かつたのに思ひ較べて、覺えず驚歎の語を洩したのである。「寢ての朝け」造語が頗る簡淨である。「霜のふりはも」の歌後の辭樣、想像の餘地が無窮で、情致の含蓄を多大ならしめる。

結句、古き一本に雪のふりはもとある。

しはつ山ぶり

しはつ山うち出でて見れば笠ゆひの島こぎかくる棚なし小舟

釋 ○しはつ山ぶり　四極山ぶり。この歌は萬葉集卷三、高市連黑人が覊旅歌八首の中の第三、四極山うち越え見れば笠縫の島こぎかくる棚なし小舟を歌ひひがめたもので、このまゝでは解き難い。姑く萬葉に據つて解釋しよう。○しはつ山　攝津國住吉より東の方喜連といふ所へ行く道の間に、岡山の卑い阪がある、それをいふ。喜連は呉の訛で、雄略紀、十四年正月呉人の參つた條に、「泊二住吉津一、是月爲二呉客一、通二磯歯津路一名二呉坂一」とある。○笠縫の島　攝津國東成郡深江村であらう。管田が澤山あつて、その質が他よりも勝れ、里人は昔から笠を縫ふことを業としてゐた。この村土地が高くてあたりは卑いから、古へは皆ひろい沼江で、この村ばかり島であつたと見える。よつて笠縫の島の名を負つたのであらう。○棚なし小舟　戀四「堀江こぐ棚なし小舟」の條に既出。

大意　四極山をずつと越えて見渡すと、あれあの笠ぬひ島の蔭へ、漕ぎ隱れて行くよ、棚無し小舟がサ。

評　作者は萬葉に據ると、高市連黑人である。この人また住吉で、

住の江のえな津に立ちて見渡せば武庫の泊ゆいづる舟人

と詠んだ。同時の作であらう。舟の出入こそあれ、いづれも眺望の敍景で、同趣同調のものである。抑も淀川の下流は縱橫に分派して、今の大坂附近は多くは島嶼を成してゐたのだから、眺望は頗るよい處であつた。鼻の

支へたやうなしはつの山路を越えてくると、眼界俄に豁然として、展開された一幅の活畫圖、萬頃の蒼波、幾處の緑村島嶼が、歴々と指點される。かくてはかない棚なし小舟も、端なく詩人の一顧を得て、漕ぎ隠れるまでその行方の諦視されたのは幸である。靜中の動、景致が想ひやられる。

神あそびの歌

とり物のうた

かみがきのみむろの山の榊葉は神のみまへに茂りあひにけり

釋 ○神あそび　神慮を慰める爲に、神祭の時に奏する歌舞の遊をいふ。即ち神樂である。○とり物　神祭の時舞ひはやすとて、手に採り持つ物である。榊、幣、杖、篠、弓、劍、鉾、杓、葛の九種がある。この採物に就いて、一々謠ひはやす歌章がある。これより以下の歌どもが即ちそれである。○みむろ　橘守部いふ、「又みもろといふ、御杜の義。神籬をヒモロギと訓めるも同じ」と。面白い考とは思はれるが、姑く舊説の如く御室と解いて、神の社殿の事とする。御室の山は即ち社殿のある山の意。どこの社地の山でもいはれる。飛鳥の神岳、又は三輪山を、御諸山とさしていふとは別である。○榊　榊は和名鈔に龍眼木を訓み、新撰字鏡には、杜をも訓んである。眞淵は、「榮樹の意なれば、何にまれ常磐木の稱にて、特に榧をいへるならむ」といつた。荒木田久老は「樒か」といひ、田中道麻呂は「北國にて、ミシヤク〱キ、ビサゴ、濃尾附近にてチサカキ、ビサカキ、シラシヤケと稱ふる物といひ、宣長も、これを賛けて、「伊勢にてミサカキといへるに同じ。和名鈔に、柃、比左加木」とある物といひ、本居太平は、「今いふ榊の木なるべし」といつた。字鏡に、杜を佐加木と訓んである

ので思ふと、神社に神木として齋いたのは、大抵常磐木である。されば、字義は眞淵の說に從ふがよく、しかも橿とのみ定めたのはわるい。

大意　神のましますお社の山の榊の葉は、まことに仕合はせなことで、神樣のお前に茂り合つてゐるわい。

評　榊を讃歎したのである。これ卽ち間接に神威を讃歎した事になる。

初句、六帖に神垣やとある。

○

霜やたびおけど枯れせぬ榊葉のたち榮ゆべき神のきねはも

釋　○やたび　八度。數多きことを、八の數に換へていつた。○榊葉の　榊葉の如くの意。○神のきね　神樂歌祕抄にかむなぎとある。「きね」は、眞淵は、覡女(ネキメ)の轉といひ、守部は禱部(ネギベ)の轉といつた。後說の方巫覡を通じた說だから當つてゐる。宣長の木根ならむといひ、太平の城根ならむなどいふ說は從ひ難い。さて神樂には八處女(ヤヲトメ)とて、八人の巫女があつた。

大意　霜が幾たび置いても枯れぬ榊葉のやうに、行末立ち榮えさうな巫女であるわまあ。

評　八處女のいとうるはしいのが立ち舞ふのを見て、その行末を思ひやつて祝つたので、御前の榊を借りて序とした。かういへば、自然間接にその祭神を祝ぐことになる。以上二首は、榊をとつて歌ふのである。

、二句、高野切におけどもかれぬ、「はも」六帖にかな、高野切かもとある。

○

まきもくのあなしの山の山人と人も見るがに山かづらせよ

釋 ○まきもくのあなしの山 「まきもく」は巻向(マキムク)の轉音。巻向山は大和國式上郡にある。大和志に「峰を弓月(ユツキガ)嶽といひ、南を檜原(ヒバラ)山、北を穴師(アナシ)山といふ」とある。○山人 山住の人をいふ。太平が、「西宮記、北山抄、江次第などに、神事の時、衛士を以て山人と爲して、事を執ること見えたり。こゝのもそれなるべし」といふ説は、この歌に與らない。○がに かのやうにと譯す。がねの轉語。○山かづら 山住の人、日蔭(女蘿)を頭飾とすることがある。「かづら」は髪連の義で、髪飾に巻くをいふ。萬葉に「足曳の山下日影かづらける」、「足曳の山蘰の兒」、「足曳の山蘰かけ」の類がそれである。神事に從ふ者も、日蔭を冠などにかけた。又、組絲にしてかけるのにも、日蔭の名がある。紀記、天岩戸の段には眞析を鬘として日蔭を手繦とすと見えた。それがうつつて、神事に日蔭を飾に付ける事となつたのである。

大意 神事を勤める人達よ、あれは巻向の穴師の山の山人であると、よその人も見るほどに、山蘰をしなさいよ。

評 山蘰をするようにとそれ程勸めるのは、卽ち神事をいそしめといふ諷意である。穴師あたりは今は樹木もなくなつて、からりとした山里であるが、萬葉あたりの歌を見ると昔は森林地帶であつた。されば、「まき向のあなしの山」に山深い土地の趣を思はせ、さうした地方の山賤の風俗を思ひ寄せて、「山人と見るがに」といつた。この誇張とかの諷意と、「山」及び「人」といふ語を反復した、疊音の諧調と相俟つて、頗る詩味のうごくを覺える。さてこれは神樂の葛(カヅラ)の歌である。

初句、神樂譜にわぎもこが、四句、同書に人もしるべく、六帖に人も見るがねとある。

○

み山には霰ふるらし外山なるまさきのかづら色付きにけり

釋 ○外山　奥山に對して、端にある山をいふ。○まさきの葛　二說ある。一は、「薜荔といふもので、本草綱目に、「四時凋まず、厚葉堅强なるものにて、花咲かずして實なるとある物なるべし」とあり、二は、「蔦の一種にて、其の葉は南天に似たるものにて黑みあり。冬のはじめに、古葉の紅葉して美しきものなり」とある。こゝに「正木のかづら色づきにけり」などあるによれば、常磐木ではないから、後說を可とする。されば名義も、常に綠色だから眞幸の意とする說は成り立たない。その莖を眞析に析いて、物に用ひるより出た名であらう。正木の借字であることは勿論である。

大意 奥山にはもう霰が降るらしいわ、なぜなれば、この外山にある正木の葛が色づいてきたわい。

評 外山の葛に、奥山の霰の排對である。かう外山に對へたのだから、「み山」もその本義より轉つて、奥山の意と聞きなされるのは、自然のことである。時雨ともいはず、霰を取り出したのは、殊にすさまじい山中の景氣を點出するに有効である。但こればかりの想像は、格別奇とするにも足りないが、氣韻が天成で、詞にすこしの塵垢がなく、及び難い高調である。神樂には、上のとおなじく葛に歌ふ。蓋し日蔭と眞析と竝べ歌ふのである。又、庭燎の時にもこれを歌ふ。紅葉の色を、燎の色によそへてゞあらう。

○

陸奥（ミチノク）のあだちの眞弓わがひかば末さへよりこしのび〳〵に

釋 ○あだちの眞弓　あだちは今の岩代國安達郡である。延喜六年までは安積郡の一部で、安達郷であつた。ここより良弓を貢したものであらう。萬葉には、あたゝら眞弓と詠んである。よつて思ふに、あたゝらの約つたあたらに、安達の字をあてたものか。達の字は、タルとよむから、タラにも通ふのである。さらばあたらの眞弓であらう。近藤芳樹も、安達の眞弓は、安達太郎（アタタラ）眞弓の唱へひがめなり」といつた。○末さへよりこ」「よりこ」は寄り來である。弓を引けば、本末が自分の身の方へ寄るものなので、寄せた。

大意　あの陸奥の安達の眞弓をひけば、本末がこちへ寄つて來るが、そのやうにあの思ふ人も、自分の引くまゝに、今は勿論末さへかけて靡いて寄れよ、人目に立たぬやうにサ。

評 初二句は序である。眞弓を借りての比喩と、「わがひかば」の辭樣とで、作者は男と知られる。執り馴れた弓によつて、その纒綿たる情思をつくして、その曲折に味ひがある。疎句を以て結束したのは、この卑俗に陷らぬ所以であらう。さて神樂では弓の歌である。

二句、神樂譜天治本にあづさの眞弓、高野切、元本にあだしの眞弓、四句の「末さへ」を同譜にやう〳〵、神樂歌祕抄には、やうやくとある。

○

わが門の板井のしみづ里遠み人し汲まねばみくさ生ひにけり

釋　○板井　板を井筒とした井。○みくさ　水草。

大意　自分の門口の板井の清水は、里ばなれてあるので、人がサ汲まぬによつて、あゝ水草が生えてしまつたわい。

評　眼前景致口頭語、平々敍し去つて、何となく風趣がある。但この歌を味ふ準備として、まづ往時の生活狀態を知る必要がある。井はこれ里を成すもとで、あの市井の語もこの意を表したものである。よい井戸があれば一里はうち寄つて汲んだもので、それ故門邊に井はわざと作つた。然るにこの寂しい一つ家の門井は水草が生えるまでに汲み手がない。折角の清水をとあたらしむ情が搖曳してゐる。神樂では、杓(ヒサゴ)の歌である。杓は水を汲む器だからであらう。

初句、六帖にわが宿の、結句、神樂譜に水さびにけり、同一本にみさびゐにけりとある。

ひるめの歌

さゝのくま檜のくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む

釋　○ひるめ　天照大神を、紀に「大日靈貴(オホヒルメムチ)」と申すことが出てゐる。「ひるめ」とばかりでは、餘りに無禮で、體を得ない。けれど神樂譜にも、晝目歌の題目あれば、譜のまゝに書いたものと思はれる。藤原敎長が、大嘗會の米籔女(コメヒルメ)の歌なりといつたのは附會である。○さゝのくま　解し難い。この歌萬葉に、

左檜(サヒ)の隈檜の隈(クマ)川に馬とめて馬に水かへわれよそに見む　（卷十二）

とあるを歌ひかへたものである。左檜の隈の「左」は接頭の美稱、「檜の隈川」は大和國高市郡檜隈鄕の小川。

大意 あの檜の隈川に駒をとめて、しばしその駒に水をお飼ひなされ、さらばその間もせめて、貴方の後影をなりとも見ようわ。

評 初二句は、「檜の隈」を折り返して歌つたのを、辭樣が古體なので、後人その意を心得かねて、下の檜の隈に對して、上を篠の隈と思ひ誤つたらしい。既に源氏物語葵の巻にも、「さゝの隈とも云々」と書いてある。

結句を、景樹が「聞えず」といつたのは、自分の聞き得ないのである。「影」を水に映つた影と思つたものか。これは、その後手(ウシロデ)の影である。混じてはいけない。後朝の空しめやかに袂をわかち、駒に扶け乘せられつゝ遠ざかり行く人の後影、步一步よりも小さくなつてゆく。惜しや名殘をしや、行手に流れる檜の隈川、あの人もし心あらば、そこにしばし駒に水飼つて、後影なりとも見せて下さいと誂へたのである。然し大きな距離があるのだから「しばし水かへ」といつた處で、先方に通ずる譯でもない。そんな尋常な道理などは、この熱情の前にはわからなくなる。否なくなつてしまふ。その痴意その情、實にいぢらしさに堪へない。更に氣分の上から見ると「しばし」と限局したほど內輪につゝましやかな趣からは、結句も本文の通りがよい。われと力強い箇人的執着を表現することは無用である。萬葉の歌が傳誦の間に轉化されたに就いても、やはり時代の約束はのがれないで、平安朝の製作らしいものに變つてゆくのが面白い。

この歌必ず大口靈神の御祀に歌つたものならば、「影をだに見む」を、大神の御影をだに見たいと希つた意に擬へて歌つたものだらう。

結句、元本によそにだに見むとある。

かへしものの歌

青柳をかた絲によりてうぐひすの縫ふてふ笠はうめの花笠

釋 ○かへしもの　催馬樂に、呂の律になるを反聲(カヘリゴヱ)といふ。まづはじめに、「眞金ふく吉備の中山」などの呂歌をうたつて、その後、律にかへして、この青柳の歌をうたふので、この稱がある。これから以下は催馬樂の歌章である。○縫ふてふ笠　春上「鶯の笠にぬふてふ」の條に既出。○うめの花笠　梅の花を、笠に譬へていつた。

大意 青柳の絲を片絲に縒つて、それで鶯が縫ふといふ笠は、どんな笠かと思へば、梅の花笠であるわサ。

評 柳の條を、絲に譬へることは常套である。それを「片絲に縒る」といふは、風に片靡きする狀をながめての事であらう。「鶯の縫ふ」とは、今も彼方此方と筋違はしてあるくを、縫つて行くといふに同じく、鶯の枝から枝に木傳ひあるくをいふ。その縫ふといふ語の聯想から、笠は縫ふ物なので、この鳥は柳の絲して、梅の花笠を縫ふと巧みなした。「梅の花笠」は、花を飾つた笠或は派手な笠を、既に花笠といふ成語のある處から、それに「梅の」と冠らせたので、松の緑子と同一の辭様で、作者の造語である。梅柳に鶯をあへしらひ、しかもこの笠縫の妙趣向さへ添へたので、すべて花やかに面白い。殊に陽氣な春の諸物として面白い。けれど「てふ」の語がどうも妥貼でない。この歌よりも以前に、鶯の縫ふと續けた古歌が必ずあつたので、それを承けたものと思はれる。はた又、もと縫ふなる笠はなどあつたのを、催馬樂に歌ふについて、調子にまかせて、「てふ」と歌ひかへたかといふ疑もある。さうした類例は謠物にまゝある。

まがねふく吉備の中山帶にせるほそたに川のおとのさやけさ

この歌は、承和の御べのきびの國のうた。

釋 ○まがねふく 「ま」は美稱。「かね」は廣く金屬をさしていふ。舊註は鐵なりといひ、契沖は黄金なりといつたが當らない。「ふく」は、鞴で鑛物を吹き分けるをいふ。「まがねふく」は吉備の枕詞に用ひてある。吉備の國には昔からおもに鐵を產する鑛山があつた。○吉備の中山 吉備は三備の總稱であるが、中山は備中國吉備郡眞金村にある。方角抄に、「備前備中の國境なり、吉備津の宮あり。山はさして高からず、松むら〳〵あり。今細谷川といふ水も、この山の腰なり」とある。○ほそたに川 細い谷川の意。川の名とするのは後世轉つたのである。卽ち木下長嘯子の九州紀行に、「細谷川のほとりに至りて、その水上にのぼりて見れば、小き池の中より、たえ〴〵いづる清水なりけり。水無月の頃にも絕ゆることなしとなむといへる。その谷川の廣さ、笨築の長さばかりありけり」とあるは、それである。○左註にいふ承和は仁明帝の年號。御べは大嘗の轉訛である。續日本紀に、この御代の天長十年十一月の大嘗會に、「主基の國備中、悠紀は近江」とある。その主基方の歌である。

大意 この吉備の中山が、山の腰に帶して居る一筋の紐と見える、細谷川の水の音のさわやかさよ。

評 萬葉集卷七、

おほ君の三笠の山の帶にせる細谷川のおとのさやけさ

の初二句をかへて、大嘗會の主基の備中國の歌としたのである。眼目は「帶にせる」の一句にある。山の腰といふよりの聯想らしい。昔の帶はその幅が狹くて、殆ど紐のやうな物であるから、細谷川をば帶と見るは自然

で、歌の姿も調も細くさやかである。

○

みまさかや久米のさら山さら〳〵にわが名はたてじ萬代までに

これは、水のをの御べの美作國のうた。

釋 ○みまさかや「や」は間投辭。○久米のさら山　美作國久米郡佐良山村。もとの久米南條郡佐良莊にある山である。○さら〳〵に　新にといふに近い。今の俗にいふとは意がかはつてゐる。○左註の水のをは清和帝の御號。三代實錄に「貞觀元年十一月大嘗會、悠紀三河國、主基美作國」とある時で、卽ち主基方の歌である。

大意 美作の久米の皿山の名のやうに、今更に自分の戀するといふ名は立てまいぞ、それは何時までもサ。

評 これも、古くさうした歌のあつたのを用ひられたらしい。すると上の「吉備の中山」のやうな具合に、初二句の序の如きは、或はこの場合にかなふやうに、歌ひかへたのかもはかり難い。四句までは戀歌のやうで、結句が全く殊つた趣である。四句は催馬樂に、わが名はたゝじとある。これはわが名は萬代までもいひ繼がれようの意だから、戀歌ほどの不調和さはない。しかしもとはやはり戀歌であらう。「さら山さら〳〵に」のさわやかなの語響の反復は、この歌に頗る陽氣な快感をもたせる。催馬樂に謳はれたのも、さうした理由がその一因をなしてゐると思ふ。

○

みののくに關のふぢ川たえずして君につかへむ萬代までに

これは、元慶の御べの美濃のうた。

釋 ○關のふぢ川　美濃國不破郡の不破の關を流れる藤川。今、藤子川といふ。小島の口遊に「關の藤川は、その名もなつかしければ、言問ひ侍りし。名はことごとしけれど、さしもなき小川にて、萬代までの流ともわかれず。されど絶えぬためしはいと頼もしくて、云々」。○左註の元慶は陽成帝の年號。三代實錄に「元慶元年十一月大嘗會、悠紀美濃國席田郡。主基備中國都宇郡」と見え、卽ち悠紀方の歌である。

大意　美濃の國の關の藤川の流の絶えずしてあるやうに、我等も君に仕へ奉らうわ、萬年までもサ。

評 この御時のは席田郡であるのに、不破郡の關の藤川を詠んである。眞淵はこれを訝つて「席田郡にも關の藤川あるか」といつたのは、一往尤もである。地理的思想の缺如せる時代の歌人だから、或は詠みそこねがないとも測られないが、なほ思ふに、これは大やうに美濃の國の歌として詠んだのであらう。下句、平凡ではあるが古調である。上句は或は作りかへたものか。

元慶はこの集撰者達の未生以前であるが、時代も近いし、況や大嘗會は頗る重い儀式だから、その作者が記錄にない筈がない。これらの點から見ても、その古歌の轉用であることが諾かれよう。

○

君が代はかぎりもあらじ長濱のまさごの數はよみつくすとも

これは、仁和の御べの伊勢のくにのうた。

釋 ○長濱　伊勢國員辨(ヰナベ)郡。○よみ　數をよむは卽ち數へることである。○左註は三代實錄光孝帝の大嘗會に、「元慶八年十一月、悠紀伊勢國員辨郡、主基備前國和氣郡」と見え、これは悠紀方の歌である。

大意　君の御代は、何時までといふ限りもあるまい、名さへ長濱といふこの濱の眞砂の數は、たとひ數へつくすといふともサ。

評　序文にひいた「わか戀はよむともつきじありそみの」とある歌の下句は、これに同じい。又、賀部、「わたつ海の濱の眞砂を數へつゝ」と、著想が同じである。あの歌から奪胎したのであらう。詞もうるはしく、聲調も滑らかとなつた。たゞその格調が卑くなつてくるのは、やむを得ない。「長濱」は固有名詞であるが、長の意がいよ〳〵眞砂の無數なことを象徵する。なほ賀の「わたつ海の」の條の評を參照されたい。

又、續後拾遺集に、仁和の御時の大嘗會の悠紀方伊勢國風俗歌「伊勢の海の渚を淸み云々」を擧げて、作者を大伴黑主とあるので、契沖は、これをも黑主の歌と定めた。

おほとものくろぬし

あふみのや鏡の山をたてたればかねてぞ見ゆる君が千年は

これは、今上の御べのあふみの歌。

釋 ○あふみやのや　「や」は間投の辭。○左註の今上は醍醐帝。その大嘗會は寛平九年十一月。この頃は、悠紀には、近江の國を用ひられる定例となつた。

大意　近江の國にまあ、鏡山といふ山が立てゝあるによつて、前以てサよく見えるわ、君が御代の千年で御座る

ことは。

評 鏡によつた著想は、雜上、

鏡山いざたちよりて見て行かむ年へぬる身はおいやしぬると

と同じて、これはや丶鏡を重く取りなして、山をたてたと擬態的にいつたのが面白い。鏡は立て丶見るものだからである。作者は近江の國で歌詠むといはれた人なので、この風俗歌仕うまつつたものと見える。上の御べの歌ども皆作者の名がないのに、こればかりあるのは、全く當代の事ではあり、作者もたしかだからである。蓋しこの歌の外は皆古歌を取り繕つて仕立てたものらしいから、作者と名づくべき作者はないのである。

東歌

みちのくうた

あぶ隈に霧たち渡り明けぬとも君をばやらじまてばすべなし

釋 ○東歌（アヅマ） 東國の歌の義。この東國は廣義の東國である。これも諸物に用ひられたのである。○あぶ隈 あぶくま川。阿武隈、阿福麻、逢隈の字をあつ。源を磐城に發し、岩代を横流して、陸前の亘理郡に至つて、海に入る。

大意 阿武隈川に霧が立ち渡つて、夜が明けたりとも、思ふ人をばやるまいぞ、やつてしまつて、又來るまでを待てば、その間が何とも仕方がないわ。

評 「霧たち渡りあけぬ」は夜明の景色で、川波の上などには、わけても霧の立ち渡るものである。男が女の家か

らは、なるたけ曉に早く歸るのが、この時代の常習慣で、女の飽かぬきぬ〳〵の別をつらがる餘り、曉はさておき、あの逢隈の川に霧が白く見えるほどの朝になつても貴方は歸すまいといふ。この聞分ない無理解が、男に取つては又實にあり難い情合なのである。況や結句の「まてばすべなし」の單句、實に千鈞の力がある。戀に上氣せた女心の術なさが見え、その鼻聲にダ、を捏ねて甘へてゐる態度が目に見るやうで、爲に全首無窮の情味が涌いてくる。龍尾一たび掉へば鱗甲悉く竪つといふにちかい。四五の句ィ韻を踏んで排對したのは、諧調であるのみならず、その響が凄涼で、沈痛の感を搖曳せしめる効果がある。定家の密勘に、

「凡此部歌、與日月懸、與鬼神爭奥、非短慮所及」

と激稱したのは、流石に一隻眼を有つてゐる。

二句、今本にたちくもりとある。本文は一本の方に從つた。四句、六帖にせなをばやらじとある。東歌としては、東國の俗語たるせなを用ひる方が面白い。勢語にも、陸奥の女がせなと詠んだ歌がある。

○

みちのくはいづくはあれど鹽竈の浦こぐ舟の綱手かなしも

釋　○いづく　いづこと同意に使つた。○綱手かなしも　綱手は、こゝでは曳舟の綱をいふ。「かなし」は、感哀の甚しさをいふ語で、こゝは面白さの感興をひくをいふ、悲しの意ではない。「も」は歎辭。

大意　奥州は、どこにも面白い所があるけれど、別してこの鹽竈の浦を漕ぐ舟の綱手を曳いてゆく景色が、面白いことであるはまあ。

評 思ひやつて見れば、誠に面白い景色である。しかし、その詩境の内容の敍寫を怠つて、輪廓をのみ擧げたのは慊らない。

六帖に、二句いづこはとある。又四句を籬が島のとあるはわるい。

○

わがせこを都にやりてしほがまの籬が島のまつぞこひしき

釋 ○籬が島　鹽竈の浦にある島嶼の一。○まつ　松に待つをかけた。

大意 わが夫を都へ出しやつて、何時戻られることかと、鹽竈の浦の籬が島の松といふ名の、待つて居ることがサ、さても〳〵戀しいことであるわ。

評 陸奥女の閨愁をのべたものである。三四の句は、「待つ」にかゝる序ながら、「都」との對照があつて、一別千里、兩地空しく相思ふ趣も見えるやうだ。殊に誘惑の多い都に大事な人を遣つた事は、甚しい不安で、餘計に待ち焦れる心持が見える。惜しいかな、「戀しき」は露骨で、又妥當でない。されば、同想の同型なる萬葉卷十四、

わがせこをやまとへやりて鬚刺足(マツシタス)柄山の杉の木のまか

に遠く遜る。「籬が島の松ぞ」の彫技の如きは、何でもない。

結句、六帖にまつは苦しもとある。

○

をぐろ崎みつのこじまの人ならば都の苞にいざといはましを

釋 ○をぐろ崎　陸前國玉造郡川渡村に小黑崎といふ地がある。或はそれか。○みつのこじま　三つの小島。小黑崎を同上の地とすれば、そこの江合川の川中に同名の島があつたが、明治四十三年の洪水に流失した。

大意 あの小黑崎にある三つの小島が、もし人であるならば、京へのみやげに、さあ來いといつて連れようものを、人でない故それもならぬが、殘念であるわ。

評 この面白い景色を、こゝに遺して置くのは惜しいことよの餘意がある。この餘意を、諸註都人に見せたしとまで解いたのはいひ過ぎてゐる。小黑崎三つの小島、どんなにかいゝ景色であつたらう。島を土產にしようの著想、何といふ詩的であらう。「人ならば」は分別に住する嫌ひもあるが、人ならぬ故いざともいひ難いの意を反襯して、苞にも出來ぬ歎聲を深からしめる。すると却つてこれが主眼の句で、一首の性命は、全くこゝに係かつてゐる警語となる。作者は京人であるに違ひない。伊勢物語に、

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

の條で、田舍女の人らしくないので、連れても歸れないのを歎じた趣に作つたのは、例のこの物語の常套で、こゝの趣には不用なことである。

○

みさぶらひ御笠とまをせ宮城野の木の下露は雨にまされり

釋 ○みさぶひ　御侍よの意。御侍は貴人の家來をいふ。○御笠とまをせ　御笠を召し給へと申せの意。○宮城

野　戀四「宮城野のもとあらの小萩」の條に既出。

大意　御家來衆よ、それお笠をお召しなされと申し上げられよ、この宮城野の樹蔭の露は滋くて、雨よりもきつう御座るわ。

評　まことに宮城野は仙臺市の東のはづれの原野で、今も木茂き昔の俤の一部を殘してゐる。いにしへの木の下露は、いかにも滋かつたものだらう。鄙には珍しい狩衣姿の貴人、指貫のそば取り給ふもたゆげに、野を分けわびさせ給へるに、御笠もち、御馬曳きつれた侍共、萩の露ふみしだきつゝ出て來る光景は、宛たる一幅の畫ではないか。蓋し守(カウ)の殿の御出遊であらう。この歌の口氣で推すると、作者はその御行列を拜みに出たみちのく人であらう。「露は雨にまされり」といふは既に誇張なのを、更に御笠を取り出して、そを事實にしたのは、空中樓閣に金碧を粧成したものである。この妙不可思議力、何人か魅せられぬものがあらう。初二三句に、ミの頭韻を藏いたのは、故意か無心かは知らぬが、聲調の諧ふことは事實である。

○

もがみ川のぼればくだる稻(イナ)舟(フネ)のいなにはあらずこの月ばかり

釋　○もがみ川　羽前の大河で、最上郡に入つて、この名がある。下流は酒田の港に注いで酒田川と呼ぶ。○稻舟　刈稻を積んだ舟で、これは正税を國衙に運ぶ舟である。いにしへは、稻何束といつて、穗付のまゝその正稅を納めた。○いな　否。○この月ばかり　下に待ての語が略かれてある。

大意　最上川をのぼるもあればくだるもある稻舟の名のやうに、否といふではない、しかし、この月中だけは

障があつて、逢はれませぬわ、お待ち下さい。

評 最上川は日本三急流の一と稱される。さうした河上を秋冬の交、正税の稻舟が追ひすがひ、國府まで上りくだるさま思ひやられる。さてそれを序とした。急流だから上れば忽ちくだるの意と見てもわるくないが、事狹くて、をかしくない。元來稻舟のいなを反復するのが主だから、いづれにしても「のぼればくだる」は輕く見るがよい。さてかう反復した序が「いなにはあらず」の意を強く表示し得て、相手方の心を取るに、十分の力がある。まづ一度背諾の意を表して置いて、さて本題に入つて「この月ばかり」は否と表裏の落着を見せた紆餘曲折の妙、殆ど言語に絶してゐる。結句の造語頗る簡淨である。なほ思ふと、「この月」は婦人の月事を下に含んだものか。さらばこの障を過してのち逢はうの意となる。これは試にいふのみ。又、全首の語調が、いたく促迫してゐるのに注意されたい。音數の排列を案ずると、

初句(三二)、二句(四三)、三句(四一)、四句(四三)、五句(四三)

といふ組織で、句々促調でないのはない。この急き込んだ調子は、男にさらばなど怨みられて、あわてゝ辨疏した趣に聞きなされる。

○

君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山波もこえなむ

釋 ○あだし心　空々（アダ）しい心。○すゑの松山　冬「浦近くふりくる雪は」の條に既出。なほ思ふに、陸前國桃生郡に、須江といふ山村がある、海岸を距ること一里半ばかり。以前陶物（スヱモノ）造りの居つた所で、もとは、すゑとい

つたのを、いつか假名の違つたのであらう。果してそこなら、波をいふにも由縁がある。

大意 貴方をさしおいて、他心(ホカ)を私が持つたら、その時こそこのすゑの松山を、浪も越える事がありませう。

評 間違つてもすゑの松山を波の越すことはないから、私が仇し心持つこともないと御承知下さいの餘意がある。「波も」は、人の越えるに對へた。すべて盟誓には、常住な事物を提擧して、不渝不變の意を立證することが常手段である。山厲河帶の語は勿論、日本紀に、新羅人の誓に「東の日西に入り、あれなれ川のさかしまに流るる時まで渝らじ」といつたのも同じい。男の方から異心でもあるかのやうに疑つて來たのに對して、いゑ決してそんな事はと、眞實をうち明けた貞潔の語で、すでに情の美に禁へぬうへに、「波もこえなむ」の婉語を加へた。「君を」と「わが」の相對は貼密過ぎるが、非常に切なる深い情愛を見せるには有力である。絶唱。

結句、元本にこしてむとあるはわるい。

さがみうた

小よろぎの磯たちならし磯菜つむめざしぬらすな沖にをれ波

釋 ○小よろぎの磯　雜上「玉だれの小瓶やいづら」の條に既出。○たちならし　踏み平(ナラ)すこと。○磯菜　磯つきの海草をすべて稱する。○めざし　髪を切禿にした兒女の稱。髪が短くて目を刺すほどなのでいふ。篇の名とするのはわるい。○をれ　居れの命令格。折れの意では無い。

大意 小淘の磯に出て、あちこちとあるいて磯菜を摘む、あの子供を濡らすな、これ浪よ、さう磯へ立つて來ずに沖の方に居なさい。

評　海人の子供が磯わたりして、若布など摘むさまの面白く、寄せて來ては碎け散る波に濡れなどする樣の、あぶなさうにも可愛さうにも見えるので、そちらに退き居れと、波に命令した擬人のあつかひ、凡想を超えたもので、いかにもやさしい情緒がほの見える。詩境また畫である。「磯」の重複などは問題にならない。

ひたちうた

筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし

釋　○筑波根　雜下「つくばねの木の下毎に立ちぞよる」の條に既出。○このもかのも　此面彼面。あなたこなたといふと同意に用ひる。○御蔭　お惠の蔭の意。俗にいふオカゲに同じい。

大意　筑波山のこなたおもてにも、あなたおもてにも、木の蔭はおびたゞしくあるが、お惠のあつい君のお蔭にまさる蔭はないわ。

評　筑波山は關東の平野に特立して、四方からその山容を仰ぎ得られることは、なほ芙蓉峰の八面玲瓏たるに似てゐる。されば、彼れには彼方おもて此方おもてをいひ、此れには「このもかのも」をいつてゐる。景樹が、「女神男神とて、同じさまなる高根の立ち並びたれば、このもかのもといへり」と解いたのは、この實境を知らないからである。この山、奈良時代には鷲さへかゝないた木繁き山で、今も樹木鬱蒼たる所なので、「蔭」を取り出したので、君の御蔭から、筑波の樹蔭を聯想し、この同音異意義の二語を全然混同して比較した沒理趣が、詩味の素を成してゐる。遂に「ます蔭はなし」の斷案を下すに至つて、いよ〳〵詩的である。「このもかの

も」の疊音、「蔭の」語の三疊は、いよ〳〵諧調となつて、聲響またよろしい。

○

筑波根の峰のもみぢ葉おち積りしるもしらぬもなべてかなしも

大意 この筑波嶺の紅葉が、麓に落ち積つたのが、面白くてをしまれるやうに、誰れ彼れなしに、悉く親しく愛せられるはまあ。

評 上句は、「かなしも」へかゝる序であるといふ宣長の説に從つておかう。但この歌のみでは、事相漠然たる感がする。しひて評しない。

かひうた

かひがねをさやにも見しがけゝれなく横ぼりふせるさやの中山

釋 ○かひがね 甲斐が嶺。甲州の山を稱する。○さやに 鮮かにの意。○しが 願望の辭。○けゝれ こゝろの轉訛。東國の方言である。金槐集に、けゝれ木とよみ、甲斐人は、今も九日をケ、ヌカといつてゐる。○横ほりふせる 横たはり臥せるの意。これも東國の訛言であらう。○さやの中山 今、さよの中山といふ。遠江國小笠郡、日坂峠と金谷峠との間、もとの佐益（サヤ）郡のなからにあつたので、この名がある。

大意 故郷の甲斐が嶺をば、ありありとあざやかに見たいわ、それに心もなく、あのやうに横たはり臥して、目の前をふさいで居る佐夜の中山であることよ。

評 都にのぼる甲斐人の、遠江まで來て、故郷の方を振り返つて見たのか、それともまた都から歸つた甲斐人がこゝまで來て、故郷を望んだのか、それはまあいづれでもよい。空谷の跫音、わづかに一片の山影を望んでも、望鄕の歎を醫するに足るは、そこが人情である。それを、佐夜の中山が横ほり臥して、恰も墻に向つて立つてゐるにひとしい。こゝに至つて、佐夜の中山を「けゝれなし」と罵らざるを得ない。舌だみた往時の甲斐人の風貌が眼に見えるやうだ。

三句、高野切にけゝらとある。四句、顯註に、一本横ほりくせる、又の一本横ほりこせるとあると見えた。ともに「ふせる」の訛で、心をけゝれといふ類の甲斐の方言と思はれるから。元本横ほりこやるとある。

甲斐がねをねこし山こしふく風を人にもがもや言(コト)づてやらむ　○

釋 ○ねこし　嶺越し。「越し」はあなたへも此方にもかけていふ。萬葉集巻一に「山越の風を時じみぬる夜おちず」とあるは、こゝとは反對に此方に越すのである。○人にもがもや「がも」は願望の辭。「や」は歎辭。

大意 峰をも越し山をも越して、甲斐が嶺を吹いてゆく風を、どうぞ人にしたいものだわ、さらば、都へ言傳をしてやらうに。

評 京より下り居る地方官吏などの作か。日夜鄕愁に禁へず、さりとて音問の便りを出す傳(ツテ)さへなくてわび居る時、たまたま山風が重疊した峰巒を吹きならしつゝゆくのを見て、風の便りを思ひ寄り、「人にもがもや」と歌ひあげた。郵便制度のある今日とちがひ、往時は音書の交通が非常な不便で、一々使を仕立てるか、或は幸便

に托するかであつた。地方にもよりけりで、それが甲斐のやうな殊に不便な山國に入り込んでは、いよ〳〵思ふに任せぬ次第で、反比例に鄕愁は高まつてくる。向ふへゆくものなら風でも何でも言傳が賴みたい、如何にも迫つた心持が出てゐる。二句の漸層、つぎ〳〵吹き渡る山越しの風の趣が出て、甚だ妙である。
上の「三つの小島の人ならば」と同工の點もあるが、彼れは一時の逸興、これは永久な沈痛の響で、情味の長い點においてはこれが勝り、尖奇でよく人頤を解くは、彼れに及ばない。

いせうた

をふの浦にかたえさしおほひなる梨のなりもならずも寢て語らはむ

釋　○をふの浦　所在がたしかでない。顯註に、「志摩の國にあり。齋宮の御庄にて、梨を獻ずる所なり。伊勢志摩といひて、一つによめり」とあるに、姑く從ふ。○なりもならずも　成否の意で、嫁娶の定まるをなるといふ。梨の結實（ナル）をかけた。

大意　麻生（アフ）の浦に、片枝さし覆うてなる梨があるが、その梨のなるといふやうに、其方と自分も、表向の相談のなるならざるはともかくもまあ、一所に寢て話をしようわ。

評　地方的色彩と土俗的情調が動いて面白い。「寢て語らはむ」は、女の方で、貴方の思召はあり難いが、とてもこの緣は邪魔があつて成立の見込がありませんからなど、一應拒んだのを、貴女と私とさへ承知なら、そんな事は寢ての上の話と、一徹らしい男の氣持を現はしたものである。詞づかひは「なり」の三疊などで頗る調子がいゝ。上句は序であつて、「なり」にはかゝるが、「ず」にまではかゝらない。

冬の加茂のまつりのうた　　藤原敏行朝臣

ちはやぶる加茂のやしろの姫小松よろづ代ふとも色は變らじ

釋　○冬の加茂のまつり　十一月の臨時祭をいふ。加茂は四月が例祭である。十一月の臨時の祭を始めたのは寛平元年で、左近中將藤原時平朝臣を御使として、藤原敏行に東遊（アヅマアソビ）の歌を詠ましめられた事が、寛平の御記に見えてゐる。大鏡にも、これについての傳說を載せた。下の未の日試樂、下の酉の日にこの祭がある。加茂は下上二社があつて、下社は鴨高野兩水の合流點糺にあり、上社は更に鴨川の上流一里弱の神山にある。平安時代以降、祭といへば加茂祭の事となつた程で、平安京第一の官祭として頗る盛儀を極めたものであつた。

大意　この御神威のあらたかな加茂の社の御前の姫小松は、このうへ萬年を經るにしても、色は變りはすまいわ。

評　かやうな御神德で護らせ給ふ君の御うへは、申すまでもないの餘意がある。眞淵のいふ、「歌は、いさゝかも隱れたる事なく、且滯りたる所なく、詞は、まどかなる玉を見るが如し。この巻の終に置かるべき歌なり。そのうへ、今上の御父帝の、神の御告にて始め給へる祭の歌にて、限りなき御よろこびの事なれば、この巻のとぢめにせらるゝなり」と評したのは適評である。

この歌寛平御記によると、東遊曲に歌つたとある。東遊の歌は從來用ひた求子（モトメ）やその他の歌が澤山あるが、特に新作の歌を、はじめての臨時祭の記念として作らしめられたと見える。作者敏行の名譽思ふべしである。

二句、顯本、高野切、元本にかもの祭のとあるがよくない。

家々稱㆓證本㆒之本乍㆓書入㆒以㆑墨滅歌今別書㆑之

○これは、諸家藏の證本たるべき善本に書き入れられながら、墨で以て滅してあつた歌を抜書したのである。定家卿がこの校定本を作る時の所爲であるといふ。畢竟、證本といつてからが猶、まち〳〵で誤など多かつたに相違ない。まことに滅してよいのも見え、又滅してはどうかと思ふのも見える。「我妹子にあふ坂山のしのすすき」及び以下の歌どもは、必ず除くがよい。

○この部は釋のみを與へて、評語を多くははぶく事とした。

卷第十（物名）

ひぐらし　　　　つらゆき

杣人（そまびと）は宮木ひくらしあしひきの山のやまびこよびとよむなり

在㆓郭公下空蟬上㆒

釋 ○杣人　材木を樵る山を杣山といひ、樵る人を杣人といふ。○宮木　大宮を造るに川ひろ木材の稱。

評 この歌は、本集中の或者に優ること數等。この人の作中でも、いゝ方であらう。

勝・臣

かけりても何をかたまのきても見むからは焰となりにしものを

をかたまの木　友則下

釋 ○たま　魂。○から　亡骸（ナキガラ）。

くれのおも　つらゆき

こし時とこひつゝをれば夕ぐれのおも影にのみ見え渡るかな

忍草　利貞下

釋 ○くれのおも　和名鈔に、「懐香、一名懐芸、和名、久禮乃於毛（クレノオモ）」とある。○こし時　思ふ人の來し時。

おきのゐ　みやこじま　をののこまち

おきのゐて身をやくよりも悲しきはみやこ島べの別なりけり

からこと　清行下

釋 ○おきのゐ　○みやこじま　いづれも所在不明。伊勢物語に、「昔、みちのくにて云々、おきのゐみやこじまといふ所にて」とあつて、この歌がある。これは一處のやうに聞える。物名にかく詠むからは、おの〳〵別の處かも知れない。陸奥とあるも覺束ない。○おきのゐて　熾火（オキ）の著きゐて。○みやこ島べ　或は地名でなくて、都と島邊との意か。

意によつてついでると、誹諧の部に入るべき作である。

そめどの　あはだ　　　　あやもち

うきめをばよそめとのみぞ遁れゆく雲のあはだつ山の麓に

此歌は、水の尾のみかどの、染殿より粟田へうつりたまうける時によめる。桂宮の下

釋 ○そめどの　染殿は拾芥抄に、「正親町北、京極西二町」とある。忠仁公藤原良房の第であつたのを、清和帝外宮とせられて、貞觀十八年に行幸があつた。○あはだ　京都の三條より、逢阪山の方へ出づる所に、粟田山がある。○あはだつ　淡々しく浮き立つこと。○左註は、三代實錄、元慶三年五月四日の條に、太上天皇（清和帝）清和院より粟田院へ移り給ふと見えた時の事で、水の尾のみかどは清和天皇の御事。清和院は染殿とおなじと。

卷第十一（戀一）

「奥山の菅の根しのぎふる雪」の下

けふ人をこふるこゝろは大井川ながるゝ水におとらざりけり

釋 ○大井川　山城のである。

三四句、宗于集に、飛鳥川流るゝみをにとある。みをとあるが「水」より印象が鮮明である。

わぎもこにあふ坂山のしの薄ほにはいでずもこひわたるかな

評 ○わぎもこにあふ坂山　逢ふに、相坂をかけた。上句は序である。萬葉巻十一、わぎも子に相坂山のしのすゝき穂には咲き出ず戀ひ渡るかもの訛つたものであらう。

巻第十三（戀 三）

「こひしくば下にを思へ紫の」の下

犬がみのとこの山なるいさや川いさと答へよわが名もらすな

此歌は、ある人、「あめのみかど、淡海（アフミ）の釆女にたまへる」と。

釋 ○犬がみのとこの山　近江國犬上郡鳥籠山。○いさや川　犬上川のこと。○いさ　不知（イサ）の意。○左註の「あめのみかど」は聖武帝を申す。舊註には天智とある。

評 上句は序で、もし人が問はばいさ知らずと答へよ、わが名を知らすなの意である。萬葉巻十一、詠者不詳、狗上の鳥籠（トコ）の山なるいさや河いさとをきこせわが名のらすなの訓みちがへ否時調に轉化したもので、意は違はない。上句は序であるが、恐らく近江人ことに犬上人の作であらう。左註は據のない浮說である。

かへし　うねべの奉れる

山しなの音羽の瀧のおとにだに人のしるべくわが戀ひめやも

釋 ○戀三に、「音羽の山の」とあるを、「瀧」とかへたるのみ。

卷第十四（戀四）

「思ふてことの葉のみや秋をへて」の下

そとほり姫のひとりゐ、みかどを戀ひ奉りて

わがせこが來べき宵なりさゝがにの蜘のふるまひかねてしるしも

釋 ○そとほり姫の云々　日本紀允恭紀に、天皇、衣通姫を藤原の宮に住ませ給ひて、またく行幸ありて、姫のおはすやうを伺ひませるを知らで、この御歌よませ給へると見えた。但、三句以下「さゝがねの蜘のおこなひこよひしるしも」とある。○ふるまひ　擧動。さて、「蜘の出てくるは、人の來る前兆」といふ諺によつての作である。この事、戀五「今しはと思ひしものをさゝがにの」の條にいつた。しばく説明した如く、わが邦の結婚上の慣習として、男が女の許に通ふのがそのはじめであり、又普通であつた。こゝも帝のお出をお待して、蜘蛛の吉兆に衣通姫の鼠啼をなされたお作である。

「戀しとはたが名づけけむことならむ」の下

貫之

道しらばつみにも行かむ住のえの岸におふてふ戀わすれ草

【釋】○戀わすれ草　諼草(ワスレ)に、戀と冠せたのは、人忘草、憂さ忘草の類である。萬葉巻七、いとまあらば拾ひてゆかむ住の江の岸によるとふ戀わすれ貝を、すこし換へたのみで、この作者のしわざとも覺えない。

古今和歌集序

紀淑望

夫和歌者、託其根於心地、發其花於詞林者也、人之在世不能無爲、思慮易遷、哀樂相變、感生於志、詠形於言、是以、逸者其聲樂、怨者其吟悲、可以述懷、可以發憤、動天地感鬼神、化人倫和夫婦、莫宜於和歌、和歌有六義、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌、若夫春鶯之囀花中、秋蟬之吟樹上、雖無曲折、各發歌謠、物皆有之、自然之理也、然而神世七代、時質人淳、情欲無分、和歌未作、逮于素盞嗚尊、到出雲國、始有三十一字之詠、今反歌之作也、其後、雖天神之孫、海童之女、莫不以和歌通情者、爰及人代、此風大興、長歌、短歌、旋頭、混本之類、雜體非一、源流漸繁、譬猶拂雲樹生自寸苗之煙、浮天浪起於一滴之露、至如難波津之什獻　天皇、富緒川之篇報太子、或事關神異、或興入幽玄、但見上古之歌、多存古質之語、未爲耳目之翫、徒爲敎戒之端、古天子、每良辰美景、詔侍臣預宴莚者、獻和歌、君臣之情、由斯可見、賢愚之性、於是相分、所以隨

民之欲、擇士之才也、自大津皇子之初作詩賦、詞人才子、慕風繼塵、移彼漢家之字、化我日域之俗、民業一改、和歌漸衰、然猶有先師柿本大夫者、高振神妙之思、獨歩古今之間、有山邊赤人者、並和歌仙也、其餘業和歌者、綿綿不絶、及彼時變澆漓、人貴奢淫、浮詞雲興、艷流泉涌、其實皆落、其花孤榮、至有好色之家、以之爲花鳥之使、乞食之客、以之爲活計之媒、故半爲婦人之右、難進丈夫之前、近代存古風者、纔二三人、然長短不同、論以可辨、花山僧正、尤得歌體、然其詞華而少實、如圖畫好女、徒動人情、在原中將之歌、其情有餘、其詞不足、如萎花雖少彩色而有薰香、文琳巧詠物、然其體近俗、如賈人之著鮮衣、宇治山僧喜撰、其詞華麗而首尾停滯、如望秋月遇曉雲、小野小町之歌、古衣通姫之流也、然艷而無氣力、如病婦之著花粉、大友黑主之歌、古猿丸大夫之次也、頗有逸興而體甚鄙、如田夫之息花前也、此外氏姓流聞者、不可勝計、其大底皆以艷爲基、不知歌之趣者也、俗人爭事榮利、不用詠和歌、悲哉、雖貴兼相將、富餘金錢、而骨未腐土中、名先滅於世上、適爲後世被知者、唯和歌之人而已、何

者、語近人耳、義慣神明也、昔　平城天子詔侍臣、令撰萬葉集、自爾以來、時歷十代、數過百年、其後、和歌棄不被採、雖風流如野宰相、輕情如在納言、而皆以他才聞、不以斯道顯、伏惟　陛下御宇、于今九載、仁流秋津洲之外、惠茂筑波山之陰、淵變爲瀨之聲、寂々閉口、砂長爲巖之頌、洋々滿耳、思繼既絕之風、欲興久廢之道、爰詔大內記紀友則、御書所預紀貫之、前甲斐少目凡河內躬恒、右衞門府生壬生忠岑等、各獻家集并古來舊歌、曰續萬葉集、於是、重有詔、部類所奉之歌、勒而爲二十卷、名曰古今和歌集、臣等、詞少春花之艷、名竊秋夜之長、況乎、進恐時俗之嘲、退慙才藝之拙、適遇和歌之中興、以樂吾道之再昌、嗟呼、人麿既沒和歌不在斯哉、于時、　延喜五年歲次乙丑四月十八日、臣貫之等謹序。

（上文は、本朝文粹によつて是正した）

作者列傳

▽本傳は、すべて、作家の氏を捨てゝ、名によつて次第した。氏名なきものは、官名、或は稱呼を、もとのまゝに掲げた。

▽體裁の統一上、その事蹟の詳密に知られた人も、なほ簡約にしたがつた。

▽排列の次第は五十音圖の順によつた。

あ

あきみね　秋岑

美濃守紀善岑の子、六位。

あさやす　朝康

文室康秀の子。延喜中、大舍人大允、大膳少進を歷任す。文室を文屋と書くは通用。

あつゆき　篤行

平氏。從五位上與我王の二子。寛平五年、文章生に補せられ、大和伊勢の掾より、國司を歷任して、筑前守兼大宰少貳に至り、延喜十年正月卒す。

あつゆき　淳行

伊香子（イカゴ）氏。傳は未詳。

あまねいこ　洽子

參議春澄善繩の女。貞觀の頃、正四位下典侍となる。

あやもち

傳未詳。

ありすけ　有輔

御春氏。延喜中、左衞門權少志、同權少尉となる。藤原敏行の家人にて、河内の人とぞ。貫之の集に、兼輔の兵衞佐が、加茂川の邊にて、この人の甲斐へゆく餞宴をせしこと見えたり。

ありすゑ　有季

文室氏。三代實錄貞觀五年三月の條に、「散位從五位上文屋有眞爲二下總守一」とあり。有眞は、訓アリマなるべし。さて、マの平假名、末の字の草なれば、有末と書けるを誤りて、更に有季としたるか。

ありつね　有常

正四位下紀名虎の子。性清簪にして、儀望あり。少時仁明帝に侍奉したりき。官從四位下周防權守にいたり、元慶元年正月卒す。年六十三。

ありとも　有友

又有朋。紀氏。仁明、文德、清和、陽成の朝に仕へ、從五位下宮內少輔となり、元慶四年卒す。

い

いうせん　幽仙

右近將監藤原宗道の子、寛平七年律師となる。昌泰三年入滅す。仁和寺を建立して、別當たり。もと慈覺大師の弟子たりしにより、昌泰二年、延暦寺の別當になさる。

いせ　伊勢

伊勢守藤原繼蔭が女。七條后の宮人たる時、藤原仲平に通じ、又、宇多帝に寵愛せられ、寛平の末、皇子を誕すといふ。帝、位を退く時、伊勢また退きて、五條の里第に居り、敦慶親王等と通じて、女中務を生む。歌は當代女流の第一人なり。

いなば　因幡

因幡守基世王の女。基世王は、二品仲野親王の子なり。

いまみち　今道

布留氏。清和、陽成、光孝、宇多の朝に歷任し、仁和元年造酒正に、昌泰元

年三河介に任ぜらる。

う

うつく　寵

（くらを見よ）

うりんゐんのみこ　雲林院親王

仁明帝の皇子常康親王これなり。母は紀名虎の女種子。仁壽元年出家、貞觀十一年五月薨ず。雲林院は、この親王、その別業をすて、遍昭に付囑して、寺とせしところなれば、この號あり。

お

おきかぜ　興風

參議藤原濱成の曾孫、院藤太と號す。延喜のはじめ治部少丞、上野大掾、下總權大掾、同十一年相模掾に任ぜらる。彈琴の師たり、管絃を能くす。

おと　乙

遠江介壬生益成の女。益成は、元慶仁和の代の人なり。

おほより　大頼

三代實錄、元慶元年の條に、石川朝臣箭口朝臣等奏して、先祖の蘇我氏の稱に返りて、並に宗岳朝臣を賜はること見えたり。さては、宗岳はソガと讀むべく、ムネヲカとは訓むべからず。大頼は算博士なり。

か

かげのりのおほきみ　景式王

四品惟條親王の後なり。寛平九年、從四位下に敍せらる。

かちおん　勝臣

藤原氏。元慶七年阿波權掾に任ぜらる。

かねすけ　兼輔

右近中將藤原利基の子にして、兼茂の弟。從三位中納言に任ぜられ、承平三年二月薨ず。年五十七。加茂川の堤に家居せしより、世に堤中納言と呼ばる。

かねみのおほきみ　兼覧王

仁明帝の孫、國康親王の御子。神祇伯宮內卿正四位下にいたる。承平二年卒す。

かねもち　兼茂

右近中將藤原利基の子。寛平中讃岐權掾より藏人となり、延喜のはじめ、左衞門佐侍從、同二十三年參議左衞門督にて卒す。

かんゐん　閑院

延喜頃の人にて、命婦なりとぞ。

かんゐんのごのみこ　閑院の五の皇女

嵯峨帝の妃均子內親王といふ說もあれど、歌體を案ずるに、今すこし時代下れりと覺し。傳詳ならず。

き

きせん　喜撰

又其泉とかく。眞言宗の僧にて、山城國乙訓郡の人とぞ。宇治山に迹を匿せ

り。世に喜撰式（金針とも）とて、歌の疵弊をいへる書あり。僞書ならむといふ。

きのめのと　紀乳母

名は全子。嵯峨帝の孫源澄の妻にして、陽成帝の御乳母となり、元慶六年從五位上に叙せらる。

きよき　潔興

宮道氏。昌泰元年内舍人となり、保明太子の帶刀たり。延喜七年貫之にかはりて、越前權少掾となる。

きよき　清樹

橘氏。三代實錄に、仁和二年二月從五位下彈正少弼、のち阿波守となり、昌泰二年三月卒す。

きよゆき　清行

大納言安倍安仁の子。承和三年、文章生に補せられ、清和帝の代左衞門權佐、陽成帝の代右中辨、光孝帝の代陸奥守、宇多帝の代從四位上讃岐守に任ぜられ、昌泰三年卒す。年七十六。

く

くそ

源作が女。

くにつね　國經

權中納言藤原長良の長子。基經の兄なり。荐に顯要を經て、寛平年中權中納言兼大宰權帥、延喜年中大納言となり、同八年六月薨ず。年八十一。

くら　内藏

本文、寵の字を書けるは誤。この事、羇旅の「朝なけに」の歌の條參看。傳は未詳。或はいふ、大納言源定の孫にして、大和守精の女と。

くろぬし　黑主

大友氏。近江國滋賀郡大友鄕の人にして、園城寺の地主なり。郡の大領となり。八位に叙せらる。延喜中、宇多法皇、屢石山寺に幸す。國司、その民を勞せむことを思ふ。法皇これを聞き、他國の奉邑の費を以て幸し給ひぬ。國司大に懼れ、亭を打出濱に造り、菊花を植ゑ、黑主をして侍せしむ。黑主「さざら波まなくも岸を洗ふめり渚清くは君とまれとか」の歌を獻ず。法皇大に喜び、物を賜ひて賞し給へり。仁和、昌泰の大嘗會の風俗歌を奉ず。

け

けいしん　敬信

（けうしんを見よ。）

けうしん　敬信

典侍藤原因香朝臣の母にて、尼となりし人。或は曰く、小野千古が母と。

けんげい　兼藝

伊勢少掾古次の二子と。或はいふ、大和城上郡の人と。

こ

ことなほ　言直

藤原氏。昌泰三年、因幡權掾、内竪頭に任ぜらる。

こまち　小町

小野氏。この人にかゝれる傳說は、大抵虛妄なり。出羽の郡司の娘といへるも據なし。この集、及び後撰集に、小町が姉、小町が孫なども見ゆれば、夫も、親屬もありけるなり。又小野貞樹と詠みかはしたる歌あれば、これも親屬にて、近江の小野より出でたる氏ならむか。時代は康秀、遍昭等と歌よみかはししに見れば、文德の頃の人にて、清和の御宇までもありし人にや。歌は、「今の京この方に及ぶ人なし。伊勢の御も名高けれど、小町には劣りたり」と、眞淵の評せるが如し。

こまちがあね　小町姉

傳未詳。

これたかのみこ　惟喬親王

文德天皇第一の皇子、母は紀靜子。貞觀十四年七月出家。法名算延。寬平九年二月薨ず。比叡山の麓小野に籠りましける故に、小野宮と申し奉る。

これもと　惟幹

藤原氏。六位陸奥掾。

これをか　惟岳

維澱と書く由、目錄に見ゆ。紀氏。無官の六位とぞ。

こんゐんのみぎのおほいまうちぎみ　近院右大臣

源能有。文德帝の皇子。寬平九年六月薨ず。年五十三。近院の家は、拾芥抄に「春日北、烏丸東號二松殿一」と見えたり。

さ

さきのおほきおほいまうちぎみ　前太政大臣

藤原良房、右大臣冬嗣の子、天安元年太政大臣に拜せらる。尋いで、從一位となる。貞觀十三年三宮に准じ、年官年爵を賜はる。十四年九月薨ず。年六十九。忠仁公と謚す。世に染殿の大臣と呼べり。

さだかた　定方

內大臣藤原高藤の二子。延喜のはじめ左近少將、近江介、延長二年、大納言より右大臣に任ぜらる。承平二年八月薨ず。年六十三。從一位を贈る。三條右大臣と稱す。

さだき　貞樹

小野氏。石見王の子。嘉祥二年春宮少進となり、後、甲斐守に再任して、貞觀二年肥後守に進む。

さだぶん　貞文

又、定文。刑部卿茂世王の孫、左中將平好風の子。容姿美にして、平仲の艷名世に高し。左兵衞佐、三河權介となり、延長元年九月卒す。

さぬき　讃岐

讃岐守安倍清行の女。

さね　實

參議左衞門督源舒の二男。寬平中藏人、左近衞少將を經て、昌泰二年信濃守となり。同三年卒す。

さんでうのまち　三條の町

從四位上紀靜子。名虎の女なり。文德帝の更衣となり、惟喬、惟條親王、及

び三内親王を生む。貞観八年二月卒す。

し

しげかげ　滋蔭

小野氏。掃部頭にて、寛平八年卒す。

しげはる　滋春

在原業平の二子。大和物語に、在次君とかける人。

しようえん　勝延

笠氏。寛平中律師となり、昌泰元年少僧都となる。延喜元年二月入滅す。年七十五。紀氏にて、承均法師の兄なりといふ說もあり。

しようほう　聖寶

光仁帝第一の皇子春日親王の後、兵部大丞葛聲王これなり。出家の後、寛平六年權律師、延喜元年東大寺大別當となり、同二年僧正になさる。同九年七月入滅。年七十。或は曰く七十六。

しろめ　白女

大和物語に、源告(ツクル)が女にて、攝津江口の遊女なる由見えたり。これを、大江玉淵の女といへるは、大鏡などに、白女の歌を、玉淵の女の歌と並べ擧げたるより、誤れるならむ。同書に「亭子院の、河尻におはしましゝに、しろといふ遊もの召して、御覽じなどさせ給ひて、遙に遠く侍ふよし、歌に仕うまつれと仰言ありければ、詠みて奉りける、「濱千鳥とびゆくかぎりあればこそ雲たつ山をあはとこそ見れ、いみじうめでさせ給ひ、物かづけさせ給ひき」と見えたり。

しんせい　眞靜

たゞし、靜は、吳音にジヨウと讀まねば、法師名にかなはず。或は眞勢か。御導師に補せらる。河内國の人とぞ。

しんたい　神退

近江滋賀郡の人。文德實錄に、嘉祥三年五月、雨を禱らしめ給ふに、時に應じて雨ふる。その日、諸神の爲に、七十人を僧となし。おの／＼、神の字を冠らしめて、名となさせ給ふこと見えたり。この法師も、その一人なるべし。

す

すがね　菅根

右兵衞督藤原良尙の子。元慶に文章生に補せられ、昌泰に文章博士となる。菅原道眞の左遷の時、これを救はむとて、宇多法皇の參內せられしに、菅根、藏人頭にてこれを奏上せざりし科によりて罪せられしが、直に本官に復し、官參議にいたる。延喜八年七月卒す。年五十四。從三位を贈らる。

すがはらのあそん　菅原朝臣

菅原道眞なり。かく氏姓をのみかけるは、異體なり。左遷の厄に遭ひて、延喜三年二月、太宰府にて薨ず。年五十九。その後、延喜元年本官に追復し、正二位を贈らる。この集の頃は、未だその恩赦を得ざりしころなれば、かくは書けるか。傳は人の遍く知るところ

なれば略く。

せ

せきを　關雄

刑部卿藤原眞夏の五子。天長二年文章生の試に及第す。よく文を屬し、性閑適を好み、東山の舊居に籠れるを以て、東山進士と呼ばる。その舊居は後の禪林寺、今の永觀堂の地なり。承和中、淳和上皇の徵により、遂に出で仕ふ。累遷治部少輔兼齋院別當となり、仁壽三年二月卒す。年四十九。關雄、また琴を鼓するを好み、又草書を能くす。

そ

そうく　承均

元慶の頃の僧。或抄に、貫之の甥といへり。

そせい　素性

遍昭在俗の時の子にして、名を弘延といひ、淸和の御時の殿上人なり。大和物語に、遍昭のことをいひて「世にいますかりける時の子どもありけり。太郎は、左近將監とけて、殿上してありけり。かく世にいますかりときく時だにとて、母もやりたりければ、いきたりけるに、法師の子は法師なるぞよきとて、これも法師になしてけり」と見えたり。石上の良因院に住せしに、宇多上皇、宮瀧遊覽のついで、住所の名をとりて、良因朝臣と召され、和歌を獻ぜしめられき。延喜中、屢御屛風に書し、又歌を獻じたり。

そとほりひめ　衣通姬

允恭帝の妃にして、忍坂大中姬皇后の妹なり。名は弟姬。その容姿艷妙にして、光、衣を徹ししより、世人「ソトホシノイラツメ」と稱せり。

た

たいすけ　大輔

但馬守源弼が女。また（オホスケ）とも訓む。

たかむら　篁

參議小野岑守の子。弱き時、父の任に從ひて、陸奧にありて、弓馬を事としたりき。京に歸りて後、學問に志し、遂に文章生より出でて、數多の官を經て、太宰少貳となりしが、遣唐使の時、大使と爭ひ、言不敬にわたり、流人となりしを、その三年目召還せられて、本位に復り、すゝみて參議左大辨にいたり、仁壽二年十二月薨ず。詩を善くして、樂天とその歸を同じうすといはれ、野相公の名、世に喧し。然れども、性狷介にして人と容れず、爲に野狂の名を得たり。狂と篁と韻相通ずるなり。

たかよ　高世

參議菅野眞道の子。弘仁十一年周防守に任ぜらる。

ただおん　直臣

菅野氏。三代實錄元慶三年十一月の條に、中宮大進菅野朝臣直臣に、從五位

下を授くること見えたり。

ただふさ　忠房

藤原氏。寛平中遣唐使判官となり、延喜のはじめ、大和守に任ぜらる。延長六年卒す。貫之の知人。吹笛の上手にて、胡蝶樂を作ると。

ただみね　忠岑

壬生氏。初め、藤原定國の隨身たり。後左近衞番長、右衞門府生、御厨子所預、攝津大目に累遷して、六位に敍せらる。歌道は貫之の門下といふ。この集撰者の一人なり。

ただゆき　忠行

藤原氏。仁和三年土佐掾となり、累進して、寛平中從五位下に叙せられ、昌泰三年遠江守、延喜五年若狹守となる。

ち

ちさと　千里

參議大江音人の子。延喜三年兵部大掾となる。姓名相配して意義を成せり。

つ

つねみ　經覽

阿保氏。昌泰年中右少史兼算博士となり、累進主稅頭となりて、延喜十二年正月卒す。延喜六年の日本紀竟宴の歌の作者なり。

つらき　列樹

春道氏。延喜十年文章生に補し、同二十年壹岐守となり、未だ發向せずして卒す。この人氏名相配して意義をなせり。

つらゆき　貫之

紀氏。この集の序に御書所預、次いで内膳典膳、少内記、大内記、加賀、美濃の介、大監物、右京亮をへて、延長八年土佐守、天慶三年玄蕃頭、同八年木工權頭、同九年卒す。寛平后宮歌合の時を、その若盛と見る時は、七十餘ばかりの齢ならむ。萬葉集の後を承けて、それに勝るばかり、秩序整然たるこの集を撰びて、後世撰集の模範を示したるは、全くこの人の力なり。然れども、流石に他にも撰者のあることなれば、まゝ心ゆかずやありけむ、天慶中、更に「新撰和歌」を撰すといはる。而して、この集の序、竝に大堰河行幸序、及び土佐日記は、その國文の妙手たることを證せり。書道、また奧妙に達し、その假字書は、實に入神の筆なり。

と

としさだ　利貞

紀氏。貞觀の末少内記、元慶のはじめ大内記、同五年阿波介にて卒す。

としはる　利春

高向氏。寛平二年刑部丞に任ぜられ、延喜、延長の間、武藏、甲斐の國守を歷任せり。

としゆき　敏行

陸奧出羽按察使藤原富士麻呂の子。清

和帝の代に出仕して、宇多帝の朝、近衞中將、藏人頭を經て、從四位上右兵衞督にいたり、昌泰四年卒す。或はいふ、延喜七年卒すと。書道の名手。

とものり　友則

紀氏。土佐掾となり、少內記にすゝむ。延喜の初大內記に轉じ、六位に叙せらる。この集の撰者の棟梁たり。但、いまだ撰了せざるうちに卒去せしものと見えて、哀傷の部に、その悼歌見えたり。

な

なかき　中興

平氏。忠望王の二子、實は右大辨秀長の一男と。昌泰に藏人となる。それより、春に國守を歷任して、延喜十九年左衞門佐、二十二年美濃權守に任ぜらる。

なかひら　仲平

關白藤原基經の子。昌泰の末藏人頭たり。承平七年左大臣となり。天慶五年正二位にのぼる。八年薙髮して靜寛といひ、尋いで薨ず。年七十一。世に枇杷大臣と稱す。

なかまろ　仲麻呂

中務大輔安倍昭守の子。靈龜二年年十六、遣唐留學生となり、唐にありて、力學、大に得るところあり。名を朝(又晁)衡と改め、祕書監に進み、衞尉卿を兼ね、頗る重用せらる。勝寶年中、遣唐大使藤原清河來る。共に歸らむことを請ひ、明州に至る。王維、包佶等贈るに、詩を以てせり。仲麻呂、月を望みて「天の原ふりさけ見れば」の歌を詠じ、漢譯して示したるに、衆嘆賞せざる者なし。乃ち別れて海に航し、颶風に遇ひて、安南に漂著す。唐人以爲く、仲麻呂溺死せりと。李白、詩を作りて慟哭す。こゝに於て、仲麻呂、再び唐に還り、左散騎常侍、安南都護に任じ、光祿太夫、御史中丞、北海郡開國公に至り、三千戸を食む。寶龜元年正月年七十を以て卒す。代宗の代、潞州大都督を贈る。承和三年、遣唐使に因つて、正二位を贈らるといふ。

ながもり　長盛

橘氏。延喜中五位長門守に至る。文章博士直幹の父。

なざね　名實

矢田部氏。元慶八年文章生に補せられ、累進、六位の大內記となりて、昌泰三年卒す。

なほいこ　直子

藤原氏。貞觀の末こ從五位下、延喜のはじめ正四位下に叙せらる。典侍。

ならのみかど　平城の帝

桓武天皇の第一の皇子。延暦四年立太子。大同元年五月即位、同四年四月讓位、弘仁元年出家、天長元年七月崩ず。御年五十一。

なりひら　業平

阿保親王の第五子。兄等と共に、在原朝臣を賜はる。貞觀中右馬頭に任ぜられ、又渤海國の使を勞す。元慶中右近衞中將に進み、尋いで相模美濃守を兼

ね、同四年五月卒す。年五十六。世に在五の君、在中將と稱す。二條后の入内前、これと通じ、相携へて逃亡し、髮を斷たれて放たれしは、世に有名なる傳說なり。國史に、「體貌閑麗、放縱不レ拘、略有二才學一善作二和歌一」と見えたり。蓋し、和歌は人麻呂以後一人なり。後人、加茂の岩本に祠を立てて、その靈を祀る。業平又膂力あり。曾て宇多帝の未だ微なりし時、共に殿上に相撲ひ、帝を御椅子に投げかけて、その勾欄を折りしとぞ。

なりひらのはゝのみこ　業平の母の親王

桓武帝第七の皇女伊登内親王、阿保親王に適き、行平、業平を生む。貞觀三年九月薨ず。

に

にでう　二條

大納言源定の女とも、又、定の孫宿の女ともいへり。

にでうのきさき　二條后

贈太政大臣藤原長良の女にして、名は高子。清和帝の女御となり、陽成帝を生めり。元慶元年に立后、その後、東光寺の僧善祐と奸し、寬平八年に后位を停められしが、朱雀帝の天慶六年に、本位を復せられぬ。また入内前、在原業平に通ぜし傳說あり。

にんなのみかど　仁和の帝

光孝天皇。御名は時康。仁明帝第三の皇子なり。文德、淸和、陽成の三朝に歷仕して、一品式部卿に任ぜらる。陽成帝位を遜るゝや、藤原基經、帝を迎へて、これを立つ。在位三年にして崩ず。御年五十八。世に小松の御門と申す。

の

のちかげ　後蔭

中納言藤原有穗（又有種）の二子。延喜十九年從四位下備前權守。

のぼる　登

仁明帝の皇子なりしが、母三國の町の過失によりて、出家して深寂と號す。貞觀八年還俗して、貞朝臣を賜はる。寬平五年紀伊權守、同六年正五位下に至る。

は

はるかぜ　春風

小野氏。累世の將家にして、元慶年中鎭守府將軍兼相模介に任ぜられ、藤原保則とはかりて、奧羽の叛賊を平ぐ。寬平二年右近衞少將陸奧權守となる。その檢非違使たりし時、參議源光が、禁色を着せしをせめて、服用せざらしめ、論者の偉とするところとなれり。

ひ

ひがしさんでうのひだりのおほいまうちぎみ　東三條左大臣

源常（トキハ）。嵯峨帝の皇子にして、正二位左大臣となり、齊衡元年六月薨ず。年四十三。性雅量寬弘、宰相の才能、尤も

備はれりといふ。

ひだりのおほいまうちぎみ　左大臣

藤原時平。昭宣公基經の太郎なり。仁和二年、殿上にて元服を加へられ、續いて、顯要を經て、昌泰二年左大臣に任ぜられ、後正二位に至る。延喜九年四月薨ず。年三十九。正一位太政大臣を贈らる。本院大臣と稱す。

ひでをか　秀崇

良岑氏。元慶三年文章生に補せられ、寛平八年正月伯耆守に任ぜらる。

ひとざね　人眞

酒井氏。寛平中薩摩掾、延喜十四年土佐守に任ぜられ、同十七年四月卒す。

ひやうゑ　兵衞

右兵衞督藤原高經の女。大和物語に「忠房が許に侍りける兵衞」とある人なるべし。さては、藤原忠房が家人なり。「業平朝臣家に侍りける女」といへる詞書に准へて、忠房の妹かといへる說もあれど非なり。又、後撰集、拾遺集に見えたる藤原兼茂の女なる兵衞は、別人ならむ。

へ

へんぜう　遍照

(むねさだを看よ)。遍昭と書くは通用なり。

ほ

ほどこす　惠

大納言源弘の孫。延喜四年主殿助に任ぜらる。延長六年丹波守に任ぜられ、同九年卒す。

ま

まさずみ　當純

右大臣源能有の五子。寛平昌泰の間、大皇太后宮少進、大藏少輔、縫殿頭を經て、延喜元年攝津守、同三年少納言に任ぜらる。

み

みくにのまち　三國の町

三國氏、町は名。仁明帝の更衣、貞朝臣登の母。三代實錄に、登朝臣は母の過により僧となると見ゆ。

みちのく　陸奥

從五位下橘葛直の女。

みつね　躬恒

凡河内（オホシカフチ）氏。寛平中甲斐權少目となり、延喜の朝に召されて御書所に候し、御厨子所預にうつり、和泉の大掾となる。歌道の名手として、貫之と雄を爭ひ、論者、その軒輊すべからざるをいへり。この集の撰者の一人なり。

みねを　岑雄

上野（カミツケ）氏。承和の頃の人とぞ。

む

むねさだ　宗貞

大納言良岑安世の男。仁明帝の世、藏人頭にて、寵幸を得たり。帝崩ぜらるるや、出家して遍照と號す。今昔物語に、良岑少將は、文德帝の太子の時、おぼしめしに協はず、仍て仁明帝の崩後、出家したる由見えたり。さる事もやありけむかし。元慶、仁和の間僧正に任ぜらる。光孝帝、特にその七十賀を、仁壽殿にて行はせ給ひ、又、食邑百戸を給ひ、輦車宮門に出入するを許し給ひぬ。寛平二年正月入滅す。年七十六。花山の元慶寺の座主たるが故に、花山の僧正と稱す。

むねはり　棟梁

在原業平の一男。清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に仕へて、東宮舍人より、筑前守にいたり、昌泰元年卒す。この人の名、古くムネヤナと訓めるは非なり。棟梁之材などいふ義に取りたるにて、ムネとハリとなり。ヤナは、魚を捕る具にて、棟には熟せず。

むねやな　棟梁

（むねはりを見よ）

むねゆき　宗于

光孝帝の皇子是忠親王の子。寛平六年源朝臣を賜はる。延喜の頃、若に國司を歷任し、從四位下右京大夫に至りて、天慶三年卒す。

も

もちゆき　茂行

又望行。紀氏。承和の頃の人にて、六位とぞ。

もとかた　元方

筑前守在原棟梁の子。その妹大納言藤原國經の妻たるによりて國經の猶子となれりとぞ。

もとのり　元矩

又元規。平の中興の男。延喜元年左衞門少尉、同六年藏人、同八年從五位下に叙せられ、幾くもなくして卒す。奧儀抄には、藏人右衞門尉基範とあり。

や

やすひで　康秀

文室氏。字を文琳といふ。貞觀二年刑部中判事、後三河掾にうつり、元慶元年山城大掾、同三年縫殿助となる。春上の詞書の趣に從へば、この頃、六十前後なりしならむ。

ゆ

ゆきひら　行平

平城帝の長子阿保親王の子。天長三年、父親王の奏によりて、仲平、業平の兄弟と共に、在原朝臣を賜はる。仁明より宇多まで六朝に歷仕して、正三位中納言兼按察使となる。寛平五年卒す。年七十六。國史、その經濟の才に長じて、且風流の聞えあることをいへり。

よ

よしか　良香

桑原秋成の子。弘仁中、氏を都と改む。良香、はじめ、名を言道といひし

を、渤海國の使を掌りし時、「姓名相配、其義乃美」とて、奏して、今の名に改めたり。貞觀二年文章生に補せられ、累進して、文章博士從五位下兼大內記越前權掾となり、元慶三年二月卒す。年三十六。その詩作、警句多し。「氣霽風梳㆓新柳髮㆒冰消波洗㆓舊苔鬚㆒」の類これなり。

よしかぜ　良風

一に好風、右近衞少將兼陸奥守藤原滋實の子。寛平延喜の間、左兵衞右衞門の尉を歴任し、春宮の帶刀たり。のち出羽城介に至る。

よしき　美材

小野篁の孫。寛平中文章生に補せられ後、諸官を經て、筑前守兼太宰少貳となり、延喜十年正月卒す。或は、延喜二年卒すともいふ。

よしな　良名

物部氏。六位の人とぞ。

よしひと　淑人

中納言紀長谷雄の二子。延喜九年左近將監、天暦二年河内守に至る。

よしもち　淑望

中納言紀長谷雄の子。或はいふ、貫之の猶子と。この集の漢文の序を撰ぶ。寛平八年文章生、のち大學頭、東宮學士を經、信濃權守を兼ぬ。延喜十九年卒す。

よるかのあそん　因香朝臣

藤原高藤の女とぞ。貞觀中從五位に叙せられ、寛平九年十一月從四位下掌侍となる。後典侍になされたるならむ。母は尼敬信なり。

よろづを　萬男

難波氏。傳未詳。

を

をむね　雄宗

下野氏。傳未詳。

語釋索引

▽この索引は、卷中の語釋を檢する爲に作つた。

▽解釋の短くてすむものは、わざと重複の記載を憚らなかつたから、索引には只その語の最初に出た頁數をのみ掲げた。

▽解釋の必要上重出させたものは、頁數も重記した。

▽長い詞書はその初頭の數語を掲げて檢索の便とした。

▽全體に成るべく簡約に抄出する方針を執つたから、この索引以外、本文にはなほ多分の語釋のあることを記憶せられたい。

あ

哀傷歌　八一三
あかしの浦　四八〇
あかずとや　二三五
あがた見　九〇九
曉の鳴のはねがき云々　七六四
あかでも人に　四七〇
あかなくに　二〇三
あかれやはせぬ　一四七
秋風にかきなす琴　六一九
秋霧の　四五四
秋たつ日　一四七
秋ならで　三〇六
秋のくる方　九六六
秋の夜の　八三
秋の夜をしむ　二六七
あき果てぬとか　三七五
あき人　七五
あきらけい子のみこ　八六六
あくがれ　一八二
あくたに　五〇七
あけたてば　五九〇
あさかの沼　六九七
淺香山の言の葉　五七
朝け　一〇〇九
あさぢ　七三五
淺ぢふの　五六〇
朝露のおきてし　四四三
朝露のおく手　八二五
朝な朝な　一〇三
朝なけに　四四五
朝な夕な　七〇二
麻のきぬ　一〇〇四
朝ぼらけ　三九八
淺間の山　九九四
淺みこそ　六四六
淺みどり　一一六
あし垣の　五六一
あし鴨　五八三
あしたづの　五六八
あしひきの　一四五
あすか川　四〇六
飛鳥川の瀬になる　八二
あすはあふみ　四三八
あだ　六二・一四八・三〇四
あだし心　一〇二八
あだちの眞弓　一〇一五
あだ波　七三二
あだ人　八〇七
あたり　一七二
あぢきなく　一一二
あぢきなし　五一九
梓弓　一〇八
あづま　四四一
東歌　一〇三三
東路　六二五
あづまの方へ云々　四八三
誂へつくる　一八四
あとはか　三九五
跡をとゞむ　九五四
あならめに常なる　五〇二
あはだ　一〇三七
あばらなる板敷　七五三
あはれ　一三一・一三五・三一四
あはれてふ　二一七
あひおひのやうに　六四
あひくるみ　五一九
あひ知りて　四四七
相しれりける人の漸く云々　七八五
あひみむ　一八二
あぶ隈　一〇三三
あふご　九九七
あふ事なぎに　六五五
あふ事のなぎさ　六五四
あふ坂　四四三
あふさきるさ　九九八
あふひ　五〇六
あふみぶり　一〇〇八
逢ふ夜はこよひ　二五四
あへず　三三三
あへなくに　二八五
あま　三七〇
あま雲の　七八一
あまきる　四〇〇
あま衣　八八八
あまたたび　四九〇
あまたにやらじ　二一七
あまつ星　三三九
天の川といふ處　四九三
天の川原　二五一
蜑の刈藻に　九〇六
あまのと　二八九
あまの原　四七三
あま彥の　九三五
天地のひらけ　五三
あやな　二〇三
あやなく　三〇四
あやなし　一一九
あやめ草　五二九
あら鋤き返し　八〇二
あらたまの　四〇四
あらたまる　一四四
あらを田　八〇二
在明の月　三九八
在明のつれなく　六五二
ありかず　四一一
ありきあらずは　四二〇
ありそ海　八〇三
ありて　一五九
ありなめど　一八二
あれ　一〇〇九

あわたづ　五六八
あわ雪　五九四
あをやぎ　一一五
青やぎの絲　八五

い

いかゞさき　五二〇
いがき　三三三
いかに散れとか　一七三
伊香保の沼　九六六
いきうし　四五六
いさ　一三〇
いざ　一五一
いさゝめに　五一八
いさや川　一〇三八
いさよひ　七〇七
石はしる　一四一
石間ゆく　七〇一
石山　三六八
いし井　四七〇
いせのあま　九七〇
磯菜　一〇二九
石の上の竝松が云々　八五一
石の上ふるき都　二三四
いその上ふるの中道　六九九
徒に　一九四
板間あらみ　九六三
至り至らぬ里　一七九
板井　一〇一六
一本大友黒主　一七四
いつはとは　二六五
いづみ川　四七九
和泉の國に侍りける　八九〇
いで　五六三
絲すぢ　三〇〇
いとせめて　五九八
いとど深草　九三四
いとなかる　七九四
絲による　四八九
いとのよる　九九六
いとはやも　二八五
絲よりかくる　一一五
絲をみなへし　五〇九
いなおほせ鳥　二八四
いな葉のそよと　六一八
いなばの山　四三三
稻舟　一〇二七
いにし　二八六
犬がみのとこの山　一〇三八
いねがて　二九六
命やは　六四〇
いはがき　三五三
いは切り通し　五四九
いはし水　五八六
岩躑躅　五五一
岩波　五三二
いはね　四一七
岩のかけ道　九一七
いははしる　一四一
いはひ歌　六〇
いはひつる　四三三
いはほ　三九〇
家路　一六〇
家づと　一四二
家居しをれば　一〇三
今　四三三
今しはと　七七三
今はとて　二六〇
今はの心つくからに　六六四
今は野山し近ければ　九六七
今もかも　二〇二
妹　五四三
妹背の山　八一〇
妹とわがぬる　二四三
いやしきも　八六九
いやはかな　六六八
いれ紐　五八八
いろ〳〵ことに　三三一
色なしと　八五一
色にはいでじ　一八七
色みえで　七九〇
色をも香をも　一三六
いをねぬ　七六九

う

うき草　五八六・九三六
うきね　五七八
うきふし　六七
うき目　一六五
鶯の笠にぬふてふ　一三四
うぐひすの氷れる涙　九一
鶯の谷よりいづる　一〇一
うけ　五六四
うけく　九一九
うけず　五五六
右近のうまば云々　五三五
うしろの屛風　四一八
うしろめたく　三〇九
歌合　九九
右大將藤原朝臣　四二四
うたゝある　九七九
歌奉れと　一一〇
うたて　一三五
歌の心　七三
歌の事とゞまれる　八四
歌のひりじ　六九
うちつけ　二三九
うちつけにこし　五一三
宇治のはし姫　七〇六
うちはへて　二五八
うちはへてくるし　五六五
うちも寢ななむ　六六〇
宇治山　七六
うづき　二一七
うつし心　七二四

うつせみ　五一五
うつせみの　一六一
うつせみは　八一五
うつゝ　六〇二
うつふし染　一〇〇四
うづらと鳴きて　九三五
移りにけりな　一九四
うつろはむ　一五七
移ろひ　一三三
うつろへる花　一八七
移ろふ　三〇六
うとまれぬ　二二六
うねの野　一〇〇八
采女の戯　五七
うばたまの　五一六
うひにぞ見つる　五〇八
うべ　三三一
うへのきぬ　八四九
うへのをのこ　二四八
馬のはなむけ　四三八
梅の花を折りてと　一二八
うもれ木の　六一
うらびれ　二九二
恨みはて　一八五
うらめづらしき　二四九
雲林院　一六三
雲林院のみこ　一八一
うるふ月　一四七
うれ　八七一
うゑしうゑば　三三七
右衛門の府生　八〇

え

えぞしらぬ　四四六
えぶの身　九六〇

お

老かくるやと　一三四
おいらく　四一六
おきからさきて　五三一
おきつしら波　四三七
おきつの濱　八九〇
おきてば　四一三
沖にをれ　一〇二九
隱岐の國に流され云々　四七七
おきのゐ　一〇三六
おき火　五三五
おきふしよるは　六三三
おきへ　五八二
おきまどはせる　三四九
おく山　二九一
おして　一〇八
おしてるや　八七三
おしなみ　三八五
おちにき　三〇一
音羽川　七五六
音羽山　三三一
おなじ御時上の侍
にて云々　八八〇
おのかきぬ〴〵　六六四
おひぬ物ゆゑ　三〇六
大あらきの森　八七二
大歌所　一〇〇五
大江のちふる　四五八
大かたの　二六三
おほ方は　八六一
大川のへ　七一四
大澤の池　三四七
おほせて　一九一
おぼつかなく　一一八
おほなほび　一〇〇五
大幣にして　九八九
大幣の　七二〇
大原野　八五二
おぼほれむ　九六七
大御遊　八八一
大御酒　四六三
大御酒のおろし　八五七
大堰　三七八
おもひ　八二三
思ひ出づる常磐の山　三三七
おもひきゆ　三九四
思ひくらし　七七一
思ひたはれむ　三一六
思ひつらねて　二八九
おもひ出　一三五
思ひ寐　六三五
思ひやる　五七五
思ひやれども　五四六
思ふどち　二〇六
思ふものから　二二六
思ほえず　一七〇
おもほゆれ　一二一
親のまもりける云々　七四九
おりかく　三八一
おろかなる　六〇一
御書の所の預　八〇
御ぶくぬぎ　八二九
御べ　一〇一九
御屛風　四一八

か

かうぶり給はり　八二九
鏡山　八七六
かゞり火　五八〇
かきくらし　四六八
かきつばた　四八三
隱してよ　二五二
かくなわに　九六〇
かくれが　九一七
隱れ沼の　六八三
蔭　四三三
かけたる　三七一

かけて來つ　二八三
かけてのみやは　七八二
影となりにき　六四七
影となる　五七九
かざさむ　三四〇
かざし　四二〇
かざす　一二四
かさとりの山　三三二
笠にぬふ　一三四
笠ぬひの島　一〇一〇
笠ゆひの島　一〇一〇
かしつる絲　二五八
かずかく　五七四
數かく（我ぞ）　七六四
春日野　一〇四
春日野の祭に云々　五三七
春日の山　四三一
かすみの衣　一三一
風のたより　一〇〇
鹿春山　四七九
風をいたみ　七三三
かぞへ歌　六〇
かた　三四二
片絲　五四一
片絲のより〳〵に　七一
片戀　五八八
方たがへ　八五九
かたの　五三三
かたへ　二四五
かたみ　一三四
かたもかたこそ　九八一
片岡のあしたの原　三三四
かぢ　二五二
かつ　一六一
かづくてふ　七〇二
かづけども　五〇三
かつ見る　六九八
かつら　五〇六
かつらに侍り　九三〇
かづらき山　一〇〇七
かつらの宮　五二四
門させりてへ　九三七
がに　一〇一三
香に匂ふ　一三〇
かにはざくら　五〇三
かねて　三三五
兼覽王に始めて　四六六
賀の歌　四〇九
かのかたに　五二一
かの女に代りて　六四六
川せうえう　二四八
かはたけ　五一七
かはづ　五二・二〇五
かはと見ながら　六八二
かはなぐさ　五一六
河原のおほいまうち君云々　八三一
かひ　一四五
かひ　一〇〇三
かひがね　一〇三一
甲變の國にあひしりて云々　八四二
かひのさう官　八〇
かひよ　九八六
返し　一四九
かへしもの　一〇一八
かへる〴〵も　八七九
歸る雁を　一三〇
歸るさま　四五七
かへる山　四三九
神あそび　一〇一一
神だにけたぬ　九八三
かみな月　三三五
神なひの　三三五
神なひの森　四五六
神なひ山　三二六
神のきね　一〇一二
神のまに〳〵　四九五
かみやがは　五二二
神代の事も　八五三
龜のをの山　四一七
がも　一〇三二
鴨の川原　二四八
かもの社　五四四
蚊遣火　五五五
かよひ路　二四五
から歌　五一
からくれなゐ　三六四
から紅のふり　二三七
から琴　五一九
唐ごろも　四四三
から衣きつゝ　四八四
唐衣ひもゆふぐれ　五五八
からさき　五二一
からに　二六三
唐錦　八四六
からはぎ　五一五
からはきごとに　五一五
唐物の使　四五三
からもゝ　五〇四
雁がね　二七〇
雁かへる　一一九
かりくらし　四九三
かり菰の　五四三
狩ごろも　六二四
雁の聲云々　一一九
かりほ　三七三
かれいひ　四九二
かれにし人　四〇四
かれぬと　三八二
香を尋ねて　一二八
かんなりの壺　二六七

き

消えあへぬ　九三
消えがてに　一五三
きえかへり　六〇五

消えずはありとも　一四九
きえでうき身　七八六
消えなくに　一〇七
きかくに　七九九
聞きわかむ　九八
菊合　三四二
聞えつがなむ　九五六
きさいの宮　九九
后の宮(貞保の)　四一八
北へゆく雁　四八七
北山　一八一
きちから　五一〇
來ても見なくに　一五二
來にけり　八七
紀の利貞が云々　九三二
紀のむねさだが云々　四四六
吉備の中山　一〇一九
君が爲　一〇九
君しのぶ草　二七七
清瀧　八九九
きり〴〵す　二七四
きりけむ　四一五
羇旅　四七三
來ゐる　九二

く

くゝる　三六五
草葉の妻戀に　九八六
草まくら　四四五
葛　三三三
葛の葉のうらみ　八〇七
藥けがせる　九六六
くだち　八七一
くたに　五〇七
くねる　六四
久米のさら山　一〇二〇
雲のうへ　三三九
雲の通ひ路　八五五
雲のはたてに　五四二
くもる　一三二
雲ゐ　四二五
雲ゐはるかに　五四〇
藏人所のをのこども　三一〇
藏人頭　八二九
くらぶ山　一二七
くるとあくと　一三三
車の下すだれ　五三六
吳竹のよゝに　七一
くれなゐ　五五二
くれのおも　一〇三六
寛平の御時　九九
寛平の御時御屏風に歌かゝせ云々　七九二
寛平の御時に上の侍に云々　八五六
寛平の御時にもろこしの云々　九五〇

け

けけれ　一〇三一
けなくに　八六六
けに　七二八
けにごし　五一三
けぬ　二九七
けふみかの原　四七九
けらしも　一四五

こ

こがくれて　五四八
こきいれて　三七五
こきたれて　六六五
こきまぜて　一四三
苔の袂　八二九
心地そこなひて云々　一六七
心ちそこなへりけるころ　七八四
こゝのがさね　九六七
こゝら　一九一
心あてに　三四九
心あまりて　七四
心あらば　二三五
心づから　一七二
心づくし　二六一
心のあきに　八〇五
心のあれて　七四七
心のうら　七一五
心の闇　六七二
心のゆきて　四二五
心ひとつ　三〇五
心も知らず　一三〇
心をおきつ白波　五三三
こし時　一〇三六
越路　四八九
五節のあしたに云々　八五五
五節の舞姬　八五四
こぞ　八七
木高く　四五二
木傳へば　一九一
五條の后の宮云々　七五三
こてふに　七〇八
こと〴〵に　三三一
事ぞともなく　六六二
ことづてむ　二三〇
ことゝはむ　四八六
ことなしぶ　六九三
ことならば　一六九
言のしげけむ　七一六
言の葉　五一
ことは　四六八
こともかけなくに　七九三
言やつてまし　一一九
ことわざ　五二
このたびは　四九五
この月ばかり　一〇二七

木の芽もはる　九七
このもかのも　一〇三〇
こば　二一八
戀歌　五二九
こひ〳〵て　二五四
戀しきことに　七四一
こまなべて　一九三
こめや　七七二
こもれり　一〇四
こよろぎの磯　八五七
こりずまに　六五八
是貞のみこ　二六五
惟喬のみこの狩しける供に云々　八六四
惟喬のみこの父の侍り云々　八三六
惟喬のみこのともに云々　四九二
惟喬のみこの許にまかり通ひけるを云々　九三二
ころもかせ山　四七九
衣片敷き　七〇六
衣かりがね　二八七
ころも手　一〇九
衣はるさめ　一一三

さ

齋宮　六七〇
宰相　八五一
西大寺　一一六
さうび　五〇八
榊　一〇一一
榊葉の　一〇一三
さかしらに　九九二
咲かずやはあらぬ　一六九
嵯峨野　三一〇
さかゆく　八七〇
さがりごけ　五一六
さきのおほきおほいまうち君　九三・一三九
前のおほきおほいまうち君云々　八一四
櫻あさ　八七二
櫻色　一五三
櫻をうゑて云々　八三三
さくるものかは　七一五
酒たうべ　二三七
咲ける咲かざる　一七九
左近將監　九三五
さゝ　五一八
さゝがに　五〇九・七七三
さゝのくま　一〇一六
さゞれ石の巖となる　八二
さしでの磯　四一一
貞辰のみこ　四一七
貞保のみこ云々　四一八
五月待つ(時鳥)　二一七
五月待つ(橘)　二一九
さつき山　六一五
さ苗　二五〇
さ苗とる　二五〇
さひのくま　一〇一六
雜歌　八四五
雜體　九六〇
さぶらひにて云々　二三七
さへ　一〇八
佐保山　三三五
さみだれに　三三一
寒からし　二七六
さむしろ　七〇六
さやかに　二四七
さやけさ　二九三
さやにも見しが　一〇三一
さやの中山　六三五
さよ　六七三
さよ中　二七〇
さら〳〵に　一〇二〇
更科やをばすて山　八六〇
さらぬ別　八七七
舍利會　四六一

し

しかぞすむ　九四三
志賀の山越　一九六
志賀の山越にて石井の許に云々　四七〇
志賀より云々　一九九
しかもかくすか　一八〇
しかもせぬ　七三八
しがらみ　三七一
しがらみふせて　二九三
敷島　七一三
しきたへの　五五九
鳴のはねかきを　六六
式部卿のみこ閑院の五のみこに云々　八三八
しくめる　九一四
時雨と　四六五
時雨にふり　七七九
した消えに　六〇六
下照姫に云々　五四
下にもゆる　五八〇
したにを思へ　六七七
したの帶の　四七二
下紐　五六二
したゆく水　五五一
下ゆふ紐　六七八
七條の后うせ給ひ　九七〇
七條の中宮　九三〇
しづく　八二七
しづ心　一六九
しづの苧環　八六九
してしが　二〇六
しでの田長　九七六
死出の山　七八四
しぬべし　一六〇
しのゝめ　二三四
しのばむ　三五七

しのぶ草　二七七
しのぶもぢずり　七三三
師走　四〇三
しはつ山　一〇一〇
しはつ山ぶり　一〇一〇
潮合　八八六
しほ貝　九六三
鹽釜といふ處のさまを　八三四
しほの山さしでの磯　四一一
鹽やき衣　七五三
島隱れゆく　四八〇
しまぬ　二四一
しみはつく　六八五
しもぞ　一一五
しもついづも寺云々　六〇〇
しもとゆふ　一〇〇七
霜のたて露のぬき　三六二
霜のふり　一〇〇九
白川　六八七
白雲の道　一一九
知らずとを　六五七
しらつゆ　一一六
しらなみ　二五五
白眞弓　六三三
白雪に　二六九
白雪の共に　一〇〇一
白山。　四五一
しるく　一三七
しるし　一五〇
知る人　八八六
しるべ　一〇〇
しろたへ　一一〇
しろ妙の袖　三四六
しをに　五一一

す

菅の根しのぎ　五九五
菅原や伏見の里　九四一
すがる　四三五
過ぎがてに　二〇一
すきもの　一〇〇二
すぐしてし　一八三
すくばかり　九九六
すげて　八九六
朱雀院　三〇五
朱雀院の云々　四九五
朱雀院の帝布引の云云　九〇〇
すさむ　一三七
すさめず　八七二
洲濱　三四三
住まず　七四三
墨染　八一六
すみながし　五三五
住の江　六三・四二六
住吉　八八三
住みわびぬとよ　三三〇
すも丶　五〇三
未さへよりこ　一〇一五
末つむ花　五五二
すゑじ　二四三
すゑの松山　三九二・一〇三八

せ

せうえう　二四八
せうそこ　六二三
せきなとゞめそ　四三七
關のふぢ川　一〇二一
關守　六六〇
せゞの埋木　六七五
旋頭歌　九七二
せにかはり　九四八
せめきけむ　八八一
仙宮に云々　三四五
前栽　三三七

そ

ぞう　九〇九
宗岳の大賴が云々　九三九
そことも云はぬ　二〇六
そこひ　七三二
そとほり姫　七七
そぼち　四六八
そぼつ　九八三
そへ歌　六〇
そへにとて　九九八
杣人　一〇三五
背かれなくに　九〇七
そめどの　一〇三七
染殿の后　一三九
そめるなり　九七四
ぞも　三一二
空に立つ　六九五
空もとゞろに　二三六
それわれら　八三

た

題しらず　八九
大内記　八〇
大納言藤原國經の朝臣云々　八五〇
たえて　一四〇
たがあきに　三〇六
高砂　六三・八八五
たかさごの　二九四
高師の濱　八九〇
高み　一三七
たがみそぎ　九五三
たき　一四一
たぎつ心　五四八
たぎつ瀬　三八六
瀧にそふ　四六三

たきまさり　八三七
たぐふ　二一一
たぐへ　一〇〇
竹のよ　九三一
田子の浦　五四六
ただごと歌　六〇
たゞぢ　六〇二
たゞにのるべき　九七二
たゝまく　八四六
立ち返り　二〇一
たちならし　一〇二九
たちぬはぬ衣きし人　九〇〇
たちはきの陣　一七二
たちばなの小嶋のさき　二〇二
たぢまの國の湯　四九一
たちよるばかり云々　一一三
立ち別れいなば　四三三
たづき　一一八
たつこと安き　二一三
たつた川　三五六
たつたの山　二九〇
立田姫　三六七
立田山　九五二
たつみ　九四三
立てれをれ　九八一
たとへ歌　六〇
たどり　二五五
棚無し小舟　七三九
棚橋　七四五
たなばた　一五三
たなばたつめ　二五三
たなびく　一五七
たなびく雲　八三
谷風　九九
たのしきをつめ　一〇〇六
たのみ　八〇六
旅ならなくに　三〇三
旅なる　二一九
旅寢　一六〇
玉かづら　七二三
玉くしげ　四九二
手枕　七六一
玉襷なる　九八八
玉だれの小がめ　八五七
玉づさ　二八三
玉づ島　八八八
玉なれや　三〇〇
玉にぬかむ　二九七
玉にもぬける　一一六
玉の緒　五四一
玉の緒ばかり　六〇八
玉枠の　七四四
玉藻　五八二
たまればかてに　五九四
たみのの島　八八八
手向山　四九五
田村の御時に事にありて云々　九三四
田村の御時に女房の侍にて云々　九〇二
田村のみかど　八六六
田村の帝の御時に云云　八六六
ためし　四二〇
たもと　三一四
袂より離れて　五〇一
たゆく　六五一
たより　五三九
たらちねの　四三七
垂れこめて　一六七
たれしかも　一四五
たわゝ　二九八

ち

中將のみやすん所　一九〇
中納言昇の朝臣云々　七四六
近きまもり　九六六
契り　二五六
千種　一八五
ちゞに　二七一
千鳥　四一三
血の涙　七一四
ちはやぶる　三六四
ちはやぶる宇治　八八一
ちまき　五三六
貞觀の御時　三二七
貞觀の御時萬葉集は云々　九五四
帳のかたびら　八三九
ちらずは　一八二
ちりかゝる　一三三
ちりかひくもれ　四一六
散りかふ　一九七
散りぬべみ　三五二
ちりのまがひ　一六〇
塵の身　九四七
塵ひぢ　五六
散るぞ愛でたき　一五九

つ

ついでによめる　二六七・三二七
束ね緒　五五七
つき　九八四
月おもしろし　八六二
月草　三一七
つきなみ　九八四
月の桂　二七二
月やあらぬ云々　七五四
月夜よし夜よし　七〇八
月渡る　二七〇
筑波ね　九二八
つくるなり　九九四
つけて　五二
つごもり　四〇三
つごもり方　二〇九

つごもりの日　三七八
つつ　八九
つゞら　七一六
つゞりさせてふ　九七九
つゞりの袖　四九七
綱手かなしも　一〇二四
津の國　六三二
津の國の長柄　八七〇
つひに行く道　八四二
つま　一〇四
つましあれば　四八四
つまで　九七八
妻のおとうと　八四九
摘みてむ　一〇六
露じも　二九九
露ながら　三四〇
露のあだ物　六四〇
つゆも　五三二
つらき　二五六
つら杖　九九七
釣繩　五六五
つれなく　六五二
つれもなく　六八四

て

亭子院　一五四
亭子院の歌合　一五四
亭子院の御屏風に　三七二

と

東宮　九四
春宮のうまれ給へる　四三一
東宮の雅院　一六八
東宮のさぶらひ　九五〇
春宮のたちはきの陣　一七二
東宮のみやすん所　九四
とがめ　五六三
時なりける　九二九
ときは　一一三
ときはの山　二二七
とけて　一二五
常夏　二四三
年月をわたり　五五
としといひて　八七三
年に一たび　二五六
年にまれなる　一四九
年の内に　八七
年の緒　二五八
とつぎ　七二
とゞめてば　一三四
とゞろ　二三六
とはにあひみむ　七二三
とひがたみ　七一九
とぶ火の　一〇五
とまり　三七八
留るものとは　九七〇
とめくれば　二〇九
とめて　一四五
外山　一〇一四
とよみ　一九二
鳥の跡　八五
とり物　一〇一一
とわたる　八四五

な

内侍のかみ　四二四
長き思　二七四
長きをかこてれば　八三
流せる　三七〇
中空にのみ　五四〇
中務のみこの家の云
云　八九四
長月　三七八
なか〳〵に　六二五
なか〳〵に　六九九
ながなく　二三六
鳴かぬ限　九九
長濱　一〇二一
なかひらの朝臣云々　七七八
ながむる　三〇九
ながめ　一九四
ながめふる屋のつま　七七〇
ながらに　一八五
ながらの橋　八〇九・八七〇
長柄の橋もつくる　六八
ながるゝ川を　一三一
流れて　五五一・八〇九
流なり　七七
流れひるまを　六八六
流れもあへぬ　三七一
長岡　八七七
なぎ　七五九
渚の院　一四〇
なき人の宿に云々　八三七
なきわたる　二四〇
啼く鹿の　八三
なげ　一八一
なげき樵る　九九七
なごり　一七四
なずらへ歌　六〇
なぞ　三〇六
夏引の手引の絲　七一七
なつやま　二二五
名取川　六五六
なに　一六七
名におふ宮　九五四
なにかは　二四一
名にしおはゞ　四八六
何そはありて　四五〇
名に立つ　一四九
難波　六三二
難波津の歌　五七

難波の御津 六七四
名にめでて 三〇一
縄たぎ 九三三
なべに 二八〇
なほ 三三六
涙川 五六六
なみに思はゞ 七一四
波の花 三三三
な焼きそ 一〇四
なよ竹 九五〇
ならなくに 一九二
ならぬ思 九八三
奈良の石の上寺 三三三
奈良の御時 六八
ならのみかど 一七五
奈良のみやこ 一七五
ならはしもの 五七一
業平朝臣紀有常の女に云々 七八一
業平朝臣のいせの國に云々 六六九
業平朝臣の家に侍りける女云々 六四四
業平朝臣の母のみこ云々 八七七
なりもならずも 一〇三三
なればより 九八七
名をむつましみ 三〇三

に

にがたけ 五一七
にざりける 二八〇
西川 八九三
西の對 七五三
二條の后 九〇
二條の后の云々 八五二
庭もはたれに 九六三
にほ鳥 六八四
にほはす 三一一
にほふ春べ 一三七
仁和寺 三五一
仁和の云々 一九〇
仁和の御時云々 四一四
仁和のみかど 一〇九
仁和のみ門――布留の瀧云々 四六三
仁和の御門の――御をば 四一四

ぬ

ぬぎかけ 三一一
ぬきをうすみ 一一一
ぬさ 三六八
ぬさとくだく 四四八
ぬさもとりあへず 四九五
布引の瀧 八九六
ぬるゝ顔 七六〇
濡衣きせて 四六九
ぬれてを 二九九

ね

ねごし 一〇三三
ねたく 五四四
ねにあらはれて 六九二
ねぬ縄 九八七
閨 七〇九
ねを 二三九

の

野飼がてら 九九一
のちまき 五三六
のどけし 一四〇
野中の清水 八六八
野中の水を汲み 六六
野火 七八六
野守 一〇五
野ら 三一八

は

誹諧歌 九七五
はう官に云々 九五〇
羽風 一九一
はかなきこと 六一
はかなくも 二一一
はぎにあげて 九七七
百和香 五三四
はしに 九三一
橋に渡せばや 二五三
橋姫 七〇六
はじめをはり云々 七六
橋守 八八二
ばせをば 五一八
はた 三三三
はたて 五四二
はちす葉 二四一
はつかに 五三七
初雁 二八二
はつこゑ 三三三
はつ霜 三四九
はつせ川 九七三
初瀬に云々 一三〇
はつ花染 七三二
はつるゝ絲 八二四
はてのうければ 一五九
花がたみ 七五九
花かつみ 六九七
花櫻 一六一
花薄穗にいづる 三一三
花ぞめの 七八九
花たちばな 二一九

花にさして　一六六
花の鏡となる水　一三三
花の木　一七八・一九二
花の所　一六三
花の紐とく　三一六
花のまぎれ　四六二
花見がてら　一五三
花もにほはぬ　一〇二
鼻もひぬ　九九〇
花を翫ぶ　六二
はねうちかはし　二六九
はゝそ　三三六
はひまつはれよ　二〇〇
はぶき　二一七
はふらさじ　一〇〇一
濱の眞砂　八二
ばや　二一八
はやき心　六八三
はやくいひてし　七八八
はやく住みける所　二四〇
はやくぞ人を　五三三
はやす　一三七
春かけて　九二
春くはゝれる　一四七
春しりそむる　一三六
はるに知られぬ花　三八九
春の色　一七九
春の歌とてよめる　一七六
春のきる　一二一
春の心　一四〇
はるのはつ花　九九
春の花の　八三
春のみやま　九二八
春の物とて　六四四
春のゆくへ　一六七
はる〴〵きぬる　四八四
春べ　一三七
はるやとき　九八
はれぬおもひ　四五四
はをはじめ云々　五二六

ひ

比叡に云々　一七三
ひえの山なる音羽の瀧　九〇一
ひかりのどけき春の日に　一七一
ひき野　七一六
ひく手　七二〇
蜩　二八〇
ひさかたの　一七一
久方のなかにおひたる里　九三〇
ひぢて　八八
ひづ　二一八
ひづち　三七五
人がら　六六三
一さかり　一六五
ひとしほ　一一三
人だのめ　四五八
一つおもひ　五九〇
ひとつ心ぞ　九六六
人なき床　八〇一
人にもがもや　一〇三三
人に若菜賜ひける　一〇九
人の國　四四〇
ひとの心　五一
人の業し　六〇〇
人はいさ　一三〇
人ま　一三三
ひとまつ山　二三九
人め　三八二
人目つゝみ　六八二
一目見し　一六六
人めもる　五九四
人もすさめぬ　一三七
人目をもる　六八〇
人やりの道　四五六
ひとりある人　二九六
人わすれ草　八九二
人をあく　九九一
人を忍びにあひしりて云々　七四一
人を別れ　四四二
ひなのわかれ　九二三
ひの隈川　一〇一六
姫松　八八二
ひるめ　一〇一六
ひをりの日　五三五
ひんがしの五條わたりに云々　六五九

ふ

ふかき心　五八五
深草の帝の御時に云云　八二八
深草山　八一五
深くそめてし　九三
吹あげにたてる　三七四
吹あげの濱　三七三
吹きあへぬ　一七〇
ふきとふき　八〇五
富士の山の烟もたゝず　六八
ふすぶる　五五五
ふたみの浦　四九一
ふぢ衣　三七四
藤ごろも　八二四
淵瀬　五五〇
ふぢなみ　二〇一・二一五
藤ばかま　三一一
藤原のきみとし　四四四

藤原のこれをかが云
　云　四五七
藤原の高經　八三三
藤原の利基云々　八三五
藤原の敏行朝臣の業
　平朝臣の云々　七一九
藤原敏行朝臣のみま
　かりける云々　八一七
藤原の後蔭が云々　四五三
藤原三善　四三三
舟をしぞ思ふ　四八一
ふみしだく　五一一
冬ごもり　三八九
冬の加茂の祭　一〇三四
ふり出　二三七
ふりおける　九五五
ふりさけ見れば　四七三
ふりしきて　三八八
ふりにし　三一八
ふりはへて　一一〇
ふりゆく　一一七
ふる枝にさける　二九五
ふるからをの　八六七
ふるごと　九五五
ふるさと　一三〇
故里　一九三
ふるさと人　一六二
降るだにあるを　一七二
ふる年に春立ちける
　日　八七
布留の瀧　三一八
ふる人　七三八
ふるまひ　一〇三九
文室の康秀が云々　九〇九

へ

べみ　三五二
べらなり　一一一

ほ

ほいにはあらで　七五三
法皇西川に云々　八九三
法皇西川に云々　一〇〇二
ほがら〳〵と　六六四
綻びにける　一一五
ほそたに川　一〇一九
ほだし　九一〇
螢よりけに　六〇四
ほつえ　五五四
ほに出だす　六一
穗にいでて　三一四
ほにこそ　五九三
ほの〴〵と　四八〇
ほり植ゑじ　一七八
堀江　七三九
堀河のおほいまうち
　君　四一六
堀河の太政大臣云々　八一五
ほろゝ　九八六

ま

まうち君　九三
まうで　一五三
まうでたりけるに　一九八
まがき　三一八
籬が島　一〇三五
まがねふく　一〇一九
まがひせば　四〇二
まかり　六三三
まかりまうし　四四六
まかれりける時　三九一
まきの板戸　七〇七
まきもくの穴師の
　山　一〇一三
枕定めむ　五六九
枕よりあとより　九八一
まこも　六三〇
まさ木の葛　八五・一〇一四
まさご　四一一
まさで　八三四
まし　一〇一
ましら　一〇〇三
まじりなむ　一八一
増鏡　四〇七
まだ　二四二
まだき　三〇六
またく心　九七七
まだしき程　三一八
待たずしも　七〇八
待ちみて　一六六
松の葉の　八五
松のみどり　一一三
まつほど久に　七七七
まつ蟲　二一七
松山の波をかけ　六六
まどほ　七六三
まどろめば　六六八
まとゐ　八四六
まに〳〵　二〇九・四九五
まひ　九七二
前の棚橋　七四五
まめ　九九五
まめなる處　六一
稀なる色　九六〇
萬葉集　七一

み

見え　一六五
見えなゝむ　四五九
みかきもり　九六六

みがくれて　六〇六
み影　八二七
御蔭　一〇三〇
御笠と申せ　一〇二六
三笠の山　四七三
みかの原　四七九
みかは水　一六八
右のおほいまうち君
　云々　七四二
みくさ　一〇一六
御國忌　八二八
みこ此歌を云々　四九四
みこの宮のたちはき　九二八
みさぶらひ　一〇二六
見し　三四一
見しごとも　九四九
みそぎ　五五六
身ぞふり　四六五
みたらし川　五五六
道にあへりける云々　四七一
みちのくにへ　四四九
道もさりあへず　一九六
水莖の岡　一〇〇九
みづぐきぶり　一〇〇九
見つゝわがこし　一七三
水の秋　三七一
みつのあま　九三六
みつのこじま　一〇二六
水のしら波　七〇一
見てのみや　一四二
見てを　三七三
みながら　八四九
みなせ川　六三四
みな月　二四五
みなへしり　五〇九
源のさねが云々　四五四
みなれ　七五六
みなわ　六一一
身におはず　七五
峰にも尾にも　一三八
見はやさむ　一三七
見まく　六四八・八八八
見まれ見ずまれ　七〇〇
耳無の山　九八二
みむろ　一〇一一
御室の山　三五六
宮木　一〇三五
宮城野　七一〇
みやこじま　一〇三六
みやこ鳥　四八五
御息所　九四
宮づかへ　三五三
宮仕つかうまつらず　九二八
みやはなる　五三三
み山　一〇七
み山がくれ　一九九
み雪　三八四
見ゆとは見えじ　七〇〇
み吉野　八九
見らむ　九二
みるめ　五八一
みるめの浦　六八六
見るものからや　七〇三
三輪の山　七七八
三輪山　一八〇
みを　八六三
身をしる雨　七一九
みをつくし　六〇七
みをはやながら　九五七
身をわけて　七八三

む

むかしの香に匂ふ　一三〇
昔の手　八三九
むかしへ　二四〇
武藏野　八四九
武藏の國と下つふさ
　云々　四八四
むすびし水　八八
むすぼほれ　六七八
むつ言　九七七
空しきから　六〇九
むなしき空　五四六
胸はしり火　九八四
むらさきのねずりの
　衣　六七七
むら鳥の　六九三

め

目かれぬ　一三三
めざし　一〇二九
めでたき　一五九
めどにけづり花　五一三
めならぶ　七五九
目にみぬ人　五三四
女の親の思にて云々　八二六
めもはるに　六三三

も

もがな　四一四
もがみ川　一〇一七
もくづ　七五〇
もこそ　一八七
もじある　八四
藻鹽たれつゝ　九二四
もて出なむ　三七五
本あらのこはぎ　七一〇
もとすゑ　六三六
本康のみこ　四一九
もとゆひ　七〇九
ものうかる　一〇二
ものうく　二〇八

物思　一三九
ものから　三三六
ものにもが　五八八
物とはなしに　三二一
物のたうび　六三三
物の名　四四九
物へまかりけるに　三〇九
ものゆゑに　一八五・六四八
物をいひつきて　四七一
もみぢつゝ　二六四
もみぢぬ　四〇五
もみぢをしむ　三六七
もゝ草　三一六
百しきを　九五七
もゝちどり　一一七
もや　一六六
もる山　三三一
もろこし　四七三
もろこしの吉野　九九三

や

やさしき　一〇〇〇
八十島かけて　四七七
やたび　一〇一三
八橋　四八三
宿　二七九
宿の梅ぞも　一三一
やどりして　一九八
やなぎか　一一六
やぶし　八五一
八重に　四七九
八重葎して　九三七
山おろしの風　三五七
やまがき　五〇五
山風に櫻吹巻き　四六一
山かづら　一〇一三
山崎　四五四
やまざくら　一三八
山里　一九〇
やまし　五一五
山下風　四三一
山した水の　八二
山科の　六八九
山たちばな　六八九
山田もる　三七三
やまと歌　五一
やまと撫子　三一四
山にのぼりて　四六〇
山のほうし　九二〇
山彦　二三八
山人　一〇一三
山姫　九〇〇
山ぶき　一〇二
山吹の花色衣　九七六
山べ　一四七
山ほとゝぎす　二二五
山わけ衣　八九九
闇のうつゝ　六七二
やよつ光　九六七
やよひ　一四七
彌生のついたち云々　六四三
彌生ばかりに云々　六三一
やよや待て　二三〇

ゆ

ゆきかひぢ　八四三
ゆきかふ　二四五
雪け　三八七
雪のふりけるを　九七
ゆきのまに〳〵　四五八
ゆきぶり　一一九
ゆくへ知らねば　九四六
ゆたのたゆたに　五六三
夕蔭　三一四
ゆふさりつかた　四五九
夕されば　三八四
ゆふだすき　五四四
夕づく夜　三七八
夕づく夜さすや　五四七
ゆふつけ鳥　五八五
ゆへる　八八七
ゆめ　六七七

よ

横ぼりふせる　一〇三一
よき　一七二
よききぬ　七五
吉野　八九
よし野川　二〇四
よし野の瀧　八九八
よしみねのつねなり　四二三
よそに　一三五
夜たゞ　二三七
四つの時こゝの返り　七八
淀　五五〇
よどかは　五二三
世と共に　六一一
よどのわかごも　七六三
世にふる　一九四
世の常ならば　一八三
世の中を　六七
よはひ　四一三
よひ　二六五
宵ながら　二四二
よひ〳〵　六二四
よぶこ鳥　一一八
よみて入れ　九四五
よみ人しらず　八九
よめる　八七
夜やくらき　二三二
よるの衣　五九八
よるの袂　六二六
よるの錦　三六七
よるはすがら　五七七

よるべなみ　六四七
よろづ代かねて　八八四
世をうぐひす　七九〇
世をうぢ山　九四三
世をうみべた　六九〇
世を試みむ　七五七
夜をさむみ　二八七
世をやつくさむ　八八五

り

りうたむ　五一一
龍門　八九九
諒闇　八二七
綾綺殿　三三七

わ

わかえ　九六七
若草のつま　一〇四
わかず　三九〇
わがせこ　一一三
若菜　一〇六
わがならむ　九四六
わが身のから衣　七九七
わが身を　三七八
わが身をうらと　六五一
わきて　三三七
わくらばに　九二四
忘れがたみ　七二八
わすれ草　七六七
わたつみ　八八七
わたの原　四七七
わたり河　八一三
渡りはてねば　二五五
わびし　二九〇
わびしき　九五
わびしらに　五一七
わび人　三六三
わりなき　七〇三
われかはあやな　五九四
われから　七九五
われて　九九八
われとはなしに　二四〇
我にあらねばや　五七五
われも散りなむ　一六五
われをふるせる　八〇七

ゐ

井手　二〇五

を

尾　一三八
をかたまの木　五〇五
岡のやかた　一〇〇九
をぐらの山　三七九
をぐろ崎　一〇二六
筬をあらみ　七六二
をさ〳〵しく　九六七
をしげにもあるか　一五一
をしほの山　八五三
をち　四四九
をちかた人　九七二
をちこち　一一八
男山　三〇二
男山の昔　六四
小野　三六八
をのこ　二三七
斧の柄のくちし　九四九
小野の篠原　五六〇
小野千古が　四三七
をのへ　二九四
をばな　五一二
をふ　八七二
をふの浦　一〇三三
女郎花　三〇一
をみなへしあはせ　三〇五・五一〇
をりければ　九三
折りてなりけり　一三五
をりはへて　三三九
をれるばかり　三〇一
女を見て　七四

類句索引

▽この索引は、古今集の歌の上句、或は、下句のみを知れる場合にその全體をもとめ、又は、その部立、作者、詞書等をもとむる便に供する爲である。

▽この索引は、古今集の歌につきて、その評釋を檢する便に供するものである。

▽この索引は、短歌にては、その初句と四句とを摘み、旋頭歌にては、その前句及び後句の初句を摘みて、これを五十音順に排列し、一々、本書『評釋』の頁數を記した。

▽同一の句二つ以上ある時は、更にその次の句を、五十音順に擧げ、上に接續の記號――を附し、下に、頁數を記した。

▽古今集中、長歌五首のみは、便宜上畧いたがなほ、その反歌は收めた。

あ

あかざりし　九五〇
あかずして
—つきのかくるる　八六四
—わかるるそでの　四六七
—わかるるなみだ　四六三
あかずちりぬる　七九一
あかずとやなく　二三五
あかずもきみを　六七三
あかずわかるる　四四二
あかつきの　七六四
あかつきばかり　六五二
あかでこそ　七二八
あかでもひとに　四七〇
あかなくに　八六四
あかぬいろかは　一二五
あかぬこころに　四三三
あきかぜに
—あふたのみこそ　八〇六
—あへずちりぬる　三五八
—かきなすことの　六一九
—こゑをほにあげ　二八九
—はつかりがねぞ　二八三
—ほころびぬらし　九七九
—やまのこのはも　七二六
あきかぜの
—ふきあげにたてる　三四二
—ふきうらがへす　八〇六
—ふきとふきぬる　八〇五
—ふきにしひより　二五一
—ふきにしひより　三二八
—みにさむければ　五九九
あきかぜは　七八三
あききぬと　二四七
あきぎりにのみ　三〇八
あきぎりの
—ともにたちいでて　四五四
—はるるときなき　六一五
—はれてくもれば　九七九
あきぎりは　三三六
あきくるかりは　五二五
あきくるよひは　二六五
あきくれど
—いろもかはらぬ　四三〇
—つきのかつらの　五二三
あきくれば　九七八
あきちかう　五一〇
あきといへば　八〇七
あきならで
—あふことかたき　三〇六
—おくしらつゆは　七六一
あきなれば　六一六
あきにはあへず　三三三
あきのきく　三四八
あきのこのはの
—ちればなりけり　三六一
—ぬさとちるらめ　三六七
あきのこのはを　三二九
あきのしぐれと　四六五
あきのたの
—いねてふことも　七九三
—ほにこそひとを　五九三
—ほのへをてらす　五九三
あきのつき　三六〇
あきのつゆ　三三一
あきのつゆさへ　五九一
あきののに
—おくしらつゆは　三〇〇
—ささわけしあさの　六五〇
—つまなきしかの　九八六
—なまめきたてる　九七八
—ひとまつむしの　二七九
—みだれてさける　六一七
—みちもまどひぬ　二七八
—やどりはすべし　三〇三
あきののの
—くさのたもとか　三一四
—をばなにまじり　五五三
あきのやま　三六八
あきのゆふべは　五九二
あきのよの
—あくるもしらず　二七五
—つきのひかりし　二七三
—つゆをばつゆと　三三〇
あきのよは　二七六
あきのよも　六六二
あきのわかれは　四五三
あきはいろいろの　三一五
あきはかぎりと
—おもひしりぬる　三七七
—みむひとのため　三七五
あきはぎに　二九二
あきはきぬ

—いまやまがきの　五〇五
—もみぢはやどに　三五八
あきはぎの
—したばいろづく　二九六
—はなさきにけり　二九四
—はなをばあめに　四六四
—ふるえにさける　二九五
あきはぎも　二七五
あきはぎを　二九三
あきはふかくも　三三六
あきよりさきの　七八三
あきをおきて　三五一
あけたてば　五九〇
あけぬとて
—いまはのこころ　六六四
—かへるみちには　六六五
あさきせにこそ　七三一
あさぢふの　五六〇
あさつゆの　八二五
あさつゆを　五〇九
あさなあさな　五六七
あさなけに　四四四
あさぼらけ　三九八
あさみこそ　六四六
あさみどり　一一六
あしがもの　五八三
あしたづの
—たてるかはべを　八九三
—ひとりおくれて　九五五
あしたづのねに　七七七
あしたのとこぞ　六一二
あしたのはらは　三三四
あしひきの
—やましたみづの　五四八
—やまたちはなれ　五〇四
—やまだのそほつ　九八二
—やまのまにまに　九一八
—やまべにいまは　八二六
—やまべにをれば　五三三
—やまほととぎす　二三九
—やまほととぎす　五五四
あしべより　八〇四
あすかがは
—ふちはせになる　七〇四
—ふちにもあらぬ　九四八
あすさへふらば　一〇八
あすしらぬ　八三三
あだなりと　一四八
あだなるものと　五〇八
あだにはならぬ　五三六
あたらしき　一〇〇五
あぢきなし　五一九
あづさゆみ
—いそべのこまつ　八八四
—おしてはるさめ　一〇八
—はるたちしより　二〇七
—はるのやまべを　一九六
—ひきののつづら　七一六
—ひけばもとすゑ　六三六
あづまぢの　六二五
あとはかもなく　三九五
あないひしらず　九九八
あなうのはなの　九一六
あならめに　五〇二
あなかしがまし　九七八
あなこひし　七一一
あなたおもてぞ　八六四
あなたおもても　八五九
あはずして　六三一
あはずばなにを　五四一
あはでこしよぞ　六五〇
あはですぐせる　六三七
あはぬよの　六四九
あはれあなうと　八七五
あはれてふ
—ことこそうたて　九一〇
—ことだになくば　五五七
—ことのはごとに　九一一
—ことをあまたに　二一七
あはれとはおもふ　八八一
あはれとも　七九四
あはれとやいはむ　九一三
あひくるみをば　五一九
あひにあひて　七六〇
あひみずば　六九八
あひみぬさきに　四六六
あひみぬも　七九七
あひみねば　七六三
あひみまく　九八四
あひみむことは　一八二
あふからも　五〇四
あぶくまに　一〇二四
あふことなぎに　六五五
あふことの
—いまははつかに　九九三
—なぎさにしよる　六五四

─もはらたえぬる　七九九
あふことは
─くもゐはるかに　五四〇
─たまのをばかり　六九三
あふことを　八〇九
あふごなきこそ　九九七
あふさかの
─あらしのかぜは　九四六
─せきしまさしき　四四二
─せきにながるる　五八六
─ゆふつけどりに　七四六
─ゆふつけどりも　五八五
あふにしかへば　六四〇
あふひとがらの　六六三
あふまでの
─かたみとてこそ　七五〇
─かたみもわれは　七四九
あふみのや　一〇二三
あふみより　一〇〇八
あふをかぎりと　六三七
あまぎるゆきの　四〇〇
あまぐもの　七八〇
あまつかぜ　八五四
あまつそらなる　五四二

あまつほしとぞ　三三九
あまとぞわれは　八九一
あまのがは
─あさせしらなみ　二五五
─くものみをにて　八六三
─もみぢをはしに　二五三
あまのがはらに
─おひぬものゆゑ　三〇六
─たたぬひはなし　二五一
─われはきにけり　四九三
あまのかはらを　九七七
あまのかる　七九五
あまのかるもに　九〇六
あまのすむ　七三六
あまのすむてふ　八〇二
あまのとわたる　二八九
あまのながせる　三七〇
あまのなはたぎ　九二三
あまのはら
─ふみとどろかし　七一五
─ふりさけみれば　四七三
あまびこの　九二五
あめとふるとも　三七二
あめにより　八九二

あめふれど　三三二
あめふれば　三三四
あめもなみだも　六六五
あめもふらなむ　七七四
あやなくあだの　三〇四
あやなくけふや　五三五
あやなくて　六五六
あやめもしらぬ　五二九
あらたまの　四〇四
あらたまれども　一一七
あらをたを　八〇二
ありあけの　六五二
ありあけのつきを　七〇八
ありしよりけに　七二八
ありそうみの　八〇三
ありてよのなか　一五九
ありとはきけど　五一五
ありとみて　五一二
ありとやここに　一三一
ありなばひとに　一六四
ありぬやと　九八二
ありはてぬ　九二七
あるをみるだに　八二三
あれたるやどに　三〇九

あれどもきみを　五四六
あれにけり　九四四
あわゆきの　五九四
あわをかたまの　五〇五
あをやぎの　一一五
あをやぎを　一〇一八

い

いかがさきちる　五二〇
いかがつらしと　五〇六
いかならむ　九一八
いかにせむとか　六七五
いかにせよとか　五二二
いかにちれとか　一七二
いかにねしよか　五六九
いかにふけばか　七七六
いきうしといひて　四五六
いくそばくわが　五一四
いくばくの　九七六
いくよかへしと　八八三
いくよしも　九〇六
いけにすむ　六九二

いけのそこにも　三四七
いざけふは　一八〇
いざここに　九四一
いざこころみむ　五七一
いざさくら　一六四
いささめに　五一八
いざとこたへよ　一〇三八
いざやどかりて　一五一
いしはしる　一四一
いせのあまの　七〇一
いせのうみに　五六四
いせのうみの　五六五
いそのかみ
—ふりにしこひの　九八〇
—ふるからをのの　八六七
—ふるきみやこの　三三三
—ふるのなかみち　六九九
いそのなみわけ　八五六
いたくなわびそ　一三七
いたづらに
—すぐるつきひは　四一八
—ゆきてはきぬる　六四八
いたらぬさとも　八六二
いつかちとせを　三四五
いつかはゆきの　九四〇
いづくにか　九一五
いづくをみつの　九三七
いづこをしのぶ　八〇〇
いつしかと　九七七
いつしかとのみ　二六〇
いつとても　五九二
いつともわかぬ　五四七
いつのひとまに　一三三
いつのまに　三三〇
いつはとは　二六五
いつはりと　七三五
いつはりの
—なきよなりせば　七三五
—なみだなりせば　六一三
いつまでか　一八二
いつまでわがみ　五五五
いづらはあきの　九七七
いづれのひとか　九七八
いづれみやこの　四八八
いづれをうめと　四〇三
いづれをさきに　八三二
いづれをみちと　四六九
いでひとは　七二四
いでやこころは　九八九
いでゆかむ　九九〇
いでわれを　五六三
いとかくかたき　七六七
いとせめて　五九八
いとどふかくさ　九三四
いとによる　四八九
いとはるる　九九一
いとはれてのみ　七五八
いとはやも　二八五
いなおほせどりの　三七三
いなにはあらず　一〇二七
いなばそよぎて　三五〇
いなばのそよと　六一八
いなばのつゆに　三七四
いなやおもはじ　九八八
いにしへに
—ありきあらずは　四二〇
—なほたちかへる　七四一
いにしへの
—しづのをだまき　八六九
—のなかのしみづ　八六八
いぬがみの　一〇三八
いぬるよの　六六八
いのちだに　四五四
いのちとて　五一七
いのちにも　六三五
いのちやは　六四〇
いはでこころに　五八六
いはねばこそあれ　五五一
いはのかけみち　九一七
いはふこころは　四二四
いはほとなりて　四〇九
いはほにもさく　三九〇
いはまゆく　七〇一
いまいくか　五〇三
いまいくかありて　一〇五
いまこそあれ　八七〇
いまこむと
—いひしばかりに　七〇八
—いひてわかれし　七七一
いまさらに
—とふべきひとも　九三七
—なにおひづらむ　九二〇
—やまへかへるな　三三九
いましはと　七七二
いまぞしる　九三二
いまぞなくなる　二八六

いまぞのやまを　五〇九
いまはおもひぞ　七八五
いまはかぎりの
―いろとみつれば　三三四
―かどでなりけり　八四二
いまはこじと　七七三
いまはとて
―かへすことのは　七四三
―きみがかれなば　七九一
―わがみしぐれに　七七九
―わかるるときは　二六〇
いまははや　六三八
いまはわがみを　九九四
いまひとしほの　一一三
いまもかも　二〇二
いまもなかなむ　二一七
いまよりは
・つぎてふらなむ　三八五
・うゑてだにみじ　三一三
いもしるらめや　五四三
いもとわがぬる　一四三
いやとほざかる　八〇四
いやはかなにも　六六八
いよいよみまく　八七七

いりにしひとの　三九三
いるがごとくも　二〇七
いろかはる　三五〇
いろこそみえね　一二九
いろさへにこそ　三五二
いろどるきぎも　二八五
いろなしと　八五〇
いろにはいでじ　一八七
いろにはいでじと　五五八
いろにやこひむ　五五三
いろはかはらず　一七五
いろみえで　七九〇
いろもかはらぬ　七〇五
いろもかも
―おなじむかしに　一四四
―むかしのこさに　八三三
いろもなき　七三七
いろよりも　一三一
いろをこかをも　一二六

う

うきぐさの　五八六

うきごとあれや　九三八
うきごとしげく　九二七
うきごとを　二八九
うきたるこひも　六三三
うきておもひの　五六七
うきながら　八〇九
うきふしごとに　九二一
うきふししげき　九二〇
うきめのみ　七六〇
うきめをば　一〇三七
うきめをみつの　九三六
うきよには　九二七
うきよのなかに　二四〇
うきよのなかは　九一八
うきよのなかを　八三五
うぐひすさそふ　一〇〇
うぐひすだにも　九八
うぐひすとのみ　四九九
うぐひすの
―かさにぬふてふ　一二四
―こぞのやどりの　九九二
―たによりいづる　一〇一
―なくのべごとに　一八八
うすくやひとの　七二七

うたたあるさまの　九七七
うたたねに　五九八
うたてにほひの　一三五
うちいづるなみや　九九
うちつけに
―こしとやはなの　五一三
―さびしくもあるか　八三一
うちわたす　九七一
うちわびて　五八七
うつしこころは　七二四
うつせみの
・からはぎごとに　五一五
―よにもにたるか　一六一
―よのひとごとの　七二七
うつせみのよぞ　八一七
うつせみは　八一五
うつつあるものと　八一九
うつつにだにも　五一六
うつつには　六八〇
うつつにひとめ　六八一
うつふしぞめの　八〇三
うつりがこくも　八五九
うつりもゆくか　七七九
うつろはむとは　七三七

うつろはむとや　一五七
うつろひやすき　七八八
うつろひゆくを　三六四
うつろふあきに　三四一
うつろふいろに　一七八
うつろふからに　三五一
うつろふことも　七八九
うつろふはなに　一八八
うばたまの
—ゆめになにかは　五一六
—わがくろかみや　五三三
うべやまかぜを　三三一
うめがえに　九二
うめがかを　一三四
うめのかの　四〇二
うめのはな
—さきてののちの　一〇〇二
—それともみえず　四〇〇
—たちよるばかり　一三三
—にほふはるべは　一一七
—みにこそきつれ　九七五
うらこぐふねの　一〇二四
うらさびしくも　八三四
うらちかく　三九二
うらみてのみぞ　六五四
うらみても　八〇一
うらみてもなほ　八〇六
うらみむとのみ　七三六
うらめづらしき　二四九
うれしきを　八四七
うゑけむきみが　二〇三
うゑけむひとの　八三三
うゑしうゑば　三三七
うゑしとき　三四一
うゑていにし　七七五

え

えぞしらぬ　四四六
えだもたわわに　二九八
えだよりも　一六八

お

おいずばけふに　八八〇
おいせぬあきの　三四〇
おいにけらしな　九〇一
おいぬとて　八八〇
おいぬれば　八七七
おいらくの　八七四
おきつなみ　八九〇
おきてしゆけば　四四三
おきてわかれし　六六六
おきのゐて　一〇三六
おきひむときや　五二五
おきふしよるは　六三三
おきへにも　五八二
おきまどはせる　三四九
おきもせず　六四三
おきゐてものを　九五〇
おくしらつゆの　五一三
おくとはなげき　五四四
おくやまに　二九一
おくやまの
—いはがきもみぢ　三五三
—すがのねしのぎ　五九五
おくれむとおもふ　九九三
おけるくさばも　五一〇
おしてるや　八七三
おそくいづる　八五九
おちたぎつ　九〇一
おちてもみづの　一六八
おつとはみれど　九〇三
おつるもみぢの　二六〇
おとにききつつ　五四〇
おとにぞひとを　六九八
おとにのみ　五三一
おとにはたてじ　五四九
おとにもひとの　七六五
おとにやあきを　三三三
おとはやま
—おとにききつつ　五三三
—けさこえくれば　二二一
—こだかくなきて　四五二
おなじえを　三三七
おなじこころに　五八八
おなじひとにや　七三九
おのがきぬぎぬ　六六三
おのがすむのの　三〇七
おのがものから　七四三
おほあらきの　八七二
おほかたの　二六三
おほかたは
—つきをもめでじ　八六一

―わがなもみなと　六九〇
おほかるのべに　三一〇
おほぞらの　三八三
おほそらは　七四八
おほぞらを　八六六
おぼつかなくも　一一八
おほぬさと　七二一
おほぬさの　七二〇
おほはらや　八五三
おもかげにのみ　一〇三六
おもはぬかたに　七二三
おもはぬなかぞ　七六九
おもはぬひとを　五七四
おもはむひとに　四四九
おもひいづる
―ときはのやまの　二二七
―ときはのやまの　五五一
おもひいづるぞ　六六七
おもひいでて　七四二
おもひきや　九二三
おもひくらしの　七七一
おもひけむ　九九〇
おもひしこころ　七三二
おもひしらずも
―とくるひもかな　七九七
―まどふてふかな　五〇七
おもひせく　九〇三
おもひそめてむ　七〇四
おもひたちぬる　四四四
おもひたはれむ　三一六
おもひつきせぬ　九〇七
おもひつつ　五九七
おもひのいろの　九八二
おもひのみこそ　五三六
おもひはかけじ　三三六
おもひはなれぬ　九一〇
おもひみだれて　五六八
おもひやる
―こしのしらやま　九四一
―さかひはるかに　五七五
おもひやれども　五四六
おもふてふ
―ことのはのみや　七〇五
―ひとのこころの　九八八
おもふてふこと　五七三
おもふどち
―はるのやまべに　二〇六
―ひとりひとりが　六七九
―まとゐせるよは　八四六
おもふとも
―かれなむことを　七九一
―こふともあはむ　五六三
おもふなかをば　七一五
おもふには　五五八
おもふはやまの　二八〇
おもふひとこそ　九一九
おもふより　七三五
おもへどえこそ　七二〇
おもへども
―おもはずとのみ　九八八
―なほらとまれぬ　九八五
―ひとめづつみの　六八二
―みをしわけねば　四四一
おろかなる　六〇一

か

かがみにみゆる　八〇一
かがみのかげに　五一三
かがみやま　八七六
かからぬやまの　九八五
かがりびに　五七九
かがりびの　五八〇
かかれるえだに　九二
かきくらし
―ことはふらなむ　四六八
―ふるしらゆきの　六〇六
かきくらす　六七二
かきほにさける　七一一
かぎりなき
―おもひのままに　六八〇
―きみがためにと　八四八
―くもゐのよそに　四三六
かぎりなく　四六八
かくこそはみめ　七〇一
かくこひむ　七一四
かくしつつ
―とにもかくにも　四一三
―よをやつくさむ　八八五
かくてもへぬる　七九五
かくばかり
―あふひのまれに　五〇六
―をしとおもふよを　二六七
かくるとすれど　六九二
かくれぬの　九八七

かけておもはぬ　六二四
かけてねにのみ　八三七
かけてのみやは　七八二
かげばかりのみ　七六六
かげみしみづぞ　三八三
かけりても　一〇三五
かげろふの　七三八
かさへなつかし　二〇三
かしらのゆきと　九四
かずかずに
—おもひおもはず　七一九
—われをわすれぬ　八三九
かすがのに　四二四
かすがのの
—とぶひののもり　一〇五
—ゆきまをわけて　五三七
—わかなつみにや　一一〇
かすがのは　一〇四
かずさへみゆる　二六九
かずはたらでぞ　四八七
かすみたち　九七
かすみたつ　一八七
かぜぞたよりの　五三二
かぜのうへに　九四七
かぜのおとにぞ　二四七
かぜのまにまに　七八〇
かぜはこころに　一七三
かぜふくごとに
—うきしづむたま　五〇二
—ものおもひぞつく　六二三
かぜふけど　九〇二
かぜふけば
—おきつしらなみ　九五一
—おつるもみぢば　三七二
—なみうつきしの　六九一
—みねにわかるる　六二九
かぜよりほかに　二八一
かぜをまつごと　七一〇
かぞふれば　八七三
かたいとを　五四一
かたちこそ　八五八
かたへすずしき　二四五
かたみこそ　七五〇
かぢにあたる　五二〇
かづけども　五〇二
かつこえて　四五七
かつみながらに　四四〇
かつみるひとに　六九七
かつみれど　八六二
かなしきものと　二六三
かねてうつろふ　三二五
かねてぞみゆる　一〇二三
かねてより　六五五
かのかたに　五三一
かはかぜさむし　四七九
かはかぜの　二四八
かはづなく　二〇五
かはとみながら　六八二
かはのせに　六〇六
かひがねを
—さやにもみしが　一〇三一
—ねごしやまごし　一〇三二
かへすがへすぞ
—つゆはそめける　五一六
—ひとはこひしき　五六八
かへすははなの　四六二
かへるがへるも　八七九
かへるさまには　四五七
かへるみちにし　二一〇
かへるやま
—ありとはきけど　四三九
—なにそはありて　四五〇
かみがきの　一〇一一
かみぞしるらむ　四二一
かみだにけたぬ　九八三
かみなづき
—しぐれにぬるる　八二三
—しぐれのあめの　九七三
—しぐれふりおけ　九五四
—しぐれもいまだ　三二五
かみなひの
—みむろのやまを　三六六
—やまをすぎゆく　三六九
かみのみまへに　一〇一一
かみはうけずぞ　五五六
かみよのことも　八五二
かめのをの　四一七
かよへるそでの　六一一
からくもわれは　八七三
からくれなゐに
—うつろひにけり　六二八
—みづくくるとは　三六四
からくれなゐの　二二七
からごろも
—きつつなれにし　四八三
—たつひはきかじ　四四三

——なればみにこそ　七八二
——ひもゆふぐれに　五六八
からはほのほと　一〇三五
かりくらし　四九三
かりごもの　五四三
かりそめの　八四二
かりてほす　九〇四
かりにだにやは　九三五
かりにのみこそ　七六〇
かりのくる　九〇七
かりのなみだや　三三〇
かれなであまの　六五一
かれにしひとは　四〇三
かれはてむ　七〇四
かれゆくきみに　七一八
かれるたに　三七五
かをたづねてぞ　一二八
かをだににほへ　四〇一
かをだにぬすめ　一七六

き

きえあへぬゆきの　九三
きえかへりてぞ　六〇五
きえずはありとも　一四九
きえてものおもふ　六〇六
きえぬものから　八八六
きえはつる　四八九
きぎのこのはの　三六五
きこゆるそらに　二七〇
きしにおふてふ　一〇四〇
きしのひめまつ　八八二
きたへゆく　四八七
きてもとまらぬ　四五〇
きにもあらず　九二一
きのふけふとは　八四一
きのふこそ　二五〇
きのふといひ　四〇六
きのふのふちぞ　九〇五
きみがうゑし　八三五
きみがおもひ　九三九
きみがかたみと　四六七
きみがこころに　七六六
きみがこころは　五八九
きみがこぬよは　七六四
きみがさす　九七三
きみがため　一〇九
きみがちとせの
——ありかずにせむ　四二一
——かざしとぞみる　四一九
きみがなも　六七四
きみがみかげに　一〇三〇
きみがみかげの　八二七
きみがみよをば　四一一
きみがやちよに　四一三
きみがゆききを　七一六
きみがゆく　四五八
きみがよに　九六五
きみがよは　一〇三一
きみがよまでの　八一四
きみがわかれし　八三三
きみがわかれを　四五二
きみこずば　七〇九
きみこふる
——なみだしなくば　六一〇
——なみだのとこに　六〇七
きみしのぶ　二七七
きみといへば　六九九
きみならで　一三六
きみにこひつつ　五五四
きみにつかへむ　一〇二〇
きみにより　六九四
きみまさで　八三四
きみやこし　六七〇
きみやこむ　七〇七
きみわたりなば　二五二
きみをおきて　一〇二八
きみをおもひ　八八九
きみをのみ
——おもひこしぢの　九四〇
——おもひねにねし　六三五
きみをばまして　四六四
きみをばやらじ　一〇二三
きよたきの　八九九
きりぎりす　二七四
きりたちて　三二四
きりたちわたり　二五四

く

くさのはつかに　五三七
くさのまくらに　四九〇
くさはみながら　八四八
くさふかき　八一八

くさむらごとに　二七六
くさもきも　三三三
くちしところぞ　九四九
くべきほど　五〇〇
くもかくせども　八六六
くものあなたは　三九六
くものあはだつ　一〇三七
くものいづこに　二四二
くものうへまで　九五五
くものふるまひ　一〇三九
くもはれぬ　九九四
くももなく　七五八
くもりひの　七三七
くもるときなく　四三一
くもゐにのみも　六一九
くもゐにも　四四七
くらせるよひは　五七六
くらぶのやまも　二七三
くるあきごとに　三一一
くるしきものと　五八七
くるしとのみや　五六五
くるとあくと　一三三
くるるかと　二三五
くれなばなげの　一八〇
くれなゐに　九九一
くれなゐの
—いろにはいでじ　六八三
—はつはなぞめの　七三三
—ふりでつつなく　六二七
くれなゐふかき　三六四

け

けさきなき　三一
けさなくこゑの　二八二
けさはしも　六六七
けさはつかりの　七七五
けさふくかぜに　二八四
けぬがうへに　三九九
けぬとかいはむ　五九五
けふこずは　一四九
けふこそさくら　一五〇
けふのみと　二一三
けふはひとこそ　八三三
けふはまちみて　一六六
けふひとを　一〇三七
けふよりは　二六〇
けぶりたち　五一八
けふわかれ　四三八

こ

こえぬまは　六三一
こがくれたりと　九六六
こきちらす　八九六
こけのたもとよ　八二九
ここぞとまりと　八九四
ここらのとしを　四三六
ここらのひとに　一〇〇〇
こころあてに　三四九
こころありとや　七三〇
こころがへ　五八七
こころから　四九九
こころこそ　七八九
こころざし　九三
こころしあきの　七三五
こころぞともに　五二七
こころづがらや　一七二
こころづくしの　二六一
こころにしみて　四四九
こころのあきに　八〇五
こころのうらぞ　七一四
こころのゆきて　四二五
こころばかりは　四三七
こころはきえぬ　一〇〇二
こころはきみか　六四七
こころばせをば　五一八
こころははなに　八五八
こころひとつを
—さだめかねつる　五六四
—たれによすらむ　三〇五
こころぼそくも　四八九
こころよわくも　七九七
こころをいづち　六〇九
こころをきみに　四四一
こころをぞ　七〇三
こころをぬさと　四四八
こころをひとに　五三九
こしときと　一〇三六
こじまのさきの　二〇二
こしをにほひぞ　五一一
こずゑはるかに　二三一
こぞとやいはむ　八七
こぞのなつ　二三六

こたへするまで　五七三
こたへぬやまは　五八七
こづたへば　一九一
こてふににたり　七〇八
ことしげくとも　七一七
ことしのみちる　一九二
ことしはいたく　八七三
ことしばかりは　八一六
ことしより　一三六
ことぞともなく　六六二
ことなしぶとも　六九三
ことならば
—おもはずとやは　九八八
—きみとまるべく　四六二
—ことのはさへも　八三六
—さかずやはあらぬ　一六九
ことにいでて　六三四
ことのはさへに　七七九
こぬひとたのむ　七五三
こぬひとを　七七六
このかはに　三八七
このさとに　一六〇
このしたつゆは　一〇二六
このたびは　四九五
このはにふれる　九一九
このひとともとは　一八四
このまより　二六一
こひこひて
—あふよはこよひ　二五四
—まれにこよひぞ　六六一
こひしかるべき　五〇二
こひしきが　九八一
こひしきごとに　七四一
こひしきときの　一三五
こひしきに
—いのちをかふる　五七〇
—わびてたましひ　六〇九
こひしくば
—したにをおもへ　六七七
—みてもしのばむ　三五七
こひしとは　七一三
こひしなば　六三一
こひしねと　五七七
こひすれば　五七九
こひせじと　五五六
こひのみだれの　五五七
こひわたるまに　八〇九
こひわびて　六〇二
こひをしこひば　五六六
こふれども　七六八
こほれるなみだ　九〇
こまなべて　一九三
こまのあしをれ　七四五
こまもすさめず　八七二
こむといふなる　四一六
こむよにも　五七二
こめやとは　七七二
こよひこむ　二五九
こよろぎの　一〇二九
こりずまに　六五八
こりぬこころを　六三八
これなむそれと　五〇一
ころもにかかり　七七二
ころものそでの　八二六
ころもへずして　七一三
こゑうちそふる　四二六
こゑきくときぞ　二九一
こゑするかたに　二七八
こゑたえず　二一〇
こゑのうちにや　三七八
こゑのかぎりは　二三九
こゑばかりこそ　二三三
こゑはして　二二八
こゑふりたてて　二三五
こゑをだに　八四〇

さ

さかさまに　八七五
さかしらに　九九二
さかゆくときも　八七〇
さきそめし
—ときよりのちは　九〇三
—やどしかはれば　三五二
さきだたぬ　八三一
さきてとくちる　九二九
さくとみしまに　一六一
さくはなは　一八五
さくらいろに　一五二
さくらちる　一六三
さくらばな
—さきにけらしな　一四五
—ちらばちらなむ　一六一
—ちりかひくもれ　四一六
—ちりぬるかぜの　一七四

ーとくちりぬとも　一七〇
ーはるくははれる　一四七
さけるさかざる　一七九
ささのくま　一〇一六
ささのはに
ーおくしもよりも　六〇五
ーおくはつしもの　六五五
ーふりつむゆきの　八七一
さすがにめには　七八〇
さそふみづあらば　九〇九
さつきこば　二一八
さつきまつ
ーはなたちばなの　二一九
ーやまほととぎす　二一七
さつきやま　六一五
さてもやうきと　七五七
さとはあれて　三一八
さとびとの　七一八
さとをばかれず　九三二
さほのやまべを　三三五
さほやまの
ーははそのいろは　三三六
ーははそのもみぢ　三三二
さみだれに　一三一
さみだれの　三三六
さむしろに　七〇六
さやくしもよを　九九三
さよなかと　二七〇
さよふけて
ーあまのとわたる　六七三
ーなかばたけゆく　五一七
さらばなべてや　八五五
さりとてひとに　五七九

し

しかのなくねに　二九〇
しかもつれなく　八七五
しかりとて　九〇七
しきしまの　七一三
しきたへの　六三六
しぐれつつ　八〇五
しぐれのあめを　三八一
しげきのべとも　八三五
しげきわがこひ　六三三
しげさまされど　六〇三
したにかよひて
ーこひしきものを　六三四
ーこひはしぬとも　六八三
したにながれて　六三三
したにのみ　六八八
したのおびの　四七三
したばのこらず　三三一
したはれて　四五七
したゆふひもの　六七八
しづごころなく　一七〇
しでのたをさを　九七六
しでのやま　七八四
しにはやすくぞ　五七〇
しぬとぞただに　七一三
しぬるいのち　六〇八
しののめの
ーほがらほがらと　六六三
ーわかれををしみ　六六五
しのびにそでは　六一三
しのぶれど　六六一
しのぶれば　五七三
しばしみづかへ　一〇一六
しはつやま　一〇一〇
しひてゆく　四六九
しほのやま　四一一
しまがくれゆく　四八〇
しまこぎかくる　一〇一〇
しみはつくとも　六八五
しもとゆふ　一〇〇七
しものたて　三六三
しもやたび　一〇一二
しらかはの　六八七
しらくもに　二六九
しらくもの
ーこなたかなたに　四四八
ーたえずたなびく　九一三
ーやへにかさなる　四四九
しらずやひとを　五八三
しらたまと　六二八
しらつゆの　三一九
しらつゆも　三三一
しらつゆを　五〇九
しらなみに　三七〇
しらなみの　五三三
しらやまの　四八九
しらゆきの
ーところもわかず　三九〇
ーともにわがみは　一〇〇二
ーふりしくときは　四三一

—ふりてつもれる　三九四
—やへふりしける　八七九
しりてまどふは　九九五
しりにけむ　九一四
しるしなき　一九二
しるしらぬ　五三六
しるといへば　六九五
しるもしらぬも　一〇三一

す

すがるなく　四三五
すぎがてにのみ　二〇一
すきものとのみ　一〇〇二
すぐるよはひや　八七五
すすきおしなみ　三八五
すまのあまの
—しほやきごろも　七六二
—しほやくけぶり　七三二
すみけむひとの　九四四
すみぞめの　八二六
すみのえの
—きしによるなみ　六〇三
—まつほどひさに　七七七
—まつをあきかぜ　四二六
すみよしと　八九二
すみよしの　八八三
すむひとさへや　三九四
すむわれさへぞ　三六八
すめばすみぬる　九一三
するがなる　五四六
すゑさへよりこ　一〇一五
すゑつむはなの　五五二
すゑのまつやま
—こすかとぞみる　三九二
—なみもこえなむ　一〇二八

せ

せきのこなたに　五三三
せにかはりゆく　九四八
せみのこゑ　七一七
せみのはの
—ひとへにうすき　九八七
—よるのころもは　八五九
せむかたなみぞ　九八一
せをせけば　八二〇

そ

そこともいはぬ　二〇八
そこにかよふと　六八四
そこのかげさへ　二〇四
そこひなき　七三一
そでかとのみぞ　三四六
そでのみぬれて　六四五
そではかわかじ　四六八
そでひぢて　八八
そでふりはへて　一一〇
そのそこに　九七一
そへにとて　九九九
そまびとは　一〇三五
それかあらぬか　二三六
それをだに　七九九
そをだにのちの　七二八

た

たえずなみだの　八三六
たえずゆく　七三〇
たえてつれなき　六二九
たえてみだれむ　六八八
たえぬこころの　七二三
たがあきに　三〇六
たがさとに　七三三
たがそでふれし　一二一
たがたまづさを　二八三
たがために　八九八
たがための　三三九
たがぬぎかけし　三一二
たがまことをか　七一五
たがみそぎ　九五三
たぎつこころを　五四八
たぎつせに　六一三
たぎつせの
—なかにもよどは　五五〇
—はやきこころを　六八三
たきのおとには　六七六
たきのしらたま　四一七
ただいつはりに　九九六
ただここにしも　七二三
たたまくをしき　八四六

たたるにわれは　九八〇
ただわびひとの　八二三
たちいでてきみが　九五六
たちかくすらむ　一四四
たちかくれつつ　九八八
たちかへり　五三三
たちさかゆべき　一〇一二
たちどまり　三七二
たちなばみゆき　三九九
たちなむのちは　四三九
たちぬはぬ　八九九
たちわかれ　四三三
たちわかれなば　四三九
たちゐのそらも　六一五
たつことやすき　二一三
たづぞなくなる　一〇〇八
たつたがは
—にしきおりかく　三八一
—もみぢばながる　三五五
—もみぢみだれて　三五四
たつたがはにぞ　三六九
たつたのやまに　九五三
たつたのやまの　一九〇
たつたひめ　三六七
たづぬるひとも　七七八
たづねくればぞ　八八九
たつのとはやく　八三八
たてれをれども　九八一
たなばたつめの　一五三
たなばたに　二五八
たなびくやまの　一八六
たにかぜに　九九
たねしあれば　五六六
たのむかげなく　三六三
たのめこし　七四三
たのめしことぞ　六三八
たのめつつ　六三八
たはぶれにくき　九八二
たびゆくひとを　四三五
たまかづら
—いまはたゆとや　七五五
—はふきあまたに　七三三
たまくしげ　六六七
たまだれの　八五六
たまにもぬける　一一六
たまのゆくへを　五一五
たまのをばかり　六〇八
たまぼこの　七四四
たみのしまに　八八八
たむけには　四九七
たもとのみこそ　六二七
たもとゆたかに　八四七
たもとより　五〇一
たよりにも　五三九
たらちねの　四三七
たれかことごと　四〇二
たれかはるを　一八五
たれかまさると　三三九
たれかゝらびと　五一八
たれこめて　一六七
たれしかも　一四四
たれにおほせて　一九一
たれによそへて　六七九
たれみよと　八三八
たれをかも　八八五
たれをまつむし　二七九
たをりてもこむ　一四一

ち

ちぎりけむ　三五六
ちぐさにものを　六一七
ちぢのいろに　七三五
ちとせのかげに　四二三
ちとせのさかも　四一五
ちとせのためし　四二〇
ちとせをかねて　一〇〇五
ちどりなく　四二九
ちのなみだ　八一四
ちはやぶる
—うぢのはしもり　八八一
—かみなひやまの　三二六
—かみのいがきに　三三三
—かみのきりけむ　四一五
—かみよもきかず　三六四
—かものやしろの　五四四
—かものやしろの　一〇三四
ちよもとなげく　八七九
ちらぬかげさへ　三七二
ちらねども　三三四
ちりかかるをや　一三二
ちりかふはなに　一九七
ちりなむのちぞ　一五三
ちりならぬなの　六九五
ちりぬとも　一三五

ちりぬれば
—こふれどしるし　一五〇
—のちはあくたに　五〇七
ちりのまがひに　一六〇
ちりをだに　二四三
ちるといふことは　一三六
ちるとみて　一三五
ちるはなごとに
—たぐふこころか　二一一
—ぬきてとどめむ　一九五
ちるはなの　一八九
ちるはなを　一九四
ちるまをだにも　一六七
ちるををしまぬ　一七四

つ

つきかげに　六三〇
つきぐさに　三一七
つきふきかへせ　五一七
つきみれば　二七一
つきやあらぬ　七五三
つきよには
—こぬひとまたる　七四四
—それともみえず　一二八
つきよよし　七〇八
つくばねの
—このもかのもに　一〇三〇
—このもとごとに　九〇八
—みねのもみぢば　一〇三一
つつめども　六〇〇
つづりさせてふ　九七九
つねなきものと　六三一
つねよりことに　六二〇
つのくにの
—なにはおもはず　七一二
—なにはのあしの　六三二
つひにはいかが　一〇〇一
つひにもみぢぬ　四〇五
つひにゆく　八四一
つひによるせは　七二一
つひにわがみを　七八七
つまこふる　三〇七
つまもこもれり　一〇四
つもればひとの　八六一
つゆながら　三四〇
つゆならぬ　六二三
つゆをなど　八四一
つらきひとより　七八四
つらづゑのみぞ　九九七
つらぬきかくる　三〇〇
つるかめも　四二二
つれづれの　六四五
つれなきひとの　七九二
つれなきひとも　六三〇
つれなきひとを
—まつとせしまに　七七〇
—むかしとおもはむ　五七二
つれなさを　七九七
つれもなき
—ひとをこふとて　五七三
—ひとをやねたく　五四四
つれもなく　七八三

て

てごとにをりて　一四二
てもふれで　六三二
てるひのくれし　八二八
てるひのひかり　三六三

と

ときしもあれ　八三三
ときしもわかぬ　八四八
ときすぎて　七八五
ときぞともなく　六一四
ときはなる　二一三
としごとに
—あふとはすれど　一五七
—もみぢばながす　三七八
としにひとたび　二五六
としにまれなる　一四八
としのうちに　八七
としのおもはむ　一〇〇〇
としのをながく　二五八
としふるひとぞ　一四四
としふれば　一三八
としへぬるみは　八七六
としをへて
—きえねおもひは　六一六
—すみこしさとを　九三四
—はなのかがみと　二二三

—またもあひみむ　九七三
とどむべき　二一一
とどめあへず　八七五
とどめおきてば　四一三
となりのかたに　九九〇
とはにあひみむ　七一三
とびたつきじの　九八六
とぶとりの　五八五
とぶらひきませ　九四二
とへどこたへず　九七五
とめむとめじは　四六〇
とりとむる　八七五
とりよりさきに　六六五
とわたるふねの　八四五

な

なかがきよりぞ　九八〇
ながきおもひは　二七四
ながくやひとを　六五二
ながしとも　六六三
なかぞらにのみ　五四〇
なかぬかぎりは　九八
ながらのはしと　八七〇
ながるるみづに　一〇三七
ながるるみづの　八二一
ながれいづる　五三五
ながれてこひむ　五五一
ながれてしたに　五八〇
ながれてとだに　八〇九
ながれてなほも　七八六
ながれては　八一〇
ながれてはやき　四〇六
ながれてふかき　七三一
ながれてよに　六八七
ながれもあへぬ　三七一
なきこそわたれ
—あきのうければ　九〇四
—あきのよなよな　二八九
なきこふる　六七九
なきつるはなを　一八四
なきてわたると　七四二
なきとこにねむ　八四〇
なきとむる　二〇八
なきなぞとだに　七九八
なきなとりては　六五五
なきひとの　八三七
なきわたる　二九六
なくなみだ　八一三
なくなるこゑの　五〇〇
なくなるこゑは　一〇三
なくねそらなる　六一五
なくひとこゑに　二三四
なくゆふかげの　三一四
なくゆふぐれは　七七二
なげかむためと　八〇一
なげきくははる　九四五
なげきこる　九九七
なげきをば　九九八
なけどもいまだ　九二
なしとこたへて　八七四
なぞいろにいでて　三〇六
なぞよのなかの　九八八
なぞわがこひの　九八六
なつぐさの　五三三
なつとあきと　二四五
なつなれば　五五五
なつのよの　二三四
なつのよは　二四二
なつひきの　七一七
なつむしの　五九〇
なつむしを　六二九
なつやまに
—こひしきひとや　二三五
—なくほととぎす　二三五
などいひしらぬ　六六四
などかこころに　五九三
などかなみだの　七九四
などかほにいでて　五九四
などかわがみの　九二七
などほととぎす　二三三
なとりがは　六七五
などわがこひの　五五〇
なにおふみやの　九五四
なにかその　九九五
なにかはつゆを　二四一
なにかわかれの　四五四
なにこそきみを　八九〇
なにしおはば　四八五
なにしかひとを　六二五
なににふかめて　七六三
なにはかくれぬ　八九二
なにはがた
—うらむべきまも　九三七
—おふるたまもを　八九一
—しほみちくらし　八八八

なにはなる　九九四
なにひとか　三二一
なにめでて　三〇一
なにやまびめの　八九九
なにをうしとか
—ひとのかるらむ　七九三
—よただなくらむ　二三六
なにをさくらに　一五八
なにをして　一〇〇〇
なびくあさぢの　七三五
なべてくさばの　八〇五
なほうきときは　九二〇
なほうとまれぬ　二三六
なみだがは
—なにみなかみを　五六五
—まくらながるる　五七八
なみだせきあへず　六九〇
なみだにうかぶ　七五〇
なみだのかはに
—うきてもゆらむ　五七九
—うゑましものを　五八一
なみだのたまの　八二四
なみだのみこそ　六一六
なみぢはあとも　五二一
なみとともにや　二四八
なみにおもはば　七一四
なみのうつ　五〇一
なみのおと　五一九
なみのさわぎに　九一四
なみのはな　五二一
なみのはなにぞ　三二二
なみのをすげて　八九五
なみもてゆへる　八八七
なよたけの　九五〇
ならのみやこも　九四五
なりみてしがな　九八四
なりもならずも　一〇三三
なるるをひとは　七五八
なればよりなむ　九八七
なをむつまじみ　三〇三

に

にしきたちきる　三六六
にしこそあきの　三二七
にはもまがきも　三一八
にほひもあへず　五一四

ぬ

ぬぎかへがてら　六七九
ぬきみだる　八九七
ぬさとたむけて　三七九
ぬしさだまらぬ　二三三
ぬししらぬ　三一三
ぬしなきやどは　八三一
ぬしなくて　九〇一
ぬしやたれ　八五五
ぬばたまの　六七二
ぬふてふかさは　一〇一八
ぬるがうちに　八一九
ぬる.よのかずぞ　一五七
ぬれぎぬきせて　四六八
ぬれつつぞ　二一三
ぬれてのちは　三一七
ぬれてほす　三四五
ぬれてをゆかむ　一九九
ぬれにしそでと　六一三

ね

ねぎごとを　九九七
ねずりのころも　六七七
ねてあかすらむ　二六七
ねてのあさけの　一〇〇九
ねてもみゆ　八一七
ねにあらはれて　六九一
ねになきて　六一三
ねになきぬべき　五五四
ねぬなはたたじ　九八七
ねをこそなかめ　七九五

の

のがひがてらに　九九一
のこりなく　一五九
のちまきの　五一六
のとならば　九三五
のなるくさきぞ　八四九
のにもやまにも

　たちみちにけり　六九四
―まどふべらなれ　九一五
のはなければや　五一一
のべちかく　一〇三
のべのみどりぞ　一一三

は

はかなきものは　八四〇
はかなきよをも　八一九
はかなくて　六一二
はかなくひとの　六一九
はぎがはな　二九九
はぎのしたばも　二八七
はぎのつゆ　二九七
はしにわがみは　九二一
はちすばの　二四一
はつかりの
―なきこそわたれ　七九四
―はつかにこゑを　五四〇
はつせがは　九七三
はてはなげきの　九九七
はてはものうく　二〇八
はなかあらぬか　三四二
はながたみ　七五九
はなこそちらめ　三三七
はなごとに　五二四
はなしちらずは　一八二
はなすすき
―ほにでてこひば　六七八
―われこそしたに　七五五
はなぞむかしの　一三九
はなたちばなに　三三一
はなちらす　一五四
はなちれる　二〇九
はなとみて　九七七
はなとみるまで　三九七
はななきさとに　一三〇
はななきさとも　九七
はなにあかで　三一〇
はなにもはにも　五〇九
はなのいろは
―うつりにけりな　一九四
―かすみにこめて　一七六
―ただひとさかり　五一六
―ゆきにまじりて　四〇一
はなのかを　一〇〇
はなのきに　五一三
はなのきも　一七八
はなのごと　一八三
はなのさかりに　二〇五
はなのすがたぞ　九七九
はなのちりなむ　一五二
はなのちる　一九〇
はなのなか　五二七
はなのまぎれに　四六一
はなみつつ　三四六
はなみてくらす　四一八
はなみれば　一八七
はなよりさきと　三四八
はなよりも　八三三
はなをしみれば　一三八
はなをばひとり　七九一
ははそのもみぢ　三三六
はひまつはれよ　一九九
はやきせに　五八一
はやくいひてし　七八八
はやくぞひとを　五三三
はらはばそでや　七四〇
はるがすみ
―いろのちぐさに　一八六
―かすみていにし　二八六
―たつをみすてて　一二〇
―たてるやいづこ　八九
―たなびくのべの　九八四
―たなびくやまの　一五七
―たなびくやまの　七〇三
―なかしかよひぢ　五三五
―なにかくすらむ　一六七
はるかぜは　一七一
はるきぬと　九八
はるくることを　一〇一
はるくれば
―かりかへるなり　一一九
―やどにまづさく　四一九
はるごとに
―ながるるかはを　一三一
―はなのさかりは　一八二
はるさめに　二〇三
はるさめの　一七四
はるされば　九七二
はるたつけふの　八八
はるたてど　一〇二
はるたてば
―きゆるこほりの　五八九

―はなとやみらむ　九三
はるにおくれて　二一七
はるにしられぬ　三八九
はるのいろの　一七九
はるのきる　一一一
はるのこころは　一四〇
はるのしらべや　五一九
はるののに　一九七
はるののの　九八六
はるのひの　九四
はるのみやまの　九二八
はるのものとて　六四三
はるのよの　一三九
はるはいくかも　二一三
はるはすぐとも　一三四
はるばるきぬる　四八三
はるやとき　九七
はるよりのちは　九三九
はれぬおもひに　四五四
はれぬくもゐに　九〇八

ひ

ひかりとどめず　八六三
ひかりなき　九二九
ひかりのまにも　五九三
ひかりみねばや　六〇四
ひかりをのみぞ　九三〇
ひかりをはなと　五三三
ひぐらしの
―なきつるなべに　二八〇
―なくやまざとの　二八一
ひさかたの
―あまつそらにも　七五七
―あまのがはらの　二五二
―くものうへにて　三三九
―つきのかつらも　二七二
―なかにおひたる　九三〇
―ひかりのどけき　一七〇
ひさしきほどに　二五九
ひさしくも　七七六
ひとくひとくと　九七五
ひとこふる　九九七
ひとしくまねば　一〇一五
ひとしるらめや　五六〇
ひとしれず
―おもへばくるし　五五二
―おもふこころは　九五六
―たえなましかば　七九八
ひとしれぬ
―おもひのみこそ　六三四
―おもひやなぞと　五六一
―おもひをつねに　五八四
―わがかよひぢの　六五九
ひとだのめなる　四五七
ひとつおもひに　五九〇
ひとづてにのみ　六二一
ひととせに　四九四
ひとにあはむ　九八四
ひとにゝからぬ　六五八
ひとにこころを　五三三
ひとにしられぬ
―こひもするかな　六〇六
―はなやさくらむ　一八〇
ひとにつきなみ　九八四
ひとにはつげよ　四七七
ひとにもがもや　一〇三二
ひとのあきには　七三九
ひとのこころぞ　一七〇
ひとのこころに
―あかれやはせぬ　一四七
―しもはおかなむ　七九二
ひとのこころの
―あきしらければ　七九四
―あれてみゆらむ　七四七
―そらになるらむ　七八三
―はなとちりなば　七九〇
―はなにぞありける　七九〇
ひとのこころも　七三六
ひとのこころを
―みてこそやまめ　八〇二
―みてこそやまめ　九九四
ひとのことのは　七三五
ひとのこひしき　七九九
ひとのしるべく
―わがこひめやも　六八五
―わがこひめやも　一〇三九
ひとのためさへ　九三二
ひとのとがむる　一三三
ひとのみも　五七一
ひとのみる　一〇八
ひとはいさ
―こころもしらず　二三九
―われはなきなの　六五七
ひとはくれども　七四七

ひとはよそにも　七五七
ひとひもきみを　五四四
ひとひもみゆき　三八七
ひとふるす　九四五
ひとめづつみの　六八三
ひとめみし　一六六
ひとめもくさも　三八二
ひとめもる　五九四
ひとめゆゑ　五〇七
ひとめをもると　六八〇
ひともかよはぬ　八〇八
ひともとと　三四七
ひともみるかに　一〇一三
ひとやこひしき　五八五
ひとやりの　四五六
ひとよもゆめに　九四一
ひとりあるひとの　二九六
ひとりして　六一八
ひとりぬる　三六五
ひとりのみ
―ながむるよりは　三〇九
―ながめふるやの　七七〇
ひとわすれぐさ　八九二
ひとをあくには　九九一
ひとをおもふ
―こころこのはに　七八〇
―こころはかりに　六一九
―こころはわれに　五七五
ひとをこころに　四三六
ひとをしのぶの　七七〇
ひとをぞたのむ　五九九
ひとをとふとも　七四四
ひとをみぬめの　六〇〇
ひとをみるめは　六三六
ひのひかり　八五一
ひるはおもひに　五三一
ひろはばそでに　五〇一

ふ

ふかきこころに　八五〇
ふかきこころを
―しるひとのなき　五八六
―ひとはしらなむ　五八五
ふかきたにこそ　一〇〇〇
ふかくさの　八一六
ふかくさのやま　八一五
ふかくもひとの　七〇四
ふきくるかぜは　一八七
ふきなちらしそ　三五七
ふきまよふ　七七九
ふくかぜと　一九八
ふくかぜに　一八四
ふくかぜの　三六一
ふくかぜを　一八九
ふくからに　三三一
ふしておもひ　四二一
ふじのねの　九八三
ふじのやまこそ　五八四
ふしみのさとの　九四一
ふたたびとだに　二一〇
ふたたびにほふ　三五〇
ふたつなき　八六三
ふたみのうらは　四九一
ふぢごろも　八二四
ふみわけて　三五九
ふみわけてとふ　三八八
ふゆがはの　六二三
ふゆがれの　七八六
ふゆごもり　三九七
ふゆながら
―そらよりはなの　三九六
―はるのとなりの　九八〇
ふゆのいけに　六八四
ふゆもこほらぬ　六一一
ふりかくしてし　三五九
ふりにしこのみ　五一三
ふりにしさとの　八三一
ふりはへて　五一一
ふるさとさへぞ　二三六
ふるさとさむく　三九一
ふるさとと　一七五
ふるさとに　七四七
ふるさとにしも　二三九
ふるさとは
―みしごともあらず　九四九
―よしののやまし　三八七
ふるさとびとの　一六一
ふるひとみれば　七三八
ふるゆきは　三八六

へ

へにけむあきを　五一〇

ほ

ほかなるものは　九三九
ほかになくねを　三三七
ほかのちりなむ　一五四
ほそたにがはの　一〇一八
ほととぎす
—けさなくこゑに　八〇二
—こゑもきこえず　三〇七
—ながなくさとの　三三六
—なくこゑきけば　三三六
—なくやさつきの　五一九
—はつこゑきけば　三二三
—ひとまつやまに　三三九
—みねのくもにや　五一五
—ゆめかうつつか　六六六
—われとはなしに　二四〇
ほにいづるあきは　三一三
ほにいでてひとに　七五五
ほにいでてまねぐ　三一四
ほにはいでずも　一〇三七
ほにもいでぬ　三七四
ほのぼのと　四八〇
ほりえこぐ　七三九

ま

まがきがしまの　一〇三五
まがねふく　一〇一八
まきのいたども　七〇七
まきもくの　一〇一三
まくらのみこそ　五五九
まくらより
—あとよりこひの　九八一
—またしるひとも　六九〇
まこもかる　六三〇
まさきのかづら　一〇一四
まさごのかずは　一〇二一
まさしやむくい　九九〇
まだしきほどの　二一八
またるることの　七七三
まぢかけれども　五六一
まちしさくらも　一六七
まづしるものは　九一一
まつとしきかば　四三三
まづなげかれぬ　九〇七
まつはくるしき　七七六
まつひとに　二八二
まつひとのかに　一三三
まつひとも　一八四
まつむしのねぞ　二七七
まつもむかしの　八八五
まてといはば　七四五
まてといふに　一五八
まどひまされる　六〇四
まどふこころぞ　六三七
まどふゆめぢに　五七五
まどほにあれや　七六二
まなくちるとも　六三三
まなくときなく　一〇〇七
まなくもちるか　八九七
まひなしに　九七二
まめなれど　九九五

み

みかさのやまに　四七三
みきとないひそ　七九九
みさぶらひ　一〇二六
みさへながると　六四六
みずばこひしと　六九九
みずもあらず　五三五
みだれてあれど　九九五
みだれてのみや　五八二
みだれてはなの　一一五
みだれむとおもふ　七三三
みちしらば
—たづねもゆかむ　三七九
—つみにもゆかむ　一〇四〇
みちのくに　六五五
みちのくの
—あさかのぬまの　六九七
—あだちのまゆみ　一〇一五
—しのぶもぢずり　七三三
みちのくは　一〇二四
みちふみわけて　三五八
みちもさりあへず　一九六
みちゆきぶりに　一一九
みづぐきの　一〇〇九
みつしほの　六八六
みつともいふな　六七四
みづなきそらに　一七四

みづのあきをば　三七〇
みづのあわの　七八六
みづのうへに　八九四
みづのおもに
—おふるさつきの　九三八
—しづくはなのいろ　八三七
みづのはるとは　五三一
みづまさりなば　八一三
みづまさるとや　四六三
みてしひとこそ　五三八
みてのみや　一四三
みてもこころの　七四九
みてもまた　七五八
みどりなる　三一五
みなせがは　七八七
みなとやあきの　三七八
みなひとは　八二九
みねたかき　四三一
みねにもをにも　一三八
みねのこずゑも　三三八
みののくに　一〇二〇
みのまどふだに　五七五
みはすてつ　一〇〇一
みはてぬゆめの　六三五
みまくのほしき　八八七
みまくほしさに　六四八
みまさかや　一〇二〇
みみなしの　九八二
みむろのやまに　三五五
みやぎのの　七一〇
みやこいでて　四七九
みやこぞはるの　一四三
みやこのつとに　一〇二五
みやこしまべの　一〇三六
みやこはのべの　一〇七
みやこびと　九〇八
みやこまで　八九五
みやまがくれの　一九八
みやまには
—あられふるらし　一〇一四
—まつのゆきだに　一〇七
みやまより　三七七、
みよしのの
—おほかはのへの　七一四
—やまのあなたに　九一七
—やまのしらゆき　三九一
—やまのしらゆき　三九三
—やまべにさける　一四六
—よしののたきに　五〇五
みるかげさへに　・四〇六
みるひとも
—なきやまざとの　一五四
—なくてちりぬる　三六六
みるめなき　六五一
みるめにひとを　七〇一
みるめのうらに　六八六
みるものからや　七〇三
みるわれさへに　一六九
みれどもあかぬ　七〇三
みればなみだの　八三六
みわたせば　一四三
みわのやま　七七八
みわやまを　一八〇
みをうらしと　七九五
みをしるあめは　七一九
みをすてて　九三九
みをつくしとぞ　六〇七
みをはやながら　九五六

む

むかしのひとの　二一九
むかしはまたも　一八三
むかしへや　二三九
むかしもいまも　六五七
むかしをこふる　九一一
むしのごと　六一六
むしのねきけば　二六三
むすぶての　四七〇
むつごとも　九七七
むなしきからの　六〇九
むねのあたりは　六一〇
むねはしりびに　九八四
むらさきの
—いろこきときは　八四九
—ひともとゆゑに　八四八
むらとりの　六九三

め

めざしぬらすな　一〇二九
めづらしき
—こゑならなくに　四二六
—ひとをみむとや　七三八

めづらしげなく　六九九
めにこそみえね　七三七
めにはみえずて　二九三
めにはみえねど　三〇七
めにみぬひとも　五三四

も

もえてもはるを　七八六
もがみがは　一〇二七
もしほたれつつ　九二四
もとくだちゆく　八七一
もとのこころは
—わすられなくに　八六七
—わすれざりけり　二九五
もとのこころを　八六八
ものうかるねに　一〇二
ものおもふごとに　七四八
ものおもふことの　二六五
ものおもふときの　五六五
ものおもふやどの　二九六
ものおもふわれに　二三五
ものごとに　二六四
ものはながめて　五〇三
ものわびしらに　五一七
もみぢすればや　二七二
もみぢせぬ　三三三
もみぢにあける　四九七
もみぢのにしき　四九五
もみぢばの
—ちりてつもれる　二七九
—ながれざりせば　三七〇
—ながれてとまる　三六四
もみぢばは　三七五
もみぢはよるの　三六六
もみぢばを　八四〇
ももぐさの　三一六
ももちどり　一一七
もろこしの　九九三
もろこしも　七六九
もろともに　四五三

や

やどかすひとも　四九四
やどちかく　一三二
やどりさだめぬ　五〇四
やどりして　一九八
やどりせし
—はなたちばなも　二三三
—ひとのかたみか　三一三
やどるつきさへ　七六〇
やへむぐらして　九三七
やまかくす　四八八
やまかぜに　四六一
やまかぜにこそ　一一一
やまがつの　七四七
やまがはに　三七一
やまがはの　九五六
やまざくら
—かすみのまより　五三八
—わがみにくれば　一三八
やまざとは
—あきこそことに　二九〇
—ふゆぞさびしさ　三八二
—もののさびしき　九一三
やましたかぜに　四三一
やましたどよみ　二九二
やましなの
—おとはのたきの　一〇三九
—おとはのやまの　六八五
やましろの　七六三
やまたかみ
—くもゐにみゆる　四二五
—したゆくみづの　五五一
—つねにあらしの　五一四
—ひともすさめぬ　一三七
—みつつわがこし　一七三
やまたちばなの　六八九
やまだもる　三七三
やまにはるも　二〇九
やまのかすみを　八三九
やまのかひある　一〇〇二
やまのかひなく　九九八
やまのかひより　一四五
やまのこのはの　五三一
やまのこのはも　四三九
やまのたぎつせ　三八六
やまのにしきの　三六二
やまのはならで　八六三
やまのはにげて　八六四
やまのやまびこ　一〇五
やまのゐの　七六六
やまはいかでか　三三二

やまぶきの　九七五
やまぶきは　一〇三
やまほととぎす
—いつかきなかむ　二一五
—いまぞなくなる　一三〇
やまよりつきの　六六一
やまわけごろも　八九九
やみにこゆれど　一一七
やよやまて　一三〇

ゆ

ゆきかとのみぞ　一四六
ゆきかふひとの　三三四
ゆきかへり　七八一
ゆきげのみづぞ　三八七
ゆきぞふりつつ　一六三
ゆきとのみ　一七二
ゆきとのみこそ　一九三
ゆきとまるをぞ　九四六
ゆきのうちに　九〇
ゆきのまにまに　四五八
ゆきふみわけて　九三三
ゆきふりて
—としのくれぬる　四〇五
—ひともかよはぬ　三九五
ゆきふれば
—きごとにはなぞ　四〇三
—ふゆごもりせる　三八九
ゆきみるべくも　四五一
ゆきめぐりても　四七二
ゆきもわがみも　四〇四
ゆくかたのなき　五三三
ゆくとしの　四〇六
ゆくへさだめぬ　三五八
ゆくへしらねば　九四六
ゆくへもしらず　九四七
ゆくへもしらぬ　九五四
ゆくみづに　五七四
ゆたのたゆたに　五六三
ゆふぐれの　四五九
ゆふぐれは　五四二
ゆふされば
—いとどひがたき　五九一
—ころもでさむし　三八四
—ひとなきとこを　八〇一
—ほたるよりけに　六〇四
ゆふづくよ
—おぼつかなきを　四九一
—さすやをかべの　五四七
—をぐらのやまに　三七八
ゆふつけどりは　六六一
ゆふてもたゆく　五六三
ゆめうつつとは　六七三
ゆめかうつつか　六七〇
ゆめぢにさへや　七六八
ゆめぢには　六八一
ゆめぢにも　六二一
ゆめぢをさへに　六八〇
ゆめてふものは　五九八
ゆめといふものぞ　六〇八
ゆめとこそ　八一九
ゆめとしりせば　五九七
ゆめともしらず　九一三
ゆめにいくらも　六七三
ゆめにだに　七六九
ゆめにだも　七〇〇
ゆめのうちに　五七六
ゆめのうちにも　一九八
ゆめのかよひぢ　六〇二
ゆめのただぢは　六〇二
ゆめもさだかに　五七八

よ

よきもさかりは　八六九
よこぼりふせる　一〇三一
よしのがは
—いはきりとほし　五四九
—いはなみたかく　五三二
—きしのやまぶき　二〇四
—みづのこころは　六七六
—よしやひとこそ　七八八
よしのかはの
—たぎつせのごと　六九三
—よしやよのなか　八一〇
よしのさとに　三九八
よしのやまに
—みゆきふるらし　三八四
—ゆきはふりつつ　八九
よしみむひとは　二九七
よせてかへらぬ　八九三
よそながら　九九六
よそにして　五八八

よそにのみ
—あはれとぞみし　一三五
—きかましものを　七五六
—こひやわたらむ　四五一
よそにみて　一九九
よそのもみぢを　四三〇
よどがはの　七三一
よともに　六一一
よなよなかなかむ　五〇五
よにふれば
—うきごそまされ　九一七
—ことのはしげき　九三一
よのうきごとは　九一八
よのうきときの
—かくれがにせむ　九一七
—なみだにぞかる　八九六
よのうきめ　九一九
よのうきよりは　九一三
よのなかに
—いづらわがみの　九一二
—さらぬわかれの　八七九
—たえてさくらの　一四〇
—ふりぬるものは　八七〇
よのなかの
—うきたびごとに　一〇〇〇
—うきもつらきも　九一一
—うけくにあきぬ　九一九
—ひとのこころは　七八八
よのなかは
—いかにくるしと　一〇〇〇
—いづれかさして　九四六
—かくこそありけれ　五三四
—なにかつねなる　九〇五
—むかしよりやは　九一五
—ゆめかうつつか　九一二
よのなかを　九一六
よはにやきみが　九五一
よははるなれや　九〇三
よひのまに　九九八
よひのまも　六〇四
よひよひごとに　六五九
よひよひに
—ぬぎてわがぬる　六二四
—まくらさだめむ　五六九
よぶかくこしを　六六七
よぶかからでは　九九三
よぶかくなきて　二三一
よやくらき　二三二
よやふけぬらむ　四三八
よるこそまされ　六三六
よるさへみよと　三五二
よるのころもを　五九八
よるのたもとは　六二六
よるはこえじと　四五九
よるはすがらに　五七七
よるはほたるの　五九〇
よるべなみ　六四七
ょろづよかねて　八八四
よろづよふとも　一〇三四
よろづよを　四二三
よをいとひ　一〇〇三
よをいまさらに　三七五
よをうぢやまと　九四三
よをうみべたに　六九〇
よをさむみ
—おくはつしもを　四九〇
—ころもかりがね　二八七
よをすてて　九二〇
よをばなしとや　五一三
よをへておつる　九〇二
よをへてみれど　八九八

わ

わがいほは
—みやこのたつみ　九四三
—みわのやまもと　九四二
わがうへに　八四五
わがおもかげに　七〇〇
わがおもふひとに　七一六
わがおもふひとの　九八九
わがおもふひとは　四八五
わがかどに　二八四
わがかどの　一〇一五
わがきつる　三六五
わがきみは　四〇九
わがこころ　八六〇
わがこころから　六三五
わがこころとや　九〇一
わがごとく
—ものやかなしき　八一四
—われをおもはむ　七五七
わがごとものや　二七五
わがこひに　六二三

わがこひは
—しらぬやまぢに　六二七
—ひとしるらめや　五五九
—みやまがくれの　六〇三
—むなしきそらに　五四六
—ゆくへもしらず　六三七
わがこひを　六八九
わがころもでぞ　六〇五
わがころもでに　一〇九
わがころもでの　三三八
わがしたひもの　七三八
わがすむやどに　三〇九
わがせこが
—くべきよひなり　一〇三九
—ころものすそを　二四九
—ころもはるさめ　一一三
わがせこを　一〇二五
わがそでに　七六六
わがそのの　五五四
わがたまくらの　七六一
わがたましひの　九五〇
わがために　二六三
わがつらきにや　五〇七
わがなげきをば　六三四
わがなはたてじ　一〇二〇
わがねぬごとや　二七五
わがまたぬ　四〇三
わがみから　九三三
わがみひとつの
—あきにはあらねど　二七一
—ためになれるか　九一五
わがみひとつは　七五三
わがみふるれば　七四三
わがみむなしく　八〇三
わがみもくさに　八四一
わがみもともに　一九四
わがみよにふる　一九四
わがもとゆひに　七〇九
わがものおもひの　五九四
わがやどに　二〇一
わがやどの
—いけのふぢなみ　二一五
—きくのかきねに　六〇五
—はなふみしだく　五一一
—はなみがてらに　一五三
わがやどは
—みちもなきまで　七七〇
—ゆきふりしきて　三八八
わがやどをしも　二三二
わがよはひ　四一三
わかるとひとに　四四七
わかるれど　四六六
わかれては　四四〇
わかれてふ　四四九
わかれむことを　五〇四
わかれをとむる　八二〇
わかれをば　四六〇
わがゐるやまの　七八一
わぎもこに　一〇三八
わくらばに　九二四
わすらるる
—ときしなければ　五六八
—みをうぢばしの　八〇八
わすられがたき　三一二
わすられぬらむ　七五九
わすられむ　九五四
わすることの　八〇三
わするるときも　七五〇
わすれぐさ
—かれもやすると　七九二
—たねとらましを　七六七
—なにをかたねと　七九二
わすれては　九三三
わすれなむ
—とおもふこころの　七二八
—われをうらむな　七二九
わすれぬものの　七二七
わたつみと　七四〇
わたつみの
—おきつしほあひに　八八六
—かざしにさせる　八八七
—はまのまさごを　四一一
—わがみこすなみ　八〇二
わたのはら
—やそしまかけて　四七七
—よせくるなみの　八八七
わたらでやまむ　六五六
わたらぬさきに　二五〇
わたらばにしき　三五四
わたりはてねば　二五五
わたるとなしに　七五六
わびしらに　一〇〇二
わびぬれば
—しひてわすれむと　六〇八
—みをうきぐさの　九〇九
わびはつる　八〇〇

わびびとの
―すむべきやどと　九四五
―わきてたちよる　三六三
わりなくも　六〇九
われうぐひすに　一八九
われうちつけに　二三九
われおちにきと　三〇一
われおとらめや　六一六
われかとゆきて　二七九
われかひとかと　九三五
われさへともに　六四九
われてものおもふ　九九八
われにはひとの　九九二
われにをしへよ　一六四
われのみぞ　六三七
われのみや
―あはれとおもはむ　三一四
―よをうぐひすと　七九〇
われはけさ　五〇八
われはせきあへず　六〇一
われみても　八八二
われもおもひに　六二九
われやいをねぬ　七六九
われやははなに　一八九
われやわするる　四四六
われよのなかに　二三〇
われをおもふ　九八九
われをきみ　九三六
われをのみ　九八九
われをふるせる　八〇七
われをほしといふ　九八二
われをまつらむ　七〇六

を

をぐらやま　五一〇
をぐろさき　一〇三五
をしとおもふ　一九五
をしむから　四三九
をしむらむ　四六五
をしめども　二一〇
をちこちの　一一八
をとこやまにし　三〇二
をとめのすがた　八五四
をのへにたてる　八八五
をのへのしかは　二九四
をばすてやまに　八六〇
をふのうらに　一〇三三
をみなへし
―あきのかぜに　三〇五
―うしとみつつぞ　三〇二
―うしろめたくも　三〇九
―おほかるのべに　三〇四
―ふきすぎてくる　三〇七
をられぬみづに　一三一
をりつれば　一二一
をりてかざさむ　一二四
をりてみば　二九八
をりとらば　一五一

跋

（明治版初版）

おのれ蚤くより古今集を研鑽して竊に思へらく、契沖律師のは萬葉代匠の餘材にとゞまり、賀茂眞淵のは更にそを紹述したる打聽に過ぎず。本居宣長のは、その語學の楮餘にうつし出でたる遠鏡のみ。香川景樹に至り、始めて專心に攻究せしが如しと雖も、所謂正義を樹つるに急にして、しかも體裁を備へず、況やその內容形式に立ち入りて鑑賞論評したるが如きは、僅に百中に二三を數ふるのみと。乃ち深く以て憾としたりき。

たま〳〵明治二十八年の夏、某會の希望によりこの集を講ずることありき。よりて或は諸說を折衷し、或は謬說を排し、或は新說を立て、更に私見によりて論評を下せるに、皆人耳新しと聞きなしつゝ茲にはじめて評釋の業を思ひ立ちぬ。

抑も、延曆遷都以後、今日に至るまでの國歌界を支配したるは實に古今和歌集なりき。されば本集の研鑽は、卽ち上下千數百年間の國歌を研鑽するに値し、本集の鑑賞批判は、卽ち上下數十萬首の國歌を鑑賞批判するに該當す。こゝに於て、わが評釋事業の

容易ならざることに想到し、その責任の重且大なることを覺悟したり。

乃ち評釋事業の第一著手として、前賢の諸説を網羅蒐集し、本文の異同を考訂して一の稿本を作らむと志しつ。しかも傍らその研鑽をも續けしかば、意外に長時日を費し、殊に春部上の稿本の如きは、鎌倉に滯在中盜難に遭ひて失ひしが如き打撃を受け、漸く明治三十二年秋冬の交に至りて、その大部分を完成したり。

又五十音圖の小表一千葉を製しつ。各首の聲音轉換の逕路を調査し、音數の多少を檢するなどの用に供すべく。

準備は既に成れり。こゝに始めて評釋の筆を起し、その第一巻は明治三十三年の秋において脱稿し、發行世に問ふこととなりしは、實に明治三十四年一月の事なりき。幸にも世は好評を以て迎へたりき。

かくて一氣呵成に續々脱稿すべしと豫期せしを、思ひきや多くは研鑽猶足らざる憾ありて、執筆意の如くならざらむとは。稿を屬するに、一日に就るところ僅に一首乃至二首、或は一首にして日をわたるものすら少からざりき。しかも稿を脱して印刷に附せむとするに臨み、更に一校するに、意に滿たざるもの十に五六、卽ち雌黄を施すに

塗抹縱横殆ど完膚なきに至りぬ。爲に澁滯又澁滯、遷延又遷延、漸く本年に至りて全部脱稿を告げぬ。今その毎卷發行の年月を記せば實に左の如し。

第一卷　明治三十四年一月
第二卷　明治三十五年八月
第三卷　明治三十七年十一月
第四卷　明治三十九年九月
第五卷　明治四十一年一月

五卷一千餘頁、その三分の一は解釋に屬し、三分の二は全く著者の創見にかゝれる批評に屬せり。あはれかの類書の如き、さのみ識見を要せざる編纂物すら、猶幾年を費しつと號するならずや。況や評釋事業は一言半句も腦漿の餘瀝にあらざるはなく、識見の片影ならざるはなし。思へば不才おのれが如き者には、實に過分の重擔なりしよされば本書完成の遲延は、著者が怠慢にあらずして、漸く精を加へたる所以なることをも、識者の夙に知了せらるゝ事ならむと信ず。さはいへ、かばかりの一小著述、世の才高く學博き先生にとりては何かあらむ、只これ尋常茶飯ならむ。

終に臨みて一言す。魚を捕るには筌を以てし、獸を擒るには蹄を以てす。詩歌の意義を知るに評釋を以てするは、素よりその所ならむ。然れども讀者はまた魚を得て筌を忘れ、獸を獲て蹄を遺るゝ覺悟なかるべからず。偏に筌蹄に執着する者は遂に目的の獲物を眼前にして逸すべし。かゝれば既に評釋によりてその意義と詩美の指示とを得ば、更に文字を離れて瞑想一番、詩歌の眞諦を會得せむことを要す。

元臣しるす

明治四十年十二月

昭和二年三月廿五日印刷
昭和二年三月三十日發行

古今集評釋

定價金六圓八拾錢

不許複製

著者　金子元臣
東京市小石川區白山御殿町百十番地

發行者　三樹退三
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者　井上源之丞
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社本所分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　株式會社　明治書院
東京市神田區錦町一丁目
【振替貯金口座東京四九九一番】
電話神田(25)一六六四番　二九九一番　二六五四番